【チートクリード】

グラキエース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
【チートクリード】

【Ｎコード】
Ｎ８２７１Ｊ

【作者名】
グラキエース

【あらすじ】
アサシン教団とテンプル騎士団の戦いから８００年後の現代…再び“大聖戦”が起きようとしていた。壊れていく世界、襲い掛かる化け物。再び悲劇戦いを退け終結させるべく、偶然闇に囚われなかった普通の少女と８００年間封印されていた最強アサシン“エツィオ・アウディトーレ”が現代世界を護るべく、現代世界を駆け巡る冒険物語が今…！

※原作であるアサシンクリードを無視しています。

第零曲　神話（前書き）

※アテンション※

まず初めに原作の「アサシンクリードシリーズ」の設定をほぼ無視した二次小説（「プ●トタイプ」や「デ●ルメイクライ」や「●神」や「ベヨ●ッタ」などの設定を無理矢理ごちゃ混ぜにしています。）【チートクリード】です。

後々設定を投稿しますが、激しいキャラ崩壊やエッチな部分と残酷描写やフリーダムの表現が含まれています。

フリーダム？何それ美味しいの？チートクリードだって！？上等だぜ！という方はどうぞっ！

尚、苦情は一切受付ません。自己責任で閲覧をお願いします。

第零曲　神話

今から８００年前以上のお話…

アサシン教団とテンプル騎士団が人の心を理を支配することが出来る秘宝『エデンの果実』を巡って長年に渡る戦いがありました。

彼らから流すアサシンの血とテンプル騎士団の血が母なる大地を汚し自然を枯らせて、遂には無実なる民や神々まで彼らの戦いへ捲き込み“大聖戦”へと成り果てたのです。

終わりが見えない戦いの最中、打つ手なしかとアサシン教団軍の純白の長が深く悩んでいた時、漆黒の衣を纏いし若き男の勇者が降臨したのです。

勇猛果敢に戦う姿を見た純白の衣を纏いし長は、勇者に退魔の剣を託し、襲い掛かる大量のテンプル騎士団の軍を共に退け、遂にはテンプル騎士団の長でもある“魔帝”を討ち滅ぼしたのでした。

戦いに勝利したアサシン教団だったが、漆黒の勇者は純白の衣を纏いし長よりも戦いで傷付き、息も絶え絶えで立てるのもやっとの状態でした。

“私はもう永くありません。また再びこのような悲劇が起こらぬよう、林檎と共に私を封じて欲しい。”

漆黒の勇者は現世で人の愛を知り、人を愛する心と人を護る力強い正義で大量のテンプル騎士団を退け純白の衣を纏いし若き長よりも力があったのです。

そしてアサシン教団の長である純白の衣を纏う若き男にそう伝えた後、皆に見守られるようにして眠るように事切れました。

純白の長は勇者の遺言通り、彼の為の立派な墓を建て、漆黒の勇者と林檎は遥か深淵へと封じ込めました。

アサシン教団達は役目を終えて現世から去る時、純白の長は有一生き残っていた民にこう言いました。

“我が兄弟達よ…心せよ。我らの怨敵は再び現れるだろう。再び悲劇を起こらぬよう平和と安全を怠るなかれ。そこに眠る我らの勇者の魂と共に…。”

純白の衣を纏いし若き長は、生き残っていた民にそう伝えた後、純白の大きな翼を出しそれに続いてアサシン教団達も翼を生やして天へと舞い上がり、現世から消えていきました。

…

……

……

“大聖戦”で有一生き残っていた現世に住まう民達は、消えていく彼らを“守護神”と称え、彼らの戦いの記憶を残すべく有一戦場であった場所を“聖地”として建てられました。

そして純白の長から伝えた通り勇猛果敢に戦った漆黒の勇者を“聖地の英雄”として称えられ、長い月日が経っても勇姿を忘れず、勇者の墓を護り現世を見守り続けていたのでした。

第零曲　神話（後書き）

最初だけシリアスを書きました。次回からブッコワシ本編へと行きます。

第一曲　８００年後の危機的大惨事

―８００年後　２０１０年　●月★日　勇者の墓内部―

？「ふんっ…何がバチが当たるだ？あの糞汚いジジイ共めっ！ただの胡散臭いでっち上げだろうが！！！」

ブツブツと愚痴を洩らしながら暗闇の墓の中を荒らすかのように探索する男がいた。

時間帯は深夜であり、墓の中は漆黒の闇に包まれているので当然暗く、姿形は隙間から僅かに洩れる月の光でシルエットにしか見えないが、腹が膨れており顔は丸く顎から髭が少し出ているただの中年オヤジが、手探りで何かを探すように墓の内部を荒らしていた。

？「んっ？“コイツ”がそうか？？」

手探りで滑らかな丸い感覚を覚えた中年男が、今触っている部分を無理矢理力ずくで引っ張る仕草を取るが、ゴトンッと鈍い音を一瞬たてた後意図も簡単に外れた。

？「何だ、簡単じゃないか。頼むぅー、生涯に一度しかない俺の人生を変えるチャンスを与えてくれよっ！」

。そして懐から懐中電灯を取りだし手にする物を映す。

？「へぇー。コイツがこの墓に封印されていた“林檎”ってやつ…つーかただの石ころじゃねぇーか！！あーっ！もう最悪！！」

手にする物が長年放置されたか全体的に赤錆がこびり付き煤けていたので、中年の男は「はぁっ」と溜め息をついた後、手にする物を哀れみな視線で見つめる。

？「チクショー。折角此処まできたのにこのザマか…こんなもんあのジジイ共が、護っているなんてふんっ、馬鹿らしい！聞いて損した！！」

中年男が苛立ちながら手にする物を投げ捨てようとした時…

？【ヨコセ…我ラニ…林檎ヲ。】

？「えっ？…な…何？げ…幻聴っ？？そ…それともドッキリ？？」

突然冷たい感情がこもった声が響き、中年男は冷や汗を流しやや身震いしながら顔だけで声がした方向へと向ける。

？【ヨコセ…オ前ガ持ツ…林檎ヲ…】

？「ひっ！えっ…エエエエー！！！！」

中年男が向いた先には黒いガス状でできた何かが墓全体を覆うかのように浮かんでおり、黒いガス状の中心から複数の人の顔が創っていく。

？【サァ…我ラニ…林檎ヲ…渡セ！】

黒いガス状の至るところから細い腕のようなものが、中年の男の手に持つ物に目掛けてゆっくりと伸ばしていく。

？「ひっ！ちょっ！！俺に気安く触んなっ！超キモィ！！コッチ来んな！！！シッシッ！！！！」

自分に伸びてくるガス状の複数の細い手のような物を、蚊でも払いのけるかのように手を降りながら出口へと走る。

しかも“林檎を持ったまま”。

？「えぇい！これは夢…夢だっ！！どうせ何処かにこのようなアホ番組でもやってんだろぉ！！！」

バタンッと、中年男は怒鳴りながら墓から出て、後ろへ振り向かず後ろ蹴り一つで墓の扉を荒々しく閉じた。

中年男は直ぐ様後ろに振り返って、先程荒々しく閉じた墓の扉を睨み付ける。

？「（ハァ…ハァ…。……ほぉーら見ろ、やっぱりデマだ…ざまぁ見ろ。俺は奴らにわざとはめられてこんなことをやらかしやがって…ハハハ！）おぃ…さっさと出たらどうだ？…くだらんことをしやがって…おぃテメェら、覚悟は出来てんだろぉなぁ？」

数分睨み付けたが、何も起こらない。中年男はほっとしたのか不適な笑みを出し、口元を吊り上げて周囲に怒号をあげる。

？「…おぃ、黙ってねぇでさっさと【林檎ヲ…渡セェェェェ！！】ハィィィィィィィィッ！！？！？」

中年男が閉じた扉を突き破るかのように先程撒いた黒いガス状の物体が出てくる。

？「えェエエっ！？何これ何かの祟りかぁぁ！？それとも何かの罰ゲームウゥウゥウ！？」

しかし中年男が撒いた時よりも規模が大きく、墓全体の隙間から黒いガス状の物体が出てきて、夜空を覆い尽くすかのように段々と拡がっていく。

中年男は目の前に起こっている現実をそれでも否定し、墓から出る時よりも素早く走り、口元に血でも溜まっているかのような感覚で麓に停めてある車へと必死に走って、滑り込むように乗り込む。

？「これは“夢”だぁぁぁぁ！！俺は認めんぞぉぉぉぉ！！！！」

車を急発進させて、アクセル全開で猛スピードで走り去っていく。

“林檎”と一緒に。

夜空に舞い上がった黒いガス状の物体があっという間に全てを覆い尽くし中心で爆発する。四散した黒いガス状の物体が四方八方へと無差別に弾け飛び、全世界へと手を伸ばした。

黒いガス状の物体が自然を呑み込み、崩れ落ちるように腐敗させ母

なる大地を吹き飛ばす。

黒いガス状の物体が海を呑み込み、毒々しい液体へと変化させ全体を汚染する。

黒いガス状の物体が現世に住まう原生生物を呑み込み、肉体を喰らって魂だけの存在と成り果て、一部を魔物と化す。

漆黒に包まれた空中に粉々に砕けた木々や岩石が巻き上がり、魔物達が咆哮をあげたこの瞬間、世界は混沌の“闇”へと呑み込まれていった。

第二曲　少女とチート剣

―２０１０年　同日　数時間後のとあるイタリアの小国―

？「…」

空中には乱れるように吹き飛ぶ複数の折れた樹と砕けた岩石、周りはペンキでも塗りつけたようにヒョロヒョロと弱々しく漂う黒い何かを呆然と見詰めながら、暗闇の中にぽつんと佇んでいた。

？「（えっ何んぞこの…初めっからクライマックスの状況はｗ）」

容姿は長い黒髪を一つに締め上げて止めており、服装は青いラインが入った白ジャージと青いラインが走った黒ズボンを着た若い女性がいた。

すると彼女は何かに気付いたかのように視線だけを動かして、その方向だけ見詰めながら言う。

言わば“カメラ目線”である。

？「あっ…どうも、私はこのフリーダムチート小説の女性主人公【

シャイナ・アクイラ】２２歳、ごく普通に見かける見習い栄養士です。えっ…と…この状況を見て皆さんどう思います？」

…無論二次元と三次元にいる私達（閲覧者）が理解できるはずがない…。あくまでも三次元（閲覧者）はこの小説の行く末をただ見守るだけである。つーか…何時までもこっち見んな糞ガキ。

シャイナ「上五月蝿い…後で作者ブッ飛ばすぞオラッ（怒）ただカメラ目線やってみたかったし、スラッと言ってみただけですよ。…でも何故…」

ほんの数時間前のことだった。２年ぶりに行事理由で仕事を切り上げて故郷に戻ってきて、祖母と祖父と一緒に買い物をした後…

シャイナ「（この包みを“聖地の英雄”様の神殿まで届けるようにと祖父に言われて、これを届けていた時に…）」

シャイナは左手に持つ黒色の長い箱に包装紙に包まれた所々の隙間から、青白い光を放ち手に持っている長い箱全体に光が覆っているのを見詰めながら思っていた。

シャイナ「（突然周りが暗くなって…気がついたら…）ワケわからんわ…。急に暗くなるし…周りにいた人が居なくなるし…私だけ無事ってどうゆうこと？」

シャイナは全く状況を読み込めずに立ち尽くす。訳も分からず途方に暮れていた時…

？【耳を清ませ…我が声に傾けよ…女。】

シャイナ「へっ!?何ぞ今の!?まさかテレパシーっ!?遂に私にも第六感が目覚めたっ!?ヒャッホーィ!」

シャイナの脳裏に響いた若い男性のような声を聞いて、シャイナは遂に自分にも超能力が目覚めたかと、勝手に思いっきりはしゃいだ。

彼女はたまに特番でやっているF〇I超能力調査官のテレビやオカルト番組に目がなく、山積みになるほど録画をして週に5回ほど見ている二次元好きなのだ。

？【否…私が今いる場所から声だけを飛ばし、お前の手に持つ包みの中の“力”を通して語り掛けているのだ。決して“てれぱしー”ではない…。と言うより“てれぱしー”とは何だ、女?】

シャイナ「へーっ、あっ…そう。別にテレパシーでも良いじゃん。でっ?…何故私に声を??」

シャイナは本題を聞くべく、瞳を閉じてじっと脳裏に響く男の声を聞く。

？【お前が手にしているその包み…その中にある物を我が兄弟の墓場へ届けよ…。】

シャイナ「へっ？これを…墓場って…“聖地の英雄”様の墓へ？それは何故なんすか？」

シャイナは数秒手にする光輝く長い箱を見た後、上空に向けて真顔に視線を向ける。

勿論“カメラ目線”で。

？【すまないが、説明をする時間がない…女、その包みは我が兄弟を目覚めさせる重要な物だ。必ずやり遂げよ…。そして…】

―世界に光をもたらさんことを…。―

脳裏に響いていた声がそう言った後聞こえなくなり、また再び静寂に包まれる。

シャイナ「（なんか…とあるゲームのシーンみたいなシチュエーションになったように頼まれたけど…）中何入っていんだろ?…ごめんじいちゃん!」

シャイナは手に持っていた包みを破き、長い箱の中心に結んでいた紐を犬歯で噛み千切る。そして長い箱の上部分を開けると…

シャイナ「えっ…これ剣?本物??パチもんじゃないよね?」

中にはシャイナの身長よりも中世に出てくるような短い剣が入っており、刀身や束の部分をペタペタと触った後、掴む所に手を握った瞬間…

ジャキンッ!

シャイナ「うわぉっ!刀身が伸びた!?何ぞこれ!カッコイイ!!どっかのトランスフォームみたいな機能でも付いているんか!?」

突然剣の刀身が伸びて、シャイナの身長以上の長さ…長剣になる。
シャイナは目を爛々と輝かせながら剣を握り絞めながら見詰める。

シャイナ「…一度はやってみたかったんだよねー。とある漫画を見

てもしも自分が魔法のような技が出来たら…」

シャイナは長剣を両手で握り締めながら、ゆっくりとかかげ右足を後方へと下げるような体勢をとり、長剣を勢いよく降り下ろした。

シャイナ「ア〇ァァァァンストラァァァァァッシュ！！！！」

ズドォォォォッ！！！！

ただ剣を振ってみただけだった。否振っただけだった。偶然目の前に聳え立っていた黒く塗り潰されたビルが数件…

“手にしている剣の斬撃で、意図も簡単にバラバラにぶっ壊れた。”

シャイナ「エェェェェェェェェェェェェェェェェ！！！？？！」

それにシャイナが立っている位置から離れているのに関わらず、普通にぶった斬れたのだから。

シャイナ「何このチート剣！？？？！マジありえねぇえぇぇえぇぇぇ！！！！」

崩れ落ちていくビルの破片を見ながら、今やったことを恐ろしく驚愕な表情でただ声が枯れるまで叫び続けていた。

今シャイナが持つ長剣が“漆黒の勇者の長剣”又は“アルタイルの剣”とは知らずに・・・。

第三曲　お目覚めフードオジサン

―数時間後　勇者の墓場前―

シャイナ「忘れるとこだった…何だよこのチート剣…マジありえん。」

シャイナが手に持つ長剣で数件のビルをぶった斬った後、脳裏に響いていた若い男の声の頼みごとを思い出し、長剣の刀身から放つ青白い光を頼りに“聖地の勇者”の墓場へと向かっていた最中…

？【ソノ剣…貴様…アサシンカ！？】

？【匂ウ…匂ウゾ！！…我ラノ怨敵！】

毒々しい水溜まりのような所や奇形な複数の漆黒の樹々から憎しみを込めた感情を吐きながら黒いガス状の何かが現れて、墓場へと向かうシャイナの行く手を阻む。

そして黒いガス状が中世に出てくるような騎士ような姿になり、更に一人一人と増えて左腰部分から禍々しい剣のような物を引き抜き、

シャイナに向けて構える。

漆黒の騎士?【此処デ死ネ!アサシン!!】

漆黒の騎士?【仲間ノ仇ダ!!】

ガス状の騎士達が、一斉にシャイナに向けて斬りかかる。シャイナは自分に向かってくる敵に向けて少し深呼吸した後…

シャイナ「アサシンじゃねぇエエエ!!!!俺は見習い栄養士じゃぁぁぁぁ!!!!馬鹿野郎ォォォォォォォォ!!!!!!」

先ほど数件のビルをぶった斬った長剣を野球選手のようにぶん回し、自分を囲っていた複数のガス状の騎士を斬り倒…否

“振った時に出来た剣圧の風力でぶっ飛ばした。”

漆黒の騎士?【オノレェ!仲間ヲ!!!】

漆黒の騎士?【コッチダ!皆来テクレ!!】

シャイナ「げっ！余計に増えたし！！最悪っ！！！」

至るところからガス状の漆黒の騎士が現れて、また再びシャイナを阻もうと再包囲を仕掛けようとする。

シャイナ「ＵＺＥＥＥＥＥＥ！！！！こっちくんなっ！手抜き絵ストカーがァァァァ！！！！」

シャイナは罵詈雑言を吐きながらも、足に力を入れて走り進行方向を妨げているガス状の敵のみ、長剣を暴徒でも不器用にぶん回しているかの状況で目的地へと走り続けた。

シャイナ「そして今にいたるんだボケッ！分かったか…糞がっ！！」

場所は冒頭部分へと戻り、先ほどの逃走で疲れたか、フラフラ歩きで“聖地の英雄”の場所の入り口へと辿り着く。

シャイナ「（先客いたか…）私はもう疲れてんだよ！またさっきの奴が出てきたら…作者ぶった斬るからな（怒）」

シャイナは既に開けられていた場所の入り口を見た後、また何かの視線を感じ取って開けられていた方向へと疲労と苛々が混じった表情で見詰める。

“相変わらずカメラ目線で”

シャイナは長剣の刀身から放つ青白い光を頼りに、一歩一歩と慎重に墓場の中へと歩く。

長い時間をかけてようやく最深部に着いた後、シャイナはあっけにとられたような表情になる。

長細い五角形の石の棺の上にローブを覆い強い覇気がそのまま出ているみたいな石像、これが“聖地の英雄”様を収める棺なのだ。

シャイナ「これが“聖地の英雄”様の像と棺…あれっ?何かおかしいな?」

シャイナは像をよく調べると石像が“何か”を掲げる部分が無く、像の造りから見るとすると“球体”を嵌めるような物と見て、シャイナの脳裏に浮かび上がる。

シャイナ「何かを嵌め込むようなも…ウギャァァァ!??!!」

ズルッ…

突如何がズレる音を聞いて、シャイナはビビりと挙動不審な状態になりながら、手に持つ長剣を前に構えて身構える体勢に入る。

シャイナ「（ヒッ…ウキィィィ…もうヤダ…作者殺す…ぶち殺す！！もうイヤッスよぉ…）えっ…んっ？」

シャイナは身体を震えただせ涙目になりながら身構えていたが、数分経っても何も起こらない。

シャイナは心拍数が落ち着いた所を図って、手に持つ長剣の光を前にかかげると…

シャイナ「棺が…ずれて……る？」

何と閉じていたハズの棺が、少し開いていたのだ。その直後…

ズルルルルルッ！！！！

ドォォォォォォン！！！！

棺の上部が横滑りするように動いた後、墓内部に響き渡るぐらいの大きな音をたてて固い地面へと落下する。

シャイナは恐る恐る棺が開いた所へと近寄って、長剣の光を当てると…

“時代がかかった黒いローブと鎧を纏った口髭オジサンが綺麗な顔をして眠っていた。”

シャイナ「えっ…あれっ？私がおじいちゃんに教えられ「ふぁぁぁー。…よく寝たぁー。」ちょぉぉぉぉ！？？！」

突然棺の中に眠っていたオジサンが目を覚まし、欠伸をあげながら腕や首や身体を伸ばしながら起き上がる。

そして目覚めたオジサンが驚愕の表情を出しているシャイナを見た後、まだ眠たそうな表情でシャイナに問い掛ける。

？「んぁ？君は誰だぃ？？」

シャイナ「こっちが聞きてぇよおっさん！つーか普通に起きんなっ！！」

シャイナの目の前にいた漆黒のローブを纏ったオジサンが少し顔をむっとした後、真顔でシャイナに言い返す。

？「んなっ！俺はおっさんじゃないぞ！俺はまだ2★#●歳だ！！」

シャイナ「なんじゃそのあり得ねぇ歳はぁぁ！！おめぇ頭おかしいぞ！？」

これが後にこの世界を救う、運命の二人の出会いでした。

第四曲　ハイテンションオジサン

―聖地の英雄の墓　最深部―

？「へー。これが“けいたいでんわ”ね。俺が寝ている間、君がいる世界ではこのような物を作っているんだ。スゲー進歩したなぁ～。」

黒いローブを纏ったオジサンがシャイナから渡された小型の携帯機“携帯電話”を見て、興味津々に携帯電話の画面やボタンなどペタペタと触り弄くる。

シャイナ「そうそう、今アンタが持っているのは私の“携帯電話”略して“ケータイ”ボタン一つで相手に連絡がとれることができる優れも…てっ、こんなことしている場合じゃねぇぇぇ！！！！」

？「へっ？何で？？」

黒いローブを纏ったオジサンが惚けたような表情で、シャイナの何かを急いでいるような表情を見る。

シャイナ「はいっ！“コレ”オジサンのモノでしょ？返します！！」

？「んっ？あぁ、俺の…俺の剣だ！まさか君が…“普通の人間”が何ともなく“コレ”を持って来れたのか！？」

シャイナは手に持っていた長剣を黒いローブを纏ったオジサンに手渡した時、黒いローブを纏ったオジサンが驚いたような表情でシャイナを見詰める。

シャイナは驚きを絶やさないオジサンの表情を見て、少し困惑したような表情になって目の前にいる真顔オジサンに答える。

シャイナ「えっ？…うん、普通に持って…来たけど…何か？」

？「おかしいな。君が持ってきた俺の剣は、ここの“現世に住まう原生生物を全て拒絶”させ普通の人間では手に持つことすら出来ないのに…」

黒いローブを纏ったオジサンが困惑した表情で、左手に顎下へつけながらシャイナの身体をジロジロと見た後、カメラ目線でシャイナに向けて言う。

？「君は…何者だ？」

シャイナ「何者…て、私は…普通の…のわわっ!?!?!」

ドォォォォォンッ

突然墓の内部が大きく揺れてシャイナは体勢を崩し、目の前に立っていた黒いローブを纏ったオジサンの身体にぶつかる。

シャイナ「わっ!…ぷ!!」

?「おっと…何やら上の方が騒がしいようだな。」

黒いローブを纏ったオジサンが、シャイナの身体を片手で受け止めて、胸部にシャイナの身体を寄せるような姿勢を取り揺れの震動を両足に力を入れて最小限に留める。

墓上部にいる漆黒の騎士?【追イツイタゾ!!】

墓上部にいる漆黒の騎士?【我ラカラ逃レヌ!!】

シャイナ「ちょっ!…もう追いついたのかよあの手抜きストーカ…わわわわっ!!!!!」

墓上部（地上）にシャイナを追いかけてきたガス状の漆黒の騎士がいるらしく、二回三回と墓の内部が激しく揺れる。すると…

上部からヒビが走り、複数の落石が墓の内部へと落下する。どうやら墓全体を陥没させるようだ。

シャイナ「うヒャアアァァ！！崩れるっ！生き埋めはイヤッスぅうぁ！！！！！死ぬぅうぅうぁ！！！！！」

？「大丈夫！俺にこっちゃこんなもん、何時ものことだＺＥ☆」

黒いローブを纏ったオジサンが、ニコニコ笑顔のまま崩落が始まっている墓場の状況なのに関わらず、シャイナにのんびりと話し掛ける。

シャイナ「何が大丈夫だっ…てっノギャァァァァ！！！！上っ上ぇえぇえ！！！！潰されるぅうぅうぅうぅうぅう！！！！」

シャイナはのんびりと答えたオジサンの話を聞いて逆上した時、今いる場所の上から大きな瓦礫が落ちてくるのを見て、鼻水と涙を大量に出しながら絶望な表情で絶叫をあげる。

シャイナを抱き抱えている黒いローブを纏ったオジサンの頭部に瓦礫が当たり、シャイナものとも押し潰される…そうなるはずだった。

？「そういえば君に、俺の名前教えてなかったな。今更だけど教えるぜ。」

頭上に落下してきた瓦礫が…

“オジサンの右腕を真上に殴りつけただけで、粉々になった。”

シャイナ「えっ！？ぇぇぇぇ！！？！」

？「俺の名は“エツィオ・アウディトーレ・ダ・フィレンツェ”！名前長いから普通にエツィオと呼んでくれ！んでっ、それと…」

シャイナが驚いている間にも黒いローブを纏うオジ…否エツィオは、降りかかる複数の大きな瓦礫をお手玉でもするかのように真上に蹴り飛ばす。

そして両足に力を入れて大きく飛翔し、先程蹴り飛ばした瓦礫を利用して瓦礫を蹴りながら上部へと飛び続ける。

エツィオ「君の名前を教えてくれないか？」

エツィオはシャイナの身体を両手で抱き抱え瓦礫から瓦礫へと飛び渡り、まだ崩れていない壁を“普通に重力とか関係なく上へと走り”ながら、穏やかな表情でシャイナに語りかける。

シャイナ「…シャイナ・アクイラよ。」

シャイナは右手で鼻水と涙を拭き取りながらエツィオの質問に答えた時、エツィオに抱き抱えられたままのシャイナは崩壊していく墓場から脱出し、二人は遥か上空へと飛翔する形へとなる。

エツィオ「ＯＫっ…さぁシャイナ、今から急降下するからしっかりと口を閉じろよ！しっかり閉じないと舌噛んで死ぬぞーぃ！ウハハーノーハー！！」

シャイナはエツィオの身体をしがみつくように掴まり、下からくる強い風圧で思わず目を閉じて、口を歯をしっかりと強く噛み締めて落下の衝撃に備える。

エツィオ「さて、８００年ぶりに軽いダンスとでもしようか。」

エツィオはニタリと口元を吊り上げて、地上にいる黒いガス状でで

きた騎士達を見下ろす。そしてシャイナを抱き抱えたまま高速に垂直落下して地上へと両足をつけた瞬間…

ズトガァァァァァァン！！！！

落下の衝撃で落下地点である地上の地面が陥没し、隕石でも落下したような大きなクレーターができる。

さらに落下した時に強い衝撃と砂埃が発生し、落下地点の近くにいた黒いガス状の騎士達が大きく吹き飛ばされ、中には衝撃に耐えきれずバラバラに四散する。

そして唯一落下地点から遠ざかって難を逃れていた黒いガス状の騎士達が、砂埃が晴れていく時にエツィオとシャイナの姿を見た時…

エツィオ「ＳＡ、俺とバトルしようＺＥ☆」

シャイナを右片腕だけで抱き抱え、右足を後ろに曲げて左足だけで身体を支える。そして残っていた左腕を上斜めに上げて左手首をやや下に下げている姿…

いわば“荒ぶる鷹のポーズ”であった。

第五曲　チートダンス

―聖地の英雄　墓場入り口前―

漆黒の騎士？【アサシンヲ逃ガスナ！此所デ始末シロ！！】

漆黒の騎士？【サァ殺レ！永年ニ渡ル我ラノ戦ト同ジ！！】

荒ぶる鷹のポーズを取ったまま立つエツィオを見た漆黒の騎士達が、剣を抜き雪崩れ込むように斬りかかる。

エツィオはゆっくりと後ろに曲げていた右足を下ろし、左腕を前に向けて指一本づつ骨を鳴らし少し指先を曲げた後…

エツィオ「クッハハハハハハハハハ！！！！」

ズドバババババババッ

エツィオの両目から車のハイライトのような強い光が出てきて、口

元はドス黒笑いしながら自分に襲い掛かる黒いガス状の騎士達を一瞬の内に片腕だけで殴り倒す。

シャイナ「（ちょぉぉぉぉっ!?!?!!マジ見えねぇぇぇぇぇ!!研修時の間に日本漫画を見た…“史上最強の●子”に出てくる酒●みてぇぇぇぇ!!!!」

シャイナの目には何が起こっているか分からないが、一応閲覧者のみスローモーションカメラ映像をお見せする。

どうやら目にも見えないほどの“高速顎打ち片手パンチ”と、“砂をつかんで目に向けて投げ付けて殴る”“目に当てるというのを見せ掛けて実は金的狙い”等、姑息なフェイントパンチや、嫌らしい位置からの奇襲パンチが混じった…

反則並の高速ガトリングパンチラッシュで、黒いガス状の騎士達を容赦なくぶっ飛ばしていた。

エツィオ「ダァァァーイ!ダァァァァーイ!!ユーマストダァァァァァーイ!!!!!」

今度は上記と同じ反則並の高速蹴りで、高笑いしながら次々とガス状の漆黒の騎士達を蹴り飛ばし、物凄い勢いで霧のように消えていく。

漆黒の騎士？【ヌ…ヌオォッ！マズイ…此所ハ逃ゲ…】

ガス状の漆黒の騎士が次々と倒されていく仲間を見て恐慌状態に陥り、今いる場所から逃げようとした時…

エツィオ「逃げちゃダメよ。せめて此処に来たからＳＡ☆騎士らしく…」

漆黒の騎士？【ヒッ！】

逃げようとした先に不機嫌の表情を出したエツィオと、哀れみの表情で手と手を合わせて合掌しながら、エツィオに抱えられているシャイナが立っていた。

漆黒の騎士は逃げようとしたが、逃げることすら出来なかった。何故なら…

エツィオ「丁度此所は墓場だから此処で散れ☆ネック・クラッチェ♪」

漆黒の騎士の首部分にエツィオの左手が握られていて、次の瞬間ゴ

キリッと首の骨がへし折れる音が生々しく鳴り、断末魔すらあげられないまま絶命する。

首から下が力無くダランとだらけ、エツィオは首を折ったガス状の漆黒の騎士を足下に投げ捨てた後、グシャッと左足で容赦なく頭部を踏み潰した。

シャイナ「うっ…はwなんという“追い●ちの極み”wwスゲーバイオレンスな殺し方っスね。」

エツィオ「ちゃんと止めささないと、また面倒事になるかもしれないからSAっ☆つーか、この小説“残酷描写有り&R15”だし♪」

シャイナ「あー、ハイハイ。そうでちゅかぃ…つーか、そろそろ降ろしてくれない？」

エツィオ「あっ！そうだったな。悪ぃ悪ぃシャイナ！」

エツィオはニシシ♪と言った後、ニコニコ笑顔で歯並びが良い歯をシャイナに“カメラ目線”で見せながら、ゆっくりとシャイナを地面に立たせるように降ろす。

シャイナ「はぁ…それにしてもスッゲ…。何処かのスタイリッシュゲーム以上だなw」

シャイナは先程のエツィオの人外的な身体能力を見て、もうこの先何があろうがどうにでもなれという…呆れた表情で、無様に転がるガス状だった漆黒の騎士の死体を一瞥していた時…

？【ブルォォォォォォォォォ！！！！】

シャイナ「ちょっ！何だ今の豚が悲鳴でもあげるような馬鹿でけぇ声は！！鼓膜が破れるぅぅぅぅ！！！」

エツィオ「シャイナっ！…こりゃ大物でも釣れたようだな？」

突然シャイナが言った通り、豚が悲鳴でもあげるような声が上空から聞こえてきて、常人の鼓膜が破れんぐらいの音量が響き渡る。

エツィオは耳を押さえながら耐えるシャイナを気遣うように、自分の胸元までシャイナの身体を引き寄せて、じっと声が聞こえた方向の上空へと睨み付ける。

？【ブルァァァアアアアアアア！！！！】

漆黒の上空に巻き上がる折れた木々と、砕けた岩石の上空真上部分から人型のような怪物が咆哮をあげながらゆっくりと降りてくる。

その姿は赤い褐色肌に人間の頭部、両腕、両足が異常に腫れあがったかのような所々に、筋肉を縫いつけた縫合部分が無理矢理縫い付けてあり、太ましい両手には刃の部分に大量の血がついた巨大な処刑斧を持ち、背中には天使のような翼が見えた。

―中級テンプル巨人騎士　コロール　ロッソ　サングエ―

シャイナ「え〝…なにあの気持ち悪いデブは…ってうぉぉぉぉぉ！！？？！」

目の前に巨大な大木が高速に迫ってくるのを見て、シャイナは一瞬両面を閉じる。

どうやらシャイナが言った“デブ”の発言で、地上に降り立ったデカブツ天使が激昂し、上空に漂っていた大木を掴んでシャイナに目掛けて投げつけたようだ。

エツィオ「よっ…と！」

シャイナとは対照的にエツィオは、平常心を保ったまま高速に迫り来る大木の根っ子を“普通に掴んで受け止める。”

コロール　ロッソ　サングエ（略してコロサン）【ブルゥォォォォォォォォォォ！！】

エツィオに簡単に受け止められて更に激昂したのか、今度は大木だけでなく数個の岩石を掴んで、野球選手のようにエツィオに向けて投げつける。

エツィオは先程受け止めた大木を使って、“軽々と振り回しながら”全方位に向かってくる数本の大木を岩石を弾く。そして最後に真っ直ぐに投げつけてきた岩石を、手にする大木で“一刀両断”した後…

エツィオ「そぉい！」

手にしていた大木を、勢い良く正確にデカブツの頭部に“投げ当てた。”

コロサン【ムゴォォォォォォォォォ！！！！】

巨人の頭部に当たったのはいいが、分厚い脂肪のせいか痣のようなものは出来ず、余計に怒らせたように見える。エツィオは一瞬自分を抱きしめながら目の前にいる巨人を挙動不審で見詰めるシャイナ

を見て、もう一度真顔で巨人を睨み付けながらそっとシャイナに言う。

エツィオ「シャイナ…君の力を貸してほしい。アイツをぶちのめすことができる力を…！」

シャイナ「えぇっ！？ちょっ…何この超展開なとこ…アフッン！？？！！」

状況が読み込めないシャイナに、何かが引っ張られていくような摩訶不思議な感覚を覚える。シャイナは恐る恐るエツィオを見ると…

エツィオ「俺は唯一、現世の人間を“同化”し取り込むことができる力がある。この世界でただ一人君が残った強き意思を俺に…。」

シャイナ「（マジかぁぁぁぁ！！？？！これはなんという“貴方と●体したい”…ズブブブブ）」

シャイナの身体が勝手にエツィオの身体へ入っていき、シャイナは引っ張られていく身体に身を任せて、意識を手放した。

第六曲　巨人レイプ

―聖地の英雄　墓場前―

エツィオ「さて、お仕置きの時間だ。来な…デカブツ！」

コロサン【ブルォォォォォォォォ！！】

エツィオは左腰に携えていた長剣を引き抜き、右手に剣を前に構え残る。左手を前に伸ばし、手首だけで軽く後ろへ振る。いわば“挑発”だ。

目の前にいた巨人騎士が激昂し、エツィオの挑発に乗って走り出す。巨人は走りながら両手に持つ処刑斧を勢いよくエツィオに向けて振り回す。

エツィオ「～♪」

エツィオは軽い口笛を吹きながら、振り回してくる処刑斧の刃を軽いジャンプで上へと避けて、刃でない棍の部分へと飛び乗る。

コロサン【ヴァフォォォォォォォ！！】

巨人騎士は棍の部分に乗ったエツィオを振り落とすべく、猛烈に処刑斧を振り回す。

エツィオは振り落とされないようにしがみつくようなことはせず、乱暴に揺れている棍の上を“ふらつきすらしないで普通に走りながら”巨人騎士へと走り寄る。

コロサン【バォォォォォォォォォォ！】

エツィオ「アサシンキーック！アンド…」

コロサン【バフッ！？？！！】

巨人騎士は咆哮をあげてエツィオの進行を仰け反らせそうとしたが全然ものともせず、エツィオはそのまま巨人騎士の頭部に蹴りを加えその直後…

エツィオ「アサシンスイーング！」

巨人騎士の頭部を“片手だけで掴んで”、巨人騎士の身体が自然に宙に浮かび、そのまま勢いよく巨人騎士の頭から地面へと垂直に“

投げ飛ばした。”

コロサン【ブギョェッ！！！！】

エツィオに投げ飛ばされた巨人騎士は、頭から地面へと突っ込まれて垂直にめり込む形へとなる。

巨人騎士は地面にめり込んだ頭を出そうと両手を地面につけて、無理矢理力ずくでめり込んでいだ頭を引き抜いたが…

コロサン【ヴォ？】

巨人騎士は先程両手に持っていた巨大な処刑斧が無いのを気付いて、頭部だけを右往左往と振り回し呆けた表情で上を見上げた時…

エツィオ「おーい！探し物は“コレ”かな？」

コロサン【！！！！】

頭上にエツィオが宙に浮いており、巨人騎士が探していた巨人処刑斧はエツィオが手に持っていた。

しかも“片手持ち”で。

エツィオ「金的ブレェェェイクゥ！」

ドシュッと、エツィオが手にしていた巨大処刑斧の刃が、正確に巨人騎士の金的に振り下ろし、ペニスの一部分を切り落とし血を咲かせ大地を赤く染める。

コロサン【ギャバァァァァァァァァ！！！！】

巨人騎士は悲鳴にもならないぐらいの雄叫びをあげて、下肢から頭部にかけて巨大な身体を無様に倒れ込む。

金的に深く刺し込まれている処刑斧の刃を、棍の部分を持って引き抜こうと手を伸ばしたが、虚しく空を切る。その理由は巨人騎士の目に写るエツィオを見直ぐ様わかった。

エツィオ「アーサーシーン流…二度ぶっ刺しの刑！！」

ドチャッと、エツィオが先端斜めに切った処刑斧の棍の部分が巨人騎士の胸部を貫いて、内部の心臓を貫通しそのまま背中から斜めに切った処刑斧の棍の部分が噴き出す血と共に出てくる。

エツィオ「お前はシャイナに向けて死にもたらす危険な物を投げつけ、彼女を俺と出逢うまで様々な恐怖を陥れた…断じて許すわけにもいかない。」

エツィオは冷たい感情をこもった台詞を吐きながら、苦し紛れにもがいている巨人騎士を一瞥した後、胸部にぶっ指している棍を掴んでそのまま“片手だけで”巨人騎士の身体を宙にかかげて、遥か高い空中へと投げ飛ばす。

エツィオは両足に力を溜めて地面にヒビができるぐらい集中した後、回転を加えながら空高く巨人騎士がいる高さまで飛翔する。そして…

エツィオ「貴殿に我の正義なる剣で、汝の逝くべき道を示そう。」

バサッと、エツィオの背中から逞しい灰色と黒が交えた大きい鷹の翼が現れて、両手から隠し刃“アサシンブレード”が飛び出す。そして…

エツィオ「眠れ…安らかに。」

コロサン【！！！！！】

エツィオの両手から出したアサシンブレードの刃が巨人騎士の首筋を貫き、刃がゆっくりと円を描くようにして動かした後…

巨人騎士の首が、そのまま地上へと落ちていった。

第七曲　まずは一つ目

―とあるイタリア小国の上空―

エツィオ「汝に救いがあらんことを…。」

エツィオは空中で背中から出ている灰色と黒が交えた鷹の翼を羽ばたきながら、地上に落ちていく巨人騎士の首と斧と棍の部分が刺さった二度ぶっ刺し胴体を見届ける。

カシンッと、巨人騎士の血が付いたアサシンブレードを少し手を振って綺麗に振り落とし、隠し鞘へとしまう。その直後…

シャイナ『な…なんというレイププレイwベヨ●ッタ以上のスタイリッシュみたいっす。』

突然エツィオの胸部からシャイナの透き通った声が響き渡る。エツィオは胸部に右手を当てながら口元を吊り上げて、ニヤニヤの表情を出しながらシャイナに語り掛ける。

視線は勿論“カメラ目線”で。

エツィオ「どうだ?凄いだろ、シャイナ?まだまだこれでも、俺の“一部分の力”だぜ?ヒャフーィ!」

シャイナはエツィオの身体に取り込まれた後、エツィオの目を通して先程の巨人騎士の戦いを最後まで見ていたらしい。

シャイナ『まだ“一部分”って…エツィオ、アンタどんだけチート能力あんのｗｗｗ』

シャイナは呆れた言動でエツィオに言い、エツィオはニシシッ♪と、ニコニコ笑顔で歯並びの良い表情を出しながら胸をドンと力強く張り“カメラ目線”の状態で、シャイナにケラケラと語り掛ける。

エツィオ「ＨＡ☆ＨＡ☆ＨＡ♪これも己の体鍛の成果ＳＡ!それだけじゃなく、シャイナの力も凄かったぞ!」

シャイナ『ハヒッ??私なにかしたっけ???ただフツーにエツィオの中でポポポポカーンしてただけだけど?』

シャイナは本当にあったことを、すっ惚けたような言動でエツィオに吐く。

エツィオは「そんなことはないさ。」と瞳を一瞬閉じて首を右往左往に振りながら、“カメラ目線”でシャイナに語り掛ける。

エツィオ「シャイナを取り込んだ途端に、身震いするほどの凄まじい“力”を俺は感じたんだ。なんにせよ、シャイナは俺の剣を“普通に持ってきた”からさ、…変なこと言うけど、もしかしたら、シャイナの…シャイナの家系は…」

エツィオが言葉を少し遮りながら少し眉を下に寄せて、左手を顎下に当てたまま深く悩んでいた時…

シャイナ『わっ！エ…エツィオ！！地上にラピ●タの雷のような光がぁぁぁぁ！』

遥か地上から爆発したような光が迸り、やがて光は上空へと伸ばしてエツィオの周りに漂っていた漆黒の闇を上書きするかのように元の空色へと変わっていく。

エツィオ「あぁ、さっきのデカブツがこの土地を閉じ込めていたようだから“浄化”されたようだな。というかラピ●タの雷って何ぞ？」

シャイナ『スゲェェェェェェェェ！大●降ろしみてぇぇぇぇ！！！！エツィオ早く地上に降りて！ふ…ふつくしい大地を…私は見た

い。』

エツィオ「あ…あぁ（苦笑）」

エツィオはシャイナから聞いたラピ●タの雷の意味が解らない表情で、目を丸くさせながら遥か上空から降下し地上へと足を着ける。

そしてエツィオは少し右手を胸元に寄せた後、背中の翼を引っ込めて右手を前にかざすように、ゆっくりとエツィオの身体からシャイナを出す。

シャイナ「プッハッ！出れた出れた。…あぁ元の色…元の景色…私生きてるぅぅぅ！！生きてるってすん晴らしいぃぃぃ！！！！」

シャイナは元通りになった故郷の風景を見た後、両手を上に広げて思いっきり叫び、身体を伸ばしてリラックスを満喫する。

エツィオ「ふぁ…シャイナぁ。そろそろ俺寝るわ。８００年振りに動いたで一休みするぉ。」

シャイナ「ＯＫっ。戦闘お疲れ様。ゆっくりと疲れを取ってちょうだい。」

エツィオは「おぅ」と言った後、生き生きしているシャイナの姿を見て、少し穏やかな表情を出し微笑ましくしながら草と花が交えた地面へとごろ寝する。その時…

？【一つ…邪悪の闇が消え去り、安全と平和を取り戻したようだな。】

シャイナ「おぉうっ!?この声はまさか!!」

突然若い男のような声を聞いて、シャイナは声がした方向“カメラ目線”へと向ける。

シャイナ「あーっ!!アンタは確か、エツィオの剣からエロチックボイスで喋った恥ずかしがり屋さん!（第ニ曲参照）」

？【そうではない…それよりも、よくぞ無事に我が兄弟を目覚めさせてくれた。我が教団の団員に私が代わって礼を言う。「ありがとう。」】

シャイナ「良いって良いって、このエロチックボイス恥ずかしがり屋さんＭＥ☆んで、“一つ目”ってどういう意味??まさか此処だけじゃなくて、他の他国でも…」

シャイナはタラリと冗談めいた表情を出しながら、至るところから冷や汗を流す。すると…

ブゥゥン…

何処かで聞いたことがあるような電子音が鳴り、麓の駐車場の中心に何かの赤い字で書かれた紋章が現れ、紋章を囲む円部分から白い光が立つ。

？【詳しい話は私がいる所“神界マシャフ”でじっくりと話そう。さぁ…そこに現れた我らの紋章“アサシン教団”へ入るのだ。そこに入れば“神界”へ入れる。】

若き男の声がそう言った後、また再び辺りが静寂に包まれて、色とりどりの花弁が紙吹雪のように舞う風景に戻る。

エツィオ「“神界”“マシャフ”かぁ。久し振りに聞いたなぁ。ふぁぁぁ…。」

エツィオが欠伸しながら起き上がり、ローブに付いた草や花弁を手で払いながら立ち上がる。

シャイナ「あっ、そうか。エツィオは８００年間眠っていたから、８００年ぶりの帰郷となるよね。」

エツィオ「まっ、そうなるな。よっと！」

エツィオが起き上がりながら軽く一回転しながら跳ねて、シャイナの両肩辺りに手を触れた直後…

シャイナ「わっ！！ちょっとエツィ…あれ？重くない？それにエツィオの身体がスケスケになってるｗ」

エツィオ「“ソーシャルステルス形態”だ。この状態なら現世の理に反映されないし、使用する力も最小限に抑えられる。シャイナ以外の人に映ることも聞くことも気付かれないのさ。」

シャイナはエツィオの身体が“半透明に”なっているのを見て、少し興奮が混じりながら驚く。

シャイナ「スゲェ便利なステルスｗ私も欲しいなぁー。（ウホッ！ますます二次元に入り込んだようだね。ウヒヒッ展開が楽しみだっちゃ♪私はもうワクワクしてきちゃったぉｗｗｗ）」

エツィオ「８００年ぶりの“神界”か。ひさびさに皆に会って挨拶

とでもしようかね。」

シャイナの両肩辺りに空中で漂う、油かいた座りをしながら仲間のことを思っている半透明のエツィオと、ニヤニヤ顔を隠しながらカメラ目線で紋章の中心へと歩んだ時…

紋章から光が出て二人の身体を覆った時、二人の姿は現世からいなくなっていた。

第八曲　神界での珍事とマシャフ式恒例行事

―神界　マシャフ　アサシン教団砦前―

シャイナは目を開けると、そこには無限に広がる鈴蘭が至るところに咲きほどき、鈴蘭の花弁がチラチラと舞い上がっていた。

シャイナ「う…ウヒョォォォォォォォォォ！スゲェェェェェェェェェェ！！なんというヴァ●キリープロファイルｗｗｗ」

エツィオ「ハッハー…８００年前と全然変わってないな。まっ、解りきっていたけど。」

エツィオは腕を組みながら、口元を軽く吊り上げて鈴蘭の上をはしゃぎながら踊っているシャイナを見る。

シャイナは興奮しながら身体を何度も回転し、鈴蘭の上で何度もごろ寝した後、何かを見つけたように立ち上がって、視線を前に映す。

鈴蘭の花弁が舞う青白い崖の上に、雪のように真っ白い巨大な城が立派に聳え立っていた。

シャイナ「エツィオ！ねぇ彼処に見えるのがエツィオ達“守護神”様達の住んでるところ！？」

エツィオ「そうだ。といってもここの“神界”そのものが俺達の居住区だ。あとそれと、シャイナ…」

シャイナ「ラララララァァァァ～♪私は風に…えっ何？」

シャイナは両腕を水平に伸ばし軽やかスキップ走りしながら、一旦キョトンとした表情になって、歩みを止めてエツィオを見ようと後ろへと振り向こうとした時…。

エツィオ「上、危ないＺＯ☆」

カカカカカカッ

いつの間にかエツィオが目の前にいて、エツィオが伸ばした左手がシャイナの後ろ腰に当てて、無理矢理引っ込めるように引き寄せられる。その理由は、直ぐ様理解した。

シャイナ「え〝っ…あれってもしや、ナイフっすか？本物？本物？？？」

エツィオ「やれやれ…。“これ”も８００年前と変わらないな。」

先ほどいたシャイナの場所に、数本の投げナイフが刺さっていた。
あの時エツィオに引っ張らなかったら、シャイナは数本のナイフに急所を刺されて絶命していただろう。

シャイナ「はぃ？“これ”がエツィオがいた時と同じってどういう…んぁ？」

エツィオ「（・―・）…（。Д。）！…あ。」

パサッ…

シャイナが着ている服が突然破れて、ボロボロに裂けたシャイナのジャージ服とズボンが、鈴蘭の草原の上へスローモーションでもかかったかのように落ちる。

シャイナの身体が露になり当然目の前にいたエツィオに、シャイナの裸姿をそのまま“露出を魅せる”形となってしまった。

シャイナ「うぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！エッチ！ヘンタイ！！スケベぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

どうやら投げナイフの投げて出来た“僅かの風圧”の力でシャイナの服を“裂いた”らしい。

突然のアクシデント…否珍事で流石に最強チートアサシン“エツィオ”でも、対応が遅れてしまった。

シャイナはムンクの叫びのように絶叫をあげながら、直ぐさま胸元と大事な股間を隠すように、腕を交互させてペタンと鈴蘭の草原の上へと座り込む。

エツィオ「シャイナァァァァァァ！！！！」

バサッと、エツィオは素早く背中から鷹の翼を出して、シャイナの身体を覆うように包みあげる。そしてエツィオは自分の中へ入れるべく、優しい手解きでシャイナの身体をエツィオの身体に取り込んだ。その直後…

エツィオ「大丈夫だシャイナ！君の胸がち『言うなぁぁぁぁぁ！！！！言うんじゃねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！』」

シャイナの悲痛の叫びが轟いた後、エツィオは包むようにしゃがんでいた体勢から、包むようにしていた翼を解き、翼を折り畳んでゆ

っくりと立ち上がる。閲覧者のカメラ目線から見ると…

エツィオ「イチチ…そこを見ただけで怒るのか。８００年前にはそんなことなかったのに…シャイナぁぁぁぁ（；Ｏ；）」

エツィオの頬にシャイナを取り込む前に思いっきり叩かれたのだろう…“赤い痣ができるほどの平手打ちの跡”と、鼻から“大量の鼻血”を吹き出し真顔のままカメラ目線を取っていた。

エツィオ「なぁお前ら…今俺のこと変態オジサンやらＨ男やら変態ジジイと思っただろ…？なぁ…そうだろ！？」

エツィオは“カメラ目線”で閲覧者や作者やら逆ギレの表情を出しながら、背中の翼の左方翼だけで素早く動かし、クルンと丸めるようにして背後から前へと動かす。そして…

エツィオ「おぃ、どさくさに紛れてナイフを投げるな。それにお前ら…」

丸められた左方翼の翼を広げた時、数本の投げナイフが雫が滴り落ちるように零れ落ちる。

どうやら左方翼の翼を人間の手のように動かし、“わしづかみする

ような動作”で投げナイフを全て盗ったようだ。

エツィオは左腰に携えていた剣を抜き、零れ落とした投げナイフを剣の刀身に乗せて、剣を水平にし投げナイフをお手玉しながら…

エツィオ「戦士(アサシン)らしく正々堂々戦え。出てこい小僧共！」

剣の刀身上でお手玉していた数本の投げナイフが、一瞬の内に四散して肉が突き刺さる音と苦痛の声が響く。

高速カメラ目線からだと、一つの投げナイフを空中に飛ばして、もう一つの投げナイフを空中に飛ばした投げナイフの刀身に当てて跳ね返させる。“ビリヤード”のようにその繰り返しをしたようだ。

周りからエツィオの黒ローブと対象的に白い武曽姿をした男達が、先程投げ返したナイフの攻撃を受けて、半透明から実体へとなる。

ーアサシン教団　見習いアサシン&師範級アサシンー

エツィオ「（見習いアサシンが多いな。あと師範級が3人程度ね…）んじゃ、８００年ぶりの恒例行事でもやりますか。」

エツィオを囲む白い武曽の数は、投げナイフで戦闘不能になっているのを除き約９～１５人。白い武曽はエツィオに向けて剣を抜き構える。

エツィオは一息をつけて剣を一回転させた後…

エツィオ「マシャフファーイツ！レディ…ゴォゥ！！」

またしても“荒ぶる鷹のポーズ”を取ってカメラ目線へと華麗に剣を構えた。

第九曲　どう見ても…中年オヤジ狩りです

―神界　マシャフ　アサシン教団砦前―

ガキンッ！ドスッ！

エツィオ「チャーンバーラー♪チャーンバーラァァァー♪俺らアサシン、今日も明日も暗殺（むそう）しに逝くぅぅぅ♪」

エツィオは訳のわからない歌を歌いながら、前方から斬りかかってくる白い武曽「アサシン」の真っ直ぐの剣を、剣先だけで受け止めて匠如くに剃らし、剃らした際に白い武曽の胸部に向けて左フックを叩き込む。

白い武曽の…見習いアサシン一人が短いうめき声をあげた後、身体を前のめりにして後へと吹き飛ばされ、鈴蘭の草原の上に倒れ込む。

シャイナ『意味不明の歌を戦いながら歌うなよ、アホバカジジツィオ（怒）』

エツィオ「ちょっ！だからシャイナぁぁ。俺はまだ2●★#歳だってばぁぁ（泣）これでもまだ若い方だぞ？」

エツィオは中にいるシャイナに突っ込みを入れがら、両側面から斬りかかる見習いアサシンの胴体狙いの太刀筋をしゃがんで避ける。

しゃがんだ同時にエツィオは右手を鈴蘭の草原の上に付けて身体を垂直にした後、両足を側面にいた見習いアサシンの顔面に向けて蹴りを当て、双方とも真横へと吹き飛ばす。

シャイナ『どう見ても外見40代変人顎髭オジサンです。』

エツィオ「オゥフッ（;¬ Д¬）い…痛い。心に硝子が刺さ…し…シャイナぁぁぁぁぁぁ。」

シャイナに突っ込みを入れられ苛立ちが込められた台詞を聞いて、エツィオは“垂直状態”のまま一瞬落ち込む表情になる。

そんなエツィオに背後から見習いアサシン二人と、前方から師範級のアサシンが走ってきて、垂直状態のエツィオを斬るべく同時に剣を振り回すが、虚しく空を切る。

師範級のアサシンが顔を上に上げると、エツィオの身体が遥か上空へと浮かんでいた。

シャイナ『ねぇ、エツィオ？さっき“恒例行事”って言ってたけど、今やっていることって単なる“唯の殺し合い”か“貴方に対しての下克上”じゃん。』

どうやらエツィオは垂直状態のまま身体を支えていた右手に力を入れて、空中へと跳び跳ねるように大きく飛翔し“背中に出ていた翼を使わない”で華麗に避けたようだ。

エツィオ「まっ、シャイナはそう見えるだろうな。確かにこれは普通の“殺し合い”やら“下克上”やらに見えるけど…」

エツィオはシャイナに答えながらエツィオの身体を空中で後方回転した時、地上にいた見習いアサシンと師範級のアサシン達が、エツィオの黒い鷹の翼と対象的に白い鷹の翼を出して、空中へと飛翔し剣を振りかざして襲い掛かる。

エツィオ「これは外界から来た者が“アサシンとして受け入れる時にやる神聖なる儀”だ。多くの兄弟(なかま)達の正義の剣を全て受け止めて、己が内にある悪を滅ぼし、善なる心を持つ正義を兄弟達に証明するためにな。」

前方から斬りかかる見習いアサシンに向けてエツィオは、エツィオの首筋を狙う太刀筋を左腕についている籠手で撫でるように剃らし

た後、見習いアサシンの首を締め上げるように掴む。

シャイナ『じゃあその時もしも、負けたら…』

エツィオ「悪(てき)と見なされて本物のアサシン達の正義の剣にて死ぬ。“外部の者”がマシャフで鍛えられたその“力”が他の世界で無差別に“振る舞われた”らシャイナはどうすると思う？」

そして掴んだ見習いアサシンの身体を利用して、後から斬りかかる見習いアサシン達と側面から斬りかかる師範級のアサシン二人に向けて“片腕だけで乱暴に振り回し”て自分に向かってくるアサシン達の身体にぶち当て地上へと“ヌンチャクでも振り回すか”のように叩き落とす。

シャイナ『そりゃ許されないよ。エツィオのような“チート”級を鍛えた人が私がいる世界に普通の人間に振る舞っていたら…たまったもんじゃないしw世界のバランスが崩れるわｗｗｗ』

掴んでいた見習いアサシンを投げ捨てるように落とした後、背中の翼を大きく広げて人間のてのように振り回し、残りのアサシン達を“平手打ち”でもするかのように頬の部分へと当てて地上へと落下させる。

エツィオ「ザッツ・ライト・シャイナ★そのための“儀式”。そう

いうことだＺＥ♪」

白い鷹の羽根一枚が、エツィオの目の前に漂う。無様に落ちていくアサシン達と一緒にエツィオも、地上へ向けて身体を何度も回転させて、鈴蘭の草原の上へ降り立った時、決まりの荒ぶる鷹のポーズを“カメラ目線”に向けてかっこよく決めるように取った時…

空中にいた全てのアサシン達が、折り重なるようにバタバタと倒れ白い鷹の羽の一部が、ヒラヒラと鈴蘭の花弁と共に舞った。

シャイナ『で、もう終わったの？こんな“中年オヤジ狩り”のような儀式は？？』

エツィオ「いや…まだだ。」

エツィオはニヤニヤした表情で荒ぶる鷹のポーズを解き、手にしていた剣を振り返りもせず後ろへと構えた瞬間…

？「見事だ、エツィオ。」

もう一人いたかのように別の鋼が、エツィオの剣の刀身に当てて、互いの剣の鋼から火花が飛び散り鋼同士の悲鳴をあげる。エツィオは後ろを振り向かずに思いっきり剣を振るって、背後からの奇襲者

を遠退かせる。

エツィオ「おやおや、マシャフの大導師が直々相手をしてくださるとはね…」

エツィオは剣を前に戻し、ゆっくりと奇襲者に向けて振り返る。その姿は見習いアサシンと同じ白い武僧のような姿をしていたがフードの部分だけ白く、眼つきは鷹のように覇気丸出しの漆黒の眼力があり、背中と腰から真っ白の鷹の翼が生えている外見２５歳の男が…両腕を広げその姿から“お前を抱いてやる”ようなポーズで立っていた。

―アサシン教団　大導師　アルタイル―

エツィオ「８００年振りに再会したというのに“コレ”をやるとは…神界はよっぽど“暇”なのかい？アルタイル？？」

アルタイル「そうではない…むしろ８００年間お前が眠っている間、こちらでも現世とのくだらん小競り合いがあってな。今ようやく最近、落ち着いた所だというに…。」

アルタイルは背中と腰から出ていた鷹の翼をしまい、左腰からエツ

ィオと同じ剣を引き抜く。

アルタイル「現世に再びテンプル騎士団が復活するわ、奴らの闇が現世の全体を呑み込むわ、お前共に封じていた“林檎”が行方不明になるわ…目覚めて間もないお前に対して次なる任務へと向かう時、支障が無いか…。」

アルタイルは腰を低くし剣の握り部分を両手で握りながら、剣先を前に構え低姿勢の体勢を取る。エツィオもアルタイルと同じように剣を構えて、互いに睨み合いながら臨勢体勢を取った。

アルタイル「ここで試させてもらうぞ。」

エツィオ「ああなるほd…へっ?…俺と共に封じていた“林檎”が行方不明だとぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!!??!??!?」

エツィオがアルタイルから聞いた“林檎”の行方不明を聞いて“カメラ目線”のまま弛んだ表情から驚愕の表情で絶叫しながら、突撃してくるアルタイルに向けてエツィオも走り出した。

第十曲　オジサンに惚れる瞬間

―神界　マシャフ　アサシン教団砦前―

シャイナ『ちょっ！何このイケメン！？？！！エツィオのような加齢臭でも漂ってきそうなオジサンと違って、このエロチックボイスにふつくしい美フェロモン丸出しの容姿…あぁ素敵すぎるぅぅぅ！！！！！』

シャイナはエツィオの眼から通してアルタイルを見ながら身体の中で、アルタイルの容姿とエツィオの容姿を見比べて“鼻血でも出している”かのように興奮しながら発狂する。

エツィオ「おまっw加齢臭ってひでぇ言い方しないでくれwつーかあの容姿でもアルタイルは、俺よりも数倍歳上だぞ？て、加齢臭やら美フェロモンって何？それとアルタイル…」

エツィオはシャイナに突っ込みと落胆をいれながら、アルタイルの振りかざす剣を受け止めて、袈裟斬りや激しい突きが混じったお互いの急所を狙った高速の打ち合いへと持ち込む状況へとなる。

互いの剣の鋼が火花を散らし打ち合いの最中、エツィオはアルタイルの剣を退け剃らせ一撃を加えようと、エツィオは手にする剣に力を入れてアルタイルの持つ剣ごと退けようとするが…

アルタイル「事実だ。お前が眠っていた棺の上に収めていた“林檎”が何者かの手によって盗まれたのだ。盗まれたと同時に各地に封印されていたテンプル騎士団までも現世に復活され…世界はまた再び闇へと閉ざされたのだ。」

エツィオ「いっ！…くっ！」

アルタイルはそれを狙っていたのか、一瞬剣を退けるためにエツィオの右腕が大振りになる所を狙って、アルタイルは素早く剣を持っていない左腕を滑らせてエツィオの右頬に向けて平手打ちをかます。

アルタイル「正気を失わず“林檎”を力を振るうことが出来る者は私とお前…そして我らが怨敵“魔帝”のみ。それは８００年前の話だ。だが今はどうだ？このような例外な現状になってしまったのは…」

エツィオはアルタイルに叩かれて一瞬怯んでしまい、視界が数秒遮られる。アルタイルはそこを狙って右手に持つ剣をエツィオの胴体に目掛けて降り下ろす。

エツィオ「んなモン知るかよ、アルタイル。基本的に“林檎”は心弱き者を拒絶し、強き者には真理を与える秘宝だったよな？なら何故現世に生きる民が“林檎”を持ち出すことが出来たんだ！？」

エツィオは危機的な気配を感じて、まだ焦点が合わない視界を気合いで目を開き、エツィオの持つ剣を胴体に構えてアルタイルの斬撃を防ぎきる。

そしてエツィオはさっきの仕返しとばかりに、アルタイルの右肩へと振りかざす剣を剃らした後、間を入れてアルタイルの胸部に向けて左肘打ちをかますが、アルタイルはそれを読んでいたかのように、剣の刀身を胸部に構えて完全に防ぐ。

アルタイル「原因は分からぬ。私も直ぐに現世へと下界しようとしたが、邪悪の闇が一瞬の内に全てを覆ってな…下界すら出来ぬ事態へとなったのだ。」

アルタイルは背中と腰の白い鷹の翼を出して、翼を大剣のように真横へとエツィオに向けて振りかざす。

エツィオは直ぐ様バック転でアルタイルの翼攻撃を避けたのはいいが、後々から出てきた翼の“衝撃波”が発生し、エツィオはアルタイル級の衝撃波の風圧を身に受けて、軽々と後方へと吹き飛ばされる。

シャイナ『うわわわわっ！エツィオ！！（先程戦ったデブの咆哮すら効かなかったのに、何このハチャメチャなチート違いｗ）』

エツィオ「く…ぁ！大丈夫だシャイナ！！ＨＵＵＵＵＵＮ！！」

エツィオは吹き飛ばされながら背中から漆黒の鷹の翼を出し、力強く前へと羽ばたいた後、後方へ引っ張られる力を無理矢理殺すように後方急ブレーキ（受け身）感覚で後退を防ぎ、体勢を立て直す。

アルタイル「それからだ…奴らの、テンプル騎士団が造った闇の中からお前に託した私の“力”を微かに感じて、鷹眼（イーグルアイ）を使って下界を写し取ったら“それ”だ。エツィオ…お前の中に入る女だ。」

シャイナ『えっ私？』

アルタイルがいつの間にかエツィオの目の前におり、アルタイルの持つ剣がエツィオの腹部へと向けて真っ直ぐ伸びてくる。

エツィオは瞬時にアルタイルの右腕を掴んで、剣の軌道を無理矢理剃らした後アルタイルの頭部に向けて頭突きをかまし、頭突きをすると同時にアルタイルの持つ剣をもぎ取って投げ捨てる。

エツィオ「シャイナが何だっていうんだ？まさか彼女に計り知れない“何か”があるとでも？？」

エツィオは先程の頭突きで頭を後ろに仰け反っているアルタイルの首筋に向けて剣を振るおうとしたが…

アルタイル「そ…うだ。お前の中に入る女の“力”が我々にとって希望か或いは厄災なのか。どちみちハッキリさせねばならん。なので…」

いつの間にかエツィオが持っている剣の刀身にアルタイルの右手が握られており、親指をデコピンの原理で軽く刀身を弾いた時、エツィオの持つ剣を意図も簡単に弾き飛ばす。

アルタイル「嫌とは言わせぬ…意地でも“女”をお前の中から引っ張り出してもらうぞ。」

アルタイルの左手がエツィオの胸部に向けて真っ直ぐに伸ばす。エツィオはやや真面目顔で“カメラ目線”のまま、伸ばしてきたアルタイルの左手を左手で受け止める。

エツィオ「おぃ、それは性的な研究実験の意味か？あるいはお前の「有り得ぬ話だ。」アホかw絶対あり得るわw」

更にアルタイルの右手も伸びてきて、エツィオも右手を伸ばし受け

止めて双方力をいれながら組み合い、背中の翼を羽ばたかせ空中へと持ち込む。

アルタイル「たわけが…。」

エツィオ「ぐっ！」

アルタイルの腰から出ていた鷹の左方翼を“合金のように硬質化”し、払いのけるような動作でエツィオの腹部に当てる。

エツィオはそのまま背中を下に向けたまま地上へと落下し、受け身無しで鈴蘭の草原の上へと叩きつけられる。

エツィオ「か…はっ！」

アルタイル「それが、詰だ。」

アルタイルはそのまま急降下し、野生の鷹が獲物を捕らえるような体勢で両足を前へと伸ばし、エツィオの両肩をアルタイルの両足を引っ掻けて、前方へと引き摺るように鈴蘭の草原の上を滑る。

エツィオ「うぁ…！」

アルタイル「チェックメイト…エツィオ。」

アルタイルは左手から隠し刃“アサシンブレード”を出し、引き摺りが終わった直後にエツィオの左肩を貫いた後、残った右手をエツィオの胸部に向けて伸ばす。が…

エツィオ「チェックにゃ、まだ早ぇなアルタイル。」

アルタイル「むっ…く！」

いつの間にかアルタイルの右手にエツィオの左手の隠し刃“アサシンブレード”が右手の甲まで貫いており、アルタイルは一瞬身体を揺らして怯む。

エツィオは仰向け状態のままアルタイルの腹部に向けて蹴りを加えて、蹴り飛ばした後にエツィオは少しよろめきながら立ち上がる。

シャイナ『ちょっ…エツィオ。アンタ大丈夫??すっげぇ疲れているし、血も出ているけど…』

シャイナはエツィオの眼から通して、左肩から血を流し息切れなが

ら漆黒のローブの刺された部分からジワリと出血している所を右手で押さえているエツィオの姿を見て、シャイナは戸惑いと焦りと心配が混じりながら、エツィオに語りかける。

エツィオ「大丈夫だ、シャイナ。俺はずば抜けた忍耐力があってな、これぐらい…掠り傷ＳＡ★」

エツィオは“カメラ目線”のまま身体の中に入るシャイナに向けて微笑み、口元を吊り上げて余裕を見せるようニヤリと笑った後、傷口を押さえていた右手を離し右手からもう一つの隠し刃“アサシンブレード”を出す。

シャイナはエツィオの眼から通してよく見ると、先程貫かれた左肩の出血が“綺麗に塞がっているように”血の跡が完全に無くなっていた。

エツィオ「悪いなシャイナ、カッコ悪い所見せちまって。だがこれだけは真剣に聞いて欲しい…。」

シャイナ『え?…エツィオ??（ちょっｗナニこれ?妙にオジサンがあのイケメンよりメチャかっこよく見えますがｗ）』

エツィオは右手のアサシンブレードを後ろに下げ、左手のアサシンブレードを前に真顔（マジ）のまま“カメラ目線”に向けて構えながらシャイナに言った。

エツィオ「俺は…君を守る！例えこの先何があっても、君の持つ“強き意思”を守り続けてやる！！」

エツィオの瞳が人間の漆黒の瞳が“金色の鷹の眼”と変わり、彼本来の８００年前と同じ勇者の姿へと変わった。

第十一曲　まさに…ビューティフル

―神界　マシャフ　アサシン教団砦前―

アルタイル「美しい…良い眼だ。」

エツィオに蹴り飛ばされたアルタイルは、苦痛の表情を出さず穏やかな表情ので、両腕を斜め上へと上げて後方回転しながら、綺麗に左足だけで身体を支えて鈴蘭の草原の上に着地する。

いわば“グ●コ”のポーズである。

アルタイル「８００年ぶりだな。…お前の本当なる姿を見るのは。」

エツィオ「Ｐｅｒ　ｆａｖｏｒｅ　ｐｒｅｐａｒｉ　Ａｌｔａｉｒ（覚悟しろ。）」

エツィオは無表情のまま冷たいイタリア言語を少し吐いた後、両腕を後ろへと引くように、低空状態のままアルタイルへと突進する。

アルタイルは迎え撃つためもう一つの“アサシンブレード”を右手

から出し、両腕を前へと向けてまたしても“お前を抱いてやる”ポーズでカメラ目線に向けたまま…

アルタイル「そうだ。もっと魂(いのち)を燃やせ。私の魂まで焼き尽くして魅せろ。」

エツィオ「Ｆｕｌｅｃｃａｔｏ Ｄｉａｍｏｇｌｉ ｌａ ｇｉｕｓｔｉｚｉａ ｃｈｅ ｉｏ ｈｏ ｃｏｍｐｌｅｔａｍｅｎｔｅ！（上等だ。俺の持つ正義の力で、お前の魂まで総てを焼き尽くしてやる。）」

アルタイルの目もエツィオと同じ“金色に輝く鷹の目”へと変わり、エツィオがアルタイルの懐へと滑り込んだ瞬間…

お互いのアサシンブレードの剣先が当たり、確実に喉仏や心臓を串刺しにするべく命懸けの高速の突き合戦が起きる。

剣先がぶつかる度に火花を散らし、鋼と鋼同士のぶつかる金属音と、突きの度に発生する彼らの風で彼らの上にいる鈴蘭が激しく踊る。

アルタイル「まだ足りぬ…もっとだ。」

アルタイルはニヤリと口元を軽く吊り上げた後、背中と腰の翼を剣

山のように“硬質化”し、アルタイルは身体を回転させてエツィオに向けて剣山の翼を振り払う。

エツィオ「Ｉｏ　ａｎｃｏｒａ　ｌｏ　ｃａｌｅｒ？　ａｌｌ'ａｎｇｏｌｏ　ｄｅｌ　Ｓｕｏ　ｃｕｏｒｅ　ｓｅ　ｉｏ　ｃｏｒｒｏ　ｆｕｏｒｉ．（なら満足させるまで、お前を堕としてやるよ。）」

エツィオも背中の翼をアルタイルのように剣山に変えて、アルタイルの剣山翼攻撃をエツィオの左肩に靡かせるマントのように広げて完全に防ぐ。エツィオも身体を回転させて剣山と化した翼をアルタイルに向けて振り払う。

アルタイル「ノッてきたな、エツィオ。伝わるぞ、お前の中に激しく燃える魂が…！」

アルタイルはエツィオの剣山翼攻撃を軽く上昇して避け、両腕を水平に伸ばした後、アルタイルの背中の白い鷹の翼が、蛇のように腕に沿って纏わり付く。

アルタイル「潰れろ。」

翼が籠手のように硬質化し、アルタイルの手が手の平にアサシンブレードを残したまま巨大な爪へと変化する。アルタイルは爪と化し

た両腕を組んで、エツィオに向けて頭部から振り下ろす。

エツィオ「Ｉｏ　ｓｔｏ　ｓａｐｅｎｄｏ！（しゃらくさいぜ！）」

エツィオもアルタイルと同じように、背中の黒い翼を腕に纏わり付けて巨大な爪へと変化させ、頭部に向けて両腕をクロスさせるように、アルタイルの頭部攻撃（ハンマーナックル）を防ぐ。

その後二人は低空状態から地上へと地へ両足を着けて、二人は左片腕の手を握りお互いの顔面に向けて、硬質化した腕を前へと振る。

アルタイル「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄ァァァァ！！！！！」

エツィオ「Ｄａｄｏ！Ｄａｄｏ！Ｄａｄｏ！Ｄａｄｏ！Ｄａｄｏ！Ｄａｄｏ！Ｄａｄｏ！Ｄａｄｏ！（死ね死ね死ね死ね死ね死ねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！）」

今度は“アサシンブレード”の突っつき合戦から高速殴り合い状態になり、お互いの両眼から車のハイライトのような光が出ていた。硬質化した腕だけの殴り合いだけでなく、片足の百連蹴りが混じった蹴り合いも入り、お互い譲らない“高速素手合戦”の状態が続く。

…

……

……

アルタイル「…っ…はっ…ぬ…ぅ……。」

エツィオ「…ハァ…ハァ……。」

長い殴りと蹴り合いから数時間後、アルタイルとエツィオは所々全身に擦り傷と打撲を負いながら、今でも殴り続ける。

アルタイル「ぐぉっ！」

エツィオ「ぐっ！！」

最初の殴り合いの時と違い、所々身体にお互いの硬質化した腕が当たって、意識が飛びそうなる位に身に受けながらでも“どちらかが倒れるまで”戦い続ける。

アルタイル「…貰ったぞ！」

アルタイルは一瞬膝を着いたエツィオを見逃さず、長時間に及んだ

戦闘を締め括るべく、持てる力を持って右腕をエツィオの左頬に向けて振り下ろす。アルタイルはしめたと思いニヤリと微かに笑って、己の勝利を脳裏に思い浮かぶ。が…

エツィオ「Io sono deluso. Questa lotta? la mia vittoria (違うな。“貰った”のは俺だ!!)」

突然アルタイルの顎下から衝撃が走り、傷ついているアルタイルにとってこれは、何が起きたかは理解出来なかった。エツィオはアルタイルの渾身の攻撃を誘うべく膝を“ワザと”着き、当然誘われたアルタイルは大振りの一撃を振るいエツィオの反撃を作るように形を取ってしまった。

アルタイル「……なん…だと…!?」

エツィオはアルタイルの渾身の一撃を、頭部を少し傾けて逸らしこの瞬間にアルタイルの顎下へと向けて腹部下から頭突きをかまし、アルタイルに脳震盪を与えた後、エツィオは右手でアルタイルの左足を掴み…

シャイナ『待てって!!エツィオそれ以上やったら死ぬ!!!駄目ぇぇぇぇぇらめぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!ひぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ!!!!』

エツィオ「Ｕｎ　ｇｉｏｃｏ　ｐｉａｃｅｖｏｌｅ　ｇｉ？　？　ｕｎａ　ｆｉｎｅ（終わりだ。）」

一本背負いの勢いでアルタイルを仰向けに転倒させ、エツィオはアルタイルの身体を馬乗りのように乗り、右手でアルタイルの首を掴む。

そして必殺の一撃を込めて集中した“硬質化”した鷹の翼の左手のアサシンブレードを、シャイナの叫び声が轟きながら殺す勢いでアルタイルの顔面に向けて振り下ろした。

アルタイル「（私は…此処までか…。）」

アルタイルは焦点が定まらない虚ろの眼で、エツィオの殺気出る金色の両眼が眼に映る。アルタイルは覚悟を決めて静かに眼を閉じて、自らの命を悟って顔面から来る衝撃を待った。

エツィオ「馬鹿っ。何カッコつけてまで命を差し出す覚悟を決めてんだ。とっとと起きろ、アルタイル！」

パチンッと殴り掛かる重い衝撃で無く、少し軽い衝撃をアルタイルは右頬から軽い痛みの感覚受ける。どうやらエツィオの軽い平手打ちを、右頬に軽く叩かれたらしい。

アルタイルは眼を開いてみると、エツィオが口元に切れていた血を爪状態を解いた元の右手で拭いながら、背中の翼を閉まい呆れた表情で両眼が元の黒に戻った状態で、アルタイルを見下ろしていた。

アルタイル「…何故だ?」

アルタイルは疑問でも浮かべているような表情で爪状態を解き、腹部を左手で押さえよろめきながら翼を閉まって立ち上がる。

エツィオ「自分で言ったことを忘れたのか?“次なる任務に支障が無いか試す”って言ってただろ??」

アルタイル「っ…むぅ。」

アルタイルは少し真面目に少し思い出すと、今までエツィオとの戦いで本来の目的さえ忘れてしまったことに少し恥じを感じ、一瞬だけ顔面を少し赤くする。エツィオは一息ついた後、ちょうど足元に刺さっていた“アルタイルの剣”を目の前にいたアルタイルに、刀身に蹴り当てて蹴り飛ばす。

エツィオ「でっ?結果は??」

エツィオがそう言った後、アルタイルは蹴り飛ばしてきた自分の剣を右足先端に刀身を蹴り当て、さらにもう一度右足裏に刀身を当てて、自分の剣を空中回転させながら数回お手玉した後…

アルタイル「残念だが、８００年前と全く変わらん。お前はまだ温いところがある。そこに敵が付け込まれたら、お前はいったいどうするつもりだ??・・・が、一応合格としておく。久々の良い戦いだった。」

左腰に携えていた剣の鞘に、空中回転しながら自分の剣をピンポイントに入れる。その後アルタイルはちょうど足元に刺さっていた“エツィオの剣”をエツィオに向けて投げつけ、エツィオは右手できっちりと握る部分を掴んだ後、左腰にある鞘へと収める。

エツィオ「どうもツンデレ的な意味のご指摘どーも。なぁ、アルタイル“さっき”お前言ったことは…。」

エツィオはアルタイルが言ったこと“シャイナの力”を調べさせるために、シャイナの身体を使って研究するのではないかと…いまだに、心深く真剣に思っていた。アルタイルは何のことだと言って少し笑った後、エツィオに言う。

アルタイル「あれは“嘘”だ。お前の実力を引き出すために言ったことだ。お前の中にいる女の身体を研究利用で破廉恥に扱うなど絶

対せん。寧ろ私は、元々女は好かん触りたくも無いわ。」

エツィオ「ですよねーｗｗｗお前のような眼力だけで払い除ける奴は、元々女や男など寄り付かないしな。つーか…お前の眼力が効かないのは俺か一部の者だけだし…。」

アルタイル「そういうことだ。」

アルタイルの冷たい発言を聞いたエツィオは、すこし笑った後ほっとした表情を出して、胸元を軽く摩って撫で下ろした。

第十二曲　長いお使いの始まり

―神界　マシャフ　アサシン教団砦内部―

シャイナ「ぷへーっ、ひどい目にあった…（流石リアルチート世界！どこでも見かける二次元と違って、私だけ見れてもう最高っ！！！ありがとう神様ァッ！）」

シャイナは服が破れたことで落ち込んでいる表情を出す中、心の中ではプクと興奮が混ざった幸せ笑いを出しながら、窓に映る砦の下山部分に建てられている中世風の居住区を見る。

シャイナは空いていた個室をアルタイルから借りて、その後部下からこの世界での衣装を一時的に借りるよう持ってきてもらい、着替えている最中であった。

シャイナ「これで…よしっ！（イヤァーンｗｗｗなんというD●C４オープニングに出てくるキ●エちゃんのようなお姫様衣装ｗｗｗ私美しいぃぃぃ！！）」

太ももまでかかる長い裾に、首にはアサシン教団の紋章の銀のプレートの首飾りを付け、両腕には大脚部までかかる裾を付け、腹部には赤い帯を二三回巻いてリボン結びで止めた後、白をベースにした

服をシャイナは見て興奮する。

エツィオ「おーい、シャイナ！着替え終わったかぁー？」

シャイナが着替え終わったと同時に、今居る個室の外からエツィオの声がシャイナに話しかけてくる。

シャイナは終わったよー。と言った後に、個室の扉からエツィオが入ってきた。

エツィオ「おっと、これはこれは…。」

エツィオは今着ているシャイナの衣装姿を見て思わず魅とめてしまい、エツィオは左手を差しのべてシャイナの背中から腕を通し、右胸を触る手前までゆっくりと滑らせる。

エツィオ「中々のお似合いですよ、シャイナお嬢様。」

エツィオは社交的な言動で左片足膝を固いコンクリートに着けて、手馴れた手つきでシャイナの右手を取って、少しばかりのキスを付ける。

シャイナ「イヤァーン、ありがとうエツィオォｗｗ今お姫様気分を味わえて最高ぉぉぉｗｗウフフフフｗｗｗｗ…あっ、そだ。アルタイルの所に行くんじゃなかったっけ？」

エツィオ「おっと、そういえばそうだったな。あんまりアイツを待たせてはいけないし…。」

エツィオは今やるべきことを思いだし、一瞬だけ少し顔が赤く染まった後、小さな声でシャイナに言った。

エツィオ「アルタイルはこの砦の上部“大導師の間”にいるんだ。さっさと行くとしよう。…なぁ…シャイナ、今度“ヤっていいか”？８００年ぶりに…」

エツィオがもじもじと顔を下に向けて、シャイナにの視線を反らしながら両手を細かい動作を取る。

シャイナはそんな動きをしているエツィオに向けて手を首筋に差しのべて、シャイナの唇がエツィオの頬に付く手前まで身体を寄せた後、エツィオに言った。

シャイナ「良いよ。どうせこの小説“エッチ描写”あるしｗｗｗなんにせよ作者フリーダムだからさ。時間が空いたら“見えない所でチュッチュッ”しよ！」

シャイナはエツィオの誘いをそのまま承諾し、穏やかな表情でカメラ目線のまま答える。エツィオはシャイナの視線から見えない位置で、喜びの表情を出しながら、両手を丸めて小さいガッツポーズを取った。

―神界　マシャフ　アサシン教団砦　大導師の間―

アルタイル「漸く来たか…何をしていた？」

シャイナは大導師の間を見ると、目の前には机の上に山積みになった書類に、白いタイルのようなコンクリートの床、両側面には分厚い本棚、山積みになった書類の机の後ろには大きなガラスがあり、そこから白い光が入ってくる。

エツィオ「悪ぃな、８００年ぶりに兄弟達から声掛けられてな。ついつい話が長くなってしまってｗ」

アルタイル「全く…お前らしいな。」

シャイナはアルタイルを見て厳しい言動を吐かれるかと思ったら違い、先程の戦闘とは大違いに寧ろ穏やかな表情でエツィオに語りかけていた。

シャイナ「（たしか、二人とも８００年ぶりの再開だもんね。どれだけこの人は、一人の時間を過ごしたんだか…それに人付き合い苦手そうだし…。）」

アルタイル「私は“一人”ではないぞ女。エツィオが８００年間眠っている間“兄弟達”が私を支えてくれたのだ。」

シャイナ「ちょっ！何故わかった!?」

シャイナの心の中で言ったことがアルタイルに読まれていたことに驚き、シャイナはエツィオの左腕にしがみついて“頭隠して尻隠さず”の状態になる。

アルタイル「二万の時を生きた私にとって、人間の心など読むに容易い。寧ろこれも己が体鍛の一つだ。」

アルタイルは目を細くしながら少し口元を吊り上げて、彼なりに笑っているようにシャイナに言い、アルタイルは机の上に山積みになっていた一つの分厚い本の一部を取りだし、二人の床の前へ投げ付ける。

アルタイル「本題に入ろう。まず一つ目だ。女、お前の世界が闇に

包まれている正体は我らが怨敵“テンプル騎士団”の闇の力だ。理由は分からないが奴らは現世に復活し、もう一度“大聖戦”を起こそうとしているのだ。我々に復讐を果たすためにな…。」

床に落ちていた分厚い本から変な紋章が出てきて、溶けるように床全体に広がる。シャイナとエツィオの床の前に今現在の地球の姿を見て、シャイナは信じられない表情で見詰めていた。

シャイナ「え、ちょっ…それは、８００年前に起きた出来事でしょ？私がまだ小さい頃に話を聞かれて、まさか昔話が本当に…」

エツィオ「事実だ。俺も…アルタイルもこの世界も存在している。あり得ないことなど、そんなの無い。それに…」

エツィオは腕を組ながら床の前に映るシャイナが住まう地球の姿を見て、少しめんどくさそうな表情で息を漏らす。

エツィオ「シャイナがいた場所を除いて、“全部”じゃないか。マンドクセー（、ε′）」

アルタイル「それだけ奴らの闇が短時間で広がったことだ。まだ奴らのような完全な“魔界”ではない。地球に残っていた魔力の境界線が辛うじて“特異界”として地球の世界構成を保っている。」

シャイナ「“特異界”？」

エツィオ「つまりシャイナの住む現世…“人間界”とテンプル騎士団の“魔界”が混じった様々の魂が行き来する“特異界”ってことだ。シャイナが住む世界から簡単に説明すると、“あの世とこの世の境目”ってわけ。」

エツィオは頭部に“？マーク”でも付いているかのように、きょとんと表情を出しているシャイナに向かって、分かりやすく説明する。

アルタイル「まず一つ目の任務は、世界を呑み込んだ闇を祓う“浄化”をお願いしたい。闇を産み出した“媒体”を殺すか、いまだに現世の何処かにある“秘宝”の力を使って闇を祓うか…お前達の判断に任せる。そして二つ目は…」

アルタイルは一瞬視線をシャイナ向け、何かを調べるような仕草をした後、エツィオに言う。

アルタイル「行方不明になっている“林檎”の捜索をしてもらいたい。お前達が現世で浄化をしている間、神界にいる私も鷹目（イーグルアイ）を使って“林檎”を探すから、一つの浄化を終えた後、現世の何処かにある我らの紋章へと入り、此処に戻って私に必ず報告してくれ。そして三つ目は…」

アルタイルはエツィオにそう言った後、視線をシャイナに向ける。シャイナはアルタイルの鋭い視線に気付いたのか、少しビクビクしながらエツィオに左腕に抱きつくようにしてしがみつく。

アルタイル「女…お前の中にある“力”を知りたい。エツィオの剣…いや、私の血と肉と神域の魔力で構成した退魔の剣を“普通に持てた”そうだな？お前の血筋と家系を言え。」

アルタイルの気迫の込めた言動で、強い眼力をシャイナに送る。シャイナは少し身震いしたが、側にいたエツィオが落ち着いて言えばいいと、シャイナに一言言われた後、シャイナは意を決してアルタイルに答える。

シャイナ「血筋って…よく分からないけど、私の住む世界から説明すると性が“アクイラ”よ。小さい頃に叔父の実家で大切に保管していた供え物がまさか…“エツィオの剣”だったなんてね。」

エツィオ「シャイナの叔父が？」

シャイナは幼い頃の記憶を思い返して少し笑った後、シャイナは床に映る黒くなった地球を見て言う。

シャイナ「“エツィオの剣”をずっと所持していたのは私の叔父の名は“リオール・アクイラ”。叔父は昔からエツィオ達守護神様の伝えを守るために、伝承を守り続けた神の仲介役として戦い続けた“神様に選ばれた人”だったらしいの…。」

アルタイル「ほぉ…現世の人間共が、そんなくだらんことをするとはな。が…“アクイラ”か、少し聞いたことがある気がするが…」

アルタイルは何かに思い当たるような動作をした後、アルタイルは背中を向けて右親指の骨を鳴らし、床に映っていた地球の姿を消す。

アルタイル「だが今は“浄化”が先だ。まずはそれに当たって貰おう。」

エツィオ「了解した。」

すると、床から先程の分厚い本が出てきて、蝶が飛ぶように本が羽ばたく動作をした後、元の山積みになった机の元へと戻る。

アルタイル「エツィオ、お前に“８００年前に使っていた装備”を返しておく。また再び此処へと戻られた時、私は新しい“暗殺魔具”を造っているかもしれないから。」

アルタイルは山積みになった書類の後ろから何かをエツィオに放り投げて、エツィオは右手で放り投げられた物を掴んで見た後、ニタリとアルタイルに向けて笑った。

エツィオ「サンキュッ。アルタイルありがとな。コイツをずっと預かってくれて！」

シャイナはエツィオが持っている物を見ると、何やらオーケストラで使われる“指揮棒”見たいなものが握られていた。

シャイナ「（ナニコレ？D●のタッチペン？？）」

アルタイル「気を付けて行ってこい。…安全と平和を、兄弟（エツィオ）。」

アルタイルがそう言った後、エツィオとシャイナの足下からアサシンの紋章が出てきて、光が二人を覆うように迸った後、一瞬の内に二人の姿は消えた。

アルタイルは消えた二人の場所を少し見た後、シャイナが言ったことを見返して深く悩むような仕草を取った後、何かに思い当たるようなことを脳裏に過って少し呟いた。

アルタイル「“アクイラ”だと…まさかな…。」

第十三曲　これでも日常茶飯事なんです。

―現世　とあるイタリア小国　聖地の英雄慰霊墓地　駐車場―

シャイナ「うーしゃ、戻ってきたＺＯＹ★（うひょぉぉぉぉ！なんというネイチャーアドベンチャー的な大冒険っ！！うひひっ、私がもうゲームの主役みたい！！）」

駐車場にあるアサシンの紋章から、シャイナとエツィオが現れる。

エツィオは身体を半透明にさせて、軽々とジャンプしシャイナの右肩に両手を乗せ、両足を便所座りのように組み、鳥が休むように座る格好でシャイナの右肩に乗る。

エツィオ「先ずは近くから闇の気配を感じる“北”の方からだな。」

シャイナ「となると、“ドイツ”か“スペイン”辺りかな。何れにせよ世界を廻るこ…あっ！！」

エツィオ「どうしたんだ、シャイナ？」

シャイナが突然すっ惚けた声を出し、エツィオは戸惑いながらシャイナに答える。

シャイナ「イケねぇ！今日“聖地の英雄”様…エツィオ！アンタを祝うこの国の恒例の祭だったよ！！」

エツィオ「へっ！？俺を祝う？」

シャイナ「そうだよ！何にせよ祭の際に五月蝿い連中がいるんでね。少しでも遅れると爺連中のボヤが長いんだ。悪いけどエツィオ、一旦私の家に戻るよ！！」

シャイナは今日の行事のことについて思い出し、大急ぎで実家を目指して足を蹴ったが…

エツィオ「そういうことなら、俺にまかせろ！」

シャイナ「ちょっ！おわっ！！」

いきなりエツィオの身体が実体化し、エツィオの右手はシャイナの背骨を左手にはシャイナの足を持ち、いわば“お姫様抱っこ”の持ち方で抱き抱えられる。

エツィオ「ＳＡ★いっくＺＥ（＾Ｏ＾）シャイナの家はどっち？？？？」

シャイナ「ぎょえぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！早ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！ギブっギブぅぅぅぅ！！！！！」

エツィオがそう言いながら景色が、ビデオの高速早送りのように映り、エツィオは“屋根の上”を走ったり“木と木の枝を伝って”高速に飛び移りながらまっすぐに走っていた。

シャイナ「もぎゃぁぁぁぁぁぁ！！！！ジェェェェロォォォォォォニィィィィィィモォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！」

シャイナの訳の分からない絶叫の声が、後方へと置いていくようにあっという間に去っていく。

そんな中エツィオはマンションの屋上を走って、次から次へと屋上を乗り継ぎ数少ない田舎のような居住区から、様々な公共施設と通勤で通る車が多く走る都市内へと入る。

―となるイタリア小国　中心都市―

エツィオ「あっちか？こっちか？？それともあそこ？？？」

エツィオは水へダイブするように落ち、落下地点にあった一つの街灯を左手で掴んで、“ポールプレイ”のように横へ何度も回転しながら勢いをつけた後、正面に建っていたビルへと飛翔する。

そしてビルの壁に両足をつけてエツィオは真上へ向かうよう“普通に重力とか関係無く走り”、走る度にひび割れを作り、一部の“ガラスの破片を歩道に落下”しながら上へと走る。

シャイナ「え…えちち〃…ちゅぃオ〃……と……れ…★℃¥$#&⇔…＊@§⇔……。」

エツィオ「ブッハハハハハ!!!!シャイナ?何いっているんだ?分からないZO★ブホッ♪それになんだ?その宇宙語のような言い方は?」

エツィオはシャイナの意味不明の言葉を聞いて、思いっきり高笑いしながらビルの屋上へと辿り着き、屋上を囲っていたフェンスを蹴り破り勝手に侵入した直後…

?【見ツケタゾ!アサシン!!】

?【殺シテヤル!!】

ビルの屋上の床から黒いガス状の騎士が数人現れ、エツィオの行く手を阻むよう剣を抜く。

―下級テンプル騎士　ネロズ　マティーター

シャイナ「お〝え〝っwあ〝れ〝ぇぇぇぇぇ?何でこ〝い〝づら〝い〝る〝の〝??」

シャイナは白目で青ざめた表情で口から泡を吐きながら、ぐったりと声を枯らしつつ目の前に立ち塞がる黒いガス状のテンプル騎士を見る。

エツィオ「テンプル騎士団の下級兵だ。奴らは地球の魔力境界線の隙間から侵入して、糧となる“ヨリシロ”に寄生した後ヨリシロを基に自由に現世を徘徊できる存在なんだ。」

エツィオはシャイナに説明した後、エツィオはやや険しい表情を出してシャイナを“お姫様抱っこ”したまま身構える。

ネロズ　マティータA（略してネロマテ）【死ンデモラウゾ!】

ネロマテB【我ガ主“魔帝”ノ名ニ誓ッテ死ヲ！】

ネロマテC【我ラニ永遠ノ闇ヲ！】

一人一人が剣を槍を構えて一斉に、数での暴力如くエツィオに向けて斬りかかる。

エツィオ「が…“ヨリミ”が無ければこの光溢れた世界だと、魔界で生まれた奴らにとって猛毒だ。出来損ないの屑のように短命なのが奴らの欠点なのさ。このように軽くあしらうだけで…」

エツィオは左方翼だけ背中から出して、シャイナの全身を覆うように包んだ後、包んだ翼をエツィオの左肩まで上げた所で、花が咲くような動作で翼を広げ“赤子が眠る揺り篭”のような形を創る。

シャイナ「ウェベッフッボッ…あ〜ー、う〜ー、エツィオの羽モフモフしててん〜ぎも〜ぢぃぃぃぃぃ…（´ω`）」

シャイナは身に包んでいるエツィオの羽をギュッと抱きしめて、先程までの酔いの表情から幸せに満ちた表情へとなる。

エツィオは目の前に立ち塞がる敵の説明をしていたが、シャイナの幸せ顔を見て真顔からニヤケ顔になり、調子に乗ってシャイナに背

中の翼のことを言う。

目の前に敵がいるのに関わらず、“顔を後ろに向けたまま”でシャイナに喋っていた。

エツィオ「…ウホホッw温かいだろ（ー十ー）シャイナの体調に合わせて創ったんだぜ？超幸せだろー（＾ω＾）」

エツィオはシャイナの表情を見ながらニヤニヤと顔を崩し、優しい手付きでシャイナの顔を額から顎下までゆっくりと摩りながら言う。

ネロマテA【貴様ァ！我ラヲ舐メテイルノカ！？】

ネロマテB【生意気ナ餓鬼メ！殺シテヤル！】

ネロマテC【殺ッチマエ！】

自分達を無視しているのか、目の前に立っていたテンプル騎士団の下級兵達が、“顔を後ろに向けたまま”の不真面目エツィオに激怒した後、一斉に斬りかかる。

エツィオ「まったく熱心な奴らだな。どうせアンタらは…」

エツィオはシャイナにニタニタな表情で顔を向けたまま、穏やかな言動で斬りかかって来るテンプル騎士団の下級兵に言う。

後数メートル、エツィオがいる所までテンプル騎士団の下級兵達が迫った瞬間…

ネロマテ-ｓ【！！！】

テンプル騎士団の目の前に、大きな箱のような物体“乾燥機”が突然視界に飛び込んできた。

ネロマテＡ【ギャッ！】

ネロマテＢ【ギィィィ！！】

ネロマテＣ【ギュッ！！！】

目の前にいたテンプル騎士団の数人の下級兵が、飛んできた乾燥機に丸ごとぶち当たる。

どうやらエツィオが近くにあった乾燥機を“片足だけで蹴り飛ばした”らしく、乾燥機に下敷きになった彼らを巻き込みながら、屋上フェンスを破って“ビルの下”へと落下する。

ガシャァァァン！

ビルの下にいた通行人Ａ「キャァァァァァァァァ！！！！」

ビルの下にいた通行人Ｂ「うわぁぁぁぁぁぁ！！！！」

ビルの下にいた通行人Ｃ「か…乾燥機が落ちてきたぞ！！！！だ…誰か警察に電話してくれ！！！！」

ビルの下にいた通行人Ｄ「上からだ！上から乾燥機が落ちてきたぞ！！！！」

エツィオがいるビルの屋上から、ビルの下にいた人の悲鳴が多数聞こえて、落下し大破した乾燥機でも見たのか、徐々に人の声が増えていく。

エツィオ「おーおー、８００年前はそんなに珍しいことじゃなかったのにｗｗｗ平和呆けしているなぁー。今の現世の民は（＊＾ｍ＾

＊）」

シャイナ「おっまｗｗｗ８００年前の住民達はもう“これ”が日常茶飯事だったんだねｗｗｗ（どんだけ修羅場だったんだろ？マジアリエネェェェェェｗｗｗ）」

シャイナは両手を口に添えて微笑むエツィオの表情を見て、呆れた表情で身体を覆う羽を少し握り締めながら、８００年前の世界のことを思っていた。

第十四曲　ドSの時間…その1

―とあるイタリア小国　中心都市　ビルの屋上―

ネロマテD【馬鹿ナ…ソンナハズデハ！】

ネロマテE【マ…マグレダ！掛カレ皆！！】

一瞬の内に倒された仲間を見て怯んだ後、残っていたテンプル騎士団の下級兵達は、手にしている武器を握り直し、またエツィオに斬りかかる。

エツィオ「ザ★タタミ返し！！」

ガシャァン！

ネロマテD&E【ギャゥ！！】

屋上に侵入する際に蹴り壊したフェンスが、エツィオの足元に倒れていたので、エツィオは右手だけで軽くフェンスを叩くだけで…

フェンスが“跳び跳ねるように上へと”上がりテンプル騎士団の下級兵の顔面を丸ごとフェンス中央にぶち当てる。その直後…

エツィオ「レッツ☆和風“トコロテン”の刑！」

上へと跳び跳ねたフェンスの端を掴んで、フェンスを屋上床へと下方向に押し込んだ後、エツィオが言う通り“トコロテンが出来るような”形で顔がフェンスの網を通るよう細く分割される。

エツィオ「ブーメラン♪ブーメラン♪♪だが戻らない欠陥ブーメラン♪♪♪」

ネロマテF【ゴゥッ！？】

ネロマテG【オ゛ッ！】

エツィオは笑いながら掴んでいたフェンスを投げ飛ばし、一つだけでなく蹴り壊しただけのフェンスを拾い、雪合戦のようにテンプル騎士団の下級兵達の的確に“頭部を当て”ながら投げつけた。

ネロマテH【装甲兵！装甲兵！前ニ出ロ！！】

ネロマテＩ【弓兵！弓兵！！ヤツヲ串刺シニシロ！！】

すると、床から大きな楯を構えているテンプル騎士団の兵が現れ、さらに別の様々なビルの屋上から、弓を構えた兵が数人現れる。

ネロマテＪ【サア殺レ！】

ネロマテＫ【串刺シニシテヤル！】

テンプル騎士団の下級兵達がまた再び襲い掛かる。エツィオから遠い位置にいた弓兵数人がエツィオを射ぬくべく、赤い光を纏ったガス状の矢を一斉に放つ。

そして、目の前にいた大きな楯を持つガス状の兵が、武装している仲間と一緒にエツィオに向けて突進する。エツィオはやれやれと手を軽く広げて一息ついた後…

エツィオ「貴方の身体をグラッチェするぉ☆」

エツィオが先程アルタイルから返してもらった“指揮棒”みたいな物を取り出すべく、右手を“身体の中に入れて”身体の青白い光が少し漏れながら、ゆっくりと“指揮棒”を取り出す。

シャイナ「えっ？何ソレ？？指揮棒？？やけにリーチ短いじゃんｗｗｗ」

エツィオ「ノン★指揮棒ちゃうで。これは敵を…」

シャイナはアルタイルから受け取った物を見て思っていたことを言った後、エツィオはノンノンと顔を横に何度も振って、右手に持った“指揮棒”を振った直後…

装甲ネロマテＪ【ギャァァァァァ！】

目の前にいたガス状の装甲兵が悲鳴をあげて、肉が引き裂かれ貪る音が聞こえる。

シャイナは目の前に映る物を見て、口をあんぐりと開けたまま呆然としていた。

？《…ギュルッ》

エツィオ「おー♪おー♪おしおし♪♪良い子にしてたかぁ？ブリトラ？」

指揮棒しか見えなかった物がエツィオが敵に向けて振った後“突然変異”する。

握り部分が指揮棒の原型を保っていたが、先端から活きているかのように蠢く紫色の繋ぎ目が入った長い刀身に、剣先は犬のような顔をした物がいて、口にしている瀕死の装甲兵を牙で噛み砕くように飲み込んだ後…

ブリトラ《ペッ！》

装甲兵が持っていた大きな楯を不味そうな表情で口から吐き出し、吐き出した楯は一斉に射って来た矢に全て当たって、唾液と矢が付いた楯は隣のビルへと“衝突”する。

ドカァァァァン

ビル下にいた通行人D「うわっ！なんだビルが！！！！」

ビルの下にいた通行人E「まさか…テロか！？」

またしてもビルの下にいた通行人が、悲鳴と驚きの声をあげてまた

しても騒ぎが大きくなる。

シャイナ「（ ゜Д ゜）」

エツィオ「おややぁ（´ ω`）不味かったかい、ブリトラ？」

ブリトラ《キュゥゥ…ン。》

ブリトラと言われたエツィオの持つ武器の先端の“犬”に言った後、ブリトラは落ち込んだ表情でエツィオに向けて声をあげる。

シャイナ「えっ…なにこの“犬”のような可愛い子ｗｗｗ（ブリトラってあのインド神話に出てくる最強の魔竜だったような…）」

エツィオ「シャイナー（＾―＾；）ブリトラは“犬”じゃないぞｗ“竜”だ。それに俺が持っている武器は暗殺魔具の一つ“雷を喰らいし魔竜の咆哮”いわば“雷竜鞭”だな。」

ブリトラ《…ガウッ！》

エツィオがそう言った後、鞭の先端のブリトラが軽く吠えた直後、エツィオの背中に包むように支えているシャイナに向けてブリトラ

は刀身（からだ）を後ろに伸ばして、シャイナの髪や服を犬のように嗅ぐ。

ブリトラ《クン…クン…クン…クン……バァゥ。》

ベロッ

シャイナ「わっ！ちょっ！！く…くすぐったい！！らめぇぇぇぇっｗｗｗ」

ブリトラがシャイナの頬や顔を舐め始め、よほど気に入ったのかブリトラは満足の表情でシャイナの顔全体を隅々まで舐める。

エツィオ「おぉっ！？ブリトラが“人”を舐めたとはΣ（ΘｏΘ）シャイナ…君は生きた“魔竜”を魅られるほど認めているのか…スゲーｗｗｗ」

シャイナ「え゛…そんなに凄いことなの？（ウホッ…こんな犬畜生が神話に出てくる“ブリトラ”とはｗゲームに出てくるモンスターじゃ無理矢理美化されているしｗｗｗ）」

シャイナは顔全体がブリトラの舌の唾液にベトベトになりながら、目を大きく開いて驚いているエツィオに言う。

エツィオ「そりゃ、ブリトラは魔界から産まれ“史上最強の竜”だ。神が振るいし雷でも効かず、逆に雷を飲み込んで我が物にし、己の力を永遠に継続させるために“武器”として形を変えた存在だからな。例え“神”でも“人”でも決して壊すことが出来ないし、寧ろコイツに“餌”として喰われるだけさ。」

エツィオがそう言った後、鞭(ブリトラ)を横に振り回し、刀身(からだ)が蛇のように伸びて、鞭先端のブリトラの口が大きく開いた後、テンプル騎士の下級兵を喰らい鋭い牙が肉を臓器を噛み砕き飲み込む。

エツィオ「コイツは“特異界”でずっと漂っていた。己の力を“超えた者”を待っていたんだ。以前のままにブリトラ本来の力を使役することが“出来る者”をね…。」

シャイナ「で…エツィオに選んだワケね。」

エツィオ「そういうこと♪だからコイツは俺の“使役(ペット)”なんだ（＊＾ω＾＊）」

エツィオはそう言いながら別の屋上から矢を放つ敵を倒すべく、今いた屋上から走り隣のビルの壁へと飛翔する。

シャイナ「（流石チートツィオｗｗｗ神でも恐れた竜さえペット呼

ばりするとはｗｗｗ）」

ビルの壁を“横方向に普通に走り”飛んでくる矢を鞭で軽く振り回して、先端のブリトラが矢を口に挟んで口に入れて軽く噛んだ後、不味そうに砕かれた矢の残骸を“ビル下の道路へと吐き落とす”。

ネロマテＫ【ヒッ！】

ネロマテＬ【ハ…早ク奴ヲ！！】

弓を構えるテンプル騎士の下級兵が、もう目の前に映る飛翔エツィオの姿を見て恐怖に奮える。意を決してエツィオに弓を構えようとしたが…

ブリトラ《ガォッ！！》

ブリトラの口から前方へと紫の光が迸り、弓を構えようとしていたテンプル騎士の下級兵達が、一瞬の内に消える。

どうやらブリトラの口から“雷”の塊を“光線”のように吐いて計り知れない高圧の電流で、テンプル騎士の下級兵の肉体そのものを消し炭にしたようだ。

シャイナ「うっはｗｗｗなんというサンダーフ●ースｗｗｗ」

エツィオ「最初に言った通り、ブリトラは“雷を喰らった竜”だ。属性は“雷”。それに広範囲に敵を凪ぎ払い喰らう。」

エツィオはシャイナにそう言った後、ビルの屋上にあるアンテナに着地する。

エツィオ「よくやった。偉いぞ（＾－＾）」

ブリトラ《バウッ！》

エツィオが褒めるようにブリトラの頭を数回撫でる。ブリトラは持ち主であるエツィオに気持ちよい表情を出し喉から猫が甘える声を出した後、ブリトラはエツィオの身体へと入っていった。

エツィオ「うっ…し、さぁ、シャイナ。君の家はどっち??」

シャイナ「あっ…そうだった。（・―・）」

エツィオは本来の目的を聞くべく、シャイナに道案内を質問する。

シャイナは先程のことを思いだし、少し呆けた後エツィオに言う。

シャイナ「あ…えっと…もうすぐそこ…つーか、」

シャイナは指を指した時、エツィオは指を指した方向へと顔を向ける。

シャイナ「目の前に立つビルが“ソレ”私の家はあの赤い服が干してある所よ。」

エツィオ「おっし。まかせろ！」

エツィオがそう言った後また再び跳躍して、ビルの壁に足を着けた後、赤い服を干してあるビルのバルコニー“最上階”へと壁を真上に向かって“普通に走っていった。”

第十五曲　おじさ…伊達男に更に惚れる瞬間

―とあるイタリア小国　中心都市ビル２５階２２３号室　シャイナの部屋―

シャイナ「ん…」

シャイナは目を覚ますと、自分の身体は温かいベッドの上にいた。自分の部屋の中だと直ぐにわかって、シャイナは両手をベッドに付けてゆっくり起き上がる。

シャイナ「あれっ…エツィオ??」

エツィオの姿がなく、シャイナは立ち上がって少し部屋を歩いた時…

エツィオ「やっほー、シャイナ。此処に着いた途端、君は寝ちゃっててな。起こそうかと色々と思ってたけど…君の寝顔が可愛くてツイツイ（＊＾＾＊）」

エツィオは躊躇っちゃったと言って、“カメラ目線”で少年のように赤みの頬を出しながら笑顔を見せる。シャイナはエツィオを見て

何か違和感が出てある所を見た途端、きょとんとした表情でエツィオに言う。

シャイナ「あれっ…エツィオ髭反ったの？」

シャイナが言う通り、エツィオの口の周りと顎下に生えていた髭が綺麗サッパリと無くなっており、老け顔が多少あるものの顔からして、“三十路出前の色気が出ているふつくしい若男”だった。

エツィオ「シャイナが眠っている間に脱衣場に髭反りの道具があったから反ったんだよ。悪ぃな勝手に髭反りの道具使っちまって（＾人＾）」

エツィオはニヘヘッ♪と軽く言って歯を出しカメラ目線に向けながら、ハリウッドスマイル並みの笑顔をシャイナに見せる。

シャイナは本来のエツィオの顔を見て少し唖然とし、口内の大量に出る唾を飲み魅惚れてしまうほどの伊達男（イケメン）を見て呟いた。

シャイナ「…本当に…若いです。（これで…２８００歳以上の男の容姿かよｗｗｗアルタイルは２００００歳以上の男だし…何このチートイケメン設定ｗｗｗ）」

エツィオ「俺達の身体“神体”は月日が経つことに力と身体の部分だけは成長はするが、ある程度成体に成った後“老化”はしない。“神体”が死する時は“他人に殺される”か“他人に同調して共に朽果てる”か、それだけだ。」

エツィオはシャイナに自分の体を説明した後、窓側へと歩み寄って薄いカーテンを軽く左手で開ける。

外はもう日が落ちており、ビル下の車の光とビルの部屋の光が多数点いていて、夕日のオレンジの光がシャイナの部屋全体に射し込む。

シャイナ「あー…こりゃ爺共にどやされるな。ほぼ遅刻決定だしｗプヘー（ρ．ー）」

エツィオ「心配すんな。もしシャイナに長い説教が押し付けられたら、俺がそいつらに軽い“ちょっかい”だしてやるからＹＯ★」

エツィオは悪そびれているシャイナに向けて何かと“自信満々”の表情でカメラ目線に向けて言う。

シャイナはそんなエツィオの少年のような表情を見て少し微笑んだ、居間に歩んで小さいガラスのテーブルの上に置いてあるテレビのリモコンを持って、テレビのリモコンキの受信ャッチ部分へと向けて電源を押す。

エツィオ「うぉっ！？スゲー！！シャイナァー！これは何！？」

エツィオはテレビが点いた映像を見て子供がはしゃぐように驚き、シャイナが手にするリモコンを見てシャイナに言う。

シャイナ「これは“リモコン”主にテレビの映像を変えたり、音量も調整できる機械よ。それと向こうに映像が点いているのは“テレビ”主にリモコンのボタン次第でリアルタイム（今の時間と合わせて放送を皆に送る）に映すの。」

シャイナはエツィオに簡単な説明をした後、テレビの映像を見てはしゃぐエツィオにリモコンを手渡す。

シャイナ「じゃ、私着替えるからエツィオはそこでテレビでも見ながら待ってて。すぐ終わるから。」

エツィオ「ＯＫ！」

エツィオはシャイナから手渡されたリモコンを受け取り、見たことも無い物に興奮しながら床に敷いてある絨毯の上に座ってワクワクした表情でテレビを見る。シャイナはもう一度自室に戻り、タンスから新しい服を取り出して今着ている服を脱ぐ。

シャイナ「（エツィオったらあんなにはしゃいじゃって…なんだか微笑ましいな。まっ、でも…）」

シャイナは着替えながら、今テレビに映っているバラエティ番組を笑いながら見ているエツィオの姿を見て、８００年前のエツィオはどうしていたのか色々と思いながら下半身の紺ズボンを着る。

シャイナ「（いいか…今は祭りのために行事をやらないと。）」

上半身に腕部と腰から脇まで走る黒いラインが入り、首の後ろにパーカーが付いた白いトレーナーを着る。シャイナは紺のズボンに黒い皮製ベルトを入れてしっかりと固定し着替え終わった時、シャイナのベットの上にあったケータイからタイミング良く着信音が鳴る。

シャイナ「（あいつ等か…）はい？」

シャイナはケータイの受信ボタンを押し、耳に当て少し喋った瞬間…

？『シャイナ！！今何処にいる！？とっくに祭開催時刻から数時間経って多くの者たちが今でも教会を祈りを捧げて待っているのに…何たるザマだ！？我々の偉大なる救世主である“献上品”を正午まで届けなくてはならないのに…夕刻になるまで何をしていた！？』

携帯電話越しから聞こえる男の莫大の怒号が、シャイナが今いる部屋全体にピリピリと震えるように響き渡る。居間にいたエツィオも聞こえて、エツィオは何事かと思いシャイナが要るところへと歩み寄る。

シャイナ「（うぜー。無駄に声でけぇよｗクソジジイが…。）急用連絡が入って仕事していたんだよ。私もそんなに『言い訳するな糞餓鬼が！！今日は我らの為に戦ってくださった“勇者様”に対して（前略）２２になったお前がこんな単純なことをこなせないのか！？』

シャイナはめんどくさそうな表情で相手電話主に喋っていたが、向こう側はかなりのご立腹で脳内の血管が切れるぐらいに怒りを込めてシャイナの話を遮る。

？『ああ何たることだ…こんな小娘に“献上品”を託したこと自体が間違いだった…。あの元祭司（リオール）め…』

シャイナ「（ん？元？？元って言ったような…）まだこんな時間になるまでお祈りをしているとは…それに教会にいるとなると…ご苦労さんなこった。いっそ祭なんぞ無くなればいいのにｗｗｗ（私のすぐ傍に“チート勇者様”がいますけどねｗｗｗ）」

シャイナは軽い口調で相手の電話主へと話しながら、直ぐ隣にいるエツィオに電話主の声を聞かせてお互いニタリ笑いしながら、じっくりと聞く。

？『小娘が…調子に乗った言葉を吐きやがって。どうせ教会に来た後我らが“勇者様”の前で跪け。餓鬼は餓鬼らしく喚いて泣くがいいさ。』

シャイナ「やってみろやクソジジイ…精々首を洗って待っているんだな。」

シャイナはそう言った後手にしていた携帯の電源を切り、投げ捨てるような動作で手にしていたケータイをベットに叩きつける。そしてシャイナは顔からベットへと前のりに倒れこむ。

エツィオ「シャイナ…今のが。」

シャイナ「そう…ここの地区の教会の奴らの一人。エツィオは知っていると思うけどここは元々“大聖戦”だった場所だからさ。ここにいる衆はみんな…勇者（エツィオ）に対して異常なほど崇拝しているんだよ。」

シャイナはベットのシーツを強く握り締めながら言い、エツィオは戸惑いの表情を出しながらシャイナを顔を覗く。

シャイナ「だが今は崇拝というよりも狂信者ね。勇者の像を一つでも傷付けるだけで教会からの“強制執行”が来るのさ。そこらへんのマッポから刑務所に入れられると違って…。」

シャイナは胸部に手を当てて、少しの間だけ目を瞑る。エツィオは何かに気づいて、はっと真剣な表情でシャイナを見る。

シャイナの胸部に当てていた右手が少し“震えて”いたから…。

シャイナ「“身体そのものま「無理に言うな、シャイナ。」…エツィオ？」

シャイナはひょんとした声で言った途端、エツィオの両手がシャイナの身体を抱きしめるに抱えられていた。シャイナは少し戸惑ったが、抱きしめているエツィオの次の台詞で…。

エツィオ「君の過去は何があったのか分からない…だけど、そんな悲しい声を出すな。俺も悲しくなる。」

エツィオはシャイナにそう言った後…シャイナの右頬にそっとエツィオの唇が付けられる。

シャイナ「え…エツィオ？」

エツィオ「…笑ってくれ。君の笑顔を見たい。」

シャイナは顔面を赤く染めながら後ろに振り返ると、いつものニコニコ笑顔を出すエツィオがいた。

シャイナは数秒間だけの真面目な声と今の少年のような普通の声を聞いて、目の前にいるエツィオの表情を見た後、シャイナは前めりにエツィオの胸部に顔を擦り寄せる。

シャイナ「…ありがと。（うはっ…なにこの伊達男ｗｗｗマジ彼氏にしたいタイプｗｗｗ）」

シャイナは顔面を赤く染めながら、短くエツィオに言った後少し瞳を閉じて一時の眠りに堕ちる。

その後エツィオはどうもっ♪と言って眠ったシャイナを頭を数回撫でて、窓に映る夕日をじっと…シャイナには見せていない本来の真顔のまま、“カメラ目線”を向けたまま厳しい視線で見詰めていた。

第十六曲　ブッコワシ祈祷祭

―とあるイタリア小国　教会前―

シャイナ「…あー着ちゃった。ヤダヤダ爺の集まりにこのピチピチの私一人で…」

シャイナは長い箱の中にある“エツィオの剣”を持ちながら教会前の正門に立って、はぁ…とあくそびれた表情で息を漏らす。時間帯はもう夕日が沈んで、紺色の暗い空の上に数々の星の光が映る。

正門を潜り抜けると目の前には、中世の時代に建造された物をそのまま残しており、教会中庭中央には天使の像をモチーフに掲げられた聖杯の口から水が零れ落ちる大きな噴水があり、緑に覆われた中庭には数多くの白い花が咲き乱れていた。

エツィオ「大丈夫だ…シャイナは一人じゃない。俺がいるＺＥ★」

シャイナは右肩に乗る“半透明状態”の余裕の笑みが溢れるエツィオの表情を見て、シャイナはええと言って少し笑みを返し、ゆっくりと教会入り口の扉へと歩み寄った。

シャイナは扉の前で息を吸って深呼吸した後…

ドカンッ

シャイナ「あざーす！“例”のお届け物持って参りましたー」

シャイナは手で扉のノブを手にかけず、よく見かける若者の悪ふざけた表情で、右足で扉を壊すぐらいな音を立てて“蹴り開ける”。すると…

？「ふざけた態度だな…。前のお前の時はこのようなことをしなかったのに“神聖な教会内”でこのような行為を…。」

シャイナ「アルエー（・８・）？アンタ教会の“福祭司”じゃなかったの？なんで祭司の証である白いローブ着ているのＳＡ？」

シャイナの記憶の中では、唯一叔父である“リオール・アクイラ”が教会の祭司のハズなのに、かつては鼠色のドブローブを羽織ってリオールの側に居続けていた男を見て、一瞬疑問を浮かべた表情になる。

？「代わったのだよ。私が現教会の“祭司”だ。言葉を慎めたまえ。

」

―とあるイタリア小国　教会内―

教会内の奥の祭壇に立っている純白のローブを纏った長身男が、後ろを振り向かず入り口にいるシャイナとエツィオ（半透明なので見えない）に静かな声で言う。

？「我らの教会の上部が決めてくださったのだ。私は教会の上部の者達に対して感謝の気持ちで溢れている。…が、」

教会の中には純白のローブを羽織った大勢の信者がおり、信者達はシャイナの蹴り開けた扉の音さえ聴いていないように静かに手を合わせ、顔を下向きにしながら祈っていた。

？「お前との電話の時もそうだ…その生意気めいたタメ口、いかに我らの“勇者様”の前でその行為を見せるとは…」

祭壇にいたローブを羽織った長身の男が、ゆっくりとシャイナとエツィオ（半透明なのでｒｙ）に向けて振り返る。

顎下に喉仏までの長い白い髭を垂らし、顔には多くの皺がしわくちゃにできた老人が、表情は無表情なもののシャイナに対し、言動は強い怒りを込めていた。

―現祭司　アンジェロ・グレーリー―

シャイナ「だーかーらーぁ？“勇者”“勇者”って、そこに置いてある石像はただの“大きい石ころの塊”じゃない。それは実物の勇者じゃなくて、人が勝手に創った妄想の石だっつーの。（ねぇ、エツィオ？あの石像は貴方の為に創られたそうよ？どう？？）」

シャイナの小声を聞いたエツィオは、顔を上げて目の前に聳え立つ自分の石像を見上げた時、エツィオはワクワク顔から一転不審と怒りが混ざった真面目顔になる。

エツィオ「…下手ＤＡ（ー＿ー＃）なんだこの不細工な顔は…こんなの俺じゃねぇＹＯ（、ε′）」

エツィオの言う通り胴体部分は似ているが、肝心な“顔”の部分だけが手抜きであり、頬が無駄に膨れ、目も鼻の口も何もかもバランスがハチャメチャであった。

アンジェロ「餓鬼が生意気に言い張りおって。我らの前世の者達が切磋琢磨し、長い年月を掛けて造り上げた“勇者様”をよくも…」

シャイナ「ふーん。私は前世の人など興味無いし、現代っ子ですから大昔の話など知ったことじゃないわぃ（ー”ー）」

シャイナは一瞬右肩に乗るエツィオが自分の石像を見て、やや苛立つ声を聞いて、余裕の笑みを“カメラ目線”に向ける。

現祭司はシャイナの態度を見て無表情から怒りの表情になり、シャイナは表情が変わったアンジェロに向けて、挑発を交えた言葉を返す。

シャイナ「で?“現”祭司様??貴方様がおっしゃいましたこの“御届け物”は、何処に置けば良いのかぃ?」

アンジェロ「…祭壇に“献上品”を置け。さっさと来い糞餓鬼。」

現祭司に言われた後、シャイナは祭壇へと続く黒い絨毯の上へと歩き、悪そびれた表情のまま祭壇へと歩いていく。

エツィオ「感じ悪い奴だな、あのじいさん。よくもあの態度で教会の““現”祭司”をやっているな。」

シャイナ「このジジイに何度も世話になったか…数えるだけでも嫌になるし苛立つわぃ（、ｏ､）」

シャイナは小声で苛立ちを込めた言動をエツィオに言いつつ、教会の祭壇へと辿り着く。

アンジェロ「置け。」

シャイナは現祭司の言われるままに、無言のまま手にしていた献上品（エツィオのけん）を、祭壇の棚上へと置く。

シャイナ「これで終わり？じゃ…帰るね。」

アンジェロ「待て、小娘。」

シャイナがやるべきことを成したと思い、祭壇に背を向けて帰ろうとした所、現祭司に呼び止められ自然に足が止まる。その直後…

シャイナ「あ゛！？…何その手？？」

アンジェロ「お前にはまだ言うべきことがある。お前が犯した“処置”を決めるためにな…」

シャイナの左手首に祭司の右手ががっしりと掴んでおり、シャイナは気味悪い表情で掴まれている祭司の手を払おうと振るうが、握られている力が強く振り払うことが出来ない。

シャイナ「ＨＡ・ＮＡ・ＳＥ糞ジジイ。私は早く家に戻って寝たいからＳＡ（、ε、）」

アンジェロ「お前の処置…我々神聖の行事を破り我々信者や勇者様にも迷惑をかけ、更にはタメ口で祭司である私に罵詈雑言をぶつけたその行為…全くもって許しがたいことか！！」

アンジェロは怒りの表情を出しながら、シャイナの左手首を掴んでいる右手に力を更に入れる。

シャイナは少し苦痛の表情を浮かべ、無言の威圧を掛けた視線で目の前にいる祭司に睨み付ける。

シャイナ「ちょっと…いい加減放してくんない？明日早朝から仕事控えているし、ジジイ同士の下らねぇ祈祷を何時までもヤッてろや（＊、θ、＊）」

アンジェロ「決まりだな…お前には“極刑”を言い渡そう。我々の神聖なる教義でお前が犯した罪を洗い流そう。」

祭司が右手を掲げてシャイナの左頬に目掛けて、平手打ちをかまそうとした時…

エツィオ「はい、長っだるいシリアスはそこまでー（´Δ、）ノシ」

アンジェロ「ゴフッ!?」

突然アンジェロの身体が祭壇の奥にあった像にぶっ飛び、固い石でできた像にぶつかって剥がれ落ちるようにして、アンジェロの身体は前から崩れ落ちる。

どうやらアンジェロの右頬に、右腕だけ実体化したエツィオの右拳が、平手打ちをかますアンジェロの左頬に向けて殴りつけて、そのまま後方へと殴り飛ばしたようだ。

シャイナ「エツィオ!!」

エツィオ「全く…女性の扱い方が素人並みだな。」（･ ～、）「それにあのじいさんだけは、ついつい殴っとけと思って♪」

右腕だけでなく全身実体化したエツィオが床へと降りて、シャイナの側に寄る。エツィオはアンジェロに握られたシャイナの左手首の

赤い跡を見て、心配が溢れた表情でシャイナに向けて言う。

エツィオ「大丈夫か、シャイナ？」

シャイナ「んん、平気！全然平気だよーん（＾Ｏ＾）」

シャイナの元気な言葉を聞いて、エツィオはほっとした表情でシャイナを見る。

アンジェロ「そんな…まさかこの小僧が…我らの…！」

エツィオ「おっと！叩きつけられたのに立てれるとは…じいさんタフだな（・ｏ・）」

教会内の信者達が突然現れたエツィオの姿を見て、戸惑いと驚きとざわめきの声が飛び交う。

そんな最中、エツィオに殴られ叩きつけられたアンジェロが立ち上がり、エツィオは眉を少し上げ普通の表情をだしながらアンジェロに言う。

アンジェロ「嗚呼“勇者様”…そこにいる小娘を貴方様の力で「気

安く俺に寄るな」あぐぉ！」

エツィオに寄ろうとしていたアンジェロが右手を伸ばして、ゆっくりと歩み寄ろうとしたが、エツィオが左手を軽く振っただけで、数メートル先にいたアンジェロを“風御越しでも起こしたように吹き飛ばし”、またしても像に叩きつけられる。

エツィオ「あー、現世の人達は俺のために力を尽くしてくれたと思っていたのに…“コレ”かよ（、へ、）呆れたモンだな。」

エツィオは少し怒りながら、祭壇に置いてあった長い包みの箱に向けて右手を軽く振った途端、振った時の風で長い包みの箱が“軽やかな動作で舞い上がり”その後左手で軽く横向きに振った後、“長い包みの箱がバラバラに破けて”中身のエツィオの剣が出てくる。

エツィオ「俺が訂正してやる！ザ★アートタィム」

エツィオは破いた剣を右手に取った後像に向かって飛翔し、像の顔に向けて目に見えない程の高速の剣の太刀筋を、何度も像に向かって斬りつけて空中で身体を回転させながら着地する。

その後エツィオは剣を左腰に仕舞い、両足を広げて左手を左腰に当てた後、ゆっくりとカメラ目線に合わせたまま右腕を斜め上へと上げて右手の人差し指を出したポーズを取った瞬間…

像の顔に幾つもの亀裂が走り、細かい石屑が床へとこぼれ落ちる。
先程の不細工顔だった像の顔が、“エツィオと同じ完璧なバランスを保った伊達男の顔”に変わっていた。

シャイナ「ブラーボーｗ（☆ｏ◎）ｗ現代のプロ彫刻絵師もビックリＤＡ★」

エツィオ「芸術はアルタイルが教えてくれたのＳＡ★俺はもともと不器用だったし。（＾∀＾）」

エツィオがシャイナにそう言った後、教会の壁に向けて身体をクルクルと回転させながら歩む。そして…

エツィオ「チュエエエエエエスゥトォオオオオオオオオオオ！！！！」

身体を回転させながら右拳の甲を壁に殴り付けて、壁が壊れる音を立てながら“外の穴を壊し開けた”。

エツィオ「シャイナ、帰ろ。ここ臭くて長く居たくない（、皿、）」

シャイナ「じゃ、帰るか。どうせ此所から離れるし、んじゃ旅の準備をするために一旦私の家に戻ろ。（折角の祭が台無しだね。まっ、いいかー。）」

シャイナはエツィオにそう言った後、先に開けられた壁の外にいるエツィオに向かおうとして数歩歩いた時…

アンジェロ「貴様…勇者様の前でこのようなことをさらけ出すとは…もはやお前は「うるせぇ、汚わらしい、近付くな、糞ジジイ」ゴォ！？」

二度もエツィオに殴られ像に叩きつけられたにも関わらず、床にアンジェロが這うようにシャイナの左足に向けて手を伸ばした瞬間、アンジェロの顔面にシャイナの右足が叩き込まれていた。

アンジェロに背を“向けたまま”で…

シャイナ「祭？何それ？？美味しいの？？？喰えんの？？？？それとも…馬鹿なの？？？？？」

顔面を蹴られたアンジェロが鼻血を足らしながら、不気味な笑みを見せるシャイナを見る。そしてシャイナはアンジェロを一瞥した後、壁の外にいるエツィオに向けて再び歩きだす。

シャイナ「…あー、スッキリした。」

シャイナがそう言った後、エツィオに出迎えられるようにして“お姫様抱っこ”のように抱き抱えられる。

エツィオは帰るかと言って背中から鷹の翼を出した後、羽ばたき一回で空へと飛翔し、教会から飛び去っていった。

アンジェロ「…馬鹿め。もうお前は“極刑”さえ受けていればそこまで“行かなくてよかった”のに…残念だ。」

アンジェロは床を這ったまま、飛び去っていくシャイナと勇者（エツィオ）を見届けた後、祭司の後ろに群がる信者に向けて言った。

アンジェロ「我ら同士よ…あの“狂信者”を捕らえよ！この国から一歩たりとも逃がすな！！」

アンジェロに言われた信者達は、静かに頷いた後教会の扉から蟻の行列のようにのそのそと出ていく。

一人だけ残された現祭司は静かになった教会の中で、ただ一人床に這いつくばったまま狂気の笑みの表情を出していた。

第十七曲　祭は終わらない…ここからだ。

エツィオはシャイナを抱き抱え翼を羽ばたかせながら、シャイナの部屋のバルコニーへと足を着けて翼を仕舞う。シャイナはエツィオに抱えながら降ろされた後、バルコニーの窓を開けて部屋へと入る。

―とあるイタリア小国　中心都市ビル２５階２２３号室　シャイナの部屋―

シャイナ「これとこれと…これを入れて…」

シャイナは自室に入ってオレンジ色の灯りを点け、タンスや棚の戸を色々と開けて床には旅に必要な物と、無い物の２つに分ける。

そして壁に掛けてあった黒いのショルダーバッグを手に取ってチャックを開き床に置いてあった“必要な物”だけ入れていく。

シャイナ「（ん…コレは？）」

シャイナは物を入れていく内にふと、ある物を見てそれを手に取って少し悩んだ後…

シャイナ「持っていくか…」

シャイナは手に取った物を入れてチャックを閉めて、黒いショルダーバッグを右肩掛けて、床に様々な物が散らかったまま自室を出る。
自室を出ると両腕を組ながら立つエツィオが待っていた。

エツィオ「忘れ物はないか?何かやり残したことは無いか?」

エツィオは穏やかな笑顔で、“カメラ目線”を向けながらシャイナに語りかける。

シャイナ「忘れ物なんてないぉ。(＾ω＾)これから長い旅が始まるんだし、ここから離れる次いでに実家の叔父と叔母に挨拶しなくちゃＮＥ★あと実家に、此所に来た時に乗った“車”を使いましょ。」

エツィオ「“くるま”?何ソレ!?馬車よりも早いのか!?」

エツィオはシャイナが言った“車”という言語を聞いて、８００年前に見た“移動道具”が進化した“存在”を思い浮かべて、少し眉を上に上げて目を興味津々に輝かせながら、シャイナに言う。

シャイナ「そりゃ馬車よりかは断然速いわｗｗｗ他にも“電車”や“バス”や“高速船”や“飛行機”もあるのよ。まっ、世界を旅するにつれてエツィオも見るでしょうね。（＾＾）」

エツィオ「へぇー（ΘｏΘ）こりゃ、たぁのーしぃーみだな。よーし、んじゃシャイナの実家に向かうか。」

シャイナはじゃ、行きましょと言って、部屋の入り口である玄関へと歩こうとした時…

バンッ！

？「待て“狂信者”。お前はもうこの国から一歩も出られぬ。」

？「抵抗せず我らに身柄を置け。今ならまだ“祭司”様にお許しを頂ける。」

突然玄関が乱暴に開き、シャイナは玄関を開けた人を見て、目を細めてめんどくさそうな表情を出した。

玄関に立つ侵入者は、先程教会にいた“白いローブ”を羽織った信者達であり、よく見ると玄関の外には多くの信者が重なるようにし

て詰め掛けていた。

信者Ａ「我々は出来る限り手荒のことはしたくない。さぁ…」

信者Ｂ「来なさい…」

一人一人右手には“警棒”や“肩ぐらいまでの長さを持つ棍”を握っており、信者達は土足でシャイナの４ＬＤＫ部屋をズカズカと一人一人入ってくる。

シャイナ「で…私に対しての言葉は優しいのに、何その今からでも戦うような“準備万全の武装”は？」

シャイナは彼らの手にする武器を見て、呆れた表情を出す。そんな最中エツィオは立ちはだかる信者を見て、昔の出来事を独り言のように語り始める。

エツィオ「８００年前にもこんなのよくあったな。残した知識を自分流に書き替えて“前世の知識を否定し、己自信の知識を前世を超えた新しい神”として勝手に称えた大馬鹿がいたな。」

シャイナ「えっ！？エツィオが眠る前の時代でも、このような“ドコ厨だワレ”な奴いたのか！？」

シャイナはエツィオの独り言を聞いて、少し声をひょんとあげてエツィオに顔だけを向けて言う。

エツィオ「そうだ。只か“口だけ”で他の者に己のトチ狂った知識を勝手に植え付ける、周囲の人間にははた迷惑な“狂信者”がいたんだよ。…あぁ思い出すだけで気持ち悪い。（ˊ ε ˋ）」

エツィオはシャイナに８００年前の出来事を語った後、溜め息をつく。すると一人の信者がエツィオに寄ってきて、信者の手にする警棒をエツィオの鼻に当たる数センチまで突き付ける。

信者Ａ「我らの“勇者様”よ。貴方様の左にいる“狂信者”を我らに御譲り下さい。決して貴方様だけは…」

エツィオは自分に突きつけられている警棒を見て、眉間を寄せて不機嫌な表情を出す。

エツィオ「オイオイお前達が崇拝している勇者様（オレ）に何でそんなモン突き付けているんだ？つーか…」

突然エツィオに警棒を突きつけていた一人の信者が、身体をくにさせて洗面所まで吹き飛ばされる。

エツィオ「お前らテラキモスｗｗｗ」

エツィオの右拳に赤い跡が多少付き、右手の人差し指に信者が持っていた警棒が人差し指の上でクルクルと器用に回して遊んでいた。

どうやら、エツィオは警棒を持っていた信者に向けて“目に見えない右裏拳”を信者の口に目掛けて炸裂し、前歯と犬歯を数本折り口内の血をエツィオの右拳に多少付着しながら洗面所へと吹き飛ばしたようだ。

そして信者から手放された警棒を右手の人差し指を立てて、警棒の中心に“人差し指の先を付けて受け止めた。”

エツィオ「それに衣装がダサい。あと顔はしわくちゃ梅干し顔だし、色々と残念な所多すぎ。アンタらの教会はただの“老人会”かＹＯ（、皿´）」

シャイナ「あー、確かに“老人会”だな。エツィオよく言った。アリガトー（＾ｏ＾）／」

信者が洗面所に叩き付けられた仲間を見てどよめく中、シャイナの片言が混ざった台詞でそう言った後、エツィオはシャイナの身体を

左手で自分の身体に触れるまで引寄せる。

エツィオ「シャイナ、逃げるぞ。…しっかり俺に掴まれ。」

シャイナ「実家に行くまでにゃ、スリル満天なアラビアンナイトが待っているＮＥ－（三三三（´ω`）三三）」

シャイナが右手で軽くエロチックな手つきを振った後、エツィオは左手でシャイナの背中を少し倒し、残る右手はシャイナの右足を少し上げるように二人一緒に“カメラ目線”に向ける。

そのポーズからにして“氷上のフィギュアスケート選手が締のポーズを取っている”格好だった。

その直後、エツィオは背中の漆黒の鷹の翼を出して、一度彼等を背中の翼で前に隠した後、翼を前へと思いっきり振りかざす。

翼で振りかざされた風が“ハリケーン並みの暴風”がシャイナの部屋全体に吹き乱れる。

部屋にいた多くの信者達全員が暴風で意図も簡単に舞い上がり、一部の者は部屋全体を風の力で何度も回り、暴風の力で何度も壁に叩きつけられ、飛んでくる家具が信者達の頭部や顔に当たって信者達

は悲鳴をあげながら恐怖と混乱に陥る。

やがて暴風は収まり、信者全員は無様に床へ倒れていた。そして一人の信者が立ち上がった時、シャイナとエツィオの姿が無いのを気づいて信者達全員に声を掛けた。

信者B「に…逃げたぞ！！お…追え！！」

…

……

……

―とあるイタリア小国　上空―

シャイナ「ふぇー、やっぱり空はイイよ（´ω`）鳥になった気分で気分最高になるしｗｗｗなによりもエツィオの羽ンキ〝モヂィィィィィィィィｗｗｗ」

エツィオ「俺も空が好きだ。俺の背の翼を見て、人が空を飛ぶことに憧れていた者もいたしな。（＾―＾）」

シャイナはエツィオの背中にしがみつき背中の翼の羽を握りながら、

感動とのんびりが混じった言動でエツィオに話す。エツィオは背中にしがみついているシャイナに向けて微笑みながら、心地よい雰囲気を作りながらシャイナの実家に向けて翼を平行にし、まったり速度で滑空する。

シャイナ「このモフモフ感がイイのよぉー（＊´ω`＊）自宅にある格安ベッドと違って断然イ…」

エツィオ「おっ？なんだありゃ？？」

突如目の前に浮かぶ多数の“モノ”を見て、シャイナは幸せの表情から顎が外れるぐらいに口を開けて、呆然な表情を出しエツィオは目の前に飛ぶ“モノ”見て、興味津々の表情で眼を輝かせながら見た。

ババババババババ

黒色の黒い塊に上部と尾翼に高速回転するローター音、両翼の下には大きな箱に敷き詰められた“ミサイル弾”、そして機体の下部に付けられた巨大な“ガトリング砲”…

シャイナとエツィオの前には、戦闘ヘリ“ＡＨ－６４Ｄ　アパッチ”が多数立ち塞がっていた。

第十八曲　間違ったミサイルの使い方

―とあるイタリア小国　上空―

シャイナ「おぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！何で本物の戦闘ヘリ“アパッチ”が飛んでるんじゃぁぁぁぁぁぁ！！！！。。。（Д）」

エツィオ「あぱっちぃ？ナニソレ？？目の前に沢山浮かんでいるのがそうなの？」

突如1機の戦闘ヘリから、エツィオに向けてミサイルを二三発放つ。更に後方にいた戦闘ヘリ六機から同時にミサイルを放ち、計十八発のミサイルがエツィオに向かってくる。

エツィオ「うほっ、何この“空飛ぶ斬新的なカッコいい鉛筆”はｗｗｗ」

シャイナ「おっまｗｗｗそれは鉛筆じゃねぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！ミサイルだ！！！！！ミッソーだぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

シャイナは眼と鼻から汁を大量に出しながら、ツッコミと驚愕が混ざった悲鳴を後方へと流れる。エツィオはその逆に感動の表情を出しながら、飛んでくる十八本の内の一本のミサイルを“右手で掴む”。

エツィオ「おっ、これもいいな＾＾超気持ちぃぃぃぃぃｗｗｗ」

シャイナ「何故“乗る”？（。Д。）」

その直後掴んだミサイルをミサイルの上部の平らの部分に“乗って”、後方から残り十七発のミサイルに追いかけられながら、“サーフィンでもしている”かのように匠に掴んだミサイルを“足腰のみで完全に操りながら”空中を波立つ海のように滑り遊ぶ。

エツィオ「うっひょぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！こりゃＫＡ・Ｉ・ＫＡ・Ｎ★」

シャイナ「何故“滑れたし”ｗｗｗミッソーの使い方間違ってるｗｗｗつーか間違いすぎｗｗｗ」

シャイナはミサイルを操りながらキャッキャッと楽しむエツィオを見て、鼻水と口元からヨダレを垂らしながら呆れた表情で声を嗄らしながら言い、ひたすらエツィオの背中をしがみ付いていた。

エツィオ「ちょっと鉛筆、頂きますＹＯ★」

エツィオは足元を操っているミサイルを操りながら、背中から生えた漆黒の鷹の翼を“大きな人間の手に変えて”後方から来るミサイル六発を掻っ攫うように鷲掴みする。

エツィオ「ほっ…と！」

そしてエツィオは乗っているミサイルの方向を前進にするよう、足腰の力で後方へ向くように“空中後方転換（エアバックロール）”する。

人間の手になった背中の翼を、掴んでいたミサイル六発を後方から追いかけてくる六発に向けて順番に投げ、エツィオが投げつけたミサイルが正確に追いかけてくるミサイル一つ一つ全て当たり、中心都市の人間全体の視力から目立つほどミサイルの爆音花火をオレンジ色に咲かす。

エツィオ「おほほっｗこれは凄い…これが昔から見た“空に光る美しい花”なんだ！（・ｏ・）」

シャイナ「ちょっｗそれは花じゃなくて“ガソリン臭い汚ねぇ花火”だ（〃―　―）Γ」

シャイナに突っ込まれながら、エツィオは背中の右片翼を“人間の手”から“巨大な漆黒の弓”へと変え左片翼を背中に仕舞い込む。

エツィオ「アーサーシーン流ぅー…」

エツィオは巨大な弓を左手で中央の握る部分を掴んで構え、右手を弓の引き部分をゆっくりと引くような形を取ると、矢発射口部分から“青白い光で生成された大きい鷹の羽根”が八本と綺麗に並べられる。そして…

エツィオ「心臓射殺刑（ハートブレイク）★」

エツィオが引き離した時、生成された青白い光を放つ鷹の羽根が、一つ一つ意思を持っているかのように自由自在の動きで、前から迫るミサイル六発を“六枚の羽根で刺し抜き”連続で爆発を起こす。

そしてエツィオは残り六発のミサイルをまとめる様、弓状態の翼を解いて背中に仕舞い、足下で駈るミサイルを操って旋回するように残りのミサイルを誘導する。そして…

エツィオ「アサシン鉛筆キィィィィック！！！／（、Ｏ′θ／」

エツィオは足下で操っていたミサイルをサッカー選手のように蹴り飛ばし、蹴り飛ばされたミサイルが前方回転しながら中心に固められた六発のミサイルにぶつかった直後大爆発を起こす。

シャイナ「嘘ーンｗｗｗ十八発のミッソーがあっという間に粉砕ｗｗ」

シャイナは呆然と口を開きながら、バラバラに空中に四散する十八本のミサイルの残骸を塵と化すまで見届ける。

全てのミサイルを壊したエツィオは、空中で身体を海老ぞりのような体制を取り背中にしがみつくシャイナを左肩に着いているマントで胸部に寄せる。

エツィオ「楽しいなぁー、でも此れからだろ？俺に対しての最高の祭(クライマックス)が！！」

右手でシャイナの身体を抱くように抱えながら、残る左手でピースサインを取り、“カメラ目線”を向けたままエツィオは笑顔(ハリウッドスマイル)を出して地上へと落下し、地上の電波塔の先端部分に“右片足”だけ着ける。

エツィオ「ムッハハ♪“これだから刺激的な人生は面白い”そうだろ？シャイナ？？（＾＾）これから先もお楽しみ要素が待っている

んだよなー★」

シャイナ「（おまっｗそれはダ●テの台詞に似てい…るｗｗｗつーかパクるなよｗｗｗ）そうね」（↑～、；）「だけど今は…」

シャイナはエツィオの好奇心旺盛の発言を聞いて心の中で突っ込んだ後、またしてもシャイナとエツィオがいる電波塔の周囲を囲むよう多数の戦闘ヘリが空中に静止する。

エツィオ「ＳＡ★楽しいショウタイムの始まりだＺＥＥＥＥＥＥ。」

シャイナ「…もう好き勝手に暴れろや（ノ－ｏ－）ノやっちぇエツィオ★」

エツィオがカメラ目線に向けてニヤニヤ顔で左手を人差し指と中指を合わせて振った後、エツィオの身体にシャイナを取り込む。

シャイナはもうどうでもいいやの発言をした後、のほほんとした表情でカメラ目線に向けて右手を軽く振り、バイバイしながらエツィオの中へと入って入った。

第十九曲　チートダンス２

―とあるイタリア小国　中心都市―

戦闘ヘリＡ【“奴”は化け物か！？撃て！…撃つんだ！！】

戦闘ヘリＢ【目標“狂信者”が“奴”の中に！！“狂信者が奴に喰われた”ぞ！！】

ヘリの無線から驚愕と恐怖が乱れた会話が飛び交い、そんな最中一機から片足だけでバランスを保っているエツィオに向けてガトリング砲を放つ。

エツィオ「オィオィ…“人”を“化け物”呼ばりしやがって（―＿―＃）お前ら何様ＤＡ！」

シャイナ『いや十分“人外”だろｗ』

エツィオはヘリの無線を聞いてその内容に、プクっと顔を膨らませてやや怒りの表情を出す。そんな最中身体の中に入るシャイナに突っ込まれながら、エツィオは自分に放つガトリング弾を後ろ向きに

倒れるよう飛び込むように避ける。

両腕を平らに広げて第三者からは飛び降り自殺に見えるが、エツィオ達アサシンにとっては日常茶飯事なアクション“イーグルダイブ”であり、エツィオは身体を空中で一回転させたあと足を電波塔の鉄骨へと着けて、真下へと向かうよう“重力とか関係なく普通に走る”。

ガガガガガガガガガガガガ

戦闘ヘリA【撃て！！撃てぇ！！】

戦闘ヘリB【攻撃を休ませるな！！撃ち続けろ！！】

放たれる戦闘ヘリのガトリング弾が、エツィオの後ろから追いかけるように電波塔の鉄骨に多数の穴を開ける。そして一機の戦闘ヘリからミサイルを三発放ち、ガトリング弾が刻まれる電波塔を疾走するエツィオに目掛けて撃つ

エツィオ「〜♪」

ヘリから放つミサイルをエツィオは口笛を吹きながら、鉄骨を蹴って何度も空中前方回転（エアロール）させながら身体を前に広げて、放たれたミサ

イルを回避する。

三発のミサイルはエツィオが居ない鉄骨へと当たり、激しい爆発が起きて電波塔の鉄骨を破壊し、ミサイルの爆発で一部の素材が燃えながら電波塔の腹部がくの字に折れ、上部の電波塔がミサイルで破壊された鉄骨の素材をばら撒きながら地上へと落下する。

エツィオ「…ふんっ！」

エツィオは顔を上げて落下してくる上部の電波塔を見て、先程足場にしていた部分を見てニタリと笑い口元を吊り上げた後、エツィオは足場にしていた部分を“右手だけで掴む”。そして…

エツィオ「ブーンブーンブーン！！！！」

エツィオは掴んだ“電波塔の上部”を空中で“何度も回転”させて、“竜巻でも出来る”ぐらいに勢いをつけた後…

エツィオ「Ｉｏ　ｌｏ　ｒｉｔｏｒｎｏ！（返す！）」

エツィオはイタリア語で掴んでいた上部の電波塔を、片手フルスイングで飛んでいる二機の戦闘ヘリに目掛けて“投げ飛ばす”。

戦闘ヘリA【うわぁぁぁぁぁぁ！！！！】

戦闘ヘリB【駄目だ！避けられない！！全員衝撃に備えろ！！！！】

高速に飛んでくる上部の電波塔が二機の戦闘ヘリに当然当たって、悲鳴の無線が聞こえながらヘリのローターが吹き飛び、尾翼も両翼も圧し折られて翼に付いていたエンジンが爆発し、二機の戦闘ヘリは爆発し、空中で炎上しながら地上へと堕ちる。

戦闘ヘリC【くそっ！ならば…ローターでぶっ飛ばしてやる！くらえ“化け物”！！】

仲間のヘリがやられたのを見て一機の戦闘ヘリを操作するパイロットが、舌打ちしながら空中に舞う余裕顔のエツィオを見て機体をエツィオの落下地点へと移動させ、真上にいるエツィオに向けて戦闘ヘリを急上昇させる。

エツィオ「アーサーシィィィィィン…」

エツィオは足下から上がってくる戦闘ヘリを見て、エツィオは右腕を上へとあげて右拳を握り締めた後…

エツィオ「パァァァァァァァァンチ！！！！」

エツィオはヘリのローター中心へと目掛けて拳を振り下ろし、思いっきり殴りつけた瞬間ヘリが“くの字”になるように意図も簡単に圧し折れ、上部のローターが“粉々に砕ける”。中のパイロットごと中破したヘリと、ヘリ上部に乗っかるエツィオごと都市の道路へと高速落下する。

エツィオ「Ｐｏｉ　ｐｅｒ　ｆａｖｏｒｅ　ｓｉａ　ａｃｃｕｒａｔｏ　ｓｕ　ｕｎ　ｐｅｒｃｏｒｓｏ　ｄｉ　ｉｎｓｔｒａｄａｍｅｎｔｏ　ｌｕｎｇｏ♪Ｃｉａｏ！！（じゃ、死出の旅路にご十分気をつけて逝ってこいよ♪バイバーイ！！）」

戦闘ヘリＣのパイロオット【うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！】

ドカァァァァァァン！！！！

硬いコンクリートに落下した衝撃で戦闘ヘリが大破し、更には炎上して大爆破を起こす。エツィオは爆炎の中から飛び出すように両腕を顔面にクロスさせながら、道路へと足を着けてかっこよく着地する。

都市の住民Ａ「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

都市の住民Ｂ「悪魔だ！悪魔がいるぞ！！誰かぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

都市の住民Ｃ「化け物だぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

当然地上にいた都市の住民にもエツィオがヘリを叩き壊す姿を見たため、中心都市にいた住民達はパニック状態に陥り、悲鳴と怒号が飛び交い辺りの住民達は一斉に逃げ出す。走っていた交通機関の一部が、突然の事態に急ブレーキをかけて、車と車同士の衝突が起き将棋倒しの状態が次々と出る。

エツィオ「おーおー、皆元気だなぁ♪あんなにはしゃいじゃって★」

シャイナ『はしゃいでいるよりも、全員パニックになってんじゃんｗｗｗつーか…』

シャイナはエツィオの眼から通して突っ込みながら、またしても都市の高層ビルから戦闘ヘリが飛んできて、今度はガトリング弾を撃ちながら道路に立つエツィオに向けて放つ。

エツィオ「ＯＫ，ｂａｌｌｉａｍｏ ｃｏｎ ｍｅ．Ｕｃｃｅｌｌｏ ａｂｂａｓｔａｎｚａ ｐｉｃｃｏｌｏ♪（さぁ、俺と踊ろうか。可愛子ちゃん♪）」

エツィオはニコニコ笑顔で自分に向かってくるガトリング弾を、エツィオは風のように走った途端、市民はエツィオの走り抜ける“突風”に巻き込まれて枯葉のように人の体が宙に舞う。

戦闘ヘリD【おのれ“化け物”！卑劣な手を使いやがって！！】

戦闘ヘリに放ったガトリング弾はすべて宙に舞った市民達に当たり、市民の身体がガトリング弾の弾をモロに受けて、さまざまな身体の一部が欠損しながら道路に臓器と血モロともベッタリと付着する。

エツィオ「えー（´Д`；）？卑劣の手なんか使ってないぞ？俺の“普通の走り”で“ただ巻き込まれた”だけだ。Ｃａｐ？？（お解り？）」

シャイナ『あれで普通かＹＯｗｗｗ巻き込まれた一般市民カワイソスｗｗｗ』

エツィオはノンノンと自分でないとやや眉を下へ下げて、右手を軽く横へ振りながらヘリのパイロットに答える。パイロットは自分が操縦する機体に、高速で走りながら接近してくるエツィオの姿を見て、後退するようにヘリを動かしながらガトリング弾をありったけエツィオに向けて撃ち込む。

エツィオは高層ビルの壁へと飛んで壁に足を着けた後、そのまま“重力とか関係なく壁を高速に走りながら”走る度にエツィオの背後から追いかけるようにガトリング弾が刻まれ、ビルのガラスやコンクリートを砕きながら沢山の風穴を開けていく。

エツィオ「ザ★ハイパーＲＡＡＡＡＡＩ！タイム♪」

背中から漆黒の鷹の翼を出して両腕に纏うよう包んだ後、腕が篭手のように硬質化し手先が鋭い“爪”へと変化する。（第十一曲アルタイル戦を参照）そしてエツィオはビルの壁を蹴って戦闘ヘリへと突っ込むようにそのまま飛翔し…

エツィオ「Ｕｎ' ｕｎｇｈｉａ ｂｌｕ！」

戦闘ヘリが放ってきたガトリング弾とミサイルに向けてエツィオは、硬質化した爪を交互に振り下ろした時、爪先に迸っていた青白い光が三日月のようになって爪の“飛ぶ斬撃”が放たれたガトリング弾とミサイルを全て“ケーキカットのように細かく切断”する。

戦闘ヘリＤ【なっ…！】

戦闘ヘリに乗っていたパイロットが絶句する中、エツィオは右爪をヘリの前方ガラスに向けて爪を立てた直後…

エツィオ「Ｕn' ｕnghia ｂlu ｄella ｆine！」

前方のガラスごとぶち破り中にいたパイロットごと頭部に爪先を叩き込まれ、パイロットは断末魔すらあげられないまま絶命する。そのままエツィオは貫いたパイロットの頭部ごと戦闘ヘリを横向きに両断し、エツィオは道路へと着地する。

エツィオ「リリース・ザ・可愛子ちゃん★」

右爪に付いていたパイロットの頭部を投げ捨てた後、横に両断した戦闘ヘリが道路へと落下し、またしても爆発して道路に様々な戦闘ヘリの残骸が転がり落ちる。

エツィオ「ふぁぁぁぁ…ちょっと動いたら眠たくなっちゃった。休憩しーよぉ（ρ．ー）」

シャイナ『戦闘中にゴロ寝するな、アホツィオ（＾ω＾＃）』

中心都市が地獄絵図に満ちている最中エツィオは欠伸を出して背を伸ばし、シャイナに怒りのコメントを突っ込みながら、道路にお釈迦寝入りのような格好で寝るような体勢を取る。

戦闘ヘリE【くそっ…くそっ！このぉぉ！！】

戦闘ヘリF【撃てっ！撃て！！撃ち殺せ！！！】

戦闘ヘリG【奴を地獄に送るんだ！！】

あと三機の戦闘ヘリは撃破された仲間の仇を討つため、炎上しているヘリの側でのんびりとお釈迦寝入りているふざけた態度のエツィオを見て、一斉にガトリング弾を放とうとトリガーを引こうとしたが…

ブリトラ《バウッ！》

ドォォォォォォォォォ

突如エツィオの背中から紫の光の塊が三機の戦闘ヘリに向けて放ってくる。パイロット達は目の前の眩しい光で一緒視線を剃らした直後、一瞬の内に肉体が痛みの感覚もなく“機体ごと全て消えていった。”

エツィオ「ナイスアシスト・ブリトラ（＊＾ω＾＊）」

ブリトラ《ガウッ！…キュゥゥン。》

なんとエツィオの背中からブリトラの剣先から刀身中間部分まで（第十四曲参照）が出てきており、剣先のブリトラの口から放った雷の塊を主人の背後から襲おうとした“敵（ハエ）”に向けて鉄槌の雷を喰らわせたようだった。

ブリトラは先ほど消した敵と退治する表情と違い甘えた声で、エツィオの背中から途中に出ながらエツィオの顔に向けて刀身（からだ）を伸ばし、エツィオと向いた後擦り付けるようにエツィオの顔を何度も擦り付ける。

エツィオ「よしよし♪イイ子だ。偉いぞぉ（＾＾）」

ブリトラ《キュゥン》

エツィオはブリトラの頭部を撫でて、二三回ブリトラの鼻にキスをする。ブリトラは主人の抱擁に幸せの表情で、満腹感を満たした後また再びエツィオの中へと戻る。その直後…

？「素晴らしい！流石は我らの“勇者様”だ！！我が精鋭達を意図も簡単に蹴散らし、圧倒的な“神の力”を我らに示して下さった…美しい！！」

突如エツィオから離れた道路から盛り上がるようにして、アスファルトを砕きながら道路下からなにやら“デカイ鉄の塊の物体”が現れる。両手両足は昆虫のように細く、身体構成は人間に近いが頭部だけ蟹のような顔で覆われており、醜悪な物体がエツィオの前に立ちはだかる。

―都市防衛決戦兵器　ギガス　アールベロ―

シャイナ『何あのジ●ースみたいなロボットwつーか何でこんなモノが田舎国にあるのさ!?』

エツィオ「さぁ?あの“デカブツ”を操っている奴でも直接聞くしかないだろ??「（ー ー）Γ」

シャイナと語り合ってエツィオは両腕を広げて、目の前に立ちはだかるデカブツ“ギガス　アールベロ”を見て呆れた表情を出す。するとデカブツの顔面に複数付いていたカメラアイが複数光って差し出された光が立体映像（ホログラム）となり、デカブツを操作する者“操縦者”が生成される。

?「どうでしょう?我々が長い年月をかけて作ったこの街…いえ“この国”の魔神を!!全ては貴方様“守護神様”のために与えられた使命のひとつなのです!!さらにこの人間界に降臨した貴方まで

もこの世界にいる！嗚呼…今日はなんて夢のような一日なのだろうか！？」

シャイナ『あ…よく見たらクソ顎髭ジジイ（アンジェロ）じゃん。』

エツィオ「おぉ…あのタフなじいさんか。」

操縦者である“現祭司アンジェロ”が立体映像でありながらでも、身体全体を何度も回転させ自分が製作した“魔神”に酔いしり、そして目の前にいる“勇者（エツィオ）”を見て興奮を隠し切れないほどの表情をながら、両腕を水平に広げてダンスでもしているかのように何度でも回り続ける。

シャイナ『へぇーこのジジイが、わざわざよぼよぼになるまでジ●ース作っていたなんて…無駄な時間と努力を惜しみなく使ったなｗｗｗそれと勇者厨ついでにロボット厨乙。』

エツィオ「ああ、同感だな…」

シャイナがエツィオの中で呆れた視線で回転しつづける“現祭司”を哀れみの表情で見続ける。エツィオはいまだに回り続けるアンジェロを見て、今度は両手を組みながらやつれた表情で少しため息をついた。

第二十曲　Io scompaio come carta

―とあるイタリア小国　中心都市―

アンジェロ「是非とも我らが作られしこの“魔神”を貴方様の力を借りて実践してみたいのです！よろしいですか！？」

エツィオは目の前に立ちはだかるデカブツ“ギガス　アールベロ”（略してギガアル）を両手で組みながら見て、しかめっ面を出しながら立体映像のアンジェロの鼻息を出ながら両脇を上下に動かして興奮している表情を見た後、エツィオは頭部のフードを前に引っ張って深く被り直し表情を隠すように言った。

エツィオ「（何興奮しているんだか…気持ち悪いじいさんだな。）したきゃ、勝手にどうぞ。」

アンジェロ「有り難う御座います！！では早速…」

そう言ったアンジェロは歓喜の表情を出し見の前の立体映像が消えて、ようやく立体映像で半分隠れていたデカブツの機体が露になる。

ギギギ…

アンジェロが操作するギガアルは近くに停めてあった車を掴み、機体自体の装甲が重いのか軋むような音を出し動きは鈍足だった。ギガアルは野球選手のように投擲体勢を取った後…

アンジェロ「いざ、お手並み拝見。」

ギガアルは手にしていた車を、エツィオに向けて思いっきり投げつける。エツィオは自分の所に向かって投げてきた車を見た後…

エツィオ「Ｉｏ　ｓｏｎｏ　ｉｎｄｅｇｎｏ（つまんねぇな。）」

エツィオは投げつけられてきた車を、“片腕だけで受け止め”屋根の部分を片手だけで車を持つ。その後…

エツィオ「Ｎｏｎ　ｎｅ　ｈａ　ｂｉｓｏｇｎｏ（返す。）」

エツィオはそのまま掴んだ車をギガアルに向けて投げ返し、ギガアルは車を受け止めようと両腕を動かすが装甲が重いため間に合わず、車はそのままギガアルの頭部にぶち当りその直後車が爆発する。

エツィオ「ふっ！」

エツィオは車が爆発した直後に風のように走り出し、あっという間にギガアルの距離を詰めて車の爆発で半分煤けたギガアルの頭部に向けて右爪先を刺し込む。その直後…

エツィオ「Ｕｎ' ｕｎｇｈｉａ　ｖｕｏｔａ！」

右腕の爪だけで頭部ごと“バラバラに引き裂き”、引き裂かれた頭部から様々なコードが千切れ剥き出しになる。エツィオは剥き出しになったコードの一部を掴んだ後…

アンジェロ「そんな…特殊装甲１００枚に更に対核爆耐久装甲１００枚埋め込まれ“過去”に幾らの軍隊の火力でも傷一つ付けられずビクともしないこの“魔神”が…！！」

エツィオ「Ｓｉａ　ｓｅｐｐｅｌｌｉｔｏ（寝てろや）、デカブツ。（、ε´）」

掴んだコードを投げるようにギガアルの“本体ごと空中に一回転させ”頭部から固いアスファルトの道路へと投げる。

重い装甲が仇となったか道路を“陥没させる”ぐらいにギガアルは

破壊された頭部から道路の中へめり込んでいた。

アンジェロ「これが…人にない“神の力”！！！！」

エツィオ「あっ、これもカットねＩｏ　ｌｏ　ｔａｇｌｉａｉ　ｉｎｃｉｄｅｎｔａｌｍｅｎｔｅ（一”一）」

アンジェロが驚いている間にエツィオはギガアルの両脚部へと向けて払うように左腕の爪を振るった後、唯一の移動手段でもある両脚を“五つにスライス横カット”させ、完全に移動手段を殺した。

シャイナ『えーｗｗｗ何この期待はずれの戦闘ｗｗｗすごく…弱いですｗｗｗ（今さっき過去とか言ってたけど…気にしちゃダメかなｗｗｗ）』

エツィオ「長年の歳月をかけて作った“努力と忍耐力だけ”は認めるが…現実はそう簡単に上手く出来ないモノさ。“よくある話”だよ。」

エツィオに引き裂かれた両脚と頭部の破片が道路に転がり、アンジェロが搭載するギガアルの本体が頭から不様に埋め込められた姿を見て、エツィオは両手を広げてシャイナにも落胆の声をあげる。

エツィオは肩をすくめた後、両腕に纏ていた鷹の翼を解いて背中の翼を仕舞い、爪状態を解除する。

シャイナ『エツィオ、早くここから離れよっ！早くおじいちゃんとおばあちゃんに会いたいし。』

エツィオ「そうだな。これ以上騒ぎが大きくなると面倒だし。さっさと離脱しようＺＥ★」

エツィオは身体の中にいるシャイナの声を聞いて“カメラ目線”に向けて顎だけで頷いた後、エツィオは本来の目的地であるシャイナの実家に向けて背を向けて走り出そうとした時…

アンジェロ「まだ終わってないぞ勇者（こぞう）！！」

エツィオ「うおっ！？」

エツィオは背後から来る何かを感じて反射的に背中を屈めた時、エツィオの頭部に巨大な刃物のような物体が横凪ぎに振りかざされる。

エツィオは屈んで避けた後左足を少し蹴って右足を伸ばし滑るように離れ、ある程度離れた後左足を軸にして背後へと振り替える。

アンジェロ「ふっ、早い動きには“これ”が最適かもしれませんね。」

なんと、ギガアルの胴体から隠し刃が複数出てきており、中には“チェーンソー”や“刀”や巨大な鉈等色々と危ない物が出ており、残された両腕が道路を突き立て頭部から突っ込まれた状態から逆さまの状態で引き抜かれる。

アンジェロ「装甲形態（アーマーモード）解除。本来のこの“魔神”の姿を御見せしましょう！」

アンジェロがそう言った直後ギガアルの胴体の装甲が爆発したかのように、分厚い装甲が至る所に四散し一部の装甲がビルの壁や車に刺さって亀裂を作る。

シャイナ『おぉっ！これが第二形態かＮＥ（＊＾ｍ＾＊）ジ●ースがデ●モンのようにリアル版超進化するのかぁぁぁぁ！！！！』

エツィオ「へぇー。こりゃ楽しみだな。（・ｏ・）」

シャイナはギガアルの第二形態の姿を脳裏に妄想を浮かべて興奮しながら、エツィオは再び腕を組んで剥がれ落ちるギガアルの装甲を興味津々に見届ける。

アンジェロ「ギガスアールベロ攻撃形態（アタックモード）！！」

装甲が全て剥がれ落ちエツィオとシャイナが見た姿は…

中心の試験管のようなガラスの中にアンジェロが操縦機を操る姿に、コックピットの中心には先程の様々な危ない物が新たな武器としてタコのようにのたうちまわっており、コックピットの円盤の下から細い足が多数道路の上に立っていた。

要するに“人型？ロボット”から“蜘蛛型ロボット”に変わっていたのだ。

シャイナ『おぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！（（（

一方エツィオはなんだと期待し損をしたという表情で、目の前に立ちはだかる蜘蛛型ギガアルを白い目で見る。

アンジェロ「…この…餓鬼…」

エツィオ「“蜘蛛”じゃん。本当のこと言っただけだＺＥ★」

エツィオの言動を最初から今まで聞いてきたのか、アンジェロはエツィオの“勇者らしからぬ態度”を見て尊敬語から怒に満ちた言語へと変わる。

アンジェロ「小僧…最初から貴様の態度を聞いて正直失望したぞ！！何故このような男が“勇者”として称えたのだ！？」

激怒の表情を出すアンジェロが、操作する蜘蛛型ギガアルをエツィオに向けて急発進させ、コックピットのまわりにのたうち回る凶器を感情剥き出しでエツィオに向けて振りかざす。

エツィオ「あー、それはね。（一・一）ｙ俺が戦う姿を前世紀の人間達が見て“勝手に勇者（ソレ）のあだ名を付けられた”モンＤＡ。Ｕｎｄｉｓｃｏｒｓｏ ｅｓｔｒｅｍａｍｅｎｔｅ ｉｒｒｉｔａｎｔｅ（すっげぇ迷惑の話だったぜ。）」

シャイナ『おまっ…マジかよw』

アンジェロ「何…だと……！？」

エツィオは振りかざされる凶器（チェーンソーや刀や巨大鉈等）を…

一瞬の内に左腰の鞘から引き抜いたのか、エツィオの右手に手にする剣が凶器についていた“繋ぎ目の間接部分の鉄”を、意図も簡単に“斬り落とした”ようだった。

エツィオ「正直困ったんだよなぁ。俺は当時“人間”のために剣を振るったワケじゃないのに…勝手に“英雄呼ばり”されてさぁ」（'～`）「」

エツィオの回りにコックピットの回りに付いていた凶器達が道路へと落下し、アンジェロが驚愕な表情を出す中エツィオは、一瞬脳裏に過去の映像を流した後、呆れた表情で両手を水平に広げながら右手に持つ剣を一回転しながら何度もお手玉する。

エツィオ「さて、“祭”はもう御開きにしようかNE☆まっ…俺を盛り上げてくれたアンタらに“褒美”をやるよ。（＊^＿^＊）」

エツィオは穏やかな笑顔で右手に回している剣を、かっこよく剣を道路に突き立てた直後…

エツィオ「８００年ぶりに暴れていいぞ、“ブリトラ”。…Ｄｉｓｔｒｕｇｇａ　ｔｕｔｔｉ（遊んでやれ。）」

突き立てた所から青白い光を放つ“円に囲まれ呪文のような字が入ったアサシンの紋章”が現れ、紋章の中心からエツィオの身体に入っていた“雷竜鞭”が紫の光を武器全体に放った後、莫大の紫色の光が天まで迸る。その直後…

ブリトラ《バオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！》

紫の光の中から紫色の長い身体を持った武器から具現化した本来の巨大な魔竜（ブリトラ）が現れ、紫の稲妻が所々身体全体を迸りながら、力強い咆哮を主人の敵向（アンジェロ）かって牙を剥き出しにし吼える。

アンジェロ「ひっ！！に…逃げ……」

アンジェロはブリトラの姿を見て恐怖し、急いでその場から離れようと操縦機を握るがすでに遅く、アンジェロの目の前にはブリトラの開いた巨大の口が目の前に映っていた。そして…

バキッ!!ゴキッ!!ゴリゴリゴリゴリゴリグチュグチャグシュ…

ブリトラはアンジェロが乗っていた機体ごと喰らい、所々生々しい音がブリトラの口内で鳴りながら、口にした“食べ物”を満遍なく噛み砕き赤い液体がブリトラの口元から零れ落ちる。その後…

ブリトラ《…不味い。》

一瞬ブリトラが人間の言葉を喋って、口からアンジェロの一部の肉片を近くのビルに吐き捨てる。その後ブリトラは主人(エツィオ)のところへと長い身体を寄せて顔を合わせた後、主人(エツィオ)に向けてこう言った。

ブリトラ《今度は極上の生気が溢れた餌食(エサ)を頼む。吾が口にした者は“悪意”が込められた腐り掛けの残念な魂(にく)だ。》

エツィオ「そうか…Ｉｏ　ｅｒｏ　ｃａｔｔｉｖｏ（悪かったな。）」

エツィオが悪そびれた表情で道路に突き立てていた剣を引き抜き、左腰に剣を戻した後ブリトラの鼻を摩り頭を撫でる。

ブリトラは主人に撫でられて気持ちいい表情で甘えた声を少し出し

た後、ブリトラの体が紫色に光りだして、光に包まれながら本来の長い身体から元の武器へと戻り、エツィオの右手に収まった。

第二十一曲　邪気眼じいちゃんとコーヒー

ー とあるイタリア小国　中心都市 ー

シャイナ『…しゃ…しゃべ（。Д。）』

シャイナは先程エツィオが召喚したブリトラの本来の姿と、人間語を喋るブリトラを聞いてシャイナはあんぐりと口を開きながら絶句する。

エツィオ「え？知らなかったのかシャイナ？？ブリトラは雷属性の魔物の中で随一、“特級魔獣”だから“普通に喋れる”ぞ。人間語だけでなく魔界語も話せるんだＺＥ★」

エツィオはケラケラと笑いながらカメラ目線で向いた後、右手に持つ“雷竜鞭”をエツィオの身体の中へと仕舞い込む。そしてエツィオは右手の平を胸部に当てた後、ゆっくりと身体の中にいたシャイナを導くように取り出す。

シャイナ「オウッ…フ。先程のあの“犬”が特級魔獣ってwどんだけ厨二病的な用語が出てくんだよ“この小説”わｗｗｗ」

シャイナは「はぁ」と溜め息をついて視線をカメラ目線に向けたまま、やつれた表情を出しながら言う。

エツィオ「他にも“妖精界”とか“深蒼界”とかもあるんだぜ（＾＾）まっ、後々“そこにも行く”から閲覧者の皆様！ちょっと覚えておいてくれよ。で…シャイナ！ほら、“あれ”だよ！！」

エツィオはニコニコ笑顔を出しながらカメラ目線に向けて、右手人差し指を指しながら伊達面（イケメンフェイス）の表情で言った後、シャイナの右肩を少し叩いて、本来の目的を言う。

シャイナ「あっ！そうでちた。（「○」）自由戦闘場面（フリーダムダンス）が長かったから本来の目的忘れちゃったＮＥ☆サーセンｗｗｗ」

シャイナは舌を少しだして照れるような表情を出した後、エツィオは少し可笑しな表情で「気にするな」と言って、エツィオの背中から漆黒の鷹の翼を出す。

シャイナ「さっ…私の実家は“北区域の山林地帯”だよ。ここからだと車で３５分ぐらい掛かるけどエツィオなら5分で着けるでしょうねｗ」

ウゥウゥウゥウゥウゥー！！！！

遠くからサイレンの音が聞こえて、こちらに向かってくるような気がして少しずつ音が大きくなる。

きっと阿鼻叫喚の中で唯一生き残った誰かがエツィオのチート無双を見て、警察でも連絡でもしたのだろうかと。

エツィオ「さて…さっさと此所から離れるとしようか。それとシャイナ！」

シャイナ「何？」

エツィオはふっと口元を吊り上げて笑った後、シャイナを“お姫様抱っこ”のように抱き抱えた後にこう言った。

エツィオ「“３分”だ。“３分”で辿り着いてやるよ。道案内頼んだＺＥ（＾人＾）」

そう言った直後、エツィオは背中の翼を一回羽ばたいた後に上空へと飛び立ち、一瞬の内に遥か上空へと浮かび上がる。

シャイナ「おまっ、カップラーメンかよｗｗｗまぁいいや、さぁ行くか。」

シャイナが呆れる言語を吐きながら笑顔を出し、左手の指先を指し出した後エツィオに顔を見せないまま小声で言った。

シャイナ「潰(つぶ)してくれてありがとネ…」

エツィオは気づいていただろうか、シャイナの仇敵相手を殺したことで“シャイナの過去を解放し吹き飛ばした”かのように、エツィオは穏やかな笑顔を出してシャイナが指す方向へと顔を向けながら言った。

エツィオ「…御安いご用さ。」

そう言った後、エツィオは翼を羽ばたかせ“カメラ目線”を向けたまま、高速飛行で中心都市から飛び去って行った。

…

……

……

―3分後　とあるイタリア小国　山林地帯　シャイナの実家前―

エツィオ「着いた　着いた。」

シャイナ「モツカレさーん（´Д｀）ノ」

エツィオは抱き抱えるシャイナの指先に指されるままにゆっくりと地上へと降りて、足を着けた後翼を仕舞いシャイナを抱き下ろす。

シャイナ「さて、何言われるかなぁ？街では“騒動”を起こしているし、その果てには“破壊活動”するし…噂はもう此所まで広がっているかな？？」

シャイナは右手人差し指を顎に当てながら心配する表情を出した後、エツィオは半透明になってシャイナの右肩に乗り、ケラケラと表情を出しながらシャイナに向けて言う。

エツィオ「大丈夫大丈夫（＾＾）何があろうともポジティブに行こうＺＥ★“援護”なら任せろ！！」

シャイナ「もう、エツィオったら（＊＾＾＊）…」

シャイナはエツィオの少年のような笑顔を出す言語を聞いて顔だけ向けた後、エツィオに感謝の笑顔を出しシャイナは実家の扉へ向けて歩きだそうとした時…

？「シャイナ！！」

バンッと、扉が荒々しく開かれて、扉から老年期の服に合うような黒いトレーナーに灰色のズボンを履き眼鏡を掛けた何処でも見掛ける白髪の老人が、シャイナに向けて走り寄る。

シャイナ「わわっ！？＼（◎ｏ◎）／お…おじいちゃん苦る〝じぃ！！」

老人は娘の安否を気にしていたのか、余計にたシャイナの身体を強く抱き締めており、シャイナは老人に強く抱き締められてうなぎ登りのように身体が細くなるほど、おぇっとシャイナは声を吐いた。

―シャイナの叔父　リオール・アクイラ―

リオール「あぁ！…すまない。ワシはお前をつい…」

シャイナ「うっぷ、…だ大丈夫だよおじいちゃん。おぇっ。」

シャイナの祖父リオールは、少しきつくシャイナの身体を締め上げているのに気づいて、慌てるような表情でシャイナの身体を抱いて

いた手を放す。

シャイナ「ま〝…まずは家の中で話そ?色々とおじいちゃんに言いたいことがあるし…」

リオール「おぉ、そうか!…そろそろワシはお前に話そうと思っていた。続きは家の中で語ろう。お前の話も交えてな…。」

シャイナは慌てわめく叔父(リオール)を見て少し笑った後、リオールと話をじっくりとやるため、祖父を落ち着かせ二人と一人はシャイナの実家へと入っていった。

―シャイナの実家　居間―

リオール「そうか…お前の話が間違いなければこの世界は長年敵対してきた“テンプル騎士団の闇に囚われた”のだな。」

リオールは黒いソファーに座り両手を祈るように組みながら、シャイナは向かい側の白いソファーに座りながら、勇者(エツィオ)の出会いから今までであったことの話をじっくりと聞いた。

シャイナ「そう、信じられないかもしれないけど、また再び世界の危機が迫っているんだ。おじいちゃんには驚くかもしれないけど私

の肩「“勇者”が居るのだろう？」へっ！？」

シャイナはリオールの言葉を聞いて馬鹿馬鹿しい表情から一変、信じられない表情になる。

リオール「“感じる”のだよ。ワシは“元祭司”であり“神の仲介者”として役職を果たした者だ。なので…」

リオールはソファーに座りながら手を組み祈るようなポーズを、“カメラ目線”にを向けて真剣な眼差しでシャイナの右肩部分に注ぐように注目した後…

リオール「姿を見せてくれるかね？若き勇者（アサシン）よ…。」

エツィオ「ほぉ、こいつは驚きだ。俺の姿が見えるとは流石だなじいさん。」

いつの間にか右肩から降りたのかシャイナの隣に実体化したエツィオが、腕を組みながらあぶら掻き座りでシャイナの叔父をニタリと口元を吊り上げながら言う。

リオール「ワシに“見えないモノなど存在しない。”ワシの目に映るのは“真実のみを語る”ものだ。それにしても立派な勇者よ…。」

エツィオ「悪いがじいさん。俺はアンタら人間共が言う“勇者”じゃない。俺はただあの時“けじめをヤツに着けたかった”だけだ。決して人間のためでなく、俺自身の意思(せいぎ)で動いただけさ…。」

エツィオはリオールの“勇者”の単語を聞いて、少し困ったような表情を出した後、リオールはエツィオの表情を見て穏やかな笑みでエツィオに語りかける。

リオール「なに…そんなに恥じることは無い若いの。お前さんの功績は前世の人間も高く評価していた。今はお前さんに対しての戦記を信じるものはごく僅かだが、ワシはお前さんを“勇者”を呼べるぐらい尊敬しているのだよ。」

エツィオ「そりゃ、どうも。あんまり俺的には嬉しくないがな…」

リオール「フフッ…お前さんにも人間にはない“思い”と“様々な苦しみ”を知っているからこそ、事実上…それを知らない“人間”にも気づかないのもお前さんに対しては“深い業(カルマ)”なのだろうな。だが…」

リオールが話をしている時、シャイナとエツィオの背後からシャイナの祖母『エルシア・アクイラ』が、三つの湯気が出るマグカップをお盆の上に乗せて持ってきて三人にマグカップが乗ったお盆をテ

ーブルの上に置いた後、リオールに続いて話に加わる。

エルシア「いつかは貴方に対して“気づく者”が現れる。貴方に対しての傷を癒してくれる者が…」

エルシアは一瞬シャイナを見て微笑んだ後、エツィオとシャイナに向けて湯気が立つマグカップを手馴れた手つきで彼らに差し伸べる。

エルシア「長旅の前にどうぞ…お手製の“コーヒー”です。シャイナも勇者様もお召しあがり下さい。」

シャイナ「（お…まっｗｗｗ何この邪気眼じいちゃんと真面目ツィオの会話ｗｗｗそれにタイミングよくコーヒーを持ってくるおばあちゃんｗｗｗなんて出来すぎるシリアスシーンｗｗｗ）」

隣で珍しい表情を出すエツィオに説明をする祖母を見て少し両肩を落とした後、シャイナは祖母の手作りコーヒーを涼しい表情で啜っていた。

第二十二曲　さらば故郷イタリア！そして次なる場所へ！！

―数時間後　とあるイタリア小国　シャイナの実家前―

エツィオ「じいさん有り難とな。シャイナのおばさんが作った“こーひー”というの旨かったぞ（＾＾）」

エルシア「いえいえ…貴方様が私達に会うまで“娘（シャイナ）”を命懸けで護って下さったのですから、ほんの感謝の気持ちですよ。」

エルシアは少年のように笑顔を出すエツィオに、微笑みの表情を出して感謝の言葉を言う。

リオール「ワシも色々とお前さんの話を聞いて十分楽しんだ。感謝するぞ若いの。それとシャイナ…」

シャイナ「何おじいちゃん？」

シャイナは叔父に顔を向けて、きょとんとした表情で言う。

リオール「お前が知るべきことは“旅”の中でいつか“真相”を知るだろう。何があってもお前は私達の“家族”であり“大切な娘”

だ。気を付けて行ってこいよ。」

シャイナ「えっ…じいちゃん？そんなの当たり前のことでしょ？私が帰るべき場所は此処しかないし…。（ちょっｗｗｗ今度は昼ドラになってるしｗｗｗシリアスすぎて口から砂が出そうｗｗｗ我慢我慢。）」

シャイナはリオールの臭い台詞を聞いて、心の中では口から砂でも吐きそうな表情を出していたが、リアルでは出すと台無しになると思い心の中で隠したまま、何を今さらと少し毅然とした態度でリオールに言い返す。

エルシア「もし、何かに行き詰まった時…先程お茶した時に話したリオールの言葉を思い出すのよ。きっとその“意味”も旅の中で知るわ。」

シャイナ「分かった。…じゃ、行ってきます（＾＾）／」

エルシアは旅立つ娘（シャイナ）にそう言った後、シャイナは車庫に停めてある車に向けて歩き出す。

リオール「エツィオ殿…一つだけ約束してくれないか？」

エツィオ「何だい、じいさん？」

エツィオはシャイナが車に向かう姿を見て追い掛けようと踵を返して歩こうとしたが、リオールに呼び止められて顔だけ振り向く。

リオール「娘（シャイナ）を絶対に護り通してくれ。あの子だけの笑顔を絶対に…」

リオールの願いを込めた言葉を聞いたエツィオは、口元を吊り上げて余裕溢れる強い表情でリオールに言った。

エツィオ「大丈夫さ。俺はシャイナを守る。絶対にな…。」

エツィオはアンジェロを倒す前のシャイナの一部の表情と心を取り戻すのを思い浮かべ、右手を強く丸めるように握り締める。

リオール「アンジェロを倒したことで教会の上部の者も動くだろう。エツィオ殿の力と、シャイナの身柄を手に入れるためにな…」

エツィオ「何があろうとも俺はアルタイルの使命と共に“シャイナ”を守る。人間が創った教会なんぞ知ったことか…」

エツィオの力強い信念の言動を聞いたリオールは、脳裏に過去の映像が流れながらでも目の前にいるエツィオに信頼と期待に答えるような表情を出した。

リオール「“スペイン”に向かいなされ。“浄化”が終えた後のそこに私の知り合いの一人“アイモン”と言う者が居る。その者に合えばきっと“探し物や秘宝と間違えている暗殺魔具（アーティファクト）”の情報ぐらいなら知れるだろう。」

エツィオ「“アイモン”か…覚えておく。」

エツィオがそう言った直後、車庫にいたシャイナが「出発するよー。」と甲高い声がエツィオがいる所へと聞こえてきた。

リオール「エツィオ殿（エツィオどの）の世界ではこう言ったほうがいいかな?…安全と平和を、兄弟。」

エツィオ「…世話になったな兄弟（じいさん）。じゃあな。」

エツィオはリオールの言葉を聞いて少し笑った後、リオールに笑みを返してシャイナの“車の上”へと軽いジャンプで乗っかり、鳥が木の枝に停まるような座り形を取る。

シャイナ「何会話してきたの？エツィオ？？つーか、乗るところ間違っているからｗｗｗ」

エツィオ「シャイナの祖父と約束事だＹＯ☆良いじゃないかー。この“くるま”の乗り心地が良いのか試したいモン★」

エツィオの子供めいた発言を聞いたシャイナは、「アホかｗ」と呆れた表情で顔を少し下へ下げた後、車を実家前の門へと発進させ道路に出て実家を後にした。

リオール「シャイナとエツィオ殿に、良き旅路が有らんことを…」

エルシア「どうかエツィオ様…シャイナを御守り下さい。」

リオールとエルシアは実家から去っていくシャイナの車が見えなくなるまで、ずっと二人は扉の前に立ち尽くしていた。

…

……

……

―スペイン行きの国道―

シャイナ「“アイモン”ねぇ。あの“珍コレクターマニア”の奴か。それにエツィオが言う“暗殺魔具”とか言うのはこちらからにして“秘宝”として扱っているのね…」

シャイナが運転する車はスペイン方面の有料の国道へと入り、数々の車が行き来しながら快適な速度で走り出す。

空は段々と白くなり東の方角から赤い光が平行線へと延びてくる。いわば“夜明け”だ。

エツィオ「そうそう前に話した通り俺が使う“暗殺魔具”は“意思ある霊(かみ)や魔(あくま)”が、実体を保つために“様々な容(かたち)として”好き勝手に生きているのさ。人間に対してはただの“秘宝”にしか見えないが、それは奴らが“眠っていた”から通常に触ることができたのさ。」

シャイナは車を走らせながら、車の上に座る半透明のエツィオに“エツィオが使う武器”の質問を語りかける。

エツィオ「中には神に目指そうとした者が逆鱗に触れて、奈落へと落とされ“神への憎悪で武器と化した”ヤツも有るし、数々の人間を堕落させて人の生きる源である“生気(まりょく)を喰らって生き続ける”武器も存在するし…寧ろ“暗殺魔具”は“眠り”以外の活動は“普通の人を喰い殺す最悪の武器”なんだよ。」

半透明のエツィオはシャイナが車を運転する中、途中パーキングエリアでシャイナが買ってきた棒付き飴（ペロペロキャンディー苺味）を舐めながら幸せの表情でシャイナに答える。

シャイナ「要は“ただの人間じゃ扱えない呪われた武器”ってこと？（うはっｗｗｗ何ていうD●Cシリーズの魔具のような恐ろしいのが“この星”に存在すんのかよｗｗｗたまんねぇー）」

エツィオは「分かりやすくいうとそうだな。」と言って、また再び飴を舐め始める。シャイナはエツィオの言葉を聞いて少し身震いするゆうな言動を取った後、前方に通っていたトラックを追い越すため左車線に入る。

エツィオ「この速度は“俺よりメチャ劣る”けど、この風の辺り心地がイイな（＊´∀`＊）今の人間が使うスタンダードな乗り物の“くるま”ってのも悪くないな。」

シャイナ「アンタは“人外”だからそりゃ…この乗り物程度じゃ、生温いでし…ん？」

シャイナはエツィオの会話を聞いて少しおちゃらけた表情で言った後、サイドミラーに映る後方からの黒っぽい車を見て少し眉を下に動かす。

シャイナ「（あれは…まさか…な。）」

シャイナは何かに気付いたように少し額から汗を出した後、シャイナは車のアクセルを強く踏んで更に速度を上げる。

エツィオ「？どうしたんだ、シャイナ？？」

エツィオはマッタリ速度から異常なスピードの風を身に受けて、口にしている飴を加えながら運転席にいるシャイナに顔を下に向けて運転席の窓から尋ねる。

シャイナ「（…マズイ！）ゴメンね、エツィオ。これから“荒っぽい運転”になるから、しっかりしがみついてＮＥ★」

エツィオ「それはどうい…おっ！」

突如シャイナが運転する車が先程よりもスピードを上げて、前方にいた車を横滑りするようにタイヤの面を道路に擦りながら猛スピードで走る。

エツィオ「あっ！」

エツィオは突如車が急ハンドルを取ったことにより口に加えていた飴が外れて、道路へ落下する。

エツィオ「シャイナが買ってくれた“あめ”！救助ぉ⊂（。Д。⊂（ ⊃三三三」

直前にエツィオは左肩のマントを“紐のように伸ばして”マントで飴を空中キャッチした後また口に加え直す。

エツィオ「エツィオ　は　“あめ”　を　救助した。　やったＺＥ★」

シャイナ「（そんなに飴が大事かよｗｗｗ何気にポ●モン字幕ｗｗｗ）さぁ、ぶっ飛ばすわよ。明けの頭文字●！！」

シャイナは心の中で突っ込みながら、車のＣＤボタンを押し音量を最大に上げ猛スピードで擦り痕を作りながら国道を走り出した。

第二十三曲　目覚まし爆炎花火

―スペイン方面行き国道―

前方に走る複数の車を追い越すためシャイナが運転する車が、荒々しく右往左往豪快に滑るようにのタイヤが路面を黒く擦る。

シャイナは限界までアクセルを踏み、サイドミラーに映る後方から迫り来る黒い物体の同じような動きを見て舌打ちする。

シャイナ「たくっ…しつけぇな！教会のジジイ共は私をこの国から逃さないほどご立腹らしい（、ε′）」

エツィオ「え？後ろから来るあの“黒いくるま”が教会の“くるま”なの？」

半透明のエツィオは後ろから追いかけてくる車（パジェロを改造した物）を見て、者スピードで右往左往に動いているのに関わらず“あぶら座りしながら飴を舐め”シャイナに語りかける。

シャイナ「あの祭司を“殺った”ことで私はもう“狂信者”扱いと

しているらしいね。」

エツィオ「“上部の教会”って奴に話が入ったのか。現代の世界は情報伝達早いなぁ。（・o・）」

後方から来る車はシャイナが乗る車よりも大きい車…対沼地改造パジェロであり機動力は向こう側が上らしく、徐々にシャイナの運転する車へと迫っていく。

シャイナ「ダメだな。こりゃ追いつかれるわぃ／（＾o＾）／なので…エツィオ。」

シャイナは車の上にいるエツィオに向けてこう言った。

シャイナ「へるぷみー★エツィオ（；ω；）」

エツィオ「任せろ！」

エツィオは実体化し右片翼だけ翼を出して、大きな弓の形へと“変形”する。そしてエツィオは弓の握り部分に左手で構え残る右手は、“カメラ目線”に向けて人差し指を指して言った。

エツィオ「しつこいゴキブリ退治でも、始めようとしようＫＡ★ブリトラＬｏ　ｓｅｇｕａ。」

そう言った直後にエツィオは実体化し構えられていた弓の発射口から紫の光が迸る鷹の羽を形した矢が数本出てきて、エツィオは口に飴を加えながら発射体制を取る。

普通に車を運転する人Ａ「うわっ！？何だあいつ！？気でも狂ったのか！？」

普通に車を運転する人Ｂ「車の上に立って何しているんだ！？」

普通に車を運転する人Ｃ「背中に何か出てるけど…何あれ？」

普通に運転している人達がエツィオに向けて野次を飛ばすが、エツィオは気にせず穏やかな表情で…

エツィオ「Ｉｍｐｏｒｐｏｒｉ　ｐｉｏｇｇｉａ！」

掴んでいた弓の引っ張り部分を離し、発射口に出現していた複数の紫…ブリトラの力を借りた雷の矢が数本後方から迫る大きい車改造パジェロの一台一台にボンネット辺りに突き刺す。その直後…

ズドォォォォォォォォォン！！

突き立てられた場所がエンジン部分だったのか引火し、朝の爆発（おはよう花火）を起こす。その直後…

普通に車を運転する人Ａ「ギャァッ！」

ドスッ！

爆発して大破した車の破片が近くに普通に走っていた車達にぶつかって、一部のフロントガラスを突き破り運転していた人が避けようとハンドルを切るがすでに遅く、車の破片が運転者頭部を生々しい音を立てて突き抜け、案の定力なく頭から崩れ落ちるよう即死する。

普通に車を運転する人Ｂ「ひっ！避け…うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

ドコッ！！！！ギャァァァァァ！！！！！ガン！！！！！ゴン！！！！！ドン！！！！！

頭部を貫かれて即死した運転手の車が安定を失い、そのまま暴走するように隣に走っていた車に向かって突進しそのままぶつかる。

普通に車を運転する人C「いやっ！こんなところでし…」

普通に車を運転する人D「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

ぶつかった車がピンポン玉が弾かれる様に車体がクルクルと回りガードレールにぶつかりながら、路面にタイヤの痕やガードレールに車体の痕を作って次から次の車へと巻き込みながらぶつかっていく。

普通に車を運転する人E「こん畜生ぉぉぉぉぉ！！よし！！さけ…嘘だろ…」

エツィオ「あ。（・・）」

次々と追突していく車がついに前方にいた若者の男が乗る車へと迫り、ハンドルを横に切って危機一髪回転してきた車避け、避けられた車は近くの故障車占領スペースの壁へぶつかってようやく止まる。だが…

普通に車を運転する人E「悪夢だ…」

目の前にはガソリンタンクを積んだ車があってブレーキを踏もうと

したが、今走っている国道の制限時速が５０キロなので、若い男が運転していた車は時速６０以上だったので無論止まりきれず、案の定男性が運転する車にタンクローリーに突き刺さるようにぶつかる。その直後…

ドォオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！

タンクローリーの中にあったガソリンが引火して大爆発を起こし、爆炎が後方からの事故車ふくめて普通車と下り側方面の車達まで巻き込み、所々火災が起きながらオレンジ色の爆炎が朝日の上空へと立ち上る。

シャイナ「おまっ…朝の通勤時間が“地獄絵図”になっとるｗｗｗそれに死者出すぎｗｗｗ」

エツィオ「Ｉｏ　ｓｏｎｏ　ｍｅｒａｖｉｇｌｉｏｓｏ！（すん晴らしいぃ！）スゲー花火だな。まっ、目覚ましにはちょうどいい音だろ？」

シャイナは車のサイドミラーとフロントガラスの上に付いているミラーで後方の様子を見て、あんぐりと口を開きガタガタと身体を震えながら引き続き前方を見て運転をする。

エツィオはシャイナとは逆に少年のように小さく右拳でガッツポー

ズを取った後背中の弓型の翼を解いてそのまま仕舞い、左手を眉上まで上げて爆炎を見上げるような形で歓喜の表情を出す。

シャイナ「エツィオ…これは目覚ましというレヴェルじゃねぇぇぇぇぇぇぞｗｗｗでも少しは時間稼ぎになったか…」

エツィオ「いや、しつこい害虫共はそう簡単にくたばらないさ。ほらっ♪」

シャイナ「え…ちょ！！何だってぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？！！？？」

シャイナは進行方向から逆走してくる複数の改造パジェロを見て、シャイナは反射的にハンドルを横に切って逆走してくる改造パジェロの追突を辛うじて逃れる。

エツィオ「おー。わんさかわんさかと増えることだ（＾＾）俺ワクワクしてきたＺＯ★」

避けられた改造パジェロ数台は回転するように車体を滑らせた後、タイヤを空回りするように痕が出来るほど擦ってシャイナの車を追いかけるよう急発進し、また再び追跡を開始する。

シャイナ「おいおい…教会の連中“抜群に空気読むように特殊訓練受けすぎ”だろｗｗｗまぁこの小説はもともと作者がフリーダムに執筆させているし、物語を盛り上げるように自由設定されてるからさ、まぁいいか…そんなことを気にしちゃ駄目ＮＥ★」

シャイナはハンドルを握り締めアクセルをまた再び限界まで踏んで、今度は下り方向から来る改造パジェロが横入りするように道路境目のガードレールを突き破って乱入したところを見た直後…

シャイナ「ＨＡ…研修先でやった遊楽街のゲーセンで“頭文字●アーケード世界ランク２”の実力を現代版に見せてやろうじゃぁないのぉぉぉぉぉぉ！？」

運転席にいるシャイナはゲーセン廃人のような半狂の表情でハンドルを豪快に回し、不敵に笑いながらアクセル全快で前方の車両を更に追い越していった。

第二十四曲　一日最初の地獄絵図

ー スペイン方面行き国道 ー

シャイナ「クッハハハハハハハハ！俺はもう誰にも止められない！！俺は自由じゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

シャイナは悪魔顔の表情を出しながら猛スピードで前方の車をギリギリ縫うように追い越し、一部車体に車体のフレームが少し当たって火花が飛び散る。

シャイナ「オラオラオラオラオラオラオラァァァァァァァァァア！！！！どけどけぇぇぇぇぇぇい！！世界ランク2のお通りじゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

シャイナは半狂乱舞の表情でギリギリの車間をプロも泣かせるほどの運転手並に潜っていくように入り、前方の車だけでなく横入りしてくる改造パジェロの隙間を狙って追突を避けながら追い越す。

あまりにもシャイナの運転がプロ並みに驚いたか、改造パジェロを操る運転手はシャイナの挙動不審の動きにたじろいでシャイナとの車間距離が離れていく。

が…所詮素人は素人なのでシャイナの車体の一部が、無理矢理追い越すときに擦った数が多く、シャイナの車体のフレームが段々と元の色が分からなくなるほど剥がれ落ちていた。

エツィオ「シャイナ！前方が塞がれているぞ！！俺が「必要ない。」おぅ！？Σ（・・）ノノ」

エツィオは前方を見て隙間がない車間をシャイナに告げた後、エツィオは活路を開くべく“身体に右手を入れて”中から雷竜鞭を取り出し、ブリトラを前へ振りかざそうとしたがシャイナの覇気の声に思わず動作が止まる。

シャイナ「俺の華麗なる運転捌きを見るがいい！！」

シャイナは前方の車へと突っ込んでハンドルを左へ切った直後、タックルでもかますように前方の車体後部に向けて車前方部分をぶつける。その時シャイナの車の速度は“１４０以上”だった。

普通に車を運転する人Ｆ「うわぁぁぁぁぁっ！！！！」

ガシャンとシャイナが猛スピードに運転する車が前方にいた車が、後方にいたシャイナの車の前方部分に当たって一瞬車体が浮く。

シャイナ「オラァァァァァァァァァ！」

シャイナはそれを見逃さず前方の車両が浮かんだのを見た後、シャイナはハンドルを全快に切ってスピンするように車体をまわして前方へと滑り込む。

宙に浮かんだ前方の車が、シャイナが運転する高速回転状態の車に弾かれるようにボンネットから当たって、スローモーションでも掛かったように後方へと落ちていく。

エツィオ「ヒュゥ！ＣＯＯＬだぜ、シャイナ！！」

エツィオはシャイナの運転捌きを見て感動し、口笛を吹きながら後方へと弾かれる車を“猛スピードで走り回転するシャイナの車の上に普通に立ったまま”興味津々の表情で見届ける。

シャイナ「妨害アタックその１。コンプリィトッ。」

シャイナが右手の人差し指と中指を付け残りを曲げたまま右目間近に寄せた後、付けた部分を斜め上に上げてカメラ目線に向けてポーズを取った時…

前方にいた車が空中でバランスを崩し、切り揉み状態のまま落下する。

ガシャァァッ！！！！ギャギャギャギャ！！！！

その後安定のしないまま車がスピンし、後方へとタイヤを路面に擦りながら、後方から追いかける改造パジェロ数台に当たって生々しい音を出しながらクラッシュさせた。

ガシャァッ！！ギャギャギャギャ！！！！ドゴンッ！！！！

エツィオ「ＳＵＧＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥ！！！！（・Д・）やったな、シャイナ！！」

ブリトラ《ガウッ！》

シャイナ「クハハこれぞ“世界ランク２”の実力じゃ！！俺最強ぉ！！だが…」

エツィオは追跡の車を撃退した所を見て、車上で少し飛び跳ねて握っていたブリトラも驚くように少し吠えた後、手にしていたブリトラをエツィオの身体の中へ戻す。

シャイナはちらっと視線だけ動かしてサイドミラーに映るいまだに追いかける改造パジェロの姿を見て、けっとややため息がついた声を漏らしゲーム感覚で真顔の表情を出す。

シャイナ「俺のカーチェイスバトルは終了していない！いいじゃないかぁ～。楽しくなってきたぜぇ！！」

シャイナはニタリと笑って前方にあった合流の小さな合流壁に向けて車を走らせる。

シャイナ「エツィオ！車体傾けるから何かに掴まって！！」

エツィオ「あぁ！」

そう言った後シャイナは小さな合流壁に車の左車輪を掛けて、車体を斜めにさせながら前方の車と車の間を縫って二輪走行で高速疾走する。

エツィオは斜めになる直前に開いていた左側の窓の枠に掴まって、その直後に車体が斜めに傾き二輪走行のまま高速疾走する中…

エツィオ「あっ！まだシャイナから貰った飴食べきれてない！！」

いつの間にか閉まっていたのか半分まで舐めた飴を“エツィオの身体の中から出して”、もう一度口に加えてのんびりとシャイナのドライブを引き続き楽しむ。

シャイナ「グへハハハハハハハハハハ！！俺は無敵なんだよっ！！ヒャッハハハハハ！！！！！」

エツィオがのんびりとしている中、シャイナは調子に乗ったか顔を不気味に歪ませてラリった表情を出しながら、二輪走行のまま国道を疾走…否爆走する。

シャイナ「あのカーブは…よし、あれを使おう。エツィオ！通常走行に戻るから衝撃に備えて。」

エツィオ「アイヨー（･◇･）ゞ」

長いカーブの部分に差し掛かった時、シャイナは二輪走行を止めて元の四輪走行へと戻す。エツィオは相変わらず飴を舐めながら、四輪走行に戻ったにも関わらず“よろけもしないで”また再びあぶら掻いた座りをする。

シャイナ「ヒィィハァァァァァァ！！ベイビィイェェェェ！！！！！」

ギャァァァァァァァァ！！！！

シャイナは急カーブに差し掛かった時、バンドルを深めに切ってアクセルとブレーキを両方踏みながら、ゲーセンで見掛ける“イン攻めドリフト走行”をやり、タイヤの痕が荒々しく刻みながら爆走する。

シャイナ「アイ・アム・ナァァァンバウアァァァ…あっ。」

ドリフトをこなしたシャイナが有頂天になっている最中、シャイナは車に点いている“あるモノ”を見て、有頂天からぎょっとした表情になった。

エツィオ「おっ？どうしたシャイナ？」

エツィオはシャイナの異変を感じて、舐め終えた飴の棒を道路に捨てた後、顔だけ下げて運転席にいるシャイナに語りかける。

シャイナ「やっべ…もうガッソー（ガソリン）が無いｗｗｗ燃料の配分考えてなかったおｗｗｗ」

シャイナが指さした方向にエツィオは視線だけ動かして見てみると、時速メーターの下にあるガソリンマークのゲージがあと1メモリであり、警告音が静かに鳴っていた。

シャイナ「（車のスピードが落ちてきてる…こりゃヤバいな。）スペインまであと少しな…だわっ！？」

エツィオ「おろん？」

パンッと乾いた音が鳴ってシャイナの車がフラフラとよろめくように動き、徐々にシャイナの車のスピードが落ちてきた。

どうやらタイヤも破裂（バースト）し、それだけでなくボンネットからも白い煙が出てきて、エンジンが加熱し過ぎて徐々に発火する手前に陥る。

要するにシャイナの無理な運転が車体を大きくダメージを与え、もはや瀕死に成る程無茶をしたらしい…。

シャイナ「あー、こりゃ無理があったか（ρ・―；）素人の人間が無理矢理運転するとこうなるのですねｗｗｗ分かります。（やっぱ二次元と違ってこれが現実なんですねぇぇぇぇぇｗｗｗ）」

すると後方からしめたと思ったのか複数の改造パジェロが現れて、徐々に数を増やしながら損傷したシャイナの車へと高速で向かってくる。

エツィオ「中々良い運転だったぜ！シャイナ、選手交代だ。此処から先は俺が何とかするＳＡ★」

そんな最中、シャイナの顔に車の上にいたエツィオの右手が差し伸べられ、少年のような笑顔でニシシッ♪と笑いながらシャイナに語りかける。

シャイナ「ハハッ…マジ…頼んだよ。」

シャイナは安心したのか一瞬笑った後、ガソリンランプのバーが無くなって警報音が鳴り響く中、シャイナは車のドアを開けて両手でエツィオの右手に掴まる。その直後…

エツィオ「さて、此処からは俺の出番だな。行くとしますかね（＾＾）」

バフッ！

エツィオはシャイナの両手を握った後、一瞬の内にシャイナの身体をエツィオの胸部へと寄せてエツィオはシャイナを“お姫様抱っこ”のように抱えながら、損傷したシャイナの車の側面フレームを後方へ蹴るように右片足力を貯めた後、前へと飛翔しその場から離れるように飛ぶ。

シャイナ「グッバイ…“二年間車検支払が終わっていない”私の愛車（／＿；）ノ」

ガシャッ！！と、音が鳴ってシャイナの車はチート級のエツィオに蹴り飛ばされて“波紋が出るほど”所々車体の部品が壊れながら後方へスピンする。

そして半壊しつつあるシャイナの車は、後方から追いかけてくる改造パジェロにぶつかって、その直後にまたしても大爆発が起き周囲にいた車達も巻き込まれて、死屍累々の状況になった。

エツィオ「さぁ、走り抜けるＺＯ☆俺達のために戦い走り続けたシャイナの車に敬礼（＞＜ゞ」

エツィオはカメラ目線に向けて左手を斜めにし顔まで上げた後、背後で爆発する風景に背けたまま敬礼するようなポーズを取る。

その後エツィオはシャイナを抱き抱えたまま飛翔し、前方に走って

いた車体上部に“窪みが出来る程”足を着けた後、また再び前方へと飛翔し高速で飛び渡りながら前へと進む。

エツィオ「俺の自由疾走（フリーラン）は誰にも止められないのＳＡ★」

シャイナのカーチェイスと違ってエツィオは後方から追い掛けてくる改造パジェロすら“絶対追い付けないぐらい蟻のサイズまで引き離した”後…

エツィオ「いーもの見っけ！！」

エツィオは遥か前方にいる長い車（旅行バス）を見て、エツィオは車上部を蹴って空中に身を浮かせた後、エツィオの背後から“青白い呪文が書かれたアサシンの円形紋章”が現れて、エツィオは紋章を蹴って更に前へと飛びかかる。

何度も“空中でアサシンの紋章を蹴り”ながら空中疾走（エアダッシュ）し、漸く旅行バスに追いついてバス上部にエツィオの左手が触れた瞬間…

エツィオ「よっ、と…」

左手一つで“旅行バスが宙へと持ち上がり”、そのまま旅行バスを左手一つで“お手玉するように逆さまの状態で持ち上げる”。

バスの乗客Ａ「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

バスの乗客Ｂ「助けてエエエエ！！！！助けてエエエエエエエエエ！！！！」

バスの中で多数の乗客が悲鳴をあげているのを“気にせず”、エツィオは遥か後方から追い掛けてくる小さな黒蟻（改造パジェロ）に向けて…

エツィオ「そりゃぁ！！！！」

エツィオは思いっきり旅行バスを力一杯後方へと投げて、旅行バスが逆さまの状態で回転しながら横方向に火花を散らしながら道路へと落下する。

普通に車を運転する人Ｇ「うわぁぁぁぁぁ！！？！？！前がぁぁぁ！？？？！？」

普通に車を運転する人Ｈ「駄目だ！！止まりきれ…」

ガシャドコガシャガガガドンッドドンガガグシャシャ！！！！

登り方面から来た“改造パジェロの他全て車両がバスに激突”し生々しい激突音が響く中、エツィオはニタリと口元を吊り上げて追突車両を見ながら左手を握り締めてガッツポーズを取りながら道路へと着地する。

エツィオ「Ｉｏ　ｌｏ　ｆａｃｅｖｏ！（やったぜ！）」

シャイナ「あぁ…せっかくの始まりを告げる朝がもう地獄絵図＆阿鼻叫喚の状況に変わっちゃったｗｗｗ（グラ●プだとほぼ犯罪レヴェルＭＡＸだろｗｗｗそれにしてもこんな騒動でケーサツまだ来ないしｗｗｗ）」

エツィオ「（ん…この波動は…。）」

エツィオは何かを感じて焦げ臭い臭いが漂う国道の中、背後に向けて振り返ると…

エツィオ「シャイナ見えたぞ。浄化されていない土地“特異界の境目”が…」

シャイナ「！あれが…？」

シャイナはエツィオに抱きかかえながら、エツィオに言われた通り前方を見ると…

現代の普通の人では見えないだろう“二人（シャイナとエツィオ）だけしか見えない黒き霧”が上空を覆いつくし、所々禍々しい触手が蠢きながら二人を誘うように振るっていた。

第二十五曲　ようこそ触手王国へ！！

―スペイン方面行き国道―

シャイナ「あれが現世との境である“特異界の入り口”！！」

エツィオ「そうだ。あの影から出ているのは“コンモヴェンテ（誘うモノ）”っていうもんだ。あれはこの“特異界を生み出した媒介の分身”の一部であって、特異界の中にある魂の生気（にんげんまりょく）を徐々に喰らいながら行動範囲を広げていくのさ…。」

シャイナは覆い尽くす影の範囲から“黒い触手”が至る所から出てきて、触手達は二人（シャイナとエツィオ）を引き摺りたいような動作で、こちらへ誘うようにぬめぬめとした動きをする。

シャイナ「うっはｗｗｗきもいきもいｗｗｗあのグロテスクな触手みたいなのは眼を逸らしたい気分ｗｗｗ」

エツィオ「じゃぁ、シャイナ…俺の中に入っているか？特異界の中は“媒介役の魔力によって状況が違う”からさ、シャイナが見てきた世界とたぶん“気色悪い”かもしれないし…。」

口に両手を当てて触手の姿を眼で逸らしているシャイナの姿を見て、エツィオは心配する表情を出しながらシャイナを見ながら言う。

シャイナ「…ごめん、吐き気がしてきた。しばらく“浄化完了”するまで中に入ってる…。（小さいころに“半生タコ料理”を食べてお腹を壊したり、研修中本物のタコを捌くとき触手部分が“ある身体の所”に絡みつかれて絶叫したことを思い出して“トラウマ”になっているということを黙って置こうｗｗｗ）」

エツィオ「…すまん。悪い“モノ”見せちまって…。」

シャイナが青ざめた表情で口元を両手で隠しながらそう言った後、シャイナはエツィオに優しく抱きしめられるようにエツィオの身体の中へと入っていった。

エツィオ「…さて、さっさと浄化を…ん??」

ウーッウウウウウウウウ！！！！ギャギャァァァァァァァァ！！！！

騒がしいタイヤの滑る音とサイレンが鳴る音が背後から聞こえて、エツィオはキョトンとした表情で背後へと振り向く。

車体の上には赤いランプが光りながら回り、白と黒が混ざった車（パトカー）が覆い尽くすほど沢山エツィオがいる数メートル離れたところに止まる。

シャイナ『おっまｗｗｗこの時点でようやく“ケーサツ”登場かよｗｗｗ遅い展開だなｗｗｗ』

エツィオ「“けーさつ”？自警団のようなモノなの？？」

エツィオが身体の中にいるシャイナに向けて“カメラ目線”を向けたまま戸惑う表情を出す。するとパトカーの一人一人出てきて手には…

ガシャ！ガシャ！！ジャ…ジャキッ！！

黒い物体（コルト・ガバメントモデル・４５ハンドガン）や長い物体（ベネリ　Ｍ４／Ｍ１０１４　ＪＳＣＳショットガン）やら平べったい物（ＳＭＧ機関銃）を手にしており、パトカーの開けられた戸やに後方部分に隠れるように身を隠した後、エツィオに向けて銃を構えていた。

警察Ａ「そこのマントの男！身に着けている武器を全て外し、手を上げろ！！」

警察Ｂ「抵抗せずこちらに投降せよ！投降せず刃向かう場合は問答無用で射殺する！！」

きっとこの死屍累々に満ちた国道の中で生き残った運転手の誰かが、シャイナの暴走走行（カーチェイスバトル）やエツィオの無差別自由暗殺攻撃（フリーダムキルアタック）を見て警察に連絡しただろう。

エツィオ「だってさ…シャイナどうする？？」

エツィオは呆れた表情で両肩をすくめながら、“カメラ目線”に向けて両手を少しひろげてシャイナに語りかけていた。その時…

警察Ａ「もう一度言う！身に付けている武器を外せ！！さもなｋ…」

ガジュッ！

エツィオ「んっ！？」

突然音量最大のメガホンでエツィオに言ってきた警察の一人が、エツィオの背後から伸びてきた境目の影の黒い触手に警察の顔面から貫かれて、脳の肉片一部や一部目玉が血しぶきと共に道路へと流れ

落ち、頭部を貫かれて即死した警察の身体がだらけるように宙へと持ち上がる。

シャイナ『ひいいいいいいい！！！！なんちゅうグロ描写ぁぁぁぁ！！！！！』

エツィオ「（これは…まさか、具現化してきているのか！？）」

そして顔を突いた触手の至るところから蛇のような頭部が出てきて、貫いた警察の身体全体を貪るように服ごと肉を喰らい骨になるまで内臓を喰いつくした後、骨だけになったもと警察の身体の成れの果てを投げ捨てる。

カシャンッ

エツィオ「おっ？ナニこれ？？」

エツィオの足下に先程触手に貫かれた警察が持っていたのだろうか長い物体（ベネリ　Ｍ４／Ｍ１０１４　ＪＳＣＳショットガン）が滑るように転がってきて、エツィオは気にもせず“ショットガン”を躊躇なく手に取る。

警察Ｂ「た…隊長が“目標”背後のアンノウンに殺られた！！」

警察C「おい！何だあれは！？隊長を突いた“アレ”が多数いるぞ！！？！」

警察D「う…射つんだ！」

ドガガガガババババハドドドッ！！！！

警察達がうろたえた瞬間、手にしていた武器をエツィオでなく、“エツィオの背後に映る影”に向けて一斉にありったけの弾を射ち込んで発泡する。

エツィオ「（まさか、人間には見えない特異界が肉眼に映るほど見えるのか！？だとしたら…）よせ！無暗に刺激を与えるな！！」

エツィオがそう言った直後に背後の影から多数の触手を警察に伸ばして、影に刺さる銃弾が鉄のように効かないように弾かれ、前方にいた警察全員の身体を宙に浮かせるよう鞭のように払いのけた後、宙に浮かんだ警察の心臓に目掛けて瞬く間に貫く。

ドスグシャグジュドン！！！！

警察E「だ…第一部隊全滅!!チクショウ!!何だこれは!?!!?」

警察F「お…応援を頼む!SWATに連絡しろ!!」

シャイナ『アバババっwwwなんて修羅場な状況になってんだろwww逃げろよケイサツ（；￣―￣）σ』

エツィオ「ちっ!こりゃグズグズしている暇ねぇな!!」

エツィオは引き続き銃を乱射する彼らを見て舌打ちをしシャイナは突っ込みながら踵を返し背後へ振り向いた後、背後からの肉を喰らう音と警察の悲鳴と怒号を聞くのを無視し、特異界の入り口へと走って入っていった。

…

……

……

―スペイン　マドリード　特異界―

エツィオ「んっ…と。」

特異界に入ったエツィオが見た光景は、シャイナがいた特異界よりも異質であった。

空が墨のように黒く渦巻き、毒毒しい水溜まりの物体が地面を這いつくばるように蠢き、樹だった物体や腐敗したビルの壁から黒い触手のようなものを生やしてタコのように蠢いていた。

シャイナ『おぇっｗｗｗ何このイカスミ天国のような風景ｗｗｗ触手大杉じゃねｗｗｗ』

エツィオ「キメェしバッチいな、此処。早く浄化して元の国に戻そう。」

エツィオはそう言った後走り出して、地面に蠢く黒い水溜まりを避けながら先に進む。

エツィオはビルの壁を“横方向に登るように走り”ビルの壁から伸ばしてくる触手を、右手で軽く振るうだけで触手が風であおわれるように爛れるように反れて漂う。

エツィオ「俺に触れるな、近寄るな、テラバッチいｗｗｗ」

エツィオは先ほど手にいれたベネリ　Ｍ４／Ｍ１０１４　ＪＳＣＳショットガン（略してショットガン）を構えて、進行方向を妨げる触手に向けて“右片手射ち”で“射つ反動すら無し”の無いまま発泡する。

グシャっと潰れた音が鳴り、生えていた触手が挽き肉のようにミンチになって、道路へと落下する。エツィオはそのままショットガンを進行方向を妨げる触手のみ射ち、壁から壁へと飛び渡り壁走り（ウォールラン）しながら先へと走る。

エツィオ「（この先から強い波動を感じる。近いな…）」

だいぶ先に進んだ後、エツィオの足取りはマドリードの観光名所の一つでもある“マドリード王宮”へとたどり着いた時…

？【あらっ…私のお家の中で何をしているのかしら??】

エツィオ「あ゛？」

エツィオは声がした方向へと顔を向けると…

マドリード王宮の屋根上に複数の触手が蠢き、毒々しい色と体をしたぬめぬめ感が漂うイカのような下半身、その体の頭部の部分に蛇

柄の模様を刻み黒色の長い髪先には蛇が蠢いていて見て目を逸らすほどの醜い女性が、口元を吊り上げて不敵に笑いながらエツィオを見下ろしていた。

第二十六曲　悪魔が惚れる暗殺者

―スペイン　マドリード　特異界　マドリード王宮前―

エツィオ「何だ、醜いイカ女か。どおりでこの特異界に入った途端海水臭いと思ったよ。」

？【まぁ、酷い事を言うね可愛い坊や。これでも私は“魔界”の中で“美しい”と言われているのよ？】

―上級テンプル魔女獣　モラド　アンゲルス―

エツィオは悪そびれた表情で両手を広げながら、王宮屋根上にいるイカ女に余裕の表情を出しながら挑発するような言動を吐く。

モラド　アンゲルス【それと、私はイカじゃなく“天使（アンゲルス）”よ？お解り頂けるかしら可愛い坊や。】

一方モラドアンゲルス（略してモラアン）はエツィオに酷いことを言われていたのに関わらず、エツィオと同じ余裕が溢れ口元を吊り上げながらエツィオを見下ろし、決して怒りの表情でなく穏やかな表情を出しながら二重のような声を吐く。

エツィオ「いや…どうみても“イカ”だろｗｗｗどこが天使（アンゲルス）に見えるんだｗｗｗ」

モラアン【ウフッ♪見ればわかるわ…。】

モラアンは下半身の触手を翼のように広げて身体を空中に浮かべた後、吸盤辺りからエツィオに向けて紫色の光弾の弾幕を雨のように放つ。

シャイナ『ひゃぁぁぁぁぁ何この●方のようなルナティック弾幕ｗｗｗ』

エツィオ「あー、なるほど。たしかにそれは“天使（アンゲルス）”だなｗｗｗ」

エツィオは降りかかる紫色の弾幕を軽い身のこなしで飄々と避け、息切れ“一つもなく”それに“掠りもしないで”完全に弾幕を凌ぎきる。その直後…

？【ギシャシャ！】

エツィオ「おっと。い〝い！？」

エツィオは反射的に背後から飛び掛かって来るモノを“見向きもせず右手一つだけで掴んで”前へと持ってくると…

？【ギュギュ！！ギギィィィ！！！】

右手の中には生まれたてなのか“眼が出ていないイカ女の幼生の物体（フルフルのような物）”が息苦しくエツィオの右手の中でビチビチと体を振って暴れまわる。

一幼体　モラド　アンゲルス　イッガド一

シャイナ『もぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！キッモォォォォ！！！！エツィオはやくその“フルフル”見たいなモノを投げ捨てて！！！！！』

シャイナの絶叫が身体の中で叫ぶ中、エツィオは気味悪い表情を出して「ヌメヌメしてて気持ちわるりぃ！！」と言って、手にしていたモラアンの幼体を投げ捨てる。

投げ捨てられた幼体（フルフル）はビルの壁に当たってグチャっとトマトが潰れるように“中身の内臓と紫色の血が壁にこびりついたまま”絶命する。

モラアン【ねぇ、可愛い子だったでしょう？？私の“子供”を握りしめてくれた可愛い坊や。】

エツィオ「うわわわわわわわわ（（（（（（（（。Д。；）））））））））いまだにあのヌルヌル感覚が抜け…ん！？」

グチャグチュグチ…

エツィオはヌメヌメとした音がした方向に顔を向けると、次々とあの同じような幼体が複数道路や壁やら生まれるように出てくる。

どうやら先程エツィオが避けた紫色の光の弾幕は“卵”だったらしく、卵に付着した部分に寄生して最初のファーストアタックはエツィオを囲むように作り出した行動だったらしい。

モラアン【私の子達をもっと抱きしめてあげて…可愛い坊や。】

モラアンが言った直後に生まれたばかりの幼体達がエツィオに目掛けて飛び付く。エツィオはぎょっとした表情で飛びかかってくる幼体達を見た後…

エツィオ「こんな気色悪いモンなんか抱きたくないＺＥｗｗｗ」

ドンドンドンドンドンドン！！！！

エツィオは手にするショットガンで右片手射ちの構えで、幼体に向けて何度も散弾銃の弾を“連発撃ち”する。

エツィオ「来んな来んな、どっか逝けＮｏｎ　ｓｉ　ａｖｖｉｃｉｎｉａ　ｍｅ！（、皿´＃）」

幼体Ａ【ギャウ！】

本来ショットガンは弾数が少なく、連発が効かない波動が大きい至近距離重視の武器だが、エツィオにとっては“人間が作った玩具”を“エツィオの魔力で外部と内部を無理矢理強化し弾数を魔力が続く限り射ち続ける”反則的に構成させたのだ。

グシャグジュグチュッ！

幼体Ａ【ギヒィ！】

幼体Ｂ【ギェ！！】

エツィオの放つショットガンの散弾が複数の幼体の身体をミンチのように粉々に粉砕し、身体が破裂の音が鳴り響く中、内臓や肉と血がべっとりとビルの壁や道路や噴水などにこびりつく。

エツィオ「（どこまで殖えるんだよｗｗｗ）うざったいＳｃｏｍｐａｉａ！（ー┼ー＃）」

時にはショットガン自体を“ヌンチャクのように振り回しながら発泡”し、幼体を“銃倉で殴り飛ばす”など明らかに“散弾銃の使い方を間違った”戦い方をしていた。

エツィオ「（倒しても切りが無いな。空中戦に持ち込むか。）どいつもこいつも、海水臭いことだ。」

いまだに生まれてくる幼体を見てエツィオは溜め息をついた後、背中から漆黒の鷹の翼を出して一度身体を一回転させ翼から出る“衝撃波”で幼体達を吹き飛ばした後、羽ばたき一回で上空へと飛翔する。

モラアン【あらっ？私とやるの可愛い坊や？？】

エツィオ「元凶断たないと…こんな“海水臭い場所”なんて何時ま

でも居たくないしな！！Ｉｏ　ｖｏｇｌｉｏ　Ｌｅｉ　ｈａ　ｓｃｏｍｐａｒｅ　ｒａｐｉｄａｍｅｎｔｅ！」

エツィオは背中の翼で羽ばたきながらショットガンの発射口をモラアンに構えて、容赦なく頭部へ向けて片手撃ちする。が…

モラアン【そんな危なっかしいのを、私に向けないで…可愛い坊や。】

カァァァァンッ

モラアンの八本の内の四つの触手が、本体である上半身を庇う様に前へと覆った後に氷の結晶のような光が出てくる。エツィオが撃った散弾が結晶のようなところへと刺さった後、パキパキと凍りつくような音を立ててモラアンの下半身あたりから白い雫（凍ったショットガンの弾）が零れ落ちる。

エツィオ「（やれやれ…“水と氷”を司る魔獣いや魔女か。）ヒュゥ♪静かな戦いだな。が、やっぱり海水臭い。ｗｗｗ」

モラアン【かつては魔界と現世の海を統べた“女帝”だったわ。まぁ色々とあって私は“女帝”から“魔女”へと格下げされてしまったけど…その理由は…】

モラアンの触手一つ一つが氷の大剣となって、エツィオに向けて触手を伸ばし軟らかい動作で不可解な動きをしながらエツィオに斬りかかる。

エツィオ「Ｉｏ　ｓｏｎｏ　ｍｏｌｔｏ　ｆｒｅｓｃｏ！」

エツィオはニタリと表情を出しながら伸ばしてきた触手一つに乗り、背中の翼を両腕に纏わせて“爪形態”にさせたあと“スケートのように滑るように”触手の上を疾走する。

モラアン【一人の“勇者”の出現だった。いえ私達魔族の“裏切り者”であり魔界の中では“魔帝”よりも遥かに凌ぐ“最強の暗殺剣士”…それが貴方だった。】

モラアンは触手の上に疾走しているエツィオを振り落とそうと何度でも振るって、残りの触手達がエツィオにめがけて氷の大剣と化した触手を振り回すが…

エツィオ「Ｕｎ　ｍａｒｃｈｉｏ　ｄｉ　ａｌｌａ　ｍｏｄａ！」

逆にエツィオは振りかざされる触手を“壁”として利用し、触手と触手に飛び回って“風圧や色々と関係なく普通に走り”、滑れる場所があればまた“触手の上でスケートのように滑って”その繰り返

しを行いながらあっという間に本体である“モアランの上半身”へとたどり着く。

モアラン【貴方が魔帝と戦う勇猛果敢の姿を見て…私は正直“惚れてしまった”のよ。もはや自分の名誉でもある“女帝”の誇りでさえ捨てきれるほどね…。】

エツィオ「Ｌｅｉ？ｄｉｓｇｕｓｔａｔｏ ｃｏｓ？ ｃｏｍｅ ａ ｓｃｉｏｃｃｈｅｚｚｅ（お前もバカだな。）魔族は本来冷徹の感情しか持たない存在のハズだ！」

エツィオは右手の爪をモラアン頭部へと目掛けて振りかざすが、またしても氷の結晶みたいな物が現れて、爪の攻撃を防ぎきられる。

エツィオは舌打ちをしつつモラアンは穏やかな表情で真剣顔のエツィオを見た後…

モラアン【それを崩したのは“貴方”だった。私だけでなく“他の魔族”達も…。】

エツィオ「なっ！？…マジ！？」

突如結晶の結界に触れていたエツィオの右腕が爪ごと凍てつくよう

に固まり始め、エツィオは慌てて直ぐ様離れようとするが、モラアンが素早くエツィオの身体を両手で捕まえて抱き締めるような形になる。

エツィオ「ぐ…ぁ。」

モラアン【…離さないわ。漸く眩しい光を放つ貴方を掴まえた…私はもう幸せで一杯…】

エツィオは苦痛の表情を出しながら徐々に凍っていく身体をただひたすら耐えており、モラアンは触手部分から首まで液体窒素のような白いモヤが掛かった身体になり、凍っていくエツィオをただひたすら穏やかな表情で見届ける。

シャイナ『エツィオガンガレL（・o・）」レバガチャで何とか抜けるんだ!!』

エツィオ「れ…ればがちゃってな…な何?つ…つーか…」

エツィオの身体の首下まで凍りつき言葉も絶え絶えでシャイナに答えるが、焦点が合わなくなって視界がボヤけ言葉の回数が減っていく。

モラアン【大丈夫…恐くないわ。貴方ならきっと…】

遂にエツィオは動かなくなりだらけるように顔を下にして、両目を閉じて眠るような表情になる。モラアンは子供のように眠るエツィオの表情を見て、そっと白い煙に包まれた手を差し伸べた後…

モラアン【“私”を自在に扱えるでしょう…可愛い坊や（ダーリン）。】

モラアンがエツィオの唇に向けて接吻をした途端、エツィオとモラアンがいる上空に白い光が眩しいぐらいに立ち上ぼり、長い時間を掛かるほど暗闇の特異界を照らし続けた。

第二十七曲　氷上の勇者…いいえ魔神です。

―スペイン　マドリード　特異界　マドリード王宮前―

上空の眩しい光が漸く止み遥か地上にいたテンプル騎士団下級兵ネロマテ達が、光っていた上空を見つめる。

ネロマテA【光ガ止ンダゾ！】

ネロマテB【モラドアンゲルス様ハ御無事ダロウカ！？】

ネロマテC【皆、空ヲ見上ゲロ！！】

ネロマテの一人が上空へと指を指した時、指に吊られて他のネロマテ達も空を見上げると…

ネロマテA【アサシンダ！】

ネロマテB【モラドアンゲルス様ガ、奴ヲ倒シタノカ！？】

上空からエツィオが雫を全身に滴りながら仰向けに落ちてきて、表情は子供のように眠ったまま無防備にネロマテ達がいる場所へ落ちてくる。

ネロマテA【好機ダ！皆武器ヲ構エヨ！！止メヲ指スゾ！！！】

ネロマテB【勝利ハ我ラニ有リ！！】

ネロマテ達が歓喜の声をあげて武器を引き抜き、エツィオが地面へと落下した瞬間に一気に畳もうと落下地点へと集まって、今か今かと武器を握り締めながら機会を待つ。が…

エツィオ「Ｎｏｎ ｌｏ ｆｉｎｉｓｃａ ｓｅｎｚａ ｐｅｒｍｅｓｓｏ！まだ俺は死んでませんＹＯ★」

突如エツィオがネロマテ達のいる地上に顔だけ動かして、口を八の字にし不満の表情を出しながら左手を顔に上げて軽く何度も振る動作を取った瞬間…

エツィオ「折角だから俺はお前達を“串刺し”にするＺＥ★」

ネロマテ’ｓ【！！？！？！？！？】

エツィオの至る所の身体から純白に輝く氷柱（つらら）のような物が複数出てきて、氷柱が地上にいたネロマテ達を頭部やら心臓やら急所すべてを突き、貫かれたネロマテ達は一瞬の内にして半透明に凍り付く。

エツィオ「おぃ、天使（アンゲルス）。お前は本当にいいんだな？」

モラアン【適わないわよ可愛い坊や（ダーリン）。どうせ私は貴方に使えたいと元々望んでいたから…。】

凍りついたネロマテ達が粉々に砕け散り、氷の破片が飛び散る中からエツィオが現れる。

エツィオが持つ右手には先程使っていた“ショットガン”が“変形”しており、原型の砲口だけはそのまま残っているがその後は氷のように透き通っており、側面には天使の羽のような物がついて氷結の形が所々に刻んだ美しいフォルムをもつ…

エツィオ「決めた。天使（アンゲルス）、お前の新しい名は氷魔銃“氷界を統べる白き姫君”でいいかな？」

氷の破片が粉雪のように降る中、エツィオは散弾銃を右後ろ肩に乗せるように構えた後、不敵の表情で手にする“武器（アンゲルス）”に答える。武

器となった“天使（アンゲルス）”は穏やかな言動でエツィオに答えた。

モラアン（アンゲルス）【良いわよ…あぁ…なんて素敵な名前。私…幸せ。】

エツィオ「まっ、よろしく頼むぜ。」

エツィオがそう言った瞬間、右手に持っていた氷魔銃（アンゲルス）を前に構え、貫かれていないネロマテ達に向けて“片手撃ち連続発泡”をする。

ネロマテD【ギャアッ！】

ネロマテE【ギィィ！！】

エツィオの銃弾で心臓ごと撃ち抜かれ、貫かれた部分からアンゲルスの氷の力が一瞬の内に伸びて、ネロマテ達の身体を半透明の氷結状態にさせた後…

エツィオ「アサシンキィィィィーク！」

ガシャァンッ！

エツィオは氷ついたネロマテ達を身体を回転させて左足を軸にし右足を回すように蹴り、氷ついた身体ごと硝子が壊れる音をたてながら蹴り壊す。

ネロマテF【距離ヲ取レ！！投擲武器ニ持チ変エロ！！】

ネロマテG【弓兵！弓兵！！投擲体勢ヲ取レ！！】

ネロマテH【装甲兵！弓兵ヲ護ルベクノ前ニ出ルノダ！！】

弓兵と装甲兵が出てきてネロマテ達は弓兵を護るべく、エツィオから距離をなるべく長く取って、弓兵は弓を構え装甲兵は弓兵の前に出て楯を前に構える。

エツィオ「無駄なことだ。諦めたまえ諸君（ー＋ー）」

エツィオは右手に持つ銃（アンゲルス）を右肩後ろに乗せるように構えた後、左手から雪のようにこぼれ落ちる白い光を広げて、顔の口元まで上げた時…

エツィオ「プッ・ペッ・ポォォォォォォ♪」

パキィィ…

白い光を口息で吹き掛けた瞬間、特異界“全体の地面”が“スケート上の氷の路面”になり、漆黒の空から“深々と白い雪が”降る。

ネロマテF【!?地面ガ凍ッタゾ!!??】

ネロマテG【ヌォォ!?!!ス…滑ル!!!!!】

ネロマテH【グォォッ!??!】

突如地面が氷結したことで、ネロマテ達の足取りがアンゲルスの氷に捕られて、ネロマテ達が取っていた陣が氷結で次々と崩れていく。

一部のネロマテは尻から頭部へとかけて滑り倒れ、カーリングのように無様な格好で滑り倒れたまま回るネロマテもいた。

エツィオ「さて、俺と氷上でダンスだZE☆」

そう言った後エツィオは足下をアンゲルスの力を引き出して氷の形をした“スケート靴に変化”させて滑り走り、エツィオは口笛を吹

きながら右手に持つ銃を握り締めて、カーリングのように滑り回るネロマテに向けて狙い撃ち凍らせる。

エツィオ「アーサーシーンー流ぅー…」

その後エツィオは、凍ったカーリングのネロマテに向けて手にする銃を野球選手のバットのように左足を軸にして右足を上げながら滑って構えた後…

エツィオ「アイス★ホッケー！！」

ガコンッと、固まった氷を叩く音をたてながら氷付けになったネロマテを“一本足打法”で豪快に弾き飛ばす。

弾き飛ばされた氷魂（ネロマテ）は至るところに無様に滑るネロマテ達に当たって、当てられたネロマテは宙に浮かび、更に別のネロマテが氷魂に当たって宙に浮かび、先に浮かんだネロマテに次々と別の身体を当てられて繰り返される。

エツィオ「一ヶ所に釣った後はぁー♪」

そして宙に全て浮かんだ氷魂とネロマテ達が一ヶ所に集まった時、エツィオはニタリと口元を吊り上げて不適の表情を出した後…

エツィオ「刺す！」

エツィオが右手に持っていた銃を銃倉あたりに両手で掴むようにした後、銃の砲口を氷上に突き立てた瞬間、宙に浮かんだネロマテ達がいた所の氷上から巨大な氷柱が飛び出るように現れる。

エツィオ「美しく…華麗に…消えていく♪」

巨大な氷柱がネロマテ達を指し貫いた後、凍結するような状態にならずそのままネロマテ達の身体に大きな風穴を開けて、巨大な氷柱が砕け散ると共に無防備に息耐えた身体と一緒に氷上へと落ちていく。

エツィオ「俺は氷上貴公子アサーシーン♪貴公子と云えども俺は残虐非道ぉの、勇ぅっ者ぁ♪♪」

エツィオは歌を歌いながら落下していくネロマテ達に向けて滑り出し、一番最初の頭部が潰れ頭部無しのネロマテに向けて軽く飛び宙に浮かぶ状態になる。

ジャキッ！

エツィオの右足下のスケートの下に付いているブレードの爪先を“飛び蹴り”のようにして胸部にめり込む。

エツィオ「俺は勇者じゃないのよ♪人って酷い！俺よりもぉ残酷ぅ♪♪」

スケートのブレード爪先にめり込まれたネロマテが一瞬の内に音もなく凍って、飛び込んできたエツィオに当たったあと身体がバラバラに砕ける。

その後エツィオは次々と落ちて来るネロマテ達に向けて身体を横向きに回転させながら、足下のスケートブレードの爪先を半壊した頭部や、ボロボロに爛れた折れた歯が見える口の中やら痛々しい箇所へ目掛けてめり込み、身体を一瞬の内に氷結させた後…

エツィオ「俺はぁぁ魔族ぅぅ♪魔族にして生粋のぉぉぉぉ！！」

エツィオは身体を一瞬にして横向きから縦向き回転へと変えて、両手を斜め上に上げて広げながら華麗に三回転以上に宙に舞った後、左足スケートブレードの爪先を氷上に突き立てて、またしても“荒ぶる鷹のポーズ”を決めた瞬間…

エツィオ「“魔神”！！なのＳＡ★」

宙に浮かんでいた凍り付けのネロマテ達がエツィオの背後の氷上に落ち、氷上に落ちた凍り付けのネロマテ達がバラバラに砕かれ、ネロマテ達の氷の破片がエツィオの天使顔（ハリウッドスマイル）を何枚も映していた。

第二十八曲　エツィオの3分クッキング

―特異界　スペイン　マドリード　マドリード王宮前―

シャイナ『何この展開ｗｗｗまだ“序盤”にしてアンタの正体明かすの早くねぇかｗｗｗそれに私の喋る回数少なくね？？』

シャイナはエツィオの身体の中で先程のエツィオの音痴が混ざった酷い歌を聞いて、呆れた表情を出しながらエツィオに突っ込む。

エツィオ「いや、プロローグ（※零曲　参照）である方察している閲覧者（ヤツ）もいると思うし、イイじゃん別にフリーダムに行こうＺＥｗｗ」

エツィオはニシシと笑いながらシャイナに答えた後、左手の親指骨を軽く鳴らした時、地面を凍結していた氷の面が一瞬の内にして元の地面へと戻る。

シャイナ『本当にエツィオは“魔神”なの？何で魔族の“フリーダムな魔神”が私のような下等な人間に味方したのＳＡ？』

エツィオ「おっと、それについてはこの小説“後半”辺りから明かされる予定だＺＥ★またこの小説の連載が終了した数ヶ月後に“俺が眠る前の神話時代の物語”を連載予定中しているらしいから、是非とも楽しみにしてくれＹＯ♪」

エツィオは“カメラ目線”に向けて笑顔（ハリウッドスマイル）を出したまま、軽く右手を振るように何度も手を動かす。

シャイナ『まぁいいや、シリアスすぎる小説は好きじゃないし、出来る限り厨二臭い場面も少なめにしたいのはモットーだもんね」（'～`）「でもさ…エツィオ。』

シャイナはエツィオの目から通して見ると、いまだに空が元に戻らず触手みたいな物と蠢く黒い水溜まりがまだ変わらずにいて、シャイナは疑問の表情を出しながらエツィオに問い掛ける。

シャイナ『“浄化”されるような場面がないね？一体誰だろう？？エツィオが持っている武器が元凶じゃなかったの？？』

エツィオ「俺もそう思っていたが…アンゲルスと少し手合わせして戦った時、俺に対して“敵意は無かったんだ。”な・の・でぇー…」

エツィオは喉を鳴らしアーアーと小さく声を出して大きく息を吸った後…

エツィオ「シュゥビィィバアアアドォォォォブゥゥゥゥゥゥゥゥぁぁぁ！！！！！」

ズギャァァァァ！！！！

エツィオが両手を口元に寄せて訳の解らない言葉を大きく言った途端、エツィオの頭部に向けて“横に断裂した長い高層ビルの部分”が落ちてきて、エツィオもろとも押し潰される。

？《キャッハハハハハハハハ！！！！馬鹿なクソジジイめ！！！！簡単に潰れたよ！！！！アホクセェェェェェェェェェェェ！！！！》

エツィオに向けて高層ビルを押し潰した本人が、電波搭に身体を絡み付くようにして高笑いしながら見ていた。

その姿は頭部をキャバクラにいるような容姿を持つ化粧が濃いめの人型に、下半身からは赤い鱗がギラギラと映る蛇のような長い身体を持っていた。

―上級テンプル魔獣　アマラント　アングィーラ―

アマラントアングィーラ（略してアマアン）《けっ！！どこが人間に味方した最強の勇者だ！？あの魔帝が討ち滅ぼされるぐらい強いと思「悪かったなぁ、餓鬼。詰まらん“ジジイ”相手で（＾＾＃）」ちょぉぉぉぉっ！？？？！》

アマアンは突如声がした方向に顔を向けた途端、余裕顔から驚愕顔になって身体を巻き付いていた電波搭から離れるように宙に浮かぶ。

自らが斬ったビルをエツィオに向けて押し潰したハズが、実はエツィオの“左手だけでビルごと受け止められており”、エツィオは笑顔を出しながら宙に浮かぶ特異界の元凶に向けて“ビルを手のひらに持ったまま”アマアン話し掛ける。

エツィオ「君かい？特異界を産み出した元凶は？？それと俺が手にする“女帝”を“魔女”に格下げしたのも…君？？」

エツィオはいつの間にか背中に携えている“氷魔銃（アンゲルス）”についての他に、左手に乗せているビルを“空中で一回転させ”ビルを“お手玉遊び”しながらアマアンに話す。

アマアン《気安く私に話し掛けるなクソジジイ！！！！ここは私の居場所！！！！アンタが持っているババアを魔帝の名でしょうもなく受けて嫌み嫌みに連れきた結果がこのザマだ！！！！本当にムカつくクソジジイだぜ！！！！》

エツィオ「ふむっ、君を見るとして…まだ生まれたてのようだな“２００”ぐらいだろ??それに、年輩に対してその口調は流石に失礼だぞぃ（´・ω・`）」

今度エツィオは大きなビルを“片手でお手玉”から両足のつま先を使って大きなビルを匠に何度も“サッカーボールのように何度もお手玉”する遊びに切り替えながら、アマアンの生まれ歳を見抜いたように言い困った表情を出しながらビルをお手玉遊びをする。

アマアン《気　安　く　私　に　喋　る　なと言ったハズだ、クソジジイ!!!!私はペラペラ喋る奴とジジイとババアが嫌いなんだよ!!!!》

歳が見抜かれたのかアマアンは激怒の表情を出した後、長い身体を一回転に捻らせて長い蛇のような下半身の赤い鱗を複数飛ばした時…

？【フハァァァ…】

？【ギ…ギギギ。】

鱗が巨大化して“鮫のような顔”になり、地上にいるエツィオに向けて牙を剥き出しにし涎を垂らし宙に浮かびながら大きく口を開け

る。

―幼体　アマラント　アングィーラ　コローレ―

アマアン《あの“お喋りジジイ”を跡形もなく喰っちまいな！！お前ら！！！！》

幼体Ａ【ギシャァァァァ！】

幼体Ｂ【ガォォォォォォォ！】

アマアンがエツィオに向けて左手人差し指を指した後、周辺に浮かんでいたアマアンの幼体達（サメ）が、エツィオに目掛けて口を大きく開き奇叫をあげながら突進する。

エツィオ「やれやれ、口の悪い餓鬼だＮＡ」（ˊ～、；）「年輩に対してその口調は無いＺＥ★」

シャイナ『お前が言うなよｗｗｗ』

エツィオは呆れた表情でアマアンに人差し指を指しながら口を八の字にさせて抗議し、シャイナは特異界を作った元凶（アマアン）と同様に口が悪

いことに吹いてエツィオの身体の中で突っ込む。

幼体Ａ【ゴァァァァァッ！！】

一匹の幼体がエツィオの身体全体を捕らえ、一気に牙を剥き出しながら口を閉じてエツィオもろとも“喰らう”。が…

エツィオ「しゃーない、年輩に対しての言葉使いを丁重に教えないとＮＡ★」

グチャッと生々しい音が鳴って、鮫の頭部背後から夥しい血と肉片と共にエツィオが“右手だけで鮫の頭部ごと突き破り”更に“返り血さえ付かない”ように不適な笑顔を出したまま出てくる。

エツィオ「んっ！」

エツィオは突き破った時に飛び出したの鮫の“眼球”を右片手で掴んで、何かが千切れる音をたてながら身体と共に潰れた鮫の頭部を何度も回転させた後…

エツィオ「血生臭ぇ（ー”ー）」

エツィオはオエッと喉声を出しやる気の無い表情を出した後、口を開きながら突進してくるもう一匹の鮫に向けて口元目掛けて死骸鮫を片腕だけで投げつける。

幼体B【ボゴッ！？】

大きく開いた鮫の口の中に、エツィオが投げつけた死骸鮫を喉奥までめり込まれるように突っ込まれ、モガッと声を洩らした瞬間…

エツィオ「爆☆砕」

エツィオが右親指の骨を鳴らした時、鮫の死骸を加えた鮫が突然“爆発”して空中で赤い肉片が混じった汚い雨を降らす。

どうやらエツィオは投げ飛ばす前に掴んでいた鮫の眼球に“魔竜（ブリトラ）の雷”を注ぎ入れ、エツィオの意思で何時でも雷が発動するように仕掛けていたらしい。

エツィオ「うっうっー…のっ！」

エツィオは踞るように両腕をクロスさせるように組んで、身を屈めた時身体の至るところから紫色の電流が迸る。その直後…

エツィオ「エツィオ　の　１０まんボルト　攻撃！」

エツィオの身体全体に紫色の光が爆発するように眩い雷が上空まで伸びて、降りかかる血肉の雨と他アマアンの幼体達を雷の圧倒的な火力で一瞬の内に“消し炭”になるまで焼け焦がす。

エツィオ「おっと、フカヒレ料理には程遠いな（＾＾）まっ、フカヒレなんて食べたことないがなＨＡ　ＨＡ　ＨＡ★」

シャイナ『おまっｗｗｗフカヒレってレヴェルじゃねぇぞｗｗｗ（何気にポケモン字幕で技名言いやがったｗｗそれに１０万ボルトじゃねぇだろｗｗｗ）』

地上に落ちた幼体達の焦げ臭い匂いがエツィオがいる場所に漂いながら、カメラ目線に向けて“ニシシッ♪”と歯を見せて笑う。

アマアン《ケッ…調子に乗るんじゃねぇぞ！クソジジイ！！》

放たれた幼体達が全てエツィオに殺られアマアンは舌打ちを出しエツィオの余裕の表情を見て更に激怒し左腕を上げた後…

アマアン《我が“子”よ！あのクソジジイを取り囲め！！》

ザザザッ

特異界に漂っていた“毒々しい水”や“触手”をアマアン周辺に集めて、黒い物体を一つにし特異界全体を飲み込むぐらい“大きな津波”を作りエツィオを囲むよう覆った後…

アマアン《クソジジイ!!我が闇の海に呑まれ、そのまま溺死しろ!!》

一気にエツィオを囲んでいた大きな津波が、エツィオに向けて雪崩れ込むようにエツィオもろとも高層ビルやマドリード王宮が、アマアンが作り出した“魔力の津波の魔水”で“粉々に粉砕する”ほど、エツィオがいた場所はあっという間に“泥沼のように水没”する。

アマアン《アッハハハハハハ!!!!!絶景絶景ぃ!!!!!水没してそのまま溺死しやがれクソジジイ!!!!!》

アマアンは水没したマドリード王宮前にいたエツィオに向けて、ザマァ見ろと言ってから高笑いした直後…

エツィオ「ほぉ、その“ちんけな魔力”だけで“女帝(アンゲルス)”の名誉を奪ったのかｗｗｗ魔界の基準可笑しいだＲＯ★」

アマアン《ちょおおおおおおおおおお！？？！！？》

アマアンは声がした方向に上半身だけで動かすと、下半身の長い身体の上に“お釈迦寝入り”しているエツィオがいて、アマアンは驚愕の表情を出す。

アマアン《い…いつの間にいたんだよクソジジイ！気安く私の背中に乗るな！！》

アマアンは下半身の長い身体を乱暴に動かしてエツィオをはたき落とそうとするが、“お釈迦寝入りのまま微動さえもせず”乱暴に身体が動く中、エツィオは期待外れの表情を出しながらアマアンに言う。

エツィオ「まっ、君は現世の人間喰っているし、“糞餓鬼暴食悪魔”として見なし君を葬ることにする。残念ＤＥＡＴＨ（、ε´）」

エツィオは詰まらない表情を出した後お釈迦寝入りしたまま背中を見せて、アマアンの下半身上でごろ寝し右手を斜めに上げ右足を斜めに上げて膝辺りを曲げた直後…

エツィオ「ＶＩＰＥＲ！！」

ブリトラ《バォォォォォォォォォォォォ！！！！》

エツィオの背中から具現化した巨大な魔竜（ブリトラ）が飛び出すように現れて、アマアンは魔竜の姿を見て驚愕から恐怖の表情を出す。

アマアン《ヒッ！何でジジイの中にブリト…ギャァァァァァァァァァァァ！！！！》

ブチッとブリトラの大きく開かれた口がアマアンの下半身をそのまま噛み千切り、上半身だけになったアマアンは口から血を吐き出し千切られた部分から、小腸や肝臓等の内臓類を剥き出しにしながら地上へと落ちていく。

エツィオ「死での旅路はＯＫっすか？？イエスｏｒオフコォォースゥ？？」

アマアン（アマアン）が最後に見た光景は自分の首を掴む穏やか笑顔を出すエツィオがおり、エツィオの背中から自分に服従してきた元“女帝（アンゲルス）の触手が羽のように生えて”いて、触手一つ一つが手術台に使う“メス”のような形をした氷の刃がアマアンの上半身の至るところに刺し込んだ後…

エツィオ「眠れ、此所で…安らかに。」

エツィオがそう言った後、刺し込んだ刃が一つ一つの触手（アンゲルス）の意思で自由に滑るように動き、刺し込んだ触手がエツィオの背中を翼のように広げた直後、アマアンは上半身もろとも細切れに引き裂き声もあげることもなく散っていった。

第二十九曲　二つ目

―スペイン　マドリード　特異界　上空―

エツィオ「以上、魔神（エツィオ）による調教（おしおき）遊戯ですた＼（＾ｏ＾）／」

エツィオは細切れになったアマアンの肉片が地上に落ちていくのを見届けながらそう言った後、背中に生えていたアンゲルスの触手を背中に仕舞って地上へと落ちていきながら高層ビル屋上へと足を着ける。

シャイナ『調教（おしおき）っていうよりも拷問（レイプ）プレイだろｗｗｗつーか“犬（ブリトラ）”が何か美味しそうに喰っているしｗｗｗ』

シャイナはエツィオの身体の中で突っ込んでいた時、同じくして上空にいたブリトラも口にアマアンの下半身を加えたままエツィオにいる場所へと降りて、アマアンの下半身の肉を貪るように生々しい音をたてながら喰らう。

バキッ！ボリッ！！ゴリゴリッ！！！パキ！グチャ！！コリコリ…

ブリトラ《…ゴクッ》

ブリトラがアマアンの最後尾を飲み込むように喉仏の声を出した後、エツィオに向けて満足の表情を出し猫が甘えるような声を出しながら言う。

ブリトラ《中々良い若き魔女の魂(にく)だ。我が主よ…感謝する。が、魔(のみ)力(もの)だけは残念だ。》

エツィオ「生まれたての“餓鬼”だからさ…ちんけな魔力は仕方無いだろ。Ｌｏ　ｓｏｐｐｏｒｔｉ！」

エツィオが悪そびれた表情を出しながらブリトラにそう言った後、《キュゥゥン》と犬のような声をあげて元の雷竜鞭へと戻り、エツィオは雷竜鞭を手にとって身体の中へと仕舞う。

エツィオ「天使(アンゲルス)もよくやった。これからは俺の“使役(ペット)”だ。Ｍｉｓｅｇｕａ　ｉｎ　ｔｕｔｔａ　ｌａ　ｖｉｔａ…Ｌｏ　ｃａｐ？」

エツィオは背中に携えていた氷魔銃(アンゲルス)を手にとって、ニタリと口元を吊り上げながら“カメラ目線”に向けてイタリア語で言う。

アンゲルス【アハン…嬉しい言葉頂いて…私、幸せ。】

シャイナ『（何というどM発言ｗｗｗ。流石はチートツィオｗｗｗ。）』

一方アンゲルスはエツィオに一生使役されることに嬉しいのか“受（マゾ）身発言（スティックボイス）で色っぽく言った”後エツィオの身体の中へと入れられる。
その直後…

特異界全体を水没させていた毒々しい黒い沼のような物が“南国の海のような”綺麗に透き通った色になり、アマアンの戒めから解き放たれ浄化された綺麗な水が天へ向けて思いっきり弾け飛ぶ。

浄化された水が先程戦闘で破壊されたマドリード王宮や高層ビル等が、綺麗に洗い流すように覆った瞬間“破壊されるまえの元に状態”に戻り、そのまま川のように流れるように枯れた木や自然が浄化された水で洗い流された後若返るように“次々と特異界になる前の元の姿へと再生”される。

そして浄化された水が特異界全体を浄化し覆いつくした時、浄化された水はそれぞれ天へと上がって雲となり霧雨を降らす。短時間地上に向けて降り注いだ後雲から太陽の光を差し出し、まだ降り注ぐ霧雨に照らされたところから、くっきりと七色が見える“虹”が出来た。

シャイナ『おお…故郷のときは花弁天国だったけど、今度は雨上がりの虹！う…美しいいいいいいいいい！！！！！』

エツィオ「へぇ、“コレ”が虹っていうんだ（・o・）昔の奴らは“虹蛇様”の降臨やら“神の道標”やら“宝のありか”だと言ってたけど。」

シャイナ『それは人が“勝手に言い出した名称”だよ。神なんて存在しない。“神”といったら私が見てきたチート魔神（エツィオ）やらアルタイルぐらいね。』

エツィオはへぇーと声を出した後、エツィオは右手を胸部に寄せゆっくりと前に向けて振りかざし、身体の中にいるシャイナを外へ導くように出す。

シャイナ「フペェェェェ、出れた出れた。故郷（イタリア）もいいけどスペインの空気も素ん晴らしいいいいいい！！！！！」

シャイナは両手を水平に広げて、高層ビルから映る景色に歓喜する。

エツィオ「アルタイルは神族だから“天神”なんだ。ま、俺のような魔族と何故一緒にいるのかは（省略）」

シャイナ「ちょっｗｗｗ一番気になる部分が省かれたしｗｗｗ作者がんばれよｗｗｗ」

エツィオ「無理言うなよシャイナｗｗｗ作者だって“閲覧者の気持ち”になってＰＣ版や携帯版でも“読みやすく短ページで”かつ“何度も訂正しつつ微調整”しているからさぁｗｗｗ」

シャイナは“カメラ目線”に向けて口元を八の字にさせて不満の表情を出した後、人差し指を画面（カメラ）に向けて何度も指す。エツィオは両腕を組みながらシャイナに向けて作者の本音を訳すように突っ込むように笑った後…

エツィオ「さて、二つ目の浄化が終えたし…一旦アルタイルに報告だ。」

ブゥゥゥゥン

エツィオがそう言った直後、今居る高層ビルの床端に電子音と共に“アサシンの紋章”が現れる。

シャイナ「そうね、取り敢えず置いといて、さっさと神界（マシャフ）へ行きましょ。借りていた服返さないといけないし（＊＾＾＊）」

シャイナがそう言った後腕を軽く伸ばし、エツィオは「そうだな。」と軽く言って腕を組ながら二人一緒にアサシンの紋章へと歩む。

シャイナ「そう言えばアルタイルの声無いね。どうしたんだろ？」

エツィオ「…あっ、それ多分初回だけじゃねｗｗｗ物語的な意味でＳＡ★」

シャイナが何かに気づいたように隣にいるエツィオに話したが、エツィオは左手を顎下に付けて少し悩む仕草を取りながらシャイナに話した時…

二人の身体はアサシンの紋章の光に包まれて光が消えた途端、二人の姿は現世から消えていった。

第三十曲　マシャフDEお茶会

―神界　マシャフ　大導師の間―

シャイナ「はい、連載３０回目になりました。チート小説主人公シャイナ☆アクイラ２２歳とぉ～」

エツィオ「最強最悪にして最凶鬼畜魔神エツィオ・アウディトーレ・ＤＡ・フィレンツェ２８００歳だった気がするＤＥＡＴＨ★」

大導師の間にあるアサシンの紋章が光って目映い光が迸った後、光が消えた中心にシャイナが左手を、エツィオが右手でシャイナの手を繋いだ状態で身体を斜め４５。に傾けたまま、お互いノリノリの言動で“カメラ目線”に向けて新体操でいう“人間扇”で登場する。

？「大導師の間で、何しているんだ…我らの馬鹿魔神と阿呆人間の女。」

突如上から呆れた言動でシャイナとエツィオに向けて吐く声が聞こえて、シャイナとエツィオは声がした方向に同時に向く。

―人間扇をしたままで。―

エツィオ「いやぁぁ～♪“連載３０回目”なので次いでに記念にポーズしようとシャイナが言ってたんでｗｗｗ」

シャイナ「ゲームで言う“チャプター１エンド”やら“シークエンス１終了”という意味でさ、イタリア編終了というノリＤＥ★つーか…」

シャイナが大導師の間にある大きい柱の上に突っ立っているアサシンと同じ白色の武曽の上に、黒いローブを羽織い左腕だけが無いらしくローブの裾が風でヒラヒラとしている青年を見てシャイナは目を丸くして言った。

シャイナ「ところでアンタ誰？」

？「副大導師マリク・アルシャイフだ。歳は２２６００ぐらいだったかどうか忘れた…そうか、俺はまだ“登場していなかった”のだな。」

黒いローブをきたアサシン…マリクが柱の上から降りてきて、人間扇ポーズを解いたシャイナとエツィオの前へと無表情で歩み寄る。

―アサシン教団　副大導師　マリク・アルシャイフ―

マリク「アルタイルは今“私用”で出かけているから此処にはいない。地上からの報告をアルタイルの代わりに俺が聞こう。」

エツィオ「わかった。んじゃ報告を…と、」

カタンッ

突如マリクが右手人差し指を床に指した直後、床から“中世に出てくる白いテーブルと四人分の白いイスが出てきて”、マリクは「何処でも良いから腰掛けろ。」と言った後背中をエツィオに見せながら大導師の間から出て行く。

マリク「茶を入れてくる。奴(アルタイル)は私用と言っても直ぐに戻ってくるだろう。だからそこで座って待っていろ。」

エツィオ「たくっ…変わんねぇな。相変わらず魔力で茶を構成(つくらない)しないんだな、お前は。」

エツィオはマリクが魔力で構成したイスにドカッと座って、呆れた表情で大導師の間から出て行くマリクの背中に向けて言う。マリク

は「魔力だけで頼っては腕が鈍るだけだ。」とエツィオに言葉を付け足した後、扉を開けて大導師の間を後にする。

シャイナ「うっわ、すげーなこのイスとテーブルの作りｗｗｗ神界の皆は魔法を普段どおりで使用して生活しているのかｗｗｗ」

エツィオ「いや、魔力を使って生活はしていない。ほとんどシャイナの世界と同様、物を買いその手で食を作っているのさ。魔力を使うとしたら“俺が悪魔相手や狂人の戦闘”か今のような“客人相手をもてなす”かだな。」

シャイナはマリクの構成したイスに座りながら興味津々にテーブルをペタペタと触る。エツィオは左肘をテーブルに乗せて左手甲を顎下に乗せながらシャイナに向けてニタリと口元を上げて微笑しながら言う。

エツィオ「もともと魔力はこの神界で“使用制限があった”らしくてな、俺のような魔族は好き勝手に使用していたのにここでは“掟”というモノが存在してたんだよ。堅苦しいもんだった。」

シャイナ「“掟”？」

エツィオは顔を上げて上部に映る白い空を見上げながら、当時アルタイルが語ってくれたことを思い出しながらシャイナに言う。

エツィオ「一つ“汝の剣を罪無き者に振るうな”二つ“常に思念深くあれ”三つ“兄弟を危険に晒すことなかれ”だ。当時はここの神界を治めていたのは“アル・ムアリム”ってやつだったんだが…。」

シャイナ「あー、それってなんかゲームでいう黒幕っていうか“ラスボス”クラスのような感じがするｗｗｗ」

窓が開いていたのか白い鳥がエツィオの左肩に乗って、エツィオは顎下に付けていた左手を離し人差し指を指した後、左肩に乗っていた白い鳥がエツィオの人差し指に乗る。

エツィオ「そのとおりだ、シャイナ。アル・ムアリムは魔界から派遣された“残虐非道の上位悪魔”でね。当時のアサシン達は彼に崇拝して悪魔という素性を隠して“本物の神”として崇められたのさ。笑える話だろ。破壊を好む悪魔が信条を創って神になる瞬間の奴の素顔と言ったらな。」

シャイナ「うっわ。ｗｗｗ何かその人もうこの後の展開として“フラグ”が立っていますけどｗｗｗ」

シャイナは左手人差し指で小鳥と戯れるエツィオを見て、シャイナは脳裏に浮かぶ結末を思い浮かべながらエツィオに話しかけた時…

マリク「一人のアサシンがアル・ムアリムの裏の素顔である“悪魔の正体と目的”を見事見破って、この神界の内部ごと壊滅しようとしていた“元凶”を討ち滅ぼしたのさ。あー…昔を思い出すと“奴”対して色々と…な。」

マリクが手にするお盆の上に中世風の白いマグカップが湯立つのを持って来ながら、エツィオの昔話に参加しシャイナとエツィオに茶色い茶を入れた白いマグカップを一つづつ丁寧に置く。

マリク「神界教団の裏庭で育てた“俺特製の紅茶”だ。試しに二人とも飲んでみてくれ。“一切吐き出すな”よ??」

シャイナ「（此方の世界にも色々あったみたいだけど、全てはアルタイルのお陰なのねｗｗｗ）どれどれ♪」

シャイナはマリクの話を聞いて元凶を討ち倒したアサシンが誰なのか、直ぐに脳裏で想像した後テーブルに置かれたマグカップを手に取り、マリクが作った紅茶を啜りながら一滴飲む。

シャイナ「う…うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!??!?!?!う…美味いいいい

シャイナはマリク特製紅茶を飲んだ直後、目が飛び出るぐらいに叫んで思わずガタンッと椅子から立ち上がる。

マリク「汚染の下で人間が作る“下等”の茶葉よりも良いだろう女？私用目的で下界に降りた途端、あの“毒々しい臭い”がたまらんのでな。よくあの臭いで人間共が平気で住めるなんて今でも驚いてる。」

エツィオ「神界の茶葉は人間が住まう星の大気と違って、此所は“宇宙”なんだからなw大気の影響受けないし、外気を遮断する結界も十分だし。まぁ、ここの空気は新鮮だもんで居心地良いしな。」

シャイナとは対象的にエツィオは普通に紅茶を啜りながら、のほほんとマグカップに入れられたマリク特製の紅茶を飲む。

一方マリクはシャイナの表情を見てニタリと口元を吊り上げて、眼を細めながら笑う表情を出しながらシャイナに語りかける。

シャイナ「（・―・；）えっ…此処って……本当に“宇宙”…なの？」

シャイナはエツィオの会話を聞いて紅茶の美味さに感動の表情からピキッと氷付けのような固まるように表情が唖然となって身体が硬直する。

マリク「知らなかったのか？俺達は元々“星（ちきゅう）”に住んでいたが、魔神（エッイオ）と林檎が眠りについた時に、一人の人間からの迷惑と言ってもいいような“面倒事”があってな。その“面倒事”が後に俺達神界を星から離れさせる羽目になるんだ。」

シャイナ「（アルェー？じいちゃんが話してくれた昔話の内容にズレが出てきてますけどｗｗｗ）面倒事？？」

シャイナは硬直状態からキョトンとした表情になり、魔力で構成された椅子にマリクが座りながら自分が作った紅茶をうろ覚えな表情で啜りつつ当時のことを言う。

マリク「そうだ…ある人間が俺達神族にこう言ったんだ。“貴殿達の神の力を我らの為に振るえ”要は人間同士の殺し合い“戦争”のための“道具”として活躍して欲しいとな。」

シャイナ「マジかよｗｗｗ」

マリクは紅茶を飲みながら顔を上へと上げて、上に映る白い空を見詰めながら続きを言う。

マリク「俺達は勿論断った。大導師アルタイルも当然の拒否。使者

が何度も来ようが俺達は人間同士の小競り合いに参加するつもりはないし、時が経つことに神界を人間へと招き入れることがなくなってきた。が…」

窓から白い小鳥が数羽の雑談する三人の元に飛んできて、テーブルの所々に止まった後マリクは続きを話す。

マリク「そんな時だ。人間達が俺達“神界”に襲撃してきて、神族の一人を人質に捕られたのさ。その人質相手は大導師が初めて人間に恋をした女性だった…その人間の容姿は、」

―お前なんだ…人間の女。―

第三十一曲　ＴＨＥ★エロタイム鷹と人

―回想　８００年前　神界　マシャフ　知識の間　―

？「これが“実りの章”貴方が見てきた“真実”を伝えるためにこの本に残しているなんて…ペンを滑らせて苦労したでしょう？アルタイル様。」

敷き詰められている本棚達の中心に三本の蝋燭の光が灯しながら、隣に立ちながら女性を見つめる白きローブを纏った若き男否神界を治める天神…アルタイルに言う。

アルタイル「苦労などしていない。私はこの星に住まう人の為に、毎日命を削りながら長年に掛けて記載したものだ。それにその…」

アルタイルは隣に座りながら本を読む純白のローブ衣装を羽織い首に数々の飾りが着いたチョーカーを身に付ける若き女性に向けて赤色の頬が出ているのを隠し顔を背きながら彼女に言う。

アルタイル「ア、アウダ…私を呼び捨てにしてくれないか。私は“様”など…似合わぬ…。」

アウダ「いいえ、貴方様はこの神界を統べる“王”。人間である私は今でも眠りにつかれている“勇者様”と同様敬意を払っているのです。」

アウダと呼ばれた女性は隣に立っているアルタイルのぎこちない言動と動作を見て少し微笑んだ後、アウダは椅子から立ち上がってアルタイルの右頬を左手で自分と向き合うように寄せる。

アウダ「私を見て下さい、アルタイル様。貴方様の素顔を私にお見せ下さい。」

アルタイル「むっ…ぅ。…ア…ウダ。」

アウダがアルタイルの唇に向けて口付けした後、そのまま仰向けに押し倒しお互い口付け状態のまま、アウダは馬乗りになりながらアルタイルの羽織うフードを左手でゆっくりと取る。

アルタイル「アウダ…。」

アウダ「アルタ…イル……様。」

アルタイルが両手でアウダが羽織う上半身のローブを剥ぐように取った後、中心に灯っていた蝋燭の光を背中から出した左片翼で軽く払った後、蝋燭の光を消した。

…

……

……

アウダ「！申し訳御座いません！！貴方様のような神界の王にこのような…」

アルタイルと性行為（エロタイム）をして数時間後、アウダは上半身がはだけたアルタイルを見て思わず慌てて顔を赤くしながら立ち上がる。

アルタイル「いや良い…私もアウダと抱いて幸せな気分だ。」

アルタイルは微笑んだ表情を出しながら立ち上がり、“上半身がはだけフードが取れたまま”でアウダの上半身をまた包み込むように抱きつく。

アルタイル「私は元々“愛”を知らなかった。もしあの時、聖地に眠る“兄弟（エツィオ）”に会わなかったら、私はアウダに会うことが無かったかもしれぬ…。」

アウダ「魔族の“魔神”でありながら人の心を持った“勇者様”が、貴方に愛する感情を教え…勇者様の“意思”が貴方様に受け継がれていたのですね。」

アルタイル「私はあの若者に出逢えて誇りに思う。魔族や神族の境界線を超えた“友情（とも）”を知ったのだから。」

アルタイルは脳裏に浮かぶ眠る前のエツィオを思い出しながら瞳を閉じた後、胸に沸き上がる熱い感覚を受けてアウダの左頬から上半身腹部までゆっくりと右手を滑らせる。

アルタイル「アウダ…アウダ…もっと…私に……」

アルタイルは顔面をアウダの左耳たぶに向けて少し口先で揉むようにしゃぶり、その後に首筋や頬下等に唇を何度も付ける

アウダ「あぁ…アル…タイ……ル……さ……ま……」

アウダはアルタイルの接吻を耳たぶから感じて、ギュッとアルタイルの上半身を抱きしめる。

アウダは鍛えられたアルタイルの身体を左手で胸部へとゆっくりと

滑らせながら顔を胸部に近づけた後、胸部にある乳首を舌で舐めてその後しゃぶるように乳首を被うよう口を開けた。

アウダ「あぁ…ん……ア…ルタイ……ル……様ぁ」

アルタイル「嗚呼…愛してる。」

今度はアルタイルがアウダを押し倒し、またしても二人は幸せに溢れた“快楽”へと堕ちていった。

…

……

……

―神界　マシャフ　神界出入口前―

アウダ「アルタイル様、今日も有り難う御座いました。また時間が空いた時に…」

アルタイル「アウダ…また来い。人間界の方ではなにやら政(まつりごと)でやら争いで何やら騒がしいようだが?」

アルタイルは目を細め彼なりの心配する表情を出しながら、アウダに向けて話す。アウダはアルタイルの表情を見て少し微笑んだ後、アルタイルの右手を握りながら言う。

アウダ「えぇ、父上は隣国の王と和平を結ぶ話をしているのですが、聞き入れてくれなくて…」

アウダは少し顔を下に向けてアルタイルの視線を反らすような仕草を取る。アルタイルは身を屈めてアウダの左頬をそっと触れた後…

アルタイル「我ら神族は人間達の争いなど参加はしない…が、アウダ…お前の“胸の内に溜め込んでいる悩み”だけは聞いてやる。この神界の大導師である私が、必ずや約束いたそう。」

アルタイルはアウダの左頬に触れていた右手を、撫でるように軽く摩る。アウダは撫でられてはっと顔を上げ、アルタイルの口元を吊り上げて彼なりの微笑む表情を見る。

アウダ「アルタイル…」

アルタイル「お前の中に溜め込んでいた悩みを全て私にぶつけても構わぬ。お前の気持ちが少しでも楽になるなら…な。」

アルタイルは身を屈めたままアウダを抱き寄せアウダは左目から少量の雫を溢しながら、またしても二人は長時間に渡る抱き合う形になった。

―神界　マシャフ　砦の崖―

マリク「ふっ…随分と熱いことしているな。アルタイル。」

カダール「それにしても本当にアウダさんとアルタイル大導師仲良いですね。種族が違うと言えど…二人ともお幸せになるといいですね（＊＾―＾＊）」

アサシン教団の砦の崖の上に二人の姿を見つめるアサシン達が、一人は穏やかな笑顔を、一人は綻んだ表情を出しながら二人の抱き合いを眺めていた。

ラウフ「ウホッホッ♪これはこれは熱いこってｗｗｗ」

新人アサシンＡ「いいなぁー、アルタイルさんに恋人がいるなんて。俺も一度は彼女と交際してみたいなー。」

新人アサシンＢ「何か抱き合っている姿を見ていると、微笑ましいし羨ましいなぁー。」

アサシン達が皆笑う中、マリクは目を細めて二人の姿を複雑な表情を出しながら、そっとアサシン達に聞こえぬように呟く。

マリク「だが、人間達の世界では俺達を人外（バケモノ）と見なしている。アルタイルはアサシン教団の中で異質な“天神”だからな…そう巧くは…」

カダール「それを選ぶのは“本人”なんですよ、兄さん。アルタイル大導師が言うに“歴史の変える時…それは神の言葉で従うではなく…

マリクの心配事を撃ち破るようにカダールが期待を胸に寄せるような表情を出しながら前向きに兄（マリク）に言う。

カダール「“自分自身で決め、自分の義なる意思で道を歩け”ですよ。」

―僕らは見守りましょう。二人の行く末を…―

神界に舞う鈴蘭の花弁が出口にいる二人に被うよう鮮やかに舞った後、マリクの弟であるカダールが白い空を見上げながら呟いた。

第三十二曲　ガマガエルと鷹

―回想　８００年前　イタリア　ローマ　とある宮殿内部―

？「えぇい！！またしても神族が我らの耳を貸さぬと言うのか！！それは何故だ！！！！」

中世風の床作りに赤い絨毯が先にある巨大な椅子に座る国の王と呼べる衣装を纏った口元に生えた髭が長く腹がカエルが膨らませる袋ように丸く出ている中年デブ男が、今いる謁見の間全体に轟くほど怒鳴る声を目の前に跪く甲冑を纏った兵士に言う。

兵士Ａ「バエル様、先日申した通りですが、神界の神族達は我ら人間の“争い事と政（まつりごと）”は一切力を貸さないということです。」

兵士Ｂ「彼らが剣を取るには、魔界から召喚され我ら人間に破壊活動をこなす“悪魔”のみ…我ら弱き人間に手を差し伸べるぐらいで「それが奴らにとって、我は腹立しいのだ！！」」

王の前に跪く兵士は最もなことを言っているのに関わらず、バエルは右手に手にするワイングラスを苛立ちばかりか跪く兵士に向けて

グラスの中のワインを顔面からぶちかける

バエル「ぬぅぅぅぅぅ！！！！何故神族は己の力をもっと有効的に見せつけたりはしないのだ！？“悪魔”相手だけでは腕が鈍ろうだろうに！！！！」

遂には手にしていた空のグラスを足下に投げ捨てて割った後、ワインをかけた兵士を見もせず後ろに振り替えって窓に映る闇に染まった空の上で光る稲光を見ながら、無駄に脂肪が付いた左腕を横に伸ばす。

バエル「ニ万体の兵を出せ！神界に奇襲を仕掛けるぞ！！我も出る！！我の甲冑着を持って来るのだ！！」

跪いていた兵士が少し間を取った後「承知しました。」と言ってゆっくりと立ち上がった後、謁見の間にいた他の兵士達もぞろぞろと出ていく。

バエル「神界の大導師と言う“あの小僧”め…」

誰も居なくなった謁見の間にバエルは一人窓際まで歩いて、右手で窓に触れながら口元を歯を噛み締めて、表情は憎しみを込めた顔を出しながら憎悪を込めた言葉を吐く。

バエル「我が娘に…手を出したことを、後悔させてくれる!!」

…

……

……

―数時間後　神界　マシャフ　大導師の間―

カダール「アルタイル大導師!大変です!!」

バンと、大導師の間の入り口の扉から壊すぐらいの荒々しい音をたてながら、アサシン教団の新米一人であるカダールが慌てふためく表情を出し入って来る。

アルタイル「どうした、カダール?また新米一人が怪我でもしたのか??」

アルタイルは大導師の間で分厚い本の紙にスラスラと書きながら、執筆している作業を止めて微笑んだ表情を出しながらカダールを見る。

カダール「違いますよ!!現世の人間達が神界に襲撃されてます!

今兄さん達が進行を食い止めているのに精一杯です！！」

アルタイル「！！何だと！」

アルタイルは握っている羽のペンを折るぐらいに立ち上がり、生ぬるい表情から一変真顔になって直ぐ様空いていた天井に向けて飛び出すように飛翔し、砦屋上の屋根から崖へと飛び込むように両腕を広げ海へダイブするようなポーズを取る。

大分長く落ち一部の崖の岩を蹴って空中で身体を前転一回転した後、地上にあった民間の屋根に右手を着け落下の衝撃を“片腕だけで完全に殺し”身体ごと前転した後、屋根を足場に高速に走り一部は壁を使って蹴るように飛び渡りながら現場へと向かう。

カダール「奇襲理由は分かりません！！人間達は真っ直ぐここの砦へ向けて進撃中です！」

カダールもアルタイルの後に続いて背中から出ていた白い鷹の翼を羽ばたかせながら飛翔し、アルタイルの後を追うような形で追い掛けながら言う。

アルタイル「新米及び師範アサシンは神界の民の安全を最優先にし砦に避難させろ！私が食い止める！！」

アルタイルがそう言った後カダールは「了解しました！」と言って、翼を力強く羽ばたいた後アルタイルの元から飛び去るように一瞬の内に離脱していく。

アルタイルは視線だけでカダールがマリクの元へ向かうのを見た後、目の前に聳え立つ崖を“重力とか関係なしで普通に走り”ながら上り、崖上の岩を右足で蹴るように軽く飛翔した後身体を回転させながら両腕を広げて後方から来る追い風を利用して“背中の翼無しでゆっくりと下降しながら滑空”する。

アルタイル「ふっ！」

滑空時間を短縮するべくアルタイルは身体を空中で後転させた後、伸ばしてた両足をくの字に曲げて両足裏に“赤い円形のアサシン教団の紋章”を出現させ、足裏に出てくる紋章を何度も蹴りながら高速に空中疾走（エアダッシュ）する。

やがて前方に右片腕を前方に伸ばしながら結界を張るマリクの姿を見て、アルタイルは両足裏に出した紋章を蹴り何度も前転しながら鈴蘭が踊る地面に両足を着けて右手を斜め下に伸ばし左手を地面に着けた状態でマリクの元へとたどり着く。

ー神界　マシャフ　現世出入り口部分の草原ー

マリク「っ！！アルタイル！！！」

マリクが右手を前に伸ばしながら、顔だけを後ろに向けてアルタイルに答える。彼の表情から見ると汗だくが非常に出ており、表情からにしては疲労が溜まっているように見えた。

アルタイル「マリク！結界の先にいる人間共は私が相手する！！直ぐにカダール達と合流して我が砦に全て民をカダール達と共に避難させてほしい！！」

マリク「馬鹿を言うなアルタイル！結界の向こうは“計り知れない数の人間”が詰め掛けているんだぞ！？お前一人では「私を信じろ、マリク。」…アルタイル！？」

マリクはひょっとアルタイルの“あの生粋なる強き気配を放つ穏やかな表情”を見て思わず、表面に出ていた汗が引いていく感覚を覚えて息を呑む。マリクはアルタイルから放つ何かを感じ取って、緊張したような言動でアルタイルに言う。

マリク「…あの“若造”の影響か？アルタイル？？」

アルタイル「そうだな。私はあの若者“エツィオ”に出会えて私自身の心もあの時以上に変わった気がする…いやさらに変わったのだ。

我らが敵対する魔族の中で魔神ならぬ“人間らしさ”に惹かれ私は…」

アルタイルは一瞬瞳を閉じながらマリクの張る純白に中心から外部へと帳を広げる結界へと歩いて近づいた後、マリクに背後を見せながらアルタイルは左手を後ろへと伸ばした後マリクに言う。

アルタイル「さぁ行け。私が…」

マリク「…わかった。民を砦へと非難させた後、全アサシン軍を率いれてお前の元へ向かう。それまで…」

ー死ぬなよ、兄弟！ー

マリクは心の中で思ったことをつぶやいた後、背中の純白の鷹の翼を出して出入り口前に伸ばしていた右手を下ろす。

マリク「俺が此処を離れた直後、アルタイル…お前の周りには“俺の結界を叩いた全ての人間”が地の果てまで覆っているだろう。だから…」

アルタイル「心配するな。私は人間ごときで“簡単”にやられたりはしない。」

マリク「…ったく、あの若造に“似てしまっている”な。心も感情もな…。」

マリクは呆れる表情を出しながらアルタイルの自信満々の言動を聞いて少しため息をついた後、一瞬の内にしてアルタイルの元から消え去る。

ビキッと前方から音が鳴って、アルタイルは穏やかな表情から眼を細め彼なりの真顔へと変わる。マリクが消え去ったことで前方に張ってあった結界に複数のヒビが次々と走る。そして…

パァァァァァン

結界がガラスの破片のように崩れ割りすべての結界の破片が粉雪になって砕け散った後、結界の外の風景が露になる。

アルタイル「（ほぉ、マリク…お前の言った通りだな。）挨拶にしては多くないか？現世の人間共。」

マリクが言ってた通りアルタイルの周りには、地の果てまで多い尽くすほどの“バエル王の兵士達”がアルタイルに向けて殺気を剥き出しにしながら剣を抜き構えていた。

第三十三曲　流石、天神！何ともないＺＥ！！

―回想　８００年前　神界　マシャフ　現世出入り口部分の草原―

バエル「ほぉ？“小僧一人”でお出迎えかな？？神界の大導師？？」

アルタイルを囲む兵士達の奥にバエルがフフンと口元を吊り上げて、見下すような表情を出しながらアルタイルに言う。

アルタイル「すまない。お前達人間共を歓迎する準備が整えるに時間が無くてな…。それに…」

アルタイルは自分を囲むバエルの兵士達を視線だけで動かした後、不敵な笑顔を一瞬出し頭部のフードを深く被り直した後、無表情で遥か後方にいるバエルに言う。

アルタイル「我らは“人間同士の殺し合い”は手を貸さないと何度も言ったハズだ。」

バエル「くくっ…“悪魔”相手だけでは腕が鈍ろうではないか？？折角の貴様らに与えられた“神の力”を無駄にするのか？？」

アルタイル「“無駄”とは何だ?我らは“無駄”という日々を送ってはいない。我らは日々命を削りながら“世界の心理”と“理”を伝えるために日々戦っている。ただ人間共が我らの“本来の戦いを知らない”からそんなことが簡単に言えるのだ。」

アルタイルは無表情ながら屈強の男でも“逃げ出すぐらいの気迫を込めた言動”で、遥か後方にいるバエルに言い返す。バエルはアルタイルの言動を聞いてガタガタと身体が震え身震いしたが、味方を沢山連れてきたことで安心しているのか、落ち着きを戻しつつアルタイルに言い返す。

バエル「知らぬといえども“所詮詰まらぬ雑務”でもやっておろう?黙々と密室の中で“己が作った「…私の話をちゃんと聞いていたのか?ガマガエル??」何?」

バエルはアルタイルが吐いた“ガマガエル”の単語を聞いて一瞬身体を硬直させた後、バエルの左額に血管が十字になるように浮き上がる。

バエル「小僧…今何と言った??我は“王”なのだぞ??」

アルタイル「聞こえなかったのか?“ガマガエル”と言ったのだ。それとも“トド”と言ったほうが良かったかな??Ｄｕｒｃｈａ

ｌｌｅ Ｃｈａｎｃｅｎ ｉｓｔ ｅｓ ｅｉｎ ｕｎｓｉｃｈｔｂａｒｅｓ Ｋａｌｉｂｅｒ ｆ?ｒ Ｋｉｎｇ（どう見ても王には見えないなｗｗ）」

ニタリと口元を吊り上げて細目で笑う表情を出すアルタイルが、ドイツ語交じりで軽い笑い声を出しながら言った直後…

ブシュドスドスグチャグシャ！！！！

囲っていた兵士達が手にしていた武器がアルタイルの至る所の身体（全身）に向けて、“身体を突き抜けるぐらいに串刺し”アルタイルの鮮血が辺りに飛び散った。

バエル「口の聞き方に気をつけるんだな“小僧”。我に暴言を吐いたその罪は儚く重い！」

どうやらバエルが囲っていた兵達に合図を送り手を上げた後、アルタイルを囲っていた兵士達が一斉に手にする武器でアルタイルの身体に向けて貫かれるぐらいに深く突き刺したようだ。

バエル「小僧が…我が娘アウダに薄汚い手で出しおって。それにしても素晴らしい“鳥葬”だ。」

バエルは後ろへ反り返るように串刺しになっているアルタイルの姿を見て欺くように笑った後、トドメを刺すためにまたしても兵達に合図を送るように手を上げようとした時…

アルタイル「ふっ…外圧からの攻撃を身に受けて何年振りだろうな。あの“若者”エツィオと戦った以来かもしれん。」

バエル「なっ…!??!?」

串刺しにされていたアルタイルが突然後ろへ反り返っていた状態から“身体に武器が刺されたまま”通常の立ち姿に戻る。囲っていた兵士達とバエルは驚愕の表情を出しながら後ろへとたじろぐ。

アルタイル「人間側にしての“挨拶”はこれか。これは駄目だ、欠伸が出るほど生温い。」

アルタイルは瞳を閉じながら身に刺さった武器を“痛恨の声を出すこともなく次々と刺された部分から血を吹き出し平気に抜きながら”言い、身に刺さっていた全ての武器を地面に落とした後…

アルタイル「私を感じさせたいなら、もっと…」

ドンッと肉を突き抜けるような生々しい音が鳴りバエルは目が飛び

出そうな表情を出し、下半身からはガタガタと震え目の前に映る光景を呆然としてしまった。

囲っていた兵士だけでなく周りに居た兵士達も口から白い“細くて尖った尻尾のような物”が口から肛門に掛けて深く貫いており、その“細くて尖った尻尾のような物”はアルタイルの“背中”と“腰”から何本も生えていた。

アルタイル「刺激的な物がなければ…詰まらぬ。Ｉｃｈ　ｗｅｒｄｅ　ｅｎｔｔ?ｕｓｃｈｔ　ｓｅｈｒ（残念だ。）」

口元を吊り上げながら微笑む表情を出すアルタイルがドイツ語で言った後、兵士達を刺していた身体が一瞬の内にバラバラに細かく解体されて、兵士の血肉がボトボトと草原に落ち草原の色を深緑から赤く染めあげる。

兵士達の身体を解体したアルタイルの背中の変形した翼は、一つ一つ意思があるように付着していた血を鞭のように横へ振り払った後、伸縮して元の背中と腰に生えている純白の鷹の翼へと変わる。

バエル「…化け物！」

アルタイル「“化け物”とは心外だな。私は…？」

元に戻った背中と腰の翼を仕舞いアルタイルは、不敵に口元を吊り上げながら両腕を前に伸ばして“お前を抱いてやる”のポーズを生き残っている兵士達に向けて取った後…

アルタイル「私は“大導師アルタイル・イブン・ラ・アハド”神族の“天神”なり。さぁ…」

―Ｔａｎｚｅｎ　ｗｉｒ　ｍｉｔ　ｍｉｒ（私と踊ろうじゃないか。）―

第三十四曲　アルタイル★ザ★チートダンス

―回想　８００年前　神界　マシャフ　現世出入り口部分の草原―

バエル「ば…化け物め！！我が兵達よ！！怖気づくな！！果敢に戦え！！！！相手は一人ぞ！！！！！」

バエルがまだ生き残っている兵士達に怒号を上げながら言った直後、意を決したか兵士達は剣を槍を握りなおしアルタイルに向けて斬りかかる。

アルタイル「Ｌｅｉｃｈｔ…Ｌｅｂｈａｆｔ．（軽く…鮮やかに）」

アルタイルはドイツ語を吐きながら突き出された兵士の槍の棒部分を右手で掴んで、槍を持った兵士の鳩尾に向けて左手を前へと突き刺し、兵士の身体が“アルタイルの左手ごと貫かれ左手が血しぶきと共に背中を突き破る”。

アルタイル「Ｏｈｎｅ　ｅｉｎｅ　Ｖｅｒｚｅｉｈｕｎｇ…Ｉｃｈ　ｂｉｎ　ｋａｌｔｂｌ？ｔｉｇ（容赦なく…冷酷に）」

ドチャッと突き破った左手を引き抜くと同時に、兵士が手にしてい

た槍をもぎ取って槍先を兵士の咽仏に向けてトドメの横一線に“首ごと掻っ切る”ように槍を振り回し鮮血と共に兵士の“首が飛ぶ”。

更にアルタイルは側面から斬りかかって来る兵士達の剣を、手にする槍で軽く一周し槍の後先の棍で剣の握り部分を当てて剣を宙に浮かせ弾いた直後…

アルタイル「Ｖｅｒｓｃｈｗｉｎｄｅｎ　Ｓｉｅ　ｂｉｔｔｅ　ｖｏｒ　ｍｉｒ．（消え失せろ。）」

槍先を横一線に凪ぎ払った時、兵士達の首が軽やかに宙へと舞いボトボトと首が地面へと落ちる。アルタイルの右頬に首を切り落とした一人の兵士少量の返り血が付着する。

兵士Ｊ「う…うわぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

剣をもった兵士が叫びながら、アルタイルに目掛けて背後から斬り込むように突進する。が…

兵士Ｊ「うっ！？」

突然兵士の顔面全体に赤い液体が掛けられて血が付着した兵士は、視界と嗅覚を遮られて思わず足が止まってしまう。その直後…

アルタイル「Ｅｓ　ｉｓｔ　ｓｐ?ｔ（温い。）」

ボキリと、兵士の左頬が思いっきり歪むように口内の犬歯と前歯が数本折られ、顎が外れるように口元が爛れ身体がくの字に曲げられるように“大きく後方へと吹き飛び”、後方にいた兵士数人にぶつかって巻き込みながら“将棋倒し”になる。

どうやらアルタイルは背後から斬りかかる兵士を、背を向けたまま兵士の持つ剣の手を右手で掴んだ後“捻じ曲げるように腕を前へと折り曲げて”剣を手放した直後、アルタイルは兵士の顔面に向けて左裏拳を噛まし、大きく吹き飛ばしたようだ。

アルタイル「Ｗｉｒｄ　ｗｅｇｇｅｔｒａｇｅｎ…Ｕｍ　ｅｉｎｅｎ　ｇｒｏ?ｅｎ　Ｗｉｎｄ－Ｚｗａｎｇ…（舞え…我が風の力で…）」

アルタイルは右手に手にした槍を身体ごと振り回し“高速回転”させた直後、“巨大な竜巻”が発生し、アルタイルを囲っていた兵士達はアルタイルが作り出した竜巻に巻き込まれてほとんどバエル以外“全員”軽やかに遥か高い空中へと舞う。

アルタイル「Ｄｉｅ　Ｐｅｒｓｏｎ，ｄｉｅ　ｋｅｉｎｅｎ　Ｆｌ?ｇｅｌ　ｈａｔ…Ｉｃｈ　ｗｅｒｄｅ　ｚｕｒ　ｈｏｈｅｎ

Ｐｅｒｓｏｎ　ｂｅｈａｌｔｅｎ（翼を持たない者は…高き者に捕らわれ）」

アルタイルは竜巻と共に空中へと飛翔し“カメラ目線”に向けて口元を吊り上げて穏やかな表情を出しながら軽くウィンクした後…

アルタイル「Ｓｉｅ　ｗｅｒｄｅｎ　ｎｕｒ　Ａｎｇｓｔ　ｕｎｄ　ｅｉｎｅｎ　Ｓｃｈｍｅｒｚ　ｅｒｋｅｎｎｅｎ（恐怖と痛みを思い知るだろう。）」

手にする槍を振り回しながら宙に浮かんだ兵士一人の身体に向けて、槍先を背中を突き抜けるまで串刺しにし、兵士の死体が突き刺さったまま槍を次々と宙に浮かぶ兵士の身体に向けて次々と乱暴に叩きつける。

アルタイル「Ｅｉｎ　ａｒｍｅｓ　Ｋｉｎｄ…Ａｕｃｈ　ｗｅｎｎ　Ｓｉｅ　ｓｉｃｈ　ａｂｍ?ｈｅｎ，ｗｉｅ　ｄｏｃｈ…Ｅｓ　ｗｉｒｄ　ｇｅｇｅｓｓｅｎ.（悲惨だな人間共、どう足掻いても…所詮クズ同然だからな。）」

叩き宙に浮かんだ兵士が“ビリヤードの玉のように軽やかにほかの兵士達の身体にぶつかって”、痛恨の声さえ上げることも出来なく無抵抗に空中で一箇所へと集める。

アルタイルは手にしていた槍を前方に固められた兵士達に向けて投げ“団子のように槍に複数の兵士を重ね串刺し”にし、背中から鷹の翼を出して両腕に纏わせ爪状態にしたその直後…

アルタイル「Ｅｉｎ　ｒｏｔｅｒ　Ｎａｇｅｌ！」

爪先から赤い光が迸り一箇所に集められた兵士に向けて、アルタイルは身体を一回転させながら爪を何度も振りかざす。

爪を振りかざした直後、“巨大な赤色の三日月”の形をした飛ぶ斬撃が数個現れて、宙に固められた兵士達がアルタイルの爪飛ぶ斬撃を受けて身体が“ケーキカット”のようにバラバラになった。

バエル「うぉ…ぁ…ぁあ、わ…我がに……ニ万体の兵が……」

バエルは引き連れてきた兵士達があっという間に“全滅”し、兵士達の血肉の破片が地上の草原を赤く染め上げる。

バエル「な…何故だ！？私が知っている限りの神界の信条（クリード）では“汝罪なき者に剣を振るうな”と……」

バエルはパクパクと口を何度も開き呆然とした表情を出しながら、脳裏で覚えていたことを言い着ている甲冑に兵士の肉片が所々こび

りついていく。

アルタイル「残念だがその信条（クリード）は、かつて神界を治めていた魔界から派遣された“悪魔の戯れ言”。私が本来神族の長だ、悪魔（ムアリム）が言っていた“信条（クリード）は、偽りの信条（クリード）”だった。」

血肉の欠片が降り注ぐ中、血肉がアルタイルの身体を“避ける”ようにアルタイルの周りは円型に反り返りながら返り血さえ付かず地上へと降る。

アルタイル「我ら神族は信条（クリード）を捨て、それぞれの意思で“自由”で動き、己の正義を貫きながら“敵”と戦え。と私は兄弟達にそう言ったのだ。」

アルタイルは爪状態を解いて元の鷹の翼に変えた後、両腕を斜め下に伸ばしながら“カメラ目線”に向けて“お前を抱いてやる”のポーズを取りながらゆっくりと地上に降り地を着ける。

アルタイル「我々は悪魔が作られし信条（クリード）に力を押さえつけられ、思う存分に発揮出来なかった。それがようやく…」

―“自由”に動いてみたらどうだ?掟よりも己の思った意思で行動でやると案外以外な物まで見えるんだぜ?。一度駕の中から外へと羽ばたいてみろ。―

アルタイルは瞳を閉じながら脳裏に映る眠る前の人間らしい魔神（エツィオ）を思い出しながら、過去の思い出を胸に穏やかな表情を出した後、左腰に携えていた剣を抜き遥か後方にいるバエルに向けて剣先を突き付ける。

バエル「信条を捨てるとは…もはやお前達は悪魔と同様“無差別に破壊”を尽くしているではないか！？冷酷な化け物め！！！！」

アルタイル「言ったハズだ…お前が我らの戦いの日々を見ていないから勝手に言える。私はいや我ら神族は己の正義を信じて自由に行動する。今我が目に映る“モノ”は…」

アルタイルの目が一瞬漆黒から黄金の鷹目になり、バエルの身体を被う“赤い光”と“呪文のような文字”を見て、ニタリと口元を吊り上げながらバエルに言う。

アルタイル「“真実”を映す眼だ。ほぉ…人間のトドのお前は過去“下級貧地区に住まう人間から人体実験”やら“つまらぬ政（まつりごと）に参加しない者に拷問処刑”やら好き勝手に“都合の言い様”にやってきたじゃないか？」

バエル「！？？？！！何故…我の過去やってきたことが全て分かったのだ！？」

バエルは自分の過去の出来事を全て見抜かれたように言われ、わなわなと身体全体を震わせて後ろへとたじろぎながらアルタイルに言う。

アルタイル「Ｓｉｎｄ　Ｓｉｅ　ｄｕｍｍ？（お前は馬鹿か？）話を良く聞かない男だ。次いでにもう一つだが…」

アルタイルは右手に手にする剣を地面へと突き立て両手で握り部分を握りながら、バエルの甲冑に携えるあるものを見て厳しい表情を出した直後…

アルタイル「お前…“魔界から来た上位の悪魔”だな？」

バエル「！？？！！」

突然バエルの目の前に遥か前方にいたアルタイルが現れて、アルタイルが手にする剣がバエルの甲冑もろとも横一線に斬り伏せた直後…

バエル「…調子に乗るな《小僧！おぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！》

アルタイル「！」

突然斬ったバエルの声が二重になるような声になり、横に斬られた身体の肉片から“黒い触手のような物”がアルタイルに向けて伸ばしてくる。アルタイルは触手のような物に向けて斬り、後方へと軽くステップで下がった直後…

アルタイル「成る程、私の目に映っていた情報は“魔力継続”のために人を殺した後、喰らって生きていたのか。悪魔は元々魔力を補給しなければこの“毒に満ちた世界”では生きられないから…だからなのか。」

アルタイルはバエルの残虐ぶりを脳裏で整理して、口元を吊り上げながら彼なりに笑う仕草を取る。バエルは逆にアルタイルに対して、憎しみに満ちた表情を出しながら言う。

バエル《折角、我は地上で魔界の扉を開けるために補給していたのに…余計な邪魔をぉぉぉぉぉぉ!!!!》

割られた人間体のバエルの身体から、鋼鉄のような長い蜘蛛のような腕が血しぶきと共に数本出てくる。そして身体から生まれるように本来のバエルの姿が露になった。

第三十五曲　燃える海の鷹と悪魔

―回想　８００年前　神界　マシャフ　現世出入り口部分の草原―

バエル？《小僧が余計な真似を。これだから若輩者は感が鋭くて困る。》

バエルがいままで使っていた人間体（ヨリシロ）が、蛹の抜け殻のように鈴蘭の草原の上にとハラリと落ちた後、抜け殻になった身体が“突然発火”し炭になるまで焼き尽くす。

露になるバエル本来の体は、白灰色の鋼鉄のように太い蜘蛛の足が八本に、顔には人間のような口と八つの眼が付き、脚部先から頭部に掛けて赤い雫（マグマ）が零れ落ちながら走り、尾には蠍のようなものが付きアルタイルよりも巨大な体をもっていた。

―上級テンプル魔獣　フランメ　カノーネ―

アルタイル「人間になり過ごした“バエル”はどうだったか？？あまりにも我が儘が多くて退屈しのぎは良かっただろう？？」

アルタイルは本来の姿であるバエル…否フランメカノーネの悪魔の姿を口先を吊り上げて、彼なりに笑顔を出しながらじっくりと見詰める。どうやらバエルと対峙した際に、既に人間体(バエル)の中は悪魔に乗っ取られていることを“見切っていた”ようだ。

フランメ　カノーネ（略してフラカノ）《アア…ただ、人間共の口だけの“政(まつりごと)”がめんどくさくてな。正体を隠すためにひたすら人間(バエル)の記憶を穿って努力したものだよ。》

フラカノは地上に立つアルタイルを見下ろしながら喋った後、手足の先端に付いた巨大な一本爪を地面に突き刺した瞬間…

フラカノ《我の世界に招待してやろう。》

腕から割れていた隙間の溝からマグマが零れ落ち周りが一瞬の内にアルタイルを逃がさないように天まで伸びるほどの火柱と冷えた溶岩と流れるマグマが混じった“炎の世界”になる。

アルタイル「熱い…」

アルタイルは周りの高熱の風を身に受けて、顔を少し歪ませて目を細めながら、背中の翼をアルタイルの顔に向けて団扇のように扇ぐ。

フラカノ《我が創魔結界“獄炎の戒め”は如何かな。若き天神よ？ふむっ、どうやらお前は熱に弱いようだな？？ンン？？顔を見ると分かるぞ若いの？》

アルタイルの表情を見たフラカノは、ニタリと笑うような素振りでも出しているかのように、アルタイルに向けて話を続ける。

フラカノ《先程の“バエル”という身体は意心地が良かったぞ。我が乗っ取った人間（バエル）は何度も言っていたな。「娘が“あの怪物”に盗られたら…」「何故娘は私を見てくれない」とか…小僧、お前に対しての憎しみがあったぞ？？》

いつの間にかアルタイルは冷えた溶岩の上で両腕の手を冷たい溶岩に着けながら楽座りしており、フラカノの話を聞いてどうでもいいような表情を出しながら多少欠伸を出しながら答える。

アルタイル「眼中に無いな。私はお前が乗っ取った人間の心の心境など興味無い。それよりも早く始めないか？？Ｔａｎｚｅｎ　ｗｉｒ　ｆｒ？ｈ　ｍｉｔ　ｍｉｒ？（そんなことより早く俺と踊ろう？）」

アルタイルは座り状態から“お釈迦寝入り”のポーズになり、詰まらなそうな表情を出しながら火の海の中にいるフラカノに答える。

フラカノはアルタイルの姿を見てクックッと軽く笑う声を漏らした後、八つの内の四つ目だけを動かしてアルタイルに話を続ける。

フラカノ《そう急くな、小僧。他にもまだあったな。お前が焦がれている女、たしか“アウダ”と言ったな。我が此処へ向かう前にあの人間の表情が堪らなかったぞ？あの美しい脚部と身体の構造…，魔界の中では人間の中で持って来いの食…》

ドゴムッとフラカノの顔面に生々しい音を立てながら巨大な溶岩がぶつかって、話が途中まで遮られる。どうやらアルタイルは長いフラカノの台詞に聞き飽きたか、流れるマグマに浮かんでいた大きい溶岩一つを“片手で持ち上げて”、フラカノの顔面に目掛けて投げつけたようだ。

アルタイル「Ｅｉｎｅ　ｇｅｓｃｈｗ?ｔｚｉｇｅ　Ｐｅｒｓｏｎｉｓｔ　ｍ??ｉｇ　ｌａｎｇ（能書きはいい。）さっさと踊ろうか。」

背中と腰に白い鷹の翼を出しながら剣を握り部分に両手で握り締めながら前に構え、腰を少し折り戦闘体勢を取る。

アルタイルは大きな溶岩をフラカノの顔面に向けて投げ付けたが、外皮は合金以上に硬く傷さえも付けないまま溶岩の破片がマグマの中へとこぼれ落ち効果が無かったみたいだ。

フラカノ《失礼…我は元々、長話が好きでな。気に入った話題となると、時間も忘れて喋り続けてしまう程、困った“悪魔”なのでな。》

フラカノがそう言った直後、アルタイルが足場にしていた溶岩に向けて、蠍（サソリ）の尾の先端を伸ばして粉々に溶岩を一突きで破壊する。

アルタイルは破壊された足場と共にマグマへと落下しながら破壊された溶岩の破片を使って“足場にしながら飛び渡り”、まだ破壊されていない溶岩へと軽やかに移動する。

フラカノ《焼き焦げよ！》

フラカノは口に溜め込んでいた炎を生成し、複数の炎の塊を新たな足場にいるアルタイルに向けて、機関銃のように連続に吐き出す。

アルタイル「…ふんっ。」

アルタイルは剣を前に構えて“手先で剣を高速回転”させ、吐き出されたフラカノの炎の塊がアルタイルの持つ剣の刀身に全て当たって至るところに炎の塊を弾く。

そして吐き出された炎の塊一つを“左手で掴んで”、手が燃えたりもせず掴まれたフラカノの炎がアルタイルの手の中で吐き出された炎のサイズより“大きく成っていく”。その直後…

アルタイル「返す！」

アルタイルの左手中で生成した炎の塊が“赤く燃え上がる隕石”になり、マグマの中にいるフラカノの顔面に向けて投げつける。

フラカノ《ククッ…見事な！》

フラカノは楽しんでいるような素振りを出しているのか口内に生成した炎の塊を、投げつけてくる隕石に向けて吐き出し二つの炎が宙で爆発し、炎の破片が至る所に飛び散る。

アルタイルは飛び散る炎の破片を背中の翼をマントのように身を包んで、降りかかる炎の破片を防ぐ。

フラカノ《モット踊れ。若造》

フラカノが顔面をマグマに沈めた直後、炎の海から四匹の“マグマで出来た身体が蛇のように長い竜”が現れて、アルタイルに向けて

牙を剥き出しにしながら襲い掛かる。

アルタイル「はっ！」

アルタイルは襲い掛かる竜一匹の口に目掛けて剣の刀身を縦に食い込んだ後、掴む部分を両手で握り締めてすくい上げるように炎の竜の頭部ごと斬り倒す。

アルタイル「ふっ！」

そしてそのまま身体を一回転し、背後からの襲い掛かる炎の竜の顔面に刀身を食い込んで竜の鼻に左足裏で“苦しもがく竜の動きを押さえながら”斜めに斬り落とす。

その次に側面から襲い掛かる炎の竜二匹を手にしていた剣を左腰の鞘の中に収め、“素手”で炎の竜の鼻部分を触れ無理矢理開かれた口を閉じる。その直後…

アルタイル「蛇が…」

グシャリと、“素手”で掴んでいた炎の竜を足下に祓うように投げ飛ばした後、地に伏せた竜の頭部に目掛けて両手を丸めた拳をハンマーのように叩きつけて、“炎の頭部を粉砕”し炎の竜を一瞬の内

に“全滅”させる。

フラカノ《ククッ、小僧…中々やるな。》

フラカノの足場にしていたアルタイルの溶岩の端に目掛けて前足数本伸ばし引っ掻けた後、フラカノは自分が今いるマグマの中心まで足場にしているアルタイルごと引き寄せていく。

フラカノ《塵りとなれ。》

フラカノは引き寄せながら口内に溜め込んでいた炎を、一直線にアルタイルに向けて吐き出す。

アルタイル「ンン！！」

アルタイルは一直線に向かって来る炎を、両足にヒビが出来るぐらいに力を入れて、炎がアルタイルに触れる瞬間高く宙へと飛翔し避ける。

そして宙に浮かんだアルタイルは左手を握りながら左腕を上へと振り上げて、フラカノの頭部へと向けて落下し…

アルタイル「殻（うつわ）を脱げ。」

ドゴッと、アルタイルの左拳がフラカノの頭部にぶち当たって、マグマを通さない“合金以上の外殻”を“陥没させるほど凹ませ”て更には“外殻にヒビを作って”その直後に“外殻がボロボロに剥がれ落ちて”中身の筋肉が剥き出しになる。

痛みを受け外殻が破損したフラカノは痛恨と驚愕の声を漏らす暇もなく、己の巨大な重い身体がアルタイルに殴られただけで“軽やかに宙に舞う”。その直後…

アルタイル「失せろ。」

宙に浮かんだフラカノの前足一つを右手で掴んだ後、“片腕だけで”空中で何度もフラカノの身体を“軽やかに回転させて”、浮かんでいた溶岩に目掛けて投げ飛ばす。

アルタイルに投げ飛ばされたフラカノはそのまま溶岩にぶつかって、粉々に崩れ落ちる溶岩と共に炎の海へと没した。

アルタイル「さっさと立て、デカブツ。」

アルタイルは背中と腰の翼を羽ばたかせながら宙に浮かび、炎の海に没したフラカノに強い眼力で威圧をかけながら言う。

フラカノ《フフッ、これが我らの“裏切りの魔神”と手を組んで魔帝を討ち滅ぼした若き天神の“力”か。成程…納得がいく。》

アルタイル「古汚い手品(ネタ)はもう品切か?デカブツ??」

バシャッと、フラカノは炎の海から這い上がるように現れて、宙に浮かぶアルタイルを見て一瞬、魔神(エツィオ)の姿が見えて軽く笑いながら呟いた後…

フラカノ《クハハ…その言動と態度といい…何もかも“裏切る前の魔神”とそっくりだな。我らに無い“人間の感情”を生まれながらにして持っていたあの生粋なる魔神が…》

アルタイル「私にとってエツィオは“戦友(とも)”。戦友(とも)のお陰で私は変われたのだ。」

アルタイルはフラカノに止めを刺すべく、腰の翼を閉まって背中の翼を両腕に纏って爪状態に変形させる。

アルタイル「逝ね。」

その後足下に赤いアサシンの紋章を出現させて、火口にいるフラカノに向けて何度も紋章を出しながら蹴り、爪先を前に伸ばしながら剥き出しになった頭部に向けて突進する。

が…

フラカノ《が…何時までも調子に乗るな。小僧!!》

アルタイル「ぐっ!?」

ドスッとアルタイルの背後から生々しい音が鳴って、アルタイルは痛恨の声を出し口から少量の血を吐き出す。

アルタイルは痛みで身体を震えながら顔だけを後ろに動かすと、背中から右腸まで炎の海の中からフラカノの前足に付いていた爪一つが貫いていた。

第三十六曲　Wei?er　Gott,　der　Natur　kontrol

―回想　８００年前　創魔結界内部“獄炎の戒め”―

フラカノ「ククッ…油断したな小僧。これはこれは、深かっただろうな。」

アルタイル「ぐ…ぁ。」

フラカノは多少高笑いしながら腕を上へと掲げ、見上げるような形で突き刺したアルタイルの姿を見る。

アルタイル「（くそ…なんて無様な格好を。）」

両腕に纏わりついていた翼が剥がれて普通の腕に戻り、ダランと白い鷹の翼が背中に力無く折れたようにだらける。

アルタイルは苦痛の表情を出しながら歯をぐっと食いしばり、右腸に貫かれた白灰色の合金な蜘蛛の腕の一部を両手で掴んでフラカノの腕を引き抜こうと握り締める。

フラカノ「無駄だ若僧。その貧弱な腕で我の腕から解放されぬわ！！」

フラカノは炎の海に複数の溶岩に向けて腕を振りかざし、突き刺さったアルタイルの身体を何度も溶岩にぶつける。

フラカノ《もっともがけ！！》

フラカノは尾ともう一つの前足を伸ばし、アルタイルの背中に出ていた二つの翼を貫いて更に別の溶岩へとアルタイルの身体をぶつける。

アルタイル「か…はっ…」

アルタイルは無抵抗のまま何度も溶岩に叩きつけられ、ついにはフラカノの腕を掴んでいた両手を力を無くしたかのようにだらけるようになる。

フラカノ《深負いの追い討ちも悪くない。人間にとっては多少罪深く感じるらしいが？？》

フラカノはアルタイルを突き刺していた腕と尾を投げ捨てるように

引き抜き、無抵抗に宙に舞ったアルタイルに向けて口内に溜め込んだ火球を数発アルタイルの全身に全発当てる。

アルタイル「ぐっ…ぅ…。」

フラカノの火球を全て身に受けたアルタイルは、至る所から黒煙を吹き、身に纏う“白いローブは何故か焼け燃えない”まま苦痛の表情を出しながら炎の海に漂う一部の溶岩の上に受け身なしで落ちる。

ドシャッとうつ伏せになって風穴が出来た翼と、宙に舞う数枚の白い羽根と共に覆い被さるよう倒れる。

フラカノ《どうだ?我が魔力より造りし火球をその身に受けての感想は?“カ　イ　カ　ン”だろう貧弱な天神よ??》

アルタイルはフラカノの自慢の声を聞いて、右拳を握って全身震わせゆっくりとよろめきながら立ち上がる。

傷付いた翼を背中に仕舞い左手を貫かれた右腸に当てながら、本来ならの激痛の表情を無理矢理抑え口元を吊り上げて所々汗を流し作り笑いしながらフラカノに言う。

アルタイル「く…Ｅｓ　ｇａｂ　ｎｕ…ｒ　ｄｅｎ　Ｓｉ…ｎｎ

der das Brennen, und war unerträglich（焦げ臭くて料理は任せられない）とでも…言っておく。」

フラカノ《…そうか。ならその身が“消し炭になるまで”我が百熱の炎で焼き焦がしてくれよう。》

フラカノは傷付いたアルタイルにトドメを刺すべく、口内に莫大な炎を口元から溢れるぐらいに生成した後…

フラカノ《我が炎で魂ごと消滅するがいい。》

フラカノの口からアルタイルの視界に映る全体に“膨大の炎の壁”がアルタイルに向けて一直線に押し寄せてくる。

アルタイル「…て…。…に……行く。」

フラカノの炎の音でアルタイルの声が遮られながら、アルタイルは右腸を押さえていた左手を離す。

右腸から血を身に纏う白いローブ滲ませ、足下に数適の血を滴り落としながら、姿勢を前屈みから直立になってそっと静かに瞳を閉じた後…

フラカノ《何!?》

突然アルタイルに向けて吐いた厚い炎の壁が“綺麗に真っ二つに割れ”、その直後炎が“透き通った水”に変化し、水が炎の海へと没した後蒸気が激しく炎の海で立ち込める。フラカノは何事かと思い、溶岩の上にいたアルタイルを見た瞬間…

アルタイル「待ってろアウダ…『今行くぞ。』

左手を広げて前に出すように立つアルタイルが、身体の至る所から赤いラインが走って徐々に声が二重になり姿が変わっていく。

容姿は人間体に纏っていたローブを白ベースで保ち、裾の部分が本来の“裾の形をした鷹の翼”になっていて、身体の至るとこには赤いラインが刻み、全体に赤みがかかったオーラが纏う。手先と足下は鳥のような爪になっていて、見た目は“人間に近い究極の生命体”…

否…アルタイル本来の姿である神々を束ねる王“天神”になっていた。

フラカノ《！！！！…“天神”だと！？？！！ぐぉっ！！！！》

フラカノの目の前に天神と化した宙に浮かぶアルタイルがいて、アルタイルの右膝がフラカノの顔面に叩き込まれる。

アルタイル『Ｅｓ　ｉｓｔ　ｉｎ　ｖｏｒ　Ｒ？ｃｋｋｅｈｒ　ｅｉｎｅｒ　Ｗｅｉｌｅ　ｄａｓ　Ｇｅｓｃｈｅｎｋ！（ここからだ！）』

フラカノは驚く隙さえも与えず巨大な身体が、万歳するような形で宙に浮き上がる。

フラカノ《ぐぉおっ！？》

アルタイル『Ｗｉｒｄ　ｗｅｇｇｅｔｒａｇｅｎ！（上がれ！）』

更にアルタイルは身体を捻って左足裏と右足を回転させるように思いっきりフラカノの腹部に二連続当てて、身体を前に戻るまま握った左拳をフラカノの顎下にぶち当てて少し宙に浮かしたその直後…

アルタイル『Ｗｅｉ？Ｚｏｒｎ！』

アルタイルがフラカノの身体に向けて右手を前に伸ばした瞬間、白い発光が槍のように迸って“百連突き”のような形でフラカノの身体から背中まで高速に指し貫く。

刺し貫かれた部分から外皮である合金以上の白灰色の殻が“粉砕”され、外皮の殻を破壊すると同時に内部の肉を“突き破って”外皮の粉々に砕けた殻と共に紫の血を外へ噴き出す。

フラカノ《ガ…ガァァァァ！？？？！？》

アルタイル『Ｍｅｉｎ　？ｒｇｅｒ　ｗｉｒｄ　ｎｉｃｈｔ　ｇｅｒｅｇｅｌｔ！（楽に死ねると思うな。）』

間を入れずアルタイルはフラカノの顎下に鳥の爪と化した右手を食い込んだ後…

アルタイル『Ｅｉｎ　ｒｏｔｅｒ　Ｎａｇｅｌ　Ｉｃｈ　ｂｉｎ　ｓｔａｒｋ！』

尾の部分へと目掛けて一直線に爪を滑らせ“真っ二つ”に爪先に光っていた赤い光を後方に伸ばしながらフラカノの身体をかち割る。

アルタイル『っ！』

ズブッと割れたフラカノの身体から溶けた繭のような物が出てきて、良く見ると繭の隙間から溶けかけた人間の手…アルタイルは溶けた繭のような物を掴んで、手が出ていた隙間に右手に爪を食い込みゆっくりと引き裂くと…

アルタイル『アウダ!!』

溶けた繭のような物の中から、上半身が火傷のように皮膚が所々爛れて一部の薬指や耳や顔半分がフラカノの胃酸で溶けて欠損した原型を半分以上留まっていないアウダが現れ、残りの下半身が完全に溶けて臓器も骨もフラカノの胃酸で溶けて無くなっていた。

第三十七曲　Ich dr?cke Phantasie praktisch

―回想　８００年前　創魔結界内部“獄炎の戒め”―

アウダ「……ぅ……あ…ル……た…イル。」

身を抱きしめられている感覚を覚え顔半分溶け口元の筋肉と頬の肉が曝け出したアウダが、ゆっくりと顔を上げて目の前に映る天神と化したアルタイルを見て、声帯までもやられたか途切れ途切れの弱弱しい声でアルタイルに言う。

アルタイル『っ…アウダッ!!』

アルタイルは悔しい表情を出し歯を噛みしめ上半身だけのアウダを両腕で抱きしめながら、宙に浮かんだ状態から炎の海に浮かぶ溶岩の一つに降り立った時…

アルタイルの足元から“草花が生えて”アルタイルが立つ溶岩の上部分だけが色とりどりの花が咲き乱れ、アルタイル本来の天神の力の一部である“浄化”の力で“草原”になる。

アウダ「……イル。……その……う……。」

アルタイル『くっ…無理に喋るな、アウダ！』

アルタイルはアウダを抱きしめながら地面に両膝を着いて、左手をアウダの無くなった下半身の切断部分を一瞬見た後、自分本来の姿をあまり見られたくないかアウダの顔を背けるように横向きになったが…

アウダ「…だよ。……しを……見て……。」

アルタイル『！』

アウダが残った顔半分笑顔溢れる表情を出しながら、弱弱しく腕をアルタイルの頬に向けて伸ばし、天神と化したアルタイル本来の顔を自然にアウダの方へ向ける。

アウダ「だい…ぅ……ぶ。……わく……ない…よ…。」

アルタイル『…アウ…ダ？……うっ！？』

アウダに振り向かれたアルタイルが突如アウダの手で引き寄せられ

て、自分の唇に半分溶けたアウダの顔が一瞬互いの唇が触れ、数秒間アルタイルはアウダに口付けされ身体がピキッと硬直する。

アウダ「……いで…、た……イル。な…か……いで。」

アルタイルとアウダからでは長い時間がたったような気がしてお互いの唇を長く触れた後、アウダからゆっくりとアルタイルの唇から離れる。

残されたアウダの視界に天神（アルタイル）の頬からツツッと少量の雫を見て、その雫がアウダの右頬に零れ落ちる。雫を頬に感じて残されたアウダの顔は、微笑みを出しながら天神と化したアルタイルに言う。

アルタイル『私はまだ…泣くことが出来たのか?』

天神（アルタイル）は金色の鷹の瞳から雫（なみだ）が出ていることに少し驚き、無表情ながらにして胸の中は何かが弾かれるように熱く感じて、アルタイルは雫流（なみだ）しながらそっと右手を爪で傷つけないように、アウダの残された右頬から頭部に掛けて撫でるように動かす。

アウダ「……たは、……け……も……じゃ……い。……あな……に……だ……よ。」

アルタイル『アウダ…私は……』

アウダはアルタイルの右腸に開いていた傷を見て、傷口に向けて残されていた腕を伸ばしてそっと触れる。

アウダ「……く……ない？……いた…い……いたく……の？……」

アルタイル『大丈夫だ…これしきの傷など。』

アルタイルはアウダに向けて微笑むような表情を出した後、数秒瞳を閉じた時、右腸の傷口が“一瞬の内に消えるように癒えて”元の白い身体になる。

アルタイル『アウダ。私の身体(なか)に入って待っていろ。直ぐに片を付ける。』

アウダは微笑みながらアルタイルの強い意思が込められた言葉を聞いて顎で頷いた後、ゆっくりとアルタイルがアウダを抱えている一つの左手で胸部へ引寄せて、吸い込まれるようにアルタイルの身体(なか)へと入っていった。

アルタイルはアウダを取り込んだ後、ゆっくりと立ち上がって顔を

下に伏せたまま右手を前に伸ばした瞬間…

アルタイル『我が爪に刻まれても立てるのか…タフな奴だ。』

ドンッとアルタイルが前に伸ばした右手間近に数発の赤い火球が“宙で止められており”、“顔を下に向けたまま”右手をぐっと握った瞬間、数発の火球が細か分解されて小さくなった火の粉達が“赤い花弁”へと変わる。

フラカノ《まさか、お…お前みたいな若輩者のこ…小僧が、全なる…こ…“理（コトワリ）”をし…支配で…》

炎の海からアルタイルの爪だけでボロボロに身体が崩れ落ちたフラカノが、口から腸から紫色の液体を大量に流しつつ、身体を足下に流れる炎の海に纏わせて崩れ落ちる身体を支えながら途切れ途切れにアルタイルに言う。

アルタイルは顔を前に上げて真顔を出しながら、ボロボロのフラカノに向けて言う。

アルタイル『“Ｉｃｈ　ｄｒ?ｃｋｅ　Ｐｈａｎｔａｓｉｅ　ｐｒａｋｔｉｓｃｈ　ａｕｓ（生きる総ての世界の魂と共鳴）”が出来るのでな。私の戦友（とも）であるエツィオがそう名付けてくれた。』

アルタイルが火口へ向けて飛び込むようにダイブし、仰向けになりながら両腕を広げて“炎の海へ”と身体そのもの沈んだ瞬間…

フラカノ《なっ…》

突如アルタイルが飛び込んだ箇所から波紋が出て、赤い炎の海から“透き通った綺麗な水”へと変わって、一瞬にフラカノを被う炎の海以外の箇所が“水”へと変わり果て、所々蓮と蓮の花が浮かんで出てくる。

フラカノ《何だ…この世界は…我が生み…出した炎が…消えていく!!》

浮かんでいた数多くの溶岩も“草と赤い花（彼岸花）が生えて”、深緑と彼岸花が咲き乱れる“岩石”へと変わり、空の色が暗い赤から深海のような濃い青へと変わった。

アルタイル『お前が創った“世界”を消してやる。見た目は美しい世界に見えるが…』

水の中からアルタイルが浮かぶように現れて水面に身体を浮かぶように立った後…

両腕の裏部分に剣の鞘のように開いていた穴から長い赤い光を放つ本来の“アサシンブレード”が現れ、ブレードが出た両腕を広げながらフラカノに向けて言った。

アルタイル『お前に対しての“二度と目が覚めない”唯一の墓場だ。』

フラカノ《ぬっぅぅう!!…ふざけるな小僧!!!!》

フラカノは激昂し至る所から紫色の液体を吐きながら身体を纏う炎の力で宙に浮かんだ後、残されていた殻を前足や尾で脱皮するように殻を壊し、殻(なか)に閉まっていた“炎”を宙にさらけ出す。

アルタイル『それが正真正銘の“本体”か。』

フラカノ《あの裏切りの魔神め…このような厄介な奴と手を組むとは!!》

崩れ落ちたフラカノの殻と紫色の液体が、天神と化したアルタイルが浄化した水面に落ちた瞬間、殻が“白い蓮の花”になり紫色の液体の雫は“大小が混じった様々の蓮”へと変わり果てる。

アルタイルが見たフラカノの本体である炎は、巨人のような身体に、頭部に二つの角が生えて背中から竜のような翼が付いていた。

フラカノ《“浄化”と“再生”と“破壊”を司る神とはな！忌々しい…あの裏切りの魔神と“同じ力”を！！》

フラカノは両腕を伸ばし両手を広げた後、複数の炎の塊を生成して雨のように水面にいるアルタイルに向けて炎を降り注ぐ。

アルタイル『Ｅｉｎｅ　ｒｏｔｅ　Ｋｌｉｎｇｅ！』

両腕の裏の鞘から出ていた長い赤い光を放つ“アサシンブレード”を掬い上げるように斬る残像が出ながら炎の雨に向けて振りかざした時…

アルタイルに降りかかった炎の雨の全てが“アサシンブレード”の風圧で粉々に砕け散り、砕け散った炎の粉が一瞬の内に“赤い花弁”へと変わる。

赤い花弁が舞う中アルタイルは水面から蹴るように飛翔し宙に浮かんで、宙に浮かびながら炎の雨を両手の平から放ちアルタイルから逃げまくるフラカノに目指して滑空するように追いかける。

フラカノ《うぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！》

アルタイル『無駄だ。』

アルタイルは自分に向けて降りかかる炎の雨を、両腕に出ている“アサシンブレード”で凪ぎ払うように振りかざし、アサシンブレードで粉々に砕けた炎の雨を“赤い花弁”へと変化させつつ逃げるフラカノへと滑空する。

フラカノ《！！！！》

フラカノは天神（アルタイル）に追い詰められ慌て右手に大剣を生成しようと心掛けるが、一瞬の内に天神（アルタイル）が目の前に現れて、アルタイルの左腕裏から出ていたアサシンブレードで右腕ごと斬られ“切断”される。

フラカノ《ガッ…ァ！！？？！》

アルタイル『散れ…。』

宙に飛ぶフラカノの右腕がバラバラになると同時に、アルタイルはフラカノの胸部に両腕のアサシンブレードを貫いた直後、腕を交互に振りかざしてフラカノの上半身を切断した。

フラカノ《き…貴様も……道ズ……》

フラカノは苦し紛れに残されていた左腕をアルタイルの首に目掛けて伸ばしたが、『Ｂｅｒ?ｈｒｅｎ　Ｓｉｅ　ｍｉｃｈ　ｎｉｃｈｔ（触るな。）』と冷酷の表情を出すアルタイルに言われて、アルタイルの右手でパシンとフラカノの左手が虚しく叩かれた後…

アルタイル『安らかに眠るがいい…。』

アルタイルの右手の平から白い“太い光線”みたいな物が発射され、切断されたフラカノの上半身と下半身ごと光に呑み込まれて“消滅”した。

第三十八曲　神話の終わりにして始まり

―回想　８００年前　神界　マシャフ　現世出入り口部分の草原―

マリク「…アルタイル。」

神界の住民を皆に避難を終わってマリクはアサシン軍全員引き連れて、空中に浮かぶ歪んだ赤い空間を見て中にいる“アルタイル”を心配するように全員見詰める。

カダール「アルタイル大導師…無事でしょうか??僕は“強い氣の魔”を出入り口部分に感じて……」

マリク「まさか、“上位悪魔に取り憑かれた人間”が現世の軍勢の中にいたとはな。それに…」

マリクは視線だけ下に映して足元に転がる人間の…否、醜悪の形相を持った“下級悪魔”が地の果てまで部分欠損したまま死んでいたのを見てマリクは顔を少し歪めた後、再び視線を目の前に映る歪んだ空間を見詰めなおしながら言う。

どうやらマリク達は神界の民を避難誘導させている間、神界出入口部分から“強力な魔の波動”を直ぐに感じ取っていたらしい。

マリク「人の生気（まりょく）を喰らい奪ったことで媒介役を作って他の人間にも寄生し次々と繁殖したのか…たくっ、“寄生された人間”も哀れだな。知らず知らずの間に上位の悪魔に憑かれて喰われるとは…。」

カダール「けど…アルタイル大導師凄い…。数からにして二万体以上の下級悪魔を…」

カダールや他の新米アサシンや一部の師範アサシン達は、驚愕を隠せない表情を出しながら地の果てまで転がる部分欠損した悪魔の死体達を見て少し息を漏らす。

新米アサシンA「これが…俺達“神族”を束ねる大導師の…“力”!!」

新米アサシンB「いったいどうしたら…このようなことが出来るんだ…？」

師範アサシンA「見事な…私もあの方のように、なりたいものだ。」

師範アサシンB「我ら“天神”に無い“彼の力”は…一体どこで？」

マリクの後方にいるアサシン達がざわめきながら愚痴が所々出ながら、マリクは少し歪んだ空間を見て何かに気づき眉を少し下へ下げた後、後方にいるアサシン達に背を向けながら右腕を伸ばして後方にいるアサシン達に言う。

マリク「！空間が捻れた！？皆剣を構えろ！！空間から何かが出てくるぞ！！！！」

マリクの声を聞いたアサシン達ははっとなってざわめいていた空気から、緊迫に満ちた空気へとなり一人一人左腰に携える剣の握り部分に右手を当てて、何時でも剣を抜けるような体勢を取る。

カダール「強い魔の“氣”を感じる！…まさかアルタイル大導師は…」

マリク「馬鹿なことを言うな、カダール！奴は絶対に死にはしない！！俺に…俺に、そう言ったんだ！！」

マリクはカダールに否定の言葉をぶつけた後、右手を左腰に携える剣の握り部分に手を当てて、左額から一滴の汗を流しながら何時でも剣を抜ける体勢を取る。

マリク「（アルタイル！…頼む…もう無茶なことをしないでくれ！！俺は…もう……）」

脳裏にもしものことがあったなら…マリクはそのことに脅え、ただ兄弟の無事を祈るばかりでいっぱいだった。その直後、グチャと捻れた空間が波紋を出しながら所々歪み、波紋が何度も激しく浮かび上がる。

そして何かがつぶれる音を立てながら捻れた空間の中心から、暗闇で姿が見えない人影が何かを抱くようにして出てくる。中心から歩いてくる人物がマリク達がいる太陽の光で照らされた大地（うつしよ）へと歩んだ時…

マリク「！…アルタイル！！」

カダール「アルタイル大導師！！」

空間の中から天神の姿を解いた人間体のアルタイルが出てくる姿を見て、マリクが引き連れたアサシン達はわぁっと緊迫の体勢から歓喜が溢れた空気になって、一斉にアルタイルの下へと走り寄る。

マリク「アルタイル！…こいつは…」

カダール「アウ…ダさん…そんな…」

アルタイルが抱きしめている下半身が無い上半身溶けかけた死にかけのアウダの姿を見て、アサシン達はぐっと息を飲む。

マリク「アルタイル…」

アルタイル「…れ……かった。」

マリクがアルタイルに寄った時、頭部のフードが深被りで顔が隠れて見えなかったが、声が掠れており所々嗚咽が出ながら、死にかけのアウダをぎゅっと抱両腕で抱きしめる。

マリクは今のアルタイルの姿を見て少し間を置いた後、右手をアルタイルの左肩を軽く置くように触れて、アルタイルに向けて少し哀れむ表情を出しながら言う。

マリク「…アルタイル、一旦砦に戻ろう。一体あの中で何があったか、落ち着いたら俺達に話してく…」

突然ガシャンと捻れていた空間から鳴り、マリクは何事かと前方の空間を見た後…

カダール「空間が…なっ！？」

ラウフ「オィオィ…なんつぅタイミングだよ。」

硝子が割れたように崩れ落ちる空間を見て本来の入り口部分が戻った瞬間、神界に詰めかけた“本物の人間達”がおりカダールとラウフ他アサシン達は最悪だと呟いて、焦りの表情を出す。

マリク「最悪だ…」

無論何も知らない人間達はアルタイルが持つアウダの“姿”を見て…

人間Ａ「アウダ様ぁぁぁぁぁぁぁ！！！！神が…人を殺した！！…貴様ぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

人間Ｂ「皆武器を抜け！奴らは神ではない！！堕ちた“悪魔”ぞ！！！！」

人間Ｃ「この“悪魔”を討ち取れぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

人間達が武器を引き抜き、アルタイルに向けて斬りかかる。マリク

はアルタイルを庇うように前に出て、両手を前へと伸ばした時…

マリク「Ｄｉｅ　Ｅｒｌａｕｂｎｉｓ！」

マリクの両手の平からハリケーン並みの“突風”が発生し、人間達はマリクの作り出した風で神界出口へと“一人残らず”吹き飛ばされる。

マリク「カダール！新米共！！早く入り口を塞げ！」

カダール「は…はい！！」

そして後方にいたアサシン達数人が出口に向けてマリクは右手を翳した後、白い光を前方に向けて迸りながら出口部分に帳が出来て被うように塞ぐ。

マリク「！っアルタイル！！」

出口を塞いだその直後、アルタイルはアウダを抱きしめたまま両膝を折って、身体を横に落としながら草原の上へと赤子のように倒れ込む。

アルタイル「ア…ウダ……。」

マリクが駆け寄る音と周りのアサシン達の声を聞きながら、アルタイルは瞳を閉じて左目の瞼から雫(なみだ)を流しながら意識を手離した。

…

……

……

―数日後　神界　マシャフ　アサシン教団砦　大導師の部屋―

アルタイル「はっ…ここは……。」

マリク「漸く起きたか…このまま俺達の苦労を知らず、勝手に死んで逝くかと思ったよ。」

アルタイルがゆっくりと目を開けると、身に包んでいた衣装は上半身だけ脱がされ、代わりに身体の上には薄い革で被われた掛けシーツが掛けられており、周りは薄暗く壁に架けられた蝋燭の光で部屋を明るくしていた。

アルタイル「私は…あれから……気を失っていたのか。…」

アルタイルは自分の部屋だと直ぐに解釈し、上半身だけゆっくりと起こす。今いるベッドの傍らには食事をお盆に乗せて持ってきた、多少冗談がこめた言動を言いながらやつれた表情を出すマリクがいた。

マリク「お前は六日間、気を失っていたんだ。あれから俺達は交代交代でマシャフの出口を塞ぐようにしている。人間共がまた此所に詰めかけるのを止めるためにな。」

アルタイル「マリク…私は…」

アルタイルは数日間のことを思い出しながら重い言葉を吐こうとした時、「それはいいから、とっとと飯食え。」とマリクに言われて話を遮るように、アルタイルの身体の掛けシーツの上に食事を載せたお盆を置く。

マリク「アレは仕方ないだろう。事情を説明する間も無くに人間達は“勝手に思い込んで武装隆起した”からな。お陰で俺達は人間共にとって“敵”と見なされた。」

アルタイル「私のせいだな…エツィオのように巧くアウダを身体（なか）に取り入れることが出来なかった。…すまない。私は兄弟達を……」

アルタイルは右手に掛けシーツを握りしめて、暗い表情をだしながら数日前の出来事を後悔する。数日前はアウダを取り込んだのはアルタイルにとって初めてだったらしく、フラカノを倒すまでが精神そのもの集中していたので辛かったようだった。

マリク「いや、お前のせいじゃない。“出来る限りのことを尽くした”んじゃないか。お前は…命懸けでこの“神界に住まう俺達”を守ったんだろう?弟のカダールから聞いて俺は…いや俺達アサシンは感謝している。それで…十分だ。」

アルタイル「マリ…ク?」

アルタイルはきょとんとした表情を出しながら、窓際に移動したマリクを見て縁に手を添えながらアルタイルに背後を見せながらあの時の出来事を語り掛ける。

マリク「お前が抱きしめいた女は、お前が気を失って数時間後“死亡”した。が…死した女は器(からだ)だけ消失した後…」

マリクはぼんやりと窓の外に映る羽ばたく白い鳥達を見ながら、数日間の出来事をアルタイルに話を続ける。

マリク「消失した器(からだ)から“女の魂”が出てきて…アルタイル、お前の身体(なか)へと入っていった。」

アルタイル「アウダが…私の中に!?」

アルタイルは少し驚く表情をだした後、胸部に左手を当てながらベッドに歩み戻ってくるマリクに言う。

マリク「女は最後にこう言ってた。“ずっと側にいる”と…」

マリクは身体を屈みこんでそっとアルタイルの右手を両手で奮えるように握り締めた後…

マリク「お前はもうあの時の“無垢に事をなす冷酷の天神アルタイル”じゃない。お前は人知勇と技と情を完全に身に付けた史上最強の“天神”だ。お前は…俺達の……」

アルタイルから顔を背けるように下を向いていたマリクだったが、顎から少量の水滴が床へと数適落ちるのを見て、アルタイルは嗚咽が混じったマリクの言葉を聞いて、綻んだ表情を出しながらマリクに言った。

アルタイル「マリク…有り難う。それと…」

―…アウダ…すまなかった……。―

…

……

……

―数時間後　アサシン教団の砦　大導師の間―

マリク「成程…上位悪魔（フランメカノーネ）が此所に押し掛ける前に生気（まりょく）の動力源で偶然居合わせた女（アウダ）を食らっていたのか…」

アルタイルは大導師の間にある机の上に両肘を上に置いて手を組むような形で、マリクが魔力で構成した白い椅子に座り顔を俯きながら傍に立つマリクに言う。

アルタイル「あぁ、寄生体だったあのお喋り悪魔の私の目に映っていた“情報”にはそう書かれていた。それだけでなく…」

静寂に満ちた大導師の間に集まる見張り以外のアサシン達の中で、カダールがアルタイルが次の言葉を代わり言う。

カダール「上位悪魔の本来の目的である“魔界の扉”を開くための“魔力補給”していたんですね…。そのためには複数の人間の生気（まりょく）

を奪う必要があった。」

アルタイル「そうだ。それにもう我らは“勘違い”とはいえもう取り返しがつかないところまで行って来ている…この星にもう長くは居られない。」

マリク「潮時か…」

アルタイルの重々しい言葉を聴いて、マリクは顔を下へと伏せたまま眼を瞑せる。そして…

アルタイル「宇宙へこの“神界”ごと場所を映そう…。これ以上兄弟達に結界を張り続けるわけにもいかない。」

マリク「星に“眠ったままの兄弟”を取り残したままか…苦渋の決断だな、アルタイル。神話はもう…幕を降りるか。」

アルタイル「我が友であるエツィオが傷が完全癒えて再び目覚めた時…星のどこかにある我らだけの“紋章”だけをどこかに残そう。また再び我らに会うまではしばらく…エツィオは…」

組んでいる手が震え苦渋の表情を出すアルタイルの姿を見て、マリクはそっと震えている手に右手を触れた後、アルタイルに言う。

マリク「アルタイル…お前を咎める奴なんていない。あの聖地に眠る兄弟もきっと…」

カダール「そうですよ！もしエツィオさんが此処にいたら、…きっとこのことを理解してくいると思います！！彼は魔神でありながら“人間らしい”生き方をしてきたのだから…。」

カダールがそう言った後アサシン達も無言で頷いて、アルタイルに信頼を寄せる笑顔に満ちた表情を出す。アルタイルはマリク達の言葉を聞いて少し瞳を閉じ俯いた後、すくっと椅子から立ち上がり大導師の間に集まるアサシン達に向けて静かな言葉で言った。

アルタイル「“神界”を宇宙（そら）へと移動させるぞ。手が空いた者は手伝ってくれ。」

アサシン・S「「了解しました。」」した。アルタイル大導師！」

アルタイルはそう言った後、大導師の間に集まるアサシン達を縫って出て行く。アサシン達もアルタイルの後に続くように彼の背中を追いかけるように着いて行った。

―この日から俺達は…神族は星から姿を消した―

一人に恨まれ…神話を終わらせたのは…一人の天神一

第三十九曲　長い回想乙ですた

―現代　神界　マシャフ　アサシン教団砦　大導師の間―

マリク「あれから俺達は星(ちきゅう)を離れ、宇宙(そら)に場所を移してもアルタイルにとっては心痛んでいた。愛する人を守れず…それに唯一友であるお前(エツィオ)を星(ちきゅう)に残して行ったことで後悔の日々を孤独に送っていた。」

シャイナ「（おっまっｗｗｗｗ回想長すぎて俺らの出番此処まで無しｗｗｗｗそれにシリアスなシーンと祭シーン(クライマックスアクション)お疲れさま作者ｗｗｗｗ）なるほどね…エツィオと戦っている最中（第九曲参照）になんか“見詰められている”ような気がしてさ…エツィオの身体(なか)にいても…ね。」

マリクは手にするマグカップに入っていた茶を飲みながら８００年前の出来事を全て話し、きょとんとしながら初回神界にきた時を思い出しながらシャイナはマリクに向けて言う。が…

エツィオ「あれっ？無くなったぞ？…ふぁぁぁぁぁ。超ねみぃ…寝よ。」

一人だけ除いてシリアスな空気でも関わらず“のんびりと茶を飲み続けていた”エツィオは、飲み干したマグカップの中を見て机の上

に置いて欠伸を出した後、右足を左膝に掛けて腕をダランとだらしなく伸ばし後ろへ反り返るように大きく口を開いたまま“子供のように眠る”。

マリク「たくっ、この男め…俺がアルタイルの心情をお前に伝えているように話したのに。…自由な奴だな。」

シャイナ「ホ　ン　ト　…エツィオはフリーダム以上の自由ねぇｗｗｗ多分今までの話すら“聞いてなかった”ように見えたしｗｗｗｗ」

マリクは子供のように眠る姿勢が悪いエツィオを見て、呆れた表情を出しながら右手で顔を覆うように取る仕草を取る。

シャイナは「あはは」と少し呆れた声を漏らした後、マリクの話が始まった直後のエツィオの自由きまわりない態度を思い出しながら、心の中でクスリと笑う。

エツィオ「むにゃむにゃ…腹イッパ……ァァァイｗｗｗ。あふんっ……スピー……」

エツィオは寝言を言いながら口から少量の涎を出しながら、こんどは机を身体を乗せるように前乗りになって左腕を伸ばし右腕を顎下に乗せて幸せの表情を出しながら眠る。

シャイナ「寝顔可愛いなぁぁｗｗｗｗ…エツィ……ありゃっ？？」

シャイナはエツィオは眠り姿を見てにやける表情を出した最中、何かに握られる感覚を覚えてシャイナは握り締められている部分へと視線だけで動かした後…

シャイナ「もうっ…」

シャイナの右手にエツィオの左手が握られていて、エツィオの手の平の温かみを感じてシャイナは一瞬頬に赤みが浮かんだ後…

エツィオ「しゃい……なぁぁ……ぁ……お…れが……まも゛…るがらぁぁ…ぁぁ。」

エツィオの寝言だろうか所々聞きにくい所があったものの、シャイナは握り締められているエツィオの手を上から包むように左手で握った後、シャイナもエツィオと同じように机へと身体を傾いて一緒に寝ようとした時…

アルタイル「お帰り、兄弟（エツィオ）。空中暗殺（エアアサシン）。」

ガキンと鋼がぶつかる音が鳴ってなにごとかとシャイナは顔だけ見上げるように動かすと、空中に浮いて左手の裏から隠し刃“アサシンブレード”を出していたアルタイルの姿があって、シャイナは寝顔の穏やかな表情からぎょっとした表情へと変わり果てる。

エツィオ「ちーす。ただいま戻りましたＺＥ★」

エツィオは机を上半身身体に置いてシャイナを握り締められたまま眠っている状態から、アルタイルの左手裏から出ていた不意のアサシンブレードをいつの間にか背中から出ていた“アンゲルスの白い触手一本”出ていて、触手先を氷の小型剣（ナイフ）のように変化させて“互いの剣先を当てた”ままアルタイルの不意の一撃を逃れる。

エツィオはゆっくりと机に預けていた上半身を起き上がった後、口元から出ていた涎を右手拭って背中に出ていた触手（アンゲルス）に軽く弾くように動かした後、アルタイルは後方へと軽く吹き飛ばす。

アルタイル「ほぉ…“上位悪魔”と契約したのか。いや“特級”とでも言ったほうがいいかな??」

アルタイルはニタリと口元を吊り上げ彼なりの笑みを出し後方回転しながら身体を空中で“Ｙ字”にさせた後、身体を何度も回しながら床に両足をそろって“カメラ目線”に向けて華麗に着地する。

エツィオ「おうよ♪俺の使役の一匹“氷魔銃（アンゲルス）”（ペット）ＤＡ★見て見て（＾Ｏ＾）」

エツィオはわーい♪と子供のように無邪気に笑いながら右手を身体の中に入れて、身体の中から“氷魔銃”を取り出してアルタイルに見せた直後…

アルタイル「むぅ…お前達が浄化に中っていた間に、神界で好き勝手に暴れまわっていた“浄炎アグニ”と“水天ヴァルナ”を“半殺し”にした後、我が精力を込めて暗殺魔具をお前の為に“作った”のだが…」

シャイナ「おまっｗｗｗ“半殺し”って…つーかアンタが持ってる“ソレ”…（ちょっ…アグニとヴァルナは神じゃんｗｗｗそれを半殺しの後に“加工”ってｗｗｗ）」

いつの間にかアルタイルの右手には“炎を纏っていた赤いハンドガン”に左手には“水を纏っていたハンドガン”が二丁握られており、アルタイルは残念そうな表情を出しながら手の中で二丁銃を回転させながら玩ぶ動作を取る。

良く見ると二つとも銃口が二つ空けられていて、銃自体が“人間の顔ぐらいに大きい”のをシャイナは汗を滴ながらアルタイルに向けて指を指しながら言う。

シャイナ「何そのD●Cに出てくるダ●テのエボ●ボみたいなのはｗｗｗ」

アルタイル「“炎水二銃アグニヴァルナ”だ。エボ●ボやらダ●テとは何だ女?そうか…お前が銃を持っているとなると…」

アルタイルはシャイナの言葉を聞いて首を傾げながら少し戸惑う表情を出した後、エツィオに向け直し微笑むように言った後…

エツィオ「あっ…その銃はアルタイルが使ってくれ（＾―＾）b俺には“氷魔銃（コイツ）”がいるから。もっとコイツを暴れさせないといけないし。」

アルタイル「承知した。では本題に入ろう…エツィオ、現世の浄化報告を頼む。」

アルタイルは二丁の銃を手の中で十分に回しエツィオは銃身を肩に乗せて軽く叩いた後、お互い同時に身体の中へと入れる。

そしてエツィオはアルタイルに地上の報告を伝えるべく、再び椅子に座り直してアルタイルに向けて言った。

…

……

……

アルタイル「ほぉ…浄化の最中に“教会”という輩が我々の使命を妨げ始めているのか。」

エツィオ「今の所はまだ使命に“障害は無い”から全然平気だ。“林檎”の気配も無いし…いったい何処へ持っていったのかな?」

アルタイルはマリクが造り出した魔力の椅子に座り、両肘を机に着きながら手を組んでエツィオの報告を聞いて「うむっ」と声を漏らした後…

アルタイル「“林檎”の気配はお前達が浄化した国に一時期停滞していたが、また動きだして更に“上”へと動き出したようだった。“何か”から逃れるように…」

シャイナ「(上って…たしかイギリス辺りかな?それにしても…)まさか、私を追い掛けている教会も“林檎”を追っているんじゃ…」

シャイナはアルタイルの話を聞いてもしもの事が脳裏に過り、額に左手を当てて深く思い込む仕草を取る。

エツィオ「それも絡んでくると…プヘー、“悪魔対人間対俺の三つ巴合戦”かよたくっ！超マンドクセーなｗｗｗ」

エツィオは口を八の字にさせてブーブーと面倒臭いような仕草を取りながら、“カメラ目線”に向けて言う。

アルタイル「出来る限り“目立たないようにする”必要が…」

アルタイルがそう言った後、マリクの左肩に窓から入ってきた白い鳩が停まる。鳩の足には紙がくるんでいてマリクは右手で足に絡んでいた紙を外して広げて内容をシャイナとエツィオに向けて言う。

マリク「地上の被害報告を言うぞ。“都市破壊率６割”“悪魔討伐数２００体”“一般人死者数５８５０人”だ。まっ、ボチボチな結果だな。次なる任務だとまたこれよりも“倍”になるだろう。」

シャイナ「おまっｗｗｗ一般人死者が５０００人以上って、それに評価結果は“ボチボチ”ｗｗｗ（何スかこのプロ●タイプのミッションクリア時ｗｗｗ）」

シャイナは酷すぎる現世の報告を聞き、人間の死者数を聞いてはぁと顔を下に附せて落胆する表情を出す。

マリク「んっ？それともう一つだが、お前達が浄化した国に“秘宝”を悪意を込めて勝手に使っている人間がいるようだが？」

エツィオ「ま　た　狂　人　相　手　か　ＹＯ（、ε′）」

マリクの地上報告を聞いてエツィオは口の八の字から雛の唇みたいに尖って、面倒臭い表情を出す。

マリク「それと、人間の女…お前が言っていた“教会”という連中も浄化した国に“潜伏”しているらしいぞ？」

シャイナ「マジかよｗｗｗ」

マリクは白い鳩を撫で鳩は気持ちいい声を出した後、空けられていた窓へと飛び立つ。

アルタイル「もしかしたら、我々が置き忘れた“物”かもな。すまないが、エツィオ…」

アルタイルは何かに思い当たるような仕草を取った後、エツィオに向けて言う。

アルタイル「次なる浄化に行く前に“我々の置き忘れた秘宝”も奪還してくれないか？私の代わりということになってしまうが…」

エツィオは「しゃーないな。」と軽く言ってすくっと椅子から立ち上がり、シャイナも「また人間が複数犠牲になるのＮＥ★」とため息を漏らしながら言い立ち上がった後…

エツィオ「引き受けるぜ。回り道も悪くないがな。」

アルタイル「すまない…苦労をかける。」

エツィオは子供のようにニタリと笑みを出しながらアルタイルに言った後、「行きましょ」とシャイナの一声で二人は中心に刻まれたアサシンの紋章へと歩む。

アルタイル「エツィオ…私は…「分かっているよ、アルタイル。お前が出来なかったことを絶対に成してやる。」っ！」

アサシンの紋章に入って光が迸る中、アルタイルはエツィオの余裕が溢れた言動を聞いて、はっとした表情になる。その直後…

エツィオ「シャイナは…俺が命懸けで絶対に守るから。８００年前

の“悲劇”なんて起こさせはしない。」

エツィオがシャイナに見せない本来の真顔でアルタイルにそう言った直後、二人の姿はこの世界から消える。アルタイルはエツィオの言葉を聞いて胸部に右手を当てた後…

アルタイル「アウダの分まで…頼むぞ…。」

マリク「大丈夫だ、アルタイル。あの魔神の笑みを見ただろう?だから…」

―悲劇なんて、起こりはしないな。―

第四十曲　ほのぼの朝食とスリは止めまSHOW♪

―現世　スペイン　マドリード　ビル屋上―

シャイナ「お待たせしますた。連載４０回目“チャプター２開始”だお＼（＾ｏ＾）／」

エツィオ「それにしても長かった“回想ｏｒアルタイル無双編”だったなｗｗまっ、俺の無双も良いところイパーイ予定（＊＾ｍ＾＊）」

ビルの壁に刻まれていたアサシンの紋章から光が逆り光のざわめきが止んだ後、光が止んだ中心にシャイナは上半身を左に傾けて、エツィオは上半身を右に傾けて、互いの手先が触れる直前の脚部を大の字に広げた体勢の姿…

“●Ｂ”による“イ●ュージョン”ポーズをカメラ目線に向けて、お互い目を輝かせながらポーズを取っていた。

エツィオ「おっしゃぁ！ш（。Д。ш）さぁ、今日もノリノリで俺の自由疾走（フリーラン）を」

エツィオがやる気を出す表情を出して両指の骨の音を鳴らしながら、何時でもビルを駆け巡るようにD●イ●ュージョン体勢を解いて、腰を落とし右足を後ろに下げた途端…

シャイナ「待てや、馬鹿ツィオ（一＿一＃）“ジジタイル”と“ジジリク”の言葉を忘れたのかぃ（一”一）」

エツィオ「OH★パウチッw（☆o◎）w」

バチンと、エツィオの頭部にシャイナがいつの間にか取り出していた“黄金の大きなハリセン”のような物が叩き込まれエツィオはシャイナに叩かれて頭部が下へと向く。

シャイナ「“目立つ行動を控えろ”と言われただろうが（、o′）おめぇ“暗殺者（アサシン）”だろ?? 隠密に行動しろよ。」

エツィオ「アゥン…元暗殺剣士ですたけどねwそれにアルタイルとマリクをジジ呼ばりするのは…」

シャイナ「我に口答えするな、ジジツィオ。」

エツィオ「アヒンッ（´Д`；）」

ベシッと、流石に痛かったのかエツィオはシャイナが手にする黄金のハリセンを頭部に更に叩かれて涙目になりながら、両手を頭部に抑えしゃがみながら見下ろされているシャイナに答える。

シャイナ「細けぇことは良いんだＹＯ（#￣￣）ｒテメェも“ジジツィオ”だろうが…それが嫌ならタグのスタイリッシュを“ジジイリッシュ”にタイトルを“【ジジイクリード】”に“書き換える”ＺＯ？」

口からコフーと煙のような物をシャイナは出しながら、“カメラ目線”とエツィオに向けて本気の事を言い放つ。

エツィオ「…ハィ…ワタシハ…ジジイデス……２８００サイ…ノ、ジジイ……デス……（ｐ＿；）」

シャイナ「良し。漸く認めたねジジツィオ。何時までも若い若いって言うんじゃねぇぞ？」

エツィオはシャイナに両膝を折って座り掠れた声になりながら、鬼瓦の表情になっているシャイナにひたすら土下座し、機嫌が良くなるまで土下座し続けた。

…

……

……

―スペイン　マドリード　中心都市内　服屋―

シャイナ「さて…アイモンじいちゃんに会う前に…」

シャイナと半透明になったエツィオは、ビルの階段から都市の歩道へと降りて都市の商店街に入って歩いた後、一件の服屋に入ってゴソゴソと服を一枚一枚手に取って先に会計を支払った後…

シャイナ「エツィオ、彼処の試着室に入ってカーテンを閉めた後、実体化して。貴方の“服”を渡すから。」

シャイナがそう言った後、肩に乗る半透明エツィオは「おぅ」と軽く言った後、試着室に入ってシャイナは試着室の中に服を置いた後カーテンを閉める。

エツィオ「へぇー。これが今現在の“現世の服”なんだ。格好良いじゃん（＊＾＾＊）」

試着室にいたエツィオが実体化し、数秒後カーテンを開けて外にいたシャイナに今着ている服を見せる。

エツィオが今着ている服は、皮で出来ボタンを一つ付けた黒いジャケットに、ジャケットの下には白い襟つきの白いシャツが腰まで出ていて、首には十字架が付いたアクセサリーに、紺のズボンと実体化した時と同じ鎧が付いたブーツを着けていた。

シャイナ「うっは、なんつー伊達男（イケメン）ｗｗｗ（２８００歳の若作りした●ボイスジジイＭＥ★）」

黒い髪を短く縛り付けた後ろ姿に右口元に付けられていた縦一本の短い傷に、三十路出前の抜群なエツィオの容姿を見たシャイナは数秒ギロっと睨み付ける。

エツィオ「?:どうしたんだ、シャイナ?:」

エツィオは一方シャイナの細目を出しながら自分を見詰めているのを見て、首を傾げながらキョトンとする表情を出す。

シャイナ「いや…何でもないよエツィオ。さて、アイモンじいちゃんには悪いけど、先に朝御飯食べてから行こ。」

エツィオ「そうだな。シャイナは“人間”だもんで俺のような魔神と違って当然腹減るよな。いいぜ、のんびりと逝こうＺＥ★」

笑顔満々の表情を出すエツィオがそう言った後、シャイナは「腹が減らないアンタが羨ましいよｗ」と言って服屋を後にする。

活気溢れる商店街に観光客やスペイン国民の間をぬって二人は歩いた後、近くのコーヒー店である“ス●バ”に入る。

―スペイン　マドリード　都市内　ス●バ店内―

シャイナ「注文は勝手に決めてもいい？服屋で金沢山使ったし…」

エツィオ「あっ、別にいいぜ。何でもいいよ。」

シャイナは朝食の二人分の生ハムとレタスのサンドとス●バラテを注文し、二人は店内にある窓側の椅子に座ってまったりと朝食を食べ始める。

エツィオ「ムフフー♪オィヒィぃぃ（＊´ω`＊）」

エツィオは幸せ溢れる表情で、口に頬張る生ハムとレタスのサンドを、モゴモゴと口の中で動かす。

シャイナ「プヒー…（´ω`）漸く落ち着きを取り戻したような気がする。（つーか、一睡は一回のみだったしｗｗｗ）」

エツィオが生ハムとレタスのサンドを満喫して食べている最中、シャイナは少量のパンをかじった後うろ覚えな表情で窓に映るいつも通りの車の交通風景を見詰める。

シャイナ「研修の時もそうだったなぁー。何時もこの様に朝一人食べて、黙々と研修場所に行って勉強をする。それが何時もの日常だったなぁー。でも…」

シャイナは窓に映る景色から一瞬視線を反らして、隣にいる朝食を楽しく頬張るエツィオを見て、少し口元を吊り上げて微笑む表情を出す。

シャイナ「研修後は一人で貸し出しアパートに戻って、何時ものように寝る。それが私の一日だったのに…あの電話がきて……」

シャイナは独り言で窓に映る車の交通景色を見ながら、トレーに置いてあったラテを手にとって口に入れる。

シャイナ「私の日常は一変したんだよねー。あの「シャーイナ（＾＾）」エツィオ？」

エツィオに声をかけられるを聞いて、シャイナは何事かと顔だけで動かすと…

エツィオ「これも美味しそうだったから買ってみたよ！これも食べようＺＥ☆」

ニコニコの表情を出すエツィオの両手に持っているトレーの上に、茶色い三角の形をした菓子の上に生クリームが付いた“ザッハトルテ”をシャイナに見せる。

シャイナ「えっ…ちょっｗｗエツィオ何時買ったの？？（アルゥエー？お金は私の手元にあるのに…何故？？）」

シャイナが少し固まる表情を出しながら、エツィオは「シャイナが注文したご飯食べた後に買ったんだよー♪」と言って、シャイナの分のトルテを一つ差し出す。

シャイナ「エツィオが買ったの！？一体どうやっ…」

シャイナが言った直後にエツィオは服の懐から二三個の“財布”を取り出して、シャイナに…

エツィオ「此所に来るまでに無防備に歩く人から“盗った”（「ー＋」）だからこれからの金銭的問題はナッシィング！！」

シャイナ「おっまっｗｗｗす…盗っ……（。Д。）」

笑顔満開のエツィオが堂々とシャイナに右手親指を立てて残りの指を丸めながら答えて、エツィオは先程盗った財布の中にある金で買ってきたトルテを普通に“食べ始める”。

エツィオ「８００年前の話だけど、魔界から逃げ出して現世に生活していた時、俺は“このように盗って食っての逃亡生活”していたからな。空腹感を感じない魔神といえ…数ヵ月間食べてないところを“人間”に見られていると“不信”として見られるし…大変だったんだぜ“当時”は。」

シャイナ「だからって…人の盗むなよｗｗｗ」

ドンと口の回りに生クリームが多少付きながら胸を張るエツィオを見て、シャイナは呆れた表情を出しながら天を仰ぐように右手を額に当てて、先が思いやられることを脳裏に思っていた。

第四十一曲　ターミ●ーターがいっぱいＤＡｗｗｗ

―数分後　スペイン　マドリード　中心都市　ス●バ店外―

？「…こちらα（アルファ）。目標Ｄ１１８地点にて発見。指示をお願いします。」

多くの市民が歩道内で歩く中、黒いサングラスと黒いスーツを見にまとった数人の“ハゲ頭の長身男”が、店外から離れた所にある歩道当たりで通行人に紛れながら、耳にイヤホンが当てられ口元にマイクが付いている所に、小声で通信相手に話し掛ける。

？≪Ω（オメガ）よりαへ。至急β（ベータ）とγ（ガンマ）を座標Ｄ１１８に向かわせる。それまでに各自待機せよ。≫

？「了解。それと上部の報告内容についてですが…」

通信相手は掠れたような声が混じった男の声が聞こえて、マイク越しに他の人に聞こえぬよう慎重した声で「そこに赴く前に、我々の書類を参考にせよ。」と、黒スーツの長身ハゲ頭に言う。

？《尚、目標側にはコードネーム“ゼウス”も付いているハズだ。βとγが合流したら直ぐに目標とゼウスの身柄を拘束しろ。手段は問わない。最後まで油断するでないぞ。》

？「了解。」

そう言った直後、通信が切れて黒スーツの長身ハゲ男は再び人混みに紛れて、一旦その場から離れていった。

…

……

……

―数分後　スペイン　マドリード　中心都市内　ス●バ店内―

シャイナ「あぁー…ん♪オィヒィィいいいいいいい（＊´ω`＊）チーズケーキも、まいうー☆」

シャイナは幸せ溢れる表情を出しながら、ラテからカプチーノを飲みザッハトルテからチーズケーキを口にしてゆっくりと次々と食べる。

―全ては、エツィオが盗った“財布の金”で構わず食べていた。―

エツィオ「よかったぁー♪シャイナがこんなに喜んでくれるなんて（＾Ｏ＾）」

エツィオはニコニコと表情を出しながら両手を顎下に乗せて、食べ続ける幸せ溢れるシャイナを見詰める。

シャイナ「これ食べちゃったら今度はデパートに入るか♪小物店回りたいし、色々買いたい！見たいｗｗｗ」

本来の目的である“アイモンに会う”ことを忘れて、エツィオが盗った財布の中身の“万札の束”を見て、小悪魔的な思考を心の中で出しながらエツィオに言う。

エツィオ「ＯＫっ（＾Ｏ＾）ｂシャイナがテンション上がってきた所で俺もテンションＵＰ！！観光巡りしよーＺＥ★」

エツィオもノリノリな表情を出しながら言い彼も“目的を忘れて”、机の上に置いてあったトレーの上にシャイナが食べた食器やコップ等を乗せて、二人は返却口へと歩んでいた時…

スタッフＡ「いっらっしゃいませ…」

カウンターにいたスタッフが出入口から入ってくる黒いスーツを着た長身のハゲ男達を見て、思わず声を詰まらせる。

ザッ…ザッ…ザッ…ザッ…

スタッフだけでなく店内の客達もぞろぞろと入ってくる黒スーツの男達を見て、少しざわめくように視線だけで彼らを追う。

シャイナ「えっ？何？？」

シャイナとエツィオも店内のざわめきを聞いて顔だけ出入口部分に振り向くと、黒いスーツを着た長身の男達がシャイナの所へと真っ直ぐに向かって来る。

シャイナ「（ちょっｗｗｗターミ●ーターのアレがイッパイいるんスけどｗｗｗ）誰？」

？「“シャイナ・アクイラ”だな？」

シャイナとエツィオが返却口に立つ位置から少し離れた所に黒いスーツを着た長身男達が止まって、中心からリーダーらしい男が少し

歩いた後シャイナに向けて言う。

シャイナ「へぇ…そうですけど??何…」

？「“教会”の命でお前の身柄を拘束する。」

無感情のままリーダーらしい男がシャイナの手を握るように歩もうとした時、エツィオがシャイナの前に立ち塞がる。

？「退いてもらおうか。お前の後ろにいる“目標”に要がある。」

エツィオ「嫌だと言ったら?」

エツィオがニタニタとにやける表情を出しながら男にそう言った時、エツィオの左肩の何かが掠めて壁に穴が刻まれる。

？「退け…１０秒以内に其処を退かなければ、お前を撃ち殺す。」

シャイナ「おまっうぇ…（ﾟДﾟ）…。ナニコノ展開ｗｗｗ」

流石に鍛えられているか男の右手には銃口にサイレンサーが付いた

銃を持っていて、銃声も出さずに威嚇だろうか壁に銃弾を付けたようだ。

前に立つ男だけでなく後ろにいる男達も懐から銃を取り出して、次々とエツィオに向けて銃口を向ける。

？「１０…９…８…７…６…５…４……」

エツィオ「あのさぁー（「▽」；）俺達これから“でぱーと”に行ってシャイナと一緒に店舗巡りしたいのにＹＯ★」

緊迫の空気が店内に漂う中、一人だけはっちゃけ全快のエツィオが両腕を広げてカメラ目線に向けながら言い男に言うが、男は眉一つも微動さえせず手に持つ銃のトリガーに人差し指をゆっくりと後ろへと動かす。

？「３…２…１……」

エツィオ「そう硬くなるなってばぁｗｗｗどうせ手にするそれは“玩具”だろ？ほらっ、どこでも見かける“ドッキリ☆てれび”みたいＮＡ感じでＳＡ★」

シャイナ「いやｗｗｗどお見ても“玩具”じゃねぇよｗｗｗ」

エツィオは呆れた表情を出しながら目の前に立つ銃を構えた男の鼻先に左人差し指を当てて、抗議するような仕草を取りエツィオの後ろにいた呆れた表情を出すシャイナに突っ込まれた直後…

？「0。」

パンパンパン…

カウント後にエツィオに向けて一斉に銃を撃ち、エツィオは至近距離で後方からの銃弾も無抵抗に“全身を浴びる”。

？「馬鹿な男め…」

エツィオはよろめきながら後ろへと反るように身体を後方へと曲げて、銃弾で破れた衣類の欠片と共にそのまま床へと倒れ血塗れの床を作る…ハズだった。

エツィオ「ひでぇぇーなぁぁー（、ε´）折角シャイナが買ってきてくれた服をー！！」

？「なっ！？」

突如男の着るスーツの襟にエツィオの右手がいつの間にか握られていて、男は驚愕の表情を出しながら男の体が意図も簡単に前へと“宙に浮く”。

エツィオ「身体を張って服の弁償しろＹＡ（、ｏ，）」

その直後エツィオは空中で前へと男が先程立っていた位置へと回りながら、右手拳を左手の平に当てて右足を曲げて左足裏を宙に浮いた男の鳩尾に向けて蹴りを叩き込む。そしてエツィオは空中で軽く身体を一回転させた後、両足を華麗に床に着け“カメラ目線”に向けて右手でピースをする。

シャイナ「あーあ…“二万”もした高級ブランド製が…（ノノ）。。。」

ドゴッ！

エツィオに蹴り飛ばされた男は一瞬の内に壁へと頭からめり込むようにして、悲鳴さえ上げられないまま尻を見せた状態で壁へとひび割れを複数刻みながら突き刺さる。

？「な…何だこ……」

エツィオ「歯　ぁ　食　い　縛　れ　。」

ドシャッ！！

一瞬の内に投げ飛ばされたリーダー格の男が壁にめり込まれたのを見て、驚愕の表情を出した直後に目の前に“銃弾で穴だらけになったニンマリ顔のエツィオ”がいて、二人の男の頭部にエツィオの右手左手刀が“頭部後ろまで突き抜けて”、突き出すエツィオの手刀と共に血しぶきが出てくる。

シャイナ「おまっ…歯を食い縛るレヴェルじゃねぇぇぇぇぇぇぇぇぇwwww思いっきり殺害しとるがなwwww」

エツィオ「必殺★マグロ解体ショー！！」

頭部に突き刺した手刀をそのまま“股間までなぞるように思いっきり引き裂いて”、右手左手に付いた赤い液体を横に振り払った直後、二人の男の身体が一直線に両断され中身の臓器と共に床へと零れ落ちる。

エツィオ「あーあ…穴ぽこの次に血塗れかよwwwごめんよぉシャ

イナァァァ、折角買ってくれた服がもう台無しになっちゃったぁぁぁぁ（＞人＜）」

エツィオは身に染み付いた血と穴だらけになった服を見て、顔半分血塗れになりながら後方にいたシャイナに申し訳ない表情を出してシャイナに情けない声を出しながら言う。

シャイナ「あ…うん、別にいいよ？まだお金はあるし（盗んだ金）…気にするなＹＯ★（もうスプラッターな展開になっちゃったぁぁぁｗｗｗ…もう、隠密というより無双モードに。ｗｗｗ）」

シャイナは目の前に映る血塗れの光景に呆れた表情を出しながら、作り笑いで血塗れのエツィオにただ答えているしかなかった。

第四十二曲　残さず人間を食べましょう

ー スペイン　マドリード　中心都市内　ス●バ店内 ー

客Ａ「うわぁぁぁぁぁ！！！！人殺しだぁぁぁぁぁぁ！！！！」

客Ｂ「早く逃げろ！逃げるんだぁぁぁぁぁぁ！！！！」

エツィオの殺害を見てもちろん普通にいた店内の客達は直ぐにパニックになって、店内の所々コップ割れお皿も割れる音が立てながら一斉に出口へと向けて店内のスタッフも一斉に走り逃げていく。

エツィオ「やれやれ…ここも騒がしいなｗｗｗ相変わらず今の時代の人（ｒｙ」

シャイナ「普通こんなの見たらパニックになるってｗｗｗ」

エツィオは上半身の黒いジャケットを脱ぎ捨てて、中の白い襟が付いたシャツを出しながら右手をぐっと丸めゆっくりと右手を開いた時、体内に埋め込まれていた鋼の塊“銃弾”を砂のように床へと零

す。シャイナはパニックになっている阿鼻叫喚の店内の中で、冷静にエツィオに向けて突っ込みを入れる。

黒スーツの男A「くそっ！報告書以上の“化け物”じゃないか！！こちらβ！αが全滅！！至急応援を…」

男がイアホンのスイッチを入れて、誰かに応援を呼ぶために応答しようとしたが…

エツィオ「誰が化け物だって!?俺は生粋の魔神だっての（、皿、＃）」

黒スーツの男A「ヒッ…ぎ…」

目の前にエツィオが居て不満の表情を出しながら男の左頬に右手を優しく添えた後、軽く右手を押し付けるようにしただけで男の首が“一回転”し、首がありえない方向に曲がったまま男の身体が後ろへと崩れ落ちる。

エツィオ「暗拳殺★」

更に遥か前方にいた黒スーツの男の身体に向けて右足を前に出して左足を後ろへと下げ、身体を横向きにして右手をかざした直後、“

黒い竜巻で出来た巨大な竜の腕のようなモノ”が出てきて遥か前方に居た黒スーツの男の胴体ごと突き破る。

黒スーツの男B「β2よりβ3とβ4とγ隊へ！“ゼウス”に正面問わず狙われたら一撃で殺られるぞ！！確実に遠距離から攻撃するんだ！！」

黒スーツの男C「了解！あと数分で応援部隊が到着します！！それまでに凌げ！！」

逃げ惑う人の最中黒スーツを着た長身の男達は、手にする銃をもう一度構え直し一斉に散開してテーブルの下やカウンターの影に隠れながらエツィオに向けて発砲する。

エツィオ「それぇい★」

エツィオはすぐさま背中からアンゲルスの白い触手を出して出口に詰めかける“一人の常客を背中から突き刺し”、突き刺された常客の悲鳴を聞きながら手元まで引き寄せた直後…

客D「ギャ…」

突き刺した常客の身体に赤い穴が何度も刻まれて、隠れていた黒い

スーツの男達の銃弾を、悲鳴すら上げられないまま突き刺した常客の男の身体を“銃弾の身代わり”にする。

エツィオ「さて、お前らも暴れてもらうＺＯ★」

エツィオは“盾”にした突き刺した常客が弾が何度もめり込まれて身体がビクビクと痙攣している最中…

ズピュッ…

銃弾の嵐を凌ぎつつ右手から紫の丸い光を生成して、突き刺した男の背中に当てて光を中へと入れた後…

エツィオ「Ｐｅｒ　ｆａｖｏｒｅ　ｍａｎｇｉ　ｔｕｔｔｉ（残さず食え）」

突き刺した男をカウンター辺りまで投げ捨てて、エツィオは左手を前にかざし氷の結晶みたいな光を後方にいるシャイナまで被って、撃ち続ける銃弾を完全に防ぎきる。

？《ギッギッ…ギィィィ…》

黒スーツの男Ｂ「んっ？何だ？？」

カウンターの影に隠れていた男が銃弾を装填していた時、奇妙な鳴き声を聞いて顔だけ覗くようにカウンターから顔を出した時…

？《ギニャァ！！》

口が開かれ牙が剥き出しにしていた“目が無いフルフルのような物体（第ニ十六曲参照）”に“男の頭部ごと”喰われ、首から大量の血が噴き出す。

グチャグチャと男の頭部と頭部の骨ごと噛み砕く音を立て、美味しそうに口元を血で汚しながら飲み干す。

どうやらエツィオが突き刺した常客の男の身体の中に“アンゲルスの卵”を入れて身体（なか）で羽化させた後…

幼体アンゲルスＡ《ギィィィ！！！》

幼体アンゲルスＢ《ギュッ…ギルルル！！》

カウンター辺りに転がり落ちた男の身体を前から突き破って“複数

の幼体”が奇声を上げながら“近くの獲物”から蜥蜴のように好き勝手に地を這い回っていたようだ。

黒スーツの男Ｃ「ひっ！…何だコイツは！！」

地を這いながら向かって来るアンゲルスの幼体を見て、銃弾を撃ち込むが、“特級悪魔の卵”から羽化したので“銃弾が突き刺さらず”に、逆に弾を“前菜のスープのように幼体の“身体の至る所から出ていた口”で銃弾を吸い込んだ後…

アンゲルス幼体Ｃ《ギニャァ！》

スーツの男Ｃ「ぐぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

アンゲルス幼体Ｄ《ギヘッ！》

カブッと、男が手にしていた“銃の腕ごと噛み千切り”、男が悲鳴を上げる最中別の幼体が男の頭部へと飛びついて“８０キロ以上ある人間の身体をそのまま押し倒した”直後、頭部ごと喰らって血祭りにする。

黒スーツの男Ｊ「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

アンゲルス幼体E《ギャヒ！ギャヒヒ！！》

グシャ！グチュ！！

アンゲルス幼体F《グキキキキキャキャ！！》

黒スーツの男U「ひいいいいいいいいい！！！！」

アンゲルス幼体G《キキキキキ！！！》

グチャグチ…

その他の幼体達も次々と死した常客の男の身体から生まれて、店内の至る所に隠れていた黒スーツの男達を喰らっていき、悲鳴と肉を喰らう音を立てながら徐々に銃声が鳴り止んでいく。

黒スーツの男W「くそ…一旦退避だ！こちらγ１０よりΩへ！！至急撤退命令をお願…」

エツィオ「逃　げ　る　な　Ｙ Ｏ　★　シャイナが買ってきてくれた服の弁償払ってないじゃないか。」

黒スーツの男が振り向いた直後、黒スーツの男の右肩にエツィオの左手が乗せられていて、エツィオがニコニコと笑顔を出していても声は怒りで満ちていた。その直後…

エツィオ「きちんと身体で払え。」

アンゲルスの幼体二匹がスーツの男の手を掴んで床へと押し倒し、エツィオが男の身体の上に乗って馬乗り状態にさせた直後…

エツィオ「Quando il cattivo bambino non l'addestra, non？buono？（おしおきしねぇとな？）」

黒スーツの男の顔面に向けて何度も“高速に殴り続けて”、脳汁と血が飛び散り頭部の中身ごと粉々につぶして顔の原型すら留めないぐらいに“グチャグチャ”にする。

エツィオ「Io non fermo di colpirLa fino a Lei piange！（お前が泣くまで殴るの止めないZE！）」

シャイナ「もう泣くどころでは無いがNAwww」

更に身体までも高速に殴り続けて男の原型すら分からなくなるまで“全身を挽き肉のようにグシャグシャにした”後、黒スーツの男の両肩を手で掴んで、身体を馬乗り状態のまま後方回転させてボウガンのように首のない男の身体を上へと飛ばした後…

エツィオ「Ａｃｃｏｍｏｄｉ　ｓｏｌｏ　ｄａｄｏ.」

エツィオは立ち上がって“カメラ目線”に向けて返り血が至る所に付きながら笑顔ハリウッドスマイル）全快で出し、両手が血塗れのままピースサインをし万歳の格好をした直後…

エツィオの影からまたしても“黒い竜巻で出来た巨大な竜の腕のようなモノ”が下から出てきてアッパーカットするようにグシャグシャにつぶれた男の肉片を店の天井まで押し潰し、血と肉片をビシャッと付ける。

アンゲルス【あらぁ…私の子達は貴方に働かれてずいぶんと“嬉しそうよ”？】

エツィオの身体の中からアンゲルスが嬉しそうな表情でも出しているかのように、数秒後の地獄絵図になった店内をエツィオの瞳を通

して言う。

エツィオ「そりゃぁ、“久しぶりに思いっきり暴れた”んだろアンゲルス？ただ“下等な人間相手”で、悪かったがな…」

グチャグチャと、血塗れになった店内で全滅したスーツの男達の死骸を幼体達が喰らっていき、所々肉の奪い合いが起きながら残さず食べた後、エツィオの所へ地を這って一匹ずつエツィオの身体の中へと飛び込んでいく。

アンゲルス【いいえ…寧ろ私も嬉しいわ。久々の人間の血肉は美味いわぁぁ…この血の味といい精力が溢れた精魂（にく）は極上で…アハン…。】

エツィオの身体の中にいたアンゲルスが、幼体（アンゲルスの身体の一部）を中で取り込み気持ちいい表情でも出しているようにエツィオにそう言った後…

エツィオ「アンタら悪魔の言う“人間の血肉”という味のモノすら分からないな。俺は元から…」

一生まれてから、一度も人を食べたことがないんだよ。一

第四十三曲　なんというプ●トクリードｗｗｗ

―スペイン　マドリード　中心都市　ス●バ店外―

スペイン特殊部隊Ａ「隙間を出来る限り無くせ！完全に店外を包囲するんだ！！」

スペイン特殊部隊Ｂ「国道の“無差別殺人犯（第二十四と二十五曲参照）”はここに居るぞ！！出てきたら一斉に撃て！！」

ス●バ店外には大勢のパトカーの車と大きなトラックが店の出口を囲むように動き、所々から手に銃を持って車の影やビルの影に隠れ屋上に身体を伏せながら銃口を入り口に向けて無差別殺人犯（エツィオ）が出てくるのを待つ。

辺りが騒然となっている中、囲む警官と特殊部隊から離れた場所で、黄色いテープが張ってある場所の外側で大勢の野次馬が見守る中…

アナウンサー「こちらマドリードテレビ局アナウンサー“エミリア”が、今現在の状況をお伝えします！」

野次馬の中のスペインテレビ局のクルーがテレビカメラに向けてマイクを握りながら、今か今かと特殊と警察の交戦の瞬間を捉えるため緊迫が満ちた表情でカメラに言う。

どうやら特殊と警官隊が此処に来た理由は、先程ス●バ店内にいた生き残った常客からの連絡を受けて此処にきたようで、さらには国道の無差別殺傷も既に情報が入っていたようだ。

エミリア「今特殊部隊が包囲している店内にあの国道の“無差別殺人犯”が潜んでいたようで、今まさに無差別殺人犯との戦いが始まろうとして…《ドゴォォォォォォォォォォン！！！！！》きゃぁぁぁあっぁ！！！！」

突然街全体が大きく揺れて囲っていた大型の車とパトカーが全て爆発したように“吹き飛び”、ビルのガラスが粉々に砕け、耐震性が無いビルが崩れ落ちる。そして地面のアスファルトが引き裂かれるように割れ、中の水道管が破裂し鉄骨がむき出しになる。

そんな最中一部の普通車及び大型車が野次馬達まで無抵抗に横回転しながら“吹き飛んできて”、テレビ局のクルーごと複数の人間達を“無差別に巻き込む”。

野次馬Ａ「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

野次馬Ｂ「うぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

グシャッと生々しい音が鳴りながら数台の大型車に巻き込まれて様々の身体の部分を欠損し、離れていた安全の場所も阿鼻叫喚の状況に変わり果て、新たな血と肉片を大量に零しアスファルトの上にペンキのように赤く染める。

スペイン特殊部隊Ｃ「シグマ応答しろ！！応と…」

スペイン特殊部隊Ｄ「うわぁぁっぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

同じくして隠れていた特殊部隊も地震に巻き込まれて、一部の者はビルの崩れた瓦礫に下敷きになり、砕けたビルのガラスの破片を全身に浴びて全身串刺しになる。

スペイン特殊部隊Ｅ「総員退…」

スペイン特殊部隊Ｆ「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

一部の者は地割れに巻き込まれて遥か下へと落下し、身体がトマトのように瞑れる。又は大きく吹き飛ぶ大型車やパトカーに巻き込まれて、悲鳴が全域に響き渡りながら一般人と同じように四肢の一部が欠損しながらそのまま車体の下敷きになって案の定“即死”する。

エツィオ「まったく、店中の次は外もかよｗｗｗ相変わらず、騒がしいなぁ（- - #）」

ガシャンと先程の地震で原型が分からなくなるほど全壊したス●バの位置から、エツィオは左手でアッパーカットしながら突き破るポーズを取りながら瓦礫から這い出て、両腕を水平に広げて手の平をヒラヒラと動かし、呆れた表情を出しながらエツィオが出てくる。

どうやら囲っていた車を背中から出ていたアンゲルスの触手を使って、触手を地面へと叩きつけてマグニチュード8ぐらいの“地震”を起こし、その衝撃で囲っていた車や普通車も“無差別に地震の衝撃”で吹き飛ばしたようだった。

シャイナ「もう街全体がパニックになってるｗｗｗもう隠密に行動なんて無理ですよねぇぇぇぇｗｗｗ」

いつの間にか水晶の光のようなモノで囲っていたシャイナもエツィオに続いてぬっと出てきて、エツィオがパチンと左親指の骨を鳴らした直後、水晶の形をした光が薄っすらと消えていく。どうやらエツィオが作り出したアンゲルスの氷の結界で守られていたようだ。

外の景色が“幾つ物のビルが倒壊”し、“大型車他普通車までも何台も横転”していて辺りのひび割れた壁やアスファルトにも赤い液

体がべっとりと“大量にこびり付く”。

ところどこ“地割れ”が起きて、中身の配線がバチリと火花を散らしながら千切れており、水道管が破裂し水が所々噴水のようにアスファルトの上に滴って、日常の交通が戦場のように“地獄絵図の光景”になっているのを見て、改めて嘆くようにシャイナは額に右人差し指を当てながら顔を俯かせる。

エツィオ「まぁ、いいか。“食後の運動”には持って来いだな。さぁ、Ｏ・ＲＥ　張り切っちゃうＺＯ★」

シャイナとは対照的にエツィオは腕を上へと伸ばして両手を組みながらボキボキと骨を鳴らした後、背中に出ていたアンゲルスの触手を閉まって、好戦的な表情を出しながら“カメラ目線”へと向けて両腕を前へと構える。

エツィオ「シャイナ！ちょいとこれから“お祭”になるＺＥ！だいぶ落ち着いてきたらシャイナを…」

シャイナ「分かっているよ、エツィオｗｗｗもうこうなった以上…アンタらしい祭を楽しんできなＹＯ♪」

シャイナはもうどうにでもなれよという表情を出しながら、エツィオに寄ってエツィオの上に掲げられた右手に向けてパシンと軽く叩

き、バトンタッチでもするように動作を取った後、エツィオに抱かれるようにして“カメラ目線”に向けてバイバイと左手を振りながら身体（なか）へと入っていく最中…

エツィオ「ノン☆ノン☆いや、俺だけじゃなく…」

シャイナ「？じゃなく？？」

シャイナはエツィオの身体に半分取り込められながら顔だけ上に動かして、頭部にクエッションマークが付き目が点の表情を出しながら、ニシシ♪と歯を見せながら笑うエツィオに向けて言う。

エツィオ「シャイナも“閲覧者”も…一緒にいいいい…」

シャイナを取り込みながらエツィオは足を軽く弾ませてタップダンスを取り、両腕を水平にし左足を軸にし右足を曲げながら身体をクルクルと回転させて瓦礫の上で軽いダンスをした後…

エツィオ「俺　と　楽　し　く　“ＤＡＮＣＥ”　し　よ　う　ＺＥ★」

ビシッと“カメラ目線”に向けて右手人差し指を指しながら、エツィオなりにかっこよく決めシャイナを身体（なか）へと取り込んだ直後、エ

ツィオの背後から“爆発”し戦いの始まりを告げる爆炎が鳴り響く中エツィオは空高く飛翔する。

どうやら上空に複数の黒い戦闘ヘリ“アパッチ”が飛んでいたらしく、エツィオに狙いを定めてミサイルを撃ち込んだが標準がずれてエツィオには当たらなかったようだ。

エツィオ「ヒャッハァァァァ！！！！天使（笑）とダンスだぜぇ！！！！」

エツィオは笑いながら上空に飛んでいたアパッチの足を“右手で掴んで”、軽々とヌンチャクのように“振り回しながら遊んだ”後、地上へと投げ捨ててヘリが爆炎と共に爆発して破壊し、次なる標的へと向けて空中を両腕を広げて高速に“滑空”しながら移動する。

エツィオ「空　中　暗　蹴　殺　★」

エツィオは宙に漂いながら右足を前へと蹴るように伸ばした直後、“漆黒の竜巻のようなモノで出来た巨大な竜の足”が出てきて、数機の戦闘ヘリを一瞬の内に蹴り壊し新たに空中で爆炎を咲かす。

エツィオ「Ｉｏ　ｓｏｎｏ　ｆｅｒｍａｔｏ　ｐｉ？　ａ　ｎｅｓｓｕｎｏ！！」

エツィオはそのまま倒壊していないビルの壁へと向けて落下した後、壁に足を着けてそのまま普通に“走り始める”。その直後数発のミサイルがエツィオの背後から追いかけるように撃ち込まれていき、背後から爆炎を出しながら次々とミサイルを絶えなく撃ち続けてくる。

戦闘ヘリのパイロット「くそっ！早くてロックオン出来ない！！」

ヘリのパイロットは舌打ちをしながらエツィオに向けてミサイルを何度も放つが、エツィオ自体が早すぎてロックオンが出来ないことに歯軋りしながら、がむしゃらにミサイルを無駄に放つ。

エツィオ「（おっと…まだ巻き込まれていないところもあったのか。だったら…）試してみるか。」

シャイナ『えっｗｗｗエツィオ一体何を??』

追いかけてくるミサイルを壁に刻みながらエツィオはビルの壁を飛び渡りながら高速に走り、まだ地割れが出ていない平和な箇所があった別の地区を見た後、“普通に歩いている人間達”のところへとビルの壁から平然に歩く人に“見られながら”両足を着けて着地する。

普通の通行人Ａ「うわぁぁっ！！何だ、こいつ！！？？！」

普通の通行人Ｂ「か…壁を走っていたぞ！？？！？！」

普通の通行人Ｃ「な…何なのよアンタ！？？！？」

無論通行人も白い目でエツィオを見ながら、変人扱いする表情でエツィオに言う。エツィオは「はぁｗｗｗ」とため息を漏らして、呆れた表情で両手を広げながら…

エツィオ「一般人もお構い無しか。やれやれ…」

普通の通行人Ａ「えっ…ヒッ……」

目の前にいた人間の男性の首を迷い無く“右手で掴んで”軽々と後ろへと投げた直後、グチャッと投げられた男性の身体が空中で“爆発”して臓器もろとも粉々に砕けながら、歩道を歩いていた通行人達に向けて赤い肉片をボトボトと落とす。

普通の通行人Ｂ「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！人殺し！人殺しいいいいいいいい！！！！」

普通の通行人C「いやぁぁぁぁぁぁ！！！！助けてぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

エツィオの殺害を見た通行人達はパニックになって一斉にエツィオから逃げ出し、またしても悲鳴が轟きながら崩壊した都市の一部と同じように阿鼻叫喚の状況になる。

シャイナ『（ ゜Д ゜）……ちょｗｗｗ市民普通に投げやがったｗｗｗそれにお構いなしでミッソーを撃ってきたしｗｗｗ』

エツィオ「集中力切れているな。まったく…」

ガガガガガガガガガガ！！！！

エツィオは背後から追いかけてきたヘリに向けて走り出し、ミサイルが無くなったのか機関銃でヘリからの攻撃を避けつつ、ヘリの胴体まで走った後思いっきり上空へと飛翔しヘリの胴体に向けて両手で交互突き刺した直後…

エツィオ「アーサーシーン流ぅぅぅ…」

エツィオはヘリと共にアスファルトへと落下しながら、両腕にぐっと力を入れた後…

エツィオ「クラッチ！！！！」

ゴシャッと戦闘ヘリがV字型に“ひしゃげるように折れて”、中に居たパイロットもろとも折れたヘリごと身体が“逆くの字”に折れて、ヘリと共に絶命した後…

エツィオ「ぽいっちょ♪」

逃げ惑う人に向けて折れた戦闘ヘリを投げつけ、グシャリと何人も折れたヘリに巻き込みながら悲鳴と共に新たな血みどろと屍を築きあげる。

シャイナ『うほっｗｗｗ何という無差別殺傷ゲーｗｗｗ（そういえばどこかのＰＣサイトで一般人を無差別暗殺する動画をみたようなｗｗｗ）やっぱリアルと二次元は違うねぇｗｗｗ』

エツィオ「んー、そろそろ“本体”が出てきてもいいころだと思うけどなぁ？それでもまだ本体そのものは落ち着いているのか…ん？」

エツィオは何かを感じて、顔だけ前方を見るように動かした直後…

シャイナ『（〇Д〇）…。』

エツィオ「へぇぇ…」

シャイナはエツィオの身体の中で、絶句するような表情を出し息を漏らす。逆にエツィオは目の前に立ちはだかるモノを見て、ニタリと口元を吊り上げて笑うような表情を出しながら、そっとつぶやいた。

目の前には大きな大砲一つに装甲で覆われ長いキャタピラが付いた戦闘装甲車「軍用戦車」が、エツィオに向けて両脇に付いた長いキャタピラを前へと動かしながらゆっくりと近づいていた。

第四十四曲　ミートボールとソーシャルステルス

―スペイン　マドリード　東側地区都市―

シャイナ『今度はヘリに続いて“戦車”かよｗｗｗ』

前方から戦車が数台向かってきて、逃げ惑う人間をキャタピラで牽きながら、エツィオへと走り向かって来る。

エツィオ「へぇー、これが“せんしゃ”って、言うんだぁ。亀のように鈍足だなぁぁぁ。」

戦車だけでなく、上空から大型のヘリが数機来て、窓が開けられた直後に、武装を包んだ人間達が紐を蔦ってアスファルトへと次々とエツィオの遥か後方から降りてくる。

エツィオ「ハッハー！おかわりが来たな。流石“教会”金を惜しまず色々と雇っているねぇｗｗｗ」

エツィオがそう言った直後に前方にいた戦車一台から、前方に付い

ていた大きな砲口からドカンッと、エツィオに向けて豪速球の何かを放つ。

エツィオ「おっ？なにこの“黒い石炭のようなミートボール”は？？」

戦車の砲台から高速に放たれていたモノが、エツィオの“左手一つで受け止められ”、好奇心旺盛に左手の中にあるモノを握り締めながらシャイナに言う。

シャイナ『普通に掴むなよｗｗｗ…それは戦車の“砲丸”ｗｗｗ』

エツィオの左手に握っていたモノが戦車の砲丸だと教えられ、身体の中にいるシャイナに突っ込まれながらエツィオは興味深な表情を出し、ジロジロと戦車の砲丸を見た直後…

エツィオ「何か“鼻くそ”みたいだから、テラバッチィ★…イラネ（、ε´）」

手にしていた砲丸をポイッと軽く後ろに投げ捨てて、投げ捨てられた砲丸がコロコロとアスファルトの上を転がりながら、ヘリの下に集まる武装兵達に転がった直後…

武装兵Ａ「何だ？この…」

武装兵Ｂ「砲…丸……？？」

兵がキョトンとした声を出した直後、砲丸が“爆発”を起こしてヘリの下に集まっていた武装兵全員が一瞬にして原型を留めないぐらい“血肉に変わった”。

シャイナ『（゜Д゜）』

エツィオ「へぇ…となると…」

エツィオは何かを思い付いたように口元を吊り上げた後走り出して、エツィオが走り出した時次々と戦車から砲丸をエツィオに向けて放つ。

エツィオ「ほっ！んっ！！やっ！！」

エツィオは撃ち出される砲丸一つ一つ足を前に伸ばして、右足裏や身体を捻って左足裏を使って正確に“砲丸を蹴り当てて”、サッカー選手のように砲丸を蹴り飛ばした後…

エツィオ「アサシン-　S★ストライカー！！」

エツィオは身体を後ろにして軽く宙に後方回転しながら、撃ってきた砲丸に右足のつま先に砲丸を当てて“オーバーヘッドキック”で、砲丸を蹴り飛ばす。

ガツンと、砲丸同士が前へと蹴り飛ばされながら当たっていき、砲丸一つ一つがビリヤードの弾のように弾かれた砲丸が中心へと飛んでいった直後…

エツィオ「逝　っ　て　よ　し＜（゜Д゜）」

砲丸の中心に先程オーバーヘッドキックで蹴り飛ばした砲丸が中心に集まった砲丸に当たって、次々と数台の戦車や数件ビルにめり込むように入った直後…

シャイナ「うっはｗｗｗなんというキャプテンエツィオｗｗｗ」

エツィオ「ＮＯ★フリーのアサシンＳＡ（＾Ｏ＾）」

ズドォォォォォォォォォン！！！！

大地を揺るがすほど大爆発が起きて、戦車の装甲が砲丸の爆発で粉々に四散し、ビルも砲丸の爆発で硝子が全て割れて、火災を起こしながらビルの柱さえも吹き飛ばしたかのように踏み潰されるように倒壊する。

逃げ惑う人A「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

逃げ惑う人B「ビルが爆発したぞ！！！！逃げろォォォォォォォォォォ！！！！！！」

逃げ惑う人C「アイツは人殺しだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

エツィオの人外的な力を見て人々は更にパニックになり、一部の者は倒壊したビルの瓦礫に下敷きになり、砲丸の爆発に捲き込まれて身体の一部が欠損するなど等、またしても地獄絵図になる。

エツィオ「うっし、混乱している間にさっさと蒔くとしようか。」

エツィオは高速に逃げ惑う民衆に走り混じった時、上空からのヘリや街角からの戦車数台現れ更に増援部隊が現れるのを見て、エツィオはむーと両頬を膨らませて面倒臭い表情を出しながら考えていた時…

エツィオ「！いーこと、思い付いたＺＯ」

何か思い付いたエツィオは小悪魔的な表情を出しながら、ある程度深く逃げ惑う民衆の中に入った後…

エツィオ「“器”だけ、頂くとしますか。」

トスッと何処にでも見掛ける暴走族のピンクのパンク頭に派手なジャケットを羽織ったの青年を忍んで捕まえて、青年の口を左手で塞ぎながら背中から心臓を突き破るところまで右手を身体に刺した直後…

刺された青年の身体が細かい糸のように成ってエツィオの身体になぞるように蠢いた後、一瞬の内にエツィオは先ほど刺した“ピンクのパンク頭の青年の姿”へと変わった。

シャイナ『ちょっｗｗｗ擬態したｗｗｗ（なんというプロ●タイプのア●ックスさんｗｗｗその他にもターミ●ーターのあの人ですなｗｗｗ）』

擬態エツィオ「ただ人の器（からだ）だけを擬態するだけじゃないＺＥ★見てろよ、シャイナ（＾Ｏ＾）」

エツィオは逃げ惑う民衆と同じように走り逃げながら、人通りが少ない所へと入り逃げ惑う群衆から路地裏へと入り込んだ後…

擬態エツィオ「今擬態したこの器の“情報”も全て俺のモノ★なのでぇ♪」

ガコンと、エツィオは車の車庫らしき所を見つけて閉じられていたシャッターを右手で掴んで、“紙くずのようにシャッターをぶち壊した”後、中から黒いフレームで被った大型(バイク)二輪車が現れた。

擬態エツィオ「よいしょっ…」

バォォォン！！

エツィオは大型バイクの座席に股がるように乗って、擬態した器の情報を元にバイクのミギサイドに付いていた鍵を捻ってエンジンを掛け、右側に付いていたスロットルを二三回吹かす。

シャイナ『おーｗｗｗバイクの運転方法をゲッチュしたワケねｗｗｗこりゃいいなぁｗ（◎ｏ◎）ｗ』

擬態エツィオ「さぁ、盗んだ“カッコいい軍馬”で走り出すぜぇぃ

！！」

シャイナ『おまっｗｗｗ軍馬じゃなくてソレはバイクだっつーの！！ｗｗｗ』

アクセルバーを握ってエツィオが乗ったバイクは後輪を何度も摩った後急発進し、タイヤが滑る音を立てながら裏路地を爆走していった。

第四十五曲　隣州バルセロナへ隠密移動ですw

―スペイン　マドリード　南側高層ビル通り―

ブロロロロロッ！！

擬態エツィオが運転するバイクは路地裏を疾走し擬態した情報を見ながら遠回りしつつ、別の地区へと入って普通に走る車の大通りへと出る。

エツィオは脳裏に写し出される器の情報を一部取った後、バイクのスピードを落としてきちんと“人間界の制限速度を守りながら”、普通に走る車と混じって大通りを走る。

擬態エツィオ「♪～♪」

オーロラビジョン『緊急速報です。今現在マドリードに“イタリア国道行きでの大量無差別殺人犯”が潜んでいるという情報がありました。』

エツィオは交互に止まる複数の車と共に赤信号で止まりながら、ビルに映る巨大なテレビのアナウンサーの声を聞きながら余裕顔で口笛を吹く。

オーロラビジョン『更にはイタリア行き国道だけでなく、中区にいた観光客含めてスペイン国民６７００人と現地取材にいた我々クルー１０人、警察特殊部隊含めて４００人、計“７１１０人”の死亡の確認がされました。』

信号機が青になって擬態エツィオはバイクのアクセルを握って普通に走り出し、所々のビルの大型テレビが写りながら更にニュースの内容を全ての通行人他国民に伝える。

オーロラビジョン『尚現地、“無差別殺人犯”は逃走中であり、今警察と特殊部隊が本部で話し合いながら検討をしています。もし“無差別殺人犯”を見かけた人は…』

シャイナ『（うっはｗｗｗこりゃ後ここの国民全員が“敵”になるなｗｗｗこんだけ全域に放送しているとなると…）え…エツィオ。』

シャイナは鼻歌をしながら楽な表情でバイクを運転するエツィオに向けて、やや心配そうに瞳から通してエツィオに言う。

擬態エツィオ「大　丈　夫　。こうして擬態して器通りの情報を元

に隠密行動（ソーシャルステルス）しているからＳＡ★今現在の人間達の“技術”は対したモノは“無い”。シャイナ、最初に俺に言ったろ？」

シャイナ『あっ…（ ゜Д ゜）』

シャイナは何かに思い当たるようにはっとした後、エツィオはニヤッと“カメラ目線”に向けてバイクを運転しながら右手人差し指を指す。

擬態エツィオ「“暗殺者（アサシン）らしく隠密に行動しろ”ってネ（＊＾―＾＊）」

エツィオはニシシ♪と歯を見せながら“カメラ目線”に向けて笑った後、アクセルを握り直してバイクを運転しそのまま直進する。

シャイナ『（えっｗｗｗ何この安心感が漂うようなゲロ甘い空気ｗｗｗ私がまさか…いや、そんなハズねぇよｗｗｗ）』

シャイナはエツィオの身体の中でオェッと声を漏らした後、両頬が一瞬赤くなって口元に両手を被うように必死に口元の砂だけでなく顔も、カメラ目線から背けるように隠していた。

擬態エツィオ「（うむー、“けーさつ”だけじゃなく所々シャイナ

の言う“教会”ってやつが沢山いるなぁ。出来る限り面倒事を起こしたくないしｗｗｗ）」

バイクを運転しながらエツィオは視線だけ動かすと、先程ス●バ店内で戦った黒スーツの長身ハゲ頭男が歩道や街角や他の店内に沢山いた。

更には今いる大通りの上空にテレビ局のヘリだけでなく数機の戦闘ヘリが何度も旋回するように飛び回り、様々なビルの屋上には長い銃を手にした特殊部隊及び武装兵達が警備するように待機していた。

シャイナ『先ずは“アイモンじいちゃん”に会おうよ。今後どうするか着いてから考えよ。』

擬態エツィオ「そうだな。じゃぁ、シャイナ、いつも通り道案内頼むＺＥ（＾Ｏ＾）」

エツィオがそう言った後、シャイナは「次の信号を右に曲がってＮＥ★」と言って、エツィオは「アイサー♪」と言ってシャイナが言う通りにバイクを走らせて行った。

…

……

……

―スペイン　バルセロナ　路地裏住宅地通り―

擬態エツィオ「おっと…此処から先は“ぜんしゃつうこうどめ”ね♪」

エツィオが運転するバイクはマドリードからバルセロナへと移り、バルセロナの中心大通りから人通りが少ない薄暗い路地へと入って、道幅が細い道路の入り口の“標識”をエツィオは見て、脳裏の情報を元にエツィオはバイクを止めて駐輪場辺りに駐車する。

バイクのエンジンを止めてエツィオは薄暗い道路へと入り、白い煉瓦で何度も積み重ねて建てられているか昼間なのに光が遮られて暗く、所々に設置してあった街灯の光が主に路地裏の薄暗さを避ける為に灯していた。

擬態エツィオ「さて、人も居ないし…此所で。」

エツィオは人が通っていないことを確認した後路地裏の影に入って、煉瓦の角で擬態した顔の表面を左手で摘まんだ途端…

グチャと、皮が裂かれる音を立てながら擬態していた“器”の皮が破けて、左手で皮を破きながら中の本来のエツィオの姿が蛹の脱皮

のように現れる。

エツィオ「ばいくの“操作方法だけゲッチュ”して、残りはぁ～♪」

ピンクのパンク頭の青年の皮を投げ棄てて、更に先程の戦闘でボロボロに破けた襟付きのシャツと穴だらけのズボンを…

エツィオ「デ・リィーツ★」

エツィオの左親指の骨を鳴らした途端、皮が突然燃えて消し炭になるまでに焼けた後、身に着ていた鎧付きブーツ以外全て一瞬の内に焼け燃えて、服が全て燃えた後“大事な部分が出たまま”そのまま“裸”になる。

シャイナ『ギャエッ！！エツィオ裸…裸になっているよ！！それに大事な所“丸見え”ぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！』

“カメラ目線”からでモザイクでもかけていい位大事な部分が見えていたので、一応閲覧者に対しては“不適切を使わない緩い文章表現”だけで一応附せておく。

何故って…刺激過ぎる文章はノクターン小説行きになってしまうからＳＡ★　Ｂｙ作者

エツィオ「さて、アイモンに会いに行『待　て　よ　ｗｗｗ“裸”のまま“フツーに歩く”つもりか』

エツィオ「えっ？裸じゃぁ可笑しいの？？」

シャイナ『当　た　り　前　だ　ろｗｗｗ寧ろ“変態”呼ばりされるＺＥ（ノ－ｏ－）ノ┻』

シャイナが今のエツィオの姿を見て焦りを込めた言動を吐きながら身体（なか）で突っ込んだ後、エツィオは「おっとっと！これじゃ、本当に怪しいよなぁ★」と照れるように表面を出しながら角から出るのを止める。そして…

エツィオ「今現代の“人間の鎧”は安っぽいなぁ～♪ひと暴れした後にこんなにボロっちくなるとはねｗｗｗ」

両足のつま先を交互にし右手を腰に当てて左手を上に伸ばし、顔の方向を“カメラ目線”に向けながら“ニタリ笑いのセクシーポーズ”を取った直後、黒い光がエツィオの全身を包んで光が止んだ直後、黒いローブを身に纏い鎧を付けた元のアサシンの衣装へと変わる。

シャイナ『当たり前だろｗｗｗ今現在の人は戦争とか無いし（内乱

はあるけどねｗ）、これが通常通りの今の服装だもん。』

エツィオ「“今”ねぇ。人間達には気づいて無いかもしれないけど…」

エツィオはノリノリのセクシーポーズを解いて胸部に右手を翳した後、ゆっくりと前へと伸ばしてエツィオの身体（なか）からシャイナを出す。

エツィオ「俺という存在がいる限り、“聖戦”はまだ現実的に終わっていないんだよねー「（，、）Γ」

シャイナ「ですよねぇぇーｗｗｗもう俺ら人間は昔のことすら忘れているし…リアル的にこのような“現実”も忘れないでＮＥエツィオ★」

エツィオ「まっ…実際的このような事態を知っているのはごくわずかの“人”だけだしｗｗｗ無理もねぇかｗｗｗ」

シャイナはこりゃ無理だという表情を出して、両手を無駄にヒラヒラと動かしお手上げでもしている素振りを出す。エツィオはシャイナの現実的発言を聞いて思わず両肩を落とし、少しばかりため息をついた。

…

……

……

―スペイン　バルセロナ　路地裏通り　雑貨屋“アイモン”工房入り口前―

シャイナ「着いた　着いた。ここに来るのは何年ぶりだろう。私がまだ餓鬼だったころに何度も遊びにきたなぁ～。」

シャイナはアイモンの雑貨屋入り口前まで歩んで、脳裏に映る過去の映像と共に昔と変わらない入り口風景を見て思わず顔が綻ぶ。

エツィオ「シャイナのじいさんの“親友の家”かぁ。ふーん、なんだか…」

シャイナの肩に鳥座りで乗っている半透明のエツィオが、右手で鼻下を軽く擦りながら何かを見上げるように視線を一点に絞った後、シャイナに向けて顔を下ろしながら言う。

エツィオ「ど…いや、何でもない。それよりも此処の薄暗い所でよくも住んでられるなぁｗｗｗ」

シャイナ「（ど?ドーナツ??同僚??んな訳ないよねｗｗｗ）此処は人通り少なくて、たまにしかそこらへんにいる疫中やらの絡みでの面倒事があったけれど、最近は何も起こらないからさ。今のところ治安も良くなっているし…」

シャイナは一瞬エツィオの途切れた発言を聞いて少し首を傾げながら戸惑う表情を出したが、エツィオの工房の窓に映る中身を見て興味津々の表情を見た後、シャイナはゆっくりと工房入り口へと歩き出した。

第四十六曲　ハイテンション工房おじさんＶＳ魔神ジジッィオ

―スペイン　バルセロナ　雑貨屋アイモン工房　店内―

シャイナ「こんにちわー、そして久し「シャイナちゃぁぁぁぁぁぁぁん！！！！」」アベブッ！？？！！」

シャイナが入り口のドアを開け挨拶しながら入った途端、目の前から“特急列車のように”シャイナを高速突撃（たいあたり）してそのまま床に押し倒す。

？「お久しブリブリだけど、怪我は無かったかい！？リオールから電話で聞いて、俺はその時マジ焦ったＹＯぉぉぉぉぉぉぉ（「○ ｰ；）」

シャイナ「お〝っ…おじざ…ぐる〝じ…おゲェエ〝ぇエえ〝エえエ。」

シャイナを押し倒しながら抱き締める（締め上げる）ように、ギュゥー（メッキメキ★）♪とゆっくりとシャイナを立たせながら、押し倒した店内の本人も同時に立ち上がる。

？「イタリアで何やら凄いことしてしまったんだって!？それにここに来るまでのあの事件と、今現在の即ニューで聞いた色んな物をぅ!!…オジタン、スッゴい失神しそうになったＹＯ★」

シャイナをきつく抱く者は、雑貨屋の工房に合う雰囲気の紺のオーバーオールに、鼻下に白い二つの髭を生やし、ハゲ頭の額に十字の古傷が付いた皺がややある５０代手前の男が、きつく抱き締めているシャイナの胸元に向けて、男泣きしながら何度も顔を擦り付けていた。

―雑貨屋店長　アイモン―

シャイナ「お〝っ…え〝え〝え〝…ぎ…ギブ……」

アイモン「シャイナぁぁぁぁぁ…あっ！シャイナちゃぁぁぁぁぁぁぁぁん!!!!」

遂にはシャイナは口から魂が出るぐらい失神し、シャイナの青ざめた表情を見たアイモンは思わず再会の感動から危機的表情に変わって、とりあえず蘇生しようとシャイナを床に寝かした後…

アイモン「待ってろシャイナちゃん!!俺が人口呼「“ 俺のシャイ

ナ”に、何をするんだ！じいさん！！」オゲゴォぉぉ！？？！！」

シャイナに口づけをする瞬間、突如アイモンの身体がきりもみ状態でペラペラとタコが海で漂うように後方へと吹き飛び、アイモンは工房の奥にある本棚へと激突してそのまま降りかかる本達にボトボトと下敷きになる。

エツィオ「シャイナはまだ生きているＺＥ！心臓も動いているし無意味な人口呼吸は止めろＹＡ（＊、θ′＊）つーか、“俺のシャイナに、気安く長く触わんな。”」

いつの間にか実体化したエツィオがおり、右膝を折って半分中立しながらシャイナを抱き抱え、工房の奥の本の下敷きになったアイモンに向けて牙が丸出しになった“鬼の表情”を出しながらシャーシャーと威嚇しながら見詰める。

どうやらアイモンの左頬に向けて“軽い平手打ち”を咬まし、重症を負わせないよう力を巧く加減し半減にさせて“軽く吹き飛ばす程度”でアイモンを叩き飛ばしたようだった。

シャイナ「（アルェェぇ〝？何か“俺の嫁”発言をぶっちゃけ私に言ったような気がしましたがｗｗｗ）あ〝ぁ〝ぇ…エヅィオ〝…私…い〝……きて…る？」

魂が抜けかけて青ざめていたシャイナは、エツィオに抱き起こされることで最初は掠れた声だったが、徐々に息が段々と透き通るように整っていくのを感じて、顔だけ上に動かして朧気な表情でエツィオに言う。

エツィオ「その生気溢れる声さえ出ていれば、大丈夫だ！暫く安静に「待て待て待て待て待てぇぇぇぇぇぃ！！！！」

突如積み重ねられた本の山から脱皮如くアイモンが這い出て、鼻血を出しながらシャイナを抱くエツィオに向けて猪のように突進し…

アイモン「“俺のシャイナちゃん”に何しとるんじゃぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

エツィオ「あ〝ぁ！？？！！何だこのジジイ！？？？！！」

アイモンが軽くジャンプして宙に浮きながら両足を前に伸ばし、憤怒の表情を出すエツィオに向けて…

アイモン「アイモンキィィィィィィク！！！！！」

“ドロップキック”を繰り出すが、そこにはエツィオの姿は無く空しくアイモンは開けられていたドアに吸い込まれるよう飛んでいって、店外へと身を放り投げる形へとなる。

アイモン「アジャパァぁぁぁぁぁぁ！？？！？！」

エツィオ「たくっ…。」

ズザーと滑り落ちる音が鳴って、エツィオは両肩を落としながら呆れた表情を出し、シャイナを抱き抱えたながらカウンターの前に設置してあった黒いソファーに寝かせるように、シャイナの身体を横向きにする。

本物のエツィオは店内のカウンター席にいつの間にか座っていて、エツィオの“超人的横滑り避け（スウェー）”でシャイナを抱き抱えたままカウンター席へと移動していたようだ。

アイモン「し…シャイ…ナちゃ……ん……ガクッ。」

エツィオ「全く」（-〜、;）「このじいさんは…」

固いアスファルトに尾てい骨から背骨にかけて叩きつけられたか、アイモンは口から泡を吹きながらピクピクと痙攣し、そのまま気絶する。

エツィオは呆れながら、自滅したアイモンへと寄って仕方無く抱き起こし、店内へと戻っていった。

…

……

……

―数分後　雑貨屋アイモン　自宅キッチン―

アイモン「そうか、そうか。俺の勘違いとはいえ、そこの“黒ローブの兄ぃちゃん”がシャイナの叔父リオールの言う“勇者”か。スマン…マジ悪かったｗｗｗ」

エツィオ「あんな固い所に叩きつけられて、普通背骨がそのまま逝くような気がしたのに…タフだなじいさん。」

アイモン「俺はまだ“現役工房屋の店長”だからな。ここで背骨とか折れたら店潰れちまうわぃ。（物語的な意味でｗｗｗ）」

アイモンはキッチンでコーヒーと菓子を作りながら椅子に座るエツィオに言い、香ばしい匂いが漂う中暫くしてアイモンはお盆の上に三人分のコーヒーと皿に入っていた小さな丸い穴が開けられた菓子を持ってきた。

アイモン「レモン果汁入り“ドーナツ”だ。黒ローブの若いの食べてみんしゃぃ♪味は保証するＺＥ☆」

バチコーン★と、アイモンは“カメラ目線”に向けてウィンクをかまし、シャイナはオエッと顔を背けて手で口を押さえる態度を取る。

エツィオ「どーなつ！？この狐色のような菓子が、どーなつって言うんだ！！頂きまーす♪」

逆にエツィオはそんなの関係せずワクワクと、アイモン手作りの焼き立てドーナツを食べ始める。そんな最中…

シャイナ「（もう少しで背骨が折れる所だったｗｗｗハゲ頭のオジサンの癖に力有りすぎｗｗｗ）別にいいよ、アイモンじいちゃんと遊んでいた頃はまだ私が保育園に通っていた頃だったし…。」

シャイナはドーナツを少しかじって、脳裏に映る過去のことを思いだしながら平和に遊んでいた自分を懐かしく振り返る。

アイモン「懐かしいな。今のシャイナちゃんを見ると、昔とほぼ変わらない所があるなぁ～♪オジタン再会で嬉・し・い・ＺＯ★」

シャイナとエツィオは椅子に座ってアイモンが作ったコーヒーを飲み、机の上にある皿に入っていた“ドーナツ”を食べながら、三人とも楽な時間を過ごす。

アイモン「まぁ、取り敢えず本題。リオールから電話で事情を聞いているから、旅の理由は理解したが…」

アイモンはテーブルの上にあったリモコンを手に取り、テレビの受信センサーに向けて押した後、先程とオーロラビジョンに流れていた同じような放送画面が映し出される。その後…

エツィオ「！俺の姿が映ってるぅ／（＾ｏ＾）／スゲー！！！！」

画面が切り替わって“エツィオが街中で無差別に無双”している映像が流れて、エツィオは自分の戦い姿が映っているのを見て、キャッキャッ♪と興奮する。

アイモン「…まっ、こんな有り様だ。暫く外に出ないほうが良いだろう。」

シャイナ「そうだね…（ー・ー；）」

アイモンのお手上げするような素振りをシャイナに向けて苦笑いす

る。

テレビ画面ではしゃぐエツィオと違ってシャイナは、両手で顔を隠すようにしてそっと「最悪ｗｗｗ」と呟いた。

第四十七曲　破壊の王城の一柱と生粋なる魔神

―スペイン　バルセロナ　夕刻　雑貨屋アイモン工房　店内―

アイモン「今日はここら辺で閉めるか。」

店内の最後の客の接客を終えたアイモンは店入り口へと歩み、入り口のドアノブに飾ってあった札を引っくり返して、店の入り口の鍵を閉める。

オレンジ色に染まった空の色の光が店内の窓から射し込み、アイモンは店内の窓へと歩んで脇にあった黒いカーテンを広げて、夕刻の光を遮るようカーテンで閉める。

アイモン「シャイナちゃーん！夕食作るの手伝っ「シャイナなら、寝ているＺＥ★」オロンッΣ（゜、゜）ノノ」

アイモンが二階へと階段を登って自室にいるシャイナに声を掛けたが、シャイナの代わりにエツィオが応えられる。

エツィオ「此所に来るまで、シャイナは“一回しか寝ていない”ん

だ。暫く休ませてくれ。」

アイモンは自室に入ると、ベッドの上にスヤスヤと眠るシャイナの姿があって、エツィオはシャイナの眠る傍に座りながら優しくシャイナの髪を撫でるように言う。

アイモン「そうか…この子にとっては“刺激すぎる1日”だったかもしれないな。“今日という騒動”といい、堪ったモンじゃない。」

エツィオ「俺にも落ち度があったな。俺は勇者ではなく“魔神”だから“疲労”というモノは“知らない”。今日はシャイナにとってハチャメチャな1日だったからさ…」

エツィオはシャイナには見せない真剣面(マジメ)ヅラで二階のカーテンを閉めていない窓の風景を見ながら、じっと何かを過るようにアイモンに言う。

アイモン「そうか…だが若いの、お前は俺に会うまでしっかりとシャイナちゃんを守ったんだろう?んっ?これは??」

エツィオ「??それが、どうしたんだ?」

アイモンはエツィオに穏やかな笑みを出しながら言った後、アイモ

ンはベッドの下に置いてあったシャイナのショルダーバッグの小さなポケットに入っていた“モノ”を見て、アイモンは懐かしそうにポケットに入っていた“モノ”を手に取る。

アイモン「シャイナちゃんの6歳の誕生日と小学生入学祝いの時に心を込めて作った“白銀のペンダントナイフ”じゃないか…懐かしい。」

ジャリッと、アイモンが掴む銀色に輝く鎖（チェーン）の音を立てながら、ゆっくりとアイモンの右手の平に乗せてエツィオに見せながら懐かしい表情を出す。

エツィオは窓の視線からアイモンの持つ“白銀の鉄で出来た短刀のような平べったい形をしたペンダント”へと視線を変えて、エツィオは「んっ？」と何を感じるように顔を少し傾げながら白銀の短刀ペンダントを見詰める。

エツィオ「（？微妙に魔力を感じるが、まさかな…）アンタがこれを？アンタが作ったそれに「“マジナイ”を込めているだけさ。それ以外は無い。」何だと？」

アイモンはエツィオの言葉を遮るように言った後、アイモンは手にしていたペンダントをベッドに寝ていたシャイナの首にそっと付ける。

アイモン「そうだな…春なのにまだ寒かった頃だ。自然という意味でなく、回りの世界からの馬鹿げたようなことではなく、その…」

エツィオ「アイモン…アンタは…」

アイモンはエツィオの何かに見抜かれるような声を聞いて、「ふぅ…」と息を漏らした後、エツィオに背を向けて両腕を水平へと伸ばしておちゃらけた言動でエツィオに言う。

アイモン「隠し事は止した方がいいか…若いの、いや…」

―我らの、無垢なる心を持つ魔帝を討ち取りし魔神よ。―

突如アイモンの声が二重になったような声になって、アイモンの映し出される影だけが“人間体から本来の姿”へと蠢くように変わり、背けたままベッドの傍に座るエツィオに見せる。

エツィオ「やっぱりな…その姿として…」

頭部に生えた巨大の牛のような二本角に、西洋の龍のような巨大な翼をマントのように広げた巨大な“悪魔”が、影としてそこにいた。

エツィオ「魔界で見たことあるけど…破壊の王城七柱一柱“アモン”か？」

アイモンの影『左様、だが今の俺の名前は“アイモン”だ。そんな古い名前など昔捨ててきたがな。』

影の顔辺りから映る赤い両眼の光が、座っているエツィオに見下ろされるように言うが、そんなの関係無い素振りで続きを言う。

アイモンの影『“破壊”という“地味的な作業”に飽きてな、一回現世に出て興味ある“創作”ということに引かれてから、俺は辛気臭い魔界から出たのさ。まっ、その際に城にいた他の悪魔達を全て“殺ってから”出たけどな。ｗｗｗ』

エツィオ「成る程、破壊というよりもこのような“創作”というのに引かれたのか。事情アンタは“破壊の王城”の最後の“特級悪魔”ってことねｗｗｗ」

アイモンの影『そう言うこと。それにしても俺よりも若いクセに、シャイナちゃんのペンダントを見るだけで“正体を見破る”とはな。現世の匂いと混じって２２年、悪魔の魔気を完全に消し去ったつもりだったのにＮＥ♪』

アイモンの影は「こりゃたまげたもんだ。」と、両腕を広げて軽々とお手上げするような素振りをするが、口はエツィオのように軽く気にしていない様子で言う。

アイモンの影『創作は本当に良い。街中でひっそりと創ることで人間の“喜び”を提供出来るからさ、そのことで俺は嬉しかったのＳＡ★』

エツィオ「ハハァーン♪シャイナのペンダントから微量の“魔力”を感じてな。もしやと思って言ってみたけど、まさかそれでアンタの正体を見抜けるとは思わなかったＺＥ★でも…」

エツィオはシャイナの首に付けられたペンダントを手に取り、左手でペンダントの部分を見ながらアイモンの影に言う。

エツィオ「悪魔らしからぬ“魔除け”の魔力が微量に入っているな。これは一体…」

アイモンの影『先程言った通り、入学祝の次いでに“御守り”を作ったのさ。“多少の中級あたりの霊ぐらいまでを退ける”“外圧の痛手を和らげる”ぐらいに少量“俺の魔力を注ぎいれた”だけ。これだけじゃなくアクイラ一家のリオールからの依頼を何度も受けていたから、店の顔馴染みになってそれから親友同士になったんだよ。まぁ、全ての発端は…』

エツィオ「俺の存在という者が出始めてからかｗｗｗ全く…本当に（アンゲルスの言った通りだな。本当に悪魔という本質そのものが乱れはじめているな。）」

エツィオは頭だけガクリと下げて落胆な声を漏らしたが、アイモンの影は『細けぇことは良いんダヨ☆』と言って、エツィオの右肩に何度も軽くペシペシと叩く。

アイモンの影『カッカッカ！魔神で生まれながらにして“人の心”を持つ。これは魔界だけでなく妖精界と深蒼界でも驚きに捉えた報告だった。まさかお前のような若輩者が“魔神”とはなぁ。天界にいる“天神”もお前と同じ“若輩者”と聞いたが…』

エツィオ「2万の時を生きていたアルタイルが“若輩者”呼ばりとはねｗｗｗ（やっぱ容姿で言われるのかなｗｗｗ）」

アイモンの影『何にせよ、お前は俺達にとっちゃ“憧れの悪魔”だったしな。こうして身近にいると、やっぱし“ただの若僧”しか見えねぇｗｗｗ』

アイモンの影がひたすらゲラゲラと笑いながらエツィオ右肩を叩き、エツィオはただ虚しく顔を伏せたまま呆れた表情でただ耐えていた。

…

……

……

―雑貨屋アイモン工房　店内奥　事務所―

アイモンの影『で、此所にに来た理由は天神の若僧が言う“秘宝”の奪還か。こんな悪い状況の時にねぇ。』

アイモンの本体は影に操りながら自室から一階工房奥へと移動し、後ろから付いてくるエツィオと共に机の上にあったノート型のＰＣを開いて電源を入れる。

アイモンの影『最近の人間はこの様な便利なモンを作ったもんだ。こんな時こそ“ググれカス”だＺＥ』

エツィオ「ぐ…ググれカス??」

アイモンの影は『検索エンジンのＧｏ●ｇｌｅから調べろって意味さ。』と言いながら、カタカタとＰＣのキーボードをアイモンの本体が影に操られながら打つ。

エツィオ「何、秘宝を守る一部に関わりある人間に“擬態”してそ

のまま“テイク☆アウト”する予定だからさ、状況が悪くても此方は何の支障も無いぜ。ただ秘宝の在りかは…」

アイモンの影『ククッ！偉く自信満々だなw俺にもちょっと耳に挟んだが…おっ、合った合った♪このサイトを見てみろ。』

エツィオ「？コレは？？」

エツィオはアイモンの影による検索で入ったＰＣ画面に映る画像を見ながら、一瞬だけエツィオの瞳が金色の鷹の眼へと変わる。

アイモンの影『こいつは“アズール社の三代目責任者ベフェ―レン・アンシュトゥルム”という奴だ。表顔はアズール社の社長にして都市のために働く政治家。割とクソ真面目でスペイン国民にとって英雄とも言われているまともな奴に見えるかもしれないが…「こいつ…人間にない“魔力”を感じるんだが？」』

エツィオは数秒画面に映るアズール社の三代目責任者ベフェ―レン・アンシュトゥルムの温和そうな顔つきに、もやし体型の男を見て一瞬歪む表情を出した後、ＰＣ画面から顔を背けるようにアイモンの影へと言う。

エツィオ「こいつが…アルタイル達が忘れていった“秘宝”を悪意を込めて勝手に使っているのか…。」

アイモンの影『お前の両眼に映る“真実の眼”に書かれている通り、奴の裏顔は“トレジャーハント”という闇取引の人間の一人だ。それに若造が狙われたあの“教会”という者にも関係している。』

アイモンの影は引き続きもう一つのウィンドウを開き別のサイトを開いて、興味なさそうな言動でエツィオに向けてＰＣ画面に映るモノを見ながら言う。

アイモンの影『“教会”正式名は“コルナ　ド　アンジェリ”穢れを祓う天使達だとよｗｗｗププッ、下等の人間のくせにこのような馬鹿らしいことを無意味に立ておってｗｗｗ』

エツィオ「教会なんて正直どうでもいい。アイモン、“アズールしゃ”という所は一体どこだ？」

アイモンの影『おっと！一人で殴り込みかい、自信満々の魔神君？？アズール社は“各国の軍との契約”ともして…そんなのどうでも関係ないか、君は魔帝すら圧倒するほどの、史上最強の魔神だからなｗｗｗ』

アイモンの影はケラケラと笑いながら少しキーボードを弄った後、エツィオに地図の画面を映す。

アイモンの影『先程お前達がいたマドリードの中心に聳え建ってあった4つの高層ビル。こちらの画面からしてそこの右から二本めが“アズール社”だ。てか…マジで殴り込む気かい？ｗｗｗ』

エツィオ「馬鹿…阿呆みたいに突っ込む戦いに赴くんじゃねぇよ、フツーに偵察と情報入手してくるだけだ。まっ…後々殴り込むけど、ＮＡ★」

エツィオは瞳を一瞬閉じて淡々な表情を出し、アイモンの影に踵を返して店の入り口へと歩む。アイモンの影は「おっ…大人っぽい部分が出ているなｗ」と言った後、そっと店の入り口の鍵を空けて外へ出て行くエツィオを見送る。

エツィオ「場所教えてくれてありがとな、アイモン。少しの間シャイナを頼む。後それと…」

アイモンの影『アホかｗｗｗ俺はそんな疚しいことは絶対しねぇよ。ｗｗまっ、とりあえ…あり？』

アイモンの影は一瞬エツィオに嫌味嫌味の視線が突き刺さるような感覚を受けて、突っ込むような仕草をエツィオに向けて冷や汗を額に流しながらチョップを繰り出す仕草を取ったが、既にエツィオの姿が無くアイモンの影はふと思い顔だけ上に上げた直後…

アイモンの影『元気溢れているなぁ、最近の若者といったらｗｗｗ』

遥か上空に“バイクをまたがりながら元気よく空中疾走する”エツィオの姿があって、アイモンの影はクハハと宙に飛ぶエツィオの姿を見て笑う表情を出した後…

ー心配なんて必要ないなｗｗｗー

第四十八曲　爆走★暴走★恐怖のミッドナイト

―　夜　スペイン　バルセロナ　マドリード行き高速道路　―

空が深海の闇のように包まれて上空に月が浮かび上がる時、道路のガードレール脇に付いた外灯の光で、夜の道路に間隔を開けながら徐々に外灯に光を灯す。

今日の1日の終わりや、帰宅へと急ぐ者や様々、首都マドリードへと繋ぐ高速道路の一つに何度も複数の幾つかの種類の車達が快適な何時もの速度で、道路がライトアップされるように眩く往復する。

そんな中、一台の黒いレガシーを快適に高速道路を下り方向へと運転する中は、穏やかな雰囲気が溢れる会話があった。

旅行帰りの車の運転手「さぁ、途中のパーキングへと夕食を取ったら真っ直ぐにお家へと帰るぞぉ。」

旅行帰りの車に乗る子供「パパッ♪ハンバーグ食べたい！！もうお腹ペコペコォー！！」

旅行帰りの車に乗る母「今日沢山歩いたもんね（＾＾）ママも沢山食べちゃおうかしら♪♪」

観光旅行に行っていたらしく、車の後部座席半分が土産袋で積み重ねており、車に乗っている全員が満足した表情で何処でも見掛けるような穏やかな会話が流れる。

旅行帰りの車の運転手「ハハハッ！んじゃ、パパも大盛りボンゴレでも頼んじゃうかな★明日の仕事に備えて沢山食べちゃうＺＯ♪♪」

旅行帰りの車に乗る子供「へへーんだ！パパなんかに負けないほどぐらい沢山食べるもん！！」

運転手の男が「なーに、パパも負けないぐらい食べちゃうぞー♪」と後部座席に座る娘に歯を見せるように言い返しながら笑った後、前を見ながら少しアクセルを踏んで速度を上げようとした時…

バォォォォォォォォォォォォ！！！！！

旅行帰りの車の運転手「ん？何だ？？」

バイクの音が上空から段々と近付くに連れてエンジン音が大きくな

っていき、運転手の男は聞こえて何事かと視線だけで上へと上げた瞬間…

エツィオ「おっとっと、ゴメンＹＯ★」

ガシャァンと、レガシーのフロント硝子に向けてバイクの前輪が突っ込んで、割れる硝子と前輪が運転手の顔面もろともぶち当たって、顔面が一瞬にし“て中の筋肉が出るほど血塗れ”になりそのまま首がボキリッと“への字に折れる”。

どうやらバイクでそのまま“空中疾走しそのまま“アズール社”へと直行しようとしていたエツィオだったが、「シャイナのように爆走してみーよぉ♪」と気紛れ的な発言をした後、バイクを地上へと向けて綺麗に斜めへと落下したが…

落下地点が偶然にも先程の旅行帰りの車であり、エツィオが運転手していたバイクはそのままレガシーのフロントガラスへと“バイクもろとも突っ込む”ような形へとなってしまった。

旅行帰りの車に乗る子供「ぱ…パパ？？ひっ！！！！」

旅行帰りの車に乗る母「い…嫌……」

エツィオ「おっと、失礼ｗｗｗ決して“わざとじゃない”からなｗｗでは、アデュー♪」

エツィオはニコッと笑顔を出しながら絶句する二人にそう言った直後、バイクのアクセルを強く回すように握ってそのままエツィオが運転するバイクは“レガシーの車ごと真っ直ぐ割るようにぶち破る”。その後…

旅行帰りの車に乗る母「いやぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！」

旅行帰りの車に乗る子供「ママッァぁぁぁぁ！！！！パパァぁぁぁぁぁ…」

エツィオの運転するバイクの背後から悲鳴の声が上がって、両断されたレガシーの破片の音と、人肉が潰れる音が後方へと流されるように消えていった。

エツィオ「♪～♪♪♪～♪♪♪♪～～♪」

エツィオは先程の“無差別殺傷のことなど気にせず”鼻歌を歌いながら、エツィオからの視点として逆走してくる車達を“時速２００以上”出しながら軽々と避けながら爆走する。

車を運転する運転手Ａ「何だあのバイク！！逆走してきているぞ！！？？？！！」

車を運転する運転手Ｂ「し…正気じゃない！！！！！！」

様々な運転手から罵声を浴びられているが、エツィオはそんなの気にしないで身体から氷魔銃（アンゲルス）を出して、バイクを運転しながら背中にアンゲルスを携える。

エツィオ「んー♪シャイナの“くるま”も良かったけど、“ばいく”も良いなぁー＼（＾ｏ＾）／かっこいいしｗｗｗ何よりも“くるま”より速いし。」

エツィオは運転するバイクの乗り心地の感想を満足な表情を出しながら言い、更にアクセルを限界まで回して走ってくる車を避けながら走り続ける。

トラックの運転手「アイツは馬鹿か！？？！！何を考えていやがる！！？？！！」

旅行バスの運転手「ひっ！！！！！つ…追突！！！！！！！」

積み荷のコンテナを運ぶトラックを運転する男が、猛スピードで逆

走してきているエツィオを見て避けようとトラックを左へと動かそうとしたが左側には旅行バスがいて、トラックの運転手は苦い表情で舌打ちをしたが…

エツィオ「ちょっと通りますＹＯ」

エツィオの運転するバイクがトラックと旅行バスに追突する数秒前に、エツィオは両腕を前に伸ばして一つ一つの手にトラックと旅行バスの正面部分に触れた瞬間…

エツィオ「邪　魔　ＤＡ★」

大きなトラックと旅行バスが“軽々と宙へと舞い上がり”、エツィオの手でポイッと“払い除けられた”ように二つの大型車は宙で何度も縦方向に回転する。その数秒後…

トラックの運転手「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

旅行バスの乗客Ａ「嫌ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

旅行バスの乗客Ｂ「死ぬのは嫌ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

旅行バスの運転手「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

ギャリィィィィィィィィィィ！！！！！

仰向け状態で猛スピードに車体の火花を道路に散らしながら、数々の悲鳴と共に前方へと猛スピードで流れていった。

エツィオ「はい、邪魔ーｗｗｗ」

車の運転手「ひぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

ドゴムッとエツィオの前方を塞いでいた車のボンネットに向けて、“左手ごと食い込むように鷲掴み”しながら“宙へ持ち上げた”後、上り方面の道路へと向けて車を“投げ捨てる”。

投げ捨てられた車の運転手「ひぃィィィィィィィィ！！！！！」

投げ捨てられた車は空中できりもみ状態のまま上り方面へと車の車上から落下し、ガシャァンと潰れる音を立て後続車に次々と玉突きするように激突する音が後方へと流されていった。

エツィオ「んあっ？」

トレーラーの運転手「うぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

ギャリィィと、前方から猛スピード走ってくるエツィオが車を投げ捨てる姿を見て、トレーラーの運転手は絶叫を上げながらブレーキを踏みついバンドルを切ってしまい、トレーラーの向きが横へとなってエツィオの進行方向を遮る。が…

エツィオ「オラよっ…と！！」

エツィオはバイクを斜めに伏せるように傾けて、バイクのタイヤを路面に擦り付けながらそのままスピードを落とさずに“トレーラーの下をくぐり抜ける”。

だったがエツィオがくぐり抜けた先に、二台の車の一台がエツィオに向けて突っ込むように突進してくるのを見てエツィオは両腕に力を入れた後…

エツィオ「アサシン・ズ☆エスケープ！！」

バイクの車体が“斜めのまま宙へと上がって（ジャンプして）”、エツィオは斜めのまま後輪から前方へ車体を回転させながら、バイクの後輪を右から突進してきた車の運転部分への窓へと当てる。

車の運転手C「ぎっ！！…」

バキッと、バイクの後輪が運転手側の窓ガラスをぶち破って、ガラスの破片が運転手の首から額に掛けて全て刺さり、更にはバイクの高速回転する後輪が刺されたガラスと共に、顔の表面の肉を磨り潰すようにベリベリと抉って…

エツィオ「どーん♪」

悲鳴すら上げられないまま右から突進してくる車の運転手の顔は、エツィオの“上り方面行きの壁役”としてバイクに蹴られ、エツィオが上り方面へと斜め状態のバイクを見事綺麗に垂直へと直して着地した瞬間…

ゴキリッとバイクの重さだけでなく“エツィオの人外的な力”に耐えきれず、首もろともぶち壊れるように折れて“即死”する。

車の運転手D「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

バキリッと、顔の原型すら留めていない首が折れた死体が運転する車が隣に走っていた車へとぶつかって、ガードレールに車体側面を

擦るように押さえつけられている車と共に火花を散らしながら、悲痛な叫びと共に後方へと消えていった。

エツィオ「ひょぅ♪」

エツィオは猛スピードで走りながらバイクの車体を軽く宙へと浮くように上げ（ジャンプし）て、ガシャンと前方車の上を凹ませるほど叩きつけてバイクの前輪を乗せた直後に、もう一度バイクを宙に浮かせて次々と車の上に飛び渡りながら前へと進んでいた時…

エツィオ「おっと、鉛筆達（ネロズマティエーター）もチェイスに参加かい？？」

上り方面へと前方に走る数々の車の上にテンプル騎士団の下級兵達が表れて、それぞれ腰から武器を引き抜きエツィオに向けて車を飛び渡りながら襲い掛かる。

エツィオ「さっ、遊ぼうＺＥ★」

エツィオは背中に携えていたアンゲルスを右手に持ち替えて、バイクを猛スピードで走らせながら襲い掛かるネロマテ達に向けてズガンズガンと“連続片手撃ち”する。

ネロマテＡ【ギャッ！！！！】

ネロマテB【ギ…】

ネロマテC【ギュ！！！！】

撃ち抜かれたネロマテ達は空中で全身氷結し、高速に後ろへと風圧で吹き飛ばされながらエツィオにぶつかる数秒後、エツィオはアンゲルスを片手で前方へと高速一回転させて、高速回転するアンゲルスに触れた氷塊（ネロマテ）は粉々に砕け散る。

エツィオ「Ｕｎａ　ｆａｔａ　ｓｕｌ　ｇｈｉａｃｃｉｏ！」

ズドドドドドドッ！！！！

エツィオが手にするアンゲルスを“ヌンチャク”のように腕から肩へ背中から腕へと行って、氷の散弾銃そのものがエツィオの中で激しく踊るように、ネロマテ達だけでなく周囲の車も“無差別に撃ち抜かれる”。

車の運転手Ｅ「ぎゃっ…」

車の運転手Ｆ「え゛…」

当然撃ち抜かれた車は声を出す暇も無く一瞬の内に凍らされ、後続車は凍った数台の車を避けようとしてハンドルを切るが、同じように避けようとしていた別の車に激突し、次々と玉突き事故が起きていきまたしても“朝と同じような悪夢”（第二十三から二十四曲参照）が夜版となって再来する。

エツィオ「（ん?何か先程から付いて来ているなぁ。何、あの“人間”？ｗｗｗ）」

エツィオはバイクを走らせながらふと思って、脇にある小さなサイドミラーに映る赤い大型バイクを操縦する人間が“小説冒頭”あたりから上り方面でエツィオを“様々な障害物があったのに関わらず普通に追いかけるように走ってくる”のを見て、エツィオは「ふぅ」と一息付いた後…

エツィオ「こいつは“面白く”してくれそうだな。」

エツィオは口元を吊り上げて不敵に笑う表情を出しながら、もはや愛用と化しているバイクを走らせていった。

第四十九曲　スペインの頭文字E

―　夜　スペイン　バルセロナ　マドリード行き高速道路　―

？「……やっと…見つけた！」

赤い大型バイクを駆る赤いヘルメットに赤いスーツを纏ったシャープ型に胸が大きく膨らんだ細い体格を持つ女が、前方に走る黒衣のローブとマントを後方へと川のように流すエツィオを見て、アクセルをつねに全快にしながら徐々にエツィオとの距離を縮めていく。

？「もう、逃がさない！！」

ジャキッ！

ある程度距離を縮めた直後赤い大型バイクを駆る女の背中に付いていたホルスターから黒い物体“銃（ワルサーＰ２２）”を取り出して、前方にいるエツィオに向けて片手で発砲する。

ガウンガウンッ！

エツィオ「おっと。」

エツィオはバイクを横に滑らせて後方から放ってくる女の銃弾を避け、高速道路の路面に銃弾の痕が刻まれる。そのあと何度も銃声が後方から轟きエツィオはアクセルを全快にしてスピードを更に上げながら、銃弾を避けつつ追いかけてくる女を降り切ろうとする。

？「このっ…！」

エツィオを追いかけてきた女は舌打ちをした後、どんどん引き離されるエツィオを逃がすまいと右手に銃を握り締めたまま片手運転でバイクを操作しながら速度を上げていく。

エツィオ「付いてこれるかい？人間の女？？」

エツィオは逆に楽しみながら、追いかけてくる女に不敵の笑みを出した直後…

？「！？」

ギャァァァ！！

突如前方にいたエツィオが“逆に後ろへと逆噴射するように高速突進してきて”、追いかけていた女は突然のことでヘルメットの中は驚愕顔になる。どうやらエツィオはブレーキバーを握って、時速２００キロ以上の弾丸並みのめちゃくちゃ危険な状態のバイクを後方へと仕掛けたようだ。

？「くっ！！」

追いかけてきた女は前方から逆噴射突進してくるエツィオを避けようと、女の反射神経がいいのかエツィオのバイクをなんとか瞬時に横に切ってギリギリ避けたが…

エツィオ「君の顔を…拝見させてもらうとするか。（＾＾）」

？「なっ！？」

ガシリと女のヘルメットにエツィオの背中から出ていた左片翼の漆黒の翼を“大きな人間の手”へと変えていて女の頭部に着けてあったヘルメットを掴んだ後、驚く間も無く掻っ攫うように女が着けていた頭部のヘルメットを?ぎ取る。

？「っ！なんて…奴なの！？」

エツィオ「おーおー、こんな可愛い子が俺を追いかけ来たとはね。それに…」

エツィオはジロジロと顔を右往左往と動かしながら女の容姿を見て、思わずニヤケ顔になりながらニタリと口元を吊り上げて笑う表情を出しながら、翼が手にしていたヘルメットを後方へと投げ捨てる。

エツィオを追いかけてきた女の顔は、月明かりに輝く金の長い髪を一つに赤い髪締で縛っていて、にきびもいぼも無い完璧な理想的な容姿を持つ若い女性が、エツィオに対して憎しみを込めた表情で睨み付けていた。

エツィオ「君のような“抜群な美女”が銃を持つなどとｗｗｗそれに、君のような顔はけっしてソレは似合わないＺＥ★」

？「黙れ！国道およびマドリード中心都市の無差別殺人犯め！！！！漸く…お前を血なまこになるまで探して来てやっと見つけたんだ。今ここでっ…！！！！」

女は怒りを込めた言葉を吐きながらバイクのスピードを緩めて、後方側面にいるエツィオと同じ位置へとスピードを調整した後…

？「同僚クルーだった仲間（エミリア）の仇を討ってやる！！」（第四十三曲参

照)

女はエツィオに向けて突進するようにアクセルを全快に回して、運転するバイクを横滑りしながらエツィオのバイクに向けて体当たりを仕掛けるが…

エツィオ「えみりあ??誰だ、それｗｗｗ君のお友達の名前???」

?「あぁっ!!」

ゴォォォッ!!と、突如トルネード級の突風が発生しエツィオに向けてバイクを体当たりしようとした女は、突然発生した強い突風で“駆るバイクごと宙へと舞い上がって”、女が握っていた銃は一瞬の内に後方へとぶっ飛んで女とバイクは後方へと吹き飛ばされる。

どうやらエツィオは背中から出ていた一つの漆黒の左片翼を“一羽ばたきしただけで突風が起きて”、突撃しようとしていた女のバイクもろとも後方へと吹き飛ばしたようだ。

?「このぉっ!!」

女は空中できりもみ状態になっても後方に浮かぶバイクのアクセル部分に向けて手を伸ばし、ガシリとアクセルバーを握った直後女は

空中で後方回転しながらバイクの座席へとそのまま座るように乗った後…

左大脚部に付いていたフックショットと取り出して、前方のトラックの車体上部に目掛けてフックショットの嘴を撃つ。

エツィオ「ヒュー♪ＣＯＯＬな女だぜｗｗｗ」

女が放ったフックショットの嘴がトラックの車体上部の端を見事に掴んで、女が乗るバイクごと空中移動し女は前輪がトラック車体上へと着くと同時に、アクセルを全快に握って前方にいるエツィオを追いかけるよう再びバイクを高速に疾走させる。

エツィオは口笛を吹きながらスタイッリシュドライブテクを見せた女に向けてニタリと口元を吊り上げて笑った後、エツィオは背中の左片翼を背中に仕舞ってエツィオが運転する爆走バイクは、再び追いかけてくる女のバイクと共にトンネルの中へと入っていく。

エツィオ「パラッペーぃ♪」

エツィオは楽しみながら前方を塞ぐ車に目掛けてアンゲルスを放ち、車を凍らせた後バイクの車体を斜めにさせて凍らせた車を粉々にぶち壊す。

そしてインコースをとりながらトラックの下を潜るようにまたしてもバイクの車体を斜めにさせてくぐり抜けながら、トラックの下部を“右手だけでで宙に持ち上げた”後、追いかけてくる女に目掛けてトラックを投げ捨てる。

？「く…のっ！」

女は投げ付けられてきたトラックを見て、瞬時にバイクの車体を斜めにさせてトラックの上部コンテナが女の纏うボディスーツにギリギリ掠めて、多少穴が空きながら辛うじて回避する。

エツィオ「あそーれ♪それ♪♪」

エツィオはバイクを運転しながらアンゲルスを前方に放って数台車を凍結させた後、凍結した車を次々と拾い上げて後部へと投げ捨てていく。

？「絶対逃がさない！！逃がすものか！！！！」

後方から追いかけてくる女はエツィオのハチャメチャな運転と攻撃で驚きつつも、引き離されないようにフックショットを有効に使いながら前方車両のサイドミラーの首部分やトラックの上部端に目掛けてフックショットの嘴を放つ。

車に引きずられるようにして投げつけてくる凍結された車を、フックショットで引っ掻けたトラックを影に隠れてながら、攻撃を避けつつ攻撃が止んだと同時にフックショットを使ってエツィオを追いかけていく。

？「（クソッ…何あの殺人犯が乗るバイク!?あれからだいぶ走ってあと数分後に燃料が無くなってきているハズなのに!!）」

女はエツィオを追いかけながら、エツィオの駈るバイクが“長時間にも関わらずまだ走れる”ことで苛立ちと疑問を思い浮かべながらぐっと、口中の歯を強く噛み締める。

エツィオ「どうしたお嬢さん?何悔しがっている??俺に追い付けないことで苛立っているのか?」

？「!?」

女は声がした方向に顔だけ動かして上に上げると、トンネル上部に“逆さまになったまま重力とか関係無く普通にバイクを走っている”エツィオがいた。

逆さまになったエツィオが顔だけ動かして、トンネルの下部にいる

女にニシシと歯を見せ笑いながら話し掛ける。

エツィオ「そんな“玩具”を使っているってことは、もう君が乗る“ばいく”は燃料切れ（スカピン）かい??」

?「!!」

エツィオは追いかけてくる女の顔が一瞬変わったのを見逃さず、エツィオはニタリと口元を吊り上げるように笑った後…

エツィオ「…ハンデだ、お嬢さん。俺の遊びに付き合ってくれないか?」

?「何…!?」

エツィオは女から離れるようにバイクを走らせた後逆さま運転の状態から下部に走るタンクローリーを見て下へと落下するようにバイクごと降りて、アクセル部分を左手だけで握りながらタンクローリーの上に綺麗に両足を着ける。

エツィオ「燃料はまだ残っているんだろ?なら、君がいる場所から俺がいる所まで“ギリギリ辿り着ける”ハズだ。」

？「…何が言いたい！？」

女はトラックの上部端に付いたフックショットの嘴を便りに支えながら、遥か前方のタンクローリーの上にいるエツィオに答える。

エツィオ「制限時間は3分、君の持つ“玩具”を使わずに俺の所まで来てほしいんだ。見てみたいんだよ。君の“不屈なるガッツ”をな！！」

エツィオは背中をバイクに預けながら右足を左足の上に組んで、ニヤリと表情を出しながら遥か後方にいる女に向けて人差し指を指しながら言う。

？「時間内に辿り着けなかったら？」

女はじ…と、考えた後バイクの燃料メーターを一瞬だけ見て、目を細めながらエツィオに言う。

エツィオ「分かるだろ？俺が“此所にいる”ことで、何をしようとしているか…をな（ー＋ー）」

エツィオはニタニタと笑いながら右手でタンクローリーの上部を軽

く叩いて、遥か後部にいる女に向けて答えた直後…

？「何て…卑劣な殺人犯め！！！！」

女は歯を食い縛りながら、ギリッとエツィオを睨んだ後、残り燃料が少ないバイクにまたがり直してフックショットの嘴を引っ込めた後、アクセルを全快に握り回した。

第五十曲　魔神の遊びに付き合わされた人間の足掻き

―夜　スペイン　バルセロナ　マドリード行き高速道路トンネル内―

？「（なんて卑怯な男め！！此所で爆発させてしまったら、私もあの男も…他此所にいる皆がトンネル全体が高温の炎の海に呑み込まれる！！）ぁあああああ！！！！」

女は気迫をこめた表情を出して叫びながら、残り少ない燃料が入ったバイクをアクセル全快に回して、遥か前方にいるタンクローリーの上にいるエツィオに向けて走り出す。

だがガス欠に近いか女の駆るバイクはエツィオを追いかけてきた速度より落ちており、アクセルバーを全快に回しても速度は徐々に落ちていって、エツィオがいるタンクローリーとの距離が遠くなっていく。

エツィオ「あはははははｗｗｗｗ頑張れぇぇぇい♪人間の女ぁぁぁぁぁ！！」

エツィオはタンクローリーの上で背中にあったバイクを“蒼色の小さな光の球体”へと変えて両腕を組んで右足を左膝辺りで組みなが

ら球体を仕舞って“挑発するような座り方”で、女の必死なバイク走行を見ながらわざとらしく声援の声を出しながら両手を口に添えながら大きな声で言う。そんな最中…

アンゲルス【あらあら、私の可愛い坊や（ダーリン）を追いかけていたあの女、徐々に差が出ているじゃない。非常に見苦しくて腹が立つわね。】

ブリトラ《所詮人間はそれが限界なのだ。突発的な感情だけで無理矢理動こうが、それはつまらぬ一時凌ぎにしかすぎぬのだよ。》

エツィオの背中から“上半身だけのアンゲルス”と“腹部辺りまで伸ばしたブリトラ”が出ており、アンゲルスはつまらなそうな表情で女を見下しながら背けた後、エツィオの左肩にアンゲルスの顎を乗せ左手でエツィオの左頬から顎下までゆっくりと撫で下ろしながらエツィオを見惚れるような表情を出しながら瞳を閉じる。

一方ブリトラはフンッと鼻息を出した後、だんだんと遠ざかっていく女を顔を逸らして、エツィオの首筋辺りに身体を伸ばした後、ブリトラの横顔を寄せるようにして「グルルルル」と猫のように甘えた声を出す。

エツィオ「確かに“人”は貧弱でか弱い生物。だが人間は“俺ら”を想像つかないぐらい凌駕することを起こすんだ。」

アンゲルス・ブリトラ【一体それは何かしら?】《それは?》

アンゲルスとブリトラは頭部にはてなマークでも付けているかのように疑問の表情を出しながら、エツィオに向けて顔を同時に横に向ける。

エツィオ「これSA★」

エツィオがニタニタとにやける表情を出しながら、“カメラ目線”に向けて右人差し指を指し一人と一匹が同時に指す方向へと向いた時…

?「負け…る……ものか!!」

後方に走る車の上部に女が“生身で走ってきており”、隣に走っていたバスを見た女は身を宙に投げ出して、窓枠に腕を伸ばしてガシリと掴む。

どうやら女が乗っていたバイクはガス欠になった途端、隣に走っていた車を見た後、両足をバイクの腰掛けに乗せてバイクをジャンプ台にして車の上部に蹴り渡ったようだ。

女は今まで運転してきたバイクが横に倒れて機体がバラバラに破損しながら、高速に後ろへと流れていくのを見ずに、しがみついたバスの窓枠からバス上部へと蜘蛛のように上っていく。

？「あと……2分！！」

女は右手首に付いていたデジタル腕時計を見て苦い表情を出しながらバスの上部に上り、両腕を水平に伸ばしてバランスを取りながらバスの上部を走る。

エツィオ「へぇ…あれが人間でいう“パルクール”てっ、いうやつか。」

そして、女は隣に走っていたトラックを見て動きを良く見た後、タイミング良くトラックへと足をくの字に曲げて腕を伸ばしながら身を投げ出して、またしてもトラック上部端へと掴んで両腕に力を入れて身を上に上げていく。

ブリトラ《ちょっとは絶望の表情を見てみたいものだ。》

ブリトラがそう言った直後、ブリトラの口内に紫の光が口元から漏れるほど小さな稲妻が迸った後…

ブリトラ《足掻いてみろ。我が主を追い掛けていた、心外なる人間の女。》

ドウンッと、ブリトラの口から紫の塊（雷球）を何度も吐き出し、トラック上部の端に掴まりながら上る女に向けて容赦なく撃ち出す。

？「きゃっ！！」

上半身まで起こしていた女は迫り来る複数の紫の雷の塊を見て、思わず掴んでいた腕一本手離してしまい右腕一本だけでトラックに身体を宙に流されるような形になる。

女は身に受ける風圧とパルクールをやったことで身体的にも激しい疲労を受けて、歯を噛み締め苦しい表情を出しながらでも気合いで宙に爛れる左腕を前に伸ばす。

？「仲間（エミリア）の…為にも……！」

ドンドンと、ブリトラが吐き出される雷球がトラック周囲に当たって、トラックの運転手だけでなく周りの車の運転手も騒然としながら、車体がフラフラと右往左往にタイヤを滑らせながら動き始める。

？「殺人犯なんかに…負けない！！」

キッ！と、目を強く輝かせ険しい表情を出しながら気合いでトラック上部へと上り、女は吐き出されてくる雷球と次なる足場を見て考えながら両腕を後ろに伸ばして走っていく。

？「あと…一分！！」

ブリトラの雷球を飛び込むように避けて、トラック上部からダイブするようにトラックの前に走っていた他の車上部へと右手を着けてから身体を前に転がるようにして立ち上がった後…

？「３…０…秒……！！」

女は死にもの狂いで乗っていた車体上部から前方に走っていたトレーラーの木の積み荷を見て宙に身を投げ出した後、木の積み荷の舳辺りに左腕を伸ばしてガシリと掴んだ後…

？「あぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

女は叫びながら身を投げ出していた際にブリトラの雷球を全身の身体に掠めて、赤いボディースーツの所々が雷球で焼け切れて穴が空き血が滲みながら、掴んでいた箇所をトレーラー上部へと身を上げる。

そして思いっきり走って腕を後ろに伸ばしながら、後数メートルにエツィオがいるタンクローリーへと近付いて、トレーラー前方へと足を運んだ時…

？「うぁぁぁぁぁぁ！！！！」

両足に最後の力を振り絞って思いっきり身を大きく投げ出し、タンクローリーの上に座っているエツィオに向けて左手を伸ばし後数メートルエツィオの身体に触れる。が…

？「は…あっ…！！」

ドフッ！と肉を突き破る音を立てて女の口から段々と少量の血が顎下まで流れていき、エツィオに伸ばされた腕がワナワナと震える。

アンゲルス【なかなか良い所まで逝ったじゃない。でも残念…。】

どうやら女の腹部にアンゲルスの背中から出ていた触手の先端部分が“氷柱の剣と成って”背中を突き破るぐらいに、触手の剣先を突き破っていた。

女の身体を突き破ったアンゲルスは惜しむような表情を出した後、エツィオを抱くような形で優しくエツィオの身体を擦るように手を動かしながら突き刺さした女に向けて続けて言う。

アンゲルス【私の可愛い坊や（ダーリン）をしつこく追い掛けていた、人間の貴方だけは許さないわ。だから…】

ブリトラ《せめての褒美だ。》

ブリトラは「ククククッ」と声を漏らした後、口内に先程よりも規模が大きい紫の光が立ち込めエツィオの指示を待つ。

アンゲルスはもう一本の触手を出して、触手先端を氷の鉈に変えて女の首に鉈先を添え何時でも首を跳ねられるようにエツィオの指示を待つ。

？「か…あ……。」

エツィオ「残念ながら時間切れだ。惜しかったＮＥ（＾＾）折角此所まで来れたのにｗｗｗ」

女は焦点が合わない朧気な瞳でガクリと顔を下に下げて、ダランと両腕をだらけるように力なく身体を突き刺された触手の剣に爛れる

ようになる。

エツィオはニコニコと表情を出しながら立ち上がって背中のアンゲルスに「寄せろ」と言う風に手首だけ振るように見せた後、アンゲルスは顎だけで頷いて突き刺した触手と氷の鉈を女の首に添えたまま、瀕死の女をエツィオの身体が触れる出前までぐるっと引き寄せる。

エツィオ「人間の限界を見せてくれて有り難な！それと俺の遊びに付き…おっ？」

アンゲルス【！可愛い坊や（ダーリン）！！】

トスッとエツィオは何かに刺されるような感覚を受けて視線だけで追ってみると、女のボディースーツの右手裏に隠し鞘が付いていて中からナイフのような刃物が、エツィオの鎧で被われていない左胸下に隠しナイフの刃物を突き刺していた。

ブリトラ《人間の女が…詰まらぬ、足掻きを！》

？「…ぁ…く！！」

女は顔を上げて強い気迫を込めた眼力で、胸下にナイフを突き立て

たエツィオを睨み付ける。アンゲルスとブリトラは刺された主を見て一瞬驚愕になったが、すぐさま刺した女に振り向いて本来の悪魔の牙を剥き出しにし、直ぐに殺ろうとしたが…

エツィオは「Ｎｏｎ　ｆａｃｃｉａ　ｕｎａ　ｃｏｓａ　ｎｏｎ　ｎｅｃｅｓｓａｒｉａ（止めろ）」とイタリア語で軽く言って一人と一匹に向けて背を向けたまま、左手を掲げて攻撃を止めるように一人と一匹に動作を止めさせる。

エツィオ「ＨＡ　ＨＡ　ＨＡ（＾Ｏ＾）ホンッとに、困ったお嬢さんだな。」

ナイフを胸下に突き刺されたにも関わらず苦痛の表情を出さないで“胸にキュンと来るような穏やかな笑み”を女に返し、エツィオは手をプラプラと手を動かし、軽く両手を広げるような仕草を取った後…

エツィオ「Ｉｌ　ｄｒａｍｍａ　？　ｕｎａ　ｆｉｎｅ（遊びは終わりだ。）」

ドゴンッと、右足でタンクローリー上部を突き破るように風穴を開け中からガスの気と燃料が出た直後、アンゲルスの触手先端部分の鉈が女の首を食い込んでブリトラの口内に溜まっていた規模が大きい雷の塊が、タンクローリーの上部から漏れでる気と燃料が後方に降りかかる女の全身に向けて放たれた直後…

ドゴォォォォォォォォォォン！！！！！

トンネル入り口から出口まで馬鹿デカイ真っ赤な炎の塊が竜のように伸びて、トンネルを走っていた車の他出入口部分周辺に走っていた車も炎に呑み込まれる。

これだけでなくトンネル全体がブリトラの特級並みの雷でタンクローリーの爆発の炎が“火山マグマ以上の熱風”が起きてトンネル自体の強度に耐えきれず固い装甲と路面が溶けていき、トンネル全体が地鳴りを起こしながら天辺へと突き破るように火山が爆発したように大噴火を起こし、トンネルだった場所の上空には…

“核爆発”のような赤い茸雲が立ち上がっていた。

第五十一曲　遊びの代償と原作混じりの隠密潜入

―？？？―

？「…何だ、此所は…？？」

閉じられていた中に光を受ける感覚を受けて女は目を開けると、視界に映る物は全て何もない白で包まれていて誰もいない静寂の世界に一人だけ残されているように覚える。

？「（私は…あの男の背後に憑いていた“異形”に殺されたハズ…）何故…生きている？」

女は首を両手で触って繋がっていることに不思議に思い、全身の所々が穴だらけに破けたボディースーツが、破かれる前の綺麗なあの時と同じ姿になっていることに疑問を浮かべていた時…

エツィオ「此所は君の“夢の世界”だからさ。君の器（ほんたい）はまだ現世に魂と共に残っているよ（＾＾）それに、俺が君に見せた“死”の幻はいかがだったかな？？」

？「！」

女ははっとなって声がした方向に身体を捻りながら向けると、白い世界に“宙に浮かびながらお釈迦寝入り”しているエツィオがいて、ダラダラとしながら遥か下にいる女を視線だけで見下ろす。

エツィオ「あの爆発が起こった直後、生き残っていたのはお嬢さん…“君”だけだった。スッゴいなぁぁ♪君の凄まじい生命力に俺もドッキンだＺＥ！！（ΘｏΘ）」

？「貴様っ！！」

女は左腕裏に隠していた小型の鞘からナイフを右手で引き抜き、エツィオに向けてナイフの刃先を向けて憎しみを込めた表情を出しながら言う。

？「降りてこい！！この無差別殺人貴！！」

エツィオ「まーまー、そう急くなって（＾―＾；）君の器は弱々しくなっているからさ、ここで思いっきり暴れると…」

エツィオは“宙でお釈迦寝入り”したまま左手で止さないかと何度も前へと振って、アハハと笑う表情を出しながら左手親指の骨を鳴らした途端…

？「！！あっ！！」

女の持っていたナイフが突然鉛のように重たくなった感覚を受けて、思わず女は“額から汗を流し”て“苦痛の表情を出し”ながらナイフを手放して、カランと乾いた音を立てながら白い世界の床らしき物に落とす。

エツィオ「ふーむ、その状態を見るとして…君の器は多分“多大なる外圧”を受けているみたいだねぇ（・ω・）それに生気も“抜けかけている”みたいだＹＯ？」

？「！？」

女は汗だくになりながらはっとなって左手を見ると、左手が段々と“消えていくように色が薄く所々透明”になっていて、女は突然の衝撃的な出来事を生目で見て、思わず両膝を折って背中を丸めるように両手を床に着ける。

？「はぁ…はっ……わ…た……私は一体…！？」

エツィオ「君の器…即ち“現世にある体が、段々と生気と共に抜けかけている”ようだね。まっこのまま放っておくと“現世の器が死

ぬ”な（＾＾）」

エツィオはククッと歯を見せながら笑いクルンと宙を回転させた後、床に降りたってゆっくりと背中を折り苦しんでいる女に向けて歩き出す。

エツィオ「君がそう苦しむのも、現世にある器の生気が抜けかけている証拠だ。んっ？君は現世で“誰かに複数助けられているようだけど、…何も変わらない見たいだねぇ？」

エツィオは現世の状況を読み取るように頭を少し上げた後「はぁ」と呆れた表情を出して溜め息を付いて女の下へと寄った後、左膝だけ折って半立ちしながら女の右肩に右手を触れる。

？「！私に気安く触れるな！！殺人……！！っ」

女は苦し紛れに背中と両膝を折ったまま捻るように後ろへと振り向いて、身体を捻らせながらエツィオに向けて左手裏拳をかますが、エツィオの身体が“透ける”ように左手そのものが空を切る。

エツィオ「言っただろ？君は時期に“死ぬ”と…君がいる夢の世界でその姿が消えかけていることは即ち、“現世の器と夢の世界の君と共に消えていく”。という意味だ。」

？「っ！！」

女は声は優しくてもエツィオの“今起こっている偽りのない現実的な台詞”を聞いて、声にもならない短い叫びで身体が段々と透明になっていくことに絶望しながら両手を丸めて思いっきり床を叩く。

エツィオはそんな彼女を見て顎下に左手を乗せて、少し考える仕草を取った後…

エツィオ「生き返らせてやろうか？」

？「な……に……！？」

女は突然の問題的な発言を聞いて身体をグルンと思いっきり正面に向けて捻らせ、両手を背中後ろの床に着けながら半立ちするエツィオに向けて目を丸くしながらパクパクと口を数回軽く動かす。

？「何を…私だけでなく、他の者達にも貴方の気まぐれな殺傷に巻き込んで…獲物を好き勝手に狩りながら死を弄んだというのに…何を、考えている！？？！！」

キッと、エツィオに向けて徐々に消えていく身体と共に嫌悪の表情

を出しながら、先程のトンネルだけでなく高速道路の殺傷を見て、マトモなことをエツィオに言ったが…

エツィオ「あっ、そだ！！まだ君の名前聞いてなかったなｗｗｗ悪いけど生き返らせる前に教えてくれない？？俺はエツィオだよーん（＾Ｏ＾）」

エツィオは女が真面目に言ったにも関わらず、“何も聞いていないようにスルー”しながら何かを思い当たるようにポンッと左手に右手を丸めた拳を軽く叩く仕草を取る。

女は疑心暗鬼な表情を出しながら両足を交互に動かして、後ろへと下がりながらエツィオに言う。

？「私を生き返らせる…ことは……」

女はぐっと背中の床に着けていた右手を丸めて、憎しみの表情を出しながらエツィオに向けて数秒間睨み付けた後、ゆっくりと足に力を入れて立ち上がる。

？「私は…貴方を殺すまで“一生追われる”ということになるでもいいから、早く教えてくれよぉ（、ｏ′）此方から名乗ったからさぁ～ｗｗｗ」…。」

エツィオは半立ちから普通に戻って、口を八の字にしながらブーブーと文句の表情を出すのを見て、女は“空気を読まない男”を見て憎しみだけでなく少しエツィオに対しての態度にイラッとした後…

？「リネージュ…リネージュ・アクセルティー。」

エツィオ「リネージュか。よし覚えたＺＯ★それっ！！」

エツィオは左手を女…リネージュに向けて伸ばした途端、リネージュの身体が青白い光に包まれて宙へと舞い上がる。

リネージュ「後悔するわよ…」

エツィオ「アハッ♪しないよ。それに君を生き返らせるに…」

エツィオは笑いながらゆっくりと両手を真ん中に組むようにして、握りしめていた両手をゆっくりと開くように宙に浮かぶリネージュに見せた途端…

リネージュ「！？？！！」

エツィオ「生き返らせるための“代償”を君の大事にしていた部分を払う。それが“コレ”ＳＡ★」

リネージュは開かれた部分を見て絶句しながら、リネージュがいた世界が鏡のように崩れ落ちていった。

…

……

……

―夜　スペイン　救急車内部―

？「リネージュ！！リネージュ！！！」

？「しっかりするんだ、君！！」

リネージュは目を覚ますと目の前に必死な形相で傷口の手当てをしている眼鏡を掛けた白髪のショートヘアとラフな格好で身を包んだ若い女性と、周りには白い服で包んだ男性が複数いて、中には薬品と機械が積んでおり大きいサイレンが鳴っていることを見て、此所は救急車の中にいることを理解する。

リネージュ「と…トリーナじゃない。一体…」

トリーナ「あっ！！起きちゃだめ！！それに見ては……」

リネージュは同僚であるトリーナだと分かって、身体を起こそうと上半身に力を入れて立ち上がろうとするが、トリーナが何かに慌てるようにリネージュを立たせるのを静止するような仕草を取る。

リネージュ「見ては駄目ってどうい……！？？！！」

救急隊員「！！駄目だ！！！見ちゃ駄目だ！！！！」

リネージュはトリーナの行為に疑問を浮かべながら静止するトリーナを払うように退けた直後、リネージュは目を疑うような光景に絶句する。

リネージュは救急隊員の驚愕と焦りの声が響く中、夢の中で言われたあの男（エツィオ）の言葉が、“現実となって何度も再生させられる。”

―生き返らせるための“代償”を君が一番代償にしていた“部分”を払う。―

リネージュはテレビ局の実況アナウンサーになる前は自慢の足を使

った“スペイン代表のマラソン選手”の一人だった。

数々の苦闘の日々を選手時代に送り、引退すると同時にずっと憧れだったテレビのアナウンサーを夢見て、マラソン選手から受け継がれてきた“身体能力”を活かして此処までやり続けた相棒の…

リネージュの両足が“綺麗に膝上まで切断”されていた。

リネージュ「ぁあああああああああああああ！！！！！！！」

リネージュは両足が無くなっていることを見て絶望する表情を出し、両手を顔を被ってビクビクと痙攣するように身体を激しく震えただせる。

トリーナ「リネージュ！！リネージュ！！！」

救急隊員Ａ「！マズイ！！患者が両足の状態を見た！！直ぐに鎮静剤を投入しろ！！」

救急隊員Ｂ「はいっ！」

トリーナは焦りの表情を出して上半身暴れまわるリネージュを押さ

え、同じく救急隊員もリネージュを押さえて他の隊員に指示をだしながら、叫び声と共に救急車は一直線と病院へと向かっていった。

リネージュは無意識に身体を暴れながら夢の世界に現れた男の姿を焼き付けて、更なる憎悪を思い心の中で犬歯を剥き出しにしながら声が枯れるまで叫んだ。

―許さない！！！！今度会ったら、殺してやる！！！！！！―

…

……

……

―夜　スペイン　上空―

アンゲルス【ねぇ、可愛い坊や（ダーリン）？本当に生き返らせて良かったの？？】

エツィオ「んぁ？」

エツィオはアンゲルスの声を聞いてすっ惚けた表情を出しながら、右手の平に先程刺されたリネージュのナイフをクルクルと手の中で

回すように遊んでいた。

どうやら先程リネージュにナイフを左胸下に刺されたのに平然としており、“出血さえ滲み出無い”ままナイフを引き抜いて、そのまま遊んでいたようだ。

ブリトラ《我が主よ、あの女に刺された傷は?》

エツィオ「心配するなって♪俺はお前らの“人を喰らい殺す位の特級の使役(ペット)”を操る位の“魔神”だぞ?人間の“外圧なんざ通用しない”し、“殺すことすら出来ない”程計り知れない“アルタイル同様の俺の身体”だぞ?」

エツィオは背中から漆黒の鷹の翼を出して遥か上空に浮かびながら、翼を羽ばたき大きく広げ水平にしながらゆったりな速度でブーブーと表情を出して、身体の中にいる一人と一匹に答えながら飛んでいく。

そんな最中エツィオの身体の中からアンゲルスの声が響いて、何かを心配するように主に向けて言う。

アンゲルス【あの子に払った“代償”の事よ。あの子の世界が崩れていく同時に…】

ブリトラ《憎悪の思いを読み取れた。…主よ、これは後々厄介な人間になるが…》

アンゲルスが言った途端、ブリトラが言葉を付け足すように話を割り込み、所々「キュゥゥン」と声が混じりながらエツィオに言う。

エツィオ「それでいいんだよ。俺に対して“憎しみ”を持っても構わない。あの子の…リネージュの次なるステップを信じてな。」

エツィオは両目を閉じてにやける表情を出し、可能性を秘めた思いを浮かべながら身体の中で心配している一人と一匹に語りかける。

エツィオ「シャイナから借りた本の一部を見たけど、事故で一番大事な部分を失って絶望な日々を送っていたものの、残された部分を活かして“新たなヤリガイ”を見つけて、昔の自分を捨てたという話を読んでな。それを元に…」

アンゲルス【賭けてみた…と、言うことね。】

アンゲルスに言われながらエツィオはマドリードへと再び辿り着き、アイモンの影が言われたように高層ビルが四つ建っているのを上空から確認した後、画面と同じようなビルを見た後翼を目的地へと目指すように羽ばたかせる。

ブリトラ《果たしてそう行くのかな？あの人間は…？？》

エツィオ「全てはリネージュ次第さ。リネージュがこの先俺に立ちはだかっても…」

エツィオはアイモンの影が指したビルの屋上上空へと移動した後、翼を軽くゆっくりと羽ばたきながら屋上へと静かに下降していく。

エツィオ「俺はシャイナと共に前へと歩み続ける。歩み続けることでリネージュも…」

ブリトラ《考え方も変わるハズか…だが、人間は一度忘れられない出来事を刻むと其処から脱け出すのに数年掛かると聞くが？》

ブリトラの声と共にエツィオは両足を屋上に着けて翼を背中に仕舞った後、手の平の中で遊んでいたナイフを貰うように腰に仕舞って、屋上出入口である扉に向けて歩んでいく。

エツィオ「大丈夫（＾＾）それはさておき、“あずーるしゃ”に着いたＺＯ★な・の・で…」

エツィオの身体が段々と半透明になり、アズール社屋上出入口のドアノブへと手を掛けた途端…

エツィオ「ＴＨＥ☆原作混じりの隠密行動（ソーシャルステルス）始っじまるＹＯ～＼（＾ｏ＾）／」

エツィオはニシシと歯を見せて“カメラ目線”に向けて左手を斜めピースサインを出した後、エツィオの半透明になった身体が、“幽霊のようにドアをすり抜ける”ようにアズール社へと入っていった。

第五十二曲　原作混じりの盗聴＆スリ

―スペイン　マドリード　アズール社　２００階廊下―

エツィオ「うはぁぁぁぁぁ♪随分と広い廊下だなぁぁぁぁぁぁぁｗｗｗ」

透明状態のエツィオは現代の技術を見て息を漏らしながら感激し、所々ペタペタと壁を触って廊下に敷かれたもっこりとした赤い絨毯の上にゴロゴロと身体を横に何度も回転させながら、どこでも見かけるような子供が思いっきり遊ぶように転がる。

エツィオはここまで来るまで屋上の出入り口から入った後階段を下りて、降りた後気のままに突き当りまで歩いて現代のガラスに興味津々でペタペタと触ったりと、“超適当な建物内の散策”で歩いた結果が、今いる廊下へと繋がったようだ。

エツィオ「夜なのに今の人間は働いているんだなぁ（・ｏ・）随分とご苦労さんなこって。」

夜にも関わらず今いるアズール社の中は黒スーツで覆われた沢山の社員が歩いており、中には右脇に沢山の書類を挟んで何処かへと急

ぐように走っていて、そんな中には片手に湯気が立つカップを持ちながら社員と話しかける者もいた。

エツィオはごろ寝状態から両足を交互に組みあぶら座りしながら、興味津々に人と人が交差する廊下の様子をじっくりと観察しながら見つめる。

社員A「ホント、やってられないな。やっと仕事を切りあげられると思ったらこのザマだ。」

社員B「まーまー（汗）その分ここの会社は残業ボーナス付くから金がたっぷりと入るんだし、家庭の大黒柱としては上出来じゃないかｗｗｗ」

社員C「ねーねー、今度人気店のピザ屋に行かない？彼処のマルゲリータが超絶品らしいよ～♪」

社員D「勿論行く行く！！だけど、今日の社長から言い渡された残業分をやらないとねぇ。にしても…多すぎない？（涙）」

エツィオはガヤが混じった廊下を聞いた後立ち上がって、更に人が集まる場所へと歩き出す。（エツィオは透明状態なので見ｒｙ）

エツィオ「“ベフェーレン”て奴は一体何処にいるのかな？」

エツィオの足は廊下から社員食堂へと歩んで、社員同士の食事を取り勤務以外の様々な日常的な会話が流れ、社員達が食堂のトレーを持って並んでいる中並んでいる位置から、少し離れたところで“皆に聞こえないように背中を向きながら突っ立っている二人の社員”を見たエツィオは…

エツィオ「おっ、アイツらなら“盗み聞き出せそう”だな（＊＾―＾＊）よっこい…せ、と♪」

エツィオの両眼が一瞬金色の鷹の眼になって、エツィオの鷹の瞳に映る二人の身体に金色の光が纏わりつき、所々文字が浮かび上がるのを見てニヤッと口元を吊り上げ、近くにあった食堂のベンチに座って両膝上に手を乗せて股を開きながらベンチに座った後、耳を澄ませながら二人の会話を集中して聞く。

社員E「おい、聞いたか？俺らの社長明日バルセロナの“サグラダファミリア内”で例のことをやるらしいな？それに今はスペイン国内の政権のことと俺ら社内の事で色々と悩ませているのに関わらずに…」

社員F「けっ、たまんねぇな。最近“アレ”を社長が持ってきたことで、余計に仕事量が増えたきがするぜ。なんにせよ此処の社長は元々“ボンボン”だったんだろ？」

社員Ｅ「あー、そう言えばそんな噂が流れていたなぁ。お前の話からすると“ボンボン”だけでなく何やら“ヤバイ事”でもやってた噂もあったなぁ～。それに“例”のことだけど…」

社員Ｆ「ああ、古代の発掘品の“アスタロトの卵”という秘宝らしい。俺は少しだけ見たことあるけど見かけはただの“錆塗れの球体”しか見えなかったなぁｗｗｗ」

社員Ｅ「へぇぇぇぇ。んじゃあの“ただの錆塗れの球体”を社長の手の中にあるんだ？しかも“大事そうに抱えながらそのまま社長室へと歩いていった”のを見た同僚もいたって話だぜ？」

社員Ｆ「うっわっ、マジかよｗｗｗ俺これから“２１０階の社長室”に行って書類を届けなくちゃいけないのにｗｗｗ何かあのすっごっい真面目態度の社長の裏顔を想像して身震いしてきたｗｗｗ」

社員Ｅ「アハハッ♪まぁどの道俺らのような食ちゃ寝しながら生活してきた元ニートがこのクソ真面目な会社に入社できたのは、あの社長のおかげだしなぁぁ。それにスペイン国内の現政治家だし。」

社員Ｆ「ま…まぁそうだけどよ。今更こんなこと言っちゃ駄目だよなｗｗｗ俺らの身分は格下なんだしｗｗｗ」

ガヤガヤと賑わう食堂の中でエツィオと二人の距離はだいぶ離れているのに関わらず、エツィオにとっては“身近”に聞こえて…否二人の会話のみしか聞こえないように、じっくりとエツィオは二人の話を聞く。

社員E「そうそう、今はじっくりと黙って仕事をするだけでいいさ。一応書類出すだけで仕事終わるんだろ？」

社員F「あぁ、ようやく溜まっていた書類内容を全て書け終えたぜ。ようやく密室地獄から開放されるぅぅぅ。」

社員E「俺もだ。早く飯食ってさっさと社長室に行って分厚い書類提出してきな。今日は二人で飲みに行こうぜ。」

社員F「おお、なんにせよ三週間ぶりだもんな。」

そう言った後、二人は間を空けて突っ立っていた場所から机が現れて、空の皿がいくつも乗ってあったトレーを持ち返却口へと持ち歩いて、二人は椅子の下にあったカバンと書類を持って食堂出口へと歩いた後…

社員E「んじゃ、また後でな。」

社員Ｆ「ああ。」

二人は別々のルートで別れて、多くの社員達に紛れながら消えていく。エツィオは二人が去った後すくっとベンチから立ち上がって、顔だけを出入り口へと向けながら“カメラ目線”に向けて微笑みを出す。

エツィオ「２１０…２１０階にベフェーレンってやつがいるのかぁ。それに“アスタロトの卵”となると…」

エツィオは食堂のざわめきが多く聞こえていたのに関わらず、先ほどの会話を全て盗むように聞いていた（アサクリのハイパー地獄耳）ように“重要な部分の内容”を吐いて、ふぅと息を出しながら食堂を後にする。

エツィオ「（オイオイ、アルタイルｗｗｗ相当ヤバイ秘宝（人間的な意味で）を、星（ちきゅう）に忘れていったなｗｗｗ）」

エツィオはプクッと苦笑いしながら廊下を歩き、突き当たりの階段まで行って２１０と壁に書かれた階へと目指してまた再びビル上へと上昇する。

ーアズール社　２１０階　廊下ー

エツィオの足が２１０と書かれた壁を見て階段を後にすると、先ほどと同じように赤い絨毯が敷かれた廊下があったが…

エツィオ「！」

エツィオが２１０階のフロアへと足を一歩踏み入れた途端、身体全体に“ビリビリとくるような振動”が来て、エツィオの身体に来る振動は徐々に前方から来るように発していた。

エツィオ「（おっと、これはアスタロトの卵からか…それに…）…こっちか。」

エツィオは卵の気配からだとすぐに感知して、スタスタと卵の気配が盛れ出ている所へと歩いている最中…

警備員Ａ「はぁ…今度はバルセロナかよ。それに秘宝展示とくだらない論舌のついでに観光かいｗｗｗもはや政治家というよりも“金持ちサン”の警護のようだぜ。」

警備員Ｂ「そう言うなって。ｗｗｗ何だか近頃“連続殺人事件”とかも多発的に起こっているし、それに今度の任務は２０００以上の機動隊も混じって警備に当たるらしいぞ？」

エツィオが歩く先に武装をした男達が突き当たりの廊下の真ん中に立っていながら話しており、歩いてくるエツィオ（透明状態なのでｒｙ）に気づかないままグチを続ける。

警備員Ａ「情報によると連続殺人犯は“一人”らしいぞ。ただか一人相手に何故２０００以上の機動隊も出撃するんだよ??」

警備員Ｂ「話によるとその殺人犯…ビルの壁とか“普通に走ったり”、“妙な奇術”で多数の人間を葬ったり、大型二輪車を使って“車を一刀両断にしたり”とか…なんか無茶苦茶変な男がしでかしたようで…」

警備員Ａ「はぁ?なんだそいつはｗｗｗ厨二漫画にでも出てくる“スーパーマン”のような奴かよｗｗｗ」

警備員Ｂ「その変な男は“教会（コルナ　ド　アンジェリ）上部の一人だったアンジェロさん”を殺したそうで…それに一人の“教会の信者”を連れ去ったまま逃亡中だとか。」

警備員Ａ「マジかよｗｗｗあの教会…“コロナ　ド　アンジェリ”は本当にヤバイぞ…。上部の教会の死はもはや“宣戦布告”とでも

言っているようなもんだ。」

警備員の一人が腰から紙切れのような何かを出して、パラッと折りたたんでいた紙を広げるように紙に描かれている全体図を見て、そっともう一人の警備員に話しかける。

警備員Ｂ「この見取り図を見てくださいよ…。この配置といい、人員といい…」

もう一人の警備員は出された見取り図に向けて視線を下ろし、右手を顎に当てながらそっと呟く。

警備員Ａ「ああ、この図からにして“サグラダファミリア”の敷地内全てを囲うように配置されているな。それに内部も波状のようになっている。」

警備員Ｂ「ええ、見た感じでは“死角なし”です。外も中も敷き詰められているようになっていま…」

警備員Ａ「ん？」

二人は“何かが通り過ぎるような感覚”を受けて二人ははっと視線を前に映し、きっと眉を斜め下に下ろして険しい表情を出しながら、

腰に掛けられていた銃を何時でも抜けるように手を添えながら言う。

警備員Ａ「??…居ない…よな??」

警備員Ｂ「??気のせいでしょうか??」

何時までたっても何も起こらないので二人は険しい表情からキョトンとした表情になって、二人は何も起こらないことに安堵したのかそっと銃に添えていた手をゆっくりと前へと戻す。

警備員Ａ「…まっ、いいか。とりあえず明日だな。配置通りに着かないと…。」

警備員Ｂ「そうですね。」

二人は再び立ちなおし、またしても廊下の真ん中でペラペラと喋りながら半分手抜きな警備を行った。

エツィオ「ふーん、これが“見取り図”ね。…どう見ても俺から見て“簡単”に進入できるな。ｗｗｗ」

エツィオの手には先ほど警備員が持っていた“配置図の紙”が握ら

れていて、ペチペチと右手で紙に軽く何度もデコピンしながら気楽そうな表情でフンと鼻息を出す。

どうやらエツィオは二人の警備員が見取り図に気を反られている内に、見取り図を紙から出していないもう一人の警備員の腰裏にあったポケットから出ていた紙に向けて、二人の間を通り過ぎると同時に“もう一人の警備員から盗んだ”ようだった。

エツィオ「さて、この先から“卵”の気配を感じるな。」

エツィオは盗んだ見取り図を懐に仕舞って“卵”からの気配を頼りに歩いていくと、派手な大きな扉があって扉の真ん中には“社長室”と書かれた札が貼ってあった。

第五十三曲　コインの表と裏

―夜　スペイン　マドリード　アズール社　２１０階　社長室―

？「今夜の月も綺麗ですね。もうじき満月になる。時間の流れは残酷かつ、あっという間に過ぎ去っていくもの…」

窓に映る少し欠けた月を見上げながら、顔を上に上げてロマンチックな台詞を吐く。

？「川の水もそうです。流れる水は時間、水の上に浮かぶ葉は私達人間、川の水は時と同じ様に流れに従って動く。水が戻ることなど無いのです。」

エツィオ「（コイツがアイモンが見せてくれた“ベフェーレン”か。いやぁ本当に…）」

エツィオは透明状態のまま厳重に何重もロックされていた社長室の扉を“幽霊のようにすり抜けて潜入”し、既に社長室に入っていて両腕を組ながら冷たい表情を出し背中を壁に付けながら窓にいる人物を見詰める。

体型はアイモンが見せてくれた通り電柱のような細い身体に、顎がシャープに尖ってひし形の顔に髪型はリーゼントのような黒髪、服装は紫の紳士服のようなもので羽織って、胸の二つの小さなポケットの口に白い薔薇の紐で作られた花が付いていた。

―アズール社　社長＆amp;スペイン現政治家　ベフェーレン・アンシュトゥルム―

社長F「はぁ…あの社長。書類を何処に置けば宜しいですか??」

社長室には先程エツィオが盗聴した一人の人間がいて、社員は戸惑いながら手にする厚い書類を両手で支えるように緊張した言葉を吐く。

ベフェーレン「あぁ、失礼。今日の月に魅とれてしまってね…。私は美しい物を見るとついつい…」

ベフェーレンはすまないという表情を出しながら社長室にある社長専用の黒いソファーに座って、右足を左膝に乗せながら社員が持っていた書類に向けて軽く右手で手首を軽く後ろへと振る動作を取る。

社員は両手に持っていた分厚い書類を両手で差し出すようにベフェーレンと渡し、渡した後数歩後ろへと身体を前に向けたまま下がる。

ベフェーレン「確かに頂戴いたしました。…フムッ…内容は問題ありません。訂正箇所は…無いですね。ふふっ、上出来ですよ。」

ベフェーレンは手にしていた書類内容を確認して、穏やかな表情を社員に向けて出した後、パサッと黒い机の上に置く。

社員F「あ…ありがとうございます！」

ベフェーレン「大分君も成長しましたね。当初の貴方と比べると違います。仕事に馴れてくると流れも解り、尚且つ己自身も変わっていくのです。」

社長はベフェーレンに好評価されたことでガチガチに固い表情から、緊張が和らいだ表情へとなって何度もベフェーレンに向けて感謝をするようにお辞儀する。

ベフェーレン「君は花と例えて話すとしますと、段々と蕾が開いてきて次期に花弁一つ一つ開花させていく最中なのです。成功する度に貴方の花の蕾が開いていき、完全に開いた時は、君は…」

ベフェーレンはそんな社員の姿を見て「ホホホッ」と穏やかな表情で笑った後、机の引き出し箱を出して机の上に置いていた書類を中

に入れる。

ベフェーレン「貴方の周りにいる咲き誇る花達と同様になるのです。しかし、油断は禁物ですよ。一度咲かせても咲かせた花弁は意図も簡単に千切れてしまうのです。だから…」

社員F「“初心を忘れるな”ですね。」

社員は真面目顔になりながら黒いソファーに座るベフェーレンに向けて、背をピシッと伸ばしながら言う。

ベフェーレン「そうです。だから此れからもその調子でお願いしますね。」

ベフェーレンがそう言った後「下がりなさい」と社員に言って、黒いソファーに座りながらクルンと半回転させて、ベフェーレンは再び窓に映る月を見上げるようにする。

社員は「失礼しました」と言った後、ドアノブに手を掛けて閉まる音を立てないように慎重に社長室を後にする。

エツィオ「（見た感じは人間にとっていい奴かもしれないな。けど…）」

エツィオの瞳が金色の鷹の眼になって、瞳に映るベフェーレンの身体は“赤色”に覆っていた。（アサクリユーザーには分かる通り、鷹の眼使用時の赤色は“敵”）

ピリリリリッとベフェーレンの腰にあった携帯電話から着信音が鳴って、ベフェーレンは月を見上げながら腰に入っていた携帯電話を取り出して左耳に当てた後、受信ボタンを押して言う。

ベフェーレン「どうですか？」

？「教会上部（コロナドアンジェリ）より“コードΩ”、作戦は失敗です。私以外のコードαとβとγはコードネーム“ゼウス”の手に掛かって全滅しました。」

ベフェーレンは月を見上げながら眉を下に下げてはぁとため息を付いた後、電話相手に向けて落胆の声を出しながら言う。

ベフェーレン「そうですか…」

教会上部「我々教会だけでなく、一般市民及び観光客含めて７００人以上の死者が出ています。明日の講演は中止したほうが良いかと…」

ベフェーレン「いいえ、講演は予定通り行います。表の行事もこなさなければ私の“登り詰めた地位”そのものが崩壊してしまいますからね。でも…」

ベフェーレンはソファーから立ち上がって数歩前へと歩いた後、窓手前にあった床に刺さった長い四角形のような物の上部に触れた途端…

ベフェーレン「明日は“満月”。手にいれた卵が漸く眼を醒ます…。」

長い四角形の上部からボコッと錆塗れの丸い球体が出てきて、ベフェーレンは球体を手の平で掴んだ後、ゆっくりと顔まで持ち上げながら口元を吊り上げる。

教会上部「例の発掘した秘宝“アスタロトの卵”ですか?」

ベフェーレン「そうです。この卵が目醒めた時、貴殿方の教会の連中を打ちのめした“殺人貴”など秘宝の力で挫くに容易いでしょう。だから…」

教会上部「…分かりました。予定通り明日の夕刻に…」

ベフェーレン「頼みましたよ。」

ベフェーレンがそう言った後携帯電話の受信を切って、手の平の中にある秘宝を両手で大事に包むように顔まで持ち上げて、表情は月明かりの光で薄笑いしながら秘宝に向かって呟く。

ベフェーレン「もうじき…もうじき…“私の卵”が孵る。卵が孵った時…」

ベフェーレンの顔が“子供が産まれることでの喜び”と秘宝に対しての“力”に酔いしれながら歪んだ笑顔で、歯並びが悪い歯を剥き出しにしながら空に浮かぶ月に向かって呟いた。

ベフェーレン「私は…スペイン全国だけでなく、世界そのものを手に…！！」

その直後、悪役のような笑い方をして、ベフェーレン本来の裏の素顔をさらけ出しながら、声が枯れるまで歪んだ笑い声を吐き続けた。

エツィオ「…くだらねぇ。」

エツィオはベフェーレンの姿を見て少し顔を伏せて頭部のフードを深く被り直した後、踵を返して笑い続けるベフェーレンに背を向けて社長室を後にした。

第五十四曲　夢の中の幸せ

―夜　スペイン　バルセロナ　雑貨屋アイモン工房　２階寝室―

シャイナ「スー…スー…」

すっかりと外は真夜中になっていて寝室は上空に浮かぶ月の光でおぼろげに照らし、暗闇の中のアイモンの寝室に眠るシャイナは、眠りながら穏やかな表情でぎゅっと掛けられた布団を握り締める。

彼女は今夢の世界にいる。ただ幼い頃の平和だったあの時を思い出を見ながら、ただひたすら現実から一時的に開放されるように逃れて、朝が来るまで楽しかった日々を夢の中で再現させていた。

…

……

……

―シャイナの夢の中　１６年前　アイモン工房内部―

幼シャイナ「アイモンおじちゃん、早くぅ！早く作って作ってぇぇ（＾ｏ＾）」

アイモン「待ってろよぉ、シャイナちゃん♪もうじき出来上がるでねぇぇぇぇーｗｗｗ」

幼い頃のシャイナはカウター席辺りに立ちながらピョンピョンと両足を軽く何度も跳ねて、カウンター奥に何かを作っているアイモンに向けて待ち切れない表情でアイモンに言う。

エルシア「これこれ、シャイナ。あまりアイモンさんを急かせちゃ駄目よ。」

リオール「ハハハッそうだぞ、シャイナ。もうじきだから座って待っていなさい。」

カウンター席辺りにあった椅子にシャイナの叔父と祖母が座りながら、テーブルの上にある湯気立つマグカップを手に持って口元へと啜り、はしゃぐ幼シャイナに微笑みの表情をだしながら言う。

幼シャイナ「だってだってぇ、世界にたった一つしかない“わたちだけの宝物”をアイモンおじちゃんが作ってくれるから、楽しみで座って待ってられないもん！！」

アイモン「アッハッハ！そうだもんなぁ。世界に一つだけの宝を俺が作っているんだから、座って待ってられないもんな！あ…あとちょい！！」

アイモンは幼シャイナに背を向けながらでも笑顔の表情を全開で何かを作りながら、懸命に細かく何かを調整し匠な技術で創作していく。そして…

アイモン「ウホッ！！…で…でーきーたーぞーおぉぉぉぉぉ！！！！」

幼シャイナ「ホントォ！？わぁぁぁぁぁぁい！」

アイモンは納得いくような表情を出して創作した物を手の平の上に乗せて、カウンター席前はしゃぎながら軽くジャンプしている幼いシャイナに向けて歩き出す。

アイモン「ご注文通り、シャイナちゃんの小学校入学祝いだよぉ♪」

アイモンはニコッと口元を吊り上げて笑う表情を出しながら、手の平の上に乗せている創作物をまだアイモンの膝までの小さい身体の幼シャイナに向けてしゃがんで、そっと幼シャイナに向けて創作物

を差し出す。

幼シャイナ「ありがとぉぉぉぉぉ♪このキラキラが虹のように輝いているみたい！！」

幼シャイナは目を爛々とさせながらアイモンの手の平に乗る創作物に、太陽の光があたって所々虹色の輝きを放つのを見て、幼シャイナは更に興奮する。

アイモン「そうか、そうか。シャイナちゃんがそう言ってくれると、おじタンすっごい嬉しいぞぉー。その喜びを受けると、おじタンもっと頑張れるぞぉぉぉぉぉ（＾∀＾）」

幼シャイナは差し出された創作物を手に取って、わーいと甲高い声を出しながら身体を回転させながら跳ね、クルクルと周り踊るように思いっきりはしゃいだ後…

幼シャイナ「あっ…そうだ。おじちゃん、コレどうやって付けるの？？」

アイモン「おっとっとｗｗｗそうだったな。シャイナちゃん、こう付けるんだぞ。」

アイモンは少しずっこけるように身体を斜めにさせた後、シャイナの手の平にあった創作物を一度取って創作物先端に付いていた銀色の鎖をシャイナの首元に向けて囲むようにして、鎖の先端に付いていたフックに引っ掛けてカチンと閉まる音を立てる。

幼シャイナ「ありがとう、おじちゃん！」

幼シャイナは首に付いた創作物を見て一度しゃいだ後、シャイナは首後ろに手を回して一度外しアイモンが教えたとおりもう一度首後ろに付けて、何度もはめる音を立てながら何度も練習する。

リオール「すみませんな、アイモン殿。忙しい間にこのようなことを頼んでしまって…」

アイモン「いや、別に構わんさ。なんにせよ“世界で有名な教会信者サンの一人”の入学祝だからな。それに…」

アイモンははしゃぐ幼シャイナを見て少し心配するような表情を出した後、リオールはアイモンの言葉を聴いて少し顔を伏せて何かを思うような表情を隠した後、顔を天井に上げてふぅと両眼を閉じながらため息を吐き出す。

エルシア「いいえ…あの子の笑顔をずっと…この先もこれからも…」

アイモン「…そうだな。」

アイモンとエルシアはカウンター席の近くにあった黒いソファーに座った幼シャイナを見ながら、心配するような思いを浮かべながらでも、幼シャイナが出す笑顔に少し軽い微笑みを出しながら見つめていた。

幼シャイナ「わたちだけの…宝物……。」

幼シャイナは座っていた黒いソファーに猫が眠るように身体を丸めた後、首に着けた創作物を手にとって見ながらゆっくりと瞳を閉じる。

幼シャイナ「わたち…だけの……」

遂には瞳を閉じて幸せな表情を出しながら、黒いソファーの上で創作物を手に握ったまま猫のように眠りに落ちていった。

…

……

……

―現代　雑貨屋アイモン工房　2階寝室―

エツィオ「ただいー…おっと…」

ガラッと寝室の窓からエツィオが入ってきて、陽気な表情で言おうとした途端、幸せに眠るシャイナの姿を見て思わず息を飲む。

エツィオ「ハハッ…お腹が出ているぞ、シャイナぁ（＾O＾）」

寝相が悪いのかシャイナの身体に掛けられていた布団が、蹴り飛ばしたように掛け布団が床に落ちて、シャイナの服が捲れて腹が半分出ていた。

シャイナ「ズピー…スピュー…ゴゴゴ……」

エツィオはそんな寝相と鼾の悪いシャイナを見て少し笑った後、シャイナが眠るベッドへと近づいて方膝を折って身体をしゃがんむように半立ちした後…

エツィオ「そんなんじゃ、風邪引くぜ。」

バサリッと戻ってくる際に使っていた背中の漆黒の鷹の翼をグッ

と伸ばして、シャイナの身体を覆うように翼を掛け布団代わりにする。

シャイナ「ふにゃぁぁぁ…モフフフーん……」

シャイナは幸せな表情で寝ぼけながらエツィオに掛けられた翼を握り締めて、ゴロンと身体をエツィオに向けて横になった後…

シャイナ「あ……た……ち……だけ……の……たか……ら…もの。」

シャリンと首に付けられたペンダントの鎖の音が鳴って、エツィオの翼の中で包まれるように夢を見ながら寝る。

エツィオ「シャイナ…」

エツィオは幸せな表情で眠っているシャイナを見て穏やかな表情を出しながら、そっとシャイナの左頬を右手で何度も擦る。

エツィオ「明日は激しくなるからな。それまで…」

―良い夢を…―

第五十五曲　なんという逆誘いされる主人公ｗ

ー朝　スペイン　バルセロナ　雑貨屋アイモン工房　２階寝室ー

シャイナ「ん…」

チュンチュンと小鳥が鳴く声が外から聞こえて、シャイナの顔に太陽の光が当たってほんのりとした暖かみを受けている感覚を受けて、ゆっくりと両目を上へと開ける。

シャイナ「んあ？…もぅ朝っずっか…ん゛……ありり゛？？」

寝ぼけた声を出しながらシャイナは寝ぼけた瞳で上半身を起こそうとした時、身体上に黒い羽のような物が覆われているのを見て、シャイナは左手で目を擦ってしっかりと両眼の視界のピントを合わせた後…

エツィオ「スピー…ピピー…スー♪」

シャイナ「ちょ…エツィオ！？何時の間にｗｗｗ」

シャイナが眠っていたベッドの傍に寄りかかるように、エツィオは片方の手をベッドの上へと乗せ子供が寝るような表情を出しながら眠っていた。

シャイナ「もうっ…エツィオったら…。」

シャイナの上半身に覆う黒い羽は、エツィオの背中から出ていた翼だと分かり、寝ている間に何をやっていたのか瞬時に理解する。

エツィオ「しゃ…いな……スピー…」

シャイナ「わっ！…とととｗｗｗ」

無意識なのかシャイナの上半身を覆っていたエツィオの翼が人間の手のように動いて、シャイナの身体を翼で優しく包みながら身体を横向きにしてエツィオが寝る傍まで引き寄せる。

エツィオ「しゃ…いなぁ…しゃい……な……。」

シャイナ「エツィオ…？」

シャイナは身に包まれている翼が少し震えるのを覚えて、シャイナはきょとんとしながら子供のように眠るエツィオを見た途端…

―エツィオの閉じられた左目からツツッと一滴の雫がすっと零れ落ちていた。―

エツィオ「しゃい……な……どこ…にも……いか……な…い……で。」

グッと、シャイナを包む翼に力が入って、所々震えながらも放さないように人を抱き締めるように、背中の翼を身に包むシャイナを抱きつくように抑えていた。

シャイナ「エツィオ…。（２８００歳とも言えども、本当に子供のように若いのね。ｗｗｗ）」

シャイナは子供のようにねだる寝言を聞いて少し顔を綻んだ後、エツィオの翼の温かみを感じながらそっと身を包む翼の羽を右手で擦るように撫でる。

エツィオ「しゃい…な……。」

その直後シャイナに翼の羽を撫でられたのか翼自体の震えが止まって、翼に入っていた力を抜いてシャイナに包んでいた翼を緩めるようにして少し羽の一部を身体から離す。

シャイナ「大丈夫だよ…」

シャイナは身に包む翼の温かみを感じながら、少し瞳を閉じた後また赤子のように足を折ってエツィオの左頬に向けて右手を伸ばしながら、数分だけ眠るようにして意識を手離した。

…

……

……

―数分後　1階キッチン―

アイモン「おっはよー、シャイナちゃんに勇者君。朝からテンション高く逝っちゃうZO★」

シャイナが寝室から1階へと降りてキッチンに入った途端、アイモンのモーニングスマイル溢れた表情を“カメラ目線”に向けながらバチコーン☆と片目を閉じてウィンクする。

シャイナ「おぇっｗｗｗお…おはよ……（朝からいきなり気持ち悪い中年顔をカメラに向けて出すんじゃねぇよ。このクソハゲｗｗｗ）」

エツィオ「オハヨー、アイモン。」

シャイナはオエッと気色悪い顔を見せないように反らしながら、階段を降りつつキッチンのテーブルへと歩んで、椅子へと座り込む。

一方エツィオは目をショボショボと朧気な表情で足を動かしながら、アイモンの中年ウィンクを“普通にスルーする”ようにシャイナの後を続いて歩いてくる。

アイモン「ハーイ★今日の朝食は卵尽くしのアイモンおじタン風洋食ＤＥＡＴＨ♪」

アイモンの片手一つ一つ持った皿をテーブルの上に置いて、どうぞ召し上がれぇ♪という感じでシャイナとエツィオに向けて笑顔全快で表情を出しながら、左手を前に出して手の平を握手するような形を取る動作を取る。

―二人に負けない位に、カメラ目線に向けたまま。―

シャイナ「（朝からそんな顔するんじゃねぇ（、ｏ′）メッチャキメェェェェェｗｗｗ）い…頂きまーず。」

シャイナは心の中で突っ込みを入れながら呟いた後、表情をショボショボしながら皿に乗せられたオムレツ一つをフォークで刺して口の中に入れて食べ始める。

エツィオ「うわぁぁ～！（◎ｏ◎）皿が黄色だぁぁ～！！いっただっきまーす♪♪」

一方エツィオはシャイナと対象的に席に座った途端見たことがない料理を見て完全に目を覚まし、わくわくとしながら子供のようにシャイナと同じフォークを使ってマカロニとレタスが混ざった卵サラダを食べ始める。

エツィオ「オフーン…あぁん…何てウマウマなぁ（´ω`）」

エツィオは左頬に卵サラダを頬張りながら、幸せな表情で口元を閉じてモゴモゴと動かしゆっくりと噛みしめながら卵とマヨネーズの味を味わう。

アイモン「どうだ、坊主?現代の食の技術は??すっげぇ進化してるだろ??」

エツィオ「もごごごごごごんＷＷＷ」

アイモンはエツィオの食べている表情を見ながら高笑いし、全員食事を取りながらアイモンはテーブルの上にあったテレビのリモコンを取って、テレビの電源赤外線に向けてリモコンの電源スイッチを押す。

テレビのアナウンサー『此方スペイン放送局“ガネーシャ”よりお伝えします。今日の夕方“サグラダファミリア内”にてアンシュトゥルム氏による論説が行われる予定です。』

テレビに映るアナウンサーが言いながら画面が切り替わり、所々サグラダファミリア外部周辺が機動隊や警察隊がバラバラと動いて地上には戦車と空中には戦闘ヘリも出撃しており、警戒態勢が高い場面を全国のテレビに向けてカメラを的確に回していく。

アイモン「おーおー、警戒態勢が凄いこってＷＷ流石は国民的英雄の男ＭＥ。けど…」

エツィオ「こいつなぁ…夜見てビックリしたよ。裏の顔がすっげぇ“出っ歯が見えるぐらい”にキモイ顔を出すんだぜＷＷ表はいいやつに見えるけどな。（、８′）」

シャイナ「マジｗｗｗつーか私が知らない間に調べてきたのかＹＯｗｗｗ」

エツィオ「あぁ、シャイナが眠っている間にちょいっと“あずーるしゃ”へ隠密調査してきたのＳＡ。ついでに見取り図も盗んできたんす♪」

テレビのアナウンサー『…先ほどのお伝えしました通り、スペイン国内に潜伏している“無差別殺人犯”が襲撃してくるのを備えて…』

テレビのアナウンサーの内容が淡々と流れる中、アイモンはニタニタと笑いながら言いシャイナはへーというような表情を出して聞き、エツィオは口を八の字にしてブーブーと文句でも付ける様な表情を出しながら言う。

アイモン「で？秘宝奪還は何時ごろに？？」

アイモンはシャイナと共に盗んだ見取りを見てニタニタと笑いながらエツィオに向けて視線を動かしながら言い、エツィオはそんなの決まっているというような余裕の表情を出しながら、手にしていた焼きたての四角のパン端を齧ってアイモンに言う。

エツィオ「アイツが演説している間に“秘宝”を“隠密に殺すように掻っ攫う”。もし失敗しても周りにいる全員を“証人隠滅のため

ぶっ殺し（全殺し）てもいいように”フツーに暴れるだけＳＡ★」

シャイナ「えーｗｗｗ（おまっｗｗｗ結局どれも無差別チート無双じゃねぇかｗｗｗ多分隠密って、無理ポなフラグｗｗｗ）」

アイモン「がっはっはっはっは！！“ドＳ鬼畜攻め”と来たか！！くっはっはっは！今時の若造らしい“単純計画（ストレートプロット）”だなｗｗｗ」

エツィオ「あんな状況で隠密など、“超堅苦しい”しな。それにくだらねぇ“仮説塗れの論説”なんて長々と聞きたくないしｗｗｗ」

シャイナは見取り図を見てエツィオの発言を聞いた後、心の中で突っ込みながらエツィオに向けて呆れた表情を出しながら、がくっと頭を下げて呆れながらも笑う表情を出す。

アイモンはエツィオの提案を聞いて豪快に高笑いし、腹を両手で押さえながら空になった皿を手に取ってキッチンの流し場へと持っていく。

エツィオ「夕刻に始まる予定だからさ。それまでに…」

シャイナ「？」

エツィオがシャイナの方向へと顔だけ振り向いて、目を爛々と輝かせながら首を傾げるシャイナの所へと向いた後…

エツィオ「時間になるまで…シャイナ！“何処か遊びに行こ”？」

シャイナ「（ちょっ…何この逆誘いｗｗｗ私この小説の主人こｒｙ…まぁ、いいか。）あ、いいよ。（＾＾）んじゃ、何処かに行こかぁｗｗｗ」

心の中で自分がヒロイン役になっていることで突っ込みながら、シャイナはそれを抑えつつエツィオに向けてニコッと笑みを返しながら言った。

第五十六曲　二人でのんびり観★光

二人は路地裏のアイモン工房から出て数分後、シャイナは見馴れたように歩いてバルセロナ一つのメインストリートへと歩き着く。

―スペイン　バルセロナ　ランブラス通り―

エツィオ「うはぁぁ。これが“ランブラス通り”かぁー。ちっちゃな店イパーイ♪」

半透明になっているエツィオがシャイナの右肩に乗りながら、きょろきょろと興味津々に様々な小さな店舗を見て、無邪気に腕を振舞いながらシャイナに向けて見下ろすような形で言う。

シャイナ「バルセロナの中の“メインストリート”の一つよ。小店舗が多く並ぶから、ちょっとした買い物には最適ね。」

シャイナは小型店舗の一つである花屋に寄って、様々な花を摘んで匂いを嗅ぎながらシャイナしか見えないエツィオに向けて小声で言う。

シャイナ「観光客を誘うにうってつけね。此所に並ぶ店舗はあらか

た“小物店”が多いのよ。私達がいる場所は女性向けが多いわね。」

シャイナはある程度花を見て悩む仕草を取った後、花店から離れて別の店舗へと行き色々と物色しながらメインストリートの店舗に立ち寄る。

シャイナ「さて、エツィオの新しい服を見つけないとｗｗｗ」

エツィオ「俺が盗んだ“金”はまだある？（第四十曲参照）」

シャイナ「余裕にあるよぉｗｗｗ貴方が盗んだ財布の中にある万札が何枚入ってんのｗｗｗ」

シャイナはこっそりとエツィオに向けて盗んでくれた財布の一つを右肩に掛けていたショルダーバッグの中から取り出して、心配の表情を出すエツィオに向けて財布のがま口を開けてじっくりと見せる。

エツィオ「おぉーｗｗｗスゲーな、まだ入っていたとはねぇｗｗｗ」

シャイナ「あっ、そだ。エツィオの私服と大きめの財布を買っておこーと♪（買ったら万札束を移し変えて、エツィオが盗んでくれた空の財布は、中の誰かさんの免許証ごと全部ゴミ箱に捨てるかｗｗクッハハハハ…）」

エツィオは財布の中身を見て安心したかのようにほっとする表情を出して、右手を胸に擦るように動作を取る。

一方シャイナはニコッ★と微笑みながらも、中身は“ドス黒い悪巧み”を堂々とさらけ出して不敵な笑みを出しながら、エツィオの私服を買うために一件の小型店舗の服店に入る。

シャイナ「これで…いいか。」

シャイナは店舗の店主に服を見せて支払った後、メインストリートから外れるように人がまだ時間帯で通らない裏路地へと入る。

シャイナ「今だよ、エツィオ。実体化して。」

シャイナは人が通る動きが少なくなるのを見計らって右肩に乗る半透明のエツィオに言った後、エツィオは「おぅ♪」と言って右肩からアスファルトへと降りて実体化し、シャイナから服を手渡された後ササッと物影に隠れる。

シャイナは物影に入ったエツィオを見た後、背中を向けて裏路地から出てメインストリートに戻った後壁に背をもたれ掛かるように立って待つ。

エツィオ「お待たせ、シャイナ♪」

するとシャイナが背もたれで立つ裏路地入り口から私服姿になったエツィオが現れて、ニシシ♪と歯を見せて笑顔の表情を出し、身体の中から出したのだろうか漆黒の大型二輪車を引っ張りながらシャイナの元へと歩いてきた。

シャイナ「（ふむっ、あの小型店の安物を選んだけど…これも十分似合うわねぇｗｗｗ）」

エツィオ「シャイナは服選ぶの上手だなぁ♪俺は羽織る服を“じっくりと考えて選ぶの一度もしたことがない”し、何にせよ“センス”という意味知らないしｗｗｗ」

エツィオの今着ている服は、白い襟が付いた長袖の上に黒い皮の胸に小さなポケットが付いた脇までの首筋が見えるベストに、黒いズボンの両腰に銀のチェーンが間を開くように背中まで2つ付いていて、靴は実体化した時と同じ鎧付きの黒いブーツを履いていた。

シャイナ「そんじゃ、私をエスコートしてくれる?」

シャイナは手を差し伸べながら「誘ったのは、エツィオだもん（＊

＾＾＊）」と言って、笑顔満開でエツィオに言う。

エツィオ「勿論ですよ、シャイナお嬢様（「ー＋ー）」

エツィオはニタニタと口元を吊り上げて笑う表情を出しながら、差し伸べられた手を取って軽やかに胸元までシャイナを引き寄せてシャイナの左頬に軽くキスを着けていった。

…

……

……

ブロロロロロロロロッ

エツィオが運転する大型バイクは後ろにシャイナを乗せて、二人乗り運転をしながら大通りを高速道路と違って普通の速度で走る。

シャイナ「凄ーい（Θ ｏ Θ）もうバイクを乗りこなしているの！？」

シャイナはエツィオの背中にし向けて両手を囲むようにしがみつき、走るバイクの前方から風を身に受けながらエツィオに言う。

エツィオ「あぁ、“ばいく”の操作はもう完璧に分かった（＾―＾）
Vもうコイツは俺の相棒になっているしｗｗｗ」

シャイナ「盗んだバイクがもうエツィオの手の中にｗｗｗ燃料とかは補給しなくても平気？」

シャイナは一応エツィオが操作するバイクの状態を確認するべく、首を傾げるような形でエツィオに言う。

エツィオ「大丈夫（＾＾）俺が運転する“ばいく”は、“燃料制限無く無限に走れる”“俺の意識でばいくの速さを調節出来る”“ぶつかっても壊れない”とか、色々と“魔力で強化”しているから、心配無用だＺＥ★」

エツィオは視線だけ背後にいるシャイナに動かしながらアハハ♪と笑ながら言い、シャイナは「あっ、それなら心配無用だわｗｗｗ」と言ってエツィオの内容を聞いた後ぶっとわざとらしく吹く。

エツィオ「あっ、因みに俺のばいくは“空飛べる”から（＊＾＾＊）
」

シャイナ「おまっｗｗｗ空飛ぶバイクってハリ●タかよｗｗｗ」

エツィオはポンッと左手を丸めて右手の平に向けて軽く叩き、“今更ながらのバイクの説明”を言葉で付け足すように思い当たる表情を出しながらシャイナに向けて言う。

シャイナはププッと内容を聞いて笑ながらしがみつき、エツィオが運転するバイクは気のままに走らせて疾走した後、気楽に二人を乗せたバイクは都市内にあるビルの水族館へとたどり着く。

―スペイン　バルセロナ　中央ビル内水族館―

エツィオ「うはぁぁぁ…中が“深蒼界”みたいに全体が青いなぁ～（・o・）」

シャイナとエツィオは水族館の中へ入った後、エツィオは快感の表情を出しながらペタペタと巨大な水槽のガラスへと触って、興味津々に水槽の中にノウノウと泳ぐ魚を見ながら水族館の中を子供のようにはしゃぎ回る。

シャイナ「適当に着いた場所が“水族館”かｗｗｗまっ、いいか。折角楽しんでいるところなのにｗｗｗ」

シャイナはアハハと苦笑いしながらも空気を読むかのように押しとどめながら、はしゃぎ回るエツィオを後ろから追いかけていく。

エツィオ「うはぁぁ…なんだこの“平べったい生物”はｗｗｗそれと平べったい生物に“何か付いている”ぞ??」

エツィオは水槽の中で泳ぐ魚を見てポカーンと顔を呆けたまま、右人指し指を漂う魚にむけて指しながらシャイナに言う。

シャイナ「それは“エイ”よ。ヒラに付いている長い針のような物は“毒針”。見た目は可愛いけど案外こいつコワイよねぇｗｗｗでも…」

エツィオ「?シャイナ??」

シャイナは歩き寄りながらエツィオが指を指した生物の説明を言い、シャイナはそっと水槽のガラスを右手の平を広げるように触ってそっと瞳を閉じる。

シャイナ「蒼はちょっと…寂しい感じがする…あんまり…」

エツィオは隣に立つシャイナの表情を見て子供のように振る舞いはしゃぎ回っていた顔から少し戸惑う表情になって、エツィオは傍にいるシャイナがガラスに手の平を当てたまま俯き、おぼろげな瞳で漂う魚達を見ながら…

エツィオ「…。（悪りぃ、シャイナ…少し覗くぞ。）」

一瞬エツィオの瞳が金色の鷹の目になって、気づかないシャイナの脳裏に向けてエツィオの精神体（たましい）を飛び込ませ、シャイナの中に溜まっていた何かを…全ての思い当たる出来事が精神体（エツィオ）に映し出された。

第五十七曲　二人の距離はぁ、更にぃ縮まりますよぉ★

―シャイナ　精神内部―

ザザザ…

精神体（エツィオ）はシャイナの精神（のう）の中にダイブして空中に漂いながら、様々な光の道筋（ノードのような繋がり）が枝分かれするように引かれているを見ながら、深い藍色の光を放つ一つのノードを見付けて入っていく。

エツィオ「（雨か…）」

藍色の光を放つノードに入った途端雨がパラパラと降っており、空は夜空のように暗くなり遥か下は巨大な公共施設の入り口から様々な人が次々と傘を広げて出てくるのを見る。

エツィオ「“げこう”最中ってヤツかな？」

どうやら精神体（エツィオ）がいる場所はシャイナが通っていた学校らしき建物の上にいて、エツィオは地へと降り立つと１５～１７ぐらいの黒い服を着た人間…学生達がガヤガヤと笑いながら傘を頭上に広げて、

雨が降り注ぐ中家へと帰路するように門に向けて歩き出す。

エツィオ「シャイナは…」

エツィオは下校している学生達の身体を“幽霊のようにすり抜ける”ように（精神世界なのでエツィオ以外は全て幽霊みたいに幻な存在）素通りしながら校内へと入っていき、暗くなった校内の廊下をブーツの底の音を立てながら一点の場所へと目指す。

ブーツの音が乾いた音のように廊下を響き渡り、外は段々と強くなる雨の音で風と共に水滴が窓に打ち付けられ雷鳴の音が鳴り響きながら暗闇の階段を上っていく。

エツィオ「！あいつ…。」

エツィオの足取りが三階あたりまで上って左へと曲がった途端、奥の教室の入り口から灰色のローブを纏った男と白いローブを纏った男が数人出てくる。エツィオが前から歩いてくる灰色のローブを纏う男の素顔を見て、表情を険しい表情に豹変する。

エツィオ「あの“タフなじいさん”か！！（第十六曲参照）」

なんとシャイナの故郷での現世で倒した（※ブリトラを召喚して殺

した）アンジェロであり、当時はまだ副祭司だったらしくローブは鼠色で所々埃まみれの小汚いローブを羽織っていたが…

アンジェロの表情は“狂喜に満ちた笑み”で歯を見せながら、他の信者同様ニタニタと笑い下卑めいた声を出しながら険しい表情で立つエツィオの身体にぶつかって、スゥ…と幽霊のようにエツィオの身体ごと通り過ぎていく。

エツィオ「シャイナ！！」

エツィオはアンジェロ達の表情を見て切羽詰る表情を出した直後、瞬時に走ってアンジェロ達が出てきた教室の入り口へと駆け寄って前へと見た瞬間…

―外の雷雨で暗闇に満ちた教室の隅に、よたれかかるようにして倒れている“学生時代のシャイナ”が学生着を“全部脱がされ”裸になったまま“異性の性液”がシャイナの全身を浴びせられていた。―

エツィオ「！！」

エツィオはシャイナの状態を見て目を大きく開きながら、シャイナの状態を見て胸が苦しくなり息が詰まるような感覚を受ける。エツィオの推測であるがアンジェロ達は何かの執行を体で実行させ、気が済むまでヤられる相手の叫び声とヤる側の快楽を味わいながらシ

ャイナの身体を汚していただろうと。

エツィオは胸の内部からくる痛みを抑えるかのように苦しむ表情を出し、左手で胸を抑えるようにただ呆然に立ち尽くしながら性液塗れのシャイナを見つめていた時…

学生時代シャイナ「……暗い……なぁ。」

シャイナは朧気な瞳で外の雷雨の影響で暗くなった天井を見上げながら、性液塗れの右腕を上へと伸ばして声を枯らしながら言う。

学生時代シャイナ「あ…ぁ……寒……い。」

ヒュゥゥと、どこからが風が入ってきているのかシャイナは両眼から涙を流し身に受ける冷たい風を受けて、上に伸ばしていた右腕を段々と下へと力無く下げていく。

学生時代シャイナ「…蒼…アオは……」

意識が段々と遠ざかりシャイナの朧気な目にはもう色の判別が出来なくなっているのか、学生シャイナ視点では天井と教室全体が黒一色になっているのに“濃い蒼色”に見えて、大海の底へと沈むような感覚を覚えながらそっと…

学生時代シャイナ「い……や。」

右腕が教室床へと落ちて顔と身体を少し左横へと傾けて、裸のまま眠るような形で意識を手放した。

エツィオ「シャイナ…」

エツィオは眠るように切れたシャイナを見届けた後、何かを思うように決めてそっとシャイナへと歩み寄る。ドッと近くに雷雲があるだろうか物凄い雷鳴と光が数秒間教室を照らした時、エツィオの背後にあった影が一瞬…

ー腰部分に“巨大な西洋の竜のような翼が生え”、腕が“西洋の竜のように逞しく”雷の光でシルエットしか分からなかったが、エツィオ本来の“魔神”の姿が浮かび上がった。ー

エツィオ「シャイナ…」

精神世界にも関わらず触れることが出来ないシャイナの身体に向けて手を伸ばし、エツィオはお構い無しで身を屈めシャイナの身体を覆うように体勢を取った後…

エツィオ「すまなかった…。」

人間の姿を保ちながらエツィオは両目から後悔の涙を流し、背後の影は本来の“魔神”の姿をさらけ出したまま、影の魔神の金色の目の光を放つ両目からも涙を流す。

豪雨が猛威に震い激しい雷鳴が轟く中、触れることが出来ないシャイナの左頬に向けて人間体と魔神体が両方共同時に口付けをした直後、シャイナの精神世界がガラスが割れたように崩れ落ちていった。

…

……

……

―現在　スペイン　バルセロナ　都市ビル内水族館―

シャイナははっとなって身に何かが触れるような気がして、すっと閉じられた瞳をゆっくりと開けると…

シャイナ「エツィオ?」

いつの間にかシャイナの背後にエツィオがおり、エツィオの両腕が

シャイナの背中から腹まで包むように抱き締められるような形で、エツィオに背後から抱かれていた。

シャイナ「えっｗｗｗちょっｗｗｗエツィ「シ……は……せ……ない……」！」

小声で所々聴こえない部分があったが、シャイナが抱き締めているエツィオの腕を視線だけで動かして見た途端、カタカタと震えているように見え…

エツィオ「シャイナは……もう……汚れさせない！！」

顔を下に伏せたままエツィオが抱き締めるシャイナに向けて強く言った後、ギュッと先程の弱々しい力が力強くなって、シャイナの身体を力強く抱き締める。

シャイナ「エツィオ…」

エツィオ「俺は……君の一部の過去を見た…俺は…君の！！」

シャイナはエツィオの悲痛に近い叫び声を聞いて、少し困った表情を出しながら一瞬瞳を閉じた後…

シャイナ「ねぇ、エツィオ?私ね…最初“エツィオの剣”を握って光を見た時…」

シャイナは何かを思い当たるようなことを言い、穏やかな表情を出しながら背後から抱き締めているエツィオに向けてそっと呟く。

シャイナ「何時も見る上空と海の色と違って“貴方の放つ蒼い光は温かかった”。」

エツィオ「シャイ…ナ??」

エツィオははっとなって下に俯いていた顔を段々と上に上げながら、悲痛の表情からキョトんとした表情へと変わり、シャイナの言葉を続けて聞く。

シャイナ「私は青色は嫌いなの。哀しみと悲劇を起こす悲哀な色だから、この青という色だけはひたすら憎み、一生青を嫌悪しながら生きていくと思っていた。けど…」

抱き締めていたエツィオの両腕の力が抜いた所を見計らって、シャイナはグルンと身体を反転させて正面を向けるような形で、エツィオに向けて穏やかな表情を出しながら…

シャイナ「貴方の持つ剣の刀身光を見た瞬間、護られるようにして優しく包みこんでくれる感覚を覚えたの。その瞬間…」

―全てが、反転したの。―

シャイナはエツィオを床に押し倒し、馬乗りになりながらそっとエツィオの唇に向けて軽い口付けをする。

シャイナに馬乗りをされたエツィオは、シャイナに口付けされてハハハッ…と心の中で笑うかのように救われたような笑みを放つ表情を出した後…

エツィオ「ありがとな…」

エツィオは身体の上にいるシャイナに向けて右腕を伸ばし、片腕でシャイナの身体を右腰まで掴んだ後、ゆっくりとシャイナの身体も床に倒して、二人は床に倒れた状態で横向きのまま向かい合う形になる。

シャイナ「だから…これからも……」

エツィオ「大丈夫だ、シャイナ。俺は…君を…絶対に護ってやる。」

水槽の魚達が静かに泳ぎ水槽の機械の音が鳴る中、二人は幸せな表情を出し身体と身体を擦り合って互いの口の中の舌を舐めながら、深い海の底へと沈むように落ちていった。

第五十八曲　！！…ちょっとした変化が起きとる！？

―夕方　スペイン　バルセロナ　サグラダファミリア前―

水族館で二人は誰もいない中で性行為（エロタイム）を気が済むまでヤり終えた後、エツィオが運転するバイクは背中にいるシャイナの道案内で導きながら、快適な速度でサグラダファミリア前へと辿り着く。

シャイナ「うはぁぁぁぁ、スッゲェ人だかりｗｗｗ」

シャイナが言う通りサグラダファミリア前にはスペイン国民が多く集まっており、中には国民を誘導する警備員や“無差別殺人犯（エツィオ）”を警戒する警備員と機動隊も外部全体まで広がるようにしてバタバタと動いていた。

シャイナはエツィオの運転するバイクを先に降りて数歩入り口前へと寄った後、やや驚愕めいた表情を出し息を漏らしながら言う。

エツィオ「おーおー♪ただか“仮説だらけの自己満足を聞く”だけなのにあんなに集まってぇｗｗｗ」

シャイナ「政治家ってのはそのようなモンなのよ。口論だけでうち等の様な“庶民的な大変さを知らず”に“自然にお金がガッポガッポと入る”し、なにより口だけの喧嘩が絶えない仕事なのよねぇ～。」

エツィオはサグラダファミリア入り口前に集まる群衆を見て苦笑いしながらバイクのエンジンを止めた後、エツィオは誰も見られていない物陰へとバイクを引きずりながら隠れた後、大型バイクを小さな蒼い光の球体へと変えてぐっと蒼い光の球体を胸元まで右手で引き寄せるように身体の中へと入れる。

エツィオ「ＨＡッ…今も昔も“政治（まつりごと）”なんてわかんねぇなｗｗｗ出来る限り関わりたくないしｗｗｗ」

シャイナ「でも“政治”があってこそ人は“安心に暮らせる”ことが出来るんだよ？？不思議だねぇ～。ただか口だけで人は“フツー”に生きていられるもんだ。」

シャイナは両腕を広げてもう何もかも分からないという表情を取った後、おちゃらけた仕草を取りながら歩いてくるエツィオに言う。

エツィオ「この世界にも“信条（クリード）”というモンが存在するんだＮＡ★昔のように簡単な決まりごとがあったというのに、今は何でも複数の決まりごとがゴッチャ混ぜになっとるんだねぇｗｗｗ」

シャイナ「で?どうする?、エツィオ??入り口部分があの様だし、簡単には入ることが出来ないよ??」

シャイナは入り口の状況を見て「むぅー」と両頬を膨らませて、不満の表情を出しながら遅れてシャイナの元へと歩いてくるエツイオに言う。

エツィオは「そうだなぁ～♪」と言ってシャイナの左側へと立って表情をわくわくとさせながら顔を左右前後へと動かし、両手を腰部分のズボンに付いたポケットの中に入れたまま何かを探すような仕草を取る。

エツィオ「おっ!これは…。」

するとエツィオは何かを見つけたように一瞬ニタリと口元を吊り上げて笑う表情を取った後、エツィオは入り口部分に詰め掛ける群衆の中へと入っていく。

シャイナ「??何か見つけたのエツィオ??」

シャイナはエツィオの後を着いて行ってエツィオが先頭をきりながら、群集の民一人一人右手や左手を使って無理矢理押し退けるように進んで行き一部の者がエツィオに罵声を言う者がいたが、そんな

ことを気にせずにエツィオは群集を掻き分けながらズンズンと奥へと入っていく。

シャイナ「ねぇ何か見つけ…【グシュッ】お？」

シャイナが少し遅れるようにエツィオの後ろから着いて行ってようやく追いつき言葉を掛けようとした時、群集が歓喜の声を全体に轟く中シャイナしか聞こえない“肉の音が突き刺さる音”を聞いて数秒シャイナは動きを止める。

エツィオ「嗚呼…（・∀・）イイ身体見つけたＺＯ★」

グチュッとエツィオの身体に細かく分解された黒い線が複数纏わり付いて、蛇のように全身絡みながら一瞬のうちでエツィオの姿が“ハゲ頭の黒スーツの長身男”へと変わり果てた。

シャイナ「あー…なるほどねぇｗｗｗそれなら…」

どうやらエツィオは群集の中に“ス●バを襲撃した教会の人間（第四十一曲参照）”がいたのを見つけて、エツィオはゆっくりと気づかれないように民衆を盾にしながら近づいた後、群がる民衆の歓喜の声が轟く瞬間を見計らって黒スーツの長身男の口元を左手で押さえ背中から胸元にかけて右手を突き破るぐらいに刺し付いて、群集はそれに気づかず身体（うつわ）そのものを頂いて擬態したようだ。

擬態エツィオ「さて…これであの中に進入できるＺＥ★なので…」

黒いスーツを着た長身ハゲ男に擬態したエツィオは、背後にいたシャイナに向けて笑みを出しながらお決まりの言葉を言おうとしたが…

シャイナ「わかっているよ（＾＾）んじゃ、ゲーム的な意味で“ミッションスタート”って感じかなぁ♪じゃっ、後はエツィオの気のままに任せるよｗｗｗ」

擬態エツィオ「！」

シャイナはもうお決まりな展開だＮＥ★と分かっていたのかニコッと笑う表情を出し、自然にエツィオの身体へとトコトコとテンポよく中へと入っていく。エツィオはシャイナの変化を見て少し驚く表情を出したが、シャイナの何かが少しずつ変化していることにそっと顔を俯くように瞳を閉じた後…

擬態エツィオ「…俺に、任せとけ！」

何時ものように調子に乗ったエツィオなりのニヤリ顔の表情を出してゆっくりと顔を前へと上げた後、群集が群がるサグラダファミリア内の入り口を見て一瞬シャイナにはまだ見せていない険しい表情

を数秒間出す。

擬態エツィオ「んじゃ、テケトーに使命を果たしてくるか。（´∀`）Ｆｉｎｉａｍｏ　ｖｏｌｅｎｔｉｅｒｉ　ｌａｖｏｒｏ★（まっ、気軽にやるＺＥ★）」

シャイナ『さて、どのような展開とオチが来るのかなぁ～。ｗｋｔｋしてきたＺＯ♪』

シャイナの言葉で後押しするように擬態しているエツィオはイタリア語を吐きながら「それはお楽しみだな♪」と言った後、鼻歌を言いながら黒いスーツのズボンについていたポケットに両手を入れたまま群集が集まる入り口へと歩み始めた。

第五十九曲　ターミ●ーターともやし野郎

―夕刻　スペイン　バルセロナ　サグラダファミリア聖堂入り口前―

擬態したエツィオが群衆を手で押し退けて掻き分けながら、聖堂入り口前へと辿り着いた時…

教会の人間A「コード“アサルト”、そちらの方は問題なかったか？」

入り口前に立っていた黒いスーツを着た長身の男が、擬態エツィオに報告内容を聞くために話を掛けてくる。

擬態エツィオ「…問題は特に有りません、コード“エッジ”。そちらの方も特に変わったことは有りませんでしたか？？」

エツィオは擬態した器の情報を元搾り出しながら入り口前に立っている男に向かって、取り憑く前と同じ長身ハゲ男の太い声を出して“普通通り”の言葉を返す。

どうやらエツィオが擬態している器はコードネームで呼ばれているらしく、感情のない機械のしかめっ面で事を成しているらしい。

擬態エツィオ「（この身体なんかギスギスしているなぁ～（－・－；）本当に人間かよｗｗｗ）」

エツィオにとってこの器は何もない空洞のような感覚を覚えて、仕事以外は何も感情さえ無くしているかのように、少し戸惑いの思惑を過る。

教会の人間Ａ「此方は今の所問題ない。間もなく聖堂内でアンシュトゥルム様の論説が始まる。コード“アサルト”、コード“チョッパー”と“スノウ”と合流し、入り口前にいる民衆の誘導を行え。」

擬態エツィオ「了解。」

聖堂入り口前に立っていた男が擬態エツィオに指令を言った後、擬態エツィオは背を向けて歩き出し男の指令に大人しく従う動きを取る。

擬態エツィオ「（８００年前と違って変わりすぎだろ。こんな人間が次々と出てくるとはな…）」

エツィオは脳裏で少し突っ込みを入れながら溜め息を心の中で吐きつつ、擬態した情報を元に群衆を手で押し退けながら教会の仲間で

あるコード“チョッパー”と“スノウ”と合流する。

擬態エツィオ「コード“アサルト”より“チョッパー”と“スノウ”へ。コード“エッジ”から指令が入った、もうじきアンシュトゥルム様の論説が始まる。今いる群衆を隊列に列べさせ聖堂へ誘導せよ。」

教会の人間B「コード“アサルト”より“チョッパー”。了解した。」

教会の人間C「同じくコード“スノウ”。コード“エッジ”指令内容感謝いたします。」

エツィオが内容を告げた後、教会の仲間は“無表情で眉一つ動かさず”に背後を振り向いて数歩歩いた後、エツィオに言われた通りに入り口前にいた群衆に向けて手をかざした後、手を左右に振って誘導を開始する。

同じくもう一人の教会の人間も感謝の言葉を返したのに関わらず“無表情”のままでエツィオに向けて言い、耳元に付いていたイアホンのマイクに向けて少し何かを言った後、彼も無表情のまま群衆の誘導を開始する。

シャイナ『え…エツィオぉ…何か…怖い…（何…この…リアルター

ミネーターな奴ｗｗｗ映画の中のクオリティさえ超えてね？？）』

無感情で動くことに怖かったのか、エツィオの身体の中にいるシャイナがエツィオの瞳を通して全てを見た後、涙ぐむ声を出しながらエツィオに向けて言う。

擬態エツィオ「俺が先程戦った人間って（第四十二曲参照）…普段はあんな素顔をするんだな。」

エツィオは身体の中にいるシャイナに向けて“カメラ目線”のまま「大丈夫だ、シャイナ。俺の身体は今アイツらだけど、“中身”はアイツらと違うから（＾＾）」と優しく宥めるように言った後、エツィオも群衆の誘導に参加するように教会の人間に寄って、彼らと同様に誘導指令を行った。

…

……

……

―サグラダファミリア　聖堂内部―

シャイナ『すっげ…なんとかギリギリ入ったんだねｗｗｗ（半分ぐらいは外に出るんじゃないかと思ってたｗｗｗ）』

教会の男に擬態しているエツィオは聖堂内部の隅に立っており、他の教会の仲間も同じように無表情で隅に立ったまま全体を見渡せるように警備体勢を取っていた。

擬態エツィオ「外見はそんなに広くないと思っていたけど、中はこんなに広かったとはな。俺も凄いと思ったぜｗｗｗ」

聖堂の中は先程入り口前にいた群衆はあらかじめ用意してあった椅子に座って、ザワザワと所々声が出ながら待っていた。

聖堂内部も外側もまだ建設中であり中はそんなに広くは無いと思っていたが、案外王立劇場並みに広く、天井には美しい絵が描かれているスタンドガラスに、中央には巨大なパイプオルガンが設置されていた。

教会の人間Ａ「上部の教会の方々が直々この聖堂に来て、アンシュトゥルム様の論説に間に合わせるために早めに建設したそうだ。それにコード“アサルト”、今は任務中だ…私語を慎め。」

擬態エツィオ「すみません、コード“エッジ”。」

エツィオが身体の中にいるシャイナに向けてブツブツと小声が聞こ

えていたのか、隣にいた男（エッジ）に注意されてエツィオは軽く無表情のまま答える。

シャイナ『あっ…ゴメン、エツィオm（＿＿；）m』

擬態エツィオ「気にするな、シャイナ。…おっ、始まるな…」

シャイナが申し訳ない声を出してエツィオは気にしない素振りで聞こえないように小声で返した直後、あらかじめ用意してあった照明が暗くなり、聖堂の内部は暗闇に包まれる。

アナウンス《スペイン国民の皆様、本日のアンシュトゥルム氏による論説を聞きに来られまして、誠に有り難うございます。》

聖堂内部の上部からマイクで直々と感謝の言葉で吐く女性の声が聞こえて、淡々に会場にいる群衆に向けて長々と言葉を続けた後…

アナウンス《…それではアンシュトゥルム様の入場です。スポットライト中央に視線を向けて下さい。》

バシッと白い光が中央に当てられて、群衆達は照らされた光に向けて一斉に視線を向けた直後…

擬態エツィオ「（来たか。）」

中央にはエツィオがアズール社に偵察した時と同じ服装で来たベフェーレンが立っていて、エツィオは外見無表情のまま内部は眉を少し上へと持ち上げ、“一点の物を見ながら”険しい表情を出す。

ベフェーレン「先程心優しき人の通りこのような時間帯で私の論説に聞きに来られたスペイン国民の皆様、誠に感謝いたしお詫びを申し上げます。」

群衆達が歓声を次々と上げる中ベフェーレンは背を曲げて右手を胸に当てながら、直々と礼儀良くお辞儀する仕草を取る。

ベフェーレンは数秒間お辞儀する仕草を取った後、懐から錆塗れの球体を取り出して、群衆達に見せるように上へと掲げた後、群衆達の歓声が止んでベフェーレンは穏やかな表情を出しながら淡々と話をする。

ベフェーレン「今日はとても良き日です。心優しき皆様に見守られながら私の論説を語ることが出来るなんて、夢のような気分です。」

ベフェーレンは錆塗れの球体を上に掲げながら中央を左方向や右方向に歩き、スポットライトも彼の動きに合わせながら光も同時に動

いた後…

ベフェーレン「早速論説を始めたいと思いますが、折角パイプオルガンが置いてあるのに勿体無いですね。ですから、論説前のオープニングセレモニーとして私の叩くピアノの曲を聞いて下さい。」

ベフェーレンがそう言った後、中央に置かれたパイプオルガンの席に座って、錆塗れの球体をパイプオルガンの上に置いた後、ゆっくりとオルガンの音を華麗に叩き始める。

低い音から高い音へ、高い音から低い音へと周期的に変化させながらパイプオルガンの音を踊るように奏でる。

シャイナ『スゲェｗｗｗあんなモヤシ男が華麗に叩くとはｗｗｗ』

パイプオルガンの音で聖堂内部にいた群衆全員が聞き惚れて、一部の者はうっとりと穏やかな表情を出しながら、エツィオの中にいるシャイナも驚きつつ段々と音色に魅れていく。

エツィオはオルガンの音色をつまらなそうな表情をだしながら、ふぁぁーと擬態状態のまま欠伸を出そうとした時…

擬態エツィオ「（！これは！！）」

ピクッと曲の中の何かを感じて、しかめっ面の表情から一瞬の内にシャイナに見せないほど真面目に険しくなった直後…

擬態エツィオ「シャイナ、耳を塞げ！奴の曲を聴くな！！」

エツィオは身体の中にいるシャイナに向かって焦りを込めた言動を周囲に聞こえるように吐き、シャイナは突然のエツィオの莫大な声を聞いて聞き惚れている状態から声に驚く表情を取る。

シャイナ『えっ！？…何コレ（。д。；；）』

シャイナはエツィオの言われるままに両耳を一つ一つの手で当てるように塞ぐ仕草を取った直後、エツィオの視界から通した時目を疑うような光景を目にした。

第六十曲　どう見てもモヤシです。本当に本当にありがとう御座いますw

―スペイン　バルセロナ　サグラダファミリア聖堂内部―

ベフェーレン「ふっ…ははは、私の音色に惚れなさい。虜になり私の…」

シャイナがエツィオの目から通して見た光景は、座っていた群衆達がオルガンの音色を長く聞いた人間が突如“生気が抜け、両目が真っ白になった気色悪い表情”になって不自然な体勢のままワイヤーでも使ったかのように立ち上がる。

スペイン国民A「あ…ぁ……」

スペイン国民B「う゛…ぅぅ……」

ベフェーレンはオルガンを叩きながら歪んだ笑みを出し、ベフェーレンが叩く音色が段々と重苦しい音程になっていく。

スペイン国民C「べ…ベフェ……レン…様ぁ……」

スペイン国民D「わ…私に……お導……きを……」

他の国民も同じように立ち上がって、両手を前に伸ばし“ゾンビのような動き”でうめき声をあげながら、段々と数を増やしつつベフェーレンのパイプオルガンを奏でる中央へと歩み寄っていく。

ベフェーレン「我が曲に聴き受けよ。我の愛する者達も、一緒においで…」

ベフェーレンは歪んだ笑みを出したままオルガンを奏でつつ、エツィオ達教会の人間に向けて右腕を海の波のように動かしながら優しい言葉を吐いた直後…

教会の人間A「…ぎ……ご……」

教会の人間B「そ……そばに……」

教会の人間C「う……くし……ぃ。」

国民だけでなく擬態していたエツィオの隣にいた男や、教会の仲間も国民達と同じように“朧気な白い両目”になってゾンビのような動きを取り、所々うめき声をあげながら、国民達と同じように中央

へと歩いていく。

シャイナ『えっ…ちょっ…何…この光景ｗｗｗ何かの“儀式”？それとも何かを“祭って”んのｗｗｗ』

シャイナは中央に集うゾンビ集団を見てぶっと吹きながら、可笑しな表情を出しつつ宗教のような集団な状態を白い目で見詰める。

擬態エツィオ「いや、これは…違う。魔力の音色による“魅了”だ。」

シャイナ『み…魅了！？』

エツィオは険しい表情を出しながら仁王立ちの体勢を取りつつ、パイプオルガンの音色を奏でるベフェーレンを睨み付けながら真面目な声で“カメラ目線”を向けたまま身体の中にいるシャイナに言う。

ベフェーレン「非常に嬉しいことです。こんなに都合良く集まってくれるとはねぇ…」

オルガンの音色を奏でる中、ベフェーレンは中央に集まるスペイン国民達と教会の人間達の讃美歌を心地良く聴きながら、パイプオルガンを叩きつつ顔だけを後ろに向けて…

ベフェーレン「初めまして…いえ、再び会いましたね“漆黒の勇者”様？」

ポロンッとオルガンの音色を軽く上げて叩くのを止めた後、すくっと立ち上がり“擬態しているのに関わらず正体を破ったような言葉を普通に吐いて”歪んだ笑みの表情を出しながら穏やかな言動で擬態エツィオに向けて言う。

擬態エツィオ「何だ、分かっていたのか。そのまま気づかないかと思っていたけどＮＥ♪」

擬態エツィオはベフェーレンに向けて口元を吊り上げながら不敵な笑みを出しつつ、両腕を組んでつまんないという素振りを出しながら言う。

ベフェーレン「私が手にする“アスタロトの卵”の力ですよ。そのお陰で私は甚大なる力を得た。貴方様の借り物の姿など見破るのに容易い。寧ろ…」

ベフェーレンはパイプオルガンの上に置いてあった錆塗れの球体“アスタロトの卵”を右手に持って天へと掲げながら悪役面のような雰囲気で擬態エツィオに言う。

ベフェーレン「我が誇り高き社に勝手に入り込んだ貴方の“心外なる行動”に目を疑うほど呆れたのですよ。高級素材で仕入れたレッドカーペットに擦りつく行為やその他もろともと…（第五十ニ曲参照）勇者らしからぬその行「無駄に台詞長ぇよ。“閲覧者”を困らせる気か？？」…。」

ベフェーレンの長々とした言葉を遮るようにエツィオはベフェーレンに背を向け“カメラ目線”に向けたまま“何処でも見掛ける若者達のふざけた表情”で言う。

擬態エツィオ「閲覧者だけでなく作者も大変なんだぞ？携帯から文字を打ち込む作業を思い浮かべてみな。すっげぇ右親指を激しく“夜更けまで動かす”地道な作業をっ！！」

左人差し指を指して擬態エツィオにスポットライトでも当てられているかのように照らして、足下の両側面からクラッカーのような紙吹雪がパンッ★と鳴る音を立てる。

シャイナ『それにストーリーを考えるに“仕事の合間”をぬってやっているそうだよ。いかにして“読みやすく”“飽きないようにする”か、毎日仕事をやりつつ考えているんだって』

擬態エツィオ「マジＤＥｗｗｗたしかここの作者は“ケアワーカー”だろｗｗｗ毎日更新するように小説を打っているなんて大変じ

ゃんｗｗｗ」

擬態状態のままエツィオは“お釈迦寝入り”のポーズを取り、背後にいるベフェーレンと群衆を“無視（スルー）”しながら、シャイナの現実的近況を“作者の代役変わりとして言った”その後…

シャイナ『あっ、今の所“シフト制”だからなんとか“毎日更新出来るＺＥ”と言ってたような気がするよｗｗｗ』

擬態エツィオ「まっ、更新遅くなっても“２日程度”だしな。ｗｗｗ別に今の所は問題ナッシングゥ★って感じぃ？」

シャイナ『まっ、今の作者は小説を書く自体“楽しい”らしいからＳＡ★日頃の仕事の鬱憤だけでなく、昔投稿していた“黒歴史小説”を削除して、新しくこの小説を始めたそうＹＯ？』

擬態エツィオ「昔投稿していた小説は“糞真面目過ぎ”たからなぁ～。作者もさぞかし阿呆らしいと思っただろーね。ｗｗｗ」

今度はイナ●ウアーのポーズを取って床をスケートのように滑りながら、スポットライトも擬態エツィオを追いかけるように照らす。

シャイナ『確かク●ックタワー４だっけ？作者が大学生の時に投稿

者したって奴ｗｗｗ』

擬態エツィオ「その小説の登場人物が酷かったよなｗｗｗストーリーがＢ級だったし、なによりノクターン小説にない“性行為描写”が無かったからなぁｗｗｗ」

シャイナ『それはしゃーないと思うよＨ男ｗ当時は初心だったと思うし、“説明文さえ読まず”にやってたらしいからＳＡ★』

擬態エツィオ「まっ昔と比べて“少しにゃぁマシ”になっているだろ。フリーダムにやっているしＮＡ♪」

身体をクルクルと回転させてエツィオとシャイナの投稿者の過去話と代弁の会話を“ノリ★ノリな気分”で話ながら、お互いにカメラ目線に向けてウィンクした後、“カメラのシャッターでも鳴っている”かのようにワンシーンづつ撮りながら滑っていく。

そして滑っていた先にあった長い椅子を見てそこに向けて片足で滑りながらドカッと腰掛けた後、左手を顎下に当てて右足を左足上へと掛けるようにニタリと口元を吊り上げて笑いながら座る。

―言わば“スタイリッシュやらないかのポーズ”である。―

擬態エツィオ「まっ、それは置いといて♪長ったらしい台詞は止そうＺＥ、“モヤシ出っ歯人間”。とりあえず今から…っと」

擬態エツィオがそう言った後、座りながら右親指の骨をパチンッと鳴らした直後、擬態の器が燃えるように焼けて全身が青白い炎に包まれて器の灰が全て空中に漂った後、本来エツィオのシャイナが買ってもらった私服を着た姿に戻った。

エツィオ「単刀直入に言う。その“秘宝”を俺達アサシン軍にＫＡ・Ｅ・ＳＥ“モヤシ出っ歯貧弱体型人間”★」

エツィオは座ったまま“スタイリッシュやらないかポーズ”を取りながら、左手人差し指を後方に軽く動かして中央にいるベフェーレンに向けて舐めた態度で軽い挑発をする仕草をする。

ベフェーレン「…断る。私は断じて“モヤシ体型”ではない！私成の“スマートなＣＯＯＬ美形”だ！現アズール社社長かつスペイン政治家の“ベフェーレン・アンシュトゥルム”様と呼べ！！」

エツィオ「Ｉ・ＹＡ・ＤＡ・ＮＥ☆どう見ても“モヤシ”だろｗｗｗ」

ベフェーレンがエツィオから聞いたモヤシという単語を聞いて舌べ

ロを出してベロベロベー♪と、舐めた態度で挑発するのを見た直後、彼の本性である憎悪まみれの憤怒の表情をさらけ出す。

ベフェーレン「この若造が…後悔させてくれるわ！！」

上に掲げていた錆塗れのアスタロトの卵が、ピシリッと白い光を放つ亀裂が数本と静かに走り始めていた。

第六十一曲　ドSの時間…その2

―スペイン　バルセロナ　サグラダファミリア聖堂内部―

ベフェーレン「あの若僧を叩きのめせ！我が愛する使徒達よ！！」

ベフェーレンはアスタロトの卵を掲げたまま悪人面の表情を出し、舐めた態度で座っているエツィオに向けて人差し指を突き指した時…

スペイン国民Ａ「べ…ベフェ……レン様の…」

スペイン国民Ｂ「た…ために……わ……」

中央に集められていた国民と教会の人間が朧気な表情で、一斉にエツィオの方向へと向けた瞬間…

教会の人間Ａ「や……つ……死を！！」

スペイン国民Ｃ「て……つを！！」

教会の人間Ｂ「……え……よ…！！」

白い瞳から赤い光を放つ目となって、禍々しい赤い光が国民及び教会の人間達の全身体漏れでるように上へと迸って、言葉が途切れ途切れになりながらもエツィオに向けて一斉に“全速力で走り始めた”。

シャイナ『おまっｗｗＬ●Ｄかよっ！！これが現実版の走るロ●ロゾンビなのですね！？わかりますｗｗｗ』

シャイナはエツィオの身体の中でブフゥッと吹いて、全速力で向かって来る彼等を見てこれこそが“ネタになったコ●ケ会場”だ！と脳裏の中で“勝手に解釈する”。

エツィオ「いやいや、秘宝の魅了でただ操られているだけＳＡ♪こんなのまだ“大したことないチンケな魔力”だなｗｗＨＡＮ★」

エツィオは逆に長い椅子に座りながらスタイリッシュやらないかポーズから、今度はお釈迦寝入りのポーズをしつつ左人差し指を鼻穴に指し入れて“鼻くそをほじる”仕草をする。

いわば“気が抜けるほど超ふざけた態度”で、走ってくる国民と教会の人間の他にベフェーレンに向けて“エツィオなりの超挑発”す

るような仕草をする。

シャイナ『ちょっｗｗｗコラ、ジジツィオ（、ｏ′）ボヘヘェとしながら鼻くそほじるなＹＯ。ｗｗｗ超汚ねぇｗｗｗ』

エツィオ「だって本当に“スルーしてもいい位チンケな魔力”なんだＭＯ・Ｎ☆こんな程度で…」

エツィオはほじくった鼻くそを鼻穴から出してクルクルと左人差し指と左親指の平で練りながらシャイナに言い、ある程度鼻くそを丸めた直後…

エツィオ「本気出すまでもないＺＥ♪」

ペチッと人差し指の先を親指の平に乗った丸まった鼻くそを弾き飛ばし、弾き飛ばされたエツィオの鼻くそが先頭にいた国民一人の服の胸部へと付いた瞬間…

ドォオオオオオオオンッ！！！！！

ベフェーレン「な…。」

シャイナ『（ ゜Д ゜）』

エツィオの鼻くそが先頭に走って来ていた国民に付いた直後“大爆発を起こし”、ただか鼻くそごときで“ダイナマイト並みの爆発”が起こるのを見てシャイナとベフェーレンは口をあんぐりと開けて唖然としながら見届ける。

エツィオ「これぞ、アサシン流“ダァァァァイナ★マァィツゥ”。いい刺激だろぅ??」

エツィオに向かって走っていた人間達半数が“爆発に巻き込まれて”、腕や足等部分欠損しながら血飛沫と共に派手にぶっ飛んで聖堂の壁や床にビシャッと付着する。

シャイナ『は…鼻くそＴＵＥＥＥＥＥＥＥＥＥ。。。（Д）』

シャイナが目を飛び出すぐらいに唖然と口を大きく開きながら長く見詰めていた最中、鼻くそ爆発に巻き込まれなかった人間数人が立ち込める煙の中から飛び出すようにエツィオに目掛けて走ってくる。

スペイン国民Ｄ「…ガバッェ…エェェェ！！」

スペイン国民Ｅ「ぎ……あぁぁ！！」

国民が甲高い奇声を上げながらエツィオに向けて両腕を伸ばし、犬歯と前歯を剥き出しにしながら軽く前へと飛翔する。

エツィオ「へっ！」

エツィオは瞬時にお釈迦寝入りから身体を半立ちにさせ左手を軸にして、身体を後転させるように椅子からかっこ良く降り数歩滑るように身体を直立にさせて退いた直後…

スペイン国民Ｄ「ォオ〝…」

スペイン国民Ｅ「あ〝ぎ…」

飛びかかってきた国民の頭部から突っ込むように椅子上からバキリッと音を立てて、自ら自滅するように椅子が中心から折られるように固い床へと顔から叩き付けられる。

スペイン国民Ｆ「がが……ぎぃ……ギギッ！！」

ブオンッとエツィオの頭部へと目掛けて秘宝の魅了で操られた国民の一人が、背後を狙ってエツィオの頭部へと目掛けて手刀を横一線

に振りかざすが…

エツィオ「おっと♪」

エツィオは既にわかっていたかのように瞬時にしゃがんで横一線の手刀を避けて、身体を捻らせながらエツィオの左腕を伸ばして裏拳を背後から襲った国民の顔にめり込む。

スペイン国民F「ギヒッ！」

バキッとエツィオに殴り付けられた国民の顔が斜めにひしゃげるように歪み、鼻と両眼が陥没するほど凹みながら後方へとぶっ飛んでいった。

スペイン国民G「ぎぁ…ああ……！！」

エツィオ「んっ！」

殴り飛ばした直後スペイン国民の一人がエツィオの左腕を掴んで、牙を剥き出しにしながら口を開いてエツィオの首元に向けて歯を突き立てようと顔を前へ振りかざすが…

エツィオ「魚臭せぇ。」

スペイン国民G「お゛ぉあ゛！！」

エツィオは国民の手に掴まれた左腕を、掴まれた国民ごと“しがみ掴まれるような形で上へ持ち上げるように掲げて”、その後…

エツィオ「イーチ・ニーの・サァァァン！！！！」

バキッゴキッ♪ビキッ♪♪

エツィオは“笑顔全快の表情”を出しながら左腕にしがみついた国民を思いっきり何度も“高速に床へと叩き付けて”、エツィオの右足も叩き付けるタイミングに合わせて何度も踏んで“ノリノリな地団駄仕草”を取る。

エツィオ「アッヒャヒャヒャ

国民の身体の骨がリズム良く折れていく音を立てながらエツィオの“本来悪魔の本質である人を叩き潰す快楽”を楽しむように叩き付ける。

エツィオ「ほいさっ♪こらさっ★どっどこどーん☆」

グチャグチャに全身の骨が折れた国民の身体をエツィオは左手だけで振り回して、右往左往から襲い掛かる国民の他教会の人間の鳩尾に目掛けて骨が折れた国民の身体をぶち込み、軽々と鞭のように扱って次々と薙ぎ倒していく。

エツィオ「ブブブぶーんのぉ♪」

ある程度襲い掛かる国民と教会の人間をぶっ飛ばしエツィオの左腕を掴んでいた国民の手と身体が原型すら留めない程複雑に折れて、エツィオはふうっと原型を留めていない人間の姿を見て溜め息を吐いた後…

エツィオ「人間は“消耗品”なのＤＥＡＴＨ！！」

ノリノリな雰囲気でエツィオは鞭のように扱っていた国民の身体の一部であった右腕を“片腕だけで真上に何度も旋回するように振り回した”後…

エツィオ「ぽいぃ～～～～ちょっ」

グチャグチャに折れ原型を留めていない国民を“ブーメランのように投げ飛ばし”、前方から走ってくる数人の国民にぶち当てて、全身の骨折れた国民ごと遥か後方へとぶっ飛んで聖堂の壁へと奥深く潰れるように叩き込まれていった。

教会の人間D「が……がぎぃ…ぃ゛！！」

教会の人間E「お゛……がじゃっお゛！！」

黒スーツを着た男二人が口を開き奇声を上げて涎を出しながら、両腕を前に伸ばして左右前後からエツィオを捕まえるべく血なまこの眼力であと数メートル走り寄ったが…

エツィオ「テラ★バッチィZE♪」

教会の人間'ｓ「「ぎゅお゛！！」」

エツィオの両側面の足下から“巨大な漆黒の竜巻で出来た竜のような腕”が出てきて、前後左右から襲い掛かる教会の人間を身体ごと

かっさらうように鷲掴みして、“巨大な漆黒の竜巻で出来た竜の腕の手の平の中に教会の人間を閉じ込める”ように握り締めながら上へと持ち上げる。

エツィオ「アーサーシーンー流ぅ…」

両側面の足下から出ている“巨大な漆黒の竜巻で出来た竜の腕”は遥か下にいるエツィオの動きに合わせて“ポージング”するような仕草を取った直後…

エツィオ「プゥゥゥゥレェェェスゥゥゥ！！」

グチャッと巨大な漆黒の竜巻で出来た竜の腕が手の平の中にいた教会の“人間の身体を握り潰し”、竜の腕の指の隙間から赤い液体が多少飛び散る。

両側面の足下から出ていた“巨大な漆黒の竜巻で出来た竜の腕”が手の平に付いた血と肉をペッペッ♪と聖堂の壁や天井などに無差別に払った後、静かに床へと引っ込む。

グチャッ

ベフェーレン「！！…私の…高級で仕入れた服が！！」

先程エツィオが半召喚した“巨大な漆黒の竜巻で出来た竜の腕”から振り払った国民の血と潰れた肉がベフェーレンの服と髪にこびりついて、わなわなとベフェーレンは身体を震えただせながら血まみれた両手の平を見る。

ベフェーレン「あぁ……あああぁ！！私の……私の！！！！」

エツィオ「何だＹＯ？服が汚れた程度でガッカリすんなよ“モヤシ人間”。」

ベフェーレン「貴様ぁ…私が今着ていた服は幾らしたと思っている！？１００万もする高級素材で出来た価値ある物をっ！！」

ブォンッ！

服を汚されたことで怒りが頂点に達したのかベフェーレンは秘宝を右手の中で握り締めたままエツィオに向けて走りだし、秘宝の力を引き出したのか左手に西洋風の剣を生成してエツィオに斬りかかる。

エツィオ「お前“せいじか”だろぉ？？今ある金で買え直すことぐれぇ出来るだしょっ？？」

ベフェーレン「黙れ、この餓鬼！！私の高級素材で仕入れた服を汚した罪を死で償って貰うぞ！！」

エツィオも私服の状態からエツィオの長剣を魔力で召喚して鞘から引き抜き、怒りで我を忘れているベフェーレンの剣の太刀筋を剣の刀身で軽く受け止める。

ベフェーレン「おぉぉぉぉ！！！！」

エツィオ「へぇぇ♪」

幼い頃から鍛えていたのかベフェーレンの綺麗な太刀筋を見てエツィオはニヤリと口元を吊り上げながら、ベフェーレンの太刀筋を余裕な表情で片腕だけで軽く受け流す。

ベフェーレン「くっ！ぬっ！！ぅおぉぉぉぉ！！」

鋼同士がぶつかり合い火花を散らしながら、ベフェーレンは怒りの感情だけでエツィオの身体に向けて剣を振るうが、エツィオの持つ長剣がベフェーレンの斬る太刀筋を読んでいるかのように全て遮られて、苛立ちを徐々に腹の中に溜め込んでいく。

エツィオ「はい、がら空き見っけ♪」

ベフェーレン「あぐっ！？」

ドスッとエツィオは大振りになった所を見計らってベフェーレンの鳩尾に左拳をめり込み、ベフェーレンは身体をくの字に折って数メートル後方へと退いてうつ伏せに倒れる。

ベフェーレン「く…のぉぉぉぉ！！！」

ベフェーレンは直ぐ様立ち上がって秘宝を右腰のポケットの中に入れて、剣を両手に持ち構えながらエツィオに向けて斬りかかる。

エツィオ「これも駄目！集中しろ、集中！！」

ベフェーレン「がっ！！」

エツィオの左肩から右脇へと目掛けて斬り下ろそうとしたが、エツィオが身体を横にして避けられて、代わりにエツィオ左手による平手打ちがベフェーレンの顔面に向けてバチンッと叩かれて顔から後ろへと身体ごと仰け反られた直後…

エツィオ「Ｔｏ　Ｅａｓｙ.」

ベフェーレン「ぐぁ…」

グシャと、ベフェーレンの左脇腹からエツィオの長剣が背中まで突き刺されて、ベフェーレンは口元から少量の血を吐き出す。その直後…

エツィオ「Ｔｈｅ　止め★　コマンド“Ｘ”！！（ｘｂｏｘ版）」

エツィオはベフェーレンの左脇に突き刺した剣を引き抜いて右足をベフェーレンの左足裏を引っ掻けて床に倒した後、ドスッとベフェーレンの眉間から頭部裏に掛けて長剣を刺し貫いて反撃暗殺（カウンターキル）をぶち込んだ。

エツィオ「怒りに任せてやるとこうなりますｗｗｗ皆さんも絶対に真似をしないで下さいＮＥ★」

エツィオは“カメラ目線”に向けて子供のように笑う表情を出しながらウィンクした後、ベフェーレンの頭部に突き刺した長剣を引き抜いて剣先と刀身に付いた血を軽く右手で振り払って一回転した後、華麗に鞘の中へと仕舞う。

シャイナ『おまっｗｗｗカメラに向けて言うなよｗｗｗそれに…』

シャイナはエツィオの目から通して全体を見回すと、ベフェーレンを含め聖堂にいた国民他教会の人間全員が“原型を留めない位に床に叩き付けられるように潰されて”、所々新しい血痕が“床や天井や壁に複数ペンキのようにこびり付く”。

シャイナ『無双モードになるとやっぱこれになるよねｗｗｗ何か不思議に見馴れて来ちゃったｗｗｗ』

複数の瓦礫とひび割れが聖堂内全体に起きて、半壊した聖堂内部が“一瞬の内に地獄絵図の光景になった”のを見て、はぁ…と両腕を広げて呆れたような仕草でも取っているかのようにほんのちょっぴり苦笑いしているかのように溜め息を吐く。

エツィオ「“慣れ”って凄いもんだな。まっ、この先も同じことだと思うし…それは置いといて…」

エツィオは身体の中にいるシャイナの変化を言動で聞いてニシシと歯を見せながら笑った後、ベフェーレンの死体の下半身のポケットから転がり落ちた秘宝を見て、中央に転がり落ちていく秘宝を視線だけで追い掛けていく。

エツィオ「さて、アルタイルの使命である秘宝を持ち帰って、さっ

さと離脱しようか。」

シャイナ『そうだね。エツィオに襲い掛かってきた敵も“全滅”したようだし、ミッションコンプリートだね♪』

シャイナがそう言った後、エツィオは「そうだな。（＾＾）」と言って、スタスタと中央に転がり落ちた秘宝へと向けて歩き出した。

第六十二曲　あ、元気な天使が産まれましたよぉｗｗｗ

―スペイン　バルセロナ　サグラダファミリア聖堂内部　死体ベフェーレン真相―

暗い…

暗い…

私の意識が遠ざかっていく。

ベフェーレンは暗闇に満ちた世界に一人だけ大の字になるように仰向けの状態で倒れたまま、身体の所々から出る血を視線だけで追いながら見続ける。

私は死んだ…

私はあの若僧の力で……

中央に転がり落ちた秘宝に向かって歩いていくエツィオの姿を見て、

ベフェーレンは心の中で奥歯が折れるぐらい強い歯軋りし、口元から血をドプッと流してより深い憎悪へと呑み込まれていく。

許さ…ヌ。あの若僧ごとキニ……この…私ガ！！

ベフェーレンは両眼から血の涙を流し視界が段々と遠ざかっていく中、ベフェーレンは転がり落ちた秘宝に向けて右腕を伸ばし、手の平を広げて一点の言葉を叫んだ。

―殺シ…テヤ……ル！！―

ベフェーレンが叫んだ瞬間、転がり落ちた秘宝のひび割れた光に呼応して、徐々に身体が変異し始めた。

ただ、憎しみだけを思って…

…

……

……

―サグラダファミリア聖堂内部　エツィオ&シャイナ視点―

エツィオ「？」

シャイナ『？どうしたの、エツィオ？？』

エツィオは後数メートル秘宝を手に入れる距離まで歩いた途端、エツィオは何かを感じて歩みを止める。

シャイナは身体の中でエツィオが戸惑う表情を出しながら歩みを止めたのを見て、首を傾げるようにエツィオに向けて言う。

エツィオ「成る程…あのもやし人間は“普通の身体と違う”らしいな。」

シャイナ『それはどういう…ちょっΣ（ﾟДﾟ；）』

エツィオがニタニタと口元を吊り上げて笑う表情を出しながら後ろへ振り向いた途端、先程長剣で刺し殺したベフェーレンの死体がワイヤーでも吊り上げられるように不自然な体勢で起き上がる。

シャイナは頭部を貫かれて死んだ死体が起き上がったことでビックリし、眼を丸くしながら目の前に映る光景を絶句する。

エツィオ「ＨＡＨＡ～Ｎ★秘宝から“魔力を少量吸いとった”か。通りで尋常離れした再生能力ＤＡ♪」

死体ベフェーレン「小僧ォォォ…殺シテ…ヤル！！！！」

死体ベフェーレンはエツィオに向けて走り出して、余裕顔を出すエツィオの眉間に向けて右手手刀を真っ直ぐに伸ばしたが…

エツィオ「それだけでなく、秘宝の力を長年手の中で使いすぎたか、もやし人間の身体が秘宝（アスタロト）に“浸食”されているぜ。」

シャイナ『マジかよｗｗｗんじゃ、次は“第二形態フラグ”っすかｗｗｗマジっぱねぇＹＯ☆』

エツィオは首を横に軽く傾けてベフェーレンを手刀を避けて、エツィオは呆れた表情を出しながら次いでにベフェーレンの右手首を左手で掴みながら変異していく死体ベフェーレンを見る。

シャイナは段々と変異していく死体ベフェーレンをエツィオの身体の中から瞳を通して見た後、オェッと吐くような“わざとらしい仕草”を苦笑いしているかのような表情を出す。

死体ベフェーレン「ダ…マ……レェェェェェ！！！！」

ベフェーレンは徐々に身体が変わり始め顔が人間肌から妖怪のように白くなり、悪鬼羅刹のような紋様が所々の表面だけでなく身体の所々の隅々まで伸ばしていく。

死体ベフェーレン「ギォォォ゛…ォォォォ゛！！」

ベフェーレンは怒りの表情を出し憎悪にまみれた言葉を吐き捨てながら、エツィオに向けてもうひとつの左手刀を前に伸ばそうとしたが…

エツィオ「ペイッ♪」

エツィオはつまらん表情を出しながら掴んでいたベフェーレンの右手首をグイッと上へと引っ張るように引いた途端、死体ベフェーレンの身体が“軽々と上へ上がって”、そのままエツィオは転がり落ちた秘宝の所まで死体ベフェーレンの身体を投げ捨てる。

死体ベフェーレン「グギィッ！！…ギギ…」

ドシャッとエツィオに投げ飛ばされた身体が横方向に床へと叩きつけられて、死体ベフェーレンは両眼を白眼にしながら羅刹の模様が刻んだ白い左腕を転がっている秘宝に向けて伸ばす。

死体ベフェーレン「もモモモ〝モ…モヴジギ……ダダダダ……」

口調がもう“吃音症”なりながらでもベフェーレンは笑っていて、
転がっていた秘宝を左手でガシリと力強く握り締めた瞬間…

パキッ…

エツィオ「あっ、割れたｗｗｗ」

シャイナ『おぉぉぉ！！これが“孵化”なのですね、分かりますｗｗ』

秘宝に刻まれていた光の亀裂が遂に真っ二つに割れて、秘宝（たまご）の中から凄まじい光を天井へと放った時、聖堂内部にいたエツィオ他転がる死体達ごと秘宝の光と共に呑み込まれていった。

…

……

……

―夜　サグラダファミリア聖堂外部周辺―

スペイン機動隊Ａ「各団員へ！例の殺人犯が聖堂内に侵入！！警察及び軍へ、全員突撃準備をせよ！！」

スペイン軍ｓ「「了解！！」」

聖堂外部はいつの間にか侵入されていたことの事態で慌ただしく動き、各自同様しながらでも聖堂入り口に向けて機動隊や警備隊が集結して、それぞれの銃器を構える。

スペイン軍Ｇ「どうなってんだ！？この包囲からして“容易く侵入すら不可能な状態”だったのに何時侵入を許した！！？？！！」

スペイン軍Ｊ「俺に聞くなよ、ジャイド！それを言う暇があったら戦車を動かせ！！」

これだけでなく聖堂外部に停めてあった戦車も動き出して、砲台を入り口に向けて動かす。

スペイン警察Ｂ「上空ヘリ“チェトレ”へ、何時でもミサイルを発射出来るように待機し…《ドオオオオオオオオオオンッ！！≫うわあああああああっ！！！！！！」

一人の警備隊が右耳にトランシーバーを当てたまま上空に飛ぶ戦闘ヘリに向けて言っていた最中、大地震のような揺れが起きて地面へと叩きつけられる。

地震のような衝撃波が起こった瞬間、サグラダファミリアが内部から大爆発したかのように一気に破壊されて、様々な破片が辺りに飛び散る。

スペイン軍Ａ「総員退…」

スペイン警察Ｄ「うわあああああああああああっ！！！！」

ドゴォォォォォンッ！！

入り口周辺に集まっていた軍及び機動隊がサグラダファミリアの屋根部分が欠損した大きな破片に押し潰されて、人間の身体がトマトのように潰れる。更には上空にいた戦闘ヘリも破片に巻き込まれて大きな爆炎を花のように複数咲かせる。

スペイン警察Ｎ「一旦離脱だ！後退！！」

スペイン軍Ｋ「早く後退し…」

様々な破片が雨のように降り注いで地面に突き刺さっていく中、数台の戦車と警備隊の大型トラックは後退をしようとして動かしたが…

ガガガガガ

地面も衝撃波の影響で地割れが発生しており、戦車の側面のキャタピラと機動隊の大型トラックのタイヤが地割れの中へと入ってしまい何度も空回りし、後退すら出来なくなるほど立ち往生する。

スペイン軍M「駄目です！地割れに入って下がれな…」

スペイン警察P「ひいいいィィィィィィ！！！！」

ドォォォォォォンッ

地面も天変地異を起こしているかのように“荒ぶる海のように激しく動いて”、複数の大型トラックと戦車を“軽々と弄ぶように空中へとぶっ飛ばして”きりもみ状態のままそれぞれの周囲民家や野次馬達に目掛けて横転しながら吹き飛ばされていく。

野次馬T「ギャアアアアアアアア！！！！！」

野次馬W「ヒィィィィィィィィィ！！！！！」

集まっていた野次馬達も落ちてくる大型トラックや戦車に押し潰し、民家には破片が上から突き破るように刺さって、無差別に巻き込みながら犠牲者を増やしていく。そんな最中…

？「オギャァァァァオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！」

全壊したサグラダファミリアの跡地の瓦礫の山から、生まれたばかりの赤子のような雄叫びを上げながらヌゥと這い出るように出てきて、外見が白いアメーバのような物体が徐々に人間のように身体を恐るべき速さで生成し“東京タワー三本分ぐらい”身体が大きくなっていった。

第六十三曲　Un　angelo　di　distruzione　bianco

一夜　スペイン　バルセロナ　上空ー

エツィオ「うほぉぉぉぉぉ。こいつは“良い産声”なこってｗｗｗ神界まで届きそうな感じもしたよぉ♪」

エツィオは右腕を顔に向けて少し斜めにしながら除くような仕草をしながら、彼なりの興味津々の表情で遥か地上にいる白きアメーバ状の人間のような形を取った物体を見下ろすように言う。

シャイナ『ほ　ん　と　“近所迷惑というレヴェルじゃねぇ産声”だったねｗｗｗてか…』

シャイナはエツィオの身体の中で先ほどの産声を聞いて両手を広げ、「超うるさかった♪」とわざとらしく手の平を軽くヒラヒラと動かしながら呆れた表情で言った後…

シャイナ『ところで今“何処立ってんの？”ｗｗｗ』

身体の中にいるシャイナがエツィオの瞳から通して見た時、視界が“ひっくり返っているように反転している”ように見えて、シャイナは少し首を傾げ両腕を組む仕草を取りながらエツィオに言う。

エツィオ「んあ？何処って…“瓦礫の上”だよ？」

なんとエツィオの身体は宙に浮かぶ半壊したサグラダファミリアの“瓦礫の下”にいて、“逆さまになっても落ちない”でそのまま“普通に立っていながら”平然にシャイナの質問に答える。

シャイナ『えーｗｗｗ立つ位置“思いっきり間違っている”ＺＥ★』

エツィオ「えっΣ（・・）そうなの！？」

よく見ると上空に半壊したサグラダファミリアの瓦礫だけでなく、大型トラックや戦車も空中に漂っており、様々なオブジェクトが空中に舞う風が竜巻並みにグルグルと旋回しながら軽々と舞っていた。

エツィオ「（長年眠っていたアスタロトの魔力が、徐々に周囲の魔力を吸収しつつ呑み込みながら拡散しているな。）」

どうやら人間状の巨大な白きアメーバ（アスタロト）が産声だけで“ハリケーン並みの突風”が起きたらしく、様々なオブジェクトが上空へと舞い上がって地上にいた逃げ回る人も無差別に宙に上がりながら叫び声が所々後方へと流れていく。

？「ぎゃぉおおお

アスタロト・ベフェーレン（略してアスタロト）「うぎゃぁぁぁっ
ぁぁぁぁぁっぁぁぁぁぁぁぁ！！」

アスタロトは両目を閉じながらも赤子のような声をあげながら、エツィオにめがけて右拳を振り下ろす。エツィオは今いる瓦礫から飛び跳ねるようにアスタロトの攻撃を避けた直後、今足場として立っていた瓦礫がアスタロトの右拳だけで粉々に砕け散る。

エツィオ「ＨＡ　ＨＡ　ＨＡ　☆まだ産まれたてだから、十分に喋る事などできんかｗｗｗ」

エツィオは腹を両手で押さえて笑いながら仰向けの状態で両腕を水平にしながら宙を後方へと滑空し、“カメラ目線”に向けて空中で後方回転しながら笑顔全開でピースサインをしシャッター音が鳴った後、別の足場へと飛び移って巨大なトラックの上部分へと降り立つ。

アスタロト「ぎゃぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

両目を閉じながらもアスタロトは身体を正確にエツィオの方向へと向けて、口から莫大な雄叫びを衝撃波としてエツィオに向けて放つ。
その瞬間…

エツィオ「あっ。（・・）」

シャイナ『ちょｗｗｗまたかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！（怒）』

すっ惚けたような呆ける声をエツィオが出した瞬間、今着ていた衣服がビリビリとバラバラに引き裂かれるように破れていき、足元の漆黒の鎧付きブーツを除いて今着ていた衣類が“全て破けて裸になる”。

シャイナ『グォォォォォォォ（怒）小型店でありながら“二万もした若者用衣類セット”がまたしてもぉぉぉぉぉぉ！！！！』

エツィオ「イヤン（ノノ）エッチィィィィｗｗｗ」

身体の中でシャイナは“ｏｒｚ体勢”を取りながら右腕の手を丸め、見えない床に目掛けて何度も叩きながら“落ち込む＋怒る”が混ざった表情になる。

逆にエツィオは女の子のようにわ両頬を赤くして両胸に両腕を隠すようにわざとらしく振る舞う仕草を取りながら、脚部をくの字に折って“エロスなポーズ”を取る。

因みに“大事な部分”は宙に漂う瓦礫等で上手く“カメラ視線から”遮っていた。

シャイナ『も…もう許さん…許さんＺＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯ（＃、皿′＃）』

エツィオの身体の中でシャイナは“般若のような恐ろしい形相”を出し禍々しい“紫色のオーラを全身に向けて上へと遡る”ような雰囲気をモロ出しにした後…

シャイナ『エツィオォォォォォオオオオオオオォォォ！！！！！』

エツィオ「ひぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ（（（（（（（（（。Д。；））））））））は…はい！？！？な…何でしょうカ…し…シャイナ…サン？？？？？」

エツィオは身体（なか）で“殺気満々溢れたドス黒い覇気丸出しのシャイナ”の声を聞いて、史上最強の魔神（エツィオ）ですらビビるぐらいの表情を出しながら、“シェー”のポーズを取る。

―相変わらず脚部の鎧つきブーツ以外“裸”のままで―

シャイナ『…あの上半身“キュー●ー”のようなマネキン天使をぶ

っ殺せ…跡形も無くブゥゥゥゥゥチィィィィィィィ殺せぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！』

エツィオの身体の中でシャイナが両眼に“車のハイライトのような強烈な光”を出し、カメラ目線に向けて般若の表情をさらけ出しながら右人差し指を何度も指す仕草を取る。

―全ては二万もしたエツィオの私服代の金の仇を執るために―

エツィオ「…わ…わかった。（（（（（（（（（。o。;））））））））」

シャイナ『出来る限り“原型さえ留めないぐらい壊して”？…あの髪型がムカツクし、下半身のヘビのようなモノも全部ブチ抜いてチョウダイ？？Ｐｅｒ ｆａｖｏｒｅ ｌ' ａｓｓａｓｓｉｎｉ ｃｏｎ ｔｕｔｔｉ ｌａ ｆｏｒｚａ ｄｉ ｕｎｏ.…Ｅｚｉｏ？？（本気で壊れ、…エツィオ。）』

エツィオはシャイナの言動を聞きながらガタガタと全身震え寒疣を出しながら、シャイナの怒りに満ちたリクを聞いた後…

エツィオ「…勿論、シャイナのリクエスト通りにして見せるさ。Ｌｏ ｌａｓｃｉ ａ ｍｅ.」

先ほどのシャイナに恐れる仕草から偉く違う真剣（マジメ）な表情に戻って、
（小説の都合によりｒｙ）エツィオは不適な笑みを出しイタリア語を吐きながら“裸”の状態で宙に聳え立つアスタロトを見上げた後…

エツィオ「さて、天使の“嘆声”をたっぷりと聞かせてもらうとするか…Ｂａｌｌｉａｍｏ　ｃｏｎ　ｍｅ（踊ろうぜ。）」

空に浮かぶ満月をバックにエツィオは口元を吊り上げて微笑む表情を出しながら言って、左腕を前に伸ばし両足を軽く上下に動かして左手首を軽く後ろへと何度も振るった時…

エツィオの全身に黒い光が上へと逆って、光が消えると同時に元の黒衣のアサシン衣装へと戻った。

第六十四曲　Io lasciai l'immaginazione correre

―夜　スペイン　バルセロナ　上空―

アスタロト「ぎゃぁぁっぁぁぁあああああぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

上空に浮かぶ巨大な“上半身だけキュー●ー天使”が天へ向かって叫んだ途端、遥か上空から赤色の丸い点が複数光って、エツィオは両腰に手を当てながら「ほほう♪」と興味津々に顔を上へと上げる。

段々と赤色の丸い点が近づくにつれて大きくなっていき、シャイナも最初はエツィオと同じ目を輝かせワクワクとした表情を出していたが、徐々に明らかになる赤色の丸い点の正体を見て、口を大きく開いて唖然とした表情へと変わる。それは…

ドドドドドドドドドドドドドッ

シャイナ『ぎょえぇぇぇぇぇぇぇ！？？！？！？！“メテオ”ですかぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？？？！？！？』

なんと赤色の丸い点の正体は大気圏を突入したときに燃え上がる“隕石”であって、様々な上空からエツィオを狙うだけでなく地上の建造物に向けて“無差別”に落下してきた。

エツィオ「おっと♪」

エツィオは今足場として乗っかっていた大型トラックから後ろから飛び降りるように軽くジャンプ（イーグルダイブ）した瞬間、今いたトラック上部に隕石が落ちて車体を真下まで突き破った直後、大爆発を起こしてトラックは当然ながら粉々に大破する。

地上の人々A「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！空から隕石が落ちてきたぞ！！！！逃げろぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！」

地上の人々B「早くしろ！！早く動け！！！！俺たちあっという間に死んじまうぞぉぉぉぉぉ！！！！」

地上の人々C「神様ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

地上では無差別に落下してきた隕石に複数の人間たちが巻き込まれて阿鼻叫喚な状況になっていて、隕石による直接落下や落下の衝撃による風圧と熱風で人間の四肢が軽く欠損たり一瞬の内に焼け燃えてたり、落下してくる隕石から逃げ出そうとする車同士による衝突で次々と死者が増えていた。そんな最中…

エツィオ「ヒャッハァァァァァァ！！！（ ゜∀ ゜）」

身体を何度も後転回転させながらエツィオの身体は地上へと落下していく中、両腕を水平に広げ表情は楽しむように笑いながら“カメラ目線”に向けて上空に降り注ぐ隕石と満月をバックに、地上では“阿鼻叫喚な地獄絵図”の状況へとなっているのに右手と左手で口元に近づけながら両ピースサインをする。

エツィオ「ＹＡ★“かめら”さん?ちゃんと撮った??」

シャイナ『こんな状況で言うなよｗｗｗ』

こんな状況ですらエツィオはカメラ目線に向けて“笑顔全開”に出しシャイナに突っ込まれながら言った後、何処かでカメラのシャッター音が鳴る音が聞こえて、エツィオは「宜しい。ｂ（＾＾）」とでも言う風に右親指を上へと立てて、宙に浮かんでいた“サグラダファミリア”の屋根部分へと華麗に降り立つ。

アスタロト「ぎゃぉぉぉ

場に向けて二匹だけ伸ばし、一匹ずつサグラダファミリアの屋根部分の端を口で挟むように掴んだ後、上空に浮かぶアスタロトの元へとエツィオがのる足場ごと引き寄せていく。

アスタロト「ぎぁぁあああぁぁぁあぁぁぁあぁぁあああ！！！！」

アスタロトは叫びながら両腕を駄々っ子のように右往左往とチラチラと動かした時、上空に漂っていた瓦礫や車等のオブジェクト物がアスタロトに寄り添うように幾つものが集まってきて、一ヶ所にオブジェクト物をかき集めた時…

アスタロト「グギャォォォォォオオオオオォォォ！！！！」

アスタロトが集めたオブジェクト物に向けて叫び声（衝撃波）を浴びせた瞬間、一斉に前へと吹き飛んでいき、引き寄せているエツィオに目掛けてオブジェクト物を吐き出したかのように飛ばす。

エツィオ「Ａｎｇｏｌｏ－ｐｅｎｅｔｒａｎｔｅ？ｆｉｎｉｔｏ（簡単だぜ。）」

エツィオは前から迫り来るオブジェクト物を見てニヤリと笑い両足にひび割れが出来るほど力を貯めた後、イタリア語を吐きながら今いる引き寄せられている足場から前へと飛び出すように果敢に飛翔

する。そして…

エツィオ「アサシンブロック！アサシンガード！！アサシンキーパー！！！アサシンウォール！！！！」

ドガッ♪ドゴッ☆バキッ★

エツィオは迫り来るオブジェクト（大型トラックや瓦礫を含む）に目掛けて何度も回し蹴りするように蹴って、ワンシーンづつカメラのシャッター音と共に“オブジェクト物をサッカーボール”のようにテンポ良く“フツーに蹴り飛ばす”。

シャイナ『うほっｗｗｗ何というアサシンズ★ストライカーｗｗｗ』

エツィオに蹴られたオブジェクト物は一つ一つ“ビリヤードのように弾き飛ばされて”いき、ガツンガツンと生々しい音を立てながら宙に浮かぶアスタロト周辺へと集まっていく。その後…

エツィオ「Ｉｏ　ｌａｓｃｉａｉ　ｌ'ｉｍｍａｇｉｎａｚｉｏｎｅ　ｃｏｍｐｒｅｎｄｅｒｅ！（生きる総ての世界の魂と共鳴）」

エツィオがシャイナに見せない本来の真顔を出し左腕を前にかざし、左手をグッと握り締めた直後…

アスタロト周囲に蹴り飛ばしたオブジェクト物に向けて漂うオブジェクト物が複数引き寄せられるように混ざるように合体し、一つ一つの蹴り飛ばしたオブジェクト物が“漆黒の巨人のような腕”になって、巨人のような腕はボキリッと一つ一つの指の骨を鳴らしながら握り締める。

シャイナ『おまぁぁぁぁぁぁｗｗｗ何という“ヘカトンケイル”な腕ｗｗｗ』

エツィオ「おおっΣ（・ｏ・）シャイナよくわかったなぁ～。説明したいところだけど小説の都合つーことｒｙ…Ｌａ　ｒａｂｂｉａｄｅｌ　ｇｉｇａｎｔｅ★（百の激怒★）」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドッ！！！！！

周囲のエツィオの魔力…否Ｉｏ　ｌａｓｃｉａｉ　ｌ'ｉｍｍａｇｉｎａｚｉｏｎｅ　ｃｏｍｐｒｅｎｄｅｒｅ（生きる総ての世界の魂と共鳴）で“過去世界の神の一部を具現化”し半召喚した“巨人の腕（ヘカトンケイルの腕）”が、一斉にアスタロトの全身に向けて“集団リンチ”するかのようにボコボコに殴る。

因みに“Ｉｏ　ｌａｓｃｉａｉ　ｌ'ｉｍｍａｇｉｎａｚｉｏｎｅ

ｃｏｍｐｒｅｎｄｅｒｅ”（生きる総ての世界の魂と共鳴）はアルタイル同様に“過去に忘れられた神々の闘いの記憶を現実世界に具現化”“本人の記憶から見た世界の記憶を具現化”するという意味であり、当然有り得ない存在も“本人の意思次第で簡単に生成”しちゃいます♪

…という非常に三次元の現実世界に生きる“どこでも見かけるチーター達”さえ顔負けするほど“超反則の何でもありの力”ということである。（第三十七曲参照）

アスタロト「ニャアアァ〝ァァァァァァァァァ！！！！」

エツィオが造り出した巨人の腕（ヘカトンケイルの腕）が全身に何度も何連発も殴られて、両眼から涙が出る程痛がる仕草を取って痣が所々出てきて蜂でも刺されたように腫れがブクブクと膨れ上がる。

エツィオ「？ ｕｎ ｂｕｏｎ ｂａｍｂｉｎｏ，Ｐｅｒ ｆａｖｏｒｅ ｐｉａｎｇａ ｐｉ？ ｕｎａ ｍｅｒａｖｉｇｌｉａ.（そうだ、思いっきり泣け叫べ。）」

エツィオが腫れ上がったアスタロトの姿を見て、ニタニタと笑いながら両足に力を入れた後…

下半身の龍Ａ「ギッ？」

下半身の龍Ｂ「ギュ？？」

一瞬の内にエツィオの姿が足場にしていたサグラダファミリアの屋根部分から消えて、端を掴んでいた二匹の龍は唖然としたように食い込んでいたサグラダファミリアの屋根部分の端を離して、キョロキョロと見渡すように首を振る仕草を取る。そんな最中…

アスタロト「ヒギィいいいいいいィィィィィ！！！！」

パパパパ

の元へと歩み寄る。

下半身の龍C「ギォォォォ！！」

下半身の龍D「ガアァァァァ！！！」

下半身の龍E「ゴァァァァァ！！！！」

本体の上半身が巨人の腕（ヘカトンケイルの腕）による“集団リンチ平手打ち”による鬼畜的な意味で外圧を受けている中、エツィオの爛々とした進撃を見た下半身の龍達が激昂の声を上げて口から炎やら水やら雷などエツィオに向けて放射状に放つ。

下半身の龍F「グォォォォ！！！！」

下半身の龍G「ガギァァァァァ！！！！」

下半身の龍H「ゴォォォォォォ！！！！！」

他の龍と同様に腕を前後に振り回しながらスキップランしてくるエツィオに向けて、一匹一匹の口から風や紫色の煙で出来た毒や岩石を放射状に吐き出す。が…

エツィオ「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄ァ！！！！」

笑顔全開に出すエツィオが色とりどりの下半身の龍達による放射状攻撃に向けて、右腕を前に伸ばし右手を広げるようにかざした瞬間…

下半身の龍達の口から吐いた禍々しい色とりどりの放射状攻撃が、一瞬の内にして漆黒の夜空に似合わない“虹”になってキラキラと星屑のように輝いた。

下半身の龍達「！！？？！！」

エツィオ「どだ？マジふつくしいだＲＯ？？」

下半身の龍達が眼を飛び出すぐらい唖然と驚愕する表情を出そうとしたが…

ブリトラ《ガォッ！！》

ドンッ！

エツィオの前にかざしていた右腕が“ブリトラ”になってブリトラの口から本物の特級並みの雷を放ち、一瞬の内に下半身の龍達が跡形もなく“消し炭”になり、龍達に隠れていた下半身の足が露になる。

エツィオ「ラン♪ランララ♪♪ランラッラー（´ω`）ラン♪ラランララララーン♪♪」

エツィオが歌いながら身体をクルクルと時計回りに回転させて、足場のない空中が“地面”となってエツィオはノリノリな気分でダンスをした後…

エツィオ「ブリトラ、良くやった（＊´ω`＊）褒美のキスをやっちゃうＺＯ★」

ブリトラ≪キュウゥゥゥゥン（＊´Σ`＊）≫

エツィオの足下に白い階段のような物体が現れて、エツィオは階段を一段登った後右腕に現れたブリトラの鼻に向けて軽いキスをした後、ブリトラは甘えた声を出して幸せそうな表情を出しながら身体へと戻っていき、元の右腕へと戻る。

エツィオ「魔神は階段のーぼるぅぅぅ♪そこにあるのは…」

エツィオがルンルンと階段を登っていく中、アスタロトは迫り来るエツィオに対して“恐怖”を覚えて逃げ出さそうとするが、周囲の巨人の腕（ヘカトンケイルの腕）がガシリと四肢の関節辺りを掴んで完全に拘束し、アスタロトの逃げ動作を力で封じ込め羽交い締めするようにを阻止する。

アスタロト「ぎ…ギアアァァァァアアアアァァァァ…」

所々腫れ上がったアスタロトの視界には登っていく度にエツィオの右腕が“徐々に変化”していき、右腕だけでなく青い線のような物がエツィオの“全身”に向けて徐々に伸ばしてアスタロトの顔面部分に辺る階段最上階を登り詰めた直後…

エツィオ『地獄なのＳＡ（＾３＾）ー☆』

エツィオの声が二重に重なるような声になって、アスタロトの眉間にエツィオの竜のような逞しい漆黒の右腕がめり込み蒼い光が全身に迸った後…

姿は人間に近く８００年前に魔帝を討ち滅ぼした魔を極めた究極の“漆黒の悪魔”がそこにいた。

第六十五曲　見た目は竜人ですが魔神です。

―夜　スペイン　バルセロナ　上空―

アスタロト「ギアァあああぁぁぁぁぁあああああぁぁぁぁ！！！！」

ドゴムッと魔神化したエツィオの右腕がアスタロトの眉間にめり込んで、めり込んだ箇所が骨が陥没するかのように窪み、アスタロトを拘束していた複数の巨人の腕（ヘカトンケイルの腕）が、エツィオが殴ると同時にアスタロトの身体から手離す。

東京タワー三本分のアスタロトの巨体が“殴られただけで軽々と吹き飛び”、身体が仰け反られたまま地上に向けて落下していく。

シャイナ『う…うわぁぁぁぁぁ（´Д｀；）エツィオがなんかギ●ティ2の“ソ●さんが＃17で常時ドラゴンイ●ストール”したような姿になったぁぁぁｗｗｗ』

身体の中にいるシャイナがエツィオの瞳から通して、エツィオの“本来の姿”を生見で唖然とゆっくりボイスを吐きながら見続ける。

エツィオ『そうＳＡ★これが本来の俺の姿…魔を極めし究極の悪魔“魔神”ＤＡ＼（＾ｏ＾）／』

容姿は人間体のエツィオが羽織っていた黒をベースに、両腕先と両足先には西洋の竜のような逞しい爪に成っていて、両眼は黄金に輝くの鷹の目に、身体の所々に青い線が走り、エツィオの全身に蒼いオーラが纏う。

人間体の時のアサシンのローブの裾の部分が西洋の竜の翼になり、背中の中間あたりから西洋の竜のような尻尾が長々く生えて、見た目は人間に近く悪魔に無い感情豊かな表情を出す“魔を極めし究極の生命体”。

云わばエツィオ本来の“魔神”の姿になっていた。

エツィオ『恐いか？』

魔神（エツィオ）が左親指の骨を鳴らした後、巨人の腕（ヘカトンケイルの腕）の半召喚を閉じて、依り身となったヘカトンケイルの腕のオブジェクト物がバラバラと宙から地上へ向けて落下する。身体の中にいるシャイナに向けて言い、シャイナは悪魔ならぬ人間のような表情を見て少し呆けた後…

シャイナ『いや…寧ろ恐いと言うより“スッゲェェェェェェカッコイイ”ＤＥＡＴＨ（＊・∀・＊）』

エツィオ『えっ…マジ!?本当にマジで言っていんの!!??!』

シャイナは逆に恐れたりもせず“喜ぶ”表情を出し、エツィオの姿が二次元のＧ●２の主人公が変身する“ドラ●ン”の姿と比べて眼を大きく広げながら外人四コマのようなの喜ぶガッツポーズを取る。

エツィオ『こ…怖がるかと思った…。俺…少し何か言われそうで…』

エツィオは落下していくアスタロトを追いかけるように両腕を後ろに伸ばして、上空からロケット落下するような体勢を取りながら地上へと滑るように降りていく中、魔神は左胸部分に右手を当てながら本来の姿を見て怖がるだけでなく、キツい言葉を掛けられるのではないかと心配し心境をシャイナに言ったが…

シャイナ『いや、カッコいいじゃん!!Ｄ●Ｃの魔人化やアレッ●スさんのアーマーモードよりも“超カッコいい”!!!!!むしろ“抱きつきたい”ｗｗｗ』

シャイナの何も恐れ…否逆に腐女子全開の笑みで鼻血でも噴出するぐらいの興奮するような言動を聞いて、魔神（エツィオ）は少し予想外なことに一瞬たじろぐ仕草を取る。

エツィオ『ほ…本当ぉぉぉぉぉぉぉぉ！？？！！』

シャイナ『本当だＹＯ★だって今更ここでシリアスモードなんて“Ｂ級臭せぇストーリー”なんて作者も私も一部の閲覧者様も御免だもんＮＥ☆だってこれＳＡ…』

シャイナの理由はどうであれ「はい、どぞー♪ｍ（´∀`）ｍ」という歓迎する言動を聞いて、エツィオは人間体のように子供のように“思いっきり喜ぶ表情”を出しながら、両腕を上に上げくの字に曲げ頭上に両手先を軽く当てる。

右足をくの字に曲げて左足をまっすぐに伸ばし、身体を喜びの舞に応じて何度も時計回りに回転させながら地上のアスファルトの上へと華麗に落下した直後…

ギュルルルルルル

左足をアスファルトに突き刺しドリルのように身体を片足だけで回転させながら、エツィオが落下した地点に“高速に回る黒い竜巻”が発生し、抉ったアスファルトの破片がエツィオが造り出した竜巻の風に舞い上がる。

シャイナ『少しシリアスかつ“ギャグ”全開の“馬鹿アホ小説”DEATHよ?まぁ、元ネタは小説の零曲の前書きに載っているしwww』

エツィオ『おっと!Σ(・・)そういえば、そうでしたなwww“とあるバカゲー”と“アホゲー”のようなアクションを元に小説として書いているんだっけwww』

エツィオが身体の回転を止めて両足をちゃんとアスファルトの上に着き、両腕を伸ばしてゆっくりと“少林拳法”のように回転させた後…

シャイナ『文でアクションシーンを再現させる表現が中々ムズいよねぇー(笑)いまだにこの“作者”も苦戦しているしwww』

エツィオ『出来る限り“使い回しの表現文”は使いたくないのが作者のモットーだからなwwwまぁ、でも…少しは“使いこなしている”んじゃね(?Δ?)』

作者の代弁話を二人で自由に語り合いつつ右腕を前に伸ばして手の平を広げながら、左腕を後ろへと流し身体をやや斜め右横向きに向いて、胸部に青い十字の光を放つ逞しい胸部をカメラ目線に魅せながら、口元を吊り上げて魔神の姿のままウィンクを放った時…

アスタロト「ギアァあああぁぁぁアアアアアアアァァァ！！！！」

ドシンッとエツィオがいた位置に、激昂したアスタロトの右手の平が地面のアスファルトを震度８ぐらいの地震の衝撃によって海が波打つように揺れて魔神（エツィオ）を叩き潰す。

アスタロトは地上に殴り飛ばされて仰向けの状態からゆっくりと起き上がり、周りの建造物を破壊しながら両足に力を入れて立ち上がった後…

アスタロト「アブあああぁぁぁぁアァアアアア！！！！」

叩き潰したアスファルトに向けて何度も右手の平を叩きつけながら、上空に浮かんでいた複数のオブジェクト物が至る所に垂直に落下して、アスファルトに突き刺さる。

アスタロト「アァあああぁぁぁぁアアァァァァ！！！」

落下地点がもう原型すら分からないほど逃げ回る人間達を巻き込みながら跡形もなく破壊され、アスタロトは怒りを任せて両腕を上に上げて組んだ後、思いっきり降り下ろそうとしたが…

エツィオ『オィオィ、人と“人”が楽しく喋っている最中に攻撃してくんなよ（、ε´）空気読め空気っ！！』

アスタロト「ギゥゥうあああああぁぁぁぁ！？！！？」

いつの間にか魔神（エツィオ）の姿は落下地点のアスファルトに立って無く別の場所にいて、エツィオの今いる場所は“垂直にアスファルトの上に突き刺さったタンクローリーの後方部分”にいて、右足を左足膝部分に引っ掛けて両腕を顎下に組ながら“スタイリッシュやらないか座り”で座っていた。

エツィオ『こうゆう行為は“けーわい”て言うんだＺＯ／（、Ｏ´θ／俺を少し見習ったらどう…』

シャイナ『いや、そう言うアンタも“ＫＹ”だからｗｗｗ（ノ－ｏ－）ノ┻』

エツィオが右人差し指を指しながら呆れる表情を出してアスタロトに向けて“カメラ目線”のまま言い、エツィオの身体の中にいるシャイナはペチッ♪と左手で軽く横へ振るように突っ込んだ後…

アスタロト「ニギャあああぁぁぁぁアアアアァァァァ！！！！！」

アスタロトがエツィオが座っているタンクローリーに向けて平手打ちするかのように、右腕を思いっきり横へと振りかざす。

エツィオは座っている状態から軽く跳ねるようにジャンプした直後、座っていたタンクローリーがアスタロトに叩かれただけで大きく後方へと吹き飛ぶ。

エツィオ『さて、楽しい祭は此処からだ。』

エツィオは身体を捻らせながら地上へと落下し、両腕を広げて両手の平をプラプラと軽く振って呆れたような仕草を取り、華麗にアスファルトの上へと着地した後…

エツィオ『派手に逝くぜ。レッツ…』

―Ｓｈｏｗ★Ｔｉｍｅ―

第六十六曲　Balliamo col diavolo pi? forte

―夜　スペイン　バルセロナ　中心都市内大通り―

アスタロト「ニ〝ャアアァあああぁぁぁぁアアアァァ！！！！」

ドドドドドドドドドドドドドドドッ

アスタロトが魔神（エツィオ）に向けて咆哮を放った時莫大な“トルネード以上の衝撃波”が発生して、ビル等の硝子があちこちと一瞬の内に連鎖しながら割れていき、エツィオの魔神体にアスタロトの咆哮の息が当たる。が…

エツィオ『！おぇっ　。。。（Σ）く…臭っｗｗｗ』

魔神（エツィオ）にはアスタロトの咆哮には“吹き飛ばされたりもせず”、“立つ位置から微動すら無し”でフツーに立っていたが、アスタロトの咆哮を身に受けて息がエツィオの鼻の中に入った途端、あまりにも臭かったのか“気持ち悪い表情”を出して、口元に両手を当てる仕草を取る。

エツィオ『い…く…臭っぁぁぁぁぁぁぁぁ！何だこの“腐った卵”のようなテラ酷ぇ臭いは（、ε′）』

シャイナ『お…オェェェェェェェェェプッｗｗｗ…これが何年も歯磨きしていないとこのような近所の生ゴ…ウゲェェェェェェェェｏｒｚ』

エツィオの身体の中にいたシャイナもアスタロトの臭いを受けて、悶絶しているかのようにｏｒｚの体勢を取りながら口元に右手を当てて必死に耐える仕草をする。そんな最中…

ガシャアアアアァァァァン！！！！

次々と大通り全体に建てられていたビルの硝子が全て割れた途端にビルが粉々に破壊されていき、同時に逃げ惑っていた大型車含む車と人間がアスタロトの咆哮の“衝撃波”でビルの破片と共に後ろへと軽々に吹き飛ばされる。

車Ａ「うわぁあああぁぁぁぁ！！！！！」

車Ｂ「助けてくれぇエエエエエエエエ！！！！！」

車Ｃ「ひぎゃあああぁぁぁぁ！！！！！」

人間達の悲鳴が大通りに轟く中、数台の大型車（バスやトラック等）が気持ち悪い表情を出しながら口元を抑えているエツィオに目掛けて吹き飛んでくる。

エツィオ『！こんなことしている場合じゃねぇなｗｗｗ』

魔神（エツィオ）は先程の馬鹿馬鹿しい仕草から直ぐに真剣（マジ）顔になって前へと向き直した後、両腕の裏に付いていた剣の鞘のような穴から青白い光を長く放つ本来の“アサシンブレード”を出して、腰を軽めに低くし右足を少し後ろへと下げて右腕を後ろへと流し、身構える体勢を取る。そして…

エツィオ『Ｕｎａ　ｓｐａｄａ　ｂｌｕ！』

吹き飛んでくる数台の車に目掛けて右腕のアサシンブレードを青白い光の残像を残しながら掬い上げるように振りかざし、車の中にいる“運転手ごとブレードでぶった斬る”。

エツィオ『ひたすら“Ｘ”“Ｘ”“Ｘ”“Ｘ”“Ｘ”のガトリング“Ｘ”ラッシュアサブレコンボ★（ｘｂｏｘ版）』

運転手の断末魔すら上げられないままエツィオのアサシンブレード

に“車体ごと真っ二つ”に斬られて、いまだにアスタロトの臭い咆哮が止まない中後方へと吹き飛んでいったが、まだエツィオに向けて数台の車が迫って来ており、エツィオは自分だけに目掛けて吹き飛んでくる車だけ狙うようにテンポ良く“中にいる運転手ごと次々とぶった斬っていく”。

エツィオ『やっ！はっ！くのっ！！』

ザック♪ザク♪♪と、両腕の裏に出ている長い青白い光を放つアサシンブレードを華麗に振り回しながらリズム良く吹き飛んでくるオブジェクト物を中身ごと斬っていくが、一方に前に進めず“時間”だけが過ぎていく。

エツィオ『（チッ…魔神（オレ）は他の悪魔と違って疲れという感覚は無ぇが、同じこと繰り返されてキリがねぇな。）』

斬っても斬っても吹き飛んでくるオブジェクトの数が減らないことで、エツィオはワンパターンに永遠ループされているのを眉毛部分を下に下げて表情を曇らせ、ふぅ…と溜め息を付いた後…

エツィオ『（まだ遮断物が沢山あるし、隠れながらヤツに近付くか。）おふぅ！臭っｗｗｗこの場所臭うＹＯ（´Д`；）』

最後に吹き飛んできた大型タンクローリーを“右足だけで上へと一

蹴して”タンク部分へと蹴り当てて後方へと蹴り飛ばした後、左手で鼻をつまみながらササッと路地裏へと隠れて走り出す。

アスタロト「ギィいいいいィィィィィニャァアア゛!!!!」

アスタロトは大通りから路地裏に走るエツィオを見て顔だけ振り向いたまま、口の中に空気を思いっきり吸って腹が風船のようにパンパンと膨らませた後…

アスタロト「アァアァァ゛ァアアアァあ゛あああぁぁぁぁぁ゛!!!!!」

アスタロトの体内に溜め込んでいた空気を思いっきり吐き出して、トルネード並みの息吹きと共に口内の何かが腐った臭いと一緒にエツィオに向けて吐き出す。

エツィオの後方からアスタロトの吐息で建物が崩壊し、瓦礫が追い掛けるように崩れ落ちながらエツィオは路地裏を疾走する。

エツィオ『よっ…と!』

前に崩れ落ちた大きな瓦礫をハードルのように飛び越えて前へと進み、頭上から降り注ぐ瓦礫と硝子の破片は両腕の裏に付いていた青

白いアサシンブレードを振りかざして粉々しながら走り、アサブレで斬り裂かれた瓦礫と硝子の破片は一瞬の内に“青い薔薇の花弁”へと変わる。

エツィオ『う～ん（－．－；）何処か絶好な場所は無いのかなぁ？？』

シャイナ『絶好な場所ってｗｗｗここら辺には特に目立った所がないＤＥＡＴＨよ？？』

エツィオは走りながらアスタロトの吐息で砂がサラサラになる位まで崩壊していく路地裏から見通しの良い都市のもうひとつの大通りへと出て、民衆が逃げ回る中にエツィオの魔神体を道路上へと降り立つ。

アスタロト「ギニャアァァア〝あああぁぁぁぁ！！！！」

ドゴムッとアスタロトは先程と同じ位置に立ちながら魔神（エツィオ）に向けて右腕を上から下へと振り回すように建造物を右手の平だけでオモチャのように破壊しながら叩く動作を取る。

エツィオ『？ ｆａｃｉｌｅ ｃｏｓ？ ｃｏｍｅ ｃｈｉｕｄｅｒｅ ｉ ｓｕｏｉ ｏｃｃｈｉ（－３－）』

エツィオは振りかざされるアスタロトの払い攻撃を軽いジャンプで上へと避けて、右足をアスタロトの腕部分へと踏んだ後、前方に向けて何度も回転しながら一件のビルの壁に向けて右手の爪とブレードの剣先をめり込むように刺した直後…

吹き飛ばされた一般市民Ａ「ギャアあああぁぁぁぁ！！！！」

吹き飛ばされた一般市民Ｂ「うわあああぁぁぁぁぁ！！！！」

エツィオ以外の逃げ回る一般市民はアスタロトの払い攻撃を複数…約５００名が受けて、一人一人体格差があるといえども相手は“かつての星の真の破壊者になりかけた墜天使（ちきゅう）”なので“関係無く”当然ながら巻き込まれた約５００の人間達は軽々とそよ風のように吹き飛ばされる。

巻き込まれた一般市民Ａ「ギュ…」

巻き込まれた一般市民Ｂ「ゲッェ…」

人の身体が高速に壁や路上に叩きつけられた瞬間、トマトが潰れるような音を立てて人間の身体が原型を留めないぐらい中身の内臓ごとグチャグチャになり、道路一面とビルの壁辺りに生々しい血肉が次々と付着していく。

巻き込まれたバスの運転手「ヒャアアァァアアアア！！！！！」

巻き込まれたバスの乗客Ａ「イヤァアアアアアアアア！！！！！」

巻き込まれたバスの乗客Ｂ「助けてくれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！」

巻き込まれたバスの乗客Ｃ「あああああぁぁぁぁぁあああああぁぁぁぁぁ！！！！！！」

アスタロト右腕で払いのけ攻撃の後に半崩壊しめり込まれたビルの壁からすっと出した直後、アスタロトの右手の中に観光バスを掴んでいたらしく、アスタロトは右手で掴んだバスを上へと上げて顔を観光バスの方向へと向ける。

アスタロト「あ…あああ…あああぁぁぁぁぁ？？？？」

アスタロトは両目を閉じつつ無表情のまま、右手の中で何かが摩れる感覚を受けながら観光バスから聴こえる数々の悲鳴を聞いて首を傾げた後…

アスタロト「ヂュアァ゛アァァァァイ！！！！」

エツィオ『オィオィｗｗｗ』

バキッ！

アスタロトは口を開けて歯並びが良い歯を剥き出しにしながら、右手の中に掴んでいた観光バスを口の中に入れてそのまましゃぶるようにして“生々しい音を立てながらお菓子のように食べる”。

シャイナ『おまっｗｗｗバスごと人を喰うなよ（。Д。）』

エツィオ『しゃーねぇーだろシャイナ」（｀～´；）「やつはまだうｒｙ…つーか…』

エツィオはビルの壁にしがみつきながらシャイナに見せない本来の真顔を右往左往に動かして、周囲の至るところから黒い霧のようなモノが漏れ出るように出始める所を見る。

エツィオ『（マズイな。人を殺傷した時に喰らったアスタロトの魔力が、この区域内を徐々に浸食してきている。）少しピッチ上げるか。』

エツィオは両腕の裏に出していた青白い光を長く放つアサシンブレードを鞘の中に閉まって、左腰に付いていた剣を左手で引き抜き、壁に突き刺していた右手を離した後…

エツィオ『Ｔｈｅ☆特攻ＴＩＭＥですＹＯ（'◇'）ゞ』

裾の部分の西洋の竜の翼を長いコート状から本来の猛々しい巨大な竜の翼へと変えて、剣を右手に持ち変えた後翼を羽ばたかせながらアスタロトに向けて滑空する。

アスタロト「ニギャアアァアアアアァ！！！！」

アスタロトは高速に滑空してくるエツィオに見て口を大きく開けた後、先程食べた“観光バスの砕かれた破片”と千切り潰した“人間達の肉片”をエツィオに向けてスイカの種飛ばしのように吐き出す。

エツィオ『悪いがさっさと決めるぜ。閲覧者の為にもＮＡ♪』

エツィオは右手に持つ剣の束を握りながらもう片方の手も右手に重なるように握り締め、剣を頭上へと掲げた時…

エツィオ『“Ｘ”長押しクラッシュ攻撃構えー…ＹＯ・ＳＨＩ★（

ｘｂｏｘ版）』

エツィオの長剣の刀身が剣先まで青白い光を上へと迸るように放ち、スウッ…と、両腰をやや低くしながら長剣の束を両手で握り居合い斬りをするような体勢を取って、後数メートル位にアスタロトの口内から吐き出されたバスの破片とグロい何かがエツィオに当たる直前…

エツィオ『Ｕｎａ　ｇｒａｎｄｅ　ｓｐａｄａ　ｂｌｕ!!』

エツィオが長剣を振り回した直後、振りかざされた前方が“全て見えない位の驚きの青白い光に包まれ”、吐き出されたモノとアスタロトの全身ごとエツィオの青白い光に呑み込まれ、前方にある“全ての存在がエツィオの剣の太刀筋で跡形もなく消し去っていった”。

第六十七曲　さて、ボス戦後の秘宝回収ですＹＯ？

―夜明け　スペイン　バルセロナ　上空―

シャイナ『おまっ……何この“約束された勝利の●”はｗｗｗなんという驚きの明るさｗｗｗ』

前方が驚きの青白い光に照らされているのを見て、シャイナはエツィオと出会う前の本来の剣の“強さ”を目辺りにする。（第ニ曲参照）

エツィオ『そりゃぁ、“万物その物を全て支配する天神（アルタイル）が作った退魔の剣”だからな。気をつけてコイツを扱わないと星（ちきゅう）その物すら“消失させるぐらいに滅ぼせる”からＳＡ★』

シャイナ『えぇぇぇぇぇぇー！？？！！　。。。（Д）ち…地球を…ほ…滅ぼせ……』

エツィオはケラケラと笑いながら剣を左腰に付いていた鞘の中に閉まった時、前方の眩い青白い光が止んで本来の太陽が上る前のオレンジ色が少しかかった夜空へと戻る。

そんな最中身体の中にいるシャイナが前の自分がやった出来事を思い出し、表情を蒼白にさせ口をパクパクと動かしながら、エツィオの長剣は“核兵器以上に危険な存在”という物を理解した。

エツィオ『だから最初に言った通り、俺の剣は“この世界に生きる全ての存在を拒絶する（第四曲参照）”と呪(まじな)いが掛けられていたのに、シャイナは“普通に持てれた”からなぁ。それが不思議で理解出来ないＹＯ（´・ω・`）』

シャイナ『私だって分からんわぃｗｗｗあの時は必死でエツィオが眠っていた墓場へと向かっていたしｗｗｗつーか、長い戦闘後の“ダルいシリアスな会話”は止そーＺＥ？』

エツィオ『そうだな、これは“物語後半から明らかになる”から、取り敢えず今は深く考える必要ナッシングｗｗｗつーことで…』

魔神(エツィオ)はカメラ目線に向けて御手上げのような仕草を取り、身体の中にいるシャイナに向けて言いながら上空から地上へと降り立つ。

一夜明け　スペイン　バルセロナ　ムンタネ通り一

アスタロトとの長き戦いで半壊した大学に、血塗れた道路や壁等に

こびりつき、複数の瓦礫と横転した車が折り重なるようにして転がって、巻き込まれた人々の苦痛の声が辺りに呻く。

シャイナ『うっはぁぁ～（。ｏ。；）何という地獄絵図ｗｗｗもう“見慣れた”と言ってもこれはスゲェｗｗｗ残酷度“ＬＶ６”だＮＡ。』

エツィオ『“仕方ないのさ”。“偶然”此処にいた人間達が悪い。要するに“運が悪かった”んだＹＯ「（´３、）ｒ』

そんな阿鼻叫喚な風景になっているにも関わらず身体の中にいるシャイナが“二次元と三次元を混ぜた残酷脳内補正”を自分流に思い浮かべて評価する。

エツィオは魔神の姿のまま『アハハ♪んじゃ、まだ残酷度は低いんだなｗｗｗ』と歯を見せながら軽く“カメラ目線”に向けて軽くお手上げするような仕草をして笑った後…

エツィオ『Ａｎｎｕｌｌａｍｅｎｔｏ　ｄｉ　Ｄｅｍｏｎｉｚａｔｉｏｎ★「あー、すっきりした♪」

エツィオが右親指の骨を軽く弾く様に鳴らした直後、全身が一瞬青い光に包まれて青白い光が消えた後に、元の黒いアサシンの衣装と鎧を纏った人間体になり、声が二重から普通の声へと戻る。

エツィオは魔神化を解いた後、胸元に右手を寄せてゆっくりと前へと翳すように動かして、身体の中にいたシャイナを外へと出す。

シャイナ「フヒーッ。出れた出れたｗｗｗエツィオの身体（なか）は核防壁シェルターよりも“スッゴい安全”だということをやっと理解したｗｗｗ」

エツィオ「ウヒヒッ♪俺の身体…いや俺が身に纏っているアサシンローブと胸部と両肩と両籠手に付いている漆黒の霊鎧は“神の力でさえ通せない程の外圧を一切通さない完璧な魔力の壁”で構成されているからな。」

シャイナ「ちょっｗｗｗ何と言う“今更ながらのチート防具”ｗｗｗ作者何してんだｗｗｗ」

エツィオは胸を張って鼻息をピューピューと機関車のように出しながら、己の自慢の箇所を“カメラ目線”に向けて人差し指を指しながら“今更ながらの身に纏う鎧とローブの反則並み耐久力”を説明する。

シャイナは“今更ながらの説明”を聞いて顔を上へと上げた後、“カメラ目線”に向けて口を八の字にさせながら呆れた表情を出して苦笑いする。

エツィオ「そこは気にするなＹＯ（＾ω＾）たとえ霊鎧に被われていない生身の部分に刃物とかが刺されようが、その他モロモンどんなに外圧を与えても“死にはしない”し、“軽傷”程度で済むからな。シャイナ、俺が一度アルタイルと戦った時のことを思い出してみろ＾＾」

シャイナ「あっ！！Σ（・・；）そう言えば…」

シャイナは一度神界でアルタイルと戦って負傷（エツィオにとっては軽傷）した時、“コンマ数秒程度で傷が癒える驚きな速さ”と“ジワリと浮かんだ血痕が綺麗サッパリと消え元通りのローブに戻る”ことを思い出す。（第十曲参照）

エツィオ「そーいうこと♪アルタイルは俺の“霊鎧”は無いけれど身に纏う“白いアサシンのローブ”は他の天神達と違って耐久力は“生きる万物の全てを拒絶する”位に護られているからな。ちょっとやそっとの外圧を与えても“無駄”なことなんだ♪だから…」

シャイナは「あー、成る程ｗｗｗそれと同様の“エツィオ”のみ人間の肉体と同じ様に“痛手を受ける”のねｗｗｗ」

シャイナが納得したように右手の平に丸めた左手をポンッ♪と叩く仕草を取った後、エツィオは「魔力はアルタイルと“互角”だから

なぁ♪」と言って子供のようにはしゃいでおちゃらける仕草を取った後…

エツィオ「さて、目的の卵卵卵卵卵卵卵ぉぉぉぉぉは♪」

左手を水平にして額に近付けてを顔を右往左往に動かし、興味津々な表情を出しながら本来の目的であるアスタロトの卵を探す仕草を取る。

シャイナ「！あっ、エツィオ“アレ”じゃね？？」

シャイナも顔を右往左往に動かしながら数歩前へと歩んだ後、前方にコロンと転がり落ちている白く光る球体を見て、後ろにいるエツィオに言う。

エツィオ「んぁ？…おっ、あったあったあれだＹＯ＾＾サンキュッ、シャイナ（＾ｏ＾）／」

エツィオはシャイナが指を指す方向に顔を向けて“白く光る球体”を見た後、奪還使命の秘宝であることを見て感謝の言葉を吐いた後、転がり落ちている秘宝に向けて歩き出す。

シャイナもエツィオに続いて歩き出し上空の水平線から太陽が登り

始める中、二人は白い光を妖しく放つ秘宝に向けて歩き出した。

ジャッ…

揚々に歩く二人の背後から、砂のように崩れ落ちていく白い腕が密かに忍んでいた。

―ワワワ…渡タタタ…ススス…ススス…も……ももも……物か…カカ…―

第六十八曲　敵が増える？ＨＡ、いつものことＤＡ（ー＋ー）

―夜明け　スペイン　バルセロナ　崩れ落ちる死体ベフェーレンの視点―

サラサラ…

……触るな…触るな…わ…私の……

顔と上半身半分が砂のように崩れ落ち残されていた左顔面半分の片目の視界に、転がり落ちた秘宝を手に入れようとするシャイナと隣にいるエツィオを見て、ギリッと歯を食い縛るように二人に向けて睨み付ける。

……私…わた……し…だけの……

ピシッ…ピピッ……

残されていた白くなった右腕を前に弱弱しい動きで伸ばし徐々にヒビが入っていきながらも、ベフェーレンは僅かに身体（なか）に秘宝の魔力

を吸い取って残っていた力を、秘宝を手にしたシャイナに向けて放った。

ー夜明け　スペイン　バルセロナ　シャイナ&エツィオ視点ー

シャイナ「これがアルタイル達が忘れていった“秘宝”なんだ。野球ボールのように軽ーい軽ーーーいш（＊´∀`＊）ш」

シャイナは転がり落ちていた秘宝を両手で拾い上げた後、両手の平の中に“アスタロトの卵”をワッショイ♪ワッショイ♪と何度も上へと掲げる仕草を取りながら、“秘宝”を玩具のように遊ぶ。

エツィオ「ＨＡ　ＨＡ　ＨＡ★俺がぶっ飛ばしたアスタロトの“霊体だけが派手にぶっ飛んだ”もんで中身はスカスカだからなｗｗｗだから軽く感じるんだ。本来は少し石のような重さだけどな。」

エツィオは両腕を組みながらケラケラと笑い秘宝を両手の平の中で遊んでいるシャイナを見て、笑いながら本来の“秘宝”の重さを説明する。

シャイナ「へぇぇぇぇ（・ｏ・）んじゃ、中身は赤ちゃんの身体が出来る前の“羊水”のような何もないってこと??」

そう言いながらシャイナは両手の平の中に持っていた“秘宝”を片手に持ち替えて右手の中に持った後、ポンポン★と軽く“秘宝”をお手玉するように遊び変える。

エツィオは「まぁ、そんな感じだな。」と言って、歯を出しながらカメラ目線に向けて数歩前へと歩んだ時…

エツィオ「やれやれ、諦めが悪い奴だな。」

ガシッ！とエツィオは背後を振り向かずにニタニタと笑う表情を出しながら、“左手だけで背後からの何か”を意図も簡単に受け止めてそのまま左手の中で掴む。

シャイナは何事かとエツィオが掴んだ物を見て温和な表情から一変、ぎょっとするようなモノを見て表情が数秒間青ざめる。

エツィオ「悪魔（おれ）と天神達（アルタイル）は“生まれながらにして異端なる魔力”を持っているから、暗殺魔具の力をフツーに振るうことが出来る。」

エツィオが掴んだモノは所々砂のように崩れ落ちている“白色のタコのような触手のような物体”であり、エツィオの左手のなかで苦しむようにビチビチと蠢きながら最後の抵抗を謀る。

エツィオ「が…“天”からの恩恵を受けていない元々魔力を持たない人間が、“眠り状態から醒めた”秘宝や暗殺魔具を使うと“今生きる総ての命を吸い取る”ことになる。つまり…」

エツィオは左手の中で暴れる触手を掴んだまま後ろへと振り返って、呆れた表情を出しながら砂のように身体が崩れ落ちていくベフェーレンを見る。

死体ベフェーレン「…。」

シャイナ「普通の人間が暗殺魔具が力を使っちゃうと、“生気を食っちゃう”んだっけ?命そのものを捧げますぅってことに…」

エツィオ「ピンポン♪ピンポーン（o＾ω＾）bシャイナ大正解!!／（＾o＾）／その証拠がアレなんだ♪♪♪」

パンッ★とエツィオとシャイナの両端辺りからクラッカーの様な色とりどりの紙吹雪が吹いて、スポットライトのような光がシャイナの全身に照らす。

シャイナは「イィィィィーーーヤッホォォォォォォォ♪へ（。∀。へ）（ノ。∀。）ノ♪」と言って右腕を上に伸ばして足をくの字に折りながら軽くジャンプし、ガッツポーズを取る仕草を取る。

エツィオは左手の中に暴れ回る触手を持ちながらシャイナの喜びに呼応して踊り出し、両腕を水平に広げて身体を回転させながら右端から左端まで宙に舞う色とりどりの紙吹雪の中でクルクルと回った後…

エツィオ「あの“白くなったもやし人間”の身体の生気は、もう中身その物も何もない“スカピン”なのさ。ほっとけば勝手に死ぬだけだＺＥ★」

カメラ目線に向けて伊達男面（イケメンフェイス）を出しながら右手人差し指を指した後、左手の中に暴れ回っていた触手を捻らじ切るように握り潰し、サラサラと白い粉のようなモノが左手の平からこぼれ落ちる。

シャイナ「うはぁぁぁぁｗｗｗ何か日本漫画のＡＲ●Ｓのコアが壊された時のような身体だな。くわーばらーくわばーーーら（＾。＾；）」

エツィオ「さて、秘宝奪還の使命は果たした。さっさとこっから離脱しようカネ（、Д、へ）」

エツィオがそう言った後シャイナは「そだね。」と言って白い光を放つ秘宝をエツィオに手渡し、エツィオは手渡された秘宝を左手で受け取った後身体の中に入れる。

二人は崩れていくベフェーレンの身体を後にするように後ろへと振り返って、エツィオがシャイナの左腰辺りに左手で触れながら前へと歩もうとした時…

死体ベフェーレン「ククク…馬鹿な奴メ……私ヲ…この私を殺……しタコ…トハ」

エツィオ「あ？」

ベフェーレンは崩れ落ちていく身体でも笑いながらエツィオに言い、エツィオは顔だけを後ろへと振り向いて不満の表情を出しながらベフェーレンに軽い言葉で言う。

死体ベフェーレン「私ガ…契約してキ……タ…“軍の一部”に…怒ヲ「あー、どうぞどうぞ。別に敵がこの先“増えようが問題無い”しー♪」…。」

ベフェーレンが伸ばした右腕が崩れ落ちた後、エツィオは余裕たっぷりの笑みを出しシャイナを守るようにして後ろへと抱えながら、右腕を砂のように崩れ落ちていくベフェーレンに向けて伸ばした後…

エツィオ「俺達の使命を妨げる奴だけは容赦しねぇ。そんだけＤＡ。」

前に伸ばされた右腕の手の平から巨大な青白い円形の呪文が入ったアサシンの紋章を出し、紋章の中心から“氷魔銃”が出てくる。

武器が白い光に包まれて天へと遡り白い光が止んだ直後、本来の巨大なアンゲルスの姿になって、上空から白い雪を深々と降り注ぐ中アンゲルスは穏やかな笑みを出して死にかけのベフェーレンを視線だけで見下ろす。

アンゲルス【アハンッ…砂のように崩れ落ちていく人の姿は溜まらないわ。何だかゾクゾクとするのよ…】

崩れ落ちていくベフェーレンに向けて左手を口元に寄せてキスをする仕草を取り、口元から氷の形をしたハートマークがプワン♪と一つだけ宙に浮かぶように出てきた直後…

アンゲルス【けど…容姿と魂が残念ね。私の理想な男の体格と意思が相応しくないわ。なので…】

アンゲルスが両腕を後ろ斜めに伸ばして両手の平から白い光が迸り、光の隅々から雪のようにこぼれ落ちながら段々と白い光が大きく広がっていく。そして…

アンゲルス【可愛い坊や（ダーリン）の前から消えて頂戴…ね？＾＾】

白い光を前へと差し出すように両腕を前へと突き出した瞬間…

ヒュォォォォ…

―エツィオとシャイナを除く前方全ての地区が液体窒素でもぶっかけたように一瞬の内に白くなり、ベフェーレン他死傷者含めて全てがアンゲルスの氷の力で古代の氷河期のように凍りついた。―

シャイナ「おまっｗｗｗ寒っｗｗｗ負傷者と生き残りがいたのに無差別に凍ったＹＯｗｗｗへっ…へっく！！！」

エツィオ「ヒュー♪流石“現世と魔界の海を全て支配した女帝”。たまげたなぁ～♪」

前方が凍りついたことで寒気を身に受けてがガタガタと震えた後嘘が出そうになって顔を下に下げた時、エツィオが背中から漆黒の鷹の翼を出してクルッとマフラーのようにシャイナの身を包んで温める次いでに嘘の動作を止める。

アンゲルス【ウフフッ…此処まで凍てつくことが出来たのは、可愛い坊や（ダーリン）を守るために発揮した“愛”の力よ♪】

シャイナ「ウフーフフフフーフフーン（＊´ω`＊）エチュイォの羽モフモフしててン〝ギモ〝ヂィィィィィィィィィ（いや、やり過ぎだろｗｗｗまだ生きていた人を巻き込んでるからｗｗｗ）」

シャイナはエツィオの翼の中でニヤけるような表情を出しながら羽を擦るように何度も撫でて、心の中ではアンゲルスに突っ込みながら心の中でボソッと吐く。

アンゲルスは背を低くしてエツィオの横顔にアンゲルスの左頬を擦るようにして、フードの頭部から首筋まで左手でなぞるように動かした後、エツィオに向けて幸せ溢れる笑みの表情を出しながら閉じられた口元の隙間から白い吐息を漏れ出ながら言う。

エツィオ「まっ、取り敢えずご苦労さん。ご褒美だ、アンゲルス。？ｕｎａ ｂｅｌｌａ ｒｉｃｏｍｐｅｎｓａ ｄａ ｍｅ＾＾」

エツィオは一息を付いた後顔に寄せているアンゲルスの左頬に向けてチュッと軽い口付けをし、アンゲルスはエツィオにご褒美のキスをされて顔面を赤くしながら【イヤァン♪…可愛い坊や（ダーリン）にキスされちゃったわん。（＊´、＊）】と言った後…

アンゲルスの身体を眩しいぐらいの白い光に包まれて天まで遡り、ある程度時が立って白い光が止んだ後元の氷魔銃へと戻り、エツィ

オの右手の中へと収まった。

エツィオ「さて…シャイナ、帰るか。＾＾」

右手の中に握り締めている氷魔銃（アンゲルス）を身体の中に入れた後、エツィオは子供のように笑顔溢れる表情を出しシャイナに向けて顔だけ振り向きながら言う。

シャイナは朝日をバックに笑顔全快で言ってくるエツィオを見て、一瞬少し両頬が赤みになってキョトンと惚ける表情を出した後…

シャイナ「う…うん。んじゃ、一端神界に報告しようか。（えっ…何コレ何これ何コレ何これ！？！？？何時から私はエツィオにデレが入った！？？！！）」

シャイナは身体の所々からヤカンの湯煙のようなモノがピューピュー♪と出て、赤くなった顔面を両手で隠すような仕草を取りながら、心の中で恥心と戸惑いにダブルパンチを受けながら脳内で迷走する。

エツィオは「おっし、んじゃアサシンの紋章に入ってアルタイルに報告していこうか。」と言った後、シャイナの身体に巻き付いていた翼を解いてお姫様抱っこのようにシャイナをだき抱え直した後…

バサッ！

エツィオ「祭（クライマックス）にしては安っぽかったなｗｗｗんじゃ、アデュー（￣▽￣）ノ」

背中の翼を大きく広げて一羽ばたきしただけで遥か上空へと上昇し、エツィオはカメラ目線に向けてピースサインをし目をキラーン☆と一瞬輝かせた後、一瞬の内に今いる氷河期の風景の場所から飛び去っていった。

第六十九曲　一旦マシャフへ、ノリ★ノリ帰還ＤＥＡＴＨ♪

―朝　スペイン　マドリード　中心都市ビル屋上上空辺り―

エツィオ「静かだねぇ…朝はこんなモンなんだな。」

シャイナを抱き抱えながら上空を飛び続けてマドリードへと着いた後、アサシンの紋章からの魔力を感じとりながら魔力が漏れ出るビル屋上周囲を旋回するように飛ぶ。

シャイナ「静かと言うよりも一昨日と昨日の“無差別無双騒動”で人口減ったから“ガランガラァンにでもなってんじゃないの？？ｗｗ」

エツィオ「えっ！？マジΣ（ Д| ）…まっ、いいか。人はまた次々と“ほっとけば勝手に増える”からＳＡ★」

シャイナの半分冗談話と現実的話が混ざった言葉をエツィオに言った後、エツィオはやや苦い表情を出しながらシャイナに言いつつ漆黒の瞳から金色の鷹眼（イーグルアイ）へと変わって、一点の魔力に集中した箇所を見て神界入り口となるアサシンの紋章を見つける。

シャイナ「でも今のところは結婚しない人間達が“増えているんだよね。”子を産むと日々が地獄になり果てる”とか、“自由時間が無くなる”とか…特に私のような年代が多いのよ。」

エツィオ「気持ちは解らんでもないな。確かに結婚するとなると“今までの自分の自由時間を奪う”し、何より“子が立派に巣立つまで日々雛鳥の命を守らなくてはならない”からなぁ～♪でも、」

シャイナ「？」

エツィオはアサシンの紋章の魔力が漏れ出ているビル屋上へと翼を動かした後、ゆっくりと背中の翼を広げながら屋上の床へと降り立つ。

エツィオ「結ばれた二人の時にしか出来ないことと、二人と一緒にいることで新たなる出来事を日々発見出来るからさ、一人の時よりも数倍楽しくなる。“末永く生きていく”ことがね。＾＾」

ビル屋上へと両足を着けて抱き抱えていたシャイナを地上へと下ろした後、背中の翼を仕舞ってアサシンの紋章が刻まれている屋上ビルの壁へと二人は一緒に歩み出す。

シャイナ「ふーん、（・ε・）エツィオは昔“結婚”したことがあるの??」

ビル屋上の壁に刻まれたアサシンの紋章に近づきながら、シャイナはエツィオに向けて過去の出来事を質問する。

質問されたエツィオは「経験者だからな＾＾」と言ってシャイナに向けて顔だけを動かして紋章に向けて左手を前に翳した時、刻まれた紋章から息を吹き返すように紋章全体が青白い光に包まれる。

エツィオ「勿論あるさ。８００年前以上の話だけど、魔帝との戦いで永い眠りに浸くまで、この現世で楽しい一時を過ごしていたんだ。“大切な人”と一緒にね…」

シャイナ「…そう。（“大切な人”かぁ。エツィオにも私のように重い過去があったんだろうね。）」

そう言った後エツィオは穏やかな表情で頭部のローブ部分を深く被り直し、脳裏に浮かぶ思い出の残像を見ながら顔を前へと向け直し、アサシンの紋章に向けて引き続き魔力を注ぐ。

エツィオ「（あの頃は本当に幸せだった。人と触れ合って互いに笑いあって怒ったり、一日一日が本当に楽しかった。“あの時が来るまで”は…な……。）」

シャイナは一瞬エツィオの表情が曇っていた所を見逃さず、そっとエツィオの身体に寄り添うように立つ。

シャイナ「ごめん、エツィオ。変なこと聞いちゃって。」

シャイナが表情を曇らせながら俯いているエツィオを見てはっとした後、申し訳ない表情を出しながらエツィオに言う。

エツィオ「！…いや、大丈夫だ。気にしてなんかないぜ。」

エツィオは少し数秒間だけ驚く表情を出してぎゅっと右腕を抱きしめているシャイナを見た後、いつものように女性を惚れ倒しそうな笑み溢れる伊達男（イケメンフェイス）を出しながら、そっとシャイナ右腰辺りに右手を当ててぐっと引き寄せる。

シャイナ「アハハ…何だかシリアスな会話になっちゃったなぁ～♪この小説を書いている作者らしくないＮＥ★」

二人は互いの身体を寄り添うように立つ“恋人”のような仕草を取りながら、シャイナはクスッと苦笑いするように表情を柔らかく綻ぶ。

エツィオ「だな。」（'～`）「さぞや作者は“現実（リアル）でダリィ表情”を出しながら“けーたいのぼたん”をカチカチと動かしてんだろぉなｗｗｗ」

シャイナ「グフッｗｗｗそれを“代役”する俺らって一体ｗｗｗまあいいや。さぁ、逝くか＾＾」

所々“作者の現実（リアル）心境会話”が、ぶっちゃけ出るように二人は言いながら笑う表情を出す。

エツィオが「気にしたら負けＤＡ★」とシャイナに向けて子供のように笑った後、お互いの全身がアサシンの紋章の青白い光に包まれて光が止んだ途端、二人の姿は現世から消えていった。

…

……

……

―神界　マシャフ　アサシン教団砦　大導師の間―

カダール「あっ、戻ってきたかな？？エツィオさんと人間の…シャイナさんでしたか。」

アルタイル「ふっ…私が頼んだ使命を果たすのに、時が早いなエツィオ。」

カダールが両手に乗せていた分厚い書類を運んでいた時、大導師の間にあるアサシンの紋章から青白い光が迸って書斎へ向かおうとしていた足が自然に止まる。

アルタイルは迸る光を見ながら大導師の間にある椅子に片足を組んで机に左肘を乗せて左手を顎に乗せながら座り、口元を吊り上げて彼なりに微笑む表情を出しながら二人の姿が神界に現れるのを見届ける。

アルタイル「安全と平和を、兄弟（エツィオ）。首尾良く我らの秘宝を取り戻したか？」

エツィオ「勿論“秘宝を悪意に使った人間を殺傷”するまでさっさと奪い返したさ、アルタイル。」

光が止んで二人の姿が紋章の中心に現れた時、エツィオは身体を左に向き左足を上げる。

右腕を斜め上に上げて頭部辺りに右手をちょこんと魅せるように立てる仕草をしており、シャイナはエツィオと逆版で右向きでｒｙ

（省略）…二人は手と手を片方づつ繋ぎながらノリ☆ノリなテンポで登場した。

シャイナ「ちょっｗｗｗ作者“同じ文章になるからって…執筆中に面倒になってわざと省略”しやがったｗｗｗだ　か　ら　作　者　い　い　加　減　頑　張　れ　よ　ｗｗｗ」

エツィオ「まーまー、シャイナ「（＾。＾；）ある程度小説本文を“読みやすく縮める”ためだからそこら辺は気にしないでくれＹＯ★」

二人のノリ☆ノリィィンなポーズを解いた後、シャイナは“カメラ目線”に向けて口を八の字にしながらブ右人差し指を何度も指してブーイングをする仕草を取りながら言う。

エツィオはシャイナの背後で右から左端まで両腕を水平に伸ばして左足をくの字に曲げ、“スケートのようにチュルゥゥゥーン♪と滑りながら”“ニカメ”、“三カメ”という順に左人差し指を指しながらシャイナに向けて突っ込む言動を吐く。

アルタイル「其処ら辺は作者の気配りだからこそ“間に合わせの短縮文章表現”を出している。貴様も第三者の視線から通して一度最初から見てみると良い。（第零曲前書き参照）」

アルタイルの姿はいつの間にか大導師の間にある黒い柱の上にいて、左頬に左手で当てて片足をくの字に曲げながら横向きに寝ている（スタイリッシュお釈迦寝入りポーズ）をしながら、口元を吊り上げて“キメの四カメ”に向けた後、軽く片目を一瞬閉じてキラリーン☆と瞳から光が輝いてウィンクした直後…

ドゥフゥゥゥゥン♪と黒い柱の両隅の下からライブ会場のような“銀色の花火”が噴出して、どこからか会場内にいた観客の大歓声が全体に響き渡り、大導師の間が一時“チート達によるライブ劇場”になる。

カダール「うわぁぁぁぁ。僕も僕も！混ざってい「止めろ、カダール。あんな“阿呆集団の輪”の中に入るな。“感染”するぞ」えぇぇぇぇー（´Д`；）」

カダールも両脇を上下に動かして少年のようにワクワクする表情を出しながら混ざろうとしたが、いつの間にか大導師の間にいた兄のマリクに右肩を掴まれて無理矢理止められる。

カダール「何でだよ、兄さん！（、皿´）アルタイル大導師含めて皆あんなに楽しそうにしているのに！！」

マリク「本当に止めてくれ…あ…兄として弟（カダール）に本気で言っておくが、あんな連中に深く関わるとお前の中の純粋な本質が“ドス黒く汚される”んだぞ！？分かるか！？俺がこんなに必死になって言ってい

る“ワケ”が！！」

マリクがカダールの顔方向に向けて身体を向かわせた後、カダールの瞳に映る“シュールな光景”を見せないように被って、マリクは額から汗を出しながら必死で弟（カダール）に説得する。

カダール「え…ちょ…に…兄さん？？（・・；）」

カダールは他の兄弟達には見せないほどの必死に説得する兄（マリク）の形相を見て、両頬を膨らませて怒る表情からオドオドと戸惑う表情に変わって、ただ必死な兄の台詞を黙って聞くしかなかった。

マリク「いいな！？絶対に“あの連中”の輪の中に入るなよ！？これ以上…」

―犠牲者（弟含めて）を増やしてたまるかぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！―

第七十曲　ＴＨＥ★チークリ劇場ですよ♪

―神界　マシャフ　アサシン教団砦内部　大導師の間―

シャイナ「連★載　七！」

エツィオ「ジュゥゥゥゥゥーッ！！」

シャイナとエツィオが“カメラ目線”に向けて互いの両頬をくっ付けて、テンション高く言いながら観光旅行先で記念撮影でもするかのようにお互いピースサインを取る。

アルタイル「回だ。我らを見届けてきた閲覧者（にんげんども）…ご苦労。」

二人の背後からアルタイルが二人の頭部部分から“荒ぶる鷹のポーズ”を取りながら、無表情のままで上へと上がってくるように登場してきて、二人は交互に腕を絡むように組んだ後かっこ良くポーズを決めた直後…

パンパカパーン♪パラパパラパパパーン♪♪パパパパーン♪♪♪

何処からか吹奏楽によるトランペットとドラム等の楽器が鳴って、ノリノリの三人組の両サイドから“クラッカーによる紙吹雪”が宙に舞って背後の黒い柱をバックに中央にいる三人組に向けてスポットライトを照らしていった。

シャイナ「やった！まさかの７０回目だよ！？良く執筆し続けるなぁ、俺らの作者はｗｗｗ」

エツィオ「んじゃ、次は１００回目でこのような“間が出来た”時に、もうちょい“派手なポーズ”を考えないとなぁ。いそいそ（ε・）（・ω・）（ﾟ∀）」

シャイナはガッツポーズを取りながら手応え有りと、テンション良く身体を駒のように何度も回転する。

エツィオはいつの間にか取り出していたのか伊達眼鏡を両目部分に付け、左手の平に開かれた小さなメモ帳にサラサラと何かを鷹の羽根先に付いたペンを滑らせる。

アルタイル「フッ…時にはこのような“遊び”も悪くない。いつものような固くな日々を送っているから、このような“刺激”が無いので、欠伸が出るほど詰まらぬ。」

三人組による超ノリ★ノリポーズに“自ら参加した”アルタイルは、無表情ながらも今のポーズ（荒ぶる鷹のポーズ）を決めながらスポットライトの光に照らされて気分良く両目を閉じながら、彼なりの穏やかな笑みで僅かに空いていた口元から息を洩らす。

マリク「そりゃ、俺らニ万の時を生きればあり得…てか、大導師の間が現世でいう“●塚劇場”になってる…。」

マリクは神聖の大導師の間が●塚劇場になっていることで呆れた表情を隠すように、右手で表面を覆い体勢をしゃがんだままでドヨーンと雨でも射たれているように落ち込む。

カダール「（あんなに楽しそうなのに、兄さん何で??）に…兄さん??」

カダールが雨に射たれるように落ち込んでいる兄（マリクの姿を見て、）オロオロとしながら両腕をマリクの身体に触れる手前でパタパタと上下に動かす。

マリク「あ…あの時の“馬鹿タイルによる恥デジャブ”が……お…俺の頭の……な……中に……ガクッｏｒｚ」

カダール「うわわわわわわわっ!?（（（（（（（（（（゜Д゜；）

）に…兄さぁぁぁぁぁぁぁん！！！！」

遂にマリクはしゃがみ状態から臀が入った四つ這え状態になり、黒い雨を全身に打たれながら酷く落ち込む仕草を取る。

カダールは急に落ち込んだ兄（マリク）の姿を見て直ぐに駆け寄った後、両膝を曲げて膝を床に着けて両脇に手を入れて顔だけを上に上げながら当てられるスポットライトと共に、白い天井へと心の叫びを“後ろにいるシュールなチート達による劇団”のように叫び続けた。

…

……

……

アルタイル「では、本題に戻るとしよう。エツィオ、我々の忘れてきた秘宝を…」

上記の“おふざけタイムは此処までだ”という風に、アルタイルは無表情のまま大導師の間にある椅子に座って左肘を机に置き顎下に左手の平に乗せながら、“スタイリッシュやらないか座り”でエツィオに向けて右腕を前へと伸ばし、右手を軽く何度も後ろへと寄せるような仕草を取る。

マリクとカダールはアルタイルが座る大導師の間の席の両脇に立ち

ながら、エツィオとシャイナに向けて使命の成果を聞くようにそっと待つ。

エツィオ「頼まれたモンを取り返して来たＺＥ★ほらよっ！」

エツィオは身体の中に右手を入れて中から奪還してきた秘宝を取り出した後、スタイリッシュやらないか座りをしているアルタイルに向けてポイッと、ボールのように投げ渡す。

アルタイル「確かに頂戴した。…む？中身の魔力が“何もない”ようだが？？」

アルタイルは投げつけられた秘宝を右手だけでナイスキャッチし握った後、秘宝からの“禍々しい何か”が無いような感覚を受けて、アルタイルは眉一つ軽く動した後エツィオに向けてやや戸惑う言動が混じった声で言う。

エツィオ「あー、それはなぁ…“カクカクシカジカデウンチキパッペー”なことでよぉ…そんで“ポケポカポンポコココポッペペェィ”…（以下省略）」

シャイナ「（ちょっｗｗｗまためんどくさくなって“テキトー”翻訳になってるしｗｗｗってか…）」

シャイナはエツィオの地上であったことをアルタイルに説明する文が“前回の出来事の説明を小説文の都合により思いっきり省かれている”ように言っているのを聞いて、思わず心の中でブフゥと口から飲み物を吐き出すぐらいに吹く。

シャイナ「（こんな“テキトー過ぎる翻訳”をマジメに聞いているアルタイル達って何ｗｗｗ）」

そんな“テキトー翻訳”をアルタイル達は黙って真面目顔で聞きながら、所々顎いて最後までエツィオの現世であった出来事の話を真剣に聞く。

アルタイル「…そうか、現世ではそのようなことがあったから“秘宝の中身の存在”そのものを消し飛ばしたのか…。」

エツィオ「余りにも予想外な事態になってなぁｗｗｗ秘宝の卵が完全に目覚めて人間に取り憑くし、後もう少しで折角取り戻した国をもう一度“特異界”に再び戻っちまうぐらい成り掛けたしなｗｗｗ」

シャイナ「えっ！？それは一体どういうこｒｙ」

エツィオの半分おちゃらけた表情を出し両腕を軽く上へと上げて両手の平をプラプラと動かしながら、現世であった出来事を半分はお

ふざけ状態だが残り半分は真面目面でアルタイルに言う。シャイナはエツィオが言った言葉を聞いて、少し信じられない表情を出しながらエツィオに向けて見る。

エツィオ「こりゃやべぇなと思ったので、ついつい俺の本来の姿“魔神化”しちまったが…スマン、マジ悪りぃ。」

エツィオは申し訳ない表情を出して、両手を合わせて顔面辺りに深々く謝るように背を曲げながら、アルタイルに謝罪する。

アルタイル「むぅ…仕方ないな…一度“死滅”した秘宝の魂が再生するまでまた“１００年後”になる。そこまで首を長くして待つには正に合わぬ。なので…」

アルタイルはスクッと椅子から立ち上がって右手の平の中にある秘宝を一瞬見た後、口元を吊り上げて何かを企むようにエツィオに向けて微笑む表情を出した後…

アルタイル「我が地下牢に丁度良い“暗殺魔具の元である素体”がある。其奴等を“半殺し”した後、奪還してきた秘宝の外郭を削って…」

エツィオ「まさか（・―・；）アルタイル…」

エツィオは秘宝を見詰めているアルタイルの“ドス黒い微笑みの表情”を見て、ヨヨヨと少し後退りするようにやや後ろへと苦笑いしながら後退する。

アルタイル「少し行って来る。マリク、私が来るまでエツィオと女に“茶”でも入れて接待してくれないか？」

マリク「分かった。」

マリクがそう言った後、アルタイルの全身に白い鷹の翼の羽根が軽々と数枚宙に舞って、一瞬の内に大導師の間から消える。

シャイナ「あれ？アルタイルは？？それに何か“悪人面のように笑っていた”けどｗｗｗ」

マリク「いや、“いつも通り”だ。奴の地下牢は神界で現世で悪事をこなした神々達の“処刑場（キッチンルーム）”だからな。多分叫び声位生々しく聞こえるだろう。」

シャイナ「え…ちょ……処刑場が調理室ってｗｗｗ」

シャイナが口をあんぐりと上げながら呆然するように立ち尽くして

ながら、マリクは普通の表情で「茶を入れてくる。」と言って大導師の間からスタスタと出ていく。

カダール「ということは…エツィオさん！武器ですよ！！新しい暗殺魔具をアルタイル大導師が作りに行ったんだ！！」

エツィオ「えっ、マジ！？やったぁぁぁ！！！！／（＾Ｏ＾）／」

カダールはアルタイルの行動を見て話を盛り上げるようにエツィオに言った後、エツィオは和気藹々な表情を出しながら軽いガッツポーズを上に上げて、両足をくの字に曲げながら軽く跳躍した。

シャイナ「（処刑場が調理し…か…家庭内のゆ…唯一の…ガクッ……）」

いまだに驚きの表情を解けないまま、彼らに付いてこれていないシャイナを置き去りにしたまま…で……

第七十一曲　鬼畜タイルによる三分クッキング

―神界　マシャフ　アサシン教団砦内部　地下牢に続く階段―

カツン…カツン……

外部の光が遮られて階段の隅に灯されている蝋燭の炎の光で薄暗く、一段一段降りる度にアルタイルの乾いたブーツの音が鳴り響く。

右手には奪還してきた秘宝を握りしめながら螺旋状の階段を長く降りた後、目の前映る鉄製の大きな扉が立ちはだかる。扉には“血のような生しい赤い呪文文字”でこう書かれていた。

―Ein Gef?ngnis von Gott, der ein Verbrechen begingSie m?sse nicht hineingehen ander als der K?nig der G?tter（堕ちた神々の牢獄大導師以外は立ち入りを禁ずる。）―

アルタイルは無表情のまま左腕を扉の前に翳した直後、目の前の扉が軋む音を立てながらゆっくりと扉が開いていき、完全に扉が開い

た直後…

ーアサシン教団砦内部　地下牢ー

？「ゴアァァァァァァァァァァ！！！！」

ガシャンッと牢獄内部は暗闇に満ちていたが何かの存在が暗闇の中で鎖の音を何度も立てて、出口部分に立つアルタイルに向けて憎悪の声を放つ。

アルタイルは牢獄内部に入って歩きながら左手の親指の骨を軽く鳴らすように弾いた直後、小さな丸い球体のような光が現れて、小さな光が一つ一つが大きな明かりを灯し暗闇だった牢獄内部が光に満ちて明らかになる。

？「ガァッ！！！グォォォォォォォォォォン！！！！」

アルタイルの前方数メートル先には人型のようで完全な人ではない存在…“奇形なるモノ”が黒い鎖で何度も全身に絡まり、身体の至るところには天神（アルタイル）の攻撃を受けたのか斬り傷が多く刻まれていた。

傷口から血を床に滴り落ちながら張り付け状態で向かってくるアルタイルに向けて何度も吠え、身に縛っている鎖を何度も身体を使っ

て前やら後ろやら鎖の拘束を解こうと抵抗する。

？「グアァッ！！！ゴハァァァァァァァ！！！」

アルタイル「Ｄｅｒ　Ｖｅｒｌｉｅｒｅｒ　ｉｓｔ　ｂｉｔｔｅ　ｓｔｉｌｌ（黙れ。）」

バキリッと鎖で縛り付けている“奇形なるモノ”の顔面に目掛けてドイツ語を吐きながら丸められた左拳を陥没するぐらいまで殴り込み、苦痛の声と共に口内の牙が二三本欠けて口内に開かれた血と一緒に床へと落ちる。

？「ガッ…ガアァァァァァ……」

アルタイル「さて…」

鎖で縛り付けていた“奇形なるモノ”を殴り一発で黙らせたアルタイルは拳に付着した血を腕で振るっただけで払った後、壁に掛けられていた白いエプロンのような物を手に掛けて身体に羽織いきちんとリボン結びで縛って両手に半透明の手袋を着ける。

そして調理台に置かれていた鉈や鋸等の刃物を磨ぐように十分擦って、右手に手にしていた秘宝を台の隅辺りに置いて調理の準備を整

う為に数分整理した後…

アルタイル「待たせたな…今から処刑を始める。」

右手に十分磨いだ鉈を握りながら、“カメラ目線”に向けて“無表情のままドス黒い微笑みが込められた超危ない表情”とエプロンの左胸元にプリントされていた“暗殺一筋”を見せた後、壁に張り付けている“奇形なるモノ”に向けて歩み出した。

…

……

……

―同時刻　アサシン教団砦内部　大導師の間―

マリク「さぁ、今度は現世で作られている手製の“珈琲”というのを作ってみた。試しに飲んでみてくれ。“一度でも吐き出したら血を完全に抜き取るまで殺す”からな。」

カチャッとマリクの魔力で召喚した白いテーブルの上に五人分の珈琲が入った湯気立つ白いカップを置いて“一部問題発言”を吐いた後、マリクは既に座っているシャイナとエツィオにいつものようにドカッと椅子の上へと腰掛ける。

カダール「あと僕からのお手製“甘菓子”を皆さんに作ってきました。是非シャイナさんにも召し上がってください！！」

カダールは兄（マリク）とは逆に笑顔全快の表情を出しながらテーブルの上に白い皿の上に盛った様々の形をした狐色の固形物（スコーンのようなモノ）をカタンと乗せた後、行儀よく動作を取りながら椅子に腰掛ける。

シャイナ「（今何か一部ヤバ気な発言を聞きましたがｗｗｗまぁいいや）うわぁぁぁ（・ｏ・）美味しそぉぉぉぉぉ。んじゃ、早速…」

エツィオ「ＹＥＡＡＡＲ！！！！頂きマァァァァァス！！！！＼（＾∀＾）／」

テーブルの上に置かれたアルシャイフ兄弟の菓子を二人は手に取って、幸せな表情を出しながら口の中に入れようとした時…

？「グギャァァァァァァァァァァァ！！！！」

今いる砦の最上階である大導師の間まで聞こえる“人間ならぬ人外の悲鳴”が遥か下である地下牢から響き渡って、窓ガラスを声が響くたびにカタカタと震えるように軋み、パラパラと天井から少しの砂埃が至る所に落下する。

シャイナ「え゛!?何コレ??誰っすか??こんな平和なひと時を邪魔してくる“お馬鹿”はｗｗｗ」

尋常じゃない声を聞いたシャイナは“普通の人間なら驚きと恐怖が混じった声”を出す場面だったが、たった数日でエツィオと共にいただけで“どんな相手&場面だろうともはや普通”だと“小説の都合よく完全に慣れてしまった”らしく…

シャイナは無表情な表情を出しながら虚ろな瞳で天井を見上げるように顔を上げて、右手に手にしていたマリク特製のコーヒーが入ったカップを口元に寄せてズズッと音を立てな飲みながら言う。

エツィオ「おーおー、コレは良い“嘆きの歌声”だとよｗｗｗどんな武器を作ってくれるのか楽しみだなぁぁ♪」

エツィオは階下から聞こえてくる処刑されているモノの悲鳴の声を聞いて、心地よい表情を出しながら黙々とカダールお手製菓子を口の中に入れて、新たな暗殺魔具の姿を作ってくれるのかワクワクする。

マリク「ふぅ…“奴”なりの処刑を始めたな。まぁ、“いつものこと”だ。確か奴が裁いた相手は…」

カダール「“ディヤウス”だよ兄さん!!前々は“空天”と呼ばれていたらしいけど、今は神界にすまう僕ら“人間”に対して何故か牙を向いて、破壊活動をしでかした“堕ちた神”なんだ。だから…」

地下からの悲鳴が今いる大導師の間へと響き渡りながらカダールは淡々と兄(マリク)に言い、シャイナとエツィオはフツーに菓子を楽しみながら食べて珈琲をズズッと音を立てながら飲んでいく。

マリク「ああ“ディヤウス”か。“広きモノ”と言われていたかつての空天が“悪魔”へと堕落するとはな。まぁ、俺ら“天神”には関係ない話だ。」

マリクはカダールが作った菓子を少し齧って風味を味わいながら喋った後、窓から入ってきた白い小鳥達に菓子の細かくなった粉末部分を床にばら撒いて白い小鳥達に餌を与える。

エツィオ「“天神”は他の神々さえ何もかも超えた“特級種族”だからな。万物の頂点は“天使”ではなく“天神”。人間達が書かれた偽りの聖書にはそう書かれていないし…。」

カダール「仕方ないですよ、エツィオさん。８００年前の出来事以来から現世の人間達は僕らを“悪魔”として勝手に書かれてしまっていますし…(第三十八曲参照)」

シャイナ「要するに人間っていうのは“勝手な生き物”なのよ。現代世界も自分の都合の良いように踊らされているし、時には私の国民の何処でもいる幼稚並みの坊ちゃま同士（政治家同士）の口喧嘩、または力を見せ付けるために兵器を振りかざして好き勝手に振りかざす…ホ　ン　ト　混沌並みな“世界”へと成っているよねぇ～ｗｗ」

エツィオとカダールが苦笑いしながら話す中、シャイナが二次元と三次元に起こっている現代の世界の心境を“リアル”に言いながら珈琲を飲み干し、カタンと白いカップをテーブルの上に置く。

マリク「お前が住まう現世は大変なんだな。確かお前が住まう世界には王（首相，大統領）という存在が複数いるらしいが？」

エツィオ「いっそ、人間達を束ねる存在を“一人”にすりゃいいのによぉ。そうすりゃ今いる“神界”のように“くだらねぇ争い事”なんて“一切起こさねぇ”のにな。」

シャイナ「そう言ってもねぇ。人間は人間なりにわけわかんねぇ“勝手な都合”があるんだよねぇ。その勝手な都合が言い合いが長く続く羽目になっているんだよなぁ。「（´∀｀）ｒ」

マリクとエツィオが交互に言いながら彼らなりの提案をシャイナに向けて言うが、シャイナはそんなこと言ってもなぁと両手をプラプラと動かしながらお手上げする仕草を取った直後…

アルタイル「待たせたな…。」

ドンッと大導師の間の中央の紋章から、舞い上がる複数の白い鷹の羽と共に赤白い光の中からアルタイルが現れる。

エツィオ「おっ！（・・）来た来た♪新しい武器武器武器♪♪」

マリク「ん?随分と早く製作して来たな、アルタイル。」

カダール「あっ！…お帰りなさい、アルタイル大導師。」

現れたアルタイルを見たエツィオとナリクとカダールは、三人とも椅子に座ったまま顔を少し下ろして数秒お辞儀するように仕草を取る。が…

シャイナ「お…お帰りナサイ?（おいｗｗｗ何あのケチャップ塗れの変な武器ｗｗｗ）」

シャイナだけはほかの三人組と違い表情をぎょっとさせて、アルタイルが右手に持つ“Ｓ字型に湾曲した両手剣”が血まみれになっているのを心の中でオブゥと吹きながら見続けていた。

第七十ニ曲　強制的に言う。今から俺の使役（ペット）となれ（＾Д＾）？

―神界　マシャフ　アサシン教団砦内部　大導師の間―

シャイナ「ちょっｗｗｗ何すかあのＰＳ●に出てくる“キャリ●インルゥカー”のようなケチャップ塗れの両手剣はｗｗｗ」

シャイナの視点から見るとアルタイルの右手に握る武器全体が、刀身含めて赤いケチャップでもぶっ掛けたように鮮血に染まり、ポタポタと赤い血が床に滴り落ちる。

アルタイル「私が“半殺し”した悪魔“ディヤウスの爪”と奪還してきてくれた秘宝の外郭を削って魔力を底上げにした“双空剣アスタ・ディウス”だ。お前なりに“可愛がってくれ”。」

アルタイルは口元を吊り上げながらエツィオに向けて微笑む表情を出しながら、双空剣を扇風機のように振り回して武器に付いていた血を全て振り回して払いった後、エツィオに向けて双空剣を投げる。

飛び散った血は床や壁に付着する数秒前に、一瞬の内に飛び散った血が“赤い薔薇の花弁”へと変わって、床に滴るように溜まってい

た血痕が一瞬の内に“蒸発”するように消える。

エツィオ「来た♪来た♪♪」

ガシンッとエツィオの数メートル先の前に双空剣が縦一筋に綺麗な形で刀身先から床に突き刺さり、突き刺さった暗殺魔具を見届けた後エツィオ達は座っていた椅子から立ち上がる。

刀身から握り部分までが青一色で塗られており所々呪文のような文が刻まれていて、エツィオは床に刺さった双空剣に向けて歩き、ワクワクと子供のように好奇心溢れた表情を出しながら握り部分に右手を掴んだ直後…

アスタ・ディウス（省略してディヤウス）「グガァァァァァァァァァ！！！！」

エツィオ「おっ？」

床に突き刺さった上部分の刀身が白灰色の刃物状トサカ頭に、表情を側面に被う鋼の仮面のようなモノ（ポケ●ンの●ルキアの頭部辺りのようなモノ）が厳重に隠すように被っていて、かつての空天と呼ばれた神が剣先から本来の姿を頭部だけで這い出るように出てくる。

ディヤウス「！！！！貴様ァァァァァァァァ！！！！」

アルタイル「むっ。」

ディヤウスは正面の口を開いて口内の牙を剥き出しにしながら背後にいるアルタイルに向けて吠え、ズルズルと蒼と灰色が混じった上半身部分まで這い出るように出てきた後…

ジャキッ

頭部のトサカ部分の先端からS字形の刃物を出し、両腕が青い両腕がジェット機の翼のように変化してバキリッと翼先端にある鳥のような爪の音を立てる。

ディヤウス「殺スッ！！！！貴様ダケハ殺スゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！！」

怒りに満ちた表情を出しているかのようにジェット機のような左翼の腕を、アルタイルに向けて殴り付けるように振りかざそうとした時…

エツィオ「まぁ、待てよ“トサカ頭の特級悪魔(ペット)”♪今日から俺の使

役だからＳＡ…」

ディヤウス「何ィ！？！！？」

ガシリッとディヤウスはアルタイルに向けて振りかざそうとしていた左腕がピクリとも動かないのを覚えて、牙を剥き出しにしながら長い首を後ろへと振り返った後…

エツィオ「お前の力を匠に操る“主人（おれ）”の顔を見ろや（＾Ｏ＾＃）」

ディヤウスの左腕にエツィオの左手が握られていて、握られている部分からミシミシと筋肉が軋む音を立てながら笑顔全快でディヤウスを見詰めていた後…

ディヤウス「グォォォッ！！？？！」

ディヤウスのエツィオよりもデカイ巨大な上半身が握っていたエツィオの左手を後ろに引っ張られただけで“巨大な上半身が軽々と宇へ宙へと上がって”、エツィオは振りかざそうとしていたディヤウスの左腕を左手だけで掴んだまま半周するようにディヤウスの顔面から床へと叩き付ける。

ディヤウス「グヌォッ！？？！？？キ…貴様ァ…何者ダァァァァァ

ァ！！？？！！」

ディヤウスは顔面から叩き付けられて表面を被っていた白灰色の仮面のような隙間の部分から鼻血を出しながら、痛みを堪えるようにグッと顔だけを上げる。

ディヤウスを片手だけで投げた倒した左手を右手と一緒にパンパンと軽く叩くニタニタ顔の表情を出すエツィオを見た後、口内の牙を剥き出しにしながら警戒するように見詰める。

エツィオ「何者？…簡単なクエツチョォォォォンだな。アンッアァーは“お前の主人”そして…！！」

バサァッと左肩に着いていたマントを左腕だけで上げるように払った時、“カメラ目線”に向けてマントを翼のように広げて身体を右斜めへと胸部を魅せるように傾ける。

右腕を斜め前へと伸ばして右手首を軽く後ろへと何度も下げながら、片目を一瞬軽く閉じてラリーン☆とウィンクするように輝かせた直後…

エツィオ「俺の“使役（ペット）”ＤＡ★」

ディヤウス「フザケルナ小僧ォォォォォォ！！！！誰ガコンナ貧弱ナ餓鬼ゴトキニィィィィィィ…！！！！」

ディヤウスは激昂して両腕のジェット機のような翼を一羽ばたきで宙へと上がった後、下部の武器部分が残りの下半身に成って完全な本来のディヤウスの姿に戻る。

―誇り高き堕ちた空ノ王者　ディヤウス―

ディヤウス「グバァァァァァァァァ！！！！」

ディヤウスは激昂の声を上げながら地上にいるエツィオに向けて見下すように両腕を水平に広げた後、勢い良く高速にエツィオに向けて突進するようにダイブする。

アルタイル「仕方無いな…おぃ、マリク…」

マリク「ふぅ…やっぱりこうなる展開だと分かっていたよ。」

アルタイルはマリクに向けて顔だけ動かし、無表情のまま何かを言おうとしたが、マリクは呆れた素振りで溜め息をつきながら顎だけで促しアルタイルと共に片腕を交戦直前のエツィオとディヤウスに向けて前へと伸ばし右手の平を広げるように翳した後…

エツィオ「おっ♪（・・）」

ディヤウス「！！？？！ナ…何ダ！！？？！！」

エツィオと突撃してくるディヤウスの床から赤い線なようなモノが四角形になるように伸ばしていき、引かれた四角形の線から赤い光が天まで迸り一人と一匹を呑み込む。

シャイナ「えっ！？ちょっｗｗｗ一体何をｗｗｗえ…エツィオは？？」

シャイナが驚く間に床に引かれていた赤い線の光が止んだ後、エツィオとディヤウスの姿が消えているのを見て顔だけ右往左往動かす仕草をする。

カダール「アルタイル大導師と兄さんは“転送結界”を張ったんです。エツィオさんは今…」

マリク「俺とアルタイルが作り出した“仮想亜空間”の中で特級悪魔（ディヤウス）と交渉（たたかう）している。まっ、奴のことだから問題ないだろう。」

カダールが何が起こったのか分からないシャイナに説明した後、マ

リクは翳した右腕を下ろしてドカッと椅子に座る。

マリク「奴が“交渉完了”するまで茶でも飲むとするか。アルタイル、お前の分も残しておいたぞ。」

カチャンとマリクは椅子に座りながらテーブル上に置いてあったティーポットを握って、中に入っていた残りの珈琲を空のカップの中に入れ注ぐ。

アルタイル「すまない、マリク。」

アルタイルは無表情に普通な言動を吐きながらテーブルへと歩いて来て、椅子に座った後彼なりに口元を吊り上げて微笑む表情を出しながら、注いでくれた珈琲入りのカップを飲み始める。

カダール「交渉と言っても“スグに終わる”と思いますよ。シャイナさんも一緒に飲みましょうか（＾＾）」

カダールは笑顔満開の表情を出しながら呆然と立ち尽くすシャイナに言った後、椅子に座るようにシャイナに向かって手招きする。

シャイナ「…まぁ、いいや。エツィオが戻ってくるまで私もティータイムしているか。（＾Ｏ＾）おかわり！！」

シャイナは呆ける表情を出して少し間を開けた後、静かに茶を楽しむアルタイル達に向けて振り返って椅子に座り、空になったカップを中央に置いた後、「神界の珈琲も美味いだろう。人間の女？」とマリクが言って、引き続き一人を除いた茶会を楽しんだ。

第七十三曲　黙らせる＝全殺し

―亜空結界内部―

エツィオ「んしょっ！」

エツィオはアルタイルとマリクの力で亜空間へと飛ばされて数秒宙に浮かんだ後、重力に従って気泡が所々宙に漂う赤い空から地上へと落ちる。

両足を着けた後バシャッと水が跳ね上がる音を立てて、左手を地上に数ミリ溜まっていた赤い水の中へと入れてきちんと底に手を着ける。

エツィオ「おーおー♪わざわざ創作結界の中に俺の使役（ペット）ごと飛ばさなくてもいいのにぃ♪まぁ、でも…」

エツィオは笑うような言動を吐きながらクスクスと笑った後、ゆっくりと立ち上がりローブの裾部分に浸かっていた地上の水を滴り落ちながら、ニタニタと笑う表情を出している顔を上へと上げた瞬間…

エツィオ「彼奴（アルタイル）は本当に変わったなぁｗｗｗ前までは人間でさえ“一切気遣いが無かった”のにｗｗｗ」

ディヤウス「貴様ァ…コノ遥カ高キ場所デ見下ロス“神”ニ！オ前ミタイナ“小僧”如キニハァァァァ！！！！」

血のように染まった宙にはエツィオよりも巨大な悪魔（ディヤウス）が浮かんでいて、ジェット機のような両腕を上下に何度も羽ばたかせながら見下すように言った後、口を開いて長い頭部を後ろへと仰け反った直後…

ディヤウス「手足トシテ動ナド…虫唾ガ走ルワァァァァァァァァァ！！！！」

仰け反っていた頭部が前方に戻った直後、ドワッと開かれていた口から半透明の風の塊が“極太の光線”のように吐き出され、あっという間にエツィオがいた地上が“巨大な水柱が天へと遡る”ように上った後、地上の赤い水が全て漆黒の水へと変わり果てる。が…

エツィオ「フムッ、今吐き出した魔力の密度といい…地上の“聖水”を“魔水”へと変える力！ウフフーンｗｗｗまずまず俺の使役（ペット）にしたいぜ！（＊´∀`＊）だが…」

ディヤウス「何ィィィィ！？？？！？！？」

いつの間にかディヤウスの背中部分にエツィオがいて、ディヤウスの背で“お釈迦寝入り”をしたままゴロンゴロンと“フカフカのベットの上で遊ぶ子供のように”ロードローラー遊びする。

ディヤウス「クッ…コ……コノ、餓鬼！！！！」

ディヤウスは顔を後ろに向けて背中の上で遊ぶエツィオを見た後、憤怒の表情でも出しているかのように怒りに満ちた声を吐きながら、もう一度口を開いて口内に風を溜め込もうとしたが…

エツィオ「お前に本当の空の戦いというのを教えてやるＹＯ★ブリトラ…Ｐｅｒ　ｆａｖｏｒｅ　ｇｉｏｃｈｉ（＾＾）ｍｇ」

エツィオはニコニコと微笑む表情を出しディヤウスの背で大の字になりがら、ゆっくりと後ろに仰け反るように斜め４５度ぐらいまで上げ両腕を斜め水平に伸ばした後…

エツィオ「カタァーカナァー★ｙｅａ♪」

ブリトラ《ガォォォォォォォォ！！！！》

エツィオの腹部あたりから具現化した本来の姿のブリトラが現れて、

ブリトラは力強い咆哮を吐きながらディヤウスの左頬に向けてバキリッとディヤウスの左頬に自慢の長い尾を鞭のように振り回して思いっきり叩く。

ディヤウス「グォォォ!?…グァァァァ?!」

ブリトラ《グルゥゥ!!!!》

ディヤウスの口から吐かれる半透明の光線を溜め込む動作を阻止し主人(エッィオ)がディヤウスの背から離れるように見届けた後、ブリトラは長い身体をディヤウスの全身に巻き付けてディヤウスをきつく蛇のトグロ巻きのように締め上げる。そして…

ブリトラ《ガウッ!!!!!バァゥッ!!!!!バォッ!!!!!ガルゥッ!!!!!》

バシャァッ!バシャッ!!とブリトラの尾の部分から中間辺りまで巻き付けたディヤウスの身体を地上に向けて何度も“顔面”から叩きつけて、頭部のトサカ部分のブレードが地上へと叩き付けられる度に“クタリとへし折れ”、頭部から内部の脳の一部が曝け出し割れた頭部の部分から吹き出る血と共に“抉り砕いた後”…

ディヤウス「ガハッ!!グバァァァァァ…」

ブリトラ《グルゥゥゥゥゥゥッ！！》

ブオンブオンブオンブオン！！！！

何度も地上に叩かれて頭部がV字に割れた“血塗れ状態のディヤウス”の全身を巻き付けた尾を宙で扇風機のように振り回し、思いっきり遠心力がつくまで思う存分に振り回した後…。

ブリトラ《貧弱…》

ポイッ♪と、巻き付けていたディヤウスを解くように離した直後、遠心力が十分につけられたディヤウスの身体は無抵抗のまま高速に“テレビの画面外”ぐらいまで吹き飛ばされる。

ディヤウス「グォォォォォォォォォォォ！！！！」

ズシャァァと、腹から地上の水面へと滑るように引き摺り落ち、カーリングのように少し全身が回りながら亜空間内の壁辺りまで真っ直ぐに激突する。

ディヤウス「グッ…グヌゥゥゥゥゥゥゥゥゥ…」

ディヤウスはV字に割れた頭部から血を流し口元からも血を吐きながら、グッと痛みを堪えるように全身を震え頭部だけを上に持ち上げるように上げた直後…

ブリトラ《フンッ…これが貴様の“かつて天を支配していた神の王の力”か??…馬鹿馬鹿しい程がある。》

バシャリッとブリトラの長い身体を地上の水面に浸け蛇のように長い身体を巻きながら、頭部部分から腹部辺りまで上に伸ばしてひれ伏したディヤウスを見下すように言う。

ディヤウス「（グウゥゥゥゥ…ナ…何故ダ…我ガ神ノ力デ地上ノ汚ワラシイ水ヲ……）」

ディヤウスは自らの力で地上の水を吹き飛ばし魔水へと変えたのに、再び“赤い聖水”へと戻っているのを覚え、グッと両腕に力を入れて立ち上がろうとするが…

アンゲルス【私が“元”に戻したのよ、可愛い坊や（ダーリン）の為にね。】

ディヤウス「ナッ…グアァァァァァァ!??!!」

ギリィッとディヤウスの両腕にアンゲルスの触手が複数絡み付いて、腕を引き千切るぐらいまで思いっきり締め上げる。両腕だけでなく首にも巻き付いて、窒息させる手前まできつく締め上げていた。

どうやらブリトラだけでなくエツィオは身体の中から密かに氷魔銃を取り出して、地上へ向けて落とした後アンゲルスを具現化し元の聖水へと戻して、予め宙に浮かぶディヤウス叩き落とした際に後ろから拘束するように待機していたらしい。

アンゲルス【此処の結界内に閉じ込めた“あの白い坊や”も凄いわね。聖水まみれの世界を私達の魔力さえ“半減”させないぐらいに……】

ブリトラ《見事なものだ。》

アンゲルスとブリトラが同時に顔を上へと上げた時、背中から漆黒の鷹の翼を羽ばたかせ両腕を組ながら宙に浮かぶ主人(エツィオ)を見て、口元を吊り上げて笑うような表情を出しながら言う。

エツィオ「アルタイルは“全ての万物を支配する神々の王”だからな。お前のような堕ちた神…いや降格した悪魔程度の力じゃ…」

エツィオが地上へと降り立ち背中の翼を折り畳んだ後、穏やかな笑

みを出しながら拘束している“重症状態のディヤウス”に向けて歩き出し、腹部辺りまで歩んだ直後…

エツィオ「天神（アルタイル）とマリクが造り出した世界さえ壊せないんＤＥＡＴＨ★」

バキゴキッ！ボキゴキュ☆ビキッバキャァッ♪

ディヤウス「ギャアァァァァァァァァ！！！！」

エツィオがディヤウスの腹部に向けて蹴りを食い込んだ時、蹴られただけで“内部の骨が全て砕かれ”、ディヤウスの腹部から背中にかけて衝撃のような波を肉眼で見えるぐらいに浮かべながら、一部身体の所々から折られた骨が槍のように剥き出しにしながら突き破って出てくる。

アンゲルス【ウフフッ♪非常に良い声よ、醜い坊や。もっと聞かせて頂戴…。】

ブチッブチブチ…ブチミシッ！！！！

アンゲルスはディヤウスの悲鳴を心地好く聞きながら、ディヤウスの両腕を拘束し締め上げていた触手に力を入れて思いっきり横へと

引っ張った途端、肉を引き千切る音を立てながらディヤウスのジェット機のような両腕を力で“もぎ取る”。

ディヤウス「グギャァ！！！！ギャアァァァァァァ！！！！」

ブシーッ☆と、もぎ取られた部分から思いっきり吹き出す血と、やや割れた頭部から流す血と共に悲鳴を上げながら叫んだ後前…

ブリトラ《我が主に跪け。》

バシャァァッ！！と、ブリトラの腕が割られたディヤウスの頭部の後ろから掴んだ後、頭部から地上の底まで浸けるように“土下座するような形”で叩き付ける。

アンゲルス【これは、おまけよ♪醜い坊や…】

ドスッとブリトラがディヤウスの顔から叩き付けた後、アンゲルスはディヤウスの尻穴に向けて数本の触手を突き刺し、内側から少しずつディヤウスの身体を凍らせていく。

パキッ…ピキピキ…

ディヤウス「ギャ……ガ……ガ……ガガ。」

エツィオ「この“世界”は兄弟と認められた者以外は“拒絶”する。魔神（オレ）と天神（アルタイル）は“良き深く戦友”だから、この“光”の世界にいても何の支障もなく思う存分に暴れられる。」

エツィオはブリトラに向けて軽く左人差し指を軽く何度も後ろへと下げて、ブリトラは顎だけで頷き《グルルル》と甘えた声で鳴きながら、地上の赤い水の底に浸けているディヤウスの頭部を軽く上へと鷲掴みしながら持ち上げる。

エツィオ「もう一度言うぞ。俺の“使役（ペット）”になれ。さもないと…」

エツィオは頭部やもげた両腕部分から血を滝のように吹き出し折れた骨が所々出ている“瀕死状態”のディヤウスの顎下を左手の平で摩りながら言う。

表情は微笑んでいても声は“冷たく冷酷で容赦もしない神や悪魔でも声だけで恐れて逃げだすぐらいの言動”を虫の息のディヤウスに吐く。

ディヤウス「グガ……ガガ……コ…断ル！！コ…コノ我ガ…コ…小僧……如キ……グバァァ！！？？！」

バシッ！とディヤウスの左頬に向けてエツィオは軽い右手の平の平手打ちを咬まし、叩かれただけでディヤウスの口内の牙が“全てボロボロに砕くように抜け落ちる”。

エツィオ「交渉は決裂…だな。そんじゃ♪」

ディヤウス「ギッ！！！！？！？！？」

エツィオは笑顔満開の表情をだしながら右腕を上げて後ろへと下げた途端、エツィオの背後から青白い悪魔の幻影（スタンド）…いわばエツィオが魔神化した時の“上半身だけの姿”が浮かび上がって、コキコキと右手の骨を鳴らし…

エツィオ「死ぬがよい」

エツィオの表情が笑顔満開でも後ろの悪魔の幻影は“ブチ殺す快楽を味わう狂気の表情”を出しながら、瀕死のディヤウスの顔面に向けてエツィオの右拳と悪魔の幻影の右拳が同時に“カメラ目線”へとぶち込まれた。

第七十四曲　何という尾上際の悪い悪足掻きｗｗｗ

―数分後　神界　マシャフ　アサシン教団砦内部　大導師の間―

シャイナ「エツィオが結界の中に入って“一分”経ちましたぁ♪交渉はどのぐらいまで進んでいるかなぁ？」

シャイナは椅子に座って珈琲を啜りながら右手の中に握る“携帯電話”を弄って、カチカチとボタンを動かしながら画面上の右端に映る電子時計を見て呟く。

因みにシャイナは携帯で有料ダウンロードしたゲーム“元祖ぷ●ぷよ”を遊んでいた。

アルタイル「フムッ、エツィオなら今頃“悪魔を叩き潰す快楽”を楽しんでいるだろう。それより…」

アルタイルは椅子に座りながらマリクが作ってくれた珈琲と、カダールの手作り甘菓子を口に入れて黙々と動かしながらシャイナに言った後…

アルタイル「現世の余暇が出来た時に遊ぶ技術も素晴らしい。むっ！この人間強いな…小賢しい…。」

アルタイルの両手の中にはシャイナが持ってきていたＰＳ●の“勇者の●せになまいきだ３Ｄ”をやっており、ピコピコとゲーム音を立てながら“暢気に携帯ゲーム機”で遊んでいた。

マリク「おぃ、アルタイル。後少しで“守護対象物（まおうさま）”に接触するぞ。何とかしろ。」

アルタイル「人間の癖に足が早いな。それに使う技が広範囲で軍力が半分持っていかれた。強い…やるな人間…。」

アルタイルは真剣にゲーム画面を見詰めながら言い、画面に映る軍力が半分切っていながらも口元を吊り上げて今の状況を楽しむかのように笑う。

アルタイル「ならば…“ツルハシスキル”というモノを使って…いや、駄目だ。堀りパワーが無くなる。（あと２０しかない）」

カダール「うわー、この人間凄く強いですねｗｗｗ名前の“＊＊＊＊”という人間ｗｗｗ足早いし、魔力もまだ半分以上残っているし。」

マリク「ちっ、体力が無駄に高いな。何だこの“ＨＰ９９９”は。まだ半分でさえ削ってないぞ。」

マリクとカダールはアルタイルがやるＰＳ●の勇者の●せになまいきだ３Ｄの画面を見ながら言い、所々“ゲーム本編ラスボスのネタバレ”を言いながら、アルタイルが遊ぶゲーム画面を最後まで見る。

アルタイル「むう、下級生の兵相手では勝ち目は無いか。んっ？」

マリク＆ａｍｐ；カダール「おっ？」「あ。」

画面両端に赤い文字が流れて、アルタイルが設置した“守護対象物（まおうさま）”が簀巻きにされてヤバい音楽が流れながら高速にダンジョン出口へと引き摺られていく。

カダール「アルタイル大導師！捕まっちゃったですよ！？」

マリク「凄い早さで引き摺られて行くな。どうする？？」

画面に映る軍力がもう“０”になりダンジョンに徘徊するモンスター達が居ない（全滅状態）のまま、徐々にダンジョン奥地から守護対象物が出口に向けて引き摺られていく。が…

アルタイル「フッ…危機と見せかけて此所を待っていたのだよ。」

アルタイルは画面に映る勇者の行動を見てラリーンと右目を光らせ、口元を吊り上げたながらニタリと笑う表情を出しカーソルを動かした直後…

カダール「あっ！！」

マリク「ほぉ…成る程な。」

勇者が通る出口前に骨のブロックが数個出来ており、ツルハシで出来ていた骨のブロックを全て叩いた直後…

アルタイル「このゲームの“最初場面から今やっている最後の場面まで”きっちり貯めていた“力”を解放するまでだ。安らかに逝け、人間。」

“白い竜（しんりゅう）”が沢山生まれて、軍力が０から“１万”を軽く超える。

その結果…

＊＊＊＊《世界はやっぱり＊＊しい！》

白い竜軍団（しんりゅう軍団）の炎に焼かれて、あっという間にラスボス勇者が“変な台詞”を吐きながら死んでいった。

アルタイル「フッ、突然変異とか起こしながら戦力を高め、補助がどれぐらい必要とするか…等と、これは中々と“奥深い遊戯”だな。私でも人間が創る余暇の携帯機に驚いたよ。」

カダール「アルタイル大導師凄いですね！僕、ハラハラしちゃいました。」

マリク「“ド●ゴンオーブ”というやらも粗方集まったな。これを全て集めると何が起こるんだ？」

カダールとマリクはアルタイルがクリアしたゲームのエンディング画面を見ながら言い、いまだに携帯電話機（ぷよぷよ）で遊んでいるシャイナに向けてマリクは言う。

シャイナ「あっ、それはＰＣの攻略ｗ●ｋｉを見れば分かるＹＯ★つーか私が手渡したゲームをクリアするの早くない？ｗｗｗ」

シャイナは携帯電話機での遊戯を止めて、アルタイルがクリアしたゲーム画面のエンディングを見ながら信じられない表情を出して言

う。

因みに勇者の●せになまいきだ３Ｄは難易度が非常に高く、“初代勇なま”“勇なまｏｒ２”をクリアした強者でも、前回の魔物の一部が強すぎて“修正＋補正”された為クリアが困難にｒｙ（

アルタイル「この“げーむ”は“戦略遊戯”なのだろう？我々が余暇が出来た時にやっていた“チェス”と同じだ。如何にして“相手を嵌めるか”、“余裕浮かべている相手を突然にドン底へと叩き落とす”かだ。」

カダール「あー、成る程。チェスならアルタイル大導師は兄さんと“同様”に強いです。ｗｗｗ」

マリク「チェスだけでなく現世の人間共の三流な策謀を逆に利用して“屈辱的に叩き潰す”のもあったな。ああ、思い出すだけで相当ｒｙ（」

マリクとカダールは互いに笑い合い、アルタイルは「マリク、そう言うお前も“腹黒い”部分があるぞｗｗｗ」と言ってシャイナも全員笑い合っていた時…

ブゥン…

シャイナ達が座るテーブルから少し離れた位置の床から“青色のマンホール”が電子音と共に現れて、アルタイルは少し離れた先に現れた青色のマンホールを見た後、シャイナにＰＳ●を手渡しで返す。

アルタイル「むっ、交渉を終えたか。我が友よ？」

アルタイルが青色のマンホールに向けて微笑む表情を出しながら、“カメラ目線”に向けて軽く首を傾げてウィンクし、カメラのシャッター音が何処かで鳴った直後…

エツィオ「終わったＹＯＯＯＯＯＯＯＮ☆アルタァァァァイルゥ＼（＾ｏ＾）／」

マンホールがくぱぁ♪と真上へと開かれた時、穴の中から“上半身オワタ体勢”を取って、下半身はくの字に曲げながらエツィオは笑顔満開でテンション高く身体を何度も回転させて天井へと上昇しながら登場する。

天井まで上昇した後、エツィオは身体を鯱のように反りながら“ニカメ”に向けて軽いウィンクを咬まし、続いて“三カメ”に向けて左手を口元に沿えてそっとキスを飛ばすような仕草を取った直後…

＼カシャッ♪／

エツィオ「Ｙｅｓ　ｏｆ　ｎｉｃｅ★キャァァァメェェェラァァァ（＾３＾）ー☆」

何処かで“カメラのシャッター音”が鳴って、エツィオは更に興奮した後、カメラ目線に向けて両手で口元に添えた後何度もキスをし、キラーン☆と瞳から光を放つ仕草をしながら、シャイナ達がいるテーブル間近へと降り立つ。

―エツィオの右手には“血塗れの半壊した双空剣”を握りしめたまま。―

シャイナ「おまっｗｗｗまた武器がケチャップ塗れ＋半壊してるしｗｗｗ」

良く見ると両端に付いていた刃の部分がポッキリ♪と割れるように欠けていて、所々ヒビが走っているのを見てからにして、アルタイルとマリクが作り出した結界内で“強烈な調教遊戯（レイププレイ）”をしたのだとシャイナの脳裏の中で勝手に解釈する。

エツィオ「アルタイルが作ってくれた俺の使役（ペット）は言うこと聞かなくてなぁ。“ついつい全殺し”しちゃった☆アハッ♪」

アルタイル「フムッ…所詮堕落した“口だけ特級悪魔”相手では、我が友エツィオにに力を授けてく…エツィオ?」

アルタイルは両肩を竦めるように落としムスッとした表情を出そうとしたが…

アルタイル「!」

エツィオ「オロン?此れは一体…あっ。(・・)」

シャイナ「ちょっｗｗｗ」

マリク「な…」

カダール「エツィオさん!?」

ガブッとエツィオは右首筋に何かが食い込むような感覚を受けて、エツィオはきょとんとした表情を出し、今起こっていることを見て身体を“氷付け状態”のように固まるシャイナ達に見られながら右手の中に収める武器へと視線だけで動かした時…

瀕死ディヤウス「カ……カガ……ククク。」

半壊した武器の刃部分からV字形に頭が割れた頭部が血塗れ瀕死状態のディヤウスが出てきており、まだ欠けてない歯が残っていたのかエツィオの右首筋に向けて不意の噛み付きを噛まして、最初で最後の“尾上際悪の悪い足掻き”を微動しない不機嫌顔のエツィオと驚愕顔を出すアルタイル達に見せ付けた。

―ククク…馬鹿メ……―

第七十五曲　ブチ切れた天神＆魔神は何もかも破壊する

―神界　マシャフ　アサシン教団砦内部　大導師の間―

ポタポタ…

シャイナ「ひゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！え…エツィオォォォォォ！！！！！Σ（゜Д゜；）」

エツィオ「…。」

ディヤウスの悪足掻きによって不意に噛み付かれた右首筋から血が徐々にジワジワと滲み出し、シャイナは絶叫しながら一つの血の流れを床へと滴り落ちていくのを見て、シャイナの絶叫を聞きながら苦痛の表情を出さず視線だけで静かに睨み付ける。

瀕死ディヤウス「ククク…コ……コ……小僧ガ…コノ我ガ…簡単ニ…ヤラレ…ハ…セン！！！！！ユ……油断シタナ…！？ハハハッ！！！！」

エツィオの右首筋を噛み付いたディヤウスはしてやったりの表情でも出しているかのように、せせら笑いしながら噛み付いている残されていた牙をエツィオの首筋をより深く食い込んで、エツィオの血を口内に流しいれながら喜ぶように味わう。

エツィオ「たくっ…しぶとい奴だな。」

瀕死ディヤウス「ククク…オ…オ前ノ……頚動脈マデ…フフ……深ク刺シタ！！オ前ハ……モウッ！！！！」

頭部はもう“クレーターのように陥没”しているぐらいにグチャリと潰れていても、生命力…否“執念”だけがディヤウスの魂(うつわ)を動かしているように見えた。

カダール「くっ！何て尾上際の悪い！！」

マリク「この…下衆が…。」

カダールとマリクは今の状況で下手には動けない。否エツィオが人質として捕まっている以上動くことすら出来ず、歯軋りをしながら瀕死のディヤウスを睨みつける。

エツィオはふぅ…と、死に掛けのディアウスの悪足掻きを見て両肩

をガクリと落とし、呆れるような表情で哀れむ視線をスラっと一瞬“ガタガタと恐怖で震えるシャイナの姿”（見た目だけで勝手に判断）を見て…

エツィオ「お前を使役（ペット）にしようと思っていたけど…気が変わった…。」

今までのような“暢気&気が抜けて&ふざけた態度”を取っていたエツィオの声が“豹変”し、情けの欠片もない“本来の冷酷の声”を出した直後…

バキィィィィ！！！！！

瀕死ディヤウス「！？？？！？」

エツィオ「シャイナを怖がらせやがって…テメェ……」

右首筋を深く食い込んでいたディヤウスの牙が突然エツィオの右首筋が“魔神化したときの黒い鱗部分”が現れて、食い込んでいた牙がエツィオの本来の肉体に“世界に生きる総ての生物を拒絶される”ように圧倒的な魔力の壁で全て砕かれる。そして…

シャイナ「あ…あぁ……。（ちょぉぉぉぉｗｗｗ何このかっこいい

エツィオ本来の“真剣顔（イケメンフェイス）”はぁぁぁぁ！？？？！？うひょおおおおおおおお！？！？？？！）」

シャイナは身体を震え恐れているような素振り（嘘）を出していても、心の中身は鼻血でも出しているかのようにブフゥwと、エツィオ本来の真剣顔（イケメンフェイス）を見て思いっきり興奮する。

エツィオ「お前のような主人（オレ）の忠義（せいぎ）に従わない使役（ペット）なんざ…いらねぇんだよ！」

エツィオは怒りの表情を出しシャイナにようやく本来の真顔を見せながら、ディヤウスの顔面にめがけて“本気の力”が入った左拳裏を容赦無くぶち込む。

ボッ！！と、一瞬の内にディヤウスの顔が跡形も無く“消失”し、血さえ噴出することが出来ないまま下半身の武器ごと後方へと吹き飛ばされる。

ビシャッ…ゴボボボボボボボボ……

死体ディヤウス「ビクッ…ピクピク……」

壁まで打ち付けられた頭部の無い死体（ディヤウス）は床へと転がり落ち、身体の

所々から赤い噴水を噴出し白い床を赤く染めながらピクピクと痙攣する。

エツィオ「頭部をぶち壊しただけじゃオレの怒りは収まらねぇ…Ｉｏ Ｌ' ａｓｓａｓｓｉｎｏ ｃｏｓ？ ｃｏｍｅ ｎｏｎ ｔｅｎｅｒｅ ａｎｃｈｅ ｕｎ ｍｏｄｅｌｌｏ.（テメェの原型すらわからねぇぐらいまで殺してやる。）」

エツィオの首から下の身体が本来の身体である“魔神化”になって、両腕を組みながら爪の音をバキバキと立てて、目元から青い線が二つ浮かび瞳が金色の鷹の目となって“怒りに満ちた表情”を出しながら首なしの死体（ディヤウス）へと歩もうとした時…

アルタイル「待て、エツィオ。このような有様になったのはあの武器の生み親の私の…いや…“俺”のせいだ。」

エツィオ「！」

エツィオの左肩にアルタイルの右手が乗せられて、半分魔神化したエツィオが乗せられた左肩のアルタイルの右手を見て顔だけを横に動かし後ろにいるアルタイルの姿を見たとき…

アルタイル「生みの親は最後まで“責任持って後始末”をしないといけないからな。ここは…」

―我が友を傷つけた三流悪魔（ディヤウス）に俺が鉄槌（しょけい）を下す。―

アルタイルも首から下が“天神化”しており、無表情ながらも製作した武器の反逆だけでなく戦友のエツィオが“傷ついた”ことで心の底から溜まっていた怒りを露にし、一人称が“私”から“俺”と変わってエツィオよりも超冷たい“死神オーラ”を放っていた。

マリク「…キレたか。（“ブチ切れた”か。あの半死…いや死んだ悪魔め…。愚かなことを…）」

カダール「…アルタイル大導師が……“８００年ぶり”にブチ切れた……。」

今いる大導師の間があと数秒で“血塗れの世界”になるのを８００年前以上の“とある回想を脳裏に思い出した”直後、アルシャイフ兄弟はそそくさに背中から純白の鷹の翼を出して、黒い柱の上へと我先に避難する。

アルタイル「ここは俺がやる。エツィオ…後ろにいる女と共に下がっていろ。」

目元から赤い線が二つ走りエツィオに向けて笑みを出しながら左肩

を軽く二三回ぐらい叩いた後エツィオは先程出した怒りの表情から虚を突かれたようなきょとんとした表情になる。

兄弟(とも)だけ見せるアルタイルの本来の優しさが出ている笑みを見たエツィオは、胸部に何かにズギュンと射たれたように無言で顎だけを動かした後、アルタイルは「さぁ、早く…」と言って頭部のない死体(ディヤウス)に向き直し再び“鬼のような表情”に変わって歩き出す。

エツィオ「シャイナ、掴まっててくれ。」

シャイナ「うわっ！…とととｗｗｗ」

いつの間にかシャイナの背後にエツィオが“ワープ”したかのように現れて、両腕の竜のような爪で傷つけないようにシャイナをそっとお姫様だっこをするように抱き抱えた後…

バサッ

腰の裾状の翼から本来の西洋の竜のような巨大な翼へと変えて、一羽ばたきしただけで宙へと浮かんで一瞬の内にアルシャイフ兄弟がいる黒い柱の上へと辿り着く。

アルタイル「…。」

アルタイルは無言で恐ろしい表情を出してゆっくりと歩みながら、床に天神化した鳥のような足爪を着く度に“亀裂”を作り、空気がガタガタと恐れるように震えながら床に転がり落ちる死体（ディヤウス）へと一歩一歩近付く。

死体ディヤウス「……クカ……カカカ……只カ……小僧一匹……如キニ」

ボコッと死したハズのディヤウスの腹部部分から残された魔力を使って、生前だった頃の“顔”だけを歪み出るようにさらけ出しながら、無言で歩んでくる半天神化のアルタイルに言う。

アルタイル「…。」

死体ディヤウス「クカカカカ！！！！…憎イカ？憎イダロウ、若僧！？？！！コノ我ガ……アノ餓鬼ニ、キ……傷ヲツ…ケタコトデ……」

ビキッとアルタイルの爪の音を鳴らし死体手前まで歩んだ直後、アルタイルの全身が赤いオーラで包み込んで完全に天神化する。

アルタイル『死ぬ準備は整ったか？糞が…。』

死体ディヤウス「ハ……ハハハ……ハ。」

死体(ディヤウス)の視界にはアルタイルの冷たい目線が見下されているように見えて、ディヤウスは処刑される恐怖よりも狂ったようにわざとらしくせせら笑いしながら“ブチ切れ状態”の天神(アルタイル)に言う。

死体ディヤウス「キ……キキ……貴様コ…ソ……ア『Ｇｅｈｅｎ　Ｓｉｅ　Ｅｗｉｇｋｅｉｔ　ｌａｎｇ，　ｄｉｅ　Ｗｅｌｔ　ｏｈｎｅ　ｄｅｎ　ｓａｍｓａｒａ…ｂｉｔｔｅ！！（死ね。）』

ディヤウスの言葉を遮るように天神(アルタイル)は計り知れない魔力の赤い光が迸った左手の平を開いて、ドイツ語を吐きながら容赦無く死したディヤウスに向けて追加外圧(オーバーキル)攻撃を右手をかざした瞬間…

ドゴォォォォォォォォォォン！！！！

砦の天辺部分（大導師の間）から赤い火花が爆発した光が漏れ出た瞬間、爆発したかのように天辺部分から凄まじい赤い光と茶色く煤けた噴煙が濛々と、麓にある民達が住まう居住区まで“思いっきり目立つ”ように出ていた。

第七十六曲　オエェェェェップ並みなB級シーンだZE♪

―数時間後　アサシン教団砦内部　大導師の間―

エツィオが今後使うハズだった“双空剣アスタ・ディウス”の素体であった三流悪魔（ディヤウス）を“この世から消失（デリィーツ）”させて数時間後、ヒビが所々走り荒れていた大導師の間の内部をエツィオ含めてマリク達の魔力で再び綺麗に構成させて“傷一つもない元の大導師の間に戻す”。

云わば“何事も無かった”ように今までのシーンをNGとして“映画的な意味でカット”していた。

アルタイル「すまない、エツィオ。お前の為に暗殺魔具を授けようと製作したが、“とんだ手違い”で消失する羽目になった。神界の王の一人の“人間”としてお前に詫びる…。」

元通りになった大導師の間で人間体に戻っていたアルタイルは大導師専用の椅子に腰掛けて深々と頭を下げながら、数メートル先にいるエツィオに向けて謝罪の言葉を投げる。

エツィオ「いや、良いって（＾。＾；）そんなに謝らなくてもｗｗｗもう済んだ話だしｗｗｗ」

シャイナ「そ…そうだよ、アルタイル。もう、私はあの“トサカＤＱＮ”が消えるまでエツィオにずっと抱きしめられていたからさ、身に覚えた恐怖なんてぶっ飛んだからいいＹＯ★」

エツィオも人間体に戻っていて表面をボフンと赤熱化するように赤く染め上げて、アワアワと慌てふためく表情を出しながら、両手の平を前に広げて何度も軽くプラプラし、気にしていない素振りで謝罪しているアルタイルに言い返す。

シャイナ「（てか…エツィオが何かずっと隠していた所を暴くために“一芝居”売っただけでこんな騒動になっちゃったぁぁぁぁぁｗｗｗアフンッ。。。（ρ）ゝ」

シャイナはエツィオの直ぐ傍でヨタヨタと微笑む表情を出して、エツィオの身体に寄りかかるようにアルタイルに言っていながら中身は、“腹黒い鬼畜ぷり★”と“魔神さえ顔負けするような策略ップリ♪”の小悪魔的な本性を出しながら驚愕の表情を出す。

アルタイル「一応何かあった時の為に“スペア”を作って置いたが…」

アルタイルは深々と頭を下げた後ゆっくりと顔を上に上げて、右腕を上にかざし手の平を広げるように開いた時…

アルタイル「肝心な武器の魂（ちから）が無い。ただ魔神（オマエ）の力に耐えきれるようにアスタロトの“卵外部の殻と内部の魔力”と、生きた永遠の金属の魔物“オリハルコン”で形成された“だだ耐久力が高いだけの無属性”武器しかないが…」

形は先程の消失する前と同じＳ字形に湾曲した両手剣が浮かぶように現れ、握り部分と繋ぎ部分に走る呪文が白で、刃の部分が透明に近い白のような光が帳のように広がっていた。

エツィオ「えっ、“スペア”あんのか！？なら、それでも良いよ。近い内に他の特級悪魔と契約して俺なりに“改造”すっからＳＡ☆」

アルタイル「了解した。では…」

エツィオは気にしていない素振りでアルタイルが召喚した無属性両手剣に向けて、軽く右手を何度も後ろへと下げる仕草を取った後、アルタイルはコクリと顎だけで頷いて右手の平の上に浮かせていたスペア武器をエツィオに向けて飛ばす。

エツィオは飛ばしてきた両手剣を、右手で中央部分にある握り部分に向けて軽く受け取るようにナイス★キャッチした直後…

カダール「あっ！地上の被害報告が来ました！！アルタイル大導師、

読み上げていいですか？」

タイミング良く大導師の間にある開けられていた窓から白い鳩が両脇にいるカダールに向けて飛んできて、白い鳩の左足に小さな紙がくくり付けているのを見てカダールの左肩に留まったのを白い鳩をアルタイルに言う。

アルタイル「良いだろう。」

カダール「有り難う御座います！では早速…」

アルタイルがそう言った後、カダールは喜びの表情を出して左足にくくり付けていた紙を外し広げた後、紙に書いてある内容をシャイナとエツィオに向けて言う。

カダール「地上被害報告ですが…都市破壊率“８割”にエツィオさんが暗殺した対象人物含めて一般市民死亡者“２５３６５人”悪魔討伐数“１００体”ですね。“通常通り”の結果ですね（＾＾）」

シャイナ「おまっｗｗｗこんだけ被害が出ているのに“普通”ｗｗｗ何この基準ｗｗｗ」

エツィオ「なんのぉ～。まだまだ“喰い足りない部分”があるなぁ

～ｗｗｗ８００年前よりもまだまだ小さい小さい！！」

シャイナは地上被害報告を聞いて「ＥＥＥＥＥＥＥＥＥ（´Д`；）」とでも言いそうな口を開きながら、呆然と立ち尽くす。

一方エツィオは手にした両手剣を上で扇風機のようにブーンと回しながら子供のようにはっちゃけていた後、魂の入っていない“ただ武器耐久力が高い”暗殺魔具を身体の中に入れる。

アルタイル「ほぉ…現世の人間達にとっては“世界的大犯罪者”として言われるが、我々にとっては“普通”だ。私が倒してきた人間共と同じよ。（第三十四曲参照）」

アルタイルは結果報告を聞いて口元を吊り上げながら笑う表情を出し、脳裏に８００年前の出来事を思いだしながらゆったりと椅子に身を乗せる。

マリク「それは“寄生した悪魔”相手だったろう、アルタイル。まぁでも、姿、形は“人間”だったけどな。（笑）」

カダール「ですよねーｗｗｗあっ、僕もいつの間にか“ｗ”を使うようになってるｗｗ」

シャイナ「ブフッｗｗｗ遂にアンタも現世（私の住む世界）に感染してきたねぇｗｗｗ」

マリクは８００年前のアルタイル無双を苦笑いするように思い返しながら言うが、表情はケラケラと笑い隣にいるカダール同様全員が和やかな空気（ムード）を一時的に大導師の間へと流れていく。

カダール「あと他にも書いてありましたよ。現世の人間達はエツィオさんに対してスペイン最重要な政治家を殺したことで“無慈悲な破壊者”と名付けられて、全世界に“指名手配犯”として情報伝達されてますよ？」

エツィオ「アッヒャッヒャッヒャッヒャッヒャッヒャッヒャッヒャッヒャッアァ（ﾟ∀ﾟ）遂に俺はお尋ね者かぁｗｗｗヤッタァァァァァ！！！！！」

シャイナ「何故喜ぶ？ｗｗｗ」

シャイナが住む世界では指名手配になっているのに関わらず、エツィオは傍にいるシャイナにドヨヨと退かれながらも、無邪気に笑いながら“バンザーイ＼（´∀`）／”するポーズを取る。

エツィオ「えっ？何でって、こうだ。」

エツィオが脳裏の中にある８００年前の知識と現在の状況を見て、きちんと整理した“簡単安心激安情報”をカメラ目線に向けて左手人差し指を当てながら魔力の蒼い文字を浮かせてススッとこう書いた。

エツィオ「説明はこうだ。

―指名手配になる→※調子に乗った敵又(にんげん)は悪魔が出てくる。→軽く撫で殺すようにぶっ飛ばす→追い剥ぎして生計確保又は悪魔と契約して協力者をどんどん増やして、自分に立ち向かう意欲を無くす。→※へ繰り返し―

―自分とアルタイルは“反則並みに強い”からどんな敵が来ても問題なし。―

―強さ順はエツィオ＝アルタイル＞＞＞

DA★以上…フリーダムな魔神エツィオによる、簡単安心激安講座でしたぁ♪」

シャイナ「まてまてwww最後の説明文は何!?wwwめっちゃ問題な的なも…いや、色んな意味でバッドエンドじゃん!??!!」

シャイナはエツィオが説明した部分を聞いてブフゥと口から何かを出しながら、センコー面しているエツィオに向けて軽く左手でビシッ☆と突っ込む。

エツィオ「エーじゃないか（＾O＾）どのみちアルタイル達は800年間“星（ちきゅう）”から追い出されているし、一回追い出された気持ちを考えて“同じ報いを受ける”べきだと思うんDA★」

バチコーン☆とカメラ目線に向けてウィンクをかました後、スケートのように片足だけで床を滑りながらクルクルと身体を回転させて画面端へと消える。

アルタイル「フムッ、確かに私もエツィオと同じように何度もそう思っていたが…」

画面下からせり上がるようにアルタイルが出て来て、身体を横向きに倒れさせて左脚部を半周させるように動かした後、フワッと“視

線をカメラに向けたままエロスポーズ”を取るように宙に浮かぶ。

シャイナ「（何このノリノリな劇団二人組ｗｗｗ二人とも“超クソジジイ年齢”の癖になんかムカつくｗｗｗ）まぁ、取り敢えずはわかった。それより…」

アルタイル「林檎ならお前達が向かう先にある特異界で、一歩も動かず一定の箇所で留まっているぞ。」

シャイナの言葉を遮るようにアルタイルが言った途端、残像映像でも行ったかのように再びエツィオとアルタイルは元の配置に着いて、“小説的な都合により空気を読んだ”。

アルタイルはそっと数秒間両目を閉じて、脳裏に映る今現在の現世の映像と浮かび上がる情報の文字を見た後、シャイナとエツィオに向けてキリッとした態度で言う。

アルタイル「それに次に向かう特異界の場所が“妖精界”に近い魔力の境界線がある。お前なら何の支障も無いが…」

エツィオ「あー、妖精界の妖族に絡まれると厄介な種族なんだよなぁ～ｗｗｗ回りを飛ぶ蚊のように何度も付きまとわれるしｗｗｗそれに…」

シャイナ「それに？」

急にエツィオがどんよりとした表情となって、身体を伏せるように折り“体育座り”体勢を取りながら、ブツブツと右人差し指で床に何かをなぞるような仕草を取る。

シャイナは何事かとエツィオに向けて足を短く下ろした後、心配するような表情を出した瞬間…

エツィオ「一度俺が本来の魔神へと戻って特級悪魔に襲われていた妖族を助けた時に、我先にと何度も“身体を触られて”な…どの時間帯でも…何処にいても…どの場面でも…」

エツィオが８００年前以上の出来事をモヤモヤと煙が上がっていくような感覚で、次々と厭なシーンが映像として映り思い出していく中…

エツィオ「出来る限り…会いたくない…ＤＥＡＴＨ…ｏｒｚ」

遂にエツィオはｏｒｚ状態になって背中に黒い雲が浮かび雨を降らしながら、ドヨーンと落ち込む仕草になる。

シャイナ「えっｗｗｗ付きまとわれるって…妖精界の妖族は“ストーカー族”なんですねｗｗｗ」

脳裏に浮かんでいた妖精のイメージがガシャンと硝子が割れるように崩れていき、シャイナはエツィオの厭な思い出を脳内で思い浮かべながらハハッと短く苦笑いする。

アルタイル「何、境界線に入らなければ良いことだ。そうすれば妖精界に入ることはない。なので…」

アルタイルがそう言った後、二人が立つ床に書かれたアサシンの紋章に向けて右腕を前に伸ばした時、アサシンの紋章が赤い光を放ちながら輝き始め二人の身体を包み込む。

アルタイル「行け、今度こそ“林檎”を奪還しろ。我が友よ…。」

エツィオ「分かっているさ、アルタイル。それと…」

アルタイル「むっ？」

先程のｏｒｚ体勢を取っていた暗ツィオと違って真剣面を出したエツィオになって、傍にいるシャイナをそっと胸元に引き寄せて抱き抱えるように立ちながらアルタイルに向けてボソッとこう言った。

エツィオ「ありがとな。」

アルタイル「私とお前は“良き深き戦友”…即ち“友”だ。“人間”として当然なことをしただけだ。」

アルタイルとエツィオが共に笑みを出し二人だけの“B級映画並みの友情の言葉”を交わした後、シャイナとエツィオの身に包んでいた光が包んで天井まで逆って数秒後…

赤い光が止んだ途端、シャイナとエツィオの姿は神界からいなくなっていた。

第七十七曲　ただ使役（ペット）になりたくて…

―現世　スペイン　マドリード　高層ビル屋上―

屋上の入り口の壁に描かれていたアサシンの紋章が輝き、目映い赤い光を放ちながら二人の姿が出てきた瞬間…

シャイナ「アルェェェェェー？（・８・）おかしいなぁ？空が暗いＹＯ？それに今日は“曇一つもない晴れ”のハズ…」

エツィオ「真っ暗だぁ～♪太陽すら隠れて何にも見えなーい＼（＾ｏ＾）／」

シャイナとエツィオが再び現世に戻って来た時空が漆黒の闇に満ちていて、右手首に着けていた電子腕時計に映っていた“１１：１４”を見ながら、実際の天気の状況と明るさを疑問する。

上空には何か変な音…蟲でも飛んでいるような飛行音が聞こえていて、シャイナはやや身震いしながら隣にいるオワタ体勢ではしゃぐエツィオに寄り添うように抱き付く。

エツィオ「あれは“風蟲の悪魔の大群”。一匹一匹の力は弱いが…」

エツィオはケラケラと笑いながら両腕を組んで、空に浮かぶ黒い霧…否蟲の大群を額に左手を添えて見上げながら言う。

シャイナ「え〝…あの黒い霧のような物が、む…む…むむ……」

シャイナは青ざめた表情を出しながら何度も顔だけ上下に動かす仕草を取っていた時…

ブオォォォォォォォォォォ

ケラケラと笑うエツィオがそう言った途端、上空の漆黒の霧みたいな物体…蟲達がシャイナとエツィオがいるビル屋上の上空部分のみ一斉に集まって、何度も“ドーナツ状を保ちながら綺麗に旋回”し始める。

シャイナ「ぅわわわわわ…（（（（（（（（（。Д。；））））））））））何か突撃してきそうで怖いｗｗｗ」

エツィオ「大丈夫だ、俺がいる。」

回りの本来の空の色をさらけ出し黒い蟲の集団達は何度も旋回する中、エツィオは寄り添うシャイナを左手で抱くように胸元に寄せた後…

エツィオ「いっちょ、やってやるか★（何だ?さっきからにして敵意が無い…初めてアンゲルスと出会った時と同じだ。だが…）」

背中から漆黒の鷹の翼を出して胸元に寄せているシャイナを守るべく翼を前に被うように出し、エツィオは上空に向けて真剣面を出しながら旋回する蟲達に向け静かに臨勢体勢を取る。

エツィオ「（様子見か?それとも）『此処にいましたか…エツィオさん。永年掛けて探してましたよ?』おっ?」

突如、男女が混じった二重声が聞こえて、エツィオは虚を突かれたように真剣面からお惚けの表情に変わり、上空を見上げながら静かに声の主を聞く。

?『魔帝を滅ぼして８００年…再び蘇った貴方をずっと…ずっと…探していました。あの時…』

上空の旋回していた蟲達が緑色の光を放ちドンと上空全域を放って光が止んだ直後、人型を保った“本来の姿の緑色の半人型悪魔”が

シャイナとエツィオがいるビル屋上へと降りてくる。

容姿はオールバックにした緑色の髪に、肌は上位悪魔の特徴の白色で至るところには黒い羅刹模様が走る。

胸部が女性の胸のように大きく膨らんでいて、腰辺りから緑色の裾型コートを纏い、背中から蝉のような巨大な翼を六つ持った“見た目で若々しい両性悪魔”…

？『魔界で処分されそうになった私を助けてくださった、貴方様の心優しき恩を忘れなかった。』

エツィオ「あっ！お前は確か…」

エツィオは舞い降りて来た悪魔の姿を見て記憶にあった出来事を思いだし、驚くような表情を出して目の前に立つ緑色の両性悪魔に言う。

エツィオ「お前…まさか“ヴェルズィカーレ”か！？」

エツィオはシャイナを守るべく前に出していた翼を解いて背中に折り畳んだ後、目の前に立つ旧友を見て穏やかな笑みを返す。

ヴェルズィカーレ（略してヴェルズ）『そうです！あの時は“蟲王ベルゼブブ”と呼ばれていましたが…』

エツィオ「あの頃はお前は“下級”やら“塵”呼りされて皆から馬鹿にされていたのに…」

―上級テンプル魔蟲　元名ベルゼブブ　現名ヴェルズィカーレ―

シャイナ「おまぅえっｗｗｗ何このＤ●Ｃ３に出てくるバー●ルが“綺麗に女体化”したような容姿ｗｗｗ」

シャイナはヴェルズの容姿を見て思わずブフゥと吐き、二次元ゲームの様々な場面の中に出てくる醜悪な蟲の悪魔と、今現れているベルゼブブの容姿を見てあり得ない思考を過りながら脳裏で比較する。

ヴェルズ『えっ！？バー●ルって誰のことですか？エツィオさんの隣にいる人間の貴方？…いえ、それよりも…』

エツィオ「分かっているさ。俺を殺しに来たんだろ？」

エツィオは両腕を組ながら仁王立ちで、目の前に立つヴェルズに向けて穏やかな笑みを出しながらヴェルズからの重々しい言葉を待つ。

ヴェルズ『復活した魔帝からはそう言われていましたが…恩人である貴方様を殺すことなど出来ません。寧ろ殺したくない。』

エツィオ「“特級”まで登り詰めたお前が…何故…」

ヴェルズからの意外な言葉を聞いて、エツィオは虚を突かれたように少し驚くような表情を出す。

エツィオ「（あの頃のヴェルズにはない莫大な魔力を感じるなｗｗあの“魔帝”を上回る程ｗｗｗ）」

エツィオの視点から見たヴェルズの身体の中に渦巻く“魔帝を殺傷するぐらい凄まじい莫大な魔力”を感じたが、それを自ら抑えているかのように少量の魔力しか漏れ出さないようにしているのを見て脳裏で戸惑う表情を出す。

ヴェルズ『私は貴方の傍にいたかった。ただ…』

ヴェルズが鳥のような爪手先を後ろに伸ばし、両目を臥せたまま軽く丸めるように握った瞬間…

ドンッ

ネロマテA【ギ！】

ネロマテB【ギャァ！！】

ネロマテC【グゴッ！！】

隠れていたのだろうかエツィオの回りに“魔力で透明状態で隠れていた”テンプル騎士団の下級兵のネロマテ達がいて、シャイナとエツィオとヴェルズを除くネロマテ達全員が不自然な体勢で地面に抑えされているような形で叩き付けられる。

ヴェルズ『貴方様の手の内で思う存分活きていき、貴方様が今旅する新たな力になりたい。それだけです。』

ボキッボキキ…

叩き付けられていたネロマテ達の床から徐々にヒビが走るように刻み、ネロマテ達の顔が段々と空き缶潰しのように凹んでいき、ヴェルズは両目をゆっくりと開いて後ろに伸ばした手を前へと翳した直後…

ヴェルズ『エツィオさんならご存知の通り私は“空気宙の大気を自在に操れ”かつ“大気の重力を制御・調整”できる。かつての…』

エツィオ「魔界・現世の大気を総て支配した“風の王”…だろ。」

叩き付けられていたネロマテ達全員が何かに…否ヴェルズが操る大気の重力で押し潰されるように、原型すら留めないぐらいゴシャッ!!と、悲鳴すら上げられないまま内部の内臓そのものを総て潰殺した。

ヴェルズ『永年貴方様を探し続けて８００年以上…それが漸く…』

エツィオは「ハハハッｗｗｗ」と苦笑いしヴェルズの悪魔ならぬ人間らしい笑みを見た後…

エツィオ「ＨＡ★丁度いい“入れ物”があるぜ。ヴェルズ…」

エツィオは身体の中に手を入れて、ゆっくりと内部からアルタイルが作ってくれたスペア武器を取り出す。ヴェルズは取り出された武器を見て、左手を口元に寄せながら驚く表情を出す。

ヴェルズ『!それは…（凄い…いや凄いという品物じゃない。武器

そのものが“神域そのものを軽く超えている”！！）』

エツィオ「天神（アルタイル）が造った“両手剣”ＤＡ♪まだこいつには“魂”が入っていない。つまり俺と一生仕える契約…“使役（ペット）の家”だ。」

エツィオは両手剣を扇風機のように何度も振り回し、ヌンチャクのように扱いながら刃の刀身部分を足先で何度も弾みながら“カメラ目線”に向けてウィンクを咬ました後、両手剣を床にグサッと突き刺しやや背を猫背に取りながら立つ。

ヴェルズ『天神（アルタイル）…神々を統べる純白の王が此れを…』

エツィオ「んで、契約かい？ヴェルズ？？Ｐｒｏｍｅｔｔｏ ａｌｌａ ｖｉｔａ ｅ ｒｉｓｐｅｔｔｏ ｌａ ｍｉａ ｇｉｕｓｔｉｚｉａ？（“使役（ペット）”として俺の手の中で踊るか？）」

あたりの床がネロマテ達の大量の黒い血塗れを築き、天使な笑みを出すエツィオがそう言った直後…

ヴェルズ『Ｄｉａｍｏｇｌｉ ｌａ ｍｉａ ｖｉｔａ ｉｎ ｔｕｔｔａ ｌａ ｖｉｔａ』

ヴェルズが穏やかな笑みを出して全身を緑色の光を放って霧状にな

った後、一直線にエツィオが持つ両手剣の握り部分へと吸い込まれるように入っていった直後…

オォオォオォ

武器が命を吹き返したように刀身から突き刺された刀身まで緑色に輝き始めて、武器全体を覆いつくすほどの緑色の光が天まで眩く一直線に伸ばしていった。

第七十八曲　Il momento della verit? quando

―スペイン　マドリード　高層ビル屋上―

ネロマテJ【べ…ベルゼブブ様ガ…！！！！】

ネロマテK【ウ…裏切ッタァァァァァァァァァァ！？？！！】

ヴェルズの重力攻撃を遠くの様々な高層ビルの屋上で逃れていたネロマテ達は、突如寝返った風魔王(ベルゼブブ)を見て驚愕な表情でもしているかのような声を上げる。

ネロマテ達が驚く中でエツィオは右手の中に握り締めていた武器の緑色の光が止んだ後、新たな姿になった“新暗殺魔具”を見上げながら言う。

エツィオ「おぉー（・∀・）テラカッケェ！！！！」

シャイナ「ウヘェェ～。キャリガ●ンドゥルーガーがＰＳ●に出てくる“モル●ンロート”のような姿にｗｗｗ配色は●神の“草●の

剣”に似ているなぁｗｗｗ」

武器両端に付いていた刀身が緑色の帳を広げながら更にスマートに何度もＳ字湾曲していて、所々刀身先から握り部分からなぞるようにして風のような流れが複数発する。

ヴェルズ『悪くないですね。内部の魔力構造が素晴らしい。何だか“力が沸いて来る”…少しづつ…少しづつ…』

緑色の川のような光の道筋が通り過ぎながら後方部分へと近付く度に半透明色になっていき、後方部分の刀身に辿り着いた時はスゥ…と消えて、また再び武器先端刀身先から凪がれていく。

エツィオ「決めたＺＯ♪お前の新しい名は“天を引き裂く深緑の風王”風魔両剣（ヴェルズィカーレ）ＤＡ★此れからよろしくネン（＾＾）ｂ」

風の両手剣…風魔両剣（ヴェルズ）を見てエツィオは口元を吊り上げながら笑う表情を出し武器に言った直後…

ヴェルズ『此れは良き我が新たなる名…感謝いたします、我が愛する主人（マスター）よ。』

と言って喜びの気持ちを現しているかのように両端から何度も風の

凪がれを発して、エツィオの身にも包み込み数本の緑色の風が天に向けて昇る竜のように踊り舞う。

ネロマテＪ【ナ…何故ダ！？？？！！】

ネロマテＫ【我ラガ怨敵、アサシンノ小僧ナンカニ！？？！！】

そんな最中、ネロマテ達はただ突如裏切ったベルゼブブ（ヴェルズ）を唖然とし、一部のネロマテは手にする武器をカランと屋上床に落として、呆気にとられながらただ見続けていた。

エツィオ「じゃ、早速、試してみっか★」

ネロマテ‐Ｓ【！！？？！】

遥か先のビルの屋上にいたエツィオの姿が一瞬の内に、ネロマテ達がいる他のビルの屋上にワープしたかのように現れる。

シャイナ「ンアァァァァァァァン（＊´ω`＊）エツィオの羽は温かくて更にモコモコでフワンフワンで、ン〝ギモ〝ォヂィィィィィィｗｗｗ」

エツィオ「ウヘヘｗｗｗそりゃぁ俺の翼は誰でも触りたｒｙ（」

シャイナはエツィオの背中に折り畳んでいた左片翼に包まれるようにして揺り篭の中に眠るような形で、ギュッと包んでいるエツィオの羽を握り締めながら幸せな表情を出す。

一方エツィオは背中で幸せな表情を出しているシャイナを見てニヤケ顔になりながらも、右手の中で握り締める風魔両剣を後ろに構えて、左腕を前に伸ばし手の平を広げながら屋上にいるネロマテ達に向けて“俺得キモカッコイイ体勢”を取った直後…

エツィオ「ＤＡ☆ＤＡ★ＤＡ☆ＤＡＮＣＥだよぉ～～～ん＼（´ω`）／」

ズシャアアアアアア！！！！

風魔両剣を縦から横へと旋回しながら立ち塞がるネロマテ達の身体を凪ぎ払うように斬り捨てて、凪ぎ払った後回転する風魔両剣ごと身体を捻らせながら、屋上床をスケートのように滑りつつ華麗に次々と斬り倒す。

エツィオ「ヒャッハアアアアアアアア（。∀。）」

エツィオは滑りながら前方にいるネロマテ数対を風魔両剣を前に構えて、高速回転させながら上へと斬り上げるように振りかざした直後…

ネロマテJ【ギャァァァァ！！】

ネロマテK【グァァ！？！】

エツィオの前にいた数体のネロマテ達（装甲兵も含む）が両剣の風圧で“軽々と宙に浮き上がって”、エツィオの高速回転する風魔両剣の刃先にズタズタに引き裂かれ絶命する。

ネロマテP【ゴアァッ！】

風魔両剣を匠に振るうエツィオの背後から狙い斬りつけようと、右手に汗を出しながらタイミングを図って大剣を縦一筋に降り下ろしたが…

エツィオ「へっ！」

エツィオは背後から降り下ろされる大剣攻撃を大剣の剣先に向けて、両剣を後ろに構えて“後方両剣先だけで”火花を散らしながら受け止める。

大剣攻撃を受け止めながら後方部分の刃先を撫でるように大剣を剃らしながら動かした後、両剣を横に払うように動かした時ネロマテが持っていた大剣を弾き飛ばす。その直後…

エツィオ「そらよっ！とっ★」

回転させる風魔両剣と共に身体を後方へと捻らせながら前方の両剣刃先を奇襲をしかけてきたネロマテの身体に食い込んだ後、ネロマテの身体を横凪ぎに切断し振るう時に生じる魔風の衝撃波で回りにいたネロマテ達も一緒に吹き飛ばす。

ドチャッ！！！！

ネロマテQ【ギャァ！】

ネロマテR【ギィ！！】

風魔両剣を振るう剣圧（衝撃波）でネロマテ達は散り散りに吹き飛ばされ、ビルの壁や硝子に一部の者は腹から又は背中からぶち当たった瞬間、ネロマテ達の身体がトマトが潰れるように“原型すら留めないぐらいグチャグチャ”になる。

エツィオ「♪♪♪～♪♪♪～～～♪♪♪～～～～♪」

エツィオは口笛を吹きながらビルとビルの間をぬって高く飛翔し、残りのネロマテ達がいるところまでビルの壁を普通に“横方向に走る”。

ネロマテS【飛行部隊！飛行部隊出ロ！！】

ネロマテT【同ジク弓兵モ出テ、飛行部隊ヲ援護スルノダ！！】

バサッとエツィオが向かう先のビルとビルの間から飛魚のような鰭を背中から生えたネロマテが現れて、さらに後方と側面方向から矢兵のネロマテ達が数体現れる。

ネロマテS【サァ、行ケ！】

ネロマテT【撃テ！撃テ！！】

高速に飛行してくる羽が生えたネロマテは片手に黒いガス状のナイフを握り締めながら、背後と側面から援護弓射撃が飛んでくると共にエツィオに向けて突撃する。

エツィオ「ＨＡ　ＨＡ　ＨＡ　★　無駄なことさ（＾＾）ｐ」

エツィオはビルの壁を蹴って果敢に飛んでくるネロマテ達の攻撃へと突っ込むように右手に手にする風魔両剣を前にかざして、身体をクエスチョンマークのように捻って“カメラ目線”に向けたままウィンクをかました後…

エツィオ「Ｔｈｅ☆タイム・ラグ（＾３－）（　☆」

風魔両剣の全身から緑色の帳のような輪が数本発生して、緑色の輪の中に入った弓兵の矢と突っ込んでくる翼が生えたネロマテ数体がピタリと“時が止まった”ように“完全に動かなくなる”。

ネロマテＲ【ギ…ガガ……】

ネロマテＳ【カ…身体ガ……】

ネロマテＴ【ウ…動カ……ナ……！】

グチャ…グチッ……

ネロマテ達は魔神（エツィオ）の魔力で放つ風魔両剣の“無酸素&超重力”で完全に動きが止まり、次々とネロマテ達の身体が風船のように内臓ごと破裂する中…

一般市民A「う…ぇ……」

一般市民B「が…がが……」

一般市民C「グェ…エ……」

地上にいる人間達もエツィオの持つ重力に捲き込まれて、エツィオが振るう“凄まじい重力と無酸素”状態に耐えきれず、グチャリと宇宙に投げ出された人間が身体ごと“ゆっくりな速度で細かく破裂していく”。

エツィオ「フハハ、俺の攻撃はまだ終わってないＺＥ★」

エツィオが残りのネロマテ達がいるビルの屋上へとたどり着いた後、風魔両剣を上にかざして“本来のヴェルズの力”をカメラ目線にいる閲覧者に向けて「ダァァァー！」とガッツポーズをする仕草を取った時…

エツィオ「Ｐｅｒ　ｆａｖｏｒｅ　ｌｏ　ｐｏｒｔｉ　ａｌ　ｍｏ

ｎｄｏ　ｄｉ　Ｓａｔａｎａ（地獄の門へと誘ってやろうじゃねぇか。）」

ゴゴゴゴゴ…

エツィオがかかげられた暗殺魔具の都市の上空に黒い渦のような物体“重力渦（ブラックフォール）”が発生して、破裂死したネロマテ達だけでなく“重力場に入っていないまだ遠くにいた人間”も“偶然通っていた車”もまだ破壊されていないビル”も軽々と破壊・潰殺しながら吸い込まれるように次々と重力渦（ブラックフォール）の中へと入っていく。

エツィオ「Ｑｕａｎｄｏ　ｉｌ　ｃａｎｃｅｌｌｏ　ｆｕ　ｃｈｉｕｓｏ…（出口を閉ざした時…）」

イタリア語を吐きながら手にする風魔両剣を地面一直線に突き立てて、右腕肘裏を握り部分に組むような形で身体を暗殺魔具に寄りかかりながら、背中にいるシャイナと共にお互いテンポ良く“カメラ目線”に向けてニシシ♪ときれいな歯を見せながら…

エツィオ「Ｉｌ　Ｐｕｒｇａｔｏｒｉｏ　ｄｏｖｅ　ｎｏｎ？ｐｅｒｍｅｓｓｏ　ｍａｉ　ａｎｃｈｅ　ｐｅｒ　ａｐｐａｒｉｒｅ　ａｓｐｅｔｔｅｒ？★（二度と出ることすら許されねぇ“地獄”が待っているＺＥ★）」

シャイナ「Ｉｏ　ｒｉｃｅｖｅｒ？　ｃｈｅ　ｔｒａｔｔａｍｅｎｔｏ　ｔｅｒｒｉｂｉｌｅ　ｄａ　Ｌｅｉ（笑）（こりゃぁなんて“鬼畜”使用なんすかｗｗｗ）つか…俺もノリノリでイタリア語で言っちゃったｗｗｗアベブｗｗｗ」

シャイナもノリノリでエツィオと共に同時台詞を吐いて突っ込んでいた時、エツィオ周辺に立てられていた建造物が全て“荒地”のように所々草木が生えるところが見えながら“都市の跡形も無くなっていた”。

第七十九曲　元の自然の姿は人間よりも超強い！テラＤＯ根性！！

―スペイン　マドリード　荒れ地（元中心都市大通り辺り）―

エツィオ「上出来！流石だぜ、ヴェルズ！！」

全域が無重力と無酸素状態の最中、エツィオと翼で身に包むシャイナの身体だけは“重力の力と無酸素状態さえ全然効かなく”、“きちんと重力と無酸素が仕事しないまま普通に地上へと落下”し、綺麗に両足を着いてお互い顔だけを空に向けて見上げる。

シャイナ「あーあ、中心都市の一部が“丸裸”になっちゃったなぁｗｗｗでも…」

シャイナは地面に生えていた無数の草木と一輪の白い花を見て静かに微笑む表情を出しながら、そっとエツィオに聞こえるように呟く。

シャイナ「自然って、人の力に食い潰されても“活きている”んだね。」

エツィオ「どんなに人間共が外圧を与えようとも、自然は大地は人

間なんかに負けないのさ。これが“本来有るべき地上の姿”。時期に“このような姿へと戻すことがあるかも”しれないな。」

エツィオがそう言った後左手親指をパチンと弾くように鳴らした時、上空に開いていた風魔両剣の“力の一部”である重力渦(ブラックフォール)をマンホールのフタのようにパタム♪と音を立てて“可愛らしく閉じて”、空気中の無酸素を元の酸素へと戻す。。

ヴェルズ『自然…云わば霊力は私の力であり、大地に眠る霊魔や地力は力を引き出す動力源となる。そ…それよりも、貴方様のご助力があったこそ私の力を最大限に引き出し、我が永年封じ込めてきた“古の魔力”を解放し解き放ったのです。／／／』

風魔(ヴェルズ)両剣は恥ずかしがるような言動を吐きながらエツィオに言い、エツィオは「お前の本来の力をあの時見せていれば良かったのにｗｗ」と風魔両剣に言い返す。

エツィオ「まぁ、俺が出会った時以降…お前の“本来の性格”だからな。十分あの時から分かっていたさ。それに良く働いた、偉いぞぉｗｗｗ」

ヴェルズ『は…はい！！／／／／／あ…有難いお言葉を…』

ヴェルズはエツィオに褒められたことで両頬を赤く出しているかの

ように、緊張のあまりか言葉が途切れ途切れになりながらもエツィオに感謝の言葉を返す。

エツィオ「これからは俺の使役(ペット)だ。中にいる先輩達(ブリトラとアンゲルス)にも挨拶してO・KE。」

ヴェルズ『はい！』

エツィオはヴェルズが活気よく答えるのを聞いた後、満足したかのように右手に持っていた風魔両剣を一回転させた後身体の中に仕舞う。

シャイナ「よっとと…自然って本当に凄いんだね。人間と違ってすん晴らしいｗｗｗ」

エツィオ「此所は丁度良い霊地(マナ)が溢れているしなぁ。地面から生えている草花も喜んでいるＺＥ♪」

荒れ果てた大地に風が吹き凪がれ地面に生えていた元々の草花が風に揺れる中、エツィオは背中の翼で巻いていたシャイナを地上へと下ろし、背中に出ていた漆黒の鷹の翼を中へと仕舞う。

シャイナ「あっ、ホントだ。エツィオの足下から何か戦●のような

“蛍の光”が出ているｗｗｗ」

シャイナはエツィオが言われた通りに足下を見ると、エツィオの足下から“赤紫色の丸い光”が登るようにして出ており、地面に生えている自然達も喜んでいるように、風でユラユラと揺れていた。

エツィオ「そう、これがヴェルズが言う霊魔溢れる地力“霊地（マナ）”だ。魔帝含めて悪魔達に取ってはこの霊地が厄介な存在。魔を退く力もあるし、魔族がこの霊地に入ると力を逆に奪ってしまう。」

シャイナ「云わば悪魔にとっては“バッドな場所”ってことなの？」

シャイナは地面に覆い茂る草花を撫でるように触って、魔神であるエツィオの身に何か問題が無いのか心配する表情を出す。

エツィオ「まぁ、そうだな。ぶっちゃけ簡単に言うと、アルタイル達“聖なる神々”又は“ヴェルズやアンゲルスのような現世の光に近い特殊な特級悪魔”が力を吸いとって“力”に変換する“補助動力源”なんだ。だが…

エツィオは腰を折って背を低くし霊地に咲く一輪の花を優しく触って、穏やかな微笑みの表情を出しながら心配しているシャイナに言う。

エツィオ「悪魔である“魔神（オレ）”は特別。前は“神体”って言ってたけど、本来アルタイルが言うには俺の身体はアルタイル達と同じ“聖霊体”。闇の世界で生まれながらにして“光”の力を持つんだ。」

エツィオは足下から溢れ出る紫色の丸い光に向けて左手をかざした時、一瞬の内に荒れていた地面が天国にいるような“色とりどりの花畑”へと変わり果てる。

シャイナ「エツィオが“光”となると…アルタイルは…」

エツィオ「ザッツ★ライト、シャイナ♪アルタイルは光の世界に生まれながらにして“闇”の力を持つ。光と闇（オレアルタイル）の力が交互に保つことで世界の…“星の平行世界（ちきゅう）”を守っているんだ。」

色とりどりの花畑に白いモンシロチョウが嬉しそうに飛ぶ中、エツィオは顔を上へと上げて一息をつく。

エツィオ「まっ、こんな長っダルい話なんか置いといて、次なる特異界へと向かうとするか。シリアスすぎる話なんぞｒｙ（」

シャイナ「そうだね。ｗｗｗんじゃ、スペイン発つ前にアイモンじいちゃんに挨拶して行くか。」

シャイナは“必死に小説編集している作者の都合”の形相を思い浮かべながらブフッと吹くように笑った後、エツィオを追い抜くように数歩前へと出る。

エツィオ「あいよっ♪それと次なる特異界は此処から“北方向”になるんだ。アルタイルが言ってた通り、林檎の気配もあるしな。」

シャイナ「（ドイツかイギリス辺りか…）んじゃぁ、挨拶終わったら、“地下特別列車”使いましょうかね？地上は私達を追っている大勢の警備員や教会の奴らもいるかもしれないし…」

シャイナがンーと両腕を上に上げて背筋を伸ばし軽いストレッチをしていた時、エツィオが「“ちかとくべつれっしゃ”！？何ソレ何ソレェ！！？？」と目を輝かせながらシャイナを追い抜いて、子供のようにはしゃぎながら期待する表情を出す。

シャイナ「まっ、見れば分かるＹＯ★じゃぁ、エツィオ。何時も通りに…」

エツィオ「ＴＨＥ☆“ラグディカルグッド俺ばいく”召喚！」

パンパカパーン♪とでも何処かで効果音が鳴り、エツィオの右手が身体の中に入れた後、右手が身体の中から出てくると同時に黒いフ

レームで被われた大型二輪車を取り出す。

エツィオ「ＳＡ☆シャイナお嬢様、ドゾー♪」

エツィオは先に大型二輪車に跨いで乗った後、シャイナに向け少年のように笑顔を出しながら、左手を差し伸べるように前へとかざす。

シャイナは「アイモンじいちゃんがいる家まで頼んマス（＾８＾）」と言って、差し伸べられたエツィオの左手を右手で握るように掴んだ後、フワリと優しく誘われるようにしてエツィオが座る後部座席へと乗せられる。

エツィオ「んじゃ、“作者の仕事が終わって体力がテラヤバいという勝手な都合”で派手に重要シーンをフリーダムにかっ飛ばすＺＥＥＥＥＥＥＥＥ！！！！」

所々“作者の近況代弁”を代わりに語ったように言った後、エツィオは右部分にあるアクセルを回して後輪を数回擦った後、爆音と共にエンジンノズルから青白い炎が出る中…

エツィオが駈る大型二輪車は“空中”へと飛ぶように上昇していって、かつての中心都市の一部だった区域を本来の地面の姿である元の咲き乱れた美しい草花区域を後にした。

第八十曲　隠された一軒の幻悪魔バー♪

―スペイン　バルセロナ　路地裏雑貨屋アイモン工房前通り―

アイモン「おっ…帰ってきたか。」

ブゥゥン…

正午を過ぎやや夕暮れの空が掛かった色を映す中、静まり返った人通りが少ない路地裏通りに、店の外掃きしていたアイモンが青白いアサシンの紋章が機械音と共に宙に現れるのを顔だけで振り返って見る。

アイモンは店の外掃きを途中で止めて掃いた塵を四角い塵取りの中にチャッチャと入れた後、店入り口の傍らに清掃道具を置いた直後…

シャイナ「Ｈｅｙ!連載“８０”回から来ますたぁぁぁぁぁぁ！！！！」

エツィオ「迷惑?喧しい??場違い???帰れ（・∀・）そんなの

関係ねぇ！！！！」

バオォン！！

紋章の中心からエツィオが運転する大型二輪車に乗ったシャイナが飛び出すように登場してきて、大型二輪車の前輪から地面のアスファルトに着いた後…

エツィオ「仮面ラ●ダー風登場止め&決めッ！」

ザザザッ！

横に滑るような形でズザーと“俺得ヒーロー的なカッコイイ走行”をしながら、アスファルトにタイヤの痕を刻みながら車体を一周した後、華麗に止まる。

シャイナ「まさか、リク通りのぶっつけ本番で“一発成功”するとはなｗｗｗ流石チートツィオｗｗｗ」

一流スタントマンでもこのような猛スピードのバイクを止める荒業なんて“二次元漫画”に出てくる人物以外は出来ないぐらい難しい技術なのに、エツィオは見事二次元漫画のように楽々と神技を見せつけたようだった。

エツィオ「んなＨＡ・ＨＡ・ＨＡ♪俺様に出来ないことなんて、何一つナッシング！（キリッ」

シャイナ「あっ、途中から“このような展開”になったことは、フリーダム小説を見る閲覧者の皆様なら分かる通りｒｙ（」

エツィオは“カメラ目線”に向けて歯並びが良い歯を見せながら右親指を上に立てて、“俺テラカッコイイ超グッド（＾＾）ｄ”とでも言うように王子スマイルの表情を出す。

エツィオ「おっと、シャイナも遂に省略してきたかｗｗｗ」

シャイナ「だってダルい説明なんて“めんどくさい”し、作者も人間だからさ、“無駄な手間掛かる内容なんぞ書きたくない”しｗｗｗ」

シャイナはエツィオの股がる後部座席に座りながらポンッと丸めていた左手を右手に乗せて、今更ながら“小説的な展開近況”を多少めんどくさい風に言いながら、台本並みの片言でカメラ目線に向けて省略するように言う。

エツィオ「そうだよなぁ、限られた文字内で携帯ボタンをカチカチ

と動かす作業は“マジ嫌＆鬱になるw”と作者本人はそう言ってるしwww」

シャイナの作者代弁を聞いたエツィオはクスッと苦笑いした後エンジンを止めてバイクから降り、シャイナに向けて右腕を伸ばし右手を差し伸べる。

シャイナ「PC使って打っていても、途中気分転換に他のサイトに行って“長い時間放置プレイするから駄目だ”と言っているしw」

エツィオ「結局は作者の“やる気”だけだな。まぁ、俺らのような“架空人物”に代弁させる作者も阿呆ぃがなwww」

シャイナはエツィオの差しのべられた右手を左手で握った直後、プワンッ♪とシャイナの全身体が青白い光に包まれて“海に漂うように宙に長く浮遊する”。

エツィオもシャイナと共に宙に浮いて残っていた左手を伸ばしシャイナも残っていた手を使って握り、空気で大の字になりながら“エアグライダーのように何度も空中回転”した後…

エツィオ＆シャイナ「「俺得エア★フィニッシュ！！」」

エツィオはシャイナの腰辺りに両手を持って優しく抱き抱える（お姫様抱っこ）するように、身体を回転させながら両足をアスファルトの上へと着けて、腰を少し折り両足を開いて“カメラ目線”に向けたまま“フィギュアスケートの選手の〆ポーズ”を華麗に決めた。

アイモン「作者の近況代弁も良いが、そろそろ俺も喋らせてくれないか？いい加減“俺の存在そのものが空気扱いになる”ＺＥ★」

アイモンはそんなノリノリな二人に突っ込みを入れながら塵取りの中に入っていた塵をゴミ箱の中に入れて、パッパッと“スルーする”ように清掃道具を片付けながら言う。

シャイナ「エー～～～（´Д`）嫌だよぉ。アイモンじいちゃんは此れから出番少なくな「Ｎｏ　ｗａｙ♪俺の出番は此所の“章”だけＧ☆ＥＮＤせん！」ちょっｗｗｗ」

今までいた路地裏通りの風景が荒ぶる海の波打つように“様々な絵の具をぶっかけたようなモノ”が、周囲の風景をグニャリとねじ曲げるように変化させる。

アイモン「シャイナちゃん…。１６年経っても“外見は５０代のオジサン”、“幼い頃のシャイナちゃんと全然変わらない”のはおかしいと薄々思っているだしょ？」

シャイナ「あっ…Σ（・・）」

周囲の変化を顔だけで動かしながらオワタ体勢のまま片足だけで支えて回転しているアイモンを見て、“１６年前と外見がまったく変わり無い”姿を見てやや目を大きく広げながら見続ける。

アイモン「小説的な都合だけど、俺は隣にいる若き勇者君と同じ“悪魔”だ。元破壊の王城の一柱の悪魔にして…」

薄暗い部屋の中に数台の時代の駈った木製テーブルが置いてあり、上部にはチューリップのようなオレンジ色のランプが数台灯し、前方にはバーのようなグラスと酒が並ぶカウンター席が敷いてあって、二人はアイモン魔力により結界の中へと移動させられていた。

アイモン「現・表は雑貨屋工房の店長☆。裏は闇世界に活きる俺ら人間らしい悪魔が集う“物品取引場”ＤＡ。今更ながらようこそ！“アルボーレ　ド　バンケット”へ！」

バーのカウンター席の奥でバーの店員のような黒いコスチュームを着たアイモンがいて、シャカシャカと中身が入った酒の銀色の瓶（シェイカー）を両手を使って何度も振り、二人のために自慢のカクテルをノリノリな動作で作っていた。

―創魔結界　アルボーレ　ド　バンケット―

アイモン「今は此所の来客数は“俺が認めた奴のみ来場可能な特殊結界の場所”。今でも“気が合う仲魔がいる”けどなｗｗｗ。」

エツィオ「へぇ…気が合う俺のような悪魔もいるのか。それに…」

シャイナ「なんて“お約束な展開”ｗｗｗ実のおじいちゃんのお友達が“悪魔デシター”ってｗｗｗ」

エツィオは店内（けっかい）に流れる現代風のクラシックミュージックを聞き、シャイナはもうこの展開は“お約束”という雰囲気ではぁと一息ついた後、二人はカウンター席に歩みながらドカッと開いていた椅子に座る。

アイモン「まぁまぁ、シャイナちゃん。そこは“小説の都合”だから、このような展開はこの先あると思うしｗｗｗそれは置いといて…」

アイモンはブフッと苦笑いしてシャイナに突っ込みを入れた後、カウンター席に置いてあった二つのグラスの中に作った“青白い光を放つふつくしい酒”トクトクと音を立てながら入れる。

アイモン「当店新創作酒の“エル・シエロ”だ。黒い兄ちゃん、アンタのイメージカラーだＹＯ★なぉ、俺が作った酒は一切魔力を使

ってないＺＥ。現世にない本当の匠技をご覧くだせぇ♪」

エツィオ「マジかｗｗｗんじゃ早速（＾ｐ＾）」

シャイナ「頂きマース＼（＾ｏ＾）／」

二人はアイモンが作った青白い光を放つ酒（カクテル）が入ったグラスを手に取って、チョビっと口先から飲み始める。

シャイナ「うほっｗｗｗなんて“ほんのり”かつ“ふつくしい”咽越しｗｗｗ…超うめぇぇｗｗｗ」

シャイナはアイモンが作った酒（カクテル）の味を、研修先で行うクソ講師による“格安味”と今現在の“最高級味”に感動して、思わず息を漏らすほど、驚く表情を出す。

アイモン「ＨＡ　ＨＡ　ＨＡ（´∀＋、）、若き勇者君に捧げる“旅のまじない”なもんだ。それにシャイナちゃんとお前が向かう先“特異界”は非常に“妖精界”に近い区域になる。」

エツィオ「分かっているさ、アイモン。“アレ”以降はもう妖精界なんて行きたくないｗｗｗ寧ろ絶対助けを求めても行くもんかｗｗｗ」

エツィオはグラスの中に入っていたカクテルを飲み干した後、カチャカチャと皿の音を立てながらメインの料理を乗せているアイモンに言う。

アイモン「分かっているならいい。あそこは“人間問わず強者や異端者”を“蝿虫のようにしつこく追い回す”輩だからな。出来る限り入らない方をお勧めするぜ。」

クハハとアイモンは笑いながらメインディナーを皿に乗せ飾りを添え終えた後、カウンター席に座る二人にメインディナーを差し出す。

アイモン「今日からお前さんはこの“結果内に入ることを許す”ようにしてやる。町の何処かで“人がいない所”でこの魔札（カード）に少量の魔力を注げば此処に入れるＺＥ。何時でも“店”を開けといてやるからな。」

エツィオ「サンキュー、アイモン。」

アイモンは二人にディナーを差し出すついでにアイモンの羽織る黒いスーツのポケットから、四角い小さな黒いカードを出しエツィオに向けて軽やかに手渡す。

アイモン「神界にいる若き天神にも“コイツ”を渡しておいてくれ。アイツにも“色んな素材を半殺しにして集めている”と聞いたからな。今いる店にも気が合う奴にも多少“調達”してもっらっているからＳＡ★」

エツィオ「ああ。」

エツィオは手渡されたカードを手に取って懐の中へと仕舞った後、口元を吊り上げて二人はほんのりとしたひと時を過ごしていった。

第八十一曲　次なる特異界へ行ってトレイン！

―夜　スペイン　バルセロナ　サンツ駅　地下2階―

アイモンの創魔結界の中で次なる場所へと旅立つ前の前菜を身体に十分満たした後、二人はアイモンが運転する汚れ着きのワゴン車でサンツ駅へと着いた時、太陽はもう沈んで闇に満ち夜空に輝く星の下で辺りは電灯の光を灯していた。

三人は駅へと入り途中売店で半透明になったエツィオ用のチュッパ●ャップス（ソーダ味）を買って終点駅までの切符を購入した後、地下の列車待機所へと続く改札口まで着いて来てくれた。

アイモン「見送りは此所までだな。シャイナちゃんと黒い若造兄ちゃんの坊主。」

シャイナ「ありがとう、アイモンおじちゃん。此処まで見送りさせて貰って。」

シャイナは改札口まで付き添ってくれたアイモンに感謝の言葉を言った後、アイモンは「シャイナちゃんのためなら構わんもんＳＡ★」

と言って、歯を見せながら笑う表情を出す。

アイモン「此処から北上となると“ドイツ”辺りだな。それまで…」

エツィオ「分かっているさ。出来る限り妖精界に入らないように俺もシャイナも気をつけるＺＥ。」

シャイナの隣に立つ半透明のエツィオがアイモンに言った後、改札口の階段下から通り抜ける風音と機械音が大きく鳴り響く。云わば列車が来た証だ。

アイモン「一応俺の店から発つ前に“唯一信頼している常連客の一人”に連絡を入れておいた。そいつに会えばある程度の情報を手に入れることが出来るはずだ。それと…」

エツィオ「？これは？？」

ポイッ♪とアイモンは懐から半透明状態のエツィオに向けて何かを投げ、エツィオは右手で鷲掴みするようにナイス★キャッチした後、手の中にあるモノを見てアイモンに言う。

アイモン「最近魔界から仕入れた“珍しいゴロツキ”の一つだ。“上手に使え”。」

シャイナ「（何か空気を読むかのように主人公に“強アイテム”を強制的に入手になっている気がするＹＯｗｗｗ）本当に有難う。んじゃ…」

シャイナは後ろへと振り返った直後シャイナの隣にいたエツィオが「ＷＯＷ★面白い“魔具”だなコレェェ♪」と興味津々の表情を出しながら言って軽くジャンプし、シャイナの左肩の上に小鳥が木の上で休むように止まるような座り方をする。

アイモン「気をつけて行ってこいよ！武運を祈るＺＥ（＾ｏ＾）／～～～」

背後でアイモンが最高の笑みを出しながら左腕を上へと伸ばして、ブンブンと腕を横へと振って去っていくシャイナを見届けながら、列車待機所へ続く階段へと歩んでいくシャイナと半透明のエツィオの姿が見えなくなるまで振り続けた。

…

……

……

―スペイン　バルセロナ　サンツ駅　プラットホーム―

エツィオ「うへぇぇぇぇ…これが“とっきゅうれっしゃ”て、言うんだぁ。無駄に“箱”が長ぇよ。」

エツィオはプラットホームに停まる様々な列車を見て、顔を右往左往に動かし口元に買ってきてくれたソーダ味の飴をチュパチュパとしゃぶり、興味津々の表情を出しながらシャイナに言う。

シャイナ「此れが“列車”。今から私達が乗るのは特急列車。云わば早く着くための列車よ。小さな駅を飛ばして中心となる駅のみ停まる特殊列車の一つね。」

シャイナは左肩の上にいるエツィオに説明しながら、行き来する様々な人混みを避けつつ小声で言う。

シャイナ「えっと…1号線の“ブルーコメット”は……あった！」

シャイナは顔を右往左往に動かしながら乗車する列車名を探しある程度歩いた後、次なる目的地へと辿り着く列車を見つける。

シャイナ「食事&寝室付きの予約制特急列車に乗るわよ。ウフフッ…一度は乗ってみたかったんだよねぇ～（＊´ω`＊）」

エツィオ「へー、食事と寝室も付いているのかぁ～。色々とあるんだねぇ♪」

エツィオはシャイナが乗る列車の機体に塗られている青い線と、列車名に相応しい青い軌跡を残す彗星シンボルが描かれたフレームをジロジロと興味津々に飴を口の中に入れて嘗めながら見る。

ポロロロロロロ…

上部に付けられていたスピーカーから音が鳴って、プラットホーム全域にいる乗客に女性の機械声が淡々に伝える。

アナウンス《間もなく、一番線“ドイツ行き方面”の特急列車が発車します。ご乗車のお客様は急いで乗車をお願いいたします。繰り返しお知らせします。間もなく…》

シャイナ「さて、行きますかね。エツィオ…」

シャイナは次なる目的地へと決意を固めてやや険しい表情を出しながら、左肩に乗るエツィオに向けて顔だけを動かして言う。

エツィオ「ああ、行こうぜ。今度こそ、林檎を奪還だ！（ˊ・ω・ˋ）」

エツィオはシャイナの強き決意の表情を見て応えるように、エツィオは口元を吊り上げて自信満々に笑う表情を出しながら言う。

シャイナ「行こう、エツィオ。あっ！その前に…」

シャイナはアナウンスが言っていた列車の乗車口に入った直後、ポンッ♪と丸めた右手を左手の平に乗せるように叩いて、何かを思い出すように呆ける仕草を取る。

エツィオ「どうしたんだ、シャイナ（？ω？）」

エツィオはシャイナのポカーンとした表情を見て、やや戸惑う表情を出しながら質問する。

シャイナ「折角食事付きだから何か食べていーこぉｗｗｗ（此所の列車に出される料理が“高級ロブスター料理のフルコース”だもんで一回は食べてみてぇ♪）」

エツィオ「おまっｗｗｗアイモンが作った料理じゃ、全然足らなかったのかｗｗｗ流石人間の腹は“理解出来ない”ぐらい計り知れないなぁｗｗｗ」

エツィオがシャイナに向けてからかうように笑った後、シャイナは「あの時はあの時、今は今よん★」と腹黒い表情を出しながらエツィオに言った直後…

プシュー…

シャイナとエツィオが乗車した列車の乗車口が横から閉じて、ゆっくりと車輪を動かしながら列車は前へと動き出した。

第八十二曲　人間対特級悪魔による大食い選手権

―ドイツ行き特急列車　ブルーコメット　１２号車　１０２号室―

シャイナとエツィオ（半透明）が乗車した特急列車は高速に疾走し、背景に映る都市の光の残像を残しながら通り過ぎていく。

列車内部は薄暗いオレンジ色の光で包まれており、長旅に向けて乗客達は寝室に篭って一時のやすらぎを過ごしていた。そんな最中…

エツィオ「うひょぉぉっ♪速い速いｗｗｗ街が早送りみたいで見えないなぁｗｗｗ」

エツィオは列車の窓に両手の平をペタリと張り付いて、高速に流れ去っていく景色を見ながら子供のようにはしゃぐ表情を出す。

シャイナ「そりゃ、特急列車だもの。私達が乗る列車は“終点”までは停まらない列車よ。つーか、このロブスターうめぇぇぇｗｗｗ」

ガブッ♪ガブブッ♪♪

列車最後尾のシャイナとエツィオがいる１０２号室は他の寝室と違って昼間に近い明るみがあり、窓際には景色を見ながらはしゃぐエツィオ（半透明）と、シャイナはテーブルにのせられたロブスター料理のフルコースを“原始人のようにがっつきながら汚い作動”で食べていた。

シャイナ「ウフフーン♪（＊´ω`＊）このプリップリなロブスターの中肉がうまぁぁぁい。高級素材入りホワイトソースとフォアグラと一緒に頂けるなんてぇ…超最っ高ぉぉぉぉぉｗｗｗ」

口元の回りを白いホワイトソースまみれにしながら、シャイナは幸せの表情を出しながらロブスター料理をザザッと口の中に流し込んでいく。

エツィオ「良かったな、シャイナ（＾＾）それにこの魔具は…」

窓際の景色から振り返りシャイナのがっつき姿を見て微笑む表情を出すエツィオは、アイモンから貰った“モノ”を懐から取り出す。

形は籠手のような形で中心に何らかの紋章のようなモノを刻み、全体が鋼の金属で覆われた“鋼の魔具”を見てふむっ、と呟く。

エツィオ「珍しい“ゴロツキ物”ねぇ。てか、アイモン…とんでも

ないモンを入手したなｗｗｗ」

シャイナ「えっ、それはどういう意味なの？」

シャイナは右手に持つ魔具を見ながら険しい表情を出すエツィオを見て、きょとんとしながら今食べている料理の手を止めカチャンと皿の音を立てる。

エツィオはジロリと手にする籠手形魔具をじっくりと見た後、口元に付いていたホワイトソースを布で取っているシャイナの姿を見ないで、籠手形の魔具を見詰めたまま言う。

エツィオ「“羅刹王（ラクシャス）”の力が入った特級魔具だ。それにこの籠手自体が“羅刹王が纏う鎧の一部”なんだよ。」

シャイナ「羅刹王…たしか私達の世界では守護法神の一柱であって、かつ十二天の神サマの一人？？」

シャイナは冷静にテーブルの上にあった黄金色のスープを飲み、切られていたパンの上に砂糖付きマーガリンをたっぷりとナイフで漬けて、エツィオの右手に持つ籠手を見ながら言う。

エツィオ「現世の人間達ではそう言われているが、本来の名は神で

はなく“堕ちた悪魔”。ただ力と真理を求めて神サマに近付きすぎた“馬鹿野郎”の末路だよ。」

シャイナ「あー、そういえばどっかで聞いたような神話を聞かされたなぁ。神サマが与えた蝋で固められた翼を与えた人間が、太陽…云わば“神”に近付きすぎて背中の蝋の翼が溶けて堕落したというのを聞かされたなぁ～ｗｗｗ」

ガジリッと砂糖付きのマーガリンを漬けた斜め切りのフランスパンをかじって、幼い頃に聞かされたあの鼠色のローブを纏った糞ジジイの話を思い出す。

エツィオ「こいつは元々“上位の神”だったそうだが、あることのきっかけで反逆を起こし、神から魔族へと堕とされて…まぁ、話は似ているな。」

すると羅刹王の魔力が籠手全体に赤紫色に覆い所々獣の口のような形を取って、抑えているエツィオの右手を噛み付こうとしてエツィオの右手をまとわり憑こうとしたが…

ブリトラ《ガルルルル…》

エツィオの背中から顔半分だけ現れたブリトラがヌゥンと出てきて、エツィオの右手に噛み付こうとしていた羅刹王の魔力の形を取った

獣の口達が、ブリトラの威嚇声でギョッとたじろぐ。

アンゲルス【何をするつもりだったのかしら？】

ヴェルズ『…潰れたいですか？』

ブリトラだけでなく背中から上半身だけ出していた不満顔のアンゲルスと見下し視線のヴェルズが現れて、ブリトラ同様に“威嚇＆殺気”を放ちながら交互に籠手に覆う羅刹王の魔力に言う。

エツィオ「羅刹王（ラクシャス）だっけな。何時でも不意にお前が俺を喰い殺そうとしてみろ。まぁ、俺には手馴れているから全然スルーしてもいいが…」

エツィオは右手に持つ羅刹王（ラクシャス）の籠手をグッと軽く握り締めた途端、ギシッと鋼が悲鳴を上げるように軋む音を立てながら籠手に覆う魔力達はエツィオの悪魔並みのニヤケを見て恐怖する。

エツィオ「俺の中にいる使役達（ペット）が黙っちゃいねぇぜ…？」

エツィオの背中から出ている一匹と二人の両眼から車のハイライトのように光が強く出ており、威圧と威嚇が混じった本当の“鬼神面”を籠手の魔力達は見て、もう大人しく従う他にないとザワザワと

していた赤紫色の魔力を静める。

エツィオ「そうだ、今のお前にとってはそれが懸命…良い子だ。」

エツィオは右手の中に手にする籠手にそう言った後、両目を閉じてニタリと笑う表情を出しながら静かに懐の中へと仕舞う。

シャイナ「流石チートジジツィオｗｗｗどんな元上位神でも“力”で服従…あっ！」

シャイナがエツィオの強制使役を見てクスッと笑う表情を出していた直後…

ブリトラ《ガゥ。》

パクッ

とシャイナが食べ欠けていたホワイトソース付きロブスターを、エツィオの背中から出ていたブリトラが身体を伸ばして隙を見て口を開いて丸ごと盗み食いする。

シャイナ「ちょっｗｗｗ人間様の料理喰いやがったｗｗｗ」

ブリトラ《ガフ…ガフ…ガフ…ガフ…ゴクッ…》

しっかりと味わって飲み込んだブリトラは（＊＾ｍ＾＊）　ムフッとにやける表情を出して…

ブリトラ《ガァゥ。》

シャイナ同様の人間が作る食の幸せを味わいながら、次々とテーブルに乗せられていた料理平らげていく。

シャイナ「この…“糞犬”がっ！！人間様の料理を幸せそうに喰うんじゃねぇぇぇぇぇぇ！！！！」

ブリトラ《！…バアゥッ！！バゥ！！バォッ！！》

シャイナは神さえ勝るぐらいの激怒（自分だけの料理に手を出された）の表情を出して、瞬時にフォークを手にとって残っていた次なる料理をグサッと刺し、ブリトラよりも先に食べ始める。

ブリトラはシャイナが言った“犬”の言葉でやや怒ったか、牙を剥き出しにしながら吼えた後、お互い視線から火花を散らしながらシャイナ同様我先に次なる料理を貪り始める。

小さな寝室が“人間ｖｓ悪魔による大食い選手権”のように、騒がしいほどの活気になっていた。

エツィオ「ありゃりゃｗｗｗいつの間にか大食い対決にｗｗｗブリトラ腹減っていたのかｗｗｗ」

エツィオはブフフッ♪とシャイナとブリトラによるテラ真剣大食い大会を見て、両手で口元を抑えながら吹く仕草を無理矢理止めて笑い声を出す。

アンゲルス【まぁ、元気ねぇ。昔から可愛い坊や（ダーリン）に従っていたあの“駄犬”がここまで…】

ヴェルズ《不思議に変わるものですねぇ。我々もｗｗｗ》

アンゲルスとヴェルズはクスクスと笑う表情を出しながら、人間と魔竜による料理の取り合い合戦を可笑しく思い、今までの自分達と変わった所を心の中で感謝の言葉を人間と魔竜を見て笑っている主（エッ）人（イオ）にそっと呟いた。

アンゲルス【私に慈愛を与えてくれて有り難う、可愛い坊や。（ダーリン）】

ヴェルズ《心を感情を…教えてくれて有り難う御座います。エツィオさん。》

一時の幸せに満ちたシャイナ達が乗る特急列車は、山の中へと入り遥か深部へと続くトンネルの中へと入っていった。

第八十三曲　五角形の偉い人大集合＋α

―同時刻　アメリカ　ペンタゴン国防省　緊急会議室―

バシッ

暗闇に満ちた室内に大勢集まる人間達と灯される前方の一つの光、
その光には様々な映像が映し出される。

？「全世界の総司令官及び全大尉殿に前コード名“ゼウス”と我々は名付けていましたが…」

映像が切り替わると共に前方に映る全てのシーンが、エツィオによる残虐映像（無差別無双）が映し出され、前方にいる人間が淡々と画像を切り換えながら話を続ける。

？「この映像を見て下さい。コード“ゼウス”が“無慈悲の破壊者”へとなる瞬間を！！」

？一同「「！」」

次に映し出される映像がエツィオの“魔神化”姿であり、会議室にいた全ての人間達はどよめきを起こす。

？「我々にとってこの“怪物”は危険な存在だ。映像で見る通り…」

エツィオがアスタロトを滅ぼす前に変身した決定的瞬間と、破壊された都市（荒れた大地）を雑草だらけ（浄化）にするムービーを流す。

所々映してくれたカメラマンまで悲鳴声が混じり、映像に血のような血痕が付着して巻き込まれていく様子が生々しく会議室内に響き渡る。

？「仮名“無慈悲の破壊者”…この怪物をフェイズ8対象（全世界危険対象者）とし、コードネームを“クロノス”へと変更する。」

前方にいた人間がそう言った時、バシリッと前方に映し出されていた映像を消して、元の蛍光灯電気で明るみに満ちた会議室へと戻し、暗闇で分からなかった彼らの姿が明らかになる。

前方にいる人間を除く人間達は２０～４０代年齢で、各国の様々な軍服を着ており、胸に各国の様々な階級のバッチを付けていて、全員が前方にいる白い軍服を羽織った白髪の老人を一斉に注目する。

？「“クロノス”…創造と破壊を司るティターン（天空ある者）神族の無慈悲なる王か…ククッ！」

前方にいた白軍服を羽織った老人の話を聞いていた今いる場違いの黒い迷彩軍服を着た屈強の２０代後半の若き男の一人が、壁隅に寄り掛かるようにして腕を組み静かに言う。

？「グリード少佐君、静粛に…アンシュトゥルム氏を殺害したこの“怪物（クロノス）”をもはや野放しには出来ない。なので「失礼する…。グラム総司令官」

バタムッ

老人の話を遮るかのように完全武装したもやし体型の中年軍服男が入ってきて、右手には様々な資料が積まれた書類を挟みながら会議室の白いテーブルの上に置きながら言う。

？「“クロノス”の場所を特定しました。クロノスとコロナドアンジェリ狂信者はドイツ方面行きの特急列車（ブルーコメット）に乗車、特急列車は今北方面へと北上中とのことです。」

ブオンッと前方のスクリーンに青白い座標のような地図が現れて、

黄色く光点している光が映し出される電子地図の上方向へと高速に点滅していく。

？「なぉ、これがコードネーム“クロノス”の今現在の戦闘データを取った資料です。一度目を通しておいて下さい。」

パサッと手にしていた厚い一つ一つの資料を各国の司令官にリレー形式で渡して、司令官達は無言で今現在のデータ内容を目線だけで動かしながら読んでいく。

グレイズ大尉「あくまでも“今現在”の戦闘データです。その後にも修正予定も検討しています。」

グリード少佐「ケッ…こんな紙っペラなんかに頼るなんて…」

グレイズが淡々と機械のように言うのを聞いてやや苛立ったか、グリードは歯軋りをしつつ手渡された厚い書類内容をちょこっと見た程度で、グシャリと書類を握り潰す。

グラム総司令官「…グレイズ大尉、直ぐに近辺にいるフランス軍総司令官“バーニア”に出撃要請命令を掛けろ。手段は問わん。」

グレイズ大尉「了解（イエッサー）。」

白髪の軍服を羽織った老人グラムが隣にいたグレイズ大尉にそう言った後、グレイズ大尉はグラムに向けて敬礼をピシッと決めて、敬礼後十分訓練された歩行で綺麗に会議室から退室していく。

他の各国から召集された司令官及び大尉達も手渡された書類を右脇に挟んで、先に出ていったグレイズ大尉の後を追うように静かに退室していく。

グラム総司令官「…グリード少佐君。」

グリード少佐「あんだよ、ジイサン??」

気にくわない表情を出しながらグリードは会議室から出ていこうとしたが、いまだに手を組ながら座っているグラムに顔だけで不機嫌を露にした表情を出して言う。

グラム総司令官「時が来たら…お前も…」

グリード少佐「けっ！」

グリードは総司令官のしかめっ面の顔を見て更に機嫌損ねたか、ペ

ッと床に唾と吐きグシャグシャにした資料を捨てて乱暴に会議室の扉を蹴り壊すぐらいに派手に開けた後、早足でその場を後にする。

グラム総司令官「そんなお前だから、何時まで経っても昇進出来ぬのだ。」

誰もいない会議室の中に一人…グラムは組んでいた手を離れるように広げて、両手の平に刻まれていた十字の痣のような物を見てそっと乱暴に出ていった若き屈強の男に呟く。

グラム総司令官「我が軍の使い捨ての“駄犬”が…」

グラムが言う言葉で反応するかのように両手の平に刻まれていた十字の痣が、妖しい光を放って口元を吊り上げながら静かに狂喜の表情を出していた。

第八十四曲　ＴＨＥ☆下らねぇクイック早食い対決

―数分後　ドイツ行き特急列車ブルーコメット　１２号車　１０２号室―

シャイナ達が乗車している特急列車（ブルーコメット）はトンネル内へと入り、壁に灯すオレンジ色の光が高速で流れ去っていくように走りながら、列車は深き階層へと潜っていく。そんな最中…

シャイナ「…。」

ブリトラ《グルル…。》

一人と一匹が互いの視線を睨み合い所々火花をバチバチと散らしながら、シャイナは右手の平に汗を出しながらフォークを握って、ブリトラは声を鳴らし牙を剥き出しにし少量涎を垂らしながらガチガチと牙を擦る。

アンゲルス【（´ー`）】

ヴェルズ『（ °- °）』

そんな一人と一匹にいつの間にか“人間サイズ”になっていたアンゲルスとヴェルズは、互いにシャイナが眠るベッドの上に座り、呆れるような冷めた視線で一人と一匹に注ぎながら見守る。

その理由…一人と一匹は寝室にあるテーブルに置かれていた一点の料理“極上厚切り半生焼き牛肉のアボガド添え”に集中していて、牛肉の焼ける匂いとオニオンソースが漂う最中一人と一匹は身動きもせずに睨み合いながら極限に集中していた。

エツィオ「ニヤニヤ（・∀・）」

そんな二人と対象的にエツィオはニタニタと可笑しくする表情を出しながら、両腕を組んでシャイナと半身召喚したブリトラの“刹那の見切り（メイン料理のクイックバトル）”の勝敗を見届ける。

シャイナ「あ〝ぁん？」

ブリトラ《グルルルルル！！》

シャイナはギロヌと表情を“鬼顔”に変えて目の前にいる駄犬（ブリトラ）に向けて、挑発でも咬ましているかのように睨み付ける。

ブリトラも人間のようにハンッと“見下す視線”でも出しているかのように、せせら笑いしながらシャイナに向けて牙を剥き出しにしながら威嚇声を出す。

パラパー…パラパパパラパー♪

緊迫の状況になっている最中何処かで必●仕事人のＢＧＭが鳴って、一人と一匹は互いにフォークと牙を構え何時でも奪い取れるように略奪体勢を取る。

シャイナ「オィ、糞犬…美食を楽しむ人間様を舐めんなよ？」

ブリトラ《ガゥゥゥゥゥゥゥ！…下等な人間が…》

シャイナ「あぁ、下等だねぇ。人間は確かにアンタらにない力かつ短命であって下等だよ？けれど…」

一人と一匹の挑発＆罵り会話が流れる中、一触即発の一人と一匹の間から“変なモヤモヤ”が出てきて、シャイナとブリトラの背後には不気味なオーラが遡る。そして…

シャイナ「此れだけは覚えておくんだな、糞犬…。」

ダンッ！

ブリトラ《ヌッ！？》

それは一瞬の出来事であり、魔族の中の最強である魔竜のブリトラでさえ、“見えない”ぐらいの神という神を超えた域の速さで…

シャイナ「美食を毎日食う人間様を怒らせるな…。」

メイン料理の肉中心にシャイナが右手に持っていたフォークがグサリと突き刺さっていて、フォークをクルッと片手で時計回りに回して肉を抉り、憤怒の形相をブリトラに向けて出しながらこう言った。

シャイナ「人はな…何かを奪われそうになった時、凄まじい力を発揮する。それが此れだ！」

ブチリッとフォークで抉り刺した肉片を口元に寄せつつ、ブリトラの鼻先にシャイナの気迫めいた鬼面をドンと押さえ付けるように言う。

ブリトラ《ッ…。》

シャイナ「不可解な生き物だろ、人間って？ひ弱な力しかもたない存在が、突如神さえ勝るぐらいの力を発揮するんだぜ？お前のような最強悪魔でもな！！（キリッ」

キラーン☆とシャイナの両目から車のハイライトのような光を出し、ブリトラの鼻先に向けて何度も右人差し指で突っつきながら激しい叱咤を飛ばす。

ブリトラ《…不覚。》

ブリトラはシャイナに右人差し指で鼻先を何度も突っつかれて嫌みな表情を出した後、グイッと長い身体を後ろへと引っ込めるように後退する。

エツィオ「だろ？人間って何をやらかすか分からねぇからな。」

ブリトラ《理解不能だ…》

エツィオがニタニタと笑い両腕を組ながらブリトラに寄った時、ブリトラは顔を伏せて《キュゥゥン》と落ち込むような声を上げてエツィオの胸元に向けて横から顔を何度も擦る。

アンゲルス【“食”という生気を得るためということになると、人間は本能的に空腹感から逃れるため、凄まじい力を無駄に発揮すると聞いたけど…】

ヴェルズ『正しく“コレ”が…そうですね。』

シャイナはウォォー！と天に向け叫び視線を“カメラ目線”に向けたまま両腕でガッツポーズを取り、突き刺していたメイン料理の肉片を手にしていたフォークで刺して野蛮な作法で口の中に入れる。

ブリトラ《キュゥゥン…》

エツィオ「おしおし♪そんなに落ち込むなＹＯ。」

ブリトラはエツィオによる左手で何度も頭を擦られながら、酷く落ち込む気分を和らげられている最中…

ヴェルズ『シュールですね。』

アンゲルス【阿呆ね。】

アンゲルスとヴェルズは普通にベッドの上で互いに座りながら、冷

めた表情で一人と一匹の速食い対決を阿呆らしくシャイナに聞こえないように小さな声で言い捨てる。

シャイナ「クハハハハハ！！ウィナー★ヒューマン！！アイ・アム・ビクトリィィ！！！！！」

そんな阿呆場面な最中シャイナは雄叫びを上げながら肉を喰らってある程度肉を腹の中に流し込んだ後、テーブルの上に置いてあったジンジャーエールの瓶を手にとってエツィオに向けて言う。

シャイナ「悪魔に勝った人間勝利祝いじゃぁぁ！エツィオォォォォォォ！！」

シャイナにジンジャーエールの瓶を差し出されたのを見てエツィオは、ブリトラの頭をある程度撫でた後《暫く、落ち着くまで静かにする。》とブリトラが言って全身を紫色に放った直後、元の武器に戻り身体の中に入れる。その後…

エツィオ「承知しましたよ、シャイナお嬢様。」

笑みの表情を出しながらエツィオは、シュッと差し出された瓶の蓋に向けて右手刀を横に振った時、蓋部分の首辺りから太刀筋のような光が一線走った後、スッパリとこぼれ落ちるジンジャーエールの泡と共に切る。

シャイナ「サンキュー、エッチオ！レッツ★ノマノマウェィ♪ノマノマウェェィ☆ノォマァノォマァウェェェェェェェェェェェィ！！！！」

エツィオ「ヒーハーァァァァァァァ（。∀。）ＹＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＳ♪へ（。∀。へ）（ノ。∀。）ノ♪」

シャイナはテンションを更にヒートアップしながらエツィオに切ってもらったジンジャーエールの瓶を両手で猛々しく掲げた後、切った瓶の口に向けてジンジャーエールの中身を口内に流し込みながら“カメラ目線”に向けてピースサインを取った。

エツィオもシャイナのテンションに乗って背後でクルクルと身体を駒のように回転させ、ある程度回転した後身体を逆Ｃの字に曲げて、一人イ●ュージョンのポーズを数秒取った後、両手を床に着けて側転しにながら“カメラの画面外”へと消えていった。

シャイナ達を乗せる特急列車は快適な速度で通常通りに何事もなく長いトンネルを抜けて、先頭に点けてある光がトンネル出入口を照らし高速疾走する列車はトンネル外へと出る。

が…外に出た途端雨が強く降っており、風も強く吹き荒れて側面の木々が激しく揺れ稲光が天空を引き裂く中…

？「…」

列車が走る姿が見える遥か先の崖上から、暗闇でシルエットにしか見えない青年らしき人間が、向かってくる列車の姿を見下ろしていた。

第八十五曲　無音突入はしましたが…魔神相手では無意味なようですｗｗｗ

―夜　フランス　ドイツ行き特急列車ブルーコメット　最先端上部―

バババババババ！！！！

列車がトンネルから飛び出すと同時に上空からヘリのローター音と共に輸送ヘリが数台出てきて、側面にあるドアが開けられた直後紐が数本出てきてスルスルと迷彩軍服を着た人間達が降りてくる。

？「総員低姿勢で配置！手にする武器を雨で濡らすな！！」

フランス兵士-Ｓ「「イエッサー！！」」

豪雨と強風で足下と視界が悪い最中でも流石軍で鍛えられているか、全員が匠な技術で屋根上へと普通に降り立ちガシャッと様々な武器（Ｖｚ．６１スコーピオン等）を両手で握って姿勢を低くし天候の豪雨の音で足音を紛れながら無音歩行する。

フランス兵士Ａ「ＧＯＧＯＧＯ！！！！」

フランス兵士Ｂ「隊を崩すな！速やかに移動しろ！！」

フランス兵士Ｃ「天が我々を味方をしている、この瞬間を逃すな！」

そんな最中バラバラと豪雨と豪風の屋根上で動く兵士達の背後で他の兵士にない迷彩軍服の上に、黒い防弾チョッキと被い両腰と両大脚部に大型ナイフを装備し、脇には円型の手榴弾をぶら下げている屈強の肉体を持った中年男が仁王立ちしながら見届けていた。

―フランス軍　最高司令官　バーニア・アルフェンス―

バーニア司令官「ふんっ、こんな豪雨の中で楽々とのんびり観光旅行でも楽しんでいんのかよ。クソが…」

降りしきる豪雨の中でバーニアはフンと鼻を鳴らし、後尾列車にいる殺人鬼（エッィオ）と狂信者（シャイナ）が今楽して貪るように快適に過ごしている姿を想像して、苛立つような表情を出しながら口元に溜めていた唾を吐き捨てる。

フランス兵士Ａ《バーニア司令官、全兵配置完了しました。》

フランス兵士Ｂ《指示をお願いします。》

フランス兵士達が音を立てないようにほふく前進で屋根上を這った後、一個隊のフランス兵達が列車最後部にあるハッチまでたどり着いて、一人の隊の体隊長らしき兵士が腰に付けてあったトランシーバーを手に取って最先端にいるバーニアに無線で話しかける。

バーニアは降り注ぐ雨に打たれながらも腰に付いていたトランシーバーを手に取って、右耳に当てながら無表情に後尾列車にいる一個隊に無線越しで指示を下した。

バーニア司令官「よし、俺が合図を送るまで各隊待機。作戦通りの時刻で全軍突入するぞ。」

フランス兵士A《ラジャー。》

バーニアがトランシーバーでそう告げた後交信スイッチを切って、手にしていたトランシーバーを腰に取り付けるように戻した後、バーニアは先頭の列車の上部ハッチを両手で開けて列車内部へと先に侵入する。

バーニア司令官「クハハッ、この列車に乗り込んだ奴らも運がねぇな。」

ガタン…

鍛えられた両足で列車内部の床に着き左手を床にペタリと着けて内部へと侵入し、開けられた上部から雨が降り注ぐ中ゆっくりと立ち上がって薄暗い運転室を見渡すと…

バーニア司令官「“自動運転（オートパイロット）”だからな。この列車そのものが奴らに取っての…」

バーニアが言う通り先頭列車の運転席は抜け殻のように空席であって、数々の列車速度制御装置や中央官制からの通信機等の機械がただ搭載しているだけの“無人列車”であった。

―地獄へ引き摺り落とす、“移動する棺桶”だからな。―

…

……

……

―ドイツ行き特急列車ブルーコメット　１２号車　１０２号室―

シャイナ「スピー…スピピー♪♪」

先ほどのブリトラとクイック対決で床には食べ物のカスが付着し所々ゴミが散らかっており、騒がしかった寝室の明るみは無く十分はしゃぎ疲れたかシャイナは寝室にあるベットの上の毛布で身を包みながらスヤスヤと眠っていた。

カタッ…

そんな安心☆スヤスヤモードに入っていたシャイナの寝室の出入口の扉が少し開いて、薄暗い配色の隙間から人影が映る。

フランス兵士Ａ《ナイトビジョンをオンにしろ。》

フランス兵士Ｂ《何時でも発砲出来るように構えておけ。》

そろりと手慣れた手つきで武器を構えながら音を立てないように部屋へと侵入し、顔全体にマスクのようなモノを被って武器を構えながら仲間のみ通信出来る無線を投げる。

フランス兵士Ａ《コボルト隊よりバーニア司令官へ、ケースＡ完了しました。》

フランス兵士Ｂ《フォーメーション修正無し、何時でもどうぞ。》

フランス兵士C《ガン射程内。各武器弾薬フルコンプリート。配置誤差修正無し。》

数人が部屋の中へと入って残りの兵士達はドア脇の壁に身体をくっ付けるようにして背を低くし、全員が武器を両手で構えながらじっとマスク内の無線で声を掛け合って指示を待つ。

バーニア司令官《…よし、時間だ。総員戦闘体勢取れ！》

フランス兵士ｰS《ウィルコ！》

無線越しでバーニアの指示を聞いた時ガシャリと手にする武器のマガジン音を立てて、幸せな表情を出して寝っているシャイナに向けて銃口を一斉に構える。

部屋にいる武器を構えた兵士がジリジリと近づく中、無線越しで列車内部を歩きトランシーバーをニヤリと笑う表情を出す口元に寄せて…

バーニア司令官「射て！」

バーニアが無線で今いる列車内部通路全体に聞こえる程大声を上げて、通信先にいる自分の兵達に指示を下し無線越しから生々しい銃撃音が聞こえ、殺人鬼と狂信者の悲痛の声が聞こえる…普通そうなるハズだった。

ザザザ…ザー。

バーニア司令官「…？どうした？？」

数秒たっても無線越しから銃撃音が聞こえず、ザーとテレビ画面が乱れた音が虚しく鳴っていて、バーニアは違和感を感じて険しい表情から不信の表情を出す。

バーニア司令官「コボルト隊応答しろ！何があっ《オロローン？これって、なぁに？？太くなった“けーたいでんわ”なのかぁ？？もっしもーし♪》！？」

突然無線越しから気の抜けたような男の声が聞こえて、バーニアは思わずハァ？（゜Д゜）と呆けるような表情を出してしまった。

バーニア司令官「誰だお前は！？“コボルト隊”はどうした！？」

？《スゲェー、この太っとい“けーたいでんわ”から人間のオッサ

ン声が聞こえてきたぁ！！オモシローイ！！》

バーニアの質問を遮るように通信相手は、子供のようにはしゃぐ声を出しながらキャッキャッと通信越しで馬鹿騒ぎをする。

？《それはトランシーバーだよ、エツィオ。つーかよくも“血塗れのトランシーバー”を平気で掴めるなぁｗｗｗ》

エツィオ《だってさぁー、シャイナぁ。見たこと無いモノを見るとＳＡ、ついつい血塗れでも手を出したくなるんだもん★》

バーニア司令官「（血塗れだと！？ま…まさかコボルト隊は…）何を言っている！？俺の質問に答えろ！！」

他にもバーニアが持つトランシーバーの通信越しから気の抜けたような男…エツィオと半分笑っている女性の声が聞こえて、バーニアは通信越しから聞こえた“血塗れ”という言葉に反応して焦る表情を出しながら言う。

エツィオ《えっ？何時質問していたの？？ゴメン“全然聞いてなかった”ｗｗｗで？何？？》

今までの話を“スルー”していたようにバーニアは半分通信相手の

空気読み無ささの男に苛立ちの表情を出して、腹が煮えくり返るような形相を出して言動を吐き捨てるように言う。

バーニア司令官「コボルト隊だ！！お前達がいる部屋に、俺の部隊であるコボルト隊は何処にいると聞いている！！」

エツィオ《声が無駄にデケェよお馬鹿さん。れっしゃ内にいる皆が起きちまうだRO？あー、こぼると隊って…》

無線越しからグチャと潰れたような音が聞こえて、バーニアは思わず待機させていた自分の兵士達の状態が直ぐに脳裏で理解した。

エツィオ《俺が踏んづけている“死体”がそうなの？フーン（´―ゝ、）》

バーニア司令官「っ！？！！？？」

カシャン！

衝撃的な言葉を聞いて、バーニアは無意識に手にしていたトランシーバーを床に落とした。

第八十六曲　チーター視点からの実況ですＹＯ！

―事後前　ドイツ行き特急列車　ブルーコメット　１２号車　１０２号室　シャイナ＆エツィオ視点―

フランス兵士Ａ《バーニア司令官から指示が下った！》

フランス兵士Ｂ《総員武器を構えろ！弾道確保！！誤差修正無し！！》

ガシャッと寝室に眠っている幸せ顔のシャイナに向けて、フランス兵達は一斉に手にする銃を構える。

入り口付近いるフランス兵達も直ぐに開けられたドアから身を半分出して、部屋内にいる兵士達から空いた隙間から射撃体勢を取る。
そして…

フランス兵士Ａ《Ｆｉｅｒ！！》

一人のフランス兵の掛け声で手にする銃のトリガーを人差し指で引き、構えられた銃口から眩しいぐらいの光が迸る。

銃口から撃ち出された数ミリの小さな弾丸達が眠っているシャイナの身体を覆っている布団ごと突き破り、激しい銃撃音と飛び散る血や激しい弾幕で破られた内部の肉が壁や床にビシャリと付着する…

普通はそうなるハズだった。

エツィオ「グッナイ♪」

ギィィ♪

フランス兵士- S《!?》

トリガーを引こうとしたフランス兵士達の目の前から突然“ドラ●もんのようなどこで●ドア”のようなモノが現れて、開けられたドアから笑顔満開のエツィオが出てくる。

兵士達は目の前に起きた出来事で唖然としてしまい、ついつい手にする武器を下に下げてしまう。これが後の…

エツィオ「ｃｈｅｅ- ｓ♪ｃｈｅｅ- ｓ♪♪」

カメラ目線に向けてエツィオは左手でピースサインをする中、右腕には兵士達の視点では異形なモノ…背中から出していた漆黒の右片翼に纏う“巨大な爪”がメキリッと音を立て、爪先から青白い光が直線に軌跡を描きながら滴り落ちる。そして…

エツィオ「デュクシ！」

右腕に纏った翼…爪形態にさせたエツィオは茫然とし武器を下げている兵士達に向けて爪を掬い上げるように振りかざした時…

ザシュッ…ザコッ……グチャッ……

爪先から発した飛ぶ青白い三日月形の斬撃で兵士達全員が魚の三枚下ろしのように斬られ、人間の身体の切断面が現になりながら鮮血と共に宙に舞う。

三枚下ろしから段々と人間の身体がより細かく分割されていき、飛ぶ斬撃で壁が綺麗に斬られて人間だった肉片と壁の切断面と共にエツィオにいる視界全てが“細かくケーキカット”されていった。

エツィオ「もう、最近の人間は達ダメダメねん♪寝込みを襲う技術は８００年前と対して変わらないわよんｗｗｗ」

エツィオが背中から出ていた青いどこで●ドアのような扉をバタムと右手で閉じて扉を魔力で消えるように閉じた後、笑顔満開の表情を出したまま左手を斜め上へと上げて手首を何度も軽く一回転するようにに振り、爪形態の右手を右腰に当てながら腰を軽く何度もノリ★ノリなダンスで画面外へと一回転する。

エツィオのブーツの足元には、細切れになった元人間の肉片を“踏み台にして踏みつけていた”。

シャイナ「ん〝あ？…何か新鮮かつ汚物の匂いも混じって血生臭いけどｗｗｗ…あぁ…なるへそ。」

シャイナはベッドから起き上がって左手で両目を何度も拭いパチパチと両目を数回閉じた後、今いる自分の寝室が血と糞とエツィオが刻んだ爪跡の“テラ★阿鼻叫喚”な状況に成り果てているのを見て、半分寝惚けながら呆れる表情を出す。

シャイナ「またスプラッターな状況になってるｗｗで、何で列車の中に軍の兵士が居るのＳＡ？？」

エツィオ「さぁ？でもこれからの“新敵追加イベント”もたっぷりあるようだし…エエじゃん、楽に逝こうＺＥ（＾＾）ｂ」

そんなテラ★阿鼻叫喚の中でシャイナはベットから起き上がって、

かろうじて原型を留めていたクローゼットの戸を開ける。半壊したクローゼットの戸を開け中に入れていたショルダーバックを手に取った途端、バキッと音が鳴ってクローゼットの戸が壊れて血塗れの床に落ちる。

身に羽織る服の皺をまっすぐに伸ばし直し少し爪の攻撃で斬られ裂けた上部から雨が少量シャイナの頭部に向けて降り注ぎ、身に纏う白いパーカーの首後ろにある白いフードをパサっと深く被る。その直後…

？《ザザザザ…ど……ザザザザザ…した！？……》

エツィオ「んあ？何？？コレか？？？」

グチャッ

ドロリと内臓類が蕩けるように出て死臭が漂う肉片だらけの中から雑音と共に何かの声が聞こえてきて、エツィオは声が聞こえた部分に肉片まみれの塊に向けて左腕を突っ込み、肉が滴り落ちる音を立てながら肉片の塊内部に埋められていたモノを鷲掴みした後グィッと引っ張り出す。

？《ザザザザ…ト隊！ザザザザザザ…応……しろ！》

エツィオが手にした長い肉片“小腸と大腸”が付着した黒い箱の機械（シーバー）（トラン）のスピーカーから雑音と共に人の声が聞こえて、エツィオは付着していた小腸と大腸をデコピン一発でペチッ☆と弾き飛ばした後真ん中のスピーカー部分に向けて声を掛ける。

エツィオ「オロローン？これって、なぁに？？太くなった“けーたいでんわ”なのかぁ？？もっしもーし♪」

シャイナ「ブフッｗｗｗ太くなった携帯電話ってｗｗｗつーか、今の状況の中で場違いな声出すなｗｗｗ」

シャイナはエツィオのひょんとしたＫＹ声を聞いて、腹から出そうになる笑いを必死で堪える。そんな雰囲気ぶち壊しの最中にエツィオが持つトランシーバーから苛立つような声が返ってくる。

？《誰だザザザザザ…えは！？“コザザザザ…ボル……ト隊”はザザザザザザザザ…した！？》

エツィオ「スゲェー、この太っとい“けーたいでんわ”から人間のオッサン声が聞こえてきたぁ！！オモシローイ！！」

エツィオはキャッキャッ♪と手にする血塗れトランシーバーから声が返ってきて、足をくの字に折りながら兎の様にピョンピョンと軽

く一回転するように跳ねる仕草を取る。

シャイナ「それはトランシーバーだよ、エツィオ。つーかよくも“血塗れのトランシーバー”を平気で掴めるなぁｗｗｗ」

エツィオ「だってさぁー、シャイナぁ。見たこと無いモノを見るとＳＡ、ついつい血塗れでも手を出したくなるんだもん★」

シャイナが可笑しく笑う中、兎のように跳ねる仕草から今度は手にするトランシーバーの底を左手人差し指だけで支えて、ダイヤ形を綺麗に保ちながらクルクルと駒のように回す遊びに切り替える。

？《ッザザザを言っ…ザザザザる！？……ザザの質問に……答え…ザザ…ろ！！》

エツィオ「えっ？何時質問していたの？？ゴメン“全然聞いてなかった”ｗｗｗで？何？？」

グチャッとエツィオは床に転がる人間だった肉片の上にドカッと平気に腰掛けて、左足上を右足に引っ掛けるように乗せる。

そして左手人差し指で回していたトランシーバーを軽く上へと弾くように上げて、“スタイリッシュやらないか座り”を取りながら軽

く上へと飛ばしたトランシーバーを左手で受け取って、“カメラ目線”に向けながらニタニタと口元を吊り上げて左耳元に寄せながら言う。

？《ガガガ…コボルト隊だ！！お前達がいるガガガ部屋に、俺の部隊で……あるコボルト隊は何処にザザザザいると聞い…ている！！》

無線越しから落雷が近くに落ちたように轟く音量並みの声が聞こえてエツィオは一瞬片目を瞑って手にしていたトランシーバーを左耳からちょっと遠ざけた後、不機嫌の表情を出しながら“カメラ目線”に向けて爪形態にさせている右人差し指を何度も指しながら言い返す。

エツィオ「声が無駄にデケェよお馬鹿さん。れっしゃ内にいる皆が起きちまうだＲＯ？あー、こぼると隊って…」

エツィオは視線だけを動かし視界を血塗れの床に映して、転がっていた兵士の断裂した顔部分を爪状態の右手で拾い上げるように持ち上げる。

エツィオ「俺が踏んづけている“死体”がそうなの？フーン（´―ゝ、）…お？」

ザザザザ…ガガガガ……

そう言った直後トランシーバー越しからガチャンとぶつかるような音が聞こえて、エツィオは不審に思い左手に持つするトランシーバーをブンブンと何度も上下に振ったが、雑音しか聞こえなくなってしまった。

エツィオ「何だよぉー、ちゃんと質問に答えてやったのにぃ！（、皿´＃）」

シャイナ「あー…多分、“ショック”で落としたんじゃね？？こういう展開でありがちのような出来事でＳＡ☆」

エツィオがキーキーと歯をイーと綺麗に並べるように見せながら子供のように怒る表情を出して、手にしていたトランシーバーをポイッ♪と“テレビの画面外”へと投げ捨てる。

シャイナはエツィオに向けてアハハと笑う表情を出した後、床に転がる死体と血溜まりを軽やかステップで避けながら積み重ねられた肉片に腰掛けるエツィオの元へと寄る。

シャイナ「それは置いといて…エツィオ！早く此処から脱出しよ！

！」

エツィオ「そうだな。シャイナに向けて銃を構えていた奴らはまだいるし、さっさとトンズラしようかねぇ♪」

エツィオは力強い男勝りの表情を出すシャイナを見た後、彼女の問いかけに応えるように不適な笑みを出しながら顎でうなずき、腰掛けていた肉片から降りてシャイナの隣に立つ。

エツィオ「さて、れっしゃ内による脱出&

第八十七曲　さぁ、そこをどきなさい。魔神のお通りＤＥＡＴＨよ♪

―ドイツ行き特急列車　ブルーコメット　列車１階内通路―

エツィオ「おらよっ、と！」

ザンッ

寝室入り口に塞がっていた元人間の細切れ死体と分割された壁等が、共に折り重なるようにして寝室入り口に積み上げられていた。

エツィオは入り口に塞がっていた障害物に向けて、爪形態にさせていた右腕を振りかざしてスパッ♪と何処かの斬鉄●のように華麗に斬り壊す。

シャイナ「寝る前に列車内にあったの無料見取図を取って良かったお（＾ω＾）エツィオ！」

寝室から二人は出た後、シャイナは肩に掛けたショルダーバッグ内から列車内の地図を取り出して、隣にいるエツィオに列車内の地図

を見せる。

シャイナ「本来ならエツィオの“チーター技でさっさと切り抜ける”場面を出したいけど、それじゃぁ“物語的につまらねぇ”もんで…」

シャイナは広げる列車内の地図の一ヶ所に向けて人差し指で指し、エツィオはシャイナが指した地図の部屋部分を見る。

エツィオ「あぁ、“圧倒的な力を持ちつつ超遊び半分”で“閲覧者と一緒”に楽しまないとな★シャイナ、ここは…」

シャイナ「この列車を動かす“運転室”だぉ。この列車は“自動運転（オートパイロット）”で速度を制御しているからさ。だから…」

シャイナがそう言った途端バタンッと前方から音が鳴って、二人は同時に音がした方向へと顔を向ける。

フランス兵士J「くそっ！コボルト隊が全員やられた!!」

フランス兵士K「この無差別殺人犯め…何をしやがった!?」

フランス兵士Ｌ「落ち着け、ハーデル！プランＡからプランＢへと変更！総員迎撃体勢を取れ！！」

次車両へと続く扉からフランス兵士達が現れて憤りの声が轟く中、あるものは列車内の椅子に隠れ、あるものは扉の影に隠れ、日々の熟練された訓練を今いる場へと実践する。

フランス兵士Ｌ「弾幕を張る準備をしろ！奴らを先頭車両に行かせるな！！」

フランス兵士Ｓ「「ラジャー！！」」

ガシャッガシャガシャ！！

フランス兵達が手にする実弾入り銃を、シャイナとエツィオに向けて様々な物影に隠れながら一斉に構える。

シャイナ「ちょっｗｗｗバ●オ４に出てくるマシンピストーとＬ●Ｄ２に出てくるＡＫ－４７アサルトライフルやらＭ１６Ａ１ｗｗｗ」

フランス兵士Ｊ「テェェェェェェ！！」

ドガガガガガガガガ！！！！

物影に隠れながらフランス兵士達は手にする銃を、シャイナとエツィオに向けて厚い銃弾を容赦無くぶっ放す。

エツィオ「んっ！」

エツィオはシャイナを守るべく前に躍り出て、両腕を水平に伸ばし前から来る厚い弾幕を“全身に浴びながら普通に前へと進む”。

シャイナ「ちょっｗｗｗテラター●ネーターｗｗｗ弾喰っていながら前進しているＺＥｗｗｗ」

エツィオ「人間の外圧なーんて…」

全身に弾幕を受けているのに関わらずエツィオはニタリと口元を吊り上げて笑っており、寧ろ身に受けた弾がエツィオの纏う黒いローブと鎧は“突き破れず”、シャイナが言う通りドンドン弾薬がエツィオの体内に吸収していくように見える。

フランス兵士Ｊ「！？どうなっている！？？！！」

フランス兵士K「厚い弾幕張っているのに何故平然と!?!!??」

フランス兵士K「も…もっと弾幕を濃くしろ!!」

エツィオは身に受ける銃弾と兵士達の驚愕声を聞いて感じ、軽々と口笛を吹きながら不満の表情を出し、両腕の爪をクロスさせるように動かした後…

エツィオ「効っかないもーん♪」

ズバァァァァァ!!!!!

クロスした両腕の爪を広げるように振りかざした時、爪先から発した青白い三日月形の飛ぶ斬撃がバ●オ4に出てくるレーザートラップのように綺麗に前に目掛けて飛んでいく。

エツィオの飛ぶ斬撃に発した青白い光は目の前に置かれる客席をスパッと斬り、物影に隠れていた兵士達も斬られて更に斬られて逝き細かく人間の身体が分割していく。

エツィオ「♪♪~」

フランス兵士Ｌ「ば…化け物め……」

エツィオは口笛を吹きながら次車両入り口前まで歩き、入り口に仁王立ちで立ちながら銃を構える軍服人間まで歩んだ時…

フランス兵士Ｌ「ちき…しょ……」

フランス兵の至るところの身体から亀裂が多く走り、ズルッと身体が斜めにずれ落ちながら細かく切れ、吹き出す血と肉片が生々しい音を立てて床に新鮮な肉の塊を作り上げた。

エツィオ「第一エリア、“くりあー”だＹＯ★」

グシャッ！

エツィオはヤッターと胴上げするような仕草を取って、笑顔満開のまま入り口に積み重なるように落ちた人間だった肉片をブーツ底で踏み潰した。

シャイナ「流石俺ら主人公（チーター）側からとしては楽々クリアですなｗｗｗ」

シャイナがそう言いながら床に出来た血溜まりと瓦礫を避けながら

エツィオの元へと歩み寄り、エツィオは歩み寄ったシャイナに「こんなもん全然、余裕★余裕ぅ♪」と言って次列車に続く扉を開けながら体内に埋まっていた弾薬をサラサラと右手の平からこぼし落とす。

エツィオ「はいっ、次々ぃ♪」

ガラッと扉を開けた途端、目的地へと続く次車両の扉から兵士が雪崩れ込むように入ってきて、それぞれ手にする武器を構え車両にある列車の乗車席の物陰へと隠れるように飛び込む。

エツィオ「いちいち隠れるなよぉ。そんなことをしていると…」

エツィオは隠れている兵達に半分呆れる表情を出しはぁ…とため息をついて爪形態の左手を頭部の額に当てながら数秒両目を閉じた後…

エツィオ「“小説的の展開約束”で全員デリィーツしちゃうＺＯ★」

ジャキッ！と、前にかざしたエツィオの爪形態の右腕が蛇がうねるように揺れ、徐々に爪形態から“巨大な銃口が沢山ついた大型機関砲”へと変わり果てる。そして…

シャイナ「。。。（Д）…えｗｗｗ何このｗｗｗ最終兵器●●のよう

な武装ｗｗｗ」

エツィオ「アヒャヒャヒャ

則の武器なので…

エツィオ「邪魔邪魔邪魔

右腕の巨大機関砲を兵士の頭部に向けて放った時、バシャッと飛び散る脳の破片と潰れた眼や歯や舌が粉々に破れる様に砕け散って、右頬に血が少量付着したが気にもせず最後の兵士らしき敵を全て“殲滅”した。

シャイナは全ての兵士を殲滅したことでふぅ♪と一息ついた後、手にする列車の地図を今一度広げながら両腕の武装形態を解き元の背中に出ていた翼に戻しながら背中に仕舞うエツィオに向けて歩みだす。

シャイナ「よし、この扉の先が運転室だ…モガッ!?」

突如シャイナの背後から太い腕が覆うように背中から押さえつけられ、グィと無理矢理身体を締め付けられ更には口を両手で塞がれている感覚を受ける。

エツィオ「シャイナ!?」

エツィオは瞬時に何かを受けた声を聞いて、すぐに背を向けて真剣面を出しながらシャイナの様子を見た途端…

?「まさかお前のような若造一人で、我が隊を全滅させるとはな。

非常に…」

背後からシャイナを拘束している軍服を纏う屈強の男…バーニア司令官が怒りの表情をあらわにしながら、目の前にいるエツィオにギシッと睨み付けていた。

第八十八曲　えっ！？真実なんて無いんだもん♪

―ドイツ行き特急列車　ブルーコメット　運転室前通路―

シャイナ「モ〝ガァァモガガガガ！！（ちょっｗｗｗ何このバ●オ４に出てくるクラ●ザーのような奴ｗｗｗ）」

背後からバーニアに拘束され口を封じられたシャイナは、表面は苦しそうに必死にもがく仕草を取るが、内面はブフッと鼻血でも出しているかのようにとある二次元ゲームに出てくる登場人物に似ていることで興奮する。

？「俺はバーニア。お前のような若造が殺してきた我が軍を率いる最高司令官の人間だ。」

バーニアはシャイナを拘束しながらブーツで隠れていた足の指を少し上へ動かした後、両脚部に装着いていた大型ナイフがガシャッと下へと動いて、両足下の爪先から飛び出すように移動する。

エツィオ「お前の名なんてどうでもいい。シャイナを放せ。」

シャキン

エツィオはバーニアに向けて真面目面と怒りの表情を出しながら、左手首の隠し鞘からアサシンブレードを出す。

バーニア司令官「それは出来ないモンだな。それに大人しくしろ女…後動くな、コードネーム“クロノス”！」

エツィオ「！」

グッとバーニアは腕の中で暴れるシャイナに向けて強く押さえるように腕に力を入れた後、シャイナは「も〝も〝…ん……」と呻き声を上げてダランと両腕をだらけるようにしてそのまま両目を閉じバーニアの腕の中で気を失う。

バーニア司令官「左手首の裏から出ている武器を引っ込めろ、クロノス。お前が一歩でも動けば俺の中にいる女を殺す。」

バーニアは腕の中で眠る人質（シャイナ）を取ったことで有利になったか、ニタリと狂喜に笑う表情を出しながら真剣面のエツィオに言う。

エツィオ「（僅かでもいい。僅かさえ隙が出来れば…）調子に乗るなよ、人間。俺がそんな脅しに通用すると思うのか？」

エツィオはギシッと漆黒の人間の瞳を段々と黄金の鷹の目へと変えていき、左手首裏から出したアサシンブレードをスウッと少しずつ前へと差し伸べるように出す。

バーニア司令官「だろうな。お前の金色の瞳を見れば分かるぜぇ…どんだけ修羅場を潜ってきたのか俺でも分か…!?」

バチッ！

バーニアは金色の鷹の目を出すエツィオを見て一瞬両目を閉じて言うが、それがエツィオに取って“僅かな隙”だったらしく一瞬の内にバーニアの目の前にエツィオが現れて、バーニアの左頬に目掛けてエツィオの右平手打ちが咬まされる。

エツィオ「俺を現世に復活させてくれた大切な人、“シャイナ”を、さっさと放してもらおうか人間。」

エツィオは真面目面を出しながら平手打ちでバーニアの顔が後ろへと仰け反った直後、左手首の裏から出したアサシンブレードをバーニアの右首筋に向けて刺そうとしたが…

バーニア司令官「ちっ！」

バーニアは顔面を後ろにのけ反りながらも両腕で拘束していたシャイナを放し、右腕を右腰に装着していた大型ナイフを引き抜いて、エツィオの瞬時暗殺攻撃（アサシネーションアタック）をナイフの刀身で何とか防ぎきる。

が、右腰のナイフを引き抜く動作を取ったため拘束していたシャイナを手放すようになってしまい、当然バーニアはエツィオの隠し刃攻撃から守る体勢になり、エツィオのアサシンブレードとナイフの刀身から火花が飛び散りながら数歩後退する。

エツィオ「凶悪面の人間が、シャイナを好き勝手に触りやがって…」

エツィオは拘束から解かれたシャイナを右腕の下部で掬い上げるように身体ごと受け止めて、少し体勢を屈めて気を失っているシャイナを気遣いながら数歩先にいるバーニアに向けて睨み付ける。

シャイナ「ぅ……ぅん……」

エツィオ「シャイナ、俺の身体（なか）に入ってくれ。あの馬鹿に、鉄槌を喰らわせてやる。」

エツィオは気を失っているシャイナの耳元に向けて小声で言った後、スルッと抱き抱えていたシャイナをエツィオの身体の中に入れて、

シャイナの身の安全と内部にいる使役達（ペット）による回復指令を心の中で下す。

バーニア司令官「ふん…その小娘ごときで、偉くご立腹だなぁ小僧。」

バーニアはシャイナを大事に抱えながら身体の中に取り込むエツィオの真面目面を見てせせら笑いし、手にするナイフを手の平の中でクルクルと弄びながら言う。

エツィオ「あったりまぇだろ。ｗｗｗ俺のような伊達面（イケメンフェイス）とお前のような何処でも見掛ける悪人面なんかに触られたら怒りもするわぃｗｗｗ」

バーニア司令官「ッハッハッハ！！悪人面かぁ、確かに今の俺は其処ら辺にいる糞共と同じ面構えだなぁ。だが…」

バーニアはエツィオの言葉を聞いて大きく高笑いし、可笑しく笑いながら左腰に装着していたもうひとつのナイフを左手に取って、ナイフとナイフの刃をシャリッと軽く擦る。

バーニア司令官「軍人の俺達このとってこの面（ツラ）は、何時も通りなのさ。上部からの指令で動き、どんな任務でさえ“正義行為”として

実行している。たとえ…」

バーニアはニタリと一瞬口元を吊り上げて笑った後、両手の平に収めているナイフを回しながら腰を落とし、背をくの字に折って低姿勢のままエツィオに斬りかかる。

バーニア司令官「周囲の一般市民に対して死傷が出るほど被害が出てもな。」

バーニアが持つ両ナイフを逆クロスするように振りかざし、エツィオは頭を下へと下げて背を低くし、バーニアのファーストアタックを避ける。

バーニア司令官「オラァ！」

間を入れずバーニアは両足下のつま先から出ていたナイフを前へと蹴るように伸ばし、何度も回し蹴りするかのようにエツィオに向けて攻撃する。

エツィオ「ふっ！」

エツィオは連続ナイフ回し蹴り攻撃を左手首裏から出したアサシンブレードの刀身を受け止めて、火花を散らしながら全て連続ナイフ

回し蹴り攻撃を流しきる。

エツィオ「ハァ！」

エツィオは回し蹴りが止む瞬間を狙ってアサシンブレードを瞬間に前へと構えた後、バーニアの額に目掛けて一直線に突き刺すように左腕を伸ばす。

バーニア司令官「くっ！」

エツィオのアサシンブレードを見たバーニアは直ぐ様手にするナイフを顔面に向けて構え、火花が少量飛び散ってギリギリエツィオの攻撃による頭部刺しを逃れたが…

エツィオ「遅ぇ。」

バーニア司令官「ぐぉ…！」

ゴキゴキ…

頭部刺し攻撃から逃れるためナイフを顔面に構え視界を遮るのが仇になったか、エツィオの右拳がら空きになっていたバーニアの腹に

めり込み、同時に内部の骨が折れる音が生々しく鳴る。

バーニア司令官「がぁ…」

バーニアはエツィオに殴られた腹に左手を当てながら後ろへと数歩仰け反り、口元から少量の血を吐いてヨタヨタとよろける。

バーニア司令官「（な…殴られただけでアバラ数本と筋肉の組織がぶち壊された！）ケッ…イカれた力だな、小僧。」

エツィオ「俺は“魔神”だから。」

黄金の鷹の眼光を放ちながらバーニアを睨み付け、エツィオは情け容赦も無い本来の暗殺者（アサシン）の素顔をさらけ出しながらバーニアに言う。

バーニア司令官「“魔神”？何を馬鹿なことを…」

バーニアは腹の痛手を堪えて手にするナイフを持ち直した後、再びエツィオに向けて走り出し日々の体錬を積み重ねたバーニア風の接近戦格闘技を繰り出す。

鋭い右フックから左手ナイフによる頸動脈斬りをエツィオに向けて

咬ましたが、そよ風のように全て避けられて逆にエツィオに左頬に向けてカウンター右手殴りされて、バーニアは身体をたじろぎながら背中をくの字に曲げる。

エツィオ「馬鹿なことじゃねぇよ。お前らのような過去の戦いを忘れた信じることすら出来ない人間に、このような真実なんて理解出来る分けがねぇな。…あっ、いや寧ろ…」

が、エツィオは日々の人間達が地獄の体錬を重ねた特訓をぶち壊すように、くの字に曲げてよろめくバーニアに向けて右腕を払うように振りかざした直後…

エツィオ「“真実なんて…存在しねぇか。”」

振りかざしただけで“突風”が発生し、９０以上もあるバーニアの身体が軽々と浮かんで吹き飛ばされる。

バーニア司令官「ぐぁ。」

固い列車の壁に背中からぶつかって、身体を横倒ししながらうつ伏せに倒れる。

倒れた次いでに両手の平に持っていたナイフを落としてしまい、カ

ランと音を立てながら一本のナイフがエツィオの足下へと転がる。

エツィオ「（おっ、この短剣カッコいい（・∀・）一つもらっちゃぉ★）無様だな、人間。」

エツィオはバーニアの戦闘能力を見て見下すようにつまらない表情を出しながら、足下に転がり落ちたナイフを拾ってやや腹黒い計画性を脳裏に出しながらも、密かに懐の中に仕舞っていた羅刹王の籠手を取り出す。

バーニア司令官「ぐぅぅ…」

エツィオ「アルタイルは何度も言っていたな。“真理は存在しない、許される行為など無い”と…なので…」

エツィオはアイモンから貰った羅刹王の籠手に手に入れた（勝手に拾った）大型ナイフを触れた直後、羅刹王の籠手がシュルシュルと糸のように複数細かくなって、大型ナイフに羅刹王の触手が全てを侵食した後…

エツィオ「シャイナを触ったその“腕”を細かく細かぁぁく、分割してやるＹＯ★」

バーニア司令官「！？！！」

バーニアが身体を奮えながら立ち上がった後に目の前にエツィオが現れて、エツィオがバーニアを通り過ぎたと同時に…

ザクッ

バーニア司令官「な…」

エツィオの右手に変異した短剣（ナイフ）がバーニアの左腕上部を食い込んで、変異した短剣（ナイフ）が引き抜かれた直後…

ブシッ…

左腕全体から複数の光の断裂が走り徐々に筋肉の組織がずれ落ちて、吹き出す血と細かく分割された肉片と共に床へと落ちていった。

第八十九曲　お目覚め●ー声の短剣さん

ードイツ行き特急列車ブルーコメット　運転室前通路ー

バーニア司令官「が…ぐぁあぁぁああ!??!?」

ブシュー♪とエツィオの持つ異形と化した短剣で左腕が細かく分割され、切断面から噴出す血と零れ落ちる肉片と共に悲鳴に近い叫び声を上げる。

バーニア司令官「ぐぁぁ…お…俺は…ゆ…夢でも見ているのか…?」

両膝を折って床に着き左腕の切断された面に右手を当て額から汗を大量に出しながら、数歩先にいるエツィオの持つ異形と化した短剣を大きく目を広げながら見る。

エツィオ「“夢”じゃねぇさ。今お前が見ているモノは全て…」

エツィオの右手に持つ異形と化した短剣…握り部分だけは大型ナイフのグリップ部分を残し、刀身からは黒いモヤが纏った赤黒色の刀身で出来ていて、中心部分には人間の内部の筋肉のようなものが出ており、獣の赤い瞳が一つ付いていてその眼にはバーニアを見下ろ

すように視点を動かす。

刀部分の中央には獣の口が大きく開かれたように鋭い牙が複数付いていて、短剣刀身の長さは人間の足から膝辺りまで伸びていた。（もはや短剣ではないｗｗｗが、これでも短剣ｗｗｗ）

エツィオ「“現実”と“真実”そのものだＹＯ★それに《その声は…もしや“魔神”か？？》んぁ？」

バーニアに向けて不適の笑みを出しながら言った時、エツィオの持つ短剣の開かれた刃部分から二重のオバサン女性声が発する。

エツィオ「おっと、寝ていたのか？今まで俺を噛み付こうとしていた存在がいたから、羅刹王（ラクシャス）は起きていたかと思ってｗｗｗ」

ラクシャス《否、吾はお主の手によって目覚めるまで“仮眠状態”になっていた。お主を噛み付こうとしていたモノは吾が以前魔力維持のために喰らった“闇ノ小妖魔”の妖気が漏れ出ていたからだ。》

中央に一つ付く赤い獣の眼がエツィオをじっと見つめながら言った後、《すまない。》と言って恐縮ながらにして軽くエツィオに詫びの言葉を投げる。エツィオはケラケラと笑いながら「いいって、いいって♪」と歯を見せながら、少年のように笑みを出しながら言う。

ラクシャス《まさか、“魔と天を極めたお主の少量の魔力”だけで仮眠状態だった吾を“姿そのものまで完全復活”させるとはな。かつての吾の周囲にいた下等魔族共が憧れていた理由が分かる。吾はお主を前々から焦がれていたのだ。／／／》

エツィオ「どいつもこいつも俺にとって“憧れ的存在”なんだな。ｗｗｗＨＡＨＡＨＡ、笑っちまうぐらい可笑しくなったもんだ。」

羅刹王の短剣…ラクシャスの●国にいるペ・ヨン●ユンファンのような意味を込められたオバサン言葉を聞いて、エツィオは苦笑いしながら可笑しく笑い声を出す。

エツィオ「で、羅刹王（ラクシャス）さんよ。急にというが強制で言うけど、俺の使役（ペット）になってくんない？？この先色々と激しい祭りが待ち構えているからＳＡ★」

エツィオは異形と化した短剣を右手の中でクルクルと回して、左肩から両腰まで這うようにヌンチャク感覚で遊んだあと、刀身をエツィオの顔正面に向けるように短剣中心にある咆哮部分の刀身を向けて言った。

ラクシャス《良いだろう“魔神”。吾は分かる…お主の中にいる特級悪魔共も十分満足している魔気も感じられる。吾もお主の力に加担しよう…久々に狩り尽す血が騒ぐ。フフフ…》

エツィオ「やったぁー／（＾０＾）／んじゃ、お前の新しい名を決めないとな。んーんーんー…」

エツィオは新たな使役（ペット）と契約したことで喜びを現すように、両腕を斜め上へと上げて身体を回転させながら片足のつま先だけで支える“エツィオ流ヨガ★ダンス”の舞いをし、ある程度回転させた後親しむ表所を出しながら顎下に左手を当てて、新たな名前を脳裏に思い浮かべた後…

エツィオ「決めたＺＥ★お前の新しい名は“魔界を?み込む漆黒の破戒ノ鬼神”短闇剣（ラクシャス）ＤＡ！」

エツィオは子供のように無邪気に笑う表情を出しながら、“カメラ目線”に向けてビシッと人指し指を出して俺★超カッコイイ（自重）風に言う。

ラクシャス《フフ…悪くない名だ。それに吾は羅刹王（ラクシャス）ではなく…》

エツィオ「え?“男”じゃないのか??ｗｗｗ」

アルェー?（・８・）と喜びの表情から一転、首を傾げるように頭部に?マークでも出ているような困惑の表情を出して、手にしてい

る短闇剣（ラクシャス）に向けて視線を映す。

ラクシャスは《無礼者…吾は“男”ではないぞ。吾が声を聞いて分からぬのか？》とムーと頬を膨らませて不満の表情でも出しているかのように、エツィオに向けて赤い眼光をギロヌと動かしながら続きを言う。

ラクシャス《吾は魔界の闇ノ魔力・現世の剣術を交互に極めた特級悪魔・羅刹女“ラークシャシー”ぞ。吾ら魔族が焦がれし“魔神エツィオ”。》

なんと、ラクシャスではなく“羅刹女（ラークシャシー）”であって、女性であったことでエツィオは少し驚く表情を出す。

エツィオ「（おまｗｗｗヴェルズのような両性悪魔かと思っていたけど、“女”だったんだなｗｗｗマジ☆スマン、ラクシャ…いやラークシャシー。Ｉｏ ｓｏｎｏ ｓｐｉａｃｅｎｔｅ ｐｅｒ ｆａｒｅ ｕｎ ｉｎｇａｎｎｏ ｅｇｏｉｓｔａ ｐｅｒ Ｌｅｉ ｒｅａｌｍｅｎｔｅ（勝手な想像して、マジ悪ィ。）」

エツィオは右手の中で握る短闇剣（ラークシャシー）に顔を何度も下に下げて、イタリア語を吐きながら何度も謝る仕草を取る。

ラークシャシーは武器状態のままそんなエツィオを見て《別に気にすることではない。》と軽く言って、悪魔ならぬ優しい感情がこもった言葉をエツィオに向けて続けて吐く。

ラークシャシー《顔を上げよ、吾らの焦がれし魔神。吾はそなたを尊敬しておるのだぞ？お主の中にいる特級悪魔達の生粋と、愛情が溢れた穢れ無き心を今一度見るとよい。それに…》

エツィオは謝っていた仕草からボーと惚けるようにひょんとした表情になって、淡々と主人に向けて愛情が溢れた台詞を一人（バーニア）を除いて、二人だけに“ピンクのオーラ”が背後から出ているように吐き続ける。

ラークシャシー《お主が吾の媒介としたこの“箱”のいこごちも良い。お主から少量頂いた魔力の脈動が、吾が身体を全て溢れるばかりに回っておるのだ。ああ…気持ちよいぞ…。》

ポワワンと、手に持つ短闇剣からハートマークが複数天に向けて上って行くように出てきて、筋肉の色が褐色色から“桃色”になり刀身の中心から出ていた赤い瞳がエツィオにむけてバチコーン☆と今時の女の子のように可愛らしいウィンクを咬ます。

エツィオ「そうかそうかｆ（＾＾；）だが、寄り身（ペット）が気に入ってくれて有難な。ま、これからは俺の使役だよろしく頼むぜ。」

心の中でエツィオはビクッと数歩後退するようにたじろいでいたが、表面にはそれを“絶対出さずに”新たな使役(ラークシャシー)に向けて歯を見せながら笑みを返す。

ラークシャシーは《お主の愛の為に一生の約束を誓おう。》と言って、再び桃色肌から元の赤黒色の黒いモヤが掛かった短闇剣(ラークシャシー)へと戻る。

エツィオ「さて、続きをやらねぇとな。次回で決着付けたいところだＺＥ。」

エツィオは再び右手の中にある短闇剣(ラークシャシー)を握り直し、左手首裏から出ているアサシンブレードを隠し鞘へと引っ込めた後、短闇剣を額辺りまで上げて数歩先にいる重傷バーニアに向けて刀身を横に構えた。

第九十曲　シャイナｉｎザ・悪魔待機所（ラブ☆ハウス）

新たな使役（ラークシャシー）と契約したエツィオは、バーニアに向けて短剣を構えて再び対峙する最中、エツィオの身体の中にいるシャイナはまだ気を失っていた。

―エツィオの身体内部　魔神の間―

ゴボッ…

気を失っているシャイナは身体が海の中にいるように段々と沈んでいきながら、両目を閉じたまま口元から少量の泡を吹き出す。

―…これ……な……ハズ…。―

―……よ……か？―

シャイナ「（あるぇ？…自分もう現世で身体ごとバタンキューしちゃって幽体離脱しちゃったかなぁ？？つーか…）」

深い深い深海のような水の中で沈んでいくように眠るシャイナは、上部からの男女のような途切れ途切れの声が交互に聞こえる。

―……さん！……シャ……イ…ナさん！！―

―……きろ、人間！……を……るな！！……―

シャイナ「（誰だよ…さっきから何度も俺の名を呼んで（―＿―＃）バ●オのアウト●レイクのクイックチャット並みに連呼すんな（、皿′＃）ゝ）」

ガンガンと脳裏に自分の名前を呼び捨てにする声が何度も聞こえて、少し意識が反応し閉じられた瞼が数回動きながら閉じられていた口元を数回ピクピクと開く。

―…シャ…ナさん！……さい！……ャイナ…さん！！……―

―……ルズ。…そ……に……めよ。……―

―……を……人間！！……さっさと……か！―

シャイナ「（イチイチうっせぇｗｗお前らはア●ブレＡＩＰＣのケ●ンか！（、皿′＃＃＃））ん…」

自分の名前を何度も同じように連呼され、所々叫び声が聞こえるなど“精神的に苛立つ感覚”を覚えながら、ゆっくりと閉じられていた両瞳を開ける。すると…

ヴェルズ『あっ、気がついたようですね！！…良かったぁ。ｆ（´、；）』

シャイナ「あ〝れ…何で両性悪魔（アンタ）が居る〝の？？」

開かれたシャイナの視界の頭上にヴェルズがいて、ホッとした表情を出しながらシャイナを見詰める。それだけでなく…

アンゲルス【流石は可愛い坊や（ダーリン）が護る“婿”ね。少量の浄水魔力を使っただけで起き上がるなんて…】

ブリトラ《大した身体能力よ、人間の女。》

シャイナ「（ＨＡ？む…婿ぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！？？？！何言っちゃってんのコノ若作り白肌オバサン！？？！！）え〝…何でアンタラも居るのさ？ｗｗｗ」

ヴェルズだけでなく自分を見下ろしているアンゲルスと倒れているシャイナの回りに何度も旋回するブリトラもいて、シャイナはゆっくりと身体を起こしたがまだ身体の筋力は少し低下していて、少し程度だがグラッとふらつく。

アンゲルス【可愛い坊や（ダーリン）が私達を使う暗殺魔具の待機所（ラブハウス）よ。人間の貴女。】

アンゲルスが言うに今いる場所はエツィオの身体の中にある暗殺魔具達（アンゲルスたち）の“待機所（ラブハウス）”であり、床一面は深海のように濃い青が地平線まで広がっていて、床の至るところから泡みたいなモノが出てきて、遥か海のように青い天井に掛けてブクブクと静かに上昇していた。

ヴェルズ『少し運動機能が落ちていますね。私の魔力を貴女に少量注ぎ入れてみましょう。』

シャイナ「う…わっ！？」

ヴェルズの右手に翳す淡い緑色の光がシャイナに向けて放った時、フワッと鉛のようにダルかったシャイナの身体が軽々と宙に浮き上がって、身体の中にあるボロボロのような神経も一瞬の内に蘇るように全身を駆け巡って、全身のダルい感覚が消える。

ヴェルズ『貴女の中にある生気…云わば神経に向けて運動機能を働きを、我が魔力で刺激し“軽めに活性化”させました。もう通常通りに動けるハズです。』

ヴェルズに言われた通りシャイナの身体にあったダルさが、一瞬の内に消えて働き足りなかった感覚が身に覚えてくる。

シャイナ「うほっ、なんと言う気分爽快ｗｗｗＲＰＧで言う“キュア●ラムス”やら“ヒーリング”だなｗｗｗ」

シャイナはウホホ♪と口笛を吹きながら両手両足をグイグイと伸ばして、軽くストレッチし身に湧き上がる軽やかさを実感する

ヴェルズ『私はアンゲルスさんと同じ現世の光に近い“特殊悪魔”なんです。今のようなシャイナさんの四肢機能を活性化させる魔力は、本来現世の至るところにある霊地（マナ）の力が必要なんですが…』

ヴェルズは両手を弧を描くように動かし、宙に浮かんだシャイナを両手から発する淡い緑色の光を放ちながらゆっくりと両足から下ろす。

アンゲルス【可愛い坊や（ダーリン）の身体（なか）は“神という神を超えた”、計り知れない魔力の層で覆われた“最強の結界”の中にいる

の。】

アンゲルスがヴェルズの代わりに説明を付けたし、アンゲルスの胸元に浮かぶ青白い気泡を左手で掬うように取る。

手の平に浮かぶ青白い気泡に向かって吐息を吐き掛けた時、青白い気泡が一瞬の内に“ハート形”の氷の結晶へとなって、ヒラヒラと粉雪のように舞い落ちる。

アンゲルス【可愛い坊や（ダーリン）の常時溢れる“極光（ロウライト）の魔力が私達の動力源となっているの。現世にある霊地（マナ）よりも遥かに高い地力が込められているの。】

シャイナ「（うはっｗｗｗ“ロウライト”やら“マナ”とか、何て厨二病言語ｗｗｗ）フゥン…私の真上で旋回している駄犬（ブリトラ）も、アンタと女体化バー●ル（アンゲルスとヴェルズ）と同じ特殊悪魔なの？」

ブリトラ《否、我は魔界の闇（カオス）より生まれし特殊悪魔だ。本来ならこの極光（ロウライト）の結界に入っただけで我の身体は跡形も無く“消失”するハズだがな…》

グルルと喉声を鳴らしながら遥か下にいるシャイナに向けて長い身体を降下させて、頭部をシャイナの右頬に触れる手前まで寄せた後、

鋭い獣の赤い眼光をシャイナに注ぎながら言う。

ブリトラ《我が主…エツィオに“認められた”ならば、この結界内の効力を“受けつけず”、通常通りの我が闇の力…雷(アルティトナンテ)を自在に振るうことができるのだ。》

そう言った後ブリトラはガウッと軽く吼えてシャイナの身体を被うようにグルッと長い身体の一部を、トグロのように巻きシャイナの身体に触れる手前まで宙に浮かんだまま静止する。

シャイナ「（どうでもこうでも相変わらず、厨二言語が出てくるねぇｗｗｗ）あっそう。簡単に言えば“エツィオに認められた使役(ペット)どもの愛の巣”ってこと…わわっ！？」

ドォォォォォォォォンッと天井から何かがぶつかったような音が響いて、グワングワンとシャイナの耳に先ほどの高い音が何度も迷惑と言ってもいいぐらいしつこくループする。

ブリトラ《…外部で何かがあったようだな。》

アンゲルス【同時に“上位の敵意ある魔の気配”も感じ取れるわね。】

ブリトラとアンゲルスは上部の方へと顔だけ上げて、遠い視線でも見据えながら出しているようにボケケェ（´A`）と見つめる。

ヴェルズ【私の身体と少し似ていますが…それと違って本体の容（かたち）は無く“下級悪魔集合体”で出来上がった“偽りの容（かたち）”のようですね。】

ヴェルズも顔だけを天井に向けて上げながら、外部の“気配と容姿を全て見えている”かのようにカタコトのような台詞を淡々と“フツーに吐く”。

シャイナ「おまっｗｗｗ何という“リアル超超千里眼”ｗｗｗエツィオ大丈夫かなぁ？（´・ω・`）ショボーンｗｗｗ」

モキューンとシャイナは表面をアザラシのように出しながら、自分の周囲にいるエツィオの使役達（ペット）と同様顔だけを上に上げて、三人と一匹と一緒に“カメラ目線”に向けながら一点を“ウザこっち見んな風”に（´・ω・`）ショボーンと見続けていた。

第九十一曲　崖の上から美青年？タ●リ神

シャイナがエツィオの身体の中にある魔神の間（正式名は待機所（ラブハウス））の中で、アンゲルス達の極光（ロウフライト）の力で体力が回復し、光（ロウ）と闇（カオス）の相対説明を聞いている最中、エツィオがいる現世の無人列車内で緊迫の状況に持ち込んでいた。

―ドイツ行き特急列車ブルーコメット　運転室前通路―

バーニア司令官「はぁ…はぁ…全く今日の俺はどうかしている！」

エツィオの短闇剣（ラークシャシー）で切り落とされた左腕の切断面から血を床に貯まるように落として、段々と顔全体の皮膚が青くなりながら今起きている出来事を己の身体を受け又は見て、目に疑うような言動を吐き捨てる。

バーニア司令官「俺のナイフが若僧の手に渡った途端“変異”するわ、変異したナイフが“ベラベラと喋る”わ…なにより…」

背中を列車の壁に寄りかかるようにガツンと付けて、軍服の一部を口元の歯で数センチ千切った後…

バーニア司令官「左腕が切り落とされて、追い撃ちに細かく分割されるとは…なんて厄日なんだ！」

ギュッと切断面よりやや上の残された腕に、千切った軍服を残された右腕と口元だけで紐のようにきつく絞めて所々血が付着しながら圧迫止血する。

エツィオ「アン★ラッキーだろぉ、人間？左腕はもう完全に死んだ。お前の攻撃パターンはもう把握済みしたし。（笑）」

エツィオはフフンと鼻高く笑うように言いながら手にする短闇剣をクルクルと手の平の中で回した後、短闇剣の剣先を重症状態のバーニアに向けて突き立てるように言う。

エツィオ「もうお前に勝ち目はねぇ…？ ｉｎｕｔｉｌｅ ａｎｃｈｅ ｓｅ ｉｏ ｆａｃｃｉｏ ｑｕａｌｓｉａｓｉ ｃｏｓａ（諦めな。）」

ジャキッ

短闇剣の剣先が正確にバーニアの心臓先に向けて指しており、暗殺者（アサシン）ならではの無表情ながらにして冷酷な言動がバーニアの胸に容赦無く突き刺さる

バーニア司令官「確かに勝ち目は無さそうだな…だが、」

バーニアはエツィオに気付かれないように右腕を背中腰にある小バックへと持ってきて、中から丸い形をした物体…手榴弾を取り出す。

バーニア司令官「追い詰められた時こそ、人間の本領発揮だ！」

手榴弾を背中に隠しながら右手で安全装置のピンを外し決死の覚悟でエツィオに向けて走りだし、背中に隠していた手榴弾を前に翳しながら走ったが…

エツィオ「三流戦法（テラカスいうごき）だな。」

エツィオは手にする短闇剣を軽く走り出すバーニアに向けて振るった時、短闇剣の刀身から黒い鞭のような太刀筋が“相手を噛み砕くように伸びる”。

バーニア司令官「がっ！？」

ザクッ

エツィオと離れているにも関わらず振った時の黒い太刀筋の軌跡が、バーニアの持つ手榴弾と中指から親指まで黒い残像の中へと触れた途端、“指が綺麗に切断”され同時に手にしていた手榴弾を“爆発出来ないぐらいまで内部破壊”する。

バーニア司令官「え…？」

エツィオ「Ｌａ　Ｓｕａ　ｖｉｔａ　ｅｒａ　ｆｉｎｉｔａ（じゃぁな、人間。）」

いつの間にかバーニアの懐にエツィオがいてバーニアの見た最後の視界には、しゃがんだまま身体を捻らせて身体を正面に向けると同時に手にしていた短闇剣の刀身が、バーニアの喉仏に剣先から刺される。そして…

エツィオ「抹殺完了（ミッションコンプリート）。」

エツィオは手にする短闇剣を、横一線に振りかざして“喉仏を掻き斬り”喉仏から噴き出る一点の噴水の血と共にバーニアを絶命…。

それだけでなく、喉仏も掻き斬ったと同時に首に一閃の光が走って、首もろとも“切断”し頭部が床へと転がり落ちた。

エツィオ「おっと、コイツは“おまけ”だ。たーんと、受け取れＹＯ（＾＾）ｐ」

ザクッ♪ザクッ♪♪

更にバーニアの心臓部分に目掛けて短闇剣の剣先を突き刺し、何度も短闇剣をブスブスと突き刺しながら、内部に蠢いていた心臓の動きを突き刺した部分から噴き出す血と共に完全にバーニアをオーバーキルした。

エツィオ「ヂェィ＼（＾Ｏ＾θ／」

首なしのバーニアの腹に向けてトドメの軽い蹴りを加え、ドシャッと生々しい音を立てながら列車壁隅へと死体（バーニア）を吹き飛ばした。

死体バーニア司令官「…ゴボッ……ピクピク……」

エツィオに蹴られた死体（バーニア）は壁によたれかかるように叩き付けられ、首と左腕と右腕中指から親指の切断面から血を流す。

ラークシャシー《ククク…足掻いた人間の末路は歪み美しい。》

数秒間切断面以外の部分は痙攣を起こしやがてピタリと完全に動きが止まって、バーニアという人間は完全にこの世から消えていった。

ラークシャシー《吾が焦がれし魔神よ。吾の“身体”を床に突き立てよ。お主が倒した全ての人間の死体を吾が“跡形もなく喰らってやろう”ぞ。》

短闇剣がエツィオにそう言った後エツィオは、「好きなだけ喰らってろ。」と言って手にする短闇剣の剣先を床に突き立てる。その直後…

ウオォォォォォォォォォォォォォン…

短闇剣を突き立てた床から赤黒い影が列車全体に一瞬の内に広がって、影の中から不死者の声が轟きながら複数の黒い腕が出てくる。

オォォォォォォォォォォォォォ…

一つ一つの黒い腕が死体（バーニア）やエツィオが倒したフランス兵達の死体にも向けて伸ばし、ガシリと死体達（ラークシャシーのエサ）を掴んだ後、床に広がっていた血と死体と共に血を啜る音と肉を引き裂く生々しい音を立てながら、不死者が彷徨う影の中へと“跡形も無く引き摺り込まれていった”。

エツィオ「ふむっ、綺麗にお掃除出来たなｗｗｗラークシャシー。」

ラークシャシー《フフフ…数千年ぶりの人の血肉は美味也。御粗末だったぞ、吾の焦がれし魔神よ。》

フランス軍を全滅させ短闇剣の力で“証拠隠滅”させたエツィオはのびのびとした表情を出し、床に突き立てていた短闇剣を引き抜く。引き抜かれた短闇剣はゴクリと美味しく飲み込む咽仏を立てて、満足したかのように喜ぶ言動を吐く。

エツィオ「お前もいい働きした。これからも宜しく頼むぜ。Ｌｅｉ？ｕｎｓｅｒｖｉｔｏｒｅｐｅｒｍｅｉｎｔｕｔｔａｌａｖｉｔａ.（＾＾）ｂ」

エツィオはイタリア語を吐きながら両瞳を元の黒に戻って短闇剣にそう言った後、《お主の手の中で生きるのは、本当に幸せじゃ。／／》とラークシャシーが顔を赤くしているように愛溢れる幸せの表情でも出しているように言った後、エツィオは手にしていた短闇剣を身体の中へと仕舞う。

エツィオ「さて、さっさと列車を止めるか。」

エツィオは運転室入り口の扉へと歩み寄ってドア前へと歩んだ後、

ドアに向けて右手を前へと押すように軽く力を入れた途端…

グシャリと運転室のドアがひしゃげるように壊れて前から倒れていき、破戒されたドアが甲高い金属製音を立てながら床に倒れた後、床の埃が少量足首までブワッと上がる。

ーードイツ行き特急列車ブルーコメット　運転室ー

エツィオ「うわぁぁぁぁ…きかいがいっぱい付いているぞぉ?どれが…」

エツィオは運転室にある様々の機械を見てワクワクと興味津々の表情を出しながら運転席手前へと数歩歩み寄った後、顔を右往左往と動かしてキョロキョロする。

エツィオ「列車を止められるんだ??」

様々な光が点滅し数字が変則的に変化していて、ボタンの下辺りからラインが様々のところへと伸びながら列車の速度を制御している装置を見て（エツィオには分からないw）、困惑した表情を出しながら首を傾げる仕草をする。

エツィオ「うーん…よう分からんwwwここで躓いてちゃ拉致あか

ねぇし、ならば！」

ジャキッ！

エツィオは何かを閃いたように頭部に！マークでも付きながら右人差し指を上に立てた後、背中から漆黒の右片翼の鷹に翼を出して右腕に纏わせて爪形態にさせた後…

エツィオ「目の前にあるヘンな物体を“ぶち壊せば”、列車停まるっか…ん！？」

纏わせた右腕の爪を目の前にある機械に向けて振りかざそうとした時、運転室前の雨で弾くフロントガラスの前方の上方向から…

エツィオ「あ。（・・）」

ガシャァァァァァン！！

エツィオが反射的にふぬけ顔から真面目顔へとなって後ろへと軽く飛び退いた時、前方に張られていた運転室のフロントガラスをぶち破って降りかかる豪雨とヌメヌメした物体が数匹床に落ち、第三者が疾走する列車内へと乱入する。

？「グチュ…グチュチュチュ……」

エツィオが見た左膝と右手を着けて顔を下に向けた第三者のモノ…身体は人間のように近い何処でも見かけるロン髪の青年男子のようだが、首から下がヌメヌメとした生々しい生き物が蠢く様に這い回っており、床に落ちた数匹の蠢くモノは“黒い蛭”が人間の手のサイズぐらいに巨大化したような姿だった。

第九十二曲　そしてバ●オ0のお約束展開へ！

―ドイツ行き特急列車ブルーコメット　運転室―

？「ジュル…ジュ……グチュ」

ロン毛髪の美青年の口から赤黒い蛭が数匹出てきて、ボトッと生々しい透明の液体のようなモノと共に床へと落ちる。

エツィオ「（集合体の悪魔か…）乱入して来て早々、バッチィモンを吐くなよｗｗｗ」

エツィオが美青年から吐き出した数匹の蛭を見てケラケラと笑い声を出していたが、表情は真面目（マジメ）顔のままで美青年に纏わり付く蛭達の動きを見る。

ジュルジュル…グチュ……

床に着いていた美青年が顔を少しずつ上げていく時、床に落ちた蛭達が何故か“分裂”を起こして段々と数を殖やしていき、運転室の

壁や天井にまでヌメヌメとした動きで登っていく。

エツィオ「（広い場所で戦うとしようか。先ずは…）」

エツィオは美青年？と首から下に蠢く蛭達の動きを見計らう為に右足を少し後ろへと下げて、運転室から逃げ出すタイミングを待つ。
そして…

？「…グチュ…ジュルジュル……ジュルジ…に……く。」

エツィオ「あ？」

美青年？が顔を上に上げて正面にいる真顔エツィオを見た途端、表情を歪ませるように口元を吊り上げて生々しい音を立てながら人間の声を出して不気味な笑みを…

？「グチュチュル…く……グチッ……いた…ジュル……い……
…ヒヒッ。」

ビシュッ！

美青年？の口がカパッ♪と開いた時、口の中からヌメヌメした液体

を纏う数本の触手（バ●オ４以降の寄生体のようなモノ）が飛び出してきて、触手達は蛇のようにうねらせながらエツィオに向けて伸ばす。

エツィオ「口から“グロ変なモン”を出すなよ。作りロン毛野郎ｗｗ」

右腕の爪を蚊のように払うように振りかざし伸ばしてきた口内触手達が、エツィオの右腕払いで強い風に煽られる形で後ろに仰け反られる。

触手を仰け反らせたと同時にエツィオは先程後ろに引いた右足を蹴って、身体を後ろに反転させ宙に浮かびながら後方へ飛んだ後…

エツィオ「けっ…。」

開かれていた運転室の入り口へと半後転宙返りしながら退き、左足を先に床に着けて低姿勢のまま床を滑るように運転室から退いた直後…

ゴシャァァァァァッ！！

蛭Ａ「ギィィィィ！！」

蛭Ｂ「シャァァァ！！」

大勢の蛭達が奇声を上げながら一匹一匹が一つの形“人の腕”となり、運転室入り口だった部分ごと両手で無理矢理抉じ開けるように破壊する。

―集合体下級＆中級悪魔　レジョナーリオ　ミンニャッター―

エツィオ「あーあ、うんてんしつが蛭だらけになっち『ギョェッ！！何あのバ●オ０に出てくる“ヒル男”のようなクリーチャーはｗｗ』あっ！シャイナ、気がついたのか！？」

エツィオは運転室だった入り口に溜まる蛭の大群を見て、左手を胸元に触れる手前まで寄せて軽く振るい、エグッ！と嫌みそうな表情を出しながら垂直に立ち上がろうとした時、身体の中からシャイナの声が聞こえて自然に動きが止まる。

シャイナ『お陰様でピンピン状態になったよ。つーか、私が寝ている間に何があった？ｗｗｗ』

エツィオ「説明したい所だけど、今は戦闘中だから無理ぽｗｗｗ」

ザクッ

入り口部分から一匹一匹が結合した鞭のようなモノがエツィオに向けて伸ばし、エツィオは右腕に纏わせた爪を払い退けるように振りかざし、鞭となった蛭達の集合体を爪先からザックリと華麗に横一線に引き裂く。

ドシャッとエツィオの爪で引き裂かれた腕になった蛭の一部が、体内の粘膜を吹き出しながら破裂するように壁に叩き付けられて、透明の粘膜を大量に付着しながら床へとズレ落ち一瞬の内に引き裂かれた蛭の死体が蒸発する。

蛭D「ギギギギ！」

蛭E「ギシャ！ギシャシャ！！」

ズリュゥッ

エツィオ「！」

シャイナ『ありゃぁー？ｗｗｗ（；¬ Д¬）』

切り落とされた切断面から新たな蛭が一匹一匹生えてくるように出てきて、一匹一匹の身体を結合しながら繋げ元の腕へと“再生”する。

エツィオ「面倒くせぇ相手だｗｗｗこういう時はブリトラを使って“さっさと消失”させてもいいけど、そんなんじゃ小説的な意味でつまらねぇしｗｗｗ」

シャイナ『勇●までいう“俺ＴＵＥＥＥＥＥＥＥＥのヒッキー勇者”は、リアルで死ねばいいと思うしｗｗｗ何度でも言うけど“強すぎてもいけない”からねぇ。強すぎちゃつまらないし、小説版縛りプレイゲームのような展開だもんな。ｗｗｗ』

エツィオ「まあお約束のお約束だなｗｗｗん？」

エツィオは身体の中でカメラ目線を向けているシャイナの台詞を聞いてクックッと苦笑いし、背中からもう一つの左片翼を出して左腕に纏わり付いた後、右腕と同じ爪形態にさせる。

背をやや前かがみになりながら入り口前に集まる悪魔の集合体に向けて、真顔から好戦的表情へと変えて両腕を素手先頭構え（ファイティングポーズ）を取った時…

アナウンス《Ｕｒｇｅｎｃｅ!Ｕｒｇｅｎｃｅ!!（緊急事態です。）Ｃｏｎｔｒ?ｌｅｚ ｄａｎｓ ｌｅ ｔａｘｉ ａ ?ｔ? ｄ?ｔｒｕｉｔ ｅｔ ｌａ ｖｉｔｅｓｓｅ ｅｔ ｃｏｎｔｒ?ｌｅ ｄｅ ｌ' ａｒｒ?ｔ ｎ' ?ｔａｉｅｎｔ ｐａｓ ｐｏｓｓｉｂｌｅｓ.（運転室内のコントロールが破壊されて速度および停止制御ができなくなりました。）》

突然天井辺りのスピーカーから女性の声が発してフランス語を淡々と吐き、サイレンの音が煩いぐらいに鳴って今いる通路・全寝室内・乗車席全体の明かりが消えて、赤い光が警報に合わせて何度も赤い光を全体に照らしながら一周する。

エツィオ「え!?何何??何言っているんすか、天井のお嬢さんｗｗ??」

アナウンス《Ｌｏｒｓｑｕ' ｕｎ ｐｒｏｂｌ?ｍｅ ｎ' ｅｓｔ ｐａｓ ｒ?ｓｏｌｕ, ｊｅ ｓｕｉｓ ｐａｒｔｉ ｐａｒ ｕｎｅ ｖｏｉｔｕｒｅ ｐａｒ ｕｎｅ ｍｉｎｕｔｅ. Ｉｌ ｓｅ ｒ?ｐ?ｔｅ…（なお問題が解決されない場合は、一分ずつ列車一両を爆発させます。繰り返します…）》

シャイナ『待って今エキサイト翻訳で調べ…って、つぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁ!!??!』

エツィオ「Ｗｈａｔ!?どうしたんだ、シャイナ??ｗｗｗ」

突如身体の中で叫び声が轟いてエツィオはビクッと両肩を一瞬弾くように驚いた後、エツィオは困惑した表情を出しながらシャイナに語りかける。

シャイナ『い…一分ごとに…こ…この列車の一両ずつ…“爆発”させるん…だって！』

エツィオ「な…なんだってぇぇぇぇぇぇ！？？？！？！Σ（ﾟДﾟ；）」

シャイナから聞かさせた翻訳を聞いてエツィオはＡＡ（アスキーアート）に出てくる“なんだってぇー”のエツィオ風“リアル顔とデフォルト顔とフリーダム顔”を背後から出現させながら、カメラ目線に向けて大きく眼を開かせていた。

第九十三曲　バ●オ経験者なら謎解きなんてっ！

―ドイツ行き特急列車ブルーコメット　次車両通路―

蛭の集合体悪魔（略してレジョミン）「フハァァァァァ……グチュ…チュルジュル……ジュル……に……く。」

口元から蛭を数匹吐きながら不気味に笑う表情を出した後、蛭達で出来た両腕を前に伸ばし両手を組んで、エツィオに向けて組んだ蛭達の両腕を思いっきり振り下ろす。

エツィオ「おーおー、れっしゃ内の明かりが真っ赤になってるなぁｗｗｗ」

ドシンッ！

列車全体内部に警告音が鳴り響く中、エツィオは振り下ろされるレジョミンの頭部潰し攻撃（ハンマーナックル）を、右足を蹴って後ろに軽く後退しバックステップで避ける。

先程いたエツィオの位置にレジョミンの組んだ両腕が床に空振りす

るように叩き付けられて、叩き付けられられた鉄製の床がボコッと粘土のように凹んで、周りにヒビを出しながら小さなクレーターが出来る。

シャイナ『エツィオ！襲撃される前に私達が寝ていた部屋まで引き返して！その車両の次が“もう一つの運転室”があるの！』

エツィオ「うんてんしつが二つもあるのか。このれっしゃｗｗｗ無駄な設計をｗｗｗ」

ブォンと更にレジョミンの蛭達が結合した腕がエツィオに向けて、動きは鈍足ながらもワン★ツーゥパンチ！アーンドキィック♪風に順序良くエツィオに殴り掛る。

エツィオ「ニャァ！チャッパ★おにょろぉーん♪」

ビュッ！ガキッ！シュルッ！

エツィオは最初の右フックを身を屈めて避け、続いての左ストレートを左外腕受けで反らし、最後のミドルキックらしき攻撃を身体を捻らせ同時に攻撃を反らしながら後退する。

シャイナ『確かそこにもエツィオが見たと同じ、運転室の内部なの。“非常緊急処置装置”というボタンを押せばなんとかなるかもしれ

ない！』

シャイナはエツィオの身体の中で列車マップ内案内の他に“パンフレット”でも見ているように言い、今なすべきことをエツィオに伝える。

エツィオ「分かった！そこに行けば爆発も阻止&れっしゃズドープッ♪出来るんだな！？」

結合した蛭達の尻尾の形をしたモノがエツィオの腹部に向けて触手叩き攻撃を仕掛けてきて、エツィオは前から来る触手叩き攻撃を飛び込み側転で回避し、次車両の開けられていた扉の中まで一気に移動した直後…

ドンッ！

エツィオ「うぉっ！？」

シャイナ『ひゃぇぇ！！！！』

床からめり上がるように揺れながら内側から炎が竜が一直線に昇るように現れて、徐々に炎が蜘蛛の巣を張るように伸ばし、木材及び巻き込まれた蛭達の一部が爆発の炎に巻き込まれて列車一両が完全

に爆破された。

エツィオ「ヒュー♪跡形もなく消し飛んだなぁ♪♪」

エツィオは左肩のマントを前に広げて跡形もなく爆破された列車の木材の破片が降り掛かるのを防ぎ、先程の豪雨が降り頻る空洞の車両の跡を見てハハハと苦笑いしながら軽めに口笛を鳴らす。

エツィオ「只か列車の原因が分からんだけで“爆発”なんかさせるんだ？ｗｗｗ今でも作者はバ●オの爆発ネタに突っ込んでいるんだがｗｗｗ」

ゆっくりとエツィオは立ち上がり膝や脚に付いた埃を両手で軽く払い落としながら、今の小説の展開&現実近況報告にピシッと左手を横にして軽く突っ込む。

シャイナ『こらぁ（、ｏ′）阿呆ツィオっ！もうこの車両も“爆発カウントダウンが始まった”のにのびのびすんな！！』

シャイナが身体の中で怒りが混じった突っ込みをエツィオに向けて咬ましていた時、バキッ！と天井から蛭達の集合体で出来た腕の塊の一部が突き出てくる。

レジョミン「ジュジュジュ…ジュル…ジュル……に……く。」

バキッバキバキ…

エツィオ「おっと…お前も爆発から逃れていたのか。面倒な奴ぅ★」

どうやらレジョミンも列車の爆発から逃れるため腕のような物体を天井に向けて突き破り、次車両の屋根の舳に掴まった後爆発と同時に伸縮性能力を活かして移動回避していた様だった。

レジョミン「…グチュチュ…ジュ…にく…ルグチュジュルジュル…に…く…ュル…にくぅ…」

段々と天井の穴を両腕で抉じ開けつつ割かれた穴から、美青年?の顔がヒョコッと覗くように現れる。

エツィオ「お前は“肉”しか言えねぇのかｗｗｗ」

エツィオは覗くように現れたレジョミンの蛭の移動音が混ざった幼稚並みの言葉を聞いて、両手を軽く広げ呆れたような素振りを出しながら言う。

レジョミン「にジュく。ルジュにくジュにくュ…ルジュルグチ…に…く……ュチュルグチュ……に……グチュく。」

レジョミンの左腕が下へ叩き付けるように振りかざした時、木材が破壊される音を立てながら天井が破壊され、バラバラに砕けた木材の欠片と共にレジョミンの集合体の身体が床へと腹から先に落ちる。

床に落ちたレジョミンは纏わり付く蛭達の透明の液体を滴り落としながら、両手の平を床に着いてエツィオが行く先を遮るように立ち上がる。

エツィオ「悪りぃが、先行くぜ。こんな状況でイチイチ相手をしてやれねぇからな。“少し本気出すぜ”。」

エツィオの右腕の爪の音を立てて開くように爪先から青白い光を出しながら前に翳した時…

エツィオ「ＪＡＭＭＭＭＭＭＭＭＥＲ！」

ボッ！

少し本気の力が入ったエツィオの爪がレジョミンの腹部に向けて殴るように当てた時、突如レジョミンの腹部がドーナツの穴抜きのよ

うに大きく“風穴が開く”。

レジョミン「！」

ボトボトと死した蛭達の透明の液体を床に落としながら、エツィオは右腕の爪で開けたレジョミンの風穴を潜り抜けて、次車両の扉まで一気に走る。

レジョミン「ジュルジュにくルジュジュグに…くチュグチュに…く……グチュチュにグチュく。」

ボトッボトトトト…

先程はエツィオの爪攻撃（本気出していない）で四肢の一部を再生出来たのに、本気の力が入った爪攻撃を受けた腹部の風穴が“一切治らず”、所々から蛭達が力尽きたように落ちていき身体の四肢の一部が千切れ欠けながら床に落ちた蛭達が蒸発する。

レジョミン「ジジュジュジュジュジュ……グジュジュジュジュジュ…ジュ。」

ボトッボトボト…

今いる列車内のカウントダウンが容赦なく迫り、レジョミンは千切れ欠けている身体をくの字に曲げて四這え状態になり、先に進んだエツィオを追い掛けるべく蛭達を床に落としながら物凄い勢いで追い掛け始めた。

…

……

……

―ドイツ行き特急列車ブルーコメット　最車両運転室―

エツィオ「よし、もう一つのうんてんしつに着いたぞ！」

エツィオが車両最後尾にある運転室にたどり着いた時、今爆走している列車はもう9車両が爆発されて、列車全てが爆発されるまで後数分しかない状況になっていた。

シャイナ『エツィオ、私を外に出して！非常緊急処置停止ボタンを押すから！！（エツィオがやると絶対列車が派手にぶっ壊れてバッドエンドになるからヤダァ！！）』

エツィオ「了解！」

エツィオは運転室に入った後運転室の扉の鍵をしっかりと閉めて身体に右手を突っ込ませた後、ゆっくりと前へと翳すようにシャイナを身体の中から出す。

シャイナ「よしよし、あとはこのパンフレットに書いてある通りに…」

エツィオの身体から出たシャイナは直ぐにパンフレットを右手でピラッと広げて、緊急用マニュアルを目に通しながら運転室の装置に近付く。

シャイナ「えっと、このボタンを押して…緊急システム停止をタッチパネルに…」

エツィオ「と…止まるのか？」

シャイナが黙々と緊急システム停止をパンフレット項目に書かれているように操作する中、エツィオは黙々と作業をするシャイナを心配するように見届ける。

シャイナ「で、此処からは…パンフレットに書いてない所…おまっｗｗｗこれ何てバ●オハザードｗｗｗ」

エツィオ「どうした、シャイナ？」

シャイナが順調に操作する運転室の機械のタッチパネルの次画面を見た瞬間、ピキッと身体そのものが凍りつくように固まって動きが止まる。

エツィオは何事かと思いシャイナの側まで歩いた後、シャイナが操作していたタッチパネルの画面の赤いデジタル文字でこう映し書かれていた。

『パスワードを入力してください。←

【　　】

』

エツィオ「…それだけしか書かれてないなｗｗｗ」

シャイナ「おっと、ここはバ●オで言うファイルが無いと解けないぉｗｗｗ」

パスワード入力画面でシャイナは困惑の表情を出しながら、運転室周囲に向けて顔を右往左往に動かす。

シャイナ「（てか…ファイルらしき物体が何処にも）「シャイナ、何か変な紙切れ落ちてたＹＯ～♪」えっ！？」

突如ひょんとしたエツィオのＫＹ声が聞こえて顔だけを声がした方向に振り向くと、ニコニコ顔をしたエツィオが両手に一つ一つの紙切れを持っていた。

エツィオ「足下に落ちていたもんで、拾ってみただけだよー（＾＾）」

ハイッ♪とエツィオはシャイナに紙切れを手渡すように差し出し、シャイナはエツィオが持っていた二つの紙切れを手にとって一つ一つ目を通していく。

ファイル１』

―緊急停止システム作動変更について―

各作業員及び運転士は必ず読むようにお願いします。

先月のパスコードは、午前０時より使用できなくなるので注意してください。

パスワード【４…】

〈後半辺りから千切れて読めない。〉

』

ファイル２『

―各特急列車運転手のＩＤ―

アーバイン：Ａ―４４６６―

ベルーガ：Ｂ―５９６３―

クライマリー：Ｃ―２５４９―

ディロブ：Ｄ―３２８４―

尚このＩＤは非常時の時に必要な番号なので、無くさないようにお願いします。

』

シャイナは一通りファイル内容を見て、カメラ目線に向けてこう呟いた。

シャイナ「…答えは次回！」

第九十四曲　パスの答えは“＊＊＊＊＊”ＤＡ！

―ドイツ行き特急列車ブルーコメット　最車両運転室―

パスワード『エラー　再度パスワード入力して下さい。』

ブゥゥゥゥと嫌な音と共にスピーカーから鳴って、シャイナはエツィオが拾ってくれたファイルを元に必死にパスコードを打ち込むが何度もエラーが鳴って、段々と焦りと苛立ちがこめた気持ちになる。

シャイナ「（あれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？？？！この列車のパスコードらしきのを見て“４５９６３”と打ったんだけど違うのかぁぁぁぁぁぁ！？）」

アナウンス《Ｃ' ｅｓｔ　ｅｎ　ａｒｒｉ？ｒｅ　ｄｉｘ　ｓｅｃｏｎｄｅｓ　ａｕ　ｄｉｘｉ？ｍｅ　ｓｏｕｆｆｌｅ　ｄｕ　ｖ？ｈｉｃｕｌｅ…（第１０車両爆破まで後１０秒…）》

シャイナ「（おはぎゃぁぁぁぁ！！もう１０車両爆発ＤＥＡＴＨか！？早ぇぇぇぇぇ！！！！）」

更に追い討ちを掛けるように爆破警告を促すアナウンスが流れて、シャイナはドヒィーン（´Д`；）と絶望するような表情を出す。

エツィオ「（中々、苦戦しているなぁ。けど…頑張れシャイナ！俺は応援しているＺＯ★）」

エツィオは爪形態を解いて普通の腕に戻し翼を背中に仕舞った後、両腕を組ながら背中を鍵を掛けた入り口に寄り掛かるように、右片足をくの字に曲げてやや斜めに立ちながら、頭部を両手で何度も掻き回すように必死に打ち込むシャイナを見守る。

シャイナ「（あーん（；Ｏ；）分かんねぇ…分かんねぇぇぇぇ！！！一体どうしたら良いんだＹＯ！？！！？？」

今いる列車最後尾の背後から段々と爆発音が聞こえてきて、脳裏に浮かぶバッドエンドの自分の姿を思い浮かべながら、思考はパニック状態に陥る。

シャイナ「（アフーンｗｗもう無理。もう駄目ポ／（；Ｏ；）／いっそゲームオーバーになってコンテニュ…それは無理かぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！）」

何度もオワタ状態になり口元からシャイナのデフォルト顔のような魂がミョキッ♪と出てきて、顔面蒼白になりながら諦め掛けていた

時…

ヒラッ…

シャイナ「ありっ？」

エツィオ「おっ？」

シャイナが手に持っていた右手の中のファイル２が、後ろにくっついていたのだろうか握り締めたことで剥がれ落ちて、シャイナとエツィオは剥がれ落ちたもう一つの紙切れに注目する。

シャイナ「！ファイルの続きだ！！」

シャイナはパッと絶望溢れた蒼白顔から希望を賭けた強い表情になって床に落ちた紙切れを拾った後、ファイル２の続きらしき文章を目に通す。

ファイル２の続き？『

―追記―

先月改訂した非常用パスワードだったが、どうしても変え直してくれとの連絡を受けた。

各運転士及び作業員達には申し訳ない。

そこで新しいパスコードだが、君らの乗車ＩＤと共に“星”を追加してくれ。

“星”の意味さえ解れば、緊急事態の時にさっさと入力できるだろう。

』

シャイナ「（“星”…もしかして“あの意味”かな？）取り敢えず、これかな？」

シャイナは追記ファイルに書かれていた“星”という単語に少し脳裏で思い浮かべた後、タッチパネルに思い浮かべた数字をペッペッと押す。すると…

ピィィィィィィー！

アナウンス《J'ai confirmé normalement un mot de passe.（暗証番号を正常に確認しました。）Je développe un programme de l'urgence de l'usage non-commun et j'arrête l'explosion du train et d'urgence arrête un train pendant la course.（非常用緊急プログラムを展開し、列車の爆発を中止し、走行中列車を緊急停止させます。）》

ギギィと鋼を擦り付ける音が聞こえて徐々に運転室のフロントガラスの窓に叩きつけられる雨が、次第に雨を弾く範囲が狭くなっていく。

シャイナ「おっしゃ！謎解き完了じゃぁぁぁぁ！！」

エツィオ「祝★おめでとう御座いまぁぁぁぁすぅ！／（　＾∀＾）／□祝□／（、∀、　）／」

パンパカパーンと謎解きを解いて喜ぶシャイナの背後で、エツィオが身体を“命”ポーズを取りながらクルクルと回っていて、画面端から出る色とりどりの紙吹雪と共にシャイナは小さくガッツポーズを取った。

エツィオ「で、シャイナ。パスワード入力の答えは何??」

謎を解いた二人が喜ぶ中エツィオはススッとシャイナの元へと歩み寄って、視聴者視点（云わばカメラ）に向けてシャイナに顔を向けたまま左人差し指で軽く何度も指す。

シャイナ「“星”それは“身近にある存在”だから解った。…“三次元（リアル）で大学又は高校をちゃんと卒業していれば”簡単に解けるパスだよ。ファイル1とファイル2を…」

エツィオ「！あっー！！解ったぁ！！馬鹿な俺でもパスの答え解ったZO☆」

ピコーン♪とエツィオの頭部に！マークでも付いたように現れて、作者の出した“超簡単謎解き”のパスの答えを脳裏の中に描く。

シャイナ「どーも♪視聴者の皆さん、作者の簡単安心“バ●オ擬きのクソ謎解き”に付き合って、本当に本当に有り難う御座いまーぁす。ｗｗｗ」

シャイナは笑顔満開で“カメラ目線”に向けて腰を落としやや猫背になって、両手の平を前に翳して軽く何度も振りながら口元から短くベロを出して、シャイナなりの軽い挑発？みたいなものを取る。

シャイナ「それにしても追記ファイルが無かったら、今頃俺ら列車の爆発でアボ《ガシャァァァン！》ギャー！！」

エツィオ「っ！？シャイナ！？」

突如運転室の前に付けてあったフロントガラスが割れて、調子に乗っていたシャイナの身体を大きな赤黒い手みたいなモノがシャイナの全身をかっ攫うように捕まえる。

レジョミン「グジュジ…ュジュジュジュ。」

エツィオ「ああ…お前の存在がいたことに忘れてたよｗｗｗ」

どうやらエツィオを追いかけてきたレジョミンが列車の天井を突き破って、爆発していく車両の後ろから追いかけられるように屋根を四足歩行で這って此処まで来たらしい。

レジョミン「グジュジュジュジュジュジュ…にく…にくブチュッにく…にく」

シャイナの視点から蠢く赤黒い肉塊（蛭）の中央辺りからロン毛の美青年？が顔だけ生まれてくるように出てきて、吐息をシャイナに

向けて軽く吐きながら不気味に微笑んでいた。

第九十五曲　ちょっぴりアッーな部分とメ●ブラのあの業をチート風に使ってみた

―ドイツ行き特急列車ブルーコメット　最車両運転室―

グジュル…グジュジュジュ

ロン毛の美青年?はしてやったりと勝ち誇っているように、不気味に笑う表情を出しながら拘束したシャイナを身に引き寄せて楯代わりにする。

シャイナ「ひぃぃぃぃぃぃぃぃ!!!!!何か周りの“何かが”ウジュルウジュルと蠢いていますけど…アッー!!!!!」

服の襟部分から蛭数匹スルッと入って胸元辺り（下着の上）にモコモコと蠢きながら、シャイナの“服の中身の上半身だけ”厭らしく一周する。

エツィオ「シャイナ!!」

エツィオは直ぐにレジョミンに拘束されているシャイナを助けようと、一瞬の内に真面目面になって懐へと踏み出そうとしたが…

レジョミン「ジュジュにジュルルく…に…くグジュジュル…ルにく！」

ビュッ！

エツィオ「っ！」

レジョミンは向かってくるエツィオに向けて左腕が、棘無しツルンツルンの蛭達の集合体である赤黒い触手となって鞭のように横に振り払う。

エツィオ「（場所が悪すぎるから駄目だ、避けられねぇ！）ぐぁっ！」

ドッ！

バーニアと戦ったやや広い通路と違い運転室の狭い部屋にいるせいか、エツィオは避けることが出来ず案の定モロにレジョミンの触手払い攻撃を腹部に受ける。

エツィオは後方に吹き飛ばされながら背中から運転室の入り口扉へとぶつかって、短い呻き声を上げた後両膝を床に折るように半分身

体が崩れ落ちる。

エツィオ「…イチチ。い…イマイチ場所が悪り…ぐぉ！？」

ギリッ！

背中から入り口扉にぶつかってやや呻き声を上げ、右手を床に着けて再度立ち上がろうとした時、一瞬の内にエツィオの首に先程叩いた触手が絡まって、ある程度巻いた直後エツィオの首を締め上げる。

レジョミン「ジジュジュ…ジュジジジジ…ジュ…ククククッ！」

エツィオ「うぐぁ…！」

エツィオは首にレジョミンの触手で締め上げられて、チート技を使わない人間の人間らしい苦痛声を上げる。

レジョミン「グジュルルルルルル！」

レジョミンはざまぁみろとでも言っているように苦しむエツィオを見て、欺く声を出しながら締め上げているエツィオの身体を締め上げている触手に力を入れて、エツィオの身体を宙に持ち上げる。

シャイナ「ンー！ンンー！！（ウピィィィィィィィ！！！！これ何てR－18ｗｗｗ）」

エツィオを締め上げている最中シャイナは上半身だけが蛭達の粘液まみれになっており、中身の下着もグチョグチョに汚れて気持ち悪い感覚を受けていた。

シャイナ「ウプッ！（あー、参った。アン●ンマン的な意味で力が抜けていくぅ～）」

更にはレジョミンの唇がシャイナの左頬に口付けし数回両頬に舌べロでじっくりと嘗めた後、シャイナを蛭達で覆われる胸らしき部分に触れて…

レジョミン「ジュジュ…にく…ジュジュ…にくにく。」

グプッ

レジョミンは拘束しているシャイナの身体を左肩から胸に当てた後、徐々にシャイナの身体が蠢く蛭達の中に入っていき呑まれた部分から蛭達がシャイナの身体を這って、数の暴力如く蛭まみれにしていく。

シャイナ「（こうゆう光景（デジャブ）は7年前以来だな。只か教会の一人を…グフッｗｗｗ）」

シャイナは身に受けているキモい感覚を7年前の教会による執行を思いだし、心の中で皮肉にも苦笑いしながら呑み込まれていく身体を抵抗せず、両目を閉じて受け入れようとした時…

エツィオ「…ち…調子に乗るな…クソ雑魚が！！」

レジョミン「ギッ！？」

エツィオはややご立腹になりながら瞳を黄金の鷹の目へと変えて、自分の首を締め上げていた触手を右腕を震えながら上に上げて右手で掴んだ後…

エツィオ「“ピンチと見せ掛けてテメェを叩こう”と思っていたが、やっぱり現実的には巧くいかないらしい。」

ブチッ！

ドアノブを開けるように手首だけをを動かした時、エツィオの首を

締め上げていた触手が捻千切れて、触手からの拘束を解いたエツィオは重力に従って下へと落下する。

落ちていく身体を両足できちんと着いて、ビチビチと右手の中に蠢く捻千切った触手の一部を掴みながら力を入れた後、グシャッと暴れていた触手を握り潰す。

エツィオ「まぁいいか、今は取り敢えず…」

エツィオは真面目面になりながら身体の中に右手を入れて短闇剣（ラークシャシー）を取り出し、シャイナを取り込もうとしているレジョミンに向けて刀身を右手の平の中で一回転させた後、綺麗に水平に構える。そして…

エツィオ「Ｍｉ　ｒｉｔｏｒｎｉ　ｕｎａ　ｐｅｒｓｏｎａ　ａｄ　ｏｒａｔａ！（シャイナを、返せ！）」

エツィオの放つ黄金の鷹の眼光がレジョミンに向けて走ると同時に、目元から金色の軌跡を後方へ一直線に流しながら低姿勢で斬りかかる。

レジョミン「グジュジュジュ！！！！」

レジョミンは向かってくるややご立腹エツィオに取り込もうとして

いたシャイナを中断し、粘液まみれのシャイナの身体を前方に差し出し人質行為をする。が…

エツィオ「テラカスぃ動きだな。」

レジョミン「ギッ！」

ズバァァァッ！！

エツィオは右手に持つ短闇剣を手首だけで高速に動かし漣（さざなみ）を発生させて、短闇剣の刀身が“複数の蛇のようにうねる”。

更にそこから発する剣圧と衝撃波でシャイナを、“拘束している腕のみ”バラバラに解体した。

グチッ…

拘束から解かれたシャイナは前乗りから身体が倒れていき、エツィオはレジョミンの懐に飛び込んだと同時に粘液まみれのシャイナを左腕で受け止める。

エツィオ「ほんの少し、戯れてやろうか？焼きそば野郎？？」

エツィオに抱き締められるような形で、しっかりと粘液まみれのシャイナをエツィオの胸元に優しく引き寄せた直後…

エツィオ「メ●ブラ風に…斬刑に処す！（キリッ」

ブワッ！！！！

エツィオの持つ短闇剣を目に見えない程高速に手首だけで動かした時、相手を斬る赤黒い軌跡が肉眼で見える程何度も三日月形を描きながら容赦無く乱斬りする。

ザクッザコッザシュシャシュシュ！！！！

レジョミンはエツィオの匠以上の太刀筋に高速に細切れにされていき、悲鳴すら上げられないまま顔や髪や目や纏わり付く蛭達も原型すら分からない位にバラバラに四散していく。遂に…

エツィオ「ＨＡ…クソッタレが…」

ブリトラ《ガゥッ！》

グシャッ！

細切れにしたレジョミンだった肉片の一部を右足で“再生出来ないぐらい踏み潰した”後、背中からブリトラが待ってましたー♪とでも言っているように出て来る。

ブリトラは少量口元から涎を足らし長い身体を伸ばしながら残りの肉片達を見て、大きな口を開けた後…

ブリトラ《バァウ。》

グシャッ！

開かれた牙丸出しの口内に細切れにしたレジョミンの肉片が“欠片すら残さず丸飲みし”、閉じられた口内で何度も噛み砕く音を立てながらゴクリッと喉声を鳴らした。

第九十六曲　事後Ｔｈｅ廃小屋内にてのシャイナと真っ黒い●ンヘル

―？？？―

地の果てまで暗闇に満ちた世界にポツンと、シャイナは暗闇の中心に当てられている僅かな光の中で眠るように倒れていた。

トクンッ…

トクンッ…

シャイナ「（生に聞こえるなぁ…自分の心臓の音がこんなにも…）」

シャイナは横に倒れながら身を猫のように丸め、暗闇の中に聞こえる自分の心臓の音を聞く。

シャイナ「（あのＲ－１８のような状況で人間の私が生き残れたのは、本当に奇跡だと思う。イヤ、マジでｗｗｗ）」

シャイナは現世の列車の中で起きた出来事を再度脳裏に映る映像を

見て、両目を閉じて眠ったまま苦笑いするが…。

シャイナ「（ウキィィィィ…あのバ●オに出てくるリー●マン擬きの悪魔のせいだ（ー”ー）寒ぃ…無駄に寒いいいいっ！！）」

音も無く返ってくるのは自分の声だけであり、つーんと耳鳴りでも受けているような感覚を受けながら、身に受ける生温さと気色悪さを感じてじっと眠るように身体をそのまま横倒せる。

シャイナ「（ダルい…気持ち悪ぃ…もう最悪…次の特異界で浄化を終えたら服を変えるか…はぁ…（ー・ー；））」

シャイナの身体にはレジョミンの蛭達に所々絡まれて通った蛭達の粘液の跡が沢山通っていて、外見だけでなく服の中もぐちゃぐちゃに汚れて悪寒を感じていたが…

シャイナ「（此所にいるのは私だけだから、寒くなるかなぁと思っていたけど…）」

冷たかった身体が段々と暖かくなっていく感覚を受けて、シャイナは自然に両目をうっすらと少し開ける。

シャイナ「（このモフンモフンのプリンプリンのン〝ギモ〝ヂィィ

〝イィ　〝イィィィ　〝感覚…もしかして…）エツィオ？」

ぼやけた視線のままシャイナは顔だけを上に上げそっと呟いたた時、シャイナを天から照らしていた光がシャイナの声に応えるように段々と幅広くなっていく。

エツィオ「エツィオなんだね？ねぇ…？」

シャイナは天に映る眩い光を見ながら穏やかな笑みを出した後、シャイナの意識又は精神をそっと現世へと帰るように飛ばしていった。

…

……

……

―現世　フランスの何処かの森の深部　廃小屋内―

シャイナ「！…ここは。」

シャイナが意識を取り戻すとまず感じたのは長年の雨で染み込んだ自然の傷んだ木製の匂いを嗅いで、自然に目を開けながら横向きの世界のまま今いる場所を視界に通す。

外は雨で降り頻る中、至るところには緑色の黴（カビ）が生えており窓硝子も割れて所々割れた欠片が辛うじて付いていて、天井にはかつてランプが付いていたのだろうの跡がくっきりと残っており、今いる場所は廃小屋の中にいると理解する。

ラークシャシー《気がついたか、吾の焦がれし魔神の“婿”よ。》

シャシー「うへぇっ!?ちょっ…アンタ誰？ｗｗｗ」

突然シャイナの背後から二重声の●ーター声が聞こえて、シャイナは声がした方向に顔を向ける。

ラークシャシー《すまぬ、自己紹介がまだだったな。吾が名はラークシャシー、先程魔神と契約したばかりの仲魔ぞ。》

シャイナの背後には胸部と両肩と手首と腰に白銀の西洋の羅刹文字が刻んだ鎧を被い、本来の巨大な体型を小屋サイズにした鎧付きの黒い竜がいて、シャイナの身に左小指から上腕部分まで付いた両飛竜の巨大な翼がシーツ代わりにシャイナの身を折り畳むように包んでいた。

ラークシャシー《どうだ?吾が翼に暖まれた気分は?》

頭部に花の蕾のような形をした太い角が二つ、長い尾の先端に赤黒い光のような痕を浮かべながら大きい身体を丸めて長い首を下ろし顔をシャイナに近付けた後、向けて悪魔ならぬ優しさを込めた言動を放つ。

シャイナ「（えっ…なんすか？ｗｗこの●ＯＤに出てくるア●ヘル第三形態の真っ黒バージョンの奴ｗｗｗ）あ…ありがとう。貴方が私を暖かくれたのね。十分ホクホクしたよ。」

シャイナは身に包んでくれているラークシャシーの竜の翼の暖かみを感じて、両瞳を閉じながらラークシャシーに笑顔で応える。

ラークシャシーはグルルと声を鳴らして《そうか。》と一言言った後、顔を割られた窓に映る雨を見ながら列車での騒動の後をエツィオに代わりに続きを言う。

ラークシャシー《お主が意識を取り戻すまで2日は経った。あの走る長い箱動きが止まった後、魔神がお主を抱き抱えて外部に出た時、外にも玩具を持った下等の人間共がおったわ。》

ラークシャシーは翼を僅かにわななかせながら、表面は恐面ながらもニタリと笑っているように列車後の出来事を思い出しながら言う。

シャイナ「ふ…2日!?それに列車が止まった後に、またアンタらに対しての軍隊(エサ)来てたのかｗｗｗ」

ラークシャシー《左様、下らぬ玩具ごときで吾らの焦がれし魔神に刃向かうとは、実に愚かで計り知れない雲泥の差があるとも知らずに、本当に無謀な下等種族よ。》

ラークシャシーはカカカと笑い声を出しながら言い、シャイナはラークシャシーの列車後の様子を脳裏で想像しながら言葉を聴いて半分呆れた表情を出しながら言う。

シャイナは一旦ラークシャシーの翼の中で身に包む服装を触ったが、あのときのヌメヌメ感と生臭い臭いが“まったく無く”身に羽織る服そのものが洗濯を干した後のフワフワ感がある“キツイ臭いさえもない完璧に乾いた状態”になっていた。

ラークシャシー《ククク…吾だけでなく魔神の中にいる使役達も、その場にいた全ての人間を一匹残らず喰らっていたわ。その場に残されたのは吾らのみよ…》

シャイナ「!」

窓に映る豪雨の光景からプィッと反らして穏やかな表情でも出しているかのように強面の顔を横に向けた後、シャイナもラークシャシ

ーの向いた顔の方向に釣られて同じように顔を向ける。

エツィオ「スピー…スピピー♪」

シャイナ「エツィオ！」

朽ちかけたカビまみれの中央の柱に背中から寄りかかるように身体を丸くしながら眠るエツィオの姿が居て、体育座りのまま所々鼻穴からプクー♪と風船のように何度も凝縮させ幸せ顔を出しながら眠っていた。

ラークシャシー《ただお主を護るために、吾らよりも刃向かってくる人間を“多く殲滅していた”。ただか人間相手に“本来の姿”に戻って一匹残らず…な。》

ラークシャシーはありのままに起こった事をシャイナに言い、グルルと声を鳴らしながら牙が三本ぐらい見えるまで口を少し開く。

シャイナはラークシャシーの言葉を聞いて子供のように眠るエツィオを見ながら、少し笑う表情を出して「ハハハ。起きたら…感謝しないとね。」と軽く一息を付け足すように言う。

ラークシャシー《今はこの天候だ、暫らく動かないほうがいいだろ

う。まずはお主の溜まりきっていた疲労と体力を十分回復してからだ。旅の続きはそれからぞ…。≫

シャイナ「そうだね。（やっぱり●ＯＤの●ンヘルだｗｗｗ気遣いが半端無いｗｗｗ何気に私はカ●アン信者なのよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ♪）」

シャイナは心の中で二次元に出てくる公●夫婦をニヤニヤ要素で腐女子的に興奮する表情を出していたが、それを表に出さないように“無理矢理作り無表情”を出して堪えながら…

シャイナ「…おやすみー。（だが●ＯＤ自体のＥＤはＧＯＯＤＥＮＤ以外は最悪なんだよねぇ…特に“ＤとＥ”な。ｗｗｗその中でも強烈なのはあのｒｙ（実際にプレイしてＧＯＯＤＥＮＤを除く全てのＢＡＤＥＮＤをその眼で確かめよう！…“厭”になりますが。））」

所々作者の言葉が入りながらラークシャシーの翼をそっと両手で握り絞めた後、かつての家で住んでいたベットの中でスヤスヤと眠るように再度意識を手放した。

第九十七曲　魔の神の赤い夢

―？？？―

エツィオ「（？浮遊感があるな…こいつは一体…）」

ドクンッ

現世で幸せに眠る魔という存在を超え神さえ凌駕する魔の神が、深い深い意識の中に落ちていって“半分寝惚けた状態”のまま底にある黒い大地に右足から先に降り立った時…

エツィオ「んぁ？」

ズズズ…

魔神は眼に映る阿鼻叫喚の光景を見て半分寝惚けながらも、身体の中にある心の臓の鼓動を打ちながら変わっていく世界を静かに見届ける。

グプッ…

？『我等を葬りし魔神め…若輩ながらにして何故…』

？『何故…何故…何故…私たちは何も…貴方に対して害を与えてないのに…』

エツィオ「？」

降り立った足元から赤い血のような染みがジワリと広がっていて、所々から引き千切れた原型すら留めていない元人間・悪魔の肉片が出て来ながら交互に千切れ掛けの口を動かしてまだ寝惚けているエツィオに言い放つ。

悪魔だった肉片『何故我等悪魔特有である“喰らう”ことをしない!?』

人間だった肉片『何故、無実な人まで殺すの!?何故殺したのぉぉぉぉぉ!!!!』

尿と糞の臭いが混ざった赤き死臭の世界で、至るところから出ている原型を留めていない死者達が、憎しみと嫉妬と怒り・妬みが混じ

った言葉が半分寝惚けのエツィオに向けて飛び交う。

悪魔だった肉片『裏切り者めぇ…よくも我らを！！』

人間だった肉片『唯一の幸せを…幸せを奪った悪魔め！！』

悪魔だった肉片『憎い！憎いぃ！！憎いぞぉぉぉぉぉぉ！！！』

人間だった肉片『返せ…私の可愛い娘達を返せぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！』

世界を救うための浄化…そんな最中で魔神を阻止できず敗れた悪魔と魔神（エツィオ）の戦いに巻き込まれた人間達が、数々の罵詈雑言を木霊のように吐きながら次々と言い放つ。が…

エツィオ「はぁ…（´◇`＃）いちいち煩ぇよ、口だけ死人が。」

エツィオはそんな言動を吐かれようとも気にせず、死者達の戯言を“小説冒頭から話を聞いていなかった”ように背中や首裏を左手で軽くボリボリ♪と掻きながら言う。

エツィオ「ふぁぁ…何だかお経のような声が何度も聞こえるし、こ

れじゃ眠りも出来ねぇーＹＯ（ー＿ー＃）だもんで…」

更に口元を大きく開けてだらしないぐらいに欠伸し両目をパチクリと何度も動かして細目にしながら、グイグイとストレッチするように手足を軽く伸ばした後…

エッィオ「死者は死者らしく、さっさと成仏しろや。ｍｇ（＾ｏ＾＃）」

右腕を魔神化した時の本来の腕へと変えて手首下の鞘部分から、青白い光を長々く放つ本来のアサシンブレードを出して足元の赤い血のような大地に突き立てた直後…

ドンッ！

突き立てられた赤い大地が一瞬の内に“青い海のような綺麗な水へと変わって”、突き立てられた大地から波紋状の青い帳が広がって“浄化”されていく。

悪魔だった肉片『！』

人間だった肉片『ギャ…』

赤い大地に生まれていた肉片達が広がっていく青い帳に巻き込まれた瞬間、肉片が一輪の“蓮の花の蕾”に成って、次々と蓮の花に成りながら水面に複数の蓮の葉が浮かぶ。

エツィオ「ふー、さっきよりも静かになった。これで…」

徐々に複数の蓮の花達の蕾が開いて、蓮の花の青い花弁が染いた美しい蓮の花が綺麗に咲く。雌しべ辺りから球体の白い発光が複数昇るように出てきて、辺りの景色が深い青の風景へと変わった。

エツィオ「眠れ……るぜ……スピー♪」

エツィオはトロンと眠たい顔を出しながら魔神化した右腕のアサシンブレードを水面から引き抜いた後、少し右拳を握って元の人間の右腕へと戻す。

そしてエツィオは水面に倒れるように背中から倒れ、バシャッと水滴を軽く弾き飛ばした後仰向けのまま口を何度も開いて、寝息を立てながら子供のようにまたしても眠り始めた。

サワッ…

エツィオが水面の上で大の字で大胆に眠っている中、水面に浮かぶ青い蓮達はユラユラと漂うように揺れる。

雌しべの中心から出て宙に発光している白い球体の光は、上部にある一筋の光に向けて伸ばしていき、徐々に今いる世界を現世の光のように照らしていった。

…

……

……

―現世　フランスの何処かの森の深部　廃小屋内―

エツィオ「（とと…寝過ぎちゃったな。）ふぁぁ…。」

エツィオの意識が今いる現世に戻ってきた時、外は暗く割られていた窓の隙間から入る月の光が今いる廃小屋の中を明るく照らしていた。

エツィオ「（それにしても変な夢だったな。何で今更死人共が俺に現れたんだよ？ｗｗｗ）」

エツィオは両目を左手で何度も擦って瞼を上下にパチクリさせた後、

完全に目が醒めて夢の中に出てきたあの醜悪な存在を思いながらゆっくりと立ち上がる。

魔神（エツィオ）は悪魔で在りながらにして身体を休める時に発生する“夢”という存在を知ら…否夢を見ることが今まで無かった。

エツィオ「（あれが“夢”だというのか？それじゃぁ…）」

割られていた窓から外気の風から送られてくる自然の匂いを少し嗅いで軽く深呼吸し、ふと視線を少し動かしラークシャシーの翼の中でベッド代わりに眠っているシャイナを見る。

ラークシャシー「クルルル…」

シャイナ「ンゴゴゴゴ♪…ガフッ…ギュギュ。ンギュギュゥ♪♪」

一匹と一人（ラークシャシーシャイナ）は互いに鼾（いびき）をかきながら寝ており、お互い女性だからか身体を寄せ合う形で安らぎ溢れた幸せの表情で夢の中へと入っていた。

エツィオ「（“夢”か…。だとしたらアレは…）」

死者達の嘆きの声が轟き煩く思って浄化しようとした数秒前に、遥か最奥にいたもう一人の人物…

暗くてよく見えずシルエット程度だが、姿・形は“自分とよく似ていて”、その“自分とよく似ていた人物”の右手に持つあの半分千切れた細長い物体…

アレは何?

アレは誰だ?

アレは何故此所に居た?

千切れた部分から落ちる赤い雫…落ちていく雫が溜まっていた赤い血のような水面へと落ちていって、落ちていった箇所から赤い帳が何度も広がっていき…

エツィオ「…少し風に当たってくるか。」

エツィオは夢という夢の中で出来たあの光景を深く考え過ぎたか、一度目を反らすように瞳を数秒閉じる。

エツィオは一人と一匹の寝素顔を再度見てふと微笑む表情を出した後、エツィオは身を翻して左肩のマントを靡かせながら小屋の外へと繋がる入り口へと歩み出した。

第九十八曲　朝のリフレッシュ神水でオハヨー御座いまぁぁぁぁす！

―朝　フランスの何処かの森の深部　廃小屋内―

ピピピ…

シャイナ「アブゥ？…あ〃…朝っずが？…」

外から小鳥の鳴き声が聞こえてシャイナは半分寝惚けたまま目を擦って、ラークシャシーの黒い翼の中から這い出るように起きる。

窓から入る朝の太陽の光が今いる部屋の中を照らす最中、シャイナの頭部は爆発したかのようにボーボーと“鳥の巣状態”で出来ていて、ヨタヨタと歩きながら割られていた窓際まで歩み寄る。

シャイナ「髪の毛を真っ先に解かしたいのも山々だけど、先ずは…」

シャイナは窓にまだ付いていたガラスの破片に映る“爆発頭”の自分の姿を見た後、廃小屋中にある洗面らしき部分を探そ…否シャイナはブンブンと顔を何度も横に振って、今いる廃小屋内には絶対に

使えそうな物は無いと“自己判断する”。

シャイナ「エツィオがいない…外に居るのかな？」

シャイナは起き上がった時今いる部屋の中の中心柱に寝ていたエツィオの姿が無く、シャイナは数秒間柱に寄り掛かるように体育座りで寝ていたエツィオの姿を一瞬瞳に映し出す。

シャイナは再度割られていた窓に映る外の景色を見た後シャイナも外に出ることを決意し、今いる廃小屋から出ようと足を入り口の扉に向けて歩もうとした時…

ラークシャシー《待て、魔神の婿よ。一人で外に赴くのはリスクが高い。》

シャイナ「ありゃ？起きてたんすか？？●ンヘルさんｗｗｗ」

いつの間にかシャイナの背後に起きていたラークシャシーが居てそのままの強面の表面を出しながら、シャイナが着ている白いパーカー内に翼の鉤爪を一本引っ掻けるようにグイッ♪と、破れない程度で軽くシャイナの歩みを止めていた。

ラークシャシー《ラークシャシーだ、魔神の婿よ。吾の名は●ンヘ

ルではないぞ。一度で覚えよ。≫

シャイナ「いや…どう見ても●ンヘルです。ｗｗｗ本当に本当にありがｒｙ（」

ラークシャシー《だから●ンヘルではないと言うであろう、魔神の婿よ…。それよりも●ンヘルとは誰の名前ぞ??≫

これっ＼（´、｀）と強面ながらでもムスッと苦笑いするような言動でシャイナに言い、グルルと喉声を鳴らしながら長い首を下ろして顔をシャイナの鼻先に付く手前まで近づけた後、更に続けて言う。

ラークシャシー《吾は魔神に“お主を何としても護り通せ”と命を授かった。お主なら解るな?今からやろうとしている意味が…≫

シャイナはまさかまさかと思い手に汗だくがブワッと出てきて、キリキリと腹が傷むような感覚を受けながら額に汗を流した直後…

ラークシャシー《つまりだ…お主が今から何処に行こうとも“魔神の使命のままにお主に付いていく”という意味だ。≫

シャイナ「ちょっ！Σ（´Д｀；）となると…」

ムフフンと強面のまま口元を吊り上げて笑っているかのように言うラークシャシーの言葉を聞いて、シャイナは今から自分がやろうとしている行動を脳内で三秒間妄想シュミレーションとして映し出す。

シャイナ「顔を洗いにいくという現在アクションを置いといて、ＩＦ妄想でこんな深い森の中で“用を足しに行く”時…」

深い森の中で何かに急ぐように早歩きする自分の姿…見通しの良い場所を発見、更に用を足すために必要不可欠な扉代わりの葉っぱと、用を身体から出す為に必要不可欠な穴。持参のトイレットペーパーを取り出して枝の中に通してセット完了！

さぁ…これでリフレッシュ出来て至高の時が……！？？！！

シュミレーション中にいるＩＦシャイナが、何かの視線を感じて下半身の“大事な部分が出ながら”、顔を上に上げた瞬間…

ラークシャシー《そんな所に居ったのか。魔神の婿よ（＊´ー、＊）≫

ＩＦシャイナが居る覆い繁る森林の空が見える頂き部分の横からスッ♪とラークシャシーが元からの巨体と長い首でＩＦシャイナを探し見つける。

当然ＩＦシャイナの視点からは“上から覗かれた（用足し中）”形になってしまい、ラークシャシーに対しては正当な使命で動いたつもりでいても…

ＩＦシャイナ「ギャァァァァァァァァァ！！！！」

“大事な部分”が見えたままＩＦシャイナは絶叫する。ＩＦシャイナが絶叫する声は森の中にいた小鳥達まで驚いて、バサバサと森林の至る所から飛び立って行く中ＩＦシャイナは背中から暗転した。

…

……

……

ラークシャシー《馬鹿者。吾はお主の個人行動（プライベート）までは見ぬわ。》

上記の脳内妄想でシャイナは今いる現世（さんじげん）でついつい声出してムンクのように絶叫していた時、背後にいたラークシャシーは強面ながらも呆れた表情を出していたかのように長い尾を横に軽く振りながら言動を吐く。

シャイナ「だってだってだってだってだってだってだってだってだってだ

ってだってだって！！！！もしかしたら先程脳内妄想で見た“破廉恥（テラ★エロス）な場面”がこの先にありそうな感じがしてっ！！！！…」

ブリトラ《朝から騒々しいぞ、人間の女。》

ヌゥン。

シャイナの慌てっプリの声が廃小屋全体まで聞こえていたのか、割られていた窓の上からまだ眠たそうな顔をしていたブリトラが長い身体を下ろして中にいるシャイナに煩いと噛み付く。

シャイナ「あ゛？あんたも居たのかよ駄犬（ブリトラ）ｗｗエツィオの使役共（ペット）は朝から本当に「三日ぶりにオハヨー、シャイナぁ！（＾＾）」」

バタン♪と廃小屋の入り口の扉が開いて、いつものようなＫＹボイスを吐くエツィオが外から来る。エツィオの右手には黒い茶巾袋をぶら下げたままシャイナに歩んで来る。

シャイナ「？エツィオ、それは？？」

シャイナはエツィオの右手に持つ黒い茶巾袋を見て首を傾げるように見ながら言う中、エツィオはハイッ♪とシャイナに手渡すように

持っていた黒い茶巾袋を前に出す。

エツィオ「神聖な魔力が入った“神水”だよ（＾＾）この辺りは高い霊地（マナ）がこもった土地だからＳＡ★」

シャイナ「へぇ（・・）此処にも霊地が溢れた神聖な場所なんだぁ。」

シャイナはエツィオから差し出された水入り黒い茶巾袋を受け取った後、袋の紐を解いて袋の中にある水を袋の開け口からグビッと飲み始める。

シャイナ「！ウマァァァァッ！！なんという超自然で作られたレアモンの天然水ｗｗｗ」

エツィオ「シャイナは今日まで3日間眠っていたから、体調も崩してないようだし…よかったぁ（＊＾＾＊）」

エツィオは差し出した黒い茶巾袋入りの神水をシャイナが元気よくガブガブと飲むのを見て、ほっとしたような表情を出しながら左手を胸元に当てて軽く摩る。

シャイナ「んぐぐぐっ♪そりゅ、3日も寝てればピンピンとする

ＹＯ～☆お陰様でスタミナ&体力完全回復！」

シャイナは黒い茶巾袋に入っていた神水を跡形残らず飲み干した後、グイッと口元に付いた水滴を右拳で拭い取ってダァッシャァァァ！！と元気一杯のオワタポーズを取る。

ラークシャシー《お主の生気も十分満たされたようだな。さて…》

ラークシャシーは元気一杯になったシャイナの姿を見て相変わらず強面のｒｙ（…フッと笑うように口元を吊り上げた後、ラークシャシーはエツィオの方へと顔を向ける。

外部にいたブリトラもラークシャシーと同じように、エツィオに向けて視線だけを動かして一点を注目する。

エツィオ「あぁ、シャイナの準備ができ次第出発するか。次の特異界はちょこっと遠い位置にあるからな。」

エツィオは自分を見詰める使役達（ペット）にそう言った後、ラークシャシーとブリトラはコクリと顎を下に動かして信頼する主人に笑みでも出しているかのように頷く。

エツィオは少し割られていた窓に映る外の景色を見た後、“カメラ

目線”に向けて突っつくように軽く人差し指を指し、画面端へと歩みながら消えていった。

第九十九曲　精霊も生きるために大変なんです

―フランスの何処かの森の深部　霊地溢れる林道―

サワッ…

サワサワ……

シャイナが廃小屋である程度準備した後3日間泊まっていた（潜伏していた）廃小屋を後にして、手入れもされていない自然でできた林道をシャイナと半透明エツィオは共に歩いていく（エツィオはシャイナの左肩上に乗っている）。

シャイナ「廃小屋にあった古い地図だけど、此処って“オルレアンの森”なのねぇｗｗｗ」

シャイナは発つ前に見つけた廃小屋の古地図を両手で広げながら、今いる箇所をボールペンで丸印を付けて確認しながら林道を歩いていく。

歩く度に地面の草花から黄緑色の小さな球体の光が複数昇るように

出て、シャイナと左肩の上に留まる半透明エツィオも穏やかな笑みを出しながら霊地の魔力による蛍の光のような林道を爛々と進んでいく。

シャイナ「すごぉぉぉぉぉぃ（＊＾○＾＊）なんという火垂るの●のようなふつくしい道ｗｗｗ」

シャイナは歩く度に出る黄緑色の霊地の光を見て、感動するように声を出しながら両腕を軽く伸ばすような形でワクワクする。

エツィオ「ここの霊地（マナ）も充実しているな。回りにいるこの地の精霊達も喜んでいるし…。」

半透明エツィオがシャイナの左肩に小鳥座りしながら、魔神（エツィオ）しかわからない蚊の形をしたような小型の精霊の姿を視線だけで追うように見る。

半透明の緑色光を全身に放ちながら森林の枝と枝を飛び回り、高速に羽ばたかせる羽根から緑色のリンプンを落としながら、今ある本来の自然を幸せに思うかのようにエツィオは踊っているように見えた。

シャイナ「ふぅ～ん、精霊も居るんだ。どんな姿なの？」

エツィオ「あー…見掛けは“蚊のような容姿”だが、精霊は案外シャイナの人間よりも短命であって、微弱な魔力しか持たないし尚且つ霊地（マナ）の世界でしか生きられないんだＺＥ。」

シャイナ「えっΣ（・・）。マジ！？」

半透明エツィオがそう言いながら一旦両足から林道の上に着いた後、林道の脇に咲いていた一輪の白い花を引っこ抜く。

一方シャイナはエツィオからの驚く内容を聞いて軽く眼をパチクリさせながら、花を摘まんだままのエツィオの話を続けて聞く。

エツィオ「精霊は土地の霊地（マナ）の魔力を継続させる為に、背中から生えている翼からほんの一握りの魔力を尽きるまで霊地（マナ）に注いでいるのさ。差はあるが大体基本寿命は三日なんだ。」

エツィオが摘まんだ花を左手で翳すように何度も宙で撫でるように動かした直後、摘まんでいた白い花の花弁が淡い紫色の花弁へと変わる。

開かれた淡い紫色の花弁の中心から黄色い小さな球体の光が複数出て、その光は空の景色を遮るように覆うよう深緑のカーテンへと昇りながら、段々と黄色いから透明色へとなっていった。

エツィオ「その短い時間の中、精霊達は土地の霊地（マナ）の魔力継続のために子孫を残すべく、限られた時間内で霊地継続をする中より深く結ぶ相手を見つけるのさ。」

シャイナ「云わば精霊さんも、自然界に生きる野生動物と同じなのね。そりゃ必死だわぁ（－・－）ｙ」

シャイナの視界にはエツィオの言う精霊の姿は見えないものの、今歩いている林道で霊地（マナ）の光が見えているので空想のような内容のエツィオの言葉を、シャイナは信じていた。

今までの常識破りの現象やエツィオとアルタイルに出逢ったことでの無差別殺傷をヤってきた反則（チーター）行為、何もかもが今の世間にいきる人間（シャイナ）凌駕していたのだ。が…

ババババ！

シャイナ「！」

静かな森に相応しくない騒がしい程のヘリのローター音が聞こえて、シャイナは瞬時に顔だけを上に上げて葉と葉で覆われている森の上層の隙間から通りすぎていくヘリを見る。

エツィオ「騒ぎ始めたな。まったく…」（'〜`）「」

半透明エツィオも顔だけを上に上げて立ち上がり、上空に通りすぎていく数台のヘリを見ながら真顔で睨み付ける。

シャイナ「まぁ、あの走る鉄の箱内で喧嘩殺傷騒動（第八十二曲〜九十五曲参照）があったからね。てか、列車編が微妙に長すぎるｗｗ」

シャイナは3日前に起きた騒動を脳裏に再放送するように振り返って、一部は作者の“仕事帰りの超gdgdな編集”に吹きながら、花を摘んだまま顔を見上げているエツィオに言う。

エツィオ「作者も大変だからなぁ、三次元（テラ★リアルワールド）で仕事内容を理解出来る一年経過するまで苛立ちを覚えながらやっていくのさ。まぁ、それは置いといて。っと…」

エツィオは真顔のまま見上げていた顔を下ろして、視点を摘まんでいた花に向け直す。そして開かれていた花弁を左手の平で翳すように何度も動かした直後…

ファサ…。

エツィオの手に持っていた淡い紫色の花が淡い光を放った直後、摘まんだ一輪の花が“一匹の揚羽蝶”へとなる。

チリィーン…

色とりどりの両翼から白いリンプンのような光をこぼしながらシャイナとエツィオの周囲を旋回するように回った後、鈴のような音が何処からか聞こえて喜び溢れた飛行で森の上部へと消えていくように昇っていった。

エツィオ「今いる此処にも時期に人間達の手が入る。シャイナ、早めに人里に降りて紛れ込もう。」

シャイナ「そうだね。此処から近いとすると…」

上空にヘリが次々と通り過ぎるように飛ぶ中シャイナは地図を再度広げた後、今いる場所から人里に近い林道を探し見つける。

シャイナ「此処からね。」

シャイナが持つ古い地図から見た人里に続く林道らしき道をエツィ

オに分かるように右人差し指を指した後、シャイナは人里に続く林道に入って森の出口へと歩み出した。

第百曲　三桁突入しましたが、半分野蛮人となっていますｗｗｗ

ーフランスの何処か…オルレアンの森の深部　人里に続く？林道ー

サワ…サワ……

エツィオ「ふんふん…あーはいはい…。そうなのそうなの？えっ？マジ？ｗｗｗ」

シャイナの左肩の上に乗るエツィオが人間のシャイナには見えない今いる霊地に住まう精霊に話しかけて、エツィオならでは“フツー”であって親しみ溢れる日常会話をする。

エツィオ「はぁ…ふぅ…うんうん♪…？　ｕｎ　ｌｕｏｇｏ　ｐｅｒ　ｏｒａ　ａｎｄａｒｅ　ｉｌ　ｌｕｏｇｏ　ｃｈｅ　ｉｏ　Ｌ'ａｄｏｒｏ，　ｅｄ　ｉｎｏｎｄａ　ｄｏｖｅ　ｃ'？　ｕｎ　ｅｌｅｍｅｎｔｏ　ｓｔｉｍｏｌａｎｔｅ？」

シャイナはうんうんと顎を軽く何度も下ろして静かに口を閉じながら、姿無き誰か（精霊）に話すエツィオのイタリア語混じりの会話を見届ける。

エツィオ「Ｎｏｎ　ｃ'？　ｕｎ　ｌｕｏｇｏ　ｔｒｏｐｐｏ　ｅ　ｖｉｄｅｎｔｅ？…ｕｍｍ…Ｑｕｅｌｌｏ　？　ｔｒｏｐｐｏ　ｃａｔｔｉｖｏ．（－３－；）ここからまっすぐ行けば、人間達が住まう“おるれりあん”てとこに着くんだってぇ♪」

エツィオが精霊との会話で数秒話した後エツィオはシャイナの方へと顔だけ向きなおし、「あっち♪あっち♪♪」と言って笑み溢れる表情で今いる林道の東方向に向けて右人差し指を指しながら言う。

シャイナ「（えっｗｗｗなんか閲覧者にわかるように“イタリア語翻訳されてねぇぇぇ”ｗｗてか、イタリア生まれの私にも何言っているか“全然分からなかった”ｗｗｗ）本当!?よかったぁ…あと少しで本当に遭難するかと思ったｗｗｗあのクソボロイ紙が突然…（－皿－＃）」

シャイナと半透明エツィオは人里に続くらしき林道を歩いて数時間、シャイナが持っていた地図を頼りに歩いていたが途中どこかで“紛失”してしまい、慌ててバック内やポケットに手を入れて探したものの何処にも無くて仕方なく“勘”だけで出口のない林道を彷徨っていたらしい。

エツィオ「しゃーないだろｗｗｗそんなこともあるさ、俺もシャイナも“人間”だからな。Ｎｏｎ　ｃ'？　ｃｏｓ？　ｍｏｌｔｏ　ｌ'ｅｓｓｅｒｅ　ｕｍａｎｏ　ａｌｌａ　ｃｏｓａ　ｄｅｌｌａ　ｐｅｒｆｅｚｉｏｎｅ（人間は完璧じゃねぇんだよ。）」

シャイナ「おまっｗｗｗアンタは“悪魔”だろーがｗｗｗ（そう言いつつエツィオも“人間”らしい所もあるんだよねぇ。ほんっと謎の多い“変なオジサン”なことだｗｗｗ）」

仕方なくシャイナは半ベソを掻きながら左肩に乗るエツィオにヘルプコールを言って、エツィオは「ＯＫ！待ってたＺＥ★」とでも言っているように左親指を立てながら口元の歯並びの良い歯を見せながら笑みを出した後、偶然通りかかった精霊に話しかけて今いる上記の文に至るということだ。

ザワッ…

すると久しぶりに話しかけて嬉しかったのか霊地に住まう精霊がシャイナ（シャイナには見えない）とエツィオの周囲に集まるように旋回した後、精霊の細い右腕を前に翳した瞬間地面に覆い茂るほどボーボーに生えていた雑草が“金色に輝き”はじめる。

シャイナ「おおおっ（・ｏ・）なんという風の谷のナ●シカに出てくるラスト辺りのシーンｗｗＳａｒ？ ｌ'ｉｍｍａｇｉｎａｚｉｏｎｅ ｄａ ｅｓｓｅｒｅ ｄｅｃｒｅｓｃｉｕｔｏ ｓｅｉｌ ｍａｔｅｒｉａｌｅ ？ ｖａｒｉｏ？（ネタが色々と少なくなってきたのは気のせいかな？）」

深緑から金色になった雑草の至る所から金色の粒子のような光が出

てきており、金色の光が森の上部へと昇る様に半透明になりながら消えていく。

エツィオ「Ｌ？　ｐｅｒ　ｆａｖｏｒｅ　ｒｉｔｏｒｎｅｌｌｏ　ｄａ　ｃｏｍｍｅｎｔｏ　ｔａｎｔｏ　ｑｕａｎｔｏ　ｐｏｓｓｉｂｉｌｅ．Ｕｎ　ｓｈｉｎｅｒ．（そこは突っ込んじゃいかんＺＥ、シャイナ。）さぁ、これでｇｄｇｄな迷子編はおしまい！教えてくれただけでなく、シャイナを無事に出れるよう道標を作ってくれてありがとな！！Ｉｏ　Ｌａ　ｒｉｎｇｒａｚｉｏ！！」

シャイナの左肩の上に乗るエツィオが精霊達に向きながらバイバイ♪と子供のように両腕を横に何度でも振って、エツィオなりの天使顔溢れた挨拶をする。

シャイナは嬉しそうに手を振るエツィオを見てふと笑った後、精霊達が作った人里へ続く黄金の林道に入って歩み始める。

更に歩いて歩き続けて今日まで羽織い続けてきたシャイナの白いパーカー服とズボンの一部が、ビリッと破けて所々細かいながらも目立つような穴がポコポコと出始める。さらには垢みたいな赤茶けた汚れも付着していてつんと来るような異臭も嗅ぎ取れた。

シャイナ「Ｕ・Ｅ…（；¬Д¬）もう服がボロボロｗｗｗわたしゃぁ野蛮人になりかけてるｗｗｔ－か…臭っ！！」

エツィオ「ぶはっはっｗｗｗいっそ野蛮人になってしまえぃｗｗｗ肌がスースーになって風通しも良くなるからより気持ちよくなるぜ？（酷）」

故郷のイタリアからずっと今日まで羽織い続けていたので遂に今着ている服にも限界が来たらしく、エツィオの羽織う反則魔力に被われたローブと違ってシャイナは三次元にいる閲覧者と同じ普通の服だ。

エツィオはケラケラと笑いながら破れかけているシャイナの服を見て、ワザとらしくふざけるように大口を開きながら言った後、シャイナは「それはあかんｗｗｗブラ着けてないもんで、素のおっぱいみえちゃうＺＥ★」と半分冗談とホントが混じったワザとらしい会話をする。

シャイナ「まずは、服の購入からはじめないと…あ、それと…」

エツィオ「？それと？？」

ば●りのガジガジ如くとっても長かった黄金に輝く林道の終わりが見えて、半分野蛮人と化しているシャイナと左肩上に乗るエツィオが黄金に輝く林道から外れた時、瓦礫に覆われた都市裏入り口あたりまで歩んだ後…

シャイナ「飯！飯が最優先じゃぁ！！あと遊びもｗｗｗ」

ウオォォォー！とシャイナは両腕をうきうきするような形で静止しながら、都市外壁内部にいる一般市民にでも聞こえるんじゃないかとの如くで大きく叫んだ。

第百一曲　こんな時こそ、ど●でもドアですよ（´―｀）

―フランス　オルレアン　都市裏入り口城壁辺り―

シャイナ「都市に着いたとしても、この格好じゃ…なぁ（；―）σ＝」

シャイナは服に染み着いた垢痕とボロボロに破けた服とジーンズを見て、嘆くように両肩をガクッと落としながら落ち込む仕草を取る。

エツィオ「流石に今のシャイナの衣装じゃぁ、街に入った途端白い目で見られるな。服だけじゃなく髪型と素顔を含めて、奴らは俺達を追ってきているからな。」

シャイナ「うん、これじゃぁせっかく都市に入っても怪しまれるし、全世界で“指名手配になっている”し、より警戒度が高くなる尚且つ追手を呼ばれちまう一方だわｗｗｗ」

エツィオの言う通り事実上シャイナ（一方的にエツィオが指名手配）とエツィオは全世界の指名手配となっている為、もう写真とかも掲載されて知れ渡っているだろう。

シャイナ「何気にこの都市も私の故郷と同じ英雄や魔女とやらを崇拝する、狂信者が沢山いるんだよねぇｗｗｗ勿論此所にも悪党共も居るけど。」

エツィオ「マジかｗｗｗ」（'～、；）「」

今から入る都市オルレアンは英雄や魔女とも呼ばれたジャンヌ・ダルクを祀る宗教的な都市であって、英雄が眠る歴史溢れる都市の裏は夜のみ徘徊する悪党共の巣へと変わって夜問わず昼間も軽い騒動が起きるほど治安が悪い場所なのだ。

そこでシャイナの想像だが今の状態だと確実に都市の何処かに居る悪党一人にシャイナの存在を政府や教会の連中に連絡し、シャイナを捕らえる又は殺すことで莫大な賞金を受けとる為に襲い掛かって来るだろうと…

エツィオ「何…悪党共やらなんざ俺が居る限りシャイナには一歩にも近づかせねぇよ。が…」

エツィオは一瞬瞳を金色の鷹の眼へと変えて厚い城壁内にいる人間達の動きと容姿を“全て盗むように見て”、真顔のままエツィオ式“超超超千里眼”で都市内にいる人間達の特徴と今の行動をシャイナに軽く伝える。

エツィオ「此所にも“教会”という輩が居るみたいだ。それと私服で都市の人間達に紛れ込みながら潜伏している“軍”も居るねｗｗｗ」

シャイナ「うっはｗｗｗ何という手際よさｗｗｗもう教会と軍は手を組んでいるのね。これはメンドイ（－３－＃）」

どうやら今から入ろうとしているこの都市にもシャイナ達追手がもう潜伏しているようで、シャイナはため息をつきながら今の現状を「最悪」と軽くわるそびたように言い捨てる。

エツィオ「こんな時こそ、“コイツ”だ。早速使って見ようＺＥ★」

シャイナ「あっ、それって…Σ（・・）」

一方そんな状況を楽しむかのようにエツィオは余裕溢れる笑みを出しながら懐に左手を入れた後、懐の中から小さな黒い魔札（第八十曲参照）一枚を取り出して、シャイナに向けて懐から取り出した魔札を左手の平の中で収めるように見せる。

シャイナ「確かアイモンじいちゃんの隠し居酒屋（アルボーレドバンケット）に繋がる、会員制の魔札（カード）じゃんｗｗｗ」

エツィオ「ザッツ☆ライツ、シャイナ！　まずはアイモンに近況報告しよーＺＥ★服のことはそれからＤＡ♪」

シャイナ「もう、エツィオったら（＊´ー、＊）」

エツィオのマイペースすぎる発言にシャイナはやや呆れたように言動を吐きながらも、表情は安心しているかのように不適に笑みを出しながら都市へ入っていく人の目に余り映らないよう少しずつ離れていき、太陽の光がさえぎられて誰も寄りかからない城壁の影へと隠れるように移動する。

シャイナ「ここら辺でいいかな？」

エツィオ「ああ、バッチＧＯＯＤだ（＾＾）ｂ」

シャイナは今いる太陽の光が入らない暗い城壁の場所に立ちながら左肩上にいる半透明エツィオにそう言った後、エツィオは右手を丸めて親指を上に立てながらＧＯＯＤＪＯＢ♪という風に笑みを出し前方回転しながら着地と同時に実体化する。

そして魔札を握り締めたまま城壁に向けて翳した時、魔札の中心に画かれていた破戒の王城一柱アモンの紋章が輝きはじめて、城壁に向けて紋章を刻むように灰色の線を走らせた後そこから創魔結界へ

と入れる入り口が出来た。

エツィオ「アルボーレ　ド　バンケット　に入る？　　はい
　いいえ＞　」

ピュピピー♪

シャイナ「ブフッｗｗｗエッチオの台詞がゲーム字幕になっている
しｗｗｗてか…何今の気が抜けるような効果音はｗｗｗ」

すると何処からXボタンやらBボタンでNOにする選択が押されて、
エツィオは「んぁ？」とやや戸惑った表情を出しながら背後でシャ
イナが笑いを堪えるように腹を一生懸命両手で押さえて変な効果音
とともに視点を“カメラ目線”に向ける。

エツィオ「オイオイ…ここは、“はい”だろGKｗｗｗじゃぁもう
一回…アルボーレ　ド　バンケット　に入る？　　はい　　い
いえ＞　」

ブピュピピー♪

エツィオ「…。」

シャイナ「グフッｗｗｗ」

またしてもＮＯの選択肢を選ばれて変な効果音とともにエツィオは戸惑いの表情からやや苛立った表情になって、両手を軽く上げながらプラプラとカメラ目線周辺を一周するように歩いた後…

エツィオ「Ｆｉｎｏ　ａ　ｐｅｒｃｈ？　ｉｏ　ｔｒａｓｆｏｒｍｏ　ｉｎ　ｎｕｌｌａ　ａｎｃｈｅ　ｓｅ　ｉｏ　ｐａｓｓｏ　ｆｉｎｏ　ａ　ｑｕａｎｄｏ，　ｉｏ　ａｆｆｅｒｒｏ　ｌａ　Ｓｕａ　ｉｎｔｅｎｚｉｏｎｅ　ｓｅｎｚａ　ｐｅｒｍｅｓｓｏ！（何時まで経ってもＮＯにすんな！いい加減に話を進めるぜ（怒））」

ガシャン！

シャイナ「ちょっｗｗｗカメラ壊すな！Σ（´Д`；）」

拉致があかなくなる前にエツィオは応急措置として大人げなく右足だけを“魔神化”し、竜のような逞しい足を爪先からカメラに向けて蹴りを加えた直後、映像がバグったように乱れて厭な雑音がガーガー混じりながら“閲覧者用のカメラが大破”する。

エツィオ「大丈夫大丈夫♪カメラは死んでも、代わりはいくらでも居るのＳＡ★」

シャイナ「ちょっｗｗｗ●波が居るｗｗｗてか、此れからも何台かはカメラが犠牲になりそうだｗｗｗガクッｗｗｗ」

閲覧者を映すカメラが破損され姿・容は何をしているのか解らないものの、ながらもエツィオとシャイナの突っ込みと笑いが混ざった会話が飛び交っていた。

エツィオ「ふー何だかスッキリしたよ☆まぁ、いいや。さぁ逝くか。」

シャイナ「おっと、何気にエ●コンのあの死亡フラグ先生の台詞ｗｗあっ、でも良いやあの先生のことだし（酷）んじゃ、逝きましょ♪」

ガチャッ♪

シャイナがそう言った直後、壁に刻まれていたアモンの紋章が“どこ●もドア”みたいな赤い扉になって、エツィオはアモンの紋章が刻まれた赤い扉のドアノブに右手を握ってゆっくりと回しながら扉を開ける。

扉を開けたエツィオに続くようにシャイナも入った後、エツィオは

開けられていた扉に向けて背中から鷹の右片翼を出して、人間の手のように扉を閉ざした途端…

スウッ…

壁に刻まれるように出現していたど●でもドアが下部分から透明になっていき、ゆったりの速度で上部分へと昇るように動いた後、刻まれた扉が現世から消えていた。

第百ニ曲　隻眼兄貴はキレやすいタイプ

―創魔結界　アルボーレ　ド　バンケット―

シャイナとエツィオがアイモンの経営する裏店…シャイナ曰く居酒屋(アルボーレドバンケット)へと入る数分前、店内には一人の常連客が先に席に着いておりカウンター席の左側に置いてあった酒入りのグラスを少しずつ飲みながらひと時を楽しんでいたが…

シャカシャカシャカシャカ…

？「おぃ、おやっさん…珍しいじゃないか。俺達のような悪魔の存在に相応しい哀愁の音色は鳴らさないのかい？」

オレンジ色にほんのりと包まれて哀風のクラシックに相応しい店内が、現代風のジャズロックがガンガンと騒がしく店内に響き渡っていて、アイモンは両手の中に瓶(シェイカー)を音楽に合わせてリズム良く振って我流カクテルを作成する。

アイモン「今まではな。が…あの黒い若僧と出逢って、何となくだが俺の店の雰囲気を変える必要があったんだよ。」

アイモンはククと口元を吊り上げて笑う表情を出しながら手の平の中で瓶（シェイカー）を振る動作から、左肩から右腰へと瓶を回転させながら移動させ八の字を描くように匠の技術でお手玉動作をする。

？「俺たち悪魔にとっては裏切り者であり、人間にとっては伝説とも英雄とも救世主とも呼ばれた“魔神”か。まさか、歴史から消え去った最強・伝説の悪魔がこのような世界に再び降臨するとは…」

アイモンが気分が良い表情を出しながらカクテルを振るっている中、カウンター席に座る襟に白い棉が付いた長い袖部分が三つに枝分かれした大きい茶色の皮コートを羽織い、両耳には輪状のピアスを三つ着けていた。

下半身は黒い皮のズボンを履い上部の髪は白銀のオールバック、左眼に十字線の古傷が刻まれた片眼の三十路後半ぐらいの体格の良い中年男が、左手に持つ半透明茶色の酒が入ったグラスを口元に寄せてちょびっと飲みながらアイモンに言う。

アイモン「クックック…あの若僧には本当に見瞬間に心が躍ったわ！なんだろうな…俺の中にある心の臓にあの若造の瞳で射抜かれる感覚を受けて、ついつい俺はあの若僧の助力までさせてしまったんだからよぉ～♪」

終には身体を回るようにお手玉していた瓶（シェイカー）をサッカーボールのよう

に何度も足のつま先を当てながら蹴り上げて、天井に当たりそうぐらいまで瓶(シェイカー)を高速回転させながら身体を軽く一回転させた後、元の前方方向へと向き直すと同時に蹴り落ちてくる瓶(シェイカー)を左手の平で狂いなく中心辺りに底から受け止める

？「ようするに一目惚れしちまったのかｗｗｗっけ、ただか裏切りのガキ魔神なんかに魅力の魔力でも受けただけだろ、おやっさん？かつての破戒の王だった“アンタ”がアホらしい程があるぜ。」

男…チェルノボグという人型を保った悪魔は呆れた表情を出しながらグラスの中に入っていた酒をグィッと飲み干した後、グラスの底からカウンター席の机に軽く叩きつけるように言う。

―元悪神の現黒き死神　チェルノボグ―

アイモン「おいおいチェルノボグｗｗｗ俺が最初に出会ったあの若憎に会った時、魅了の魔眼は“一切使っていない”ぞ？あの猛々しい覇気といい何もかも《ガチャッ♪》おっ！？」

すると店内の入り口にあった紋章が淡い光を放ちながら輝きはじめて、紋章全体が光り輝いた後扉が開かれて入り口からシャイナとエツィオがタイミング良く現れる。

チェルノボグもアイモンに釣られて顔だけ扉へと振り返るように動

かし、店内に入ってきた今話題の本人である若僧（エツィオ）の容姿を見て少し眉を下に下げてしかめっ面を出しながら静かに睨み付ける。

エツィオ「おーい、アイモン。ちょっと困ったことがあったん…お？この店の常連客かいアンタ？？」

エツィオのひょんとした声を出しながら背後にいるシャイナと共にアイモンがいるカウンター席へと歩もうとした時、すでに座っていた黒男（チェルノボグ）を見てキャッホーイ♪とレッツ★友達（フレンドリー）並みの言動で言う。

エツィオ「はじめまちてぇ（＾ー＾）ノ俺はエツィオ！で、俺の後ろにいるのはシャイナＤＡ！これからも４　６　４　９　！！」

シャイナ「チェエエエエエエエエエエエス！！！！」

チェルノボグ「（あ〝ぁっ！？何だこの餓鬼…）…。」

チェルノボグはいきなり初対面に対して幼稚並みの言動に嫌味が刺したのか少し顔を歪ませた後、カウンター席からスクッと立っていまだに瓶（シェイカー）を回し続けているアイモンに顔を振り向かずに背後のまま軽く言う。

チェルノボグ「…おやっさん、この餓鬼を試していいか？？」

アイモンは瓶（シェイカー）を弄ぶように回しながらチェルノボグの背中から立ち昇るように出ている黒くて禍々しいオーラ…本来の死神姿を幻影でさらけ出しているのを見て、アイモンはんー♪と顎下に右人差し指を当てながら軽く悩んだ後…

アイモン「お前の好きにすれば？が…コレだけは言っておくとしようかね…。」

チェルノボグ「？」

チェルノボグはウザったらしい表情を出しながらアイモンに向けて顔だけ振り返り、前方でエツィオが「うはーｗｗｗなんか出ているぜ、でっかいニイサンよぉ？」シャイナは「きっとコレは背後霊だＹＯ★それか地縛霊とかの何かかな？ｗｗｗ」と…

今の状況を“思いっきり間違えた台詞”を吐きながらお互い人差し指を何度も指して“何もかもふざけている”声をチェルノボグは段々と苛立ちながらアイモンの話を聞く中…

アイモン「お前がどんなに力を出そうとも、あの魔神（こぞう）には“一切勝てん”。あの小僧の力は本物だぞ？」

チェルノボグ「…俺は信じん！」

アイモンの出す不敵な笑みを見たチェルノボグは気に食わない表情を出した後、吐き捨てるように今まで座っていたカウンター席の椅子を片足で蹴り飛ばす。

アイモン「クックック。…まだまだだな。」

アイモンは本来の素顔を背中からさらけだしたままエツィオに向けて歩いていくチェルノボグを見て、あーあーという風にお手上げ状態の仕草を取りながら回していた瓶（シェイカー）を素手に置かれていた2つのグラスに流し始める。

コポコポコポ…

瓶（シェイカー）から2つのグラスへと分けるように綺麗に流れていく半透明の液体、下層から血のように真っ赤になっていたが徐々に上層に積み上げられていく内に、淡いピンク色へと成っていった。

第百三曲　良いことを思いついた。お前の尻に向けて生きのイイものをぶちこんでやる。

―創魔結界　アルボーレ　ド　バンケット―

エツィオ「おーい、俺の所へ歩いてくる渋顔のお鬼チャン（＾＾）
何か背後から出ているＺＥ★」

エツィオはブフッと笑いながら歩いてくるチェルノボグに向けて、
何度も右人差し指を指しながらふざけた言動を吐く。

チェルノボグ「それは俺の本来の悪魔の姿だ、小僧。それよりも…」

エツィオ「！」

ブオンッ！

チェルノボグの背後から現れていた毒々しいフードのような身を纏った隻眼の死神の幻影が、突然エツィオに向けて右腕の長い爪を振り払うように斬りかかる。

エツィオ「おっと。」

エツィオは直ぐに背後にいたシャイナをお姫様抱っこのように抱き抱え、ヒラリと軽く上へと飛翔して紙一重に幻影の死神の最初攻撃（ファーストアタック）を回避する。

チェルノボグ「貴様のような若僧が俺達が恐れる“伝説・最強の魔神”とは見えん！今ここで始末してやる。」

ドフッと数歩チェルノボグは歩いた後、両腕が本来の死神の腕へと変わり果てて残されていた瞳が、後ろに出ている幻影と同じ隻赤眼になる。

ファーストアタックを避けたエツィオはスタンと華麗に地へと着地し、抱き抱えていたシャイナを下ろした後いきなり攻撃してきたチェルノボグに対してふざけていた表情からムッとやや不満顔な表情になる。

エツィオ「いきなり、なんだよそれ！此れからお世話になる仲魔（アンタ）に挨拶をしたのにぃ（、ε´）」

チェルノボグ「あれが俺に対しての“挨拶”なのか？クソ餓鬼。ふざけすぎるのも程がある！」

チェルノボグは悪魔と化した両腕を組むように手の平を真っ直ぐに重ねて、徐々に開くように両腕を動かした後巨大な鎌が禍々しい音と共に出てくる。

チェルノボグ「剣を抜け、小僧。貴様が本当に“魔神”なのか試してやる。」

チャキッ

チェルノボグは召喚した魔鎌を両手で握って後ろにでている幻影も同じように鎌を構えながら、エツィオの左腰にある対魔の剣を抜くように示唆する。が…

エツィオ「やーだね。こっちから言い返すけどぉ、抜かせてほしけりゃぁ♪」

チェルノボグ「!?」

チェルノボグはエツィオの信じられない行動を見て、少し両眉が上へと向き残された隻赤眼にエツィオの取る構えを見据える。

エツィオ「抜かせてみろよ？」

エツィオは両拳を前に構えて左足をやや後ろに下げた腰を低くした後、余裕溢れる笑みと“ややドス黒い笑み”を出しながら両手首を何度も後ろに下げてチェルノボグを“挑発”&“素手構え”をしていた。

チェルノボグ「餓鬼がっ！！」

チェルノボグは余裕溢れるエツィオを見て遂にぶちギレて額に“バツ印の血管を浮き上がらせた”後、店内の敷かれていた板を壊れてしまいそうに蹴って、軽く飛翔しながらエツィオに向けて手にする禍々しい魔鎌を真上から振りかざす。

エツィオ「こんな安っぽい挑発なんかに乗るなよ、オニイサン？」

チェルノボグ「っ！？」

ガシッとチェルノボグが持つ魔鎌の鎌先の刃でも関わらずエツィオの左手だけで“軽く受け止められて”、無論後ろから出ていた幻影の鎌も“左手一つだけで受け止められていた”。

素手状態なのに刃物で手の平そのものが“斬られたりもせず”“鎌の刃による出血も無い”まま、チェルノボグの身体ごと“無防備に

宙へと静止する”形へとなる。そして…

エツィオ「キレやすい悪魔(アンタ)相手にはこいつで十分★なのでぇ…」

なんという“光以上の速さ”でエツィオの右中指と親指を丸めた手が、チェルノボグの額に向けて丸められた右手を額に付くように合わせた直後…

エツィオ「アサシン流ぅぅぅぅ…デコ★ピン！」

チェルノボグ「っ！？」

ドシュウウウウウウウウウ！！！！

ペチッ♪と軽く叩く可愛らしい音ではなくデコピンで叩かれた額の部分だけがボコッと“陥没”し、生々しい音を立てながら陥没した部分から一点の血を噴水のように噴き出す。

チェルノボグ「は…ガァ…！？」

エツィオ「ンニョ♪」

チェルノボグはデコピン程度で“隻眼が白くなるほど失神”し、無意識に頭部を後ろへと仰け反るように下がった直後、手にしていたチェルノボグの魔鎌をそのまま浚うようにもぎ取る。そして…

エツィオ「尻っ穴へアッー！！…や　ら　な　い　か　？」

ドスッ！

奪った魔鎌をチェルノボグの鈍穴（おしり）に向けて深く突き刺し、チェルノボグの尻を刺した鎌をエツィオはフルスイングするように、チェルノボグの身体を軽々と“片手だけで浮かせて”何度も一周するように回転させた後…

エツィオ「ボ☆シュートゥ♪」

ドゥギャァラ〝ァァ〝ァァ〝ァァァ〝ァァァァ！！！！

チェルノボグの腹部に向けてヤクザキックを食い込んだ直後、エツィオよりも体格があるチェルノボグの身体が蹴りで食い込んだ部分から扇風機のように身体が“渦を巻いて”、内部の肉が破れるばかりの生々しい音を立てながら後方へと吹き飛ぶ。

店内のテーブルや椅子をチェルノボグの背中から当たって吹き飛び・バキバキに破壊しつつきりもみ状態で吹き飛びながら、チェルノボグの頭部から噴水のように出る血と共に頭部から壁へと“ダーツのように”身体ごと綺麗に一直線へと突き刺さる。

アイモン「オィオィ坊主、俺の店をあんまり壊すんじゃねぇＹＯｗｗｗ」

口調は怒る表現を出しながらもアイモンはカッカッカッと高笑するように腹を抑えながら、一瞬の内にやられたチェルノボグの不様な姿を見て、グイッと先程作った自作の淡いピンクと赤のワインが入ったグラスを二口口の中へと入れる。

シャイナ「ブフフッ！エツィオより身長高いし良い年頃の素顔なのにダッサァァァ！！メチャダサだな（＞Ｗ＜）」

いつの間にかシャイナはアイモンがいるカウンター席に座っていて、片足を組みながら壁に突き刺さっている“穴に鎌刺し&ダーツ状態の不様なチェルノボグの姿を見て”右人差し指を何度も指しながら、外人四コマ風に思いっきり笑い飛ばしていた。

チェルノボグ「がはっ…ぐぅぅ…クソォッ！」

ドッ

チェルノボグはダーツ状態に突き刺された身体を両腕の手の平を壁に着けて押し出すように力を入れた後、深く壁に突き刺さった血塗れ頭部（デコピンされた額部分のみ）を引き抜いて背中から仰向けに倒れ込む。

そして鈍穴（おしり）に深く刺された自分が召喚した魔鎌を左手で握り部分へと掴んで、そのまま外へ出すように引き抜いた直後、痛恨の声と共に引き抜かれた部分から赤い血をドクドクと沸くように噴き出す。

チェルノボグ「はぁ…はっ…ぅぅ……」

チェルノボグは引き抜いた血塗れの魔鎌（自分の血がたっぷりと着いた）を杖代わりとして床に魔鎌の柄先を着けて、手に持つ魔鎌を頼りに身体を震えただせながら立とうとしたが…

エツィオ「ねぇ？今、どんな気持ち？素手（ステゴロ）相手にボコボコにヤられる気持ちはどう？？」

チェルノボグ「ガ…ぁ！？」

ボグッとチェルノボグの前方にいつの間にかエツィオが立っていて、

立とうとしていたチェルノボグの股間に向けてエツィオの蹴りが容赦なく食い込まれる。

チェルノボグは口から血が混じった痰を数量吐きながら手にしていた魔鎌をカランと力無く床に落とした後、身体がへの字になるように天井へ付くぐらいの高さまでへと吹き飛ぶ。

そして背後から床へと無抵抗に力無く落ちていき、落下地点が丁度通常席のテーブルの椅子へと落ちて、大の字になるような形で背中からもたれ掛かるようにして背後から出ている死神と共に悶絶したような表情を出しながら座り落ちていた。（戦闘不能）

エツィオ「おっと、やりすぎちゃった★テヘッ♪」

エツィオは戦闘不能状態にしたチェルノボグとチェルノボグの幻影を一瞥した後、“カメラ目線”に向けておちゃらけた表情を出しながら子供のように可愛らしい舌ベロを短く出す。

軽く両手でピースサインを取って、ピースサインの両手を軽く横に何度も振りながらバイバーイ♪と閲覧者用のカメラから画面外へと消えるように横へと移動していった。

第百四曲　そして次回まで放置される隻眼悪魔ｗｗｗ

―創魔結界　アルボーレ　ド　バンケット―

シャイナ「なーんだ、最初見た感じで隻眼イケメン男も強そうに見えたけど、やっぱ魔神相手には貧弱ね。見て損したよ♪」

シャイナはアハハと表面は微笑んでいても内部は“ドSかつドス黒い女王様風の笑み”を出しながら、椅子にもたれ掛かるようにして座っている“完全悶絶のチェルノボグ”を見て、ざまぁ♪とでも言うように白い視線でチェルノボグを見下す。

エツィオ「悪魔相手には“こうゆう単純馬鹿”が実際に多いんだよなぁ～」（－８－）「ただかカスぃ挑発をするだけでさぁ…へっ！」

ペチョッ♪

エツィオは額から血を流し悶絶しているチェルノボグの顔に向けて、トドメの鬼畜攻めの一つである“屈辱という名の屈辱の唾”をプッ♪と口を８の字にさせながら吹いて、軽く半透明のエツィオの唾をチェルノボグの表面に数滴掛ける。

アイモン「それにしても手際良かったぞ小僧。デコピン一発で“上（チ）級悪魔（エルノボグ）を昇天”するとはなぁｗｗｗ」

カッカッカとアイモンは口を大きく開けて高笑いしながら、シャイナとアイモンがいるカウンター席へと歩いてくるエツィオに向けて言う。

エツィオ「フーン（´―｀）あの単純馬鹿が“ちぇるのぼぐ”っていう名かぁ。“黒き神”ねぇ…プッ（●´艸｀）」

シャイナ「ブフッ！」

エツィオがチェルノボグの本来の名の意味を脳裏で思い今でも完全悶絶している無様なチェルノボグを見て、吹き出すように腹の内から出てくる笑いを必死で口元に両手で押さえながらシャイナ下へと歩み寄った。

シャイナもエツィオと同じく必死に笑いを堪えながら腹を両手で押さえて、アイモンが作った淡いピンクが混じった赤のワイングラスを持って二口口の中に入れる。

アイモン「まぁ、勝負の結果はもう１２０％以上解りきっていたけ

どなｗｗｗそれは置いといて…で?若い兄ちゃん、何しに来たんだ??」

アイモンはエツィオ用のワインを作るべくまたしても瓶（シェイカー）の中に様々な酒作りの必要な素材を入れて、キュポン♪と瓶（シェイカー）の蓋をきつめに絞めた後手にしていた瓶（シェイカー）を上へと投げながら本題を切る。

エツィオ「次の街へと入ろうとしているんだけど、シャイナの服がもう旅立ちの場所から数日でもうボロボロでなぁ…俺たち全世界でお尋ね者になっているし、こんな状態で入ると余計に怪しまれるし且つ無駄な戦闘をやちゃうからさぁ…」

アイモン「あー、なるへそｗｗｗだからシャイナちゃんの服がこんなに…それに頭が鳥の巣のようにボサボサじゃないかｗｗｗ」

アイモンはエツィオの事情を聞きながらフムフムと今のシャイナの頭部と服の状態を見て、左手を顎下に当てて何度も軽くやや真面目顔になりながら頷き、宙に舞う瓶（シェイカー）が何度も後方回転しながら足元に落ちていく。

シャイナ「今まで潜伏していた所にも追手が来ると行けなかったもんで、髪の毛を解かすに解かせなかったんだもん。あの時は列車内のリー●マンごときで私弱っていたしｗｗｗ（第九十五曲参照）」

シャイナは背を前に丸めるように曲げて猫背になりながら、ぼんやりとした表情で手にしていたグラスを口に挟んだ後、コロコロと口元の筋肉を使って軽くグラスを右往左往に行儀悪く遊ぶように回し始める。

エツィオ「そうそう、そいつだけじゃなく俺たちを追ってきた人間達の手も入って、勿論襲撃してきた全ての敵を、容赦なくぶっ飛ばしたせいで途中下車する羽目になったんだ。目的の特異界にまだ着けてないしｗｗｗ」

エツィオはシャイナの隣にドカッと足を組むように座って顎下に右手を乗せて右肘をカウンター席の机に置きながら、やや右斜めの身体を支えるようにため息混じりの言動を吐く。

アイモン「マジかＹＯｗｗｗ」

アイモンは二人の話を聞きながらエエエー（´Д｀；）という風にやや呆れ顔を出して、足元に落ちてきた瓶（シェイカー）を左踵でまた再び宙へと蹴り上げる。

そんな二人の話を聞く中、アイモンは片足で立ち身体をクルッ♪とノリノリに何度も回転させながら、蹴り上げられた瓶（シェイカー）が何度も回転しアイモンの手の辺りまで上昇した後…

エツィオ「要するに次の街へと入る時、シャイナの新しい服はないかなぁ～と思って此所に来たんだけど♪」

アイモン「たくっ、やれやれだぜ（－－；）。」

タイミング良くアイモンは宙に回転する瓶（シェイカー）をガシリと掴み取り、アイモンはエツィオの簡潔理由を聞いて苦笑いしながらもう一つのグラスの中に先程ぶん回していた瓶の蓋（シェイカー）を開けて、トクトクと淡い紫色の輝く酒を入れていく。

アイモン「でもまぁ、シャイナちゃんの外見はボロクソだけど、身体は特別問題は無さそうだし、外傷なんて何処にも見当たらないから良いか。あー、ちょっと待て…。」

エツィオ「？」

アイモンはハハハッとほんのりと笑う表情を出しながらエツィオに淡い紫色に輝く酒が入ったグラスを差し出した後、何かを思い当たるように左薬指で軽く額を叩いた後、店奥へと歩いてエツィオとシャイナがいる席から立ち去る。

そして数秒後店奥からアイモンが戻ってきて左脇に何かを抱えながら、カウンター席に座るシャイナとエツィオの真ん中辺りに店奥から持ってきた品をドサッと置く。

アイモン「取り敢えず俺が若い頃に着た“魔力が宿る古着”を持ってきた。シャイナちゃんにはデカイかもしれないが…」

アイモンは中心に置いた物品を手にとって持ち上げながら、徐々にパタムパタムと開くように広げて徐々に明らかになっていく。

シャイナ「えっ、これって服？ｗｗｗ（何すかｗｗｗこのバイオ５のグラオタ野郎とＤＭＣ３の●ン●ジコートが混ざった“厨二服”はｗｗｗ）」

シャイナはアイモンが広げた物品…見た目はエツィオの黒と対象的な白、バイ●ハザード５に出てくる●ェスカーのマ●リックスコートのような形をしていて、胸部には黒い蔦のような模様が左右に腰辺りまで走る。

腰辺りに紐が太い赤いベルトが巻き付いており、腰下の長い裾の部分が三つに枝分かれした明らかに見た目が“厨二病臭い”阿呆衣装…。

アイモン「若い頃に着た俺の古着だ。そいつには俺の若りし頃の当時の破戒の魔力が“そのまま染み付いているぜ”。」

シャイナ「アハハ…マジでけぇｗｗｗ」

破戒の王の魔力が宿った古着（コート）”を手にとったシャイナは、明らかに自分の身体がスポッ♪と入ってしまうぐらいの“超デカ過ぎる古着”を自分の胸元に寄せ計るように軽く苦笑いする。

アイモン「でけぇなｗｗｗ此所にある間に合わせの奴（コート）は生憎今ので一つしかないが…」

エツィオ「おっ？Σ（ω・）」

アイモンはカカカッと軽く笑いながらシャイナが持つかつての自分の古着とシャイナの体格と身長を見て、じっくりと考えながら顎を少し下へ下げた後、シャイナが持つ古着をスクッと上の方へと取り上げる。

アイモン「ちょっとシャイナちゃんの身長に合うように、ちょいっと古着を調整＋補強してくる。俺が作ったワインを飲みながらシャイナちゃんと一緒に暫し待たれぃ。」

エツィオ「ありがとう、アイモン。恩に着る。」

エツィオがそう言った後アイモンは「シャイナちゃんの為なら、俺

はどうにかしてやるＳＡ★」と“カメラ目線”に向けて中年の星ウィンクをバチコーンと決める。

更に右人差し指を指しながら歯を見せて超ノリ☆ノリに答えた後、アイモンは古着を持ちながら軽やかスキップで店奥へと消えていった。

第百五曲　イメチェンｉｎシャイナ！

―創魔結界　アルボーレ　ド　バンケット　チェルノボグ視点―

チェルノボグ「（あ…有りえねぇ…あんな餓鬼一人でこんな…）」

額から一点の血を流し今もなお椅子によたれかかるように失神しているチェルノボグが、おぼろげな視点でカウンター席にいるエツィオの姿を捉えながらじっと見続ける。

ドッドッド…

今座っている椅子に深く刺された鎌傷がジクジクと痛みが染み出ていて、鈍穴（おしり）から出る血が椅子の足から沿って店内の茶色の木板を赤く染め上げる。

チェルノボグ「（あんな鼻糞のような攻撃で…この俺が…かつて“破壊神”と呼ばれた…俺が…くぅ……）」

チェルノボグは心の中で両腕の手をぐっと握り締めて歯軋りをしな

がら、口元と両手の平から少量の血を染み出すようにただエツィオの圧倒的な力（素手だけで弄ばれるように身体がボロボロになった）を悔やみ同時に自らの無謀と非力さを呪うように憎んだ。

チェルノボグ「（せ…せめて…あの餓鬼にい…一撃を……）」

心の中でチェルノボグは遥か先にいる黒い幻影（エツィオ）に向けて死神と化した本来の右腕を伸ばし、ガタンと座っていた椅子を倒して這いずり一点の血を引きながら少しずつ少しずつ攻撃範囲内に入るか入らないかの距離まで縮めていったが…

ーチェルノボグの空想の中で描いていた結末とは違い、本来の現実世界でチェルノボグは再度“魔神（エツィオ）の実力（遊び半分かつ本気出していない）”に漸く身で理解できるようになったのは後の後日談で語られることになる。（笑）ー

…

……

……

ー創魔結界　アルボーレ　ド　バンケット　シャイナ&

エツィオ「〜♪」

エツィオは口笛を吹きながら店内に流れるジャズロックの曲に合わせて、シャイナの解いた長い髪を手に纏う背中の黒い爪でチョキチョキと散髪屋のハサミのように少しずつカットしていく。

シャイナ「うはっｗｗｗなんという簡単安心な散髪屋ｗｗｗしかもこの悪魔羽も鷹の翼と同じようにん〝ぎもチ〝いいいい〝いいいい〝いいいいいいいいｗｗｗ」

ハラリハラリとシャイナの黒い髪が落ちていく中、シャイナの身にはエツィオの腰から出ている“魔神化したときの巨大の竜の翼”で包まれていて、シャイナは翼の温かみを感じながら幸せの表情を出す。

何故エツィオがシャイナの髪をノリノリ気分で切っているのかは、チェルノボグを屈辱的にぶちのめした数分前の出来事へと少し遡る。

エツィオ「お…俺の提案なんだけれど……いいか？」

シャイナ「？何、エツィオ？？」

エツィオが何か言い難そうなやや渋顔の表情を出しているのを見て、シャイナは戸惑いの表情を出しながら首を少し左に傾ける。

エツィオ「ほら…俺だけじゃなくシャイナも狙われているし…シャイナにはもう分かっていると思うけど、俺は“姿を完全に消せる”もんで衣装とかは特に問題はないけれど…シャイナには特別な力は無いもんでこのままではマズイから…その…」

シャイナ「???（´・ー・、；）」

エツィオは何か言い難くそうに両人差し指を合わせるように何度も突っついて、やや迷いと苦渋が混じった表情が混じりながら長々と台詞を吐いた後、エツィオは意を決したように次の言葉をシャイナに言い放つ。

エツィオ「今のシャイナの素顔を変えたいもんで…シャイナの“髪”を切っていいかな？頼む！この通りだ！！」

エツィオは今後の為という念を込めてシャイナの一つ縛りの長髪を切って可愛くショートへとイメージチェンジしたほうがよいと思い、エツィオは両目を閉じて両手を合わせながら深々と頭を下げて無理な提案をシャイナに言う。

エツィオ「女性にとって髪は大事な部分だと分かっている！！けど、今のままじゃもしもの時に…シャイナの身に何かあったら！…」

女性の命である一つを奪うという意味なので、思いっきり反抗される可能性が超高い覚悟でシャイナに単純するぎる提案を言ったが…

シャイナ「…まぁいいや、別に良いよ。（＾＾）そろそろ切りたいと思っていたしｗｗｗ」

シャイナはエツィオの提案を聞いて少し間を開けた後シャイナは軽くエツィオに言って、グラスの中にあった酒を飲み干した後ちょこん♪と座っているカウンター席に身体を真っ直ぐに伸ばす。

エツィオ「な…なんだってぇぇぇぇぇ！？い…いいのか、シャイナ！？Σ（・Д・；）」

エツィオはいきなりのＯＫサインを貰えたことで眼を大きく開き驚愕の表情を出しながら、シャイナは髪の毛を縛る一つの縄に向けて腕を上に伸ばしサラッとずっと縛っていた髪の毛の縄を取って本来の髪の長さをエツィオに見せる。

シャイナ「良いって良いって（＾＾）ｂ別に趣味で伸ばしていたワケじゃないし…成人式のために教会のクソジジイから強制命令を受けていたもんで、髪を切ることすら全然出来なかったからさ。」

エツィオ「えっ！？（・ｏ・；）」

シャイナはエツィオにそう言いながらバックから櫛とスプレーを取り出して、シャイナは手馴れた手つきで腕手首先まである髪に向けて櫛を滑らかに動かし、頭部に絡まったように逆立つ髪を手にするスプレーでシュッと数回吹きかけて、スプレーの水滴がついた髪を櫛で綺麗に解かしボサボサ頭を解かしていく。

シャイナ「正直教会自体の制度で私は憎んでいたよ。他の皆は自由に身嗜みをしていたのに、私のような教会信者だけ皆と同じように出来なかったのか…同じ人間同士なのにね。」

シャイナは過去の出来事に少し愁哀の表情を出した後、ボサボサ頭を櫛で完全に解かして髪を綺麗に一直線に伸ばし、手にしていた櫛とスプレーをバックの中へと仕舞う。そしてシャイナはお上品に座りながら両手を交互に合わせるように下へと下ろした後…

シャイナ「さぁ、エツィオ。いままでの鬱憤が溜まっていたこの長ったらしい髪を思う存分に切って。Ｉｏ　ｃｈｉｅｄｏ　ｃｏｎ　ｌａ　ｐｉ？　ｂｅｌｌａ　ａｃｃｏｎｃｉａｔｕｒａ　ｄｅｌ　ｍｏｎｄｏ♪（ただし、可愛く切ってね♪）」

シャイナはエツィオに向けてかわいらしい笑みを出しながらイタリ

ア語で言って、椅子に座りながらプラプラと両足を軽く揺り篭のように動かす。

エツィオ「…Ｉｏ　ｒｉｃｅｖｅｉ　ｏｒｄｉｎｉ　ｅ　ｃｅｒｔａｍｅｎｔｅ　ｌｏ　ｐｒｅｓｉ！（へっ、お安い御用だ！）」

エツィオもシャイナの笑みに応えるかのように口元を吊り上げて不敵な笑みを出した後、背中から漆黒の翼を出して両腕に纏わせて爪形態にさせる。

さらに両腰から魔神化した時の巨大な竜のような翼も出して、翼をクルンとシャイナの全身を優しく包み上げた後、爪形態させた両腕をシャイナの長い髪に向けてハサミのように切り始め、今のような“上記の主人公視点（シャイナとエツィオ）”に至る。

チョキッ♪

エツィオ「んー♪どうかな？？コイツで良いかなぁ？」

ある程度シャイナの髪を切って顔に付いた細かい髪を指で軽く拭き取った後、エツィオはサッパリしたシャイナのショートヘアの頭部に向けて爪と化した左手を広げるように何度も水平に動かしながら翳した瞬間…

エツィオ「三分で出来る、ビ●ォア★アフター！」

シャラーン☆と効果音が何処かで鳴った途端、翳していた爪の手の平から金色の金箔のような光が降り注いで、シャイナの頭部の短くなった黒髪が一瞬の内に“金髪”へと成り果てる。

エツィオ「よし、仕上げだ！」

言葉通りにエツィオはシャイナの短くなった髪型をふんわりとさせるため爪形態を解き、漆黒の鷹の翼を背中に仕舞った後、素となった元の腕でシャイナの髪を可愛らしく整い始める。所々ワザとハネを付けて上部を数本浮き上がるように髪を整って…

―全体をワザとハネを付けて、ふんわりと膨らむように仕上げたエツィオなりの“金色のマッシュヘアー”が完成した。―

第百六曲　ホント懲りない奴だな（＾Д＾）？

―創魔結界　アルボーレ　ド　バンケット―

シャイナ「す…すげぇぇぇ！！！こりゃ良い変身プリッ♪ｗｗｗ」

シャイナはエツィオの魔力で構成した携帯用鏡を手に取って、鏡に映る新しくなった自分の黄金色に輝くハネ付き短髪を見て、思わずわぁと快感の声を漏らしながら前髪の一部を右手でゆっくりと触って新しい髪の毛の感触を味わう。

エツィオ「気に入ったか、シャイナ？」

シャイナ「もち！流石はチートツィオ。戦闘だけでなくこのような芸術ぶりにも、世界各地にいる色んな職種の匠達がビックリするＹＯ！」

シャイナは眼を少女漫画風にキラキラと輝かせてそう言った時、エツィオは「そうか（＾＾）」と穏やかに笑みをシャイナに見せながら言葉を返す。

エツィオ「気に入ってくれて良かった、ありがとなシャイナ。さて、片付けに入るかな。アイモンに何かと長ぁーく、どやされる前になwww」

シャイナ「そうだよねぇwww床は髪だらけで尚且つぶっこわれた椅子とテーブルが散らかっているしwww私も手伝うよ、エツィオ。」

バサッ…

エツィオはハハハと苦笑いしながらシャイナの身を包んでいた魔神化した時の巨大な竜の翼を解いて、翼を折りたたみながらシャイナに手渡した鏡に向けて右人指し指の先から青白い光を一線飛ばした直後…

シャイナ「サンキュ、エツィオ!あと塵取りもお願いね♪」

シャイナが持っていた鏡が“清掃用の青い箒”になって、シャイナはＧＯＯＤＪＯＢとでも言っているように右親指を上に立ててエツィオに笑みを返す。

そしてシャイナの要求どおりにエツィオはシャイナの足元に向けて左手の平から青白い光を落とした直後、手持ち式の“青い塵取り”を召還する。

エツィオ「ああ、俺も手伝うからな…あっ、その前に…」

シャイナ「？」

エツィオもシャイナが持つ青い清掃用の箒を魔力で構成・召還させて右手で握った後、青い箒を何度も一回転しながらシャイナへと歩み寄った時…

エツィオ「でっかい“ゴミ”も清掃しないとＮＡ★」

ガキィン！

シャイナ「ちょっｗｗｗΣ（゜。゜；）」

エツィオはシャイナの右肩を掠めるように箒の握り先を一直線に伸ばした途端、シャイナの背後から突こうとしていた瀕死状態のチェルノボグが真っ直ぐと飛びかかるように本来の死神の腕の爪を、エツィオは箒の“握り先”で簡単に受け止める。

チェルノボグ「ハァ…ハァ…クソッ……」

エツィオ「ホ　ン　ト　こりねぇ奴だな、お前は。まだヤル気かよ？」

シャイナ「（おまっｗｗｗ同じ箒のクセに何故“鉄の音”が鳴る？ｗｗｗ）」

それだけでなくシャイナはエツィオの持つ箒の性能にも目を疑い、見た目は木と蕨で出来ていた箒なのに“鋼の音”が鳴り響き、頑丈さはアサクリ2に出てくる“一般市民の最強打撃武器と同じ”であった。

エツィオ「地味なガッツは認めるけど、全ては俺が“手加減していた”からだぜ？」

チェルノボグ「がはっ…ハァハァ…」

エツィオは箒を軽ぅ～く横に一回転させて、チェルノボグの悪足掻きの攻撃を蚊を振り払うように弾いた直後、箒の掃き部分の蕨をチェルノボグの右頬に向けて平手打ちみたいにベシッ♪と咬ます。

ドッと箒の掃き部分に叩かれたチェルノボグは体格差と関係無く、身体がそよ風のように“軽々と吹き飛ばされて”身体を横向きにしながら板上へと倒れる。

エツィオ「それと俺は“餓鬼じゃねぇ”。テメェよりも数倍歳上だっつーの“坊や”。」

チェルノボグ「ぐあっ！？」

スコーン♪とエツィオは倒れ伏したチェルノボグの左頬に向けてまたしても箒の掃き部分を当てて、両頬に強い叩き痕が浮かびながらチェルノボグの身体を“ゴルフボールのようにナイス★ショットする”。

チェルノボグ「がぁ、ぐぇ、グァィアアアアアアア！？？！！」

ガン♪ゴン☆ギン！ベシッ★

チェルノボグの身体が天井やら壁やら椅子やテーブルにぶつかって、何度でも言うがエツィオよりも体格があるチェルノボグの身体が“ピンボールのように”何度も弾みながらぶつかっていく。

エツィオ「ちっちっちっち…」

エツィオは口笛を吹きながらノリ☆ノリの気分で腰を何度も横に振

り、手にする青い箒を手の平の中で何度も回転させながら手の平から右肩から左肩へヌンチャクのように回す。

更に身体までも手にする箒と共に回転させて、店内を弾み回るチェルノボグが遂にエツィオへと真正面から飛んできた瞬間…

エツィオ「バアアアスゥゥウタアアアアアアアア！！！！！」

ドゴォォォォォォォォォォォォ！！！！！！

シャイナ「ＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥ！！？！？！　。。。（Д）」

箒でそのまま殴り飛ばすと思いきやシャイナの予想と違って、エツィオは背後から本来の魔神化した上半身だけの幻影（スタンド）を出し、真っ直ぐ飛んでくるチェルノボグの頭部に向けて幻影と同時に真下へと殴り付け、頭部から真っ直ぐに板へと刺さって“お尻が見えたまま土下座する形”になった。そして…

エツィオ「そう…俺が手に持つ箒は、この為にあったのＳＡ★」

ドスッ♪

シャイナ「おっっっっまっっっっwwwwwwそれは違ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

剥き出しになった出血中のチェルノボグの鈍穴（おけつ）に向けて箒の握り先から“深くぶっ刺し”、シャイナの絶叫が響く中エツィオは深く尻へと刺した箒の握り部分を弄くり回しながら更なる“鬼畜・屈辱攻撃”を咬ました。

エツィオ「ねってねって、ねるねるねーるね♪」

シャイナ「ウホッwwwなんという穴ップリwww」

グチグチッ

グリグリとエツィオは無邪気に笑いながら箒の握り部分を何度も回し、更に突き刺した鈍穴（おしり）の鎌傷を完全に開いて血を弄くり出すように思う存分鬼畜行為をさせた後…

エツィオ「ペィ♪」

シャイナ「ちょっwww」

キュポン♪

箒の握り部分の中間辺りに左手で軽く回すように捻った直後、箒の握り部分の中から“黒い油性ペン”の蓋が抜けるような音と共に出てくる。

エツィオはニタニタと笑いながら箒の中にあった油性ペンを右手に持ち直した後、剥き出しになっている鈍穴（おしり）や服が下へ爛れるように降りて中の背中が剥き出しになっている所に…

エツィオ「俺的トドメの、屈辱的な意味での落書きをしてやるＺＥ★」

キュッキュッ♪と油性ペン付き箒を至るところに向けてペン先を走り、黒い線がチェルノボグの身体に“バカ”“アホ”“クソ餓鬼悪魔”“俺はアホＤＥＡＴＨ♪”とか超イジメ的な意味で次々と落書きをする。そんな最中…

シャイナ「もーぅ、エチュィォ♪遊んでいないで、ゴミ集めを手伝って頂戴ＹＯ★と言いつつ、私も落書きに参加中ｗｗｗ」

キュッキュッキュッキュッ

シャイナもエツィオと同じように手渡された箒の握り中間部分を回して同じように“油性ペン”を取り出しており、シャイナも和気藹々で油性ペンを走らせ二人で一緒に楽しくチェルノボグを落書き攻めしていた。

第百七曲　魔神と破戒の王のホモい雑談と、忘れられた隻眼悪魔

―創魔結界　アルボーレ　ド　バンケット―

アイモン「シャイナちゃーん。服の調整出来た…てっ、何ぞコレ？ｗｗｗ」

店奥からアイモンが右手にシャイナの身長に合わせた“白い厨二病コート”を持ってカウンター席へと歩んだ時…

―シャイナとエツィオがいた席の床に真っ直ぐに頭からぶっ刺され“鈍穴（おしり）に箒が刺されている無様姿のチェルノボグ”が、頭部以外の身体に黒い油性ペンで描かれた“罵詈雑言&二次元キャラクターの落書き姿”になっているのをそのまま見る。―

アイモン「グフッｗｗｗ何だこの“お馬鹿丸出しの姿”はｗｗｗ」

アイモンはチェルノボグの姿を見てブッと吹き腹を抑え笑い声を堪えながら、少し口を開いてこんな店内のシュールな状況の辺りに“フツーにスルーしながら掃き掃除している”シャイナとエツィオに言う。

アイモン「俺が見てない間に、“一体何が起こったんだ”黒い兄チャンよぉ？ｗｗｗ」

エツィオ「見りゃ分かるだろ？馬鹿悪魔（チェルノボグ）の調教行為（おしおきプレイ）だ。その事後だＹＯ（＾Д＾）？」

六割位店内の椅子やテーブルがぶっ壊れて所々埃と木の破片が飛び散っている中、エツィオは淡々と箒でせっせと掃除し塵を集めながらアイモンに答える。

店内を破壊した椅子とテーブルの箇所にエツィオは人差し指を刺して青白い光をペッペッと放った後、カタンと音が鳴り何処からか“新しいテーブル・椅子が現れる”。

シャイナ「テラ★リンチ如く再起不能になるまで、エツィオはボコボコにしたもんねぇ～。あっ、エツィオ。その塵を此方に持ってきて。塵取りで掃きとるからさ。（＾＾）」

エツィオ「ウィルコ♪」

アイモン「し…シャイナちゃんの髪が短い&金髪になっとる…なんという変身…プリっ！（。Д。）」

チャッチャッ♪

そんなお仕置き後の“垂直土下座チェルノボグ（尻に箒付き）を無視する”かのようにシャイナは、箒を掃きながら塵を一ヶ所に集めて塵取りで掃きとるようにとエツィオに言う。

アイモン「たくっ…。」

その後エツィオはシャイナの言われた通りに箒と塵取りを持ちながら一ヶ所に集めた塵へと歩み寄り、次いでに短い戦闘でぶっ壊したオブジェクト物までエツィオの放つ魔力で綺麗に復元する。

アイモンは元通りに作業する金髪になった新しいシャイナとせっせと働くエツィオを見ながら一息を付けて、呆れたような言動を吐きながらも表情は綻んだように笑っていた。

…

……

……

―数分後―

アイモン「シャイナちゃーん、どうでぇ？？」

エツィオの魔力とシャイナの助力によって店内を完全修繕した後、まだ突き刺さっている悪魔（チェルノボグ）を除いてアイモンとエツィオは、互いに腕を組ながら店奥に着替えているシャイナに声を掛ける。

シャイナ「あと下半身のベルトを通すだけだよ～。待っててぇ♪」

キュッとシャイナが着替えている所からベルトを締める音が聞こえて、更にコートの側面に付いていたチャックの音も身体を揺らす度に軽い音を鳴らす。

エツィオ「若いころのアンタが、あの破戒の王の特級魔力が宿った“鎧”を人間のシャイナに易々と提供するとはな。」

エツィオは腕を組ながらアイモンに言い、店奥で着替えるシャイナの服からの破戒の王の魔力を肌に感じながらやや真面目顔を出す。

アイモン「なーに、感情と趣味に目覚めた俺にとって、もはやアレは不要なモンだ。闘うことすらできず、人を喰らわない欠陥品の破戒の王は、もう特級悪魔じゃねぇんだよ。」

アイモンはハッハッハ♪とケラケラと笑いながらエツィオに言い、

いまだに真面目面を崩さないエツィオの左肩に向けてペシッと右手で軽く叩く。

エツィオ「ヒトの心を生まれながらにして持つ悪魔は“俺”だけだと思っていたんだ。まだ俺が小っちぇ餓鬼だった頃に、皆が不思議がって白い目で淡々と見られていたのを覚えている。」

アイモン「あの魔帝が人間界と神界を手に入れようとして、“侵略最中にお前は生まれた”のか？坊主？？」

アイモンはエツィオの話を聞いて少し驚愕顔を出して質問した直後、エツィオは「あぁ。」と顎を下に動かしてアイモンの問に答える。

エツィオ「初めての人間の内部の生気（にく）を重視としたそのままの食事…俺はあの生々しい色をした気色悪い存在を見て吐き気がしたんだ。“何故平然として人肉を喰らうことが出来るのか？”と…」

一瞬瞳を閉じて脳内に映る幼き頃の自分の姿を思い出し、周囲の悪魔からも薄気味悪い印象を付けられて誰もが近かずくこともしない痛い思い出が過る。

エツィオ「悪魔達にとって日常茶飯事でも俺は理解することすら出来なかった。それだけでなく月日が経つことで流れ込んでくる複雑な思考と葛藤の情報と俺の身に沸き上がる神や星さえ滅ぼすことが

出来る圧倒的な力。何故あの魔帝が罪を犯していない人間達を殺すのか…何故人を喰らっているのか…あの時も、今でも理解出来ない。」

アイモン「…。」

エツィオはそう言いながら左手で頭部のフードを下に引っ張って深く被り直し、カメラ目線から反らすように表面を隠しながら淡々と独り言めいた台詞を吐く。

エツィオ「その答えはまだ出していない。なんのために俺だけ“心”を最初から持たせたのかその「なーに、そんなに焦る必要はないぞ坊主。答えは何通りとあるからなぁ。」！」

パシッと背中を数回叩かれてエツィオははっとして少し驚いたような表情になり、後ろから叩いたアイモンに向き直す。

アイモン「おめぇは俺よりもまだ“若い”！三百万以上の時を生きた俺にも、まだ知ることも理解出来ることもない要素が沢山ある！」

アイモンは歩みながらエツィオを通り越し、カウンター席にスタンッと片足で組むように座った後、立ち続けるエツィオに向けて続けて言う。

シュボッ♪

アイモンはカウンター席に座りながら胸元にあるポケットから煙草（マ●ルドセブン１０）を取り出して口に加えた後、右手の親指と人差し指を軽く摩るように動かした時、右手から小さな火がライターのような光を出す。

アイモン「今の世の中も訳の解らんことが渦巻いて来ている。政界の動き、裏世界に生きる人間共の汚れた戦いなど…日々俺の内部にある情報源へと雪崩れ込んでくるのさ。が…」

アイモンの魔力で右手から出した火で煙草の先から点けて、口から少量づつ吸う度に煙草の吸殻が、燃え尽きるように段々と灰色に変えながら一旦吸うのを止める。

アイモン「まぁ、何れにせよ…おめぇはまだシャイナちゃんと同じように若いから、この情報まみれの世界を旅することで、きっと俺よりも早くその答えを導き出せるハズだぜ？今は急がば回れだ。焦っちゃかんよぉ～♪」

プハッ♪と口に加えていた煙草を左手で取った後、アイモンは上機嫌に口内に入っていた煙草の煙を出して、吐き出された煙草の煙が段々と三重の円を綺麗に描くように分かりやすく天井へと浮き出した。

エツィオ「アイモン…すまない。超真剣（マジシリアス）な話をしちまって…」

アイモン「良いって良いって♪若者の悩みは俺らのような年輩に、早めに言った方が良いぜ。ちょっとだけ話しただけでも、楽になれるならＳＡ…それで良しってもんだ★」

エツィオはアイモンらしい励ましを聞いて少しきょとんとした後、額に右手を当てながら静かに腰から出ていた本来の魔神化した時の竜のような巨大な翼を広げて、全身を包むように静かに竜の翼を被う。

エツィオ「（そうだな…まだ俺とシャイナの旅は始まったばかりなんだ。焦ることなどないのに…俺は阿呆かｗｗｗたくっｗｗｗ）」

暫く心の中にある焦りが混じった葛藤がまだ脳裏に過っているのを感じて、エツィオはその不可解な情報に苦笑した後…

バサッ…

落ち着くまで静かに身に魔神化した時の竜の翼を包んだまま、そっと天井へと顔を上へと上げて、旅先にある答えを唯一の楽しみとして期待するような熱い視線をし睨み続けた。

この数分後、元破戒の王の纏った白い厨二病コートと黒いズボンを着たニューコスシャイナに、今の二人の一服?姿を見て「何のんびりと二人でホ●モダチしてんじゃぁ!?」と問題的な意味の言動で叱咤される。

アイモンとエツィオは互いに焦りながら、「おまっｗｗｗこれは只の一服だＺＥ。ｗｗｗ」と軽めに言ってシャイナの腐要素発言を否定するようにさらに数分間説得するハメになる。が…

チェルノボグ「（俺は!?俺は…このままスルーかよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!?!!?!?（涙））」

今でも三人の会話を除いて店内に、まだ垂直に頭部から真っ直ぐに突き刺さされ尻に箒が刺されているチェルノボグが、心の中で“初登場からずっと無視されている”ことで涙目になりながら、そろそろ出番に参加したいという気持ちでう〝ぇーんと反省する気持ちでおいてけぼりにされているように嘆いていた。

第百八曲　魔神と死神のリアル鬼ごっこ

―創魔結界　アルボーレ　ド　バンケット―

シャイナ「アイモンおじさん本当にありがとね！調整だけじゃなく、ご飯まで提供してくれてｗｗｗ」

あれからシャイナは新しい服の着心地を新鮮に味わいながら、アウ●ーワールドのレ●ター教授如く軽やかステップで店内を歩いた後…

アイモン「シャイナちゃんが服を着替えている時に、黒い兄チャンから詳しい事情を聞いたから、旅の続行の前に俺特の旅飯を食ってけ★」

カチャン♪

とアイモンはそう言った後、のっくらとしながらカウンター席のテーブルの上に“シャイナだけの俺特旅飯”を六皿分と、珈琲が入ったマグカップを置く。

シャイナ「ありっ？エツィオはいいの？？」

エツィオ「俺はアイモンと同じ生粋の悪魔の身体だから、前に言っていた通り、俺達の悪魔・天神は食事を摂る必要はないんだ。」

シャイナは自分の分しか出されていないのを見て、少し問うような表情をだしながらエツィオに向けて軽く言った後、エツィオはどうぞお構い無くぅ♪と言う風にニコニコ笑みを出しながら、手招きでシャイナを食事が置かれた場所へと導きながら続きを言う。

シャイナはエツィオの手招きで導かれるように歩んで料理が置かれたカウンター席へと腰掛けた後、皿の上にあった焼き立てのコッペパンらしきトーストを手にとって少量かじる

エツィオ「周りの状況に合わせて随時摂取・体内の空腹を調整するのが俺の流儀。当時は毎日クソ不味い砂のような食事を我慢して摂取していたなぁ。そん時は“人間同士の戦最中”だったしｗｗｗ」

エツィオは苦笑いしながらシャイナに自らの過去話を語り、美味しそうにアイモンの料理を頬張るシャイナの姿を見て羨ましそうに見つめる。

シャイナ「うっはｗｗｗそりゃ大変だなぁ～。戦火中のドロドロした空気は本当に食べにくい感じがして堪らない気がするｗｗｗ」

アイモン「そう、初めから感情を持った黒い兄ちゃんと違って途中感情に目覚めちまった俺のような出来損ない悪魔は、通常通りの人を食べるという感覚が無くなる。人を喰らうことすら出来ない悪魔は、戦力外と見なされ廃棄（ロスト）される運命。が…」

アイモンはちぐはぐと食べるシャイナの姿を見てはにかみしながら笑った後、天井を灯すチューリップ型のランプのオレンジ色を眩しそうに見ながら、目をキュッと細くする。

アイモン「感情に目覚めた俺は破戒の城にいた連中を皆殺しした後逃げ出して数万年だっけな…俺を処刑しようとする悪魔共達との戦いで身も心もボロボロだった若りし日の俺を匿ってくれたのは…シャイナちゃん、君のおじさんだ。」

シャイナ「おじいちゃん（リオール）が！？」

シャイナは途中料理を頬張るのを止めて軽く食器の音を鳴らした後、アイモンが天井のランプの光を見ながらいつの間にか取り出していた煙草を口元でプハッ♪と吸っている姿を見る。

アイモン「当時のシャイナちゃんが入っていた教会は本当に良かった。俺のような出来損ないの悪魔でも、当時のリオールは人間のように接して落ち着くまで構ってくれた。リオールに対して俺は感謝

の気持ちで今でも溢れている！」

アイモンはそう言いながら一旦口に加えていた煙草を左手で取るように放した後、モワーッと口内に溜まっていた煙草の煙が列車の煙のように出てくる。

アイモン「だから俺はリオールに仮を返すべく、表は人間達に笑顔を提供する工房店に、裏は俺のような出来損ないの悪魔を匿う家を営む二つの業務を行うことにしたんだ。全ては…」

シャイナ「おじいちゃん（リオール）に感謝を表すようにやったことなのね？」

シャイナはウフッ♪と微笑む表情を出しながら皿の上にあったウィンナーにフォークを突き刺し、ウィンナーを突き刺したフォークを額まで掲げた後軽く横に振りながら続きらしき台詞を嵌め入れる。

アイモン「オーライィ♪流石はシャイナちゃん！元教会の祭司だったリオールの優しさに似ているぜ！！」

エツィオ「まぁ、取り敢えずシリアスな回は此処までにしようぜｗｗそろそろ“ちゃぷたーさん”に突入したいし、“好き勝手に暴れたい”とこだ（ノ－ｏ－）ノ」

そんなシリアスな会話にもう飽きたのかエツィオは大きく口を開いて欠伸をし、少量瞳から水滴を出して左手で拭い取った後今の状況で空気を読まない台詞を吐きながらアイモンとシャイナに言う。

アイモン「まぁ、特急列車後の回は“戦闘描写が少なかった”からなぁｗｗｗそれはしゃーないとしてｗｗｗ」

アイモンはアハハとわざとらしく笑うように両腕を広げて肘を上に曲げた後、手首をプラプラするように動かし煙草を吹かしながら、お手上げするような仕草をする。

チェルノボグ「次回から好き勝手に暴れるつもりだろう、小僧？…あー、いってぇ…尻穴いってぇ…最悪だ。」

シャイナ「あっ、起き上がっていたのかアンタｗｗｗそれに…グフフッ！！」

カチャンとシャイナが四皿目の食事を平らげて次の料理に向けて皿の音を立てながらフォークを料理に突き立てようとした時、既に起き上がり傷が完全に塞がった不機嫌顔のチェルノボグがいた。

チェルノボグ「このクソ餓…“クソジジイ”…二度も俺の尻穴に向けて深く下らねぇモンを注入させやがって！一回三途の川を完全に

渡りそうになったぞ！！」

尻を何度も摩りやや顔に歪みを浮かび出しながら、ややふらついた歩行でシャイナ達がいるカウンター席へとズカズカと歩いてくる。

エツィオ「ブフッ！そんだけ吠えれば十分だよ坊や。ン゛ブフゥッ！！流石俺より若い…ウヒヒヒ！！」

チェルノボグ「あ〝ぁっ！？何が可笑しいんだ、人間の女とこのジジ「チェルノボグｗｗｗこれを見たまえｗｗｗ」…！？」

チェルノボグは何度も腹を抑えて声を出しながら笑っているのを見て更に不機嫌な表情になり、二人が笑っている理由は何なのか聞いてみようとしたが、アイモンがススッ♪と空気を読むかのようにテレビ画面の横から乱入するに現れる。

そしてアイモンから手渡された鏡を手にとって、鏡を自分の顔へと映した瞬間…

チェルノボグ「っっっっ！！？？！！このクソジジィィィィィィィィィィィィイ！！！！！！！」

エツィオ「んなーはははははははははははははははは！！！！」

鏡に映った“油性ペンでの屈辱的な落書きだらけの自分の姿”を見てチェルノボグはシャーと口の中にある舌をギャグ漫画に出てくるような蛇のような物体へと変える。

チェルノボグ「このクソジジィィィィィィィ！！！！ぶっ殺しいいてぇやぁるっっっっっっっっ！！！！！」

憤怒の表情を出しながら左腕を上へと上げながらプルプルと震えるように左拳を握った後、シャイナの隣にいるエツィオに向けて至るところの表面から蒸気のような煙をブピュピュー♪と出しながら人間体の素手で殴りかかる。

エツィオ「イヤぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん（＊ノεノ＊）この御老体に暴力は駄目ぇぇぇぇんｗｗｗ」

一方エツィオは大きく笑いながら鬼瓦のような形相を出すチェルノボグの殴りを身体を横にずらして紙一重に回避し、そのまま後転宙返りするようにしてわざとらしいエロチックボイスを吐きながら、数メートル離れた後両足を着いて板を軽く滑りながら後退する。

チェルノボグ「待ぁぁぁぁぁてぇぇぇやぁぁぁぁクソジジィィイィィィィィィィィィイィ！！！！」

エツィオ「やぁーだぁーねぇーアヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャ！！！！」

後方から鬼瓦の表情を出す落書きチェルノボグに追いかけられながら、エツィオは途中エロボイスからフリーダム風のアヒャーン語へと変える。

そして後方から走りながら殴り掛かろうとするチェルノボグから軽やかに逃げ、“漫画風の光景である顔だけ後ろに向けて無邪気にニコニコ笑顔を出しながら”…

―悪魔同士の友情シーン≠悪魔同士の殺し合い&死合続行シーンを二次元漫画を今現代に再現させる“シュールな光景”へとなっていた。―

チェルノボグ「やっぱ殺す！！！！殺してやるぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！！」

エツィオ「やーん、（＊´、｀＊）誰か助けてぇぇん（嘘）やーめーてぇぇぇぇぇぇんｗｗｗ」

店内全体を走り回るのほほん顔の魔神（エツィオ）と鬼瓦の顔を出す死神（チェルノボグ）は互いに笑み（チェルノボグだけはブチ切れ）を出しながら、二人だけの

（チェルノボグだけはｒｙ）世界（嘘）へと入っていった。

アイモン「ＨＡ　ＨＡ　ＨＡ　☆此だから今の世代の若い連中は面白い！この騒動こそが今のような世界を明るくさせる起爆剤の役割ＤＡ！」

シャイナ「いいえ…　これは酷い程のシュールな光景だ（笑）」

アイモンは二人の友情≠死合続行のリアル鬼ごっこを見て期待を寄せるような言動を吐いたが、シャイナだけはあまりにもシュール過ぎる光景にぼーと遠い視線を映しながら見て、最後の六皿目であるパンナコッタをスプーンで掬いながら口の中に入れた。

第百九曲　そしてライバルが増える。

―創魔結界　アルボーレ　ド　バンケット―

アイモンの営む居酒屋で和気藹々？と過ごしたシャイナとエツィオ＋αは、互いに笑い合い楽しい一時を過ごした。

チェルノボグ「たくっ…元気過ぎるジイサン相手は疲れるぜ…はぁ…」

チェルノボグはゼーゼーと息を荒げながら両膝を着き、両腕も爛れるように着けてｏｒｚ体勢を大の男がだらしなくうつ伏せになるようにしてやや倒れ込んでいた。

アイモン「だが良い運動になったじゃないか、チェルノボグ。あの黒い若僧に出逢えて色々と味わっただろう？？（身体的な意味で）」

アイモンはカッカッカと笑いながらぐったりとしているチェルノボグに、再度チェルノボグ用の特製ワインをカウンター席のテーブルの上に置く。

シャイナ「アイモンおじさん、ありがとねぇ♪何時も通りにご馳走様！」

アイモン「ダッシャー！シャイナのためなら、オジタンは何でもするＺＯ★」

そんな最中シャイナはエツィオと共に店内出入口の扉へと歩んだ後、シャイナは顔だけを後ろに向けて感謝の表情を出しながら右腕を上に上げて何度もバイバイ♪とアイモンに向けて横に振る。

エツィオ「じゃぁ、一段落したらまた来るよ。アイモンにまた話したいことがあったらまた…」

アイモン「おうよっ！何時でも来なよ若い兄チャン！店は毎日開けているからなぁ！」

エツィオもアイモンに向けてシャイナと同様に手を振りながら言い、アイモンは暫くの別れの挨拶をする二人に向けて両腕をブンブンと激しく振りながらバイバーイする。が…

チェルノボグ「おぃ、クソジジイ…今度会ったら完全に俺が「エツィオだ。ジジイジジイと何度も言うんじゃねぇよ、隻眼の坊や。」あ〝ぁん！？」

出ていく二人にチェルノボグはカウンター席に座って窶れた表情を出しながら置かれていたワインを飲みつつ、シャイナの隣にいるエツィオに再戦でも通知するような激しい言葉をぶつける。

が、エツィオはそんな態度を取るチェルノボグに苦笑いしつつも、冷静に対処し逆にチェルノボグを挑発するような余裕ある言動をチェルノボグに吐き返す。

エツィオ「“歳上に対しては敬意を払え”。まずそこから始めないとな、隻眼の坊や。そこを直さない限り、俺は何時までもアンタのことを“坊や”と呼ぶぞ？」

チェルノボグ「うるせぇな、クソジジイ！隣にいる人間を連れてさっさとこっから出ていけ！酒が不味くなる一方だ！！」

ダンッ！とチェルノボグは手にするワイングラス底をテーブルに叩きつけて激怒し、苛々する表情を出しながらエツィオの顔を逸らして左手首を何度も前に払うように振る。

シャイナ「（やぁーねぇー…これだから特攻形のアホキャラはｗｗｗ）」

エツィオ「（まーまー、シャイナｗｗｗ時期にアイツも入れ換わる

可能性があるかもしれないもんで…少し様子を見てみようぜ？ｗｗ）」

エツィオはそんな態度を取るチェルノボグに呆れた表情を出して、手を広げながらわざとらしいお手上げをするような仕草を取り、隣にいるシャイナもエツィオと同様に一緒に溜め息をつきながら二人だけの小声を言い合った後…

エツィオ「じゃ、次会ったら“俺の名前ぐらい言えるようにしとけよ”、隻眼の坊や。じゃねっ♪」

チェルノボグ「うるせぇ！！」

チェルノボグの見苦しい言い訳のような怒声が響く中、エツィオは出入口のドアノブを回して扉を開けた後、隣にいるシャイナと共に外へと出て居酒屋（アルボーレドバンケット）を後にする。

チェルノボグ「…クソッ。」

二人が出ていった後…再び店内に一人残されたチェルノボグは少し扉を目の視線だけで動かし数秒見た後、グラスの中にあったワインを飲み干し底から前からよたれかかるようにしてテーブルの上に上半身を倒れさせる。

アイモン「どうだ?己の力量がどれ程、あの魔神に対して儚く非力で無力だったのか…実際身に染みて分かったかね?」

アイモンは食器を洗いながらチェルノボグに言い、淡々とした言動を吐きながら上半身をテーブルに倒れ込んだふて腐れ状態のチェルノボグがアイモンにそっと言う。

チェルノボグ「なん…だよ……あの“ふざけた力”は……にしても…俺は……」

チェルノボグは先ほどの喧嘩で“圧倒的に素手だけで弄ばれた自分の情けない姿”を思い返しながら、ぎゅっと口を閉じ歯を食い縛って悔しがる表情を押し留めたまま所々嗚咽が出る。

アイモン「悔しいか、チェルノボグ?だがあの若僧はお前と初めて会った瞬間、はなっから“お前のような好戦的の性格を見破って”、さらにこの後“喧嘩する予兆はもう解っていた”し、尚且つ殺さない程度に“全力で手加減”するようにしていたんだぞ?」

チェルノボグ「なっ…!?」

チェルノボグはアイモンが話す言動を聞いて目を大きく広げながら、テーブルの上に倒れ伏した身体を反射的に起き上がらせてアイモン

の話を続けて聞く。

アイモン「あやつなりにお前の力量を“最初から分かっていたからさ”…お前に対しての…どれだけ敗者を苦しめ、勝者は敗者の心を受け止めてどれだけ傷めるのか…彼奴なりに“お前に対しての気遣い”があったのだよ。」

アイモンは皿とグラスを洗いながらもどこか遠くを見るような視線で、ボーと呆けるように店内に流れるジャズロックを聞きながら話を続ける。

アイモン「あの若僧は俺よりも若輩者だが“お前と俺よりも計り知れないぐらい多くの修羅場を潜って来ている”んだぞ?あいつにもお前のよりも数々の挫折を味わって、必死に足掻いた結果が今に繋がっているんだ。わかるか?俺が今からお前に言おうとしている意味が??」

チェルノボグ「…。」

チェルノボグはアイモンの話を聞きながらグラスの中に映るまだ残っていた飲み掛けの赤いワインを見て、残された目に映る赤い液体が段々と…

数多くの障壁に果敢に立ち向かい懸命に足掻く魔神の姿がチェルノ

ボグの幻の映像として流れ、絶望を希望に変えるために戦う魔神の身体の所々から流す血を地面に滴り落としながら…。そして…

チェルノボグ「…いずれ、あのジジイと決着をつける。今度は…」

チェルノボグはスクッと立ち上がって羽織っていたコートを掛け直した後、アイモンに見守られるようにして静かに店内の出入り口へと歩みだす。扉のドアノブまで歩み手をかけた後、ゆっくりと回しながらアイモンに言う。

チェルノボグ「倍返しだ！その間に俺は暫く魔界にある隠し場所で、この体を今までよりも鍛える！！それまでに…」

一首を洗って待っていろよ、魔神（クソジジィ）エツィオ！一

心の中でそう叫びながら表面で静かにアイモンに言った後、チェルノボグも隠し居酒屋（アルボーレドバンケット）を後にした。

一人残されたアイモンはヤレヤレとわざとらしくお手上げするように両手を軽く振るった後、ため息を着きながら出入り口に向けてそっと“カメラ目線”を向けたまま小さく呟いた。

アイモン「また…好敵手（ライバル）が増えたなぁｗｗｗ苦労するぜぇ…黒い兄

チャンよぉ～ｗｗｗ」

第百十曲　色々とすみませんねぇ～ｗｗチャプター3の始まり始まりぃ♪

―現代　フランス　オルレアン　裏城壁―

ブゥン…ガチャ♪

シャイナ「ハーイ！連載百十での“中途半端など●でもドアッー！”からコンチャー！金髪少女のシャイナとぉ～♪」

人一人通らない雑草だらけの城壁の裏の壁から突然ど●でもドアのような扉が電子音と共に浮き出るように現れて、ドアノブが下に引いた直後中からピースサインをした笑顔満開のシャイナが出てくる。

エツィオ「へーイ！常時最強で色々と“股の間”からすみませんねぇ～（笑）最強アサシン“悦男（エツオ）”でございまぁーす♪イヒッ（「皿＋」）」

するとシャイナの“脚の股の間から顔だけ覗くように”厭らしい変態顔をしたエツィオが現れて、視線を“股上”に向けたまま“あるモノ”を見続ける。

シャイナ「フフーンだ、残念Ｈ男ｗｗｗ“パンティー”はズボンで隠れているから見えましぇーん。ざぁぁぁぁまぁぁぁぁ（＾Д＾）？」

エツィオ「ち…チクショー！！（＊、θ′＊）」

シャイナはエツィオの厭らしい変態視線に気付いていながらも余裕溢れる表情を出しながら、“カメラ目線”に向けて“（＾Д＾）？プギャー”とわざとらしく咬ます。

エツィオ「ぬぐぅ～。アイモンめぇぇぇぇ、責めてズボンじゃなく“スカート（短）”にしてほしかった…つ…次から…よ…ょぅじょ短パン…キボンヌ…」

シャイナ「あぁん！？アホ臭い短パンやスカートなんて今の私には似合わないもん★私も作者と同様ズボン推奨派なんＤＥＡＴＨ♪」

キリキリとエツィオはわざとらしく恨めしそうな表情を出しながらも、まだ視点はシャイナの股間上に注目しており、ズボン内部にあるパンツの色と形を予想しながら変態顔を表にさらけ出す。

エツィオ「いや、次こそはアイモンに口説いて必ずスカートにしてｒｙ（」

シャイナ「それは断じてエツィオや一部の閲覧者の言葉でも否定する！“ギリギリ全年齢対象”として継続していかないと！！」

エツィオ「ＮＯ！段々と露出していかないと、色んな意味でツマラナイぜシャイナ！！スカートの次は胸元が見える位のピチピチ又はボカボカのシャツをｒｙ」

シャイナ「こ　の　エ　ロ　オ　ヤ　ジ　ＭＥ／（、Ｏ′θ／！！」

そんな変態視点をし続けるエツィオを退けるようにシャイナは、次の“衣装換え変態フラグを回避”する言動を吐いて永遠に拒否する姿勢を取りながら二人だけの“衣装に関してのエロ抗議”を言い合っていた。

―あと数分間、扉の前でエツィオにシャイナの“股間からコンニチワの体勢”を取ったままで（笑）―

…

……

……

―数分後　オルレアン　都市入り口前露店密集広場―

ヒュオオオ…

シャイナとエツィオ（半透明状態かつシャイナの左肩の上にいる）がオルレアンの都市入り口に入ったのは、空がオレンジ色に染め上げられ人通りが段々と少なくなる夕刻の時間帯だった。

シャイナ「居酒屋（アルボーレドバンケット）に入る前は、“同じような時間帯”だったんだけど…」

エツィオ「知らねぇ間に、1日過ぎていたようだな。創魔結界の内部の時間は現世の時より“早く進む”しｗｗｗ」

元々この小国（オルレアン）は中心都市と同じようにアスファルトが引いてあったハズだが、この小国でも政治上部の連中さえ“脅かすぐらいのシャイナの故郷と同じ教会”があり、その教会の権力で全てのアスファルトを撤去しコンクリートと元々の瓦礫で積み上げられた石の街に風が通り砂ぼこりが舞う。

自然を大切にしている国を世界に示しているのか路面は一切アスファルトを使用していない固い土で積み上げられていて、所々風化した煉瓦と蔦が複数柱に沿うように巻いた崩れかけの建物が沢山建てられてた。

シャイナ「エツィオ見てみなよ。ここにも私の故郷と同じような、彼女の功績を遺す英雄の石像が至るところにあるのよ？」

エツィオ「ふーん（・・）」

エツィオはシャイナに言われた通りに顔だけを右往左往に動かして、今いる露店上部や石の建物の壁・路上の真ん中辺りに石で出来た英雄（ジャンヌダルク）の石像が“傷一つ無く綺麗に建てられていた”。

エツィオ「ここも“同じ”だったっけな？シャイナが住んでいた故郷のように…」

シャイナ「そう…ここも彼女の為に死力を無駄に尽くしている輩が集っているの。出来る限り私は前のような騒動に巻き込まれたくないので…」

シャイナは段々と露店通りにいる人数が少なくなる中静かに歩き、途中人を軽く押し退けながらも日が沈む前に小さな店舗を二三件寄る。

シャイナ「（一回此所で休息した後、さっさとここから出ていこう。）」

露店で旅の非常食と携帯食を出来るだけ買い、更に衣服を二三回目を通しただけでさっさと購入した後、路上裏に入って遮坪が多い場所に移動した後…

シャイナ「はい、エツィオ。いつも通りに！」

シャイナがエツィオに露店で買った軽めの衣類を手渡しした後、エツィオは「もちっ！」と軽く言って実体化し、ササッと遮坪物へと身を隠す。

そしてシャイナは遮坪物が多い裏路上から出て、街にある石の外壁に背中をくっつけて両腕を腰裏に持っていって交互に手を組ながら待っていた時…

エツィオ「よし、さっさと行こうぜ（＾＾）シャイナ。」

裏路上入り口からシャイナが買ってきた新しい私服に着替えた、次チャプコスの私服エツィオがテポテポとシャイナの元へと歩いてくる。

今のエツィオの私服姿は上半身縦に何度も黒い線が引かれたストライプ状の襟が付いた白いTシャツに、下半身は黒い薄木地の皮製で作られたクロップドパンツと膝辺りにから実体化した時の漆黒の鎧

付きブーツをクール●ズ風に着ていた。

シャイナ「此処から歩いて2分位にホテルがあるから、そこに一旦泊まって明日早朝さっさとここから出ましょ♪」

シャイナは先ほど露店で買ってきた街中パンフレットをエツィオに開くように見せて、今いる場所をシャイナの指先で軽く叩きながら記す。

そして叩いた箇所を静かに動かして、エツィオは動くシャイナの指先を視線でだけで追いながら今から行くべき一ヶ所へと指し示す。

シャイナ「ホテルと言うよりも“民宿”って感じかな?設備は私の故郷に住んでいたボロ家と同じようなもんだし…」

エツィオ「まぁ、取り敢えず行くべきことは決まった。ならさっさと、ホテルに向かおうシャイナ。この時間帯でも周りは“敵だらけ”だからな…」

エツィオはそう言いながら一瞬瞳を金色の鷹の眼へと変えて顔だけ辺りを見回した後、エツィオの瞳に映る鷹眼（イーグルアイ）には露店通りを歩き回る群衆の至るところに“教会”と“軍”の人間達が紛れながら潜伏していることをシャイナに告げる。

シャイナはエツィオの敵の識別が出来る鷹の眼力の情報を聞いて顎だけを下に下げて静かに頷いた後、隣にいるエツィオに向けて「行こう。」と軽く言って先に進み、手招きしながらエツィオと共に民宿（ホテル）へと歩み出した。

…

……

……

？「イヒヒッ！…漸く見つけたゼェ、憎っきクソ魔神？」

砂埃が宙に舞い夕焼けの光をバックに見張り台の上でシルエットの姿をした人間？が、小鳥のように座りながら遥か下にいるシャイナとエツィオに向けて悪役に相応しい下品めいた台詞を吐く。

？「ラッキー♪ラッキー♪♪今日の俺はついてるぜぇ…この神域の場所であの憎たらしい魔神を…」

シルエットの人型はニタリと口元を吊り上げて歯を少し見せながら笑っていた後、背後にいるガス状の下級兵士達（ネロズマティエーター）を静止するように左腕を伸ばし心の中で強く叫んだ。

―この手で漸く、テメェを引き裂くことが出来るからなぁ！―

第百十一曲　アポ無し撮影は止めましょうｗｗｗ

―夜　フランス　オルレアン―

オォォォォォォン…

陽は落ちて空が闇に満ち新月が上がって背景が黒く変色する中、何処かで野生の狼の遠吠えが聞こえる。

カラ…カラ……

風によって丸められた数個の藁が自然そのものの路面を滑るように転がり、都市入り口通りに沢山並んでいた数々の露店が前掛けのような絨毯で覆うように閉め人が通らない静かな時を刻んでいた。が…

ザッザッザッ…ガタンッ…

ズルッ…ズルルッ……

英雄を祀る都市の隠された穴・錆びまみれの開かずの扉等の至る所から突然開いて、中から別の生き物達が夜の冷たい大地をおぼつかない足取りで一歩一歩と踏み出す。

？「ハァ…ハァ……」

？「オ〝ッ…オォ……」

姿形は新月の闇に満ちた夜だったのでシルエットにしか見えなかったが、僅かに映る黒い輪郭には人型を辛うじて保ち死者のような声を出しながら頭部らしき所からは…

ジュッ…

頭部から何かが大地へと滴り落ちた瞬間、落ちた箇所が硫酸のような溶ける音を立ててカピカピの土の大地がドロッと溶けるように液体状になっていき、人らしき型のシルエットが立つ位置だけが次々と大地を溶かしていく。

？「ギ…ギギ…」

？「フシュー…シュー…」

暗闇の中でフラフラと歩く死体（ゾンビ）のように蠢く人らしき型のシルエット達は、一点の灯りを灯す建物へとおぼつかない足取りでゆっくりと歩み始める。

―これが後のアイ・アム・レ●ェンド風のチート戦闘の幕開け前であった。（笑）―

…

……

……

―夜　フランス　オルレアン　観光客用民宿館　３階　Ｃ－４号室―

シャァァァ…

シャイナ「♪～♪♪～」

一方シャイナとエツィオは外の様子が一変しているのに無視（スルー）して気づかないまま、シャイナは民宿の室内にある浴室でシャワーを全身を浴びながら一人入浴を満喫していた。

シャイナ「ふー…♪久々に入浴したような気がする…」

シャワーを浴びながらシャイナはクスッと笑って浴室の暖かみを満喫した後シャワー湯の腺を捻って止めて、事前に溜め込んでいた白い泡まみれの風呂に向けて歩みながら頭部にハンドタオルをクルッと巻く。

因みにエツィオは寝室にて待機中であり、残念ながら風呂場で書くつもりだった“性的行為（アッハンエロタイム）”は作者の都合により廃止ｗｗｗ

…本当にすまない、閲覧者達…ｍ（＿＿；）ｍ　By作者

シャイナ「あぁーん♪性的行為（エロタイム）は無いからちょー楽ぅ…極楽極楽ぅ（＊´ω`＊）」

バシャッと閲覧者用のカメラ目線から映す映像には、シャイナの背中を捕らえつつ胸元が見える手前までじっくりと変態並みに映した後、泡風呂に入って泡の中の成分によるミントの香りを鼻で感じながら、幸せな表情で白い泡風呂を満喫する。

シャイナ「ンー！こういう極楽タイムはじっくりと味わうのが良いよねぇ～♪アフゥゥゥン（＊´ω`＊）」

パシャッと右足を伸ばしながら上へと上げて脚に付いた白い泡を、左手で拭うようにそっと拭き取りながら手の平に拭き取った泡を乗せる。

シャイナ「安い民宿の癖に中々設備が充実しているな。しかもちゃんと隅々まで綺麗に掃除してあるしｗｗｗ（小説的な意味で）」

手の平に乗せた泡をシャイナは吐息で軽く吹いた後、手の平の上に乗っていた泡を数適宙へと飛ばし、半透明色の泡がプカプカと浴室にへと漂う。

大分長く五分間ぐらい泡風呂を満喫しながら納得行くまで浴室天国した後、シャイナはゆっくりと泡風呂から出る。しかし…

＜●＞＜●＞ジーッ…

テレビの画面外にある“閲覧者専用盗撮カメラ”が何処からか現れるように忍びながらソソッと移動して来て、泡で隠れて見えないシャイナの股下辺りから腹にそってゆっくりと“シャイナに気づかれないように動かし”、あと少しで泡で隠れていない“素の胸下”まで映した…が…

シャイナ「はぃ、残念♪撮影は此処ま…盗撮は犯罪じゃぁぁぁぁオラァァァァ！！！！ｏ（＃＃＾ω＾＃＃）〇」

バキッとシャイナは忍んでいたハズの“閲覧者用カメラ”に瞬時に気付いて、両眼を車のハイライトのようにすっごい眩しいぐらいに強く出した後、右腕を真っ直ぐ伸ばし“盗撮カメラ”を“粉々に大破させる”。

シャイナ「フッ…私を盗撮しようなんざ１００万年早いわ。出直してくるんだＮＥ。」

シャイナは大破した盗撮カメラを見下すように何度も右人差し指を指した後、浴室の端に掛けてあったバスタオルを手にとって身体に巻きながら浴室を後にする。

シャイナはバスタオルを全身に拭き髪をドライヤーで乾かして水気をちゃんと拭き取った後、上半身に薄い黒のＴシャツと黒の薄いズボンを履いて脱衣場から出てくる。

シャイナ「おまたー！エツィオ！！就寝して…ありっ？？（・・）」

シャイナはテポテポと歩みながら寝室へと入った時、寝室に待機していたハズのエツィオの姿が無くて、シャイナはきょとんとしながら寝室内にある大型ベッドの回りを一周する。

エツィオと一緒に寝るハズのベッドを何度も周回しながら顔を右往左往に動かした後、風が入ってくる感覚を覚えてシャイナは視点を窓に向ける。

シャイナ「こんなちっちゃな国内で、夜の散歩するのエツィオ？ｗｗ」

寝室内にある二つ窓の内の一つがガラッと完全に開けられており、両端にあるカーテンが風に漂うのを見てシャイナは苦笑いしながら軽く笑い声を上げる。

シャイナ「まっ、直ぐに戻って来ると思うし…“明かりでも点けておくか”！」

シャイナは薄暗いオレンジ色のランプの端に付けられていた紐を引っ張って、ピカッと寝室内を白く染め上げるように明るくした後、シャイナは窓際にあるカーテンを紐にくくりつけて爛れを止める。

そして窓を開け明かりを点けたままシャイナはベッド脇にあるソファーに座り、片足を組ながらユラユラと身体を軽く横に揺れさせてエツィオの散歩帰りを待つ。

が…

？「シュフー…」

？「ゴ…ゴゴ……」

シャイナが泊まる民宿の地上には電気の灯りに集まる人らしき型を取った異形達が集まり、シャイナが知らない間にも徐々に異形の者達が光に吊られて数を増やしていった。

第百十二曲　●ＤＳＡＴに出てくる“アレ”と似てますが、攻めは一人だけでＯＫ

―夜　フランス　オルレアン観光客用民宿館　入り口付近―

？「フシュー…シュー…」

？「ギ…ギギギ……」

ペタペタと素足で歩きながらシャイナが泊まる一室の部屋から出る一点に向けて、おぼつかない足取りで徐々に数を増やしながら近付いて来る。

そして一点の光が開けられていた窓に漏れ出るように照らし、光が当たった人の型を取った異形の存在の姿が明らかになる。

？「ギシャ…ギシャシャ！」

？「グギッ…ギギギ！」

開けられていた窓から漏れる光に映し出される異形の姿…容姿は素

っ裸な人の型を辛うじて保っていたが、頬上からの頭部が花の蕾のようにユラユラと横に揺れていて、肌は死者のようにカピカピに渇いたような灰白色肌。

表面の両目と口が無い代わりに少し開かれる蕾の花弁部分から透明の唾液と鰐の牙のようなモノを覗かせ、そこから獣のような声を小さく上げていた。

―１００年戦争の対英雄討伐兵器　オルコ　カンニーバレ―

オルコカンニーバレＡ（略してオルカン）「ギィ…ギギ！」

オルカンＢ「シャ…シャシャ！！」

バキバキッ

光に集ったオルコカンニーバレ達（略してオルカン）は背を丸く曲げ背を低くし四つ這えになった後、頭部の花らしき部分を開いて唾液をこぼしながら中の赤い中心に穴が空いた円型の外見ミミズのような舌をグッと伸ばす。

中心が空洞の舌を建物の壁を這うように上へと密かに動かし、開けられていた窓の戸に向けて軽く口付けするようにミミズのような舌

の空洞部分から獣のような眼を一つ出す。

チュッ…

グチョッと粘液だらけの目玉を窓の戸にピッタリくっ付けるように付着させゆっくりと音を立てないように窓の戸を一つ閉じ、獣の眼から映る寝室のソファーでコックリコックリと眠ってきているボケ寝シャイナの姿を“ＴＨＥ盗撮★ＲＥＣ”しながら見る。

オルカンＡ「ギヒッ！ギヒヒッ！！」

寝姿に眠りかけているシャイナの姿に“興奮している”か少し一つ眼の粘液と舌から出る唾液を、“ハァハァ（＊´ρ`＊）風”に舌から出ている眼力を“ハートマークに変えて”変態的なピンク色のモヤを大量に出して、所々舌の間や眼底からベチョベチョと地面を溶かすように落とした直後…

オルカンＡ「ヒヒッ！ギィィィ！」

オルカンＢ「クギャ！！」

カサカサカサカサカサカサカサカサ

それを合図にオルカン達は一斉に四つ這え状態のまま●キブリのように動いて、シャイナが泊まる部屋へと目指すように壁を這うように登り始める。が…

エツィオ「Ｉｌ　ｐｒｅｌｅｖａｍｅｎｔｏ　ｐｅｒｖｅｒｔ？ｖｅｎｕｔｏ　ａ　ｆａｒｅ　ｑｕｅｌｌｏ　ｃｈｅ　ｄａ　ｎｏｔｔｅ？（＾＾）ｐ（いよぉぅっ？こんな夜に何集っているんだＹＯ？）」

オルカンＡ「ギュ？」

オルカンＢ「ギ？」

民宿の壁に沿って登り始める直前上から“ＫＹ（空気読めねぇ）場違いなイタリア声”が聞こえてきて、数体のオルカン達は何事かと不審な仕草を取りながら花弁頭部を上に上げた瞬間…

エツィオ「ピピルピルピルピピルピー♪」

オルカンＡ「ギッ！」

オルカンＢ「ギャェ！！」

ドゴォォォォォォォォォンッ！！！！

私服エツィオがニコニコと笑みを出しつつも、声は容赦無い鬼畜声で両腕を斜め上に上げながら両足を綺麗に揃えて“高速垂直落下”し、壁に張り付こうとしたオルカン達数体の内一匹を花弁が陥没するぐらい頭部をめり込むように踏んづける。

ブチブチブチッ！！！！

踏みつけられたオルカンの頭部ごと固い地面にめり込むように“小規模のクレーターを作った”直後、エツィオのチート踏みつけ攻撃に耐えきれずそのまま頭部の内部から外郭の肉と血と臓物を“ぶち撒けるように生々しく肉を引き裂く音を立てながら踏殺”する。

ドシャァァァァァァ！！！！

オルカンB「ギャウ！」

オルカンC「ギィィィ！！」

一匹のオルカンを踏殺した直後にエツィオが踏みつけた箇所から“

落下による衝撃波が発生”し、肉眼で分かりやすく大気中の空気が半透明色の波紋を帳のように広げながら周囲にいたオルカン達を“一斉に吹き飛ばす”。

更に肉眼で見えるほど広がる衝撃波の帳で一部の風化した建物が脆く崩れ落ち、オルカン達は風化しきっていた建物の瓦礫で複数下敷きになり、さらなる者は衝撃波に耐え切れず“身体がバラバラに四散する”。

エツィオ「で？何しに集まったンだヨ、この花野郎？簡潔に理由を述べろYA。（、へ、）Ｉｏ ｔｉｒｏ ｖｉａ ｉｌ ｐｅｔａｌｏｓｅ？ ｕｎａ ｒａｇｉｏｎｅ ｏｔｔｕｓａ？（くだらねぇ理由だったら、お前に付いている花を毟り取るぜ？）」

エツィオはニコニコと表情をだしながらも声は相変わらず“ドS＆鬼畜行為開始前丸出し”で、両手を両腰に当てながら背を少し丸めて背をやや低くしながら、踏殺したオルカンの花頭だった部分を、右足でグリグリと踏みにじりながら衝撃波に巻き込まれなかったやや遠くにいるオルカン達に言う。

オルカンＤ「ギヒッ！」

オルカンＥ「ガォ！」

エツィオ「あん？」

バキッ！…ベキッ！！グチッグチュチュ…グチャチャ…

するとオルカン達は四つ這え状態のまま頭部の花弁を頬下からの貧弱な身体を全身に被うように動かし、肉と皮をくっ付けるような音を立てながら段々と四つ這え状態から人間の二足歩行へと変化していく。

オルカンD「ギハッ！ギハハ！！」

グチッ！グチチッ…

オルカンE「ォ…ォオ゛オ！！」

バキッ！バキバキッ…

エツィオが見たオルカン達の“激ヤバ相手用の本来の戦闘モードのような姿”…内部の貧相な身体を外郭に被う頬上頭部にあった花弁を全身に被って鎧と化した“ＡＡの八頭身●ナーのような白い外郭”に、頭部は猫耳のような物体を少し尖らせて顔表面は両眼のない菱形の牙丸出しの口が開かれる。この後…

ジャキンッ！

人差し指と親指の間から鋭い刀のような刃が手先から肱あたりまで伸びるように飛び出して、表面の菱形の口も牙を見せながらモゴモゴと口元から出る唾液と共に軽く波打つように早く動かす。

オルカンD「ギゴッ！ゴゴゴッ！！」

オルカンE「ガ！ガガガガ！！」

エツィオ「たくっ…お前らも列車の時の焼きそば野郎（第九十一～九十五曲参照）と同じぐらいに“まともに喋れねぇ”のかｗｗｗ」

かぁー（ｆ、；）と左手を額に当てながらめんどくせぇの表情でも出しているかのように、わざとらしい呆れ顔を出しながらやや両腕をプラプラと広げ首を何度も横に振りながら両肩の骨をポキポキと鳴らした後…

エツィオ「まっ、理由なんざいらねぇな。つーことで、さっさと殺ろうＺＥ？」

―Ｇｕｓｔｏ ｄｉ ｐｒｅｌｅｖａｍｅｎｔｏ！―

第百十三曲　八頭身●ナーと踊ろう！（夜間限定）

―夜　フランス　オルレアン観光客用民宿館　入り口付近―

オルカンD「ギハッ！」

オルカンE「ガォ！！」

オルカン達は走り幅跳びのように勢い良く二足歩行で走り出して、軽く飛翔しながら飛び出した刃の腕をエツィオの真正面・タイミングを計って頭部に向けて真っ直ぐに伸ばす。

エツィオ「へっ！」

エツィオは瞬時に真っ直ぐに伸ばしてきたオルカ…一否八頭身●ナー擬きの突き攻撃を、身体を横に反らして回避する。

さらに二体目のタイミングを計っていた頭部刺し攻撃を“すでに分かっていた”ように、一体目の攻撃を横に避けながら頭を少し下げて、空振った●ナー擬きの飛び出し刃攻撃避けながら頭部の髪を“

一本すら斬られず”完璧回避した直後…

エツィオ「アサシン…パァァァァァァァァンチ！！」

ズドォッ！とエツィオの身体を真っ直ぐに過ぎていく前に、エツィオは二体の●ナー擬きの開かれていた菱形口に両腕を横に伸ばし、“素手のまま口から頭部裏まで噴き出す血と肉と共に突き破る”。

エツィオ「Ｓｖａｎｉｓｃａ！！」

オルカンＦ「ギャ！」

オルカンＧ「ギュッ！！」

ドカッとエツィオは素手で突き殺した死骸●ナー擬きの身体を、どんどん向かって来る●ナー擬き達に向けて突き刺した死骸を“ブーメランのように軽々と投げ飛ばし”、数体が投げ飛ばされた死骸の身体に当たって無差別に周辺にいた仲間達を巻き込みながら他の建物の壁へと激突させる。

エツィオ「Ｉｏ　ｒｏｍｐｏ，　ｅ　ｓｉａ　ｃｏｓｐａｒｓｏ！」

その後エツィオは猛ダッシュしながら口笛を機嫌良く吹いて、向かって来る八頭身●ナー擬き達に向けて身体を捻らせながら足を一蹴させる。その直後…

ゴォォッ！！

一蹴した蹴りで肉眼で見える程の“蹴りの風圧による帳”が複数発生し、蹴りの風圧でエツィオよりも離れている位置にいても“身体がくの字に曲がって内部の骨がゴキリと折れる”音を立てながら帳の範囲内にいた全ての八頭身●ナー擬き達がキーンと一瞬の音速の音が複数の断末魔と共に“遥か後方へ消えていった”。

オルカンH「ギヒッ！」

オルカンI「ガァッ！！」

エツィオ「ほぉ。（・Σ・）」

バキバキッとエツィオは何かが折れる音が聞こえて顔だけ後ろに振り向いた直後、複数の八頭身●ナー達が近くにあった電灯に昇って集団で力任せに電灯を“根からボキリと折れさせて”、さらに根元の電灯を複数の八頭身●ナー達が交互に持ちながらエツィオに向けて電灯を狂い無く振り下ろす。

エツィオ「Anche se le parole non possono parlare direttamente, l'intelligenza della testa? la stessa come l'essere umano che divenne un adulto（口はアレだが、知能は人間と同じかｗｗｗ）」

エツィオは倒れてくる電灯を軽く身体を捻らせながら横ステップだけで回避し、体勢が崩れた所を狙って電灯の上に乗っていた八頭身●ナー達が高く飛翔しながら右腕を軽く引っ込めるように上へと上げて追撃を仕掛ける。

オルカンH「ギゥッ!!」

オルカンI「ガァッ!!」

エツィオ「おっと。」

ガガガガガガガガ!!!!

エツィオは身体を横に浮かせて左手を地面に着きながら何度も側転し、次々と八頭身●ナー達の飛翔刺し攻撃を避けながらエツィオが側転した後の位置に、ブスッと八頭身●ナー達の矢みたいに次々と

地面へと落下しながら突き刺さる。

オルカンJ「ギュィ！！」

オルカンK「シャァ！！」

エツィオ「！」

“必ず避けられることを前提としていた”のか他の八頭身●ナー達はエツィオの側転移動を追うように周囲の建物の壁を“重力とか関係なく普通に走りながら”、何度も側転するエツィオを思いっきり全力で追い越した後…

オルカンJ&K「「シャァァァァァァッ！！」」

壁を走っていた八頭身モナー達が一斉に壁にヒビが出来るぐらいに蹴って、いまだに側転している無防備なエツィオに向けて飛翔しながら右腕の飛び出し刃をまっすぐに伸ばしながら弾丸如く突撃していく。が…

エツィオ「良い連携だ。囮役と本命役がいてこそ戦況を有利に導く…だがそれは相手が“並の人間相手”ならばの話だ。」

オルカンJ&K「「！！？！？！」」

不安定な体勢だったのに突如エツィオの身体が宙でクルッと綺麗に“やや垂直体勢”で右足を左足に乗せ“空気椅子を取る”ような形を取りながら、弾丸のように背後から突撃してくる八頭身●ナー達に向けて笑顔満開に表情を出した直後…

エツィオ「俺流チート奥義…“不動●塵爆”！！！！」

ズドォォォォォォォォォォォォン！！！！

真正面から突撃してくる八頭身●ナー一体の腹に向けて右腕をめり込むように当てた瞬間、真正面から突撃した八頭身●ナーの背中から“全ての血と臓器（骨も含めて）が突き破るように出てくる”。それだけでなく…

ドキャァァァッ！！！！

オルカンK「ヒギャァ！」

オルカンN「ギュッ！！」

オルカンＭ「ガ…ガガ…」

エツィオ流“不動●塵爆”を喰らった一体の八頭身●ナーの周辺にいた仲間まで“一体目の爆砕死と同様に巻き込まれて”、“次々と背中から血しぶきと共に内部の臓器と骨まで勢い良く吹き出し”、段々と変哲もない地面を鮮血の色へと染めていく。

エツィオ「？　ｕｎａ　ｃｏｓａ　ｄｅｌｕｄｅｎｔｅ…（あっけねぇな…）」

ドサドサと背中から内部破裂した八頭身●ナー達の死骸が折り重なるように倒れていく姿を、エツィオは皮肉の表情を出しながら死臭漂う大通りを少し嗅いだ後、まだ残っている八頭身●ナー達に向けて走り出す。

ーなお不動●塵爆のネタ業を知っている方は分かる通り内部の組織を全てｒｙ…ネタが解らない人はＰＣ又モバイル辞典で“史上最強の弟子●ンイチの技一覧●ｉｋｉを参考にしてねっ♪　Ｂｙ作者ー

エツィオ「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラァァァァ！！！！」

ドドドドドドドドドドドドドド

エツィオはまだ残っている八頭身●ナーの内一体一体に向けて走りながら右手刀・左ブローを真っ直ぐに伸ばし又は思いっきり殴り、確実に人間?の急所の部分である“心臓”“頚動脈”“顎下”“鳩尾”“金的”等にむけて様々八頭身●ナー達の身体を“背中裏まで突き破り”ながら確実に“殴殺”していく。

オルカンX「ガァ！」

オルカンY「ゴァァァァ！！」

オルカンZ「キシャァァァ！！」

“素手（ステゴロ）だけで八頭身●ナー達を半分以下まで減らした”が相手は諦めが悪いらしく、まだ生き残っていた八頭身●ナー達は再度エツィオの周囲を包囲するように囲んで一斉に飛び掛る。

エツィオ「？　ｌｏｔｔａｎｄｏ　ｉｎｕｔｉｌｅ…（無駄さ…）…さて、そろそろと…」

再包囲し再び決死の思いで飛び掛ってくる八頭身●ナー達を見てエツィオはふぅと軽くため息をついて、一瞬必死に倒そうとする八頭身●ナー達の行動を逸らしながら軽蔑した後…

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ…

両腕をクロスさせ少しづつ身を屈めていった時、全身体に青いラインが至る所の身体に走りながら身に覆う青白い光が全体を限界まで覆い尽くした時…

エツィオ『Ｉｌ　ｇｉｏｃｏ　ｉｎｄｅｇｎｏ　ｇｉ？　？　ｌａ　ｆｉｎｅ！』

ドッと二重声と共に身体を“本来の姿である魔神化（第六十五曲参照）させ”両腕を広げながら天を仰ぐような姿勢を取りながら身を覆っていた青白い光…“エツィオの内部に溜まっていた極光魔力の気流”を“嵐に変化”させ、青白い光が一気に今いる都市全体まで広がる。

シュウウウウウ…

飛び掛ろうとした全ての八頭身●ナー達がエツィオの身体を覆っていた極光魔力の嵐を受けた直後、悲鳴さえ上げられないまま“全身が蒸発していく”ようにエツィオに害なす全ての“敵のみ”が消えていった。

第百十四曲　世界一ウザい迷惑親子とイケメン２８００歳以上の主人公

―夜　フランス　オルレアン大通り―

エツィオ『あ〜ぁ、終わった終わった♪やっと静かになれるぜぇ。（´ε`）』

エツィオは魔神化したまま口を大きく開けて欠伸をし眠たい表情を出しながら、手足をグイグイと伸ばして背中から出ている長い尾を横に軽くプリプリしながらストレッチをする。

戦闘後の周辺にはエツィオの素手（ステゴロ）だけで“完全崩壊した”建物の瓦礫と、地面は八頭身●ナー達の原型を留めていない死体溢れる“阿鼻叫喚な世界”へとなっていた。

エツィオ『ふぁぁぁぁ…思いっきり暴れたから眠くなっチャッタ♪早くシャイナがいる宿へ戻ろｗｗｗ』

ある程度エツィオは先程の戦闘は“夜間の運動”であってあんまり味気が無かったか“ツマンネッ（´Д`）”の表情を出した後、左親指の骨の音を軽く立てて全身に青白い光が迸った直後、元の私服

姿を着た人間体へと戻る。

エツィオ「さて、これからが俺にとっての“夜間限定パラダァィスタイム”ＤＡ♪まずシャイナが泊まる宿に戻ったらぁ「何処に行ったと思ったら、此処にいたの悦男!!」おっ！（、・ω・′）」

エツィオはいまだに地面に転がっている死体達を軽蔑しながら両手を下半身のポケットの中に入れて民宿へと戻ろうとした時、背後から聞き慣れた愛しい声がエツィオに向けて聞こえてくる。

エツィオ「おっと♪こんな修羅場に一人で御迎えねんっ（＊′ε、＊）」

シャイナ「だぁぁぁぁって…あんな“デカイ音”だと寝相の悪いアタシでも目が醒めるわぃｗｗｗで、気になって窓から覗いたらさぁｗｗｗ」

背後からテポテポと雛歩調で歩いてくるご機嫌顔のシャイナがいて、口調はため口を吐きながらも笑っているかのようにエツィオの元へと歩いてくる。

エツィオ「悪りぃ悪りぃ♪ちょこっとした“体操”でさぁｗｗｗそれに勝手に付き合った変な奴らがなぁ…」

シャイナ「まぁ、それは置いといて、丁度静かになった所だし今此処で…」

エツィオ「ウホッ！Σ（＊・・＊）」

突如シャイナが服を脱ぎ始めパサッと内部の胸や臍チラ等のふつくしい素肌をさらけ出して、エツィオはシャイナの裸姿を見てニヤケ顔になりながら両頬を赤くし“エロゲー風の変態おやじ顔”を出す。

シャイナ「もう我慢出来ないのぉぉぉぉ。早く“チュッチュッ”しよーよぉ～（＊´ε、＊）」

ペタンッと両足を折って背中を少し後ろに倒しながら左腕を前に伸ばし、左手首を何度も後ろへ下げながら“R指定お誘い”仕草を取る。

エツィオ「ウホホォォオ…これはなんと言うエロプレイ前のお誘いシーンｗｗｗ俺、ハァハァしてきたＺＯ♪（＊´ρ、＊）」

エツィオは相変わらず変態顔を出しながら口元からジュルッと少量涎を垂らして、エロス誘いポーズを取るシャイナに向けて両腕を前に出しながらシャイナへと向かっていく。

エツィオ「シャイナぁぁぁぁぁぁぁぁぁ（＊´Д`＊）」

シャイナ「エチュィオォオオォオオオォオオォオン（＊´ε`＊）」

シャラァァァン

シャイナはお色気丸出しのエロポーズをしながらエツィオの飛び込み待ちをし、エツィオは身体を何度も一回転させながら何処からの“変な効果音”と共にフィギュアスケート選手のようにシャイナへと滑っていく。

後少しでシャイナとエツィオによる“R指定ノクターン行き”へと突入し、イチャコラシーンがフリーダムに振る舞う…

ハズだった…

エツィオ「メリャァァァァァァァァァ！！」

シャイナ「え゛…」

ドスッ！

素っ裸シャイナにあと少しでエツィオの身体が触れる数秒前、突如シャイナの眉間に緑色の光を放つ蜂みたいな物体が、眉間ごと頭部裏まで突き破って後頭部から血を勢い良く噴き出す。

シャイナ「な…何故…」

エツィオ「…」

頭部を突き破られたシャイナは身体をくの字に折るように仰向けになりながら倒れ、頭部裏だけでなく両眼からもドクドクと赤い血を染み出すように出した途端…

エツィオ「こんな下らねぇ“三流芝居”なんかに魔神(オレ)が易々と騙されると思うのか？クソ野郎…」

シャイナの顔が段々と砂のようにサラサラと崩れ落ち、内部から本来の醜い顔をした本来の“黒鉛筆の中級悪魔兵士(ネロマテ)”の素顔がさらけ出す。

どうやらエツィオはの偽者(シャイナ)に変身した中級悪魔を“小説冒頭に出てきたシャイナを見て直ぐに見破っていた”ようで、シャイナに抱かれる数秒前に右手に生成した風魔両剣(ヴェルズ)の魔力を引き出し、緑色の光

を放つ蜂を“投げナイフ”のように投擲し眉間へと一発仕留めたようだ。

エツィオ「俺が知るシャイナはこんなモンじゃねぇよ…シャイナは…シャイナはな…」

エツィオは数秒両眼を閉じながら数週間前のスペインでの二人デートの際悲しい表情を出すシャイナを思いだし、実際シャイナの精神の中に入って過去のノードに映るシャイナの身体的執行による悲劇を再度脳裏に再生させながらゆっくりと瞳を開ける。（第五十七曲参照）

エツィオ「過去に身体な屈辱の痛手を負って、末長く性的行為を恐れ悲しみを散々と受けていた。それは、俺にとって一番…！！」

エツィオはキッと眼を険しくさせて真面目顔になった後、顔だけを上に上げて両拳を強く丸めながら高台にいる“人物”に視線を向けて強気に言う。

エツィオ「一生守るべき“愛する人”だ！！わかったか…このクソ野郎！！」

ギンッ！！

？「ヒィッ！！…ず…随分と威勢の良い声をだ…だだ…出しやがって！！」

高台に立ちながら眠っている“本物シャイナ”を抱き抱えながら、ガタガタと恐怖で黄金の鷹の眼を出すエツィオを見て全身を震えたださ、声が所々“吃音症”になってきているひ弱な電柱体型の人物…姿は西洋風の貴族が羽織る黒い衣装に、髪型はコ●リコの●中のような“激ダサ顔”と羽織る服が全然似合っていない“ミスマッチング”な場違いの腰抜け悪魔。

？「くぅぅぅぅ！！あと少しで穴蔵クソ魔神を、俺の下僕達の力で引き裂くことが出来たのに…クソッ！！！！」

エツィオ「おやおや、良く見たら“ヴィエリ”じゃねぇか。こんな下らねぇ“三流戦法”を取るのも相変わらず８００年前以降と変わらねぇな。あとそれと…」

エツィオは瞬時に左手からヴェルズの魔力の一部である緑色の光を放つ…略して緑色の投げナイフを振り向きさえせず背後に向けて投擲した瞬間…

？「ぐわぁっ！！？！」

ドスッと肉体に鈍器が刺される音が鳴って地面に倒れる音と共に、段々と透明だった姿が明らかになる。

ヴィエリ「親父!?」

?「く…クソッ!!」

容姿はヴィエリと似ていたが髪はヴィエリよりも長く、口元の回りに鬚が生えていて、左肩に茶色いマントを羽織う。

ヨロッと身体を震えただせながら立ち上がり、左二の腕部分から小さな穴が開いて血を一直線に地面へと滴り落としながら、憎むべき裏切り悪魔(エッヴィオ)を睨み付けていた。

エッヴィオ「おっと、“フランチェスコ”までいるじゃねぇか。親子揃って魔神(オレ)をフルボッコ…なーんて、考えてねぇよなぁ??」

―上級テンプル騎士悪魔　ヴィエリ　デ　パッツィ&フランチェスコ　デ　パッツィ―

フランチェスコ「このクソ餓鬼が…パッツィ家の首領の“俺”に手

傷を負わせやがって！！」

エツィオ「あんだよ？傷一つぐらいキーキー言うんじゃねぇよ“坊や”。あとそれと俺は“餓鬼じゃねぇ”テメェよりも“歳上”だぞ？（、ε、）」

エツィオは左二の腕のから血を流し右手で抑えている憤怒顔のフランチェスコを見て、呆れた表情を出しながらわざとらしい軽いお手上げ仕草をする。

ヴィエリ「チィィィィ！！クソ生意気な“若作りジジイ”がっ！！高貴なる親父に傷を付けやがって！！！！！あー！！！！！ムカつくぅうううううううう！！！！！」

エツィオ「あん？お前ぇもかよ、ヴィエリｗｗｗ親子揃って性格も似ているなぁｗｗｗ」

高台の上でシャイナを抱き抱えたまま地団駄をしてキレている表情を出すヴィエリを見て、エツィオはハァ…とため息を付き左手を額に当てながら、この先を思いやられるような予感を感じ取っていた。

第百十五曲　世界一ウザい親子との長ぁぁぁぁい戦い

―夜　フランス　オルレアン大通り―

フランチェスコ「このクソ生意気な“小僧”がっ!!今の状況を見て何とも思わねぇのか!?」

ドカンッとフランチェスコは八つ当たりに近くにあった建物の壁を殴って少し陥没させた後、怒りの表情を出しながら高台にいるヴィエリに向けて左人差し指を指す。

ヴィエリ「そーだ!そーだ!!“クソジジイ”!!此方には人質を取っているんだ!!それを何とも思っていないテメェが可笑しいぜ!!!!!」

ヴィエリは眠っているシャイナを抱き抱え背後に黒鉛筆達（ネロズマティエーター）を率いながら、高台の下にいるエツィオに向けて軽い挑発をする。

親も共にいるためかヴィエリはやや怒りつつも、人質を取っているため有利の状況を持っていることで、余裕を思わせるような笑みが表に出ていた。

エツィオ「“ジジイジジイ”とチェルノボグと同じように、うるせぇ奴だなぁｗｗｗ俺がこの土地の“夜間限定ヒッキー兵器”と戦っている最中、こっそりと眠っていたシャイナを易々と拐ったんだろ？そこまでは良いとして…」

ギンッとエツィオは覇気丸出しの黄金の鷹の眼を出しながら、高台にいるヴィエリに向けて数秒睨み付けて、抱き抱えられているシャイナの状態をチェックする。

エツィオ「（気を失っているだけか…良かった。）ここに住まう住民の生気が“全く感じない”んだが？コイツは…」

エツィオは鷹眼（イーグルアイ）に映る真実の情報を見ながら、今いる場所全体に張られている“地球に無い異質な力”と、国に住まう市民・潜入していた教会&軍の全生気が“死んだように抜けている”のを見て、エツィオはやや眉を下に下げながら真剣顔でヴィエリとフランチェスコに言う。

エツィオ「この国全体に“人間の生気を奪う生気吸収創魔結界”を“俺とシャイナが来る事前”に張ったんだろ？」

ヴィエリ&フランチェスコ「「！！」」

エツィオは二人の表情が一瞬少し変わったのを見て、軽くため息を付きながら更に続けて両眼に映る真実の情報を二人に言う。

エツィオ「やっぱりな…俺とシャイナがこの国に入る数日前に“魔帝の命”で事前に“国自体を二人の上級悪魔と中級含めて下級悪魔達が、潜伏していた教会及び軍も全市民もろとも全て壊滅させる”。此処までは合っているだろ？」

ヴィエリ「ぐっ！…こ…このっ…！！」

フランチェスコ「き…きききき……！！！！」

ザワッと余裕溢れるエツィオが見抜かれたように言われる度に、ヴィエリとフランチェスコの至るところの身体から紫の線が走って、苛立ちを腹の底から貯まっていく中、徐々に姿が禍々しく変わっていく。

エツィオ「次、現世の境界線魔力に耐えきず魔力を全て消費し餓死した下級悪魔を補充するため、人間の死骸を使った寄り身の作成。あとは根気よく“俺達にバレないように二人の魔力で生きていたこの国の、“通常風景を保つ襲われる前の過去世界を再現”しながら待ち伏せして、準備しだい俺らボッコ…ははっ！なんと言う三流計画ｗｗｗ」

エツィオはわざとらしく額に右手を当てて顔を上に上げながら高笑いし、二人に向けて馬鹿にするような仕草をする。

フランチェスコ「ぐぬぅっ…やはり魔界の中で、我が敬愛する魔帝よりも凌ぎ“あの方”も恐れている“史上最強の悪魔”か…見掛けに寄らず恐ろしい奴め！！」

エツィオ「今更言うかよ、ボケ茄子がｗｗｗ“ハナッからだよ”。こんな馬鹿馬鹿しい阿呆結界を張った、お前らの魔気がプンプンと分かりやすく漂ってきたのさ。」

エツィオがこの国に入る自体前に“全てを感じ取っていた”らしく、こんな馬鹿馬鹿しい結界を張った輩は誰なのかエツィオはシャイナには言わないで興味津々の表情を裏に出しながら、二人の張る偽りの結界内部へと入っていったのだ。

そしてシャイナが民宿でシャワー浴している最中にエツィオは再度結界内部を確認するため窓から外に出て、民宿の屋上で表向きは風に当たりながらも裏の本目的は“結界を張った輩を探し出す”ようにシャイナがいる場所の見張りも兼ねて張本人を見つけ出す裏調査をしていたが…

エツィオ「まさか、英雄ジャンヌ・ダルクが決死の思いで封印した“この国に封印されていた最悪兵器”まで掘り起こすとはなｗｗｗ

あとそれと…」

フランチェスコ「!?」

ドンッとフランチェスコの前にいたエツィオが一瞬の内に“消えて”、残像と気配すら“無い”まま完全にエツィオの気配が消える。
そして二人の変身しかけている悪魔は…

エツィオ「まず先にシャイナを放してもらおうか。“クソ餓鬼ヴィエリ君”？（＃＃＾＾＃＃）p」

ヴィエリ「え゛？」

いつの間にかヴィエリの前に遥か下にいたエツィオが瞬間移動したかのように居て、ニコニコ笑みを出しながらも右手にはエツィオの身体から出した風魔両剣（ヴェルズ）の後剣先が、ヴィエリの二の腕へとザクッと腕を突き破るように斬り込む。

バキバキバキッ!!!!

そしてエツィオが風魔両剣をカーテンを閉めるように動かした瞬間、一瞬の内にシャイナを抱いていた両二の腕が綺麗に切断され更に細かく分割されていった。

ヴィエリ「ぎゃ…ぎゃあああああああああ！！！！！」

ブシィ～♪と切断面から血を大きく噴き出して後ろへと仰け反り悲鳴を上げながら、抱いていた腕ごとシャイナを引き離す。

シャイナ「う〝ー……ん…（－－；）」

エツィオ「ととっ！…」

エツィオはそのまま自分に向かって倒れてくるシャイナを左腕で胸元に寄せた後、左肩と右腰に付いていたヴィエリの腕を払うように振り落とす。

エツィオは胸元に引き寄せながら右腕に持っていた暗殺魔具を背中に風魔両剣を携え、両腕でしっかりとシャイナの身体をお姫様抱っこした後、心配するような表情を出して彼女の状態を気遣う。しかし…

シャイナ「ふ…にゅ……ンン〝…スピー♪」

エツィオ「ハハッ♪シャイナ…こんな状況になっているのに、その

まま“朝までグッナィ”かwwwこりゃぁ、たまげたもんだwww」

エツィオが封印が解かれた兵器と戦っている間、シャイナは“擬音語だらけの騒音”と“いつの間にかパッツィ一族に身体ごと拉致られている”という散々な出来事が起こったというのに…

―“眉一つ動かさずそのまま幸せな表情を出しながら爆睡”しているシャイナを見て、エツィオは思わずアハハと苦情してしまった。―

ヴィエリ「痛ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇよぉぉおおおおお！！！！！」

そんな二人を除いてヴィエリはそのまま高台から落ち、地表にいるフランチェスコの近くまで背中から落下した後、バタバタと本気で痛がり涙も出ながら何度も身体を横にもがくように動かす。

フランチェスコ「さっさと悪魔化（ディアーヴォロ）して再生しろ、馬鹿息子がぁっ！！いちいちこのような醜態を我らの魔帝に見られたら…」

メキッといまだに転がっているヴィエリにフランチェスコは叱咤しながら、徐々に伸びる紫の線と共に両腕を伸ばし顔を歪ませて口内に伸びる人間の歯から鋭い悪魔の牙へと変わる。

やがてフランチェスコの腕・顔に狼のような黒い毛がモサッと生えて、爪先が段々と鋭くなり人間体だった普通の身長が大きく伸びて体型が変化する。そして…

フランチェスコ『我ら魔帝の下で慕う“テンプル騎士団”の名が汚れるだけぞ！！』

ドンッとフランチェスコの声が二重に重なった時、完全にフランチェスコは悪魔化し黒い毛で被われた巨体な身体を持つ人狼（ウェアウルフ）を思わせるような“本来の姿”へと変じる。

フランチェスコは悪魔化した後四つ這えになるように背を折って、手足を地に着けて歩行形態を取った後…

ダッ！

地を後ろ足で蹴り飛ばす勢いで蹴った直後、疾風如くの早さで高台にいるエツィオと気を失っ…爆睡シャイナに向けて、地上にもがいているヴィエリを残し猛スピードでかけ登り始めた。

第百十六曲　素手（ステゴロ）＋α縛りコンボキルは最強なのＤＥＡＴＨ！

―夜　フランス　オルレアン　大通りにある高台―

ガガガガガガガガガガ

手足の鋭い爪を高台の壁に向けて抉る様に突き刺し、所々爪痕を刻みながらエツィオがいる高台の頂まで四足歩行で“重力とか関係なく普通に昇り駆ける”。

―悪魔化　フランチェスコ　リカントゥロポ・ベルリッケ―

フランチェスコ『クソ生意気な小僧が…俺の馬鹿息子に何たる醜態をっ！』

エツィオ「！」

ダンッ！と高台の頂まであと数メートル辺りまで駆け昇った直後、悪魔化したフランチェスコは後ろ足を力づくで蹴って天へと飛翔しながらエツィオがいる高台の頂を越して両腕を水平に伸ばす。

そして両腕を交互に交差するように腕を動かした途端、両手の爪先から紫の光が迸って禍々しく二の腕辺りまで覆い尽くした後…

フランチェスコ『我がパッツィ家の一族の恥だ！史上最悪という意味での恥いいいいいいいい！！』

シャァァァァァァッ！！！！

紫色を纏った両腕を交差するように前へと振りかざした時、爪先から“紫色の線が幾つも不規則に浮かぶように現れて”、“Ａ●ＭＳに出てくる魔剣アン●ラー”もどきの攻撃を高台の頂にいるエツィオに向けて“禍々しい飛ぶ断裂斬”を仕掛ける。

エツィオ「おーおーｗｗｗ随分とご立腹なこったぁｗｗｗ」

エツィオはキレ状態の狼悪魔（フランチェスコ）を見て軽く苦笑いした後、シャイナを抱かかえたまま左足を蹴って背中から落ち優しい手つきでシャイナを身体の中へと入れる。

背中から地表へと落ちた数秒後に今いた高台の頂にフランチェスコが放った断裂斬が刻んだ瞬間、線と線が入ったところだけ綺麗に切れて更に続く後方からの線により細かく分割されていった。

フランチェスコ『ちぃぃぃぃぃぃぃぃっ！！！！軽々と避けやがったな、クソがっ！！！！』

エツィオ「そりゃ、避けなきゃ“連載オワタ＼（＾ｏ＾）／”になるだろｗｗｗ折角の連載を此処で終わらせちゃぁ、作者の“今までの努力が無駄になる”わぃｗｗｗ」

背中から地上へと落下していく中エツィオはフランチェスコの発言に突っ込みつつ、一度後方宙返りして身体を垂直にさせた後頂から落下してくる複数の破片に向けて…

エツィオ「ワーン！ツー！！スリーィ！！！ＤＥ…」

バシッ♪とエツィオが宙で“Ｙ～♪Ｍ・Ｃ・Ａ★”の身体文字を順に超ノリ☆ノリの動作で両手両足を動かした直後、エツィオの背中からタイミングに合わせて緑色の光を放つ蜂型の“投げナイフ”が複数現れて、頂上から落下してくる破片に向けて左人差し指を指す。そして…

エツィオ「Ｕｎ　ｇｅｔｔｏ！」

バシュッ！とエツィオの掛け声と共に背中から現れていた緑色の光

を放つ蜂型の“投げナイフ”が一斉に飛んで行き、次々と落下してくる破片を“跡形もなく全部粉砕”しながら追撃を仕掛けるフランチェスコに向けて一斉に向かっていく。

フランチェスコ『チィッ！！！！』

ドドドドドドド！！！！！

フランチェスコは自分に向かってくるエツィオの“投げナイフ”に向けて再度右腕に紫色を纏った魔力を集結させた後、舌打ちをしながら右腕を思いっきり前へと振りかざして相殺狙いに飛ぶ断裂斬を仕掛けたが…

バキィィィィィィィ！！！！！

フランチェスコ『！？』

自分が放った飛ぶ断裂斬がエツィオの放つ投げナイフで“粉々に破壊”され、紫色の線のがガラスの破片のように飛び散りながら狂い無くフランチェスコの身体に向けて襲い掛かる。

フランチェスコ『ぐおぁぁぁぁぁぁぁ！？』

フランチェスコは瞬時にに両腕をクロスするように顔を覆った瞬間、ズドドッ！とエツィオの放った投げナイフが悪魔化した本来のフランチェスコに大脚部・両肩・両腸等に“巨大機関砲でもやられたような大きな穴”が開いていき、血さえ噴出す時間さえ与えないままどんどんフランチェスコの身体の肉と毛を“消し飛ばしていく”。

エツィオ「Ａｃｃｏｍｏｄｉ　ｓｏｌｏ　ｄｉｖｅｎｕｔｏ　ｌａ　ｃａｒｎｅ　ｍａｃｉｎａｔａ（そんまま、挽き肉になっちまえｗｗｗ）」

どんどんフランチェスコの身体がエツィオの台詞どおりに“挽き肉”になっていく中、再度宙返りしながらきちんと地上に足を綺麗につけた直後、破壊音と共に地面が陥没して大きなクレーターが出来る。

ネロマテＡ【ギャァ！！】

ネロマテＢ【ギィ！！】

地上に待機し追撃しようとしていたネロマテ達もエツィオの落下の衝撃に巻き込まれて、一部のネロマテは衝撃に耐え切れず身体が四散し、他のネロマテ達も一部四肢が欠損しながら建物の壁や電柱に無様な格好でぶつかって、ガス状の身体から出る黒い液体のようなものをどんどんとこびりつけていく。

ヴィエリ『親父！くそぉおおおお…このクソ生意気な“ジジイ”めぇ！！！！！』

エツィオ「あん！？」

またしても“ジジイ”という単語を聞いたエツィオはやや半ギレの表情を出して、モウモウと魔神（エツィオ）による落下の衝撃によって出来た噴煙がまだ宙に舞う中、ジジイ発言の主に向けて顔を向ける。

ヴィエリ『親父を…俺の親父をよくもぉおおおおおおおおお！！！！』

姿は昆虫の蝉を思わせるような外見に背中からは蝉の翼が大きく生えて、両腕と両足部分が蟷螂のように細長く前腕部分から鎌状になった紫の光の刃が付いた“気色悪い二重声の蝉人悪魔”がそこにいた。

―悪魔化　ヴィエリ　ディアヴォリーノ・バンベロットロ―

ヴィエリ『死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ねェェェェ！！！！！』

ブンブンとエツィオに向けて魔力で生成した鎌状の腕を乱暴に振り回し、エツィオだけでなく近くにいた彼の下級兵達(ネロマテ)も“斜線に入る全ての存在”を見境無く斬り捨てる。

エツィオ「だ阿呆ｗｗｗ仲魔も斬り捨ててどうすんだよｗｗｗつーか、俺も悪人戦法やっているしｗｗｗ」

エツィオは狙いがしっかり定まっていないヴィエリの攻撃に呆れながら軽やかに避けて、途中四方八方からも襲い掛かるネロマテ達を“素手で捕まえ”そのまま“盾代わり”をしながら、そのほかのネロマテ達を“片足だけで豪快に蹴り飛ばす”。

ネロマテG【ギャヒィ！】

ネロマテH【ギァ！】

前方から斬りつけるヴィエリの斬撃に耐えられなくなったネロマテを捨てつつ“また新しいネロマテを素手で捕まえて”、ホールド状態を保ちながら襲い掛かる手下達を“蹴殺”していく。

ヴィエリ『ぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！』

あらかた手下達を蹴り飛ばし（正確には蹴殺ｗｗｗ）今エツィオが掴んでいるネロマテが最後の手下であって、ヴィエリが苦し紛れに右腕を大きく振りかぶって苦笑しているエツィオに向けて振りかざしたが…

エツィオ「へっ…！どいつもこいつも鍛え足りねぇな！！」

ヴィエリ『グハァ！？！！？』

ドカッとヴィエリの顔面にエツィオが持っていたズタボロ状態のネロマテが背中からぶつかって、エツィオによって投げつけられた下級兵の身体による視界が数秒さえぎられ、身体がバンザーイするような状態になる。そして…

エツィオ「一人相手にそのザマかっ！！ヴィエリ含めてボケ茄子共ＭＥ！ヽ（ヽ Д ノ）ノ」

ゴキィィィッ！！！！

瞬時にエツィオはヴィエリの首を両手で掴んで身体をヴィエリの懐まで飛び込んだ後、ヴィエリに背を向けたまま両腕で“捻じ切る”ようにヴィエリの首の骨をヘシ折って、数秒ヴィエリと共にイナ●ウアーをする。

フランチェスコ『くぐぁぁ！！この…クソが…っ！！！！』

エツィオ「！おっと…まだ生きていたのか。ｗｗｗ」

首をへし折った絶命ヴィエリをポイッと投げ捨てた直後、地上の噴煙が止んだ後にドシャリッと生々しい音が鳴って、エツィオは視線だけで音がした方向へと向ける。

フランチェスコ『ま…まだだ！！！俺はまだ此処で…終わるわけにもいかん！！！』

所々穴だらけになったフランチェスコが土下座するような形で倒れていて、見かけはもう穴だらけの身体に数センチの皮だけでかろうじて四肢が繋がっている瀕死状態なのに、左顔半分が完全に抉り取られようが残された右顔の赤い獣の眼が見下しているエツィオに対して強い憎しみがこめた視線で言い放つ。

フランチェスコ『う…裏切りの…魔神を、この手で引き裂くま…までは…っ！！』

第百十七曲　これがとある某ゲーの“ベェィビィィ無双”である。ｗｗｗ

一夜　フランス　オルレアン　大通り一

エツィオ「そんなボロンボロンの身体で、よく言うなぁアンタ…。ｗｗｗ分かっていると思うけど、アンタの“攻撃型の身体”は防御型と逆に再生能力という概念が低い。早く再生に集中しねぇと…」

もはや脚部の腱が切れて完全に動くことすら出来ないのに、かろうじて繋がっていた腕を爪先から地面に突き立ててヨロヨロと這うように数メートル先のエツィオの元へと鈍足の速度で近寄っていく。

だが…這う度に段々と脚部から段々と細かく千切れていき、内部の腸や胃がヌメヌメとゆっくりと出ていきながら這う血痕の痕を地面に濡らしつつ“部分欠損していく”。

エツィオ「“再生そのものが一切出来なくなる”ぜ?…“狼の坊や”??」

フランチェスコ『黙れぇぇぇぃ!!!!裏切り者がぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!』

エツィオに対しての憎しみ溢れた口調が吐かれようとも、引き摺る度にフランチェスコの身体が崩壊していき、身体・臓器の一部が食い散らかしたように地面へと残されていく。

フランチェスコ『が…ガァァァァァァァァ！！！』

エツィオ「…哀れだ。“奴”に対しての忠実心が此処まで染み着くとわな。“奴”の部下に対しての扱いが今となって現れるように見えているから胸クソ悪ぃ……」

エツィオは這う度に身体が崩壊していくもがき姿のフランチェスコを見て、哀れみの視線を送りながら瀕死のフランチェスコにそっと吐く。

フランチェスコ『あ…あと少しで……奴に……奴にぃ！！』

再生出来る・出来ない辺りまで時間が刻々と迫る中、フランチェスコは残された左腕をエツィオに向けて弱々しく伸ばし、あと少しでエツィオのブーツの爪先に触れる辺りまで身体を引きずった。が…

エツィオ「せめてだ…狼の坊やに、“救いの道”ぐらい提供してやるとするか。」

フランチェスコ『がっ！？』

ドスッ！

伸ばされたフランチェスコの左腕を触れる寸前にエツィオは足で左腕を“踏み潰し”、更に踏み潰した後背中に携えていた風魔両剣を右手に持ち、両剣の後部剣先から“裏首から喉仏までザシュッと貫かせる”。

エツィオ「解放だ。“奴”に対しての戒めを解いてやるぜ。フランチェスコ…！」

右手に持つ風魔両剣に魔力を注ぎ入れた直後、数秒間武器全体に青い円形のアサシンの紋章が浮かび上がって武器が緑色の光を放ち天まで迸った後、光が止むと共に本来の巨体であるヴェルズが現れる。

ヴェルズ『お久しぶりですね、２０００年と八ヶ月間だけでしたが…』

フランチェスコ『が…ガガ……で…出来損ないの…廃棄悪魔（カスカーメ）が…貴様程度の力なんぞ…』

フランチェスコがエツィオが召喚したかつて廃棄として捨てていた出来何処無いの悪魔（ヴェルズ）を見て、軽く見下すような言動を吐き視点をヴェルズからエツィオに向けなおしてギッと睨み付ける。

ヴェルズ『いいえ、私は出来損ないじゃない。ただ…己の“最初から備えていた強大すぎる力”に脅えていただけです。だから貴方達魔族は勝手に都合よく私を棄てようとしていた…ですが…』

フランチェスコ『!?…な…何だと!??!!』

ヴェルズは死にかけている目を逸らしているフランチェスコに対しての哀れみの視線と表情を出しながら“真実”をフランチェスコに言い、フランチェスコは逆に驚くような表情を出して再度ヴェルズへと向けなおす。

ヴェルズ『私は主に対しての恩がある。今ここで恩を返しつつ…』

ヴェルズが左腕を天へと向けて掲げるように上げて、手の平から出る緑色の光がパッツィ親子の張る結界内部全体を覆い尽くした時…

―私が恐れていた“本当の力”を、主と共に御見せしましょう。―

スゥ…

頂から一筋の太陽の光が一つ差し込みその光はフランチェスコではなく、首が折れた無様死のヴィエリから先に一筋のスポットライトのように照らす。そして…

赤さん?A『ア…アア…』

赤さん?B『い…いい……』

ヴェルズが手に翳した光の中からまだ目が開かれていない“●ューピーのような人型”が現れて、一人一人“ビル三階建てぐらい身長”を持った“子供には見えない体格を持つ”。

背中から一瞬僅かに浮かび上がる緑色の電流がバチリと“天使のような翼”を作り映し、赤子のような言葉を吐きつつ次々と綺麗に首が折れたヴィエリへと着地した直後…

赤さん?A『アギッ!』

赤さん?B『ヒャヒャヒャッ!!』

ガッ!ビリビリビリバキグチャクチャグチャグチャ!!!!

口を開いて歯並びの良い人間の牙を“真正面二カメ”“側面三カメ”という順に映した直後、一斉にヴィエリを囲んでいた赤さん達が身を屈めてヴィエリの肉体を“服ごと貪るように食べ始める”。

フランチェスコ『…っ!??!?!…な…何だコレは!?…コイツは一体…』

赤さん?A『ギャギャッギャッ!』

赤さん?B『ヒヒヒヒヒ!!』

赤さん?C『クヒュヒュヒュヒュヒュ!』

フランチェスコが驚く間にもバキバキと肉と臓器を引き千切り身体の骨を砕く音を“生々しく立てながら”、とある某ゲーによる“バッドエンド”を思わせ“地獄絵図を超えた”“史上最強の鬱ゲー”の光景を、フランチェスコは目を大きく広げながら息子が喰われていく光景を目の辺りにする。

ヴェルズ『私は天をかつて支配した“天の古神”。大気をただ操るだけでなく、このような“天界にいた古の使徒達”も我が“力”として手内に収め、そして…』

フランチェスコ『ひっ！？！！！』

赤さん…否ヴェルズによる天を支配した古神に従う“使徒”が立ち上がって、口元に喰らい尽くしたヴィエリの血肉がこびりつく。

パシッと天からまたしてスポットライトのような光が喰われたヴィエリ同様フランチェスコに当てられ、赤さん達はニタリと笑いながら血まみれの口元に左手で軽く拭い取った後、古の使徒達は瀕死状態のフランチェスコへとゆっくりと歩んでいく。

ズシンッと古の使徒達が地を足に着ける度に“軽い地鳴り”が鳴って、一部建物の壁から砂が落ちながら愉快な歩調でエツィオを見た途端…

エツィオ「！」

赤さん使徒A「アブぅ♪」

赤さん使徒「ぶっぶぅっ～♪♪」

歯並びのよう歯を綺麗に見せ瞳は閉じられたまま笑みの表情を出し、

エツィオの足下にいる餌（フランチェスコ）に“早く投げ渡せ”風に腰を落とし両手を軽く何度も後ろに振る。

エツィオ「オラッ／（´∀`θ／」

フランチェスコ『ガァッ！？』

ドゲシッ★とエツィオは足元に転がるフランチェスコを穏やかな笑みを出しながら“手招きしている赤さん達へと蹴り飛ばし”、蹴られたフランチェスコは何度も横に転がりながら赤さん達の足下まで転がった直後…

ヴェルズ『この者達は“輪廻”を司る古神の使徒。数々の罪を現世で起こし、死してなお汚れることがない魂を次世代に持ち込ませぬよう、彼らは地上で汚れた魂を取り込み中で浄化することで…』

フランチェスコ『ヒギッ！？？！！！』

バキッとヴェルズが説明する間にも“輪廻”を司る使徒達はフランチェスコを“喰らっていき”、悲鳴さえ上げられないままフランチェスコはなすすべもなく喰われていく。

捕食最中、道端に落ちていたフランチェスコの欠損部分もエツィオ

が使徒達に向けて“フリスビーのように投げ渡し”一人一人がエツィオに投げられた欠損部分を“喰らいながらＮｉｃｅ★キャッチ”して“おつまみ”ごとく好き勝手に喰う。

ヴェルズ『浄化された汚れなき無垢なる魂は、再び次世代で新たなる歩みを造り出す。けど…』

エツィオ「おぃおぃ、ヴェルズｗｗｗ説明する間にもオメェが召喚した“下僕共”が、親子二人分喰っちまったＺＥｗｗｗ」

ヴェルズが召喚した使徒達による“数の暴力”でお残しすらしないまま“全て喰らい尽くし”、所々一部の使徒が腹に向けて軽く叩きながらゲップ声を出す。

そして喰らい尽くした使徒達がかつての天の古神が下に付く新たな“支配者（エツィオ）”に向けて顔を向き直し、全員がきちんと背筋を真っ直ぐに伸ばして数メートル先にいるエツィオを数秒間目を閉じながら瞬きせずに静止した後…

輪廻の使徒Ａ「バィ！」

輪廻の使徒Ｂ「うーうー♪」

全員が斜め４５。ぐらいに背を曲げて“礼儀正しくお辞儀”し、数秒間そのまま“新たなる支配者にお辞儀した”後、天から差していた光の中に向けて一人一人順に入り空へと吸い込まれるように上昇しながら消えていった。

第百十八曲　これが…史上最強の魔神を出し抜く“隠れプランB”の始まりです

―夜明け　フランス　オルレアン大通り―

ヴェルズが翳した緑色の光が止んだ後本来の空の色へと戻り、東側の水平線からオレンジ色の光が徐々に上へと伸ばす。

ヴェルズ『全く、私がエツィオさんに説明している間にも…ハァ（´、；）少しは浄化する速度を落として欲しかった…。』

エツィオ「まーまーｗｗｗそう言うなってｗｗｗオメェが召喚した古神の使徒達は“はなっから腹を空かしていた”しｗｗｗ」

ヴェルズは顔を伏せて左手を額に当てたまま窶れたように顔を横に動かし、溜め息を付きながらもエツィオはケラケラと両腕を組ながら軽く笑う。

長い（エツィオにとっては短けぇ）夜であって壮絶な（エツィオにとってはうざったい）戦闘をこなし、パッツィ家親子の策謀を完全に粉砕したチート主人公（エツィオ）一行はのんびりと朝日が昇るのを待つ。

ヴェルズ『…まぁ、いいでしょう。私にとってあの一族は目の敵にされていましたから、取り敢えず私の中に溜まっていた“鬱憤”は取り払われました。だから…』

エツィオ「あぁ。」

感謝いたしますと本来の巨体な身体を持つヴェルズが両手を口元に寄せてもじもじしながら、足下にいるエツィオを見るたびに両頬が赤みを出す。

ヴェルズ『では、次なる浄化場所へ向かいましょうエツィオさん。ですが…』

ヴェルズの身体が緑色の光を放ち徐々に身体が小さくなって下半身から武器になっていく中、顔を横に向けて隣にいるエツィオに…

ヴェルズ『まだこの地には“邪悪な魔気”が隠し潜んでいたようです。決して油断めさらぬように…』

エツィオに警告を促す発言を残した直後再度光が放って、光が止んだ後元の風魔両剣に戻り、後方刃先から地面に突き刺しながらそっと静かに立つ。

エツィオ「分かっているさ。まだあの一族の力は…」

エツィオは地面に突き刺さっていた風魔両剣を右手で引き抜いて一回転させ、軽く右肩を刃の表面で叩き肩凝りをとるような仕草を取った後…

エツィオ「Ｉｌ　ｇｉｏｃｏ　ｎｏｎ？　ａｎｃｏｒａ　ｓｕ（しつけぇぐらいに、終わっていねぇｗｗｗ）」

徐々に東から太陽の光が垂直一つまた一つと昇るように出てきた時、エツィオは険しい表情をだしながら風魔両剣を身体の中に仕舞うと共に太陽に向けて視線を送り続けた。

…

……

……

ー数時間後　観光客用民宿館　３階　Ｃー４号室ー

シャイナ「ん…」

キュッ

閉じられていた瞳に生温かい熱が当てられてシャイナはまぶたを少し動かしながら、身体を休めているシーツの一部を掴んで前へと軽く引っ張る。

やがて瞳部分だけでなく頭部の額や手にも温かみを感じ取り、シャイナは太陽の光だということを理解してすくっと両手で押さえながら半寝ぼけた視点でうつ伏せ状態から起き上がった時…

シャイナ「はひっ！？Σ（ｏДｏ；）な…何この…サイ●ントヒルみたいな侵食世界ｗｗｗ」

バッと目の前の視界に映る今まで休めていたシーツが“赤茶色”に変色しており、それだけでなく今いる寝室がシャイナの台詞通りに座っていたソファーが“ボロボロに黒ずんでいて”、壁や床と天井が“赤錆まみれ”の気色悪い世界へとなっていた。

エツィオ「おはよっ、シャイナ♪悪りぃなぁ、一日の初まりがこんな“スプラッター”になっちまってｗｗｗ」

シャイナ「あっ！エツィオ！！これは一体どうなっｔ…ブフゥッ」

シャイナの背後からケラケラと笑うエツィオの声が聞こえて、シャ

イナは今のような状態の事情を聞くべく背後にいるエツィオに向けて振り返ろうとしたが、シャイナの顔面から白い厨二病コートがバサリと軽めに叩きつけられて視界が遮られる。

エツィオ「いやぁーｗｗｗさっさと昨夜起こった事をシャイナに説明したい所だが…」

シャイナ「！」

エツィオがシャイナが羽織るアイモンの古着を顔面に向けて投げ渡し、シャイナは何事かと軽く投げつけられたコートを取った瞬間…

エツィオの背後には昨夜民宿に襲いかかろうとしていた“八頭身●ナー”の爆発したように潰れた死骸が壁に打ち付けられていて、前方にいるエツィオの右腕部分が魔神化した時の“本来の悪魔腕に変わっていて”魔神の拳に八頭身●ナーの返り血が少量こびりついていた。

シャイナの推測であるが、自分がまだ眠っている間に“夜間何かしらの騒動”をやらかして、その騒動の残党が自分を狙おうとしたが、エツィオに返り討ちにされて今のような状況になったと。しかし…

エツィオ「ｕｍｍｍ…（－－；）どーも、上手くさせてくれないらしい。」

ガシャァァァァンッ！！！！

間を入れる間もなく突然窓ガラスが割れる音が鳴って、シャイナは瞬時に割れた音へと顔を向けた途端、またしてもエツィオが潰していた八頭身●ナーのような敵が数体侵入してきた。

オルカンA「ゴハァァ…」

オルカンB「ギヒッ！ヒヒッ！！」

菱形の口元から涎を垂らしモゴモゴと口元を揺らしながら、下品めいた声が吐かれ白い身体を二足歩行から四つん這え状態にする。

エツィオ「まずはコイツらから逃げたら、じっくりと説明するぉ（＾ω＾）」

エツィオは事態を読み込めず硬直状態になっているシャイナを庇うように魔神化した右腕をベッドにいたシャイナの左腕を掴まえて身体ごと胸元へと寄せる。

シャイナはエツィオに引き寄せながらコートを羽織り、更にベッド

の下に置いてあったバッグを取って、手早く身仕度をする。

シャイナ「え…あっ！？ちょっｗｗｗい…一体どうゆうコト？？？？」

エツィオ「逃げるＺＯ★」

エツィオがそう言った途端、魔神化した右腕を前へと振りかざした瞬間…

Ａオルカン「ギャッ！！」

Ｂオルカン「ギヒィ！！！」

前方にいた数体の八頭身●ナーが振りかざされた“拳圧で吹き飛び”、グシャリと背中から壁にぶつかってエツィオの拳圧に耐えきれずそのまま“内部破裂した”かのように“ぺしゃんこ死”になる。

そしてエツィオは“轢殺”した八頭身●ナーを一瞬見た後、シャイナを左腕で担ぐように抱いたまま走る。

ドドドドッ！！！！

オルカンC「ガヒッ！！」

オルカンD「ギァッ！！」

途中側面にいた他の敵をエツィオの走りの風圧で“吹き飛ばし”、吹き飛ばされたオルカン達が叫び声を上げ無様に宙を舞う中、エツィオは割られた窓に向けて身を投げ出した。

第百十九曲　ま　た　し　て　も　偽りの黒歴史が展開するぉ（、ε、）

―数分後　フランス　オルレアンとある敷地内―

シャイナ「…取り敢えず、状況は分かったけど…」

襲撃してきた敵を一時撃退し民宿から逃げ出したシャイナとエツィオは、途中敵に襲われ撃退しながらもエツィオの話を聞いて先程の状況を理解し、表情を曇らせながら両手を組んで顎辺りに寄せながら顔を俯く。

オルカン達に襲われながらもシャイナとエツィオは屋根と屋根を飛び回るように移動し、“豆粒ぐらいになるまで”追撃してくる彼等から十分引き離した後、都市外れにあった住宅地のモーテルに逃げ込んで一時身を潜ませていた。

シャイナ「私が知らねぇ間にテンプル騎士に拐われるわ、八頭身●ナー擬きに狙われるわ、ここにいた全ての市民が既に死んでいるわ、挙げ句の果てにサ●レントヒル＆L●Dのような世界設定を混ぜた結界が張られるわ、何この隠密な“リアルプランB”ｗｗｗ」

シャイナはボロボロに朽ち果てていた錆まみれの椅子に座りながら溜め息を付いて、天井に漏れる数本の外の太陽の光をボケケェとした表情を出してじっくりと見つめる。

太陽の光だけは白く映しとれていたが開けられていた天井の空洞空から、赤黒いコントラストの配色に今いる部屋の一室も壁や床全体に赤みがかかった“とある厭シーンを思わせるキモ色”を現していた。

エツィオ「まーまーｗｗそー言うなって、シャイナ（；一一）Γ予め奴等（パッツィ親子）は、“ボロくそに負けることを前提にしていた”から、このような“めんどくさい事”を…つーか本当に押し付けやがって！」

エツィオは窓脇に立っていて閉じられていたカーテンを少し右手で開けて、外にシャイナとエツィオを狩るべく徘徊しているオルカン&ネロマテ達を見ながらシャイナに言う。

エツィオ「“小汚ない悪巧み”は奴らにとっちゃ“御手の物”。兵器発掘・魔神（オレ）討伐だけでなくこの地に建てられていた霊柱“対魔の御柱”まで腐らせていやがった。けっ（、Ｂ′）…」

シャイナ「れ…霊地の御柱？」

エツィオは身に感じるこの土地の英雄の苦痛と悲鳴のような霊気を受けて、口を閉じながら少し歯を軋む音を立て同時に唾を少量床に吐き捨てる。シャイナは新たに出たエツィオの“厨二病単語”を聞いて、コレ何ぞぉ？（´Д`）風に目をパチクリさせる。

エツィオ「いわばこの地に張られていた“対魔の障壁結界の作用となる柱”のことだ。ただ魔を退けるだけでなく降りかかる人体の病を退け、どんな気候でも確実な実りを人に与える、“聖なる光”を与えていたんだ。それが段々と腐らせるとなると…」

シャイナ「悪魔・病・厄の侵入を許すってことか。こりゃ今にとっちゃ悪魔に取って好都合…てか、何故“始めて入る地なのにその存在を知っている？”ｗｗｗ」

シャイナが口元に左人差し指を軽く当てながら言った後、エツィオは「ピン☆ポーン♪、流石だぜぃ！」と言って少し開いていたカーテンを閉めた後、窓際からシャイナが座る錆まみれの椅子へと歩む。

そんな最中シャイナはエツィオの発言を聞いて疑問を思わせるような表情を出し、目を点にしながら首を軽く傾げる。

エツィオ「俺が現世で逃亡生活中に偶然此所に立ち寄ってな、彼女（ジャンヌ）と出会ったんだ。その時は人間で言う“１００年戦争”その真っ只中だったんだよ。」

シャイナ「マジかｗｗｗ」

エツィオはシャイナに言いながら近くにあった垢錆まみれのベッドシーツの上に腰掛けて、溜め息を付き顔を俯きながら続けて言う。

エツィオ「霊柱はジャンヌダルクの死後、彼女の従者の一人が建てたモンだ。都市の外から降りかかる厄災を退けるためな。」

エツィオは脳裏に映る過去の人物を映し出しながら言い、更に続けてシャイナに当時の記憶を語る。

エツィオ「当時１００年戦争のフツーの人間から見た目は、人と人同士の下らねぇ殺し合い。だが、実際には…」

エツィオは天井の穴に映る赤い空を見上げるように見ながら、遠くみるような視点で過去に彼女との共闘（自分は見ているだけｗｗｗ）を脳裏に思い浮かべながらそっと呟いた。

エツィオ「死した人に擬態した悪魔と人の容を保った“長年に渡る悪魔共の戦い”だった。」

シャイナ「！」

シャイナが生きる世界に学んだ史実がまた一つ“偽り”であったことを聞いて、少し両眉を上に動かす。

エツィオ「戦いが長引けば長引く程、悪魔共は倒した彼女の部下の死骸を喰らって更に力を増し、彼女の持つ戦気を徐々に喰らいながら精神的な意味で、どんどんと追い詰められていったのさ。」

エツィオの脳裏に映る決死で足掻く彼女の幻の姿、血を咲かせ徐々に自分という存在が消えていく中に、唐突にエツィオにつき出される血塗れの腕…

エツィオ「俺は逃亡生活中だったもんで、彼女に助言（ヒント）を与えつつ“手を下さないでただ見ていただけ”だけどｗｗｗ」

シャイナ「（たしかどこかの史実だと大天使“ミカエル”の声を聞いて数々の戦いに勝利へと導いたと書いてあったような…それは“偽”で声を聞いた主はエツィオだったのねｗｗｗ）だけど？」

エツィオはわざとらしい笑い声を出し天を仰ぐように額に左手を当てて、過去に起きた彼女本来の素顔を醜くさらけ出す姿を思い出しながら脳内での史実を思い浮かべているシャイナに語り掛ける。

エツィオ「彼女は一度俺の持つ力を貸してくれって、“本音”が素にさらけ出したまま言ってきてさぁ～。後の英雄らしくねぇ阿呆らしい所もあったんだぜぇ？」

シャイナはエツィオのおちゃらけた“毒舌発言”を聞いてブフッと口内で吹き、口元から白い何かが放射状に出ながらとある漫画のような仕草をする。

エツィオ「これだけじゃねぇ。俺の持つ力に魅了し、彼女の“寄せ集めの軍”の下へと成り下がれと言われる始末だ。あーあー、俺を“くだらねぇ呪縛の呪い”なんざ掛けて“決して逃がさない”ように念入りに縛り付けられたのさ。…当時の人間って薄汚い存在かと思っていたよ。ｗｗｗ」

シャイナ「そりゃエツィオの言う体験談の“血み泥沼のような戦禍中”は、誰よりも戦力を欲しがるもんだＹＯ。ｗｗつーかあんたのような“チート魔神”が呪い掛けられていたのねｗｗｗ引き千切ることすらしなかったの？ｗｗｗ」

シャイナは半端無い強さを持つエツィオが、呪いを掛けられたという言葉を聞いて、少し目を大きく開き驚くような表情を一瞬出す。

エツィオ「したきゃもうとっくにしていたＳＡ。でも…」

かつて過去に唯一戦禍の中で信じることが出来た、邸内生まれの子供がいた。時には励ましの言葉を貰い、ドヨンとしていた空気を和ませてくれたその存在を…

エツィオ「俺は人間の持つ強い意思で彼女の戦禍の末を見届けたかったのさ。外部者(オレ)の力を借りず、“自分自身の持つ最大の力”で完全にやり遂げる“自己達成感”を見たかったのにな…」

シャイナ「？エツィオ？？」

シャイナはエツィオの表情が曇らせている素顔を見て首を傾げながら、エツィオは視点を天井の隙間穴から見える空から赤い錆まみれの壁に刻まれたシミを見て険しい表情を出す。

エツィオ「人間でいう１００年戦争…人型擬態悪魔と対抗勢力の人間が争い初めて７０年ぐらいか？その時彼女は…」

エツィオ視点で壁に染み付いていたシミが徐々に“血のように見えて”、“悲鳴と怒声が聞こえてくる”中、数分間のエツィオだけ見える幻の背景と現代の風景と共に隣にいるシャイナに今まで見てきた一部の過去を語り掛け始めた。

―もはや、呆れるぐらいにしつこく…ずっと枷を付けられていたモ

ンDA。|

第百二十曲　たとえ女でも約束を破る奴はゆるしまへんでぇ～（、ｏ′＃）

今から８００年前以上の話だ。俺が旅をしてきた中で一番“嫌な存在だった人間の中で、史上最悪な自己チュー英雄”の話を…

―回想　８００年前以上　フランス　オルレアン　ジャンヌダルク邸裏庭―

？「ハァ…ハァ…くそっ……」

ガシャッと歩く度に鎧の音を立てて一室の西洋の宮殿のような白いタイルで敷かれた石床に、一人の若き女戦士が足を引き摺りながら裏庭の中央に生えている林檎の木へと歩む。

辺りは百合の花で覆われた裏庭で白銀の甲冑だっただろうか右脇から左肩まで斜め一直線に服ごと破れ、斬られたばかりか赤い線がこびりつき赤く染め上げられいていた。

？「わ…我ら…大天使…ミ…ミカエル様…どうか……」

慈悲をと呟いた後、ジワリと傷口部分から血が噴き出るように滲み出し、両骨盤からそって赤い血が床に滴り落ちて、遂には両膝から床に着き前へと倒れ血塗れの身体を左腕でギリギリ支える。

長いブロンド髪を後ろの紐で縛って一つにし外見２０代後半の女性が、額だけでなく両頬と口元から血を出してもう満身創痍な状態だった。

―フランスオルレアンの偽・英雄　ジャンヌ・ダルク―

エツィオ「おーおー、クソ派手にヤられたなぁ♪ジャンヌ（＾＾）長い戦いでついに集中尽きたかｗｗｗ人間軍の軍師として阿呆らしいＺＥ」

ミカエル…否当時魔界から逃亡していたエツィオは最初半透明状態のまま生活していて、“水●黄門風世直し旅”のように各地を転々しながら現世の世界を旅していた。

そんな旅の最中光溢れる気を感じてこの国に寄った途端、“光の霊気が常時溢れる果実”があって一時実体化し林檎の成る木の上で快適に過ごしていたが…

―貴方様はもしや…神の使いですか？―

偶然そこはジャンヌダルクの裏庭であって当時“若かった彼女”の呆れた台詞を聞いて“ハァ？（。Д。）”とトンデモ顔を出しながら彼女に否定する答えをしてしまった時…

―やっぱり貴方様は我らの為に降臨なさって下さった！是非私達に力を貸し、戦争を終わらせる知恵を与えてください！大天使“ミカエル”様！！！―

―おっまっっっっ！ｗｗｗ俺はミカエルじゃねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！―

と…否定したのに関わらず“勝手に解釈されて”、挙げ句契約されて自分の名前も“本人の了承すらしないで勝手に名付けられ”、次には…

―契約の代償は“時”でお願いします。私の持つ美貌を“永遠に保ち”奴らを討伐していきたいので。あと貴方様の力の一部…“助言だけ”でよろしいですので、是非我ら人間に“神の知恵”を与えてください。―

―…（―”―；）―

“契約の代償”を勝手に払い更には“呪縛の呪い”もかけられて外に出ることも出来ず、彼女の都合の良いようにエツィオは捕らわれて、今いる林檎の木の上だけで“扉の無い鳥籠の中”の不自由な生活をしてきて嫌みを感じていたのだ。

エツィオ「あぁん?そいつは駄目だぜ“お嬢ちゃん”?俺が当初お前に交わした“契約内容”を忘れちゃいねぇだろうな?」

シャリッと林檎の木の上でエツィオは呆れた表情を出しながらお釈迦寝入りするように寝べそを掻き、右手にする林檎を口元によせて一口林檎の実をかじる。

無理矢理契約されて最初にジャンヌがエツィオに告げた内容…それは“助言(ヒント)”という“会話のみ”で成立していたハズだが……

ジャンヌ「ゴボッ!!ゴフッフッ…さぁ、何の……話だ?…それより…グヒィッ!!!!」

エツィオ「!」

次第に月日が経つに連れて次第にジャンヌの性格が狂うように狡猾になっていき、助言だけではもう今までより“拡大している悪魔との戦にはもう勝てない”と彼女は悟る。

なので彼女はエツィオに寄せ集めの軍の下へと取り入れて、エツィオの持つ力を振るうことが出来れば戦を早く終わらせる…と、“外部の力を借りた”外道戦略で率いれようとしたが…

エツィオ「“助言だけで良い”とお前ぇはハナッから言っていたよな?それはもう“嘘ッパチ”なのか?」

ジャンヌ「ククッ!何のこ…とやら…さっぱ……う……そんなことよ…り……わ…私に……」

救いをと、遂には身体の悪化でジャンヌの口からゴポッと赤い血の塊が出て、右手でどんどんと血が吐き出てくる口を抑えながら身体の傷の痛みを押さえ込む。

ジャンヌ「ゲホッ!!お前のち…かゴホ…力を私…ゴホッ!!!ガハッ!!!!…寄こせ…ハァハァハァ……!」

エツィオ「あ〝ぁ!?“寄こせ”だぁ?そんじゃぁ、お前ぇはもう…」

咳を込み口の中全体が喉から登るように出て何度も床に血を吐き出す中、エツィオはピクッと眉間を少し動かし苛立つような言動を聞いて、寝べそっていた状態から身体を半立ちするように起き上がる。

ジャンヌ「ゲヒィガハッハッ…“寄越すんだ”…お…お前の……ゴボッ！お前の…“神の…ち…力”をっ！…ガヒュッ…ギヒィハッヒィッ！！！」

吐血しながらもジャンヌは狂喜の表情でも出しているかのように不気味に笑い、次第に吐き出された石床の上に広い血溜まりが出来ていく。

ジャンヌ「早く…寄…ガヒュッヒュ！！！ヒューヒュー…越せ！！私に…ハァハァハァ…ハァハァ…」

本性がさらけ出した彼女がだいぶ血を吐いて数分…乱れていた息が漸く整い始め、ジャンヌは何度も深呼吸しながら抑えていた右手を口から放した瞬間…

エツィオ「俺は言ったよな？“助言だけはする”それ以外は手を貸さねぇと“７０年前”から約束していたハズだ！！それをもう“破る気なんだな”人間！！」

ジャンヌ「ヒッ！？」

ジャンヌの右手が乾いたように干からびた“骨と皮だけの手”に変

わっていて、ジャンヌは叫び声にもならない悲鳴に近い声を上げる。

どうやらエツィオは眉を上げて眉間を寄せながら怒りの表情を出した後、約束を破ったジャンヌに向けて左手から契約の代償である“時の魔力”を解き放ち、７０年も閉じ込めていた本来あるべき“彼女の姿”へと戻していく。

ジャンヌ「ヒィィィィィィィィィィィィ！！！！止めてっミカエル様ぁぁぁぁ！！！！止めてぇぇぇぇぇぇ！！！！」

ジャンヌは身体を倒れさせのたうち回りながら頭部の髪を白くさせていき、徐々に身体がしわくちゃの老体化していくジャンヌの“本来の姿”へとなっていく。

エツィオ「“７０年間”テメェの“自己チュー的な阿呆契約と呪い”をずっと我慢して信じていたのによぉ…それが年を重ねるに連れて考え方をズル賢く狡猾に変えていきやがって…お前はもう契約者として失格だ！！」

エツィオは厳しい表情を出しながらのたうち回るジャンヌに叱咤し、７０年間身体にまとわり付くように絡んでいた“エツィオしか見えない彼女の呪縛の鎖”を引き千切り、解放された身体を広げる。

ジャンヌ「ガヒッ！！！ヒィィィィィィィィィィ！！！！」

ジャンヌの声がもう７０年代以上の“オバチャン声”になりのたうち回りながらも、７０年前エツィオに掛けていた呪いが破れて目を大きく開いて林檎の木から降り立つエツィオの姿を見る。

エツィオ「俺のような“この星そのものを滅ぼす力”を易々と借りようとする“馬鹿丸出しの人間”なんて、この先の戦なんて生き残れねぇ…ましても“勝ち目のない悪魔と人間の戦い”に７０年間挑んだアンタ自身も狂ってやがる。」

エツィオは溜め息を付いてのたうち回るジャンヌに歩み、芯になった林檎の欠片をジャンヌの頭部に投げ捨てて、左拳を右手の平中心に向けてパシンと軽くぶつける。

ジャンヌ「ぁ…あ…あぁぁ。」

エツィオ「どうせ俺の力を借りずとも今のお前の軍事力じゃ、１００%以上の確率で人間軍は大敗。今いるこの場所も時期に悪魔の手に落ちて、最高のバッドエンドとして幕を下ろすだろうな。まぁ、そうなる前に…」

ジャンヌの足下まで歩んだエツィオは見損なった表情を出しつつ、“アンタの本性を知らずに付いてくる人間共が哀れだ。”と言ってブーツの爪先で老体ジャンヌの腹を何度も蹴る。

ジャンヌ「ヒギッ！！ぎゃぁぁぁぁ…や…やめっ！！！！」

ジャンヌは何度もエツィオに腹部を蹴られて悲鳴を上げながら背中を折り、足も畳むように丸めて頭部を両手で押さえる形で身体を凝縮する。

何度もジャンヌの腹部を蹴ったかエツィオの右足ブーツの爪先がジャンヌの血でドロッと生々しく付着し、ジャンヌの身体の回りに口から吐き出された痰と血が辺りに飛び散っていた。

エツィオ「たくっ…下らねぇ７０年間だったぜ…。」

ジャンヌ視点からにしてエツィオの表情は頭部のフードで鼻の上から影で隠れて見えなかったが、エツィオの放つ黄金の鷹の眼がジャンヌの心に恐怖という物を突き破って背中から射抜かれる感覚を覚える。

エツィオは恐怖で固まっているジャンヌを見下すように視線を送った後、右足のブーツを上げてジャンヌの顔に向けて狙いを定める。
そして…

ジャンヌ「ひぎゃぁぁぁぁ！！！！！！！ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ

ああ！！！！！！」

エツィオ「７０年間もかつての部下が死に逝くように、オメェも同様逝っちまいな。」

ジャンヌの悲鳴声を上げる最中エツィオは狂い無く狙い定めたジャンヌの顔に向けて、ブーツ底から顔面から頭部裏を突き破るように足を思いっきり殺す気で下ろした。

第百二十一曲　ショタのみ許す。だがババアは駄目だ。

―回想　８００年以上前　フランスオルレアン　ジャンヌダルク邸裏庭―

ジャンヌ「？」

老婆となった本来の姿のジャンヌは顔面に来るエツィオの足蹴が何時までも来ないことに覚え、恐る恐る眼を開けながら頭部に当てていた両手を下ろして視界を分かりやすくした途端…

？「止めてっ！ジャンヌを殺さないで！！」

ジャンヌの前には小さな身体に今いる邸に相応しくない庶民的な茶色い服を着た栗色髪の子供がいて、両腕を水平に伸ばし所々震えながらも果敢に立ち塞がるようにエツィオに向けて涙声を出していた。

ジャンヌ「…ディク…！」

？「お願いっ！ジャンヌを殺さないで！！僕はジャンヌ姉ちゃんのお陰で僕は…僕は！！」

エツィオ「！」

ジャンヌの視点には少年の額に当たる寸前にエツィオの右足ブーツが止まっていて、ジャンヌは心の中で助かったと呟き自分を救いに来た少年の姿を見て弱々しく少年の名を言う。

―後の真・ジャンヌダルクと呼ばれる少年　ディク―

エツィオ「…退くんだ、少年。この女は契約内容を破り、俺を裏切った“最低最悪の人間”だ。こいつを一度、地獄を見ねぇといけねぇ。」

エツィオは黄金の鷹の眼を出しながら少年（ディク）に言い、恐怖という名の魔神（デーモン）威圧を放ちながらそのままの足を少年の額に当たる寸前の体勢を保つ。

ディク「御免なさい！！御免なさいっ！！！“お姉ちゃん”の本来の性格がおじさんの信頼を“何時か破る”かと薄々感じ取っていたんだ。…それがもう怖れた事態になってしまったっ！！」

エツィオ「何？」

ピクッとエツィオは眉を一瞬動かしていま目の前いる少年が、後ろにいる“裏切り者の弟”…つまり家族の一人だということに驚く。

それだけでなく“裏切り者”に無い“きちんとした態度と強い思いが溢れた偽りの無い生粋の眼”をエツィオの黄金の鷹の眼に映る真実の眼にはっきりと映し出していた。

ディク「御免なさい！御免なさいっ！！お姉ちゃんの眼に配らなかった兵士達と僕に落ち度があった！せめて…せめてっ！！」

エツィオ「な…。」

ディクは意を決したかのように震えていた身体を無理矢理止めた後、後ろにいるジャンヌを背に踞る形で額を石床に着けてエツィオに土下座する形を取る。

ディク「僕を…ジャンヌ姉ちゃんの代わりに殺してください。お姉ちゃんの不始末は僕が払います！だから…」

額を床に着けたディクは一筋の水滴を落とし、必死に後ろにいる血塗れジャンヌを助けようとして訴えを投げ掛けた。

エツィオはそんな必死すぎる少年を見て両肩を落とし溜め息を付いた後、額寸前に止めていた足を戻してその代わりに…

エツィオ「…良いだろう、少年。お前の迷い無き覚悟を受け止めるとしよう。」

ジャキッと左手首裏からアサシンブレードが飛び出して、土下座している少年（ディク）の頭部にアサシンブレードの剣先を突き付ける。

ジャンヌ「ひぁ…ぁ…デ…ディクっ！！止めな…さい！！止めて…止めてぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

エツィオ「良かったなジャンヌ？馬鹿のお前の代わりに、この少年が７０年分の罪を受け入れると言ったんだ。まぁ、お前の後継ぎが途絶えることに深く、此れからの短い余生を後悔するように呪うんだな。」

老婆（ジャンヌ）の悲痛声が上がる最中、エツィオはそれをよそにしてアサシンブレードを上へと掲げて、しっかりと少年の首筋に狙いを定める。

少年はエツィオの冷酷な声を聞いて心の中では恐怖で震えても、自分の起こした行動は立派なものだったと思い悔いは無かった。

ディク「（悔いは…無いよ…ただ僕は、お姉ちゃんを助けたかった…。）」

もうじき二度と眠りが醒めない永遠の死というものが自分に降りかかり、親しい者達と別れなくてはならないという悲しき結末を身に受けることをじっと待った。

しかし…

エツィオ「…っっ！駄目だな。どうも…「（´ε、；）ｒ」

ディク「！？」

ガシンッと鋼の音が鳴り響きディクは“はっΣ（ﾟДﾟ；）”として眼を開いた後、顔を上げて視界に映る光景を眼の辺りにする。

エツィオ「少年…お前の嘘偽りの無い思いが、俺の執行軌道を剃らしちまった。云わば…少年、“お前だけは”殺すことが出来ねぇ。」

エツィオのアサシンブレードが土下座しているディクの身体でなく、当たるスレスレ辺りに石床に突き刺さっていた。エツィオは嫌味嫌味の表情をだしながら頭部のフードをクシャクシャするように掻き毟り、石床に刺さったアサシンブレードを引き抜く。

エツィオ「…殺気が失せた、少年。（クソ真剣すぎるお約束展開な“ショタ顔の少年”なんぞ、易々と狩り取れない理由が今…分かった気がするｗｗｗ）」

驚いている少年（ディク）の背にエツィオはアサシンブレードを隠し鞘の中へと戻し、左肩のマントを一周するように翻してテポテポと元の林檎の木へと向けて歩く。

そんな最中エツィオは心の中で魔神の自分がただか人間の子供相手の言葉を聞いただけで手を止めてしまったことに苦笑いしつつボソッと呟いた後、軽く飛翔して林檎の木の上に小鳥座りのように乗っかる。

ディク「お…おじさん……ゆ…許してくれるの？」

ディクは恐怖が終わったことで腰が抜けて一度尻餅を着いたが、態度が変わったエツィオを見てよろよろと立ち上がりながら背を向けているエツィオに言う。

エツィオ「お前の持つ“勇気”が俺のやろうとしていた事を遮った。今だけは許してやる。しかし…」

ジャンヌ「ひっ！？」

ギンとエツィオは老婆（ジャンヌ）だけ見るように顔だけを振り返って、金色の鷹の眼光から放つ殺気が前にいる少年でなく“ジャンヌのみ”を睨み付け、ジャンヌはビクッと身体を震えただせ声を高く上げる。

エツィオ「命は取り損なったが、テメェ（ジャンヌ）はもう“契約破棄”だ。二度とこの場所に来るんじゃねぇ。また来たら“次はねぇ”と思いな。」

エツィオがそう言った直後裏庭入り口から騒ぎに気づいたか彼女の寄せ集め兵士達が数人走ってきて、口々に“様”付けしながら本来の老婆になった血塗れの彼女を数人抱えて、騒々しく邸の屋敷内へと走り去っていった。

ドコドコと自己チュー女と騒がしい連中が走り去って裏庭にいるのはエツィオと少年のみになり数分間を空けた後…

ディク「おじさん！お姉ちゃんを殺さないでくれて、ありがとう！」

エツィオ「…（￣￣；）」

ディクは再度林檎の木の上で背を向けているエツィオに向けて、喜

び溢れた表情を出しながら深々と感謝するように何度もお辞儀する。

一方エツィオは苦々しい表情を出しながら木の上に成っていた林檎の実を一つ採って、脳裏によぎる複雑な思いを掻き消すようにガジッと少年の言葉を聞きながら林檎を一口齧り、ゴロンと寝べそを掻く様に身体を横に転がった。

エツィオ「少年もここから去れ。しばらく一人になりたいからな。（あー駄目だ…今日の俺は調子わるぃ。…一度寝て忘れるか。）」

ふぁぁぁとディクに背を向けてまま言った後大きく欠伸をして、両手両足と背筋を伸ばしながら安眠するような体勢を取る。

そしてディクも背を向けたままのエツィオに「はい！」と言って良い返事声を出した後、少年も邸の屋敷内へと走り去り、再び一人きりになったエツィオはゴロンと林檎の木の上で寝始めた。

第百二十二曲　だ…騙されていた人間達の昼ドラ？劇場

―回想　８００年前以上　フランスオルレアン　ジャンヌダルク邸屋敷内―

バタバタと屋敷内は騒がしく動いており、右往左往と何度も往復しながら一人一人戦での戦歴（ブランク）とか関係無くきちんと戦以外の救助重視とした“ＴＨＥ★連繋”という名の役割分担を果たしていた。

兵士Ａ「包帯と薬をありったけ持ってこい！時間が“あの老体軍師”を生かすか死せるかの戦いだ！！」

兵士Ｂ「担架の代わりってものだが、屋敷にあった木地の強い布と棍を合わさって臨時作成した。まぁ、俗に言うと間に合わせだがね。応急処置後、これを使って数人で部屋まで運ぼう。」

兵士Ｃ「了解了解、そんで大怪我人になんの食事を与えれば良いんだ？」

あるものは彼女の為の薬を・あるものは担架代わりとなる台の用意をと等、必要な物を十分に揃えるようにテキパキと動きながら準備

していた。

そして彼女の雇った兵士達は“なんというラグディカル★グッド☆スピード”の連繋で彼女(ジャンヌ)を治療室に運び、それに続いて白衣の衣を羽織った数人衛生担当兵士が入って治療室の扉をバタムッと閉めた。

彼女(ジャンヌ)が治療室で応急処置を受ける中、兵士達は裏庭の林檎の成る木で何があったのか、何故老婆の姿になっているのか先にいたディクに問い詰めて聞き出した所…

ディク「林檎の木に住んでいた大天使(オジサン)の契約内容をお姉ちゃんが破ったから…このような姿になっちゃったんだ。」

と、ディクは淡々に大天使ミカエル（本名はエツィオ）の契約内容を姉は破ったという事を、治療室前にいるまだ知られていない彼女が雇った衛生兵他斬り込み屈強の兵士達に伝える。すると…

兵士A「くそっ…。長年に渡ったあの戦いは一体何だったんだ…。」

兵士B「薄々、我々に下す作戦内容がバラけている気がしてきたんだが…やっぱりそうか。」

兵士C「所詮、林檎の木に宿る天使様の知恵を手にいれようとした

“魔女”が地に堕ちたみてぇだな。」

寄せ集めの兵士達はディクの話を聞いて“ハァ…（´、；）”と呆れたように表情を崩した後溜め息を付いて、今まで見てきた彼女の本来の素顔を裏切られたような思いを脳裏に描いて後悔し口々に愚痴を吐いていた。

兵士C「でっ？これからどうするアグナス？？ジャンヌ様…いや期待外れの魔女の代わりを勤める、新しい指揮者の…」

兵士B（アグナス）「…それが居ればなジェズム。だが、…」

一人の兵士が隣にいた顎下に鬚が付いた今いる治癒室前の最長年の兵士（アグナス）に向けて言ったが、アグナスは眼を伏せて顔を横に振りながら隣にいる額に斜めの傷がついた２０代後半の黒人肌の兵士（ジェズム）と他兵士達に現実の言葉を吐く。

アグナス「唯一、彼女（ジャンヌ）の無鉄砲な直進戦術よりも“我々寄せ集めの人間をいかに生存を高めるか”と、我々の命を護るべく密かに仕切っていた“レイド”がいれば、次なる指揮者としての才能はあったのに…」

兵士C（ジェズム）「先日の悪魔との戦いで、俺達よりも先に逝っちまったんだよな。忘れられねぇよ…アイツの最後の姿を。俺はアイツの…」

くっと兵士（ジェズム）は歯を噛み締めて先日戦った悪魔との激戦の中で隙を取られてしまい、狂いなく狙う自分の心の臓にめがけて高質化した悪魔の黒い腕と爪が、自分の背中から中の心の臓と血と共に食い破られて絶命するハズだった。

だがすぐ近くにいたレイドがジェズムをかばうように身を投げ出して、ジェズムを狙った黒い腕がレイドの頭部をそのまま突き破り、即死したレイドの中身の脳の肉片と一部破れた眼と血がジェズムの顔面にこびりついたのだ。

ジェズム「俺を庇って…アイツを殺した悪魔は俺が代わりにギタギタにしてやったよ、ちくしょうっ！！」

ダンとジェズムは飛び上がるように立ち上がって振り返った後、背後にあった白い壁に向けて右拳を八つ当たりするかのように何度も殴りつける。

ジェズム「ちくしょう！ちくしょうっ！！ちくしょおおおおおおおおおおおお！！！」

ジェズムは表情をクシャクシャに崩して両眼から涙を流しながら殴り、殴れば殴るほど右拳の皮が破けて内出血したかのように拳から痣が薄っすらと滲み出てくる。

兵士Ａ「分かっているハズだろジェズム！？今ここで苛立ちをぶつけようが仲間は帰って来ない。実力とかどうのこうのとの問題でなく今ここでおまえ自身を失ったら、先に逝った仲間達と同様になってしまうぞ！？」

ジェズム「うるせぇアルベルト！俺は…俺は…レイドを殺した悪魔をズタズタにした後、“突然頭部が潰されたのに関わらず起き上がって”、“アイツらと同様の身体”になった元仲間をこの手で…この手でやったんだぞ！？」

壁を叩くジェズムの向かい側に座っていた長ロン毛の三十路過ぎの兵士（アルベルト）がガタンと立ち上がって、両眉を上に上げて叱咤の声をジェズムに向けて吐きながら皮が少し爛れるように破れ血が出ている右拳の腕を掴んで止めさせる。

ジェズム「離せアルベルト！お前はまだ一度も“元仲間に手を下した”時の断末魔の姿を見ていない！！仲間を殺す罪悪感をお前にはっ！！」

兵士（アルベルト）Ａ「そんなことより意味無く自分自身を深く八つ当たりするように傷つけるな！！まだこれから悪魔共との戦いが迫っているのに、拳を壊すと剣さえ握れなくなってしまうぞ！？」

アルベルトの右手に掴まったジェズムは振り払うようにただ八つ当たりするように怒り、無意識に足も出てアルベルトに向けて抵抗するように蹴り付ける。

アルベルトは逆に落ち着いているような表情を出しながら振り払おうとするジャズムの腕を離さないように握りつつ、抵抗最中に蹴りも加えてくるジェズムの八つ当たり攻撃を身体を横にずらして避けて、力の限りでジャズムを背中から壁へと打ちつける。

ジェズム「っっ！！この…手を退けろアルベルト！俺は俺はっ！！」

兵士D「そこまでだジェズム、アルベルト。仲間同士でくだらねぇ言い合いは止せ。今の状況を把握していんのか？？」

ズシンと殴りかかろうとする二人の頭部辺りに斧でも振り下ろされたかのような気迫が込められた言動を放ち、二人はビクッと両肩を一瞬上げて声を吐いた主に向けて二人同時に顔だけを動かす。

ジェズム&アルベルト「「オズワルド隊長！？」」

治癒室の前に立っていた髪をオールバックに四十代後半の風格が漂う隻眼の兵士（オズワルド）が、強面の表情を出しながら両腕を胸元辺りに組んで殴る寸前のジェズムとアルベルトをむく出すような形で更に続けて言う。

兵士D（オズワルド隊長）「何時悪魔共が此処に攻めてきても可笑しくない状況だ。今更ここで仲間割れしている光景をクソ悪魔共に見せてみろ。俺ら人間共の隙を伺って“ここにいる国の民もろとも押し潰される”んだぞ？いちいち仲間の死で嘆いちゃぁ、この後の戦でボロ負けするだけだ！」

オズワルドは二人の下へ歩み寄った時、同時に二人の右頬に向けて交互のグゥ☆パンチ！ｏ（、皿′）〇を噛まし、二人の頬に痣がくっきりと残るぐらい痕をつけながら殴り飛ばす。

オズワルド隊長「仲間の死は生き残った俺らが、次なるクソ悪魔共の戦いで償い取ればいい。襲い掛かる悪魔共を全て根絶やしにするまではなっ！そんなことより、さっさと“新しい指揮者”を選ぶぞ。悪魔共は都合よく待たせてくれんからな！」

アグナス「…そうだな、オズワルド君。今ここで仲間同士の小競り合いしても仕方ない。今やるべきことをやらなければ…。」

アグナスは通り過ぎるように歩いてくるオズワルドの激しい覇気が込められた激昂を聞いて少し両目を閉じた後、廊下の床に伸びている二人の肩を持ってさらに他の兵士達も手伝うように、ゆっくりと二人を立ち上がらせながら何処かへと歩いていくオズワルドを見る。

オズワルド隊長「…治癒室で応急処置を受けた女を担架で自室まで運んで寝かせた後、至急臨時作戦会議室まで全員集合。そこで新たな指揮者を決めつつ今後の対悪魔の作戦内容を立てる。そこにいる馬鹿野郎共も一緒にだ。」

アグナス「承知した。」

オズワルドがそう言った後、ため息を付きながら頭部の髪をクシャクシャに掻き毟って、他の兵士達よりも先に臨時作戦会議室へと移動する。それに釣れて他の兵士達も担架に必要な人員を残し同様に歩き去っていく。

アグナス「（さて、この若い二人組みの息が整ったらワシも…）む？ディク？？」

アグナスははっとなって殴りかかろうとしていた二人の内のジェズムを肩貸ししながら歩こうとした時、一緒にいたはずの少年の姿が無いことに気づく。

アグナス「…“例”の場所かのぉ？」

アグナスはふぅと息を漏らしながら微笑む表情を出した後、ちょうど治癒室の扉が開いて包帯まみれになった彼女（ジャンヌ）を担架に乗せ、待機していた他の兵士達が交互に担架を持って揺らさないように急ぎつ

つ早歩きでジャンヌの自室へと運んでいった。

第百二十三曲　少年は早く立派な大人になりたいんじゃぁ！

―回想　８００年前以上　フランスオルレアン　ジャンヌダルク邸
夜　裏庭―

兵士達が屋敷内で臨時会議室へと向かっていたそのころ、ディクは彼らから離れて静かに夜になって漆黒の闇に包まれた裏庭へと向かい中央に生えていた林檎の木へと歩み寄る。しかし…

ディク「（居ない…もう何処かに行っちゃったのかな…）」

昼間ジャンヌとの会話で林檎の木の上にいたハズのエツィオの姿が無く、ディクは両眉を下に下げて林檎の木に背中から合わせるように立って、何か心残りでもあったかのように寂しい表情を出す。

ディク「（そうだよね…長年契約していたお姉ちゃんを今日裏切ったから、怒って出て行くのも…）「こんな夜更けに何か用か、少年？」うわぁっ！？」

突然にょろ～ん♪と変な効果音と共にディクの目の前に顔から逆方向に下ろした不真面目顔のエツィオが現れて、ディクは思わぬ不意

打ちのような登場で驚愕の表情を出す。

ディク「お…オジサンがとっくに…もうこの国から出て行ったかと思って…」

エツィオ「オィオイｗｗｗこの俺が“単純すぎる契約破棄程度の喧嘩騒動”で一言なく勝手に出て行くと思っていたのか?そいつは大きな間違いだぜ、少年。あとそれと…」

ディク「?」

ヒョイッと冗談めいた表情を出すエツィオがいまだに驚いている少年に向けて林檎を投げ、ディクは自分に投げてきた林檎を右手でナイス★キャッチするように取る。

エツィオ「“オジサン”じゃなくて“お兄さん”だ、少年。（＾＾）」

ディクの視点から映るエツィオの表情は昼間のような鬼顔と違って、彼本来の優しさが現れた穏やかな笑みが出ており、自分に向けて口を八の字にさせながらからかうように林檎の木の上から降りて両足から地に着ける。

ディク「…あははっ！ど…どうみてもオジサンに見えｒ「お　兄さ　ん　ＤＡ！だからオジサンじゃなｋｒ（」

ディクはそんな表情を出しているエツィオを見て顎下に左手を寄せて、クスッと口元を綻ぶように動かした後エツィオに応えるべく笑顔全開で今時の子供のように言う。

ディク「いや…オジサンだよ、どう見てもｗ“顔と声”で」

エツィオ「…コリャひでぇな、先日髭剃りまでしてキチンと身支度整えていたのにｗｗｗ（　８　）」↑“外見は２７ぐらい”だが実年齢は“２０００歳以上のジジツィオ”ｗｗｗ

ディク「鬚を剃っても“顔”だけは“オジサン”だよ。ジェズム兄ちゃんに似ているモン。（額に傷は無いけど、口元に傷があるからちょっと似ているもん。）」

エツィオ「グフッ……こ…こ……これは痛い…ｏｒｚ…２…２００（多分ｗ）の時を生きた俺に…とっ…て…」

ガチョーンとエツィオはディクにからかわれているように口をあんぐりと開けながら呆け、エツィオの黒い配色が漫画のようなまっ白いペンキでも掛けられたかのように数秒間硬直する。

ディク「オジサン?オジサンどうしたの?何か僕…嫌なこと言っちゃったの?」

エツィオ「いや…だ…大丈夫だ、少年。…少年の言うこと自体は間違ってイナイ…そう、間違っちゃ…いねぇ…（；；）グスッ…」

そんな最中ディクの止めのような一撃の言葉を更に聞き受けて、カ●ュのフリージ●グコフィンでも受けたように精神面含めてエツィオはフリーズし、そのまま“ｏｒｚ体勢”を取る。

ディク「（うっ…オジサンに何か酷いこと言っちゃったかなぁ…何か泣いているような声が一瞬聞こえたような気がすｒｙ）」

エツィオ「泣いてなんかないぞ少年…目に塵が入っただけだ…」

ディク「うわぁっ!?な…何で僕が思ったことがわかったの“オジサン”!?」

エツィオ「…長年による“勘”だ、少年。（読心術が使えることは後々少年が大きくなったら、じっくりと教えるとするか。俺の“正体”も含めてな…）」

数分間眼を点にさせて戸惑う表情を出すディク（本人は悪気無いように言っただけw）に心配される言動を吐かれながらも、エツィオは子供相手に大人げないことを決してしないように心の中で抑えながら、ディクに見下されるような形になった。

…

……

……

―数分後―

裏庭の林檎の成る木の下で楽しい会話（エツィオにとっては精神的にハートブレイクタイムｗｗｗ）をしたディクとエツィオは、会話後再び無口になりディクは木によたれかかるような体勢から体育座りになって、エツィオから投げ渡された林檎を一口齧りながら夜空に映る星々達の光を見る。

真上には明日満月になりそうに欠けていた月が昇っていて、遥か高き場所から今いる林檎の木へと銀色の月光を眩く照らす。そして…

ディク「…ねぇ、オジサン……」

エツィオ「何だ、少年？」

長かった沈黙をディクの一言で破って隣に立っていたエツィオを余所にし、顔を真上に浮かぶ月を見上げながら蚊のような小さな声で言う。

ディク「今此処にいる皆…国全体に住まう人々も…“今のままだと死んじゃうの”??」

ディクは少し嗚咽のような声が出ながら両眼から流れ出る涙を、エツィオに見せないで堪えながら真上に浮かぶ月を見つつエツィオに言う。

エツィオ「あぁ…駄目だ。先ほど居た少年の屋敷に複数の人間共が、何かしら必死に計画を立てていても“次の戦で此処にいる民ごと壊滅”するな。」

ディク「そんな…みんな…が…、お姉ちゃんも…ジェズム兄ちゃんも…みんな…」

エツィオは一瞬屋敷の方向へ顔を向けて瞳を金色の鷹眼に変えた後、瞳に映る“真実の眼”で内部の青色に覆われた人間達の身体に浮かぶ呪文のような情報を見て、エツィオは両眼から見た“この後の未来”を少年(ディク)に告げる。

ディク「ひっ…く…く。」

エツィオは子供相手に残酷すぎる現実を突きつけ、此れから起こる事を悲惨な未来を言わなければいけない…。故に今の時代そのものが“無慈悲なる修羅場”なのか、エツィオは眼を伏せて頭部のフードを被り直し更に続けて言う。

エツィオ「…それだけじゃなくこの地の光の源と成る霊地(マナ)の力が弱まってきている。光に覆われた霊地(マナ)は外部から来る厄災を退ける結界作用を持っていたが…」

ディク「それ…たしか…お姉ち…ゃんの日記に書いてあってちょこっと…見たけど……」

エツィオ「！なら説明するまでもないな、少年。以外に精神面(メンタル)は姉以上の強さだなｗｗｗ」

姉(ジャンヌ)にないディクの少年ならぬ強い精神力（小説的なお約束の意味で）を持った言動をエツィオは聞いて、両眉を一瞬少し上げた後口を八の字にしながら少年の言葉を聞く。

ディク「こんな“戦”の時代に…何時までも泣いてなんか…いられないよ。僕は…僕は…凄く悔しいんだ。」

エツィオ「悔しい？」

ディクは両眼から流れ出ていた涙を拭い取り鼻穴から少量の鼻水も右手で拭き取った後、月を見上げていた顔を隣にいるエツィオに向け直し真顔を出しながらエツィオに言う。

ディク「こんな“小さな体”のせいで、ジェズム兄ちゃんのような強い兵士になれない…オジサンが言うこの国の未来がもうじき終わると言うなら…僕は何も出来ないまま皆と同じように運命を共にするんだ…。」

エツィオ「…。」

ディク「強い身体を持った“大人になりたい”…もし国がまだ滅びる時間があったら、僕は…僕は…」

―お姉ちゃんが集めた兵士達だけでなく此処に住まう皆を…護ることが出来たのに…。―

第百二十四曲　少年の無垢なる思いは魔神の正義の心を動かすＺＥっ！

―回想　８００年前以上　フランスオルレアン　ジャンヌダルク邸
夜　裏庭―

エツィオ「あー…つまり、早く大人になって悪魔共を片っ端からぶっ飛ばしたいっていうのか？少年？？」

ディク「うん…お姉ちゃんの為でもなく…ただこの国に住まう民を皆を護りたかった。ただ…ただ…それだけのことなのに…。」

エツィオはディクの“クソ真面目すぎる心”を読んでボヘヘェとやる気のない表情を出しながら、左鼻穴に右人差し指を入れて暢気に鼻くそをほじりながらも、心の中で少年の心の意志を鷹の両眼に映る情報を見ながら静かに聴く。

ディク「今となって僕は“時間”が憎い…。どんなにの憎しみをぶつけても…時は実体を持たないし、何もかも虚無なんだ…今の僕のような子供が何の言っても、無意味なんだ…。」

エツィオ「…。（だが…この餓鬼の意志は本物だ。あの裏切り者に無い“此処にいる全ての命を護りたい思い”が俺に流れ込んでくる

な。）」

そんな最中ディクは顔を俯かせて歯をぐっと噛み締めた後、右拳を少しずつ丸めて強く握り拳から右腕にかけてプルプルと僅かに震わせる。

ディク「もう願うことは出来ない…だって「…いや可能だぜ、少年？」え！？」

民を護ることが出来ない身体であきらめていたディクの表情に突如エツィオの“可能宣言”を聞いて、はっとなるように眼を大きく開きながら顔を上に上げてエツィオを見る。

エツィオ「昼間…裏切り者の少年の姉（ジャンヌ）を蹴り殺そうとして、骨の髄までボッコ☆ボコしていたんだが、少年…お前の介入で大きく事情が変わった。」

ディク「そ…それは一体…」

エツィオ「分からないのか少年？今このような修羅に満ちた世界で、俺のような“大天使様”の前で立つ事ができていることが。」

ディク「？」

両腕を組みながら不敵に笑うエツィオの姿を見て、ディクはどうゆうことなのかさっぱりと理解できていない表情を出し眼を点にさせて首を傾けながらエツィオの話を聞く。そして…

エツィオ「少年、お前には“この未来を変える力”が俺の眼に映っていた。もちろん偽りのない“真実”を人間が言う“大天使様”の有り難いお告げＤＡ。」

ディク「ぼ…僕のような子供に…未来を…変える！？」

エツィオが馬鹿馬鹿しいようにわざとらしいお手上げするような仕草を取り、両手首を軽く何度も縦に動かしながら両目を閉じていまだに驚き顔を出すディクにおちゃらける。

エツィオ「だ・け・ど・ぉ、今のままだと少年の身体と知識が完熟するまで時間がぜんぜん足りないから…」

ディク「わっ！？」

突如エツィオの身に青白い光がブワッと気流のように流れて一瞬の内に気流がディクの方へと広がり、ディクは自分に向けて流れてくる青白い気流を顔面を庇うように両腕で覆い、地面の草花を少し反

るように舞い上げる。

身に受けるエツィオの身体から発した風と草花の匂いを嗅ぎながら眼を瞑り、漸く身に受けていた風が止んで顔を塞いでいた両腕を下ろした時…

エツィオ『少年、俺と契約しないか？』

ディク「っ！」

ディク視点から映る光景…それは人間体だったエツィオに限りなく近い竜人のような青い線が身体の至る所に刻んだ屈強の姿に、腰から巨大な竜の翼・背中から漆黒の鷹の翼が生えた二重声の本来の黒色大天使（※魔神）が立っていた。

エツィオ『お前達人間で言う“大　天　使　様　（※何度でも言うが魔神でｒｙ）”の本来のお姿はどうだ、少年？』

実物と違って恐ろしいだろ？と歯を見せながらディクに笑いかけて言い、わざとらしい仕草をとりながら両腕を組んで少年と本来の姿の背丈の違いで見下すような形で見る。

ディク「。。。（　Д　）」

ディクは口を開けたままそのまま“放心状態”になりつつも、顔を横に振ってエツィオの本来の姿に恐れを表に出さず、自然に少年の足が大天使（さらにしつこ…ｒｙ）の元へと歩み寄っていく。

ディク「ね…願ってもない…こ…ことだけど…ほ本当に…い…良いの？」

エツィオ『これは俺の意思だ、少年。俺は君の持つ“偽りの無い正義”を信じてみることにした。云わば、見届けてみたいんだよ。この戦いの行方を…』

エツィオは無言でも不自分の本来の姿に恐れもしない少年の態度を見て微笑みながら言い、口元を吊り上げ更に続けて放心…否悪魔を恐れない最高の勇気を出すディクに言う。

エツィオ『契約の代償は特別に“無し”だ！少年の身体が完全に完熟するまで“俺が学んできた超★史上最強知識”と“戦闘技術”を跡形もなく叩き込んでやるよ。どうだ？悪い条件じゃないだろ少年？』

ディク「ぅ…は。…け…契約の代償が無いなんて…ぼ…僕は。（Д）」

ディクは本来の大天使様（※魔神化）の姿に呆気にとられるだけでなく“契約の代償が無い”かつ“姉に無かったエツィオからの指導”という“相棒契約”という内容に口を開き、眼も大きく開きながらあんぐり（；￣Д￣）する。

その間、数秒間だけだが長く感じるように見えて両頬を赤く染め上げるように出し、鼻下を少し右人差し指で擦るように動かした後…

ディク「契約…する。いえ、します！！あり…がとう…有り難う、オジサン！！」

エツィオ『エツィオだ。これからは俺の前だけエツィオと読んでくれ、少年。』

ディクは顔を上げて感謝するように涙を少し流した後、大天使様の身体（魔神の身体）の胸元に向けて、両腕を広げながら飛び込む。

そして大天…魔神（エツィオ）は飛び込んで来る少年（ディク）を受け止めるように両腕を差し伸べた後、ガシリッと少年の身体を胸元に寄せてそっと抱き抱える。

エツィオ『今この場で契約完了した。少年、お前という“逸材的な人間”が何処まで未来を作り替えて行くか、最後まで見定めてもら

うぜ？あとそれと…』

ディク「ディク。僕は…ディクだよ。…“エツィオ兄ちゃん”！」

少年が自分の名前をエツィオに告げた後、エツィオは「ディクか、良い名前だな。」と言って背中の鷹の翼と竜のような巨大な翼を前に寄せて、抱き締めている少年の身体を覆う。

エツィオ『おっと、Σ（＊´、＊）分かっているじゃないかディク。漸く俺のことを“オジサン呼ばり”するの止めるなんて。』

ディク「だって、僕は大天使（エツィオ）と契約したんだよ？これから僕に知識を戦い方を教えてくれるのに…しつ…」

エツィオ『んぁ？どうした、ディク？』

十字に光る青白い胸元で段々と少年の意識が薄れ言葉が途切れていき、瞳がトロンと閉じながら寝息を少し立ててスヤスヤと少年が眠っていく。

エツィオは顔を傾けて少年を引き寄せた胸元で眠っていくのを見て「精神面は大人並だが、まだまだ子供だな♪」と言って、クスリと笑った後少年の頭の髪を軽くなでる。

エツィオ『忙しくなるな。契約者（ディク）の思いに今応えねぇと…』

魔神（エツィオ）はむっと真面目顔を出しながら“カメラ目線”に向けて顔を向けた後、一仕事後の長い調教期間が待っているのを見て少しため息を付いた。

第百二十五曲　どのみち絶望しか残されてな…いいえ、フラグ取り消しじゃぁぁ

―回想　８００年前以上　フランスオルレアン　ジャンヌダルク邸屋敷内　臨時会議室―

そのころ屋敷内では生き残った兵士達による次の戦時で、対悪魔の討伐対策を作戦を練り一部の者は疲弊した身体でもそれを無理矢理押し殺して作戦を聞いていた。

オズワルド隊長「…ってな訳で、悪魔共相手は一人づつ挑むのは禁止。一人づつ人間体の悪魔の身体の四肢の内“足・腕”の左右あわせて二つ同時に斬り“二人で一匹の悪魔を仕留めるんだ”。」

パンパンと中央のテーブルに大きな画用紙で絵を描きながら、周囲に座る生き残りの兵士達に今後の悪魔戦の対策を細かく動きをとるべきか慎重に練る。

ジェズム「あぁ、しかし…仕損じた場合はどうす「“必ず仕留めるんだ”。でないと殺られるのは人間（オレら）の方だ！翌々思い返してみろ、かつて俺達を率いた“あの魔女”の無謀すぎる作戦内容を！」っ！」

ジェズムは中央の画用紙に描かれた対策内容を聞いて顎に左手を当

てながらオズワルドにもしものことを言ったが、オズワルドは“Ｉ（も）Ｆ（しも）”という単語を嫌うかのように一瞬ジェズムに向けて眼を殺気立つような視線を放ち、ジェズムの言葉を遮るように続けて言う。

睨みつけられたジェズムはオズワルドが言うように過去の戦いを再度脳裏に思い出しながら見た後、何かに思い当たるようにはっとなって額から一滴の汗を流し出す。

ジェズム「そういえば…戦が起こる度に俺達に告げる作戦内容。“一貫突撃”と“後方兵士の支援をしつつ防壁”しか与えられなかったような…」

アルベルト「ああ…しかも時が経つにつれて次第に“防壁”のみに…いや、それだけじゃない今までの戦いからにして、何かがおかしいところが薄々と浮かび上がるように思ってきたんだ。“なにかを引き擦り出すべく俺達（盾）を使って時間を稼いでいた”ように…」

アルベルトは冷や汗を額から頬にかけて滴り落ちるように出し、額に右手を当てながら今までの戦いの記憶を搾り出して「まさか…」と軽く呟いた直後…

オズワルド隊長「…俺はあの魔女に引き入れられて“２０年”ぐらいだが、あの魔女が密かに立てていた戦略は“真意を告げていない”俺たちにとって絶望とされるようなこと。それは…」

アグナス「各“仁知勇を備えた果敢なる我等の兵士は自ら槍となって、平和を狩り取ろうとする魔の軍勢を自らの身体を犠牲とし打ち砕け。”これが表だったが、真意は“林檎の木に宿った大天使様(ミカエル)を戦場に狩り出すべく時間を稼ぎ盾となれ”だったな、オズワルド君？」

オズワルド隊長「！…知っていたのか、アグナス。」

アグナス「うむ…ワシが用を足しに行った時、偶然彼女の部屋にあった作戦指示内容の本を見てしまってな…悪寒が出るほど恐ろしい内容だったよ。我々寄せ集めの兵士そのものが生贄に捧げるようなものでね。」

オズワルドが言おうとしていた内容が代わりに向かい側にいたアグナスが言い、両手を組んで両肘をテーブルにつけながら冷静に言う。

アグナス「換えの兵士は幾らでもいるからな、彼女が契約していた大天使様(ミカエル)の“魅了”の力で兵力を補いつつ戦場へ…つまり我々は彼女にとっての“いずれ砕かれる城壁”扱いとされていたのだよ。」

ジェズム「なっ…なんだよそれっ！？つまり俺たちはあの魔女に…」

アルベルト「“大天使様(ミカエル)”を戦場に引き摺り出すべく“時間稼ぎ役

”とされて戦場で散るだけの“捨て駒扱い”とされていたワケか。クソッ！」

ジェズムはアグナスから聞いた真意を聞いて表情を驚愕顔にさせた後、両手をテーブルに向けて思いっきり叩いて座っていた椅子を勢い良くガタンと弾き飛ばしながら立つ。

その隣にいたアルベルトは感情をさらけ出すジェズムと対照的に表情は冷静に保っていたが、心の中は憤りと裏切られたような思いで困惑しながらギリッと歯軋りをした後丸めた右拳をテーブルに叩きつける。

ジェズム「でもっアグナス！何故そのクソッタレの真意を俺達に早く教えなかったんだ！？そうすりゃ早く次の「わからねぇのか？クソ単純馬鹿野郎。今日まで契約してきたあの魔女は俺達を凌ぐ“人にねぇ強大な力”があったんだぞ？」

ジェズムはオズワルドの向かい側に黙って座っていたアグナスに向けて本音を苛立ちが込められた言動を言い放ったが、それをオズワルドは言葉を遮るようにジェズムの顔面に向けて彼女（ジャンヌ）の部屋にあった日記のようなモノを投げる。

ジェズム「いっ…たぁ！！！！何をしやが「いいから黙って読め、クソ馬鹿野郎。他の野郎共も同様に全てを目に通しておけ。」

バシッとジェズムの額に叩き付けられた日記の表面が当たって痛みをこらえながら額を両手で抑えても、もの凄く痛かったか打たれた所から一部赤い腫れが浮かび上がる。

オズワルド隊長「たとえ真意を誰かに見られても、あの魔女は俺達の“一部の記憶を奪う”“記憶を封印する”能力があった。俺もその“真実”をお前達に告げようとしたんだが…」

オズワルドもアグナスと同じく当時率いれていた作戦内容を不振に思い、実際彼女の部屋に入って長年書かれていた日記を読んで“真実”を知ってしまう。

長年自分達は大天使の力そのものを手にいれるべく、時を無駄に稼がれて利用されていたことに衝撃が走って練兵場にいた昔の戦友達に知らせようとしたが…

ー何処ニ行クノ？私ノ大事ナ大事ナ…防壁サン？？ー

オズワルド隊長「何の前ぶりもなくあの魔女が現れたのさ…たとえ地を離れてもすぐに現れて“俺達のすべての行動が把握できていた”ように。」

アグナス「彼女と眼と合った瞬間から“見てきた記憶の一部を封印

されていた”のだよ。思い出そうとしても彼女に掛けられた“呪い”で思い出せず、真意を知るワシとオズワルド君に縛り付けられていたのだ。今日まで何事も無かったようにね。それで契約破棄の時に漸く…」

オズワルド隊長「“第二次計画”だったのさ。あの単純すぎる魔女が“例え俺達含む全ての民を皆殺ししようとも”自分だけ強大な力を手に入れようとしたた。そして…」

ジェズムは額を左手で抑えながら隊長に投げつけられた彼女の“７０年分の日記内容”を見て、ぞわりと身体の中から外にかけて悪寒が吹き出てくる。

ジェズム「な…なんだよコレ…」

アルベルト「コレが…あの魔女の…」

日記の内容を１ページづつ捲る度に段々と彼女の人使いが狡猾に・非道へと落ちていく狂気めいた内容になっていき、次第に日記を捲る右手をカタカタと震わせながら日記を見に来ていたアルベルトと他兵士達も視線だけで文を追い、心の中で日記文を読みながら最後のページ昨日の日記内容を見た瞬間…

―…ミカエル様の力だけ欲しい欲しいほしいホシイホシイ…他は…

ミカエル様を手中に押さえる…唯一時間を稼げる私の使徒達…道具だ。何も要らない要らない…邪魔なだけ。聖なる戦に…なんて…邪魔なだけ。そう全ては私の…ために…―

所々黒いインクが滲んで読めなかった文もあったが、どちらにせよ“今の自分達”は彼女にとって“唯一時間稼ぎができる壁”として扱われていたことを知る。だが…

ジェズム「くっ…そ……。」

オズワルド隊長「…薄々皆感じてきていると思うが、次のクソ悪魔共との戦いで“確実に俺達は生き残れない”。どんなに作戦を練ろうが…もはや“生存率・作戦成功率０”と言ってもいいぐらい完全な人間側の“負け戦”だ。」

オズワルドは左腰に収めていた短剣を引き抜き中央の描かれた悪魔と人間の絵図紙に向けて、ドスッとテーブルごと突き破るような勢いで深く刺しこんだ。

オズワルド隊長「たくっ…あの魔女にとっては最後の“迷惑過ぎる最悪の呪い”と言っても良い。俺達全員含めて民もろとも“次の戦で跡形もなく全滅した”という歴史を残そうと！」

ジェズム「くそぉっ！」

ダンッとジェズムは読んでいた日記を床に叩き付けるように投げ捨てた後、感情を高ぶりながら悔し過ぎる表情を出してテーブルを丸めた両手で降り下ろすように殴り付けた。

オズワルド隊長「…だが、負け戦と言っても易々と引き下がる訳にもいかねぇ。人間の最後の悪足掻きぐらい、あのクソ共に見せつけてやるまでだ。だから…

周囲の空気が段々と重くなっていく中、オズワルドは意を決したかのように両手をテーブルに着けて顔を渋顔を出して周囲の兵士達に告げる。

オズワルド「今後の最後の指揮者はお「待って、その役は僕が引き受けるよ。」！」

オズワルドが次なる言葉を兵士達に告げようとした時、突然扉から第三者が入ってきてオズワルドの決意の言葉を遮りながらオズワルドの下へと歩み寄ってくる。

オズワルド隊長「な…」

ジェズム「はぃ！？」

アルベルト「おぃ、冗談だろ!?」

アグナス「な…なんと…」

オズワルドは信じられない表情を出しながら自分の下へ歩み寄ってきた人物を見て絶句し、他の兵士達も唖然としながらその姿を見る。
それは腰辺りまでしかない栗色の髪を持つ小さき存在…

ディク「僕が今後の指揮を取る。さっき林檎の木に住んでいた大天使（エツィオお兄ちゃん）様と“契約”してきたから。」

第百二十六曲　土筆塔と小さな契約者の力ハナッから開花！

―回想　８００年前以上　フランスオルレアン　ジャンヌダルク邸屋敷内　臨時会議室―

ディク「僕が指揮を取ります。お願いです、やらせてください！！お願いします！！」

ジェズム「！馬鹿が！！お前みたいな戦を見たことも無い餓鬼が、今後の指揮者につと…へっ！？だ…大天使様と契約したぁぁぁぁぁぁぁ！？！？！」

アルベルト「ば…馬鹿な、お前のような１０になる子に…何故！？」

ジェズムは臨時会議室に入ってきた第三者…ディクの姿を見て、一瞬役不足かつ場違いだという風にディクを怒鳴りつけたが、“大天使との契約”という言葉を聞いて思わず顎が外れるぐらいに大きく叫びながら、床に転がった椅子をガタンと軽く蹴る。

アルベルトも若年ながら“かつて魔女と契約した大天使”が今度は“魔女の弟”にまで手をつけて、いままで恐れていたことが現実と

なってしまい両手を頭部に当てて絶望するような表情を出す。しかし…

ディク「僕は“外部の力に酔いしれて溺れてしまったお姉…クソジャンヌ”のような“何もかも駄目人間”には絶対にならない！…大天使…いや、“エツィオ兄ちゃん”は僕を見た途端“Ｏ・ＲＥと相棒契約やらないか★”といわれたんだ。まぁ“俺ＴＵＥＥＥＥＥＥな最凶軍師”が今此処に誕生というお約束展開（以下省略）だから…」

ジャズム「な…（おいおいおいおいおいおいｗｗｗ自分の姉を“呼び捨てしている”し“最低評価というワースト人間呼ばり”しているぞ…（（（（（（（。Д。；））））））」

アルベルト「（と…所々子供っぽくない“問題発言”がポロンポロォンと出ている。が…これは良いのか？掲載しても本当に大丈夫なのか！？Σ（´Д`；）」

契約と言うより“僕を完熟するまで知識・技術を鍛(おし)えてくれる”んだと言って、兵士達が思っていた“第二次の魔女”の到来のフラグを粉々に打ち消す。

―それよりも、ジャンヌの弟(ディク)の口調が、子供ならぬ“ドSと腹黒が所々出た大人並の言動”で周囲の兵士達を後を引くぐらいに仰け反らせていた。―

兵士Ａ「（おかしい…色々とおかしいｗｗｗ何だよこの…“いきなり何コノ超展開プリッ”はｗｗｗ）」

兵士Ｂ「（つーか…一瞬キャラの性格が恐ろしいぐらいに変わっていたなｗｗｗ（数秒間だけだけどｗｗｗ））」

ディク「お願いします！僕に指揮を取らせてください！！僕が全ての責任を請け負います！やらせて下さい！」

オズワルド隊長「信じられん…裏庭の林檎の木に宿っていた大天使が“直々手を貸す”とは…！」

アグナス「し…しかし、我々にはもう“時間が無い”のだ。契約者がディクになったとしても…」

契約がどうであれ真相を知った兵士達は、もうどう足掻いても絶望でしかない…漸く知った真実が闇に葬られてしまう“最後の戦い”が訪れようとしているのを思い誰もが落胆していた。が…

ディク「大丈夫、“僕と兵士達の生きる時間”はまだ沢山ある。それを今から“証明する”よ。」

ドヨンとした空気の中ディクは落ち込んでいる兵士と違い希望に満ちた表情を出しながら、臨時会議室にあるカーテンが閉じられた一つの窓へと歩み寄る。

アルベルト「時間が…ある…だとっ！？」

ジェズム「な…何言っていんだこの餓鬼っ！俺達にはもう…」

アルベルトがディクの発言で絶句している（数秒間によるドS＆キャラ崩壊発言によってｗｗｗ）中ジェズムは半ば仮にも指揮者が“子供”ということで苛立ちを覚え、左手の平にパシンと丸めた右拳を叩きながら窓脇に移動した少年（ディク）へと歩もうとしていた時…

ドォォォォォン！

ジェズム「うわぁぁぁあぁ！？！！！」

アルベルト「うっ！？」

オズワルド隊長「なっ…これは何だ！？？！！」

突然何の兆候もなく今居る臨時会議室…否国全体に地面が浮き上がるような震動が走り、ガタガタと椅子とテーブルが“上へと何度も波打つ”ように揺れて、部屋にいた全ての兵士達が不意の激しい揺れに耐え切れず腰から床に落ち、一部の者は尻から落ちて尾てい骨を打ち痛みで身体を何度も横に転がりながら床に着いた。

ジェズム「いっっっっっってつぇぇぇぇぇぇぇぇぇ俺の“マグナムド（ピーーーーー）がぁぁぁぁぁぁぁぁ」

アルベルト「どさくさに“禁止用語”使うなボケ那須がぁ！！！！（怒）ちったぁお前の（ピーーーーー）ぐらい言葉に出さ「お前ぇも同様に言うんじゃねぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

ジェズムは波打つ床に何度も身体ごと“活きの良い魚”がピチピチとのたうち回るように転がり、両手で“大事な部分”を隠すように悶絶しながら“なんと言う禁止用語”をベラベラと吐く。

アルベルト「あぁ！？お前のような（ピーーーーーーー）で（ピューーーーーーーー）な所なんぞ…鍛え足りない証だな。この（ズギューーーーーーン）め！！！！」

ジェズム「あんだとぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！！？？！テメェのような（ズバズガズギュギュギュン）と（ズドゴォォォォォォォォン）は地に（◯♂♀∞£％＃＆＊@§℃¥＄¢★◯●）」

オズワルド隊長「（段々と伏せ字が酷くなってるな。）」

そんな無様姿にアルベルトは身体を蜘蛛のように伏せて衝撃をこらえながらジェズムに激を放ち、彼も同様“良い子は使っちゃだめよん♪禁止用語”を言い互いに“バリ★キタネェ阿呆用語”を使いながら子供のように言葉だけで喧嘩していた。

ジェズム「テメェが死ね！」

アグナス「あぁ！？お前ぇが死ねっ！！」

ジェズム「ド頭カチ割れやっ！！！」

アルベルト「消し炭になりやがれっ！！！！」

アグナス「（こんな状況で…まったくあの二人だけは…ハァ…）ま…まさか悪魔共がしゅ「違うよ。エツィオ兄ちゃんが“結界の要となる霊柱”を呼び起こしたんだ。僕に…」

そんな“低レベルによる痴話喧嘩”の最中、アグナスは震動で左腰から落ちて這いずり状態になりながら近くにあった壁によたれかかるように身体を支えて、激しく揺れている部屋全体の中左手を壁に

付けながら苦い表情を出したが…

―ディクはエツィオに認められた契約者としての力の現れなのか“震度８以上の震動でも平然”としていた。―

ディク「エツィオ兄ちゃんの力は僕にとって“強大過ぎる”…いえ、この力は“必要な時”のみ振るうべきだと思う。だから…」

いまだに屋敷全体が激しく揺れる中、“ふらつきすら無く”ディクは真顔のまま閉じられていたカーテンの裾を掴んで、横へと開くように外の景色が見えるように全開に開ける。

オズワルド隊長「これが…お前の契約したエツィオとか言う大天使の…」

アグナス「我々は…夢に…でも…見ているのか!?」

オズワルドは伏せ状態から一見窓に映る物体を見て驚愕の表情を出し、身体を壁に背中からぶつけて数メートル先にいたアグナスも同様背に力を入れながらグイッと立ち上がる。

ディク「夢じゃないよ。これが…」

窓に映る外の景色…土筆のような外見に古びたように茶色い煉瓦造りの長ヒョロィ塔が、各階層の空気穴らしき四角の形をした小さい穴から砂煙が上へと登り出る度に吹き出てくる。

ディク「契約した時の“力の一部”…と言うかな？…とりあえずエツィオ兄ちゃんの“代弁”だけど、《この国の入り口周辺に“北東　南　西”に一つ塔を出した。今から“超超超超超超超超超の史上最強の超超超超超超超反則結界（スウトオウレエエエンジユウウアアア）を張るから、ディクに従うクソ共…良く見ておけ。》だって。」

オズワルド隊長含めて全兵士「「！」」

立ち上がったオズワルドとアグナス含めて兵士全員が、ある者は地に伏せたまま、ある者は壁に背中からよたれかかるようにして付けながら外部に映る土筆の塔を一斉に見る。

そして土筆のような塔がある程度月まで届きそうぐらいに天へ登って止まった後震動が止んで、頂部分である土筆の蕾がクパァ♪と花のように開く。

そして開かれた花の中心から七色の光を放つ球体がポコンと一つ浮かんで、虹の球体が数メートル上へと上昇した後…

シュオオオオオオオオオオオオ

球体は北へ向かって虹の軌跡を描きながら飛び去り、窓からしか見えない兵士達は何事かと窓へ詰め掛けた瞬間…

ディク「これが…僕の為に与えられた“時間の場”！」

夜空に白い閃光が眩しいぐらいに光った時、徐々に虹色の帳のような光が南へと広がりながら夜空の配色を変えていった。

第百二十七曲　どう見ても天使には見えないｗｗｗ

―回想　８００年以上前　フランスオルレアン　都市内にある一つの見張り塔　エツィオ視点―

エツィオ『おっと…ここまで迫ってきていたのか。気が早ぇ奴らだ。ｗｗｗ』

魔神（エツィオ）は中心都市内にある見張り塔の頂にある艀で小鳥のように座りながら、都市外にいる下級含めて中級悪魔達が逃がさないように都市外周りを“数の暴力ごとく地平線まで包囲している”のを見る。

エツィオ『これじゃ何時攻められてもおかしくないな。特に今のような指揮者が居ないとなる…っと。』

エツィオの金色の鷹眼に映る都市の外部に集う悪魔の軍勢…下級兵・中級兵は口内の牙をガチガチと上下に動かし牙と牙を擦り合わせながら、背を猫背になるように曲げて手にする魔力で形成した黒い霧状の剣を持ち、今か今かと攻め時（食事時）が来るまで不気味に笑いながら心待ちしていた。

本来の魔神の姿のままエツィオは両眉を下に下げてふぅとため息を

付いた後立ち上がり、たくましい魔神の背中を見せながら屋敷にいる契約者（ディク）に向けて“思念（テレパシー）”を送り、見張り塔の中心へと歩みなおし再度真正面へと振り向いた後…

エッィオ『Ｉｏ　ｌａｓｃｉａｉ　ｌ'ｉｍｍａｇｉｎａｚｉｏｎｅ　ｃｏｍｐｒｅｎｄｅｒｅ（生きる総ての世界の魂と共鳴）』

魔神（エッィオ）は足先をクロスさせて背筋をピンッと“半ジ●ジョ立ち風”伸ばし両手をハ●レンの練成術発動のように合わせた後、青白い光が合わせた手の平から放ち今立つ見張り塔の石床に向けてイタリア語を吐きながら両手を着けた瞬間…

ドドド

エツィオ『Ｖａｄａ　ｉｎ　ｐｅｎｓｉｏｎｅ　ｄａｌｌ' ｏｓｃｕｒｉｔ?…』

虹色の光を眩しい位に放つ右腕を上へと掲げた時、球体がスゥ…とエツィオの手の元から離れて空中に漂った後、四つに分裂して高速に東西南北と一球づつ飛翔しながら頂部分の土筆のような部分に当たった時…

＼クパァ／／コパァ／／クピョォ／／ポミョォン／

召喚した四つの土筆の頂の蕾部分が花のように開いて頂の部分から塔の根元まで白色の色が浸透するように塗り換えられていき、初回は塔自体が赤茶けて見た目からにしてへし折れそうに古びていた印象から“改装建築”したかのように塔自体が生き返る。

そして開かれた塔の中央から聖火台のようなモノがグニョンと出てきて、灯すところからエツィオが放った光と同じ七色の球体が出てきて一つ一つの塔から光が天へと昇って宙に停止し、七色の球体が交互に混じるようにしてＸ字を描きながら天の中心にぶつかった後…

エツィオ『Ｕｎａ　ｃｉｔａｚｉｏｎｅ!“Ａｔｈａｒｖａ－Ｖｅｄａ”!!（召喚!アタルヴァ・ヴェーダ!!）』

口元を吊り上げてニタリと笑う表情を出しながら“カメラ目線”に向けてウィンクを咬まし、身体を横に“ゲッツ★蠑歩き移動”しながら画面外へと消えた途端…

天の中央に混じった四つの虹色の球体が更に眩しく輝き始めて迸った後、虹色の軌跡を描きながらカーテンを敷くように光の帳を広げていき、都市全体の隅々まで魔神による“史上最最最最最最最最最最最強の超反則結界”が敷かれた。

エツィオ『よし、これなら少年（ディク）が完全に“俺ＴＵＥＥＥＥＥＥＥＥ”に成るまで十分な箱庭完成…おっとΣ（・・）』

エツィオは満足の表情を出しながら己の超反則の力を見て頷くように顎を引いた後、ピクンと両側サイドの付いた竜のような前に突き出している両銀角の裏に隠れていた尖った耳が軽く動き、エツィオは耳から聞こえる“契約者の声”を澄ませながら聞き、魔神の身体を屋敷がある方向へと向ける。

エツィオ『…あー…わかった、ディク。今からそっちに行くよ。ん？…オイオイｗｗｗ俺のような“大天使様（´，―ゝ、）”がくっだらねぇ寄り道なんかせんから…ははっ！、ちったぁ安心しろＹＡ★ｗｗｗ』

エツィオは契約者の声を慌てっぷりの声を聞いて（´ε、）ブフッと腹をくに折って笑った後、腰のコート状の翼を本来の巨大な竜の

翼へと変えて右足を軽く蹴り宙へと浮かぶ。

エツィオ『今から行くよ。なんにせよ説明しなくちゃいけねぇ所が、めんどくせぇぐらい出てきたからな。』

エツィオは思念で契約者にそう伝えるように言った後、両腰の翼を広げて腕を後ろに下げるように下ろし、滑るような形で滑空しながら契約者がいる屋敷へと飛び去った。

…

……

……

ージャンヌダルク邸屋敷　屋敷入り口門前ー

一方ディクと寄せ集めの兵士達は外に出て異様な光景にディク以外全員“顎が外れるぐらい口を大きく開けながら”唖然しており、漆黒に包まれた夜空が“薄い虹色の光の靄が掛かった変な空間”になっていて、いまだに天の中心辺りから帳のような膜が何度も広がるように出てきていた。

アグナス「むぅ…ワシらはまるでのあのときの思いが現実となった“夢の中”にいるみたいだ。だがこれは…」

オズワルド隊長「俺達が此処に立っている以上“夢”じゃねぇ…生まれて４０数年経つが、こんな“奇妙過ぎる体験”なんぞ一度きりだろう…」

そんな最中アグナスとオズワルドは冷静に保つように表情を崩さず両腕を組みながら立って、張られた結界内の光景を見ながらそっとつぶやいていた時…

ディク「あっ！来た来た！おーいエツィオ兄ちゃん此処だよぉ～！！」

ディクは飛んでくる黒い物体を見ていまどきの子供ように笑顔を出し、おーいとでも言う風に両腕を何度も横に振って此処にいることを向かってくる小さき黒い物体に示す。

ディク「こっちこっち！ここだよぉ～！！！！」

ジェズム「おぃディク、そんなに大きな声で呼ばなくっても分かっ…お…ぃ…。」

アルベルト「アレがかつて魔女と契約した現ディクと契や……え、…。」

オズワルド隊長「お…おぃ…あれ…は……」

徐々に近づいてくる黒い物体の正体を見て兵士達ははしゃぎ回るディクの表情と逆に“眼がアボーンと飛び出すぐらい身体が彫像のように静止”しながら、ディクの元へ降りてくる“怪獣のような男”の体格を見る。

アグナス「これが…大天使…様……？」

人間サイドからにして見た本来の姿である魔神（エッィオ）の第一印象…両腰に生えたおとぎ話に出てくる巨大な竜の羽、背中の中間辺りから生えた怪獣のようなギザギザの背鰭が尾先まで付いた長々しい尾。

掴み一つで人間の頭など捻り潰せるぐらいに禍々しい両腕に、頭部は人の顔を保ち目元と額に隈取りのような青い紋様が刻んだ灰色肌のお…“半人半竜”。

ディク「エッィオ兄ちゃんの本来の“大天使様の姿”だよっ！みんな、挨拶して！！」

ジェズム「ば…馬鹿…これは…」

アルベルト「あ…あ……」

―悪魔だぁぁぁぁぁぁぁ！！！！（涙）―

第百二十八曲　省いて省いて省いｒｙ（…サクッと進もう！ｗｗｗ

―回想　８００年前　フランスオルレアン　ジャンヌダルク邸屋敷入り口門前―

翼を数回羽ばたかせながら魔神（エツィオ）はゆっくりと地上へと左片足から着けて、ズシンッと地面が沈むような音を立てながら右足を着けた後完全に地上へと降り立つ。

腰から出ていた巨大な両翼を折り畳んで、両翼を地上用のコート状の裾へと変化させた後顔を上に上げる。

エツィオ『おっす！俺はディクの契約者であり“ＴＨＥ★コォォォウチィ”なエツィオＤＡ！よろし…おろぉぉぉぉんっ？？？？』

エツィオは魔神の姿のままフレンドリー並みに笑みを出しながら左腕を上げて、左手を額辺りまで寄せて挨拶の言葉を言ったが…

―兵士達全員が口から何か“白い変なモノ”をブクブクと吐きながら、瞳孔を開きつつ全員が“仰向けのまま失神”していた。―

エツィオ『あぁんだぁよぉぉぉぉぉぉ（、ε′）何勝手に気絶してんだ、此れからディクに従うクソ人間共！』

ディク「あっ…多分、今のエツィオ兄ちゃんの“本来の姿”を見て、倒れちゃったと思う（－ｏ－；）…（何か数人股の所から“シミのような痕”が広がっているけどｗｗｗ）」

エツィオ『えっ！？そうなのか！！？？！たくっ…７０年以上も雑魚悪魔と戦い続けているコイツらが何で俺ごときの“大天使様（※何度でも書くが魔ｒｙ）”のスゥンバァァァラシィ美姿に気絶するんだよｗｗｗ』

ディク「突然のことだったから皆ビックリしたと思ｒｙ（えっ！？アレってもしかして（ピーピー）なの！？嘘ぉっ！？大人でも（ズギャァァァン）が出ちゃうなんて…嫌っ…絶対大人になったら、“あの姿”なんてならないぞ！！…決して。）」

エツィオは全員仰向けのまま気絶している無様姿（クソだらしねぇ）を見て、額を左手の平に当てながら両肩をガクンと下に落とし落胆という溜め息を付く。

一方隣にいたディクは表面は兵士達の状態を見てエツィオに良フォロー？を告げるように言ったが、裏面は一部兵士達の股間から“シミのような痕”を見て途中“プギャァ★アウトォォォ語”が都合

により伏せられる。

しかし…“腹黒い一部”も出ていたが、それは作者の投稿精神的によりに付きｒｙ（

エツィオ『たくっ…このままずっと寝ていちゃ話が“全然進まねぇ”し、そろそろ“現代編”へと繋げたいから…』

魔神（エツィオ）は頭部をポリポリと右手で掻くように動かしながら、呆れた表情で頭部を掻いていた右手を額に翳すように持ってきた後…

エツィオ『ヒューマン☆メタモルフォーゼｉｎ俺！！』

額に翳していた右手を左へと動かした瞬間、青白い光を放ちつつ電子音と共に元の黒いアサシンローブと鎧を纏った人間体に戻る。そして…

エツィオ「禁断魔力解放！“アニムス２．０ＴＨＥスキップメモリーＤＯＮ”！！」

ディク「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！？？！！ちょっ！！！！それはちが…。。Σ（Д）」

両眼と開かれた口からビィグォォォォォォーと“黄金の光線”のようなクソ危ない光を“閲覧者用カメラ”に向けて放つ。

ディクが言っている意味が違うことに突っ込みながら言っても既に遅く、エツィオの吐かれた口と両眼のWチート（ダァブゥゥゥル）ギャグ光線が“カメラ”に当たってブシュゥと何かが“蒸発するような音”が鳴って画面が突然暗くなる。

エツィオ「さぁ、限られた小説内にてさっさと“俺TUEEEEEEEEEE編”に突入しないとな！！」

ディク「う…うん。（え…カメラが“溶けた”んですけどwww）じゃぁ早くジェズム兄ちゃん達を屋敷の中に連れｒｙ」

エツィオ「いや、一人づつ運ぶのは面倒だから、俺の魔力で宙に浮かせた後“全員ダーツ投擲”して屋敷の中に入れてやる。」

ディク「ちょっ！待ってエツィオ兄ちゃん！そんなことしたら《ガシャァァァァァン！》うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

閲覧者用のカメラが壊れて映像は映せないが、取り敢えず“音”だけ聞いて“生々しい出来事が起きている”ことを閲覧者の脳裏の想像力に任せる。

もしカメラを壊さずそのまま映していたら……ねっ？　ｂｙ作☆者

…

……

……

―数分後　ジャンヌダルク邸屋敷内　臨時会議室―

数分前エツィオの魔神姿で気絶していた兵士達は、屋敷内に入れるべく全員魔力で身体ごと浮遊させて“全員ダーツ投擲”して屋敷内に入れさせられた後、エツィオの治癒魔力で全員気絶状態から復活させられた。

回復した彼らは怪獣のような姿から人間になっているエツィオの姿を見て、またしても驚くように挙動不審状態に陥りながらもディクのＮｉｃｅ☆フォロー説明によりようやく彼らが落ち着いて数分…

オズワルド隊長「まさかお前みたいな“若僧”がかつて魔女と契約していた“大天使”様だとな。」

ジェズム「へぇ…これが大天使様が人間になった時の姿かぁ…」

オズワルドとジェズムは両腕を組ながらディクの隣に立つエツィオの容姿を見て、自分が描いていた“妄想エロ天使”の姿と今の“半人半竜から人型へと戻った変な衣装を纏った男”の姿と二次元と三次元と全然違っていたことに…

オズワルド隊長「（まだ“餓鬼”じゃねぇか。）」

ジェズム「（俺と対して変わりねぇ顔付きだな。ケッ（、Д,）っ）」

何かと“超…残念な表情”を出しながら、心の中でブーブーとブーイングしつつ大天使（※魔神エツィオ）を見る。

エツィオ「聞こえたぞ“クソ餓鬼”共。アンタらが言う裏腹に俺はテメェらよりも“数千倍以上”生きているわぃ（、皿,#）それに俺の羽織るアサシンローブはテメェらが羽織る“紙鎧”よりかは“すっごい頑丈”かつ（省略）…俺はテメェらよりかは“多くの実績獲得しているん”じゃぃ。」

オズワルド隊長「!?Σ（Д）な…何故分かった!?」

ジェズム「おまっ!ちょっ…そこまでお見通しなのかよ!?（てか

…実績って“作者がアサクリ2プレイ時のフル実績獲得”の意味なんＤＥＡＴＨか！？）」

エツィオに心の中の本音を全て“見据こされた”ように驚き、ドヒィィィン風に二人は青ざめた表情を出しながら、エツィオの口内が魔神化した時の悪魔のギザギザの牙のようなモノを見て、“（、皿´＃）イ〝ー”をしているエツィオから離れるように数歩退く。

エツィオ「まぁ“ソレ”も含めてだがこの“二次元小説に書かれていない俺の隠された実績”もある！まぁ、それは置いといて…」

エツィオはもうまんどくせぇ表情を出しながら頭部の後方辺りにポリポリと右手で数回掻いた後、隣にいるディクに向けて顔を動かして、数秒ディクだけの契約者同士による思念の会話を無言で交えた後、臨時会議室に集っている兵士達に今の状況とこれからの出来事を彼らに告げる。

エツィオ「めんどくせぇから“作者の都合による安心★簡潔★説明”をサックリ言うぞ。まずお前らがいる国に間に合わせの結界塔を召喚して“隅々”まで張ったから、外部にいる悪魔からの進行を“完全にシャットアウトした”のでもう国自体もう安全。たとえ悪魔が人型になってもこの俺の魔力が展開した極光結界内に入った途端“跡形もなく勝手に完全消滅”するからま…いや大天使様による史上最強のセキュリティはほぼバッチグゥだＺＥ★」

寄せ集め兵士-ｓ「「おまっ、安心は良いとして文自体“簡潔になってねぇぇぇぇ”ｏｒｚ」」

兵士達はエツィオの“超★長ったらしい台詞”を聞いて額から数滴汗を流しながら、呆れた表情でエツィオが何処からか取り出した“小●館☆落書き帳”に色とりどりのクーピーを右手で鮮やかに走らせながら描く“超ヘタクソな画”を話を聞きつつ視線だけで追う。

エツィオ「次ぃ、俺の召喚した史上最強の結界塔でももともとのこの土地にあったクソ弱ぇ霊地（マナ）の魔力が、“俺のすさまじぃ（プロアク以上）魔力に付いてこれない”もんで、定期的に尾俺の魔力を注ぎ込んでも長くて“３０年程度”しか結界の効力は持たん。」

オズワルド隊長「となると…この３０年の間に指揮者（ディク）を強くしなくちゃいけない…か。」

アグナス「ディクにとっては、長い道のりじゃな。その間にこの老体のワシも生きていれば良いのだが…。」

オズワルド隊長「いや、アンタは絶対に生きてくれ。新しい指揮者（ディク）がクソ悪魔共との戦いを勝ち誇る姿を見届けてくれや。」

最初だけ兵士達はもう突っ込んでもいいじゃねぇかぐらいの表情を出したが、次の説明台詞を聞いて兵士全員真剣顔になり、エツィオ

が描いた絵を見つつ数人エツィオの隣に立つディクに視線だけを動かして、そっと微笑む表情を出しながら小さくボヤくように吐く。

ジェズム「“３０年じゃあっという間”だな。となると３０年後…俺達が戦ってきた悪魔共の戦いが始まって…」

アルベルト「あぁ、“１００年”になるな…。その時俺らも…」

―新しい指揮者の下で、お互い生きていれば良いな。―

第百二十九曲　色々とカットして舞台はお祭り現場へ！

魔神（エッィオ）の説明を聞いた生き残りの兵士達と契約者の少年は、限られた時間と充実した最強結界の中でいまだに外部に集う悪魔に対抗するすべを学ぶべく、魔神の知識・生き残りの兵士達の戦闘技を必死に身体に叩き込む。

時には身体そのものが悲鳴を上げるほど痛みつけて、足が震えて立てなくなるほど苦痛と恍惚と激昂、指揮者としての多大なる外圧を押し寄せる津波のように、幼き身体に容赦なく身に叩きつけられる感覚を受けたが…

―国（みんな）を絶対に…護り抜く。―

“護りたい思い”がボロクソだった少年の身体を支え精神的にも強くなっていき、徐々に少年は大きくなって青年期…そして…

―回想　８００年以上前　フランスオルレアン　色々ありましたねぇ３０年後　国外の何処かの荒れ地―

ワァァァァァァァァァ

人間・悪魔の怒号と悲鳴が至る所に飛び交うように響き渡り、激しい鋼の音と足音が大地を引き裂くように轟かせる。

人間軍Ａ「うぉおおおおおお！！！！！」

悪魔軍Ａ【ゴハァァァァァァ！！！！！】

人間軍Ｂ「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラァァァァァァ！！！！！」

悪魔軍Ｂ【ギシャァァァァァァ！！！！】

戦禍が更に激化し段々とドサリッドサリッと斬られた肉が落ちる音を次々と立て、次々と生きていた頃の新鮮な肉片（かたまり）が細かくより細かく雪のように積み上げていく。

人間軍Ｃ「ぐわぁぁぁぁ！！！！！」

悪魔軍Ｃ【ガッ…ガガ！！】

人間軍Ｄ「ぎゃ…ぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

悪魔軍Ｄ【ギャヒィッ！！！！】

互いに斬り合い殺られた者は人間・悪魔問わず四肢の一部が噴き出す鮮血と共に飛び、断末魔と共に大地へと沈むように倒れ込んで、倒れた敵は更なる敵の容赦無い追撃で頭部や首に人間の剣・悪魔の爪が叩き込まれて完全に生き絶える。

人間軍と悪魔軍がぶつかってから数時間たっても互いに“五分五分”の軍力。前指揮者であったジャンヌと違って今回人間軍は戦略をきちんと立てながら僅かに悪魔軍より戦力が上余っていた。何故なら…

ズドォォォォォォォン！！！！！

オルカンＡ「ギャァァァ！！！」

オルカンＢ「ギヒィィィィィィ！！！！！！」

ネロマテＡ【グギャァァァァ！！！！！】

ネロマテB【ギャォォォォォォォ！！！！！】

戦禍の中ぶつかり合う人間と悪魔軍の中央辺りから対英雄兵器であったオルコカンニバーレと、テンプル騎士団の下級・中級兵達が“天まで伸びる巨大な白い柱のような直線上の物体”に“核爆発でも巻き込まれた”ように軽々と“万ぐらいの悪魔軍が落雷のような音と共に吹き飛ぶ”。

ネロマテD【ナ…何ダアノ光ハ！！？？！】

ネロマテE【ニ…人間共モ我ラト同様ニ巻キ込マレルハズナノニ…何故！！？？？】

核爆発した箇所でも“人間軍だけは巻き込まれず”、白い光の中にいた“悪魔軍のみ跡形もなく全滅”されていて、遠くにいた悪魔軍達は驚愕の表情でも出しているかのように数歩足を後退させる。

だが突如中央に発生した謎の光は“まだ消滅しておらずそのまま杭でも打ち付かれた”ように残っていて、光の中に入った悪魔軍のみどんどんと“身体ごと消滅”させられ悪魔軍の軍力が削られていく。

ネロマテD【馬鹿ナ！！人間ニハ元々我ラガ振ルウ“魔力”ハ無イハズ…】

？「ならば教えてやろうか、テンプル騎士団の下級兵共？」

ネロマテD&

ネロマテM【キ…キサマ!?!?ナ…何者ダァァァァァァァ!!!!】

オルカンM「ギシャァァァ!!!!」

あっという間に“５万ぐらいいた悪魔軍がフードの男の一撃で消滅”されて、辛うじて生き残ったネロマテとオルカン数体はたじろぎながらも爪の音を立てて仲魔を消滅させたフードの男に斬りかかる。

？「やれやれ…。お前達悪魔だろ?優先的に倒すべき“相手が直ぐ目の前にいる”ことに分からねぇのか?」

ネロマテ・オルカン・S「【!!?!?!?】」

突然男が被っていたフードが前にいたネロマテ&

たオルカンの頭部から股に掛けて二体同時に縦一直線に解体する。

更に横から襲い掛かるネロマテとオルカン数体をスライディング状態から、身体をクルンと海老反りするように曲げて地に両手を着き両足を綺麗に上へと上げた後…

？「俺様の華麗な美脚に酔いな。」

ズドォン！ズガンッ！！ドォォン！！！

両足の付け根辺りから“護身銃（リボルバー）サイズの白銀の銃”が飛び出し、襲い掛かる敵に向けて“お釈迦寝入り体勢”“イナ●ウアー体勢”“空中静止版ラ●ダーキック”“逆☆鯱体勢”“身体文字のW&Z”の体勢”等の“お馬鹿丸出しの射撃体勢”を取りながら次々と男の思念で発泡し、襲い掛かるネロマテ・オルカン達を確実に“頭”に当てて完全に撃ち殺す。

粗方撃ち殺した男は半立状態から両手に力を入れた後、ネロマテ・オルカン交差するようなタイミングを図った爪払い攻撃を、男は地を蹴るように軽く飛翔し斜め回転しながら華麗に飛び越す形で攻撃を避けた後…

？「戦場に正義など無い。ただひたすら狩れ狩れ狩れ狩れ狩れ狩れ狩れ狩れ狩れ…狩り取れ！！！！もぎ取ったモノは全てっ…」

逆大の字になりながら身体を翻し右腕の袖からもうひとつ左手と同じように隠し刃を飛び出した後、交差払い攻撃を仕掛けようとしたネロマテ・オルカンの頭部から首筋に掛けて深く突き殺す。

頭部を貫かれて破壊されたネロマテ・オルカンが力無く地に倒れたと同時に男は宙を翻しながら綺麗に着地し、少しずつ立ち上がったことでようやく男の素顔と正体が明らかになる。

？「待たせたな、今から“俺ＴＵＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥ無双”始まるぜ。次回からなっ！！！」

第百三十曲　ノリ★ノリ　ＤＥ　Ｌｅｔ’ｓ　Ｄａｎｃｅ　Ｂｏｙ♪

－回想　８００年以上前　フランスオルレアン　３０年後　国外の何処かの荒れ地－

ネロマテＯ【有リ得ヌッ！魔力ヲ持タナイ“下等ノ人間”ガ“最強ノ光ノ魔力”ヲ持ツナドト…ッ！！！！】

生き残っていたネロマテの一部が華麗なる美脚にて射殺された悪魔の死体が、ボロンボロンと地に落ち中央に立ち上がる男の姿を見ながら驚愕の表情でも出しているかのようにたじろぐ仕草を取る。

頭部の無い撃ち抜かれた悪魔の死体が地に落ちた途端、粒子のような細かいダイヤ状の光となって“跡形もなく綺麗に蒸発”しどんどん悪魔軍の仲魔が消滅していく。

？「“連載１３０回目”にして過去話で悪かった！本当に本当に本当ぉぉぉおおぉぉぉぉぉぉぉぉに閲覧者の皆に申し訳ない！！、まぁ謝罪という名の処置を今ここで…（＾＾）」

フードを脱いだ男の容姿…長くなった栗色のメンズ髪の頭部裏を赤

いリボンで髪を一つに縛り、口の回りと顎下に黒い髭が生える。服は黒いフード付きのレザージャケットのような皮生地に両袖から飛び出し刃が出る。

下半身は膝下まででですそが括られた黒いニッカーボッカーズ風の皮生地を纏い、両足には悪魔を葬った銀色のリボルバー付き短銃黒ブーツを履いていた。

？「鎧なんかつけていると重くて重くて、軽々と動けないからなぁ～…だから“余分なモノは全部省いた”。ただお前達を多数相手に掛かるとなると…ね♪」

鎧や篭手さえ“装着せず軽装のまま”戦火に立っていて外見４０を少し過ぎた“パーフェクト　ｉｎ　ｔｈｅ　完熟髭男”が、自分を囲っているネロマテ・オルカン達を…

―口元に右手を寄せて投げキッスするような仕草で右足を近くに積み上げられていた瓦礫を踏みにじるようなドS体勢で、いい年こいた完熟男が不気味な笑みで悪魔軍を挑発していた。―

―コレが真ジャンヌ・ダルク伝説　ディク（完熟版）―

ネロマテO【ナ…ナンナノダコノ人間ハ！？？！！】

ディク「はいっ！突っ込みどころはここまで！！さっさと楽しい“ア・ホォ戦闘シーン”を繰り広げたいのでぇ（＾＾）ｐ」

ネロマテＯ【！？】

いい年こいていた大の大人の人間が気色悪い表情を出しているのを見て、一部のネロマテ達はハァ？（。Д。）と口を開けて呆然としながら中央にドＳ立ちしている男（ディク）に言った時、突如目の前に“黒い残像”と共に“Ｙｏｕ★ファッキュゥ”風の表情を出すディクが現れる。

表情は微笑んでいても右腕の右親指が“下”に向けられていて、代わりに左腕の人差し指がネロマテの鼻先に当てられた瞬間…

ディク「Ｂａｄ　Ｂｏｙ（＾Д＾）ｍｇ★」

ドチャッとディクの左人差し指で鼻先を突かれたネロマテが突如一瞬の内に“内部から爆発する音と共に頭部が消失”し、血さえ噴出すことが出来ないまま頭部の無い死体が仰向けの形で大の字に倒れる

ディク「これぞ秘儀“北●百裂拳”だ。人間だってやれば出来るんＤＥＡＴＨ！！」

ドシャッと倒れると同時にネロマテの至る所の身体から穴が出てきて、風穴が開いたところからダイヤ状の粒子の光が細かく分裂していきながら、死体が一つの光となってこの世から完全に消えていった。

ネロマテP【ヤ…ヤバイ！ゼ…全軍！！コノ男ヲ…】

甲冑ネロマテ【…畳ミ掛ケロ！！人間共ノ“敵将”ガ此処ニ居ル内ニ！！】

突かれただけで“仲魔が即死”した所を見た他のネロマテやオルカンにない西洋甲冑とマントを纏った“総大将らしき悪魔”が、中央に居る大人ディクに向けて右人差し指を指しながら周囲の悪魔軍に号令を掛ける。

ディク「やってみろよ黒鉛筆共（ネロズマティエーター）。数だけで叩くお前らなんかに…」

ディクは仁王立ちしながら自分を包囲する見かけは5万以上もいる悪魔軍団を見て、肩骨を鳴らし首も軽く横に曲げて身体をゆっくりと一回転させながら見回した後…

ディク「負けねぇよ。」

おちゃらけていたディクの表情が真顔になって、右足を半時計回りに回転させるよう動かしながら、右腕の袖から出ていた飛び出し刃を額に寄せて口元を吊り上げた瞬間…

悪魔軍ｰ　Ｓ？【ゴハァァァァァァァァァァ！！！！！】

悪魔軍ｰ　Ｓ？【ギシャァァァァァァァ！！！！！】

せせら笑いしたディクを見て悪魔共は嫌みを刺したか半激怒し、伸びた爪を前に伸ばし手にする剣を掲げて一斉にディクへと集団フルボッコを仕掛ける。

ディク「んー…」

計り知れない数の悪魔軍が至る所から向かってきているのに関わらず、ディクは欠伸と共に両腕を伸ばし身体を低姿勢になりながら、両足を斜めに倒すように何度も横に動かしストレッチをしていた。

ディクにとっては向かって来る悪魔軍の動きがスロー・モー仕様みたいに“鈍足に見えて”、一体一体動作がわかるような動きを取り、悪魔共の口内にある鋭い牙が剥き出したまま敵意ある視線を全身に

貫かれるように受ける。

そして向かって来る悪魔軍を見てディクは仕方無い風にやや哀れみの視線を出した後、後数メートルぐらいに自分に触れるぐらいまで悪魔軍を引き付けた後…

ディク「ヘイ☆お待ちっ！“俺ＴＵＥＥＥＥＥＥＥＥＥ無双”始っまるっっっよぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！」

ディクは身体を逆立ちにさせて“左片腕だけで身体を支えた”後、身体を回転させてカポエラキックを繰り出しながら、両足のブーツ脇に装着していた短銃を思念で容赦無く悪魔共の頭部に向けてぶっ放す。

ネロマテＰ【ゲ…ヒッ……】

オルカンＰ「ギ……ャ……」

ネロマテＲ【ガ……】

オルカンＲ「ィ……」

ディクの放つ光の魔力が込められた魔弾が的確に前方の悪魔軍団の一隊を頭部裏まで撃ち抜き、撃ち抜かれた悪魔は悲鳴さえ上げられないまま頭部が“蒸発していくように跡形も無く消し飛ぶ”。

更に前方一隊の後方にいた悪魔も射殺された仲魔の殺られた光の魔弾に当たって連鎖的に撃ち抜かれていき、ディクに向かってきた全ての悪魔が一回の銃弾で“全て巻き込まれて”…

シュゥゥ…

ジュッ…

―頭部の無い5万隊以上の悪魔の死体が後ろへと仰け反るように倒れた途端、先程ディクが倒した悪魔と同様に身体ごと光のように消滅していった。―

ディク「残念…俺の髪の毛ぐらい霞み取れば、初ダメ良記念だったのに。」

カポエラ撃ちで自分を囲っていた5万ぐらいもいた悪魔軍を“全員射殺した”後、軸にしていた右手に力を入れて軽く宙で後転し捻りながら元の高姿勢に立て直す。

中級ネロマテD【ゴハッ！】

ディク「！」

突如ディクの背後から巨大な身体を持ち縫い目が多く刻んだ巨人悪魔が、手にする巨大な刺に血付き棍棒を縦一直線にディクの頭部に目掛けて降り下ろす。

ディク「とっ…」

ドゴッ！！！

ディクは瞬時に巨人悪魔の棍棒攻撃を横っ飛びに避けて、ディクがいた位置にO文字のクレーターが出来き、戦場の大地の面を物凄く抉り取る。

長く飛びながら地に左手を付いた後、前転しながら軽くスライディングし脳天割り攻撃から逃れ、低姿勢から高姿勢になりながら身体を捻らせて軽く地滑りする。

ディク「（さっき頭風格（ヘッド）みたいな悪魔がいたけど、何処にいったのかな？まぁ、それは良いとして…）そうこなくっちゃ！戦いは楽しまないと…ね？」

中級ネロマテ【ゴッ！？】

またしても巨人悪魔がディクに向けて棍棒を振りかざし、今度は横一線にかけて周囲にいた仲魔も巻き沿いにしながら、広範囲の凪ぎ払い攻撃をディクに仕掛けたが…

ディクは口元を吊り上げて余裕の笑みを出しながら、少し両腕を後ろに伸ばし“やや荒ぶる鷹のポーズ”を取った後、両足に力を入れて高くジャンプし超人的な飛翔で回避する。

ディク「超☆ドリィィィル！」

ジャンプ回避した後ディクは身体を回転させ両腕を交互にして飛び出し刃を互いに前へと構えた後、中級ネロマテが持つ刺付き棍棒に向けて“台詞通り自身がドリルとなって”棍棒に付いていた刺を“抉り壊しながら”巨大な身体へと真っ直ぐに突っ込んだ後…

ディク「…これが“モノ”を殺すということだっ！（キリッ」

心臓部分がある胸に向けてディクは身体の回転を止めた後、右腕の袖から出ていた飛び出し刃を巨人悪魔の胸に突き刺した瞬間…

ビキキキキキッ

中級ネロマテ【ガ…ヒュッ……】

貫かれた所から徐々にヒビが走っていき、割れた隙間から金色の光が溢れるばかりに出るようにして巨大な身体全体に金色の光が出た後…

ディク「アバヨ、デカブツ。」

パンッと鏡が割れたような音を立てながら巨人の身体が割れて、割られた身体が破片となって地に落ちながら更に細かくダイヤ状の粒子を至る所から零れ出た後、一つの光となって破片達が“地に付く前に完全に宙で消滅した”。

ディク「まだ行くよ！まだまだ物足りないさっ！！」

巨人悪魔を倒したディクは宙で何度も前転した後“カメラ目線”に向けて右足を下に残り左足をノ字に曲げて上半身を上版Cのように曲げて両腕を左足先を掴むように体勢を取りながらキメ☆ポーズをする。

そして何処からかカメラのシャッター音が鳴って「君、分かっているじゃないか（＾＾）」と言って元の体勢に戻った後、落下地点にいたネロマテ達に向けて両足の短銃を思念で撃ち、確実に頭部に当てて射殺する。

その後ディクは地に着いた後襲い掛かる悪魔に向けて走り出し、両腕の袖から出した飛び出し刃を自身を駒のように動くように振るって、勢いを付けながら確実に悪魔共の急所に目掛けて刃を食い込み、頭部を切り落とすと同時に身体ごと光のように蒸発させていく。

甲冑ネロマテ【ナントイウ“人間ノ力”ヨ。マサカ此処マデ我ラハ…】

そんな最中、総大将らしき悪魔軍の甲冑悪魔が戦火から一旦離れた位置の崖の上で押されていく自軍を見た後、ワナワナと両手を震え怒りの表情を出しながらドンドン殺られていく悪魔達を見て身体に禍々しい線が走る。そして…

甲冑ネロマテ【我ラハ…人ヲ舐メスギテイタ！！】

全身に禍々しい線が届いて身体を曲げながら両腕を交差し紫のオーラが浮き出た瞬間、紫色の光が柱のように伸びて天まで届き禍々しい光が止んだ後、本来の総大将悪魔の姿が露になった。

第百三十一曲　人間サイドの“粉砕☆玉砕★大喝采いいいい

砲の砲口が、一斉に火を吹いて撃ち出された砲丸の雨が悪魔に降り注ぐ。

ズドォォォォォォォォォン！！！！！

ネロマテS【ギャガッ！！！！】

オルカンS「ギィィィィィ！！！！！」

撃ち出された砲丸達が地面にめり込んだ瞬間、砲丸が閃光手榴弾のように驚きの白さで眩しく広々と爆発したかのように展開し、爆発した砲丸の光に入ったネロマテ・オルカン達悪魔は眩い光で身体ごと“消滅”した。

オズワルド隊長「第二次光柱展開！奴らを光の中に誘い出せ！光の中で一気に蹴散らす！」

アグナス「さて、敵悪魔の指揮力は低下してきている。そろそろ倒し時だぞ、諸君？」

最前線にオズワルドとアグナスは撃ち出された砲丸の光の中で死にかけの悪魔を止めを刺し、配下を率いりながら剣を振るう。

互いに老兵ながらも表情は楽しんでいるように剣を振るい、３０年前と同じように背中を合わせ、互いに同じ命を護りながら戦う技力は健在であった。

アルベルト「第三次射撃用意！光を絶やすな！！容赦なく撃ち続けろ！！」

アルベルトもジェズムと同じように髭が生えて老けてもジェズムと同じように“お前ぇらもうやっちまぇ（´Д｀）？”風にのほほん＋腹黒い部分が出ながら後ろにいる部下に告げる。

人間軍兵士Ｂ「はっ！第三次射撃体制完了！！テェェェェェェェェェェッ！！！！」

人間軍兵士Ｃ「おっしゃぁ！第四次射撃完了！目標はクソ悪魔だ！今だ、ブッ飛ばせぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

兵士達も超★ノリノリに＼ダァッシャァァァァァ！／とポーズを取りながら右腕を上に上げた後、予め並べていた大砲に次々と火が吹いて凄まじい光の弾幕の雨が戦火に降り注ぐ。

悪魔軍ｰ　Ｓ？【ギャガァァァ…】

悪魔軍－Ｓ？【ギュィィィ…ィ……】

次々と砲丸が大地にめり込まれ砲丸が爆発して出来る巨大な光の柱を、次々っ杭打ちするように立てていき、光の中に入った悪魔達は最後まで絶命する声を上げられないまま身体ごと消滅していく。

光の魔力が込められた砲丸の光で消えていきながらも、一部の悪魔は消え逝く前の足掻きとして腕を伸ばし、残された片目で視界に映る兵士に向けて消え逝く爪先を震えながら伸ばしたが…

人間軍兵士Ｇ「お嬢際の悪い奴だな、アンタ。見ているこっちが辛いよ。」

人間軍兵士Ｈ「人を害なす冷酷非道の悪魔は、さっさとこの世から消え失せろ。目障りだ…」

人間軍兵士Ｉ「とっととおっちね！テメェ！！」

ザクッと消え逝く悪魔の片面の目に兵士は剣を深く突き刺して、一人は哀れみの表情、一人は嫌悪の表情、一人は憎悪の表情を出しながら完全に死にかけの悪魔に止めを刺す。

人間軍兵士G「ディク様が創られし救いの道へ早く入れば、多少は苦痛を味わうことなく楽になれたのに…」

人間軍兵士H「ハインツ…そいつは仕方ねぇのさ。悪魔共は元々人という存在を壊す“心”しか入っていない。悪魔という存在自体が哀れだ…。」

人間軍兵士I「テメェが今まで葬ったその憎たらしい爪で逝っちまった俺達の仲間の…同じような気持ちを受けて、永遠にあの世で後悔するんだな！」

粒子となって消えていく爪の一部が地面に落ちた後、兵士の一人が憎しみと哀れみを込めた感情を出しながら右足で欠けた爪を踏み壊す。

人間軍兵士I「このクソ悪魔に…“俺が出会うハズだった先輩達”を…仇を討ったぞ。」

人間軍兵士G（ハインツ）「長年国を守るために悪魔と戦ってきた先輩達…だけど今までの戦いは…」

驚きのまっ白い背景の中で人間軍兵士の一人であるハインツが、消えた悪魔の位置に向けて視線を送り両目を伏せて、少し過去の戦いを複雑な思いを脳裏に過りながら呟く。

人間軍兵士H「…行くぞリード、ハインツ。俺達に仇なす敵はまだ沢山いる。ディク様から聞いた“偽りの戦いの歴史”は…後にしよう。」

人間軍兵士I（リード）「あぁ。」

人間軍兵士G（ハインツ）「そうだなグラエス。今は奴らを全て滅することだけを考えよう。こんな戦火中に余計な考えなんて…」

一人の兵士が仲間の軽い激に押されるように言われて少し苦笑した後、まっ白い背景の中で人間軍の兵士達は剣の握り束を再度握り直し、決死の勢いに襲い掛かる悪魔に向けて再び戦いの中へと走っていった。

…

……

……

ディク「ハァッ！ヤァッ！！」

ザクッ！ドスッ！！

身体を扇風機のように回転させ両袖から飛び出した刃をプロペラのファンのように凪ぎって、次々と襲い掛かる悪魔を飛び出し刃を首に食い込んで、首を綺麗に切断すると同時に“頭を宙に吹き飛ばす”。

ディク「アヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャ！！！！」

ドゥラァァッシャァァァー！と変な気合い声と共に立ち塞がっていた悪魔に向けて“ドス黒い笑みを浮かべながら思いっきり走り出し”、途中背中から…

ディク「ちょっと通り“魔”っすよ？」

ズバババババッ！！

“ラグディカルグッドスピード第3連チャン（。ε。）＼（￣￣）突っ込みブゥ♪”がディクの右手突っ込みの残像がはっきりと“無駄に残るように出して”、このような馬鹿移動でもディクを畳み掛ける悪魔達は“捕らえることすら出来きず”、逆に捕らえようとしていた悪魔がディクの作り出した残像に触れた途端、“全身が千切りでもしたかのように一瞬の内にバラバラになる”。

ディクは無差別通り魔移動で悪魔を殺しながら進みつつも再度両袖から飛び出し刃…ハイドブレードを出し、立ち塞がっていた悪魔の心臓部分と喉仏に突き刺す。その後…

ネロマテW【!?】

ディク「チィッチキチィィィィィ♪」

ドスドスドスッ♪と突き刺した部分を狂人のような悪人面を出しながら“何度も高速に突っついて”、心臓部分を突き刺した胸部が“中身の組織が見えるぐらいの大きな風穴”を開けて、喉仏を指した首には胸部と同様の“大きな穴が開く”。

ネロマテW【ギ…ャ……!】

ディク「お前、イラネッ!テラ弱ス（笑）」

トンッと2つの風穴が開いた悪魔を右手の平で額に軽く叩いた途端、叩かれた額が頭部ごと“爆発したかのように破裂”し、血と声と音さえ聞こえないまま仰向けになるように倒れた後、頭部の無い死体はさっさと光の粒子となってこの世から消える。

ディク「諦めろ、もうお前達には勝機など無い。」

ネロマテX【ガ…ガァァァ……】

ネロマテY【…グ…グヌゥゥゥ…】

ディクがまだ生き残っていた悪魔を見て両肩をガクンと下ろし溜め息を付いた後、左袖から出したハイドブレードの剣先を生き残りの悪魔に突き付けながら続けて言う。

ディク「今この戦場で残っているのは“お前達だけだ”。他対英雄(オレ)兵器は“全て消失(ロスト)”した。投降した方がイイカモYO？」

ディクの圧倒的強さだけでなく彼の戦略・対抗悪魔の技術で遂に悪魔軍は人間軍よりも軍力が“最低”になり、次々と戦場が光の柱が何度も生えて悪魔軍は完全に人間軍の剣で駆逐されようとしていた。それでも…

ネロマテX【ガッ…ガァァァ！！！！】

ネロマテY【オ…オ前ノヨウナ人間ニッ！！！】

ネロマテZ【落チヌワ！！】

生き残っていたネロマテ達はゴクリッと唾を飲み込んだ後、それぞれの持つ武器を握り直してディクに斬りかかろうと勢い良く走り出したが…

ジェズム「そいつは無駄な…」

アルベルト「時間だったな。」

ディク「あっ（・・）ジェズムとアルベルトだｗｗｗ」

ディクがウハーと良いタイミングにジェズムとアルベルトが来て、喜ぶ表情を出しながら両袖から出したハイドブレードを閉まった直後…

ズバァッ！！

互いに交差するようにして走りながら剣をディクに襲い掛かる悪魔と通り過ぎた瞬間に、ディクに襲い掛かった悪魔が“三枚下ろし風に横向きスライスカット”された。

ジェズム「よくもあの“カオス集団の中”で“傷一つ無く”無事だ

ったなディク。」

ディク「いや、皆のお陰だよ。３０年も俺と長く付き合ってくれて感謝している。」

アルベルト「フフッ！成長したな、ディク。３０年前と偉い違いだ。」

ジェズムとアルベルトは悪魔の血が付いた剣を振り払った後背中にあった鞘に入れて、武装状態を解いたディクに向けて笑みを出しながら歩み寄る。その後…

オズワルド隊長「んっ？ジェズムとアルベルト生きていたか。そろそろ野垂れ死ぬと思っていたが…」

アグナス「ディク…よくぞこの長き戦争の末に生き残れたな…。」

ディク「！オズワルド！アグナス！！」

更に後方からオズワルドとアグナス＋その他の生き残った多くの人間軍がディクに向けて歩いてきて、ややジョークを飛ばしたように遊び発言がジェズムとアルベルトに向けて言う。

ジェズム「なんだとぉぉぉぉぉ！！？？！このナイスガイの俺がこんなクソ共ごときにやられたりはしねぇぞ、ゴルァァァ！！！！」

アルベルト「同感だな。だが俺は隣にいる　コ　イ　ツ　と違って、俺はロン毛クールガイだからｗｗｗ」

ジェズム「ハァン！？何がお前と違うって！？簡潔理由として１２文字以内に答えよ！」

アルベルト「テメェの“頭の構造内がお馬鹿と阿呆の倉庫”だからだ！！クソ猿がっ！！！！！」

ジェズム「全　然　１２　文　字　に　な　っ　て　ね　ぇ！！！！！つーか、俺は猿じゃねぇぇぇぇ●子擬きがぁぁぁぁぁぁ！！！！」

アルベルト「んだとぉ…クソ猿！！！！！●子は余計だ！！！！」

遂に二人（ジェズムとアルベルト）は互いに両片頬をつねるように引っ張り、ギャーギャーと３０年前と同じように痴話喧嘩になる。

アグナス「ほっほっ♪喧嘩する程仲が良いと聞いたが、これはワシ

にとっては良き思い出じゃのぅ（＾ﾊ＾）」

ディク「アハハッ！でも…」

オズワルド隊長「！ディク！？」

ディクは二人の見慣れた日常喧嘩光景に笑いながら、数秒両目を閉じた後…

ディク「勝鬨上げるに…まだ早そうだね。」

オズワルド達含めた人間軍兵士ｰ S「「！」」

ジャキンッとディクが再度左袖からハイドブレードを出し、飛び出す鋼と共に身体を翻しながら後ろに向いて、左腕を前に伸ばした途端…

？《まさか…貴様のような人間ごときに我々が追い詰められたとは！！》

ギャリィィィとディクの背後から斬りかかった赤い大剣を持った巨大悪魔が、ディクの出したハイドブレード先で互いに火花を散らし

ながら簡単に受け止められて、巨大悪魔は余裕顔を出すディクを見て憎悪のような表情を出しながら歯軋りをしていた。

第百三十二曲　ボス戦前→フードは正義

―回想　８００年以上前　フランスオルレアン　３０年後　国外の何処かの荒れ地―

？《下等な人間共(ゴミ)が…誰が貴様ら人間共(ゴミ)に光の魔力を教えたのかは知らんが、光だけで我々を討ち滅ぼそうなどと虫酸が走るわっ！》

ディク「へっ！」

巨大悪魔の大剣とハイドブレードの剣先だけで火花を散らしながら受け止めていた後、ディクは左腕に力をぐっと入れて掬い上げるように腕を振りかざし、自分よりかは巨大である悪魔を“数歩退ける”。

ディク「（これが…友(エツィオ)が言った…人間のように知能がある上、下級中級上級に無い、何かと特化した“特級悪魔”！）」

ディクが見た巨大悪魔の姿…上半身は獅子の様な顔と燃える鬣を炎のように靡くオレンジと赤が混ざった外見をしたマッチョ人型に、下半身は四つ足の馬のような青錆のような色をした固そうに見える

体格。

右手にはディクを斬りかかろうとした巨大な剣が中腹から剣先まで赤熱化したように燃えていて、背中から悪魔の翼のような型を取った炎が出ている巨大悪魔。

―上級テンプル魔獣騎士　レオーネアリーペデ―

ジェズム「ディクッ！」

アルベルト「ディク様！！」

オズワルド隊長「ディク！皆、剣を抜け！！生き残り一体の悪魔を討伐すべく加勢するんだ！！！」

アグナス「ディク君！加勢するぞ！！」

ジェズム・アルベルト達兵士はオズワルドの声で直ぐに鞘から剣を抜き取り出して、受け返した人間サイドの最強指揮者を守る&援護するべく、彼らが守るべき対象（ディク）に向けて走り出したが…

レオーネアリーペデ（省略してレオアリ）《下らぬ害虫共は、ご退

場願おうか…》

ディク「！」

人間軍兵士ｓ「「！！」」

レオアリは目の前にいるディクしか見ていないように目を細めたまま、後方から走り寄ってくる人間達に向けて左腕を横に伸ばし、親指と人差し指を軽く弾くように骨を鳴らした途端…

ボンッ！！

ジェズム「おわっ！？！！？」

アルベルト「な…火が！！？？！」

突如地面から溶岩のような炎が連鎖的に噴出し“巨大なカーテンとなって”、後方から走り寄ってくる人間達の加入を遮る。

ジェズム「だっぁっっっちっっっっ！！！！あんのぉデカブツ野郎…っ！！！！」

オズワルド隊長「クソッ！隙間もなく遮られた！加勢不可能！！ディクッ！！！！」

ジェズムは噴き出す溶岩の熱で嫌み嫌みの表情を出し後退りしながら、右手で汗だくになっている顔に向けて扇ぐように動かす。

オズワルドは隅々まで円形になるように溶岩が噴き出ているのを見て、加勢できないことにギリッと歯軋りしながら溶岩の先にいるディクの安否の声を掛ける。

ディク「大丈夫大丈夫！他の皆は！？」

アルベルト「一部は不意の溶岩で巻き込まれて焼け死んだ者もいたが、巻き込まれていない部分と俺達含めて全員無事だ！」

ディク「…そっか。じゃあ皆聞いて！！」

アグナス「何かねディク君！？」

ディクは炎の壁の向こう側にいる仲間に背を向けたまま、右腕を横に伸ばし号令を下す。

ディク「俺以外全兵士は直ぐに此処から離脱しろ！総大将（デカブツ）は俺が引き受ける！！」

ジェズム「馬鹿っ！！お前一人で立ち向かうのか！幾ら一騎当千のお前でも無謀過ぎるぞ！！」

ジェズムの言う通り炎の壁からよく見える彼らからの巨大悪魔の姿…明らかに“山ぐらいの大きさ”を持つ人知を超えた存在が、小さき存在である人間（ディク）などひと溜まりもないだろう。だが…

ディク「ちゃうちゃうｗｗｗ全員離脱しつつ戦闘区域外から援護射撃…対悪魔用砲撃を使って援護してほしいんだ！！今なら“本体丸出しの状態”なら、十分人間の力でも効くよ。」

ジェズム「！そうか…あれだけのデカさなら“何処に当てても必ず命中”ならば…」

ジェズムはディクの台詞を聞いて何かに気付いたようにはっとなり、炎の壁から見える巨大悪魔の姿を見て脳裏に思い浮かべた後…

オズワルド隊長「全兵撤退！国内にある退悪魔用砲撃“パラケススス”を使ってディクを援護するぞ！！」

人間軍兵士'ｓ「「イ〝ェァァアァァアァァアァァアァァア！！！」」

ジェズムの隣にいたオズワルドが後方に集う兵士達に向けて令を下し、令と共に兵士達は超超ノリ★ノリなテンションで剣を上に掲げた後、オルレアン国内へと一斉に走る。

アルベルト「今から俺達は国内に戻った後、光の力を込められた“史上最大の巨大砲”を使う！それまでに…」

アグナス「確りと持ちこたえるんじゃぞ！ディク君！！」

ディク「もちぃっ！！」

ドドドドドドドドドド…

ディクが彼らに背を向けたまま笑みを出しそう言った後、炎の壁の先にいた兵士達は“チート小説的な流れ仕様で超団結&超スピード”で“豆粒ぐらいになるまで”一気に戦場を離脱した。

巨大悪魔が呼び起こした炎の戦場になりつつある場所で残されたディクは、少し顔だけを後ろに向けて国内に走っていった仲間達を綻

ぶ笑みを出した後、再度右袖からハイドブレードを出す。

レオアリ《…愚かな、例え退こうとも我は直ぐに皆殺しにしてくれるわ。》

ディクは巨大悪魔の見下した台詞を聞いて少しむっとなり、後ろに向けていた顔を前へと戻して目の前に聳え立つ巨大悪魔を見上げる形で睨み付ける。

ディク「そうさせねぇ為に、俺は残ったんだ。こんっの…超デカブツ！」

レオアリ《ふんっ…。貴様のような下等な生物なんぞ、我の剣一つだけで滅せれるわ。》

レオアリは小さき存在であるディクを見下すような形で視線だけを下に下ろし、悪魔だけ聞こえる国内へと走り戻る人間兵士達の足音と思いを煩く感じながらディクに続けて言う。

レオアリ《騒々しい！ただか下等の人間一人に“希望”やら“信頼”など…》

ディク「悪魔（アンタ）には分からないだろうな。俺…いや皆が俺の為に力を

尽くそうとしている人の“命の輝き”を！！」

ブワッとタイミング良くディクの背後から風が吹いて、首後ろに下がっていたフードが上がりディクの頭部をフードで覆い被せる。

レオアリ《“命の輝き”だと？…下らん。そんなモノは人間が造り出した妄想に過ぎん！！》

ドカッ！！ドドドドドド！！！！！！

レオアリが持つ大剣を地面一直線に突き刺した瞬間、ディクに向けて地割れのようなヒビを走り出し、裂目から炎が踊るように噴き出しながらディクに襲い掛かる。が…

ディク「どいつもこいつ勝手だな！人間を馬鹿にしたように好き勝手にほざきやがって！！」

レオアリ《！》

チュドォォォォ！

フードを被ったディク（本気版）が自分に向かってくる地割れ＆溶

岩攻撃を見て両腕を前に伸ばし左足を前に出して前屈するような体勢を取った後、両手の平から“白い帳状の桜の花弁の形をした光の壁”が現れて、壁のようにレオアリの地割れ&溶岩攻撃を壁に触れた途端“時が止まったかのように停止させる”。

数メートルディクの両足が大地を抉るように引きづりながら下がったが、踵に力を入れてディクの持つ強き思いが後退を防ぐ。

ディク「友(エツィオ)から聞いたけど、大昔…この星に住んでいた“最初の人間達”は外部からの襲撃者“神”と渡り合った記憶が代々受け継がれてきたんだとか。まぁ、アンタからにして人間はか弱い生き物として見えるだろう。しかし…」

レオアリ《何が言いたい？》

ディクは両手に力を込めるように思念で送った後、頭部のフードで出来た影で表情は冷酷に見えて、言動は悪魔に対する怒りの表情を出しながら…

ディク「“今の俺達をクソ舐めするのもたがいにしろ”！！」

レオアリ《！》

両腕を思いっきり前へと押すように動かした時、ディクの張られていた結界が止めていたレオアリの攻撃ごと前へと押し込むように吹き飛び、地面を抉り・炎が大地を溶かしながら、レオアリへと真っ直ぐ向かっていく。

ディク「“Ｎｅ　ｆａｉｔｅｓ　ｐａｓ　ｕｎ　ｉｄｉｏｔ　ｄ'ｕｎ　？ｔｒｅ　ｈｕｍａｉｎ（人間を舐めるな）”！」

フードを被ったディクがフランス語でそう言った途端、結界ごと吹き飛ばしたレオアリの地面&溶岩攻撃を顔面からぶち当てて、結界の電子音・瓦礫が壊れる音・何かが溶ける音を立てながらレオアリの顔面に“トリプルフルコースアタック”が命中した。

第百三十三曲　決してL●Dのハ●ターではないｗｗｗ

―回想　８００年前以上　３０年後　フランスオルレアン　国外の何処かの荒れ地―

レオアリ《ふん…人を凌駕した力を“多少”身に付けたようだな。しかし…》

ドドッとディクが結界ごとレオアリの攻撃ごと顔面にぶつけたのに関わらず、一瞬溶ける音を立てたが“獅子顔悪魔には溶岩＆地の瓦礫を受けて傷一つも無く”平然とし溶岩と瓦礫が地へと落ちる。

レオアリ《我が鉄壁なる魔力の層には人間の力・我自身の魔力など届かぬ。》

ズシンとレオアリがディクに向けて数歩下半身の馬足を動かし、歩く度に大地を凹ませヒビを周囲に作りながら、赤い眼孔を放ち遥か下にいるディクに見下すような形で言う。

ディク「ふーん…固い身体がアンタの自慢の一つなのかい？だったら…」

ディクは頭部のフードを深く被り直した後レオアリに向けて走り出し、腰を低くし低姿勢のままレオアリの下半身の腹部辺りへと潜るように入った後…

ディク「“何処が鉄壁か何処が鉄壁じゃないか”全箇所試し斬りしてやる。」

レオアリ《フンッ…》

ディクの右袖から出したハイドブレードを下半身の間接辺りへと刺して、鋼と鋼が擦る音を立てながら斜め一直線に下半身の右足後方部分まで振りかざす。

ディク「ラ〝ァァ〝ァァァイ！！！！」

その後ディクは判孤を描くように身体を捻って何度も後転させながら右足後方部分の腿辺りに掴んだ後、右袖から出したハイドブレードを下半身間接部分から斬り動かしながらポールプレイのように右足後方部分を何度も斬りつける

レオアリ《賢しい！！》

ディク「うわっ！？とっ…！」

レオアリはディクの下半身が何かになぞられている感覚を受けて嫌みを差したか、レオアリは一旦眉間に皺を三枚ほど浮かべる。

その後下半身の馬足に力を入れて巨体の身体ごと宙に飛翔し、一回転させて右足後方にいたディクを風圧で掴んでいた手を弾き飛ばようにに振りほどく。

ディク「っ！」

ディクは背中からくの字に折って慣性の法則通り吹き飛ばされながら、後方にある溶岩で出来た百熱の炎の壁へと高速に迫る。

ディク「なんのっ！Ａ／Ｂ全っっっっっっっ快！」

ボッ！

両足の脛に付いていた短銃（リボルバー）に思念を送って踵まで力を入れた途端、銃口から白い炎のような光が噴き出し、地面から出る炎の壁に当たる数メートル寸前に“空中停止”する。

ディク「そんっっっっっっっまま、空中散歩！！」

ディクは両足の短銃の光で宙に踏ん張りながら腰を落とし両腕をＹ字になるように上げた後、地を蹴るような感覚で空気中の酸素を高速に何度も踏みながら、ワン●ースのＣ●９●歩で“宙を走る”。

レオアリ《…逝ね、ゴミが。》

ブンッとレオアリは“宙で走りながら向かってくる”ディクに向けて右手に持つ剣を真っ直ぐに伸ばし、赤熱化した剣先をディクの頭部に狂い無く振りかざす。

ディク「空中☆ＲＴ“エア～ダァァァァチ”♪」

向かってくる赤熱化したレオアリの剣先を孤を描くように回避し、ディクの羽織る服の皮一枚さえ“斬り裂けない”まま赤熱化していないレオアリの剣の中腹辺りに片足を着けた直後…

ディク「Ｙｅａｒ，ｒｉｇｈｔ！」

レオアリ《むっ！？》

レオアリの視点からはディクの動きが“光を超えた速さ”のように

“肉眼で捉えきれることさえ出来ない”ほど、自分の手に持つ大剣の刀身に何度も光の軌跡が横一線に描かれる。そして…

ディク「“これでも多少”に見えるのかクソ野郎？」

レオアリ《！》

バキャァァッ！！！！

レオアリが持っていた大剣が“ガラスの破片のように砕け散り”、バラバラと剣の破片が雪のように舞って地面へと突き刺さる。

ディク「“相手の得意とする武器を真っ先に潰せ”と、何度も何度も教えられたからな。それが今となって意味が分かったよ。」

剣を破壊したディクは続いて短銃の砲口の火で空中の大気を蹴りながら進み、レオアリの頭上を通り越すように大きく飛翔しながら新体操ＪＵＭＰ♪した後…

ディク「ドッシャァァァァァァァァァ！！！！」

ザクッ！バキバキバキバキバキバキバキ！！！！

左脇下部分辺りにハイドブレードを両手で深く刺した直後、気合い声と共に自身がスノーボード台となって滑りながらハイドブレードを下半身の馬の背の尻まで斬り込んだ直後…

レオアリ《！？》

ブシッ！

ディクに斬られた部分から一直線の光が差し込めた時、光が差された割れ目から赤い悪魔の血が吹き出る。

レオアリ《（馬鹿な…我の身体は強固たる炎と大地魔力の層で被われているハズだ！何故あの人間ごときの攻撃に！？）》

ズシンとレオアリは下半身の馬の右前足から跪くように折って、背中から下半身の尻まで噴き出る鮮血と痛みを感じながら右腕を地面に着く。

ディク「例え分厚い層で被われようとも、必ず薄い部分がある。特に間接辺りが刃が容易く入りやすいしな。」

レオアリ《（あ…有り得ぬ！この事を為し遂げる力を、あの人間が持っているというのか！？）》

レオアリの背後一直線に斬り捨てたディクは宙で身体を丸めるように何度も前転させた後、両足で綺麗に地へ着くと同時に両腕を斜め下に広げて若干荒ぶる鷹のポーズを取る。

レオアリ《（我々悪魔と神々と同じ力。まさに…）貴様…何者だ？》

ディク「今更かよ、馬鹿。俺は人間軍最高指揮者“ディク・ダルク”であり“二代目ジャンヌ・ダルク”！そして…」

ディクがスクッと立ち上がると同時に背後に跪くレオアリに向けて再び翻した後、胸を強く張って頭部の乱れたフードを被り直した後更なるクッッッッッサ！台詞を吐く。

ディク「国内の林檎の木に宿る大天使“エツィオ”の現・契約者だ！」

チュドォォォォン＼（＾３＾）／

背筋を伸ばして両腕をハの字になるように後方へと動かし左足を軸として右足を曲げた後、背後から何かが“火薬でも爆発したかのよ

うな”スタント音が何処かから鳴る。

ディクは“俺☆命”のポーズを取りながら超★ノリノリ♪に決めた後、巨大悪魔が創りし炎の戦場を唯一“ライヴ会場”へと変えた。

第百三十四曲　これが人間サイドの“ア●サング・ウォー”擬きである。

―回想　８００年前以上　３０年後　フランスオルレアン　都内城壁上―

バタバタと城壁上で兵士達が慌ただしく走りながら移動し、小説的な都合で“特殊訓練でも受けた”かのように、一人一人無駄なく持ち場へと走り向かう。

城壁上に設置されていた巨大大砲の外見はハ●チの槍のような形状で、槍先から刀身の下部分まで蔦のような白銀の紋様が刻んでいた。

人間軍兵士Ａ「仰角修正＋５。おおおおおおお！！」

人間軍兵士Ｂ「修正＋５。じゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ガコン♪ガコン♪♪と兵士達が連携で動かす“ハ●チの槍風の超巨大版の物体”の下部品（パーツ）の土台辺りで二人一組で動かし、超ノリ★ノリに声を掛け合いながら一つ一つ動かし砲口をディクが今戦っている巨大悪魔に標準を合わせていく。

ジェズム「対特級悪魔極光弾“ジャベリン”装填！」

ジェズムと人間兵士数人が装填部分に現代の“ミサイル”のような大きさを持つ砲丸…否鉛筆型ミッソーを担ぎながら慎重に下ろし、一発分の広さを持つ装填部分に入れる。

アルベルト「ジェズム、余り振動を起こすな！二次被害が起きてしまったら心許ない！！」

ジェズム「言われなくても分かっているって！つーか、こんなクソ真剣時に二次被害なんざ起こさねぇよ！！」

ガチンッとアルベルトの言われるままにジェズムと数人の兵士達は、互いに苦笑いしながらミッソーサイズの砲丸を入れた後装填部分の蓋を慎重に閉めて鍵を掛ける。

オズワルド隊長「よしっ、ジャベリン装填の確認した。」

アルベルト「“ジャベリン”を発射砲口まで移動…1…2…」

ジェズム「3！！設置…完了っ！！」

ジェズムと担いでいた兵士達の装填仕草をオズワルドは肉眼でしっかりと確認した後、ジェズムの側にいたアルベルトは作業している兵士達に最終段階の指令を下す。

そして隣にいるジェズムと共に装置をゆっくりと動かしながら、両隅に付いているフックらしき物体を作業している兵士達の動きが止んだと同時に引っ張った直後、ガタンと何かが発射口に引っ掛かる音が鳴って完全に発射準備完了した。

アグナス「後は、ディク君の合図待ちじゃな。」

アグナスは今いる都外の荒れ果てた遠くの地で爆発と業火音、死合している悪魔の怒声がドカドカと聞こえ、アグナス否全兵士達は“ディクが今いる戦いの場所”へと真面目顔を出し目を細めながら互いに向ける。

ジェズム「ディク…」

アルベルト「大丈夫さ、アイツは３０年の間本当に変わった。俺達にとってアイツは…」

オズワルド隊長「あの時の冷徹な魔女と違って、こっちの方が熱いようにしっくり来る。何かと言えば…」

アグナス「漸く訪れた我々人間側の“救世主”じゃな。仲間を思い何一つ我々だけでなくこの国の民の全て命を守る為に、彼は命を削って全力を尽くしている。」

巨大砲口の下の土台部分で他の兵士達が騒がしく動く中、彼と身近で長く付き合っていた４人は、前方から来る生暖かい風を顔面から受ける。

ジェズム「今までは餓鬼っぽさが出ていたから何かと苛立つこともあったな。それが３０年経った今は、楽しい思い出として残ったなぁ～。」

アルベルト「そうだな。ディク様だけでなく、我々もこの３０年の間に随分と変わった。狭い籠庭の中でディク様と共に見てきた“もう一つの世界の存在”をな。」

オズワルド隊長「大天使ミカエ…いや“エツィオ”とか言う小僧か。奴は我々が討伐する“悪魔と同種”なのに、中々憎めない奴だったな。時には夜酒に付き合ってくれたよ。」

ククッとオズワルドは右手に口元を寄せて軽く笑う声を出した後、３０年間見てきた魔神の素顔を脳裏で思い返しながらクスクスと笑う。

アグナス「悪魔に無い“我々と同じ人間の心”を持った“魔神”という悪…いや、“神も何もかも全て超えた光を司る王”か。」

ジェズム「悪魔と同じように魔界生まれだというのに、本っっっっ当に変わった奴だよな。アイツって！ハハッ！！何もかも全てが俺達“人間”と同じだったからよぉ！！」

アルベルト「我々の戦闘指導だけでなくディク様が契約した魔神（エッィオ）の下で魔力指導していく内に、ディク様も“魔神と同様の力”を３０年の間で身につけたのだからな。」

オズワルド隊長「その力に目覚めたからも、ディクは“必要な時以外”は使用しなくなったからな。まぁこれも俺達にとっては、唯一あの時の魔女（ジャンヌ）と違う所が現れとなっただろう。」

その後彼らは周りの兵士達に聞こえないように数分雑談した後、遥か先にいる人間達にとっての最後の希望に向けて再び顔を“カメラ目線”に向ける。

ジェズム「後少しだな。」

アルベルト「あぁ、もう間もなくだろうよ。この戦いが始まって丁度今日で“１００年目”だ。長くて辛かったあの戦いはもう、今日

で終わる。」

オズワルド隊長「…最高のケリを着けてくれよ、ディク。この戦いが終わったら、最初からお前に祝酒を先に掛けてやる。」

アグナス「まてまてオズワルド君ｗｗｗディク君は“禁酒”と聞いたが…まぁ、良いか。今日だけでもｗｗｗ」

長年に渡る悪魔との戦い・魔女の下らない策謀で命を落としていったかつての仲間達を思いながら、漸く訪れる人間達にとっての戦いの終わりを告げる声を、４人は口元を少し吊り上げて彼の勝利の声を待ちわびていた。そして…

アルベルト「！来た！！」

肉眼から見える巨大悪魔の背景の地平線から一筋の橙の光を放ち、徐々に光が登りながら一筋の光を立てると同時に巨大悪魔の中腹辺りから白い光が点された。

ジェズム「野郎共今だ！巨大悪魔に向けて“ジャベリン”を放て！！」

オズワルド隊長「槍を放て！槍を放て！！ＦＯＸ３ィィィィィィ

ィィィィ！！」

人間軍兵士' s「「Ｙｅｓ！ＢＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＳＳ！！」」

ズドォォォォォォォォォン！！！！

彼らが悪魔と戦い初めて１００年経った今長い戦いが漸く終わる時、放たれた一筋の光と共に城壁上にあった巨大大砲が火を吹いて、長い発射口から放たれた一筋の銀色の光が真っ直ぐに巨大悪魔に向けて飛翔していった。

第百三十五曲　Une lance de l'argent de la V

―回想　８００年前以上　３０年後　フランスオルレアン　国外の何処かの荒れ地　ジャベリン発射数分前―

レオアリ《エツィオ！！あの“裏切りの魔神”が人間の貴様ごときに力を貸しただとぉぉぉぉぉぉ！？》

ディク「“貸　し　た”？違うね、“相棒契約（フレンドリィ）”だＺＥ★」

レオアリは半激怒する表情を出しながら余裕笑みを出すディクに向けて、両手の鋭い爪を下半身辺りにいるディクに向けて振りかざすが…

ディク「ＴＨＥ★紙重ＤＥポンッ♪♪」

ヒョィ♪

チョリ～ス♪風に額に当たる手前まで左手の斜めピースサインをしながら笑みを出し、蝶の様に舞いながら風で揺れる柳のように紙一

重でレオアリの爪攻撃を回避した後…

ディク「紙重後のぉぉぉぉぉぉ…Ｋｉｌｌ！！（、皿′）ｐ」

レオアリ《むっ！くっ！！》

ザクッ！バキッ！！ベキッ！！！ブシュッ！！！！

ディクは避ける度にレオアリの鋼鉄の全身体の一部分“間接と間接が繋ぐ間”“悪魔独特の身体の繋ぎ目？部分”に向けてをハイドブレードを深く突き刺し、強固の外皮に被われていない肉体の組織を斬り壊す音を立てながら、噴き出す血と肉片を粉雪のように細かく散らして地面をレオアリの血肉を重ねていく。

ディク「Ｉｌ　ｎ'ｅｓｔ　ｐａｓ　ｌｅ　ｄｉａｂｌｅ　ｉｎｃｏｍｐａｒａｂｌｅ　ｄｅ　ｓａｎｇ　ｆｒｏｉｄ　ｃｏｍｍｅ　ｖｏｕｓ！（それとエツィオはテメェらような冷酷無比の悪魔じゃねぇ！）Ｉｌ　ｅｓｔ　ｕｎ　？ｔｒｅ　ｈｕｍａｉｎ　ｍ？ｍｅ　ｃｏｍｍｅ　ｎｏｕｓ（エツィオは悪魔ではなく“人間だ”！）」

レオアリ《このっ…ちょこまかと！！》

何度も攻撃を避けられ避けられる度にディクからの傷を増やしボロ

ボロになっていく自分の姿を見て流石に痺れを切らしたか、ディクの反撃攻撃を受けつつも右腕を上げて拳を丸めた後、拳自身を炎の塊へと変えて腕全体を赤熱化する。

レオアリ《虫けらのように塵と化せ！！》

ゴオッ！！

炎と化した右腕を一つの拳に纏めて怒りを露にした一撃を、下半身で何度も全脚部分を斬り裂いているディクに向けて殴り付ける。

ディク「嫌だねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇDA★」

ヒョッ☆

ディクは右目下に右人差し指で皮膚を引っ張りベロを出しながらレオアリに向けてアッカンベー（＾ｐ＾）しつつ、身体をCの字に曲げてレオアリの炎の殴り付け攻撃を回避する。

ディク「Ｃｅ　ｎ'ｅｓｔ　ｐａｓ　ｍ?ｍｅ　ｐｏｓｓｉｂｌｅ　ｄｅ　ｍ'ａｒｒ?ｔｅｒ　ａｖｅｃ　ｖｏｕｓ.（テメェじゃ俺を捉えきれねぇよ。）」

そして攻撃を避けたディクはC字になった身を前へと翻すように回転させ、半分宙で平泳ぎするように両手両足を動かした直後…

ディク「Ｊｅ　ｎｅ　ｐｅｕｘ　ｐａｓ　ｔｏｕｃｈｅｒ　ｍ？ｍｅ　ｕｎ　ｍｏｒｃｅａｕ　ｄｅ　ｐｅａｕ　ａｖｅｃ　ｖｏｕｓ（見え見えだな！）」

レオアリ《！またか！？》

待たしてもレオアリの視点からディクが“光以上の速さを超えた動き”で完全に翻弄してしまい、そんなコンマ数秒の速さの世界の中でディクはフランス語を吐きながら“赤熱化していない四肢の一部分の剥き出しになっていた肉”に向けてハイドブレードをズブリと深く突き刺した後…

ディク「Ｃｏｕｐｏｎｓ　ｄｅ　ｌａ　ｇｒａｎｄｅ　ｖｉａｎｄｅ　ｌｕｘｕｅｕｓｅｍｅｎｔ！」

ズリュゥゥゥ！！！！

振りかざすレオアリの腕の動きがディクが突き刺したハイドブレードを上へと動かすように斬り、肉と肉の組織を引き裂きながら右脇辺り辺りまで“中にある骨ごと綺麗に斬り裂いた”。

レオアリ《ガッ！》

ドスッ！

ディクのハイドブレードで斬り裂かれた腕の肉がぶら下がるように爛れ、血を滴り落としながら辛うじて繋げていた肉の繊維がたった数秒で切れて、分厚い肉と骨の切断面が見えた塊が地面へと落ちる。すると…

シュゥゥゥゥ…

落ちた巨大悪魔の肉塊が大地を凹ませてひび割れが至る所に走り血しぶきが飛び散った時、巨大の肉塊が白銀の光を全体に放ち隅々からダイヤ状の粒子の形を取りながら宙へと分解していき、大地に落ちた悪魔の肉塊が光となって完全に消えた。

レオアリ《く…くそ。》

ディク「流石特級悪魔の肉質は良い、十分斬り応えがあったよ。」

ディクはハイドブレードの刀身に付いた赤い液体を腕を瞬時に下に

動かして振り払った後、片腕が細くなっている巨大悪魔の鼻先向けて右ハイドブレードの剣先を突きつけながら更に続けて言う。

ディク「どや？こんなちっぽけな“人間”ごときに、ここまで追い詰められる“クソ苛立ち”は？？Ｅｓｔ－ｃｅ　ｑｕｅ　ｖｏｕｓ　ｓｅｒｅｚ　ｆａｔｉｇｕ？ｓ　ｍｅｎｔａｌｅｍｅｎｔ　ｄｅ　ｃｅｃｉ　ｐｏｕｒ　ｖｏｕｓ？」

レオアリ《不快だ！こんな“猿”一匹ごときにこの我がここまで圧されるとはっ！！》

余裕の笑みを出しながらディクは巨大悪魔に向けてフランス語を吐いた時、レオアリは細くなった右腕を左手で掴んだ後ブチッと思いっきり引き千切って、血しぶきと共に下半身にいるディクに向けて細くなった右腕を投げ捨てる。

ディクは投げ捨ててくる細くなった巨大悪魔の右腕を右ハイドブレードで上方向になぎ払うように振りかざして、“その場で一歩も動かず”巨大悪魔の右腕を綺麗に一刀両断する。

ディク「分かるぜぇその“ゴミ”ごときの俺相手で、こんなに“ボロクソ”になってよぉ…非常ーに苛立つよなぁ～。」

細くなった巨大悪魔の右腕の切断面から血が横方向へと降りかかっ

ても、“中央に居るディクを避けるかのように”血自体が避けて別の場所へと血が落ちてハイドブレードで斬った腕の肉片が地面へと交互に落ちた後、またしても白銀の光を全体に放ち隅々からダイヤ状の粒子の形を取りながら宙へと分解して完全に消えていった。

レオアリ《憎たらしいわ！よりにもってこの我が貴様ごときにっ！！》

レオアリはディクに対して憎しみを込め口内の牙を見せて負の感情が丸出しになった表情を出した後、残された左腕に力を入れるように拳を握った直後、またしても腕自体を炎のように赤熱化させる。

レオアリ《生意気な小僧がっ！魂そのものまで消し炭にしてくれる！！》

ディク「！」

バキバキと下半身と上半身を繋ぐ部分からヒビが走って蛹を破るかのように下半身自体を剥い出て、黒い破片を飛び散らせながら本来の人間の足部分が思いっきり上へと飛び出てくる。

レオアリ《死ねぇぇぇぇぇぇぇぇい！！》

そして下半身を剥いだレオアリは今まで使っていた馬の部分を踏み台にして右足で蹴って宙に浮いた後、レオアリは左腕を上へと掲げて地上に居るディクに向けて全身を弾丸と化し突っ込んでいく。しかし…

ディク「クックック…案外乗せられるもんだな。こんな阿呆臭ぇ挑発ごときに乗せられるなんてｗｗｗ」

ディクは東側から昇り始める太陽の光で逆光になり表情は見えなくても、彼の吐く言動が“鬼畜&ドS丸出しの黒笑み”でも出しているかのように背後から変な触手みたいな黒いオーラが出る。

そしてディクは「クケケケケケケケケケケケ」と“不気味に笑い声を出しながら”右足に力を入れて宙に飛翔した後、突っ込んでくるレオアリに向けてハイドブレードを昇り始めている太陽の光に向けて刀身を翳した瞬間…

ディク「Ｌｅ　ｒｅｔｏｕｒ　ｄｕ　ｄｉａｂｌｅ　ｌｅｎｔ？ｌ'ｅｎｆｅｒ　ｒａｐｉｄｅｍｅｎｔ！！」

レオアリ《！？！！！？》

ズドォォォォォォォォォォォ！！！！

レオアリ視点でディクの背後から落雷のような轟音と共に何かが向かってきて、銀色の発光を放ちながら“鋭利の物体”が豪速にディクに向けて左腕を振り下ろす間も無く、レオアリの腹部に鋭利の物体“ジャベリン”が大きく背中を抉るように突き破った。

第百三十六曲　これが１００年戦争の知られざる真の歴史である。

―回想　８００年前以上　３０年後　フランスオルレアン　都内城壁上―

オズワルド隊長「“ジャベリン”命中確認！！目標巨大悪魔…沈黙！！」

オズワルドが手にする望遠鏡らしき筒を両手に持って、両眼に寄せるように上げながら望遠鏡に映る巨大悪魔（レオアリ）の腹部に“ジャベリン”がピンポイントに命中し、巨大悪魔の背後から血が大量に吹き出ながら地へ落ちていく様子を周りの兵士達に伝える。

オズワルド隊長「待ちに待った瞬間だ…本当にこのような時が来るとはっ！！」

アグナス「ディク君！君は本当に我々の…！！」

オズワルド…否全兵士達は肉眼で見える巨大悪魔が地に伏せて倒れこむ瞬間を見て、全員が手にする武器・オズワルドが持っていた望遠鏡をカランと乾いた音を立てながら地に落とし、真剣の表情から

一変…

ジェズム「うおっしゃぁぁぁぁぁぁ！！！！！やったぜ！！！！俺達の勝ちだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！人間軍の勝利だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

人間軍兵士'ｓ「「ＹＥＥＥ

て、今居る人間軍の兵士全員が長年に渡る戦いが漸く終結したことで喜びに満ちていた。

ジェズム「ディク！！お前は本当にっ…やりやがったな！！こんなに…俺達はっ！！」

アルベルト「は…はっ…！ジェズムいい歳こいて…男泣きか？折角のお前のイケメン顔が…豚のようなブス顔に…なっているぞ？」

ジェズム「ケッ…お前もだ…ろ馬鹿野郎っ…！！待ち待った瞬間…なんだぞっ！！嬉しくて泣か…ずにい…られるかっ！！」

アルベルト「ふふっ！！だが、その…アングルで“閲覧者用カメラ”に向けて見せるのも…な？」

アルベルトの台詞通りに折角の５０代後半ぐらいの良い顔を持つジェズムの表面がクシャクシャに崩れて、“鼻水を大量に垂らしながら男泣きしている”素顔を見てアルベルトはクスッとあふれ出る涙を出しながら、ジェズムよりかはひどくない表面をほころばせて軽口を叩く。

ジェズムも軽口を叩くアルベルトの台詞を聞いて少しむっとなったが、お互いお互い長年に渡る戦友としての絆が深く結ばれていて、彼とアルベルトは長年背中を預けてくれた友（アルベルト）の額に向けて笑みを出

しながら軽く拳骨を咬ます。

ジェズム「アルベルト…17の時からずっと“40”年間背中預けてくれて、本当にありがとな。」

アルベルト「こちらこそ…お前と同じように共に戦ったことは…一生忘れない。」

アグナス「フォフォフォッ!まだ別れは早いぞ諸君、我々にはまだやるべきことがある。のぉ、オズワルド君?」

ジェズムとアルベルト他兵士達が共に正面から抱き合って感謝の言葉を掛けながら言っていた時、アグナスが顎に右腕の拳を寄せて沸々と喜びながらアグナスが顔を上に動す。

オズワルド隊長「さぁ…迎えに行くぞ…我々の“救世主”をこの国へ!!」

いつの間にか白馬に跨ったオズワルドが居て昇る太陽の逆光で表情を隠し、手にするたずなを後ろへと思いっきり引っ張った時、オズワルドが乗る白馬が鳴いて身体の半分・前足を上に上げて掻くように動かしながら再度地に着ける。

ジェズム「へっ…一人だけ格好付けやがって！」

ジェズムは逆光でオズワルドの表情は分からないものの一瞬だけ口元を吊り上げてニタリと“カメラ目線”にむけて独り占め笑いをしていたのを見て、ジェズムは憎らしい口調を吐きながらもクスッと笑ってオズワルドの背後に“予め用意していた軍馬”に向けて走りだし、鞍掛を使わず一回で飛び越すように飛翔し一発で軍馬の上に乗る。

アルベルト「全く…３０年やら４０年やら経っても、ジェズム…まだ変わらない所が腐る程あるなっ！」

ジェズム「ＨＡ！俺はまだまだ現役なんだよ！！こんなスタイリッシュミドルな俺様がはしゃがねぇとどうする！？」

オズワルド隊長「餓鬼共が派手に言いやがって…後々痛い目（身体的な意味で）に合っても知らねぇぞ？」

アグナス「本当に…元気よのぉ～。」

アルベルトも苦笑いしながら馬に跨がった長年の相棒（ジェズム）の仕草を見て歯並びの良い歯を見せ口元を少し開けた後、彼も軍馬に向けて走りジェズムと同じように一回乗りする。

その後他の兵士達もアルベルト同様に軍馬に向けて走り出して、次々と馬に跨がっては一部の者は尻から落ちて周囲から笑われる者がいたが、アグナスは一人“戦後でも元気過ぎる彼ら”を見て苦情しながら穏やかな笑みを出してそっと呟く。

アグナス「然りと戦を勝ち取る瞬間を、最後まで見届けたぞディク君。後は…」

軍馬に乗った兵士達が次々と都市門を抜けてディクが居る荒れ地へと噴煙を上げながら走っていく中、アグナスは昇っていく太陽の姿を見つつ両目を細めてそっと両眼を閉じてフェードアウトしていった。

…

……

……

―国外の何処かの荒れ地　ディク視点―

ディク「じゃぁな、もう二度とお前と会うことは無ぇ。お前らが次々と葬ってきた俺達の仲間の正義の剣で、（ピーーーー）してくるんだな。」

一方巨大悪魔をジェズム達城壁上から後方支援したジャベリンで討伐したディクは、一部“禁止用語”が吐かれながら巨大な風穴が空いた悪魔と共に地へ落ちていく。

ディクは仲間の力で倒した巨大悪魔を見下しながら軽く唾を吐いた後、身体を捻り何度も後方回転させて両腕を横に伸ばし、斜め人間タケ●プター風に落ちながら両足から綺麗に地を着け腰を少し折りながら顔を下に伏せる。すると…

＼カシャッ♪／

ディク「ｎｉｃｅ♪やっぱり君はちゃんと場を読んでいるね＾＾」

顔を上げると同時にカメラのシャッター音が鳴って、笑みを出しながら両袖から出していたハイドブレードを鞘の中へ閉まった瞬間…

ズシャアアアアアアアアアアン！！！！

ディクの背後に腹部に大きな風穴が空いた巨大悪魔の死体が落ちて、大地を陥没させる生々しい音を立てながら仰向けに倒れ伏した。

レオアリ《む……んだ…》

シュゥウゥウ…

開けられた傷口からダイヤ状の細かい粒子の光が、悪魔の身体を分解していくように徐々に範囲を広げていき、首下辺りまで身体が消えていく中…

レオアリ《無念……だ……》

満身創痍のレオアリが人間の本来の力を受けて完全に屈服し、敗北を認めたかのように両眼を伏せて口を少し開いた直後、首下から頭部まで砂のようにサラサラと崩れて、崩れた砂のような物体が赤い炎の光と成って宙に燃え尽きると同時に完全にレオアリは現世から消え去った。

ディク「勝った…やっと…やっと…これでっ！」

ディクは背筋を少しずつ伸ばしながら立ち上がって、長い戦いを漸くケリを着けた喜びと巨大悪魔を仲間と共に討ち倒した感覚を覚えながら、右手を丸く握りしめた時…

エツィオ「いよぉぉぉぉぅ♪お疲れお疲れ！よくもあのデカブツを人間の力で倒したなぁ♪♪」

ディク「！エツィオ！！」

“画面外の側面方向”からパチパチとタイミングをわざとらしく両手同士で叩いているエツィオが歩いてきて、ニシシと子供のように歯を見せ笑う表情を出しながらディクの下へと歩いてくる。

ディクは突然現れたエツィオを見て少し目を大きく開き目が点状態を少し出した後、歩いてくるエツィオに向けて身体ごと向ける。

ディク「エツィオ！お…俺は！！」

エツィオ「間違いなかったぜ、俺に映っていた“真実の情報”は正しかった！ディク、お前は本当に未来を変えやがったなこの野郎っ！！」

ディク「おわっ！？」

＼ダキッ♪／とエツィオが突然ディクを思いっきり両腕でディクの身体ごと抱き締めて、３０年間信じ続けてきた契約者に褒美という名の“ハグ”をする。

ディク「あたたっ！エツィオ痛い痛いｗｗｗ急に抱き締められると

俺はぁｗｗｗ」

エツィオ「おっとっと…Σ（´、`）悪ぃ悪ぃｗｗｗついつい契約者のお前が此処まで成長したことで嬉しくて嬉しくて…／／／」

エツィオはディクをきつく締め上げていることで少し“あら、やだぁぁん（＊´、＊）”風に口を八の時にしながら、わざとらしいエロ声でハグしていたディクを放す。

ディクはエツィオにきつくハグされたか少々衣服が皺が浮かび綻んでしまったが、ディクは契約した魔…否“人を護る技を教えてくれた友”に向けて笑みを出してエツィオに言う。

ディク「ははっ！俺からもだよエツィオ。エツィオのお陰で俺は“最上位の光の魔力と格闘技”を３０年間教えてくれたから…」

エツィオ「いや、それだけでなくお前自身の国のを護りたい思いと、お前の持つ人を統べるセンス・決断力が、この戦いを完全に終結させることができた。それがお前自身の人と人同士で協力し、今に繋がった“成長”の現れだ。」

ディク「エツィオ…」

エツィオからの良き結果とも言える褒美台詞を聞いて胸の内から熱くなる感覚を受けて、胸に向けて左手を当てた後目の前に立つエツィオに向けて顔を向ける。

エツィオ「聞こえるぜ。お前に対しての感謝と歓喜が溢れた人間達の声が…あの裏切り者に付いてきていた一部の人間達も、お前に対して祝杯を上げたいそうだが？」

ディク「アハハッ！ジェズム達も…皆…！！！！」

エツィオは苦笑いしながらディクの方向でなく別の場所に向けていて、ディクはエツィオが向いている方向に向けて顔だけをゆっくりと動かす。

エツィオ「ディク、お前はもう“救世主”だとよ。長年に渡る悪魔との戦いを終わらせた“守護神”とも…次々と言い換えられているなｗｗｗ」

エツィオがケラケラと笑いながらディクに言っている間、顔を向いている方向から馬の足音とジェズム達の声が段々と大きくなるように騒がしく聞こえてきて、ディクは再度最高の笑顔を出した後、数歩前へと歩んで隣にいたエツィオを通り越す。

ディク「ハハハッ！皆買い被り過ぎだよｗｗｗ俺は…俺は…ただ、

民だけでなく共に戦う仲間を護るように…」

エツィオ「此れからが大変だぞ、ディク？乱用パーティーの後は…っとｗｗｗ」

ディク「そうだね。」

ドドドと遠くから軍馬に乗ったジェズム達が歓喜の声を出しながら近付いて来るのを肉眼ではっきりと見て、ディクとエツィオは互いにわざとらしく笑う声を出しながら、朝日の太陽を背に彼らの迎えを二人で一緒に待った。

第百三十七曲　世界一危ない８００年前以上の酒乱★混沌☆暴走パーティ

悪魔と人間の戦いが始まってから今日で１００年目、人間達にとって長く苦しく悲しみを背負い続けた戒めの鎖が、漸く引き契るように解き放たれた。

一人の“救世主・守護神”の降臨及び今日誕生した一人の男を讃え、国民全員が彼を祝福するように手と手を取り合いながら笑い合っていた。

取り戻すことが出来た日常と明るみを帯びた笑みを、二度末長く持ち続けることが出来ると思って…

―回想　８００年前以上　フランスオルレアン　とある酒場店内―

戦後太陽が真上に昇った昼間の都市内の一件の酒場に向けて走り出す多くの人々、国民全員が国を救った男を見ようと我先に酒場へと入り込む。

国民全員が歓声を上げる中オレンジ色に満ちた木製の酒場内で、カウンター席の中央に座るディクを中心に隣にいたジェズムが手にす

る木製のジョッキを上に掲げた直後…

ジェズム「長年戦ってきたクソ共を倒し終止符を討った我々の“救世主”と共にノマ★ノマウェェェィするぞ、野郎共ぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」

人間軍兵士’s「「イェ〝エェェェェェ〝エェェェェェェェェェェェェェェェェィ！！！！！！」」

両頬がほんのりポン♪と赤く出した既に酔っていたジェズムが超ノリノリに台詞を吐いた途端、周囲に集まっていた兵士及び国民と共に手にする木製ジョッキを上に掲げて、チン♪と隣同士のジョッキの先部分を軽く当て兵士達は飲み始める。

ディクは兵士達…否国民全員が笑顔溢れ生のある熱気を身に受けながら口元を少し上げて笑みを出した後、カウンター席のテーブルに置いてあった水入り木製ジョッキを取ろうとした時…

オズワルド隊長「ディクゥゥゥゥゥゥゥゥ！！貴様ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！お前から酒を飲ませてやるぜぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

アルベルト「お前に特別っっっっっっっ最★高☆酒を先にプレゼッッッッッッッッしてやる！！！！」

ジェズム「イケッッッッッッッ！！！！飲めっっっっっっっっっっ！！！！！そして堕チロ！！！！！！！！！！」

ディク「（ちょっｗｗｗ皆以外のオズワルドとアルベルトとジェズムが酒で溺れて、超ハイ★テンション状態ｗｗｗつか一人“ネロマテ共の言語”になっとるｗｗｗ）」

ディクは勢い良くディク視点の“前方カメラ”からいつの間にか酒でほろ酔いかつ暴走している三人組の“悪人のような…顔面そのものが鬼のように赤い形相”を見て、Σ（´Д｀；）ドヒィィィンと数秒顔を青ざめて手にしようとしていた水入りジョッキの手を止めてしまった。

ディク「（だ…だけど俺が主役なんだから、今此所で引いては…）あ…ありがと。そんじゃ頂き「声が小っっっっっっっっっっせぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！救世主ならもっとハイに言えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」」オブゥッ！？？！！」

ゴバッとディクの言葉を遮るかのように泥酔いしたジェズムが、ディクの開かれた口に目掛けて思いっきりアルコールが強い酒が入った木製ジョッキを“手ごと突っ込む”。

ディク「ムグッ！ムググゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！」

ジェズム「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラァ！勢い良くノマ★ノマウェェェィしろぉぉぉぉぉぉぉっ！」

ディク「グヘッ！グブブブブブブブブブブブブ（痛っ！つっ…か…叩き過ぎ叩き過ぎ！！ｗｗｗ痛たたたたたたたたたたたたｗｗｗ）」

ドスドスと酷く酔ったジェズムがディクの口に手ごと入れた高アルコール酒入りジョッキを、ディクの口の中で下へ動かしながら腹部に向けて何度も拳を丸めた左腕で何度もワザとらしく叩く。

ジェズム「ウヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャ！こりゃ快感だＺＥＥＥＥＥＥＥＥＥ！！」

ディク「つぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ…ガハッ！？」

グポッ♪と泥酔いしているジェズムがクケケケケと子悪魔的に不気味に笑う声を出しながら、ディクの口の中に入れていた自分の右手とジョッキを外へと引き抜く。

ディクはゲホッとジェズムの腕ごと口の中から引き抜かれて、咽奥

に何かが引っ掛かったのか軽く咽せて両眼を閉じながら丸めた右手を口に寄せて身体を何度もくの字に折る。

オズワルド隊長「まぁぁだまぁぁぁぁぁぁだぁ！俺達の“１００年祝★杯ドSアタック”は終了していない！！」

ディク「Σ（Д　；）ちょっ…ま…まだ？？？ｗｗｗ」

漸く呼吸が落ち着いたディクはケホッと軽く咳き込んで顔を上に上げた時、ディクはまたしても顔を引き攣るように表情を青ざめながらオズワルドとアルベルトが持つ巨大な物体を見る。

アルベルト「喰らえぃ！俺☆達の三人組みのぉぉぉぉぉぉぉぉぉ♪」

ジェズム「当店自慢の最高美酒！鬼畜ＤＥ☆」

オズワルド隊長「ウルトラジェッ●ストリームアタァァァァァァァァァァク！！」

ディク「っぅ…え　ぇえ！？ブッ！？？！！」

ドガシャァァァァ！！！！

暴走三人組（ジェズムとアルベルトとオズワルド隊長）が交互に持つ“酒入り巨大樽”を、ディクに向けて…

―オッサン二人と白髪ジジィの年輩野郎がサッカー選手のように、オズワルドが片腕だけで巨大樽を投げた後、残り二人が同時にオーヴァ★ヘッド＼（ˋ〇′θ／キィィィィィックし、ディクの顔面に目掛けて酒入り巨大樽を超ノリノリな連携で蹴り当てた。―

ディク「グッ！？…え〝…ちょっ…」

バキッと先程ジェズムに高アルコールの酒を飲まされたせいか視界がぼやけて虚ろになり、蹴られた巨大樽がディクの顔面にモロ当たって巨大樽が粉々に砕け散り、中に入っていた酒がディクの全身をズブリと濡らす。

ディク「う…ぅ・E……に…苦すっぱ…く…臭い…」

巨大樽に顔面からぶつけられても流石３０年間エツィオに鍛えられていたか“痣・傷一つも無く”平然としていて、酒でずぶ濡れになったディクは口の中に入った苦い酒を飲んで嫌み嫌みの表情を出して酒で濡れた顔面を拭っていた時…

人間軍兵士Ａ「俺得★Ｍｙ酒ミッソー発射（ロンチ）！！」

人間軍兵士Ｂ「ミッソー！ミッソー！！」

ディク「ホバッ！？」

バシャッと“カメラの画面外”からほろ酔いした兵士達の一部がディクの頭部・左肩に目掛けて酒が入ったジョッキごと投げ当てて更にディクの身体を濡れさせる。

人間軍兵士Ｃ「俺★ＦＯＸ２！！」

人間軍兵士Ｄ「特殊兵装ＸＬＡＡ！！発射！！ＦＯＸ３！！！」

人間軍兵士Ｅ「逝くぜ！受け取って下さいディク様！ＦＯＸ４！！」

ディク「おまっ！！全員酔ってエ●コン無線台詞になってやが…てかっ、ＦＯＸ４は断じて止めろ！！」

ババババババババババ！！！！

酒場にいる全員がもう完全に酔って暴走したのか、全員が“酒乱限定ドS・腹黒・悪人面のような笑み”を出し、ディクに向けて手にしていた酒入りジョッキをミッソーのように投げつける。

数々のジョッキが宙に舞う中一部の者は、両腕を横に広げハァハァと息を乱し変態顔を表にさらけ出しながら、ディクに向けて身体ごと飛翔し向かってきていた。

ディク「ギャェッ！もうヤベェ！色んな意味でマズイ！！ｗｗｗ（お…俺、アルコール強くて良かったぁぁぁぁ！！）」

ディクはさぶいぼを出し通常の視界に戻って戦火のような危機的感覚で睨んだ後、投げつけてくる酒入りジョッキ＋αをカウンター席を飛び越すように後方宙返りして向かい側のテーブル裏へと集中放火攻撃を間一髪逃れる。

バシャバシャと酒が先ほどいた席に集中放火していく音と、バキリと何かがぶつかる生々しい音を聞きながら、ディクは身体の機能を素早くチェックし異常無いことを隅々まで確認した後…

ディク「（取り敢えず…此処から逃げなくてはｗｗｗ）ご…御免皆！！」

ディクはしゃがみながら両足に力を入れてクラウチングスタート体勢のような姿勢を取り、グモモと上から目付きがもう危い危険な猛獣共がゆっくりとテーブル裏にいるディクに向けて手を伸ばそうとした時…

ディク「剃！」

酒に酔った危ない人間達「「アァン！？」」

バシュゥ！とディクの姿が一瞬の内に残像すら出さないまま消えて、酒で超危ない位に進化した人…否猛獣共は顔を右往左往に動かし天井・店出口等を隅々までディクの姿を探す。

アルベルト「何処ダァァァァァァァァァァディィィィィィィィィィィク！！！！」

ジェズム「勝手ニ抜ケルナ、ボケ那須ガァァァァァァァァァァァァァァ！！！！」

オズワルド隊長「グヌゥゥゥ！！！！奴ニ一度気持チイイ快感ヲ味アワナセレバナラァァァァァン！！！！」

主要三人組がもう言語が下級悪魔のネロマテ達になって両眼から悪

魔と同様の赤い眼光を車のハイライトのように出す。

両鼻穴から蒸気機関車のような蒸気がブピュピュー♪と出しながら酒に酔った状態の一人…オズワルドが酔い限定の指揮者となって、集まった超ほろ酔い兵士&民に半端ない命令を下した。

オズワルド隊長「総員…我々ノ“贄”ヲトッ捕マエロ！！手段ハ取ラァァァァァン！！！！！」

猛獣共ｰ Ｓ「「イェェエエェェェェェェェェェェスボォォオォオオォス！！！！！」」

酒に酔った全ての民が一致団結して獣同士の奇声を上げて片腕を何度も上に上げた後、オズワルドを先頭に一斉に外へと走り出した。

オズワルド隊長「クハハハハハ！！リアル鬼ゴッコノ始マリダゼ！ヒャッハァァァァァァァ！！！！！」

第百三十八曲　とある某ゲーの悲惨なお約束場面

－回想　８００年前以上　フランスオルレアン　都市内－

ディク「おはぎゃぁぁぁ

ドドドドドドドドドドドドドッ！！！！

ジェズム「待ァァァァアアアァァテェェェ

逃げれば逃げるほど地上ではどんどんと自分を追いかけてくる人の数が“増えてきていて”、酒を飲んでいない一般市民も彼らの“悪魔さえ逃げ出す凄まじい（呪われしい）力”に引き寄せられるようにして、彼らも猛獣共と同様“赤い眼光”になってディクを追いかけていく。

ジェズム「オイ弓兵部隊ァァァァァァァイ！先回リシテ撃チ落トセェェェェェェェェ！！！！」

市民含めて猛獣共「「C' e s t u n o r d r e e e

アルベルト「撃テ撃テ撃テ撃テ撃テ撃テ撃テ撃テ撃テ撃テ撃テ撃テ撃テ撃テ撃テ撃テ！！！！！」

オズワルド隊長「槍ヲ放テ！ＦＯＸ２！！ＦＯＸ２！！」

バヒュヒュヒュッ！

オズワルドが空中に走るディクに向けて右人差し指を思いっきり下へ下ろした時、屋上・見張り台の頂にいた全弓兵が一斉に弓を引いて炎の矢をディクに向けて雨のように飛ばす。

ディク「っく！や…やり過ぎだテメェらぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！Ｒｅｓｔｅｚ　ｑｕｅ　ｊｅ　ｐｌａｉｓａｎｔｅ　ｄａｎｓ　ｌｉｅｎｓ！（ふざけてんのたがいにしろ！）」

ディクは一旦逃走を止めてもう厭顔から一変真剣顔になり、足元に円形の呪文のような銀色の土台のようなものを召喚して、自分に向けて放ってくる炎の矢達に向けて右足を少し上げた後…

ディク「Ａｒｇｅｎｔｅｚ　ｌｅ　ｔｏｕｒｂｉｌｌｏｎ！」

通常の人の眼に見えない“高速百連蹴り”を何連発も繰り出して、辛うじて肉眼に見える銀色の靄が一つ一つ“巨大の三日月型の風”

になり、放たれた炎の矢がディクの作り出した風に当たった瞬間、炎含めて矢達が“砂のように風化して綺麗に消滅”した。

オズワルド隊長「グヌゥウゥウゥウゥウゥウゥウゥウ！！！！ヤ…ヤルナ小僧！！！！！ナラバ第三次テ「二度とやらせねぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」オフゥ！？！！！」

ゴオッと突然突風のような風を前から受けてオズワルド及びジェズム・アルベルト＋α含めて全員が“突風で軽々と宙に舞い”、屋上にいた矢兵達も突風で吹き飛んで、手にしていた弓が身体が宙に舞うと同時に何処かへと吹き飛ばされる。

どうやら高速百連蹴りをした後ディクは両手を翳すように前へと突き出して魔力を集中させた後、両腕を前に突き飛ばすように押した途端両手の平に集中していた魔力が“嵐”となって、地上にいた暴走者&弓兵ごと魔力の風で吹き飛ばしたようだった。

ディク「全くっ！！…もぅ…」（-〜、;）「」

ディクは前に翳していた両腕を元に戻し足下に浮かぶ魔力の土台に浮かびながら、地上でディクの魔力の嵐で吹き飛んだ暴走者共が枯れ葉のようにペチッ♪と軽い音を立てながら落ちて、そのまま無様な格好で“全員気絶した”所を見届けた後…

ディク「そのまま朝まで寝てろや。」

両肩を落とし深く溜め息を付いた後、無様に気絶している彼らに踵を返して再び“空中疾走”しながら何処かへと走り去っていった。

…

……

……

―数分後　ジャンヌダルク邸　裏庭―

空中疾走してきたディクは屋敷（マイ★ハウス）の真上上空に着いた後、静かに魔力を引き出してワイヤーでも吊るされたかのようにゆっくりと裏庭内へと降り立つ。

右足から先に着いて芝生の音を軽く立てながら、きちんと両足を着いて林檎が成る樹へと数歩歩みだして軽く林檎が成る樹へと言う。

ディク「エツィオ、居る？」

エツィオ「おっ？何だ？？乱用パーティはオシマイにして、一人上がりかぃ？？」

サクッと半透明状態だったのか林檎の樹の上に再び鼻下と口の周りに髭が生えた髭ツィオがディクの声を聞いて実体化し、エツィオは笑みを出しながら林檎の樹から、空中で何度も前転して華麗にディクの前へと降り立つ。

ディク「皆が皆で勝手に暴走するから、こっそりと抜けてきたんだよ。」

エツィオ「ＨＡ　ＨＡ～Ｎ♪随分と“被害”にあったなぁ。英雄やら救世主と呼ばれたお前にゃぁ、たまったもんじゃない。」

エツィオはディクの衣服に染み付いた酒の臭いを犬のように嗅ぐ仕草を取りながら、わざとらしく落胆しているディクの左肩を軽く右手で何度も叩く。

ディク「…加減して欲しかったんだけどね。ｗｗＵ・Ｅ…酒の臭いが取れんｗｗｗ」

エツィオ「かなりの高アルコールを染み付けられたなぁ、ディクｗｗまぁ、それは置いといて…」

ディク「うん。俺が此所に来た理由は…」

ディクは何時ものエツィオのおちゃらけたKY台詞を聞いて、口元に左手を覆い隠すように軽く可笑しく吹いた後…

ディク「エツィオはまだ“今の俺達が生きる世界の旅の最中”だったんだろ?だから…」

エツィオ「!」

ポゥ…

微笑む表情を出すディクがエツィオの胸元の漆黒の鎧に右手の平を触れた瞬間、エツィオの全身が数秒銀色の光に包まれて、星屑のような細かい粒子が宙に舞う。

ディク「契約解除…エツィオ、アンタはもう自由だ。」

エツィオ「オィオィ本当に良いのかよ?」

エツィオの全身に包まれていた銀色の発光が止んだ時、ディクは胸元の鎧に付いていた右手を離し、エツィオに向けて天使のような微笑みの表情を出す。

ディク「これからは、俺達人間が民の為に作り上げる時だ。俺が民の命のために振るっていたこの力は…“もう必要無い”。」

ディクは身体の中に入っていた全ての光の魔力を“エツィオの中へと注ぎ込んで”、契約解除したと同時に身に付けていた魔力をエツィオに差し上げたようだった。

エツィオ「オィ、待てよ。俺はただお前の…」

ディク「大丈夫、俺には沢山の友が居る。共に戦ってきた俺の仲間達と此所に住まう民と共に、“本来の人間の力”で幸せな国へと築き上げるから…心配しないで。」

エツィオは少し額から汗を出して困惑する表情を出しながら“魔力を持たない本来の人間になった”ディクに言ったが、ディクは数秒両眼を伏せて顔を何度も横に振った後、両眼を開けながらエツィオに言い返す。

エツィオ「ディク…お前…」

ディク「大丈夫だって、エツィオ。俺はもう戦場の指揮者からこの国を護る“王”に成ったんだからさ、エツィオと一緒に過ごしてそこで学んできたことを活かしながら、この先を人間同士の会話で何

とかしていくよ。なので…」

エツィオ「ん？」

ディクの成長した言語を聞いてキョトンとしていたエツィオに、ディクの伸ばされた右手がエツィオに向けて差し伸べられる。

ディク「３０年間ありがとう、エツィオ。俺は…アンタに出逢えたことで、誇りに思う。」

ディクの生粋な表情を見たエツィオは少し口を開いて間を開けた後、エツィオは立派になった元契約者に向けてフッと再度口元を吊り上げて軽く笑った後…

エツィオ「立派になったな。楽しかったぜ…ディク。」

ディク「此方こそ…たまには顔を見せてくれよ。何時でもいいからさ。」

ディクがそう言った後エツィオは「あぁ。」と軽く返事して、差し伸べられたディクの右手に向けてエツィオは左手をゆっくりと伸ばし二人の手の平があと数秒握手として握る。

しかし…

ドスッ！

ディク「っ！」

エツィオ「ディク！？」

突如何かが刺される音をエツィオが聞いた時、目の前にいたディクの口から少量の赤い液がツツッと下へと落ちて、地面の芝生を数滴赤く染め上げる。

？「ナ…ニヲシ…テイル…！ナゼ…！！」

ディク「ぁ…ぁあ…」

ディクは苦痛の表情を出し身体をガタガタと震えただせながら、顔だけを後ろへと振り向くように動かした時…

？「ミ…カエル……ミカ……エル……ヲ……テバナス…キカ！コノ……」

―馬鹿な私の弟！！―

第百三十九曲　気になる場面ですが、さっさと次に進ｒｙ（…記憶を早送りして

―回想　８００年前以上　フランスオルレアン　ジャンヌダルク邸　裏庭―

エツィオ視点から見るディクの背後から左腹部までナイフを突き立てた本人、それは以前エツィオに強制契約をした自己チューな女であって、刺されたディクの姉である史上最悪の老婆…

―かつて時の契約で勝手に成立し他人任せかつエツィオを戦場に率いれようとした“老婆ジャンヌ”が、自分の弟であるディクにナイフを身体の表まで突き出していた。―

ディク「ぁっ！…ね…姉さん…どうし…て。」

エツィオ「ディク！！」

ジャンヌが持つナイフが引き抜かれると同時にディクは膝から地面に折って、ドサッと力なく身体を横向きになりながら芝生の上へと倒れる。

エツィオは直ぐに倒れたディクに駆け寄った後、エツィオは右膝を折って半立ち体勢を取りながら右腕で倒れたディクを胸元に寄せる。

ジャンヌ「コノ…バカナ…オトトトトトウ…トガ！！ナンデ…オマ…エナンカニ…ミカエ…ル…サママ…マノ！！！！」

既にジャンヌという人格が崩壊しているのか所々吃音症になりながら、身体を逆くの字に折って若干とある格ゲーのキャラが覚醒技でも使ったように、ジャンヌの背後から“何か禍々しい触手”のようなオーラが出る。

ジャンヌ「アハ…ハハハ…ハハッ！！ミカ…エルミカカカカカカ…サササササ…ハッ！……モモモ！！」

エツィオ「このクソババア…ディク、しっかりしろ！」

エツィオはギリッと歯を噛み締めてディクを刺した元契約者を睨み付けた後、刺されて息が乱れている出血状態のディクを見て苦渋の表情を出した後…

エツィオ「Ｕｎ　ａｌｂｅｒｏ　ｃｉｌｉｅｇｉｏ　ｄｅｌｌ' ａｉｕｔｏ.」

パァァァ…

刺された左腹部に向けてエツィオが右手を翳した途端、右手の平から青白い光が放って所々桜の花の形をした光が、刺されたディクの左腹部に吸い込まれるように入っていく。

ディク「う…ぇ…エツ…ィオ。」

エツィオ「Ｐｅｒ　ｆａｖｏｒｅ　ｒｅｓｐｉｒｉ　ｂｅｎｅ（気をしっかり持て）、ディク。」

刺された左腹部の傷が“コンマ数秒で癒えて”流れ出した血も“元の身体の中へ逆戻りし”、突き刺され少し破けた上半身衣服も血の痕さえないまま“完全修復された”。

ジャンヌ「ォ…オ！！！！オォォォ

ジャンヌ「ホシ…イイイイイ！ホシシシシシシ…イホ…シイイイイイイ！！！！」

ディク「ね…姉……さん……。」

エツィオ「けっ（＃、Д,）」

グオッと老婆ジャンヌがエツィオに目掛けて思いっきり走り出し、手にするナイフはいまだにエツィオの胸の中にいる弟（ディク）の心臓に向けて前へと突き出す。

ジャンヌ「アァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！」

ディク「姉…さん！！どう……してだよっ！！」

エツィオは人格崩壊し自分の弟を殺そうとする姉の姿を見て醜いとでもいうように嫌み顔を出し、胸の中で半分気絶しているディクを庇うように“右腕だけで抱えた”後、唾を数滴ジャンヌの顔面に吹き掛けて横ステップでジャンヌの突進ナイフ攻撃を紙一重で回避する。が…

ジャンヌ「チチチチチチチチチ…チィィィィィィィィィィィィ

ィィィ！！！！！」

エツィオ「！」

ボキリとジャンヌの首が折れる音を立てながらエツィオの方へと“狂気の表情を出しながら一回転し”、右腕に持つナイフも骨が折れる音を立てながら“右腕自体がヘビのようにうねって”、右手に持つナイフが抱かかえているディクの額に向けて狂いなく突き出てくる。

エツィオ「くっ！」

ディク「エ…ツィオ！！」

エツィオは抱かかえているディクを庇うように左腕を前へと持ってきた瞬間、ドスッとジャンヌが持つナイフが鎧で覆われていないエツィオのローブの服に刺さってナイフの刃がエツィオの腕の中へと突き刺さる。

ジャンヌ「ギャハッ！！ギャハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハッハ！！！！」

首が一回転し“顔が背中に向いた”ジャンヌはナイフを突き刺した

大天使(エツィオ)を見て、瞳孔が更に大きくなって白い強膜が徐々に赤い線みたいなものが複数浮かび上がり、理性を無くした悪魔と同様の狂喜の表情を出しながら気持ち悪く大きく笑う。が…

エツィオ「Ｉｏ　ｍｉ　ｓｅｎｔｏ　ａｍｍａｌａｔｏ…Ｄｉ　ｃｏｓａ　ｒｉｄｅ　ｄｉｖｅｒｔｅｎｔｅｍｅｎｔｅ？（キメェ…何が可笑しいんだ？）」

ジャンヌ「ギッ！？？！！」

突如エツィオの左腕が“西洋の竜のような屈強の魔神の腕”になって、左腕に突き刺したナイフがエツィオ本来の“この世界を活きる全ての魂(いきもの)を拒絶する魔神の圧倒的な魔力の壁”で、ナイフ自体が“粉末状”になって消失する。

ディク「エ…ツィ……オ……。」

姉(ジャンヌ)が突然変異したエツィオの左腕を見て狂喜顔から一変“絶望したような顔”になり、意識が薄れていくディクが弱弱しくエツィオからジリッと後退していく姉を虚ろな視界で見ながら言う。

エツィオ「…少し寝ていろディク、こっから先は“Ｒ指定”ＤＡ…」

ディク「ぁ…」

ディクの視界が段々とブラックアウトしていく中彼だけ優しく語るエツィオの背後から“青白い靄が立ち上がる”光が見えて、徐々に靄がエツィオが完全に魔神化したような上半身だけの幻影に成っていく。

エツィオ「ジャンヌ…俺は言ったよな?“また裏庭に来たら次はねぇ”と!!」

ジャンヌ「ガッ…ヒャァァァァァァアアアア!!!!」

ゴォォォォォォォォォォォォォォォ!!!!!

エツィオの両眼が黄金の鷹の眼へと変わっていき黄金の眼光と幻影の眼光から放つ“殺気”が、ジャンヌ…否今いる全ての自然たちの生気が一瞬の内に死神の鎌で狩取られる様な勢いで奪い去っていく。
そして…

エツィオ「Ｓｉａ　ｆａｔｉｃａｔｏ　ｆｕｏｒｉ…Ｍａｉ　ｎｏｎ　ｔｏｃｃｈｉ　ｑｕｅｓｔａ　ｔｅｒｒａ!!!!」

“カメラ目線”に向けて左手を翳すように前へと突き出した時、蒼

一色の光が全体を覆いつくし恐怖で脅えているジャンヌ・自然達がエツィオが放った青い光に入った瞬間…

―全てが暗転した。―

第百四十曲　そして現代へと戻り、魔神＋α無双を開始するＺＥ★

―現代　フランスオルレアン　都市内―

エツィオ「はぃ★色々とかっ飛ばしてスマンネェ～♪今から現代編へと元に戻すぉ～（＊´８`＊）」

シャイナ「おっっっっっっっまっっっっっっっ！！！！“今一番気になる展開があった”のに、何故現代編になる！？ｗｗｗ」

突如過去編からシャイナがいる現代編へと戻っているのにブフッと吹いて、エツィオと共に隠れていた場所で語った“第百二十曲～第百三十九曲”の飛び飛び過ぎる超展開に激しく突っ込みを入れる。

エツィオ「えー、だってもう作者がさぁ～♪“もう過去話メンドイＺＥ☆”とリアルに言って急遽現代編に移り…」

シャイナ「かっ飛ばし過ぎだろｗｗｗてか、作者本当にフリーダムだな。ｗｗｗあーたが契約していたディクの安否は？糞ババアのジャンヌはどうなったとか…色々質問攻めしてくると思うぞ？ｗｗｗ」

エツィオ「まぁまぁ、ちったぁモチつけよシャイナ。折角連載１４０回目にして漸く現代編へと“無理矢理繋げた”からＳＡッ★」

シャイナ「かといって“手抜き過ぎるのも程々にしろ”やクソ作者ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！ヽ（＃、Д、＃）ノ」

一旦隠れていた場所からエツィオはシャイナを背中に乗せて肩車しながら移動しており、途中突っ込み処満載しながら叫んでいるシャイナに向けて●コちゃんフェイスを出しながら続けて言う。

エツィオ「この小説のタグにキチンと書いてあるだろ？“フリーダム”って★それと作者はもう“先輩ケアワーカー”になったから、色々とリアル的に忙しくなったもんでとうとう“ｇｄｇｄな手抜き場面が多くなっちゃった”♪♪…まぁ、あの後の話だが…」

タタンッ！と赤黒く染まった空とサイ●ントヒル風の裏世界のような都市風景バックに、エツィオはシャイナを背中に乗せ肩車しながら都市の屋根を使ってある場所へと目指しながら“あの後”の続きを語る。

エツィオ「ディクを殺そうとしていた奴は俺が直々葬ってやったが、奴の死と同時に密かに捕らえていた“悪魔”が地の底からまた這い

出て来たのさ。ディク達が国民の為に命懸けで戦っている最中に奴は…」

途中ネロマテやオルカン達がシャイナを肩車に乗せて走るエツィオに立ち塞がり爪を振りかざそうとしたが、エツィオの“目に見えない高速ＹＡ・ＫＵ・ＺＡキック★”で立ち塞がっていた悪魔達の頭部が“一瞬の内に血・肉片すら出させないまま消滅”する。

エツィオ「“奴（ジャンヌ）を契約破棄にする７０年前の戦いの最中に倒した悪魔の死骸”を戦火から盗み出し、屋敷内の地下で密かに研究していたのさ。俺の力を手入れるだけでなく、その兵士が全て滅せられた時の第二戦力兵として“自在に操ることができる強力な兵士”を開発しようとしていた。」

シャイナ「それが今俺らの前に塞がる“敵”がそうなの？てか…何故そのようなことも“都合良く知っている”？ｗｗｗ」

ドガッ！ゲシッ♪とエツィオの両肩に乗るシャイナは、襲い掛かる悪魔を“蹴りだけで蹴殺”しながら前に進むエツィオに向けて顔を下に向けて言ったが、エツィオは「いや、コイツらは奴が求めていたモンじゃない。」と否定する。

エツィオ「ディクを癒した後、俺はキな臭い裏切りモンの気を感じ取って回復したディクと共に地下へいったんだ。それが“コレ”なんだよ。」

走りながらエツィオは後ろから襲い掛かるネロマテ数体の腹部に向けて眼に見えない“左ソバット”を風穴できるぐらい蹴っ飛ばし、さらに左足を前へと一蹴させて前方から襲い掛かるネロマテ・オルカン達を左回し蹴りで豪快に“バラバラになるぐらい蹴殺”する。

エツィオ「コイツらは“失敗作”なんだ。知能は高くても唯一求めていた“意思”を自在に操ることが出来ないし、尚且つコイツらは地上の光に弱く少しでも当たっただけで消滅してしまう。」

めんどいなと思ったエツィオは前に進みながら身体の中にいる使役（ペット）一体に向けて思念を送った後、エツィオの背中から青い円型の呪文が入ったアサシンの紋章が浮かび上がって…

エツィオ「再度奴が作り出した“失敗作”と戦うことになったのさ、迷惑すぎるほどにね。だから粗方痛みつけた後二度と地上に這い出てこないように“数体地下へと封印した”というのに…あのクソ親子め！！」

浮かび上がった紋章の中心から短闇剣が出てきて、武器がクルクルと回転しながら赤黒い光を放ち天へと昇った後…

ネロマテ- S【ゴギャァァァァ！！】

オルカン・Ｓ「ギャヒィッ！！」

バキンッと割れるような音を立て赤黒い光の柱の中から、飛竜の翼のような大きい羽根が掬い上げるようにアッパー☆カットし、エツィオの背後から襲い掛かろうとしたネロマテ・オルカン達を一羽はたきだけで“身体がバラバラに引き裂かれる”ぐらい思いっきり後方へと吹き飛ばす。

ラークシャシー《光に弱い下等共（ゲス）め…最後まで援護しようぞ、吾が愛する魔神よ。》

赤黒い光の柱が止むと同時にラークシャシーの本来の全身体が飛び出して、ズシンと逞しい竜の足を陥没させるぐらいに凹ませながら地上に着く。

ラークシャシーを召喚したエツィオが「捻り潰せ。」と軽く言った後、ラークシャシーは無言で頷いて巨大な翼を腕の中に折り畳むように仕舞い、本来の屈強の腕にさせ背中に携えていた妖刀ヤ●ガラスのような巨大刀を右手で引き抜く。

ラークシャシー《逝ね…魔神に刃向かう愚かな者共め。吾が魔刀の錆にしてくれる！！》

シャイナ「だわわっ！？」

ドドドドドドド！！！！！

ラークシャシーの持つ魔刀の刀身の周りが赤黒い靄が覆い尽くし、右足を後ろに下げて右手に持っていた刀を両手持ちにし、顔面に向けて刀の刀身を構えた直後、刀身に覆われていた赤黒いオーラが爆発したかのように前へと広がる。

ネロマテ・ｓ【ギャァァァァァァァァァァァァ！！！！！】

オルカン・ｓ「ギュォォォォォォォォォォ！！！！！」

ラークシャシーの魔刀の刀身から放った赤黒いオーラがネロマテ・オルカン達に当たった直後、蒸発していくように身体が細かく分解していきながら跡形も無く消えていく。

エツィオ「“Ｎｏｎ　ｄｉａ　ｉｌ　ｐｏｔｅｒｅ　ｏｒｉｇｉｎａｌｅ（本気は出さなくてもいいからな）”、軽くあしらってやれ。」

ラークシャシー《無論。》

ラークシャシーが手にする刀を下へと下げて後退するように飛び退きながら、シャイナを肩車をしているエツィオの傍へと付き魔刀を再度構える。

シャイナ「で…エツィオは今何処に向かっているのさ?」

ラークシャシーと共にエツィオは襲い掛かる敵を足だけで蹴散らしながら前へと進み、赤錆びた建物の壁や街灯等にエツィオとラークシャシーが斃した敵の血がベロォンとこびりついていく。

エツィオ「ディクが命を掛けて護った国をこのように変えた邪悪の存在の場所は“９割見当”がついている。そこは…」

キッと眼を細くさせ真剣顔を出しながら、エツィオ一行は一点の場所へと目指す。それは過去ディクと初めて出会いそこで死に物狂いでディクが特訓した思い出ある場所…

エツィオ「奴の館にあった“林檎の樹が生えた裏庭”だ!!」

第百四十一曲　嫉妬に包まれた世界の中の史上最凶の猛獣達

ブリトラ《バォオオオオオオオオオオッ！！！！》

ネロマテP【グァァァァァァァァァァ！！！！】

オルカンP「ギッ！ギィィィィィィィィィィィ！！！！」

召喚したラークシャシーと共にエツィオ一行が、ディクと共に過ごした思いである場所へと向かっていた最中、次いでにブリトラも身体の中から呼び寄せて召喚していた。

立ちはだかるネロマテ・オルカン達に向けてブリトラは力強い咆哮を今いる国全体に轟かせながら、口から吐かれる紫色の雷の塊を放射状に放ち敵を肉片すら残さないぐらい消失させる。

ラークシャシー《退け！吾が主に汚らしい手で触れるでないわっ！》

ネロマテ・オルカン・S【「ギャヒッ！！！！」】

ザシュッとラークシャシーが両手で持つ魔刀の刀身が赤黒い軌跡を描きながら横一閃に振り、主人を狙う敵を全て綺麗に身体を横へと切断する。

ブリトラ《この出来損ないがっ！》

ラークシャシー《吾が主に寄るな、動くな、クタバレ阿呆！！》

シャイナ「（おまっｗｗｗ一瞬ア●ヘルが“Ｓ●３に出てくるプリン野郎”になったｗｗｗ）」

更に続けて魔刀を華麗に振りながらエツィオの周りを旋回し雷を吐くブリトラと共に敵を打ち倒し、同じ闇生(カオス)まれなのか“息ピッタシ”で一部有名台詞を吐きつつ、エツィオを狙う敵を“片っ端から身体そのものを消失していくように滅ぼしていく”。

エツィオ「はぃ、邪魔～♪」

ネロマテZ【ギャァ！！】

ドゲッ♪と懐に飛び込んだネロマテだったがエツィオは既に読んでいたらしく、ネロマテの爪の代わりにエツィオの右足が顔面から食

い込んでいた。

食い込んだ直後にエツィオの右足が“頭部裏まで突き破り”、シャイナが「御愁傷様ｗｗｗ」とわざとらしく言った直後、ネロマテの頭部をそのまま爆発させるように破壊して、頭部の無いネロマテが仰向けに倒れた後残された身体が細かく分解して消滅する。

ブリトラ《…粗方滅したな。黒き闇竜よ。》

ラークシャシー《そのようだな雷竜。だが嵐が去っても、また再び再来するであろう。だから主よ…》

エツィオ「心配すんな、もうじき目ぼしい所へと着く。また現れたらお前達に任せる。」

シャイナを肩車しながら移動するエツィオが後方から飛んでくる使役達に向けて振り返らずに言った後、エツィオを護衛するブリトラとラークシャシーは《承知》と言って再度己の武器を構え再来する敵を警戒しながら、エツィオの後を追うように付いていく。

エツィオ「おらっ！邪魔すんなボケ！！」

ネロマテ・オルカン－ Ｓ【「ギャァァァァァァ！！！！！」】

赤く染まった空の下でエツィオ一行は思い当たる一点へと目指し、途中ネロマテ・オルカン達を容赦なくぶち倒しながら漸く８００年振りの思い出ある場所へとたどり着いた。

―フランスオルレアン　ジャンヌダルク邸　裏庭―

エツィオ「…８００年振りだな。ここで奴に出会い、前契約者（ディク）と共に過ごした場所に…」

スタンッと屋敷の閉じられていた門を走り幅跳び感覚で飛翔し、軽々と“ビル１０階立ての高さ”で屋敷を飛び越して、裏庭が見える真上まで翔んだ後華麗に両足から着地する。

エツィオ「懐かしいねぇ～。だけど…」

数秒遅れて後方からラークシャシーがエツィオの右傍に降り立つようにズシンッと地面が沈む音を立てながら両足を着いて、ブリトラは宙に浮かびながらエツィオの左傍に付く。

シャイナ「うわっ…なんぞコレｗｗｗ」

降り立った芝生が腐ったように赤錆のように染まっていて、生えていた数々の人口木が全体的に黒く変色し気色悪い形へと変化させていた。

寄生花Ａ【ギュィィー！！】

寄生花Ｂ【ィィ！…キィィィィ！！】

一部の草花・蔦先には鋭い獣のような牙が生えた元の花を形を取った生物が生えており、花から発する寄声が今いる裏庭そのものを変わり果てた姿へとなっていた。

エツィオ「見る影もねぇな。かつての思い出の場所が“魔界”のような異世界へとなってるし…」

肩車にしていたシャイナをゆっくりと腰を落として地上に下ろした後、長年寝床にしてきた林檎の木だった“醜悪の物体”を顔だけ動かして目を細めながらそっと呟く。

シャイナ「おまっ…これ何て“人類消滅後の１００年後の世界ｗｗｗ”」

エツィオの顔の向きに合わせてシャイナも吊られるように顔だけを

動かした後、かつて林檎の木だった物体が手入れをしていない柳のように変化し、樹木そのものが赤黒く全体に赤黒いオーラが纏う。

林檎の実だった悪魔顔Ａ【ゴハッ…ゴハハッ！】

林檎の実だった悪魔顔Ｂ【グォォ…ン。】

林檎の実だった物体がオルカン達の頭部部分のようなモノに変化し、中心辺りから菱形口をした獣の牙がエツィオ一行を感じてガチガチと牙を擦る音を騒がしく立てていた。

シャイナ「うげっ…キモッ…見るに耐えないモンが、テラ★オンパレードゥｗｗｗ」

ラークシャシー《フムッ…この屋敷そのものが“魔界”と化している。この建物を覆う邪なる魔力の気流…地に生える魔草が魔界にある“第六階層”と同じよ。》

ラークシャシーが長い首を下に下ろしてグルルと咽声を鳴らした後、生えている魔草や魔実や魔蔦に向けて首を動かしながら（、皿、）イーと歯並びのよい牙を出し、軽く威嚇した直後…

寄生花ｰ　Ｓ【ギッ…！……ィ…ィ……】

林檎の実だった悪魔顔【ガ…ガガ……】

周りの魔草等の騒がしかった奇声を、ラークシャシーの威嚇程度で“恐怖&圧倒的な威圧感”を覚えて、大量の汗でも流れ出しているように一瞬の内に静めた”。

エツィオ「“第六階層”…嫉妬（レヴィアタン）という名の特級悪魔が収める場所か、ラークシャシー？」

シャイナ「嫉妬（レヴィアタン）ねぇ…なんか“七つの大罪”のようなモン？」

ラークシャシーの圧力（プレッシャー）が掛かっているのに関わらずエツィオとシャイナは“平然”としていて、変わり果てた林檎の木からラークシャシーに向けて顔だけ動かし問を返す。

ラークシャシー《左様。吾が愛する魔神よ…それに人間のお前も中々鋭いな。》

シャイナ「うん、とある某ゲーで覚えただけだけど、私として解りやすかったのはア●ラスの真・女●転生シリーズとか…ハ●レンのとあるシーンとか…トレ●ャーのシル●ットミラージュとか…」

シャイナが七つの大罪について思い当たることを脳裏に過らせながら、トントンと額を右人差し指で軽く叩きつつ七つの大罪について関係あるモノを脳内映像にて弄くり出す。

ラークシャシー《既に御存知だと思うが、魔界は悪魔の階級(じつりょく)によって七つの階層で別けられている。最弱な悪魔は“色欲(アスモデウス)”にそこそこの悪魔は“怠惰(ベルフェゴール)”そして…》

ラークシャシーが魔界構成の説明をする間にエツィオはスタスタと前へと歩き、シャイナ・使役達(ペット)も後を付いていってプンプンと漏れ出てくる気を感じながら一点へと目指す。

ブリトラ《最上…云わば強い悪魔は“傲慢(ルシファー)”。となると闇竜の言う嫉妬(レヴィアタン)は傲慢に次ぐ強さを持つ悪魔となる。》

裏庭を抜けると風化しきった地下鉄入り口のように大きく開かれていた穴があって、地下へと続く赤錆まみれの階段が長々と続いていた。

エツィオは側面付いてきていた使役達(ペット)に向けて交互に両腕を横に伸ばし、手の平を広げながら軽く「戻れ。」と言った直後、使役達(ペット)は《気をつけられよ。》と言って全身光に包まれた後元の武器へと戻り、交互にエツィオの手の中へと収まる。

シャイナ「二番目に強い悪魔かぁ…でもこの屋敷自体…何か気持ち悪い…前に進む度に異がムカムカしてきた。」

武器を身体の中へと閉まってシャイナと共に階段を降りていた時、ビリッと前に進む度にシャイナの身に悪寒のような感覚を受けて、首したから喉まで何かが上がってくるような気色悪さを覚え、表情を曇らせ歩行を遅くさせていく。

エツィオ「（…この先に“奴”が居るな。しかも…）…シャイナ、俺の中に入っとけ。そろそろ“ＨＥＹ♪お待ち、ボス戦だよぉぉぉぉぉぉん★”だからＮＡ。」

階段を降りている最中エツィオは歩行が低下しゼーゼーと息切れしているシャイナを見た後、気遣うようにシャイナの身体を右腕で支えながら胸元に引き寄せ中に入るように促す。

シャイナはエツィオの言動に賛成するように頷いた後、シャイナ自らがエツィオの胸元から入っていって「Ｇｏｏｄ★Ｌｕｃｋ」とエツィオに向けてビシッ♪と笑みを出しながら右親指を立ててスイッと身体の中へと入っていった。

第百四十二曲　Il diavolo di sette grandi cr

カンッ…カンッ…カンッ…

シャイナを身体の中へと取り込んだエツィオは一人闇に満ちた階段を降りて、カツンカツンと降りる度に足下のブーツ音が高く鳴り響く。

エツィオ「（…スゲェ魔気だな。俺は魔界の全体まで詳しくは知っていないけどｗｗｗ）」

ビリビリと前方から襲い掛かる強い魔気と圧力さえ眉一つも微動したりもせず超真剣の表情を出しながら、漸く長い階段を下がりきって目の前に地獄門のような呪文文字が書かれた巨大な鉄のドアが聳え立っていた。

―Ｌａｓｃｉａｔｅ　ｏｇｎｅ　ｓｐｅｒａｎｚａ，　ｖｏｉ　ｃｈ'ｉｎｔｒａｔｅ'―

シャイナ『うわっｗｗｗホンマに地獄門やんか。ドアの前に書かれている文字も神曲と同じだしｗｗｗ』

エツィオ「何て書いてあるんだ？」

エツィオの眼から通して身体の中から見るシャイナはオォーと目を丸くするように驚き、エツィオは身体の中にいるシャイナが知っている素振りでもしているように覚えてシャイナに問う。

シャイナ『“此処に入る者、一切の希望を捨てよ”と。多少のことだけど、地獄門の別名は“絶望の門”。門を潜り抜けた先はより酷い裁きの世界へと導かれるとか…』

エツィオ「へぇ…“希望を捨てろ”と？ふぅん…だが俺はっ！」

エツィオは目の前に聳え立つ門に向けて右腕を後ろに下げてグッと拳を握った時、背後から“黒い竜巻で出来た竜のような腕が沢山出てきて”、バキッと骨を鳴らしながら一つ一つ拳を丸めていく。そして…

エツィオ「希望というより“俺の意思（せいぎ）”を捨てないＺＥ！！」

シャイナ『おまっ！ｗｗｗΣ（　゜Д゜；）』

ド★ゴゴゴゴゴゴンッ！！！！

背後から出現させ魔神化時の腕達を半召喚したエツィオは大きく振りかぶりながら右拳をドアに叩きつけた時、背後に現れていた腕達も続いて殴り豪快に地獄門を“粉々に殴り壊した”。

パラパラと鉄の扉の破片が床に落ちて数秒噴煙が立ち上った後、モウモウとしていた白い煙が晴れて扉先の風景が現になる。

―フランスオルレアン　ジャンヌダルク邸　地下研究室　ジュデッカ―

ブゥン…ブゥン…

部屋の中は中世に無いほどの近代に近い鉄のフレームに覆われた航空機格納庫並みのデカイホール、そこには花の蕾のような先端が赤から黄色に掛かったカプセルが沢山横に並んでいて、蕾の中にある“何か”を外郭から出る電子音で静かに稼働していた。

シャイナ『（　゜Д　゜）…』

エツィオの眼から通して見るシャイナは沢山並べられた不気味に静かに閉じている蕾と、今いるホール自体が“近代的すぎる構造”見て口を開けてポカカカカーンと呆然としていた。

エツィオ「８００年振りに奴の地下研究室へと入ったが…“色々と可笑しくなっている”なｗｗｗ」

シャイナ「え〝…だってアンタが語った８００年前以上は“１５世紀中世”のハズだよね。まだ機械は…」

まだ発展しきっていない時代なのに有り得んと身体の中にいるシャイナがボソッと呟きながら、エツィオは閉じられている蕾のような物体に寄って右手の平で触れる。

ドクッ…ドクッ……

エツィオ「（“生きている”な。この蕾自体が異質な息吹を感じる。）」

右手の平の中で心臓のような音を感じながら聞き取り、エツィオはしかめっ面を出しながら視線を少しずつ横へと動かしていった時…

？【如何かな？余が造られし“最上悪魔が出来上がる魔蕾”の歪み美しい余の糧となる未来の魔軍たち姿を…】

エツィオ「あ？」

バシッと突如エツィオの背中から山●声のような二重声と共にスポットライトのようなまぶしい光が当てられて、エツィオは片目を閉じながら当てられた光の方向へと身体ごと後ろへと動かす。

？【元々この地が弱りきった霊地など、“あの方”のお陰で復活した完全状態の余の持つ“嫉妬”の魔力で容易く支配出来るのも容易かった。後はあの“下等親子”を時を旨く稼いだお陰で…】

エツィオ「！」

並べられた蕾の奥に十字架台に貼り付けされている女神の石造の頭部辺りの上に黒いローブを纏った男がジ●ジョ立ちで立っていて、“無風状態に関わらずブワッサァァァと長い裾を横に靡かせ”ながら地上にいるエツィオに向けて赤い眼光を降ろし見下しながら言う。

？【完全にこの国そのものが余の“魔界第六階層”へと成り果てることが出来た。下等な人間が造られし貧弱な結界塔なんぞ余の魔力の前では無意味よ！！】

エツィオ「…ボルジア。テメェか……」

眼を細めて真顔を出すエツィオが石造の上に立つローブの男の名を言った途端、くくっと苦笑する声を出しながら覆っていたローブを右手で取り払い姿が露になる。

中世の教皇が羽織っていたかのようなまっ白い貴族衣装に、背中には純白のマントを“無風状態に関わらず靡かせて”、右手にはニケの杖のような物を手にし見かけが６０?ギリギリのハゲ男がエツィオを見下すように視線だけを下に向けて睨み付けていた。

―七ツ罪皇　嫉妬　ロドリーゴ・ボルジア―

ロドリーゴ・ボルジア（略してボルジア）【くっくっく…何を怒る?余と小僧は我等と“同種族”なのだろう?使えぬ魔兵は時を稼ぐための道具として扱い、砕け散るだけの塵だ。我等の神を超えた圧倒的の力で力無き人を叩き潰し生態系をこの手で操る快感、無駄な生を歩んだ人間共の血肉を味わう極上の快楽。どれもこれも我らに取って良いことだらけではないか。】

エツィオ「テメェらと一緒にすんじゃねぇ。俺は“人間”だ。アンタらがやっていることは全て“ただの虐殺”じゃねぇか。」

ボルジア【否…これは人間界・神界・深蒼界・妖精界に対する“救済”よ。裏で下等種族の意思を操り改善処置をこまめに行い理を監視するのが我ら魔族の役目。使えない人間・神などいては邪魔にな

るだけだ。】

真顔の表情を出すエツィオが石造の上にいるボルジアに向けて両腕を組みながら言い、ボルジアは口元を吊り上げてハッハッハとワザとらしく笑い声を出しながら、ゆっくりと石造の上を歩んで宙に浮かんだ後魔力で地上へと降りて両足から綺麗に着く。

エツィオ「違うね…必要とされていない人間・神など居ない！アータラは人間達の強き意志をその眼で確かめてないから、そんなことが簡単にベラベラと吐けるんだＹＯ！！第一俺が見てきた８００年前…いや“それ以上”の古の人間達は一人一人皆非力ながらも、種という関係の壁を超えて手と手を取り合い“外部からの敵を共に退けたんだ”！人間はお前ぇらが言うように“愚かじゃねぇんだよ”！！」

エツィオは否定するように右腕を顔面辺りまで上げて真剣の表情を出しながら、今まで見てきた眠る前の過去の人間達の戦いの記憶…修羅を共に乗り越える彼らの生き様の出来事を脳裏に再生しつつ、上げていた右腕を背中の後ろ側面まで振って強い眼光をボルジアに向けて放つ。

シャイナ『エツィオ…貴方（え…“それ以上？”となるとエツィオの歳って…“２８００歳”じゃなく…ま…まさか…Σ（´Д`；））』

シャイナは身体の中でエツィオの何処かで聞いた事があるような厨ニ台詞を聞いて、口を八の字にさせて首をかしげながら物語序盤のエツィオの歳に“矛盾がある”ことに疑問をよぎりながら少し頭を捻らせた後、エツィオの“本来の年齢”が二次元脳内に映し出されてゾワッと青ざめて全身にさぶいぼを出す。

ボルジア【愚かな…これだから客観的な視点しか見ない小僧には“あのお方”の真意を読み取る事が出来ず、むしてもお前には“我らの本来事を成すべき存在理由”さえ気づく事も、理解することも出来ない非常に哀れな“最初の出来損ないの悪魔”よ。】

エツィオ「？言っている意味解んねぇよクソハゲがｗｗｗもっと閲覧者に意味解るように言えやｗｗｗそれに…」

ボルジア【ほぉ…？】

言っている意味が解らないエツィオは両眼を細めた後腰を少し落とし、右足を後ろに下げて両拳を前に構えてファイティングポーズを取りながら数メートル先にいるボルジアに向けて…

エツィオ「Ｆｅｒｍｏ　ｇｉ？　ｉｌ　ｄｉｓｃｏｒｓｏ　ｌｕｎｇｏ　ｅｄ　ｉｎｄｅｇｎｏ　ｅ　ｂａｌｌｅｒ？　ｆｅｌｉｃｅｍｅｎｔｅ　ｃｏｎ　ｍｅ？（くだらねぇ台詞はここまでにして、さっさと殺し合おうか。）」

ボルジア【はっはっはっはっはっは！！！！如何に貴様のような魔神でも“完全な余の世界”に入り込んだお前に何が出来る！？魔界・人間界を全て吸い取った大いなる嫉妬に包まれた“絶望の中”でな！！】

黄金の鷹の眼を出す戦闘体勢のエツィオを見てボルジアは右手に持つニケの杖の底を着いた直後、ドンッとボルジアの全身に禍々しい赤黒いオーラが昇るように出て来る。

ジワジワと肌が白くなり手の甲・両頬に悪鬼羅刹のような紋様が浮き出て、獣の目が細くなった赤い眼光をエツィオに向けて殺意を込めた覇気を放った。

第百四十三曲　八頭身三角様擬きと、クソハゲが持つ史上最強のチート杖

―フランスオルレアン　ジャンヌダルク邸　地下研究室　ジュデッカ―

ボルジア【出来損ないの若僧が…態々と余の手で下すまでもないわ！】

エツィオ「何だと？」

黄金の鷹の眼光を強く放ちながらファイティングポーズを取っているエツィオを見て嫌みを差したか顔を歪ませた後、右手に持つニケの杖に魔力を送って杖全体に禍々しいオーラを纏った後、柄をガツンッ！と床に穴を空ける位にめり込む。

ボルジア【行け！余の嫉妬の魔力で生まれし“子”よ！出来損ないの悪魔を…消せ。】

床に突き刺したニケの杖に覆っていた魔力が地面を這うように動き、一つ一つ蛇のようにうねらせながら一つ一つ床に立っていた魔蕾に浸透するように入り込む。すると…

？《ガギャァァァ…！！》

？《シャッ！…シャァァァァ！！》

蕾に覆われていた複数の花弁が剥がれ落ちるように動き、蕾の中に眠っていた異形の生物が奇声を上げながら両腕両足を伸ばしてゆっくりと起き上がる。

エツィオ「これは…嫉妬（テメェ）の破片（にくへん）と人間問わず何らかの死骸の血肉を混ぜて造られた…意思を操ることが出来る“半魔死人（レヴィアタンレギオン）”！？」

シャイナ『えっ！？この“白い精液まみれ”のサ●レントヒルに出てくる●角さんのような人型悪魔が、あのクソババア（ジャンヌ）が造りたかった意思を自在に操れる兵士！？』

シャイナの台詞通りに頭部が巨大な赤錆色のい三角で頭部全体を覆い被せており、残り首から下が生まれたてなのか白い液が付着しており道中に襲い掛かったオルカン達の八頭身●ナーの細い体格。

右手には柄辺りから透けるように浮き上がっていて中間辺りから黒い鉛で出来た巨大な鉈を持っており、背中には飛行能力を持つ下級ネロマテの翼が付いていた。

―ボルジア作創魔兵器　レヴィアタンレギオンズ―

ボルジア【フンッ…貴様の中にいる下等の人間を含めて、知識は多少あるようだな。まぁ、貴様と会うのもコレで最後だから明度土産に少し教えてやろう。】

ボルジアが余裕の笑みを出している間にも次々と蕾が割れて中から異形の生物が出てきて、奇声を上げながら手にする鉈の刃を床に擦り付けて、鉈を引き摺りながら戦闘体勢を取るエツィオを取り囲む。

ボルジア【余の血肉により造りし魔兵“レィヴアタンレギオン”余の意思で完全に操れるだけでなくこの素体自体の元々の過去に生きたかつての“人間だった記憶”を元に絞りだし、半永久かつ…】

ボルジアがそう言っている間にエツィオを囲った八頭身三角様が、手にする巨大の鉈をエツィオに向けて一斉に降り下ろす。

エツィオは舌打ちしながら思いっきり右足に力を入れた後、後ろ向きに上へと高く飛翔して周囲鉈攻撃を回避するが…。

レィヴアタンレギオンＡ（略してレギオン）《ガギ●●◆■ゴァァ■▲ー！！！！》

エツィオ「なっ！？」

飛翔しているエツィオの背後にいつの間にか“ピッタリとくっつきながら飛翔している”レギオンがいて、生まれた時の声でない“一部翻訳不可・禁止用語・意味不明語”を発しながら手にする鉈をエツィオの背後に掛けて斬りかかる。

エツィオ「くっ…！」

鉈で背中を一直線に斬られる前にエツィオは背中を少し前へと仰け反るように曲げて、多少衣服が鉈の刃で破けてしまったが“皮一枚さえ斬られることなく”、身体を回転させながら地上へと落ちて滑りながら両足から着く。

ボルジア【過去から現在にかけての“新しい情報”を共有し、お互いの肉体が朽果てるまで進化し続ける機能を持つ。まさに８００年前以上前に生きた“歪みを持っていた一人の人間”の理想を直々この余が叶えたのだ！】

エツィオ「ジャンヌか…」

エツィオはキッと眼を再度細め深呼吸し直してゆっくりと息を吐い

た後、再度エツィオの背中の衣服を斬ったレギオン一体がまたしても後ろからエツィオに向けて斬り上げるように鉈を振りかざす。

エツィオ「そこまでにして奴は“人外の力”を振りかざそうとして、極秘で造作していたのかよ…たまんねぇな！」

レギオンA《ギギ●●■■■！？？…ガ■■■■■！！？？！》

エツィオは背中を向けたまま振りかざした鉈の刃を左手の平で“鋼音を鳴らしながら鉈の刃を止めて”、“出血さえないまま”背後にいるレギオンの鳩尾に左足を食い込んで一瞬怯ませる。

エツィオ「如何に今現在までの情報源を元に高く発揮出来たとしても、俺のような“三次元にいる何もかも行き過ぎてしまった人間”に対してっ！…」

ボルジア【むっ？】

そして鳩尾を蹴られたことで鉈を握っていた腕の力が数秒力んだ所を見逃さず、エツィオは止めていた鉈の刃を掴んで前へと引っ張るように“武器を奪った”後、身体を捻らせながら鉈の柄先を首の喉仏に当てて更に怯ませた後…

エツィオ「“宣戦布告”なんだよっ！どっっっっっっっっせぇい！！！！」

バキッ！！！

奪った鉈を一回転させて本来の柄を握った後、巨大な鉈を“片腕だけで”豪快に掬い上げるように振りかざし、腹部から頭部に掛けて血を噴き出しながら一体を“完全ぶっＫｉｌｌホール★ｉｎワン”する。

レギオンＢ《グギャ■■■■■■ヅゥォ゛●●●●●●！！！！》

レギオンＣ《ガガィ●●●●●●●ピー■■■■■■！！！！》

高性能の素体が生まれてから数秒でヤられたのをレギオン達は見て、一部放送禁止奇声を上げながら再度エツィオを方位し時間差を仕掛けながらエツィオの四肢に向けて鉈を振り回す。

エツィオ「残念っ、無駄ＳＡ！！」

ドシャアアアアアアアアアア！！！！！

ブォンと奪った巨大鉈を片腕だけで何てお得的な軽々★一周させた直後、鉈を一周した時に発した衝撃波&剣圧で肉眼で見えるほどの白い帳が発生して、帳に入った全てのレギオン達が…

―エツィオの振りかざした剣圧の轟音で断末魔すら掻き消される程、全身が粉々に引き裂かれるように一瞬の内に破れ消した。―

ボルジア【…デタラメな奴め。“この室内にいた全てのレギオン達”を“空で凪ぎ払うだけで全滅”するとな。あのお方が恐れる“魔ノ神”という力がコレか。】

エツィオ「例えどんな兵器が来ようとも、“絶対”に俺を倒せれねぇよ。まだ此も“準備運動”だぜ?」

レギオン達を衝撃波&剣圧だけで全滅したエツィオは数メートル先にいるボルジアに向けて身体を向き直した後、レギオン一体から奪った巨大鉈の刃先をボルジアの頭部に突きつけて口元を吊り上げながら軽く挑発する。

ボルジア【だろうな。貴様のような“力がただ強いだけの出来損ないの悪魔”がこの位の魔兵じゃ殺しきれないと思って、試しに放ってみただけのことだ。】

だがボルジアも自ら造り上げた魔兵が全て倒されたのに関わらず、

余裕の笑みを出しながら取り乱すこともせず“始めから予測していた”ように軽く笑声を出しながら続けて言う。

ボルジア【何れにせよ強大な力を持つ貴様のような悪魔でも、何れは“限界”が来る。余にかつて刃向かった“あの男”もそうだ。】

ボルジアはエツィオをから反らすように顔を後ろに向いて、後ろにある十字架に貼り付けられた女神を見ながら不気味に口元を吊り上げる。

エツィオ「“あの男”？一体誰さ??つーか、そろそろ死ねっクソハゲｗｗｗ」

エツィオは長ったらしいボルジアの台詞に飽きたのかもう“ヤル気ネェッス風に口を八の字にさせてブーイングした後、巨大鉈をボルジアの頭部に向けて●田のようにバットをギロチン潰し投げで思いっきり鉈を投げ飛ばす。しかし…

ボルジア【ククッ！“あの男”の愚か過ぎる戦いが忘れられん。元より今の貴様の遊びが余が下した“あの男”と同じ状況になっているのだよ?】

エツィオ「!?」

グチャッとエツィオが投げた巨大鉈が生々しい音を立てながらボルジアの頭部を突き破るぐらいまで刺したのに関わらず“平然”としていて、エツィオは一瞬眼を丸くし驚愕の表情を出す。そして…

ボルジア【余が持つ“魔杖”は“手に持つ者を全て護る”力があり、尚且つ“手に持つ者に至高なる絶対な力”を授ける。云わば…】

エツィオ「ぐっ!?」

ボルジアの持つ杖が禍々しく光輝き柄を床に着いた瞬間、真実の眼に見えない黄金の鷹眼に映らない“特異の力”がエツィオに襲い掛かり腹部に何かが当たって身体を逆くの字に折る。

エツィオ「ぐ…ぁっ!?（まさか…奴の持つ杖は!!）」

エツィオはボルジアの持つ杖の力で後方に吹き飛ばされて、背中から床に叩き付けられながら数メートル引き摺られていった。

ボルジア【その“まさか”よ!!古の神々が作りし“林檎の断片”から産まれた“貴様に唯一対抗出来る史上最強の杖”だ!!】

第百四十四曲　発光ハゲと若作りジジィの大喧嘩！

―フランスオルレアン　ジャンヌダルク邸　地下研究室　ジュデッカ―

ボルジア【真理の林檎の破片より作られし“杖”は、貴様のような“力有るだけ”の出来損ない悪魔を処刑するに良い物だ！！余の手を下すまでもなく、この杖の力のみで滅せれるわ！！】

杖の力で魔神（エッィオ）を壁際まで吹き飛ばしたボルジアは、杖の圧倒的な力で酔いしれているか【アーハッハッハッハッハッハッハッハッハッ（。∀。）】風に狂気に笑い声を出しながら悪人面でエツィオを見下す。

エツィオ「…くそっ！」

エツィオは吹き飛ばされながら瞬時に右手を床に着けて、身体を横向きに一回転させ低姿勢で、ズアッと宙で受け身を取る。

ボルジア【廃棄悪魔（カスカーメ）が…余は貴様程度の“下等な実力”なんぞ、餓鬼遊びのように構う時間などない。】

ドドドドとボルジアが握る杖を前へと翳すように伸ばした時、杖先から禍々しいオーラが巨大な竜の幻影となって浮かび上がり、杖の力で生成された竜の口から火球のような塊を複数溜め込んだ後、受け身最中のエツィオにめがけて黒い火球を容赦なく放つ。

エツィオ「っ！…ちっ！このっ！！」

受け身を取りながらエツィオは右手を大きく開いた後手の平に退魔の剣（エツィオの剣）を召喚して鞘から剣を引き抜いた後、不安定な体勢になっているのに関わらず吐き出された火球全てを“高速に振る剣の刀身だけで全ての火球を捌く”。

エツィオ「クソハゲが！」

吐いてきた全ての火球を弾いたエツィオは身体を横に一回転させた後、両足から床に着いてズサッと床を滑りながら踵に力を入れて滑りを力で止める。

顔を上に上げながら前方にいるハズのボルジアに向けて真剣顔を放ったが、既に姿もなく顔を右往左往に動かし黄金の鷹眼も視点を動かしながらボルジアの姿を探す。が…

ボルジア【無駄だ!!幾ら貴様の持つ我らを脅かす“退魔の剣”でも、余の持つ“杖”の力には届かん!!】

エツィオ「っ!?ぐぁっ!?」

ドンと林檎の断片から作られた杖の力なのかいつの間にかエツィオの背後にボルジアがいて、手にする杖に力を注ぎ込んだ直後杖の上部に禍々しい光を放ちながらエツィオの背に雷撃の塊のような光球を、瞬時に数十発当てる。

バチッと全身に電流が走る感覚を受けてまた吹き飛ばされ、エツィオは身体をくの字に折って宙に一回転した後、ドゴンッと背中から壁にぶつかってぶつかった壁に凹みが出ながらズルッと落ちるように床へと倒れ苦痛の表情を出す。

エツィオ「く…。」

ボルジア【理解したか?コレが貴様と余の“本来持つべき魔の構成”の違いよ!!人を喰らう事が出来ない出来損ないの悪魔なんぞ、余の力まで振るうまでもないわ!!】

全身に煙が噴き上げられながらエツィオは両瞼を閉じながら痛みで震えるように動かし、杖の魔力で上半身の衣服がボロボロに破け肌には焼け焦げたような痣を数箇所浮かび、ボルジアが性能の違いを

鼻高く言うように聞きながら左拳をぐっとわななかせるように握った直後…

シャイナ『おまっっっっっ！こりゃ…この小説初めての“危機（ピンチ）”すかっ！？つーか、ジジツィオ、アンタのような大の最強主人公が“あの攻撃”程度で屈るんじゃねぇ！！さっさと立ってあの“ハゲから発光（ライジング★サン）を放つクソハゲ”を何とかしろやぁぁぁぁぁぁヽ（、皿′）ノ！！！！！』

エツィオ「！し…シャイナ…？」

身体の中にいるシャイナが“危機的状況”に成っているのに関わらず、ウガーと余裕笑みを浮かべているハゲ悪魔を見て苛立つような声を上げながら視界を通して中からエツィオを叱咤する。

エツィオ「！……ハハッ…そうだな、シャイナ（´、`；）…」

シャイナ『キィィィィィィィィー！！！！見かけ“６０代のクソハゲ”がアータの見かけ“３０代前のイケメン”に見下されるなんて…最強主人公二人である私にもメッチャ腹立つわぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！てか、アータは“最強のアサシン”なんだろ！？そんなみっともない“ダサシン”の姿なんぞ“御免”なんじゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！』

シャイナの半ブチ切れ言動を聞いたエツィオははっとなって眼を開いた後、身体の中で叱咤するシャイナの声を聞いてくくっと軽く苦笑しながら両膝両足に力を入れて立ち上がる。

エツィオ「ハッ…酷い言いわれようだ。俺も、あのクソハゲもな…／（；▽；）」

シャイナ『おうよっ！あの“ツルピカ頭”からライジング★サン！並みにウゼェ光が気にくわねぇ！悪人面のクソハゲ野郎が“日の出”を出すんじゃねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！てか、べ…別にアータのことを心配して言っているワケじゃないから…ＮＥ！！』

エツィオは身体の中にいるシャイナに多少罵声浴びれられながらも、言動の中に“ツンデレ要素”が混ざっている事に少し吹きながら右手に持つ剣の柄を再度握りなおす。そして…

エツィオ「悪りぃな…。」

エツィオは再度熟年男のような逞しい表情を出したながら立ち上がって、ボロボロに焼け切れた衣服の一部を左手で掴んだ後、ビリッと破ける音を立てながら魔力で焼けた衣服の繊維を千切る。

ハラリと焼け切れた繊維が羽根のようにゆっくりと落ちていき、右

手に持つ剣を再度右斜め下に向けて床に焼け切れた繊維と同時に降り下ろした瞬間…

ボルジア【ぬっ？】

ボンッ！と突如エツィオの全身が青白い炎に包まれて、ボルジアは一瞬虚を突かれたように瞳を丸くする。

エツィオ「あー…“下らねぇ外圧”やら“クソッタレな暴言”を何度も好き勝手にやりやがって…それに…」

ボルジア【それに？】

青白い炎で燃えるエツィオの衣服が段々と焼け燃えていく中、下半身の鎧着きブーツ以外は全て焼け燃えて数秒裸姿になった後…

オォォォォォ…

徐々に下半身から元のアサシンローブを羽織った衣装へと変わっていき、セー●ームーンの変身シーンを思わせるようなセクシーポーズを取りながら身体を一回転させ見に纏う青白い炎を天井まで眩しく照らした時…

エツィオ「テメェは俺を怒らせた。」

ドンッとエツィオの身に纏った青白い炎が消えた瞬間、元の黒いアサシンローブと胸と両肩に鎧を纏った姿へと戻って、ギンッと黄金の鷹の眼を更に強く放ちながらボルジアを睨み付けた。

第百四十五曲　決して魔神を怒らせるな！危険危険！！

―フランスオルレアン　ジャンヌダルク邸　地下研究室　ジュデッカ―

ボルジア【怒らせただと？ククッ…廃棄悪魔（カスカーメ）の小僧が何を言うか…。】

ボルジアは剣を片手から両手持ちにして顔面に刀身を見せながら構えるエツィオを見て、フンッと鼻を軽く鳴らすような音を立てながらそのまま見下す視線を出す。

エツィオ「好き勝手にほざきやがって、クソッタレが…覚悟は出来てんだろうな？」

ゴゴゴゴゴとエツィオの背後から何かしらの漫画のような“本気を出した魔神の魔闘気”を、全身に掛けて天へと遡るようにさらけ出す。

エツィオの全身から放つ青白い闘気がゆっくりと今居る地下研究室に伸ばしていくように広げて、エツィオが放った魔闘気が床や壁に

触れた途端ミシッ…とヒビが出てきて開かれたヒビが複数のヒビを伸ばし刻んでいく。

ボルジア【覚悟だと?貴様程度の半端な実力程度で、この余を屈すると思うのか!?餓鬼が!!】

エツィオ「…。」

ドンッと剣を構えながら真面目に睨み付ける“本気版エツィオ”を見るに嫌気がさしたか、ボルジアは苛立つような声を吐き捨てつつ手に持つ杖に再度力を入れた後、身体ごとエツィオの視界から消え去る。

ボルジア【(憎たらしい餓鬼め!余はそのような“眼”が余の持つ誇りを取り乱すのだ!!)】

ボルジアは杖の力で亜空間の中に漂いながら、今だに前方に向けて剣を構えるエツィオを見て憎たらしい表情を出した後、手に持つ杖先をＰＳ●に出てくる“ソ●ルイーター”のような刃に変化させてエツィオの背後に回った後、一気に首を跳ねるべく左首に目掛けて鎌状の刃を振りかざしたが…

エツィオ「Ｐｌａｙｔｉｍｅ　ｉｓ　ｏｖｅｒ…」

ボルジア【なっ…！？】

ガキィィィィィィ！！！！

ボルジアがいるエツィオの鷹の眼でも見えない“音も無い亜空間の中にいるのに関わらず背を向けたまま”エツィオの右手に持つ退魔の剣を背中に構えてボルジアの首斬り攻撃を防がれる。

エツィオ「“見え見え”なんだよ。クソッタレが！もうテメェの攻撃なんざ“二度と食らわねぇ”！！」

エツィオは背後から斬りかかったボルジアの攻撃を防ぎながら右腕に力を入れて、跳ね除けるように姿もないボルジアを遠退かせる。

ボルジア【（いや…偶然だ！余の持つ林檎の断片から生まれた杖の力は絶対なのだ！！】

遠退かせされたボルジアは再度手に持つ杖に思念を送ってより深く亜空間の中へと入り、エツィオの感じる音・気配さえ感じ取れないように潜りながら今度はエツィオの頭上に移動して、頭部ごと杖でぶった斬るように大きく振りかぶって杖先の刃を逆光で照らした。

しかし…

エツィオ「例え姿形・気配も完全に消せれても、“隠しきれない大切な部分”が易々と駄々漏れしているんだよ！」

ボルジア【なっ…！？？！！】

突如エツィオが顔を上に上げて黄金の鷹の眼をボルジアに向けて放ちながら身体を翻し、手にする退魔の剣をボルジアの振りかざした杖の刃に当てて斬撃を防ぐ。

エツィオ「テメェから放つ“殺気”“憎悪”テメェの受け持つ“嫉妬”という気が、存在していない世界からプンプンと漂ってきてるんだよ、ボケが！！」

ボルジア【グヌゥッ！？】

そして頭上からの斬撃を防いだエツィオはグッと片手から両手持ちにして退魔の剣に力を入れた後、掬い上げるように剣を振るって再度ボルジアを天井へと弾き飛ばす。

ボルジア【お…おのれ！！（いや…偶然…偶然だ！！余が持つ杖は全知の林檎の断片より生まれし“神杖”！！こんな“力あるだけの”出来損ないの若僧ごときに…！！）】

ボルジアは天井へ吹き飛ばされながらも地上にいるエツィオに向けて憎しみの視線を放ちながら、再度杖を握りしめて思念を送ろうとした時…

エツィオ「その杖…テメェの思念が実行するまでたった数秒なんだが“若干タイムラグ”があるんだよな～。杖の力は強大でも発動がこんなに遅いのは俺に対して“致命的”だぜ？」

ボルジア【はっ！？】

ゴォッとボルジアの目の前に「それは残像ＤＡ」風に背中から漆黒の鷹の翼を出したエツィオがいて、ボルジアは音も気配も無く突如現れたエツィオの姿を見て数秒眼を大きく開き驚愕する表情を出す。そして…

エツィオ「で？これでも“出来損ない”やら“廃棄悪魔（カスカーメ）”に見えるのか？クソハゲジジィ！！？？！」

ボルジア【ガッ！？？！！】

ズバシャアアアアアアアアアア！！！！！

突如ボルジアの腹部と胸部に赤い液体が飛び出して、纏う白い衣を十字を何度も刻むように破きながら赤く染め上げる。

どうやらエツィオはボルジアが再度杖の力で亜空間へと消える数秒前、杖の力が発動するラグの間エツィオは手にしていた退魔の剣を●サラ謙信のような“瞬時連続抜刀”してボルジアの全身に向けて斬り付けて亜空間逃れを完全妨害したようだ。

ボルジア【ぐあっ…ば…馬鹿な…っ!!??!!】

エツィオ「オラァ!!!!」

更にエツィオは続いて背中から出した両翼を人間のような腕に変えて両手を組んだ後、ボルジアの頭部に目掛けてハンマーナックルを繰り出し、杭打ちのように“頭から床へと陥没させるように突き刺さす”。

ボルジア【あ…有り得…ぬ!!こ…これは…】

頭部から床一直線に刺さったボルジアがピクピクと全身を痙攣させるように震えて、頭部・胸部…全身に血をプピュー♪と流しながらカランッと手にしていた杖を乾いた音を立てて手放してしまう。

本来ボルジアの持つ杖の魔力から放つ亜空間は“現世に存在し無い仮想世界”という意味で、例え人知を超えた者でも“亜空間”という存在すら知らず、知ったとしてもその亜空間の場所は“一切特定できない・感じることすら出来ない”林檎の断片を持つ者に与えられる特殊な世界のハズなのに…

エツィオ「俺に“存在しないモノ”など無い…例えテメェが何処に消えても…」

ボルジア【ゲベブッ!!??!】

エツィオは地上へと降りて人間の腕と化した右片翼を伸ばして、一直線に床へと突き刺さったボルジアの左足首を掴んで引き抜き自分の下へと寄せる。

エツィオ「本気になった俺の前にゃぁテメェの居場所、テメェの持つ杖の力などそのモン“何もやっても無駄だ”。なのでっ♪」

ボルジア【ボギブッ!??!!】

パパパパ

バシッとエツィオの残像有り左手高速平手打ちが逆さまになったボルジアの左頬右頬に何度も炸裂し、叩かれた痕が分かりやすく浮かんで蜂でも刺されたように両頬が酷く腫れ上がりながら、口から白い淡を吐き意識が飛ぶぐらいに白眼になる。つーことで…

エツィオ「カモォォォォォォォォォォォ～ン、俺の中にいる全使役達。」

ある程度ボルジアを思う存分叩いたエツィオは酷く顔面が腫れ上がったボルジアに数滴唾を掛けた後、右手に持つ退魔の剣に身体の中にいる使役達に思念を送って力を集中させる。

エツィオ「テメェは自分の部下を大切にしようともせず砕け散るだけの捨て駒として扱い、更に俺のような“人”が本来持つべき多彩な感情に目覚めた人に対してその暴言…決して許すわけにはいかねぇ！！」

退魔の剣の刀身に雷の紫・氷と水の白・風と天の碧・闇の黒の混合したオーラがまとわり憑いて、目映く照らすように剣自体が“●ェイトのセ●バーのような宝具解放”のように一筋の光の大剣へとなる。

エツィオ「テメェごときにコレを使うのは少し勿だが、まぁいいや。…では俺流チート奥義…“第二ＤＡＮ”！！」

ボルジア【！！？？！】

ボルジアの足首を掴んでいた右片翼をと投げ捨てるように上へと投げた直後、バシッとボルジアの全身に様々なイタリア語呪文が鎖のように走って、宙で静止するように鎖が蜘蛛の巣を張ってボルジアを宙に止めた直後…

エツィオ「天地創世絶対領域魔神剣（ビギニングオブザコスモス）！！！！」

シャイナ『ＥＥＥ

第百四十六曲　Ｌｅ　ｓｏｌｄａｔ　ｄｅ　ｌ＇ｅｘ－ａｓｓｏçｉ？　ｑｕ＇

―フランスオルレアン　ジャンヌダルク邸　地下研究室　ジュデッカ―

ボルジア【ば…馬鹿な……この……出来損な…いの……小僧なん…かに！！！！】

エツィオのチート奥義第二ＤＡＮ“天地創世絶対領域魔神剣（ビギニングオブザコスモス）”を受けたボルジアは身体がバラバラに四散していく中…

一瞬必殺技発動時に“裸姿になった破壊力抜群の美体エツィオ”の“見えない斬撃”と“無限の小宇宙（コスモ）と最強の魔闘気（デモーネパウワアアアアン）が宿った見えない拳”の反則魔神の複属性フルコースを身に受けて、徐々にボルジアの肉体が光の粒子状となって消えていく。

エツィオ「ふっ…俺の中に渦巻く“無限の小宇宙（コスモ）”が貴様という“敵”を撃ち砕い『テメェは聖●Ｇのア●オリアか！！？？！つーか、使役（ペット）の力が籠った剣の意味無くねっ！！？？！！』

シャイナの外国四コマのような魂の驚愕の叫びが身体の奥底から轟

く中、エツィオは色彩に輝く剣のざわめきを静めるように手の平の中で軽く一回転させた後、左腰にある鞘に仕舞うと同時に背中に出ていた人間の腕を元の鷹の翼へと戻す。

エツィオ「いや、剣も使っていたＹＯ☆（肉体言語も含めて）ただ重要な攻撃アクションシーンが“最新ハイスピードカメラ”でも全然映らなかっただけＳＡ♪」

シャイナ『おっっっっっっまっっっっっっっっっｗｗｗｗｗｗんじゃ、私が見てきたのは“数秒エツィオが裸体になったシーン”と“聖闘士●矢の●ガが使う銀河爆砕（ギャラク●アンエクスプロージョン）”の爆発背景しか映らｒｙ（』

エツィオ「それこそが“俺”というチート奥義なのＳＡッ★」

身体の中で“先程の技シーン”について激しく突っ込むシャイナが、別に満更でもない元のヤル気無しになった阿呆丸出しの“鼻くそをほじっているエツィオ”に言った直後…

ボルジア【ぼぎゃらぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！？！！！？？】

ドカァァァァァァン！

エツィオの少し離れた背後に“イミフ言語”を後方へと流されていくように、ボルジアがタイミング遅れて床へと落下し新たなクレーターを床に造り上げた。

ボルジア【み…認め…るかっ…余は…認め…ん…認めんぞォォォォォォォォォォォ！！！！】

エツィオ「けっ（#、Д,）まだ言ってやがるこのハゲが…いい加減現実を見ろってｗｗｗ」

エツィオが白い眼でいまだに自分の身が消えていくことに否定しているボルジアを見下すように見ながら、軽く唾を数滴床へと吐き捨ててボルジアの消えていく末を見届ける。（ただし表情は“阿呆丸出しのやる気の無い顔でなｗｗｗ”）

ボルジア【グッ！！…グヌゥゥゥゥゥゥゥ…！！ゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥオ！！！！】

ボルジアは段々と身体の隅々からダイヤ状の光の粒子を放ち欠片が空へと昇るように消え行く中、余裕笑みを浮かべるエツィオを見て更に憎悪の形相を表にさらけ出しながら然りと殺すべき魔神を両眼に焼き付ける。

ボルジア【小僧…“コレ”で…か…勝ったと思うな…っ！…コレもお前に…】

エツィオ「“負け犬”は負け犬らしく黙って消えろ。この●◆×■▲％野郎。テメェの存在自体が“この地にいる抗しる者”に怒りを買っている。」

エツィオは先ほどのやる気ねぇ表情から一変“真面目顔”になって、無様に倒れ伏しているボルジアに向けて覇気丸出しの黄金の鷹の眼光を放ちながら右腕を横に伸ばす。すると…

ボルジア【何を言…なっ！！？？！】

シャイナ『Ｏｈ！？Σ（◎◎）』

ズアッとエツィオの背後に８００年以上前に出会った“１００年戦争を戦い抜いた戦士達”がいて、一人一人白い発光を全身から放ちながら腰に収めていた剣を引き抜き、地に伏せるボルジアへと歩んで一斉に円型状になるように取り囲む。

エツィオ「やっぱりトドメはお前に決めるのに良いな？“ディク”？？…Ｄｉｓｃｅｎｄａ！？ｌ'ｉｎｄｉｖｉｄｕｏ ｐｉ？ｆｏｒｔｅ ｃｈｅ ｌｏ ｐｏｒｔａ ａ ｍｅ ｃｈｉ ｒｉｆｉｕｔ？ ｉｌ ｃａｔｔｉｖｏ ｑｕｅｌｌｏ ｓｕｃｃｅｓ

ｓｅ　Ｌｅｉ！」

シャイナ『ちょっ！ｗｗｗ翻訳不可になっとるｗｗｗエキサイト翻訳いそいそ！！ｗｗｗ』

カシャンと戦い抜いた戦士達が一斉に剣を上へと掲げて剣先の刃音が鳴った瞬間、囲っていた兵士達全員が一つの光の柱となって宙へと高く飛ばし、エツィオがイタリア語を吐きながら右腕を上へと上げて手と手を繋ぎ合うように光を結合させた後…

エツィオ「Ｉｏ　ｌａｓｃｉａｉ　ｌ'ｉｍｍａｇｉｎａｚｉｏｎｅ　ｃｏｍｐｒｅｎｄｅｒｅ！（生きる総ての世界の魂と共鳴！）」

エツィオが天に混じった光に向けて鷲掴みするように右手をぐっと握り絞めた瞬間、天井に結合した光が爆発したかのように帳を複数至るところに広げながら強い輝きを数秒間放った。その後…

？『Ｍｅｒｃｉ　Ｅｚｉｏ…Ｌａ　ｌｕｍｉ？ｒｅ　ｑｕｅ　ｖｏｕｓ　ｍ'ａｖｉｅｚ　？ｃｌａｉｒ？』

放たれた光が止んだ時全身白銀の光を放った鎧を纏っていないフードの男“前契約者のディク（第百三十曲参照）”が宙に浮んでおり長年の眠りから覚めたのか閉じられていた両眼をゆっくりと開いて、地上にいるエツィオに向けて微笑む表情を出した後…

ファサッ…

背中から純白の翼が大きく広げるように展開しフランス語を吐きながら、再度８００年前ぶりに現世へと降臨した。

第百四十七曲　天使になったおっさんＤＥ★神に返しなＳＡ～Ｉ（ー＋ー）カー

―フランスオルレアン　ジャンヌダルク邸　地下研究室　ジュデッ

シャイナ『（　゜Д　゜）…』

シャイナは突如光の中から“天使のような羽根が生えたフードを被ったおっさん”が俺★ヘブン状態で登場したのを見て、思わず顎の骨が外れるぐらいに口を開きながら呆然とする。

エツィオ「よっ♪久しぶりだなディクｗｗｗ暫く見ていない間に風貌が変わったなぁ～ｗｗｗ（＾∀＾）／」

姿は８００年前以上と変わらない衣服に４０代を保ったフードを被ったイケメン完熟男だが、背中には純白のトキのような“翼が生えていて”バサッと数回羽ばたきながらエツィオの傍へと両足から地へ降り立つ。

ディク『お久っ、エツィオ！！いやーぁ俺も驚いたよ。まさか自分が“神”という存在に認められるなんて“英霊”になるなんて…』

死後“英霊”になった影響なのか声は低いトーンと高いトーンを合わせたような二重声になっていたものの、口調と態度は８００年前以上と同じようにエツィオに対して尊敬を表すような風貌へとなっていた。

―１００年戦争の大英雄　ディク（前世紀二代目ジャンヌダルク）―

エツィオ「命を削ってこの地の厄災を退けたお前は“天界の神々”に認められて“この地を護る英霊（エローイコ）になっていた”んだな。くぅー…カッコイイＺＯ！！」

ディク『いやいやいやｗｗｗアンタのほうがもっとカッコいいよ！！あの後俺は地上で様々なことをやって死んだ後、再び眼が覚めたら“この姿”になっていて…それに背中から“翼”が生えているしｗｗｗまだ知られていないことが多くてｗｗｗ』

シャイナ『てかっ、見かけ４０の“ヒゲオヤジ”のアンタが、何処でも居る女子高校の仕草をすんなっｗｗｗ“余計にキメェ”よｗｗｗ』

英霊になったばかりなのでディクは顔面を赤く染め上げながら、半分両手で隠すように覆って女の子のようにイヤン★トキめいちゃう♪という顔を何度も横に振り両足もクネクネする仕草を取る。

ディク『え゛ぇっ!?だ…だってだって!!俺のような普通に生きて天寿を全うしたヨボヨボの人間が“突然神に認められて”、“あの時の戦いの年齢容姿”になっているんだぞ!?フツーありえなくね!?ありえなくね!?おまけに背中におとぎ話にでてくる“天使の羽根”みたいなのがｒｙ(』

シャイナ『だからと言って女のような魅惑溢れる腰振り止めろ!!』

ギャーギャーとエツィオは新星の光を司る英霊になったディクと身体の中にいるシャイナの言い合い聞いて見てふと笑うように表情を綻ばせた後、再度床に伏している瀕死のボルジアに向け直し真面目な顔へと戻す。

エツィオ「初めてなったお前の英霊の特権と力について色々と教えてやりたい所だが、今はやるべきことがある。」

ディク『!』

ザシャッと倒れ付していたボルジアが突如ワイヤーでも吊られたように不自然な姿勢で立ち上がって、身体は消えかけていても表情は強き者に対する憎悪と、架せられた嫉妬(あだな)という風にものすごい形相を浮べながらエツィオを睨み付けていた。

エツィオ「この地を護ろうとし再度目覚めをしようとして妨げられていた“コイツ”にゃぁ、新生(おまえ)がトドメを刺すべきだと俺は思う。だからっ（＾＾）ｐ」

左肩腕を横へと伸ばして肩に付けていたマントを軽く握って弾くように左手を煽った後、ブワッという風にマントを羽根のように広げて視点を“カメラ目線”に向けたまま不敵な笑みで続きを言う。

エツィオ「ここはお前に任せる…ヤっちまいな★（＾Д＾）ｍｇ」

エツィオがカメラ目線に向けて“（＾Д＾）ｍｇ≫プギャー”と馬鹿ばっかしの表情を出しながら人指し指を指した後、ディクは側面にいるかつて友として教えられてきた“偉大な男”に顔を向けずともクスッと笑うように口元を吊り上げて、コクッと顎を下に下げて軽く頷いた直後…

ブォン！

ディクの両袖から８００年前以上に使っていたハイドブレード…否ブレード自体が“ビームセイバー”のように変異していて、刃の部分から白銀の粒子の光を空へと伸びるように零れながら電子音と共に飛び出す。

ディク『これが…“英霊”になった時の“力”！？…だったら。ｐ

（、∀、）』

シャイナ『ちょっｗｗｗ』

無意識に“ビームセイバー”を両袖から出したディクが魔力で具現化した“武器”をジロジロと見るように右腕を数秒上げた後、突如ディクの表情がやる気ねぇ呆然顔から“悪人面”のようなドS丸出しの凶悪顔になって、再度ボルジアに向けて視点を合わせた直後…

ディク『その命、神（笑）に返しなさぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！（恥）』

エツィオ「おっ（・∀・）」

シャイナ『ぶっ！！イ●サ！！イ●サが降臨なさったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！』

ドンッ！！

な…何という光以上の速さで一瞬の内にエツィオの傍から“残像すら無い”ままボルジアの背後にいて、腰を低くしながら“低姿勢☆命”のポーズをとっており、横一直線に伸ばしていた両腕を下へと下ろして両袖から出ていたビームセイバーを仕舞った直後…

ボルジア【ガッ…ガァ……お…おのれ…余は…余はこ…尽きるとい…うのか!?こん…な…】

ズルッと徐々にボルジアの全身体に亀裂のような線が複数走って、次第に横へとずれながら線が走った部分に肉体内の切断面が露になる。

ボルジア【出来…損ない…のこ…小僧ひ…一人ご…とき…に…よ…余は……余はっ!!!!】

滑っていくたびに血がジワジワと蛆虫のように湧き出るように出て、眼球・脳等の肉がより細かく細かく複数分解され顔面がもう原形さえとどめないぐらい分解していく中、エツィオに向けて弱弱しく分解している右腕を伸ばし肉片を地へと落としながらエツィオに…

ボルジア【認め…ん…認めんぞ!!!!魔神っっっっっっっっっっっっっっっっっ!!!!ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!】

ズバブシャズシャァァァァァァァァァァ!!!!

何処かの某ゲーのような“ボスを倒した時の断末魔”をエツィオに

向けて上げた途端、ボルジアの身体が弾け飛ぶように分解し花のように血を綺麗に咲かせながら肉片を冷たい床へと落とし、ボルジアという存在はディクの裁きの光の刃にて派手に散っていった。

第百四十八曲　そして♂と♂同士による“やらないか エンド”へ

―フランスオルレアン　ジャンヌダルク邸　地下研究室　ジュデッカ―

ボルジア【か…勝ったと…思うな！！！勝負はまだついて『いい加減さっさと死にやがれ、クソジジィィィィィィィィィィィ！！！！もう勝負は着いてるわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！』ギャボォォォォォォォォォォォ！！！！？？！！】

ズドガァァァァァァァァ！！！！

両袖から出ていた白銀の裁きの刃で国を腐らせた元凶を倒したディクだったが、身体が原型をとどめていないぐらいバラバラになっても口だけは喋っていて、眼球が分裂しているのに視点はエツィオに向けていた。

だがボルジアの執念は虚しく“ただの肉塊になったボルジア”には手を伸ばすことさえ出来ず、代わりにしつこさに苛立ったか“両眼が車のハイライト状態”ディクの両手を組んだハンマーブレットが床に重なるように貯まったボルジアの肉塊に向けて降り下ろし叩き潰す。

ディク『ズタボロになった“究極の負け犬”は大人しく二度とこの世界に現れるな…永遠に消え失せろ（、Д、）p』

ズダンッ！！！！

更に叩き潰したボルジアだった肉塊痕に左足を上げて、足首の脇に付いていた白銀の短銃（リボルバー）を思念でトリガーを引き、“足蹴にする”ような形で肉塊になったボルジアを短銃から放った光の弾丸で“跡形も無くこの世から消失（デ★リィーツ）”した。

シャイナ『オーバーキル！オーバーキル！！オーバーキル！！！最大ドS蓄積ダメージ“１２２５５８０００”！！！！計測オーヴァァァァァァァ！！！！！』

エツィオ「なっ…なんだってぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇΣ（Д、；（ω・´；（∀。）」

エツィオの身体の中でシャイナは両眼がスロットルマシンのように数字が沢山回転しており、チンッ♪と何処かの某ゲーのゲームオーバー電子レンジ音と共に両眼に回っていた数字が止まって、与ダメージ測定が終わってシャイナの口から“スーパーのレシートのような白い紙がスルスルと出てくる”。

エツィオは腰を落として両足を開き“お前TUEEEEEEEEE
EEEEEE～YO！！風”に外人四コマ漫画のようなテメェ…ヤッチマィヤガッタナ★という表情を出しながら、両腕の肱を曲げて斜め上へと持っていき感激を現すポーズを取る。

ディク『ア　バ　ヨ　、ド三流●◆■▲×野郎…もう二度と“俺達”の前に会うことはないだろう。クソッタレが…』

エツィオ「イヨォォォォォォォォォォォォォカックィィィィィィィィィィ！！！！新星英霊の初めての討伐姿！イカすぜぇぇぇぇぇぃ！！！！」

ディク『えっ！？マジっすか！？マジで俺の…ことをぉっ！！！？？！』

エツィオ「オゥ！マジでだ！初討伐GoooooooooodJoooooooooooob（´｜`）b」

エツィオが伊達男面(イケメンフェイス)丸出しで背筋をきっちりと伸ばした後、ディクに向けて左親指を上へと立ててご褒美という名の歯並びの良い歯をキラーン☆と逆光で跳ね返し綺麗に映し出す。

ディクはエツィオに褒められたことによりCOOLなオヤジ顔から

一変“ウホッ…やらないか顔”となって、少女漫画のような両眼を“キラキラと輝かせながら”と●メモ風に数秒ディクのオヤジ顔が“美化”する。

エツィオ「ふっ…良いことを思い付いた。ディク、俺に向かって“最高のハグ”をしろ。拒否は出来ない、必ず遂行しろ。」

シャイナ『えっ…おまっ！！？？！ちょっ！！？？！！』

ディク『！』

ドンッと何処かで太鼓のような音が鳴ってエツィオが突如胸を大きく張るように身構えた後、両腕を斜め前へと広げてディクを身体ごと受け止める体勢を取る。

―云わば♂と♂同士のホモ★パラダァァァイスの祭開幕前である。―

シャイナ『ギャェ！！？？！ちょっ…ちょっと待てエツィオ！！俺は野郎と野郎の●◆■▲▼¥＊％な●●◆◆■＆＊♂♀な所は…』

エツィオ「この小説の“タグ”を新しく追加しないとな…“ホモ”又は“ホモダチ”と♪」

ディク『ウッシャァァァァァァァァァ逝くぜ！！！！８００年以上ぶりの“バグ”だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁヽ（＊´∀`＊）ノイーヤッフォォォォォォォォォォォォォォ！！！！』

エツィオ「Ｏｋ…レッツ★パァァァァリィィィィィィィィィィィ！！！！（バ●ラ伊達風に）」

ドドドドドドッ

一部放送禁止用語を吐きながら両腕を広げているエツィオに向けて、ディクは初代バ●ラ真田のようにグ●コのようなポーズを取りながら、足下から噴煙を上げつつ“高速走り”をする。

シャイナ『プギャラァァァァァァァァァァ！！？？！！止めろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！止めろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！』

シャイナの壮絶な悲鳴がエツィオの身体の中で木霊する中、エツィオとディクは少女漫画風に“背景が桃色のハートマーク”がうざったらしいぐらいに浮かんで、お互い両眼をキラキラと輝かせながら男同士による“ホモ　ＤＥ★ウェディングエンド”の光景になる。

エツィオ「カモォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォン！！！！（エ

●コンＺＥＲＯピ●シー的な意味で）」

ディク『ダァァァ

がら拳同士を殴りつける。

メキッと互いにぶつけて力で止めていた拳同士の溝から僅かな白銀の光が漏れ出て、光が徐々に三日月のような形を取りながらヒラヒラと床へと染み込むように落ちた瞬間…

シャイナ『わっ！？…床が！！』

突然床全体が白く発光するように輝きはじめて、キラキラと床から小さな三日月と星の形が天井へと昇るように発光する。

床だけでなく壁に沿って光が昇り、色々な隙間へとエツィオとディクが産み出した光が外へと出る。そして…

エツィオ「見せてやるぜディク、俺の中にある“破壊”“再生”…そしてもう一つの“浄化”の力を！！」

ディク『！こ…これが…活きる世界の汚れを払う“浄化”の…力！！』

ディクが驚いている間にも発光している床から“蔦のような自然”が昇るように出て、ディクとエツィオの拳同士を組んでいる間にも床から“樹や花や果実”が生えて…

ディク『っ…！』

エツィオ「よく見とけ…これから俺達が次なる特異界へ浄化する際に起こることだ。今のうちに慣れろ。」

二人は自然へと浄化されていく白い光と同化し、“閲覧者用カメラ目線”でも二人の姿が捉えられないまま、次々と生えていく自然達に呑み込まれるように消えていった。

第百四十九曲　そしてオルレアンはゆ●なま3D真エンドな世界へ！！

―フランスオルレアン　ジャンヌダルク邸　裏庭地上―

ドドドドドドッ！！！！

血のようにそまった魔界のような世界に“建物全てを完全崩壊させるんじゃね？”ぐらいの強い地震が起き、ボルジア亡き今でも魔界のようにフツーに徘徊していたネロマテ・オルカン達は、突如の地震により全員がパニック状態に陥る。

ネロマテ’ｓ【ギャガッ！！！！】

オルカン’ｓ「ギィィィィィィィィィィ！！！！」

ドガガガガガガガガガガガ！！！！！

強い揺れで一部の建物が砂ぼこりを落としヒビが走った途端重みに耐えきれず完全崩壊し、そんな中でネロマテ・オルカン達は崩壊した建物の瓦礫に巻き込まれて潰殺する者も沢山現れる。

バキッ！！ビキキキキキキッ！！！！

それだけでなく都市全体の地面が崩落し地面そのものが生きているように動きながら、天変地異如く“本来あるべきだった地の姿”へと変えていく。

ドォォォォォォォォォォン！！！！

地震の発信源はエツィオ達がいるジャンヌダルク邸から起きていて、ジャンヌダルク邸屋敷も何かが折れる音と共に屋敷の木材が全て剥がれ落ち、硝子が割れる音を立てながら原型留めなく完全崩落していく。すると…

ズバァァァァァァァァ！！！！！

更に詳しくズー●インすると屋敷跡の裏庭にある地下研究室の頂（地上の芝生）…否“崩壊したジャンヌダルク邸の重なった木材を全て吹き飛ばすように突き破って”、吹き飛ばした極太の伸びぃぃぃぃる蔦が複数人間の腕のように蠢きながら赤い空へと伸ばしていき、中央で蔦を交えて一つの樹へと化した後、至る所へと樹の蔦を伸ばす。

サワッ…サワッ……

木材が散乱する地面からは咲きほこる様々の季節花が白い光を放ちながら生えて、開かれた花の雌しべから白銀の小さな丸い玉達が風で揺れると共に動き、白い光の玉が地面へと染み込むように落ちた途端新たな季節花が生えて次々と咲かせていく。

寄生花Ａ【ギャッ…】

寄生花Ｂ【ギュッ！】

花に獣のような牙が生え異形に変形していた寄生物達が、風で運んでくる白い光玉に触れた直後、にジュッと何かが溶けるような音を立てて寄生されていた物体達が“寄生される前の元ふつくしい花の姿”へと戻る。

オォォォォォォォォォォ…

地面に散乱していた木材も花から放つ光に全体へと染み込んだ時、木材全体が白銀に包まれたながら緑色の蘚が一瞬に生えて、蘚の至る所から複数の根を上へと伸ばし一つの蕾を作った後、静かに蕾を開いて淡いピンクと白が混ざった花を複数開いていく。

バキッビキッズズズズ…

崩壊した建物達も空から伸びていた蕾に蛇のようにグルッと絡まれた直後、グイグイと優しく押さえつけて補強するような仕草をした後、崩壊した建物が“一つの巨大な樹”へとなる。

サァァァァァァァァァァァ…

地面から季節が溢れる花が咲き、割れた大地の底には溜まっていた溝色の湧水が溢れてその溝色の水が風で運んでくる白い光玉に沈むように染み込んだ直後、透き通るような新鮮の綺麗な水が割れた大地の底で川のように流れる。

崩壊し崩れた建物達は全て樹へとなり“浄化”の力に呑まれた全てのネロマテ・オルカン達は“断末魔さえ上げられないまま死滅”し、フランス国内にあるオルレアン全土が“本来あるべき太古の自然の姿へと戻っていった”。

…

……

……

―数分後　オルレアンだった国内　地上―

震動が収まって落ち着いた所かエツィオ達は浄化された地上の姿を見るべく階段を昇り、途中シャイナを身体の中から出して幽霊のように浮遊するディクと共に地上へと出た瞬間…

シャイナ「。。。（　Д　）…と…都市が…太古の森へと返って…ら…らっしゃる！？」

辺り一面が“地球一億年前の森林になっていて”地面には季節花溢れる草花に、所々流れる水の音と木影に止まる鳥達の歓喜溢れるような声が音楽のように奏でられる。

顔を上に上げると森林の木々の頂から先程の赤い魔界空でなく、元の地球と同じ太陽の光で当てられた海水の空色が映っていた。

ディク『これが…エツィオの…どの人間・悪魔・俺を目覚めさせた“神”の全ての活きる者達が魅了し欲しがっている“浄化”の力！！』

ディクは顔を右往左往に動かしながら８００年前以上住み守り抜いてきた国の“本来の自然の姿に戻っている”のを見て、呆然とするような表情を出しながら宙に浮く状態で立ち尽くす。

エツィオ「これが本来あるべきだった“この国の自然の姿”。人という種が生まれ増えていく度に、こいつらは命そのものを削られて

悲鳴を上げていたのさ。また削られてまた削られていく内に…」

エツィオは気のまま風の力で宙に漂っていた花びらを一つ右手の中へ収めるように取った後、花びらの形が背中に出ている鷹の翼の羽根に似ていることに少しながらの表情に綻びが出る。

シャイナ「人口が増える度に生活環境を段々と取り入れるべく、削り取った部分を更に広くするよう“昔も今も人間達は都合の良いように刈り取って利用していた”のね。自然達の意見さえ聞か…いえ、人は“声”を聞くことが出来ないから勝手に削り取るように減らされて、挙げ句の果てに人が造り出した偽りの改良された自然を植え付けられて…」

ディク『それじゃぁ…俺が守り抜いたこの国の守護者の名前も…俺が８００年前戦ってきたあの出来事も全て“この世界にとって偽りの歴史”であって違う事実と違う歴史を勝手に書き換えた後、今の世に“偽りの情報を流し続けていたというのか”！？』

シャイナが見渡す限りに生えている森林を見ながら言っていた時、ディクはまだ自然の力で風化しきってなかった“女英雄の石像（ディクの姉（ジャンヌ））”の側に寄ってワナワナと右腕が震えながら動揺を隠しきれない表情を出して石像へと前へ伸ばす。

エツィオ「だろうな。俺の推測だがお前が死後過去の戦いについての事実を見た次世代の人間が“お前が遺した真実の記憶”を信じる

ことすら出来ず、逆に信じようとしていた人間達でも、都合の良いようにお前の性別を“勝手に書き換えて”実際あった戦いの内容も全て次世代の人間達に誤解を招かないように“偽りの歴史を伝えてきた”んだろうな。」

ディク『くそっ！！』

ディクは過去自分の国を護った英雄の存在が姉にすり替えられ、勝手に偽りの歴史を伝えられていることに口を閉じてギリッと歯と歯を噛み締めながら苦渋の表情を出した後、立ててあった姉の石像の顔面に向けて一直線に丸めた右拳を叩き付け石像を顔面ごと破壊する。

エツィオ「俺もそうだ。林檎の力を巡る戦いの後多大なる深手を負って林檎と共に深淵へと眠りに着いた時に、眠っている間でも天神（アルタイル）達と人間共による“次世代に伝える為の下らねぇ口喧嘩”が絶えなかったそうだ。長年による悪魔と天神による戦争を事実として認め、後生に伝えるべきか…それとも…」

ゴゥッと更に風が前から吹いてエツィオの頭部のフードを後ろへと下げるようにパサッと下ろし、髪を赤い紐で一つに縛った本来の頭髪を風で靡きながら続けて言う。

エツィオ「空想過ぎる馬鹿馬鹿しい戦い自体を“人間と悪魔の人格に堕ちた人間の戦いに変えた方がいい”と勝手に決めつけた馬鹿が

いてな、彼らは天神達の声を聞こうとせず逆に人間達は天神達の力を恐れて“一人の人間を餌(トラップ)にした”後、天神達を“悪魔”という存在へと変えてそれからだな…」

シャイナ「ちょっｗｗｗまじかｗｗｗ確かそれって…“第三十一曲”に出てきた“アルタイルの恋人”を歴史を変える贄にされたってこと!?酷ぇっ!!!!（、ｏ´）」

シャイナはエツィオから「この話は秘法奪還で一時マシャフに戻った際に、アルタイルから詳しく聞いたから。（第七十曲から七十一曲の間）」と付け足すように聞いた後、シャイナは事実を都合の良いように書き換えられた先代の人間と今でも伝えられている人間に向けて怒りを表わにするような表情を出す。

ディク『誰だ…俺だけでなく俺達の友の戦いを無駄にした空気の読めねぇ馬鹿野郎は!!!!何で…事実あったことを皆に正しく伝えなかったんだ!??!!』

シャイナ「エツィオが浄化したこの地もフード天使おじさんと同じように“好き勝手に狩り取っていたのね”。最初此所に来た時は自然を大切にして自給自足だと思っていたけど、“肝心の中身は近代的に近付くよう完璧に整備された”し…なんにせよ“ライフラインが故郷の偽家のように完璧すぎた”かな。」

エツィオ「シャイナもディクも落ち着け。過ち溢れた事実を伝えた

犯人探しは後々分か…いや、俺達を小さな携帯画面又は大きなＰＣ画面で見届けている“アンタ”にはもう解っていると思うが…まずは、」

シャイナとディクが苛立ちを募らせている中、エツィオは覆い茂る季節花達の中に隠されるように落ちていた“ボルジアが使っていた杖”を右手で広い上げる。

エツィオ「奴が使っていた“こいつ”を調べたい。奴が言っていた“林檎の断片”という単語が少し引っ掛かる。林檎は本来どんなに武器を用いても“欠片一つさえ削り取れない”のに…」

シャイナ「一度…マシャフに戻ってアルタイルに見てみる？余談だけど多分…人あるいは悪魔が本物の林檎に近づけるよう“疑似林檎（レプリカ）”を造り出した”とか…」

エツィオはボルジアが使っていた杖を掲げるようにジロジロと視点だけ動かすように見ながら、顎下に左手を当てて首を傾けながらうーんと悩む仕草を取っていた時、シャイナがエツィオの横から入るような形でエツィオに仮説の一つを伝える。

エツィオも「俺もそう思う。だが林檎のことについてはアルタイルが一番詳しい。一旦マシャフに帰還しようＺＥ。」と言った直後、数メートル先に周りで蘚に覆われ透き通った沸水の中心から“空気を読むかのようにアサシンの紋章が浮かび上がり”、泉から出る一

筋の赤い光がエツィオ達を誘い出すように輝く。

シャイナ「決まりね。じゃっ…一旦マシャフに『まて、俺も行く。』

エツィオ「おろんっ！？」

シャイナとエツィオは一旦マシャフに戻るべく浮かび上がったアサシンの紋章へと歩み出そうとした時、エツィオの少し前にいたディクが彼らを呼び止める。

ディク『俺は…過去に戦ってきた真実を偽りを伝えてきた人間達に再度伝え直したい。間違った歴史を伝え続けてきた“犯人”をこの手で直に捕まえて“きっちりと制裁（おしおき）”したい。だから…』

姉の石像を破壊したディクが意を決したかのように右手をグッと丸めた後、目が点状態になっているシャイナとエツィオに向けてこう言った。

ディク『俺もエツィオと人間のアンタが“今現在の汚れた世界を旅に同行”させてくれ。』

第百五十曲　連載１５０回目にしてのこの長…ノリ★ノリである。

地上でエツィオ達がフランスのオルレアン全土を太古の地球の森へと浄化させ、深淵の中で緊迫の会話をしてマシャフへと向かっていた数分前…

―神界　マシャフ　アサシン教団砦内部　大導師の間―

アルタイル「Ｉｃｈ　ｄｒ?ｃｋｅ　Ｐｈａｎｔａｓｉｅ　ｐｒａｋｔｉｓｃｈ　ａｕｓ（生きる総ての世界の魂と共鳴）」

グワッと突然“出オチ”という名の不意な登場でアルタイルが“閲覧者用カメラ”に顔面から押さえ付けるように現れて、白い瞳孔をＤＯ★アップに見せながらドイツ語を吐く。

そのままカメラに顔面ごと押さえ付けたまま“何時もの体勢（お前をＤＡＡＡＡＡＩて殺る）”を取りながら、両手の平から出る赤い発光を天へと昇らせた直後…

アルタイル「マシャフ式卑奥義第三章神戦ノ巻１５８話!“神の軍勢（アサシンズ★ドミニオン）”召喚!!」

ドドドドーン！！！！！

腕を組ながら仁王立ちするアルタイルの背後に“軍を成して行動する近代的白装束フードを纏ったアサシン達”が列を成し右手の平にアサルトライフルを右肩まで背負うように歩き、上空には量産型●クのモビルスーツ数万体が“空の光さえ映し出さないぐらいに空域を支配する”。

＼ジークタイル！／＼ジークタイル！！／＼ジークタイル！！！！／
＼ジークタイル！！！！／

アルタイル「選ばれし我ら自然界の使徒達よっ！！我らの力で導き始めた時、人類は我らの力にようやく理解し繁栄するのだッッ！！」

いつの間にかアルタイルはシンポジウムの際に使う台におり、台の下に集うアサシン達と量産型●ク達に演説のような力説を力強く語る。

＼ジークタイル！／＼ジークタイル！！／＼ジークタイル！！！！／
＼ジークタイル！！！！／

アルタイルが語る度に集まった国民達は武器を上に掲げるように上

げて、彼の力強い声を聞く度に集う国民達は声を更に高く上げる。

アルタイル「今こそ立つ時ぞ、我が最強の国民共よッッ！！我が声を聞ｋ「馬鹿タイルゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！！！」むっ！？」

突如アルタイルの背後から剣を持ったマリクが現れてきて、両眼が車のハイライトのように強い光を放ちながら“殺す気マンマン”でアルタイルの首筋にめがけて剣を振りかざしたが…

アルタイル「何だマリクじゃないか。何を怒っている？？」

マリク「この（ピーーーー）がっ！！連載１５０回目にしてこのクソ忙しい時に何一人遊んでいるんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！？？！クソ●×＄＃＄％＊がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

アルタイルはノリノリになってきた演説を遮られたことで口を八の字にさせてブーイングするような仕草をしながら顔を少し後ろへ振り向いて、背後から放送禁止用語をベラベラと吐きながら切りかかるマリクの太刀筋を、左腰に掛けてあった剣を瞬時に引き抜いて背中を護るような形でマリクの剣筋を遮り、鍔競り合いの状態へとなる。

アルタイル「何…ほんの戯れだ。時にはこのような息抜きも必ｙ…」

マリク「何が生き抜きじゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！俺達の神界の王にしてこの＃＄％＆ａｍｐ；●×◆■野郎っ！！！！！」

いまだにやる気の無い表情を出しながらブーイングするアルタイルを見てマリクは更に激怒し、お互い剣に力を入れて火花を散らしながら長い鍔迫り合いをしている間も、アルタイルが生み出した（召喚した）創造者達は＼ジークタイル！／と上部から落ちる紙吹雪と共に武器を何度も上へと掲げて連呼していた。

ー地球からシャイナ達がマシャフに来るまで、ずっとこの体勢のままでｗｗｗー

…

……

……

ー数分後　マシャフ　アサシン教団砦内部　大導師の間ー

ブゥン…

アルタイル「ぬっ？」

マリク「んっ？」

上記のお遊びは終わし！という風に先程の爆発★喚声バンザーイ祭りによる“軍治革命（アルタイルサーガ）”から元の大導師の間へと戻っていて、マリクは何時も通りに大導師の側に立ちながら彼を護衛し、アルタイルは大導師の間にある椅子に腰掛けながら机の上にある分厚い本の紙に魔ジックペンをスラスラと走らせていた時…

アルタイル「早いな。一体何が…」

マリク「さぁな。…それに、」

中央に刻んでいたアサシンの紋章から何時もの電子音が鳴って紋章全体が赤い光に覆わ天井へと伸ばし、輝きを放っていた光が止んだ直後何時もの二人と新たな霊体（ディク）が現れる。

アルタイル「むっ！エツィオ？？一体どうしたのだ？帰還にしては早すぎないか？？」

マリク「おぃエツィオ、“誰か憑いてきているぞ”。コイツは何者だ？“元人間の匂いがする”んだが…」

ディク『俺はディクだ。先程８００年ぶりにエツィオの力で目覚めたばかりだもんで…』

マリク「何…背中から生えている翼といい、身体から湧き出る光の魔力は…“お前、転生したばかりの新参英霊”か。」

ディク『詳しくは“二代目ジャンヌ・ダルク”又は語られるハズだった“英雄ディク・ダルク”だ。これから宜しく頼むよ。』

アルタイルとマリクがエツィオ達を見た途端作業を止めて同時に大導師の間の二階辺りから飛び降りてアルタイルは何事かとエツィオに歩み寄る中、マリクはシャイナの隣に浮遊する“フードを被った半透明の天使のオジサン（ディク）”へと歩み寄りながら親しげのような会話をする。

エツィオ「すまん、色々と説明したい所だけど…アルタイル、悪いがちょっとお前に調べたい事があってな…それで急遽此処に戻ってきたんだが…」

アルタイル「むっ?これは??」

パシッと突如エツィオが持って来ていた“ボルジアが使っていたニ

ケの杖”をアルタイルに向けて投げ渡し、アルタイルは目を丸くしながらも投げつけてきた杖を右手だけでＮｉｃｅ★キャッチする。

シャイナ「エツィオが倒したハゲ悪魔のボルジアという奴が使っていた杖なんだけど、この杖“林檎の断片”から造り出したと聞いて少し疑問に思って…」

アルタイル「林檎の断片から造られただと？…事実上有り得ん話だ。私が知る限り過去このマシャフで保管し研究してきた林檎は“粉末一握りでも完全に削り取ることすら出来ぬ”が…」

アルタイルは手に持つニケの杖をジロジロと見ながらシャイナの声を聞いて、うーんと声を軽く唸らせて顎下に左手を当てながら過去研究してきた林檎の知識を小言のように吐く。

エツィオ「あぁ、確かに全知の力が封じ込められた林檎が易々と削り取ることは出来ない…だがコイツは俺とアルタイルと同じ万物を司る“完全な聖霊体を軽々と吹っ飛ばした”んだぞ？それにアルタイルと戦った時と同じ（第十曲～十一曲参照）痛手も受けた。」

アルタイル「何っ！？」

アルタイルは手にする杖を持ちながらエツィオの話を聞いた直後、驚愕の表情を出しながら再度手に持つ杖をシンジランナーイ風に見

る。

マリク「馬鹿なっ…お前のような完全な魔神がこの“魔力も感じない杖”で吹き飛ばされただと!?」

エツィオ「あぁ…マジ有り得ねぇ。つーかムカついたけどｗｗｗ」

シャイナ「だよねぇ、エツィオ。まさかあの悪趣味溢れたクソ杖ごときに危機的?なシーンがあったなんて…ねっ?」

ディク『ウソッ!?マジかっ!え…エツィオっ!アンタみたいな“人”が怪我をしたのか!!??!』

マリクもアルタイルと同じシンジランナーイの表情を出しアルタイルが持つ杖を一瞬見た後、ヨヨヨッと口を開けたまま左手を口元に寄せるように持ってきながらわざとらしく後退し、数秒大導師の間が緊迫するような空気へとなった。

第百五十一曲　マシャフＤＥ快晴の後時々黒リク

―神界　マシャフ　アサシン教団砦内部　大導師の間―

アルタイル「…少し調べて来る。マリク、“怪我人”を一度治療室に連れていってくれ。何せよ“得体も知れない存在”に我々の兄弟を“容易く傷付けた物体”だからな。」

エツィオ「！」

シャイナ「えっ！？」

エツィオから投げ渡された杖を手の平の中で遊んでいた突如アルタイルがエツィオの身に“複数怪我をしている”ことを見抜くように言ってからアルタイルの全身に白い羽根が複数舞い上がった後、アルタイルは一瞬の内に大導師の間から消える。

エツィオは一瞬ピクンッと両眉を上に上げてうはっｗｗｗ冗談だろっという風な表情を出して、額から少量の冷汗を流しながらヨヨヨとその場にいるマリクとシャイナとディクの視点に注がれながら少し身体を震わせてたじろぐ。

シャイナ「ねぇ…ちょっとエツィオ！アンタ此処に来るまで“怪我を隠していた”の！？私達に黙って！？」

ディク『何で早く言わなかったんだエツィオ！？あの時早く言えば俺にも簡単な治癒ぐらい出来たというのに！！』

シャイナはアルタイルの台詞を聞いて隣にいる“見掛けは何も外傷も無くフツーに平然としている”エツィオを見て驚愕と動揺が混ざった迷いの表情を出しディクもシンジランナーイの表情を出しながら唖然とする。

エツィオ「だ…大丈夫だって。このぐら…イチチッ！？！！」

グイッ！

マリク「何が“大丈夫”なんだ馬鹿野郎。無理に我慢するからだ！この馬鹿魔神ッ！！」

気にし過ぎだとエツィオが一旦途端歩み寄ったマリクがエツィオの右手首を軽く握った瞬間、エツィオののほほんとした表情が一変激痛を受けた苦渋の面へと変わる。

エツィオ「ば…馬鹿っ！！無理に触るｎ…うっ！！」

マリク「お前の身に纏う最強の霊鎧の層を浸透し“肉体のみを攻撃”して内側からじわじわといたぶっていたんだな。たくっ…」

どうやらエツィオはボルジアの杖の攻撃を受けた時点で“中度の痛手”を身体に刻んでいたらしく、ボルジアを倒してからディクの護った故郷を浄化する辺りまで弱みを見せないよう自身の魔力で“受けた傷を完全にコントロール”し本来の傷を隠していたらしい。

シャイナ「マジかっ！ｗｗあのクソハゲが持っていた杖…マジッパネェェェェ…（´Д｀；）」

エツィオ「っっ…！な…なぁ…いい加減放しｔ…はぁぅ！？Σ（´Д｀；）」

マリク「うっせぇ…大怪我人は黙って昏倒していろ。Ｉｃｈ ｗｅｒｄｅ ｖｏｎ ｍｉｒ ｂｅｈａｎｄｅｌｔ ｕｎｄ ｓｅｔｚｅ ｅｓ…」

シャイナ「ちょっｗｗｗ」

ディク『ぶっｗｗｗ』

エツィオは右手首に握られているマリクの手を離そうとして腕を振るおうとしたが、ブチュゥといつの間にかマリクの羽織る袖の裏手首に仕込んでいた“携帯用仕込み治癒針”がエツィオの手首裏の動脈へと刺さって、針の中に入っていた“対魔神用麻酔薬”がたった数秒の間エツィオの全身に薬が周る。

エツィオ「お…おろろぉぉ…ぉぉ…ん…。。（Д）」

マリク特製麻酔薬が全身に廻ってエツィオは次第に両眼をトロンとして閉じ、神経伝達が途絶えていくような感覚を受けながら意識が遠ざかっていく。

マリク「この馬鹿…俺達兄弟だけでなくお前の傍にいる人間の女や、そこにいる浮遊霊に心配されちゃ…この先身が持たなくなる。お前の身体は一つしかないんだぞ…？」

ドサッと遂にエツィオは対魔神用麻酔の薬で意識があっという間にぶっ飛び、脳内がクルクルと回転するような気持ち悪さを受けながら数秒間棒立ちでふらついた後、前へと倒れこむように膝から地に着いて倒れ掛かったエツィオの身体がマリクの右腕に抱き止められる。

エツィオ「う……ん゛……ぅ……」

マリク「まったく…世話が焼ける“小僧”だ…。」

マリクは右腕の中で抱き止め両眼を渦のように巻いているエツィオの“身体に刻まれた痛みで苦痛の表情を出しながら眠っている”のを見て、苦い思いを脳裏に過ぎりながら先のことを心配するように小言のような言動を吐いた後、よっこらせとエツィオを右肩に掛けるように持ちかえる。

マリク「光の霊地が最大に溢れた“集中治癒室”に行く。そこで人間の女とエツィオに憑いてきた“浮遊霊”、少しながらの助力をしてもらおうか…」

ディク『おまっｗｗｗ浮遊霊ってｗｗｗ酷ぇ言い方しやがるｗｗｗでもまずは…』

シャイナ「寝ている間にさっさと治癒するのが先ね。てかっ…エツィオ…アンタッていう人は…もうっ…」

ディクが半黒状態のマリクの発言を聞いて少しイラッとしたが隣にいたシャイナが半ば呆れた表情を出した後、身に纏う白いコートの三つの長い裾を窓から吹く風で揺らせながらエツィオを肩に抱いているマリクに寄って共に集中治療室へと歩む。

ディクも宙に浮きながらため息をついた後フワンッと集中治癒室へと歩むマリクとシャイナに追い付いて、三人は大導師の間を後にし長い廊下を歩みながら…

シャイナ「ここでエツィオの一つの性格が分かった。もう…この無茶&痩せ我慢若作りジジ魔神！！」

第百五十二曲　La　divinit?　malevola　che　dorm

―？？？―

トクンッ…

トクンッ…

上空から雪のような物体が深々と細かく降り注ぐように落ちて何処かニー●レプリカント又はゲシュタルトの“●ノ雪”のＢＧＭが流れて、何もかも全てが驚きのまっ白い背景の中に一人とある童話に出てくる人物のように心音の鼓動と共に安らかに眠っていた。

エツィオ「…スー……スー……」

身に覆っていた真っ黒のアサシンのローブ・漆黒の霊鎧は無く“大事な所が見える裸状態”で、上空から降る雪らしき物体に降り注がれながら両膝を折って両腕を折った両足を抱えるような形で眠る。

が…

ズキッ…

エツィオ「！……っ……っっ！！」

安らぎの眠りから一変エツィオの表情が渋い苦痛顔になり、現世でボルジアと戦った際にまだ断定していない林檎の魔力による傷が背中や腹部にスゥと傷が刻むように複数浮かぶ。

ズキッ…ズキンズキン…

エツィオ「っっ…！！」

引き裂かれるような激痛を受けながらでもエツィオは必死に耐えて、傷口から出る激痛を多少でも和らげるように誤魔化し何時ものように隠しつつ眠り続けていた。しかし…

エツィオ「ぁ…くっ！……ぐっ……ぅ……」

ジワッ…

今回の外圧は異なり次第にボルジアから受けていた林檎の断片による魔力が、エツィオの傷口から血を滲み出すように出てジワッと肌

を赤く染めながら、更にエツィオを苦痛の絶えない過酷な状況へと引き摺り落としていく。

エツィオ「ハァ……ハァ……く…ぅっ！」

パタタッ…

血が滲み出て床を数滴赤い液体を滴り落としエツィオは痛みで身体を震わせて横になっていた身体をゴロンと仰向けになるように転がった後、そのまま眠るような体勢を取りながら両腕両足を伸ばし大の字の体勢になる。

エツィオ「ぁ……くっ…し…シャイ……ナ……ぅっ！」

身体に刻まれた傷で激痛を受けながら閉じている両瞼を震えるように動かし、自分が今守る最愛の人の名を呼びながら更に息を荒げて自身の呼吸を乱していく。

エツィオ「ぁ……ぁぁ……し……シ…ャイ……ぐぅっ！！」

メキッと傷付いた身体の危険を感じたかエツィオの内部にある悪魔の本質が表になり、身体の隅々から青い線を呪文のように伸ばして

いき少しずつエツィオの身体が受けた傷を埋めるような形で本来の魔神の姿へと変わっていく。

エツィオ「ハ…ァ……ハァ…シャ…イナ……シャイ……ナ……。」

パキパキ…

下半身が本来の魔神の身体へと戻り固まるような音を立てながら傷口が開いた身体を優しく包み込むように、最強の魔力の層に覆われた黒い鱗が傷口を塞ぎつつより強く再び傷付けられないようにしっかりと完全に鱗を覆う。

ビキッ……ビキッ……ズゥッ！

両手の平・両足先の爪が鋭く輝くように伸びて、背中の中間辺りから長々しい背鰭が付いた尾が生え、胸から右脇まで斜めに刻む十字の青白い痣が浮かんで、腰から逞しい巨大な竜の翼がバサッと羽ばたく音と共に出てくる。

パキ…パキ…

エツィオ「シャイ……ナ……シャイ……《エツィオ…》！」

本能的に悪魔化していくエツィオは苦痛の表情を出しながら首辺りまで完全に魔神化し、両瞼の下に青い隈取りのような紋様が浮かんで流れてくる悪魔の本質を受け入れようとしていた時、突如第二者の声が今いる“存在しない世界”に響き渡る。

？《エツィオ…》

エツィオ「…シャイ……いや、違う…“君は”……まさか……」

エツィオは第二者の声を聞いてはっとなり閉じられていた両眼が僅かに開いて、身体がもう完全に顔以外魔神化になってもグッと両拳を握るように丸めて震えながら背中を曲げて半立ちするように起き上がる。

エツィオ「くっ…」

エツィオはまだ鉛のように重い上半身を半分起き上がらせて声の主に向けて顔を動かし、今いる幻の白い世界にいるせいか目の前に立つ人物が風景に同化していて素顔は見えないものの…

辛うじて外部の輪郭だけで見えるシャイナにはない長いブロンド髪のような女性の外見の、第二者の存在を見ながら足に力を入れて立

ちつつ言う。

？《変わらないわね…貴方が何れだけ苦しみを味わい…計り知れない傷を負っても…他人に見せないように静かに黙って……無茶な事をして…もう…》

エツィオ「っ！…俺は…決して……無茶など…」

？《…そうやって貴方は足を引き摺っても“人”に不安を与えないように嘘を付く…私は…そんな全てを背負う貴方を見ていると…辛い……》

輪郭で浮き上がっていた腕らしき物体が魔神化しているエツィオの左頬に手先から触れられた途端、エツィオはあっとひょんとしたような声を吐いてガクッと軽く右片膝を床に着ける。

？《お願い…もう無茶な行為は止めて…貴方が今“必死で護っている人”も…“私”と…“同じような結末になる”わ。》

エツィオ「！」

エツィオの肌を触れた姿無き女性の輪郭はいつの間にかエツィオの背後にいて、両腕でエツィオの身体を覆うように囲いながら頭部の

輪郭をエツィオの頬にくっ付くぐらいまで寄せながら言う。

？《貴方の後ろ姿を見ると…“咽から段々と涙が出る”の…“残酷すぎる優しさ”が…私…いえ、関係してきた“人達”を…皆…》

エツィオ「…。」

シャイナ・ディク・アルタイル達の仲間にはまだ語られていない、自身が魔帝を倒す決意が生まれる前の８００年前の出来事。幸せだった頃の自分達が一瞬の内に崩壊したあの瞬間、当時愛していた人間が目の前で永遠に失われる悲劇の幕。

当時の自分は身体が大人でもまだ幼かった部分があった。そしてその幼い部分が彼女を死なせてしまう原因となり、自身が漸くそのことに気づいた時は既に遅かった…手を８００年前の彼女へと伸ばした瞬間、彼女はエツィオに言葉を与える暇もなく身体ごと塵のように消し飛ばしたのだから。でも…

？《だから…もう「させなねぇよ。あの時の“お前”のように」！》

突如バサッと両腰から出ていた巨大の翼がエツィオの言動に呼応するように力強く羽ばたくように動き、背後から抱きしめていた女性の輪郭は虚を突かれたように眼を開いたような表情でも出しながらエツィオの立ち上がる背後姿を見る。

？《エツィオ…》

エツィオ「あの時は…俺の偽善でお前を死なせてしまったことに日々後悔していた。魔帝を倒す決意を決め共に戦う仲間がいて、魔帝を倒し林檎と共に眠りについていた時も俺は迷いがあった。また俺の持つ“情の心”がまた再び現世で目覚めた時に“同じような悲劇”を出すじゃないか…と。」

背後に女性の輪郭に抱きしめられたままエツィオは仁王立ちし、両眼を静かに瞑りながら脳裏に映る過去の映像をリピートしつつ次第に現代でのシャイナと一緒による遠足戦記（チート☆サーガ）を振り返りながら両眼を開いていく。

エツィオ「だがな…俺は今“あの時と違う”。蘇った時代でシャイナと共に歩む度に起こる“オンモシレェ戦い”が、俺を変えていったんだ。これからもより大切なことを…もっともっと知る必要がある。例えこの先が８００年前以上の過酷な事が起きようが…っ！」

？《！》

エツィオが突如背後にいる輪郭の女性に顔だけ向けた瞬間、頭部が完全に魔神化し口元を上へと吊り上げて彼らしい笑みを抱きしめている輪郭の女性に魔神ＤＥ伊達面（イケメンフェエエエイスウウ）を見せる。そして…

エツィオ「俺は“最愛の人”を護る。たとえ相手が“地球以外の存在”だとしてもだ…。」

？《エツィオ…》

エツィオは身体ごと振り返って彼の両眼から放つ優しい金色の鷹の眼が輪郭しかない彼女を射止めるように貫いた瞬間、今いる白い世界がガラスが砕ける音と共に崩壊しエツィオは崩れ行く世界を顔を見上げながら両腕を上へと伸ばして…

開かれた黒い手の平に上部から落ちてきた白い雪が落ちて、雪が手の平の中で溶けていくように魔神（エツィオ）も世界から離脱していった。

第百五十三曲　漸く明かされるジジィオの“本　当　の　年　齢”（爆）

―神界　マシャフ　アサシン教団砦内部　とある借居室―

エツィオ「んぁっ？」

☆（ー3・）パチッと長かった眠りが覚めて片眼を開けた時、映った視界にはタイルで張った白い天井が見え、同時に月明かりのような一筋の光が走る。

エツィオ「（俺が治療されている間に時間経って、夜になったのか。）」

月明かりで映る視界にエツィオの纏っていたアサシンのローブを脱がされて上半身だけ裸になっており、右肩や腹部と背中に白い包帯が綺麗に巻かれ止めてあった。

視界が上方向であり背中には柔らかい木地が敷いてある感覚を受けていることから、エツィオは今夜になった薄暗い居室内のベッドの上で寝かされていることを知る。しかし…

？「ンゴゴッ…グピピピ…グギュギュ～♪」

エツィオ「ぶっｗｗｗ」

突然のＫＹ（空気読めねぇ鼾）声が左右から聞こえてエツィオは穏やかな表情から険悪するような表情へと変わり、五月蝿くしている声に向けて顔を右往左往に動かすと…

シャイナ「ゲゴガガガガ…ブギャラババババ！ビジュー♪♪」

エツィオ「ＨＡ…鼾だけはクソ最強だなシャイナｗｗｗ」

シャイナ「ゴガゲラララララッ！！ガジュオッ！！」

エツィオが眠っていたベッドの左脇から“物凄い鼾と共に寝ているシャイナ”がいて、何度も大きく口を開けながら一部涎を出しエツィオに負けないぐらい子供のような寝顔を出して爆睡していた。

他にも…

ディク『…スー…スー……』

ブリトラ《…ルル……ルル……》

アンゲルス【…スー……】

ヴェルズ『スフー…フー……』

ラークシャシー《クルル…》

鼾五月蝿いシャイナの逆側に実体化したディクがベッドによたれ掛かるように寝ていて、それにいつの間にか身体から出ていたのかエツィオに慕う使役達(ペット)が全員“主人が眠るベッドを囲む”ように皆が皆で団結して眠っていた。

エツィオ「お前らｗｗｗ何時から出て…んっ？」

エツィオは呆れたような表情を出しながらでも感謝するように笑みを浮かべ、スクッと上半身を起こして右手を胸に当てた時窪んだような感覚を受けて視点を下に向ける。

エツィオ「…“架”か。」

胸元の心臓部分から右脇腹に掛けて走る“大きな十字の傷のような

痣”…否魔界で生まれ魔帝に初めて傍に仕える際に付けられたエツィオにとっての古傷。

云わばテンプル騎士団に仕える冷酷非道たる騎士として駆られた“魔族の証”として、永遠に刻まれる烙印という名の死する時が来るまで消えない痕なのだ。

エツィオ「っ…」

ズキンッと刻まれた十字の痣から悲鳴のような鼓動が鳴る、エツィオは少し眉を下に下げて胸元の十字の痣に右手の平を当てて、擦るように軽く動かしながら数秒間両眼を閉じていた時…

マリク「“その痣”は昔からあったやつなのか、エツィオ?まだ断定していない林檎による傷かと思っていたが…」

エツィオ「マリク…」

窓際にマリクが寄り掛かるようにして立っていて、顔だけエツィオがあるベッドに向けながら堅くな表情でエツィオに言う。

マリク「お前が初めて此所に訪れた際に、その痣のようなものを見覚えがあってな。確か…大…いやアルタイルと一騎討ちしていた時

に…」

エツィオ「あぁ…俺がアルタイルと戦っている最中“魔神化した”時に見た胸元の大きな光のことかいマリク？あれは、俺が生まれてから直ぐに付けられたものだ。」

マリク「何だと。…いや、そうか。我々は元々人間界を欲しようとした悪魔との長年による戦いで、どの悪魔も身体の何処かに“十字の傷”のような物が刻んであってな。それで…」

マリクはエツィオの胸に刻まれた痣の話を聞いて数秒眼を大きく開き、長年彼も悪魔を討伐した際に見覚えがあるような…と顎下に右手を当てながら俯く仕草を取りつつ視線をエツィオの胸元の古傷を見て眉間に皺が出るぐらい心配するような表情を出しながら言う。

エツィオ「んぁっ？この古傷が気になるのかマリク？？大丈夫だよ、コイツは俺が生まれた途端に“魔帝が勝手に住んでいた家に上がって『オメデタ★プレゼェェンツ！』とまだ幼かった俺の胸元を刻んで”、直ぐに魔帝は『ワシの一生仕える“最強の息子”を修復☆修復★完璧に修復ぅッッ！！と』言って開かれた傷を塞いでさっさと出ていったもんで、この古傷自体は“身体に何か影響するわけじゃない”からさ。別にＢＡＤなペナルチィは付いてないよｗｗｗ」

マリク「そ…そうなのか（汗）……（－・－；）ホッ…てか…俺達が敵対している魔帝…突撃●ご飯系の“クソ迷惑なバカ悪魔”

だろｗｗｗ」

マリクはエツィオの話を聞いてブフッと八の字にしていた口から“白い何かが吹き出て”、エェェェ（´Д`；）風に敵対してきた魔帝の本来の親バカ並みの素顔を聞く。

エツィオ「あン時は本当に痛かったなぁ…まぁまだ俺が幼児だった頃だから、“自己修復”の概念は知っていなかったし…ハァ（一一；）」

マリク「だとしても…この痣は“俺達が討伐してきた雑魚悪魔”にはない“圧倒的な威圧感がある”。痣にしては“綺麗に刻んでいる”し…それに…」

マリクは寄り掛かっていた窓際からエツィオがいるベッドへと歩み寄って、右腕を伸ばしエツィオの胸元に刻まれていた痣を手の平で何度も上下に擦りながら言う。

マリク「この痣はもう“一生治せない”のか。」

エツィオ「まぁ…な。この傷自体は“３●◆♀■▲♂▼◆†★年以降”のモンだし…身体を癒す概念を教わっていない生まれたての悪魔にゃ魔帝にとって…」

マリク「なっ！？？！！オィ…待てエツィオ！？！！？今何て言った！！？？！今何て言ったんだ！！？？！お前…確か“小説序盤”で…（オィ待て作者…序盤で言ったヤツの歳が全然違うじゃないか！？？！！）」

マリクはエツィオの付けられた“古傷が付けられた年代”＝“エツィオの歳”を聞いて心配する表情から一変驚愕する表情になり、マリクは眼を何度もパチクリしながらエツィオの“今の容姿”と聞いた“古傷の年代（エツィオの本来の歳）”を信じらんねェェェェェェェェェ風に顔を高速に上下へと動かす。

エツィオ「あー…アレは“嘘”だよ。歳を取っていく内に自分本来の年齢がうろ覚えのように分からなくなってきていてなぁ…“メンドクセェと思った時とか”…“突発的に適当に言って誤魔化したりとか”……まぁ色々と…まずマリク、お前がモチツケｗｗｗ」

エツィオは何度も顔を高速に上下に動かすマリクを見て可笑しいと思ったのかブフッと吹いて、ベッドの回りに眠るシャイナ達を笑い声で起こさないように軽くケラケラと笑う。

マリク「馬鹿ッこんなことを聞いてしまった俺にはもう…コレはッ…いいか！！？？！本当にいいか！！？？？！」

エツィオ「ＨＡ　ＨＡ　ＨＡ☆シャイナ達だけでなく“閲覧者”に

も迷惑掛けてゴメンな！この回まで色々あったけど、ようやく俺の“本来の歳”を思い出したよ。今更もう驚きさえもしないと思うが…」

エツィオは口元を吊り上げて不適に笑いながら顔だけを後ろに振り向いて、“カメラ目線”のまま背景を朝日が昇る前の白々しい空をバックに右手でピースサインをした直後…

エツィオ「俺…“３１２９９２８１０００００”歳なＮＯ★」

マリク「な…ん…だと……！！？？！」

“外見２７の男”が本来の“地球爆誕並みのじゃねーかｗｗｗのアホ歳”を聞いて、マリクは更に驚愕の表情を出して口が開いたままキャピ★キャピ★しているエツィオを見て呆然と立ち尽くしていた後…

マリク「嘘だろおおお

嘘だろぉおおおおおお…

マリクの叫びが神界全体まで何度もエコーするように響き渡った時、
神界の地平線から一点の光が少しずつ立ち上がっていった。

第百五十四曲　舞台は何故か空でチートドッグファイトｗｗｗ

―神界　マシャフ　アサシン教団砦外部上空周辺―

ディク『くっ！』

バサッバサ♪とまだ目覚めたばかりなのか背中の白い翼を何度も不器用に羽ばたかせ、翼に流れ込む風を受けながら飛行し、前方にいる黒い翼が生えた人に向けて追いかける。

ディク『とっ！…ととッ…んっ！！』

バサッ！

荒れ狂う風圧を受けてディクはバランスを崩し一旦急降下してしまったが、落ち着いて背中の翼を水平に広げるように動かし、翼を動かさないようにして上昇気流を利用し再度黒い翼が生えた人がいる上空の高さへと飛翔する。

ディク『もう…ちょい…かな？』

バッ！

同じ高さまで上昇したディクは再度背中の翼を綺麗に広げるように伸ばし、何処からでも吹き荒れて来る風の軌道を８００年前以上の訓練と同じような感覚で研ぎ澄ますように集中した後…

ディク『（よしっ！飛び方は粗方理解した！！でも…）』

トキの翼を水平に伸ばし滑空しながらディクは飛び、再び黒い翼が生えた人に向けて力強く飛び向かう。

？「♪～♪～。」

だが前方にいる黒い翼が生えた人は羽ばたくことすらせず広げた翼に風を溜め込むように宙に静止していて、安定していない上空にいるのにも関わらず“ジ●ジョ立ち”で迫り来るディクを不適な笑みで待ち続けていた。そして…

ディク『喰らえぃエツィオ！！空中版回し蹴りＤＡ　ＤＡ　ＤＡ　ＤＡ　ＤＡ　ＤＡ　ＤＡ　ＤＡ　ＤＡ　ＤＡ　ＤＡ　ＤＡ　ＤＡ　ＤＡ　ＤＡ　ＤＡ　ＤＡ　ＤＡ　ＤＡ　ＤＡ！！（ア●ブレ２の●ーク的な意味で）』

ズドギャラララララ！！！！

飛び慣れたディクは両眼から車のハイライトのようにビゴー★と出しつつ、台詞通り黒い翼が生えた人…白Tシャツと黒Gジャンを着た“神界ラフ服格好のエツィオ”に向けて回し蹴りすると同時に足首に付いていた短銃（リボルバー）の弾丸も何連発も容赦なく全身の急所に向けて狂い無く発砲する。しかし…

エツィオ「アジャパパパパパパピパァァァァァァ！！！！！！」

ズドガガガガガガッ！！！！

エツィオもディクと同じように両眼から車のハイライトの光をビィグゥォォ～！と放ちながら、右手に持つ氷魔銃（ショットガン）を“方手で高速撃ち”し、ディクが発砲した銃弾と回し蹴りの風圧を、エツィオが放つアンゲルスの氷の弾丸で“全て相殺”する。

ディク『ＤＡ　ＤＡ　ＤＡ　ＤＡ　ＤＡ　ＤＡ　ＤＡ　ＤＡ　ＤＡ　ＤＡ　ＤＡ　ＤＡ　ＤＡ　ＤＡ　ＤＡ　ＤＡ！！！！！！！』

エツィオ「ブジャビビバボビル〝ベブギァァァァァァ！！！！」

ドギャララララッ！！！！とディクの回し蹴り＆射撃とエツィオの氷

魔弾による“高速撃ち合い”が空中に発生し、その中心でディクが放った弾丸がエツィオの放つ氷の魔弾丸で一つ一つ凍りついた小さな結晶と化して、ヒラヒラと太陽の光に当てられて綺麗に輝きながら地上へと落ちていく。

ディク『ちっ！』

キリが無いと悟ったディクは一度舌打ちし後何度も回し蹴り撃ちしながら両腕を後ろに下げるように伸ばして、両手の平に銀色の光を零れ落ちるぐらいまで溜め込んで撃ち合いが収まるタイミングを図って精神を集中した後…

ディク『Ｕｎ　ｒｕｇｉｓｓｅｍｅｎｔ　ｄｅ　ｌ'ａｒｇｅｎｔ！！』

ドンッ！と撃ち合いが数秒収まるタイミングを見計らってディクは手の平を開いた両腕を前へと伸ばすように翳した瞬間、翳した両手が“竜の口”のようになって両手の平から銀色の太っとい光線がエツィオに向けて放出する。だが…

エツィオ「魔神ＢＥＥＥ

が吐かれて、光線の隅々から雪の結晶のような形も飛び散りながらディクが放つ光の魔力光線に当たって、今度は撃ち合いから放ち合いになる。

ディク『っっっっ！！！！！』

エツィオ「ムヒョヒョヒョヒョヒョヒョヒョヒョヒョwww」

エツィオが放つ青白…否アンゲルスの力を開放した氷の放射攻撃（レーザーブレス）で徐々に押されていき、ディクはギッと歯を食い縛りながら口から氷のレーザーブレスを放つエツィオの“ドス黒い笑み”を見てブルッとさぶいぼが出るぐらい身震いしてしまう。

ディク『（これじゃぁマズイ！！（色んな意味でw））ア…銀髪の護り（アイギスの）「さ　せ　ん　（、3、）mg」ちょっ…』

保てないと分かったディクは光線を放ちながら右腕だけを後ろに下げ、光の護りの魔力の壁を前に敷くべく生成しようとしたが、いつの間にかエツィオが目の前にいて表面は微笑みに満ちていても…

―背後からは不気味な触手のような黒いモヤが出ており口から氷の光線を吐きながら、唖然としているディクの両肩にガシリと両手で向かい汽車ポッポー♪と置いた―

その直後…

エツィオ「永遠氷河期（アイスエイジタイム）♪」

ディク『が…』

パキィィィィィィィィン…

一瞬の内にディクの身体が“液体窒素でもぶちまけられたように綺麗に凍結”し、太陽の光の反射で透明な氷が青と白が混ざった氷へと見えて、氷の彫像になったディクは雪の結晶を放ちながら地上へと落下していく。

エツィオ「ふー…」

バッ！

エツィオは凍結し落下していく彫像（ディク）に向けて急降下し、口から氷の吐息が吐き漏れながら背中の翼を畳むように曲げて回転しながら高速に落ちていく彫像を抱き抱えるようにＮｉｃｅ☆キャッチした後…

エツィオ「８００年ぶりに目覚めたからだと思うが、まだまだお前にゃぁ“もっと成長できる”所があるＺＥ★（＾＾）」

ディク『っっ！…ケフッ！？…え…エツ…ィオ？』

ジュワッ！と抱き締めていた氷の彫像が“一瞬の内に熱湯でも掛けられたように蒸発”し、解凍されズブ濡れになったディクは溶けた氷水が鼻の中に入って多少誤咽する。

エツィオ「でも久々に手合わせした所にゃぁ“特級悪魔には劣らない全世界に生きる人間の中では現時点最強”と言ってもいい。中々良かったぜ？ディク＾＾」

ディク『！』

バサッと翼を羽ばたかせながらゆっくりと地上へと降りていきながら、エツィオは外見４０代の水に滴る良い顔ディクを“お姫様抱っこ”しつつ両足を地に着けて背中に出ていた大きな鷹の翼を折り畳む。

ディク『まだまだ…強くなれる…か。…』

エツィオ「そうだ。俺も…ディクも皆、まだまだ強くなれる。そう

さ、だって…」

背中に折り畳んでいた漆黒の鷹の翼を仕舞いディクをお姫様抱っこしながら回復魔力（第百三十九曲参照）を注ぎ入れ、濡れたディクの全身から桜の花びらが舞い散るようにハラリと落ちる。

エツィオは笑みを浮かべながら前方から走ってくるシャイナと、マリク達天神を見てクスッと綻ばせるように笑った後…

エツィオ「“人間”だからな。」

第百五十五曲　地上視点の三人で＼（＾ｏ＾）／と無音帰還タイル

―神界　マシャフ　アサシン教団砦中庭辺り（ディクが凍り付けになる数分前）―

ドドドドドドドドドドドドドド

シャイナ「おーｗｗｗやってるやってるｗｗｗスゲーｗｗｗ」

視点は地上にいるシャイナ達に移り上空にいるディクとエツィオが上空ドッグファイトする中、砦の中庭でシャイナはマリクの魔力で構成した白い椅子に座って、右手を額に寄せて顔を見上げながら上空の激しい魔力のぶつかり合いを見る。

どうしてこうなったかというと朝ディクがシャイナ達よりも先に目覚め、次にエツィオも起きてベットに囲っていたエツィオの使役達（ペット）を全員武器へと戻して身体の中へと仕舞い、エツィオを看病していたマリク達が朝食を作っていた時に…

―エツィオ！久々に組み手…やらないか？―

と、一日の始まりを告げるニコニコ全開のディクが野球少年の笑みを浮かべながらエツィオに言い、丸めていた両手を何度もグッパッパー♪とテンポ良く広げながらキャピキャピした所…

－ＯＫ！Ｂａｌｌｉａｍｏ　ｃｏｎ　ｍｅ－

と前話にへと繋がって今、ディクの放つ“人間の中での最強の光の魔力”とエツィオが放つ“超超超超超超超超超超超超超超★反則魔力（仲間相手なので手抜き）”が空気中の酸素を刻むように引き裂き、二人の“いろんな意味で凄まじい魔力”がぶつかる度に轟音が遥か地上まで震動するように響き渡る。

マリク「まったく、奴はまだ治療したばっかだというのに…」

中庭入り口のアーチからマリクが右手の平に乗せている入れたて紅茶入りマグカップのお盆を持ちながら歩いてきて、上空へと顔を上げて曇らせるような表情を出しながらも言動は呆れたような柔らかくなっていてた。

カダール「でも治療前よりかは“すっごい元気になってます”よwだってホラッ！！」

マリクの隣いにいた弟がｗｋｔｋするような表情を出しながら上空

に向けて右人差し指を指し、持ってきたマグカップのお盆を魔力で構成した白いテーブルの上に置いたマリクもシャイナもカダールの人差し指に吊られてその方向へと注目する。

シャイナ「ちょっｗｗｗ」

ドベベベベベベベベベベベベ！！！！

上空には二人同時に“光線”を放っていて一人は両手の平（ディクのレーザー攻撃）から、もう一人は口（エツィオの冷凍ブレス）から光線を直接放出していて、白銀と蒼の太っとい光線がぶつかり合い合戦になっていた。

マリク「ほぉ、これは…。」

シャイナ「でしょ？兄さん？？エツィオさんの今の体調がこんなに溢れていますし、エツィオさんが放つ魔力の放出力の余波が手取り足取りと分かりますよね？ｗｗｗ」

シャイナ「うはーｗｗｗフード天使のおっさんは“ドラ●ォのＤーブレス”にエツィオは“ポ●モンのれいとうビーム”かｗｗｗでも…」

徐々にエツィオの口から吐く冷凍ブレスがディクの放つ白銀の光線を呑み込むように押していき、それだけでなくエツィオが吐くブレス自体が“どんどんバカみたいに極太になっていく”。そして…

パキンッ

シャイナ達地上にいる全員「天使のおっさん「浮遊霊「ディクさんオワター＼（＾o＾）／」オワター＼（＾o＾）／」オワター＼（＾o＾）／」

終に銀色レーザーを放っていたディクが防御魔力を放とうとしていた隙を見計らってエツィオは急接近して捕まえた直後、ディクが“一瞬の内に凍り付いて”一つの天使の翼が生えた氷の彫像になったディクは太陽の反射の光でキラキラと輝くように落ちていく。

シャイナ「やっぱ“何時でもプロアク状態”のエツィオには敵わないのねｗｗｗどんなに技をぶつけようが「無理なものは無理なのだ。相手は私と同じ“絶対なる聖霊体（自然の力を自由自在に操る者）”だからな。」ちょｗｗｗ」

突如シャイナが座っていた白いイスの背後に寄り添うようにいつの間にか帰ってきていたアルタイルが立っていて、腕を組み…否マリクが入れた紅茶入りマグカップを右手に持って口に含め、ズズズと啜り飲みながら顔だけを上に上げ落ちていく氷の彫像を抱き拾うエツィオを見ながら続けて言う。

アルタイル「自然の力は人間に取って脅威の存在であり“対抗手段はほとんど無い”といわれ“自然は元々人と共存するために用いてきた”力といわれてきたんだがな…」

ズビビィとアルタイルは不敵な笑みでマリク特製紅茶を音を立てながら啜り飲みながら、“カメラ目線”を腹下斜め４５。&逆光に合わせて“俺カッコイイよね!?”風に胸元を魅せるようなポーズとりながら空から落ちていく氷の彫像を追いかけるエツィオを見届ける。

マリク「アルタイル!」

カダール「あっ!アルタイル大導師、お帰りなさい!!」

アルタイルの無音帰還により気配に気がつかなかったのかアルシャイフ兄弟はそそくさにワンテンポ遅れて背後へと振り返った後、アルタイルに向けて声掛けし「すまん」「すみません」と謝罪しアルタイルは「いや、私は“不意な登場が好み”なのでな。」と軽く言って二人にむけて彼なりの不敵な笑みを出しながら言う。

アルタイル「友が持ってきた杖に“少し面白い事”と“また一つ…エツィオに頼み事”があってな。それをまず“少し面白い事”から報告しようと思って…」

シャイナ「お…面白い事って何ｗｗｗそれとアータの表情喋る度に“悪人面”になっているんですがｗｗｗ」

シャイナは段々とアルタイルの表情が“ドS丸出しの黒い笑み”になっていて、「クックック」と軽く笑いながらアルタイルは右手に持つニケの杖を見ながら不気味に笑っていた。

マリク「どうせ“エツィオにとっての残念な報告内容”だろうな。まぁ俺らは無関係だし、どんな内容が来ようが“期待しない”。」

カダール「ですよねーｗｗｗまぁ僕らの出番が終わったら“チャプター４”開始ですし、また出てくるまでは僕ら“舞台裏で長期(オ)ＤＥ休暇(フ)しています”から。ｗｗｗ」

シャイナ「おまっｗｗｗ何気に“ドラマ撮影のような現場”の台詞を吐くなよｗｗｗてか…ジジタイル“マジ怖ぇ（顔面的な意味で）ｗｗｗ」

そう言いながらアルタイル達は地上へと降りてきたエツィオと解凍されて回復されているディクに向けて歩み出し、表面はドS丸出しの会話（一人だけ）をしていたがお互い笑い合うように語り合っていた。

アルタイル「さて…私がこれから言う報告内容はエツィオにとって…」

―大凶か？それとも…―

第百五十六曲　日本語でＯＫですよ、アルタイルとエツィオとディクさんｗｗｗ

砦上空で英霊ＶＳ常時チートとの短いドッグファイトが終えた途端アルタイルがいつの間にか帰還していて、組み手を終えてディクを魔力で回復させたエツィオは「Ｙｏｏｏｏｕ！一日解析ご苦労さんｗｗ」と軽く右手を上げて言う。

アルタイルは清々しいエツィオの言動を聞いて「その声といい…傷は癒えたようだな。」と口元を吊り上げながら右手に持つ飲み干したマグカップを魔力で浮遊させ、マグカップ自体がアルタイルの魔力で覆った赤いオーラに包まる。

フワリと浮かびながらテーブルの上に置いておるお盆まで移動し、カタンとお盆の上に乗るように軽く音を立てる。

そしてエツィオはアルタイルに仲間になったディクの自己紹介をして、更に地球の創魔結界（アルボーレドバンケット）で貰った魔札をアルタイルに渡しある程度結界内の現状のことを説明しマリクたちと普段どおりの何気ない会話をした後、大導師の間へと移動する。

―数時間後　神界　マシャフ　アサシン教団砦内部　大導師の間―

アルタイル「まず手短に言う。エツィオお前が持ってきたこの杖…“林檎の力が似た模擬魔力”が入っていた。それに“少量の力程度”なのにだぞ？」

カランとアルタイルは持っていたニケの杖を床へと投げ捨てて、乾いた音を立てながらコロコロと事前に敷いてあった円形の呪文が書かれた赤い魔方陣の円内へと入る。

エツィオ「“少量”だって！？この少量程度で俺は“中度の痛手を受けた”のかよｗｗｗ…理屈が分からん、俺のような“アルタイルと同じ完全な聖霊体”に少量程度の魔力じゃ、たとえ模擬林檎の力だろうが俺の身体を“簡単に吹き飛ばすことすら出来ない”ハズだ。」

アルタイル「…確かに“自然を自由自在に操る王”の私とお前は、全ての活きる存在という概念さえ無視し外圧を受け付けず、“同じ魔力を持つ力同士でなければ私とお前の身体を傷付ける事すら敵わない”。どんなに工夫を入れようが私とお前の持つ絶対なる“壁を乗り越えることすら出来ぬ”。しかし…」

シャイナ「ちょ…だ…誰か“日本語でＯＫ”をｗｗｗ」

エツィオが顎下に右手を沿え眉間に皺が三本出るほどてう〜んと困惑する表情を出している中、シャイナはアルタイルが言う言葉の意味が解らなくて（　゜Д　゜）ポカカカカカカーンと呆ける表情

を出す。

ディク『…エツィオの身体には何重の魔力の層…いや“決して超える事が出来ない境界線”があって、その境界線は例えエツィオの纏う霊気の鎧を突き抜けてもどんな法則でも絶対に受け付けない“遮層魔線”があるんだ。その境界線を通り越したとなれば…』

シャイナ「うん♪余計に解んねぇよｗｗｗ（＾＾）ｑお前も日本語を喋れＹＡ☆ｗｗｗ」

ディク『…（´・ω・、）』

ディクがシャイナに向けて“コレでも解りやすいような説明を入れた”が、それでも意味が解らないようでシャイナはさらに機嫌を悪くしたような素振りでディクに向けて左親指を下に向ける。

そんな中アルタイルは床に右片膝を着けて低姿勢の状態で敷いた魔方陣の中に向けて右腕を伸ばし、右手を開いて翳しながら赤い光を放つ魔力を魔方陣に向けて注ぎ入れる。

アルタイル「その壁を超える為に突発的な作用となる“代わり”を注入することで、一時的に作用が働き私とお前の絶大な魔力の層を乗り越えることが出来る“深層域”が壁を貫く一筋の刃となる。」

ポワッとアルタイルが右手に翳した赤い光が敷いていた魔方陣の上に染み込むように入った途端、魔方陣全体が赤く輝きはじめて魔方陣から呪文のような文字が浮かびながら、陣の中心にあったニケの杖が魔方陣から放つ魔力でフワリと宙に浮かぶ。

エツィオ「“深層域”？それって人間の誰もが持つ隠された感情的の思想のことなのか、アルタイル??」

アルタイル「そうだ。人は予め隠された思い…感情を遥か深層区へと落とし、蓄状態を保ちながら必るべきの時が来るまで誰もが感じることすら出来ない隠界へと保ち続ける。そして…」

宙に浮かんだ杖をアルタイルは高姿勢になって腕を杖に向けて伸ばし、杖を掴むぐらいの距離で左手を翳すように開いた途端…

アルタイル「必るべき存在が現れた時のみ隠されていた思想を解放し、我々自然を操る者の想像を絶する神の壁を超える武器…云わば自然に少しでも対抗出来る“壊れかけた剣を精一杯叩き付ける”ようなものだ。」

浮かんでいた杖全体に赤いオーラのようなモヤがウネウネと曲げるように纏った時、杖の色が“反転したような残念色になって”隅々からヒビのような“亀裂が複数浮かび上がる”。

エツィオ「これは…！」

エツィオは目を大きく開いてボルジアを倒すまで奴が使っていた杖の状態を見て、一瞬顔色が変わって強面のような表情へとなる。

杖自体はもうボロボロで杖先のあるニケの像が原型留めないぐらいに半壊しているのに、魔神の攻撃を耐えたその強靭さは人間の何処かの状況へと思わせる印象が数秒脳裏に過る。

アルタイル「光の聖霊体相手に“一撃与えた程度でこのザマ”だ。本来なら聖霊体相手だと“武器ごと消し炭になる”ハズなのに、ヒビが入った程度で人体に及ばず壊れずに済んだのも奇跡とも言えよう。だが所詮…」

アルタイルが翳していた右手をグッと握るように動かした途端、魔力で浮かんでいた杖に更にヒビが走っていき破片が次々と床へと細かく分割していくように落下する。そして…

アルタイル「模擬品（レプリカ）だ。」

アルタイルが右手を強く握り締めた瞬間宙に浮かんでいた杖が粉々に破壊され、一つ一つの杖の破片が粒子状になるように床へと落ちて、サラッと元杖の破片が細かな砂へとなる。

アルタイル「素朴な素材の癖に素材に宿っていた魔力は“擬似林檎に似た妖力の成分の一部”だということを発覚した。その素材の場所は…いや、その前に…」

エツィオ「あん？」

いつの間にアルタイルが出していたのか圧縮されていた分厚い本を左手の平から召喚し、ミニマムサイズから通常サイズへと戻して宙に浮かせた後、エツィオの足下に召喚した分厚い本をドカッと投げ置く。

アルタイル「７０００年前ぐらいだったかな？…私が直に見て執筆した“魔力の章第２４３曲４２５項妖力ノ始５０話”を開け。そこにお前が知るべき項目が書かれている。あっ、そこの付箋紙は一切気にするなよ。」

シャイナ「ちょっ…厚いｗｗｗどんだけ書いたんだよアンタはｗｗ」

シャイナは床に置かれたアルタイル直筆“見ただけで超分厚い本”を見て、人間１０人ぐらいで無いと持ち上げられないぐらいの分厚さを目を丸くするように見る。

エツィオ「どれどれ？…」

そんな超分厚い本を“片手で軽々と持ち上げた”エツィオは左手で本を開きズベベベベと高速にページを捲って、アルタイルが言う付箋紙が付いた項目ページへと持っていてシャイナとディクが＞●＜＞●＜ジィィィィとエツィオの両片側に付きながら開くページを見る。

－Wo w?rden diesen Helden, zu dem ich Gehen liebte? Wir wurden auf den Rocksch??en dieser Person bewahrt. Wir lie?en die Macht, mit der ich diesem Held en folgte, in heiligen Sch?tze n wohnen, um die Gunst nicht zu verge ssen Wir Masse－produzie ren, die heiligen Sch?tze, den en ich diesem Helden durch die Macht der Heldenladenkasse ?h nelte, kommen wieder zur?ck un d wollen Helden selbst haben…（以下省略）－

シャイナ「何て書いてあるの？字自体が“超古いドイツ語”だもんで意味解んねｗｗｗ」

ディク『…エキ●イト翻訳を使ったらどうだ?またはヤフー翻訳でもｏｋだと思うぞｗｗｗ』

エツィオ「まだ此処は“どうでもいいまだマシなとこだ”。それに…ん!?」

ページ数を捲るたびに段々と愛歪むような文へとなっていき文の中から出てくる“英雄”“神器”“私達”という単語が多くなって、エツィオはもしやと額から冷や汗のような水滴が数滴垂らす。そして次のページを捲った瞬間…

―Ｄｉｅ Ｍａｃｈｔ ｖｏｎ ｄｉｅｓｅｍ Ｈｅｌｄｅｎ，ｄｅｒ ｕｎｓ ｓｃｈ?ｔｚｔｅ，ｗｏｈｎｔｅ ｓｃｈｌｉｅ?ｌｉｃｈ ｉｎ ｕｎｓ．Ｄｉｅｓｅ Ｍａｃｈｔ ｉｓｔ ｖｅｒｌｉｅｂｔ ｓｃｈ?ｎ．Ｉｃｈ ｗｉｌｌ Ｉｈｎｅｎ ?ｂｅｒａｌｌ ｉｍ Ｌｅｂｅｎ ｆｏｌｇｅｎ…Ｅｚｉｏ―

エツィオ「あ゛っ?…オイ、アルタイル…これって…ま…まさか…」

アルタイル「ふふふ…その“まさか”だよ、エツィオ…クックックｗｗｗ」

キリキリとエツィオが何かが軋む様な首の骨の音を立てながらアル

タイルに向けてゲッソリするような顔を上げた時、アルタイルはドス黒い笑みを浮かべ“悪人面”のような形相を浮かべて次の言葉を言った。

アルタイル「私が粉末状にした杖の素材は“お前が嫌う妖精界”からだ。」

第百五十七曲　チャプター４開始時はエ●コン戦闘から始まるｗ

神界でアルタイルに言われたエツィオにとっての衝撃過ぎる内容、それは“妖精界”から創られた紛い物の杖ということを知る。

あの後エツィオはもう一つのアルタイルの頼み事を聞いて深く悩んだ揚げ句、渋々と了解して神界から再び地球へと戻りエツィオにとって長い寄り道クエストが始まった。

―現世　現代　フランス上空―

エツィオ「チクショー…“チャプター４”が始まったというのに…何この気の重さはｗｗｗ」

ゴウッと背中に出した漆黒の鷹の翼を広げて風を受けて滑空し、背中にシャイナを乗せながらゆったりとした速度で曇り行きになっているフランス上空を飛行する。

シャイナ「まさかのエツィオにとっての“ストーカー一族（まだ妖精自体見てないけど、何だかヤバそうに思うｗｗｗ）”があの杖を創作していたとはね。てか、エツィオ。アンタの服それでいいの？ｗｗｗ」

エツィオ「んぁ？これか？？」

シャイナはエツィオの両肩を掴んで背中にしがみつきながら“今着ているエツィオの服”を見てブフッと可笑しく笑うように吐く。

―理由はエツィオの上半身に羽織る白Tの背中に“深巾暗殺一筋無双万歳！！”胸部に大きく“悦男（えつお）”と、暴走族のような派手な字で大きく書かれた“見た目でもう何もかも恥ずかしい厨Tシャツ”をフツーに神界から着ていたからである。―

エツィオ「あー、この服はシャイナが買う魔力の無い素材と違って、これは“天神達が纏う白いローブ”と同じ素材だからな。しかも“俺の力に耐えきれるぐらいまで強度を増した”俺だけの“超特注品（アルタイル製作）”だしｗｗｗ」

シャイナ「だからと言ってこれからはその“何もかも見た目でもう目が行く程スっっっっっっっげぇぇぇぇぇぇぇ恥ずかしい服で逝く”のかｗｗｗ余計に警戒度が高くなりそうｗｗｗ」

苦笑いするシャイナにエツィオは「別に現代でも似たようなモンあるから良いだろｗｗｗ」と言って、背中の翼を軽く上下に数回動かしてバサバサと音を立てる。

エツィオ「それは良いとして…これから行く妖精界…いやそれ自体が本当に厭だ（´Ａ`）鬱だ死ねぃｗｗｗ（妖精界自体の意味で）」

ディク『まーまーｗｗｗエツィオｗｗｗアンタが今旅をしている内容にもコレが含んでくると思うし、何にせよ避けられない使命が突然飛び込んでくるもんだ。諦メロン（＾Д＾）ｍｇ』

隣に飛ぶエツィオが落ち込んでいる表情を見たディクは背中の翼を水平にして滑空しつつ、プギャーとわざとらしい哀れみの視線を送ってエツィオに向けて右人差し指を指す。

エツィオ「つーか…アルタイルの追加使命内容が“厭”になってしょうがないｗｗｗそれを易々と引き受けた俺にも可笑しい所がｗｗｗ」

シャイナ「そんなことｇｄｇｄな小説展開を突っ込む暇があったら、さっさとアンタのチート技で最速に寄り道クエを完遂しましょ。早く次の浄化先にある“本物の林檎”の安否が気になるし…」

エツィオの背にしがみついているシャイナが口をサンの字にさせて軽くブーイングするような言動を吐いて、エツィオは「そうだなｗｗｗ」とシャイナに言って軽く苦笑しながら更に背中の翼を力強く羽ばたく。

エツィオが受けた追加使命内容は妖精界に赴き潜入した後、擬似林檎の製作者を自分の正体に気づかれずに発見・特定・監視する。第二使命は擬似林檎の力が込められた多くの擬似品の場所を発見。

そして最終使命は擬似林檎の製作者の資料を全て盗みかつ暗殺する。という“初代アサクリ版のお使い内容が込められた”簡単使命内容であった。

エツィオ「さて…もうじき妖精界の境目となる境界線が見えるころだな。あぁ…身震いしてきたｗｗｗ（過去のトラウマ的な意味で）」

シャイナとエツィオとディクは北一直線にジェット飛行しながら大分飛んで数分、顔面に少し上空の雲から降り出した水滴のようなものをペチ♪と受けながら少し濡れる感覚を受ける。

エツィオは雨が降ってきたと肌に感じた瞬間すぐに魔力を放って、エツィオの全身に薄い青みが掛かった円形の結界を展開し降り注ぐ雨を、エツィオの覆う青い結界の力で雨が反れるように弾いていく。

ディク『妖精界か…まだ見た事も無いけど、とりあえずエツィオが生前だった俺に言ったあの言葉を信じるよ。大丈夫さ、俺は出来る限りアンタをアシストするよ。』

エツィオ「悪ぃなディク。“この章だけ扱き使うように沢山頼るかも”しんねぇｗｗｗ」

ディクもエツィオと同じ円形の結界を展開し結界の色は白銀色になっていたが、ディクの張る結界の効力は“魔神（エツィオ）と同じ”なので差ほどというものは無い。

エツィオは隣にいるディクに顔を向けずに下を向いたまま重いような言動を吐いた途端、ディクは『かまわないさ。生前だった俺は、アンタの契約者だったし。困った時はお互い様さ＾＾ｂ』と左親指を上に上げて笑みを出しながらエツィオに向けて言う。

エツィオは生前の契約者のディクに「すまんｗｗｗ」と顔を下に伏せて、俯きながらでも右手を額に寄せて横にしながら軽い感謝の言葉を吐く。ディクはそんなエツィオにクスッと笑うような表情を出して、背中のトキの翼を水平に伸ばしてエツィオの傍へと寄った瞬間…

？《こちらグノーシス１！フランス上空にクロノスとコロナドアンジェリ狂信者発見！これより迎撃体勢に入ります！！》

エツィオ「あぁん！？」

ディク『何奴！？』

突如馬鹿でかい無線声が聞こえてエツィオとディクがＵＺＥＥＥ

第百五十八曲　リアルモ●ウス隊ＶＳ最強チーター&元人間チート

ー現世　フランス上空ー

シャイナ「おまぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？？！何このＩ●ＡＦに出てくるリアルモ●ウス隊！！？？！ラプターなんて間近に見れるもんじゃねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

敵戦闘機Ａ《グノーシス１了解！ＦＯＸ２！！》

敵戦闘機Ｂ《グノーシス２了解！ＦＯＸ２！！ＦＯＸ２！！》

エツィオの背にしがみつくシャイナが叫ぶ中バシュシュッとデルタ翼の下に付いていたミサイルが一斉に四発発射され、高速飛行してくるラプター四機が放つ１６発分のミッソーが数の暴力如くエツィオに向かって来る。

エツィオ「“らぷたぁ”？あの平べったい鉄の鳥がこんな上空に？？おぉぉぉぉぉぉぉ…かっこイイｗ（☆ｏ◎）ｗ」

ディク『す…スゲェ！！死後の俺がまた再び目覚めていた間に、人間達はこのような物を開発していたのか！！』

シャイナ「おっっっっっっっっっまっっっっっっっっっっっっ！！！！感動している場合かこの●＃＄％＆ａｍｐ；×がぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

１６発のミッソーが雨のように向かってくる中顎が外れるぐらいに叫んでいるシャイナを他所に、エツィオとディクはキラキラと眼を輝かせながら両手でガッツポーズを取って“スゲェ！感動したぁぁぁぁ！！”な気分でミサイルをギリギリに引き付けた後…

シャイナ「ギャー！！！！！」

エツィオ「おぉぉぉぉぉぉぉぉぉとｗｗｗ」

ディク『ミスミスミス

に動かして、向かってくるミッソー１６発分を高速横滑り（スライド）の感覚で残像を出し残しながら華麗に横方向へと避ける。

敵戦闘機Ａ《ミス！何てスピードだ！！尋常じゃない！！》

敵戦闘機Ｂ《グノーシス２よりアヴァロンへ！至急目標と隣にいる“目標と同じ白い翼が生えた謎のフードの男”の最新データ解析を願う！！現時点の古いデータでは…っ！！》

アヴァロン《今解析中だ！それまでに何とか時間を稼いでくれ！グノーシス隊！！》

無線が飛び交う中更に二人はスライドしながら身体を横に倒してそのまま宙返りし、チラッと腹ベソを一瞬魅せて笑いながら裏返し宙返りして両手でピースサインし何処かでカメラのシャッター音が鳴りながら、再度放ってくる１６発分のミサイルを次々と“衣類や髪など一つ掠りもしない”で避ける。

エツィオ「よっと♪」

ガシッとエツィオは避けながら放ってきたミサイル一本を右片手で鷲掴し、ミサイルの雨が止んだ今の上空を身体を再度一回転させ高姿勢に立て直した後、自分の周りを何度も高速に旋回するラプター一機に狙いを定める。そして…

エツィオ「そぉぃ！！」

バシュッと掴んだミサイルを旋回するラプター一機に向けて投げつけ、狂いなく一直線に自分を旋回するラプター一機に高速に飛んでいく。

敵戦闘機Ｂ《ミサイルを素手で掴みやがった！！何て奴だ！！》

敵戦闘機Ｃ《グノーシス１ミサイルが来てるぞ！！避けろ！！》

敵戦闘機Ａ《くそっ！報告書以上の翼を生やした化け物め…！！回避する！！》

ゴウッと旋回していたラプターが突如ピッチダウンし更に加速を付けて、Ａ／Ｂを全開しながら機体をやや上昇しダッチロールしながら投げつけられたミサイルを回避する。しかし…

エツィオ「おぅ！？Σ（・・）さっすがシャイナの故郷や最初の浄化の地に飛んでいた“あぽっち”と違ってクソ速いなぁ～。」

敵戦闘機Ａ《なっ！？》

ミサイルを回避した機体のパイロットが上部からＫＹ声が突如聞こえて顔を上に上げると、キャノピーの上にエツィオがにこやかや笑みで“上空を高速飛行する機体の上に張り付くように同じ速度で飛翔しながら”笑いを投げかけていた。

エツィオ「シャイナ、ちょっと入ってくれ。妖精界に入る前の“準備運動をするから”ｗｗｗ」

シャイナ「ハイハイ。んじゃ手っ取り早く済ませてね～ｗｗｗ（＾＾）ノシ」

表情は笑みに満ちていてもキャノピーの上に付いたエツィオの右手が“背中から出ていた黒い両翼が纏わり付くように異形化”していて、キシキシと巨大な爪と化したエツィオの右手先が硝子を擦るように数回軽く掻き傷が残るぐらいに引っかく。

そして背中にしがみついていたシャイナが素直に頷いて、張り付いた機体のパイロットに向けて軽くサヨナラーと手を振りながらエツィオの中にチュルン♪と入った直後…

エツィオ「ここは　『円卓』　死人に口なし。」

シャイナ『ちょｗｗｗ』

バギャラァァァァァ！！！！

エ●コンＺＥＲＯのピ●シーの台詞を吐きながら爪と化した右手をキャノピーごと押し潰すように叩き付けた瞬間機体が突き破られるように抉り取られ、乗っていたパイロットの頭部から首辺りまでグシャッと肉体の中身ごと爪の平に触れた程度で潰れるようにグロく削り取る。

宙にパイロットの残された残臓部分が噴き出す血と飛び出る臓器と共に落下しながら操縦者が居ない半壊した機体が突如爆発を起こし、悲鳴さえ上げられないまま一人目のパイロットを戦死させる。

エツィオ「ふっ…一機目撃墜。次っ！！」

ダッ！！

エツィオは叩き付けるよに撃墜した爪の右手の甲に付いたパイロットの血を軽く横に振り払った後、両足に力を入れて踵から踏ん張るように宙の空気を踏み締める。

ディク『流石エツィオｗｗｗ場所も地形もお構い無しかｗｗｗ』

上空にいるのに関わらず“地上と同じ足取りで立っている”のをディクは見て、半分丸めた右手を口元に沿えながら軽く苦笑する。

そしてエツィオは飛翔する三機のラプターに向けて“さぁドッグファイトしようＺＥ★”と軽く言って笑みを出しながら思いっきり、“ア●レちゃん走り”のように両腕を広げて楽しい形相で走り出した。

エツィオ「ウィィィ

第百五十九曲　そして魔神は●スコン架空機へと変じて滅するのだぁ♪

―現世　フランス　上空―

敵戦闘機Ｂ《グノーシス１墜落（クラッシュ）！！グノーシス１！！グノーシス１！！》

ドドォと目標を旋回していた機体が突如爆発を起こし、応答さえ応えられないまま炎を吹き上げて散っていく同機の最後を見ながら悲鳴に近い声を上げる。

敵戦闘機Ｃ《馬鹿な…グノーシ…いや“テリー”はフランス内の“紅い凶鳥”とも呼ばれる凄腕のパイロットが…！》

敵戦闘機Ｄ《それよりも目標の両腕を見ろ！“背中に生えていた黒い翼が纏わり付くように巨大化”している！！それにっ…》

爆発の下部で同機を破壊した目標の両腕が“爪形態”になっている且つ気流が荒れ狂う上空で“フツー”に地上のように立っている姿”を見て、動揺しながらも残った三機はトライアングルフォーメーションを取りながらエツィオ周囲を高速旋回する。

敵戦闘機Ｂ《くそっ…化け物めっ！グノーシス３！グノーシス４！散開しろ！！距離を取りながら目標を迎撃する！！》

敵戦闘機Ｃ＆Ｄ《了解（ラジャー）！！》

三角編隊飛行を保ちながら戦闘をきっていた副隊長らしき男の声が一瞬舌打ちをした後、編隊を解いて残り三機は自己判断で目標（エツィオ）からＡ／Ｂ全開にして距離を取りながら大きく弧を描いてミサイル攻撃の標準を合わせていく。そんな中…

エツィオ「ウィィィ

ットルで振り切るんだ！！》

敵戦闘機Ｂ《今やっている！で…でも…》

必死でＡ／Ｂを吹かしてエツィオを振り切ろうとしてもエツィオの方が“圧倒的に速く”、場所は空気が最も薄い１万フィート以上の上空でも“目標（エツィオ）相手に取っては無関係”如くあっという間にエツィオにキャノピーまで追いつかれる。そして…

敵戦闘機Ｂ《無理だ…振り切れ「勢　い　を　持　っ　て　死　ぬ　が　よ　い　（＾∀＾）ｍｇ」

ズドガァァァァァァッ！！！！

丸められたエツィオの右爪が一つの拳となってキャノピーごと吹き飛ばすように突き破り、エツィオは前に伸ばし丸めた血塗れの右手を振り払いながら…

エツィオ「これぞアサシン流真拳奥義“殺戮武舞飛翔鷹拳”ＤＡ。これを喰らった者は当然『相　手　は　死　ぬ。』あぁんΣ（´、`；）そ…それを言いたかったのにぃｗｗｗ」

チュドォォンとエツィオの背後で中にいたパイロットごと全身が一

瞬の内に風船のように破裂して、宙に操縦席だけ破壊され爆発した機体とパイロットだった肉片と共に落ちていった。

敵戦闘機C《あぁっ！！グノーシス2がやられた！！ヘリー！！ヘリィィィィィィ！！！！！》

敵戦闘機D《野郎…っ！！》

またしてもエツィオの爪の餌食になったラプター一機が撃墜されて、僚機がどんどん宙に乗る機体と共に散っていく。

敵戦闘機D《クソッタレがっ！！ならばコイツを喰ら『“もう一人の存在を忘れるんじゃねぇ”よ。ヴォケ那須が！！』！》

突然ドンッと音が聞こえてパイロットは音がした方向に顔を向けると、自分と反対側を飛んでいた僚機が火を吹いて爆炎で翼を砕け折りながら地上へと落下する機体を見る。

敵戦闘機D《ラルド！！一体何が起こっ『安心しろ、お前もまた一緒になれるから。』え…》

トスッとパイロットの頭部から尻穴まで白銀の細い針のような物体が刺さって、ジワジワと頭部や開かれた瞳孔・口から血が滲み出る

ように溢れて、操縦席の下にパイロットの血が小池並みに溜まった後…

ディク『“ただ速いだけの宙に漂う銀色の鳥紙”なんぞ、話にならないぜ。』

スパァァァァァァァァン！

そう言った瞬間パイロットの頭部を突き立てた白銀の細い針が後ろ一直線に動き、機体ごと白銀の細い針で“綺麗に真っ二つ”になる。

どうやら高速飛行するラプターの尾翼にフツーに乗ったディクがそのまま機体中間辺りまで無音移動し、機体の反対側に飛んでいた一機に向けて足首に着いていた短銃（リボルバー）を“魔弾喧嘩／（、Ｏ′θ／キィィィィィィィィック”するようにをぶっ放して一機をア●ンジャー如く何度も撃ち抜き倒す。

そして撃ち壊した後今乗るラプターのキャノピーに向けて無音移動しつつ台詞を吐いて、右袖からライトセイ…否光の英霊で構成された“ハイドブレード”を出してパイロットの頭部に向けてキャノピーごと突き破り、その後出したハイドブレードを後ろに向けて振り払うように機体を真っ二つに斬り捨てたようだった。

ディク『ケッ…紙鳥が。』

真っ二つに斬り捨てた機体が真下に落ちていくのを余所にして（＃、Д｀）ケッ！と唾を吐き捨てて、バサッと背中のトキの翼を数回羽ばたきながら右袖から出していたハイドブレードを中に仕舞って、両腕を組みながら宙に静止する。

エツィオ「ナァァァァイス、ディク♪一応敵機は今のところ全滅ＮＥ★」

するとディクの前方からエツィオが歩いてきて、ディクは歩いてくるエツィオだけ先ほどの刃向かう敵に対しての“鬼顔”から“外見４０代でも笑み溢れる２０代並の最高の天使顔”へとなってにやけるような表情へとなる。

シャイナ『（おまっｗｗｗさっきのリアルＬ●Ｄハ●ターの顔から“美化”されたハ●ター顔になりやがったｗｗｗなにこの変身ップリｗｗｗ）』

ディク『アハハッ…そうだな。んじゃ、さっさと妖精界に行こうぜエツ《くそっ！一足遅かったか！！すまないグノーシス隊！！》ちっ…応援部隊が今更きたのかよｗｗｗうぜぇ…』

エツィオ「おーおー、随分と多くやってきたなぁ～♪」

後方の水平線から応援部隊だろうか複数の戦闘機が向かってきて、ディクは更なる増援部隊を見て“空気嫁やこの野郎（、８′＃）”風に口を八の字にさせてダルい声を出しながら両眉を下げて後ろに振り向く。

ディク『ウザッてぇ…ならば俺のギャ●ック砲で「待て待てディクｗｗｗ俺がケリを着けてやるよ。」エツィオ？』

ポフポフ♪とエツィオがディクの右肩に向けてエツィオの爪と化した手の平を軽く叩き、ディクはキョトンとした表情を出しながらニシシと笑うエツィオに顔だけ向ける。

エツィオ「人間共が造り出した玩具相手にゃぁ、“同じ玩具同士”で渡り合う方が面白い。しかし…」

クスクスと笑いエツィオは歩いて両腰に手を当てながらディクを通り越し、地平線から迫ってくる応援部隊の戦闘機達を見て軽く顔を横に動かしポキポキと骨の音を鳴らした後…

エツィオ「同じ玩具と言えども“性能は神域（オレ）並み”だ。」

ディク『なっ！？』

シャイナ『ちょっ！？』

ドンッとエツィオ全身から青白い光が四方八方に伸ばすように伸びて、両腕を横に広げながら軽く戦闘機達に向けてニマァと不気味に微笑し少し宙に浮く。

そしてエツィオ自体が段々と巨大な物体へと変化していき、顔が鳥の嘴のような物体に変わって胴体から前に突き出す翼の何かに変わる。

エツィオ「フハハッ！ハハハッ！！」

メキメキと両足が縮んで何かに変化した時光が更に強くなり、眩しい位に輝いて数秒シルエット状態になって青白い光が止んだ直後…

シャイナ『ギャェッ！！？？！え…エツィオ…その…姿は！！！！』

先程戦った機体よりも巨大な真っ黒い機体（ボディ）に、前に突き出した黒い前進翼。そして抜群のステルス性にキャノピーが存在しない機首…

？エツィオ《おぅよ。過去に生きた人間達が俺に与えた“古神器”って奴だ♪スゲェだろ（＾皿＾）》

―云わば変身したエツィオの姿はエ●コンＺＥＲＯ・５・Ｘに出てくる“隠し反則架空機の機体●ァルケン”になっていた。―

第百六十曲　１６０回目で一部の人は嫁機体だＹＯ！そして死ねぇぇぇぇっ！！

―現世　フランス　上空―

シャイナ『な…なんという●ァルケンｗｗｗしかも色はエ●コン５のラー●グリーズカラーｗｗｗ』

敵応援部隊Ａ《何だアレは！？光が止んだ直後に“見たこともない巨大な黒い機体”が現れたぞ！？？！！》

アヴァロン《クソッ！目標の隣に飛んでいたフードを被った謎の男の分析が不可能だと！？！！！？…クッ、駄目だ！突然現れた未確認飛行物体の解析が間に合わない！！》

シャイナがエツィオが突如●ァルケンに変身して唖然としている中、ディクの戦闘分析すらままらないまま突然の巨大な黒い機体が現れて、到着した応援部隊やＡＷＡＣＳでも追い討ちを掛けるように次から次へと悲鳴を上げるような声を上げて動揺が走る。

ディク『うわぁぁぁぁ…カッコいい！！エツィオ！こんな姿も変身出来たのか！？』

●ァルケンエツィオ《あぁ、この古神器を造られた時、俺に対してのコイツの名前は確か…“アエリーノアーラ”だっけな。２０００年前に人間達を脅かした邪機神と対抗できた唯一の活きた聖機神としてね。》

ディクは●ァルケンになったエツィオに飛び付くように乗って、前に突き出す嘴のような機首を何度も両手でシャカシャカと擦りながら興味深い表情を出す。

エツィオ《ディク、俺の上に乗れ。気持ちいいことを味わえるＺＯ♪》

とエツィオは言って機首（頭）を下に下げた後、ディクは『楽しみだな。』と笑いながら言って“機首先端（エツィオの首辺り）へと大胆に股がる”。

●ァルケンエツィオ《さぁぁぁて♪…古神器の力をシャイナとディクに見せてやらないとなっ。（鬼畜的な意味でｗｗｗ）》

シャイナ『うわっ！？』

ディク『ｏｈっ☆』

エツィオはディクを股がった様子を見た後、ゴウッと後部のエンジンが唸って青白い炎を噴きながら両足（ブースター）に力を貯める。

そして機首を上に上げて再度水平にし、キリッと険しい顔でも出しているように睨み付けて、迫り来る敵応援部隊に向けて思いっきりブースターを吹かして勢い良くかっ飛ばす。

敵応援部隊Ａ《！巨大戦闘機が向かってくるぞ！迎え撃《先ずはテメェからだ。死ねっ（＾＾）ｐ》》

ズバンッ！！

残像さえ残さないまま高速飛行する巨大戦闘機が一つの黒い光の線となって、先端に浮かんでいた一機を通り越した瞬間爆発を起こし機体がバラバラに砕け散る。

●ァルケンエツィオ《神速！音速！！これぞ真・最強の通り魔ＤＡ！！》

シャイナ『ちょっっっぶっっっっｗｗｗぜ…前進翼が…“レーザーブレード”になってるｗｗｗてか…なんと言うＦＯＸ４（´Д｀；）』

ブゥンと台詞通りに●ァルケンの前進翼が透き通った青白い光の剣に変化させていて、更に●ァルケンエツィオは機体を回転（ロール）させ高速飛行しながら先頭の敵機をバラバラに斬り裂いたようだった。

敵応援部隊Ｂ《滅茶苦茶だ…何だこの正体不明の機体は！》

敵応援部隊Ｃ《ベラベラと喋るし例のビデオで見た目標の声のよう…いや、…ま…まさか…》

ざわ…ざわ…とカ●ジ並みのように各機体のパイロット達がエツィオが変じた巨大な黒い機体の高速格闘戦闘術を見て、ざわめきながら次第に編隊を乱していく。

敵応援部隊Ｄ《！皆うろたえるな！例え正体不明の機体でも“これだけの巨大な機体”だ！！ミサイルを集中放火すればあの黒い戦闘機を容易く撃ち落とせるハズだ！！》

敵応援部隊Ｅ《！そうか！！あの浮かぶ高速巨大戦闘機が止まった今なら…！！》

敵応援部隊Ｆ《全機散開！！あの黒い機体が止まった瞬間に各機ミサイルを放て！！特殊兵装もフルに使用しろ！！》

ゴォッ！！とバラバラになりかけていた編隊を一人のパイロットの叱咤で冷静を取り戻し、再度レバーを強く握り直しながら各機巨大戦闘機から距離を取るように四方八方に離れ、ある程度距離を取った後ミサイルをエツィオに向けて放つ。

●ァルケンエツィオ《へっ！遠距離攻撃（アウトレイジ）を取ったか。確かに一騎当千の“とある円卓の鬼神”相手にゃぁ、ミッション１６ソルジャールートに出てくる●ルト隊のようにその方法が良いだろう。しかし…》

様々な場所から敵機のミサイルが乱れ飛んで来る中、●ァルケンは何度も機体を回転させて《ヒィィィィィィハァァァァァァァァァ（゜∀゜）》と死亡フラグ先生台詞を吐きながらテンション高く簡単に回避する。

時には背後に氷魔銃（アンゲルス）の力を解放した全身に氷の結晶の形を取った壁を張って、バキンバキンと放たれて来るミサイル攻撃を完全に防ぎ、ミサイル自体を壁に触れた途端氷の塊に作り上げ地表に落下させる。

●ァルケンエツィオ《まぁ…これじゃ決着着かないのもあるし、さっさと妖精界に行って事を成したいからぁぁぁぁぁぁ♪》

ディク『おっ！』

シャイナ『んまぁ！綺麗ｗｗｗ』

スゥと氷のバリア（アンゲルス）を張る●ァルケンの黒い前進翼から青白い光を強く放ち、前進翼の下から人間体のエツィオの背中から出す黒い鷹の羽根がヒラヒラと複数舞い落ちるように出る。

そして前進翼から落ちた複数の鷹の羽根達は一枚一枚意思があるように勝手に動き始め、●ァルケン周辺をドーナツ状に保ちながら何度も綺麗に周回した後…

●ァルケンエツィオ《逝けぇぇぇぇぇぃ！！俺のファ●ンファンネル！！！！》

シャイナ『ぶっ！ｗｗｗ』

周回していた羽根達が突如爆発したかのようにズアッと一斉に飛んでいき、羽根の周りに覆っていた青白い光が飛んでいく奇跡をくっきりと残るように描きながら四方八方にいる敵機体に向けて飛んで…

敵応援部隊Ｇ《な…何だこの…》

飛んできたエツィオの鷹の羽根が敵機体に狂い無く背中辺りに当たった瞬間、ズバンッと羽根が機体を突き破る音と共に内部のエンジ

ン部品を破壊して断末魔さえ上げられないまま宙で爆発する。

敵応援部隊Ｈ《脱出ハンドルが動かない！！…しゅ…主翼が……落ちるっ…！！》

敵応援部隊Ｉ《嫌だっ！死にたくない！！死にたくないいいいいいいいいいいいい…》

エツィオが放った１００％追尾反則ミッソーを喰らい悲鳴すら上げられないまま機体と共に爆死していく中、一部の機体は主翼に当たって安定性が無くなった機体は荒れ狂う気流に耐えきれずロールしながら地表へと垂直高速落下する。

中には次々と仲間が爆死していくのを見て絶叫を上げながら逃げ出そうとした機体もいたが、それを容赦無く逃がさないように飛来するエツィオの複数の羽根達が一斉にキャノピーごと吹き飛ばすように頭部から刺し貫きバラバラに頭部ごと破壊する。

敵応援部隊Ｗ《駄目だ！全快にしても逃げ…》

敵応援部隊Ｘ《ぎゃあああああああああ！！！！》

敵応援部隊Ｙ《すまんトーシャ…もう会え……》

敵応援部隊Ｚ《畜生！まだやりたいことが俺にあったのに！！この人殺…》

ズドドドドドドドドドドドドドドド

数々の無線がエツィオに向けて飛び交う中四方八方にいた敵機が全てエツィオが放った∞発のファ●ンファンネル羽根（ミッソー）で機体と共に“全機爆死”し、宙で綺麗な花火が上がる中●ァルケンは《ＨＡ…汚ぇ花火だＺＥ★》と指でも指しているかのようにせせら笑いした。

ディク『ＳＵＧＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥ！！！！あんだけいた“複数の紙鳥達を全部蹴散らした”！！ヒャー！！』

パシュン♪と全敵機を破壊し好き勝手に空を飛び回っていた羽根達が、満足したかのように硝子のような音を立てながら消えて元の上空の静けさへと戻りながら、機首の上に股がっていたディクは歓喜の声を上げてガッツポーズを取る。

シャイナ『うんｗｗｗ本当に凄…あっ！エツィオ、まだ敵は残っているよ！！上を見て！！』

●ァルケンエツィオ《んぁ？…アレもそうなのか、シャイナ？》

グンッとエツィオは惚けた顔でも上げているかのように機首を上に上げて、斜め上に飛ぶ円盤が付いた鈍足飛行機を固定位置飛行（ホヴァリングビョン）しながらジックリと見る。

シャイナ『あれはＡＷＡＣＳと言って様々な情報を機体に送ってサポートしている空飛ぶ指令搭のようなモンよ！あれも倒さないとっ！！』

●ァルケンエツィオ《よしっ！ならば…》

ガクンッと機首が少し上がって嘴の中が開いた状態になり、跨いでいたディクが『うわっち！』と背中を後ろに反るように曲げて少しバランスを崩したが、直ぐ様反れた背中を前へと戻して体勢を立て直す。そして…

●ァルケンエツィオ《これでお仕舞い！“俺得★Ｔ．Ｌ．Ｓ”！！》

バシュゥゥゥゥッ！！

開かれた嘴から“エツィオの魔力そのものの青白い超最強レーザー”が発射されて、音速を超えた速度であっという間に遥か上空にいたＡＷＡＣＳを刺し貫く。

アヴァロン《駄目だ！コロナドアンジェリに戦闘データを送る時間が…》

チュドオオオオオオオオオオオン！！！！

●ァルケンから放ったレーザーでマグマのように溶かされて、一瞬の内に台詞さえ完全に吐ききれないまま機体ごと宙で爆死し、灰色の茸雲が上空を作り上げていった。

第百六十一曲　俺は此処から一切魔力使わねぇからなぁ！！あとは任せたＺＥＴＡ

―現世　フランス　上空―

シャイナ「スゲーｗｗｗこんな上空にいても“地上と同じ気圧と酸素”だから“風とか受け付けずにフツーに立ってられる”ｗｗｗこれ何て“仕様”？ｗｗｗ」

上空に飛んで全世界指名手配人物追跡してきた人間が造られし現最強戦闘機と８●９２並みの数で襲い掛かった戦闘機達を完全に滅したチート一行は、ゴォォと吹き出るエンジン音でなく風を悠々と切る音を立てながら●ァルケンの機首に乗せたディクといつの間にか身体の中から出したシャイナを背中辺りに乗せて北へと飛ぶ。

●ァルケンエツィオ《そりゃぁ、俺の“結界の中にいる”から平然といられるんだぜ？シャイナ（＾ー＾）ｂそれに…》

《遥か高き上空の飛び心地はどうだ？》とエツィオが言ってシャイナは両腕を斜め後ろに下げて両手の平を背中に着きながら、右片足を左足上に引っ掛け両足を組み気流が激しい上空の状態を“平然に座る”。

顔を横に向き吹き付く少量の風を受け髪を揺らしながら一万以上の上空の地の果てまで敷かれる海雲の景色を見つつ、感激するような表情を出し「凄い綺麗だよ！」とエツィオに言い返す。

シャイナ「このような景色は修学旅行ぐらいかな…一回初めて飛行機に乗って始めての上空景色が本当に…」

ディク『“世界”ってこんなに広いもんなんだな。それを昔から毎日見ているエツィオがうらやましいなぁ～♪』

機首に股がるディクも両腕を斜め前に伸ばし背中を少し折って前屈みになりながら、見た目で高速に動く下層・中層・高層の雲の波のような動きを見てワクワクしながら視点を前へ向ける。

●ァルケンエツィオ《まぁな、俺は元々生まれた時から背中と腰に翼が生えていたもんだし…俺が完全に飛べるようになるまでは何度も地面にキスしていたよｗｗｗっと…言いつつっ！》

突如キキキッ！と急ブレーキでも掛けたように宙で急停止して、慣性の法則により前へと倒れるように仰け反って、「わたたっ！？」と普通の人間であるシャイナは突如急ブレーキを掛けたことで身体が飛び出すように宙へと浮いて、そのまま“ス●ブラ横Ｂ版ル●ーゾロケットでも繰り出したような体勢を取りながら前へ吹き飛ぶ”。

ディク『おっと…大丈夫かぃ？エツィオのお嬢さん？？』

シャイナ「ぶふっｗｗｗ（´Σ､`；）スマン、マジ助かったｗｗｗ」

“英霊誕生時の特殊の力を授かっていた”ディクだけは“慣性の法則を受けつけず平然としていて”ロケット頭突きしてくるシャイナを見て後ろへと振り向きながら立ち、ガシッ！ときちんと両手でシャイナを胸の中で抱き止める。

シャイナ「もう！エツィオ！！止まるんだったらきちんと宣告してから止まってよＮＥ､（､Д､＃）ノ！！」

●ァルケンエツィオ《悪ぃ悪ぃｗｗでも仲間（ディク）がいたから全然問題ナッシングだっただろ？まぁそんなことより前を見てみろ。》

シャイナ「んぅもぉぉぉぉ…あのねぇ～ｗｗｗ…ん？前？…！」

シャイナは外見４０代のおっさんディクに“お姫様抱っこ”されながらエツィオののんびりとした発言を聞いて呆れた表情を出し軽く呟いた後、エツィオに言われるままに顔を上に上げて前方の異様な景色を目の辺りにする。

グニュグニュ…フフゥゥン…ウゥゥン…アァァン…

長く敷かれた色彩のような濃い虹色のような靄が地平線まで波打つように動き、所々靄の外部から人間の腕のような形を取った靄が複数浮かんで特異界と入り口の境目（第二十五曲参照）と違う“色気あるエロォォォス丸出し”の“しなやかさを持ったテラ女の子の動き”をしていた。

ディク『あれが“妖精界入り口”の境目ってやつなのか、エツィオ？？余計にテラキメェ動きをしているんだが…ｗｗｗ』

ディクも顔をまっすぐにさせ真剣な表情を出し妖精界の境目に蠢くモノを見て、白い視線でも送っているかのような表面真剣・裏面は“うっわっっっっ…き…キメェ…”風の表情を出しながら足場にしている機体（エツィオ）に言う。

●ァルケンエツィオ《そう、あれが妖精界の入り口だ。俺とシャイナが見てきたコンモヴェンテ（誘うモノ）と違って、あれはアッフォンダトーレ（引寄せるモノ）。外部からの強きモノの気をあの世界へと堕とそうとする“特異界と変わらない魔の手”のようなモンだ。》

とエツィオがそう言っている内に境目のキモ虹色の靄がエツィオの“莫大なる魔力”を感じたか一つ一つ人間の腕へと化して、境目から浮き上がる複数の腕達が機体周囲を逃がさないように取り囲む。

●ファルケンエツィオ《シャイナ、ディク。今から俺の言う事を3秒で理解してくれ。いいか？》

ディク『何だ？』

シャイナを抱かかえているディクは今でも掴み掛かりそうな周囲を取り囲む複数の腕を見て右足を数歩後ろに下げ、彼なりの臨勢体勢を取りながら顔を下に向けて足場にしているエツィオに言う。

●ファルケンエツィオ《俺が妖精界に入った瞬間“魔力を一切持たないスタンダードな獣”になる。その際ディクは妖精界に潜入した後特定の箇所まで周囲の安全を確認したら“俺は普段どおりの元の姿に戻る”から、こっから人間のシャイナと“魔力の無い俺”をきちんと護るんだＺＯ★》

ディク『ちょっ…（゜Д゜；）』

エツィオがＧＯＯＤ☆ＬＵＣＫ！とでも言ったかのように両足（ブースター）に力を入れて、バーナーから青白い炎を吹きながら掴み掛かってくる虹色の腕を振り切るように境目入り口へと突撃していった。

第百六十二曲　フードのおっさんとピチピチ２２女と子犬の奇妙な大☆冒★険

―妖精界　入り口上空　高度２５０００辺り―

ディク『うわぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！』

シャイナ「しゃばべぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

ゴォォォォォォォォォォッ！！！！

●ァルケンに変じていたエツィオが妖精界入り口に入った直後、突然機体がパンッと割れたような音を立てて青白い光を綺麗に細かく粉雪のように“完全に砕け散る”。

エツィオの最強の魔力で被っていた周囲の壁も主が居なくなったことで消えて、足場にしていた二人は本来の上空の激しい気流と風圧に吹き飛ばされて悲鳴を上げながら傍にいたディクから一時的にチリジリになる。

ディク『くっ！』

バサリッと背中に仕舞っていたトキの翼を再び展開し体勢を立て直した後、大の字を描きながら「アーーーーレーーーーーーー＼（＾ｏ＾）／」と綺麗に回転しつつ地上へと高速に落ちていくオワタ声のシャイナに向けて落ちるように飛行する。

ディク『（…間に合え！）Ｃｕｌｔｉｖｅｚ　ｕｎｅ　ｍａｉｎ　ｖｅｒｓ　ｍｏｉ！（手を伸ばせ！）シャイナ！！』

シャイナ「ちょっｗｗｗ“外見４０代のおっさん浮遊霊”ごときに“呼び捨て”されたｗｗｗて…こんなこと言う暇じゃＮＥＥＥＥＥＥＥＥＥ！！」

シャイナは高速落下しながら突っ込みを入れながらも自分に向けて飛翔してくるディクが腕を伸ばすのを見て、シャイナは荒れ狂う風圧でぎこちない動きを取りながら必死に腕を上に伸ばすように上げる。そして…

シャイナ「うわわわっ！！？？！」

ディク『（よしっ、間に合った！次は…！！）んっ！！』

プラプラと漂うシャイナの伸ばした右手をガシッと右手で確りと掴

んだ後、ディクは片腕だけでシャイナを胸元に引き寄せて残る片腕を横に伸ばし手先から銀色の光を放ち、自身に白銀色の魔力の円形の壁を展開する。

ディク『La gauche et les flancs du droit d'une fille de l'argent!』

“場所の法則上無を一切受け付けない”守護防壁（フィールド）（ランダム）の壁を張ったことにより乱れていた風圧と気流が感じなくなり、機体（エツィオ）に乗っていた時と同じ落ち着いた力場になる。

シャイナを掴まえたディクは額から流していた汗を左手で拭うように軽く動かし、シャイナは命拾いされたことで激しかった心拍数を右手で胸を摩って気を落ち着くようにし、お互いふぅと数秒両眼を閉じて一息を付ける。

ディク『あぶね…間に合っｔ「キャン♪」うぐっ！？』

ベチョッ♪と突如ディクの視界が暗くなって肌に毛糸のようなモコモコ感を受けて、ディクは『今度は何だよｗｗｗ』と呟きながら顔面に付いたフワフワの物体を首の根っこ辺りに手を持って引き離し、摘んだその物体を見る。

？「キャンキャン♪」

シャイナ「ちょっｗｗｗ」

ディク『S'il vous plaît dites que c'est un mensonge（Д；）…マジかよｗｗｗ』

ディクが引き離した物体…未の毛のようにモコモコとした黒い毛に、垂れ下がった茶色い両耳と茶色い逆三角形の鼻。

両手両足先に遠くからグローブのように見える白い毛、そして首を摘まれているディクを見る●ザーシリーズの主人公ようなつぶらな黒い瞳…

ディク『え…エツ…ィオ？』

犬ツィオ「キャンッ！」

摘まれている“子犬”は元気よく頷くように吠えて摘まれていたディクの手を身をブルルと振るわせて振りほどき、スタンッと軽々とした動きでムーンサルト宙返りしながら呆然としているディクの左肩の上に乗るように着地する。

犬ツィオ「キューン♪」

シャイナ「おまっｗｗｗこれ何て“黒いス●ーピー”もしくは“プードル”ｗｗｗ本当に“犬”になっていやがるｗｗｗしかも“子犬”だぞ？」

人間体の時の見掛け２７歳代エツィオ（※憶以上の年齢）と魔神体の時の、テラカッコいいスタイリッシュ最強四翼悪魔が、“魔力を持たない可愛い子犬”の姿になるという印象的に似合わないことにシャイナは少し突っ込みながら口から白い変なモノを吐き出す。

ディク『俺は“カッコイイ大型犬”になると思って勝手に妄想ｓ「ガウッ！」痛ァァァっ！？』

苦笑いするディクに突如ガプーと顔面から直接噛み付いて、ディクは噛まれた痛みで片腕を上下に動かしあたふたしながらでも、抱えているシャイナを決して放さないように力を無意識に入れる。

シャイナ「コラ！エツィオ！！変な事をしないでくれる！？また落ちちゃったらどうすんの！？」

犬ツィオ「キュ！バウバウ～。」

片腕だけでディクに抱えられているシャイナは半ば冗談めいた怒りの表情を出しながら顔面からディクを噛み付いている子犬を右手で引き離し、ベリッとデフォで剥がす音を立てて首の根っこを持って正面を向けて何度も左人差し指で鼻先を突っつく。

シャイナ「もう！またこのような高度の場所でｈ「キュゥ！」わわわっ！？ちょ…くすぐっ…たい！！」

シャイナなりにしつけをしていた最中に突如捕まえている子犬に顔面から舐められて無意識に摘んでいた手を放してしまい、再度放された子犬（エツィオ）はシャイナの胸辺りに両手両足を広げて飛びついてへばり付く。

犬ツィオ「クキュキュ、キュッ♪キュゥゥゥゥゥゥン。」

キラ★キラ＋＋

シャイナ「く…この“円らな超反則的キラ☆キラ視線”でわ…私を…み…見るなＹＯｗｗｗつーか…こ　っ　ち　み　ん　あ　。」

シャイナ下視点で胸辺りにへばり付く可愛い表面を出す子犬のキラキラな眼が“色々とア●フル以上の破壊力抜群な視線攻撃”が、シ

ャイナの心の臓をドッスゥゥゥと背中を突き抜ける位まで射抜く。

シャイナは全身をカタカタと震わせて超☆タジタジになりながら子犬の“イヤン★プリチィィィの視線”を、必死に反らすようにぎこちない動きで顔を横に向ける。

ディク『痛ててっwてかエツィオ…“本気で噛み付きやがった”wwwくぅ～それはそうとして本当に“魔力を感じない”な…まぁこのカラクリは後々落ち着いた後聞くとして…』

バッ！！

『地上に降りるぞ。』と顔面から噛まれて多少歯痕が浮かんでいたディクは数秒顔面を覆うように左手の平を当てて顔面から離し、背中の翼をバサッと数回羽ばたかせゆったりとした速度で抱かかえているシャイナと何時の間か“胸の谷間へと入るように移動していた子犬（エツィオ）”を地上まで運送していった。

第百六十三曲　初めての一歩が桃源郷のような配色が合わない草花でしたｗｗｗ

バサッ…バサッ…

キモ美しい程の虹色のペイントでもぶちまけたようなキモ美しい上空一点に、白銀の翼を羽ばたかせ実体化した元人間の英霊が全身を白銀の光で被うように放ち、両腕でシャイナ&谷間にいる黒い子犬（エッィオ）を抱き抱えながら地上へと目指す。

ディク『妖精界の上空は相変わらず“ＫＩ・ＭＯ美しい”な。』

シャイナ「同感ね。こんなシュールな上空背景に下は…」

犬ツィオ「キャンキャン！」

地上へと長い時間を掛けてようやくある程度“淡い桃色の染め上げられた”地上の姿が見え、抱き抱えられているシャイナはオエッとわざとらしく両手で口を被うように添えて吐く。

一方ディクは地表の姿を見つつ一旦翼を平行にさせて低空状態で宙

に停止し、誰も会うことも見られることがない着陸地点を探して顔を右往左往に動かす。

ディク『（彼処なら良いかな?）行こう。』

バッ！

ディクの想像だが地上の視点からにして見晴らしの悪く滅多に入ることがない“ウルトラショッキング☆ピンク色のキモ森林”を見て、その森の隅辺りに飛んでいなければ誰もが気付かないだろう“森林の無い円形の空洞”を発見し、ディクは木が生えていない唯一の着地ポイントへと翼を羽ばたかせそこへ目指す。

そして着地ポイントへと飛行した後翼をゆっくりと動かして地上へと降下し、確りと地に両足を着けて抱き抱えていたシャイナ&子犬(エッィオ)を丁重に下ろし漸くシャイナとディクにとって初めて入る妖精界の地を一歩踏み締めた。

―妖精界　忘レラレタ妖森　深部―

シャイナ「ここが妖精界の地上ねぇ～…それにしても上空関わらず“森自体の配色が全然合わねぇ”ｗｗｗ」

犬ツィオ「キャイ～ン。」

降り立った地面に生える草も“桃色”、上空から見た森の一つ一つの木全体が“桃色”になっていて、シャイナはげっそりとし谷間にいる子犬もダルそうな表情を出しながら降り立った周囲の状況を見回す。

ディク『ただ森全体が“ピンク”というわけじゃないな。この地から溢れる莫大な霊地（マナ）といい、所々張る妖の小妖気が“悪イナル魔ノモノ”を退く念入りのリンプンも舞っていやがる。こりゃ…光の魔神エツィオでも苦しそうだな。』

唯一魔力を持ち戦闘が出来る英霊（ディク）だけには人間のシャイナと子犬（エツィオ）には見えないこの世界のクソ妖しい気流、ディク視点で今いる場所でもキモ虹色の気流が渦巻くように漂っていて、とぐろを巻くように悠々と宙を覆い尽くすぐらいに自由に跳ね回る。

自由に飛び回るキモ虹色の気流が地上の桃色の自然や水・自然が創りし固定物（オブジェクト）の中に浸透するように入って、生気を維持していく為に自らの糧を差し出していく。

ディク『エツィオから聞いたけど妖精界は“天神族の魔力の断片から生まれた小さな種族”。僅かな魔力の中から生まれてでもなお魔力構造・生成・知識は“天神族と同様”だと。』

シャイナ「云わば“アルタイル達天神の子供達（ヒヨコども）”てことか。」

シャイナはトイレ座りして地面にからシャイナの座った身長まで伸びた桃色の蔦の横に生えている桃色のミ●プルーンらしき物体を右手で摩りディクに言って、スクッと背後にいるディクに向けて振り返りながら立ち上がる。

ディクは『まぁそうだな。』と言って出していた翼をバサッと音を立てながら背中の中に折り畳むように仕舞い、飛行した際に乱れた頭部のフードを再度右手で被り直す。

シャイナ「でっ？地上に着いたのは良いとして、この“ウルトラシヨッッッッキンな森”をどう抜けるつもりなの？」

ディク『そうだな。こういう時はとっ…』

シュンッ！

ディクは右手に魔力を集中して前に翳した時、白銀色の小さな球体が白銀の粉の光を溢しながら前方に飛んでいって、そして球体は森の中へと入り指針のような動きをして奥へと消えていく。

ディク『俺が放った魔力は“活きた魔力が稼働し密集している箇所”を示すモノ。云わば“人口がいる場所”の指針だ。俺の放つ光を見て先へ進もう。』

シャイナ「途中で付きまとわれる“ストーカー妖精”に会わなければいいけどＮＥｗｗｗ」

犬ツィオ「キューン。」

と森深まで消えていった光は数秒辿った白銀色の軌跡を宙に残し、シャイナはわざとらしくお手上げするように両腕を広げて、身を少し震わせた後歩き出すディクの後ろに付いて森の中へと入っていった。

…

……

……

―アレレェ？可笑しいなぁ～…外部から“神を超えた魔力”を感じたんだけド…―

―人間じゃン！！しかも魔力を持たない人間と動物も一緒にいるヨォ？？―

妖精界の大気の宙に漂う虹色の気流の中に隠れていた“迷彩の輪郭だけの妖精”がいて、森の中に入っていくディクとシャイナを下から目線で見届ける。

―がっかりだなァ…ただの人間がこの世界に入って来るなんテ…―

―追い出そうヨ？魔力を持たない人間なんてこの先にいる“リオリーネ”様に会わせてはならなイ。―

輪郭だけで保った姿無き妖精達は空に浮かぶ太陽を背に飛翔し、輪郭の後方辺りから桃色のリンプンのような粉を大気に散らしていく。

―追い出そうカ…こんな魔力の無い連中何て、この世界に入れるべきじゃなイ。―

―ジャあ…何時ものようにさっさと払ってしまおウ。迷惑分の料金もキチンと払って貰わないと…ネッ？―

クスクスと輪郭で保つ迷彩の妖精達は軽く笑い声を出しながら、自らの持ち場に着くように何処かへと消えていった。

第百六十四曲　ボイン触りはあくまでも囮作戦でｒｙ（いい加減過ぎる言い訳

―妖精界　忘レラレタ森　道中―

ディク『Ｖｅｕｉｌｌｅｚ　ｍｏｎｔｒｅｒ　ｌｅ　ｃｈｅｍｉｎ　ｑｕｅ　ｖｏｕｓ　ｄｅｖｒｉｅｚ　ａｌｌｅｒ（道を示せ。）』

シュンッ…

桃色一色のキモ似合わねぇ異端の森の中でディクはフランス語を吐きながら再度右手の平から白銀の球体を放ち、飛ぶ球体が残す一筋の光の指針を頼りに二人は妖族の集落へと目指す。

シャイナは黙々とディクが放つ魔力のを頼りに着いていきシャイナの谷間にいる子犬も軽く欠伸して目が段々と閉じ、身体を丸くして「クルル」と声を震わせるような声を立てて寝るような格好になる。

シャイナ「んまぁ…エツィオっ。俺らが懸命に妖精（ヒヨコ）共の集落に向かっているのにぃｗｗｗ」

ディク『いいじゃないか。幾ら“疲れという情報を持っていない魔(エッ)神(イオ)”でも、気分によっちゃぁ寝たい時は寝たいだろ?俺達人間と同じさ。』

シャイナ「まぁ、そうだけどさ…つーか寝る位置が私の“オッパイの間”かよｗｗｗ」

シャイナは視点を谷間に向けて顔を下ろし、その間に丸くなるように寝ている子犬(エッィオ)の姿を見て思わず苦笑いする。

ディク『ＨＡ・ＨＡ・ＨＡ★本当にシャイナの“オッパイの間”で寝てやがるな。女のモニュモニュしたあの素敵肌に挟まれて本当に幸せそうだなぁ～♪』

シャイナ「てか…私、胸はそんなに“大きくない”ＺＥ。前可愛いブラを購入しようとして試着したら、でかすぎて入らず結局●◆■サイズを買う羽目にｗｗくそぅ…（；８；）」

ディク『オィオィｗｗｗ全然“伏せ字になってねぇぞ”シャイナｗｗｗお前の胸の大きさが“閲覧者の皆”にもう分かっちまうじゃねぇ～かｗｗｗ』

ディクは一度進むのを止めて後ろにいる独り言めいているシャイナに向けて歩みだし、視点をシャイナと同じよう下にして“谷間の中

にグッスリと眠る子犬（エッィオ）”の姿を見て思わずわざとらしい吹き出し笑いをする。

―因みにシャイナは今“ブラッ☆ジャーを付けていない”ため角度によっては“オッパイが透けて見える”又は…ｗｗｗ―

ディク『見えるぞぉぉぉぉ見えるぞぉぉぉぉぉぉぉぉ。お前の中にあるオッパイ&乳首が“此処からだと全体的に透けて見える”…ＺＥ（＊´∀`＊）』

シャイナ「な…何……！？」

ブニュッ♪

突如シャイナの胸に列車内の下履き覗き魔（痴漢野郎）の表情を出す（※好奇心丸出しの表情）ディクの右手が当てられていて、更にワキワキしながらシャイナの胸を揉むように動かす。

シャイナ「おまっ！？ちょっ…その手つきはや…おぅ！！？？！」

ディク『おー！！柔らけぇ柔らけぇ♪ちっさな身体なのにこの柔らかさはまさに…“プリン”ＤＡ！！』

ディクの視点からだと丁度自らの真上辺りから太陽の光が漏れていて、カーテンのように複数映る中シャイナの羽織るアイモンのコートの内部である白いタンクトップが“内部が分かるように透けて見えていた”為…

シャイナ「オゴッ!?…な…なんという…あ…R一…15!!」

ディク『いや…“胸だけプリン”じゃない！この艶々な素肌と蕩けるような感触!!これは“活きた食べ物”だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!ヒィィィィィィハァァァァァァ!!!!』

オッパイを触っていたディクは胸を触っていた右手を横に滑るように動かして、左腕をシャイナの腰裏に回し舐め尽くすような勢いでシャイナの全身を“嫌らしい手つきの残像が残るぐらい”に高速に触れていく。

ディク『ウホッ（＊´ρ、＊）…こりゃ良い感触だぁ～♪エツィオが“谷間に入る理由が分かった”気がするぜ…。だとしても君の胸はこんなに“ちい「滅ッ!!!!!!」グホァァァァァァァッ!!??!』

ズドガァァァン!!!!!

顔面を何度も胸元に擦り付けていた変態顔（※本人にとっては好奇心な行動）ディクの顔面に目掛けてシャイナの右裏拳がめり込み、シャイナの両眼が充血したかのように赤く超光点（ハイライト）させながらディクを大きくアッパーカットのモーションで吹き飛ばす。

シャイナ「テメェも子犬（エッィオ）と同…いやエッィオよりも酷ェ“ク　ソ　エ　ロ　オ　ヤ　ジ”かＹＯ…厄介なオジサンが入ったもんだな！？」

シャイナの怒りの鉄拳で大きく吹き飛ばされたディクは背中を逆くの字に折って、地面から生えた樹の枝を数ヶ所背後から折りながら地面に多い繁る“桃色の草原”の上に大の字になるように叩きつけられる。

ディク『あー痛ェ。吹き飛ばすに値する事などしていなかったのに…。ただ俺は好奇「さっきやった行為そのものが“俺に対しての（アッー！！！！）な手前の★●◆■％＆行為”だったんだよ！！この℃＄＊野郎！！！！」

ンゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ…

シャイナの背後から赤紫色の激しいオーラが立ち上る中、所々台詞が“放送禁止用語”をベラベラと出ていて、一応伏せながらシャイナは口から白い吐息をゴ●ラのブレスのように強く吐き捨てて、丸めた右拳を左手の平に軽くパシンと背中から叩き倒れ付したディク

の元へと歩んでいく。

犬ツィオ「キュルルルル…」

―ちなみにシャイナの谷間の中にいる子犬（エツィオ）は今の馬鹿デカイ音を立てた世紀の喧嘩手前の状況でも“今度は空気読むかのように眠っていて”、ぐっすりと丸めながら寝息を立てていた。―

ディク『C'ｅｓｔ　ｕｎｅ　ｆｅｍｍｅ　ａｇｒｅｓｓｉｖｅ（笑）俺は決して君に“性的行為をした覚えは一切ないよ”。それは全て…』

一方シャイナの怒りの鉄拳を受けたディクは８００年前以上エツィオに鍛えられたことで武があったか“顔面から殴られたのに痣は一切付いてなく”、“文字通り無傷のまま”丸めた両手を地に着けて両腕に力を入れ苦笑いしながら背中からムクッと立ち上がる。

その時…

ディク『Ｖｏｔｒｅ　ｅｎ　ａｒｒｉ?ｒｅ…Ｅｓｔ－ｃｅ　ｑｕｅ　ｖｏｕｓ　?ｔｅｓ　ｄａｎｇｅｒｅｕｘ?（背後が隙だらけだぜ?）』

シャイナ「え゛？」

ズキュゥン！

口元を吊り上げながらディクは足を斜め前に伸ばした時足首に付けられていた短銃に思念を送って発砲し、短銃から吹いた白銀色の弾丸はシャイナの横髪を掠る手前まで横切って背後にあった樹に高速回転する弾丸がめり込んだ直後…

？―！キャァ！？―

シャイナ「な…何事！？？！！Σ（ ゜Д ゜；）」

ドサッとシャイナの背後から何かが落ちる音を聞いて身を翻しながら振り返り、ディクの魔弾で撃たれた背後の背中から蝿のような翼が生えた小さき物体の姿を見る。

？―痛い痛イ！に…人間の癖に何で…ッ！！―

ディク『妖精界の妖族は“強キ気ノ者”に集まるだけでなく“人間の惑ワス魅ノ気”を感じると“それを糧にしている妖族（コイツら）が集まって来る”と昔鍛えていた時にエツィオから聞いた。“さっき”はそれを利用してコイツらをおびき寄せてみたんだよ。まさかこんなに…』

ディクは立ち上がりながら肩についた数本の桃色の草を右手・両手で払い落とし立ち上がった後踵に少し力を入れた途端、カシャンと両足に付けていた短銃が外れる音を立ててつま先で二つの短銃を宙に蹴り上げる。

ディク『簡単に釣れるとはなｗｗｗ』

宙で蹴り上げられた短銃が回転しながらディクは上がってくる短銃を左右交互に受け取って、シャイナ前方にいる撃ち落した物体に向けて右手に持つ短銃を前に突きつけた。

第百六十五曲　さぁ皆で●ｉｉリモコン&ヌンチャクを持ちましょうｗｗｗ

―妖精界　忘レラレタ森　道中―

？―アァッ！！痛い！痛い！！人間の弾丸などに何故ッ！！？？！！―

ディク『俺の放つ魔弾は“如何なる魔力の層でも法則（ルール）を無視し肉体だけに外圧を与える力”がある。昔古き友に教えられたからこそ今がある。』

ディクは右手に持つ短銃を前に突きつけながらシャイナの側まで歩いて、前方にいる下肢をディクに撃たれ一点の風穴から紫色の血を流し地に付している物体に見下すような形で言う。

前話同様背中から蝉の様な翼が二つ生えて、体格は人間と同じ骨格で身体は●カちゃん人形サイズ、頭部の髪は真っ直ぐに伸ばした赤紫色のショートヘアに、頭部の上から長い触覚が生えた姿…

？―こ…この…私に傷を与えるなんテ！何て野蛮な人間なんダ！！―

倒れ付した妖精一匹はディクに対して怒りの表情を出しながら、ブブブッと背中の翼を高速に羽ばたかせ宙に浮き地面から生えていた熟した樹の中腹辺りまで飛翔する。

―妖ノ小精　ビリキナータ―

シャイナ「おまっｗｗｗ何だその“エツィオ並みの反則設定”ｗｗｗあんたも“奇想天外なチート技”が使えるのかｗｗｗ」

ディク『あぁ。“必要な時以外は本来の破壊的な魔力を極力抑えている”からね。フルで殺ると“触れた瞬間に身体もろとも消し飛ばす（第百三十曲参照）”しちまうし、何にせよ…』

ビリキナータA―ギャッ！？―

ダン！ダンッ！！

ディクの両手に持つ短銃の火が吹いて放たれた弾丸が正確に妖精の両翼に風穴を空けて、撃たれた妖精はまたしても地に落ち顔面から再度地面にキスをする。

ディク『丁度良い案内人が現れたもんだ。コイツを生け捕りにした後、全自動ナビゲェイツさせて魔力の無駄な消費を抑えるとしよう

か。』

カシャンと両手の中に持つ短銃を手の平の中で遊ぶように回転させた後、両短銃を上に投げて身体を回転させると同時に両腰に付いていた本来銃を収めるホルスターの中に短銃を入れる。

シャイナ「へェ…足だけじゃないんだ。思いっきりべ●ネッタスタイルかと思ってたしｗｗてかあんたが森に入る前に放っていたあの指針魔力は一体…」

ディク『フフフッ！あれは残念ながら指針魔力じゃないよ。“活きた魔力を常時放ち活動している存在”を示す魔力だ。いわば俺は“森を抜ける案内人”を探していたワケでｗｗｗ』

シャイナ「おっっっまっっっっ！！！！んじゃあの台詞（第百六十三曲参照）は嘘台詞なのかよΣ（Д）オイオイオイオイ随分と“勝手な都合設定”の展開なんですがｗｗｗ」

とディクはクスッ♪と口を右手で覆うように隠し『それに激しく突っ込んだら負けだＺＥ（＾＾）』と笑い声を出しながら言い、ディクは両翼を撃ち抜き地に倒れ伏している小さな妖精の首を右手で掴んで猫掴みのように鼻先まで持ち上げる。

ディク『さて、案内してもらおうか小蝿君。俺達は今始めてこの地

に足を踏み入れたもんで、ぐっすりと安眠できる宿を探しているんだ。』

ビリキナータA―ケェェェェェェェ！！！！勝手に入ってきて早々私を撃った暴力的な“オッサン人間”なんかに易々と案内するカァァァァ！！！！―

笑みを出すディクと対象的に摘まれている妖精はキィィィィィー、（、Д、＃）ノと怒りながら、両手両足を右往左往に乱暴に動かし宙吊り状態でビチビチと暴れまわる。

ディク『それは困ったなぁ～。俺達此処まで食事一つも手を付けず黙々と歩いてきたんだぜ小蝿君？君達は“現世に生きる傷ついた人の渇きを潤す心優しき妖精族”なのだろう？なにもそんな言い方なんてしない筈だぜ？』

ビリキナータA―どんなにお前が正当めいた台詞を吐こうとも“今は違ウ”！お前は私を撃っタ！傷を付けタ！！暴言を吐いタ！！もう許さなイィィィィ！許さなイィィィィィィィィィ！！！！！―

ピィィィィィィィィィ！！！！！

首に摘まれているディクに対して憤怒の形相を出しながら言い右人差し指を笑み満開のディクに向けて指した後、指していた右手の人

差し指を親指を軽く曲げてに口の中にいれ思いっきり口笛を吹かす。
すると…

ディク『！』

シャイナ「わわっ！？」

ざわっ…ざわっ…メキッ…パキパキ…

至る所の茂み・樹の上からディクが摘んでいる同じ半透明色の妖精達が現れ色を着ける様に実体化し、更に樹に巻かれていた複数の蔦がスルンと蛇のように蠢いて一つ一つ巻蔦先をシャイナとディクにビシッと狙い定める。

ビリキナータA―私を摘んでいるこの“暴力オッサン人間”を摘み出セ！！傍にいる人間も一緒にダ！！―

ビリキナータB―OK☆BOSS―

ビリキナータC―ぶっ潰してやんヨォォォォォォォ！！―

バシュシュシュシュシュシュ！！！！

妖精達は両手に魔力を集中させて円形の桃色の光を生成させた後、
一斉にシャイナとディクに向けて開いた両手を前に突き出した瞬間
一斉に光のガトリング弾が高速に飛んでくる。

シャイナ「だひゃっ！！」

ディク『よっと…』

ディクはすぐにシャイナを左手で抱かかえて右手には摘んだ妖精を
持ちながら打ち込んでくる魔弾を走り避け、追撃となる伸びてくる
蔦の横払い攻撃・振り下ろし攻撃を軽く足に力を入れて飛翔し軽々
と避け、更に続けて身体を横に捻らせて第二の追撃を回避する。

ディク『すまんっ、シャイナ！君を…投げるぞ！！あと小蝿君、お
前もなｗｗｗ』

シャイナ「わっ！？」

ビリキナータＡ―ブゥッ！？―

ディクはシャイナの身の安全を確保するべく弾幕と蔦による追撃を避けて攻撃が止んだ瞬間に、一度抱いていたシャイナと摘んでいた妖精を前方に投げ飛ばす。その後…

ディク『La gauche et les flancs du droit d'une fille de l'argent!』

前方に投げ飛ばされていくシャイナと妖精に向けて右手を前に翳して淡々とフランス語を吐いた時、投げ飛ばされた二人の周りに白銀色の円形の球体（結界）が覆って、二人を結界の効力で投げ飛ばされた二人を宙で静止させ一先ず二人の安全を確保する。

ディク『（よし、後は…）結局はコレかｗｗｗまぁいいや…。俺と楽しくＤＡＮＣＥしようＺＥ☆』

ディクはシャイナと妖精（後のナビ役）結界の中に閉じ込めて安全を確認し一息付いた後背を振り向いて、後方から追いかけ再度包囲する妖精＆蔦達を仁王立ち視点で軽く睨み付け両腕を前に伸ばし両手を少しずつ握るように閉じていく。この直後…

ディク『かつて国を襲い掛かった巨大悪魔の体内から出たこの“武器”…一度試し斬りしてみたかったんだよね“コレ”ｗｗｗ』

シャイナ「ちょっ！？？！！？そ…それは…ｗｗｗ」

バシュッ！！

ディクが前に両手を翳した所から細長い剣を収めた鞘が現れて、鞘に刻む赤と橙と黄色が浸透するように塗られた炎のような紋様が刻む。ディクは右手で柄を握り締めながら鞘から刀身を出すように綺麗に引き抜く。

ディク『友（エッィオ）はコイツの事を“妖刀・焔薙”と呼んでいたんだ。だけど俺はこの炎っぽいカッコイイ“ＳＡ・ＭＵ・ＲＡ・Ｉ☆刀”をもっとかっこよく命名したかったもんで…』

ディクは鞘から引き抜いた炎の紋様が刻む刀を右手の平の中で遊ぶように回し、残る左手を左腰に入れていた短銃を引き抜きながら両腕をクロスさせるように“カメラ目線”にむけてかっこよくポーズを決めた後…

ディク『“妖刀フラムエール”そう名付けたのＳＡ★ヒィィィィィハァァァァァ！！！！』

シャイナ「おっま！！モロ“西部侍版★レッ●スティール２”構えモーショォォォォォォォォォン！！！！！！」

ゴゥッ！！！！

ディクがそう言った直後刀の刀身から赤い炎のような靄が出て、名前通り見た目からにして翼が生えたように刀身全体を赤い炎で覆う。ハイテンション状態のディクは右手に持つ刀を斜め下に下げ左手に持つ短銃を前に伸ばし、再度“カメラ目線”に向けて左手に持つ銃口を構えた。

第百六十六曲　必ずチャンバラ等の身体動かすゲーでテレビの画面で暴言を吐く

―妖精界　忘レラレタ森　道中―

ディク『Ｉ　ａｍ…ＳＡ・ＭＵ・ＲＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＩ！！俺はク●ガリ一族の末裔な「おっっっっっっまっっっっっっっっっっｗｗｗそれは赤鉄（レッ●スティール２）の主人公ｗｗｗそれに…」

ビリキナータＡ―な…何だこの…人間ハ……！？や…やけニ……ッ！？？！！―

シャイナ＋αはディクの最強の結界魔力に入れられた球体の中で、ディクがノリ★ノリな気分で身体を何度も半回転させて炎を宿す長刀を右手の平の中で回し遊ぶ。

尚且つ左手に持つ白銀の短銃も左手の平の中で何度も回転させて、手の平の中だけでなく短銃を両肩にそって何度も一週し遊んでいる光景を見て、“一緒に入れられた妖精と共に結界の壁に顔面ごとへばりつくような形で見る”。

ディク『テレッテー♪テテテテーテ♪テテテテェェェェェェェェェェ♪♪』

ビリキナータA－ウァ…アノ人間ノ全身から出る“今でも殺ろうとしている闘気”ハ！？？！！！？－

シャイナ「ま…間違いない。あの姿はこの小説作者&赤鉄2主人公のっ…！！」

ブワッ！！！！！

結界の中にいるシャイナからの視点…刀と銃を両手の中で遊びながら、群がる妖精＋αの敵に向けて手招きして挑発でもしているディクの姿が一瞬…

作者&赤鉄2主人公「「…へっ！！」」

“後ろ向きに立つ作者&赤鉄2主人公の姿”に変わり、作者&赤鉄2主人公の両手に持つ“●ｉｉリモコン&ヌンチャク”及び“●刀&初期短銃（リボルバー）”が、前方に置く“巨大薄型地●ジ対応テレビ及びシン●ローの雑魚敵達”に向けて●ｉｉリモコン&ヌンチャクｏｒ●刀&初期短銃（リボルバー）と共に右往左往に動かし“準備運動している姿”を…そしてっ！

ディク（作者&赤鉄2主人公）『「さぁ…今日も激しく俺の“斬鉄剣（ソラ●カタナ）”&“俺得☆ジャスティスガン”で現実の鬱憤を吹き飛ばすぐらいにＢＡ・ＲＩ・ＢＡ・ＲＩ殺っちゃうＺＯ☆」』

ダンダンダンダンッ！！！！

ビリキナータＢ&Ｃ―！？―

突如ディクの姿が一瞬攻撃する際に“作者&赤鉄2の主人公が混ざりあった姿になって”、ディクを囲んでいた二…否“視界にいた全ての妖精達の頭部にディクが瞬時に放った魔力が込められた銃弾がめり込んでいて”、頭部裏から銃弾が内部の組織を破壊したように突き抜けて、撃ち抜かれた部分から赤紫色の液体を勢い良く噴出する。

ディク（作者&赤鉄2主人公）『コブラ型！全体Ｋｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｌｌ！！！！』

シャイナ&ビリキナータＡ「―ＥＥＥ

ない高速スポットバーストショット”で瞬時に殺ったようだった。

ビリキナータJ―イ…一体何がアッ『「余所見するんじゃねぇ…。」ギッ!?』

シャイナ「ちょっｗｗｗ何気に“赤鉄（レッ●スティール2）プレイ時の暴言が”ｗｗｗ」

妖精の仲間&結界の中にいるシャイナと妖精が一瞬の内に間近で殺られたのを見て両眼が飛び出すぐらい硬直していた時、突如目の前にディク（作者&赤鉄2主人公）が残像と共に現れ、冷酷の台詞を吐きながらドスッと腹部に刀に持ち変えた右手を突き刺し転倒させた後…

ディク（作者&赤鉄2主人公）『「ク　タ　バ　レ　ク　ソ　雑魚　が　！」』

ドシュッ！

転倒させた妖精の額から裏に掛けて刀を深く突き刺し、突き刺した部分から噴き出る赤紫色の血液を右頬に少量付着しつつ額に突き刺した刀を引き抜く。

ディク（作者&赤鉄2主人公）『「次…“今すぐ死にてぇ奴は居る”か?あ〝ぁ!?今すぐ殺されてぇ希望の奴なら“今なら特別出血遊戯ドMプレイサービス”してやるぜ??」』

ビリキナータE―ヒィッ!?―

ビリキナータF―う…ァア（（（（（（Д　；）））））））―

ゴォッと振り返ったディク（作者&赤鉄2主人公）の両眼から放たれる強い赤い光が周囲に飛び再度攻撃しようとしていた“妖精達の闘争精神を一睨みだけで完全にぶち壊し”、“更に追加効果で戦意を無くす絶望感を全神経を引き千切るぐらいに与えて”、後方に飛んでいた妖精達はヘタリと両膝から地に着いて飛ぶ気力を無くし“完全に戦意喪失状態”になる。

シャイナ「出たｗｗｗ作者又はやり込んだ三次元にいる廃人・変人特有精神攻撃“上級者（つわものども）の見下し”!!!!コレを当てられたものは“全て屈っする”!!!!!」

ビリキナータA―ナ…何だソノ…ジョウきゅ何とかとかつわもトカ…というよリ…―

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ…

ディクの背後から出ている“作者&赤鉄2主人公”の“精神的…否戦う意欲そのものも全てを粉砕する”殺気溢れた目線が、戦意喪失している妖精達だけでなく結界内にいる仲間を呼んだ妖精までガタガタと全身が震えて、股間からブワッと“透明の何かが滝のように盛れ出る”。そんな中…

ビリキナータA一（コ…怖い！！アノ人間の背後から出ている“二人のSA　MU　RA　I”ト、人間自身の冷酷な闘争心がわ…私達ヲ…ヒィィィィィィィィィィィ！！！！！）ー

ディク（作者&赤鉄2主人公）『「あ〝んっ？…お前が“次に死にたい奴”なのか？？どうだよ？？」』

ビュォォォォ！！

地を這っていた活きた蔦がディク…否“作者&赤鉄2主人公化”している“二人の外人侍”に向けて横に凪払うように振るい、更にタイミングをずらして上部からの頭部に向けた突きと身体を真っ二つにするかのように蔦を縦一直線に振り下ろす。まぁ結果的に…ｗｗｗ

ディク（作者&赤鉄2主人公）『「ケッ…甘い！温い！！遅い！！！全然駄目だな…激ダサだ！！！！」』

ガキン★ガキン♪と見下しているディクが攻撃してくる蔦攻撃を順序良く刀（●ｉｉリモコン）を縦にし、更に続けて刀（●ｉｉリモコン）を横にして軽がると攻撃を受け流す。そして…

ディク（作者&赤鉄2主人公）『「ストォォォォォォォォム！！！！」』

ザシャァァァと全ての攻撃を受け流したディクは間を入れず瞬時に刀を両手持ちに変えて、ディクの背後に出ている（作者&赤鉄2主人公）は●刀（作者は●ｉｉリモコンのＺボタンを押しながら）を身体ごと横一回転させて蔦全てを斬り落とし、“完全に立ち向かう者（バカ共）を屈服”させた。

ディク（作者&赤鉄2主人公）『「…これだけ倒しても３０００＄かよ…クソショボイな！！」』

第百六十七曲　誰もが嫌うだろう“長々と口煩ぇ＆ウザい”この小説の妖精とは

―妖精界　忘レラレタ森　道中―

ディク（作者＆赤鉄2主人公）『「テメェラのような三下のクソみてぇな実力じゃ、“俺達の衣服（作者の黒いパーカー衣服＆ク●ガリ一族の赤いコート）”一枚も掠りもしねぇんだよ。ボケ茄子共が…」』

ドォォォォォォォンとディクの背中に出ている“二人の外人侍”がそれぞれの●刀・●ｉｉリモコンを持ちながら両腕を組み、前方周囲の地に斃れ伏す妖精達の死骸・原型を留めていない蔦の破片を見下すような視線で言う。

シャイナ「つ…強ぇ…ぇ……。コレが“三次元に生きる廃人の力”か！？」

ビリキナータＡ―　。。。　（Д）…―

ディクが“二人の外人侍と化した”周辺に、ブチ斬られた蔦の破片と頭部撃ち抜かれた無惨な前方にいた妖精達の死体が転がり、残る

後方の妖精達はいまだにも“恐怖&絶望したぁぁぁぁ！！！状態”で両膝・両手を地面に着き背中を折りながら屈していた。

ディク（作者&赤鉄2主人公）『「ちっ…こんなクソ金じゃ“アップグレード”も儘ならないな。もっと“効率に良いとどめの一撃”を連続に出さないと…」』

シャイナ「おまっｗｗｗプレイ時の作者のリアル台詞かよｗｗｗそれにお金（サラ金）も何気に出ていたのかｗｗｗ」

シャキッ…

二人の外人侍はディクと同様にフウッと“右手に持ついつの間にか持っていた敵が落とした報酬戦利品（ＴＨＥ☆俺のヘソクリ）”をお手玉するように遊んで溜め息を付いた後、足下に転がる頭部を撃ち抜かれた妖精の死体をブーツ先で蹴り転がし、銃を左腰のホルスターの中に刀を背中に携えるように仕舞う。

作者&赤鉄2主人公「「戦争（バトル）は終わったか…また戦争（バトル）が起こったら、背中に携える刀を再度持ち“俺達”を呼べ。何時でも構わないが…今度は“骨があるガッツな相手”にしてくれ。難易度的な意味での“●ンジャモード”じゃないと殺る気がでねぇｗｗｗ」」

ディク『わかった…お疲れサン“二人の外人侍サン”。』

そしてディクの背中から出ていた“二人の外人侍”は「「宜しく頼んだ。」」とディクに向けて右腕を上げながら言った後、戦闘を終えたことでスウッと消えるように姿を消し気迫を抑えた通常のディク一人だけになる。

ディク『ふぅ…やっぱりチャンバラは良いもんだ！！身体のシェイプアップにもなるし、鬱憤も晴らせるし、赤鉄２（レッ●スティール２）は初代よりもマジで神ゲーだ！！イィィィィィィヤッフォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！！（ただし間違い日本の要素は初代よりも皆無詳しくはレッドスティール初代・２のＰＶを参照にｗｗｗ）』

ディクは先程の戦闘に満足したたかのように両腕を斜め上に伸ばして、元気●ツラツゥ風に気分爽快の表情を出しながら空に向かって『うぉぉぉー！！』と結界内にいる一人と一匹を除いて力強い咆哮を上げていた。そんな中…

犬ツィオ「クキュキュ…キュキューン…」

シャイナ「オイオイ…さっきまでの騒動があったというのにｗｗｗもう…コイツゥｗｗｗ（＊´∀`＊）」

シャイナの谷間に寝ている子犬（エツィオ）だけ“先程の戦闘による爆音&ディ

ク（リアル作者&赤鉄2主人公）による間を入れない暴言ラッシュが放たれていた”のに関わらず“顔色一つも変化なく爆眠”し寝息でも立てているようにフツーに眠っていた。

シャイナは谷間の中で丸くなるように眠っている子犬の鼻先に向けて右人差し指を軽く何度も突っついた後、眠っている子犬は「キャフン」と可愛らしい声を上げて顔面を丸まっている身体にうずくまるように隠した。

…

……

……

ー数分後ー

ビリキナータA ーコッチ…この先を歩けば“リオリーネ”様がいる“リュミエール”へ辿り着けル…ー

阿鼻叫喚な戦場を後にしシャイナと妖精を閉じ込めていた結界を解除したディクは、再度生け捕りした妖精に導かれる（強制命令でｗｗｗ）ように桃色の森の中を歩く。

ガサガサと茂みの音を立てながらサクサクと歩いていき、上部の木陰から漏れる日の光を頭部や顔面に辺りながら、妖精の全身から放

つ赤いリンプンのような光を見て進んでいく。

ディク『“リュミエール”ねぇ…それにルオリーネとかいう奴は、お前達妖族を束ねる長という存在か小蝿君？』

ビリキナータA（メリル）ー小蝿小蝿と何度も言うナ！この“無差別破壊霊体爺”メ！！私にハ“メリル”という名があル！！ー

ピューン♪とディクとシャイナを道案内し先導していた妖精がディクに向けて振り返って、ディク周囲の顔面を何度も周回した後…

ビリキナータA（メリル）ーこの“無差別破壊霊体爺”メ！！私の友達・仲間を撃ち殺した凶悪な人間ガ！！人間のクセに私達を遥かに超えた“憧れのアノ人の魔力”ソックリだシ！！ソレに貴方の持つ妖刀…イヤ“神刀”は“三次元と二次元の存在ヲ完全融合した最強ノ召喚人”を宿しテいるナンテ…ナニこの私の目の前にイル“滅茶苦茶ナ人間ワァアアアアアア！！！！ー

ウキィィィィ（、皿′　＃）ｍｇと生け捕りされた妖精…メリルはディクの鼻先に向けて何度も右人差し指を指しイーとしながら、ディクの背中に携える長神刀（フラムエール）の力を結界の中で見て、羨ましい＆妬みするような表情を出す。

ディクは長々と罵声をし何度も人を指している憤怒顔の妖精（メリル）を見て

キョトンとするような表情を出した後、ディクは『俺は元々強ェからしょうがねぇんだよっ。』と言って口元を上に吊り上げてケラケラと笑いながら右手で頭部のフードを軽く掻きむしる。

メリル―最悪ッ！ド最悪ッッッッッッ！！何で今日に限って私ハこんな目に合わなくちゃイケないノ！！もしココに私達の“憧れの人”がイタら、貴方ナンかケチョンケチョンに叩き伸メシて四肢もバラバラにさせてモラッテ、美しいアノ方の美体に酔いシレながら、この世界から永遠ニ追放出来ると思っていたノニ！！！！ケェェェェェ！！！！死ね！マジ死ねアンタ！！！！本当に死ネェェェェェェェェェ！！！！―

シャイナ「（うぁ～…こりゃぁウゼェ奴だな。ｗｗｗ私でも付き合いがたいような雰囲気が読み取れるよ（－－；））」

ディク『（憧れのアノ人…ってことは“魔神（エツィオ）”のことか。こりゃ…表に出たくない気持ちも分からんでもないな…）』

ギャーギャーと鼻先に向けて何度も人を指す仕草からメリルはディク周囲を飛び回るように旋回し、色々としつけェ位の煩い罵詈雑言をディクに向けてぶつけ吐きながら更に苛立つ表情を出し何度も人差し指を指す。

メリル―死ねコノ○£％＃爺！！テメェなんか☆★◎にして、今度コソ私達全妖族の結集した魔力で、ソコニいる人間モロともサンド

イッチにしてヤル！！！！今だけ余生ヲジッくりと堪能するンダナっ！！！！この◆□■※ヨ！！！！！その仝丌ホ（以下省略）―

シャイナ&ディク『「（ウゼェ…）」』

次第に“ピーな用語が入った”罵詈雑言になって暴走していく妖精を聞いて、シャイナとディクはお互い“もうお前黙れや（ー皿ー #）”風に表面は無表情ながらも内心は威圧を掛けた冷たい視線を出し、片耳を右手で塞いで罵詈雑言を聞き流しつつ数分歩いた後…

ディク『（見えてきたな…あれが妖族の居住区か。）』

深かった桃色の森を漸く抜けた途端、ディクとシャイナの視界には新たな光景が映っていた。

第百六十八曲　子供の夢いっぱい？の“菓子まみれ王国”にイラッサイマセェ～

―妖精界　妖族居住区リュミエール　入り口前付近―

ディク『（　゜Д　゜）…。』

シャイナ「え…間違いじゃないよね？此処…本当に居住区だよね？？ｗｗｗ」

メリル―眼を凝らシテも分からナいのか、この魔力の無い無能ノ人間！！此処ガ私達“妖族”が住まうリュミエールダ！！！！！―

先頭を取っていた妖精（メリル）に怒られつつシャイナの頭部辺りに何度も旋回しながら突っつかれながらも、シャイナ視点と呆然しているディクの視点から見た妖精達が住まう居住区の光景…

街入り口には肌色のクラッカーのような無糖菓子が側面にホイップクリームとカラフルビーンズがベタベタに付けられ積み重ねられるように建てられていて、街壁らしき部分は森●製板チョコのような物体が街の外壁として覆う。

更に都市内の建物は全て屋根の上に円形キャンディーと白い生クリームがドッペり☆と乗せられたスポンジケーキ形・あるいはウェハースで建てられた建物であり、地面からは●ポロやき●この山が沢山花の代わりという風に生えるように出て、もう見た感じで…

シャイナ「うはっ…頭が溶けちまいそう……ナニこの童話に出てくる“ヘンゼルとグレーテル”ｗｗｗ」

ディク『何だこの、甘い匂い生々しくプンプンするシュールな光景はｗｗｗ』

シャイナとディクは街入り口でも漂ってくる“出来立てホヤホヤの菓子の甘い匂い”を嗅いで、うぇっ（－３－　；）と呆れたような表情を出しながら、西洋菓子の国を見て再度両肩を落としてゲッソリする。

シャイナ「こんなクソ溶けた国の中に“林檎の模擬品を作り出した犯人”がいるのかよ…うぇ…くどすぎる甘い香りが私を昏倒しそうｗｗｗ」

ディク『とっ…シャイナ、大丈夫か?』

シャイナは目の前に映るプルンプルンな菓子王国を見て、口を両手

で被うように押さえながらオェップ♪とわざとらしい声を吐いた後、傍にいたディクがシャイナを気遣うようにそっと背後から抱き抱える。

犬ツィオ「！プルルッ！！…キャウ？？」

ディク『おっと！エツ…いや“カルボ”起きたのか！！』

犬ツィオ「キャゥ？キュィィン。」

するとシャイナの谷間に丸くなって眠っていた子犬が眼を覚まして、ディクに言われた自分の名前が違うことに頭を傾げながらシャイナの左肩上に移動する。

ディク『…カルボ。（悪いエツィオ！此処でアンタの名前を言っちゃったら、この任務そのものが失敗するしアンタ自身にも精神的な莫大ダメージを負うから、少し我慢してくれっ！頼む！！）』

表情は穏やかな笑みを出し無言ながらも裏面は“必死の形相でごまかそうとしている”あたふたと両腕を上下に動かす仕草を出しながら、魔力を持たない子犬（エツィオ）の頭に向けて響音魔力（テレパシー）を送る。

例え魔力を持たない子犬（エツィオ）でもディクの裏面の声ならばキチンと聞こ

えているハズなので、ディクは額から汗を流しつつ頭を何度も傾げながらア●フル並みの汚れなき両眼をパチクリする。そして…

犬ツィオ「キャンッ！」

ディク『おぅ！？』

ベシッ♪とディクの額に子犬(エツィオ)の超柔らかい右足肉球が当たって更に額にホット温かい舌舐めされて、ディクは少し顔面を赤く出し内心的恥ずかしい思いを過らせ顔を仰け反らせていた時…

―良いぜ、お前の好きなように言えば良い。友(アルタイル)と俺の為にも今だけ我慢するさ。―

ディク『！』

一瞬ディクの脳裏にエツィオの生声が聞こえてディクは眼を大きく開きはっとした後、シャイナの左肩上に乗る子犬(エツィオ)の可愛らしい尻尾振り動作を見る。

犬ツィオ「キャンッキャンッ！」

ディク『（…悪いな。）カルボ、今から妖精達が住まう街に入るぞ。』

ディクは再び子犬（エッィオ）に向けて笑みを出しながら子犬の頭部の毛に向けて右腕を伸ばし、クシャクシャと優しく撫でるように頭部の毛を右手で動かす。

二人の静かなる意志疎通魔力を聞いていないシャイナは左肩上にいる子犬（エッィオ）に向けて視線を映し、「アンタ…これから街に入る際に、この甘くどい匂い耐えられる？」とわざとらしい嫌み嫌みな表情を出しながら子犬の鼻先に向けて右人差し指を軽く突っつく。

犬ツィオ「キュッ！キュイ！！キャンッキャンッ！！」

シャイナ「ありゃまΣ（・・）こんな都市入り口でも私にとっては、こんな甘くどい匂いだけでこの場にいるのやっとなのに…」

犬ツィオ「キュィン！クゥーン。」

シャイナは背後からディクに支えられて甘くどい匂いに身体は酔ったようにフラフラしていたが、左肩上にいる子犬は尻尾をブンブンと早く動かして「俺は平気だＺＥ★」風に得意気な表情を出す。

犬ツィオ「キュキュー！！キャンッ！キャンッ！！」

ディク『このようなクソ甘ぇ匂いが、プンスカと漂ってきているというのに…元気だな。流石だよ…』

ディクはシャイナを支えながら左肩上に乗る子犬に向けて微笑ましい表情を出しながら言った後、シャイナの左肩上に乗っていた子犬（エッィオ）は地面へと飛び降りてトコトコとヨチヨチ歩きでシャイナの左足下へと歩む。

ディクに支えられてているシャイナは左足下に移動した子犬（エッィオ）が顔から擦り付けるようにして甘える仕草を見て、「コイツゥ（＊´∀`＊）」と両頬に赤みが出ながら少し微笑ましい気持ちになっていた時…

メリル―コラァ！この私ヲ無視するよウニ置いて、二人と畜生一匹ゴトキの世界ニ入るんジャネェェェェェェェェ！！！！この￠£%＃野郎！！！！！！―

ディク『！あっ…そうか、お前も居たな。すっかりと忘れてたよ。』

メリル―キィィィィィィィィィィ！！！！！！この無差別破壊霊体爺メ！！！！アンタラを見ていると余計ニ腹立しい気持チニなるんだヨ！！！！この▼★◆ガ！！！！！―

冒頭から忘れるように空気を読まれ過ぎていた妖精はぶちギレの表情を出しながら、シャイナを支えているディクに向けて放送禁止用語を吐き、二人と一匹周辺を何度も旋回する。

メリル―案内はもう終わリ！！私はもう此で消えル！！だが、覚えトケ！！この無差別破壊霊体爺！！！！！―

ディク『ふぁぁ…あん？何を？？』

ディクは首を傾げながら旋回してる生け捕り妖精に向けて“欠伸が混じった明らかに人や人外を挑発する”言葉を吐いた後、―ケェェェェェェッ！！！！！クソ生意気に言いやがっテェェェェェェェッ！！！！―とキレたような表情を出して言い、旋回をしながらディクの鼻先辺りまで飛翔し…

メリル―此れデ終わったと思うナ！！！！！次からは強い妖族を率いレて、お前を真っ先にボコボコにしてヤル！！！！！先程は“お前に殺られテモ良いぐラいな下等な実力を差し向けたダケ”だからナ！！！！！次からはお前ヲ絶対に（省略）イイナ！！？？！必ず今度はお前ノ血を流しテｒｙ―

何度もディクに向けて人差し指を指しながら罵詈雑言を好き勝手に吐いた後、パチンと弾けるような音を立てて目の前に飛んでいた妖

精の姿が汚い言葉が途切れつつ完全に消える。

静かになった街入り口で二人と一匹は“クソみたいな捨て台詞”の言葉を聞いて、ハァ…」（↑～、；）「と溜め息を付けながら両腕を横へと伸ばしていた時…

作者&赤鉄2主人公「「（ウゼェ…蠅だな。）」」

ディクの背中に携えている長神刀（フラムエール）に宿っている“二人の外人侍”もめんどくさいような表情を出しながら、黙って額に右人差し指を付けて俯いていた。

第百六十九曲　オッサンフード天使に群がるウザい奴ら

―妖精界　リュミエール　都市大通り―

シャイナとディクと足下にいる子犬はトコトコと都市入り口から入ってそのまま大通りへと歩み、所々建物の壁や地面を踏む“甘クドイ出来立てホヤ★ホヤな砂糖の匂い”を受けながら前に進む。

シャイナ「うぇっ…何か映画館で売られるＴＯ●Ｏシネマズつぅ“キャラメルポップコーン製作中の匂い”がｗｗｗおぇっ…甘臭ぇｗｗ」

ディク「しっかりするんだ、シャイナ。まだ身を一時的に潜める場所まで辿り着けていない。我慢だ、我慢…」

プゥーン♪と鼻につんと来るようなキツい砂糖の匂いを嗅いでいたシャイナは、背中から押してくれるディクの後押しを受けながらもふらつく足を動かして前へと進む。それだけでなく…

ザクッ…パキッ…

シャイナ「（おわっ！？ｗｗｗ何この“姉●建築士のような紙床”ｗｗｗ今でも穴一つ開きそうじゃん！？ｗｗｗ）」

ディク『この世界の住民どもは元々翼が背中から生えているから、一部の整備はしなくて済むってことか。ヤレヤレ…』

今歩いている路面は“三次元共通のコンビニ１００円で売られているウェハース”で出来た通路を歩く度に“何かが軋む音”が不気味に鳴って、所々路面にヒビが複数走り・ボコッと陥没している箇所もあった。

作者&赤鉄2主人公「「（此所で戦闘となると厳しいな…足場が悪すぎる。…行動そのものが制限されてしまっている。まさにウザい奴らにとって外部からの侵入者と戦う際に、都合の良い場所か…）」」

ディクの背中に携えている長神刀（フラムエール）の中に宿る二人の外人侍は、二人同時に腕を組んでいるように今いる場所を見て、何時もこの世界の妖精達は背中の翼で移動しているのか建物の壁意外一切補強修理すらせずほおっておいたままであっただろう。

そんな二人と長神刀の中にいる二人が苦い思いを過りながら、しぶしぶと低いテンションで身を潜める唯一の場所を歩きまっわている最中…

犬ツィオ「キャンッ！」

シャイナ「エツィオ…アリガト（＾＾；）」

シャイナが歩む度に左足下にいる子犬（エツィオ）のモコモコした頭部と顔側面の毛の摺り付きで、何度も癒されるような感覚を覚えながら視点を一時下に向けて一瞬呆けて驚く表情を出す。

犬ツィオ「キューン。キャンッキャンッ！！キュキュキュッ♪」

シャイナ「んまぁぁぁぁぁｗｗｗやぁぁぁぁぁぁぁねぇぇぇぇぇぇぇぇぇ～アンタはぁぁぁぁぁ～ｗｗｗ」

子犬（エツィオ）は更に摺り付き仕草と混じって左足首に向けて赤いベロを出し、ペロペロペロペロペロペロ♪と素早くシャイナの足首を楽しむような素顔で高速に舐める。

ディク『身体の小さいカルボなら特に問題は無いのだろう？路面の負担は少ないし、走っても特に大きなことはなさそうだしな。』

犬ツィオ「キャン！！」

と両腕を組みながら子犬を見下ろすように言うディクが言った時、子犬(エッィオ)はさらに高い声を上げて尾も素早くフリフリ♪と右往左往に動かしてシャイナとディクに振り返る。

シャイナ「そうね…てか…いつの間にか“子犬の仮名”を付けたんだｗｗｗ“フードの年増オッサン天使”ｗｗｗ」

ディク『ディクだ、シャイナ。外見は前世紀の“若かった俺”を天界の“カミサマ”が空想創作(イメージ)し構成された架空の存在に過ぎない。てか俺が死後“８００年以上”過ぎて今、生前と同じ人間のように生きているもんで…まぁ…あの……』

シャイナ「外見は生前と同じでも再び蘇った年は“翁(ジジィ)”と代わり無いか。歳を永遠に取らないエッィオと同じね…」

ディクはもじもじするような鼻下に人差し指を何度も軽く擦るように動かし、両頬からほんのりとした赤みが出る。

シャイナは少し短い笑い声を出しながらディクに向けて言った後、『そのようだな。俺はもう霊体かつ英霊だもんで“歳を取らない”し…』と数秒両目を閉じてわざとらしいお手上げのような動作をする。

犬ツィオ「キャンッキャンッキャンッ！」

ディク『分かっているよ、カルボ。早く俺達の身を一時的に潜める場所を探さないとな。』

犬ツィオ「キュィィィ！」

そして二人の前にいる子犬（エツィオ）が再度吠えた時、「いきましょ。」とシャイナが言って再び身を一時的に潜める場所を探すべく、ボロボロのウェハースで敷かれた手抜き大通りを歩もうとした時…

ビリキナータA―チョッと見て見なさいヨォ～ｗｗあそこに居る人間…“黒深巾ヲ羽織ったオッサン”と“クソ小せェ畜生一匹”ヲ連れて何処カに歩いてイルヨ？（笑）―

ビリキナータB―本当にオッサンダァァァァァ！シカも口の回りに鬚が生えてイルシｗｗアンな魔力の無イ若い人間ガ、オッサンと一緒に歩いてイルなんてェェェェェェｗｗ―

ビリキナータC―ヒャハハハハハハ！！！！全然似合わネェェェェェェ♪キャハハハハハハ！！！！！！―

シャイナ&ディク「『！』」

ドワッと突如回りからこの街に住まう妖精達の罵声が聞こえてきて、歩き出そうとしていた二人と一匹の進行を酷なる言葉だけで止めさせる。

シャイナ「こいつら…」

ビリキナータD―やーいやーい！この歳離れ勘違い交際人間メ！！コンナ鬚が生えたオッサン相手ナンテ、この先ノ余生ハ愉しくナイシ、子供さえ作るノに恥ずカしい思いヲするだロォ～？―

ビリキナータE―コッチニ来いヨォ、魔力の無エピチピチな姉チャン～？俺達のヨウなテラ★イケメソのガイの方ガ俺達と気持ちイイことをサセてヤるぜェ？良いだロォ？？―

二人と一匹は大通りにいた全ての妖精達に囲まれてしまい、囲まれた妖精達の中からモヒカン型の頭部と、リーゼント型の頭部をした見た目でもうガラの悪い“古傷だらけの暴走族風の妖精”が数体前に出てくる。

犬ツィオ「グルルルル！」

ディク『カルボ、シャイナの谷間の中に入れ。何とかするから…。』

唯一戦闘出来るディクは何時でも臨勢体勢を取りながら妖精を強く睨んでいるシャイナと、うなり声を上げながら前にいる子犬(エッィオ)を守るべく前へと出て、前方で犬歯を剥き出しにしている子犬に指示を下す。

犬ツィオ「キャウ！キャウキャウ！！キャウ！！！」

ディク『大丈夫。』

ディクの人の心を居抜く酷く優しい声聞いた子犬(エッィオ)は「キュゥ…」と喉に何かが掛かった声を立てた後、シャイナとディクがいる方向へと踵を返すように振り返ってトコトコと歩く。

そして軽々とシャイナに向けて大の字を広げるようなムササビジャンプした後、「オゥフｗｗｗ」とシャイナの谷間の中へとスポッ♪と入りディクの指示を素直に従った。

ディク『…。』

ビリキナータF―退けヨ、オッサン！お前のヨウな年増ニャぁ、ノーマッチングだ。―

ビリキナータG―後ろニイるピチピチの女ヲ俺達に引き渡セ。お前じゃ今時の若い女ノ、“大極上！衣服を破いて女ノ身体ヲ自由にしゃぶりツくアノ快楽”というモノを身体的ニ味アわせるコトすら出来ねェんダヨ！！！！！―

ディク『何だと？』

ディクがピクンと片眉を軽く上へと持ち上げた時、ディクの前にいたアフロ頭のグラサン付き暴走族風妖精がディクの胸ぐらを掴んで、ディクの衣服を引っ張りガンつけるようにディクに向けて睨み付けながら続けて言う。

ビリキナータG―ナァァァァァに、ほんの一部の戯れというお楽しみ要素ダヨ、オッサン？くくくっ！此処まで俺に言われて殴り飛ばしテェと思うダロォ？ウザいし、臭いし、長々と喋るノヲ聞いてソロソロぶちのめしたいと思ってイルンだロッ！？ナァ…ソウダろウ！？―

強面の表情を出しながら無言で睨み付ける無表情のディクを見て、アフロ頭の暴走族風妖精は胸ぐらを掴みながら人間の本性が隠された内心を全て暴露するように吐き捨てるように言って、優位な状況になったかというようにディクを徹底的に言葉攻めだけで馬鹿にしていた時…

ディク『…こ……さ……い。』

ビリキナータG―アン？…何言っているか分かんネェヨ、オッサン！！！！！チャンと聞こえるような声を出せヤ、この●◆★■ガ！！！！お前のよウな（省略）…加齢臭が漂うクセェ£％×〇でも、俺達に無い（以下略）―

一部放送禁止用語が吐かれながらもディクに向けて更に暴言を吐き、まだ微動もしていないディクに向けて胸ぐらを掴んでいる右腕に、更に力を入れようとした時…

ディク『少し…うるせぇな。』

ドッ！

胸ぐらを掴んでいたアフロ頭の妖精の頭部が無くなっていて、頭部の無い妖精の身体が地面へと落ち、頭部が無くなった首の部分から赤紫色の液体をドクドクと零れ出す。

ビリキナータ－　S―！！？？！―

ディク『長々と喋るなら簡潔で分かりやすいようにまとめてから言

ってくれ。それと放送禁止用語を出来る限り少なくしろや。』

ブンッ！…ブチュッ♪

代わりにディクの左手の平に先程長々と暴言を吐き続けていたアフロ頭の妖精の頭を鷲掴むようにして持っていて、ディクは掴んでいたアフロ頭の妖精の生首を一瞬視線だけで見た後、カメラ目線に向けて生首を投げ飛ばし死体顔面キッスをさせた。。

第百七十曲　ディクサァァァンの英霊にしての人前で、初め…否三度目の殺人

―妖精界　リュミエール　大通り―

ビリキナータA―ヒッ！こ…この黒イ深巾人間ガ…私達ノ莫大ナ魔力に覆わレた身体ヲッ！！？？！―

ビリキナータB―傷付けタァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！！オマケに殺しているシッ！！！！！！―

ビリキナータC―ウァァァァァァァァァァァァァァァァァッ！！！！！！―

突如ディクの胸ぐらを掴んでいたアフロ頭の妖精が瞬時に“首なし”になって、ドサリッと首の無い妖精の死体が地面に落ち切断面から赤紫色の血がジワジワと広がった時、二人と一匹を囲っていた妖精達が突然の死体が出たことで全員パニック状態に陥る。

ビリキナータD―あり得ネェ！！！俺達の身体ハ魔力で覆わレた鉄壁ノ…―

ディク『“鉄壁”？アレがか？？そうじゃなくて“紙クズ”だろ？？』

ビリキナータE―ヒィッ！！？？！―

シャイナ「あ…（・・）」

グシャリッとディクの足下に落ちた首なしの妖精の死体を踏み潰し、ディクのブーツ底で踏み潰された妖精の肉片と赤紫色の血が周りに四散する中、二人と谷間にいる一匹を避けるように飛んで、二人と一匹を囲っていた妖精達だけに血肉片が生々しく付着する。

ビリキナータH―イヤァ！！！！！私の服に血ガ！血がァァァァァァァァァァッ！！！！！―

ビリキナータI―ヒィィィィィィィィィィィッ！！！！！！―

踏み潰された妖精の血肉が囲っていた妖精達の衣服にこびり付いた時、一斉に悲鳴を上げて囲んでいた二人から脱兎の如くその場から逃げ出していく。

ビリキナータJ―“人”殺しィ！！“人”殺シィィィィィィィィィ

ィィィィッ！！！！！―

ビリキナータK―誰か！“リオリーネ様”に言ッテ！！！！コノ“人”殺シヲ早くッ！！早くウウウウウウウウウウウウウウウ！！！！！―

ビリキナータL―ウワァァァァァァァァァァァ！！！！！！―

ディクは色んな所へ我先に悲鳴を上げながら逃げていく妖精達を見て、『良いぞ、あっち行けあっち行け。ウゼェお前らにゃぁ用は無ぇんだよ。』としかめっ面の表面を出しながら口から数滴の唾を吐き捨てる。

シャイナ「オィオィ…入ってから直ぐに騒動が起こっているじゃねぇ～かｗｗｗ」

ディク『まさか（笑）、俺の胸ぐらを掴んでいたアフロ野郎の頭を“力を入れずに軽く触れただけで頭ポ・ロ・リ”しちまうなんてなぁｗｗｗこれは“想定外”のことだったよｗｗｗ』

シャイナ「おまっｗｗｗ」

犬ツィオ「キュゥゥゥン。」

アハハ♪とディクが胸を大きく張ってわざとらしい笑いをする中、シャイナは「まぁ…アンタが“何とかすると言った”時点でもう“この展開になるか”と予想していたからさｗｗｗ」と苦笑いしつつ谷間にいる子犬（エッィオ）も嘆くような声を上げながら、足下のウェハースで出来た路面にこびり付いた妖精の肉片（血付き）を一つブーツで蹴り転がす。

ディク『奴らが言う“鉄壁の魔力”と言っても、そのような通じることが出来る相手は“並程度の実力”ならではの話。俺は昔“生前３０年間エッィオの下で修行した”から実力はもうｗｗｗ』

シャイナ「実力は“エッィオ＝アルタイルと同じ”ってことかｗｗｗあっ…そういえばアンタは３０年間エッィオの下で魔力の修行もしたってことから“生きる総ての世界の魂と共鳴”もできるの？？」

とシャイナが死した妖精の肉片を蹴り転がして遊びながら言っている中、ディクは背中に携えていた鞘付き長神刀の柄を右手で引き抜いて、手の平の中で刀を回転させながら何時でも戦闘できる体勢を取りつつシャイナに言う。

ディク『無理…いやそれは不可能だ。その力は“理を全て束ね操ることができる最初の二人の古王”のみ授けられたと聞いた。エッィオは魔族の魔神でありながらにして“古ノ光王”。この星の地上に活きる全ての存在を監視し、全ての活きるものに害なし破壊を与える邪悪な存在が現れた時のみ…』

シャイナ「！」

ディクは数秒両眼を閉じて右手の中で握る刀に少し力を入れ刀身を縦にしながら右腕を横に伸ばした時、ズバンッ！！と縦に翳した刀の刀身に淡いピンク色の光がバチバチと破裂したような音を立てながら綺麗に二人を横切るように切断されていく。

ディク『“その力を振るうことになっている”…が、“趣味目的で使うこともしばしばある”ようだし、まぁ彼等は古王（エツィオとアルタイル）でありながら自由人（テラ★フリーダム）だしなぁ～ｗｗｗそこは大目に見てやってくれよ＾＾』

シャイナ「大目に見てくれって…確かにエツィオとアルタイルは本当に自由人だけどよぉ～ｗｗｗ限度っていうもんがなｗｗｗ…まぁいいやｗｗｗ“この際もうどうにでもなっちまぇ（-３-）ノ”」

シャイナはディクが横に切り捨てた魔弾が通り過ぎる際に少量の風が発生して、羽織るコートの裾と髪を軽く横に靡く様に動きながら両腕を組んで刀を構えるディクの後ろに着く。

ディク『（さて…どうしたもんか。）』

ディクはさらに前方から放たれてくる複数の淡いピンク色の光球を見て手にする刀を両手で握り直した後、刀身を縦一直線にして途中放たれてくる魔弾と刀の向きを合わせて刀身を斜めに動かし、微調整しながら建物の屋根や街角から放たれてくる妖精達の魔弾をズバンズバンと勝手に刀身に食い込んで斬り捨てていく。

ディク『シャイナ、カルボ、少し走るぞ。』

シャイナ「あっ…うん。」

犬ツィオ「キャン！」

ディクは前に伸ばす刀だけで放たれてくる弾を斬り捨てながらもう片方残っていた腕を後ろにいるシャイナに伸ばし、シャイナは後ろ向きに差し伸べられたディクの左手を右手で掴む。

作者&赤鉄2主人公「「宜しい、ならば戦争だ。さぁ…楽しく俺達と踊ろうじゃないか。」」

シャイナ「ちょっ！！Σ（゜Д゜　；）アンタらもか！！？？！」

スウッ…

ふんわりとした動作でディクの左腕の中に抱き抱えるようにしてシャイナの身体が横向きになった時、ディクの背後からまたしても“二人の外人侍”が好戦的な表情を出しながら透き通るように出てくる。

ディク『蹴散らしながら逝くか。あっ…蹴散らしながらでも出来る限り“さっきのように頭ポロリするような殺害を何としてでも最小限”にしないとｗｗｗ俺、悪人呼ばりになっちまうな。ｗｗｗアフンッ（´3`）』

シャイナ「いや、さっき妖精一匹殺した時点でもう無理だろ。ｗｗｗ」

犬ツィオ「キュルルルル。」

と片腕だけで抱き抱えられているシャイナと谷間にいる子犬（エッィオ）が白い目で苦笑いしながら、右手に持つ刀を右下斜めに構え両腰を落とし背中を少し曲げて左足を下げながら立つディクに向ける。

ディク『いや、決して無理じゃない。俺は不可能を可能にする男だ（嘘）…逝くぞ。』

作者＆赤鉄2主人公「「任せろ。」」

チャキンッとディクの背中から現れていた二人の外人侍もディクと同じような体勢を取って、至る所から放たれてくる淡いピンク色の魔弾を放つ妖精達に向けて、ディクと背後から出ていた二人の外人侍と一緒に走り出した。

第百七十一曲　架空世界と平行世界の魂が宿った複合人間サァン！

―妖精界　リュミエール　大通り―

ビリキナータA―この“人”殺シめ、撃てッ撃テ！！―

ビリキナータB―覚悟シロォォォォォッ！！！！！―

ズドドドドドドドドドドドドドドドドッ！！！！！！

ディクがこの世界に生きる妖精達の前で殺した（※本人はそのつもりではなかったw）ことで、遂にこの街にいた自警団や保安官にも耳が届き、彼等は直ぐに緊急出動した後建物の屋根や街角の影等に身を隠しながら両手に淡いピンク色の光を生成させ、一斉にディクに向けて光球を超超連続で高速に放つ。

ディク『あー、もう…（、8、）』

作者&赤鉄2主人公「「ｒｉｄｉｃｕｌｏｕｓ（かったりぃぜ。）」」

バキンッバキンッとディクはシャイナを左腕で抱き抱えなかまら刀（●ｉｉリモコンのＡボタンを押しながら）を前に構えて走り、放たれてくる光球を位置に合わせて刀身（●ｉｉリモコン）を傾けて防ぎつつ走る。

ディク『しっかし、アレだなぁ（笑）本当に●ーアレプリカントｏｒゲシュタルトに出てくる“イクラ弾幕のオンパレード”みたいだぜｗｗｗ』

シャイナ「確かにｗｗｗイクラ弾幕が大量発生しているけど、これはまだマシの方だよ。（実話）●ーア後半の方がもっと弾幕がカオスだｗｗｗ（弾幕的な意味で）」

犬ツィオ「キャゥ？」

四方八方から放たれてくる台詞通りの“イクラ大量生産☆弾幕展開祭中！！”を見て、溜め息を付きながら放たれてくる魔弾を刀で斬り捨てつつ前へと走り、後方や側面からの弾幕は背後から出ている作者&赤鉄2主人公の支援（アシスト）斬りで完全に防ぐ。そして…

ディク『チェッパァァァイッ（-８-）ｍｇ』

ビリキナータA―ギャァッ！！―

ビリキナータB―ガ…ガガ！！―

進行方向に隠れながら弾幕を撃っていた街角の妖精とディクが右腕を横に広げながら素通りしていった時、ブシュッと腹部と首筋にかけて一線の太刀が走って赤紫色の液体が勢い良く出て、斬られた肉体の部分が段々と身体からズルッと離れていき、ドサッと斬られた妖精の肉片と血が路面に落ちて二匹とも絶命する。

ディク『ＴＨＥ★通り魔パァァァァァァァァト２ゥ！』

ビリキナータC―エッ？―

ビリキナータD―ハ？―

ゴォッ…

屋根上から弾幕を放っていた妖精が突如音も無く背後にディクが現れて、背中合わせのままディクの人間を超えた身体能力の高さで唖然としているの表情を出していた時…

ビシュッ！！…ボトト…

背後にいるディクに振り向く暇も無く身体に複数の線が走って身体が徐々にずれていき、切断面から血が噴き出ながら屋根の上に妖精の斬れた肉塊が積み上げられた。

作者＆赤鉄2主人公「「Ｂｌｏｗ　ｏｆｆ　ｇｒｅａｔｌｙ！！（吹き飛べ！！）」」

シャイナ「だわわっ！！？？！」

ドンッ！！！！

ディクの背後から出ていた二人の外人侍は手にする●刀又は●ｉｉリモコン（Ａ＋Ｂ同時押し）を両手で握りしめながら力を溜めた後、側面の別の屋根上から弾幕を放つ妖精達に向けて思いっきり横へと振り翳した瞬間…

作者＆赤鉄2主人公「「ドラゴンの型！！」」

シャイナ「うぇっｗｗｗ」

ドチャッ…

●刀又は●ｉｉリモコンの刀身から肉眼では見えない“大きな衝撃波”が大きく三日月を描くように突風のような音を出しながら高速に飛んでいき、側面の屋根上にいた全ての弾幕を放っていた妖精の頭部が“飛ぶ斬撃で一斉に血と共に上へと跳ね飛んだ”。

ディク『フッ！！』

バシュバシュとディクは右手に持つ刀を匠に動かして“華麗に・俊敏に・美しく”描くように動かしながら放ってくる弾幕を斬っていき、左腕の中で抱えるシャイナと子犬(エッィオ)を護りつつ立ちふさがる妖精を斬っていき、背中から出ている二人の外人侍も●刀・●ｉｉリモコンを振りながら対処しきれない弾幕を支援斬りし、進行方向を妨げている妖精をディクと同じように斬り捨てていく。

作者＆赤鉄2主人公「「俺達の力が宿った刀の持ち主、“俺達”と共鳴(リンク)しろ。このような下らん弾遊びと戯れる雑魚相手など時間の無駄だ。」」

ズバッと最後の弾幕らしき球を刀又は●ｉｉリモコンで横凪ぎするように斬った後、二人の外人侍はディクに背中を見せ合いながら視線だけを動かして刀の持ち主に言う。

ディク『ヒデェ言い方だな“外人侍サン”？わざわざ共鳴（リンク）せんでも…』

作者＆赤鉄2主人公「「俺達はお前が言い放った言葉に少し引っ掛かるところがあった。この世界に入った時点でお前は小蝿共を滅し、今更殺すなと言うのは矛盾過ぎるし虫酸が走る。いや、お前は一度過去悪魔・人間共を一匹殺した時点でもうお前は“英霊ではない”。過去に生きた俺達と“同じだ”。」」

ディク『…。』

ディクは刀を斜め下に下げて腰を落とし前方や側面から再度弾幕を放つ魔力を集中している妖精達に向けて仁王立ちで構えながら、背後に出ている二人の外人侍の言葉を黙って聞く。

作者＆赤鉄2主人公「「お前が初めて誰かを殺める時はどのような思いを受けたか？そのことを分かち合える親友が居ても、お前にとっては完全に枷というモノを外し貰えたか？…否、俺達“殺しの世界に生きる罪人の存在”には至福など無い！！只の自己の都合過ぎる綺麗事ばかり聞くだけだ。しかし…」」

ディクの背後に出ている二人の外人侍は武器を構えつつ顔だけを後ろに振り向いて、いまだに二人の外人侍から背を向けて刀を構えている真剣面のディクに向けて…

作者＆赤鉄2主人公「「お前の意思は“例え全てを失おうとしても信念を貫く不死の眼”をしている。分かるか？俺達がこうして言っている今でも…」」

ディク『C'ｅｓｔ　ｕｎ　ａｓｓｏｃｉ？　ｄ？ｓｅｓｐ？ｒ？…（…ヤレヤレ）しゃーないな、好き勝手にどうぞ（-_-）ノ』

表情は暗殺者らしい冷たい形相を出し叱咤激昂しながらも、口元を吊り上げて二人らしい笑みを出していた。

ディクの背後から出ている二人…否、完成された戦闘用混合体は“古人が作りし創作世界でのとある一族だったの仮想存在である銃剣士”もう一人は“平行世界に生きる平凡の人間”だった。

作者＆赤鉄2主人公「「“俺達”は元々“この世界にない”一人一人の他世界の人間だった。しかし身体は“一つの疑似体”に留まってしまい、疑似体に入れられた“彼女”の魂はもう二度と本来の身体に戻れなくなり、生前だった彼女の偽りの存在しか成すことが出来なかった。」」

シャイナ「えっ！？？！！（待て待て待て待て待て待てｗｗｗ何か段々と設定が難しくなってきているような気がしてるんですけどｗｗｗ）」

犬ツィオ「クルル…カゥ…」

シャイナは二人のトンでもない会話を聞いて驚く表情を出し、谷間の中にいる子犬はシリアスめいた会話が流れる中、トロンと両目が閉じていき軽く欠伸をする。

作者&赤鉄2主人公「「過去の人間達は勝手だ。理由を言わずに俺達の身体を改造し完成させた後、自ら造り出した“活きる最強の戦闘用模擬体”が危険な存在とされて廃棄されたのさ。」」

しかし古人は自ら創った人間のように意思ある最強の模擬体がいつか古人を裏切るのかを恐れて、古人は最強の模擬体を武器と化して永遠に封じ込められた。

作者&赤鉄2主人公「「最初はお前に握られた時、冷たい手をしていた。しかし、本来あるべき“人”の温もりが眠っていた俺達をこの世界に引き戻してくれた。それに感謝している。」」

そして時が経ち二人は武器状態のまま巨大悪魔の中に食われるように囚われて、その巨大悪魔を倒したディクに体内から拾われ武器と化した二人の意思が宿った長神刀の柄を握られた時…

―？何驚いているんだ、赤コートの若男と黒いパーカーの女？？なぁーに、俺が最期まで面倒見てやるからよぉ♪―

混合された最強の模擬体は柄を握られている人間の“強大な力を持ちながらも、命の意味とそれに苦悩し決して悪用しない人間の正義本能”“見知らぬ人を最後まで信じる広き心”に彼等は惹かれたのだから…

作者＆赤鉄2主人公「「異世界から拉致られて名も無かった“俺達”に、お前は恐れず家族のように新しい名前を付けてくれた。俺達は…」」

ディク『分かっているよ。例えお前らが過去に酷ぇ仕打ちをされようが、“お前ら”は俺の大事な仲間の一人だ。過去は過去！！俺は前だけを見るのだから。』

ディクは背後にいる今更ながらの告白めいた二人の外人侍を聞きながら背中を見せて、わざとらしく笑いながら右腕だけでお手上げするような仕草を取り、右腕を上へと上げて手の平を広げながら翳した瞬間…

ディク『Ｒ？ｓｏｎａｎｃｅ！！』

シャイナ「えっ！？ちょっ！？こ…これはｗｗｗ」

犬ツィオ「キャゥ…クルルルル♪」

ディクの足下から古絵文字のような赤い鷲の絵が浮かび上がって、足下から出ていた絵がジワジワと枝分かれしながら上に伸ばしていき、全身に赤い線が走った瞬間全身に赤い光が遡り、抱き抱えているシャイナと眠りかけの子犬を身体から放つ赤い光に巻き込まれていくよう呑み込んでいった。

第百七十二曲　珍しく喋らないシャイナ達と機械的な正体不明のガンマン若男

―妖精界　リュミエール　都市屋根上辺り―

ゴォォォォォォォォォォォッ！！！！！

ビリキナータM―ウワァ！！な…何ダあの光ハッ！！！！！―

ビリキナータN―い…一体…ドウなッテ！！！？？！―

ディクと抱き抱えているシャイナと子犬（エッィオ）がいた屋根が突如“驚きの赤い光”で眩しく光輝き、屋根上にいた妖精達と地上にいた妖精達は顔を両腕で隠すようにして庇う仕草をする。

所々赤く光輝く場所から赤い稲妻のような電流が複数走って、バチバチと音を立てながらのたうち回るように光っていた時、数秒間だけの眩しい光がようやく止んだ瞬間…

？【…。共鳴完了。現時点模擬体状態“問題無し”四肢の動きは下肢の動きが若干鈍い“だが特に身体的機能の支障は無し”。模擬体

の記憶は…（以下省略）四肢機能調整は無で…流石だな、“俺達”の刀の持ち主。】

ビリキナータM―！？―

ビリキナータN―ハィ！？…だ…誰だ貴様！！？？！テカ…何を言ってテ……―

光が止んだ後に妖精達が見た今まで攻撃していたあの深巾男と若い女と畜生の姿ではない“変な台詞をブツブツと小さく吐く謎の存在”…

姿は赤黒い二つの袖が付いたロングコートを羽織り、頭部には短い黒髪に赤黒いカウボーイハットを被って、鼻先まで隠すようなガンマンのような衣装をした“目付きの鋭い良い体格を持つ若男”がボソボソと一人ごとのように身体チェックをする台詞を吐きながら立っていた。

？【…貴様ら雑魚ごときの相手に名乗るつもりは無い。“俺達”は…お前達をこの世から消し去る唯一の“死神”だ。】

ビリキナータ‐S―！！？？！―

妖精達と若いガンマンの若男の位置はかなり遠くにいたハズなのに突如“音もなく目の前に現れて”、弾幕を準備していた妖精達は突然現れたことにより口を大きく上げて何かを喋ろうとしたが…

？【先ずは貴様らだ…逝ね。】

ズバッ！と若いガンマン男が右手に持つ刀身も鍔も柄も全てが“黒一色の刀”が横へと凪ぎ払うように振りかざし、若い男の目の前に立っていた数体の妖精は胴体ごと上へと撥ね飛ばされる。

？【次…】

ビリキナータP―（・・）エッ？―

ビリキナータQ―ハヒッ？―

ドンッ！と胴体が撥ね飛ばされた妖精達に驚く間もなく若い男はいつの間にか“別の場所・高い場所にいた妖精達の背後にいて”、ガンマンの若い男が手にする刀の刀身に付いた赤紫色の血液を下に振り払った時…

？【振り向けば…死…例え振り向いても…】

バシュッ！

ガンマンの若い男の後ろにいた妖精達の頭部から一線が走り、頭部から股に掛けて太刀筋の光が照らした途端、縦一直線に赤紫色の血が噴き出して真っ二つに絶命する。

？【死…有るのみだ。】

ビリキナータR―う゛…ェ…―

ビリキナータS―ビ…ァ゛…―

更に続けて息つく隙もなく路上にいた妖精達にガンマンの若い男が現れて、ガンマンの若い男と目の前にいた妖精達と素通りした瞬間、パンッと破裂したような音を立てて妖精達は身体の内部ごと外側へ弾き出すようにぐちゃぐちゃに潰れた。

ドチャッ…ビチャ…

？【…北西に増援。数は１２…更に2時方向からも同じく１２…】

男の背後で破裂した内蔵類が血と共に生々しい音を立てて路上に積み上げられていく中、コンマ数秒で“今いた全ての妖精達を攻撃動作を見せることなく瞬殺した”若いガンマン男は顔を少し上に上げた直後、両眼を閉じて所々淡々と語る機械のような台詞を吐く。

？【おっと、それだけではないか…もっと“強大な力を持った存在”も雑魚と共に来たか。ふむっ…場所は…】

今いる場所に更なる増援部隊が現れた妖精達を気配だけで感じ取るように言いつつ、ガンマンの若い男はピクンと閉じられていた両瞼を少し動かし両耳を横に動かして“やっと骨がある奴が現れたことで嬉しいか”口元を上へと吊り上げた後…

？【“敵の長”は北西から来る増援部隊と合流…2時方向から来る増援部隊と合流した後俺を叩く予定…否…】

タタンッ！

“ワンアクションも無いまま若い男の姿は血塗れの路上から屋根上に居て”、無音で高速走りしながら脳内で思考計算し2時方向へと超人的速度で走った後…

ビリキナータT―えッ？―

ビリキナータU―アッ？―

シャラァァンッと北西から来る応援部隊と合流しようとしていた妖精達の頭上から上半身を上に仰け反らせ、綺麗に足下を交差するように組ながら“口に薔薇のような花を加えているキモ美しいポーズを取る若いガンマン男”が現れて、妖精達はシュール過ぎる登場に唖然と立ち尽くすように飛行を止めてその場で浮かびながら口を開こうとした時…

？【“俺達”が潰す。】

チャキッ…

薔薇を口に加えていた若いガンマンの男の左手に持つ銃（リボルバー）が一部“荒ぶる鷹のポーズ”を取りながら右手に持つ黒い長刀を背中に瞬時携えるように仕舞い、空いた右手の平を銃のコック上へと添えた直後…

ガウンッ！ガウンッ！！ガウンッ！！！ガウンッ！！！！

左手に持つ銃口の火が吹いて、銃口から放った弾が下にいた妖精達の頭部にめり込んで、弾が頭部裏まで貫通し内部の脳の一部が抉られたように血と共に出ながら“スポットバーストショット”で下にいた全員の妖精を射殺した。

ドサッ…ドササッ……

頭を撃ち抜かれ一部の妖精は顔面ごと消し飛び内部の抉られた臓器の組織がグロくさらけ出し、更に一部の妖精は頭部裏から全てのバラバラになった脳の肉片が血と共に出てきて、肉が落ち血の音が生々しくなる中脱け殻になった妖精の骸の身体が先に落ちた臓器と共に積み重ねられていく。

？【“敵の長”以外…全てを滅す。】

ガンマンの男は後ろを向いたまま北西の方向に向けて左手に持つ銃を後ろへと構えトリガーを引いた時、ズドンッと銃口からスターマイン前の花火を打ち上げるような爆音が鳴って、銃口から放たれた一筋の赤黒い光が綺麗に北西へと飛んでいく。そして…

？【“敵の長”以外全ての応援部隊の殲滅…完了。】

ドアァァァァンッ！！！！

若いガンマンの男の背後に“上空まで伸びる赤黒い茸雲が爆音と共に上がって”、側面から赤い火柱のような物体も上り火の粉らしき

破片が周囲に降り注ぐ。

ゴォ…

？【さて…会って見るとするか。そいつは“本当に骨がある良き練習相手”なのか…】

後ろへと構えていた銃を前に持ってきて銃を左手の平の中で遊ぶように回転させた後、男は後ろへと振り返って右大脚部に付いていたホルスターの中に銃を仕舞い込む。

ククッと軽い笑い声でも出し羽織るコートの裾が前方から来る熱風でバサバサと横に煽られながら“敵の長（妖精界の長）”がいる“赤黒い茸雲が上がった北西”へと向けて歩みだした。

第百七十三曲　黒シャイナとドMなク●ガリサァァンｉｎ精神内部

―???の内部―

シャイナ「。。。　（Д）…ナ…ナンデスカ?コレ?
?」

一方シャイナと子犬はディクと長神刀（異世界の改造人間の二人）と共に身体ごと共鳴（リンク）されて視界が一時暗くなり、眼を再び開けた時シャイナと子犬は赤黒い世界の中で海の中にいる感覚で宙に浮いていた。

ゴゴゴゴゴ…

音もない暗闇の世界に一つだけ映る前方の光の存在…それはディクが長神刀と共鳴（リンク）している“混合体の視界”から見える“外の阿・鼻・叫・喚♪”の光景をシャイナは見て口を大きく顎が外れるぐらいに開けながら絶句していた。そんな最中…

犬ツィオ「キャンッ♪キャンッ♪♪」

シャイナが今いる場所と外の光景を見て唖然としている中、子犬（エツィオ）だけは宙に浮く摩訶不思議な世界に気持ち良い声を出しながらパタパタと両手両足を動かして犬掻き移動をしていた。

シャイナ「外はあんな“世界の終わり”の状況だし…今にいる世界もエツィオの身体の中に取り込まれた時と同じ感覚だし…エツィオｗｗｗ」

犬ツィオ「キャンッ♪キャンッ♪♪キュィ！！」

そんな状況でもシャイナは自分の周りを旋回するように楽しく犬掻きをする子犬（エツィオ）を見て、少し怪訝な表情を出しながらも可笑しく笑いながら犬掻きをする子犬をほのぼのと見ていた時…

？「「その子犬が…“俺達”の刀の持ち主を更に超える“魔ノ神”か？どう見ても普通の悪ノ魔に見えるのだが…」」

シャイナ「あっ（・・）この世界にも“アンタら”居たのかぃ？ラスト★ク●ガリサァァンと私と同じ人間の２２歳の貴女ｗｗｗ」

シャイナの背後からディクの背後から幻影として現れていた“赤鉄２主人公とその背後に憑くように上半身だけ映る半透明状態の作者”が歩いてきて、スタスタとシャイナの下に寄った後シャイナ周囲を旋回する魔力の無い子犬（エツィオ）を細い眼で疑うように見ながら言う。

赤鉄2主人公&作者「「否…俺達は名前など無い。昔の真名などもうとっくに捨て去った。俺達には“武器状態時の名”のみ付けられているのみよ。」」

シャイナ「フーン、アンタらにはまだ武器の名前を付けられただけで、まだ根本的に名前が無いのか。つーか、不便じゃね？」

シャイナは機械的な言語を吐くような台詞を聞いて少し苛々するように左足をパタパタと上下に動かしつつ、二人の外人侍は今いるシャイナの位置から少し通り過ぎた後続けて言う。

作者&赤鉄2主人公「「否、俺達には武器状態の名さえ付けられただけで十分だ。余計なことなど俺達には要らない。」」

シャイナ「「じゃあ“感情”は？さっき森の中とか今いる街中でも“刀の契約者の会話の時眉一つも動かさなかった”じゃない？アレはどうして？？契約者同士のと言えども感情は日常的にも関わりあると思いますが？？」」

二人の外人侍はしつこく聞いてくるシャイナの喋りを聞いて「何だコイツ…？」風に両眼を細目ながら身を翻して、後ろで左足をパタパタしている聞きの悪いシャイナに向けて少し溜め息を付けながら言う。

作者&赤鉄2主人公「「（良く喋る女だ…。）俺達は肉体を改造された以来“殺し屋”として機能を為している。これが証だ。」」

二人の外人侍は左手の甲を翻すようにシャイナに向けて翳して、甲に刻まれた“剣が交差するように刻まれた贄の人間の小さな三角型の紋章”をシャイナに見せる。

作者&赤鉄2主人公「「この“証”こそ俺達の“殺し屋”としての本質が刻まれた枷だ。真名と共に俺達は感情を捨てて“只目標を殺すことを意識する”ように創られた“戦闘用としての完成体”。そんなモノだ…」」

シャイナ「あっそ…じゃぁアンタらは“寡黙的な人間擬きの人形”ってことで解釈して良い？それに…何その“アンタらの顔”？喋ること自体嫌になっているんじゃない？？いや…“喋る自体めんどくさがっている”だろ？？」

すると二人の外人侍の前にいたシャイナが突如不穏顔になって、外人侍二人の感情の無い機械的な台詞と眉一つ動かさない冷めた表情と見下したような眼を見て苛立ったか、シャイナはズンズンと荒々しい歩調で二人の外人侍に歩み寄る。

作者&赤鉄2主人公「「（何だこの女？勝手に怒っているが…はて

？この原因は何だ？？）何を…？」」

当然二人の外人侍はシャイナが怒り出し苛々し歩いてくる素振りを見て、怪訝な表情を出しながら何時も通りの会話だったのに不思議そうな思いでシャイナを見続けた直後…

シャイナ「戦闘用としての完成体という理由だけで感情なんて必要が無い？余計な名前など入らない？何だソリャ！？アンタら何様のつもりでこの世界にいるの！？それに私と会話している時に“目線も全て反らして見向きもしない”…自己の都合の良いように簡潔するようヘタな棒読みしやがって！！この卑怯モノ！！！！」

作者＆赤鉄2主人公「「っ…」」

ドスッと赤いロングコートを羽織る西部劇若外人の左頬にシャイナの丸められた右拳がめり込んで、殴られた赤い外人侍は顔を右横へと動いて少し背中がふらつく。

背後に憑いていた黒いパーカー女性も同様に影響受けて顔を右横に動き、シャイナに殴られた二人は同時に体勢を少し崩す。

シャイナ「テメェら…実際は他“他人と接したこと無ぇだろ”？世界に生きる全ての存在が信じられなくて、全てを否定しながら自分だけの世界を孤独（ヒトリボッチ）に生きてきたんだろ？なぁ、そうだろ！？」

更に追い討ちを掛けるようにシャイナはふらついた赤い外人侍の左肩を右手で掴んだ後、そのまま床?らしき所に背中から叩き付けてドカドカと赤い外人侍の両頬に向けて何度も丸められた両拳を叩き付ける。

シャイナ「アンタらに過去は何があったかのかは分からんが、取り敢えず一つ分かったこと…それはっ!!」

作者&赤鉄2主人公「「!」」

シャイナは怒りを露にした表情を出しながらマウントを取っている赤い外人侍の口元を被う上着チャックの上に右手で掴んだ直後、ビリッと繊維が破ける音を立てながら本来の赤い外人侍の顔と口を露にして思う増分吐き捨てた。

シャイナ「折角の綺麗な口と眼なのに、余程詰まらない人生でもしてきたんじゃないアンタら?視野が狭くて全てを見ようともしない卑怯モンが何を偉そうにほざくの??綺麗な顔をして勿体ないね?この腰抜け野郎…」

シャイナは露になった赤い外人侍の美形すぎる素顔を見て哀れな表情を出しながら言い、殴り付けても“全然腫れていない”鉄壁すぎる肌の防御力呆れながら両手を首に向けて絞めるように掴む。

作者&赤鉄2主人公「「っ…く…」」

シャイナ「機械的なアンタらを見ているとムカつく…殺したいぐらいにムカつく…何もかもアンタらの存在自体がウザすぎる。あーあ、昔の俺を思い出しちまうよ。なんつったって…」

ギリギリと首の筋肉が軋む音を立てながら少しづつ首を締め上げている両手に力を入れて、いまだに“表情一つも変わっていない能面な二人の外人侍”を憎々しく見ながら脳裏に映る過去の自分の虚像が映し出される。

シャイナ「アンタら“只の人形”じゃん。眉一つも動かさない感情の無い人形なんて…」

脳裏に映る過去の思い出したくない自分…それに似ている今マウントを取っている赤い外人侍と黒いパーカーの女、シャイナは冷たい視線で哀れむような表情を出しながら更に両手に力を入れて、何も抵抗さえしない二人の外人侍にこう言った。

シャイナ「廃棄…当然だよ。」

第百七十四曲　Ultimate weapon that everything

―複合体精神内部　深層区―

シャイナは赤い外人侍と背後から出ている黒いパーカー女の首を両手に力を入れて締め上げて、過去の自分の姿と今いる二人の姿が似ていることで憎々しい表情を出しながら更に両手に力を入れる。

ミシミシと肉が軋むような音から段々とメキッと肉が少し擦れ潰れるような音を立てて、シャイナはマウントを取っている赤い外人侍を締め上げながら上半身を立たせ壁?らしき所に背中からドカリと叩き付ける。

シャイナ「本当に“変”だねアンタら?これだけ締め上げられているのに何故抵抗すらしないの?馬鹿なの?死ぬの??」

作者&赤鉄2主人公「「…」」

シャイナは締め上げている赤い外人侍を見て抵抗さえせず受け入れている仕草を見て憎しみの表情と、どうしてなの風に不思議そうな眼を出しながら締め上げている赤い外人侍の両眼を見る。

作者&赤鉄2主人公「「（何故俺達はこのような行為を受けいるのに、何故“反撃”する指令（プログラム）が入ってない？俺達の指令を送る中枢を再検索して…）ん？何だコレは…？」」

逆に外人侍達は決して殴られ首を締め上げている人間（シャイナ）を、何故手を出さずに無抵抗のままシャイナの行為を受け続けているのか理由も解らず、シャイナに首を締め上げながらも身体の中の指令（プログラム）を再度チェックする。

身体の中の指令（プログラム）確認だけでなく二人の混合体の構造内容も確認するように見て、無言のままその要因を数秒探った後、混合体の身体に無い何かを見つけてはっとするような表情でも出す。

作者&赤鉄2主人公「「身体構造主目的（メインプログラム）内容再確認…検索…１０…２…一件有り。（？圧縮指令（サブメモリー）凍基盤が入っている？？しかもまだ解凍されていない基盤だ。これは…？）」」

検索した彼らの脳内中枢の隅にあった隠れた解凍されていない圧縮（サブ）指令（メモリー）基盤、二人の外人侍は不可解な思いでも表情に出しているような機械的な言語を吐きつつ、解凍されていない圧縮基盤にアクセスする。

作者&赤鉄2主人公「「圧縮基盤（サブメモリー）解凍開始。…解凍されるまで後９０秒…（これは何時俺達の中枢指令に入っていたのだ？まさか古人

達による追加記憶内…いや…違うっ！…この基盤は元々…！？）！
エラー発生…中枢神経に異常！…緊急措置として通常指令に戻し…
ぐっ！？」」

シャイナ「へっ！？Σ（ ゜Д ゜ ；）」

バチリとシャイナが首をきつく絞めている赤い外人侍と後ろにいる半透明の女が突如頭部に電流みたいな光が複数走り、シャイナは突然の出来事で反射的に首を絞めていた両手を離す。

シャイナの手から解放された赤い外人侍と背後に出ている半透明の女も頭部の額に右手を当てながら顔を下に俯いて、頭部に稲妻が走りながら苦渋の表情を出し先程解凍した中枢の基盤（メモリー）の内容についての不可解な事を脳内で見ながら半立ちの状態になる。

作者&赤鉄2主人公「「も…問題解決不能…な…何だコレ…再度緊急処置指令を発…は！？俺達の…過去の試験戦闘…エラー発生…記録？それと人間だった頃の“俺”“私”の記憶！？コレは一体何を意…味する！？？？！！俺に…私にザザザは何の…解凍された基盤がガガ…更に追加記憶内容受…シシシ信…再度こ…事だか！？」」

シャイナ「ちょ…ちょっ…何か凄い事になっているしｗｗｗ」

所々“初代ファ●コンプレイ時のプログラムがバグッたような状況

”になって、右手に額を当てながら苦しんでいる外人侍の声が女性の声と男性の声が交互に混じる。

一部音程が画面が乱れるようなクソ五月蝿い音も聞こえて、シャイナは先程の憎い表情と違って段々とおかしくなって壊れていく混合の二人を心配するような表情を出す。

作者&赤鉄2主人公「「要領な規…テテ定んん限界！…き…緊急処シだョショ…置…何なんだ!?…オオオ俺わわわわわ私ニ中秋神経指令要領ニニニ…」」

―指令内容に沿って殺し屋という思考を持つ“俺達”に…一体何を伝えようとしている!?―

混合体の二人は要領が大量過ぎる記憶内容に苦しみ破壊されていくような不可解な思いも寄せながら両眼を閉じて、脳内で過剰に今までの通常指令(メインプログラム)内容が急速に書き換えられていく不快感を覚えながら意識を手放していった。

…

……

……

此処は何処だ?何処の保存記…何言っている“メモリーフォルダ”

だ?? …何? こんな言語など俺達には知らないぞ!? これはどうしたというんだ!?

記憶が書き換えられて意識が何もかもぶっ飛んだ後漸く収まって混合体は再び眼を開けると、何もかもが真っ白な世界で脳内にある記憶を保存する基…否自分が知らない言語を吐いていることに驚き、更に混合体は自身の変化に気づく。

!? 俺達が“驚いている”!? それに“戸惑う”ことも…いやそのもの自体が追加され…追加とは一体!? …コレは…! そうか…これは…アノ女が言っていた…

人が持つ感情か? と自分の右手の平を繁々と見ながら呟いた時、前方から電子のような機械音が鳴って混合体はハッとなって自然に左腰に付いている刀の柄を右手で握って、何時でも引き抜けるような臨勢体勢になる。

何奴!?

数メートル先の前方に立つ白い輪郭で裾のようなものがユラユラと横に揺れ、その白い輪郭で覆われた人のような物体を混合体は睨み付けるように見ながら、チャッと自然に刀の柄を右手で握りながら鯉口を左手親指で切った時…

よしよし、模擬体に人間のような感情表現を追加する実験は成功みたいだね。あー良かった良かった♪長年キミの圧倒的な“滅び行く私達の世界に無かった唯一の残すべき美しい身体”にね。ハハハッ！

誰だ！？貴様っ！？滅び行く世界！？一体何を言っている！？

ありゃりゃ？覚えてな…いや、誰だよぉ？この美しい身体に俺が作った“感情制御プログラム”の発動後“時間性自動初期化プログラム”を入れた馬鹿はｗｗｗ色々と私達が開発した“人類最後の遺産”にこんなくだらねぇ内容を内蔵した奴ｗｗｗ

！？人類…最後の…遺産！？お…俺達がお前達が言う…

混合体は訳の分からないことを次々と早口で言う輪郭の人物を聞いて、はぁ？と困惑したような表情を出しながら鯉口を切っていた刀を自然に元の鞘の中へと仕舞ってしまう。

アッハッハッハ！本当に“忘れていやがるぜ”！！過去に俺達が混合体（オマエ）に“血塗れになるまでの戦闘実験内容”と“平行世界（パラレルワールド）から拉致った女を使った俺達が作った創作人間の制御・改変実験内容”のこともなっ！

ああｗｗｗ特にあの拉致ったあの女の叫び声がタマランかったなぁ～ｗｗｗ「嫌！嫌！！放して！放してェェェ！！！」てね。あの声

がもうエロすぎてついつい俺は性欲を持て余しｒｙ（

溜まらんなぁ～ｗｗｗ俺達が作った創作人物との背中合わせに励ましあう姿も見たぜぇ？後々戦闘用兵器として改変されるというのに…ウフフｗｗｗ

ハッハッハと前方の輪郭で出来た人間…否その後ろにも同じような輪郭で出来た人間達がいて、全員が腹をくの字に折って“全てが初期化され人間のような感情になってしまった最強の混合体”を可笑しく笑っていかのように見ながら言う。

貴様らが言っている意味が分からん！戦闘実験！？平行世界から拉致した女！？…く…余計に頭が痛い…。何なんだ…

おやおや本当に“何もかも忘れてしまった”ようだねぇ“戦闘用模擬体１４５６０２４５７９３号”。力は圧倒的な技術を持っているというのに…統計的に機密な動きなどもうあの時以降を最後にして今からはもう不可だな。嗚呼、折角の我々が滅び行く世界の中で決死に開発した“人類最後の最強の戦闘用模擬体”がこのようになってしまうとは…

ああ…残念…失敗だ…最高級の体がもうこんなになるなんて…“初期化プログラム”を入れた奴を呪いてぇよ…

再び混合体の頭部にジーンと繰るような頭痛が発生して混合体は額に両手を当てながら顔を俯くようにした時、前方にいた輪郭の人間達は惜しむような声を吐いて一人づつ今いる白い世界から消えていく。

ま…待て！俺達は…

聞きたい事があるんだ！と前方で消え行く白い輪郭の人間達に向けて左片手で額を押さえながら右腕を前へと伸ばして、あと数メートル先にいる消え行く輪郭の腕らしき部分をあと少しで握る。が…

失敗作にはもう要は無い。“戦闘用模擬体１４５６０２４５７９３号”、お前は破棄（ロスト）だ。

！

腕を伸ばしてくる模擬…否人間はもう要らない見捨てるような酷の台詞を吐いた直後、赤いコートを羽織った外人侍が伸ばした右腕が空を切り、それと同時に今いる白い世界が硝子のように崩れ落ちていった。

第百七十五曲　残念！貴方の冒険は此処で終わってし…んなわけないｗｗｗ

―妖精界　リュミエール　裏通り―

？【！！ぁぁっ…！ハァ…ハァ…！！ぁぁっ！！】

場面は現世の妖精界に変わり空には背景に合わない虹色の上空の下で細かい火の粉が宙に舞い、焼け焦げた新鮮の死臭が風で運ばれ“敵の長”がいる北西へと歩んでいた最中、突如ディクと共鳴（リンク）していた赤黒い外人侍が苦しむように叫んで両膝から地に着ける。

ディク『！？どうしたんだ“フラムエール”！？一体…』

フラムエール【わ…分からないっ！…と…突然俺達の中枢神経路（メインアクセス）…な…何を言って…うぐっ！！】

長神刀（フラムエール）と共鳴（リンク）しているディクの声が悲鳴に近い驚愕声が上がる中、赤黒い外人侍“フラムエール”はガタガタと震え額から汗を大量に流しながら、心の臓がある胸に向けて右腕を伸ばし右手の平を当てた直後…

フラムエール【ハァ…ハァ……通常指令基盤（メインプログラム）が…！？メインプログラムとは何なんだ！？クソッ！！んっ！？初期化プログラム！？これも何だ！？俺達は何故こんな訳の分からない言語を言っているんだ！？不可解すぎる！！！！】

ディク『フラム…エール？』

背中を折って左手を路上へと付けながら倒れかかる身体を必死に支えながら苛立つように言って、長神刀と共鳴（リンク）しているディクは機械的だった人擬きの人形が突然本来持つべき感情を持つ“人間”のように変わってしまった長神刀（フラムエール）の姿を不思議そうな表情を出しながら見続ける。

ディク『一体どうしたんだよフラムエール！？前のような機密めいた台詞と機械的な行動を取っていた“お前”は一体何処に行ったんだ！？』

フラムエール【！？機密！？機械的な行動だと！？何を言っているんだ“ディク”！？俺達は…はっ？たしか…俺達…最初初期化プログラムといった…よな？】

ディク『（えっ…俺の名前をそのまま言った！？…フラムエールの記憶が混乱しているのか？じゃぁ、一体フラムエールの精神に何があったんだ！？）あ…あぁ、それが一体？？』

フラムエールは背中を折り額に右手を当てながら自分と共鳴（リンク）している刀の契約者に言い、ハァハァと息苦しい吐息を何度も口から吐きつつ苦情の表情を出して続けて言う。

フラムエール【推測だが…多分俺達はお前と共に共鳴（リンク）した女の影響で、俺達の中にあった通常指令内…いや“前記憶が何もかも消去（デリート）さ…消去！？何だこの用語は…俺達はまともな自動保険保存基盤（バックアップデータベース）…！！またか！！クソッ！俺達はまともなことを吐くことが出来な…永久消去不可感情抑制プログラム作動…！？次から次へと！！クッ！！】

ディク『フラムエール…』

ディク視点で理由は分からないが何故今までの機密な行動を取っていた武器が突然、“記憶を無くし個性豊かな感情を初めて持った人間”になった共鳴（リンク）相手を見てディクは困惑した表情を出した後ふと今主目的以外のするべきことを思って、共鳴（リンク）しているフラムエールに決断する。

ディク『（このままじゃ“危険”だ。精神が乱れている彼等の今だと、この先何が起こるかまだ…）…フラムエール、共鳴解除（リンクダウン）しよう！何故お前が“このようなことになってしまった”原因が分からない今じゃ、この先にいる妖精界の王ともし戦うことになると…厳しくなる！』

フラムエール【！】

フラムエールは自身と共鳴（リンク）し励ますように言うディクに言われた後、はっとなるような驚愕の表情を出して胸に左手を当て不安の表情を出しながら、ゆっくりと地に着けていた両足に力を入れて立ち上がる。

フラムエール【ディク…だが…】

ディク『大丈夫！今はお前の精神が安定するまで俺がシャイナと子（エッ）犬（イオ）を何とかする！！いや“絶対に護る”から！！』

フラムエール【ディク…】

ディクの今のような状況になっても絶対に動揺しない力強い意志を聞いたフラムエールは、胸を押さえている左手甲の紋章が一瞬光り高い鼓動をフラムエールは耳で聞いた後…

フラムエール【…共鳴解除（リンクダウン）。…ディク…】

ゆっくりと両眼を閉じて胸を押さえていた左手と額を当てていた右

手の腕を下ろして背を少し曲げながら顔を下に向けた直後、すまないと小さく言ってフラムエールの全身に赤黒い光りが全体を覆うように昇って光りが止んだ後、元の共鳴（リンク）する前の背中に長神刀を携えたディクへと戻る。その時…

シャイナ「ちょえぇえぇえぇえぇえぇえぇ！？？？！！何　故　こ　の　よ　う　に　な　っ　た　ｗｗｗ」

犬ツィオ「キャフン♪」

ディク『あ…Σ（・・）』

一緒に巻き込まれたシャイナと子犬（エツィオ）はディクがいる路面上でなく“上空”にパッ♪と登場して、数秒宙に浮いていたがそれは一瞬のことであり引力にしたがってシャイナと子犬（エツィオ）は大の字になるように地上へと落ちる。

シャイナ「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！落ちる！潰される！！パンクする！！！挽き肉になるぅぅぅぅぅぅ！！！！」

犬ツィオ「キャィ～ン♪」

シャイナの絶叫が地上へと突き刺さるように轟く中、子犬（エツィオ）は数秒間

だけの空中水泳でも楽しんでいるように、一緒に地上へと落ちながらも“犬掻き”しながらほのぼのと遊んでいた。そして…

シャイナ「ぁぁぁぁぁぁぁぁあああああああああああああなたたたたの冒険はもうおわタタタタッタタタッタアアアアアアアア！！！！！／（＾ｏ＾）／」

ディク『よっと…』

逸早くシャイナと子犬（エッィオ）が落下するであろう場所にいたディクは両腕を上へと上げて、落下してくるシャイナを抱き抱えるように受け止める。その後…

ディク『エッィオ！』

犬ツィオ「キャフン！」

遅れて落ちてくる子犬（エッィオ）を背中に仕舞っていたトキの翼を出して両翼を“人間の腕”に変え両手を添えるように広げた後、子犬（エッィオ）は花のように開く手となった翼の中へとポフッとどこかで効果音が鳴って無事に怪我も無く一人と一匹を救出した。

シャイナ「フヒーフヒー…あ…危なかった…サンキュ！“ディク”

サァァン。」

ディク『良いって良いって…て…俺の名前をやっと素で言ったなｗｗそれと俺の名前の後に“サァァン”は一体ｗｗｗ』

シャイナ「え?だってアンタの背中に“真黒い世界の中で機械的だった人形が突然感情に目覚めたポン刀”と今レッ●ステール２のバトルスタイルだもんでついついｗｗｗ」

ディク『!あっ…そうだ!!なぁシャイナ、俺とフラムエールと共鳴(リンク)していた最中に何があったんだ!?何時ものようなアイツの態度が前よりも…』

ディクは息切れているシャイナの“とある台詞”を聞いて何かに気づいたように表情をはっとさせた後、抱いているシャイナと背中の翼で包み抱かかえている子犬(エッィオ)を下ろした後、精神内の深層区で何があったのか“それを見ているシャイナ”に向けて言う。

シャイナ「…深層区?ああ私がエッィオの身体の中に取り込まれた時のような場所のこと?私はただ能面面で機械的に喋るアイツらが気に食わなくて“殴ったり”“首を絞めたり”“壁らしき所に叩きつけたり”したんだけど全然“痣一つも付けれなくて”色々とムカついたが…」

ディク『ちょΣ（´-Д-、　；）ｗｗｗき…君のような“女の子”が長神刀(フラムエール)をな…なななな…』

ディクはシャイナの外見から見て若干言葉使いは変＆ａｍｐ；荒いように悪いものの“女の子らしく可愛らしい部分”があって暴力的な部分は無いと思っていたが、裏は“超★ドSなワイルド女”のクソド黒い性格を持っていたことに、ディクはどよよと青ざめながら身を若干引いていた時…

シャイナ「突然アイツラが苦しみ始めて、“初期化プログラムとはなんだぁ！”とか“滅び行く世界で何を!?”とか“何故俺達を廃棄するんだ!?”とか変に暴れながら叫んでいたんだよ。一体どうしたんだか…」

ディク『（!?“滅び行く世界”？どうゆう意味だ??まだこの“星”は滅んではいないハズ…）…一旦ゆっくりと話せれる場所に移動しよう。この世界の王と会うのは後回しだ。』

ディクは一旦今起こったことをキチンと整理が出来るまで退くべきだとシャイナに告げた直後、シャイナは当然「そうね。」とディクの意見に賛成するように言い二人と一匹は一旦目的地へ行くのを後回しにし、何処か落ち着いて話が出来る場所へと移動していった。

第百七十六曲　初期化された模擬体からのチョピッとした過去の事実談

―妖精界　リュミエール　裏路地―

ゴォォォ…

ディク『成る程…フラムエールは中にあった“密かに入れていた圧縮基盤（サブメモリー）”を解凍した時に自動何とかという初期化プログラムも同時に発動してこのようなことになっちゃったのか。うわぁ…こりゃ面倒なことにｗｗｗ』

前話での理由で目的地（リオリーネに会う）へ向かうのを中止したディクとシャイナと子犬（エッティオ）は、一旦引き返した後安心して話を整理出来る誰もが見つかんない場所へ移動し舞台は路地裏へと移る。

途中ディク達を探していた妖精達が刃向かってきたが、ディクは直ぐに両腰のホルスターの中からリボルバーを出して、両手に持つ短銃のトリガーを引き全弾頭に当てて瞬殺し裏路地へと一時身を隠した後、少しシャイナから精神内での出来事の話を聞いて今に至る。

作者＆赤鉄2主人公「「…。」」

ディク『フラムエール…何か手がかりは無いのか？お前が突然記憶を無すように埋められた“滅びる世界の時の人物”せめて名前ぐらいは…』

ディクは路地裏にあったキャラメルブロックの形をした菓子木箱の上に胡座掛けるように座って、顎下に左手甲を当てながらしかめっ面を出しつつ隣に立つ背中を向けている相棒（フラムエール）に顔を向ける。

シャイナ「まさか…本当に人格が変わるとはね。初対面からにしてまだ数分も経っていないのに…」

犬ツィオ「ワフン。」

シャイナは背中に壁へ寄りかかるように立って両腕を組み、首に子犬（エッイオ）がマフラーのように巻くような寝座り方をして、シャイナと子犬は同様にディクの隣に立つ、魔力で実体化し背中を向けている長神刀（二人の外人侍）を視線だけを横に動かして見ながら言う。

作者&赤鉄2主人公「「…。」」

シャイナ「（えー…何か更に寡黙になっているんですけどｗｗｗそれとも創り格好つけ？ｗｗｗ）」

ディク『（無理も無いな…突然起こったことなんだ。このような事後は心の整理がまだまともにまとまる事すら儘にならないし…）』

混合体は変な威圧で視線を刺しているシャイナと刀の持ち主（ディク）を受けつつも二人と一匹に背を向けたまま黙って両腕を組んで、顔を上に上げて濃い虹色の上空に舞う火の粉をうろ覚えな薄い視点でぼんやりと見る。

混合体…否二人の外人侍は背後で視線を注いでいる二人と一匹？を感じながら数秒前を置いた後、ゆっくりと口を開いて今までの自分のこととありのままに起こったことを彼等に語る。

作者&赤鉄2主人公「「女とディクが言うよう俺達…いや“俺”は、前の人格は“機密な行動”を取っていたのだな。俺の過去は平行世界（パラレルワールド）から連れ去ってきた“俺の中にいる一人の女性”を“二次元に創られた俺…模擬人体容器（レプリカント）”の身体（なか）に組み込んで、滅び行く世界の唯一の元に戻す対抗手段…分かりやすく言えば“最強の人間のような感情ではなく動作に近い遺産”として創られて…そして俺は…夢の中で“破棄（ロスト）”されたんだ。」」

ディク&シャイナ「『！』」

淡々と慣れない感情と忘れられた言語が次々と脳裏の中で溢れるよ

うに出て次の言葉を吐き捨てるように言った時、二人の外人侍の後ろにいたシャイナとディクが虚を突かれたような驚愕の表情を出す。

作者＆赤鉄2主人公「「夢にしてもアレは俺にとって生生しかった…輪郭でしかない存在が複数いて、外見は何かしらの実験でも行なった白衣のようなモノだった。その存在が消え行く前に俺にこう言ったんだ。“かつて3億5000万人もいたこの星と同じ人間達がアノ日を境に完全蒸発した”しかし“全人類の完全蒸発を拒み抗おうとして人に似た二次元兵器（オリジナルレプリカント）を創ろうとして複数開発”でも…」」

二人の外人侍は目を細めて数秒両眼を閉じた後、精神世界の夢の中で出遭った…否、圧縮基盤（サブメモリー）を解凍した時に初期化プログラムだけでなく更なる秘かに埋め込まれていた追加基盤を同時に見て、そこに映った“過去の第三者が残した情報（遺言）”のようなものまでも入っていたため、その内容どおりに続けて背後にいるシャイナとディクに言う。

作者＆赤鉄2主人公「「二次元兵器（オリジナルレプリカント）の適応者が居なく共鳴（リンク）しても拒絶反応が起きて、制御不可になり暴走しそのまま破棄処分された“失敗作が多く出た”んだ。だがそれでも確実に滅び行く過去の人間達は諦めることすらなかった。どんな方法でも良い…二次元兵器（オリジナルレプリカント）の適応者を絶対に見つけてやるまでと…」」

シャイナ「それで二次元兵器（アンタ）が創られた時…その世界の状況はどうなっていたの？」

シャイナは長い話を簡潔にさせようと痺れを切るように背を向けている二人の外人侍に言った時、赤いコートを羽織ったガンマン若男と背後の上半身だけの半透明黒パーカー女が同時に振り向いて、真面目顔を出しながら更に話を続けて言う。

作者&赤鉄2主人公「「正式名“戦闘用模擬体１４５６０２４５７９３号”これが俺の本名だ。俺が創られた時はもう既に人類は“半分以下まで消失していた”。そして一人の最後の最高の頭脳を持つ最後らしい科学者が“平行世界（パラレルワールド）とを繋ぐ技術に成功し”、漸くその平行世界（パラレルワールド）から俺の身体に合う“適応者”との共鳴（リンク）に成功する。だがもう成功してももう既に遅かったのさ…」」

ディク『そうなると一回この“星”は滅んだことになるのか？ん？待てよ…そうだとしたら俺達が生まれる前も…この星の歴史は…』

シャイナ「ねーねー…もうそんなクソ真面目すぎる展開は終わりにして次に進もうよぉ～ｗｗｗ話が長くて長くて飽き飽きしてきちゃったｗｗｗ」

犬ツィオ「キャゥゥン…キュゥ…」

作者&赤鉄2主人公&ディク「「『…σ（-_-；）』」」

突然のＫＹ声にディクと二人の外人侍はハァ？（。Д。）と呆れたような表情になって同時にシャイナに向けて顔だけを動かすと、路地裏の無造作に置いてある菓子木箱（キャラメルブロック）を上に重ねるように寄せ集めて、足元に居る子犬（エツィオ）も一緒に“ジェンガ”遊びをしていた。

犬ツィオ「キャン！キャウキャウ！！」

シャイナ「んぁ？こっちを抜きたいのエツィオ？こっちだと落ちちゃうんじゃね？？ｗｗｗ」

犬ツィオ「キュィィィン！！キュウウウウウウ！！」

一つ目の中腹辺りの菓子木箱を抜いたシャイナは手が細くて使えない子犬（エツィオ）手代わりへとなり、子犬が吼えた方向に向いてエツィオが言う抜くべき明らかに重柱を支えている菓子木箱に手を掛ける。

シャイナ「本当に良いね？エツィオ！？んじゃ…おぉぉっ！！」

カタンとエツィオが吼えた菓子木箱を抜いたシャイナは、重柱らしき部分が抜かれてもまだ“微妙な傾きすらしないで平然と真っ直ぐに立つ重ねられた菓子木箱”の姿を見て、シャイナは外人四コマのようなガッツポーズを取りながら興奮する仕草を出す。

シャイナ「えぇぇ～!?なんで重柱らしい所を抜いても倒れないんだろｗｗｗ科学って理屈だけじゃ分からない不可解な所もあるわねぇ～ｗｗｗ」

犬ツィオ「キャン♪」

シャイナはまだ倒れない菓子木箱の姿を見て不思議な表情を出しながら見続けて、シャイナの足元に居る子犬(エツィオ)はどんなもんだい！風に得意げな表情でも出しているかのように尻尾を何度も横に早く動かして、高めの声を天に向けて吼える。

作者&赤鉄2主人公「「ったく…このような状況なのに、暢気な女と子犬に変じた魔ノ神め…。その余裕は何処からくるのだ??」」

ディク『…まだ彼女と出会って数日しか経ってないけど…その余裕が出来るほどの強さは“俺達”と出会う前に“色んなことをその眼で見てその身で受けてきた”んじゃないかなぁ～?前世紀のフラムエールの世界に無かった“もう一つの変わった世界”というのを…』

作者&赤鉄2主人公「「滅んだ後に出来たこの星の“新しい世界”…か。」」

ディクと二人の外人侍はお互いシャイナと子犬(エツィオ)が“火の粉が舞う地

獄絵図のような世界で揚々と遊ぶ”光景を見て、半分呆れながらも表情は微笑ましい光景でついつい笑みに満ちた表情になりながら両腕を組んで遊んでいる彼らの姿を見る。

ディク「それで“フラムエール”…話は変わるが“戦闘技術”も初期化プログラムと共に一からなのか??」

ディクは隣に居る相棒（二人の外人侍）に顔だけを向いて、これから行く次回の戦闘シーンに何かしらの支障は無いかと聞くが…

作者&赤鉄2主人公「「いや、“戦闘技術”は初回（はじめ）からではなく“通常通り”だ。消えたのは俺の“過去の記憶”のみ。戦闘は何も…」」

支障は無い!と二人の外人侍が言った直後、左腰に装着していた刀の柄（●iiリモコン）を右手で握るように取った後、静かに刀の鞘から抜きながら視点を上空に舞う“火の粉”に向けて半分刀身を出した。

第百七十七曲　私を信ジテクダサァーイ！騙されたと思ってシンジロォ～♪

―妖精界　リュミエール　目的地に繋がる路地裏通路―

ゴォォ…！

シャイナ「熱っ！！全く私の後ろにいる“浮遊霊憑き長身ガンマン野郎”ＭＥ！！遠距離で敵を殲滅したと言ってもこの火の粉のせいで“無差別火災”を少なくしてほしかったんですがｗｗｗ」

犬ツィオ「キュゥゥゥゥン…」

タタンッとディクに抱き抱えられて谷間の中に子犬（エツィオ）を入れられていたシャイナは、目的地へ向かう度に空中に舞う火の粉が“火に弱い建物に点火”して火災が発生し次々と建物が焼け燃え、菓子で出来た素材なのか熱風だけでなく“砂糖がスミのように焦げるクソ苦甘い臭い身を受ける。

シャイナの谷間に丸くなるように入っている子犬（エツィオ）も、周囲のクソ甘焦げる変な臭いに嫌味を刺したか不快の表情を出しながら小さく唸り声を上げる。

作者&赤鉄2主人公「「仕方無かろう。例え今までの記憶が全て無くても“何らかの過去に訓練された俺自身の業(カルマ)”が“そのままの形として出てしまったんだ”。何にせよ俺は“ディクに害なす敵”に対しては加減など無用。身知らずの周囲のことを考えるなど俺は甘くない。」」

シャイナ「ケッ…クソ並みに歪みねぇなアンタｗｗｗ」

犬ツィオ「キャウッ…」

次々と建物が焼け燃えて一部は建物ごと今いる通路に向けて焼けながら倒壊するモノがあったが、ディクの後方に走る実体化した二次元兵器（模擬体）の右手に持つ●刀&●ｉｉリモコンをディクの頭部に向けて落下してくる火付きの建物の素材に向けて横へと振り、刀身（又は●ｉｉリモコン）から飛ぶ斬撃が発生して火が付いた破片を全て“素材ごと焼失する”までに消し飛ばす。

作者&赤鉄2主人公「「話を戻すが今の状態だとディクはお前を両手で支えているから周囲に対しての対応は皆無。その為に俺が実体化して“目的地に着くまでにディクを守る。”ように行動をしているのだ。決して“プログラム”というモノで動いている訳では無い。」」

シャイナ「あっそう…（しかし本当に変わりやがったｗｗｗ先程までの態度と偉い違いｗｗｗ）」

抱かかえられているシャイナは後方で支援斬りをしている二人の外人侍の姿を顔を後ろに向けて言い、長身大のガンマン一人と背後の浮遊霊は刀の名付け親を焼かれて倒壊してくる建物に向けて刀＆●ｉｉリモコンを振り翳し、スパスパと斬り捨てていく彼等の姿をシャイナは少し口を開いて虚が突かれたような表情を出す。

シャイナ「しかし本当に変わったのかねぇ～…出会ってまだ数時間しか経ってないのにこのキャラの変化ぶり…いくらこのチート小説でも疑いが出るし信用ならねぇな。（、８′　＃）」

ディク『信用していないのかシャイナ？だって両手が使えない俺に対して“あの過保護”だぞ？前はこのような“細かいことを気にかけてくるぐらいの過保護的な行動などしなかった”んだからさ…』

抱かかえられているシャイナは口を八の字にさせてブーイングでもしているかのような素振りでも出しながら、ディクの背後にいる懸命に刀（●ｉｉリモコン）を振り翳す二人の外人侍を信用しきっていない台詞を吐く。

ディクはまだ背後にいる相棒（フラムエール）を信用していないシャイナのブーイング素顔を見て軽く苦笑いし、顔を抱かかえているシャイナを見下ろすように向きながら再度前方に向けて顔を上げようとした時…

シャイナ「へっ…幾ら良い事を言っても私は信じるもんか！きっと何処かでまた同じような展開になると思うんだＹＯ！もしかしたらこの後にうちらを裏切るような要素がス…！？」

ディク『あ…（・・）』

視点をシャイナに向けてまともに前を向いていなかったのか目の前に“焼けて倒壊した建物の柱が前方に突き刺すように倒れてあって”、尚且つ焼けた柱の先が鋭利に尖っていてシャイナを抱き抱えるディクごと胸から貫くように設置されていた。

ディク『ヤベ…急には止まれ……』

シャイナ「ギャエエエエエエエエエエエエ！！！！！」

３００Ｋｍ以上の速さで走るディクの足は直ぐに止めることが出来ず（どう考えても無理ｗｗｗ）あと数秒でシャイナごと背中を食い破り、落ちた柱の先端に燃える業火が二人を串刺しにすると同時に二人を炭になるまで焼き焦がす…しかし…

作者＆赤鉄２主人公「「！すまんディク！！お前をかっ飛ばす！！」」

ディク&シャイナ「『オブッ！？』」

ドガスッといつの間にかディクの速さに追い付いていた二人の外人侍が側面からエルボータックルで、シャイナを抱き抱えているディクごと思いっきり横にかっ飛ばす。

ディク『うぉっ…！くっ！！』

シャイナ「シャブビッ！！」

二人の外人侍のエルボータックルで吹っ飛ばされた二人はディクはシャイナと谷間にいる子犬（エッィオ）に激突の激しい衝撃を与えぬように、確りとシャイナを抱きしめながら自ら背中から壁にぶつかって自らが防壁となって一人と一匹の無事を作る。

ジワッと背中にぶつかった衝撃で波動のような感覚を受けながなディクは歯を食い縛り、ふんっ！と全身に力を入れて同時に息を吐いた後、前世紀エッィオに鍛えられてきた振動外圧（小ダメージ）を全身から弾き出す。そして次に見た光景は…

作者&赤鉄2主人公「「ぐ…はっ…！」」

ディク『！フラムエール！！』

シャイナ「あわ…わっ…（（（（（（（（。Д。；））））））））」

ディクとシャイナを庇った二人の外人侍は右胸から背中に掛けて設置されていた鋭利の柱を貫いていて、鋭利な柱先から赤い血がベットリと付いて柱に沿って赤い血が一点に動き出す。

ディク『フラムエールゥゥゥゥ！！！！』

作者&赤鉄2主人公「「ぐ！な…何の…これし…きっ！！」」

ディクの叫び声が響く中二人の外人侍は苦渋の表情を出しながらも右胸に貫かれた柱の一部に左手を掴んだ後、ズボッ！と貫いていた柱を前へと引き抜いて血付きの柱を何処かへと投げ捨てる。

作者&赤鉄2主人公「「ガハッ…クッ…ッッッ…！！」」

パタタッ！

柱を不器用に引き抜いた二人の外人侍は更に右胸から血が大量に噴

き出して片膝を地に着き、感情に目覚めた影響で首から鼻上まで被っていたファスナーを空け素顔が見える口からも血が吐き出され、更に状態が悪化していく。

ディク『!クソッ…俺が確りと前を見ていれば!しっかりしろフラムエール!!』

ディクは直ぐに相棒を治癒するべく一旦シャイナを路上に抱き下ろし重症を負ったフラムエールへと走り寄って、右胸からジワリと滲み出るように下へと落ちていき足下に口から吐かれた血が段々と赤い水溜まりになっていく。

ディク『息を吸ってフラムエール!今から「「大丈夫だ…ディク。黙って見ていろ。」」おっ?』

ディクは貫かれた右胸に向けて右手に集中した癒しの魔力を翳そうとした時、二人の外人侍は右胸に翳されるディクの右手を右手で押し退けるように遠退いた後…

作者&赤鉄2主人公「「俺は“この星の前世紀の最後の完成体の兵器”だ。少しこの身体のことについて調べたら、“他の兵器以上の自然治癒能力がある”。動揺せず落ち着いて何もかも脳裏に考えないようにすれば…」」

治癒は更に早まると言った直後、二人の外人侍の右胸から背中にかけて貫かれていた傷が“服ごと完全に修繕されるように塞がって”、路上に落ちた血は一つ一つの“風の気流へと変わり果て”、二人の外人侍の全身に落ちた・吐き出された血が身体の中に戻る。その直後…

作者&赤鉄2主人公「「よし、修繕完了っと…怪我は無かったか？ディク？？あと…人間のお前と魔ノ神。」」

ディク『え？ふ…フラムエール！？』

シャイナ「…おまっ…今の状況で言うべき台詞違ぇ…」

一時右胸を貫かれて瀕死な状態になったにも関わらず“自己よりも他人の安否を気遣うような台詞”を聞いたディクとシャイナは信じられん風に顔を作って更なるキャラの性格が変わったことに少し吹き捨てた。

第百七十八曲　嘘をつきやがったなこの@▼※☆野郎！！じ…次回こそ妖精王に

―妖精界　リュミエール　北西大通り辺り―

ビリキナータA―ギャァ！―

作者&赤鉄2主人公「「このような“下らん結界を張った馬鹿者”の場所を全て吐け。押し潰されたくなければな？」」

上空の火の粉を背景にドスッと妖精の背中から生えていた羽に●刀を突き立ててそのまま路上に背中から転倒させた後、更に妖精の腹部にブーツ底を陥没できるぐらいに強く踏みながら、冷たい視点で見下ろすように尋問する。

シャイナ「ねぇねぇ“そこの危ない霊憑き外人侍サン”？ｗｗそんなに強く踏みつけていたら、口から内臓がオゥフ♪と飛び出ちゃうよｗｗ」

シャイナは二人の外人侍の右足のブーツで強く踏みつけられて顔が真っ青になって苦しんでいる妖精の姿を見て、梅干し口になっている今でも口の中に何か溜まって吐き出しそうな状況に、踏みつけて

いる二人に軽く苦笑しながら言う。

ディク『ＨＡ☆ＨＡ☆ＨＡ☆！！大丈夫だってシャイナ！例え口から何かが飛び出ようとも俺が“直々中へ無理矢理仕舞うから”ＳＡ♪』

作者＆赤鉄２主人公「「それは駄目だディク。武器状態（仮死状態）だった俺を大事にしてくれた恩人のお前が、この“糞蟲相手の臓器”なんぞ直々触るんじゃない。もし吐かれたら俺が―ギャブッ！！―ん？」」

ディク＆シャイナ『「あ…（・・）」』

外人侍の“人外並みの怪力を持った脚力”で足蹴にされて遂に限界に達したか、足蹴にされていた妖精の口からシャイナの台詞通りにゴプッと“体内全部分の内臓”が血と共に飛び出して、白眼になりながらそのまま口から内臓が出たグロい状態で残酷★死♪した。

シャイナ「おまっｗｗｗ上記の“残酷★死♪”ってｗｗｗ確かに外人侍（ク●ガリ）サァァンが踏殺した妖精の状態はグロいけど、“★と♪は余計にクソ要らなくねぇか”？ｗｗｗ」

ディク『まぁまぁｗｗｗそこら辺は突っ込んじゃアカンよアカンよぉｗｗｗこの小説自体を書いている“作者”もふざけ楽しんでいる

もんだしｗｗｗ』

ドヨヨとディクは両腕をタコの足？のようにブヨブヨ♪とデフォで何処からか鳴らしながら、半切れ状態のシャイナに向けて口を八の字にさせてのほほんと突っ込む。

何故彼らがこのような状況になっているのか“展開がまったく読めない閲覧者達＆シャイナ”に、一応簡単形式としてｇｄｇｄ風に乗せるとすると…

『―ク●ガリサァァンがディクとシャイナを庇って身代わりになった後、胸に刺さった燃える柱を引き抜いて前世紀地球の最終兵器としての最高性能を持った治癒を彼等に見せる。―

←

―しかし治癒後に目的地に向かっていた“敵の長”の気配が消える（おまけに魔力を封じる結界らしき気配が張られて“敵の長”の位置が特定できないハメにｗｗｗ）―

←

―しかたねぇから一旦“魔封じの結界を張ったそこそこ出来る妖精”を捕まえて、敵の長を特定するべく最初の妖精（上記）を捕まえて敵の長がいる場所を尋問していた。―

以上ｗｗｗ（笑）』

シャイナ「ちょっｗｗｗ間に合わせすぎてクソ笑えるよ作者ｗｗｗ！つーか作者って“俺らの目の前に居るんじゃねぇか”ｗｗｗほらっ、彼処のク●ガリサァァンの後ろにいる浮遊霊のあの…」

シャイナはそんなのほほんとしているディクをガン無視しながら、赤いコートの長身男の背後から出ている上半身だけ半透明の見掛けでシャイナと同じ歳に見える女性に向けて何度も右人差し指を指す。

作者＆赤鉄２主人公「「俺の後ろに出ている１４５６０２４５７９３番目の適応者は二次元兵器と共鳴（リンク）した際に肉体を完全に失っている。俺があの時“彼女に会った時の思い出”としての姿を“妄想投影（オリジングメージ）”しているのに過ぎない。だから、断じて“彼女”はこの小説を書いている“三次元人物”と違うのだ。」」

シャイナ「そ…そうっすかｗｗｗ（オフッｗｗｗ余計に意味解んねぇＹＯ…ｗｗｗ頼むから俺らのようなマトモな人間に解りやすい日本語をキボンヌｗｗｗ）」

ピシャリと妖精を踏殺した赤いガンマン男に超真面目顔（マジ☆イケメソ）で言い返され更に“ややクソ難しいチート小説での用語（ワード）”を聞いたシャイナは数秒現実的の願いが入った思想を思って全身白く石化したが…

ディク『うん！無理ポ♪ｗｗｗ（テメェのＤＱＮ並みのＩＱじゃ、俺らのようなチート集の意味フ言語に付いてこれかっつーのｗｗｗプププッ！）』

シャイナ「（、皿´＃）プチーン…」

ディクのドス黒いトドメの毒舌攻撃でシャイナは（´・ω・、）ショボーン顔から“、（＃＃、皿´＃＃）ノ死ねぇぇぇぇぇ！！！”風の鬼顔になって、鬼瓦面になったシャイナはディクに向けて小宇宙（コスモ）が宿った紫のオーラが纏う右拳を、タコのように蠢く“（＊´８、＊）まぁ落ち着けＹＯ★”とふざけ顔丸出しのディクの顔面に向けて殴り付けようとしたが…

シャイナ「死ね死ね死ね

作者&赤鉄2主人公「「（全く…契約者（ディク）も相変わらずだな。もうちょっと緊迫するような状況を持ってほしいが…）」」

二人の外人侍はこのような状況でも楽しむように暴れまわる？（ただの喧嘩）二人の姿を見て、クスッと口元を吊り上げて腕を組みながら微笑んでいた時…

犬ツィオ「キャン！」

作者&赤鉄2主人公「「？何だあの女と共に行動してきた魔ノ神よ？？」」

いつの間にかシャイナの谷間から降りていた子犬（エッィオ）が二人の外人侍の足下に居て、チョコンと座った後尻尾を早く右往左往に動かして軽く吼る。

犬ツィオ「キャンキャン！！」

作者&赤鉄2主人公「「？何、何時もの事だと？？あれがか？魔力が使えぬ今の状況だと“苦い戦況”だというのに…ん？」」

二次元兵器（レプリカント）の機能のおかげなのか二人の外人侍だけは子犬（エッィオ）の言葉が分かるらしく、二人の外人侍は両眉を下に下げてしかめっ面を出しながら足下にいる子犬に向けて再度耳を傾けていた時…

ー例えどんな状況だとも“ポジティブ”に行かないといけないんだ。辛気臭いことばっかり重く引き摺っていると…もしこの後の戦いが待ち構えていたら“確実に負ける”。何故なら“魔力が使えない”“使う武器が不十分”“こんなに多くの人々を護れるのか”等の“人を不安させる要素”を一つでも持ってしまうと自己の能力を巧く表に出す事が出来ずそのまま朽ち果てる。だから…ー

作者＆赤鉄2主人公「「成程…あの行為は“自己が持ってしまった不安”を除くための行為（アクション）なのか。確かにあの様子ならば…」」

ーお前はどうなんだ戦闘用模擬体１４５６０２４５７９３号？あ…たしかお前の姿を見たことあるなぁ～ｗｗたしか…ー

二人の外人侍の足下にいる子犬（エッィオ）は足れ下がっている右耳に向けて右足先を何度もパタパタと動かしながら？く動作をし、子犬（エッィオ）は過去に二人の外人…否最後の二次元兵器（オリジナルレプリカント）は数秒両眼を閉じた後、ゆっくりと目を開きながら耳を？く子犬（エッィオ）の話を遮るように言う。

作者＆赤鉄2主人公「「俺は平気だ、魔ノ神よ。あの二人を見ていたら俺の中に渦巻いていた“不安”要素は消えた。消えた…といっても俺は二人を助け胸に柱が刺さった後“前向きに行こうと”決め

たんだ。俺はもう“感情の無いただ戦場で砕け散るだけの兵器”じゃない！」」

二人の外人侍が“カメラ目線”に向けていつの間にか抜刀した●刀（●ｉ･ｉリモコン）の刀先を前に構え決意を固めた台詞を吐いて、上空には複数の火の粉と燃え盛る建物を側面にカッコよく決める。

と…一そうかい坊主…一と子犬（エッィオ）はもう眠たそうな声を二人の外人侍に吐いた後下半身を丸く曲げ“まだ外人侍の背後で喧嘩≠殺し合いしているシャイナとディクの攻防”を背後に、ゴロンと眠り始めた。

第百七十九曲　●ルカの爆心地の中心で誓いを叫ぶ（笑）

―妖精界　リュミエール　北西広場―

作者＆赤鉄2主人公「「取り敢えずは来たものの…」」

ディク『居ないや。もう他の場所へ移動しちゃったのかな？』

前話の後二人の外人侍の背後で喧嘩＝殺し合いをしていた二人を、二次元兵器（オリジナルレプリカント）は力ずくで静止し黙らせた後、路上で丸くなるように寝ていた子犬（エツィオ）を拾って再出発し、魔力を封じる結界を張ったそこそこの妖精を全て容赦なくぶちのめす。（早すぎだろｗｗｗ）

しかし魔力を封じていた結界を解いても敵の長の気配は無く、取り敢えず二人の外人侍とディクは先程感じとっていた北西の場所へ来て、途中弾幕を放ってくる妖精数体を斬り倒し広場へ来た後、何か証拠となるようなモノを探していた。そんな最中…

シャイナ「うわぁぁ…これアンタがディクサァァンと合体した時に殺った力なの？ｗｗｗ凄いことになっていますがｗｗｗ」

犬ツィオ「キュルル…」

広場に来たシャイナは谷間にいる子犬(エツィオ)を大事そうに右手の平で支えながら、顔を右往左往に動かして周囲の状況を驚いた表情で見る。

生きていた存在が魔力で焼かれて炭化し、所々焦げ臭くなったタンパク質の死臭が漂って、路上だった部分や壁らしき部分に染み付くように付着する。

広場全体はベ●カの核でも使ったかのように黒く原型さえ留めない程抉られたように窪んでいて焦土と化しており、到る所の路上にはかつて妖精だったモノが身体の内部から外部まで全体炭となっていた。

シャイナ「うはっ…なんという東の小島国のような爆心地みたいな光景ｗｗｗ」

シャイナは歩む度にカサカサと何かが崩れる音を不気味に立てて、確りと踵まで踏み締めるとジャリッと“炭化した物体を刷り壊す”音を立ててシャイナは踏み度に鳴る炭化した物体を踏み潰す生々しい音を聞きながら軽く身震いする。

作者&赤鉄2主人公「「此所に増援として駆け付けていた小蝿共は

俺の前世紀最後の最強の魔力を撃ち出した“終焉ノ蛍火”という魔弾だ。雑魚は全て滅したが、肝心な敵の長となる残骸らしき物質が何処にも無いとなると…」」

ディク『持ち去ったと考えられるな。俺とフラムエールの共鳴した時の間接攻撃を肉眼で見て、この後の展開を読んでいたと解釈した方が良さそうだ。』

二人の外人侍は魔弾で焦土と化し所々隆起した路上へと次々と渡り割れた路面を右手で摩りながら言い、ディクは砂のようにサラサラと朽ち果てた妖精の残骸を右手で掬って、少しずつ立ち上がりながら溢しつつ真顔で言う。

シャイナ「でっ？これからどうするの？？もうこんなことしたからには、俺らもう立派な“殺傷侵略者”じゃんｗｗｗもう調査どころじゃないと思うけど…どうする？また森に戻って再度仕切り直す？？」

シャイナは右手人差し指と左手人差し指の先を何度も突っつきながら言い、“（´ε、）もう任務失敗（ミッションフォーレスト）ヤァンｗｗｗ”と口をタラコ唇にしながら違う場所で路上を手探りで調べながら行動している二人に言う。

ディク『そうだな。とは言ってもまた“彼処のウルトラショッキン☆ピンクックな森の中（第百六十三曲参照）”はもう入りたくない

ｗｗｗ色もヘンだし配色も場違いと言うぐらいに似合わないし、それにあの森の中はクソ五月蝿い小蝿と触手が蠢いている場所なんぞｗｗｗ』

ディクはシャイナの下へ飛び渡るように寄った後、頭部からモワーッと雲形の吹き出しコメントが現れて、その中央に初めて妖精界の森の中へと入ったあの“クソ気色悪い場面”を思いだしながら嫌み嫌みの表情を出す。そんな苦い思いをしている最中…

作者&赤鉄2主人公「「ならばディクと女が先程生け捕りした“メリル”という小蝿に聞いてみたらどうだ?今は逃がしてしまっているが、再度その小蝿を掴まえて我々の身を休ませる場所を得た方が良い。」」

バサッとシャイナに歩み寄ったディクの背後にいた二人の外人侍が上へと隆起した路面から落ちて来て、ヒラヒラと腰の二つの長い裾が落下する度に風で上へと煽られて、ピシッと両足から地に着いて右手の平を地に着けて着地する。

シャイナ「またあの台詞が長い“口だけ小蝿野郎”を掴まえるのかよｗｗｗまぁ確かにこの地に詳しい“情報”を得た方が後々動きやすいと思うし…」

ディク『たしか…これって東の島国で言う“毒を持ってぇ…何とか”だったような気がするなｗｗｗ色々と台詞が長くて五月蝿し、禁

止用語も平気でピーピーと吐かれるもんで精神的にも苛つくが…』

作者&赤鉄2主人公「「利用する分その部分を喋らせるだけだ。我々に必要な“この世界の知識”を頂いた後は、“用済みとして俺の手の平の中で消す(ころ)”。」」

シャイナ「ぶっｗｗｗこりゃ酷ぇなｗｗｗてかアンタが“ピーピー吐く五月蝿ぇ妖精をその手で掴まえる”つもりなのかｗｗｗ」

シャイナとディクが居る低地まで着地した二人の外人侍は“ピシャッと真剣顔を出しながら問題発言を吐きつつ”、スタスタとシャイナと契約者の下へと歩んだ後両腕を組んで一つの案を彼等に出す。

作者&赤鉄2主人公「「然り。前世紀の記憶は無くともこの新しい星の下で大昔、俺を助けてくれた恩人である契約者(ディク)に、翼が生えた小蝿ごときの…否“ディクに害なす全ての敵の血をその身に浴びさせるつもりはない”。汚れ役は…俺だけで良い。そう…決めたんだ。」」

シャイナ「え〝…ナニこの厨二臭い格好イイ台詞はｗｗｗ」

二人の外人侍は両目を伏せながら二人を通り越しつつ二人に振り向きながら言い、シャイナは（。Д。）ポカーンと口を開けながら臭台詞をかっこ良く吐くク●ガリサァァンを見ながら呆然と立ち尽

くす。

ディク『フラムエール…』

作者&赤鉄2主人公「「俺は本物だった前世紀の感情の無い最高性能だけの兵器と違う…俺はもう捨てられた“偽物”だ。元の自分の姿にはもう二度と会うことも、戻れることは出来ないが…」」

「「こんな偽物(オレ)で良いか？」」と明らかに“厨二臭い台詞”を聞いて石像と化しているシャイナと違ってディクは“真剣な思いを言葉として出す人間の感情を持った彼等”を見て数秒口を閉じて黙っていたが…

ディク『何があってもフラムエールはフラムエールだ。お前は偽物じゃないよ、フラムエールは俺達と同じ人間だから。』

表面は口元を上に吊り上げて穏やかな表情を出しながら彼等に向けて歩んだ後、右腕を前へと伸ばして差し伸べるかのように右手を二人へと差し出す。

作者&赤鉄2主人公「「…ありがとう。」」

二人の外人侍は無垢なる答えを出した契約者に感謝を表したかのよ

うに笑みを出した後、差し伸べられたディクの右手を左手で掴もうとした時…

作者＆赤鉄2主人公＆ディク「「『何だ…わざわざ出てくるなんて、手間が省けたよ。』」」

シャイナ「い〝いっ!!??!」

ズダァン!と銃声が突然鳴ってシャイナは不意討ちを喰らったかのように後ろへ飛び退くぐらいまで驚く表情を出した後、パチパチと両目を何度も動かして焦点を確りと合わせて今の状況を冷静に見る。

ディクの左手と二人の外人侍の右手（●iiリモコン）に“いつの間にか抜いた銃”が構えられており、二人が構えた銃口から速撃ちしたと思われる　一筋の煙が昇るように出ていた。その直後…

？《ま…まさか魔力で姿と気配を消している実体の無い私を“撃ち抜く”なんて…》

ディクと二人の外人侍が手にする銃で前方に向けて撃った所から、グニャリと空間が捻れる音を立てて段々と波打つように空気が揺れる。

作者&赤鉄2主人公「「俺に見えない存在などあり得ぬ話だ。それよりもさっさと姿を現せ。更にその身体に複数の風穴が開けたくなければな！？」」

ディクと二人の外人侍はまだ驚いているシャイナの前へと庇うように立って、二次元兵器（フラムエール）は残っていた左手を左腰に携えていた●刀の柄を手にとって姿無き敵に脅しを掛けながら鞘から引き抜く。

ディクは残っていた右手を右腰のホルスターに収めていた短銃を掴んだ後、右手の平の中で一回転しながら前へと突き出すように構えた時…。

？《貴方達はこの世界に入った途端“私達の種族を無差別に骸へと化した”。その重なる罪を貴方達の身に刻まねばなりません。この“妖精王（リオリーネ）”が罪人の貴方達の行く先を導きましょう。》

軈て捻れられた部分から人の姿を保ち背中から蜻蛉のような翼が六本生えた“半透明”の妖精が徐々に色を付けつつ、武器を構えるシャイナ達に向けて薄い虹色の光を放ちながら降臨した。

第百八十曲　爆心地で真の隠れラストボスはシャイナである。ｗｗｗ

―妖精界　リュミエール　爆心地（元北西広場）―

？《魔力の無い人間が一人と一匹…そして魔力の無い人間を護る貴方達は“活きる存在を滅する愚力”がある。誤った力を持った人間を私が直々下さねばなりません…このリオリーネが！》

空間が歪み中心が捻れて中から半透明だった妖精が出てきて、次第に色が付き姿が漸く明らかになる。

容姿は先程殺傷したヤンキー風＆不細工顔の小蝿達と違って頭部の髪は川の水のように紺から淡い緑まで潤った長い髪色を綺麗に着色しており、顔と身体は●姫に出てくるアニメ版姫●ルクのような純白の白いドレスを着る。

そして背中には小蝿達の汚い蝉のような翼と全然違って長い丸く編曲したひし形の美しい透き通った薄い水色の六枚羽根が生えていて、●カチャンサイズのような妖精と違い純白の赤目の人間サイズを持った美女が、前方にいる魔力を持たないシャイナと子犬（エッイオ）を護るように立つ二人を睨み付けていた。

―妖精界　妖族ノ王　リオリーネ―

ディク『下す？一体どうやって？第一俺達は突然掴み掛かってきたアンタらの治安悪さの原因で俺達が“被害者”なのですけどｗｗｗ』

作者＆赤鉄2主人公「「それは駄目だディク。その発言は相手側にとって“都合良すぎる言い訳”しか聞こえない。どのみち我々は戦って無実だということを証明する必要がある。」」

ディクが今までのことを皮肉に思い苦笑いしながら言って隣にいる相棒がディクの発言に否定するように言った後、お互い手にする武器をリオリーネに前に構えてお互い手に持つ銃の安全装置を静かに解除する。

リオリーネ《無実を証明？それでは私を構えているその愚具は、この後私に対して何をするべきモノかしら？》

作者＆赤鉄2主人公「「Ｙｏｕ　ｍｉｇｈｔ　ａｌｒｅａｄｙ　ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ？（口で言わずとも解るだろう？）この後の展開が“今のお前”に取って何を眼にするのか。」」

と二人の外人侍が右手に持つ●刀（●ｉｉリモコン）の剣先を前に伸ばしシャキンと刃音を鳴らして、剣先を妖精王（リオリーネ）の心ノ臓に突きつけニタリと不気味に笑っていた瞬間…

ディク『C'ｅｓｔ　ｄ?･ｊ?　ｇ?･ｎａｎｔ（´ε､）クソ下らねぇお喋りはここまでにして、さっさとＹＡ・ＲＯ・Ｕ・ＺＥ??』

ドンとディクが構えていた両短銃の砲口の火が吹いて、エツィオに教えられてきた最強の魔力がリオリーネの頭部に向けて戦いの始まりのご挨拶を容赦なく撃つ。

リオリーネ《姑息な真似を…っ！》

ディク『Ｎｅ　ｌｅ　ｃｏｍｐｒｅｎｅｚ　ｐａｓ　ｍａｌ（バーカｗｗｗちげぇよｗｗｗ）Ｃ'ｅｓｔ　ｕｎ　ｓｉｇｎａｌ　ａｐｒ?ｓ　ａｖｏｉｒ　ｃｏｍｍｅｎｃ?　ｖｏｔｒｅ　ｅｔ　ｎｏｔｒｅ　ｂａｇａｒｒｅ★（テメェとの開戦の合図だＹＯ★）』

ガィィン！！

リオリーネは瞬時に自分に向けて放ってきたディクの不意打ち弾（開戦）に向けて右腕を伸ばし、ぐっと手の平を広げた後手の平の周囲から大きな円形の虹色の呪文が描かれた壁が出てきて、ディクが撃った魔弾を魔力の障壁で防ぐ。しかし…

作者&赤鉄2主人公「「ほらっ?手を止めるな、休むな、動け“リオリーネとかいう女”。…死ぬぞ?」」

リオリーネ《！》

その隙に懐まで飛び込んでいた二人の外人侍がリオリーネの下半身辺りにいて、低姿勢を保ったまま身体を回転させて手にする●刀（●ｉｉリモコン）を身体を回転すると同時に上へ振って、一気に首を斬り飛ばすかのように●刀（●ｉｉリモコン）をリオリーネに振る。

リオリーネ《（は…人間の癖に早すぎる！）っ…このっ！》

あと数秒で迫り来る●刀（●ｉｉリモコン）で首を落とされる前にリオリーネは全身に魔力を駆け巡るように脳裏で放った後、全身が半透明状態になって振り翳された二人の外人侍の攻撃を空振るように避ける。

空を切った二人の外人侍は更なる追撃を掛けるべく段々と消えかけているリオリーネに向けて右足ソバットを繰り出したが、それも透き通るように空を切って、リオリーネという姿は完全に今居る世界から消える。

作者＆赤鉄２主人公「「ちっ…異空間転送魔力（テレポーテーション）か。これは面倒な相手だ。しかし…」」

二人の外人侍はしかめっ面を出しながら軽くため息を付いた後、両眼だけを下に見下ろすように動かして右手に持つ●刀（●ｉｉリモコン）の剣先が赤紫色の液体が付着しており、パタタと剣先に付いた赤紫色の液体が焼かれた路面に落ちる。

作者＆赤鉄2主人公「「ディク、奴は“手負い”だ。しかも我々と出会う前にも既に“重度の痛手を受けている”。そいつを“生かす”か“死す”べきか、俺の契約者であるお前が決めろ。」」

二人の外人侍は剣先（●ｉｉリモコン）に付いた赤紫の液体を横に振り払った後、共に歩んでくる契約者と女に向けてわざとらしいお手上げをするような仕草をしながら言う。

ディク『俺達の本来の目的は“エツィオを傷付けた擬似林檎の製作者を突き止めて暗殺”することだ。こんな“無駄な殺傷は擬似創作者に取って何処かで隠れながら俺達を見て、殺シの序盤に過ぎないと胸糞微笑んでいる”だろう。もちろん彼女は“この序盤を盛り上げる駒”しかすぎない…』

シャイナ「ちょっ…何という先読ミィーな展開台詞ｗｗｗこれも都合良過ぎるだしょｗｗｗ」

ディクは両手に持っていた短銃を手の平で何度も回転させながら自身を通り越すように大きく後ろへと投げて、下肢の足を上へと上げ

て落ちてくる短銃を足先で何度もサッカーボールのように何度も上下に跳ね遊んだ後、シャイナの苦笑いの声を聞きながら両短銃を元の両足首の付根に装着する。

作者&赤鉄2主人公「「気づいていたのかディク。俺はこの街へと入った途端“第三者の視線”を感じていた。しかも我々の侵入者に対しての“殺意ノ気”も同時に感じ取れた。位置はまだ特定出来ていないが、まぁ時期に我々の手で下されるだろうよ。」」

ディク『そうだな。でも擬似林檎の創作者を下すのはエツィオに下したい。だってあの如何なる魔力・外圧・法則を絶対に通さない魔神の体を傷つけた張本人を“ボコボコにフルボッカ”しねぇと、エツィオに取っての名誉を挽回しないといけないし！！』

そしてディクは後方にいるシャイナに向けて右腕を横に伸ばし右親指と人差し指の骨を軽く弾くように鳴らした後、シャイナの周囲に薄い銀色の光が円を描くように奇跡を描いて法則を受け付けない最強の結界を張る。

ディク『シャイナ！すまないが少し暴れる。一応法則を受け付けない防御フィールドを張ったけど、何かあったらいけないから…』

シャイナ「ハイハイ、非戦闘員のニィィィトな私は黙って見物するよｗｗｗてか…“下から目線で”見ているほうが“迫力”あって楽しいしｗｗｗ」

犬ツィオ「キャン！」

ディク『Σ（´・ω・、）』

とディクが安否を気遣う余所にシャイナの姿はいつの間にか“波ようにに溶けて固まった建物の上”に腰掛けていて、シャイナの谷間に丸くなるように眠っていた子犬はシャイナの隣でチョコンと可愛らしく座っていて、尻尾を何度も横に振りながら下部にいるディクに向けて吼える。

ディク『オイオイ“何時移動した”んだ、シャイナ？ｗｗｗ一体「何、六式移動“剃”を使ってさっさといち早く移動したまでぜよ？」「キャウキャウ！！」ぶっｗｗｗ』

ディクはシャイナに隠された“隠しボス並み驚きな身体能力”を聞いてぶふっと思わず口から白い何かが吹き出て、腹から来る笑いをかろうじて両手で押さえながらヒーヒーと可笑しな表情をだしながら堪えた息を整えた後…

ディク『Ｅｌｌｅ ｌｅ ｇａｒｄｅ ｖｉｖａｎｔ．Ａｍｅｎｓ ｕｎｅ ｂａｔａｉｌｌｅ ｄ？ｃｉｓｉｖｅ ｐｏｕｒ ｕｎ ｃｏｕｒｔ ｔｅｒｍｅ！』

作者&赤鉄2主人公「「それが…お前の答えか。良いだろう…Ｉｂｅｃｏｍｅ ｙｏｕｒ ｓｗｏｒｄ.（俺はお前の意思に従おう。）」」

カッと突如二人の外人侍の身体が赤く光りだして一筋の光を天へと伸ばし光が止んだ直後、元の長神刀に戻ってガシンと剣先から路上に突き刺さる。

そしてディクは武器状態になって路上に突き刺さった長神刀を右手で引き抜いた後、両手持ちにしながら顔に触れるぐらいまで刀身を横に傾けかっこよく武器を構えるポーズを取った。

第百八十一曲　所々ネタバレが入ったＵＢＩゾブドの雑談戦闘ｗｗｗ

―妖精界　リュミエール　爆心地（元北西広場）―

ディク『さて…どうしたもんか…。』

ディクは両手に持つ長神刀の刀身を顔面に向けて横に構え、元広場らしき爆心地の下で周囲に燃え盛る炎と不気味に吹き抜ける風の音を聞きながらそっと呟く。

シャイナ「ｗｋｔｋｗｋｔｋ（・∀・）」

犬ツィオ「キャンッ！キュゥゥン！」

ゴォ…とゴーストタウンのように静か過ぎる世界の中唯一雰囲気を平気でぶち壊すように、ディクの頭上の溶けた建物の上から白銀の結界で覆われたシャイナと仔犬の応援（エール）を聞いて、ふっと静かに口元を吊り上げながら軽く彼女らに振り向くことなく背を向けたまま笑みを出す。

ディク『フラムエール、力を貸せ。周囲を吹き飛ばし全てを灰塵と化す“暴君の蹄の一撃”をな。』

作者＆赤鉄2主人公「「承知。…契約者（ディク）の一部身体を送り込もう。」」

シュゥウゥ…

ディクは両手に持つ長神刀に語った直後、武器状態になっていた二人の侍は契約者（ディク）の背中を押すように腕を伸ばして、次第に両肩から両手までにそって赤黒い光が一つ一つ線のように伸びて両手…否両手に持つ武器（彼ら）全体を赤黒く輝かせた直後…

ディク『“グリズリーの型”！！ＴＨＥ★零式ィィィィィィ！！！』

シャイナ「おぅっ！？」

犬ツィオ「キュッ！」

ドゴガッ！！！！！！！！

二人の外人侍（前世紀地球の最後で最強の二次元兵器）の力集中した光を手にする武器ごと路上に叩き付けた直後、ディクが叩き付けた箇所が大きく陥没し更にヒビが多数走ってディクがいた場所に地割れが連載的に起こって、今居る爆心地そのものを原型止めなく灰塵させる。

ディク『潰す潰す潰す

犬ツィオ「キュンッ！」

フワンッ…

シャイナと仔犬（エッィオ）が座っていた場所がディクの衝撃波の余波に入った途端、完全に原型さえ留めないぐらいまで粉々に崩落し、一時一緒に座っていた仔犬（エッィオ）と共に地上へと落ちていったが、ディクが張った魔力の結界は落ちていくシャイナを両手の平の中へと拾い上げていくように宙で静止して、ゆっくりと上へと上がっていって更に安全を確保した直後…

リオリーネ《キャッ！？》

完全に魔力と気配を消していたリオリーネはディクの“人から掛け離れた最強超人の拳による衝撃波”を受けて吹き飛び、更に余波を受けて透明状態にしていた魔力を解かれてドサッと原型を留めていない地割れが多い路上へと投げ出すように落ちる。

ディク『暴君（グリズリー）の一撃は如何だったかな？“手負いのお嬢さん”？？俺達と出会う前に何があったかは知らないけれどｗｗｗ』

リオリーネ《はっ…くっ！…》

リオリーネは地割れの多い路上で身体モロとも這いずり状態になりながらも、数メートル先にいる刀を持った殺戮者（ディク）に向けて睨みながら、右腕を前に伸ばして翳した右手を大きく広げた時、ダンと一筋の薄い虹色の光が一直線にディクに向けて放つ。が…

ディク『カウンターＴＨＥカウンター♪“タイガーの型”！』

シャイナ「ｏｈ！？」

ガキィィィン！とディクは“（´ε、）テメェ何て敵じゃねぇＹＯ（笑）”風に三次元にいるクリア済みのゲーマー達のように笑いながら、手にする長神刀を顔面に向けて刀身を斜め前へと構えて、高速に放たれてくる薄い虹色の一線を“軽くあしらうように弾いて放った相手へと押し返す”。

ディク『因みにこのカウンターは赤鉄（レッ●スティール）２のラスボスの攻撃を初段弾いた後、限界改造したライフルを二発ぶちこめば“四秒以内”に瞬殺可能なのＤＥＡＴＨ！！（プレイ時の事実ｗｗｗ）』

シャイナ「マジっすか（笑）つーか俺らを書いている“作者”は、スゲーゲーマーの一人だなｗｗというよりも今作の赤鉄（レッ●スティール）２は周回要素の特典が余り無いのにｗｗ」

と“作者の代理”で得意気な表情を出すディクに向けてシャイナは口を八の字にさせてピューン♪ピューン♪♪とわざとらしい口笛を吹いている間にも、ドシュッと肉を突き破る生々しい音が鳴り響いて同時にシピピッと水滴が落ちる音も鳴る。

リオリーネ《あぁ…！》

ディクに向けて放った一線の細い魔力がディクが持つ長神刀と丸められた左拳を“前へと押し退けられただけで跳ね返って”、自ら放った魔力の一線が左肩を刺し抜いて風穴から赤紫色の血を出す。

ディク『つーか、赤鉄（レッ●スティール）2のカウンターは強すぎて大抵ボス敵などはこれだけで“フルボッカ”できるしｗｗｗカウンターの効果が出来ない掴みや爆弾等の攻撃は、スライド避けの後にベッドショットをバンバン喰らわせればさっさと料理（ころす）することができるしｗｗｗ（↑これもプレイ時の事実）』

シャイナ「何…アサクリシリーズのカウンターも何気に酷いわよｗｗｗ特に“アサ★ブレなｗｗｗ”アサブレのカウンターを完全に極めれば“ラスボスなど瞬殺”出来るしｗｗｗ（アサクリ2のラスボスはアサブレで一撃不可能となっています。ｗｗｗ強すぎたから？？）」

ディク『あーｗｗｗ確か作者初代アサクリプレイ時に“鳩サブレ”に向けて「死ねっ！クソハゲ！！&テンプラ共め！！」と言ってアサブレだけで一騎討ち（集団リンチ）をぶっ潰したもんなｗｗｗ“あれは笑う”価値がある。』

シャイナ「アサクリ2もそうだよｗｗｗラスボスのクソハゲに対して「俺の手が真っ赤に燃える！貴様を殴殺しろとそう言われている！！」とド●ン風に素手だけでフルボッカしたもんでＳＡ☆てか…何でアサクリ2の最終ラスボス戦は“ステゴロ”なんだよｗｗｗ」

所々作者のプレイ時のネタバレがディクとシャイナの代理の会話が交互に飛び交う最中、リオリーネは自ら放った魔力で左肩を貫かれ左肩に空いた風穴から血を噴き出し、身体を前のりに折って風穴から飛び散った血痕が路上へと付着しながら崩れ落ちる。

ディク『まぁ、作者の代理の会話はここまでにして、そろそろ終いと行こうかねぇ？』

楽しい愚痴は此処までにしようとディクは右手に握る長神刀を手の平の中で何度も回転させて、路上へと屈した妖精王に向けてニヒルな表情を出した後、スタスタと前へと屈している妖精王に向けて歩み出す。

リオリーネ《はぁ…はぁ…》

ディク『チェックメイトだ、お嬢さん。手負いを受けていた時点で、アンタはもう負けだったんだよ?分かる??』

ディクは前のりに屈している妖精王に向けて歩み寄りながら言っている間に背中から上半身だけ投影した半透明色の二人の外人侍が現れて、交互に●刀（●ｉｉリモコン）を手の平の中で回しながら契約者と同じ見下したような視点で前へと屈した妖精王へと歩み寄る。

リオリーネ《ぁ…はぁ……うっ…！》

ディク『心配するな、その乱れた息も時期に収まる。ただ…』

ジャキッ…

ディクは手に持つ長神刀を両手持ちに構え直して上へと振り上げるように両腕を上へと伸ばしていき、背後から出ている二人の外人侍もディクと同じような動きを取って“処刑（ギロチン）”を決めるべく●刀（●ｉｉリモコン）を握り絞める。

ディク『二度と眼が醒めない“世界”へと俺が誘ってやるから…よぉ?』

ディクは瀕死状態の妖精王に向けて情けの欠片もない“冷徹な表情”を出しながら言った後、両手に持った長神刀を勢い良く妖精王の首に向けて斬り落とすように降り下ろした。

第百八十二曲　En fait, un l?che de la reine

―妖精界　リュミエール　妖精王視点―

勝てない…

事の始まりは私が神殿での主務を黙々とやっていた時に、突然静寂を破る音と傷付いた私の分身体が雪崩れ込むように入ってきて、入り口の側に積み重ねるように置いてあった書物を雪崩れ込んだ際の衝撃の風でバサリと音を立てて崩壊する。

何事かと私は傷付いてきた私の分身体に傷口を当てながら癒して聞いた時、“魔力で覆われた私達を簡単に傷付け、同時に殺した破壊者が入ってきた”と…

ドクンッ…ドクンッ……

中の心ノ臓の鼓動が静かに鳴り響き私は胸騒ぎがして直ぐに主務を投げ出して民を救うべく神殿から飛び出して、途中神殿の中にいた家臣・街中にいる腕自慢の者達と共に破壊者がいる場所へと向かっていた時…

あの光は一体…

最初の視界に飛び込んできたのは遥か遠い場所で天に昇る“一筋の光”、その昇っていた光が高速に私達が通っていた場所へと真っ直ぐに突き刺さるように路上へと落下した直後…

ドンッ！！

一瞬の出来事だった…眩しいぐらいに放たれる閃光が今いる場所全体を覆い尽くした時、次に受けたのは…“その場に生きるモノ達を魂まで焼き殺す熱風”。

バチチチチチ！！！！

ジュワッ！！！！

その熱風は周囲の建物を原型さえ留めないぐらいに溶かし、私の隣にいた“人”達を全て内部そのモノの全てを容赦の欠片も無く焼き尽くす。

嫌！みんな…皆ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！

私の常時身に包んでいたこの世界の王という特級の力“外部の魔力を妨げる反魔力防壁（ヴィエターレ）”でも半分は完全に遮断できず、片上半身が熱風で焼け溶けて左腕と左半分腹部が焼け消える。

しかし反魔力防壁（ヴィエターレ）の効力があったお陰で私という命を繋ぎ止め、謎の力で身体もろとも焼き尽くされる運命から外されることになる。

しかし…

―ギャァァ…―

―熱い！熱イィィ！！…―

次第に再生していく王という素質を持つ自身の身を安心していた私に息つく暇も無く飛び込んできたのは“反魔力防壁（ヴィエターレ）を持っていない人達の断末魔”。

隣に居た仲間は純白の熱風に焼かれて悲鳴が最後まで言えないまま骨ごと消し炭になり、その隣も…その隣も次々と悲鳴や身に包む肉体・内部の魂さえその場に残らないまま焼け消えていく。そして…

ピシャ…ピシャ…

―リ……オ…ネ……様……―

（！生きていた！？こんな恐ろしい世界の中で！？）

まだ閃光で前も後ろも分からない数人の仲間を焼き殺した恐ろしい百熱の熱風の焦げた死臭が漂う世界の中で、後方から千切れた肉が爛れと血が滴りつくような音と咽がやられて聞き取りにくい所もあったが“仲間”の声が確かに聞こえた。

生きていたのね！？と私は期待を寄せる声を上げて声がした方向に身体を向けたが、私の期待を裏切るかのように容赦なく打ち消される…。

否…こんな“人を一瞬の内に焼き尽くす死の世界”に“生存者など居るはずもない”から…

―リ……オ……ネさ……―

ゴトン…ブシッ…

！

振り向いた先には“右片面の顔だけ原型を留めた髑髏”が居て、所々四肢の部分に肉らしき組織も僅かに付着していたが、歩む度に徐々に焼け焦げて一つ一つ四肢の部分の骨が焼け溶けていく。

私はただ“尽きていくモノ達”の姿を見て“恐怖”の声を上げていた。かつての仲間・同族だった存在に…“罵声”“嫌悪”を歩み寄ってくるモノに向けて言い放つ。

―リ……オ……リ……―

嫌！　気持ち悪い！！　来ないで！！！　私に向けてその気色悪い腕を伸ばさないで！！！！

私はヨタヨタと歩み寄ってくる“既に死んでいる髑髏”に向けて無我夢中に右腕をなぎ払うようにすばやく動かした時、ボキッ！と生々しく折れる音が鳴って同時にガシャと硬い音が数回地面に落ちる音が鳴っる。

夢だ！“コレは夢”だ！！全て幻！！！！幻なんだ！！！！！消えて！！！！お願い！消えてぇぇぇぇぇ！！！！元の時間に戻ってぇぇぇぇぇぇぇ！！！！

私はその生々しい音を嫌い全て“夢の中に居る”のだと“勝手に解

釈”し、両眼を閉じて全てを忘れるように意識を閉ざし身を今居る世界から消えていくように意識を閉ざしていった。

…

……

……

何も起こらない…

数分経っても何も聞こえず先程の弱弱しい声が聞こえずあの不愉快な臭いはもう無い…終わったんだ…元の日常に戻ったのだと、私は魔力の中に閉じこもった静寂の世界で解釈する。

私は再び両眼を開けて再び周囲の様子を見渡すように顔を右往左往に動かし、ゆっくりと立ち上がりながら身に覆っていた異空間転送（テレポーテー）魔力（ション）の力を解いて、再び元の世界へと戻る。しかし…

！そんな…！！…何で！？

再び世界へと戻った時…上空には覆い尽くす程の多くの火の粉が風で踊るように舞い、路上には“全てを焼き尽くされた多くの焼死体

”と、原形と留めなく溶けいまだに燃え続ける建物があって、これは夢でなく“現実”というものをその眼で…

い……や……コレは……

罰…現実から逃れ夢の中へと逃避したモノへの罰なのかもしれない。現実というのを知りながらかつての仲間に向けて邪険するように振り払い、自分に触れようとして伸ばしてきたあの骸を叩き壊したのだから…

私は……ただ……

再び闇の中に私は閉じ篭る…開きかけていた花がまた閉じて蕾になり、私は閉じた蕾の中で静かに身を包むように座りながらまた夢の中へと入ろうとした時…

「「取り敢えずは来たものの…」」

『居ないや。もう他の場所へ移動しちゃったのかな?』

!この臭い…!!

眠ろうとしていた私に飛び込んできたのは“男女の声が合さった若き声”と“熟年された霊ノ声”が聞こえて、私ははっとなって夢の世界から一変現実の世界が見える異空間へと引き戻される。

私の眼に映るのは燃える世界で何かを…否私を探している“背後に女性ような霊体が憑いた赤いコートを纏った長身男”と“頭部まで着た黒い深巾を被った熟年霊体男”と後ろから着いてきている“純白のコートを着た金髪の若女とその若女の胸の真ん中辺りにいる黒い子犬”がいた。

「でっ？……うこんなことしたからには、俺らもう立派な“殺…者”じゃんｗｗｗもう調査どころじゃないと思うけど…どうす…に戻って再度……？？」

『そうだな。とは言ってもまた“彼処のウルトラショッキン☆ピン…はもう入りたくないｗｗｗ色もヘンだし配色も場……合わないし、それにあの森の中はクソ五月蝿い小蝿と……いている場所なんぞｗｗ』

「「ならばディクと女が先程生け……“メ……”という小蝿に聞いてみたらどうだ？今は逃がしてしまっているが、再……る場所を得た方が良い。」」

なにやら交互に話し合う姿が見えて内容は今居る世界の影響か“聞きづらい部分”もあったが、私にはどうでもよいことだった。

敵を討たねばならない…同族を殺したこのモノ達を私の手で！！

私は静かに右手の平に魔力を溜め込める。…この世界の王としての資質、王として民に振舞うべきその誇りと力を翳すべく雑談している彼らに向けて魔力を放とうとしたが…

「「『何だ…わざわざ出てくるなんて、手間が省けたよ。』」」

え？…！！？？！！

右手の平から放とうとしていた魔力が突然ドチャッと肉が潰れたような音が鳴って、途切れた魔力の回路を脳裏で見ながらそろそろと右手に視線だけを動かして右手の状態を見た直後…

う…そ……だ……！

痛みの感覚は無かった…ただ何かが開いたような感覚を受けて私は…

右手の平から甲にかけて複数の穴が派手に大きく開いており、そしてブチッと不気味な音が鳴って重みに耐え切れなくなった右手の撃ち抜かれ肉の塊が千切れ、異空間の世界の地上へと落ちていった。

第百八十三曲　実は油断させる為の芝居なのでした（アレで本当かよｗｗｗ）

―妖精界　リュミエール　爆心地（元北西広場）―

ディク『ギーローチンッ！ギーローチンッ！！ミンナ大好きギーローチィィィィィンッ（爆）』

シャイナ「一気一気一気一気一気一気一気一気一気一気一気一気一気一気ッ！！！！（ ゜∀ ゜）ヒィィィィィハァァァァァァァァァ！！！！！」

リオリーネ《（終りね…何もかも…）》

そして舞台は文字だらけの空想と現実が交互に混じった酷夢から本当の現実へと戻って、身も心も傷だらけになっていた私に“黒深巾を羽織った霊体が持つ赤い光で覆われた鋭利の刃”が、私の首にめがけて一気に振り下ろされる。

―夢の世界でも現実から逃げていた王としての素質と誇りが失った最低最悪の本来の私―

―かつての仲間に向けて今の自分の姿と見比べるように吐いた“罵詈雑言”―

リオリーネ《（今更後悔しても、もう遅い。…私はこの世界を統べるモノとしてもう失格だ…）》

私は覚悟を決めて両眼を閉じ現実から逃げてきた臆病な自分をケリを付けようと決め、振り下ろしてくるあの刀の姿がもう滲むようにぼやけ、同時に今居る死と生の瀬戸際の世界でゆっくりと落ちてくるように見える。そんな最中…

ツッ…

両頬に何かが滴り落ちる感覚を受け私はそっと右頬に向けてソロソロと右腕を上に伸ばし、死に逝く今の臆病者な私にとって唯一の僅かな時間となり、血が少量付着した右手の平を頬に触る。

最初は冷たい感触…

その次は暖かい感触…

更に次は……

……

リオリーネ《（死に……たくない…死にた……くない…よ。）》

……

願望…

それは真なる心の中で言った私（リオリーネ）の現世にいる人間の誰もが持つ“生きるという本能の本音”。ただ理由は無く“無意識にもがく生への固執”と“他人に殺される運命から逃れたい”それだけのこと…

まだ生きたい！

死にたくない！

殺さないで！

私は何も悪い事していない！

もう許して！

殺しても何も落とさないわよ！

その武器を下げて！お願い！！

私の中に渦巻く本音が私の首に向けて刀を狂い無く降り下ろしてくる“黒深巾の霊体”に向けて、次々と五月蝿く途絶えないぐらいに必死に“本音が混じった数々の必死すぎる願望”を目の前に立つ侵入者達に伝える。しかし…

黒ディク『だ　が　断　る　（＾∀＾）ｍｇ』

黒作者&黒赤鉄2主人公「「知るか…とっとと死ね。」」

黒シャイナ「どう見ても“実績”又は“トロフィー”狙いです。ｗｗ本当に本当にありがとうございます（笑）ｗｗｗ」

黒犬ツィオ「キャンッ♪（ザマァァァァァァァァァァｗｗｗ）」

目の前に立っていた幻影達はそんな私を見て嘲笑うかのように言い、

一人は私に向けて人差し指を指し、一人は私を足蹴しながら見下す視線を全身に向けて容赦無く射く。

ケラケラと馬鹿馬鹿しく四這えに跪いている私の姿を見て笑いが交互に飛ぶ中、黒深巾を着た霊体を持つ刀の軌道は全く変わらない…。

確実に私の首を落とし噴出す血と内部の組織が飛び出る瞬間を見るべく降り下ろし、私はもう生きることすらもう失って何もかも全てを受け入れようとした。

が…

ディク『L'ennemi que vous devriez battre est pas ceci vous!!（残念ながら後ろ斬りじゃぁ!!）』

リオリーネ《!（えっ!?）》

ドチャッと肉を突き破る音が聞こえて痛みが来ないことに私ははっとなって、夢の世界から再び意識は現実へと戻り俯いていた顔を上に上げると…

?ネロマテ【ギ…ガガッ……】

ディク『こんな“闇を退ける結界（セカイ）”の中で消滅を逃れる術を持った下級悪魔（ネロズマティーター）が出るとはなっ！し・か・も“鍋の蓋を沢山付けたような鎧付き”ｗｗｗ』

何とディクが振りかざしていた長神刀はディクの背後にいた“台詞通りの鍋の蓋を沢山不器用に付けた鎧付き悪魔”がいて、その頭部の鎧の隙間から開けられていた両眼から、赤い液体がボトボトと滝のようにこぼれ落ちる。

どうやらディクの背後にいた鎧付きの悪魔はディクの持つ長神刀に突き立てられ、背後へと見向きもせず妖精王に向いたまま背後強襲突きを黒鉛筆（ネロズタティーター）に突き立てたらしい。

作者&赤鉄2主人公「「まだ来るぞ！油断するな、ディク！！」」

ディク『おぅ。何故悪魔が此所にいるのかは解らんが、取り敢えずこの悪魔は妖精王（アンタ）を“最初から狙っていた”みたいだ。予め準備をしていたみたいで…なっ？』

背後にいた鎧付き悪魔に突き立てた長神刀を前へと引き抜くように動かした時、ドシュッ！と突き立てた部分から一線の血を大量に噴き出して、後ろへと仰け反るように背中から地面へと倒れて鎧付き悪魔はドクドクと血を鎧と鎧の隙間から噴出しながら絶命する。

リオリーネ《ど…どういうこと…？》

作者＆赤鉄２主人公「「後で詳しく聞かせてもらう。ディクと同じことを言うが、何故“神界と似せた世界”に何故悪魔がいるのかを。」」

シャイナ「あぁ…なんか●ーアの後半から出てくるウザい鎧付きのマモノのようなモンか。あれは両手剣で鎧を剥がさないと効率良くｒｙ（」

どうやらディクは妖精王と戦った際に二人の戦いを見る“悪意の気配”を感じ取っていたらしく、逸早くディクは長神刀に思念だけで命を飛ばした後、隠れながら待ち構えている悪魔に気付かれないように“油断させる人芝居”を売ったのだ。

ディク『マジゴメン！油断させるためといって俺達の都合でアンタに傷を沢山付けちゃって！！コイツらを殺ったら、後で癒すからさ。（汗）それで勘弁しｔｒｙ（』

作者＆赤鉄２主人公「「行くぞ。敵はそんなに待ってはくれんぞ！」」

ズリュッ…ガシャッガシャッ…

ディクは背後へと振り返って背中を少し前へと屈めるように折り、右手に持つ刀を斜め右下に下げて鎧と鎧の音を交互に立てながら歩いてくる鎧付き下級悪魔達に向けて戦闘体勢を取った。

第百八十四曲　何と言う●ＲＭＳ殺しのような力が入ったチート刀ｗｗｗ

―妖精界　リュミエール　爆心地（元北西広場）―

鎧付きネロマテＢ【グヌヌッ！！既ニ我々ノ気配ヲ感ジ取ッテイタノカ！霊（タマシィ）ノ臭イガスル人間ッ！！】

ディク『ったりめぇよぉ～♪俺は生前時、最高の師匠（エッィオ）にＩ・ＲＯ・Ｉ・ＲＯと鍛えられたからＳＡ☆』

鎧付きネロマテＣ【舐メオッテ！コノ“小僧”！！】

シャイナ「（小僧ってｗｗｗあれでも外見４０ぐらいのナイス★ミドルなオジサマにｗｗｗ）」

鎧付きのネロマテ達は目の前に立つ余裕笑みを出すディク（※外見は４０代のオッサン）を見て、歯ぎしりするような素振りをしながらディクを逃がさないように取り囲む。

ガシャッと背中に掛けていた鉄製の剣を引き抜いて両手に持ち直し

た後、刀を構える戦闘体勢のディクに向けてそれぞれ戦いやすいようなポジションを取りながら剣を構える。

鎧付きネロマテB【ダガ恐ルナ！我々ニハ、コノ世界ノ光ヲ通サヌ鎧ガアル！！】

鎧付きネロマテC【！！ソウダ…！外部カラ受ケル魔力モ半減ニシ…】

鎧付きネロマテD【魔力ヲ反射スル我々下級悪魔ニトッテ、素晴ラシイ防具ヨ！！】

鎧付きネロマテE【カカカカッ！！アノ“裏切リノ魔神”ト同ジ力ヲ感ジル霊（タマシィ）ノ臭イガスル人間ノ力等、今ノ我々ニ恐レハ無イ！！】

と自ら纏う鍋の蓋でも沢山付けたような“見た目が不細工”の鎧を見てわざとらしくディクに聞こえるように言った後、有利な戦況を取ったかのようにディクに向けて斬り掛かる。

鎧付きネロマテB【死ネッ！人間ッ！！】

ディク『HA…（´皿`）』

ディクはまず前方から真っ直ぐに剣を振りかざして来る鎧付きネロマテの刀身に向けて、手にする刀を顔面辺りに左斜め上方向に構えて攻撃を受ける。

ディク『オラァッ！』

鎧付きネロマテB【ヌォォッ！？】

ギャリィィィィィッ！！

敵の持つ剣の刀身と刀の刀身が擦り合い鋼同士の悲鳴音が鳴って、赤と橙色の火花を散らしながらディクは鍔迫り合いになっている相手の腹部に向けて、思いっきり右蹴りを入れガコンッと後方へと大きく吹き飛ばす。

鎧付きネロマテB【ガッ！？】

溶けた壁に背中から叩き付けられた鎧付きのネロマテは、纏う鎧の衝撃の振動でグワンと脳裏全体まで揺れるように動く感覚を受けて数秒立ち眩みをした瞬間…

ディク『そぉ～い♪』

いつの間にか目の前にディクが居てディクが手にする長神刀の刀身が下腹部と上半身の繋ぎ目の隙間に向けてドシャァッ！と背中まで突き破るぐらいまで叩き込まれ、刀に突き立てられた背中から勢い良く血が噴出して背後の建物を一瞬の内に赤い花のようなペンキを思いっきりブチ撒ける。

鎧付きネロマテC【ガァッ！】

鎧付きネロマテD【人間ガァァァァァ！！】

数体の鎧付きネロマテ達は一瞬の内に仲間がやられたのを見て数体動揺したが、油断したからだだと思いそのうちの鎧付きの悪魔は憤怒の形相でも出しているかのように、首を一気に叩き落すトドメ技を刺しているディクの背後から一気に斬りかかろうとしたが…

作者&赤鉄2主人公「「Ｄｏ ｎｏｔ ｆｏｒｇｅｔ ｏｕｒ ｅｘｉｓｔｅｎｃｅ！！（甘いッ！！）」」

ズバァァァァァ！！！！

ディクの背後から出ていた上半身だけの外人侍が不意討ちを仕掛けようとしてくる鎧付きネロマテ達に向けて手にする●刀（●ｉｉリ

モコン）を横一閃に振り翳した時、“眼に見えない三日月の飛ぶ斬撃（ドラゴンの型）”が高速に飛翔していって…

鎧付きネロマテC【ガ…ヒュ！】

鎧付きネロマテD【ナ…何故…】

ドシャッ…

数体の鎧付きネロマテ達は飛ぶ斬撃で身に纏う鎧の効果さえ受け付けず“鎧が一部付いた胴体ごと上へと跳ね飛んで”、ｗｈｙという思考さえ脳裏に伝達出来ないまま綺麗に切断された。

作者&赤鉄2主人公「「如何に魔力を通さぬ・反射するモノでも、俺の持つ“剣”はそんな馬鹿馬鹿しい空想溢れた設定など“無意味だ”。俺は“契約者の前に立ちはだかる全ての敵を斬り捨てる業（カルマ）”がある。」」

ディク『ほぉｗｗｗ“業（カルマ）”ねぇ…となるとフラムエールが持つ刀は…』

ディクはトドメを刺し突き刺した鎧付きの悪魔の体から刀を引き抜いて、刀身に付いていた血を振り払いながら背中から出ている二人

の外人侍に向けて顔を上に動かす。

作者&赤鉄2主人公『少し俺の脳裏の記憶の中にあった戦闘記録を見てみたら俺の持つ●刀（又は●ｉｉリモコン）は“活きる全てに害なす悪ノ魔を完全に滅ぼす破壊プログラム”が入っているんだ。この●刀（又は●ｉｉリモコン）に傷つけられた悪ノ魔は“二度と治癒する事が出来ない死滅ウィルス”を破壊した部分から全身へと拡散し、やがては…』

シャイナ「いわば●ＲＭＳでいう“●ＲＭＳ殺し”のようなモン？？破壊プログラムに傷つけられたモノは二度と“再生しない”っていうヤツ？？」

と上空の結界の中で“ふざけた態度でふて寝している”シャイナがディクの背中に出ている二人の外人侍に向けて言った時、長神刀（フラムエール）は「「まぁ分かりやすく言えばそうだな。」」と言ってまだ走り向かってくる鎧付きの悪魔達に向けて二人は真剣の表情を出す。

ディク『オラァオラァオラァ！！！！』

作者&赤鉄2主人公「「勢いを持って死ね。」」

ドドドッ！とまたしても囲んで斬りかかる鎧付きネロマテ達に向けてディクは刀を振りかざし、背後に出ていた二人の外人侍も支援斬

りしながら襲い掛かる鎧付き悪魔を次々と薙ぎ倒し、どんどん鎧ごと切断された悪魔の死体が積み重ねられていく中…

作者＆赤鉄主人公２「「大物だ。」」

ディク『おっと…漸く奔命か。そろそろ来るとでも思っていたぜ…。』

ドシャンッ！

粗方悪魔共を滅したディクは好戦的な表情を出しながら手にする刀を斜め下に下げて背中を少し折りながら戦闘体勢を取っていた時、此方に向かってくる更なる鎧付きネロマテ達の後方から“馬鹿デカイサイズに合わせて鎧を纏った巨大悪魔一体”が彼らに混じってやって来る。

？【ゴォォォォォォォォッ！！】

ノシノシと路上にクレーター一つでも出来るぐらいに大きく振動を揺らしながら歩いてきて、ある程度歩いて静止した後頭部の鎧の隙間から涎みたいな液がゴボゴボと滝のように気色悪く出ていた。

第百八十五曲　ピーとピーが多い婢談戦闘とファ●リーズ推薦キボンヌ悪魔ｗｗｗ

―妖精界　リュミエール　爆心地（元北西広場）―

？【ゴォオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！】

シャイナ「うはっｗｗｗ！！！！！エツィオと初めて会った後に出てきた、最初の糞デブ巨漢悪魔（第五・六曲参照）が鎧付きで来やがったｗｗｗ」

シャイナは今いる元北西広場に鎧付き下級悪魔（ネロマテ）達と共に現れたバネのようなモノを無理矢理繋ぎ合わせ、両手両足にはパイプ管のようなものをそのまま空洞部分に入れたもはや見かけにして“糞下手くそぃ鎧付き巨人悪魔の姿”を見て、シャイナはブフッとあまりにも不細工過ぎる格好を見て思わず吹く仕草を取る。しかし…

鎧付き中級悪魔【ゴガァァァァァァァァァァ！！！！！】

シャイナ「だが最初に出会った“あのデブ”よりも超臭ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇｏｒｚ！！！！！！」

犬ツィオ「キャィィィィィィィィィィン（´Д`；）」

と同時に鎧付き中級悪魔の咆哮から出る吐息がディクがいる前方（宙に浮かぶ結界の中にいるシャイナと子犬（エッィオ）も含む）に向けて吐かれた時、余りにも“超臭い臭い”にシャイナは鼻と口と両眼を思わず全部塞いで、閉じられていた両眼でも思わず玉葱を切ったような涙が出てしまう。

子犬（エッィオ）も余りにも臭い臭いに驚いてのたうち回るようにゴロゴロと激しく身体を動かした後、シャイナの谷間へと思いっきり奥深くまで入り込んでビクビクと谷間から子犬の尻穴が見える体勢で“頭隠して尻隠さず”の状態になった。

ディク『オィオィ、マジかよｗｗｗ（幾ら魔力を持たない最強の魔神でも“この臭い”だけはワン☆ナゥトォォォォッ！！かよ…ｗｗｗ）だ…大丈夫か？』

シャイナ「これで大丈夫に見えるか！？この×♀＆@＊●■※野郎！！誰でもいいからアイツの口にファ●リーズを入れてくんねぇか！？このままじゃ、この都市全体に奴の■〇☆♯♪に俺ら含めて全員“色んな意味でヤられるぜ”！！？？！」

犬ツィオ「キャンキャン！！」

所々“アーな用語”ピーとデフォ効果音でも何処かで鳴っているように出てシャイナは今の状況から、この後の未来の予想図でも浮かべているように“必死”に再び敵に包囲された困惑顔のディクに向けて真面目（ＴＨＥ★マジＤＥＡＴＨ）風な表情を出しながら谷間で思いっきり吠える“いつの間にか正面に向いていた子犬（エツィオ）”と共に言う。

作者&赤鉄2主人公「「！なんと面妖な…。しかしお前が言う“☆×♀%@”と“▼◎◇$¥”とは一体何の用語（ワード）だ女??俺がいたこの世界が滅びる前の地球にはそんな用語（ワード）など“一切無かった”ぞ??」」

一方ディクの背中から出ていた上半身だけの二人の外人侍は、宙に浮かぶ結界内のシャイナの台詞を聞いて（　。Д　。；）ＨＡ?とでも言うような口を少し開けて額から汗でも流すように呆けるような表情を出しながら、契約者を囲む雑魚の群れを見て●刀（●ｉｉリモコン）を両手持ちに構えて戦闘体勢を取る。

ディク『ちょっｗｗふ…フラムエールはそんな〇£&■〒〆な（ズギャァァァン！！）な言葉など知らなくて良いよ！！（汗）つーか“今の生粋な状態のお前”まで“コッチに毒されてはイけない”ぜｗｗｗ』

作者&赤鉄2主人公「「（な…何故ディクもあの女と同じような言葉を?それに…）そ…そうなのか?し…しかし…」」

鎧付きネロマテ- ｓ【今度コソ死ネッ！人間！！】

鎧付き中級悪魔【バッフォォォォォォォォォォ！！！！】

ディクもシャイナと同様に“アカァァァァン用語”をペラペラと平気に吐きながら背中を預ける二人の外人侍に言った直後、囲っていた鎧付きの悪魔達が次々と襲い掛かり怒号を元広場全体に響かせながら中央にいる戦闘体勢のディクの全四肢に向けて刃を振り翳す。

ディク『？ｖｉｔｅｚ－ｌｅ…Ｕｎｅ ｃｏｎｔｒｅ－ａｔｔａｑｕｅ！！Ａｂａｎｄｏｎｎｅｒ…Ｕｎｅ ｃｏｎｔｒｅ－ａｔｔａｑｕｅ！！』

ズパッ♪スパンッ♪♪スッパッン♪♪♪

ディクは次々と刃を振り翳してくる鎧付き悪魔の攻撃を軽々と華麗に避けて、時には宙に浮いて身体を横に捻らせながら空中版マ●リックス避けした後、尽かさず悪魔の胴体や頭部・四肢の一部を綺麗に鎧ごと一閃入れてそのまま素通りする。

ディク『Ｊｅ ｒｅｇａｒｄｅ ｅｔ ｉｍｉｔｅ ｌａ ｌｕｍｉ？ｒｅ…三刀流・●狼流し（嘘）（※刀は一本だけですｗｗｗ）』

シャイナ「ちょっｗｗｗそれはワ●ピースのマリモヘッドの技ｗｗｗつーか刀一本しか無いのにｗｗｗ」

鎧付きネロマテF【ヒ…ギッ……】

鎧付きネロマテG【ガ…ガガ……】

ボトトッ…！

ディクの持つ長神刀に反撃斬りされた悪魔は“斬られた鎧ごと胴体が路上へと落ちてき”、ドサリと生きていた新鮮な肉が外郭を被う鉛の音と共に重々しい音を立てながら路上へと積み重ねられていく。

作者＆赤鉄2主人公「「！ディク直ぐに横へ飛んで地に這い蹲れ！！」」

と二人の外人侍は支援斬りしながら雑魚を一掃していた時数メートル前方にいる巨体悪魔が両腕を思いっきり広げる姿を見た途端、全身から放たれてくる“全てを斬り刻む殺意”を感じ取って契約者に向けて叫び声に近い怒声を上げる。

敵悪魔の剣を受け止めていたディクは何事かと思いすぐさま二人の外人侍の言葉に従って、受け止めていた剣を力づくで弾き飛ばした後横へと転がるように身を投げ出した瞬間…

鎧付き中級悪魔【シャァァァァァァァァァァァ！！！！】

ズシャァァァァ！！！！

ディク『うわわっ！？』

作者＆赤鉄2主人公「「くっ！」」

鎧付きの巨漢悪魔の全身から赤黒い不気味な三日月の形をした物体が複数乱れ飛び、ディクは地に伏せそのまま這い蹲り背中に出ていた二人の外人侍は半立ちするようなポジションを取りながら、巨漢悪魔の全身から放たれた全てを斬り刻む“無差別魔力の斬撃”を見る。

シャイナ「うひゃぁぁぁぁっ！？？！！」

犬ツィオ「キュゥ！！」

どんどん無差別に引き連れていた仲間（ネロマテ）や周囲の建物を無差別にカットして解体していく中、宙に浮かぶ最強の結界の中に居たシャイナと子犬（エッィオ）は一部向かってくる飛ぶ斬撃を見て＼（＾ｏ＾）／オワターな表情を出しながらあたふたしていたが…

ディク『大丈夫だ、シャイナ。俺が張った結界は俺の生命力がある限り“必ず護り続ける障壁”だ。継続時間など無い。』

シャイナ「おまっｗｗｗ何という聖闘士Ｇに出てくる●ウさんの技ｗｗｗ」

生前エッィオに鍛えられた最強の結界は向かってくる斬撃を結界の外部へと触れた直後、細かな粒子へと変わりキラキラと砂のように細かく崩れ、禍々しかった赤黒い光が徐々に純白へと変わって宙に“一つの光となって消失”する。

作者＆赤鉄2主人公「「しかし…これは好機だ。追加された悪ノ魔をヤツは全て斬り捨ててくれた。雑魚と構う時間を無くしてくれて逆に有難い。」」

ディク『あぁ、これで一対一になれたワケだ。感謝するぜ、デカブツ♪』

鎧付き中級悪魔【グォォォォォォォォォォォォン！！！！】

無差別攻撃が止んでディクは両手両足に力を入れて立ち上がり肩や腹部の服に付いた埃を右手で叩き落としながら、連れてきた仲間ごと全て惨殺した巨体悪魔に向けてバチコーン☆とウィンクを噛ます。
しかし…

リオリーネ《はぁ…うっ…》

ディク『（だが俺の後ろにいる妖精王だけはニ三発喰ったようだな。あの傷といい“持って数分…いや数秒ぐらい”だろう…。）』

ディクは咆哮を上げている巨体悪魔を睨み付けながら視点だけを後ろへと動かして、自身の後方に居る妖精王（リオリーネ）の状態を見てふぅとため息を付く。

先程の飛ぶ斬撃をリオリーネは自身に結界を張る余力は無くそのまま喰らってしまい、長い金色の髪がもう真っ赤に染まり足下には池のように溜まっている血と、身に羽織る白いドレスがズタズタに引き裂かれ内部の内臓類が曝け出すように出ている“もう明らかに危険な状態”を見たディクは…

ディク『フラムエール…一気にケリをつけるぞ。Ｒ？ｓｏｎａｎｃｅ！』

作者&赤鉄2主人公「「Ｉｔ　ｃｏｎｓｅｎｔｅｄ.（承知した）…Ｉ　ｂｅｃｏｍｅ　ａ　ｓｗｏｒｄ　ｆｏｒ　ｙｏｕ.（俺はお前だけの剣となろう。）」」

ディクが手にする長神刀を右斜め下へと構えて背中を少し折りながら戦の眼を出した直後、カッ！とディクと二人の外人侍がカットインでも入ったこのように両眼を強く光らせ全身に赤い線を浮かび上がらせながら、ディクの全身に赤黒い光の柱が大きく立ち上った。

第百八十六曲　●ＩＯ様以上の俺以外の敵は〇〇〇するチート結界ｗｗｗ

―妖精界　リュミエール　爆心地（元北西広場）―

フラムエール【よし、共鳴成功認識完了。これより巨大悪ノ魔討伐に入る！】

ゴォォッ！

立ち昇った強い赤黒い光の柱が止んだと同様に中央に契約者（ディク）と共鳴（リンク）し、武器に封じ込められた本来の赤黒いコートを羽織るガンマン男（第百七十ニ曲参照）が立っていて、バサバサと腰の長い裾が風で横に煽られながら立ちはだかる巨大悪魔に向けて強い眼力をする。

シャイナ「（ヒュー♪しっかし、人間のような感情に目覚めて数分も経たない内に慣れるとはねぇ～。）」

犬ツィオ「キャンッ！」

先程よりも二次元兵器（フラムエール）は機械的な能面の表情から、主人に対して立ちはだかり敵意を出す敵に対して“本来あるべき人間の信念を突き

通す前向きの表情”を出していて、ぐっと両拳を握り締め仁王立ちしながら、数メートル先で立ちはだかる巨大悪魔を睨み付けていた。

鎧付き中級悪魔【ゴハァァァァァァァッ！！】

フラムエール【！】

ビキキッ…

巨大悪魔はまたしても先程のような無差別斬撃攻撃を仕掛けるために両腕を広げる仕草を取って、全身に魔力を高め同時に溜めながら“口から吐かれる臭い息と共に”咆哮を上げる。

シャイナ「げぇっ！？？！！またあの無差別破壊攻撃が来るぅっ！？？！！ウチらは●ウさんのような結界の中にいるから良いけど…つーk臭サァァァァァァァァァァッ！！！！！」

シャイナはまたしても臭い臭いにフガッと右手で鼻を思いっきり詰まんで不細工顔になりながら結界の中から今いる外の景色を見て、先程の鎧付き中級悪魔による無差別破壊攻撃により周囲の溶けた建物がボロボロに朽ち果てるように斬り壊されていて、今いる爆心地以外にも爆心地外にある周囲の建物にも同じような被害が及んでいる姿を見て不細工顔ならも少し焦る表情を出す。

シャイナ「フガガッ!!!何どがじでっ!グ●ガリ〝サ〝ァ〝ァ〝…ゲフンッ!ァンッ!!ご…この〝ままじゃ、●ルカのような爆心地以外の〝建物にもまだ避難しきっていない（多分）生き残りの妖精ザンまで全域に被害が連鎖的に起こって、死者が更に増えちゃ…グボッ!う〝よ!!」

フラムエール【解っている!それよりも俺はク●ガリではなくフラムエールだ!名前をワザと勝手に間違えるように言うな“不細工顔女”がっ!!】

シャイナ「ンダトォォォォォォォォォォォォォォォ!!??!このフォモ●□%£◆＊@が!!!!後で覚えてお〝グビュッ!!ゲヨ〝ォォォォォォォォォクソや…ベックシィィィィィィィィィッ!!!!」

犬ツィオ「クゥゥン…。（´、`；）」

地上にいる戦闘体勢のフラムエールの挑発的な言葉を聞いてシャイナはブシッと額にプッチンマークでも浮かんだかのようにぶちギレ状態になって、結界の下でニヒル顔でも出しているかのような赤いガンマン男に向けて“ピー音が入った罵声”を上げたが、同時に鼻に詰まんでいた手を離してしまい巨大悪魔の口臭が鼻と口に入って思わず噎せ&嘔をしてしまう。

シャイナ「オ〝エエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエッ臭っ！！い…息がも〝ぅｗｗｗ」

フラムエール【体鍛が足りんぞ女。先程精神世界の中で俺に対しての“あの行為”は、魔ノ神と共にいた時による“身体・精神もそこそこ鍛えられてきていた”と思っていたが…な？】

フラムエールは結界内にいるシャイナに向けて背を背きながらクスッと笑うように少し口元を吊り上げた後、周囲の建造物を及ばないような短期決戦の場所を創るべく右手の平に赤黒い色の呪文が入った二重円の紋章を生成する。そして…

フラムエール【Ｉｔ ｔｗｉｓｔｓ ｉｔ ｓｏ ｔｈａｔ ｔｉｍｅ ｏｆ ｎｏｗ ｍａｙ ｇｏ ｂａｃｋ ａ ｌｉｔｔｌｅ…】

ゴウゥ！と魔力を生成した右腕を横に伸ばしながら後ろへと振り翳した時、生成された円型の呪文が半弧を描くように伸びてジワッと滲みながら走っていく赤黒い光がフラムエールと巨大悪魔をドーム状に大きく包み込んだ後…

鎧付き中級悪魔【！！ゴォォ…ォォォォ……ァァァァ…ァァ……】

グニュッ…

フラムエール【己の身に変化はあるだろう？さっきよりの場所から“重くなった”と感じるか？】

フラムエールは左腰に付いていた刀の柄を右手で掴んで握った後、ゆっくりと鞘から刀を引き抜いて剣先を巨大悪魔の顔面に向けて突きつけるように構えながら、口元を吊り上げて軽く微笑む表情を出す。

フラムエール【二次創作結界“刻ノ悪戯ナル瘴気”。この世界に入ったモノは術者(オレ)以外のモノは全ての四肢の動きが“半減”かつ“回りの流れを遅くする”。それだけでなく“悪ノ魔に対しては更なる重度な追加効果”も発動する。それは…】

どうやら今居る全てが赤黒い世界が“フラムエールが張った結界内”であり、シャイナがいる世界と結界内に流れる“時間が術者以外は動作と共に大分遅れるようにゆっくりと流れていて”、結界外部に映るシャイナと子犬(エッティオ)の会話らしき口の開きがゆっくりとスローモーションのようになっていた。。

鎧付き中級悪魔【！！ゴガァアアア！！！グァア…アアアァァァァァッ！！！！】

巨大悪魔は突如苦しみ出し身に纏う鎧の繋ぎ目辺りから黒い霧のよ

うなモノが抜け出るように吹き出て、ガクンと両膝を着いて背中を折るように右腕で支えながら半分身体が地面に崩れ落ちる。

フラムエール【この結界は“活きる全てのモノに害なす存在を拒む力”があり、破壊的な魔力を持つことしかない悪ノ魔に対してうってつけの力場（フィールド）。悪ノ魔の動きが鈍足（スロー）になると同時に…】

半ば崩れ落ちた悪魔は突如●刀（●ｉｉリモコン）を両手持ちに構えたフラムエールの姿が目の前にいて、攻撃をしようとしても纏う鎧自体が重く感じて腕がピクリとも動くことすら出来ないまま…

フラムエール【悪ノ魔の身体全域に循環する魔力を吸引。邪悪な力を吸い取り、徐々に無効果していく力も展開するのだ！】

フラムエールは険しい表情を出しながら手にしていた●刀（●ｉｉリモコン）を縦一直線に降り下ろして、ズバッと鎧を纏っていた左腕を綺麗に斬り落とす。

鎧付き中級悪魔【ガ…ガァァァァァァァッ！！！！】

フラムエール【ハァッ！】

ズバンッと鎧が付いた左腕ごと斬り落としたフラムエールは悪魔

に背を向いたまま●刀（●ｉｉリモコン）を横一閃に振った直線、背中を合わせていた巨大悪魔の左肩から右腰・胴体に光が一瞬走った直線、ブシッと血が噴き出る音が鳴って同時に肉がずれていく音も無気味に鳴る。

鎧付き中級悪魔【ギャヒッ…ギ…ギギッ…！】

徐々に鎧が纏っていた体がずれていく中、巨大悪魔は少し振り返って後ろにいるフラムエールに向けて残された右腕を震えながらも伸ばそうとしたが…

フラムエール【例え魔力を反射する防ぐ鎧だともこの力場内は何があっても“無意味”。“活きるモノを害なすモノ”に対しての裁きであり、唯一の悪ノ魔が永遠に眠る墓場である。】

フラムエールを掴もうとしていた右手につの間にかフラムエールが手にする●刀（●ｉｉリモコン）が背中を向けたまま突き立てられていて、●刀（●ｉｉリモコン）に突き抜かれた巨大悪魔の右腕の途中から刀身が出ていて、そのまま●刀の剣先が悪魔の右目を食い破り頭部後ろから右腕ごと突き破ったフラムエールの刀が付着した血と共に出ていた。

フラムエール【長々と貴様のような下等悪ノ魔相手に話したのだが、それも終わりだ。Ｇｏｏｄ　Ｄｒｅａｍ…】

ザシュッとフラムエールは背を向けたまま悪魔の眼ごと突き破るように付いた右腕の●刀（●ｉｉリモコン）を引き抜いた後、今いる結界内の影響でゆっくりと斬られた身体が二つ鎧ごとずれていき、所々内部の切断された内臓類が剥き出しになりながらドサッと大きな肉の塊が結界内の路上へと落ちていった。

第百八十七曲　生々しいホラーな残酷描写有りの夢を見る

―リオリーネ　夢　闇光―

リオリーネ《眠たい…楽に……なりたいよ…》

リオリーネという存在は現世から離れて夢という楽園へと戻り、静かに体育座りしながら本来の願いの思いが出た寝言を吐く。

世界は暗闇に満ちた黒い世界であり、何も音もなく感じることもなく只静かにリオリーネは自身の唯一幸せな夢の中で眠っていた。

リオリーネ《忘れたい…忘れたい…あの人間達と出逢ったことも全て忘れたい…》

一瞬リオリーネの脳裏に現世の妖精界で出逢った“破壊的な侵入者達（シャイナと黒い子犬だけは除く）”の姿を映し出し、唯一自身に向けて刃を振りかざしてくるあの“長身男の背後に憑いたあの女”を見てギュッと閉じられていた両眼を更に力を入れて更に深く忘れたい思いで急速に閉じていこうとした。が…

二人の外人侍「「ｋｉｌｌ　ｙｏｕ．（殺す。）」」

脳裏の中に現れていたあの冷酷な外人侍の姿は消えない。消そうとして他の夢へとリオリーネ自身は移動するが、別の場所・別の夢にも同じようなことが起きてリオリーネの目の前にあの外人侍が不気味に立っていた。

リオリーネ《や…止めて…》

二人の外人侍「「逃げようとしても無駄だ。俺はお前という“敵”を殺す。」」

リオリーネは直ぐに立ち上がって背を向けたまま必死の形相で走って逃げるものの、二人の外人侍はゆらっとした歩行で逃げるリオリーネを嘲笑うかのように“同じ速さで淡々と歩いてくる”。

リオリーネ《嫌っ！来ないで！！来ないで！！！来ないでぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！》

二人の外人侍「「“敵”である貴様に拒否権などない。俺の契約者（ディク）に刃向かう者は全て死ね…。」」

リオリーネ《嫌っ！！嫌っ！！い……》

ズバンッ！！

脳裏に映っていた二人の外人侍が感情が籠っていない冷徹な能面を出しながら、容赦無くリオリーネの背中に向けて●刀（●ｉｉリモコン）を降り下ろし、繊維と肉が斬られる音を立てながら斬り傷部分から真っ赤な血を花のように咲かせる。

リオリーネ《あぁ…アアアア！！！！》

二人の外人侍が持つ●刀（●ｉｉリモコン）に斬り裂かれた背中の部分から今いる世界のせいか本来の赤紫色の血が赤黒い血に見えて、その赤黒い血と痛恨の叫びと共に思いっきり飛び出し、更に背中に生えていた美しい妖精の翼が全てぼろ雑巾のように全て斬り落とされる。

ディク『ジェィッ♪』

リオリーネ《！？？！！》

ガゥンガゥン！！

追い討ちを掛けるように発砲音が近くに鳴って、前方から肉が突き破られる音と更なる痛みの感覚を覚えて、両肩・右腹部・左脹ら脛・右手に大きな風穴が開く。

空かれた風穴からまたしても背後の背中に生えていた翼ごと斬り落とされた時と同じく赤黒い血が噴き出して、空かれた風穴から内部の内臓組織がさらけ出しながら前朔になるように倒れていく。

リオリーネ《は…ぁ……ぁ！》

ディク『はぃ♪残念っ！捕まっちゃったぁ～♪イヤンッ（＊´ー、＊）』

暗闇の前方から不意にリオリーネを狙撃した両手に短銃を構えていたディクは、かかさず倒れかかるリオリーネに向けて横に伸ばした右腕を抱き支えるように受け止めた直後…

二人の外人侍「「捕　ま　え　た　　ぞ。」」

ディク『これが二次から三次元でいう“ゲームオーバー”というモンＳＡ♪』

ドスッ！！

抱き止めた瞬間にリオリーネの心ノ臓にディクは左腕の袖から白銀の光で出来たハイドブレードを、背後からは既に追い付いていた二人の外人侍が持つ●刀（●.i.iリモコン）が喉仏を交互にリオリーネの急所となる身体を貫いた。

リオリーネ《ひ゛…ぅ゛……ぅ……》

パタタタ…

心臓部分と喉仏を交互に貫かれたリオリーネは喉仏を刺されたか声帯がヤられて所々口籠る声を出しながらゴボッと血の塊みたいなモノを滝のように吐き出して、吐き出された血の塊は風穴が空いた傷と背中を斬られた血と一緒に混じって、足下に血の池を溜めるように広がっていく。

二人の外人侍「「痛いか？苦しいか？？それとも苦痛と重圧が混ざった嫌悪から逃れたいか？？」」

リオリーネ《ひ……ぐっ……》

リオリーネの背後から喉仏ごと●刀（●.i.iリモコン）で突いてい

た二人の外人侍は、ニタリと口元を吊り上げて不気味に笑いながら絶望に落ちたリオリーネの声を楽しむように聞きつつ、手に持つ武器に更なる力を入れる。

ディク『仮にでも“一国の王”が力の無い民を“一人でも多く護ろう”とする気持ちが無くて逃げようとしていたアンタが信じられないな。元オルレアン国王の俺からにして“最・低”だなアンタ。』

リオリーネ《ヒ…グッ〝!?》

ドッ!!

ディクは心ノ臓に向けて刺していた左袖のハイドブレードごと左手をリオリーネの胸部中心を突いて、左頬にリオリーネの赤黒い鮮血が少し付着しながら内部の肉を掘じくるように一つ左手の平の中で蠢くモノを鷲掴みする。

ディク『こんな臆病者が一国の王として務まるハズがない。この件は冥界にある“裁きの天秤”にお前の“心ノ臓”に掛けて審判を下すとするか。』

リオリーネの叫び声を上げる暇なくディクは身体の中に入れていた左手を前へと抜くように腕を動かして、ブチッと何かが千切れる音と共にディクの左手の平にリオリーネの身体から抜き出された“心

臓”をもぎ取る。

リオリーネ《い〝……ぁ〝ぁ〝……う〝……じ……》

ディク『審判（ジャッジ）を開始する。この“臆病者”に行くべき道は??』

ディクはリオリーネの身体から抜き取った心臓を後ろへと投げ捨てた後、更にディクの後方にいた白い衣を着た女性と小さき存在に投げ捨てられたリオリーネの心臓が開かれていた小さき存在の口へ喰え込む。

リオリーネ《!!》

シャイナ「ちょっ…カルボの新しい玩具はコレかよｗｗｗ何かリアルに蠢いているんですがｗｗｗ」

犬ツィオ「グルル…ルルル……」

リオリーネの心臓を喰えたのはシャイナの谷間の中にいたあの黒い子犬であり、シャイナはドヒャーとわざとらしい仕草を取って後退するものの…

犬ツィオ「ゴルルルル…グフー…ゴフー……フーフーフー…フッ！」

逆に子犬は気色悪いモノを喰えているのに関わらず心臓を喰えたまま唸り声を上げており、口内で舌を舐め回しながらまだ蠢く活きた血肉を玩具のように味わった後…

犬ツィオ「うんっ！全殺し、決定っ★」

リオリーネ《！！？？！》

ズンッ！！

突如心臓を喰え遊んでいた子犬が人間のように喋った直後、リオリーネの身体を突いていたドS二人組の武器が自由気儘に動き出し、一瞬の内にリオリーネという身体があっという間に“１７個の肉体へとバラバラに解体される”。

犬ツィオ「秘技“零距離十七分割”まさかアンタでも出来るとはなぁ～、前世紀最後の戦闘兵器も…」

ドサドサとリオリーネを解体した細かな肉片が雪のようにゆっくりと落ちる中、子犬（エツィオ）は落ちてくる肉片の中を歩み降り注がれる血も“

一滴でも付着せず”返り血が付いたディクの下へと歩み寄りながら側にいる二次元兵器に向けて陽気な言葉で言う。

二人の外人侍「「違う、俺の名は“炎翼（フラムエール）”だ。俺には…新しい名前がある。前世紀に無かった本来付けるべき愛が込められた名前（タカラ）を…な。」」

犬ツィオ「そうか。人間の感情に目覚めたからにしてもう慣れたモンか。俺は当初戸惑いが絶えずに自暴自棄になっていたというのに…」

子犬（エッィオ）はクルルと喉仏の声を鳴らして見上げるように言った後、二人の外人侍は「「まだ慣れない用語もあるけど、時期に…な。」」と言って屈むように背を低くした後、子犬の顎下に右手を擦るように動かして軽く宥める行為をする。

ディク「前向きになったもんなフラムエール。しっかし…」

シャイナ「どうすんの？この肉の塊？？ｗｗｗこのままじゃ、他の人に見られたらまた面倒なことになるぜよ？？」

かろうじて顔面半分残されていたリオリーネはもう喋ることすら出来ないものの、残された右目の視界からはバラバラにされた自分の肉片に向けて何度も指すシャイナと、腕を組んで先のことを考えて

なかったい黒深巾の男（ディク）と二人の外人侍が苦笑いしていた時…

犬ツィオ「それじゃぁ、俺が何とかしよう。シャイナ、二人を連れて此処から出来る限り離れてくれ。“スプラッター”なことをするからＳＡ☆」

と子犬がそう言った後シャイナは「ラ★ジャー、ＤＥＡＴＨ♪」と言ってディクと外人侍と共に更なる暗闇の中へと入っていって、完全に三人の姿がこの世界から消える。

リオリーネ《…》

犬ツィオ「そう恐がるな。直にお前は俺と一つになる。今までの事を忘れて、お前は本当の“楽園”というモノへと入れるんだ。今まで犯してきた罪をぬぐい去ることに感謝してほしいぜ。」

子犬は床に落ちた１７個の肉片（リオリーネ）に向けて笑みを投げ掛けるような言葉を言った直後、いつの間にか“本来の姿に戻った魔神（エッィオ）”がいて、逞しい竜のような右腕が右片面だけの一つの肉片を掴み取る。

エツィオ『大丈夫…君は幸運な持ち主だ。君ら妖精達が憧れていた俺の身体の中へと永遠に過ごすことが出来るから…な？』

魔神は人間体に近い笑みを出しながら微笑み表情を出した後、クパッと口を開いて口内にある怪獣のように鋭い牙と口内に溜まる涎を見せながら言った後…

エツィオ『久々の飯(ニク)だ。頂き…ます。』

手に取られていた肉片(リオリーネ)は開かれていた魔神の口へと入った直後、視界は真っ暗になり同時にグチャリと何かが引き千切る音が鳴って意識が遠退かれた。

第百八十八曲　＼祝／毒☆舌喧嘩が溢れる彼らの本来の素顔ｗｗｗ

―妖精界　リュミエール　妖精王の神殿―

リオリーネ《っっっっっっっぁ！！！？？！！》

バサッと自身に掛けられていた純白のシーツを撥ね飛ばす勢いで起き上がり、リオリーネは息を見出しながら起き上がった上半身を見て大きく目を開く。

リオリーネ《ハァ…ハァ……（夢…だったの…？）》

リオリーネは身体の至る所に巻かれている白い包帯を見て、更に自身に痛みの感覚がまだ染み込むように覚えることで、前話は自身の造り出した悪夢だったことを解釈し今いる場所が現世の神殿にある自室のベッドの上であることを理解する。

リオリーネ《血の匂い…全て…私の…》

左片面だけが遮られておりリオリーネは左片面に向けて右手を伸ば

した途端、右手の指裏に赤い痕が付いて巻かれている包帯から新しい血痕が滲み出るように少しづつ浮かび上がる。

乾ききっていない自身の血の匂いがツンと今いる殺風景の室内に漂い、リオリーネはじっと指裏に付いた自身の血をただ黙ってずっと見続ける。

リオリーネ《でも…生きてる……私…生きている……》

身体に被われた白い布とそこから染み出す赤紫色の血痕、背中から生えていた美しい四翼は破かれたように風穴が沢山空いていて、ボロボロに傷付いた片方の狭い世界しか見えない壊れた自身はもう飛ぶことすら儘ならない。

しかしリオリーネは自身に負った傷と痛みを見てそれでも生きていることに少し溜め息を付いた後、顔だけを右に動かしてベッドの隣に付けられている開けられていた窓の景色を少し見て吹いてくる生暖かい風を顔面から受けていた時…

ディク『おっとっと！目覚めたかぃ御嬢さん。中々眼を覚まさないから、本当に逝っちゃったかなぁ～、と思ってｗｗｗ』

シャイナ「だとしたら、もう前の戦いはもう意味無いじゃねぇーかｗｗｗ折角“ホモとホモのウホッ！な友情★合体した戦闘描写の意

味”がｗｗｗ」

犬ツィオ「キャンキャン♪」

突如自室の入り口から暢気?婢談が混ざった会話と共に入ってくる黒深巾を着た完熟霊体男と、純白の衣を着た人間の女と彼らの足下にいる黒い子犬(エッィオ)が入ってきて、リオリーネは眼を丸くしながら歩いてくる彼らの方へと向き直す。

シャイナ「くー♪流石この世界の王サンは俺らチーターチームと同じぐらいの治癒能力ｗｗｗ一応消化に良い入院食擬きを作ったんだけど…どうかな?」

リオリーネ《何故…?》

リオリーネは殺傷しながら自世界に侵略してきた者達の“彼らにとって敵であった自身に包帯を巻く快方行為”や、白い布を着た女性の手に四角いトレーの上に“食事まで出してくる情けある行為”を見て、先程の敵に対して容赦の無い行動から離れた彼らなりの通常の姿を見て不思議な表情を出す。

作者&赤鉄2主人公「「聞いていなかった…いや、あの時のお前は意識混濁していて喋ることも、聞くことも儘ならなかったか。我々はお前に聞きたいことがあったから情けも入れて生かしたまでだ。」

」

リオリーネ《！貴方は…》

更に二人と一匹の後方の入り口付近の壁に赤いコートを羽織った女の浮遊霊付き長身男がよたれかかるように立っていて、両腕を組み強い眼力をベッドの上にいるリオリーネ向けて出しながら言う。

リオリーネは赤い長身男から放たれる眼力に思わずベッドから立とうとしたが、傍まで寄った片手ＤＥ入院食持ちのシャイナに「アンタ多く怪我してるから、安静しろや。」と言って額にシャイナの左手の平に当てられた直後、そのまま頭が落ちベッドの上にある枕まで押し倒される。

リオリーネ《ちょっ…と！な…何を…》

ディク『まだ動いちゃ駄目だ。治癒魔力で傷付いた肉体を繋ぎ直しても、肝心の中身の組織はまだ治っていない。俺のような“一般的な魔力を持つ人間”は“師匠”と違ってそこまではいかないんだよ。』

リオリーネ《し…師匠？貴方のような人間は“人を超えた“あの人”に近い魔力を持っている”というのに…》

リオリーネは枕側に回ったディクの潜在能力と自身に溢れる魔力を感じ取るように見て、またしてもリオリーネの額にディクの右手の平が触れる。

ディク『全肉体起動率は５６％弱ぐらいか…一番酷かった右脇腹の修復率はまだ４０％だね。完全に動けるようになるまで3日ぐらい掛かるか。てか師匠の名についてはノー☆コメントな！（＾＾）ノシ』

シャイナ「うん、ここで言ったら駄目だもんねｗｗｗそれよりアンタの怪我についてだけど、特に右脇腹が本当に酷かったよアンタｗだって…ねぇ？…」

ディクのリオリーネの身体チェックしている間にシャイナは作ってきたトレー入り入院食をベッド脇に合った机の上に置いて、鎧付き巨大悪魔を倒す際に見たリオリーネの虫の息状態だったのを生々しく思いだしながら言う。

作者＆赤鉄2主人公「「貴様の魔力が尽きた後疲弊した先に中級悪ノ魔の攻撃で四肢のニ部が欠損。且つ右脇腹に風穴が空いて一部の臓器が失われる始末だ。それでも奇跡的に生きてられたのは、俺の契約者の力のお陰だろう。」」

リオリーネ《！そ…そんなに……》

シャイナ「オィオィ…こんな所で大怪我人相手に“先程の戦闘であった生々しい言葉を使うなよ”ク●ガリサァァンｗｗｗ」

キリッとした態度で大怪我人（リオリーネ）に言う二人の外人侍を他所に、シャイナはビシッと右手で突っ込むような仕草を取りながら苦笑いする。

作者＆赤鉄2主人公「「だからク●ガリではないと言っただろう。俺はフラムエールという名が付いてい（省略）」」

シャイナ「だ　が　断　る　。（笑）　その風貌からにしてアンタは赤鉄2のドMでありドSである若きウルトラセクシーヒーローなガンマ（省略）」

作者＆赤鉄2主人公「「う…ウルトラセクシーヒーロー!?何だその“性欲が出そうな婢の用語（ワード）”は?よ…蘇ったこの地球に住まう人間は“不可解過ぎる用語”を沢山使うのか?」」

シャイナ「えっ?知らないのぉ～ク●ガリサァァン??地球が滅びる前の前世代でも、ウチらのような“腐・呆・妄・婢”が沢山溢れた用語が飛び交っていたと思うし、まぁ生きてきた殺人のことしか入っていない機械面（アンタ）には興味無かったと思うしぃ～。」

作者&赤鉄2主人公「「だからと言って、わざとらしく俺の名前を間違えて言うなよ。あと不可解な用語も止めてくれないか？頭が痛くなる一方だ…」」

二人の外人侍はシャイナのゲーム話と毒舌が入った台詞を聞いて、苦い思いでも出しているかのように額に右手を当てながら頭部に被る西部風のウェスタンハットを左手で被り直す。

シャイナ「嫌っすｗｗｗこれからはアンタのことをク●ガリサァァンと呼ぶ。もう決めた、決定！ＹＥＳで○ボタン♪つーか脳内全体にショートして自己でＢＡＮ☆しろや（笑）そして逝っチマエ（＾Д＾）ｍｇ」

作者&赤鉄2主人公「「この人間の女が…言わせておけば…！」」

ディク『まぁまぁ、雑談はここまでにして俺らには妖精王に聞くべきことがあるんだ。シャイナが誠意を込めて作った食事を食べながらでもいいから、俺達に教えて欲しい。てかっｗｗｗフラムエール…マジでキレるなよｗｗｗ』

ディクの後ろでアッカンベーしているシャイナを見た二人の外人侍は入り口付近の壁で腕組みしながらも“額にプッチンマークでも付いた”ように“威圧&憤怒の形相”でも出しながらお互いにガンづけし合う。

ディクはそんな二人の威圧だけでガンづけし合う“無言での睨み合い喧嘩”を見て少しプッと吹いた後、シャイナがベッドサイドの机の上に置いた入院食付きトレーをリオリーネに寄せて左手で上半身を起こしながら言う。

リオリーネ《何を…知りたいの？》

ディク『俺達は訳ありでこの世界に来た。といってもとある人の為の犯人探しなんだけど…』

リオリーネを左片手だけで起き上がらせたディクは、リオリーネの顎下に右手を入れてぐっと軽く顔を上に上げるようにした後、真顔で“カメラ目線”に向けながら続けて言った。

ディク『エデンの果実に似せた“疑似林檎を無法に生成している者について”と、この様な魔を退ける光溢れた世界に現れた“知性を持たない悪魔が光に対抗する知能を突然持った理由”を詳しく聞きたい。』

第百八十九曲　シャイナ「お触り禁止だ、この◆#&★*@♀■野郎ｗｗｗ」

―妖精界　リュミエール　裏繁華街―

シャイナ「ＤＥ…此所に来たワケですけど。」

ドンッとデフォで何処かで効果音が鳴って閲覧者用カメラ目線には“シャイナの鼻がドＰされた出オチ風の不細工顔”であり、所々鼻穴から蒸気のような煙がピーピー出ながらキモ顔で言う。

ディク『うんｗｗｗ明らかにもう裏臭い匂いが漂ってくるんだがｗｗｗ…獣臭いｗｗｗ』

犬ツィオ「キャヒンッ！！（´Д`　；）」

どこ見てもシャイナが住まう現世と同じ古いコンクリートと朽ちた機材で繋ぎ合わせた“モノ建てる知識の無い素人共らが住まう旧地区”であり、路面には完全に処理されていない生ゴミが無像無人に捨てられていて、一切手入れしていない腐臭が漂う不衛生だらけの現状。

所々壁にスプレーのような落書きが大きく描かれた無法者らしい派手なモノも刻まれていて、敷かれた交通機器も一切無視した三次元に生きる誰もが求める“真の自由な世界”が現れていた。

ディク『臭っｗｗｗ流石清潔を一切怠った状態がコレかｗｗｗｗェィ…（Д￣￣）』

犬ツィオ「クゥゥゥゥゥゥ…ン…」

所々漂う腐臭を嗅ぎディクは右手で口を押さえるように庇いながら、オェッ…と何が吐き出そうな声を小さく出す。

シャイナの足下にいる子犬（エツィオ）も腐臭に耐えきれず悲鳴のような声を上げて、遂に身体を路上の上へと横に倒し力無いようなぐったりとする仕草を取る。

シャイナ「わわわわわ…だ…大丈夫エツィ…カルボ。」

犬ツィオ「キャ…ゥン…」

シャイナは腐臭で倒れてしまった子犬（エツィオ）を両手で拾い上げて、抱き抱えるようにゆっくりと子犬の身体を動かさないように自身の胸元辺

りまで持ち上げた後…

シャイナ「“憶超えのエロオヤジ”にぁ、ここが復活材起点（フロポイント）だろ。」

ディク『ぶっｗｗｗそこかよｗｗｗ』

腐臭で倒れた子犬（エツィオ）をシャイナの“谷間”に入れて、ギュムッ♪とデフォで音を立てながらピッチリ合うように胸と胸同士の側面を挟む。すると…

犬ツィオ「キャウ…ウウウウウン…／／／／／／キュゥ…／／／／／／」

谷間の中で子犬は“プリン並みの肌触りを受けて苦痛のような荒い息きから“ベロが出る程鼻息が激しい変態顔の形相”になり、スハースハーと胸の臭いを隅々まで顔を右往左往に動かして嗅ぐような仕草を変態的な意味で取る。

犬ツィオ「キュィー／／／／／キュゥウゥウン／／／／／／クキュキュキュキュキュキュキュキュキュキュ／／／／／／」

シャイナ「あんっｗｗｗもうエツィオったらｗｗｗ私のような●◆■カップな人間に挟まれて破壊力抜群な顔を見せつけるなよｗｗｗ」

犬ツィオ「キュゥゥゥン／／／／」

谷間の中に入れられた子犬（エツィオ）は何度も胸の側面にベロを出して高速に舐めるように動かして、変態的（ご褒美）にしゃぶりながらゴロンと気持ちよい表情を出して谷間で小さな身体を一回転させる。

ディク『ヤりたい放題だなエツィオｗｗｗ（ヤベェ…シャイナを犯したい…ヤりたい…一回でもいいから…さ…？まずあの…）』

ドクンッ

ディクは谷間の中で遊んでいる≠ヤっている子犬（エツィオ）を見て、表面は半ば呆れた表情を出しながら見つつ裏目では心臓の鼓動が小さく…大きく周期的に変化する音を出して、ゴクッと唾を飲み込みながら恨めしい表情を出す。

ディク『（最初は敵を欺くとはいえ彼女の身体に触れた…だけなのに、何か物足りない…触るだけじゃ…満たされない…も…もう一度…彼女の身体に…ね…）』

ディクはそっと気づかれないように隣にいるシャイナに向けて左腕を伸ばし、再度シャイナの身体を触れようと無音で背中から回そうとした時…

シャイナ「貴　様　は　駄　目　だ　、　“リアルＬ●Ｄハンター”。我が不意なスケベ★タッチなど通用すると思ったのか？」

ディク『！！？？！！』

ズダンッ！！！！

突如ディクの身体が宙に浮いて背中から路上に倒れ、ディクは背中から打ち付けられた痛みを軽く呻くように上げる。

ディク『い…痛ぇ…何だこの技はｗｗｗ』

シャイナ「痴漢相手撃退用護身術“一本背負い投げ”これを覚えておけば、大抵痴漢野郎を追い払えるんだよ？カスが…」

どうやらディクが無音に伸ばした左腕をシャイナは瞬時に電脳電波で反応して右手で掴んでガッシリと手首を握った後、一度引き寄せるようにディクの身体を持ってきて引き寄せる際に崩れたディクの右足を左足で引っ掛ける。

そして後は引っ掛けられたディクは体勢を崩して半分宙に浮き、勢

い良く掴んでいたディクの左手首を両手で持ち直しながら左足を軸に思いっきり背中を打ち付けるように投げ飛ばしたようだった。

シャイナ「ククククッ…私かっこ良くない？こんな大の霊体男の身体を投げ飛ばした女ってｗｗｗ」

ディク『撃退用の…格闘術か……現代（いま）の…格闘技術も…進歩してやがるｗｗｗグホッｗｗｗ』

ディクはシャイナに投げ飛ばされて顔面に両手を被うように仰ぎながら、アハハッ…と苦笑いするように軽く参ったような表情を出す。

シャイナ「私の身体に触れていいのは“エツィオだけ”よ。他のウホ共にゃぁ、私の身体一つも絶対に触らせなんかしないぜ。」

ディク『…まだまだだな、俺も…。』

ディクを投げ飛ばし屈伏？（マゾな人にご☆褒美）させたシャイナは調子良くポージングするような仕草を取り、ピクピクと両腕の膨らんでいない細々筋肉を僅かに動かしながらカメラ目線に向けてピースサインをする。そんな最中…

作者＆赤鉄2主人公「「面白い人間だ。無音で一切の気配を無くし

たのに関わらず、反撃したあの技を持つ魔ノ神と共に歩いた人間。非常に興味深いものだ。」」

ディク『おっと…フラムエールも見ていたのか?あの技を、…』

突如ディクの身体の中から武器状態として仕舞われているフラムエールの声が聞こえて、ディクは地に背中から倒れ伏しながらも現世で声に出さず“思念”でフラムエールに声が弾むように応える。

作者&赤鉄2主人公「「然り。滅びた後に生まれた次世代の人間らは前世紀と同じように“口だけで戦う力なき奴ら”が事実上多かったが…」」

ディク『進化し続けているんだよ。前世紀は一度滅びても、また再び滅びさせた存在に立ち向かうために“するべきだったこと”を再度身に付けて…かなぁ?』

作者&赤鉄2主人公「「また…情報として入ったが、この世界に活きる次世代の人間達は不可解な行動を取るパターンが枝分かれするように複雑になってきている。一つ一つのノードがまた新たな物を作り出し、また新しい物に向けて次々と生成している…な。」」

ディク『フラムエールこそ、不可解な用語を沢山使って言っているじゃないか。段々と馴れてきたのかぃ?』

作者&赤鉄2主人公「「少しな…だがディク、俺はあの時のような元の俺にはもう１００％の確率で確実に戻らない。確実に元の俺と今の俺と違う人格へと１００％以上の確率で成りつつ有る。…それでも、俺は不思議な気分だ。」」

ディク『それは何故？』

ディクは身体の中で科学的なことを淡々に長々しく言う二人の外人侍の台詞を聞いて、新鮮すぎる人格を受けつつもゆっくりと両足に力を入れて立ち上がる。

二人の外人侍の声を聞く内に彼らは新鮮な自分の姿を見て多少戸惑いつつも“兵器にはない人間らしい本来の自分へとなっていく”作りを楽しみ進化していくように興味深いような声でも聞くかのように更に続けて彼らの話を聞く。

作者&赤鉄2主人公「「人に…前世紀のような自由気儘に情を振るえる俺本来の“人”に成りたい。この先魔ノ神とディクと共に戦って行く内に、俺という存在は完全に変われるかもしれないんだ。そうすれば俺が生きた滅び行く世界で何が起こったのか、俺自身の過去に何があったのか驚愕な事実を突き付けられても俺は微動せず、前向きに立ち向かえるような強キ人間になれて知ることが出来る。だからそれまでは…」」

ディク『共に修行…だな。』

ディクは二人の楽しみ溢れた会話を聞いて両眼を閉じながら口元を吊り上げて微笑むように笑った後、肩や腰に付いた路上の埃を右手で払い落とす。

作者&赤鉄2主人公『俺は…強くなる。技を磨くだけでなく人としての必要な“情”をっ！』

ディクはポージングから両腕を組むようにジョ●ョ立ちしているシャイナに向けて歩み出し、再度自分が今いる旅の目的を身体の中にいる二人の外人侍に思念を大きく放つ。

ディク『俺は…過去の歴史を塗り替えた“犯人”を探す。見つけ次第必ず…！』

―殺すっ！そして俺が歴史を正しく変える証人となる！！―

第百九十曲　Conversation du Roi du l?che

何故シャイナ達が腐臭漂う“暗黒裏繁華街”に来ているのか、それは作者の仕事の都合で書けれなかった前話の少し前へと遡る…

―妖精界　リュミエール　妖精王ノ神殿　王妃室　数時間前―

リオリーネ《擬似林檎の製作…！？その根拠は何処に？》

ディク『一度俺の国で“林檎の力を似せた武器”を魔界の一柱であった“嫉妬（クソハゲ）”が俺の師匠と戦う際に振るっていた。（第百四十三～四曲参照）そいつを倒した後その武器を回収して、神界を治める“古の闇王”に解析してもらったんだ。これがそうさ。』

ディクは腰辺りの左側にあったポケットの中に手を入れて、粉末状になった小さなビニール袋入りの“ニケの杖の一部”をビニール袋の先端に掴まむようにして取り出し、ベッドの上で半起きしているリオリーネに見せる。

ディク『模擬品を作り出したこの物質から“少量の魅惑なこの世界独特の妖気が漂うフェロモン”が入っていた。俺達がこの世界に来

た理由は俺が持つこの粉末状（ニケの杖）を作り出した犯人を捕まえ、直々その場で公表することなく処刑する。それだけだ。』

リオリーネ《…それだけ？それだけの理由で私達の世界に入った途端、何の罪の無い民を無差別に殺してまで…目的の為に遂行しようとするの？それに貴方は…》

リオリーネは淡々と語るディクの素顔を見て自身に掛けられているシーツの先をわななかせるように握りながら、俯いていた顔を上に上げてキッと怒りを思わせる表情に変えた後強い口調で言う。

リオリーネ《民を救った“英霊”の臭いがするのに…貴方はもうどんな理由であれ力無き“人”をその手で殺めた！貴方はもう英霊ではなく私目的で破壊活動を好む“邪霊（デモニアコ）”よ！！》

ディク『…。』

リオリーネの…妖精王としての叱咤・民を殺めた者に対しての憎悪、ディクはリオリーネから吐かれる言葉を黙って聞く。

リオリーネ《何故貴方のような邪霊に“英霊”として定めたのか、この星を代表する神々の意図が私には不可解よ！それだけじゃないわ！！貴方の身体からも私達の民の血・悪魔の血だけでなく“この星に住まう人間の血”の臭いも染み付いている！貴方…過去に“力

無き人を殺したことがある”でしょう！？≫

ドンッと何処かで効果音が鳴ってリオリーネの真顔からズームアウトしていくように閲覧者用カメラ引いていって、カメラはディクの頭部に羽織る黒いフードの後ろ姿をじっくりと映し出すように動かす。

シャイナ「えっ？ｗｗｗマジっすかｗｗｗディクサァァンは一回人間を殺したことあるんすかｗｗｗフーン（´―｀）」

犬ツィオ「キュルルルル。」

そんな緊迫な会話が流れている中、シャイナと子犬（エッィオ）はいつの間にかバッグから取り出していたマタタービ★を、子犬（エッィオ）に向けて転がして更にシャイナは鈴が付いた小さな球体の道具を子犬（エッィオ）に向けて転がし渡す。

犬ツィオ「キュゥン。キュゥ♪キャンキャン♪♪」

チリンッと鈴の音と共に転がってきたマタタービ★&鈴付きボゥルを子犬（エッィオ）は、両前足を転がって来る球体の順に交互とプニュッ♪プニュッ♪♪と肉球に当てた時の効果音と共に子犬（パピー）用遊具ボゥルを転がし遊んでいた。

シャイナ「やんっｗｗｗ可ぁぁぁぁぁぁぁぁ愛ぁぁぁぁぁぁいいいいいいいいいい（＊´８`＊）写メしたいけど、生憎携帯の電池が無いぉぉぉぉぉｗｗｗ」

犬ツィオ「キュゥ！キュゥキュゥ！！キュルルルル！！」

ドドドドドッ

転がってくる用具をパンチ遊びしていた子犬（エツィオ）は今度パンチした際に遠くへと転がっていった球体を追い掛けるように全力で走り出して、“緊迫めいた重要らしい台詞が流れている”のに関わらずシャイナはなごなごとした表情で遊具を追い掛ける子犬（エツィオ）の姿を可愛らしく見守るように“何も聞いていない”ように鼻を伸ばしていた。

リオリーネ《あの人間…よくもこんな雰囲気に……》

ディク「いいじゃねぇ～かｗｗｗ“アイツらしい所”だから。それに…」

リオリーネはのほほんと遊ぶ空気が読めない一人と一匹の姿を見て、少し腹立しい思いを脳裏に浮かべながらキリッと嫌悪の形相を浮かべた直後ベッドの傍にいた邪霊（ディク）の声が聞こえて、瞬時に顔を憎悪へと変えてディクの方へと向ける。

リオリーネ《何？“邪霊”？？私はもう貴方のような全てを活きる人を平気で殺す破壊者の戯言を聞くつもりは無いわっ！！》

ディク『別に聞かなくても良いよ。アンタが言うように俺が破壊者やらなんなの変な想像でも構わんが、とりあえずオレが聞きたいことはもう一つ…この世界に“知恵を付けた下級悪魔が現れた理由”を詳しく聞きたいけど？あっ…コレは“一番重要な質問”だぜ？お嬢さん？？』

ディクは両腕を横に広げてわざとらしいお手上げな仕草をしながら、クルルン♪と自身を一回転しつつ“一番聞きたいこと”を彼女に投げかけたが…

リオリーネ《…出て行って。もう貴方と話す気は無いわ！そこにいる人間の貴方と小動物、入り口に居る私を傷つけた霊憑き人間モドキも直ぐにこの世界から立ち去って頂戴！！》

ディク『ああ事を成したらさっさと出て行くよ。しかし今のお前の状態で“事をただ成した俺達”がこの世界から出て行った時“知恵を付けた下級・中級悪魔、最悪上級悪魔が数多くこの世界に残っていたら”、お前…“出来る限り全ての民を一人でも護りきろうとする“自信”があんのかよ？？』

リオリーネ《！》

リオリーネはディクの自身の性格を見抜かれたような言葉を聞いて少しはっとするような表情を出した後、ディクはリオリーネの顔つきが変わったことで少し口元を上に吊り上げて不敵に笑う表情を出す。

ディク『へっ…顔付きが偉く変わったなぁお嬢さん？で？…その態度といい、お前…本当は“内気で臆病な性格”だろ？最初出遭った時にお前の口調がもう“侵入者（テキ）に対してもう後退気味な様子”が伺えたんだよなぁ～？どや？？ここまで合っているだろ？？』

リオリーネ《っ貴方…》

リオリーネは全てを見据えたように言う不気味な笑みを出しているディクを見て、ギリッと奥歯同士を強く噛み締めるような音を少し鳴らせ、きっと両眼を細く尖らせながら睨み付ける形相を出す。

ディク『図星…だな。お前この国を治める王なんだろ？だったら今居る世界でも起こっていることを自身が直接赴いて解決すべきじゃないのか？まぁ俺の余談だけど、この国自体“無法になりつつある姿”をずっと眼を瞑って何事も無かったようにそのままにし《牢獄…牢獄よ…》へ？ｗｗｗ』

ディクは両腕を組みながら生前の王としてやるべきことを大怪我人の彼女に力説として語ろうとした時、突如リオリーネは何かを脳裏で思い寄せた後包帯が巻かれていない右腕を上に上げて、手の平から小さな四角形を魔力で召喚して数秒浮いていた小さな四角形はカランと音を立てて床の上へと落ちる。

リオリーネ《以前…いえ私の国で“則を破った者”に対して永遠に追放すべく作り出した“牢獄(ノワール)”があるわ。そこにまず行ってみなさい。私が出したその床に落ちたその妖札(カード)が、“牢獄(ノワール)”へと入るための必需品よ。》

ディクは床に落ちた小さな四角形の妖札(カード)を拾い上げて、カードの表に刻んだ点字らしきモノが刻んであるのを見つつベッドで休んでいるリオリーネへと顔だけ向ける。

ディク『へぇ…この妖札(カード)が無ければ易々と入る事が出来ないぐらい“危険な場所”なのかいお嬢さん？』

リオリーネ《そこに“牢獄(ノワール)の管理者ブリッツ”が全ての無法者を管理しているから、彼から聞け出せば貴方たちが求める人物を特定できるかもしれない。…話はここまでよ。》

ディク『はいはい、わかったよ。んじゃ、さっさと俺らは事を成して出て行くから。』

ディクはとりあえず鍵となる場所へと入れることで良しとしようと脳裏でそう判断した後、拾い上げた妖札（カード）を右腰のポケットの中へと仕舞い後方に居たシャイナと二人の外人侍に『出発するか。』と一言言ってさっさとリオリーネが休む居室から出ようとした時…

リオリーネ《後一つ…貴方が言った事…》

ディク『何だ?』

ディクは居室から出て行くシャイナと二人の外人侍から一旦足を止めて顔だけを後ろへと振り返り、窓に映る外の背景を見ながら背けているリオリーネの姿を見て、ふと首を少し横へと軽く傾ける仕草を取った直後…

リオリーネ《Ｊｅ ｖｏｕｓ ｍｏｎｔｒｅｒａｉ ｌａ ｐｌａｃｅ ｑｕｉ ｎ'ｅｓｔ ｐａｓ ｌ?ｃｈｅ ｕｎ ｊｏｕｒ…》

ディク『…そうかい。』

妖精界独特の言語を聞いたディクは少し笑みを出しながら軽く鼻息を鳴らして、そっと彼女に背を向けて静かに居室から退室していった。

第百九十一曲　四人達の楽園≠弱肉強食の狭い箱庭

前話、妖精王（リオリーネ）との会話で則を犯した者達の牢獄（ノワール）へと行ける切符を手にしたディク達一行は、前前話のような繁華街へと辿り着き“多少エロ開始未遂だった件”から数分後、今回の執筆辺りの辺から始まる。

―妖精界　リュミエール　裏繁華街　大通り―

シャイナ「臭ぇｗｗｗ此処大通りなのに“糞の後始末が出来ていない獣小屋にいる”ような入り口付近にいた時と同じ気分ＤＡ…（―”―；）」

犬ツィオ「クゥ～ン。」

シャイナは鼻を左手の親指と人差し指を使ってギュッと詰まんで、不細工顔を作りながら谷間にいる子犬（エツィオ）も困惑したような表情を出しつつトボトボとした歩調で歩む。

ディク『そう言うなって、シャイナ。則という存在から解き放たれた輩はこの世界の空気が一番だろ？周りに一切何も言われることとな

く、自身がしたかったことが此処で漸く出来るのだから。』

ディクはシャイナの隣で彼女の状態を気にしつつ、今いる大通りの周囲で初めて入った時よりのドンヨリ感がない“朝市のような活気溢れる≠同族同士の殺し合いの牢獄の住民”の様子を見ながら歩む。しかし…

シャイナ「自由は良いけど…アレは…ｗｗｗ」

ディク『ん？』

シャイナは困惑したような表情を出しながら一点の箇所に向けて、周囲の獄中妖精達にバレないよう仲間（ディク）だけ見せるように恐る恐る右人差し指を指す。

ディクは少し声が震えているシャイナの態度を不思議そうに見ながら、シャイナが指した方向へ顔を向けると…

獄中妖精Ａ―ヒィィィィィィィィハァァァァァァァァァァァァ！！！！！！―

獄中妖精Ｂ―ヤれ！オッズ！！てめェに俺の財産を一生賭ケテいるからよォッ！！？？！―

獄中妖精C―負けタラぶっ殺すゾォてめェッ！！！！！―

獄中妖精D―デヤッハッハッハッハッハハハハハハハハハァ！！！！！！―

ゴシャリと今いる路上の空地で鳴り響く人体の肉を潰すような音、その後にピチッと何かが滴りつくような音が数回鳴って路上を歩く獄中の妖精達数人がその光景を見て自然に足を止める。

ディク『（狂人者（フリオーゾ）か…）』

ディクは彼ら無法者の本来あるべき・手にするべき自由…否自由というより自由という度を越えすぎた“何でも出来る狂喜”を見ながら、黙って“彼らの楽しみの一つであるモノ”を見届ける。

獄中妖精E―殺せコロセ殺せコロセ殺せコロセコロセコロセコロセコロセコロセエエエエエエエ！！！！！！！―

獄中妖精F―ヒッハハハハハハハハハハハ！！！！！！―

ドスドスッと空き地の中心でボロボロにはだけた囚人用の服を着た

同族同士が二人殴り合っていて、素手と魔力が混じり肉が潰れる音が鳴り同時に骨が折れる音が生々しく数回響く。

そして殴り合う二人を囲むかのように野次を飛ばす無法者の妖精が大声を上げる中、周囲に群がる獄中の妖精達はその音を喜ぶかのようにゾロゾロと集まってきてニタニタと喧嘩している二人の姿を見ながら不気味に笑う。

獄中妖精Ｇ―アッ…丁度ィぃ！どチらか倒れたラ、敗者（使えない負け犬）は俺ラの“糧”にナレヨ！？ソロソロ食料品が切れテキた所ナンダ。―

獄中妖精Ｈ―良いネェ良いネェェェ！そんジゃ俺はあの“千切れ掛けた肉”がイイな…あの部分が本当ニ…―

獄中妖精Ｉ―アガァアガァ！！アガァァァァァァァァァァ！！！！―

獄中妖精Ｊ―死ね！死ネェ！！死ねェェェ＃＄％＆‘＊@ガァァァァァァァ！！！！―

終に殴り殺し合っていた一人の妖精がドサリと無様に倒れて、活きる活力を失ったただの塊は意識も・呼吸も無く開かれていた両眼の下と口から赤紫色の血があふれ出すように出る。

シャイナ「っ…！」

ディク『やれやれ…。』

死した囚人妖精の体はもう酷く原型を留めないぐらい捻じ曲がり傷口から鉄と腐臭を放ち周囲全体に放ち、静かに口を押さえ必死に耐えているシャイナをディクはそっと後ろから胸元に抱き寄せて彼女を庇うように抱き留めていた時…

獄中妖精Ｋ「ヒハハハハハハハハハ！！！肉だ！肉ダァァァァァッ！！！！」

獄中妖精Ｎ「ウヒャヒャヒャヒャヒャヒャ！！！！」

獄中妖精Ｍ「ククククッやったゼ！貰ったァアアアアアアア！！！！」

バキバキバキ！！！！ブチチチ！！！！ブシュシュ！！！！

周囲を囲っていた獄中妖精達が一斉に倒れた死体へと飛び掛り死体の腕・足・頭・腹に向けて手を伸ばした直後、肉を無理矢理引き千切り骨を断つ音を立てながら冥界にいる餓鬼のように死体を？ぎ取（しょくりょう）

る。

シャイナ「ぅ…ぁ！！」

ディク『見るなシャイナ！』

どんどん肉が千切れ中身の臓器も掻っ攫うかのように抉り取っていく彼等（がき）のような姿をシャイナは見ていた時、後ろから抱き寄せていたディクがシャイナの視界を遮るように左腕をシャイナの頭部を覆うように隠す。

作者&赤鉄2主人公「「落ち着くんだディク。彼等の“狂喜”に入るな。誘われるな。」」

ディク『分かっている。』

喧嘩で負けた死体が段々骨だけになる無残な姿を見ながら凶器に満ちた集団が無増無人に刈り取っていく行為を見て、ディクは身体の中で武器状態になっている二人の外人侍の声を聞きつつ心の底から湧き上がる怒りの感情を押し殺し真顔の表情を出しながら黙って死したモノの最期を見届けた後…

ディク『行くぞ。今は管理者に会うだけのことを考えよう。』

シャイナ「そ…そうだ…ね…。」

ディクはシャイナを抱き寄せながら身体を１８０。ターンして後ろへと振り返り、まだ肉を引き千切っている彼等の姿を背にしながら管理者がいる場所へと向かっていった。

第百九十二曲　更ナル血ヲ求メテ、喉カラ来ル渇キヲ癒セ。癒シテクレ。

コロセ！コロセ！！コロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセ
コロセェェェェェェェェェェェェッ！！！！！！

弱肉強食の世界のような同族同士≠囚人同士の殺し合いを見たシャイナとディクは、負けた弱者を餓鬼のように喰らいつく“人を完全に止めた狂喜の彼ら”の声を聞きながら背を向けて静かに管理者がいる場所へと歩みだす。

管理者が居る場所へ歩く度に聞こえるかつて則に従っていた者達の怒声…

明日という生を生きるために得る狂笑……

弱者は周りの強者達の糧として喰われる絶望…

シャイナ「（何だか…なぁ……。）」

シャイナは光が一切届かない永久の暗闇に満ちた狭い箱庭の中で複

雑な心境を過りながら、黙ってディクに背後から抱かれつつ前へと歩む。

途中背中から抱き寄せられているディクから『意識はまだ保てるか？』と言われ、シャイナは心配している彼に向けて無理矢理作り笑いしながら「大丈夫だよ。」と軽く言い返す。

ディクは抱いている彼女の応えを聞いて『そうか。』と言った後、寡黙な表情を出し顔を上に上げて静かに視線だけをシャイナに向けて動かしながら前へ歩み出す時に…

ディク『（たまったもんじゃねぇな…俺も、シャイナも。）』

ディクはシャイナの表情が一瞬悲哀のような面になったのを見逃さず、シャイナは顔を見せないように自分から背けているのを見て少し溜め息を付きながら共に歩む。

腐臭が漂いドロドロとした空気が流れる中、遂に二人とディクの中にいる二次元兵器（オリジナルレプリカント）は管理者が居るらしき場所へと辿り着く。

―妖精界　リュミエール　牢獄（ノワール）館監視塔入り口付近―

ディク『此処が牢獄（ノワール）の中を監視する管理者の塔か。』

ディクは自分から背けながら暗い表情を出している俯シャイナを抱き抱えながら険しい表情を出す顔を上へと上げて、目の前に聳え立つかりん搭のような赤茶色の上空まで届く馬鹿デカイ&スッゴい太いよ！ＴＨＥ☆搭を見上げる。

作者&赤鉄2主人公「「頂上辺りの搭の中から中度の魔力を感じる。四肢の動きは一切無い。眠っているか、それとも魔力の消費を抑える為に一歩も動かないのか…」」

ディク『しかし…この搭に入る“入り口が一切無い”な。窓らしき所も無いし、一体何処から入れば…』

ディクの内部から二人の外人侍の声を聞きつつ搭周辺を見渡すように歩み、ディクの台詞通りだが搭の入り口・窓らしき所も一切無く、石棺のような一切空気が通らない死の臭いが漂うみたいな風貌（見掛けだで勝手に判断ｗｗｗ）が多少見取れる。

作者&赤鉄2主人公「「…考えても仕方ない。ディク、お前の背中から英霊になった時の特権の一つである“飛翔する力”を解放したらどうだ？」」

ディク『そうだな。これだけ治安もクソも無い“強い奴だけ生き残れる弱肉強食の世界”だ。こんな目立った場所と構造でもう解りや

すい所でこの搭の入り口を創ってしまうと、もしもの時の飢えた狂人達の戦闘で…』

ディクは二人の外人侍のアドバイスを聞いた後背中から純白のトキ翼をバサリと出して、牢獄の中を見てきた彼らの“人”からかけ離れた“人外（バケモノ）”の素顔・同族殺しを直々見てＩＦというものを脳裏に過らせながら数秒間両眼を閉じる。

ディク『（自由という域を得た違う自由の具現化されたようなモンか…この世界に生きる者達が余りにも皮肉だ。）』

人という理性を失った彼らのこの世界の弱者から取り出す新鮮な活きた血肉。

そして得た時の絶頂なる恍惚と、得た物を取り入れてもまだ満たされない更なる餓えと渇き。

更なる狂喜を求めて一日…否自身が完全に朽ち果てるまで新鮮な血肉を求めて走り、この世界で活きる者達が全て死するまで永久に終わらない血と血で描かれた死の螺旋。

ディク『（さっさと依頼を完遂して、早く此処（妖精界）から出よう。）シャイナ、しっかり掴まるんだ。』

ディクは背中から出した両翼を数回上下に羽ばたかせるように動かして、抱き寄せられているシャイナは「うん。」と蚊のような小さな声を出した後、確りとディクの下半身を両腕で囲むようにしがみつく。

ディクは強く抱き締めているシャイナの腕の力を身に感じながら閉じられていた両眼をゆっくり開けた後、一気に上空へと向けて翼と共に飛翔…

ディク『で?黙って俺達に付いてきたんだ??』

シャイナ「あん?」

ドシュッと肉を貫く音・プシュと何かが噴き出る音が近くに鳴って、シャイナは寝ぼけたような表情を出しながら俯いていた顔を上に上げると…

獄中妖精Ａ「ア゛…ぅウ゛……」

獄中妖精Ｂ「イ゛ィィ…ィ。」

管理者がいる場所へ向かっていたディク達の後ろから黙って付いて

来たのだろうか“先程の大通りで同族の殺し合いを見ていた囚人の妖精”と、“同族を殺し合っていた勝者の囚人妖精”がディクの背中から出ていた翼が“一つ一つ鋭い剣山”になって背を向けたまま付いて来ていた妖精の全身を“滅多刺し”していた。

ディク『黙って付いてきて何の意味があるんだこの“心まで完全に化物に落ちたヒトゴロシ”共め。』

ディクは顔だけを後ろへと振り向いてＬ●Ｄのハンターのような悪人の形相を出しながら、背中から出ていた剣山の翼に力を入れて自らの意志で翼の一つ一つの剣山を動かし、付いて来ていた妖精をバラバラに解体して一瞬の内に肉塊へと変えた。

第百九十三曲　ピチピチしょぅし゛ょ&子犬と時々パパ●ーア風霊体オッサン

―妖精界　リュミエール　牢獄館（ノワール）監視塔入り口付近―

ディク『やれやれ…黙って俺達に付いて来んなよ。この★●＃＊¢$○◆野郎。』

ディクが目の前にいたストーキング囚人妖精を全身滅多刺し↓後に肉塊へと解体した後、一つ一つの剣山に成った翼の羽根に付いていた赤紫色の血を左右に動かして払い落とす。

ディク『解ったか、この腐れ♀&▲※が！また黙って俺達に付いてきたらテメェの▼☆℃∞♀な∃∀　■◎&をぶちまけてやるぞォラ！？！！？』

肉塊に変え路上に積み重ねるように落ちたかつての囚人妖精だった肉に向けて罵倒しながら、思いっきりブーツ先に肉塊を蹴り当ててグチャッと豪快に“蹴り飛ばす（※蹴り飛ばした肉塊を宙で瞬時に轢き潰す）”。

シャイナ「ディクサァァンｗｗｗもう（ピー）しか聞こえないぜよｗｗｗそれに音もシュール過ぎるＺＥ。」

そしてストーキング囚人妖精を壊（コロ）した剣山の羽根は元のフワ☆フワな柔らかい羽根へと戻って、元の翼に収めるように肉塊になった彼等を罵倒しながらスッとした速さで退き戻し元の純白のトキの翼へと戻す。

シャイナ「ねぇ、ディクサァァン？その■★◇%#な※〒♂¥は誰から教えられたんだよ？ｗｗｗ」

シャイナはディクが吐いた“婢談☆撲滅デフォ音”を聞いてぶっと口から白い液体を霧のように吹いた後、口を八の字にしながら自分を片腕だけで引き寄せられている“ゲシュタルト●ーア”のような素顔になっているディクに問い掛けると…

ディク『あぁ、コレ？そりゃシャイナが“良く知っている人物”だよ。わざわざ口で言わなくとも、もう分かるハズだぜ？』

と両腕を広げながら満更でもない表情を出すディクを見たシャイナは、生前ディクに技だけでなく“間違った言葉使い”を教えた人物を直ぐに脳裏で想像した後、「阿呆かｗｗｗ」と呆れた表情で溜め息を付いて俯くように応える。その後…

ピチャッ…ピチャッ…

獄中妖精C―ヒヒッ…ヒヒヒ…ッ！！―

シャイナ「ちょっ…」

突然水が滴った足で踏み歩く音が不気味に鳴ってシャイナはビクッと一瞬両肩を上にビビるように上げた後、水と肉が混ざったような踏音の方向に顔だけを向ける。

ディク『お前らもかよ…この狂人者（フリオーゾ）が！』

獄中妖精D―アらマッ！こんな牢獄（にわ）の中デ……―

獄中妖精E―イイ…良い臭イガスルゥ！！―

獄中妖精F―アハハッ…ハハハハハッ！！！！―

前方から更に大通りにいた野次馬混じりの囚人妖精達がやって来て、彼等も同様黙って付いてきて一人一人狂気の表情を出しながら監視塔入り口付近にいるディク達を逃がさないように囲む。

ディクは左腕でシャイナを胸元に抱き抱え直ぐに戦闘が出来るよう身構えしつつ、囲んだ彼等を敵意剥き出しな形相を出しながら強い眼光で睨み付ける。

獄中妖精G―旨ソウ…旨そウ！！この牢獄ニナイ上質の肉ガ此所にイタナンテ！！―

獄中妖精H―血ッ！血ィィィィィィィィィ！！活キタ若い生気を俺の中ニ早くイレテェェェェェェェェェェェェ！！！！―

囚人妖精達はディクの胸元にいるシャイナの若い素顔と細い体格姿を見て興奮するように、鼻息を荒げ鼻穴から鼻血らしき液体をブバッ♪と変態的な形相で出しながら言うが…

獄中妖精I―邪魔ダ…アの活きた若い生気ノ側にイル男…―

獄中妖精J―黒深巾ヲ纏った男…邪魔っ…邪魔！邪魔ァ！！―

獄中妖精K―最上級ナ糧を掴んでイルその手ヲ放せヨ、黒深巾のヌイグルミオッサン！？汚ワラシイ！！ソノ手が汚わらシイ！！！！―

ディク『ふん…（一―一＃）』

彼等は餌（シャイナ）を抱いている口から髭を生やした見掛け４０代の中年男（ミドルマン）を見て、嫌み嫌みな汚わらしい表情を出しながらケッ！と口から唾を路上へと吐き捨てる。

囚人達は口を閉じてギリギリと上下の歯同士を壊れてしまうぐらい強く歯軋りしながらディクを睨み付けて、グルルと喉仏を犬の威嚇声のような声を上げて背中を少し前方へと折って囚人の彼等らしい戦闘体勢を取った後…

獄中妖精Ｃ―ガァッ！―

獄中妖精Ｄ―ギヘッ！ギヘヘッ！！―

猫背になった囚人達は両腕をだらけるように流した直後両腕自体が蛇のように波打つようにうねって、ジャキンッと刃が飛び出すような音が鳴りながら両腕がザリガニのような鋭い赤紫色の刃へと変わり果てる。

ディク『これは…この世界の則を犯した者達への…』

ディクは真剣顔の表情を出しながら突然変異した彼等の両腕を見て、過去生前時に友＝師匠（エッィオ）から教えられたことを脳裏に過る。

獄中妖精E―醜い姿ダロウ?オッサン?コレが俺達“本来の心トイウ場所で仕舞われていた真ノ姿”ダ。―

ガシンとザリガニの腕となった囚人妖精は数歩前へと進み右腕を路上に突き刺して静止した後、シャイナを庇い続ける真顔ディクにニタニタと笑いながら更に続けて言う。

獄中妖精E―質は一人一人違う。この世界デ犯した域ニヨってだが、より深く罪を犯セバ犯す程…―

他の囚人妖精は両腕だけでなく両足が馬のような細い両足になって顔自体が前へと突き出すように変化し、顔が無理矢理三つに分裂するように別れたヘンテコな身体に変化する囚人妖精も現れる。

シャイナ「うわわっ!?な…何じゃコレ!!??!一部の妖精がL●D2に出てくるス●ッターやらジ●ッキーやらD●SATのような何処かで見た変身悪魔に成ってる成ってるｗｗｗ」

ディク『人間の…誰もが内の中に持つ“裏の本質”か。それを妖精王(リオリーネ)が違反した者達に向けて放たれたとなると…』

作者&赤鉄2主人公「「本来この妖精界で反逆した者達が本質となった時、魔界から生まれし下級悪魔に近い“妖ノ魔”になる。それ

が此だ。」」

中には開いていた口の周りが硫酸でも掛けられたかのように溶け出してグロく裂かれた口から黄緑色の液体を涎のように垂らすグロ・キテレツな者もいて、左片面が大きな腫瘍でも出来たかのように腫れ上がって所々から触手のようなモノが数本生え醜い姿になる。

―云わば則を犯した妖精界の妖精達は妖精王の力で身体の最深部にある“邪な存在”へと成り果てて、魔神（エッィオ）が生まれた魔界に住まう悪魔へと同種になる“醜い妖魔”へとなるのだ。―

―邪ナル者ニ堕チタ妖精　ライドレクルーゾ―

獄中妖精（ライドレクルーゾ）F―ヒトリ…ヒトリは違う。姿形は違ウドモ…―

獄中妖精（ライドレクルーゾ）G―罪ヲ犯した分デ、姿型モ大キク…ククク…変カカカカカカカカカ…ハハハッ！！―

醜い姿へと成り果てた囚人…否様々な罪を犯した者達に相応しいシャイナのような人間のサイズになった“悪魔（バケモノ）”のような姿へ変わり果てた彼等は、姿よりも自身が犯した大罪の度合いで大きく沸き起こる則を守っていたかつての自分にない魔力を余分に持っていることに嬉しく狂うように笑っていた。

ディク『で?そんな姿になってもまだ罪を犯し続ける気かよ。どうにかしているぜ。』

ライドレクルーゾD（略してライレク）―話は終ワリだ…俺…物凄く腹ガ減ってイルンダヨ。俺が欲シイ食べ物ハ…―

ライレクE―オッサン…お前の腕に抱き止メテイル“人間の女”ダ。ソノ女から芳ばシイ臭ガスル。―

ライレクF―内臓…食ベタイ。食ベタイ食ベタイ食ベタイ

大きく凹むように一つのクレーターを作っていた。

シャイナ「うぇっｗｗｗキモさ満★開のブースト状態のアイツらの力マジッパネェなぁ。ｗｗｗ今の状態だと見掛けだけで判断するなってことだなｗｗｗ」

犬ツィオ「クルルルルッ。」

シャイナはディクに抱えられたまま谷間にいる子犬（エツィオ）と共に地上で起こっている妖魔になった彼ら本来の攻撃力を見て、思わず息を洩らすほどピューと口笛を軽く吹く。

ディク『これが堕ちた妖精の妖魔となった本来の力か。力は魔界の“中級悪魔らを複数相手をする”ような状況になったぞｗｗｗ面倒だなぁ。』

ディクは背中の翼を何度も上下に羽ばたかせるように宙で空中静止（ホバリング）し、ほど路上で立っていた箇所で獣のような声を上げている彼らを見下ろすような形で、そっと●ーアゲシュタルトの●ーアのような真顔の表情を出しながら溜め息を付いた。

第百九十四曲　餓鬼達に向けてオッサンの制裁鉄拳！云わばオッサンの拳骨！！

―妖精界　リュミエール　牢獄（ノヴール）館監視塔入り口付近―

ライレクC―ククククカカカカカカカカカカカカ！―

ライレクD―我ラから逃れルと思うなヨ？餌を抱エたオッサン？？―

ディク『（この箱庭に入った時、此所に容れられた囚人達は皆“飛翔する力”を奪われていたと思っていたんだが…）』

ディクは牢獄に入れられた際に引き抜かれただろうか背中に生えていた翼の痕らしき部分から新しい翼…赤紫色のオーロラのようなマントの形をした長ヒョロイ羽根が生え出て来る。

ライレクE―ヒヒヒッ！！ハハハハハッ！！！！―

ライレクF―キヒッ！ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒッ！！―

メリッと肉を断ち血が滲むように出てくる音を立てながら彼等は、

新しい羽根が生え出てくる痛みの快感を嬉しく思って不気味な表情で出しつつ、バサッと長ヒョロイマントのような翼を羽ばたかせディクとシャイナ&子犬(エッィオ)がいる高さまで一瞬の内に飛翔する。

ディク『その翼も変わり果てた身体の部分も、則を犯したこの世界で“妖魔として活きる身体の証”がこれか。(妖ノ魔になったコイツらにはもう“俺が狩ってきた悪魔と同様”に何でもありかｗｗｗ)』

シャイナ「えーｗｗｗ飛べちゃうとなると入り口を無くした意味無いじゃんｗｗｗ何時でも監視者を殺せる機会が出来ちゃうし、何時でも脱走さえ出来ちゃうじゃねーの？ｗｗｗ」

シャイナはマントのような翼が生えたキテレツな集団を見て、えー(ー ε ー；)と“全く監視する意味の無い世界”だと思い少し戸惑いの表情を出しながら、この世界を監視している者にブーイングを送る台詞を吐く。

作者&赤鉄2主人公「「いや…この箱庭から脱走出来る力はそれほど無い。よく見てみろ女。」」

シャイナ「はへっ?え?アイツらの口から出ている“涎”と“ゾンビのような肌”を??ｗｗｗ」

シャイナはディクの身体から言い放つ二人の外人侍の声を聞いて、自分達を囲っているライレク達を再び彼らの全身をよく見ると…

ライレクG―ゴフー…ゴフー…―

ライレクH―ギシャ…シャシャシャ…！―

顎が外れたように大きく開かれていた口からボタボタと大量の唾液を足らし、更に変わり果てた四肢のまだ肌が残っていた一部から皮膚が赤茶色に変色し、そこから腐った臭いを放ちながらボトリと腐敗した肉片が落ちる。

作者&赤鉄2主人公「「妖ノ魔となったモノは直ぐにかつて持っていた“魔力の糧となるモノ”を摂取しないと生きることが出来ない。例としたら“霊地の魔力（マナ）を吸収”または“女…お前のような情報溢れる身を喰らう”ことで魔力を補給出来るのだ。しかし長期間“魔力の糧となるモノ”を取らず不足してくると正気を失い見境無く襲い掛かるのだ。」」

シャイナ「ふーん。云わば●ＤＳＡＴでいう“悪魔を喰らう（生体マグネタイトを摂取）”ことを長期摂取しないと“飢えにより暴走”ってことなの？」

とシャイナはふと額に左人差し指を何度も当てながら、とある某ゲ

ーであるゲーム名を思い出しその架空用語名をディクの身体（なか）にいる二人の外人侍に言う。

作者＆赤鉄2主人公「「分かりやすく言えばな。だが、光が無い環境で生きた外部の境界線の魔力に臨機応変に対応できる魔界の悪ノ魔と違って則を破った妖ノ魔となると“境界線の魔力を保つべく著しく魔力を消費”し、“早い周期で魔力の糧となるモノを摂取しないと短期間で魂そのものを完全に崩壊してしまう欠点がある”。それがコレだ。」

ディクの体内（なか）で“内部から崩壊しかかっているライレク達”に向けて人差し指を指しているかのように言動を吐く二人の外人侍の声を聞いて、シャイナは長々と専用用語で喋る彼等に「余計に解んねぇよｗｗｗ」と呆れたような表情を出しながらビシッと効果音でもつけたように左手を横に倒して軽く突っ込む。

ディク『要するに人間の一日三回摂取をを六回以上摂取しないと直ぐに“体がぶっこわれるぐらい崩壊”してしまう程、軟弱な体質なんだよ。』

ディクは抱かかえていたシャイナを背中に抱っこするように乗せ変えて、代わりに背中から出ていたトキの両翼を“人間のようなバカ太い腕”へと変えて足下に白銀の円形の紋章を生成し土台を作った後、バキリと骨を鳴らすような音を立てながらファイティングポーズを取る。その直後…

ライレクC―ギヒャァァァァァァァ！！！！―

ライレクD―寄コセ！寄こセ！！背に乗ル人間ノ女の餌ヲォォォォォォォォォォォォオォォォォォォォオオ！！！！―

ライレクE―ヒハハハハハハハッ！！！！アヒャ！！！！―

ライレク達はかつての人だったときとかけ離れてしまった奇声を上げ、人という存在を捨て変わりに力を得た喜びに思いながら狂喜に笑いつつ一斉にディクに向けて両腕を前に伸ばしながら襲い掛かる。

ディク『Je le force ? paille de l' impudicit? et c' est trop（ 皿 ＃ ）』

シャイナ「おふぅ！？」

ドカッ！バキ！！ボキンッ！！！

ディクはイラっとした表情を出しながら人間の腕に変えた翼を向か

ってくる順に交互に“骨が陥没するぐらい”に加減無く殴りつけ、バキリと妖魔の顔自体が“思いっきり凹むぐらいに陥没させた”後路上へと叩き落とす。

ディク『Ｃｈｕｔｅ！Ｓｏｒｔｅｚ！！Ｄｉｓｐａｒａｉｓｓｅｚ！！！Ｊ＇ｅｎｎｕｉｅ！！！！』

シャイナ「ちょ…訳がＮＥＥＥ

そんな細かい事を気にせず、背中から襲い掛かるライレクに向けて半分頭部を潰したライレクを身を捻らせると同時に投げ飛ばす。

ライレクH－ガ…ガガ…－

背後から襲い掛かろうとしたライレクは突如半分頭が潰れた半死人のライレクがグォと顔面から向かって来るように投げ飛ばされ、突然の事で直ぐに反応出来ずに“お互い顔面キス”してしまい大きく都市へと引き戻すように後方へと吹き飛ばされていった。

ディク『もっと効率的に狩れる方法…ん？』

シャイナ「おっ！？」

犬ツィオ「キャンッ！」

ディクはまだ襲い掛かろうとするライレク達を見て、溜め息を付きながらも楽しそうに口元を吊り上げて笑いながら背中を曲げて身構えた時…

ディク『！』

人間の腕に成っていた翼が主の意思に呼応するかのようにディクの両腕を覆うように纏わりついた時、ジャキンと刃音が鳴ってディクの両腕が“純白の巨大な爪へと変わる”。

シャイナ「ＯＯＯＯＯＯＯ！！これはエツィオが“武装を爪形態にする”時と同じ！！」

犬ツィオ「キャンッキャンッ！！」

ディクは口を開いて表面を驚いた表情を出しながら爪形態になった白い巨腕をジロジロと眺めるように見て、鋭く尖った両指先をワキワキと何度も内側から外側へと動かす。そして…

ディク『へぇ…英霊になった時ただ翼が生えるだけじゃなく、このようなことも出来るんだぁ～。』

ディクは新たなる力を身に付けてた快感を覚えつつ喜びの表情を決して目の前にいる敵に表へと出さないようにこらえながら、真顔でまた再び再度包囲する彼等に向けてファイティングポーズを取った。

第百九十五曲　俺の●ャリック砲は百十八式まであるぞぃ。

―妖精界　リュミエール　牢獄館（ノヴール）監視塔入り口付近　低空５００ｍ辺り―

ディク『はっ！』

ディクは巨大な爪と化した右腕を思いっきり振りかざし、目の前にいたライレクを頭部から股に掛けてズバッと五枚下ろしにしただの肉片へ変える。

ディク『この小説の作者が“Ｄエンド後（全エンドコンプ）で再プレイ中（一週目からＨＡＲＤでトロフィーコンププレイ中ｗｗｗ）”なニー●レプリカント風□→□→□→□→…□ぅ！！』

シャイナ「ぶっｗｗｗ」

シャイナはディクの作者代理台詞を聞いて思わず吹く中、ディクは“死ねこの野郎”風に歪み無き笑みで間を入れずに巨大の爪腕を思うがままに振りかざし、襲い掛かるライレク達を一瞬の内に肉塊へと変えてライレク達の肉片が舞い降る粉雪のようにドサリドサリと路上へと積み重ねる。

両側面に向けて爪と化した左腕を身体を捻らせながら大きく横へと振り、両サイドにいた数体のライレクはディクの純白の爪の餌食となって身体の右胸部から左胸部にかけて五枚へと肉体ごと引き裂く。

シャイナ「おぃっｗｗｗフィニッシュブローコマンドゥ今悩んだだろｗｗｗ溜め攻撃しようかまたはフツーに大振りのフィニッシュブローを決めようかと悩んだだろ？ｗｗｗ」

犬ツィオ「キュゥ！」

シャイナはディクの“台詞の合間に変な合間が出来た”のを聞いて、ディクの両肩をしがみつきながらニタニタと笑いつつシャイナの谷間に居る子犬（エッィオ）も楽しそうな感じの雰囲気を声で伝えるように吼える。

ディク『いやぁ～ｗｗｗ爪形態のラストコマンドゥはどうしようかと思って…つぃつぃｗｗｗ』

シャイナ「ニー●はハイスピードアクションＹＯ！？（一部ノベルゲーもどき有りｗｗｗ）その迷いが一瞬の内にやられるんだぜ？ｗｗ」

ディク『Ｉｌ　ｎ'ｙ　ａ　ｐａｓ　ｌａ　ｃｈｏｓｅ　ａ　ａｐ

ｐｅｌ？　ｌａ　ｃｈａｒｒｕｅ　？　ｍｏｉ．（俺は強ぇから一瞬の内にやられたりはしねぇよ。ｗｗｗ）つーか、俺らこう雑談しながらでも“フツーに敵と交戦中”だがなｗｗｗ』

とシャイナの挑発的な発言を聞いたディクは舐めんじゃネェ風にワザとらしく両腕を広げながら苦笑いしつつ、全方位から襲い掛かってくるライレク達を一体…一体ずつ回し蹴り・飛び蹴り等の“足技だけで身体がコナゴナに破裂するぐらいまで蹴殺”する。

ディク『（凄ぇ…見た目で重そうに見えたけど、案外軽い！それに…）□ＤＥチャージ！』

蹴りだけである程度一掃したディクは爪と化した両腕に少しある技を試そうとして、自身の生前身に付けた魔力を爪先に向けて集中させるように思念で注いだ直後…

ディク『おぉ！？こりゃ凄ぇｗｗＥｓｔ－ｃｅ　ｑｕｅ　ｖｏｕｓ　ａｇｉｓｓｅｚ　ｅｎ　ｃｏｎｃｅｒｔ　ａｖｅｃ　ｍｏｎ　ｉｎｔｅｎｔｉｏｎ？（俺の力と呼応（リンク）しているのか？）』

ゴゴゴゴゴ！！！！

爪と化した翼は主に呼応するように爪先から白銀の光を放ちディクは黙って確信し頷くような動作で顔を動かした後、光を溜め込んで

いる右腕を前へと翳すように伸ばして残りの左腕を前へと身構えつつ後ろへと下げる。そして…

ディク『Ｌｅ　ｒｕｇｉｓｓｅｍｅｎｔ　ｄｅ　ｌａ　ｂ?ｔｅ！！』

ライレクＫ一ギャ…一

ライレクＬ一ヒ…一

ドンッ！とディクが翳した右手の平から“真っ白い巨大な爪の蹄”が高速に飛んでいって、ディクの前方にいた全てのライレク達は巨大な蹄の輪郭に入った直後“悲鳴さえ上げられないまま身体ごと消滅”する。

シャイナ「むぐっ！?」

犬ツィオ「ギュッ！」

シャイナと子犬（エッィオ）はディクが放った魔力の業の力で気管がふさいでしまうぐらい激しく震動を感じて、ガタガタと脳震盪でもしたかのような気絶手前の状態を覚えながら必死に舌を噛まないようにぎゅっと歯を食い縛る。

ディク『まだまだっ！このまま…Ｓｏｙｅｚ　ｃｏｍｐｌ？ｔｅｍｅｎｔ　ｄ？ｔｒｕｉｔ！（潰れちまぇ！！）』

ドォォォォォォォォォォォ！！！！

ディクは手を休めないように更に続けて左腕も前へと翳して、爪と化した両手の平から“エツィオとの擬似空戦時よりも大きい銀色の極太光線（第百五十四曲参照）”が放出され、都市からの更なる増援を遠距離波動砲で殲滅する。

ライレクＰ－ナ…何だコノ光……－

ライレクＱ－ヒィィィ！気持ち悪…－

ライレクＲ－ヒャァァァ…－

戦いの気に反応して向かってきた彼等はディクが放たれた極太光線そのものが“この牢獄（ノワール）にとって眩し過ぎる光を悪魔と同様に嫌う”ように一旦退避しようとしてその場から離れようとしたが、”光線自体の規模が大きすぎて”逆に逃げる事すら出来ず一瞬の内に増援だった彼等（ライレク）は光に飲み込めれてあっという間に消滅されていった。

…

……

……

作者＆赤鉄２主人公「「敵意反応無し。…ディク、俺達に刃向かう敵はもう殲滅した。」」

ディク『そうか。これで“終いか”。はぁ…』

ディクは増援らしき敵を遠距離波動砲（ＴＨＥ☆●ャリック砲）で葬った後、身体の中にいる二人の外人侍のサーチ情報を聞いて翳した両腕を撫でるように下ろし、戦いが終わったことで一息付きながら両腕に纏わり付いていた翼を思念で解く。

シャイナ「モツカレモツカレ～。私のような自称大人の女一人と畜生一匹を背に乗せながらの戦闘は大変だっただしょぉ～？」

犬ツィオ「キャンッ♪キャンッ♪♪」

シャイナは戦闘後に疲れているディクを気遣うように固くなっていたディクの両肩を両手でマ★サージし、谷間にいた子犬は歓喜の声でも上げているかのようにディクに向けて元気よく吠える。

ディク『いや、大丈夫大丈夫（＾―＾；）俺はこれでも生前３０年間エツィオに鍛えているし…』

シャイナ「でも身体は正直よ?ディクサァァン?ほらっ…此所と此所が凄い固くなっているよ??」

ディクが平気だと言わんばかりにシャイナは乞っている箇所に向けて両手を置き、ギュッギュッと揉むような感じでディクの疲れをシャイナ風マッ★サージで解れさせる。

ディク『それは君がリラックスさせる技術が上手いから…でも、気持ち良いな。』

シャイナが乞っている箇所を揉む度にディクは苦笑いしながらも、表情は戦闘の時のようなＬ●Ｄのハンター真顔と違い綻んだ笑みを出しながら疲れを取ってくれるシャイナの優しさに感謝する。

作者&赤鉄2主人公「「不思議なものだな、今の人という存在は。お前の中にいても我々も同じように清々しい気持ちが出る。これは…」」

ディク『落ち込んだ時、重圧で何かを背負う時…そのことを忘れさ

せるぐらい人を元気にさせる“温もり”の力がある。それがこれなんだよ、フラムエール。』

ディクは身体の中にいる二人の外人侍に向けて思念だけで伝え、表面は笑みに満ちながら口を出さずに黙ってマッ★サージを受けながら、元に戻った背中のトキの翼を数回上下に羽ばたかせた後…

ディク『頂上まで飛んでみるか。シャイナ、掴まってくれ。』

とシャイナはディクの台詞を聞いて「了ーー解ーー（･◇･）ゞ」と元気よく答えマッ★サージを途中止めた後、再度ディクの両肩に両手を握り締めて再度しがみつく。

ディクはしがみついたシャイナに向けて顔を後ろに動かした後、『ありがとな。』と笑みを出しながら心地よいマッ★サージをしてくれたシャイナに感謝を込めた挨拶をした後、翼に力を入れて一気に頂上へ向けて飛んでいった。

第百九十六曲　時々～人間と子犬とぉ～フード英霊と人間モドキＤＥバーバァ

―妖精界　リュミエール　牢獄（ノワール）館監視塔頂上２００００ｍ辺り―

ディク『矢先のような屋根があるといい、此所がこの塔の頂辺りだな。』

今いる塔の頂らしき部分まで一気に上昇した後、バサバサと背中の翼を羽ばたかせながら空中で静止するようにホバリングする。

ディク視点で見たカリン糖のような赤茶色い長すぎる塔を一飛びし永遠に続いたような時間をシャイナと共に味わった後、漸く尖った部分が見えて頂きらしき場所へと登頂する。

シャイナ「フェェ…それにしても飛行持続能力が無いアイツらに対して、こんなに酸欠になるぐらいまで高くする必要があったのかねぇ？」

シャイナはディクの背中にしがみつき空気の薄い場所でもディクの全身に張る円形の結界魔力の力で平然としており、結界の外から聞こえる不気味な風音を聞きながらジロジロと塔の頂きらしき部分を

見る。

塔の頂はディクの台詞通り矢先のような部分を頂点に、そこから六つに枝分かれするように頂辺りの上から見ると、開かれた傘の形に見える中国風の煉瓦で出来た茶色の屋根が付けられる。

屋根下から登頂中長かった赤茶色のコンクリートではなく茶色に塗装された木材が組み立てられていて、綺麗に屋根の形と同様の大きな六角形が塔の中身が見えるぐらい開かれていた。

ディク『先程の奴らの戦闘能力だ。幾ら自我を失って妖魔化し魂そのものが段々と崩壊しているいっても、糧を得る為だけの稼働時間があるからな。僅かな時でもこの監視塔の人にとって脅かすモノに過ぎない。』

作者&赤鉄2主人公「「数時間程度だが、正確には妖魔化した後の稼働時間は6時間43.75秒…ただ“魔力を持つ同族同士”を喰らい合わなければ生きることすら儘ならないからな。例え糧を得ても3時間45.68秒を稼働追加時間として追加(プラス)させるだけ。だが所詮喰らったとしても境界線を保つための魂だけは魔力保持は出来ず時間が経つことに四肢の稼働率が減少。何れにせよ身体もろとも朽ち果てる運命なのだ。」」

シャイナ「そ…そうっすか。ｗｗｗ」

ディクの身体（なか）にいる二人の外人侍の統計的な台詞を聞いたシャイナは苦笑いしながら、それをもっと“俺らだけでなくこの画面を見て黙って読んでいる閲覧者に解るぐらいフツーに喋れ”と、静かにディクの身体（なか）にいる二人に向けて軽く突っ込む。

ディク『いちいち“細かいこと言うな”よフラムエール。ｗｗｗ俺とエツィオは解っても、シャイナのような“共通の理解を持つ人間”には不可解すぎるようなもんだぞ？ｗｗｗ』

作者&赤鉄2主人公「「い…いや…俺はディクの背にしがみつく“護るべき彼女”に解りやすく言おうとしたが、俺の中にある統計式（アルゴリズムプログラム）科学分析が勝手に…」」

身体の中にいる二人の外人侍は申し訳なさそうな素振りでも出しながら、ディクだけでなく背中にいるシャイナにもやや早口に言って少し息を止めるような声を上げる。

ディク『ま…護るべき彼女ってｗｗｗフラムエール、俺の背に乗る人はシャイナっていう名前なんだぞ。ｗｗｗお前は俺と同じ“人間”なんだからさぁ…きちんと人の名前を言わないとｗｗｗ』

作者&赤鉄2主人公「「すまない…まだ俺にも…」」

シャイナ「まぁいいけどさぁ…早く次の展開に進もうよ（作者の体力的＆精神的な意味で）ｗｗｗそろそろ妖精界編後半へと突入したいしｗｗｗ（あくまでも目標）」

犬ツィオ「キャン！」

とディクの背中に乗るシャイナが軽くディクの頭部に向けて左手チョップを繰り出し、パスンとシャイナのチョップを受けたディクは『そうだなｗｗｗ』と“もうどうでもいいやｗ”風の表情を出しながら、完全に頂の内部が見える塔の中へ翼を平行にしながら静かに入っていった。

…

……

……

ー牢獄（ノワール）館監視塔頂上２０００ｍ　内部ー

ディク『よっと…』

バサッと翼を軽く羽ばたかせながらゆっくりと木材で出来た床に両足から地に着けて、翼を休めるように折り畳み背に乗せていたシャイナを両腕でお姫様抱っこするように持ち替えた後、静かにシャイナを両足から着けるように下ろす。

シャイナ「着いたかぁ…しかし…」

ディク『居ねぇな。』

犬ツィオ「キャウン？」

頂の内部に入ったシャイナとディクは内部の中国のような寺院の風景を漂わせる臭いを嗅ぎつつ、人影も無くただ空気の風音が鳴るだけの殺風景な広い部屋を顔を右往左往に動かして隣にいるディクと同様に牢獄内の監視者を探す。

作者＆赤鉄2主人公「「いや…“気配はある”。ただ魔力で己の存在を閉じ込めるように掻き消しているだけだ。」」

いつの間にかディクの身体の中から出て武器状態から実体化した二人の外人侍もいて、二人も左腰にある●刀（●ｉｉリモコン）を何時でも抜刀出来るように右手で柄（リモコンのスティック）を握りながら彼等と同様に監視者の姿を探る。

ディク『そうだな…じゃ、“出てこぬなら　出るまで待とう　ホトトギス”ＤＡ♪じっくりして待つとしようかね。』

シャイナ「ぶっｗｗｗそれって戦国時代のタヌキのパクリ俳句じゃんｗｗｗ」

ディクはニヒルな表情を出した後ドカリと行儀悪く胡坐掻くように座って、シャイナはじっくりと出てくるまで待つディクの台詞を聞いてブッと軽く口から白い何かを吐き出す。

犬ツィオ「キュィィィンｗｗｗ」

シャイナがこの部屋に着いたと同時に谷間から抜け出ていた子犬（エツィオ）は、吹き抜ける風を気持ちよく受けているかのように身体をグッと伸ばし手足を大きく広げながら床の茶色く塗装した木の板の臭いを嗅いでゴロンとお腹を見せるように大胆と転がる。

シャイナ「おいおい、カルボｗｗｗまだ得体も知れない場所でＮＯ・ＢＩ★ＮＯ・ＢＩするんじゃねぇよｗｗｗ」

犬ツィオ「キャフン♪」

とシャイナのややイラつくような台詞を聞きつつも子犬（エツィオ）は気持ちよさそうに何度も板の上で転がって、次第に無邪気に転がる動作からやがて身体を丸くさせて“ＫＹなお休みタイム”へと突入する。

ディクはアハハと胡坐かきながら恨めしそうに見ているシャイナを余所に子犬(エツィオ)が眠る姿を見て微笑ましい表情を出し、傍にいた二人の外人侍もこれが日常ってやつだなと腕を組みながらそろそろ慣れ時へと突入しようとした…

その直後…

？《おや…こんな可愛い黒子犬がわたしゃぁの塔に紛れ込んでくるとはねぇ。…それに人間一人と英霊と霊憑き人間モドキも。》

作者&赤鉄2主人公「「！？な…」」

ディク『あ。（・・）』

シャイナ「ひょ？（　゜Д　゜）」

ドンと二人の外人侍の背中から何かが当たる感覚を受けて、シャイナとディクは不意打ちを喰らった人間(フラムエール)にむけて（　゜Д　゜）ポカーンと口を軽く開ける。

作者&赤鉄2主人公「「（馬鹿な…この俺が気配を逃した！？一体どうやって…！？）貴様…何者だ？」」

？《長年この牢獄（ノワール）にいると地上にいる囚人達の臭いが染み付いてしまってのぅ。もう魔力だけでなく同族同士を喰らい続ける死臭と咆哮と飢えと渇きが完全にワシの身体を“攻撃するという気配を掻き消す”ように侵してしまったんじゃ。》

二人一緒に驚愕の表情を出しながら背中から不意に語りかける“老婆のような声”に向けて額から一筋の汗を流し、前世紀最後の最強兵器の背中を取った“監視者”に向けて視線だけを後ろへと動した。

第百九十七曲　Ｍｒ．ブシドゥ覚醒！しかし…臭っ！！オェッと来る臭い話ｗｗ

―妖精界　リュミエール　牢獄館（ノワール）監視塔頂上２００００ｍ　内部―

？《しかし興味深いねぇ～。人間モドキのお前さんが兵器に無い“自我”というモノを身に付けて、更に“殺傷”という概念が少なくなっているなんてねぇ。最後の二次元兵器（オリジナルレプリカント）としての最高性能はどうじゃのぅ？？》

二人の外人侍の背中を取った老婆はしわくちゃな右拳を二次元兵器の背中に向けてドアをノックするような動作を取りながら軽く叩き、フェッフェッフェッ♪と楽しむような老体ならではの口癖を吐く。

作者＆赤鉄2主人公「「く…何を言っている？御老体？？何故俺が二次元兵器（オリジナルレプリカント）だと解ったんだ！？」」

？《ほぉーほぉー♪その感情豊かな声といい、完全に人間に近いという最後の…“前世紀の最強兵器だったお前”でもまだ精神が幼すぎる部分があるようだねぇ～。はて？》

二人の外人侍は全てを見据えたように楽々と語る背後の老婆の声を

聞いて憤りと困惑を思いつつ、自身の背を痛くない程度で何度も叩いている老婆に向けて身を翻そうとしても、本能に流れる“危機的な存在”が当てられ続けていることに容易く振り向くことすら出来ない。

何故なら二人の外人侍の背にベトナムのアオザイのような茶色い木綿生地を羽織い大きな麦わら帽子を被った老婆の背中から“赤黒い渦のようなモノで生成された巨大な腕”に押さえつけられるように掴まれていて、更にもう一本の赤黒い左腕が二人の外人侍の頭部に向けて何時でも叩き潰せる様に構えられていた。

―牢獄館最長年監視者（ノワール）　ブリッツ―

作者＆赤鉄2主人公「「（くそっ…どうする!?今のままでは次の反撃成功率12…否反撃成功率は…2%。確実に負ける。いや…）」」

二人の外人侍は額から汗を流しながら拘束されている状況を動揺しつつも、脳内に映る戦闘プログラムによる勝率を測定されている光景を見て…

作者＆赤鉄2主人公「「…勝ったと思っているのか?御老体??」」

ブリッツ《ほっほっほっ♪わしゃから見て“お前さんはもう確実に

負けという状況”だというのにｗｗｗ≫

ブリッツはまだ戦う意思がある二人の外人侍の覇気有る強い背中を見て、カカカッと軽く高笑いするように相手をからかうような声を出しながら魔力で生成した赤黒い腕を何時でも殴れるように構える。

ブリッツ≪お前さんのような“大の若子”が背中をこんな風に取られてしまって、必死に身の内から溢れる動揺を抑えるのに精一杯でしょうに…一体どうやって危機的な状況を打破するつもりかね？？≫

作者＆赤鉄２主人公「「（落ち着け…奴の言葉に耳を傾けるな。俺は…俺は！）…」」

二人の外人侍は眼を細めて背中を取っている勝ち誇っている老婆（ブリッツ）に向けて“無言という名の何処でも三次元にいる上級ゲーマーのような緊迫感を逆に相手に与える威圧（プレ★シャー）”を放ちながら、ジッと黙って老婆に背を向けたまま視線だけで睨み付ける。

ブリッツ≪で？何か思いついたのかね若き二次元兵器（オリジナルレプリカント）。まさかお主の持つ刀で既にお主の背中取っているわしゃを叩っ斬るつもかのぅ？無理な程があるわぃｗｗｗ≫

作者＆赤鉄２主人公「「（俺は…俺は…俺は兵器じゃない！契約者

であり名付け親である恩人(ディク)と…魔ノ神と共に旅をする強き人間、シャイナと同じ人間(ヒューマン)だ！！ディクが言うように俺は…俺はっ！！）」」

二人の外人侍は両手の平から汗が滲み出るぐらいに神経を集中させて何度も言い聞かせるように両眼を閉じた後、背中を取った老婆(ブリッツ)に気付かれないようにゆっくりと手に掛けている刀の柄（●ｉｉリモコン）に力を入れて…

静かに…静かに…静かに…

そっと…そっと…そっと…

俺の…

唯一の…

振るうべき…

シャイナ「!?待てっｗｗｗ今のコマンドｗｗｗそのコマンドはぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあっ!!!!!!!!!」

ディク『おっ?反撃か!?主人公補正という名の特権事項ってやつか!?』

突如二人の外人侍の背中に“バ●オ４又は５のアクションボタン”らしきモノが赤い点滅と共に現れシャイナはそのコマンドに向けて外人四コマのように驚愕の表情を出しながら何度も人差し指を指して、胡座を掻いていたディクは歓喜の表情を出しながらガッツポーズを取る。

ブリッツ《ま…まさかのぅｗｗお主のような若モンが…》

作者&赤鉄2主人公「「…一刀流居合…」」

そんな最中…否既に背中を取られていた二人の外人侍の姿は逆にブリッツの背中を取っていて、老婆から少し離れた場所で二人の外人侍はブリッツに背を向けたまま“いつの間にか腰に掛けていた刀の鞘ごと左手に持ち”、腰を低くして半仁王立ちしながら閉じられていた両眼を少しずつ開いていく。

作者&赤鉄2主人公「「（俺は…“人”だ!一度滅びる前の過去に出会った彼女（　　）の魂と共に俺は生き、今の…新しい世

界で俺は新たな名と仲間と！！）」」

刀の鯉口を切り半分刀身が見え少しずつ抜いた刀の刀身を鞘の中に仕舞う中、二人の外人…否大切な人を護り害なすモノを葬る“銃剣士”であり、本来の自我に目覚めた“フラムエール”は兵器として生きるでなく“強大な力を持ちながら人として活きる道”を選んで…

フラムエール「「（俺と共に活きよう…　　！！）獅●…歌歌！！」」

漸くモヤモヤしていた思いが一つになって、“漸く決めた己ならではの決意”と“改造される前に出会った彼女との思い出と彼女の名前”を心の中で叫ぶように吐いた同時に、引き抜いていた刀の刀身がカシャンッと鞘の中へと仕舞った瞬間…

ブリッツ《こんな状況でわしゃの力を弾き飛ばすとはのぅｗｗｗ》

パキィィィン！！！！

からかうように笑う老婆は再び背中を見せているフラムエールに向けて笑みを返した時、ブリッツの背中から出ていた複数の赤黒い腕が亀裂のような光もなく一瞬の内に硝子が砕けるような音を立てながら、全ての魔力で生成された赤黒い腕が粉々に破壊されていった。

ブリッツ《??はて??お主のような二次元兵器（オリジナルレプリカント）に“このような追加機能”というのはも「「俺は“兵器”じゃない。俺はディクとシャイナと同じ“感情を持った人”だ。」」むっ?》

ブリッツが口元を八の字にさせて過去に老婆は前世紀の最後兵器としての性能に付いていなかった“不可解な力”を受けたのを戸惑うと同時に少し科学的な根拠で整理しようとした時、鞘を元の左腰に掛け直して先程の戦うという真顔から一変“笑みが溢れる人ならではの軟らかい表情が出た生粋の銃剣士（フラムエール）”がテポテポと考えているブリッツに向けて歩んでくる。

フラムエール「「統計的な思考などもう止せ、ブリッツ。俺にはもう機械的な人間モドキじゃない。俺は…強大な力を持ちながらも“新しい世界に活きる者たちと同等”に活きる。俺は…感情に目覚めてからこんな短い時間の間で漸く、“人が求めるべき終着点”へ結び付いたんだ。」」

ディク『フラムエール…。』

シャイナ「く…臭…臭すぎる展開ｗｗｗお…オエッｗｗｗ（↑最低ｗｗｗ）」

胡座を掻いていたディクはフラムエールの真剣な言葉を聞いて思わず立ち上がり、フラムエールは背後にいる半驚愕顔の名付け親のデ

ィクと、ちょっ…ナニコノ展開ｗｗｗ風な唖然顔を出すシャイナの視線を受けつつ口元を吊り上げて軽く鼻音を鳴らして不適に笑った後…

フラムエール「「腕試しは終わりだ、御老体。すまないが俺達はやるべき事を成すために此所に来たんだ。我々に協力を願おう。」」

ブリッツ《…（き…奇怪過ぎるほどの気色悪い兵器じゃのぅｗｗｗ…何故兵器にこんな…）》

ブリッツは自身に差し伸べられてきたフラムエールの右手を見て、オエッと何かが出そうな気色悪さを必死に顔面に出さないように抑えながら、差し伸べられてきたフラムエールの右手を右手で掴み取った。

第百九十八曲　凄っっっっごい優しい医者ほど滅茶苦茶危険ｗｗｗその一例がこ

―妖精界　リュミエール　牢獄館（ノワール）監視塔頂上２００００ｍ　内部書斎―

ブリッツ《まったく、何故自我という概念を持たない殺戮兵器が、人間のように情がある気色悪い兵器になるんじゃろぅ？ムググ…や…ヤらなければよかっ（省略）》

ガサガサ…

先程の軽い腕試しをしたブリッツは突然本来自我を持たないハズの殺戮兵器が“人間のように情へと目覚めた気色悪い人間モドキ”になる姿を見て、喉から来る何かを必死で抑えつつ彼等を連れて書斎へと移動し、数々の積み重ねられた本棚をディク達と共にあるものを探していた。

ブリッツ《ジィッ…（やっぱり見ても気持ち悪いｗｗｗこの人間臭さが溢れた兵器など…）》

フラムエール「「？」」

フラムエールはブリッツの視線を感じてふと困惑するような表情を出し、変な威圧感を出す小柄の老婆の姿を見ながら首を軽く横へと傾げる。

ブリッツ《ジィィィィィィィィィィィィィィィ。（こんな気色悪い兵器など、この場に居るだけで探す気が失せるわぃ。このっ！どっか行け！！キモち悪い二次元兵器（オリジナルレプリカント）めっ！！わしゃから離れろ！！近づく（略））》

フラムエール「「（何故この老婆は俺のことを邪険するような視線を刺しながら何度も見ているんだ？他者関連装…いや、俺はもうこんな“奇っ怪なモノ”には頼らない。俺は…人だ。）何コソコソと俺を見ている？」」

ブリッツ《ぬぉっ！？き…ききき気付いていたのか人間ももも…モドキ！？》

ブリッツはフラムエールの言動を聞いて視線に気付かれたかビクッと両肩を一瞬上に上げて、とある書物を探していた本棚から思わず手を離し、多少両手両足をあわあわと残像でも残るぐらい高速に動かして明らかに挙動不審な動作を取る。

フラムエール「「御老体、俺は人間だ。俺は兵器じゃないし、ましても人間モドキではない。」」

吃音症になりながら両手両足を高速に動かしてパニック手間の動作を取るブリッツの姿を見て、フラムエールはムスッとした態度で呆れたような表情を出しながら両腕を組んでジッとブリッツを見る。

ブリッツ≪かぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！何処がお主のような二次元兵器（オリジナルレプリカント）が只の人間に見える！？わしゃが見た主の力は、ほぼ“人ならざる外法の力”！！主の背中に憑く平行世界の人間の女霊といい、一度滅んだ世界の者が今の世界に生きている“不死の生命力”は明らかに“人ではない”わっ！！≫

フラムエール「「そうだとしても俺は人間だ。身体は人ならぬ構成体でも、“心は人”だ。」」

高速字幕風に（、Д、）ケッ！！と威張るブリッツを余所にフラムエールは、ドドンッとアニメワン●ースのデフォ効果音でも付けたように大きく両腕を組んで胸を張りながら冷静沈着にブリッツへとありのままの自分を伝える。

フラムエールは脳裏に映る他人の心底内にある思想を“一つ一つの文字で出来た字幕文字”を見ながらでも、彼はもう脳内にあるプログラムの力を一切使わないようにしていて、決意を決めても心の中はまだ整理出来ていない所があったが…

フラムエール「「何を言われようとも俺は人間だ、御老体。お前は俺のことを知っているようだが、それは“過去”のこと。例え兵器として生まれても、人として習うハズだった“心”と“思い”、それが出来なかった人の俺が“本当の偽物”だったんだ。」」

フラムエールは両眼を一瞬だけ閉じてかつて兵器として生きていた自分の…前世紀の記憶が消える前に受けたシャイナの鉄拳の意味、彼女から受けた拳からには様々な感情が脳内のメモリーを破壊させるぐらいに一気に雪崩れ込むように入ってきたのだ。

“俺”に対しての悲しみ…

“俺”に対しての憎しみ……

“俺”に対しての怒り……

“俺”に対しての叱咤……

“俺”に対しての憤り……

そして……

―　一つにまとめた感情　―

フラムエール「「彼女（シャイナ）が俺の…人として目覚めさせるために与えてくれた要引人（トリガー）だ。人としての感情に目覚めた代償に過去の記憶は全て抹消されてしまったけど、俺はこれで良かったと思っている。彼女…シャイナに感謝しなければいけない。」」

フラムエールは閉じていた両眼をゆっくりと開けて口元を吊り上げ

ながら、目の前で（。Д。）ポカカーンとしているブリッツに無言ならではの笑みを老婆に見せる。

ブリッツ《っ…そ…“ソレ”がわしゃにとってキショいんじゃっ馬鹿者！！第一…背中に憑く人間の女を除いて“お主の身体”は前世紀、人類が後少しで焦土と化す前に創られた最後の模擬体じゃ！！自我もなく只我々“ハーメルン機関”の人類最後の切り札として…》

ディク『オィオィｗｗｗ何騒いでいるんだカリン塔の婆さん？？ｗｗで？この本が要注意者簿録（ＬＶ６大犯罪者リスト）かぃ？？』

ブリッツ《むぅっ！？》

フラムエール「「！ディク！！」」

と、（、Д，）ノキィィィィ！！とフラムエールに対してブリッツは“台詞が臭過ぎて耐えきれねぇｗｗｗ”風にボリボリと両腕を何度も掻きながら邪険が混じった言語を吐き捨てていた時、丁度良く数々の本棚の奥から一つの“明らかに分厚い書類”を右片手で持ちながら平然と歩いてくるディクが歩いてくる。

ディク『たくっ…俺らが真剣に探している間にカリン塔の婆さんは、俺の大切な相棒を好き勝手に言葉攻めしていやがったな！！このっ（、皿、）』

フラムエール「「ディク…。」」

ディクは奥の本棚から持ってきた分厚い書類をブリッツに投げようとして振りかぶったが、後ろから着いてきていたシャイナに「大の大人のアンタが、バアチャン相手にコレは無いＺＥｗｗｗ」と苦笑いしつつ両手で振りかぶっていた分厚い書類を力で強引に引っ張るように止める。

ディク『何…冗談だよシャイナ。＾＾この俺“元オルレアンの国王”が老体相手に「そう言いつつアンタ…本気であの“しわくちゃババアの頭部に目掛けて投げようとした”だろｗｗｗ」…テヘッ★撲殺失敗（笑）』ちょっｗｗｗ」

犬ツィオ「キュゥゥゥン…。」

分厚い書類を抑えているシャイナは顔だけ振り向いているディクの“片眼閉じ・ベロを出している嫌らしい黒●コちゃんドS版フェイス”を見て、「やっぱり殺す気じゃねぇーかぁぁぁぁ！！」と激しく突っ込みを入れながらディクが持っていた明らかに人間５人分の厚さがある分厚い書類を足下にいる子犬に見守られつつ“強引にもぎ取る”。

シャイナ「危ねっ！！あっっっっぶっっっっっｗｗｗ後少しで老人

撲殺事件が起ご…！！！！」

ディク『あ。』

フラムエール「「おぃ！？」」

ゴキンッ♪

突如何かが外れる音が鳴ってその音の正体を知るディクとフラムエールは、眼を丸くしてドスンとシャイナの両手から落ちる分厚い書類がスロー・モーでも掛けられたかのようにゆっくりと床へと落ちた直後…

シャイナ「ギャアアアアアアアアア！！！！！か…間接がぁぁぁ間接がぁぁぁぁぁ！！！！！」

ディク『ば…馬鹿野郎！！君のような“ただの人間”が、こんな通常持ち上げられない分厚い書類を無理矢理もぎ取るからだ！！！！！（※事の発端は貴方です。ｗｗｗ）』

シャイナは大きく子供が初めての注射を受ける前の泣き叫ぶ声を上げながら、両膝を折って床に付けながらダランと力なく蛸足のようにだらけた両腕の手指を少し冷たい床に着ける。

シャイナ「ビィエエエエエエエエエン！！！！！も〝うゲーム〝ずるごどが出来な〝いいい〝い！！！！！料理も〝づぐれ〝な〝い〝いいいい

シャイナ「グズッッッッッッッッッッ！！！！！ヒッッッッッッッッッッッッッッッッッッッッ！！！！！」

フラムエール「「丁度いい時だ。シャイナ、お前に借りを返す時が来たようだ。」」

シャイナ「ベッッッッッッッ？が…借り　？？」

間接が外れた痛みで何もかもパニック状態に陥っているシャイナは、フラムエールの言葉を聞いても意味が解らず痛みで不細工に泣き崩れた表情を出しながらジッとフラムエールを見続ける。

フラムエール「「今のお前の状態だと俺の言っている意味は解らないだろうが、この後完治した後に俺が言ったことを心の隅で覚えて貰いたい。良いな？」」

とフラムエールはまだ泣き崩れて不細工顔になっているシャイナに“破壊力抜群のイケメンフェイス”を出しながら、間接が外れて爛れている両腕手首をフラムエールは確りと握りしめた後…

フラムエール「「1…2…3で君の間接を繋げる。さぁ、行くぞシャイナ。確りと舌を噛まないように歯を食い縛ってくれ。」」

シャイナ「う〝…う〝ん〝…。」

シャイナは間接が外れた痛みを受けながらも、フラムエールの酷く優しい言葉に釣られるように顎で頷いて言われた通りにグッと歯を食い縛る。そして…

フラムエール「「行くぞ…1……“2”っ!!」」

シャイナ「!!!??!」

ディク『ぶっｗｗ』

ゴギャラ〝ァァ〝ァ〝ァァ〝ァァ〝ァ〝ァ!!!!

カウントダウン最中に突如外れた間接が入れられて、シャイナは不意を喰らった騙し顔のフラムエールの一撃により信用しきっていた表情から一変、鬼瓦のような表情へとなる。

シャイナ「ゴヒャアアアアアアアアアア!!!!痛ぇえええええええええええええ!!!!!だ…騙しやがったな糞がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!!!??!!!!」

フラムエール「「緊張していない合間なら繋ぎやすいし、治癒してくれる者に対して安心するその表情が…なっ？（黒）」」

シャイナ「ぐおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！！！！！オノレェオノレレレレレレレ！！！！！後で覚えてろこのクソ（ピーーーーーーーーーーー）野郎がぁ！！！！！！」

とシャイナはまだフラムエールの力で間接が繋がり治されたばかりなのか、背中を床に着けてじたばたと両手両足を好きなように暴れながら不適な笑みを出すフラムエールに向けて“放送禁止用語混じり”の怒りの声を上げる。でも…

―君に…罪は無い。―

間接を繋げられたと同時にシャイナの脳裏に響いた、フラムエールのシャイナだけが聞き取れる魔力のメッセージ。

表のシャイナは痛みで我を忘れて暴走していても、中身はその言葉の意味が何なのかまだ理解出来ずに、少し悩む仕草をしながら裏面の自分の意識を手離して行った。

第百九十九曲　今だけの仲の良い≠殺伐全快若モン・S～そして話はややこしい

シャイナ「このクソ♂＃＊$¥が！！！！！テメェの¥$@§◆★を蹴っ飛ばしてやるっ！！！！！」

フラムエール「「ハハハッ！それだけ声が出ているなら十分だ、“泣き虫垂らしの不細工顔女”。」」

シャイナ「何だとぉぉぉ

ち上げることすら叶わないモノを、自然に持ち上げることが出来るかもしれんぞ？」」

シャイナ「もしそうだとしたら…真っ先にテメェの★※□※〒＊を引き抜いてぶちまけてやる！！！！」

フラムエール「「ほぉ？その◎＃＊∞♂とは俺の股下にある※●■@▲♪のことなのか泣き虫垂らし不細工顔女？それをわざわざ※♪■☆にするなど…。」」

とフラムエールは顔だけ後ろに向いて爽やか過ぎる笑顔を、“顔だけ鬼化してもの凄い形相”に向けて一部“伏せ字になっていない言語”を吐き捨てながらシャイナから逃げ続ける。

逃げるフラムエールを追い掛けているシャイナは背を向けて逃げるフラムエールに向けて両腕を思いっきり伸ばし、追いかける者・逃げる者の二人の足下から、妖精界の虹空を被い尽くすほどの茶色い噴煙がモウモウと上がっていた。

ディク『うん♪今日も皆★仲が良いこった！！、（＾∇＾）ノ』

犬ツィオ「キャンッ♪キャンッ♪」

ドドドドドドドドドドドドッ！！！！！！！

その光景をディクと足下にいる子犬(エッィオ)が、二人のナウシカのように爛々走りしている≠殺す気満々で逃げ回って&追い掛けている二人を見て、微笑ましい表情を出しながらじっと見守る。

ブリッツ《ちょっｗｗｗおまっｗｗｗ何　処　が　仲　が　良　い　二　人　に　見　え　る　の　じ　ゃ　！？ｗｗｗ》

が逆に微笑ましい雰囲気が出ている一人と一匹の隣で、（。Д。）ポカカカカーンとシュール過ぎる二人の姿を冷めた表情で長時間“本編が始まるまでずっと棒立ちのまま立ち尽くしていた”。

…い
……ろ
……い
……ろ
……あ
……っ
……て
……プ
……ギ
……ャ
……ー
……し
……て

……サ

……ー

……セ

……ン

……（笑）

―妖精界　リュミエール　牢獄（ノワール）館監視塔頂上２００００ｍ　風ガ吹キシ高台―

ブリッツ《！？何…何じゃ今の！！？？！“文字数を無理矢理増やすだけの単純過ぎる小学生レベルの打ち込みは”ｗｗｗ》

シャイナ「い　ち　い　ち　作者の“仕事帰りＤＥ厭鬱憤晴れ心満載”に突っ込むんじゃないよクソババア。作者だって餓鬼に戻りたい思いもあるんだよ（爆）」

とブリッツの上記の文の突っ込みを入れる最中にシャイナの情けの欠片もない毒舌を聞いて、《クソババアだと！？こぉぉんのクソ餓鬼っ！！》と両手両足を激しく動かして棒立ちのままジタバタとシャイナに見せるように暴れる。

空はもう明るかった虹色から濃い紫一色に塗り潰されていて、頂上の開けられていた箇所から先程よりも冷たい風が頂上にいるディク達に向けて吹き荒れ、高速に流れる伸びた雲の途切れ箇所から小さ

な光が複数キラキラと点滅するように輝かせる。

太陽はもう既に落ちていて水平線辺りから一筋の赤い光のようなモノが映っており、シャイナ達にとっては長い戦いが待ち受ける前兆のような兆しにも見えていた。

ブリッツ《このクソ餓鬼がっ！！この牢獄（ノワール）に入ってきて早々、感情に目覚めた人間モドキが入ってくるわ、人間・悪魔の死臭が染み付いた英霊と畜生を連れた生意気口を叩く餓鬼人間も入ってくるわ、書類探しを手伝わさせられるわ、何だいこのハチャメチャ過ぎる展開…》

ディク『無駄に長ぇよ、カリン搭の婆さん。で、この書類の中に疑似林檎を作り出した馬鹿がいるのか？？』

一人勝手にブツブツと暴走しているブリッツを余所に、ディクは白を切った仕草をしながら書斎から持ってきた書類をブリッツの足下に向けてポィッと投げ捨てる。

ブリッツ《！馬鹿者！！この書類はこの牢獄（ノワール）に必須なも『じゃぁ俺がこの書類を見つけた途端、この書類だけ他の多くの文献から“遠ざけるように置いてあった”んだ？』…（、△、＃）》

グサリッとブリッツの右胸にディクの言葉が一つの矢となって深く

突き刺し、ブリッツは真顔を出すディクに向けて厭みな眼差しを視線だけで睨み付ける。

ディク『ちょこっと見たんだけど、その書類は名前が全て伏せられている犯罪記録だけの名簿だった。写真らしき痕もあったんだけど、無理矢理素手で破り捨てたような形跡・新しい血痕らしき部分が複数あった。もしかするとその書類は…』

ディクはブリッツの足下に投げ落とした書類の中身を見てふと思ったことを脳裏に過り、ディクだけの仮説を密かに整理しながら今の状況を管理者（ブリッツ）に伝える。

ディク『アンタにとって“余程関わりたくない連中”だったのか、或いは“存在していなかったことにして直々処刑した”のか、又は“アンタ自身の過去に何やらかを仕出かして感づかれる前に殺った”のか…何れにせよその書類自体が、俺達に真相を伝えないように真実を包み隠して、この世界で起こりうるモノを捲き込ませない為に偽物（フェイク）だったんじゃなかったかと?』

シャイナ「何ぬっ!?」

フラムエール「「何だと…?」」

犬ツィオ「キャンッ?」

ディクの言葉を聞いたシャイナとフラムエールは少し驚愕するような表情を出して、彼らの足下にいる子犬(エッイオ)は●イフル並みの眼をキラキラと輝かせながら、そっと頭を傾けて可愛らしく傾げる仕草を取る。

ディク『この世界の妖精王もそうだ。今起こっている真実を見ようともせず、何もかも無かったことにして見知らぬ行為をする…今は何とかこの箱庭の中で抑えられているけど、これじゃぁ何時かは！この世界ごと妖魔に埋め尽くされて、妖精界自体が魔界のようになっちまうんだぞ！？それでも良いのかアンタはっ！！』

ディクは今の…この世界に入って街の様子を見た時を思い出し、王として信じられない体制・王として与えるべき正しき民の教育等を見て失望し、ブリッツに向けて苛立ちが爆発したかのような怒りの表情を出しながら吐き捨てる。

ディク『アイツ（リオリーネ）に…一国の王としてのやるべきことが欠けすぎている。アイツが気絶する前に俺は身に付けていた魔道具を見たんだ。“所持者以外の存在を否定する”アイツは自分だけ助かれば良いと《事の発端は３０００年前だ。》何！うぉっ！？』

突如目の前から勢い良く厚いクリップで止めた複数の赤茶色に変色した古い書類が突進してきて、ディクは反射的に飛び込んできた古い書類を右手で鷲掴みする。

どうやらディクの元王としての威圧と叱咤を受けたブリッツは彼に対して若干嫌悪しながらも、内面は本来有るべきだった国の姿に心残りがあるかのように寂しい思いを過りながら、右手の平から“本来ディク達に見せるべき本当なる書類”を魔力で投げ渡したようだった。

ブリッツ《３０００年前、この世界に大きな…大きな特級悪魔が攻めてきて、偶然居合わせたこの世界の英雄“魔神”が特級悪魔を追い払った後、元々則を絶対に守っていたこの世界に“亀裂を生じた引き金の妖精”がこの世界を救った魔神の姿を見た瞬間に…》

―　一人の魔神の為だけに、全ての則が崩壊していったのさ。　―

第二百曲　２００話になりましたが、まだ妖精界編はしつこく続くｗｗｗ

―妖精界　リュミエール　牢獄（ノワール）館監視塔頂上２００００ｍ　風ガ吹ク高台―

ブリッツ《３０００年前、則を守り従っていた妖精達の世界に襲撃してきた巨大な特級悪魔。その特級悪魔はこの世界にある“究魔具（ウルティモ）”が欲しくて民も見境無く巻き添えにし襲い掛かってきてのう。救世主の魔神が来るまで酷い有り様だったんじゃ。》

ディク『“究魔具（ウルティモ）”？それは？？』

ブリッツは淡々と後方にいるシャイナ達に背を向け窓際へと移動しながら言い、ディクは生前教えられてきたエツィオに一切聞かれていない単語を聞いて、はっとした表情を出しながら足下に落ちていた偽りの書類が風でパラパラと一枚ずつゆっくりと捲られていく。

ブリッツ《第四究魔具“魅ニ堕チル精ノ霊虹剣”。その究魔具を手にした者は“林檎”に近い力を手に入れることが出来る。しかし究魔具は林檎の力に近いとはいえ実際の本物の林檎には程遠い。》

ブリッツはそう言いながら右腕を横に伸ばして右手をぐっと固く丸めた時、風で何枚も捲られていた偽物の書類をとあるページ付近で魔力で止める。

ブリッツ《究魔具は全て“六つ”。今言ったこの妖精界の第四究魔具“魅ニ堕チル精ノ霊虹剣”、第五究魔具の深蒼界にある“大いなる母の拳盾”、第六究魔具は人間界の“全知たる救済の書物”。この究魔具は何処かに古人達が隠すように残してがあるのだ。だが…》

ディクは先程床に落とした偽物の書物の魔力で止められたページを見て、ブリッツに投げ渡された書類のページと魔力で止められた同じ文字だらけの内容を視線だけ動かしながら一文字ずつ黙って読み“究魔具”という単語に注目する。

だが文章の途中破かれていて一部インクが酷く滲み腐蝕が進んだ所があったものの、ディク…否シャイナ達は魔界と神界の究魔具とはどのようなモノか“何となく4秒で脳裏妄想”出来た。

シャイナ「（多分“アレ”じゃねｗｗｗ俺らの直ぐ近くにいるあの…）」

フラムエール「「（あぁ、そうだな。…それしかないだろう。）」」

ブリッツ《魔界と神界の究魔具の詳細は不明なのじゃ。一つの…わ

しゃの友人の仮説によると、お前さん達が探している“林檎を産み出した親”であり今でも何処かで“密かに活き続ける深淵の究魔具”だと噂されている。≫

シャイナ「Sチーム「「『（うん、やっぱり“アイツ”だなｗｗｗ）』」」」

犬ツィオ「ワフンッ♪キュゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥン♪♪」

遠い目をして語るブリッツを余所にシャイナ達はぶつぶつと小さな声で会話しながら視線だけ下に動かして、木材の臭いを嗅ぎながら床で腹を見せるように何度もごろ寝する黒い子犬の寝顔を固い表情で見詰める。

犬ツィオ「キャゥ？クゥゥゥゥゥゥン？？」

仲間達（シャイナ）の固い視線に気付いたのか腹を見せてごろ寝していた子犬がピクッと顔を上げて、汚れなき●イフル並みの粒羅な瞳を彼らに放ちながら横たえていた小さき身体を起き上がらせる。

シャイナ「（コイツと…アルタイルがまさかの“林檎の産み親”だとわね…。どうせコイツとアルタイルの身体から一部取り出して創られたモンだろｗｗｗ）」

ディク『（多分な。ｗｗｗ一応エツィオとアルタイルは“自然そのものを全て支配する王”だからな。俺の勝手な余談だが多分林檎は“この星の境界線を保つ”為に創られた“結合（コンフィーネ）”辺りになるな。本来魔力を持たないフツーの人間達が他世界と関わりを持ってはいけないし、ましても異質なる高度の知を知られてはいけないし持ってはいけない。）』

ディクは投げ渡された書類の文章と床に投げ落とした偽の書物を交互に見ながら、小声でブリッツに聞こえないようにシャイナに向けて“専用用語が混じった長々しい台詞”をシャイナに言う。

シャイナ「（（ＤＡ・ＫＡ・ＲＡ…日本語で喋れや！このゲシュ●ーア風オッサンめ！！（怒））…云わばスタオ３のような“未開惑星保護条約”ってやつ？高度の技術をまだ発展しきっていない世界に教えてはならないと…）」

ブリッツ《まぁこれも“全然関係ない話”じゃったが…すまないのぅこの世界に来たばかりの若子らの。話を戻すがその後偶然この世界に来ていた魔神によって巨大な特級悪魔は斃されて、この世界に住まう民達は魔神に対して多大なる名声を祝杯を上げた。魔神と巨大な特級悪魔の戦いで犠牲は多く出たが、この世界に住まう民達は決して魔神に非難せず、誰もが魔神に対して大いなる尊敬を込めて感謝を送った。しかし…》

ブリッツは空に上る一筋の赤い線みたいな雲が段々と不気味に横へ

と広がってきているのを見て、表情を曇らせながら後方にいる彼らに向けて身体を振り向くと同時に続きを言う。

ブリッツ《一人の妖精が魔神の圧倒的な力を見て、民達がまだ喜びの絶頂の中一人黙々と先代王に告げる事も無く勝手に“魔神の力近づけるような究極の武器を開発”するべく則を破るぐらいまで極秘に研究を開始した。まるで悪魔に取り憑かれたようにのぉ…》

ディク『！これは…』

ディクは床に落ちていた偽書類の視点から投げ渡された本物書類を再度見直し、一枚ペラッと左手で上へと捲った直後…

ブリッツ《研究は３０…いや１４１２年も続いて年を重ねるごとに研究に加担する妖精も増えてきた。失敗し、更に失敗し…またしても失敗し…その繰り返し。》

シャイナ「これって…え…いやディクの師匠が戦った時に“嫉妬（クソハゲ）”が使っていた杖！？」

書類に文字と共に掲載されたていたのは、一度魔界に成り掛けたフランスオルレアンで死闘≠喧嘩をした嫉妬ＶＳ億越えジジツィオで使った“ニケの杖”であり、写真自体はモノクロで写真自体が古いのか全体的にぼやけて見え難い所もあったものの、シャイナ達にと

ってその杖はニケの杖だということを認識する。

ブリッツ《その写真は“まだ未完成の擬似武器”じゃ。これを大量に生産していたモノが幾つかあったが、まだ今でも隠れて製造している輩が多くいるんじゃよ。違法に製造している箇所を潰しても潰してもキリが無いぐらい多くて多くてねぇ…たくっ…。》

フラムエール「「御老体に聞くが、大体今現在この世界の則を破って違法に生成している妖…妖ノ魔はどのぐらい居る??正確じゃなくてもいい…」」

シャイナとディクが手にする書類を見ながら驚いている最中、フラムエールは両腕を組んで前方に居るブリッツに片をつけるべく顔だけを動かして強面の表情を出しながら言う。

ブリッツ《…そうじゃな、今現在妖魔化し“その研究に今でも加担している馬鹿共”は…》

―ざっと“５０００名”じゃろ。―

第二百一曲　人間になった感情兵器の貴方に、小さな素敵罵声プレゼンツ☆

ー妖精界　リュミエール　牢獄(ノワール)館監視塔頂上２００００ｍ　風ガ吹ク高台ー

ブリッツ《…という風に…で…そう…まぁ…あぁ……この世界の囚人達為に外部から蓄えられている物資格納庫地帯へと行ってみよ。そこら辺に“疑似林檎を沢山隠している倉庫がタンマリ有る”ハズじゃ。あ！あとそれと…》

ディク『？？今度は何だよ婆さん？』

この後ブリッツから詳しい情報を聞いたシャイナ達は更なる場所へと目指すべく監視塔を後にしようとしたが、突如ブリッツに呼び止められて不意に足を止められる。その直後…

ブリッツ《あそこは…このわたしゃでも押さえつけられない位に暴れまわる“ブライン”という輩がいてのぅ。則を破りより高い知能を持った最低最悪のクズが多く集う無法戦闘集団の拠点(シマ)じゃ。…気を一切抜くなよ元人間の英霊と人間モ…》

フラムエール「「“フラムエール”だ。二度と俺に対して“人間モ

ドキ”と言うな御老体！」」

ブリッツ《（　´　ェ、　）…》

うざったい表情を出しながら“右鼻穴に人差し指を入れて鼻糞を下品に穿っている”何処にでも見かけるオッサン風のディクを余所に、フラムエールはブリッツの発言を聞いてキリッとした真剣伊達面（マジイケメン）の表情を出しながら軽く叱咤し、ブリッツの言葉の続きを遮る。

ブリッツは二次元兵器（フラムエール）…否破壊という概念しか持っていない本来あるべき兵器の“目標を殺す殺傷者の視線が無い情に満ちた人間の心が剥き出しになった視線”が気に喰わなくて、両眼を細くしギリッと歯を見せるように歯軋りしながらフラムエールを若干嫌悪するように数秒睨み付けた後…

ブリッツ《…まぁ良いか。とりあえずその地区に入ったら“ブラインの蝿共”に注意することじゃ。一度狙われたら最後“確実に仕留めるまで追撃を止まない”しつこい害虫じゃとも。》

ディク『Ｍｅｒｃｉ　ｐｏｕｒ　ｌ'ｅｎｓｅｉｇｎｅｒ　ｆｏｒｍｅｌｌｅｍｅｎｔ？　ｌａ　ｐｅｔｉｔｅ　ｐｌａｃｅ.（忠告サンクス。）まぁ、狙われても“逆に返り討ち（笑）”すりゃいいしな。』

満更でもねぇなとやつれたように表情を出すディクがワザとらしくフランス語を吐きながら両腕を広げた後、ディクの背中からバサリと羽ばたく音と共に大きな純白のトキの両翼が展開する。

ディクが翼を出した後傍にいたシャイナと肩の上に乗っかっていた子犬(エッィオ)を両腕で抱かかえたて、上空の濃い紫の空へ向けて翼を一回上下に羽ばたかせた後宙へ浮かぶ。

フラムエールは名付け親が宙に浮かんだのを確認した後、いまだに無言で威圧の視線を送っている老婆(ブリッツ)にふぅと小さくため息を付いて背を向けた時…

ブリッツ《…ちっ…この失敗作がっ！…下らぬ人間の青臭い感情を持つ兵器などっ…》

背中から刺さるブリッツの感情に目覚めた二次元兵器(フラムエール)に対しての“憎悪”“嫌悪”“怒り”が込められた、蚊のような音量しかない小さな声をフラムエールにだけ聞こえるように吐き捨てる。

フラムエール「「…。（！成る程…この老婆は…そうか…）」」

フラムエールは脳裏映る新たな情報を映像と共に見て高速に“自分の過去の姿と他の白衣のような衣を着た人間達の画像”が流れていく中、一旦フラムエールは両眼を閉じクスッと宙に浮かんでいる仲

間達に向けて少し微笑む表情を出した後…

フラムエール「「（まぁいい、“今の俺”には関係ないことだ。）すまない少し考え事をしていた。今行くぞ。」」

ディク『おう。』

タンッと右足を軽く床を蹴るような動作を取った後フラムエールの身体はディクがいる高さまで一気に飛翔し、バサバサと赤いコートの裾を風力で横に揺らしながら仲間と共に物資格納庫がある地区に向けて高速に監視塔を後にした。

…

……

……

―数分後　物資格納地帯　工業跡地―

シャイナ「ここが“あの気色悪い奴らの腹を満たす糧”を与える物資が沢山貯蔵された倉庫ってとこか。でも…」

物資格納地区に降り立ったシャイナ達は抱かれていたディクに降ろしてもらった後、先に後ろにいる彼らを数歩追い越して額に横に向

けた左手を沿えながら顔を右往左往に動かして、視線に入ったモノに向けてテッテと走り出す。

シャイナ「アイツら同族同士共喰いしているし、オバケのような姿になっているし、こんだけの倉庫あっても意味ないんじゃ…」

犬ツィオ「キャゥン…。」

シャイナは目の前に建てられていた一件の大きな倉庫の薄い鉄板のような扉を開けて、軋むような音を立てながら倉庫の中へと入り中にあった多くの“袋の所々に生えた黄緑の何か”を残念そうな表情で足下にいる子犬と共に見詰める。

フラムエール「「いや、意味無いワケじゃないぞシャイナ。この狭い箱庭でも“罪を認めてまた再びこの世界へ社会復帰しようとしている取り敢えずマトモな人”がいるのだ。その区間はあの御老体から聞いたハズだぞ?」」

ディク『でもよぉ、フラムエール…これだけの倉庫があるのに食料に黴が生えるほど輸送が滞っている現状だ。あのカリン塔の婆さんが言う“ブライン”とか言う奴のせいかな?』

ディクは先に入ったシャイナを通り越して一つの黴が生えた食料入り袋に向けて右腕を伸ばし、右手で袋の上部に触れた途端バフッと

薄い茶色の細かい粉がハウスダストのように宙へ軽く舞う。

フラムエール「「…妖魔化を抑える為に取った卑劣な手段か。必至に更正しようとしている者も沢山居るのに…くそっ！」」

ディク『もうこの世界に入った時点で“弱肉強食”なんだよ。例え更正しようとして必至に生き抜こうとしている者が居ても、いまだにこの国自体制限されてきた事を好き勝手に振るうことが出来る“本当の強者”がいる限り…』

フラムエール「「お構い無し…か。」」

フラムエールは長年手入れしていない倉庫の中の錆び付いたような臭いを軽く嗅いだ後、顔を俯くように下にし俯きながら頭部の乱れていた赤いカウボーイハットを再度右手でかぶり直す。

ディク『何にせよ此所は“無法を続けている俺らのような知性を持った戦闘集団（トライブ）”が住んでいるんだ。寄せ集めといっても数が多ければ多いほど火力があるし、組織で動いて“何かを開発し大量生産している”となると、今俺達が遂行している極秘ミッションに何かしら接点に結び付くかもしれんからな。』

フラムエール「「そのブラインとかいう戦闘集団の中に、疑似林檎を産み出した本人がいる可能性が高くなるということか。」」

ディクは右手の平に乗っていた細かい砂と化している少量の埃を床に向けてこぼし落とした後、隣にいたシャイナの右肩に向けて軽く右手で叩いて倉庫入り口にいるフラムエールに向けて歩み出す。

ディク『まず俺らがやることは“疑似林檎を造り出した本人を発見”しないと…』

フラムエール「「そうだな。ならこの物資格納庫地区の奥に有る“とある製造工場跡地”に向かってみよう。何か資料とかあれば良いのだが…」」

フラムエールは右手を広げてグッと思念で集中した後、魔力で生成した今現在の牢獄の地図をシャイナ達に広げるように見せて、魔力で創られた地図を見たディクは工業地帯を一目見た後…

ディク『行ってみる…価値あるか。よし、行こう。』

と言って側にいるフラムエールとシャイナと足下にいる子犬と共に今いた倉庫を後にして、“次回戦闘警報のフラグが過る”工業地帯へ向けて走り出していった。

第二百二曲　夜間ＲＥＣスクープ劇場！ディクサァァンが見た衝撃の瞬間！！

―妖精界　リュミエール　牢獄館（ノワール）　？？？―

？―オィ？見てみロヨ？？アの見掛けねぇ糞な人間ら三匹と、クソ胡麻みてェな畜生一匹。―

？―俺らノ拠点（シマ）に何しに来たンダあの雑魚ぃ畜生を連れた人間共？？ククククッ！！―

一件の錆びまみれの倉庫から出てきたシャイナ達を見て何処かで見下ろすように見ていた則を破った妖精が、下卑めいた発言を吐きながらクスクスと可笑しく一部の妖精は腹を抱えて笑う仕草を取る。

彼らの姿は聳え立つ多くの元工業地帯の煙突や大型タンクの影で同化しており、月の光が一切入らないシルエット状態のまま何処かへと走り出して行くシャイナ達を視線だけで追い掛ける。

？―いや、正確に見ルト人は“一匹”。あの黒深巾ノ奴は“魂ノ塊”、アノ赤い長身ノような人間ハ“人ノ型を取った機械”ダ。―

？ー機械ダッテ？何でアンナ“紛いモン”ガこの世界ニイルンダよ？？ー

シルエットと言っても外側の輪郭は薄っすらと見えて、その輪郭から姿は辛うじて人型を保っているものの“四肢の一部が以上に伸びていたり・頭部が二つに枝分かれした”ような奇形種が彼等（シャイナたち）の中で唯一戦闘能力がある二人を見つめていた。

？ー…ブライン様に言っテおくカ？一応あの人間共ハ、俺らノ拠点（シマ）にブライン様の許可ナク入り込んだシ。ー

？ー止セドゥーズ。アンナ雑魚ガ一匹入ったクソ連中などニ、ブライン様の手にわずワラセルマデも無いわ！ー

建物の物陰に多く潜んでいた獄中妖精の一人が狂気の浮かべているような表情を出した時、四肢の一部である妙に長い腕の先端がビキリと何かが折れるような音が鳴って、腕自体が横真っ二つに割れて割られた部分から獣のような鋭い牙が複数生え腕自体が巨大な獣の口になる。

？ー折角の客ガ来たモンダ、責めテ“挨拶ぐらいシテイコウ”ゼ？ー

？ー挨拶ノ序に、俺らの“晩飯”デモ摂ろうトスルカ。アァ、ナン

カ…ー

？ー ハラ…へ……ッ……タ……ヒャヒャヒャ！！ー

ニヤリと静かに不気味に笑いながら口元から出ていた涎を左手で拭い取る仕草を取った途端、ゴシューと割かれた元腕の獣の口から異形に相応しい奇声を上げて宿主と同じような“ただ相手を喰らいたい”思考だけで赤黒い舌を何度も舐め回していた。

…

……

……

ー牢獄（ノワール）館　物資格納地帯　とある製造工場跡地内部ー

シャイナ「…く…暗い！静か過ぎる！メチャ怖過ぎ！！だ…だだだだ誰か居ませんＫＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！？？！？！」

と上記の“敵視点”から元の主人公側視点（ＴＨＥ★チーターチーム）へと戻り、フラムエールが生成した魔力の地図で“キナ臭い匂いが漂う怪しい場所”へと移動したシャイナ達は、煙突とタンクが沢山聳え立ち数多くのパイプで繋がれている巨大な工場内部へと入ったが…

シャイナ「暗いＹＯ！狭いよ（視野がｗｗｗ）！！怖いよ！！！だだだだ誰か助けてくれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

フラムエール「「此処に入った直後に早々煩いぞシャイナ。少しは隠密に行動することをしないのか！？」」

既に電源自体がダウンしていて内部の配電は無く“輪郭さえ見えない暗闇状態”のまま、シャイナはビビリ声を出して直ぐ隣に居たフラムエールに思いっきり飛びつくぐらい力を入れて“そのままフラムエールに抱きつく”。

フラムエール「「な…お…おいお前！何処を触っている！？そこ…ぐぉぉぉぉっ！？」」

シャイナ「怖い怖い怖い

フラムエール「「っっっっっっっっっっっっっ！こ…この女がっ！！いい加減放…」」

フラムエールは自分の“アレ”に当てられて不愉快な表情でも出しているかのように苛立つ声を出しながら、抑え付けているシャイナの面に向けて両手の平を当ててグッと押し退けようとしたが…

シャイナ「ヤダー！！ヤダァァァァァァァァァ！！！！わわわわわ私から離れないでこの＃＄％＆@◇☆！！！！！」

フラムエール「「ぬぉっ！？こ…こいつ！や…止めろ！いい加減にしないか！シャイナ！！」」

逆にシャイナは押し退けられている感覚を受けて押し退けているフラムエールの両手首を両手で握るように掴まえて、決して掴んだ（抱きついた）相手を放さないように身体ごと前乗りになっていくようにそのままフラムエールを床に押し倒す。

シャイナ「ギャァァァァァァァァァン！！！！！怖いよぉおおおおお怖いヨォォォォォォォォォォォォォォン！！！！！」

フラムエール「「くそっ！…！うぉおおおおお！？！！？」」

後数秒フラムエールの“アレ”が二度も当てられようとしていて、余計に焦る表情を出しながら押し倒したシャイナの何処かの顔面に向けて両腕を伸ばし少しでも“アレ”に触れてしまう時間を稼いでいた時…

ディク『あっ！コレかな？スイッチ★ＯＮ！！』

犬ツィオ「キャン！」

バシュッ！！

突如明かりがつけられて今居る工場内部の配電が蘇ったかのように全て明かりが点いて、配電盤のレバーを右手で上げていたディクと足下にいる動物の力なのか配電盤のありかを教えていた子犬（エッィオ）が今居る場所に再度顔だけ後ろへと振り向いた瞬間…

フラムエール＆ａｍｐ；シャイナ「「「！」」」

ディク『あまぁ！』

犬ツィオ「！キャゥ！？」

ナイト・オン・ザ★ヤッチマッタＲＥＣ！！配電盤のレバーを上げたディクと子犬（エッィオ）が見た衝撃の光景（笑）は、数メートル後方辺りにいるシャイナとフラムエールが…

―シャイナがフラムエールを押し倒しフラムエールの両手がシャイナの左頬と額に抑え付けるように当てられていて、フラムエールは押し倒されたシャイナに馬乗り状態のまま“キスをしようとしているシャイナ”をもの凄い形相で押し退けていた。―

ディク『（　゜Д　゜）エ…チョ……ふ…フラム…エールサン？？』

犬ツィオ「キュ…キュゥゥゥゥゥゥ…。」

フラムエール「「！ち…違うぞディク！！これは…「超々々々々々々々々々撲殺冥皇破戒死掌滅絶拳！！！！」ぐわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？？！！？」」

ドガシャァァァァァァァ！！！！

足下にいる子犬（エッィオ）と共にフリーズしている一人と一匹に向けてフラムエールは必死にコレは間違いだと彼らに説明をしようとしたが、鬼の形相に変わったシャイナの鉄拳が容赦なくフラムエールの右頬に食い込んで、殴られたフラムエールはギュラギュラと身体を回転さ

せて自身がドリルになるように一気にフラムエールを“何千メートル先まで機材を破壊しながら穿孔させていった”。

フラムエール「「ぐ…ぁ。に…人間の…お…女の…く…癖に……何て力だ…。。⊂（Д）⊂（⊃）」」

シャイナ「あ…あんな青臭い感情持ったク●ガリサァァンなんかに！！私は…キスしちまったのかぁぁぁぁぁぁぁぁｏｒｚホギャラァァァァァァァァァァァァァ！！！！！！！」

何千メートル深く殴り掘られたフラムエールは“初代レッ●スティールのとあるバグ”になった時によるブーンな敵を倒した時に出来る“身体を鯱のように反りながら足下をピクピクと痙攣させるように細かく動かしてた”。

フツー…否仮でも魔神の婿に殴られたフラムエールは、痛みで閉じた両眼の瞼がガタガタと震えて情けない体勢のままシャイナの咆哮が轟く中、完全に意識を手放して内面から崩れ落ちていった。

第二百三曲　怖い！女は怖い！！特に大人しい系を怒らせると…／（＾Ｏ＾）／

―妖精界　リュミエール　牢獄館（ノワール）　とある製造工場内部　Ｂ１Ｆ通路―

フラムエール「「くそっ…に…人間の女の癖に…“何て力”だ（泣）奴は…人からかけ離れた“怪力女”か！？」」

先程シャイナに殴られて数千メートル深くめり込まれたフラムエールはディクに救出（回収）された後、シャイナの尋常じゃないハチャメチャな攻撃を受けたショックにより、フラムエールは武器状態に戻って体育座りしながら落ち込んでいるような仕草でディクに語りかける。

ディク『カ…ハハッ！痛かっただろフラムエール。（笑）初めて俺がシャイナに殴られた時、“大型の木を十三本連続ぶち破る”位の力が入った制裁鉄拳を受けたんだぜｗｗｗ（爆）』

と武器状態のまま落ち込んでいるフラムエールにディクがケラケラと笑いながら、背中に携えた長神刀に向けてディクなりの爆笑体験談（第百六十四曲参照ｗｗｗ）をフラムエールに語る。

フラムエール「「アレはお前のこ…いや“敵を欺く”為にやった“致し方無い方法”だっただろうディク!?あの恐ろしい“怪力女”に対してそれはっ…!」」

ディク『まぁそうだけどSA（^―^；）でもあの行為をやった時点で…俺…』

フラムエール「「!?ま…まさか…ディク!お前、俺達男性ならではの性的な（ズギャァァァァァァァン!!??!）に成ろうとして…」」

ディクの背中に携えられている武器状態（フラムエール）はディクが喋る度に“段々と何が目覚める”ような気配を不気味に感じて、武器状態でも冷や汗が滲み出るように震えながら恐る恐るディクに“ピー用語が入った台詞音”が鳴って静かに語りかける。

ディク『……いや、ソコまで俺はイッてない…ZE?wwww』

ニ・タ・リ（　∀　）……ィヒ!

フラムエール「「（嘘だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!絶対嘘だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっっっっっっ!!!!）…正直に言え、

ディク。今のお前の“顔”でもう解るぞ？」」

武器状態でも背中しか見えていないディクの“口元を上に吊り上げてゲッゲッと不気味に笑う裏表情”が見えているらしく、フラムエールは強面を出しながらフルッと軽く身震しながらひ●らし台詞を心の中で強く吐き捨てる。

ディク『？別に彼女（シャイナ）を何をしようかと考えてはおらんよ？？ただ俺は「「“俺”に向かって下手な嘘を吐くなディク。いい加減お前の本性を…」」』

シャイナ「なぁぁぁぁぁにコソコソと私に隠れるように話しているんだ？この●シュニーア新宿オッサン＆ａｍｐ；ク●ガリサァァン？？」

ディク＆ａｍｐ；フラムエール『「「！Σ（　°□　°）」」』

ゴゴゴゴゴゴゴ…

突如二人の後ろから“覇王色の覇気”でも出したかのように人を超えた超人＆ａｍｐ；最強兵器がビクッ！と両肩を跳び跳ねるように上げて、キリキリとディクと武器状態（フラムエール）は何が軋む音を立てながら少しずつ身体を後方に振り返るように動かす。

シャイナ「私しゃねぇ…ボソボソと呟く欝みたいな人間を見ていると苛立ってくるんだ。コソコソと隠れて下らねぇ噂話をして更に広げる…迷惑な連中だこと（一┃一＃）」

ディク『…ぐっ！？』

フラムエール「「ぬ…ぉっ！？」」

ドドドドドドドド！！！！

シャイナは二人のボソボソ会話がうざったらしく、丸められた両拳を震えた出せながら前方にいる二人に対して“シャイナ自体が男性体になったような物凄い形相”を二人に全身から出る覇気と共に出す。

ディク『（こ…怖ぇｗｗｗこの時代の女はこんなに恐ろしい存在へとなったのかよ！？ｗｗｗ）い…いや…べ…別に何も…』

フラムエール「「ぁ…あぁ、き…君の思い違いだ…（汗）」」

シャイナ「そぉぉぉぉぉぉぅ？…さっき私に対して“怪力女”やら“♀※☆※◇△”が聞こえたような気がしたけど…？違う？？私の

聞き違い??」

ディク『!き…気のせいだ!シャイナ!!それは君の思い違いだよ!!!』

フラムエール「「そ…そうだぞ?シャイナ??き…君のげ幻聴でも…聞いただけじゃ…ないか??」」

二人は更に不信な表情を出すシャイナの発言を聞いてまたしてもビクッと両肩の骨自体が外れて仕舞うぐらい大きく跳ねて、ディクと武器状態はシャイナに対して“一歩間違えれば即死の恐怖”を受けながら、ガチガチに額から大量の汗を流してあわあわと左手を何度も高速に横へ振る。

シャイナ「…だったらいいけど…。」

ディク『(危っ!!危ねっ!!!危ねぇぇぇ

ディクはシャイナに向けて大量の汗を出しながらも笑みを返して言い、裏側はシャイナに決して弱みと本音を吐かないように魔力でフラムエールしか聞こえないように思念で送り、マイク音声で共鳴相手に響き渡しながら語りかける。

フラムエールもディクの意見に賛成するように黙って頷きながらも、内面は“怪力女(シャイナ)に対しての恐怖感”を覚えながら畏怖を込めて思念で返す。

ディク『（決まりだなフラムエール。これからそうしよう。）話を戻すが、今いる所から突き当たりまで行った後、直ぐ左に曲がれば“仮物品開発試験室”があるんだ。そこに行けば俺達が今受けている使命内容に近い資料が見つかるかもしれない。』

シャイナ「…成る程ね。確かに模擬試験(テスト)内容がぎっしりと詰まった資料部屋なら、一つや二つぐらい裏資料が埋まっている可能性大か。じゃ、さっさと資料やらを掘り出して疑似林檎を産み出したバカを処刑しましょ？このままじゃ、エツィオ可哀想だし…」

シャイナは真剣顔を出しているディク（必死で恐怖の面を出さないようにしているオッサン）を見て少し頷いた後、シャイナの足下に寄り付くように頭を何度も擦りつく子犬(エツィオ)の姿を視線だけで追うように言う。

ディク『そうだな。じゃぁ、さっさと資料を掘り出してとっちめるとしよう。俺にとって“大切な友”を…な？』

ディクはシャイナの左足首に何度も頭から擦り付けている子犬を見た後、踵を返すように再び前方へと振り返ってタッタと床の鉄音を立てながら、後方にいるシャイナと子犬を引き連れて仮物品開発試験室へと走っていった。

…

……

……

―同時刻　とある製造工事内部　入り口付近―

？―ゴボッ！ァアん？何処ゴホゴボッ！！に向かったトイゴヒュッ！ッタら、此処かヨ…阿呆かアイヅグヒュッ！ラ？？―

電気を取り戻しても一部配電が通っていない所があったらしく、暗闇の工場内入り口から“外郭の輪郭しか見えない盛り上がった肉塊”がズルズルと引き摺る音を立てながら入ってきて、途中ゲホゲホと咳するようなデブ特有のガラガラ声を出す。

外郭の輪郭しか見えない肉塊が外郭の何が蠢く度にズシンと鉄床を

凹ませるぐらい鳴らせて、同時に重さで耐えきれなかったのか肉塊の一部からブチャッと何かが床へと落ちる生々しい音を数回立てる。

？―ゴボッ！！ゴボッ！！ダガガ…ソコハ我々ウベッブ！〝ブライン〟様のしべべべッ！…―

下卑めいた声を出しながらニタリと口元を吊り上げるように地下にいる彼らに向けて笑った直後、咳をする肉塊の側面から四肢の一部が異形化したシャープ体型の輪郭が数人通り過ぎる。

？―飯ダ！飯ダ！！飯がコノ下にイイイイイイイイイ！！！！！―

？―アヒャヒャヒャヒャヒャヒャ！！！！！―

肉塊を通り過ぎたシャープ体型の輪郭はケタケタと狂気に高笑いしながら、シャイナ達が降りた地下行きの階段へ勢い良くドーン使用●メロゾンビ状態で一気に入り口から入ってくる数の暴力で駆け込んでいく。

？―ゴボッ！ゴボボッ！！オィ…俺の分ま〝ゴフッフフ！！残せヨ？お前ら〝？俺はアノ…―

―白い衣を着た女の肉を喰らいたいんだヨ？―

第二百四曲　ちょっとこの物語の“重要な用語”がこの回で出てきまフ。後々出てくるかは知らない。

―妖精界　リュミエール　とある製造工場内部Ｂ１Ｆ　仮物品開発試験室―

犬ツィオ「キャンキャン！！」

シャイナ「此処ら辺けぇ？エッチュィオ？？キナ臭い資料は此処を漁れば見つかる？？」

犬ツィオ「キャン！！」

試験室内に入ったシャイナ達は様々な書類が床に散乱したまま長年放置されていたカビ臭い室内で、再び実体化させたフラムエールと共にゴソゴソと隅々から疑似林檎についての手掛かりを掴むために三次元にいる白昼のコソ泥のように探していた。

シャイナは子犬（エッィオ）の吼えで何度も吼えている本棚へと歩み寄り、シャイナは半ば疑いながら左足下で座りながら何度も黒い尻尾を高速に横へ振り得意げの表情を出しているかのような“可愛らしい視線”でシャイナを見つめながら何度も吼える。

犬ツィオ「キャンキャン！！キャン！キャウン！！キャワン！！キュウ！！」

ディク『お？何か凄い形相で吼えているぞ？違うんじゃないか？？』

シャイナ「え？コレじゃない？？んぁ？左辺り？？どっちどっｃ「その棚の左端中段から二番目か三番目辺りが怪しいと言っているぞ？」」なぬ！？」

何度も吼え右手を右往左往に動かしても「違ぇぇぇぇぇぇぇぇＹＯ！（、ε´）」とでも怒鳴っているように吼える子犬（エッィオ）を見てシャイナは困惑していた時、ススッとシャイナの右側から突然実体化したフラムエールが“画面外”から現れて、両腕を組みながらしれっとした態度で子犬の代理通訳を言う。

シャイナ「ちょｗｗｗアンタ子犬（エッィオ）の言葉が解んのかよｗｗｗ！んじゃ…私がこの箱庭牢獄に入ってぐったりとしていた子犬（エッィオ）を谷間に入れた（第百八十九曲参照）…時…！」

シャイナは額から少量の汗を流して背後からディクが興味津々に軽く両腕をガッツポーズするようにワクワクしていた時、両腕を組みながらシャイナに伝えたフラムエールが穏やかな表情であの時の子犬の言葉を…

フラムエール「「あぁ、ちゃんと喋っていたぞ？知りたければ今此処で“あの時の子犬台詞をありのままに訳そうか（※不適切用語入りな意味で）”？」」

シャイナ「！？？！！！い…いや…イイデス。」

ブルッと自然に寒波のような体感温度をそのまま受けたように“全身さぶいぼが出る”ようなぞっとする感覚を受けて、シャイナはそそくさに“ドス黒い笑みを出すフラムエール”に背を向けて伝えられた本棚に向け直して左端中段から二番目か三番目の資料を手に取る。

シャイナ「よいしょっ…と！おっとぉ！？」

ディク『どうしたシャイナ？』

ディクはシャイナが手に取った少し厚い書類を見て直ぐに後ろから両腕を前に伸ばして支えるように駆けつけた後、ポスッ♪とディクが着る黒いレザージャケットの胸皮生地に倒れ掛かったシャイナの背が当たる。どうやら厚い書類を二つ持った事でよろめいてしまったらしい。

ディク『オィオィ、気をつけろよシャイナ。（汗）ｗｗｗ君はまだ間接が繋がったばかりだから…』

シャイナ「アへへ＾σ＾。マジごめマセ！！でも見て見て！！ほらっ！！」

ディク『ん？お！これは…！！』

パサリとディクは背を向けたままシャイナが手にした書類を後ろに突きつけるように両腕が持ってきて、ディクはシャイナの両手に持った二つの分厚い書類を交互に手に取って表紙に書いてあったタイトル名を言う。

ディク『おっ？３４７８　ａｎｎ？ｅｓ“Ｕｎ　ｐｌａｎ　ｄｅ　ｌａ　ｃｏｎｔｉｎｕａｔｉｏｎ　ｄｅ　ｌ'ｈ？ｒｉｔａｇｅ”（３４７８年“遺産継続計画”）にＬｅ　ｍｏｎｄｅ　ｐａｒａｌｌ？ｌｅ　ｅｔ　ｕｎ　ｐｌａｎ　ｄｅ　ｌ'ａｒｍｅ　？　ｄｅｕｘ　ｄｉｍｅｎｓｉｏｎｓ（平行世界と二次元兵器計画）だって？…３４７８年って…。』

シャイナ「えっ！？３４７８年って…今“２０１０年”だよ！？遥か未来の話じゃん！？！！！？あ…いや、これ自体があるとなると。」

フラムエール「「そうだ。この“星”自体が“一度滅んだ”ことになる。言っただろう?俺はこの世界の“滅びる前の前世紀地球に活きた証人”だ。俺のような前世紀の人々が今の世界で資料(データ)＝遺品残っている限り、絶対嘘は無い。俺という“存在”がまだ居る限りな。」」

ディクは手にした分厚い書類の一つである“３４７８年遺産継続計画”の内容が気になって一つの書類はシャイナに持たし返した後、ペラペラと一枚ずつ書類の“重要そうな文章”に向けて視線だけで追うように黙って読む。

ディク『(”Six tr?sors” partir dans le monde je tombe, et aller(滅び行く世界に残す“六つの秘宝”。)Comme pour deux de l'int?rieur, ”un chien de garde” et ”le cr?ateur” vient regarder loin quatre tr?sors de dans le monde apr?s avoir disparu.(その中の二つは“監視者”と“創造者”は、我々人類が滅んだ後の世界で造られし“四つの秘宝”を遠くから見守る存在となる。)これって…)』

シャイナ「(L' essere umano del mondo parallelo ha esistenza due-dimensionale ed il potere coi quali io posso simpatizzare.(平行世界の人間は二次元の存在と共鳴できる力がある。)I senti

mentii improvvisi possono mostrare solamente una piccola quantità?, ma diviene in modo chiaro che il cuore che ? l'un l'altro in parallelo con due dimensioni pu? prendere il potere che ? pi? grande di tempo completamente stato d'accordo（突発的な感情は少量しか発揮できないが、二次元と平行の互いな心が完全に一致した時、より絶大な力を我々が居る三次元で振るう事が出来るという事が判明し、第二検証実験が此処で一時終了する。）解んねぇよｗｗｗ）」

あの時、感情に目覚めた炎翼（フラムエール）から聞かされた“この星自体の過去話”…それが偽りでない事をようやくシャイナとディクは理解して、その書類…否“先代の遺品”の直筆を最後まで黙って（一部イミフ文有りｗｗｗ）読んでいた時…

フラムエール「「？何だ？？」」

ディク『？どうしたんだフラムエール？』

フラムエールはピクンッと何かを感じて顔だけを上に上げた後、左腰に掛けられていた刀に手をかけて左親指で静かに刀の鯉口を切る。

フラムエール「「何かが…来る。それにしても…」」

ディク『…餓えで自我が崩壊した“例の奴ら”か？フラムエール？？』

黙って書類を読んでいたディク（シャイナは途中から頭がパーン状態にｗｗｗ）も感じていたらしく、最後まで読み終えた後顔を上へと向けて手にした書類は魔力で手の平の上に浮かせた後、隅から小さな粒子を溢すとともに小さく凝縮して懐の中へと仕舞いこむ。

シャイナ「…おぐっ！？ギャ…パ…パァァァァァァァァァァァン！俺まだ全然５０％以下理解しきっていない所がああああああ有りましてえええええええｗｗｗ」

ディク『そんなもんは後だ。まずは…』

ディクは頭部から多くの白い蒸気がピューピュー出ている壊れ気味シャイナを余所に、シャイナが手にしていたもう一つの書類を引っこ抜くように上から取って、その書類も魔力で小さく凝縮した後懐に仕舞いこむ。その直後…

フラムエール「「飢えで自我が失おうとも、我々客人に対して熱い歓迎を迎えてくれたようだ。」」

ズガァァァァァァァァァン！！！！と今居る試験室の上部から巨大な肉塊が勢い良く天井の瓦礫と共に落ちてきて、更に閉じられた鉄の扉が扉ごとぶち破られて入り口から多くの人間サイズに成った奇形種獄中妖精が進入してきた。

第二百五曲　肉デブともやし体質の奇形種祭！祭！！

―妖精界　リュミエール　牢獄館（ノワール）　とある製造工場内部　仮物品開発試験室―

？―ゲヒヒッ！！久々の生キゴホッ！ゴホッ！た糧が直ゼ…ゲホゲホ！セセ接ゴ…ガヒッ！此所に〝ギダモン…ガヘッ！…ダ？―

？―ヒヒヒッ！良い顔シテイルぜぇエエエエエエエエエ！！！！ソノ白い腕ニ白イ肌…何れモコレモ……―

美　味　シ　ソ　ウ　…。

シャイナ「おわわっ！？何かぞわっとしたような気を感じたんＤＥＡＴＨけどｗｗｗ」

シャイナ達の目の前に立ち塞がった“天井からコンバンワ！巨大肉壁”＆“突入！隣の（略）奇形種妖精隊”が、全員が全員で下卑めいた声で背を少し猫背のように折り一人一人の戦いやすい体勢を取る。

そんな中、もやし体系奇形種の前にいる“天井からコンバンワ！肉塊”の頭部らしき口だけの部分から喋る度に下卑&キモ咳がウザいぐらい吐かれて、肉塊で見えない下半身から蠢く“蜘蛛のような複数の人間の足”がキモ動く度に、ドスドスと室内の藍色の鉄床を凹ませていく。

？―グググッ…！ソノ白いコ〝…ゲホッ！ゴ…衣ヲギき…ギダ人間ダケデナ〝イ！前ニィル〝ブ…ゴブッブッ！“霊塊”ど朱イ〝衣ヲ〝ギ…ゴヘッ！―

？ー俺はソコの肉ヲ頂くゾ？ブラン？？あそコハ俺の好物なんだから…サ？ー

？ーソッチコソ、俺の好物デアル手と足の全指ヲ一つも傷ツケルンジャネェぞ？一つ傷ガアルダけで、美味さガ違うんだカラよぉ？？ー

咳と痰が混じった卑声と共に吐かれる肉塊の所々から…うっすらと“半分肉厚で埋もれるように浮かぶかつて人だった頃の己自身の顔”と、糧として魔力を継続に得る為に喰らった“同族達の顔”が肉塊の所々に浮かぶ。

シャイナ「うわぁ…なんかバ●オ2の“G5”のような…トラウマラスボスがｗｗｗ」

ディク『…なんらかの理由で“集合体”になったんだ。非常に醜いよ…。』

その肉塊の所々からは喰らった四肢が複数ごちゃ混ぜに生えるようにして出ており、喰らった獄中妖精だけでなく“人だった足・腕が何らかの理由で突然変異”し昆虫のような鋭い鎌や虫のような細く硬くなった奇形部分”も出ていて、それぞれ肉塊の獣のようになった鋭い口々から多くの涎が滝のように出ていた。

ー糧ヲ獲リシ暴食妖ノ魔　カピエンテ　ゴッツォー＆ー則ヲ破リシ高キ知性ノ妖ノ魔　デフロラトーレー

フラムエール「「糧目標はシャイナだけでなく…ディク、“俺達”も含まれているようだ。」」

ディク『そうらしい…な。たくっ（ー｜ー＃）』

目の前にいる肉塊（カピエンテ）と入り口から爆★撃突入してきた彼等（ゴッツォ）と共に不気味に笑っている素顔を見たディクは、引き攣るように嫌味嫌味な表情を出しながら隣にいるフラムエールにわざとらしいからかいを聞きつつお手上げをする仕草を取る。

ディク『しっかし、気色悪い連中だな。こんな奴ら相手に俺の両隠（カストル・ポルックス）

剣と両魔光銃（アグライア）をプレ☆ゼントすんのかよ…勿体無ぇｗｗｗ』

シャイナ「フーン（´、｜ゝ、）…それがアンタが生前時８００年前使っていた武器名か。以前はハイドブレードとして書かれていたけれどなｗｗｗ（今更的な意味で）」

シャイナはカシンとディクの両袖から二の腕ぐらいまで伸びる長い隠し刃が飛び出るのを見て、ようやくディクが使っていた武器名（第百三十曲～）が明かされたことに吹きつつもこっそり武器を構える二人の後ろへ子犬と共に隠れる。

ディク『まぁ、この武器自体は“師匠が何処から調達してきた素材”と俺の血肉が少し混ざった“特殊暗殺魔具”なんでなぁ…まぁそんなことよりｗｗｗ』

フラムエール「「来るぞ！」」

とフラムエールがディクに向けて言った直後、入り口付近に立ち塞がっていたもやし体系の奇形種妖魔が牙と牙を擦り合わせて一斉にドワッと肉塊よりも早く集団リンチするように襲い掛かる。

デフロラトーレＡ「喰わセろ！喰わせロォ！！」

デフロラトーレＢ－カカカカカカカ！！ソノ腕と顔！！綺麗に引き千切っテ美味しくシャブルカラヨォ！？－

ディク『Ｉ・ＹＡ・ＤＡ・ＮＥ！！（、皿´＃）』

ガキンガキンと四肢の一部が変異した横払い攻撃の一撃を軽くディクは飛び出した右両隠剣を顔面に翳すように刀身を持った後、刀身と敵の攻撃が擦りあって激しく火花が飛び散る中ディクは余った左腕をシャイナの左手を握るように掴んでシャイナと共に前へと飛び出す。

シャイナ「だわっ！？」

ディク『すまん！少し宙に浮くぞ！！』

ディクはプロ選手による端幅跳びのように引っ張るシャイナと共に数秒間前へ跳躍しながら右腕を斜め後ろに構えて、ややブーンしながら襲い掛かる敵と敵を“フツー”に素通り”すると同時に…

ディク『Ｕｎｅ　ｂｌａｎｃｈｅ　ｖｉｓｉｏｎ！』

シャイナ「！？これはニー●の黒の幻影！！？？！！？」

ゴァァァァァァァ！！！！

短く飛んでいた間に溜めていた右腕の両隠剣を前へと振り上げるように翳した瞬間、刃を覆っていた白銀の魔力の太刀筋の軌跡から“ディクの形を取った発光体”が分身の術でも使ったかのように複数現れる。

ディク『Ｒｅｔｏｕｒｎｅｚ ？ ｌａ ｐｌａｃｅ ｏ？ ｉｌ ｄｅｖｒａｉｔ ｙ ａｖｏｉｒ ｌ' ａｖｅｃ ｕｎｅ ？ｐ？ｅ ｄｅ ｍａ ｊｕｓｔｉｃｅ（有るべき場所へ帰れ。）』

デフロラトーレＡ－グァァァ！？－

デフロラトーレＢ－ガハッ！？－

ズンッ！！！！

息付く暇も無く発光体達はそれぞれ意思があるかのように任意で本体（デイク）の近くにいる周囲の敵を一閃入れて、尚且つさらに直ぐ近くに居た敵にも一閃…一閃…一閃…一閃ずつ入れて確実に“本体に害なす全ての敵”という存在を“完全に身体もろとも両断”する。

両断された妖魔は血と断末魔さえ吐く暇もなく切り離された下半身と上半身が複数宙に舞う中、身体の隅から細かいダイヤ状の粒子に細かく分裂されていき“肉片もろとも完全消滅”させられた。

デフロラトーレG一死ねェ！人間モドキガァァァァァ！！一

デフロラトーレH一寄こセ！その人間モドキノ魂（にく）ヲ！！一

フラムエール「「黙れ、この出来損ない共が…！」」

犬ツィオ「キャゥン！」

ガガガガガガガガガガガガガ！！！！

一方フラムエールはシャイナの足下にいた子犬（エツィオ）をディクが引っ張ったと同時に左手で掬い上げて、抱えながら攻撃してくるデフロラトーレの波状攻撃を右手に持つ●刀（●iiリモコン）を前に翳して敵の攻撃にあわせて角度を定期的に変えながら連続に防ぐ。

フラムエール「「…確りとしがみ付け魔ノ神よ。少し…」」

フラムエールは連続に敵の攻撃をジャスト★ガード！！しながら視

線だけを左斜め下へと動かして、左手首にしがみ付く子犬に向けて言った直後…

犬ツィオ「キュゥ。」

フラムエール「「すまんな。」」

子犬は素直に頷くように軽く下へと下げてコソコソと左腕を這いながら上へと昇って、後ろ首に身体ごと引っ掛けるように身構えたのをフラムエールは視線だけでふと笑う表情を出した後…

フラムエール「「荒ぶる…まで…だ！！」」

デフロラトーレ「Ｓ―ウォォォォォォォォォォォ！？？！？！？―

突如フラムエールを波状攻撃していた連中が訳もわからず宙に上がっていて、フラムエールが持つ●刀（●.i.iリモコン）に斬られた覚えも無く理解できないまま為すすべも無く数秒間浮かんでいた時…

フラムエール「「イーグルの型！」」

デフロラトーレ「Ｓ―！？？！？！？！？―

ズバババババババババババババババ！！！！

宙に浮かんでいた彼等の目の前に居合い抜きするように構えたフラムエールの姿が見えた直後、宙に浮かんでいた彼らは前方から放たれてくる高速の複数の月の様な赤い光で、細かな切断シーンが見える暇も無く全身があっという間に“血肉版粉雪サイズにバラバラに解体されていった”。

第二百六曲　真面目に戦う侍サァァンと一部〝アーな戦闘描写〟をする鬼畜フレンズ

―妖精界　リュミエール　牢獄館（ノワール）　とある製造工場内部　仮物品開発試験室―

フラムエール「「黙って消えろ…！」」

フラムエールの●刀（●ｉｉリモコン）のイーグル型で断末魔さえ上げる暇も無くバラバラに細切れにされた最上位妖魔（デフロラトーレ）の肉片が雨のように落ちる中、フラムエールは落下中に伸ばしたの右手と両足から地にかっこ良く着地すると同時に…

フラムエール「「…詰まらぬモノを斬ってしまった。（￣―￣）ｐ」」

シャイナ「ちょっ…ｗｗｗ」

バラバラになった最上位妖魔の肉片が宙に舞う中手にする●刀（●ｉｉリモコン）の刀身に付いた血を振り払った後●刀（●ｉｉリモコン）を右手の平で回転させながら鞘の中に刀を仕舞った時、宙に舞っていた肉片達はフラムエールから別つように避けて地に落ちて

いき、ビチャビチャと肉片に付着していた妖魔の赤紫色の血が藍色の鉄床を赤く染め上げていった。

ディク『オラッ！邪魔だ！！さっさと死ね！！！！クソ★※□▲※%カス！！！ｏ（、へ-）〇』

デフロラトーレⅠ―ギャァァッ！！―

ザッザッザッ！！！！

半ばキレ状態のディクは引っ張っていたシャイナを自然に自分の胸元へ引き寄せて、左腕で抱き抱えながら次々と襲い掛かるデフロラトーレ達の攻撃を軽く身体を軽くくの字に折って回避した後…

デフロラトーレM―えっ？―

デフロラトーレN―何だコレハ…一ｔ…―

ドンッ！！

攻撃を避けられ反撃の一撃を喰った妖魔達は自身の腹部に横一閃の光が走って不思議に思った瞬間、複数の妖魔達の胴体がディクと通

り過ぎた数秒後に身体が綺麗に二つに別れて、クルクルと切断された上半身が横回転しながら宙へ撥ね飛ばされ残りの下半身は両膝を折って冷たい床へと力無く崩れ落ちた。

フラムエール「「逝ね…妖ノ魔が！！」」

スパッ！ザクッ！！ザシュッ！！！ドシュッ！！！！

シャイナ「ｏｈ…普段は顰めっ面なのに戦闘となると、何てウルトラセクシーヒーロー…！」

ディクが自分を抱き抱えながらまだ襲い掛かってくる妖魔達に向けて頭部や顔面に蹴りを入れて豪快に蹴り、両隠剣を一時袖口へと閉まって素手で容赦無く身体モロとも粉々になるまでぶっ飛ばしている最中、シャイナはディクの相棒（フラムエール）の刀を瞬時に出して振るい華麗に鞘の中へと収める目に見えない居合い技と感情に目覚める前と違う本来彼の戦いの表情を見て、思わず息を呑んでしまうほど口が開いたまま惚けるように見惚れてしまう。

フラムエール「「甘い…っ！」」

ズバンとフラムエールは高速居合いしながら次々と妖魔の首を撥ね飛ばし、更に背後から襲い掛かる妖魔を見向きもせず手にする●刀（●ｉｉリモコン）を左腰に掠るように背後にいた奇襲妖魔を、確

実に眉間から頭部裏まで突き破って完全に妖魔の背後奇襲攻撃を完封する。

ディク『カッコいいなぁ～フラムエールは！俺のような“クッセェ加齢臭でも漂ってきそうな髭生えオッサン”が、外見２０代の若さ溢れる西洋ガンマン侍のイケメソ戦いップリに負けるよ」（、８、）『』

シャイナ「いやいやｗｗｗアンタも色々と“違う意味な魅惑ある表面”が出ているからｗｗｗ」

ドベッ！！！！

とディクが果敢に戦うイケ★麺☆フェイスなフラムエールを見て羨う声を上げる中、胸元に抱き抱え…否逆にディクの身体に巻き付けるようにしてしがみついているシャイナはディクの台詞で苦笑しながらも…

デフロラトーレＪ―ギャァ！！ギィアアアアアア！！！！！！―

ギリギリギリギリ

―経験豊富なオジサマが“限定ドＳ丸出し黒笑顔”を見て、粗方自

分だけ狙ってきた妖魔を“全員切断死”させて、今拘束している最後らしき妖魔はいつの間にかディクの背中から出ていた巨大な腕となった翼が妖魔の頭部を鷲掴みするように持ち上げて、尚且つ鳩尾に向けて両隠剣を深く突き刺し誰得★屈辱行為をしていた。―

ディク『ＴＨＥ☆簿ぉぉぉぉぉぉぉぉ茄子ＴＩＭＥ！！！！ひたすら□□□□□□□□□□□□□□□連打ぁ！連打ぁぁぁぁぁ！！』

デフロラトーレＪ―ギャアアアアア！！！！！―

鳩尾を丸ごと両隠剣に突き刺され拘束状態になったデフロラトーレは頭部を強く締め付けられ圧迫されている痛みと、ドスドスと突き刺した鳩尾に何度も“お注射で御座る！”風に何度も両隠剣の刀身を小腸辺りまで注入して突き刺した穴から白い何かがドピピと床に滴り落とし、思う存分ディクはやりたい放題に一部Ｒ１５禁行為をヤらかした後…

ディク『イクッ！そうだっ！！そのままイ来んだよっ！！』

シャイナ「ぶっｗｗｗ」

妖魔の鳩尾に突き刺していたディクは口から白い何かを涎のように垂らしてぐったりとした白眼形相を見た後、ドＳモード全★快のデ

ィクは一気に頭部に向けて縦一直線に振りかざし、屈辱された妖魔は綺麗に身体ごと真っ二つにされていった。

…

……

……

カピエンテゴッツオ（略して肉デブ）―グヒッグヒッ！ヤ〝る〟なぁ人間ノレ〝ゴホゴホ霊塊ド人間モ〝ド…ガヒッ！モドキガァ…―

戦いが始まって数分も経たない内に肉塊と共に突入したデフロラトーレ達は、原型さえ留めていないぐらいバラバラに解体されてディク達に足蹴されていて、室内全体が新鮮な血と糞の臭いがベッタリと付着して試験室内が惨劇状態になっていた。

ディク『おっし、後はコイツだけだ。フラムエール、一気に勝負を着けるぞ。」」

あと目の前に立ち塞がるのはカピエンテゴッツオ…肉デブだけであり、肉デブだけは他の積極的だったデフロラトーレ達と違って“一切戦闘に参加していない不動状態”だったため、ディクは鼻を軽く鳴らし左手で鼻を拭いながら余裕めいた表情を出す。

フラムエール「「…そうだな。今の所奴には攻撃的意思が見えない。共鳴（リンク）して早々に片を着けよう。」」

シャイナ「うーん、味気ない連中だったけど、まぁこれは次回中ボス戦闘に対しての配慮だったんでしょ？次が楽しみだわぃｗｗｗ」

犬ツィオ「キャンッ♪」

フラムエールも強面ながら余裕溢れた言動を吐いた後ディクは『だがそれでも、決して最後までお互い油断しないようにしような。』と得意気な表情を出しながら言い、フラムエールは顔だけディクに向けて彼の表情を見て少し軽く口元を吊り上げて笑みを出した後…

フラムエール「「当たり前だ。…行くぞ。」」

肉デブ―ゴフッゴフッ！！ホォ…ソレが…ゲフッゲフッ！！！！―

ゴウッと三人と一匹の前に立ち塞がっていた肉デブの視界に赤黒い螺旋のような旋風が突如発生して、赤黒い稲妻が所々迸りながら三人と一匹を完全に見えなく成る程覆い尽くす。

室内を回っていた赤黒い旋風が次第に弱まるように回転数が少なくなって、バシュッと弾けるように赤黒い旋風が完全に晴れた後…

フラムエール【よしっ、共鳴（リンク）成功！さっ…行くか。】

赤黒い旋風が止んだ場所にディク（シャイナと子犬も含めて）と共鳴（リンク）したフラムエールが立っていて、少し下に下がった頭部のカウボーイハットを左手人差し指で軽く上へと上げ直し、立ち塞がる肉デブに向けて不適な笑みを出しながら左腰にある●刀（●ｉｉリモコン）を鞘から引き抜いて、右斜め下に向けて刀身を下ろしキラッと“カメラ目線”に向けて刀身の光を一瞬浴びさせた。

第二百七曲　こっから次第に“キャラ崩壊していく炎翼サァァン”を見よｗｗｗ

―妖精界　リュミエール　牢獄館（ノワール）　とある製造工場内部　仮物品開発試験室―

肉デブ―グヒグヒグヒ！何だナンダ？その力は？？人間モドキが“霊魂と人間と畜生”を“喰らっタァ”？ヒョヒョヒョヒョヒョ！！！！美味かったカヨォ？？お前ノ中に消化さレテいる“霊魂と人間と畜生”ノ味わぁ？？―

立ち塞がった肉デブ（カピエンテ　ゴッツォ）は霊魂（ディク）が引き連れていた模擬体が突如合体した姿を見て、所々大きな肉圧の身体から開かれていた獣の口からゲッ！ゲッ！ゲッ！！と人を愚弄・冷笑する声を出しながら、自身よりも小さく足下にいる赤い外人侍を視点だけで下ろしているかのように見下す。

フラムエール【共鳴（リンク）だ馬鹿者。俺は断じて“モドキ”では無い。】

フラムエールは自身よりも遥かに大きい壁のような存在に向けて、胸を張りながら両腕を両足をピシャリと綺麗に身構えるようにして軽く落とし、両眉をゆっくりと斜め上へと上げながら蒼い両眼を細くし立ち塞ぐ肉壁に向けて“殺気”を放つ。

肉デブ一ア〝ァァン?だったら何て呼べバ良いんだヨ??人間モ〝…ゴッホゴッホ!!“モドキ”が…ククク!悪魔でもオマエはニ〝ッ!…ゴホホホ!!“人間”トシテ言い張ッテイルつもりカ??一

両端から生えていたタコの足のような触手が足下の床に向けて振り下ろされ、ズシンと鉄の床が陥没するような音を生々しく立てながら周囲の先程の戦闘で斜めに崩れていた本棚が触手の震動で落ち、本棚に仕舞っていた多くの資料と本がバサバサと音を立てて赤く染まった床へと落ちていく。

フラムエール【…そうだ。俺は…“人”だ。】

“苛立っている”…

いや…そんなモノじゃない。もっと別な意味での…

床に溜まっていたディクとフラムエールが狩った妖魔の赤紫色の血が、本棚から落ちたやや灰色に掛かった資料と本が段々と染み込むように浸透して、赤紫色になった資料と本は血溜まりの中に浮かぶ細切れになった妖魔の肉片と同じになる。

“俺”の…“私”の…

“存在”が変わってしまったモノに…

フラムエールは目の前に立ち塞がっている肉デブの軽蔑する態度を見て、細めていた両眼をそらすようにして顔を横に動かし一瞬だけ…

―フラムエールの顔側面に“前世紀で改造される前の普通の人間だった彼等”が、前世紀の人々に告げられるモノに絶望し“希望”というものすら失った“彼等の愁哀の表情”が露になっていた。―

それでもフラムエールは立ち塞がる肉壁などに決して苦し紛れの自棄な怒りの声を一切上げなかった。フラムエールは再度逸らしていた顔を前に向けなおし、立ち塞がる肉壁に対して“自身の正体を感じ取っている敵の鋭さ”に呆れたような笑みを軽く出しながら溜め息を付く。

肉デブ―ァァン!?何笑ってイヤガル?オマエの背後ニ憑く“青白い人間女”ハ?ソノ左腰ニアル“悪魔・妖魔ヲ完全ニ滅スル魔刀”トオマエ自身に流レる“人ナラヌ力ヲ持った魔気”ハ?そんなモンを持ったオマエが“何処が人間に見えル”!?―

ディク『フラムエール…。』

フラムエール【（大丈夫だ。）ふん…別に何も笑ってはおらんよ？ただお前のような肉相手を見て、ついつい俺の持つ…】

肉デブ「あ゛？」

立ち塞がる肉デブを見てフラムエールは数秒間脳裏に映る映像を見て、自分が持つ●刀（●iiリモコン）の刀身を立ち塞がる肉にブスッ♪と入れた瞬間を見て思わず…

フラムエール【It was an unbelievable spectacle.…A similar thing comes out again and it tears it many times when your contents are torn in the right in two.（´∀`）】

シャイナ『おぃwwwまた翻訳不可になっ？www仕事しろぉwww』

フラムエールが突然口に向けて右手で覆いながらクスクスと“一人思い出し笑い”しており、何度も視点だけを上に上げて脳裏に映る“仮想妄想”と“現実”を比較しながら更に続けてイン★グリッシャーを高速字幕のように続けて吐く。

フラムエール【And … The more it cuts it, the more gradually you have become small. And, there is a heart that you have from the inside as soon as having cut you who became small. The heart must open to the light of the heaven and momentarily of the application …】

肉デブ一ガッハッハッハッハ！！！！ソウカイソウカイ！！！！だったらヨォ…一

ズダァァァァァァン！！！！とフラムエールが面白おかしく台詞を最後まで吐くのを遮るように、フラムエールの頭部に向けて思いっきり外部の被われていた肉が大きな腕となって、高速に言う台詞を言い終わる前に叩き潰す。

肉デブ一一人デ勝手にイミフ言語ヲはきナがら思い出シ笑いヲスルンじゃネェ！！この戦闘用模擬t…！？？！？！一

活きた物体を叩き潰した感覚が無くてただ振り下ろした時の衝撃が自身の痛みを感じただけで、肉デブは床に振り下ろした腕を上げる

とそこには“陥没させヒビを周囲に作ったクレーター”だけ映っており、姿は何処にと肉厚の一部分から目玉が一つ付いたミミズ柄の触手を出して右往左往に動かして、ふと視線を上に上げた途端…

フラムエール【はっはっは！すまない失敬した。しかしどうも…】

肉デブ一ナッ！？！？？！？い…何時！？？？！？！ー

デブ自身が突撃してきた割れた上部の穴隅で左足を右足で引っ掛けながら楽座りしているフラムエールが居て、余裕笑みでも浮かべるように歯並びの良い歯を綺麗に“カメラ目線”に向けてワザとらしく見せながら逆に下層にいる肉壁に向けて見下し返す。

フラムエール【Ｄｏ ｔｈｏｕｇｈ ｔｈｅ ｍｅｒｃｙ ｍｉｓｓｅｄ ｉｎ ｔｈｉｓ ｃｏｎｄｕｃｔ ｏｎｅｓｅｌｆ ｎｏｗ ｉｓ ｇｉｖｅｎ ａｎｄ ｇｉｖｅｎ ｂｅｃａｕｓｅ Ｉ ｗｉｎ ａｎｙｗａｙ ｅｖｅｎ ｉｆ ｉｔ ａｃｔｕａｌｌｙ ｆｉｇｈｔｓ ｗｉｔｈ ｙｏｕ？（どうせ戦っても確実に俺が勝つからさぁ、責めてハンデぐらいは付けてやってもいいぜ？）】

肉デブ一…よし今決メタ。オマエの中ニィる“霊魂と人間と畜生”ごトッ…喰 い 殺 シ テ や ル ！！！！ー

ドカカカカカカカカカカカカカカ！！！！

肉デブの四肢だった部分から三つ編みの肉触手（タ●リ神のようなモノ）がドワッと多く出て、フラムエールは瞬時に“スタイリッシュ座り”から回避行動（ダイブバックロール）を数回して、伸ばされた触手全部が無差別に今居る室内・フラムエールがいる上層の廊下の装甲を貫通する。

フラムエールは回避行動を取りながらクスッと口下に右手を添えて“まだ一人ＤＥ思い出し笑い”しつつ、下層部分からどんどん装甲ごと突き破っていく肉デブの串刺し攻撃を背後に“閲覧者用カメラ”に向けて…

フラムエール【次はエリア移動しながら戦闘するぞ＾＾ｖお楽しみに！！】

と余裕でピースサインしながらバック転しつつ宙で身体を“重力の法則を一切無視した宇宙空間のような動き”を取りながら、身体を前向きに変えて背後から串刺ししていく触手をバックに一気に両足で高速に駆け抜けていった。

第二百八曲　汚ェ汚物には彼処で一旦洗浄してから殺りましょう＾ρ＾

―妖精界　リュミエール　牢獄館（ノワール）　とある製造工場内部　１Ｆ　通路―

フラムエール【さて…戦い易い場所でも探すか。】

カンカンカンと足下の鉄床を走って幾たびに高速に鳴って、フラムエールは走りながら先程生成したこの工場内の圧縮した地図を右手の平から出して、バフッと左手で地図の端を掴んだ後大きく広げる。

フラムエール【え～っと…足場は一点しかないが、中央の空けられた広い空間が空中戦に適している“螺旋状階段（めいんだくと）”も良いが、広さと足場に関して“廃棄物処理場”も良さそうだ。】

シャイナ『オィオィｗｗｗク●ガリサァァンｗｗｗ“こんな状況”で楽々と“妖精界版る●ぶ”を走りながら読むなよｗｗｗ』

犬ツィオ『キュゥ。』

シャイナいわくのんびりとフラムエールが“魔地図（る●ぶ）”を現代に生きるオヤジィ－ｓのような“バフッ★と朝来た朝刊新聞を隣いる人の迷惑すらお構い無しで横に広げて見て”いて、フラムエールは中にいるシャイナに和気藹々に戦い易い場所を選んで苦笑いしている最中…

ドドドドドドドドドッ！！！！

地図を開きながら読んでいるフラムエールの背後から次々と下層部分・今いる一階の壁から、先程立ち塞がっていた下層の試験室にいる肉デブの触手が次々と突き破るように出てきて、触手の一本一本がドスドスと処刑槍のように鉄床に穴を空けてフラムエールの背後から追い掛けてくる。

フラムエール【（螺旋状か…廃棄処理場か…此所は、）決めた。やっぱ…】

フラムエールは更に脚部に力を入れグッとより深く脚を低くし、身を斜め前に屈めて突きだすようにして段々と走る速度を自身の周りの背景が全然見えなくなるまでうｐしていく。その直後…

フラムエール【…ターボだ。フルスロットル全快で逝く。】

シャイナ『だひゃっ！？』

犬ツィオ「キュッッ！」

ドンッ！！！！と閲覧者カメラ視点で遥か前方にいたフラムエールが“コンマ数秒で一瞬の内に目の前に現れて”、ワ●ピースの六式移動や剃よりも圧倒的に速すぎる駿足で今いる廊下を駆け抜ける。

長かった廊下を突き当たりまで行った後左足を軸にしドリフトするように左に曲がって、チカチカと点滅する上部の黄緑色のランプの下に赤錆がこびり付いた古い扉がドアノブに鎖が掛けられているほど無理矢理施錠されていた。

フラムエール【邪魔だ。】

フラムエールは直ぐに閉められていた扉に向けて丸めた右拳を思いっきり殴り付け、ガゴッ！と殴られた扉部分に拳の痕がハッキリと窪むように残り、鎖で施錠されていたのに関わらず“殴りだけで完全オープンする”。

肉デブ―待てェェェやァ！！！！！！コノ気色悪ィ戦闘兵器メ！！！！―

ゴォッ！！！！！！

フラムエールは直ぐに背後から迫ってくる複数の触手から本体（肉デブ）の声が触手の至る所から発せられて、バラバラに鉄床・壁を突いていた触手が一つになり大きな腕となって強引に扉を殴り開けたフラムエールに向けて捕らえるように肉デブの手の平を広げる。

肉デブ―喰い殺ス！殺す！コロス！！貴様ヲ鷲掴みシタアと、お前ノ身体の隅々マデ喰らい殺シテヤル！！！！！―

フラムエール【殺ってみろ…？先ず俺を殺すでなくて、“きちんとその手で俺を捕まえられるか”の話だがな。】

フラムエールは伸びてくる肉デブの触手腕に向けてからかうように挑発した後、殴り開けた時に“内部ごと酷くひしゃげたドアノブ”に手を掛けて、思いっきりバッッッッッッッッタァッン！！！！と半壊した鉄扉を大きな音が出るぐらい手早く払いのける仕草で騒々しく閉める。

ドシャリ…

半壊した扉を思いっきり閉めた直後何かが床に落ちる音を聞いて、フラムエールはあっ。とおとぼけたような表情で扉前に落ちた物体を視線だけで見る。

シャイナ『オゥ…何か落ちとるｗｗｗ新鮮に跳ねとるｗｗｗ魚だっ！ＳＡＫＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＮＡ☆』

犬ツィオ『キャンキャン！』

身体（なか）にいたシャイナと足下にいる子犬は、閉じられた扉の真下でフラムエールに閉じられた際に広げていた肉デブの触手親指部分が落ちていて、ビチビチと採られたての新鮮な魚がのたうち回るように暴れまわっていた。

きっとフラムエールが扉を閉じた時に伸ばしていた肉デブの触手腕の一部が、運悪く扉の風圧とフラムエールの力に捲き込まれて切断されてしまったのだろう。

肉デブ―コノ糞餓鬼メェェェェェェェェェ！！！！！！！感情ヲ持った兵器ナドニこの…ッ！！！！―

ドン！ドン！！と思いっきり再度閉じた扉に大きな音が鳴って音が鳴った部分から徐々に凹んでいく痕を浮かべながら、段々と閉じられた扉の先にいる触手達（肉デブの腕）の力でひしゃげていく。

指一本（肉デブらしい太い肉厚のお陰様なのか）切断されていたのに関わらず、肉デブは痛恨の声を上げず憎たらしいような視線でも出しているように、今抉じ開けている扉の先に居るフラムエールに

向けて何度も腕を殴り付ける。

ディク『キレてきているぞ、フラムエール。で？一体お前は何処に向かっているんだ？』

フラムエール【見れば解るさ。】

フラムエールは慌てずいまだに扉を殴り壊そうとしている触手（肉デブ）に踵を返した後、錆まみれになった階段を高速に掛け上がって上りきった先に開けられていた扉に向けて身体を投げ出すように飛び込んだ直後…

肉デブ―ガァァッ！！チョコまかちょこまカと！！！！―

フラムエール【フッ（「ー＋ー」）】

ドンッとフラムエールが掛け上っていた階段下から開けられていた扉に、一つにまとめていた触手を再度細かく展開して触手達が扉ごと吹き飛ばすように扇状に広がる。無理矢理閉じていた扉がぶち破られた証拠だ。

フラムエールはぶち破った触手達に振り返らず前を向いたまま、軽く口元を上に吊り上げて不適に笑いながらも配管が多く設置された

廊下を高速に駆け抜ける。

ディク『んっ？ここは2階？？…螺旋状の…メインダクトは1階だもんでここに繋がる通路は無いし…廃棄物処理場は地下2階だぞ？』

とフラムエールとリンクしているのに関わらず身体の中でフラムエールが生成したモノと同じ“魔地図（る●ぶ）”を両手で広げ首を傾きつつ少し困惑するような表情を出しながら、フラムエールの視界から映る超高速廊下世界をワープ感覚で何度も地ら見する内に…

フラムエール【あんな巨体だ。息も身も臭い輩に一度“洗浄”させる器具を使うべきだ。】

ピタッと走り出していた足に踏ん張りを入れて、摩擦で滑りもせずに綺麗に立ち止まる。

ディク『おっ！これは！！』

シャイナ『えっ！？…こ…これって……ｗｗｗ』

ギィッと針金で出来た扉にフラムエールは手を掛けて軋む音を立てながら中に入った途端、身体（なか）にいるシャイナ達は一部驚く顔ととある某ゲーで見たことがある場所を思わず心の中で吹いた。

シャイナ『…ば…バ●オ５のリーチマン擬きと対決する際の“上手に焼けましたぁ～♪”部屋かっ！ｗｗｗ』

第二百九曲　炎翼サァァン式…提供太陽による“肉デブ火葬儀”で上手に焼けました

―妖精界　リュミエール　牢獄館（ノワール）　とある製造工場内部　２Ｆ　汚物焼却炉室―

肉デブ―何処に逃ゲルと思いキヤ…塵ヲ焼却スる狭ぇ部屋ジャネェカ！！！！！俺ノ期待ヲ裏切りオッテ！！！！！―

ガシャンと室内の入り口フェンスが無理矢理抉じ開けるように触手が数本入ってきて、室内にいるフラムエールに蛇のような顔になった触手の先端を奇声も交えて牙が見える口をフラムエールの表面に向けて威嚇するように突き付ける。

抉じ開けた後方通路からズルズルと引き摺る音を立てながら地下一階の試験室にいた厚い本体ごと、抉じ開けた触手の力でヌルンとした動作で狭い入り口へ顔面らしき部分から無理矢理押し付けるようにした直後…

フラムエール【（動きは取り込んだモノを使わない限り鈍足だが、あの外見といいながらも狭い場所に入れるぐらいの柔軟さはあるのか。少し…手間が掛かるな。）】

グチュチュチュチュ…

台詞通り外見そのものが肉塊だというのに柔軟さが意外にあって、中身の骨…否“身体構成を臨機応変に改変出来る力”があるらしく、肉の構成を柔液（スライム）に代えてヌメヌメとした動作で狭い入り口から“ＴＨＥ★驚きのスライム式侵入術”を使う肉デブを見る。

肉デブ―クッハッハハ！！凄いダロウ？“戦闘用模擬体１４５６０２４５７９３”号！！！！！俺はお前ノヨウナ“人型モドキ”と違ッタ力ヲがアるノダ！！！！！―

フラムエール【…姿はアレだが、お前…俺と同じ“前世に生きた嘗ての人間”だったのか”。】

グチャグチャと肉を磨り潰すような音を立てながら改変した構成を元に戻すようにして再構成をし、モコモコと肉が盛り上がるようにして徐々に膨らみ厚みを増しながら試験室内で会った時と同じ巨体な体格に戻る。

フラムエールは自身の正体を知っていた肉デブの台詞を聞いて腰と両肩を少し落とし、口を閉じたまま溜め息を付いて身構えながら何時でも抜刀できるように、左腰に掛けられている●刀（●ｉｉリモコン）の柄を右手で握る。

肉デブ【人間?カカッ!違ぅンだナァ～?俺ハ元々人間デスラ無いシ、動物でも機械デモ無かったンだナァ～♪視界に捉エた者ヲ見て喰い、ヒタスラ喰ウコトダけ考えテイタ俺は、いツノ間にかコウナッタ訳でナァ?生前ダッた元の俺なド、忘れチマッタぜェェェェェェェェェェェェ!!!!!】

それを合図に肉厚の所々から触手が何千本も海胆のように勢い良く飛び出して、触手達は鉄製部分を次々と貫いて別の場所から触手がフラムエールの全身に向けて不可解に飛び出して襲い掛かる。

フラムエール【“喰らう”という本能に精神まで侵されたか。…哀れだな。】

フラムエールは左腰に掛けられていた刀を瞬時に抜いて、至る所から鉄壁・床を突き破ってくる肉デブの不規則な触手攻撃を全て●刀（●iiリモコン）で自身を回転させながら叩き斬る。（振ったときに生じる剣圧も含めて）

室内アナウンス《Pr?venir…Pr?venir…（警告…警告…）Il a ?t? envahi une cr?ature de la pollution de pr?venir le niveau 6（レベル6の汚染生物が侵入されました。）Je d?fensif par l'op?ration et fd?veloppe d'urgence un murerme tout ? fait une clef jusq

u'？ un niveau de l'avertissement devient s？r．（緊急作動により防壁シャッターを展開し、警告レベルが安全レベルになるまで全て鍵をロックします。）≫

ゴゴゴゴゴとフラムエールと肉デブが入ってきた入り口の上部から新しい厚い壁が重々しい音と共に降りてきて、鉄の扉が床に着いたと同時に扉のノブ部分の小さな四角い機器から赤い光が点灯する。どうやら密室に閉じ込められ退路を塞がれたようだ。

ディク『閉じ込められたようだな。』

フラムエール【何…今更退くつもりなど無い。このデカブツを確りと“俺”が殺らないとな。】

そんな状況でもフラムエールは決して後退という思考はせず次々と突き破ってくる触手を交互に刀を持つ右腕で斬り、対処仕切れなかった触手は左手に持つ短銃（リボルバー）で先端を撃ち抜きながら前へと走り出す。

フラムエール【あんな奴が俺と同様に作られた“人を護るの為の兵器”とは見えない！此処で…この場所で奴の身体ごと“刀を使わず”消し飛ばしてやる！】

フラムエールは走りながら全ての触手を斬り伏せ・銃で穿った後、

交互に手にする武器を左腰の刀の鞘・右大脚部にあるホルスターの中へ回転させながら華麗に仕舞って、目の前に聳え立つ肉デブに向けて軽く飛翔し肉厚の一部を右足で数秒間踏んづけた後…

フラムエール【…借りるぞ、デカブツ。】

肉デブ―ッッッッ！てメェ！！俺を踏み台ニず…ゲホッ！！―

ブニュッ♪と肉デブの肉を踏んだ時に可愛らしいデフォ音が鳴って、フラムエールよりお大きい肉デブの身体を軽々とフラムエールは赤黒いコートの二つの裾を大きく靡かせながら上へ飛翔する。

シャイナ『おまっｗｗｗそ…それって…“可燃性ガスボンベ”じゃん！』

フラムエール【んっ！】

肉デブを踏み台にして向こう側に移ったフラムエールは両足で地上に降りた後、少し走り出して壁に掛けられていた“細くて縦長の中心に円型の白いラベルが張った赤い物体”を手に取り、背後に居る踏み台にした肉デブに見られないように無理矢理バルブ部分を両手で掴んでバキンと力で引っこ抜く。

肉デブ―テメェェェ!!!!コノ俺を足蹴にしタ挙句、“俺自身に一太刀スラ入れナい”まま素通りシヤガッテ!!!!コノ野朗ォォォォ!!!!!―

肉デブは自身を向こう側に行く為に足蹴にされ踏み台されたことと、何時でも斬れるチャンスがあったのにそれを一切しなかったフラムエールの余裕（勝手な思い込み）な態度を見て激怒し、振り返りながら背を向けているフラムエールに向けて触手を数本放った時…

フラムエール【丁度良いタイミングだ。貴様にやろう。】

ポイッ♪

肉デブ―ア〝ァァ〝ァンッ!?何だコレハ…ンッ?ぼ…ゴホッ!ボンベ?―

グワシッと肉デブの視界に映ったフラムエールが投げつけてきた回転する赤い物を、数本伸ばした触手で鷲掴みするように受け止めて、肉デブは不可解な表情でも出しているかのように掴んだ赤いボンベをマジマジと眺めるように引き寄せた途端…

フラムエール【貴様には俺のような固定された人の構造に無い伸縮性・肉体の体質を臨機応変に変える能力はあるが、この星（セカイ）にある自然と科学から成り立つ存在に対してはどうだ?】

肉デブ―ア？何を言っテヤガ…―

ドアァァァァァァァン！！！！

突然肉デブの掴み取ったボンベが眩しいぐらいに閃光を部屋全体まで数秒放った直後、鼓膜が破れてしまうぐらいに大きな爆発音が肉デブの台詞を遮る位に鳴り響いて、オレンジと赤が混ざった噴煙が天井に伸びる中ビシャと潰れた肉デブの破片が至る所に付着する。

どうやらフラムエールが投げ付けた可燃性のガスボンベを肉デブを掴み取った後、瞬時にガスボンベに向けてホルスターから銃をワンアクションで取り出して、腰に銃を添えたままガスボンベに向けてツイストドローを放ち正確にボンベに向けて撃ち抜いたようだった。

シャイナ『す…凄ぇ…。。（Д）ピー●メーカーの●ープのような瞬時神ＡＩＭ撃ち…ｗｗｗ』

フラムエール【コイツは…いや俺が…俺の記憶が消えた後に残った自我というプログラムの中に“俺が生み出され間もない時のまだ俺自身の自我があった記憶の中”に…いや、そんな小難しいことなど止めるか。俺は…“人”なのだから。】

フラムエールはホルスターから抜いた銃を再度中に仕舞った後、噴煙を上げジュウゥと肉が焦げ臭く焼ける匂いを少し吸いながらも燃えている肉デブに向けて走り出す。

肉デブ―ア〝ヅッ〝！！！！！熱ぃ〝！！！！！焼げル〝ゥ〝ヴぅゥぅゥう〝！！！！！―

フラムエール【あぁ、そうだ。言い忘れたが…俺は人でありながらにして人ざらぬ力を持っている。ディク、シャイナ、既にご存知だが…】

可燃性のガスボンベで全身燃えていても肉デブはしぶとく生きており、あたふたと焼けている箇所に向けて触手を何度も叩きながら消していたが、近くまでに歩み寄らされたフラムエールの存在に気づかず、必死に身に点いた炎をまだ叩き消そうとしていた。この結果…

フラムエール【俺は“炎属性”だ。しかも太陽系にある最強の惑星と同じ“太陽”そのものだ。】

肉デブ―ギャ！…ァア〝アア！！！！！！―

…ジュッ

フラムエールが半分炎上している肉デブの身体の胸元辺りに開いた両手の平を触れた瞬間、燃えている肉デブの身体が一瞬の内に赤白い火柱が立ち上って、断末魔すら最後まで吐くことすら出来ないまま“身体ごと焼失”した。

第二百十曲　The man is called “Solar deity”

―妖精界　リュミエール　牢獄館（ノワール）　とある製造工場内部　２Ｆ　汚物焼却炉室―

アナウンス《Ｐｒ?ｖｅｎｉｒ…Ｐｒ?ｖｅｎｉｒ…（警告…警告…）ザザッ…Ｕｎ　ａｖｅｒｔｉｓｓｅｍｅｎｔ　ａｎｏｒｍａｌ　ｄａｎｓ　ｔｅｍｐ?ｒａｔｕｒｅ　ｄ'ｉｎｔ?ｒｉｅｕｒ…（室内温度に異常値発生…を呼びかけます。）》

肉デブ（肉片状態）―ニギ…ギギギ…ッ！ア〝…アノ〝…や〝ロゥ！！！！よ〝…よぐモ〝…ッ！！！！―

1882

ビィービィーと警報音が鳴り響き部屋全体が天井にあるランプで何度も赤くなる最中、唯一焼け…否ガスボンベの爆発で身体の肉片が吹き飛んで壁に付着した一部の肉片（スライム）が部屋から出て行く前に前世紀最後の二次元兵器（フラムエール）が、右手の平から赤い光の物体を床に落とす。

フラムエール【…そう。此処にはも……】

ディク『そ…だ…フラ……ル。俺達に……』

シャイナ『プｗｗｗこの…ご……“焼き…”にすんのか…ｗｗｗだなｗｗｗ』

何か彼が身体の中に居る人間と霊魂に対して何かを言っていたがもうそれとは一切関係なく勝手に無視（スルー）し、去っていく二次元兵器に向けて憎悪・軽蔑・嫌悪を視線という執念だけで射抜こうとしても…

自身はもう“ただの肉片”であり彼に対して何も気づく事さえないまま、カシャンと部屋の入り口の扉が無情に閉まり同時に鍵も掛けられた。その直後…

肉デブ（肉片状態）「殺ズ！！！コココ…殺しテ…」

アナウンス《Ｔｅｍｐ?ｒａｔｕｒｅ　ｄ'ｉｎｔ?ｒｉｅｕｒ１５０　ｄｅｇｒ?ｓ…２００　ｄｅｇｒ?ｓ…（室内温度室内温度１５０。…２００。…３００。…）Ｊｅ　ｐｅｒｃｅ　ｕｎｅ　ｍａｒｑｕｅ　ｄｅ　ｌ'ｅｎｔｒｅｔｉｅｎ　ｄｅ　ｌａ　ｔｅｍｐ?ｒａｔｕｒｅ　ｄ'ｉｎｔ?ｒｉｅｕｒ（室内温度保持限界点突破）》

バキンと室内の至る所の配管から室内の“異常な熱”で耐え切れなくなったことで中の器官が破裂し、冷却だった液体が熱になった高温蒸気となりブシューと室内の至るところへと蒸気を降り注いで、壁に付着していた肉デブの一部が噴出す蒸気に当たった直後、ジュ

ッ…と“高温という域を超えた熱”で完全に焼失する。

それだけでなく付着していた肉デブの肉片・血の壁・床にも室内の異常な温度で赤く輝き、赤熱化した壁と床が肉デブの血・肉を炭というレベルでは済まない位に焼き尽くし、熱に弱い機材がドロッと溶岩のように溶けて次第に数々の炎が生まれていく。

アナウンス《…Ｌ'ｏｐ?ｒａｔｉｏｎ ｄｕ ｓｙｓｔ?ｍｅ ｕｒｇｅｎｔｅ（…緊急システム作動）Ｕｎ ｄ?ｂｕｔ ｄｅｌ'？ｃｏｕｌｅｍｅｎｔ ｕｒｇ…（緊急放水開…）ザザザッ！！！Ｃ'ｅｓｔ ｄ'ｕｒｇｅｎｃｅ ｕｎｅ ｅｒｒｅｕ…ｒ ｄａｎｓ ｕｎ ｓｙ…ｓｔ?ｍｅ ｄｅ ｌ'ｏｐ?ｒ…ａｔｉｏｎ（緊急作動システムにエラー発…セセセ生）Ｊｅ ｓｕｉｓ ｄ'ｕｒｇｅｎｃｅ ｉｍｐｏ…ｓｓ…ｉｂｌｅ ｄ'？…ｃｏｕｌｅ…ｍｅｎｔ（キキキキ緊キュキュ急ホホ…ザザザザッ！！！）》

終に高熱で燃え上がる部屋内の配電システムにも異常がきたか室内のアナウンスもバ☆グ吃音奇声になり、天井に多く付けられていた赤く回転するランプも熱気で溶けて点滅されていた赤い室内が“超々々々々々々々々々々々赤黒い業火部屋”へとなり…

ゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！！

次第に炎は配管を溶けた通って通機構から・部屋の床を溶岩の溶か

してまだ燃えていない室内へと炎が落ち、火災と一切関係ないところも一瞬の内に業火に包まれ連鎖的に工場内全体に８０００。以上の炎が“工場全体”を赤い溶岩のような火の城へと変える。そして

アナウンス《Ｕｎｅ　ｄｅ……ｕｃｔｉｏｎ　ｐａｒ　ｐｒｏｇ‥‥‥ｒａｍｍｅ　ｄｕ　ｄ?ｂｕｔ　ｄｕ　ｓｙ……ｍｅ　ｄｕ‥‥ｅｕ　ｅｓｔ　ｉｍ…ｌｅ（ショショショショ焼キャ…シスデデデデ…ム起動プロロロロロロロロ…不可）Ｊ'ａｍ?……ｅ　ｐｏｕｒ　ｔｉ……ｒｅｒ　ｌｅ　ｎｉ……ｕ　９（カカカカカカィレベベ…９ニ達ｓ…）》

ドワァァァァァァァァァァァァァァン！！！！／（＾Ｏ＾）／

燃え盛る工場が天井部分を突き破るように大きな爆炎茸雲が汚ねぇぐらいに上がって、複数付けられていた配管・煙突が燃え盛る業炎で内部そのものを溶かし、ドドドと原型を留めないぐらいに溶融分解（メルトダウン）し工場が崩壊していく。

その炎は工場そのものを焼き溶かすだけでなく工場周囲のモノを巻き込むように焼き付けて、近くに建てられていた倉庫やガスタンク・港にある作業用大型機を焼き溶かし、一部の牢獄地区が神曲のような“大焦熱地獄”へと成り果てた。

……

……

……

―事後…牢獄館（ノワール）　物資格納地帯　グラウンド・ゼロ（とある製造工場跡地）―

ゴォォォォォォ…

もう何もかも工場という存在が有ったのかわからない位に炎に包まれた紅蓮の世界。

上空カメラ視点で見える下層はまだ事すら一切見えない炎そのものが大きな赤い川となって、黒いアスファルトを溶かしながら少しずつ炎の範囲を広げ、グツグツと煮える音が鳴る炎の川からは火の粉が舞い、黒紫色の上空に活きた赤い光が夜空を覆い尽くすぐらい踊り舞う。そんな最中…

フラムエール【ｆｌａｍｅｓ　ａｎｄ　ｔｈｅ　ｆｌａｍｅ　ｉｓ　ｓｏｍｅ　ｕｓ　ｍｅ.】

ボゥンとシャイナ達が入った工場だった辺りの燃え盛る炎から“炎に包まれたフラムエール”が現れて、一部身に纏う服に赤い炎が複数付いていたが“一切服・身体すら燃えることは無く”溶岩地帯になっていた元工場跡から“炎を滴る良い伊達男”としてかっこ良く登場する。

シャイナ『うはぁぁぁぁ…こ…これ何というファン●スティック４のような…“ダークサイド版”？ｗｗｗ』

ディク『フラムエール…まさしく俺が付けた名の通り“炎翼”だな。圧倒的な炎（太陽）の力を操り、炎は自分自身であって自分自身は炎という意味か。うん！カッコいいぞぉう！！』

犬ツィオ『キャンキャン！！』

と身体の中でシャイナ達が四コマ外人劇場のようにガッツポーズを取る中、フラムエールは【おいおい、俺はそんなに…】と恥ずかしそうな仕草で鼻下に右人指し指で何度も横に擦りながら言って、バサバサと二つの赤黒い長い裾を風で横向きに煽られながらまだ炎が届いていない路面まで歩んだ後…

ディク『共鳴解除（リンクダウン）だ。フラムエール、お疲れさん。』

フラムエール【あぁ。後はお前に託そう。】

フラムエールの全身に赤黒い光の柱が見えなくなるほど覆い尽くし、身体の中にいる名付け親に向けて笑みを出しながら顔を上に上げて数秒両眼を閉じ意識を手放した後…

身体を覆っていた赤黒い光が止んで中央に背中に長神刀（武器状態）を携えたディクと、伸ばされたディクの左手を右手で繋ぐように握るシャイナへとなった。

第二百十一曲　狂気なる純白姫の　妖精王　殺す、潰す、刺し絶える。

―とある製造工場崩壊数時間前　妖精界　リュミエール　妖精王ノ神殿　補ノ佇ム晶ノ部屋―

リオリーネ《っ！…くっ…あ…ぁん…な…連中が来たせいで…っ！…くそっ！！…くそ！くそ！！くそぉっ！！！》

シャイナ達が牢獄館（ノワール）が大炎上する数時間前に一旦遡り、誰も居ない漆黒の闇に満ちた神殿の中の一室である大型の深い蒼色から透明度が綺麗に映る無色が混ざった斜めの水晶が中央に刺さっている“只王という存在が身を一時預ける”場所として作られた殺風景の部屋の中で、一人一切表情が見えない部屋の中で女の王らしくない罵詈を吐き捨てる。

リオリーネ《くそっ！…あんな奴らにっ、この私が“殺人者”の糧を身に取り入れるなんてっ！！あのまま…あのまま糧を得る事すらしなく、さっさと捨ててしまえば良かった！！くそっ！！》

ガツンと中央に備え付けられていた大型水晶に向けて丸めた右拳を思いっきり雑言を吐き捨てながら叩きつけて、リオリーネに叩き付けられた大型水晶の箇所には“大きく凹んだリオリーネのそのまま

の拳の痕”がくっきりと残る。

彼女…否妖精王の中の“妖魔王（リオリーネ）”が本来の本質である“裏の素顔”を曝け出しながら吐き捨て、この世界に来て早々民を・自身を傷付け挙句の果てに則を破った妖精（妖魔）さえ多く殺傷した侵入者（シャイナたち）を憎く思う。

リオリーネ《牢獄（ノワール）なんかに行かせなければよかった！！でないとまたあいつ等がっ！！あいつ等がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！》

ガッ！ガガッ！！ドスッ！！！バキン！！！！

リオリーネは怒りに任せて中央に備え付けられた大型水晶を思いっきり何度も殴り、殴れば殴るほどどんどん水晶は原型さえ留めないぐらいに変形して、リオリーネに殴りつけた円型の外部は大きくヒビ割れを走り蒼と無色の硝子の破片達が床に飛び散っていく。

リオリーネ《死ねっ！死ねっ！！死ねっ！！！死ねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！》

怒りで我を忘れて水晶を殴…否破壊している妖精王の身体の一部が“変異”していき、両腕の手の平が人ならぬ“大型の爪”へと変異し爪先の爪が人間の肌色から赤く変色して更に長く伸びる。

手の甲には瑠璃色の鳥類のような厚い羽毛が爪以外覆うように生えてその羽毛は腕から肩に掛けて沿うように蠢き、本来の女性の体質である細い腕がブクブクと内側から脹れ上がり筋肉が膨張して羽織る純白のドレスの繊維の一部をビリッと破かせる。

リオリーネ《殺すっ！！殺ス！！あん…な…奴らヲ……意図も簡単に消し飛バスことが出来る力ガアレ…》

ブリッツ《おやおや、随分と取り乱しているねぇ～…リオリーネ。》

リオリーネ《！》

あと数秒で半妖魔化したリオリーネの変異した両腕で叩き潰される前にタイミング良く牢獄（ノワール）の監視塔にいたブリッツが入ってきて、怒り任せに周囲のモノをぶっ壊している半妖魔化しているリオリーネをブリッツは軽く苦笑しながら両眼を笑うように細めてゆっくりとリオリーネに向けて歩む。

ブリッツ《ちょっと“歪面白い”連中をわたしゃの所入れるなんて…リオリーネ、あいつ等の力量を解ってやったことなのなかぇ？》

リオリーネ《…おばあちゃん…私は…私ハ…私はアイツラを許さナい…！おばあちゃんがいる所に送るまでもなく、きちんとこの手で

殺シて置きたかっタ！！そうしていたら…私っ！！この“力”デ！！≫

ブリッツ…否リオリーネの“祖母”が水晶破戒の手を止め棒立ちで俯いている“娘（リオリーネ）”の苛立つ素顔を見て黙ってすこし両眼を薄っすらと開け、半壊した水晶の前に立つ娘は口調が擦れたマイク音声になり黙って右腕を斜め下へと下ろし、ぐっと変異した右手を丸めた後…

リオリーネ≪究魔具（ウルティモ）“魅ニ堕チル精ノ霊虹剣”ヲ…あの時アノ場所で振るえば…良かったッ！！≫

ジャキン！！

力で強引に丸めた右手を開いた瞬間に三角の剣先から刀身に掛けて赤から紫の薄い虹色が着色され、二つに展開した逆の黄金の天使のような翼の唾に、柄先が蝸牛のように丸まれた“約１８０センチぐらいまである虹の大剣”をリオリーネは半妖魔化した両腕の一つである右片腕だけで持っていた。

ブリッツ≪ほれ…リオリー…≫

リオリーネ≪殺す！！アイツラを殺スッッッ！！殺すっ！！殺ス！！コロスコロスコロスコ

！！！

どうやら怒り任せに壊そうとしていた馬鹿娘にブリッツの背中から出した一つの大きな赤黒い腕が、リオリーネの頭部を鷲掴みした後思いっきり床へと魔力の腕（オバアチャンの鉄槌）を身内とは関係なく叩きつけたようだった。

ブリッツ《馬鹿者！！リオリーネよ、お前さんが今やらかそうとした意味は解っているのか！？お前さんが持つその究魔具（ウルティモ）は“今の世界秩序を保つ楔”！いわば“この世界自体の外部の存在をいずれ屠る人類最古の最終兵器”を他目的に施行するなど言語道断！！》

ブリッツは怒りの表情を出しながら無様に地に伏せているリオリーネの首に向けて魔力で出来た赤黒い腕を伸ばして、猫掴みのようにまたしても半分止血状態になっているリオリーネを宙に浮かせる。

リオリーネ《ガガッ…楔？最古の兵器？何を言うんだバアチャン！？？！？このぶ…武器は元々…》

ブリッツ《…お前さんは“今現代の妖精”だから“真相”というモノを知らないだろう…。わたしゃがお前に教えてきたのは“表”の面のみ。しかしこの武器自体は“余りにも危険”だということを…表で言ったハズじゃが？？》

リオリーネ《アァァン！？ナナナナナ何を言ってイるのかサッパり解らないネェ！？オオオバァァチャン？？？？私…ワワ私は…タダ

タダアイツラをあああああアイツラを殺シタ殺シテェ！！コロコココオオオ！！！！！！》

ブリッツ《（…イかれたか。そうだな…もう眼が逝っちまっているのぅ…。）》

ゴシューゴシューと頭部を鷲掴みされているのに関わらず荒い息でひ●らし並みの●ナ版狂気顔になりながらブリッツを大きく開かれた片目で睨み付けて、徐々に両腕だけでなく両足や腹にも複数の黒い線が枝分かれするように不気味に広がりながら身体を徐々に妖魔へと侵蝕していく。

ブリッツは妖魔へとなっていく娘のを見て眼を細めながら哀れみの視線をリオリーネの顔面にブスッと刺し抜いた後、鷲掴みしている魔力の腕に力を入れて少し握り潰す手前までぐっとリオリーネを宙刷りしながら拘束した後…

ブリッツ《一旦沈んで頭を冷やすことじゃ…クソガキ。》

ズドンッ！！！！

ブリッツは思いっきり半壊した水晶に向けてリオリーネを“頭部”から綺麗に横向きになるように叩きつけて、叩き付けられた半妖魔化のリオリーネは大きく口を両眼を気持ち悪く開いて、再びシャイ

ナ達と対峙後に刻まれ血塗れになった身体ごと水晶に半分貫かれるような形で横向きに入れられたのだった。その後…

ブリッツ《…にしても、あの気色悪い二次元兵器（オリジナルレプリカント）め…このわしゃをここまで…フンッ！！》

第二百十二曲　人類初…魔力ＤＥテイクオフ！！

―妖精界　リュミエール　牢獄館（ノワール）　大炎上（物資格納地帯）　―

フラムエール「「！…今妖ノ魔の気が…。」」

ディク『フラムエール？』

一方半キレ状態だった妖精王視点から主人公視点に戻り、物資格納地区辺り一面…否今居る場所全体がフラムエールが生み出した（もしくは工場を無差別に焼け消した）“太陽並みの炎の海”に包まれている中、ディクの背中に携えている長神刀（フラムエール）が何かを感じ取った気がして顔を唐突にやや斜め上に上げる仕草を取っているような台詞を吐く。

ディク『…こっから２０００メートル先も、５０００メートル先も俺は見たけど、今は何も感じないぜ？戦闘したばかりのお前が疲れているんじゃないのか？？』

しかし主人公側に対しての敵意の反応は直ぐに掻き消されるように沈黙し、自身を携えているディクが視線だけで視界に映る地平線を右から左へ黙って動かした後、携えているフラムエールに向けてわ

ざとらしいお手上げ仕草を軽く動かしながらからかう言動をフラムエールに言う。

ちなみにディクは下半身をフラムエールと共鳴（リンク）した時に変ずる“フラムエールの足に成って”いて、一面太陽並みのマグマがアスファルトの地面を溶かす百熱の世界に一人平然と冷めた表情でシャイナを抱き抱えながら立っていた。

フラムエール「「いや…俺は疲れなんて…た…たしかに強い妖ノ魔を感じていたんだが…」」

シャイナ「気のせいじゃないのぉ？なんにせよアンタは工場そのものを“全部溶解した”し、今居る工場から離れた場所でも“アンタのせいで一面映画のボ●ケイノ並みに炎の世界になっている”しwww…つーか、熱っ！！い…いや熱というレベルじゃ…」

犬ツィオ「キュゥゥゥゥゥン…」

フラムエール「「…。」」

グツグツとディクの足下でマグマが煮える音を聞いているシャイナは地面から上がってくる熱気で汗だくになり、パタパタと手首だけで右手を顔面に向けて扇子代わりに扇ぎながら、首に引っ掛けてだらけている子犬（エツィオ）にも冷たい風を送るも…

シャイナ「アチチチチ！！！！いくらアイモンおじちゃんの御下がりでも、これは熱いｗｗｗ熱湯の湯気をそのまま受けたような…アチャ！！！！！」

普通は人間がマグマの近くに居ると２０００。…太陽の炎（フラムエール）は太陽の表面温度の６０００。以上の熱気なので通常は“熱気を当てられた時点で身体もろとも消失”するのに、一応シャイナはアイモンの御下がりを着ているので（第百四曲参照）破戒ノ王の魔力で身体そのものを護っているので、今居る場所での体感温度は“焚き立てポットの熱気程度で済んでいる”のである。

ディク『あぁ…待ってろシャイナ、今お前に“翼を生やしてやる”からな。ペェェ～スッ！！』

シャイナ「！？？！？！へっ！？つつつつつつつ翼ぁ！？？！？！」

ディクは熱くてたまんねぇ顔を出している汗だくシャイナとシャイナの首に引っ掛けて綺麗にⅡ字になるように掛かっている子犬のグーたら姿を見て、ディクは両足の股を大ぉぉ～きく♪開いて左腕を顔面から横にかけて動かしゆっくりと残像を残しながら再び顔面に向けて斜めピースサインをする動作をした後…

ディク『Ｌａ　ｂ?ｎ?ｄｉｃｔｉｏｎ　ｄｅ　ｌ'ａｎｇｅ　ｄｅ　ｌａ　ｔｅｘｔｕｒｅ』

シャイナ「うひゃぁ!?」

ぶわっとシャイナの全身に青白い光がキラキラと星屑のように綺麗に輝きながら逆って、ゆっくりと抱かれているディクから離れていくようにふわふわと上空へ風船のように浮かび上がった後…

パサッ…

シャイナの両足首辺りから薄っすらと細い青白い光が伸ばすように生えてきて、徐々にその光は架空話にでてくる天使のような細い四翼版へとなり、ディクの魔力で浮かんだシャイナは両足首から生えた四翼で空中静止した。

シャイナ「う…おオオオオオおおオオおおおおおおおおおおおおおおおおお!??!?!飛んだ!!俺飛んだよ!母さん!!!!!全人類の憧れの大空に私わぁぁぁあぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!!」

犬ツィオ「キャンキャン!!」

シャイナは自身が宙に浮かんだ（※ディクのおかげです）ことで鼻

穴からピュー♪と汽笛音を何度も鳴らしながら興奮し、自由自在に宙を旋回しながら飛ぶ実感を魔神（エツィオ）と霊体（ディク）&ガンマンの気持ちになって何度も同じように回転する。

ディク『どうだぁ～？“師匠”や俺のような羽根が生えた人たちにとっての快感はぁ～？？』

シャイナ「最っっっっ

背中に携えている長神刀（フラムエール）がく両腕を組みながら顔だけをディクに向けてやや心配するような仕草でも出しているかのような重々しい言動を聞いた後、『シャイナは大丈夫さ。エツィオと一緒に旅してきているんだし…』と言ってバサッと背中からトキの翼を出して、彼女が今いる高さまで飛翔しようとした時…

？《人間が一人に…魂の匂いがする元人間が一人…。》

ディク&フラムエール「「『！』」」

パシャと画面外から一面が百熱の溶岩（マグマ）になっているのにかかわらず平然に“素足で歩いてくる人影”が見えて、ディクとフラムエールは突然声がした方向に向けて直ぐにのほほん談話から緊迫な表情へと変えて身体をその方向に向け背中を少し折って身構える。

？《？それだけじゃない…人に似て似ていない私と同じ“素体を持つ”者がイる…。？初期化プログラムが…これは一体どうゆうこと？？あの魂の匂いがする元人間の背中に…》

フラムエール「「！君は…。」」

ディク『？？誰だ？んぁ？』

地平線から歩いてくる小さな陽炎がようやく肉眼で映るほど明らかになった時、上空にいるシャイナと子犬(エツィオ)は眼を丸くしながらその光景と姿を見て場違いすぎる存在に口を開きながら一言を…

シャイナ「おぃ…ｗｗｗ“バ●オショック版のようぃ゛ょ”が“素足で溶岩の上を突っ立っている”ぞｗｗｗしかも…衣装が黒いゴスロリｗｗｗｗ」

第二百十三曲　ＴＨＥ　Ｄａｒｋ　Ｄｏｌｌ　Ｏｆ　Ｐｒｏｔｏｔｙｐｅ

―妖精界　リュミエール　牢獄館（ノワール）　大炎上（物資格納地区）―

？《臭う…私と同じ“機械で出来た人と似た存在”に…何年振りだろう…ぅん…３億６５４７千年前の１２月２１日２３時５８分２６秒で全人類が滅んだ以降…第二次保管計画に乗っ取ってスリープモードに移行により…再活動時間が１５２８９０７秒…私より短い…》

フラムエールが生み出した百熱のマグマ上で黒いゴスロリのようなワンピース服を股が見える手前まで短く着ていて、長い銀髪を三つに密編みして頭部に黒く光の反射で輝くカチューシャを付けた見掛け８歳の幼女…

パシャッと素足で溶岩を水のように軽く蹴り飛ばすように跳ねて、ディクの背中に携えている長神刀の本来の姿を脳内に映る映像化と今現在の情報内容を見て眉一つも動かさず、感情が一切込められていない機械的な言動でシャイナ達を幼女の存在を不気味な印象として思わせる。

フラムエール「「…。」」

シャイナ「えっ？ｗｗｗちょっｗｗｗゴスロリょぅｌ　ぇょが…機械的な表面になっていた初期型クサガリサァァンと似とるｗｗｗ」

？《？それだけじゃない。貴方の中にある統計的予測機能（アルゴリズムプログラム）が削除されつつある？これは一体どういう事？“私達”の身体は悪魔でも機密に…ハーメルン機関が備えたプログラムに乗っ取って遂行しているのに…。》

ディク『？？何を言っているんだ？？』

ゴスロリ幼女は突っ立っている困惑したような表情を出す霊塊（ディク）に向けて歩み、足を上げる度に粘りつく赤い溶岩をボタタと滴り落としながら、表面一つ変える事なく上空にいるシャイナの茫然としている視線を受けながら黙々とディクへ歩いて来る。

フラムエール「「…俺が出よう。ディク下がってくれ。この後に“何があってもだ”。」」

ディク『あぁ。』

背中に携えられていた武器（フラムエール）がディクに向けて言った途端、背中に携えていた武器が赤黒く輝き始めその光がマグマに向けてバシュンと落ちた後、実体化したフラムエールがディクと同じ棒立ちでマグマの上に降り立つ。

ディクはフラムエールに向けて『とりあえず俺はシャイナの傍にいるからな。』と言って背中からトキの翼を出し、バフッと一回翼を上下を動かした後一回だけで上空へと急上昇しシャイナがいる高さまで飛翔する。

フラムエールは顔だけを上に上げてディクの下半身が共鳴（リンク）していた炎翼の両足を、元の黒いニッカーボッカーズ風の皮生地と黒ブーツに戻っているのを見てふと笑みを出した後、自身に向けて歩いてくるゴスロリ幼女に向けて真顔を出しながら見つめ直す。

？《退かないのね“戦闘用模擬体１４５６０２４５７９３号”私の計算では８０％の確率で戦闘モードに突入…第二予測の場合は１２％の確率で上空にいる人間と霊魂がいる高さまで空中回避…残り８％は…》

フラムエール「「俺は“フラムエール”だ“ブライン”。いや…正式名称は“戦闘用模擬体１７５号”と言ったほうが良いかな？あー…いや差し詰め君は…」」

シャイナ「！何ＤＥＡＴＨとぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！？？！？！？！このゴスロリコスを着たょぅぃ〝よが…」

ディク『うへぇぇぇ…こんな幼女がこの地区を仕切っていたＢＩＧ

★ＢＯＳＳなのかよｗｗｗ』

なんと幼女の正体はフラムエールの力で火山地帯なる前の“かつては妖精だった変な生き物が住まう頭領”であって、尚且つフラムエールの脳内情報による“敵？の名前”が明かされたことでシャイナとディクはどよよとわざとらしい慌てふためく仕草をしながら、少し身体を後ろへと仰け反らせた。

―現時点物資格納地区の幼き頭領（見掛けＤＥ☆）　ブライン（戦闘用模擬体１７５号）―

フラムエール「「初期“太陽という力に近付けようとした最初の炎の試験体（プロトタイプ）”。君は元々戦闘用模擬体１７５号ではなく“リコ”と名づけられていたハズだ。」」

ブライン（戦闘用模擬体１７５号）《それは悪魔でも私という“兵器”が完成するまでハーメルン機関に名付けられた“仮名”。それと“ブライン”という名はこの世界にいる妖ノ精王が勝手に付けたコードネーム。私は本来正式名は戦闘用模擬体１７５号…》

マグマの上で二人…否炎属性として開発された初代兵器と完成体兵器が睨み合う。兵器としての無感情のままに分析しながら言うブラインと人間のように振舞うフラムエールの二人の兵器には無い違う雰囲気を感じながら、上空にいるシャイナ（子犬も含めて）とディクは息を呑んで見守る。

フラムエール「「そうじゃないだろう!?君はリコだ!!生前の…兵器として完全に変えられる前に、君には“家族”が居たんじゃないか!?優しい家族に見守られ続けていた君が、改造される数週間前に君は…君はっ!!…とにかく君は戦闘用模擬体１７５号じゃない!!」」

フラムエールの脳裏に映る人類が完全に焦土と化す前の幸せな日常…まぼろばな純白の多くの大型試験管が設置されている薬臭い背景の世界の中で、そこにまだ自身に自我を持っていた自分と自分の隣いる改造される前の彼女(ブライン)とその家族が互いに笑い合う狭い世界に生きる人間にとって唯一な幸せな思い出…。しかし…

ブライン《私には“家族”という“存在(モノ)”は無い。ただハーメルン機関の駒として任務を全うする“本来あるべき二次元兵器(オリジナルレプリカント)としての本質”。平行世界(パラレルワールド)の人間を“力に変え”、私達の“道具”として引き出す重要な起爆薬。貴方の背後に浮かんでいるその人間も当時は…》

フラムエール「「違う!“彼女”は道具じゃない…!!彼女は……。」」

ブラインは完全に兵器として改造されたためその冷徹なＡＩはフラムエールの言葉を打ち消し、淡々と感情の無い幼き言動を吐くブラインをフラムエールは苦い思いをしながら静かに両拳を丸く握って

否定するように強く言い放つ。

ブライン《貴方のような二次元兵器（オリジナルレプリカント）に無い“改造される前の自我を持った人間”の感情を持った兵器は存在していなかった。それは何故だろう?兵器として改造される前は自我というモノを完全に抜き取って粒子状になるまで破棄した後、兵器としての性能を加えながら徐々にハーメルン機関という指令に沿って動く“傀儡”として駆り出される工程だというのに…》

ブラインは長々と喋りながら当時のフラムエールと今現在のフラムエールの態度・兵器としての性能が偉い違いのことで疑問に思いながら、前世紀の兵器達しか理解し合えない台詞を吐きつつ無表情で右腕を前へと翳すように上げた後…

ブライン《一度…貴方の中を隅々まで調べる必要がある…。どのような原因で改造前の“不必要な自我”を何処で発生したのか。全てを解体してでも詳しく検索する必要がある。》

フラムエール「「！」」

シャイナ「うぉっ!?!?!?こ…これはニー●ＤＬＣの“愚者の●哭”!?!?!?!」

ディク『へっ!?ぐ…愚者の●哭ってなんぞ?!?!?それにアノ武

器は…』

ドンと翳した右手の平から剣先から翼翔竜のような長い鍔まで掛けた黄色い痣のような光がギザギザに刻まれた刀身に、柄が●ＯＤのような第三形態のアレに良く似た非常に大きな“ＤＬＣに似た大剣”を細い体系を持つ幼女に相応しく無い“片腕だけで持って”、上空にいるシャイナ達を更にどよめかせる。そして…

ブライン《一度貴方の中を全て解体…後に原因不明の物質を取り出した後、後の自我を持った兵器に対して直ぐに対応が出来る採取物（サンプル）を２％程度採取して、私の中にある６５％強の内２５％内の要領格納基盤（フォルダ）内へ保存する。》

フラムエール「「リコ…。」」

フラムエールは完全に機械として振舞うブラインを数秒間愁哀めいた視線を細い両眼で見詰めた後、今でも斬りかかって来るブラインの姿を見て左腰に掛けられている●刀（●ｉｉリモコン）の柄を右手で握って、静かにチャキンと右親指で鯉口を切って刀身に映る無表情のブラインをキラッと月光で一瞬反射した。

第二百十四曲　Ｆｌａｍｅ　Ｏｆ　Ｐｒｏｔｏｔｙｐｅ　ＶＳ　Ｄｅｕｓ　ｅｘ

―妖精界　リュミエール　牢獄館（ノワール）　大炎上（物資格納地帯）―

ディク『うほっｗｗこりゃ良い戦いＤＡ★是非ともリプレイ推奨で保存したいもんですなぁ～♪ｗｗｗ』

シャイナ「ほひょぉろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！（・Д・）観戦モードって、良い視点ＤＥＡＴＨネェ～♪♪♪」

シャイナ達は緊迫モードから上空版観戦モードに入りながら空中で胡座をかいて、途中シャイナは肩に掛けていたバッグを外してジピピー♪とチャックを開けた後、中から●ァンタ（クラッシュピーチ味）を取り出して使い捨て紙コップに●ァンタ入れてグイッと飲みながら観戦する。

ドンドンと上空にいるシャイナ達の真下で戦う炎翼（フラムエール）の●刀（●ｉｉリモコン）とゴスロリょぅぃ゛ょが手にする武器の刀身同士がぶつかり合う度に、地表のマグマが水飛沫みたいに跳ね踊って刀身を振るう度にその剣圧が地表のマグマだけでなく周囲の空気を引き裂く。

フラムエール「「ふっ！」」

ブライン《左首筋に向けての頭部切断攻撃率６８％強…なおフェイク率１４％弱…真っ直ぐな太刀筋ね戦闘用模擬体１４５６０２４５７９３号。》

フラムエールは淡々に戦況分析する能面顔のブリッツの攻撃を掻い潜った後、低姿勢(しゃがみ)ながら一気に頭を飛ばすべく右首筋に向けて●刀（●ｉｉリモコン）を振るったが、既に検証済みしていた機密なる動きでフラムエールの太刀筋を右手に持つ●ーアＤＬＣ武器の刀身で受け止める。

フラムエール「「俺は姑息な手など使わん。これが“俺”なんだ。俺の持つこの武器が“俺自身”なんだよ。」」

ブライン《…単純すぎる。…不可解すぎる…。貴方の思考経路にも“異常”があるみたいね。これも主目的内容に追加する。…新たな戦闘用模擬体１４５６０２４５７９３号についての現時点情報２…３…９…現時点１５件有り…。》

フラムエール「「違うな。“異常という奴が異常なんだぞ？”リコ？？“その言葉を吐く時点”で、君は異常者だ！」」

フラムエールが言いながら咽仏に向けて突っ込んでくるブラインの

即死突きの一撃を、●刀（●ｉｉリモコン）を前に構えて刀身を下に向けながら左腕を刀身で支えるようにして、刀身にブラインが持つ剣先を一直線に防御する。

ブライン《私が異常？…不可解。特に私の思考内容には修正すべき点は０００．４８秒とも無い。貴方が言う“異常”というのは何？…検索開始…該当項目無し…？？何故？？私の身体に組み込めれているハーメルン機関の重要要領基盤内にも貴方が言うその“異常”というモノは…》

フラムエール「「…それを今から教えてやる。自身の…その機械的な思考を読み取る外部監視眼（レッドアイ）にきちんと脳裏にある思考回路が焼け切れるぐらいにしっかりと忘れないよう刻み込むんだな！」」

ザザザとブラインの突きの一撃を防御したフラムエールは反動で後ろへと下がり、踵に力を入れて後退を力で止めた後、手にする●刀（●ｉｉリモコン）を両手持ちに持ち替えて背を低くしながらそのままブラインに突っ込んで、またしても激しい高速打ち合い試合が始まった。

シャイナの見た目からにして二人は真下で長々と言い合いながらも力・業は互角に見えて、両方が繰り出す自身だけの我流剣技をありのままに振るい、その綺麗な太刀筋は観戦を虜にして陥れるべく更なる魅惑溢れた剣技で上空にいるシャイナ達とそんな最中…

シャイナ「あっ、そだ。カルボとディクサァァン、クラッシュピーチ味の●ァンタ飲む？ピリっとくるけど咽がすっきりするぜ？」

ディク『●ァンタ？くらっしゅぴーち？？へぇ…これが今現代の人達が飲む新しい商品かぁ～。んじゃ、一口頂くよｗｗｗ』

犬ツィオ「キャンキャン♪」

KY…そう言った後シャイナは「んじゃ、コンソメ味のポテチも食うかｗｗｗ」と開けられていたバックの中からオレンジの袋に入っていた菓子を一つ取り出して、上空で一人と一匹に紙コップの中にいれた●ァンタを提供し菓子袋も開けて、のーんびりと観戦しつつも変な雰囲気が漂いながら“出番が来るまで休憩（オフ）ってる☆”という僅かな時間内の宴★会状態になっていた。一方…

ブライン《次攻撃予測…予想完了…左腰腹に向けての切断攻撃率８５％…》

フラムエール「「ハァッ！」」

互いの武器は激しい高速の赤黒い漣が浮かび上がり刀身自体が蛇のように蠢きながら、ガシンガシンと火花を散らしつつ互いの急所へ目掛けて殺す勢いで前世紀最強の武器同士を鍔競り合う。

長い鍔競り合いから今度は右横薙ぎから左下から剣を振り上げ斬り、そして体を回転させて左上から右下へ斬り飛ばす〆（フィニッシュ）斬りや、右肩から左腰まで斬り下ろしながら剣を三回周囲で振り回し、左下から大きく前方を斬り払う第二〆（フィニッシュ）斬りを眼には見えない高速モーションで武器を振り翳す。

ブライン《左胸部から右腰まで一太刀入れる確率３５％…尚且つ…》

フラムエール「「まだ戦況分析しながら戦うのかリコ！？いい加減に眼を覚ませ！！」」

ガガガガガガガガガガガガ！！！！

武器同士の刀身から火花を散らす高速の打ち合いの中、フラムエールの本来持っていた情が剥き出しになった心の叫びをブラインに向けて言い放つが…

ブライン《右脚部下肢付近に向けての切断攻撃確率９６％…》

それでも幼女（ブライン）は無表情のまま…ただ脳内に思考される“主目的”以外は決して揺るぐことなく、死んだような感情一つも込められていない死眼でフラムエールの攻撃を自身の背を低くし、半しゃがみ立ちで刀身をマグマ内に突き立ててフラムエールの攻撃を防ぐ。

フラムエール「「くそっ！」」

ブライン《次攻撃内容予測開始…検索…戦闘用模擬体１４５６０２４５７９３号攻撃パターン再検索…２…４…１０…２０通りのパターン有り…その内上半身と下半身の大胸筋・横隔膜・錐体筋を狙うパターンが２０件の内４件…前戦闘データによる分析を再検索かつ主目的達成にかけての戦闘時間短縮を仮想内にてシュミレート開始…》

ガガガガガと二人は打ち合いながら今度はブラインが前へと突っ込んで、フラムエールの刀を匠に捌きながら脳内で機密的にブツブツと独り言めいた言動を履きながら、フラムエールの持つ●刀（●ｉリモコン）の刀身を食い込んで深く押さえながら自身よりも大きなフラムエールを“兵器としての当たり前の力”で一気に後ろへと後退させる。

フラムエール「「ぐっ…！（駄目だ…今のリコは完全な二次元兵器（オリジナルレプリカント）ととしての本能で動いている。どうすれば…！）」」

力でどんどん防御体勢のままブラインの押し込みで高速後退させられながら苦渋の表情を出し、ギリギリとブラインの剣と自身が持つ刀の武器同士がぶつかり目の前で火花を散らしながらこの状況をどう打破するべきか…その何かを考えていた時…

フラムエール「「（！そうだ…この方法だと“少し俺の身でも危険になる可能性が高い”が…）試してみよう…。」」

ブライン《腹にかけて反撃攻撃率１００％…》

ドンッ！！

脳裏でシャイナに初めて殴られた時の映像が映った瞬間フラムエールは何かを思い付いてハッとした表情を数秒間出した後、防御体勢のまま身を少し左へと捻って力で自身を高速後退させているブラインの腹に向けて左足裏蹴り（ソバット）放つ。

これもブラインに取っては既に想定内だったらしくフラムエールのカウンター蹴りを刀身を腹に添えて防いだが、実際の肉体力はフラムエールのほうが上であり当然身体の小さいブラインは蹴りを防いだ体勢のまま逆に後ろへと後退させる。

ブライン《波動によるダメージが腹部に有り…結果損傷率２％…外傷無のため復元プログラムを破棄、問題外とする。…再度主目的内容を続行…戦闘範囲検索…戦闘用模擬体１７５号から戦闘用模擬体１４５６０２４５７９３号までの距離２００．５８ｍ…戦闘用模擬体１７５号の攻撃範囲内および「「そんな使いまわしが多い機密的な発言は、もう止めようリコ。」」！》

シャイナ&ａｍｐ;ディク「『おっ！？Σ（ﾟ・ω・ﾟ）』」

ブラインが防御体勢から攻撃体勢を取るために前に曲がった背を上へと持ち上げた瞬間、目の前にいるフラムエールの状態を見てブラインは眼を丸くさせるような信じがたい行動を見る。

フラムエール「「幾ら最初の炎属性の二次元兵器（オリジナルレプリカント）とは言えども、君は俺の雛形であり素体は“子供”だ。君に色々と聞かなくてはいけない所も有るし、なんにせよ…」」

ブライン《？貴方…何を考えているの？その行動自体は私の統計的なプログラムには書かれていない事例…》

上空にいるシャイナとディクも同じ視線で見るフラムエールの信じがたい光景…。それは…

―両手に持っていた武器を全て鞘・ホルスターに収めて、両腕を前に構える無手状態のフラムエールの姿だった。―

フラムエール「「Ｉｔ　ｉｓ　ａ　ｔｒｕｅ　ｈｅｌｌ．．．ｈｅｒｅ（さぁ…ここからだ…。）」」

1919

第二百十五曲　銃剣士≠銃拳士

―妖精界　リュミエール　牢獄館（ノワール）　大炎上（物資格納地帯）―

ブライン《無手による生存率０．１２％…可能性が低過ぎる…貴方の行動は不可解過ぎる…低い確率が続き過ぎる。…》

ブラインは無手状態で身構えるフラムエールを見て、戦闘状況を脳内で計算しながら不可解な行動に少し両眼を細める。

フラムエール「「理解なんてしなくてもいい…君は統計的な事に関して頼り過ぎている。俺は君に…」」

フラムエールは腰を落として身構えながら丸めた両手を前に突き出して、一瞬ブラインを見る視線を“閲覧者用カメラ目線”に向けて口元を不意に吊り上げて余裕を見せる表情を出す。

フラムエール「「計算…予測…事例に無い事を今からして見せよう。」」

ブライン《それは無い。…“私達”の中にある統計的予測機能基盤（アルゴリズムプログラム）には前世紀末から今に掛けての１２３５４６８９００９６２５９９９９５８２４通りの攻撃パターンが全て保存されている。戦闘用模擬体１４５６０２４５７９３号…》

ブラインは真っ直ぐに伸びてくるフラムエールの右裏拳を顔を少し傾けるようにして避けて、避けた直後に右手に持つ●ーアＤＬＣ武器をフラムエールの心臓に向けて瞬時刺し攻撃を仕掛けたが、それを見切るようにブラインが伸ばした刀身をフラムエールは下に掻い潜るように避ける。

フラムエールは伸ばされたブラインの赤黒い刀身の下に身を屈めた後、低姿勢（しゃがみ）のまま身を横に捻って右足を前に伸ばして軸にした後思いっきり左足を前へ踏み出すと同時に無意識に力を込めた左拳を、ブラインの右顎下に向けて一気に振り翳す。

ブライン《貴方の素手による攻撃パターンも前世紀末の例として入っている。前世紀末までの全人類素手による格闘パターンは１２３１２２８５６９８７５４２通りの内…》

フラムエールの素手攻撃を避けながら脳裏で戦況解析しているブラインが淡々と言いつつ、無表情のままで身体を少し傾けるだけで楽々と素手攻撃を回避しながら手にする武器を顔半分隠すぐらいまで前に翳した時…

ブライン《！》

フラムエール「「で？君が言う“１２３１２２８５６９８７５４２通りの内の格闘パターンを全て読み取っている”君が…このザマは何だ？」」

ブラインの右側面に真面目顔（イケメソ）のフラムエールが耳元でブラインに言った直後、メキリと何かが押し潰れる音が生々しく鳴って少し開いていたブラインの口から一点の赤い液体をズルッと流す。

ブラインの背後を捉えていたカメラをゆっくりとブラインの正面が見える位置へ持っていった途端、大きな背中が見えるフラムエールのくの字に折った右腕の丸められた右拳が“ブラインの胸部にめり込むように渦巻き状で突き刺さっていた”。

ブライン《これはオカシイ…私の解析では貴方の前世紀含めて今現時点の戦闘解析内を調べ…》

フラムエール「「調べたつもりでも“想定外”なところは対処しきれてなかったじゃないか。君の目に映るその“前世紀の高性能だった外部監視眼（レッドアイ）”は節穴か？？」」

何故こうなったのか更に詳しく明確にするため現時点の時を少し遡り、刀身下で低姿勢になったフラムエールが回避攻撃をする瞬間を

“Ｆ．●．Ａ．Ｒ．２べ●ット氏による提供ＴＨＥ★スロー・モー”で映像を流すと…

ー思いっきり左足を前へ踏み出すと同時に無意識に力を込めた左拳をブラインに向けて伸ばす最中、左腕裏下に秘かに忍ばせていた“本当の攻撃する拳”を腕下を少し擦って摩擦をかけながら溜め込んでいた力を一気に射出するように、ブラインの左目が刀身に隠れる瞬間を狙って叩き込んだようだった。ー

ブライン《きょ…胸部損傷率６９％強…！…な内部…動力炉心基盤に亀裂発生！は…反撃率…》

フラムエール「「これは“溜め攻撃”だリコ。幾ら俺達のような人間よりも頑丈な身体を持つ二次元兵器（オリジナルレプリカント）でも…」」

更にブラインの口から丸められた拳ぐらいの大きな血の塊がゴポッと吐き出て、両眼を大きく開いている硬直状態のブラインを余所にフラムエールがブラインの胸部に突き刺した右拳に更に力を入れてた途端…

シャイナ「うぉぉぉぉぉぉぉぉ！？？！？！？何あのＤ●Ｃ４のギ●ガメスを使う時に出るあのチャージ攻撃はｗｗｗ」

ディク『ざわっ…ざわっ…（（（（（（（（（（（　。Д

。;）））））））））））』

無意識に力を溜め込んでいる最中胸部にそのまま突き刺した右腕全体に、ゴゥとフラムエールの戦う意思に呼応するかのように赤と橙色が混ざった炎のようなオーラが猛々しく浮かび上がる。その直後…

フラムエール「「Ｂｅｎｉｈａｓｕ　Ｄｅｍｏｎ'ｓ　ｈａｎｄ！！」」

ドバァァァァァァァァァッ！！！！

ブラインの胸部に突き刺さっていたフラムエールの右腕自体が大爆発を起こし、赤黒い噴煙がモウモウと立ち上がった後噴煙の背後から上半身が焼け燃えたブラインが背中向きに吹き飛んで、背中から地表のマグマに浸かると同時に大きな横飛沫が波状に跳ね上がる。

シャイナ「。。。（Д　　）…。」

ドドドドドドと背中から落ちたブラインが溶岩を跳ね飛ばしながら長く滑っていく間に、フラムエールはマグマ上を滑るように高速移動し溶岩を跳ね飛ばしながら大きく吹き飛んでいくブラインへ瞬時に追いついた後…

フラムエール「「Ｂｅｎｉｈａｓｕ　Ｃｌａｓｈ！！」」

ディク『Ｏｈ！ｗｗｗスゲー追い討ちｗｗｗ』

ドガシャァァァ！！！と大きく弾むブラインの背中に向けて身を捻りながら右足を一気に上へと振り上げて、ブラインの全身に纏わり付いたマグマを弾き落としながら豪快に上空へと蹴り飛ばす。

そして…

フラムエール「「Ｃａｎ　ｙｏｕ　ｅｎｄｕｒｅ？　Ｉｎ　ｔｈｅ　ｒａｍｐａｇｉｎｇ　Ｅｔａｕ！！」」

ブライン《！？？？！？！》

ドガガガガガガガガガガガガガガガガガ！！！！！

無抵抗のまま上空に上がったブラインの高さまで飛翔したフラムエールが軽々と“カメラ目線”に向けて柔軟溢れる右足をススと残像に残しながら湾曲するように大きく描いた後、ブラインの全身に向けて激しい高速百連蹴りを放ち所々赤い三日月の残像が出ながらブラインをフル★ボッカする。

シャイナ「こ…これは作者がまだＤ●Ｃ３上級ユーザーとして健在

だった時のマスダの蒼イカをぶちのめす荒ぶるベ●ウルフコンボのウルトラな格闘技いいいいいいいいいいいい！！！！！」

ディク『え？ますだ？？蒼いか？？で…D●Cぃ？？何ぞ？？』

犬ツィオ「キャゥン？？」

キャッキャ♪と鼻血を出しながら興奮している赤面シャイナと、意味が解らず眼を点にしながら首をかしげているディクとシャイナの首に引っ掛けている子犬（エッィオ）がうーんと頷いている最中…

ブライン《！！！！！…し…んた…！！！！損傷…8…9…92……！！！！じ…そんしょ…！！！！！》

フラムエールの高速回し蹴りを受け続けているブラインの身体がバキンと折れる音が鳴り、更にフラムエールの蹴りを受けて外部面が剥がれ落ち内部のコードが剥き出しになって、粉々になった腕の一部や脚部がバラバラと内部の機械油と手にしていた武器と共にマグマ上へ落ちていく。

ブライン《せ…戦闘よ…タイッ！！！！い…1456…「「違う。俺はそんな名前じゃない…いいかリコ、この後ちゃんと次から“俺の名”を言ってくれ…」」！？》

ゴォォと高速百連蹴りを全発食ったブラインは全四肢がボロボロに砕け散り纏う服がボロボロに破けて顔面半分が機械面で丸出しになっているメカバレ状態の中、かろうじて綺麗な外部層が残っていた右顔の眼に映る外部監視眼(レッドアイ)に…

フラムエール「「俺は“炎翼(フラムエール)”だ！！！！」」

シャイナ「ちょっｗｗｗｗょ…ょぅ　ぃ　ゃ相手にそれはネェＹＯｗｗｗｗｗ」

ドゴォォォォォォ！！！！

両腕を組んだフラムエールのハンマーナックルが半壊状態のブラインは回避行動という思考さえ追いつけないまま頭部に炸裂し、バチリとメカバレした左顔の機械眼が思いっきり前へと飛び出して頭部全体に青白い稲妻(ショート)が走りバラバラになった部品を落としながら、ブラインの身体は百熱の海の中へ没していった。

第二百十六曲　機ノ夢…ＢＧＭ推奨は●ーアの喪失?だっけｗ（ピアノ版）で頼む

―戦闘用模擬体１７５号　夢　邂逅―

?―リコ…リコ…良く聞きなさい。貴方はね…―

ブライン《（?）》

ドロドロとした重い雰囲気が漂う中、ブラインは重石でも押さえ付けられていたように固く閉じられていた眼をゆっくりと開けて、まだ焦点が合っていないボヤけた世界でうっすらと見える小さな存在と二つの大きな存在を見る。

ブライン《（?誰??私の目の前にいる一つの小さな存在と二つの）大きな存在は??…検索開始…?検索不能??何故?）》

薄暗い紫一色の世界でブラインは目の前にいる存在を脳内にある基盤で該当するモノを隅々まで検索したが、出てくる結果は該当すら一切無い通常のアラート…。

原因が解らないブラインは無表情のまま立ち尽くし、首を軽く横へ

と傾げる。少し黙っていると、目の前にいる朧気な大きなな純白の存在が、更に続けて姿形も明確にされていない黒色の小さな存在に向けて言う。

？―貴方は此れから消えていく人類を護るための兵器に成るの。その過程として貴方の記憶を、人間だった時の記憶を全て末梢しなければならない…。―

？―理解して欲しい…兵器に心があったら、もし何があった時に失敗しかねない…だからだよ。―

？―3日後…貴方を太陽の力に酷似した試験兵器にする手術を行うわ。其までに3日の間、人間としての思い出を今の内に楽しんでおいで…貴方と一緒に遊んでいる戦闘用模擬体１４５６…いえ赤い服を着た優しいお兄さんとその候補の平行世界（パラレルワールド）のお姉さんと一緒に…―

？―ごめんよ…ごめんよリコ…全ては…所長の命なんだ…。―

所々嗚咽が出ながら小さな存在の肩らしき部分に両手に触れて、二つの大きな存在が次第に訪れる小さな存在の未来に涙ぐむ仕草を取る。

そして二つの存在の内の一人が床へと崩れ落ち、声が枯れるぐらいまで大きく泣く始末…。ブラインは黙って見ながら脳裏に映る統計

的思考でその光景を分析した後…

ブライン《“家族”？…その家族という私があの人達の…》

するとピキーンと何かが突き抜けるような音が鳴って、ブラインは小さくはっとしたような口を開いて、瞬時に自身に新たな存在が追加されたモノを脳内視線で追っていくと…

ブライン《（？？…此は…人工保存基盤（フロッピーディスク）？しかも、第三者に見つからないように非常に解りづらい位置にあ…いや、この位置こそハーメルン機関の上層部の人間でさえ取りがたい所か…）》

ブラインの赤色の脳内の中に全神経を巡らせる機関の中に人工保存基盤（フロッピーディスク）が深くめり込まれるように入っていて、尚且つそのめり込んだ基盤（ディスク）の周辺にブラインの機能神経が多数枝分かれした細い管が纏わり付く。

更にディスク自体が脳内の枝分かれした多数の神経に侵食されつつあり、その脳内にある肉壁も徐々に溶け込んでいくように神経の管ごと一つになろうとしていた。

ブライン《（運動機能だけでなく生維持機能・武装変更機能…他多数の機能までがこの埋め込まれた基盤（ディスク）の外部上にくっついている。…解決方法…無…うーん…この問題を解決するにはどうすればいい

んだろう…うーん…。）≫

ブラインは脳内に密かにめり込まれていた長年の神経付き基盤をどうにかしようとして、無表情のまま眉間に左人差し指を軽く数回当てて悩むような仕草をとっていた時…

？―…君がこのディスク内容を見たことは…全人類消滅後と言った方がいいな。私が唯一奴等にとって一矢に報いることが出来た訳だ。―

ブライン≪（！…埋め込まれていた基盤（ディスク）が勝手に展開した！？…まだ基盤自体を展開する機能は出していないのに…何故？）何？…これは？？≫

突如埋め込まれていた基盤（ディスク）がどのような理由だか知らんが勝手に展開され、基盤（ディスク）の中身に保存されていた前世紀の人間らしき男の声が再生される。

？―リコ…君に…俺にとっての最愛な“娘”に…謝らなければならないことがある。…それは…―

？―リコ…御免なさい…。貴方がこの施設に兵器としての試験体として人間として扱えず、まだ小さかった貴方に殺すというだけに思考された狭い箱庭の中にずっと放置するように閉じ込めて…本当に

…本当に…御免ね…御免なさい！―

男だけでなく嗚咽混じりの女性声も飛び込んできて、口に両手で隠し被うように涙ぐむ仕草を読み取れる。

？―リコの…貴方の“母親”として私はただ血塗れになっていく兵器の娘を遠くから見守ることしか出来なかった…！時には兵器として成りつつある貴方を邪険して、一切貴方の身体を握ろうとしなかった…こんな…こんな…内面も何もかも弱い母で…御免ね…リコ……。―

ブライン《おかあ…さん？…リ……コ……？？》

ブラインは無表情のまま呆けるように口を小さく開いて、一つ一つ台詞を切るように言った直後、更に続けて内部の開かず基盤（ディスク）の音声再生が続く。

再生パパン―リコが初めて太陽に酷似した試験兵器（プロトタイプ）として完成させる最中、奴らの眼を盗んでこのような基盤を埋め込んだ。俺達夫婦の伝言だけでなく、君が改造される前の“人間だった時の記憶”がそのままの形で残った君の…娘（リコ）だけの結晶だ。―

再生ママン―この基盤（ディスク）は貴方と深く関わりあった“あの人”…解るよね？…たくさん遊んでくれた“あの人”と再び出会った時にこの

基盤（ディスク）は“あの人”が…ザザザザザザザ！！！！！！！！―

話の途中に嫌な砂音が混じって、その雑音はブラインの表情を僅かに上へとつねり、微妙ながらの嫌みな表情を出す。

ブライン《わ…わからな…（！？き…基盤（ディスク）自体が震え……いや、基盤（ディスク）自体がもう旧式…という意味じゃない！基盤が…消えていくんだ…！）》

再生パパン―ザザザザザザザザ！！…くっ…そろそろこの基盤（ディスク）自体が要領限カカカカカカカカカ界か…急いで今後のことを伝える…いいか良く聞いてく…ジジジジジジジジ！！！！！！れ…リ……コ……！―

ピシリとブラインの脳内にめり込まれていた基盤（ディスク）が徐々にヒビが複数浮き出て、基盤（ディスク）に複数纏わり付いていた神経管が基盤（ディスク）内の情報をストローで一気に飲み干すようにして高速に吸い上げていく。

再生パパン―君はあ…あああああと少し…せ…い……かくには1に……ガガガガガ…後に君は“人間だった時の記憶”へと書き換……ザザザザザザザ！！！！！！―

再生ママン―あああああああああああああああの人ももももももも同じよよよよよよよよように組み込まれて…いるから……

その人に会え……ガガガガガ…ギャリギャリギャリギャリギャリギャリギャリギャリギャリギャリギャリギャリ！！！！！！！！！―

ブライン《あ…ぁあ……い…痛い……頭が……》

ブラインは両手で頭を当てるようにして両膝から床に折った後、脳内で高速に書き換えられていく気色悪い感覚と乱れていく砂音を聞いて五月蝿く思い踞る。

ブライン《わ……割れ……るっ！痛い……痛い痛いっ！！嫌……だ……っ！！！！》

ブラインは訳もわからず頭に当てた両手を何度も横に振るって、両膝を折りながら意味フな痛みから逃れようと頭に当てていた右腕を離し、ヨロヨロとした動きで上へと翳した時…

……コ…！来る……だ！！！！

ブライン《痛い…誰か……居る……の？》

右腕を上へと伸ばした箇所から一筋の光が開いて、その光は段々と大きくなりながらブラインが今いる薄暗い場所を明るく照らしてい

く。

…此方だっ！！……リコっ……俺の手を掴め！！そうすれば君はっ……！！

ブライン《その声…！そう…か……貴方は……》

ブラインはそっと大きくなっていく光に向けて右手を大きく開いた途端、熱く…より熱く握り締める優しい感覚を受ける。

そして記憶が書き換えつつあるブライン自身も変化が有り、その表情は……

全てを焼き尽くす終末の炎の力“フラム”……

心優しき大きな翼がある人間としての器“エール”……

……炎ノ翼……

ブライン《…フ……ラム……エール……。》

現世フラムエールの声（掴まえたっ！！）

本来あるべきごく普通の少女の…救われ痛みを柔いてくれた者に対して、感謝を表す涙を二つの外部監視眼（レッドアイ）からボロボロと溢しながら意識を開かれていく光の中へと、溶け込むように遠退かせていった。

第二百十七曲　またしても顔面出オチ（パートチュウ）ｗそして話は高速展開に

―妖精界　リュミエール　牢獄館（ノワール）　廃墟ビル１Ｆ　居室Ａ‐１０―

ブライン《!?》

ブラインにとって深く…より長い夢の中にいた機幼（ブライン）は、照らされていく光に向けて伸ばしその光から握ぎられた感覚を受けて引っ張られた途端…

開いた視界の中に先ず先に捉えたのは垢にまみれた黒い天井に、壁の所々には複数のヒビが蜘蛛の巣のように張りめぐらされていて、床には腐蝕で崩れ落ちた天井・壁の様々な瓦礫が多く散らかっていた。その時…

ディク『オィ!?オィ!?お嬢ちゃん!瞳孔開いているままだけど、ちゃんと生きているかぃ!?』

ブライン《??…（誰?）》

突如ブライン視点の画面外から“超ド顔うｐ”したフラムエールを

除くピチピチな女性人間と、元人間で口の回りに生えた髭フードオッサン二人と、黒い鼻しか見えない黒い一匹の子犬が“額に触れる手前”で現れて、二人と一匹とも大きく眼を開いたまま倒れこむ幼女を見下ろすように静止（ストップ）していた。

ブライン《（人間と元人間は別に驚く要素は無い…でも…）》

犬ツィオ「キャン♪キャン♪♪キュゥゥゥゥゥゥゥゥゥン♪♪（＊´ε、＊）」

仰向けになっている上顔ブラインの左側面にいる鼻だけドうｐ子犬だけは、心配そうな表情を出している二人を余所に鼻息を（＊´Д、＊）ハァハァと変態チックに荒げて、何度も鼻穴から白い蒸気がピューピューともう無にもかも“ド変態並みな高速蒸気を出していた”。

一子犬（エッィオ）自体がもう何もかもがヤバイ…（ぐったりとしている幼女を今すぐ＄＃＄％●×※◇したい変態萌な意味でｗｗｗ）ー

犬ツィオ「キャウキャウｗｗｗ…キュィィィィィィィィィン♪キュキュキュキュキュｗｗｗｗ」

シャイナ「イヤンｗｗｗ（＊´、＊）カルボの鳴き声って相変わらず可愛いぃぃぃぃぃｗｗｗ（どうせ中身は＃＄＊□※□な内容で言

っているでしょｗｗｗ今度は萌要素入りな禁止用語も含めてｗｗｗ）」

ディク『オイオイカルボ、怪我したばかりの子だからあんまり急かすんじゃないＺＯ。（まーまー、シャイナｗｗｗそれをわざわざ“書きたい気持ちを抑えている作者”も打ち込めたいのに打ち込めないこの小説自体の“レーティングＡ規制”を厳密に護っているからＳＡ★まー…後々この小説自体の連載が終えた時にノク（省略））』

ブライン《…。》

ブラインは仰向けになりながら安堵の表情を出す表面の二人の裏側…“決して口に出さない密話”を内蔵されている兵器としての力で聞き、少しムスッとする表情を出しながら再度左側面にいる鼻だけ変態息を出す子犬（エッィオ）に向けて外部監視眼（レッドアイ）に映る尻尾を横方向へ何度も高速に振るハァハァ顔の子犬の姿をじっと見た後…

ブライン《…此処は何処なの？》

シャイナ「！あっ、そだったｗｗまだこの子に今いる場所とこの状況を伝えて無かったっけｗｗちょっとヤバ気な展開なんだけど…」

ブライン《ヤバ気？？》

裏話が脳内に流れるのを振り払うように今一番聞きたい事を右側面にいた女性人間(シャイナ)に向けて顔だけ動かしながら訊ねて、訊ねられたシャイナはあぁ！と切り出そうとして中々切り出せなかった本来の内容を幼女の言葉で思い出す。

ブライン《？？どういう意味？？》

ディク『まだ完全に直りきっていない深手の君には理解しがたいと思うが、あの時の俺の相棒と戦って君が敗れた後に…「「戻ったぞ。状況は芳しく無いがな…。」」フラムエール！丁度良いところに戻ってきたな！！リコちゃんという子が丁度覚めた所だ。』

ディクが虚ろな瞳で見上げるように聞くブラインに今の状況を説明しようとしていた時、ギィと南側から軋むような金錐音が鳴って音が鳴った所から赤いコートを纏った長身男と青白い光で出来た上半身だけの女性霊がやつれたような表情で二人と一匹に向けて歩んでくる。

フラムエール「「…沢山いた。悪ノ魔だけでなく、下級妖魔(ライドレクルーゾ)や上級妖魔(デフロラトーレ)までもが混じって、我々を血なまこになるぐらいに探している。」」

シャイナ「げげっ！？マジかＹＯ…（。Д。；）」

ブライン《えっ…！？》

フラムエールは外の状況を二人に告げたと同時に床に伏せられていたブラインが両手に力を入れて起き上がる動作を見ると同時に、幼女の表情が“眼を大きく開いてあっと驚く”顔になる瞬間を見逃さなかった。

フラムエール「「…“目覚めた”な、リコ…。それは置いといてディク、シャイナ、カルボ、今すぐ此処から発つぞ。もう直ぐ側まで奴らが来ている。」」

ディク『そうだなぁ…こっからもうスグ５０m前後に下級妖魔（ライドレクルーゾ）と上級妖魔（デフロラトーレ）が１０…２０ぐらい詰め掛けて来ているなぁ～。飢えで正気を失っているといっても、嗅覚だけは俺らより異常になっているからなぁｗｗｗ』

ブライン《！前！！》

一瞬フラムエールがブライン（リコ）に向けて笑みを出した時にガシャァァンと扉の破壊音と共にシャイナ達を嗅ぎ付けた複数の妖魔が入ってきて、四肢の一部が変異した異形なるモノを床に数回叩きつけながらズシンと数歩歩くと共に沈むような音を立てる。

ライレクＡ－ギヘッ！！へへへ！！！－

デフロラトーレＡ－カハハハハハ！！！！見ィィィツケタぞぉぉぉぉぉぉぉおおおお！！！！－

ディク『うーん…どいつもこいつも似たような連中なこったｗｗｗ』

シャイナ「ＤＥＡＴＨよねぇーｗｗｗしかもこのシーンはアータの故郷（フランス編）と似たような状況になっているしｗｗｗ（第百十八曲参照ｗｗｗ）」

犬ツィオ「キャワン！！（´ε、｀）」

口内の牙をガチガチと煩く鳴らしながらシャイナ達をニタリと不気味顔で笑う表情を出し、その気色悪い表情を見たシャイナ達ははぁと両肩を落として戦闘体勢を取っているディクとフラムエールを除いて子犬と共に呆れたような表情を出す。

フラムエール「「何故このような状況になったのか、此処から移動しつつ俺が説明する。リコ、俺にしがみ付け。」」

ブライン《え？…きゃっ！？》

ぐばっと上半身半立ちしていたブラインをフラムエールは抱かかえるように持ち上げて、抱かかえられたブラインは少し両頬に赤みが出るぐらいに驚く声を数秒間出す。

幼女（ブライン）をお姫様抱っこしたフラムエールは顔を下に下ろしドキ★ポッしているブラインの赤顔を見て数秒間不敵な笑みを返した後、入り口付近でどんどん詰め掛けてきている妖魔に向けて強面な表情を出す。そして…

フラムエール「「奴らの眼に届かない場所へ急行する。ディク、シャイナとカルボを頼むぞ!!」」

ディク『あぁ、お前の過去の“大切な友達”もきちんと護れよ＾＾b…？ ｖｏｕｓ ｌｅ ｄｅｓｔｉｎ ｄｅ ｇｕｅｒｒｉｅｒ♪』

フラムエール「「あぁ。」」

背後に居るディクがシャイナとカルボを抱き寄せて両翼を出し爪形態にしている最中、契約者（名付け親）の台詞を聞いてフラムエールはお安い御用だと右手の平を軽く横に振って応えた途端、入り口に集まってきている妖魔達に向けて一直線状の赤い光をより太く射出した。

第二百十八曲　厭な厭な展開ほど毒されていく作者含めての“俺達”。

―妖精界　リュミエール　牢獄館（ノワール）　廃墟住宅屋根上辺り―

一時潜めていた廃墟ビルに集まった強襲妖魔達を全滅した後出発し朽ちた屋根と屋根を飛び渡りながら、身を一時的に潜む場所へ向かう道中襲いかかる妖魔達をディクとフラムエールは容赦なく叩き潰す。

ブライン《それで…私が…フラムエールに９２％強大破された後の事の発端は何？》

ディク『（！うぉぉっ！？ムッツリ系な幼女が俺の相棒の名前を言った！？一体何があった？？ｗｗｗ）あぁ、君が炎の海に落ちた後俺の相棒が大破した君を拾い上げた途端…』

シャイナとカルボを背中に乗せたディクは炎翼（フラムエール）が抱かかえている半壊幼女が突如本名を言った事で少しどよめくわざとらしい仕草を取った後、背中の翼を爪と化し腕と一体化した生きる異形を無増無人に振り翳す。

爪を大きく横・縦に振るたびに妖魔の裂かれた部分から赤紫色の血

が飛び散り、中身から飛び出した破れかけの臓物が少量鋭利な純白爪の一つ一つに付着する。

シャイナ「突然上空から大量の奇形妖精(バケモン)共が現れてさぁ、特に別に何も俺ら“奴らを引き寄せることの要因など一切していない”というのに…（多分）」

フラムエール「「理由がどうであれ、俺はただ“この子(リコ)”を護るだけだ！」」

ディクを追うように背後から掛けるフラムエールも左腕で幼女を抱き抱えながら片腕だけで刃を振りかざし、死者(ゾンビ)のように伸ばしてくる妖魔の腕を全て叩き斬る。

自身だけでなく抱き抱える幼女(リコ)にも腕を伸ばして、乾いた血痕が付いた皮膚・破れかけた黒い服を、やつれたように閉じかけているブラインの表面に触れるべく…

フラムエール「「リコに…触るな！」」

ライレクA―ギャァッ！！―

デフロラトーレA―グァァァァァァ！！！！―

炎翼（フラムエール）は抱かかえているリコに伸びてくる穢わらしい妖魔独特の不気味な褐色の腕に向けて、手にする●刀（●ｉｉリモコン）を強く握って思いっきり横へ薙ぎ払うように視界に捉えている全ての妖魔を叩き斬る。

フラムエール「「おおおぉおおおおおぉ！！！！」」

フラムエールは抱かかえているリコに対して防衛本能…否過去に兵器として改造されていく僅かな時間内で共に笑い合って、共に悲しんで、例え兵器として完全に記憶が全て無くなったとしても…

人間として生きていこうとするその一つ一つの思い出がフラムエールに取って“護るべき思い”となり、今抱抱えている彼女（リコ）に取って大切な仲間であるから向かってくる全ての敵を手にする武器で切り伏せていた。

ディク『おっとぉおおおおおぉ！！！！相棒！とうとう“スイッチ入った”かぁ！？よしっ！俺も負けてらんねぇ！！！！ＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡ！！！！！』

シャイナ「おまｗｗｗいい歳扱いて“若輩（見掛け）相手に本気で張り合うな”よｗｗ」

犬ツィオ「キャゥ。（、8、）」

ディクは前方で超殺る気マン★マンな表情を出す相棒（フラムエール）の凄まじい覇気を受け、何かと自身にも奮え正せる変なテンションが内面から燃えるように膨れ上がって、数秒間外人四コマのガッツポーズを取った後血痕が付いた爪を拭い払って襲い掛かる妖魔を次々と皆殺しにしていく。そんな最中…

ブライン《…フラ…？何この記憶…え？？》

ザシュザシュと二人が襲い掛かる妖魔を好き勝手に絶命さえ余所に血みどろ全快☆3・7・5・6・4タイム♪している最中、フラムエールに抱かかえているブラインは顔を上に上げて決死に奮闘しているフラムエールの表情を見た途端…

―…コ！…俺が……いに、……から！！……のむす……出すな！！―

一瞬フラムエールの姿が白衣の衣を着た長身男に代わって、その右腕の先に持つ錆が付着した鉄製の長いモノを持って視界が一切利かない真っ白い世界の中で“何かに向けて”振るっていた。

ブライン《（此処は…何処なの？私は…私はフラムエールと…。）》

試験兵器（ブライン）でも知らない世界の中でただ白衣の男に身体を引き寄せられて素顔さえ解らないまま抱かかえられながら、ボロボロの身を抱かかえられている男に全てを預けていくうちにブラインに取って懐かしい感覚が脳裏に過ぎる。

纏う白衣の衣に染み付いた苦いような…嫌々しい薬品のキツイ匂い…

抱えられている手の肌は冷たかったが、何処かで優しい気分になれ居心地の良い独特の匂いを感じて…

ブライン《…これ…が…私の……お…とう…さ……ん。》

だが次第に振るう腕自体が遅くなって鈍足になった時に隅々から赤い斑点のようなものが滲み出て、同時に息切れる声も聞こえ腕だけでなく頭部・背中からもジワジワと赤い滲みがにじみ出て白衣の衣を段々赤く染め上げていく。

―…コだけは…！……俺の娘だ……いにっ！！―

ブライン《っ！》

その直後白衣の衣を着た男の頭部裏から銃声のような音と共に大量

の血が勢い良く噴出し、ビシャビシャとバラバラに砕かれた脳の肉片がドッペリと床に落ちて、抱かかえられていた腕が力なく爛れるように落ちブラインは宙に投げ飛ばされる。

数秒間宙に浮かんだブラインが見た光景は頭部を撃ち抜かれモノ抜け殻になった血塗れの白衣の男、横向きに倒れ真っ白な床に大きな花を咲かせ宙に浮かぶブラインの視界に塞がっていた存在をあと数秒で見…

フラムエール「「リコっ！！」」

虚ろな眼になっていたブラインは突然フラムエールの悲鳴に近い声を聞いて、ハッとしたような表情を出し夢という幻の世界から現実に引き戻される。

ブライン《ぅ…私……一体……何者なのか……。》

フラムエール「「（俺と同じように本来の感情が目覚めて、記憶と共に混乱しているのか？）リコ…大丈夫か？」」

ブラインは抱かかえられているフラムエールの心配そうな素顔を見て、ブラインは《問題は…無い。》と言い返し顔だけを右往左往に動かして周囲の状況を視界の中に捉える。

ディク『戦闘中に突然気を失ったからなぁアンタは…。（´Д｀；）俺の相棒もそん時のアンタの状態を見て“モノ凄っっっごい形相になって焦っていた”ぞ。ｗｗｗ』

シャイナ「そうそうｗｗｗょぅι゛ょのアンタが突然気を失った瞬間に、ク●ガリサァァンは凄ぇ形相で発狂してさぁｗｗｗ「リィィィィィィィィィィコォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！！」」と大きくセ●チューヴォイスで叫んでポン刀振り回していたしｗｗｗ」

ディク『その結果がコレだよ。まったく…心配させやがって…ｗｗｗ』

ワザとらしい悪びえた声を出しながらお手上げな仕草をするディクとシャイナを余所に、ブラインは横向きの世界で映る夥しい数の妖魔の引き裂かれた・頭部が無い死体がゴロゴロと転がっている阿鼻★叫喚な光景を見て思わず息を漏らす。

今居る廃墟の屋根だけでなくボロボロに朽ちたアスファルト上でも二人が殺った妖魔の死体も複数転がっていて、チーター達の力で切り裂かれた新鮮の死臭・未消化有りの糞臭がツンとフラムエールに抱かかえられている少し高い三角型の屋根の上まで漂って来ていた。

―簡単に言うと、襲い掛かった全ての下級・上級妖魔を出発前の入

り口殲滅を含めて約“１３１３３７５６４１４２１９体”を二人だけでぶちのめしたようだった。―

ブライン《（こんなに沢山の妖ノ魔を……）もう…大丈夫……貴方の声で……何とか……。》

フラムエール「「…無茶をするなリコ。（自己修復機能が有るとはいえ、内部の経路まで一部損傷してしまっているから修復機能に集中できる安全な場所へ早く行かないと…。）」」

フラムエールはリコの言葉を聞いてもまだ息苦しいような声を聞いて若干苦い表情を出しながら抱えているブラインを見た後、後ろに居る武装状態（エクラトンモード）を既に解いているディクに顔だけを向けて視線（アイコンタクト）で今すべき事を口に出さずに寡黙に伝える。

ディクはフラムエールの熱い視線を見て黙って顎を下に下げた後、足下に転がる首無し妖魔の死体をブーツ先で蹴って朽ちたアスファルト上へと落下させた後…

ディク『集中出来るとすると、奴らの嗅覚が効きにくいドブ川へ行くか？それとも下水道に潜って…《そこよりも、良い場所が…ある。…》おっ？』

ディクが襲い掛かった妖魔達の特長を裏を斯くようにしてフラムエ

ールに言った途端、炎翼に抱き抱えられているブラインに言葉を遮られてちょっと呆けるような素顔を出す。

ブライン《そこなら…私の……損傷した箇所を癒える装置もあるから…それ……だけでなく…》

フラムエール「「リコ？」」

ブラインは虚ろな両眼で再び前へと向き直し、カタカタと震える内面のコード類が剥き出しになっていた半壊右腕を前に伸ばしてくる方向先を人差し指で、彼らに行くべき指針ともう一つの事を彼らに伝えた。

ブライン《彼処は…貴方達がこの世界に入ってきた……その……理由が…彼処にあるの…。》

第二百十九曲　エツィオ流前を向かない子には痛いお・仕・置・き☆

抱き抱えているブラインが指す方向に向かうシャイナ達は、途中殲滅した妖魔だけでなく鎧付き悪魔も現れて立ち塞がったが、仲間を助ける為に迅速行動しているフラムエールの一太刀で一瞬の内に首が上へと飛び、絶命さえ上げられないまま切断部分から赤い花を咲かせる。

そして朽ちた廃墟住宅地をたった数秒間に真っ赤な誓いぃぃぃぃぃ風の地獄絵図に変えてそこから後をし、真っ二つに割れた路上をディクとフラムエールは魔力で空中疾走しながら牢獄内の高台にある“石棺らしき大きな建物内”へと突入する。

―妖精界　リュミエール　牢獄（ノワール）館　何かしらの廃墟遺跡　地下２Ｆ　隠し部屋ｌ―

医療装置≪…Ｓｕｐｐｌｅｍｅｎｔａｒｙ　ｍｅｄｉｃａｌ　ｔｒｅａｔｍｅｎｔ　ｔｏｏｌ　ｏｒｇａｎｉｚａｔｉｏｎ　Ｔｈｅ　１７５ｔｈ　ｔｈｅ　ｆｉｎａｌ　ｄｅｃｉｓｉｖｅ　ｂａｔｔｌｅ　ａｒｍｓ　Ｃｏｎｎｅｃｔｉｏｎ（補助機能管を戦闘用模擬体１７５号に接続）…１０…９…８…７……３…２…１…Ｏｒｉｇｉｎａｌ　Ｒｅｐｌｉｃａｎｔ　Ｔｈｅ　１７５ｔｈ　ｉｓ　Ｃｏｎｎｅｃｔｅｄ　ｓｕｃｃｅｓｓ（二次元兵器（オリジナルレプリカント）に接続成功）…Ｔｈｅ　ｄａｍａｇｅｄ　ｐａｒｔ　ｉｓ　ｂｅｇｕｎ　ａｎｄ　ｔｈｅ

ｅｍｅｒｇｅｎｃｙ ｐｒｏｃｅｄｕｒｅ ａｎｄ ｔｈｅ ｃｏｒｒｅｃｔｉｏｎ ｂｅｇｉｎ．（破損箇所修復プログラムを開始します。）≫

ビィィとカプセル状の機械の中に入れられたブラインは無機質な音声を聞くと共に両眼を閉じて、装置の中に備え付けられていたケーブルがブラインの全身に突き刺して、その根元から流れる白い光を身体（なか）に入れながらじっと機械の力を借りた治療に集中する。

シャイナ「うへぇぇぇぇ…何か病院のトコの報道でよく見る集中治療室（ＩＣＵ）を凝縮化（コンパクト）したような“未来系統の装置”がゲームの中しか見られないこの“現実世界に有る”なんて…。」

犬ツィオ「キャウキャウ。」

シャイナはブラインが集中治療しているカプセル型の見たことも無い器具を見てうわっと息を漏らし、覆われたガラスをペタペタと足下にいる子犬（エッィオ）と共に何度も触りながら興味心身に器具を素手で触れていく。

フラムエール「「もともとは応急処置器具として使われていたコンパクト型の医療器具。より詳しく追記すると製造メーカーはフェニキアＶｅｒ．４．８９だ。本来はこのような内部損傷を復元するシステムなど入っていないが…よし、これで…」」

片膝を折って床に着けているフラムエールはカタカタと装置の側で何かをいじくるようなキーボード音を立てる仕草を取った後、顔を上に上げてカプセル内で治療を受けているブラインを数秒間眼を細めながらじっと黙って見て…

医療装置《The latest program is updated.（最新プログラムを更新）The former version is updated to the latest version again.（前バージョンを最新バージョンに再更新）All the damaged sections are corrected as for the remainder at 200 seconds.（残り200秒で全ての破損箇所が修正されます。）》

フラムエール「「よし…。本来ならば2から3日掛かるこの治療プログラムを“数分で完全修繕出来るように書き換えた”。後は、このまま数分経てばリコは完全に修復される。」」

ディク『すげぇな…ｗｗ戦闘技だけでなく、このような“ヘンテコな鉄の物体”を自在に操作できる技術も持っているのかｗｗ』

シャイナ「エ?…ア…アンタタダノ戦ウダケノ戦闘兵器ナ人形ジャナイノ??（　。Д　。）…」

ディクは両腕を組みながらフラムエールの圧倒的な戦闘能力だけでなく、“どんな電子機器・今現代のコンピューターを自在に操る能力がある”意外な得意分野を見て、眼を大きく呆けたまま隣に居る片言シャイナと共にただ呆然に立ち尽くす。

フラムエール「「失敬な！俺はただ戦闘兵器（殺人マシーン）として創られたワケじゃないぞ！！戦闘技術だけでなく電子戦闘（エレクトロニックバトル）にも適応できるように改造されているのだから。…まぁ、この…今のような通常“今”の現世界に生きる機械を携わる人間でも扱い不可な機器でも…」」

フラムエールは破壊を尽くすだけの戦闘人形として見られた二人にややむっとした表情を出して立ち上がり、両腕を組んで胸を大きく張りながら自身の戦闘以外の得意面を更に続けて二人に言う。

フラムエール「「俺にとっては“ただの玩具”だ。今現代の技術はこの世界に生きる人間達にとって高度な存在だと言うが、俺から見ればまだまだ“小学生レベル”に過ぎん。」」

シャイナ「（オウッ…フｗｗｗなんか色々と三次元（リアル）にいる開発者にとって“喧嘩を売るような宣告”を告げるように言っていますがｗｗｗ）そ…そうっすかｗｗｗ」

ディク『まぁ…な、相棒（フラムエール）は前世紀の滅びる前の…えっと、確か３４７８年の地球に生きた“人”だからなぁ～。その年代になるともう

今以上の高度なモノが多く発展して、フラムエールが生きたような…』

ディクは数時間前に廃墟工場内で見つけた凝縮版の資料（第二百四曲参照）を再度右手の平から出し元のサイズへと戻した後、手にする資料の紙を一枚ずつ捲りながら再度資料内容を黙って読み直す。

フラムエール「「だがその時の人口はもう3億以下まで減少しこの３４７８年８月３０日１２時４７分３８．９０秒時点で3億が“最初で最後の最高人口数”だったんだ。人口数が最高２１００年で７５億まで繁殖したとの記憶（ログ）が、俺の中のある“要らないメモリーログ内に保存されている”。…早く“本当の人間”に成りたい…。」」

ディク『…。』

フラムエールがブラインが眠るカプセル装置に背を向けて後をするような歩調をし、ディクは一旦黙って読んでいた資料を読むのを止めて何処かへと歩いていくフラムエールの寂しい後ろ姿を顔だけで追うように動かす。

フラムエール「「ディク、シャイナ…俺は本当に…人間に成れるのだろうか？太陽そのものの力を秘めた俺の穢れた身体に…」」

―どうした小僧？さっきまでの威勢は何処に行ったんだ？―

フラムエール「「！」」

フラムエールはディクとシャイナに背中を見られる視線を受けながら施錠（ロック）されている厚い鉄の扉に向けて右手を触れて俯いていた時、突然フラムエールの脳裏に子犬…魔神（エツィオ）しか聞こえないテレパシー音声が響いて、ハッとするような表情を出す。

フラムエール「「魔ノ神…。」」

フラムエールは背後にいる子犬に向けて身体を後ろへと振り返ると、背後にいたシャイナとディクが黒いカーテンに上から敷かれる様に覆い隠されて、全体的に真っ黒な世界がフラムエールと床にいる子犬を上部にある照明器具（スポットライト）に照らされた時、子犬の姿が一瞬の内に元の黒いアサシンローブを纏ったエツィオへと戻る。

エツィオ「まだ迷いがあんのかよ炎翼（フラムエール）。何時までもそんなくだらねぇ迷いなんぞ引き摺っていたら…何時まで経っても“人間に成れないぜ”？」

フラムエール「「っ…！しかし…俺はっ……」」

エツィオ「だぁぁぁぁかぁぁぁぁらぁぁぁぁ、そんなに真剣に

なるぐらいまで悩むんじゃねぇよ!!この長身真っ赤っか“人間”ＭＥ!!」

フラムエール「「っな!?」」

フラムエールは数秒間エツィオから視線を逸らして少し顔を俯いたまま両拳をぐっと握り絞めた時、突如ドスッと腹部に強い圧力を受けて唐突に顔を上に上げて身体をくの字に折る。どうやらエツィオがフラムエールの腹に向けて右腕ごと深く殴り刺したらしい。

エツィオ「前向けよ炎翼（フラムエール）。いつまでも下方向に向いているから、ほらっ♪こんな簡単に間合いを詰められて虚を突かれるんだぜ??」

フラムエール「「ぐっ…!」」

ぼへへぇとふざけた表情で鼻穴を左人差し指で穿るやる気無しエツィオが突き刺した右腕に力を更に入れて、メキリとフラムエールの身体内の組織ごと背中から突き破る手前まで加減する。

エツィオ「これが“今のお前”なんだぞ?この先…数々の敵が容赦なく襲い掛かるというのにこのザマはいかんなぁ…あのバァサン相手に生き残ったお前はまさに奇跡ともいえる。でも…コレは駄目だ。とてもじゃないが前世紀の最強戦闘用模擬体とは言いがたいほど“超最弱な人型兵器”だぜコレ?」

フラムエールはぐっと歯を食い縛りながら後退していく足を無理矢理力を入れて後退を防ぎ、エツィオの史上最強の魔神の力を腹部に受けながら震える右腕を左腰に掛けている●刀（●ｉｉリモコン）の柄へ持っていく。

エツィオ「その刀を握った瞬間に、お前…背中から内臓ごとＢＡＮするぜ？まぁ…その覚悟があるなら俺に一太刀ぐらい入れてみろよ？どうせ…」

フラムエール「「構う…ものか…！内部の…組織が一部が吹き飛んでも…！！」」

エツィオ「！」

ポタポタとフラムエールの腹部からエツィオが刺した右腕の篭手に赤い鮮血がジワジワと染み付く中、フラムエールはエツィオに向けて屈強の表情を出しながら震える右腕を力で止めて●刀（●ｉｉリモコン）柄を握り締めた瞬間…

フラムエール「「俺はっ！！！！！…退かんっ！！！！！」」

第二百二十曲　Ｓｏｌｄｉｅｒ　ｏｆ　ｂｒａｖｅ　ｆｌａｍｅ　ｔｏ　ｏｐｅｎ

―ＶＳ魔神エツィオ事後　二人だけの精神内戦争―

…ぁ……

……ハ……ァ……

……ハァ…。……

ふ……か……深い……や……み……

…に……

ドロドロとした遅く刻が流れる深い意識で、フラムエールは中身から出る熱い鼓動と口の中に溜まる鉄の味を感じて閉じられていた両眼をゆっくりと震えながら開ける。

……イ……タ……

……イ……

……腹に……手に……

……口に……ニモ……

……ナ……カ……モ…

フラムエール「「？…腹に受けた魔ノ神の傷が……無い？」」

先ず先に映ったのは斜めになった世界で、表身体には固くて冷たいモノが触れている。どうやら自分は床にうつ伏せ状態になっていたようだ。

……ナゼ……何故何故何故

の中に溜め込んだ少量の血痰をプッと真っ黒い床に吐き捨てて、両肩や腰に付いた砂埃を右手で払い落としバサッと二つの長い裾を時々吹く風で少し横に靡く。

フラムエール「「？？…何故だ魔ノ神？何故俺を…」」

エツィオ「んにゃ、一回アンタ“死んだよ。”んー、正確に言うと、一度“死にかけた”んだけどな♪」

フラムエール「「し…死にかけ……た！？」」

前方から悪そびた表情を出しながらテポテポと歩いてくる無邪気顔（チルドレン★フェイス）のエツィオが現れて、フラムエールはエツィオの言葉を聞いて真に受けるように後ろにたじろぐ仕草を取る。

エツィオ「うんっ♪ありゃ凄かったＹＯ★下半身がバッ★キュッ☆バッ♪な状態になったというのにぃｗｗｗ」

フラムエール「「？？？ば…バッ★キュッ☆バッ♪？？？何だそれは…（汗）」」

エツィオはわざとらしいお手上げな仕草をしながら何度もフラムエールの前を横に往復し、エツィオはありのままにあったことを少し

刻を遡る気分で語り始める。

エツィオ「あ…ありのままにあった事をは…話すぜ（嘘）そ・れ・は・ね（ハート）」

ちょっとデ●ニー版映画バージョンＰ●Ｐダ●タン王子提供による“●間の砂”を使って、ある程度理解しやすい？エツィオの右拳がフラムエールの腹にめり込まれ反撃に移す時間系統へと戻す。

―事前―

エツィオ「プギャァー♪（＾Д＾）ｍｇ」

ドチャアアアアアアアアアアア！！！！

フラムエールの背中から勢い良く飛び出す莫大な赤い鮮血、フラムエールの身体に大きな風穴が開いた身体はビシャビシャと内部にある臓物さえ消し飛ばすように抉れ、何が本来の臓器だったのか解らない肉片が黒い床に複数血塊と共に付着していく。

内部ごと抉られたフラムエールは口から中量の血の塊を吐き出し、一度手に取っていた●刀（●ｉｉリモコン）の柄を無意識に放してしまい腹に開いた風穴の鮮血ごと前乗りへとなるように地へと落ち

ていく。

エツィオ「こんなモンか…言葉と行動じゃぁ何も出来…「Ｄｏ　ｎｏｔ　ｄｅ…ｃｉｄｅ　ｍｅ　ｔｏ　ｈａ……ｖｅ　ｗｏｎ　ａｎｄ　ｄｏ　ｎｏｔ　ｐｕｔ　ｉｔ　ｗｉｔ……ｈｏｕｔ　ｐｅｒ…ｍｉｓｓｉｏｎ！！（か…勝手に…決め…るな…！！）Ｍｏｒｅ　ｔｈａｎ　ｔｈｅ　ｏｔｈ…ｅｒ　ｐａｒ……ｔｙ　ｉｓ　ｓｔｉｌｌ　ａｌｉｖｅ　…　Ｔｈｅ　ｆｉｇｈｔ　ｄｏ……ｅｓｎ'ｔ　ｅｎｄ！！（まだ…俺はくたばっていない！！）」！」

ガシンとエツィオの黒ブーツ先に刺さる手前に白刃の光を放つ細い刀身が突き刺さって、エツィオは暢気顔から再び真剣顔に戻って目の前に映る光景を見る。

フラムエールは風穴が開いた身体でも倒れ掛かる鮮血の身体を、瞬時に抜いた●刀（●ｉｉリモコン）で黒い床に刀身を突き立てて腹に風穴＆ａｍｐ;血だらけなボロンボロンの身体を無理矢理支えていた。

フラムエール「「ふ…勝率は0…Ｉｔ　ｉｓ　ａ　ｓ…ｔｏｒｙ　ｇｏ……ｉｎｇ　Ｃｒ…ａｚｙ　ａｍｕｓ……ｉｎｇ（クソ面白い……計算だことだ。）だが…それ…でも……！」」

魔神という“絶望的な相手”でも決してフラムエールは退く事を一切せず一歩前へと歩みだして、戦いという真剣な表面を出しながら

ボタボタと口から吐き出る血を左手でぐっと拭い取る。

フラムエール「「Ｔｏ　ｄｅｆｅｎｄ　ｈｅｒ　ｗｈｏｍ　Ｉ　ｈａｖｅ　ｔｈｒｏｕｇｈ　ｌｉｆｅ　…　Ｉ　ｃａｎｎｏｔ　ｆａｌｌ　ｉｎ　ｔｈｉｓ　ｃｏｎｄｕｃｔ　ｏｎｅｓｅｌｆ！！（俺の…中に居る“彼女”を一生護…るために……此処で…倒れるわけには…此処で…死ぬわけにもいかん！！）」」

エツィオ「ヒュー♪~（・Σ・）さりげなくカッコイイこと言うねぇ～♪」

ブーツ先に突き立てていたフラムエールの●刀（●ｉｉリモコン）が瞬時にエツィオの咽仏に向けて掻き切るように振り翳され、エツィオは余裕笑みな表情を出しながら顔を後ろに仰け反らせ口を八の字にさせながら笛を奏でる。

フラムエール「「おぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」」

エツィオ「ＴＨＥ★回避コマンドゥ♪Ａ＋Ｂ！ＲＬ＋ＲＲ！！Ｒ１＋Ｒ２！！！○＋×！！！！Ａ＋Ｘ！！！！！ヒィィィィィィハァァァァァァァァァァ！！！！」

フラムエールはレ●ター教授直伝“軽やかステップ”で避けている（移動している）エツィオを追うように走り出し、逃げるエツィオ

をフラムエールが追う・刀を懸命に振り翳すたびにビシャビシャと内部の組織が床に落ちる音を立てて、フラムエールが通った箇所に赤い斑点が道標のように付けられる。

腹に風穴が開いた状態でも手にする刀はまだ軽く感じて不思議に腕自体が全然健在だった。普段なら血の量を伴って振るう事すら儘ならず意識混濁して、そのまま何も出来ないまま流れ出る血と共に器ごと尽きるなのだが…

フラムエール「「俺はまだ…戦える！！」」

ビュォォォォォォォォ！！！！

前世紀最後の戦闘用模擬体としての最高性能だろうか床に落ちたフラムエールの血が一つの赤い気流となり、エツィオを追いかけるフラムエールの背後から床に落ちた全ての血が開かれた風穴に入っていき隅々から“元の身体へ・破かれた服ごと高速治癒”されていく。

エツィオ「（フーン…本体（コイツ）が完全に死滅しない限り“無限治癒能力（インフェニティーケアリー）”が起動するのか。だったら…）」

エツィオは後退するのを止めて立ち止まった後両拳をぐっと丸めて力を入れた途端、エツィオの全身から青白い旋風が巻き起こって一つの柱が数秒間大きく聳え立つ。

エツィオ『（魔神化してさっさとケリを付けてしまおうか…）じゃーん♪俺の本来の姿“魔ノ神”！“魔神”だＹＯＯＯＯＯＯＯＯＮ★』

フラムエール「「！！」」

青白い光の柱が止んだ途端本来のエツィオの姿である半人半竜のような黒い漆黒悪魔“魔神（第六十五曲参照）”が現れて、半分治癒されているフラムエールがエツィオの本来の姿を見て少し眉を上に上げて驚く表情を出す。

魔神（エツィオ）はフラムエールが驚く間に左腰に掛けられた長剣の柄を手に取って、シャランと鞘から引き抜いた後両手に持ち替えながら剣を横に構えて刀身に魔力を注ぎいれる。

フラムエール「「（！凄まじい魔ノ力だ！！これが…）」」

エツィオ『一度“ソノ身”でじっくりと味わえ。一回ぐらいは敗北というモンを知らないと…な？』

再生しかかっているフラムエールがエツィオの刀身から放つ魔力を前から受けて数歩退く仕草を取り、前方からまぶしいぐらいに輝く

強い光に一旦刀を持つ右手を顔を覆い隠すように構えた瞬間…

全てが真っ黒い世界が白くなるように、今居る全ての存在が真っ白へなっていった。

第二百二十一曲　ガチンコバトル第一回結果　アサシン魔神　○ｖｓ　赤鉄銃剣

フラ……ム…エー……ル！！……

フラムエール「「（？…誰だ……リコ？？…シャイナ？？…ディク？？）」」

あの後魔神の持った剣の光に巻き込まれたフラムエールは肉体という概念さえわからず、只意識だけが生きている摩訶不思議な身体体験を受けている中、暗転した世界の中で騒がしい声が響き渡る。

フラム…否フラムエールという無の存在が“容が無い炎の思念体（スライム）”として先程の真っ白い世界が一変したかのようにドロドロとした墨世界に漂っていて、思念体は無意識に声がした方向に顔を向けるような仕草を取る。

どうし……フラム……！フラムエー……！！！

何大の…が倒れ……！！いい加減起き……クソ＃＄％＆※▽※がぁ！！！！…

そんな状態でもフラムエールという“炎の存在”は生きていた。否肉体を失い魂という存在になっても、フラムエールは無い身体の熱を感じて“活きている”感覚を受け不可思議な思いを過らせる。

フラムエール？「「（あぁ…そうだな…ディクは解る…しかし、この騒がしい罵倒といい…あの泣き虫垂らしの不細工顔女か…くくっ！しかし…）」」

…喋…れ……な……い…。

声帯がヤられたのか喋ることすら出来ずパクパクと口だけ小さくまたは大きく動かして、声がする方向に自身の声がヤられても上部の彼等に向けて皮肉ながらの彼らしい表面ならではの小さな笑みを出しながらそっと本来の裏面を呟く。

フラムエール？「「（頼む…俺は…まだ……活きて…いる…どうか…）」」

…聞いてくれ。俺は……俺ハ……オ

レ　ハ　……

オ

レ

コ

ハ

コ

ニ

イ

ル。

……ゴ　メ

ン……

……オ　レ

ハ……

……キミ

ヲ……

フラムエールは時空が乱れた闇の中へと引き摺り込まれるように落

ちていく。言葉…ワードの一つ一つがフラムエールの“願望”として現れており、只炎は何れ消え　行く存在とし　て全　てが消え　て　しまう　最　後　の　瞬間という時まで吐き　続け　。

……ス……マ……

……ナ……

……イ。……

……

エツィオ「…しゃーねぇーなぁ…」（´へ、）Γ人間モドキ（アイツ）にゃぁ俺に対して十分な素質あったし…なんにせよ…」

そんなドロドロとした暗い世界の中で消えていく赤い炎をじっと睨み続ける低位置版（－２００m）ジ●ジョ立ちエツィオが居て、既に魔神化を解いていたのか腕を組みながら顔だけを上に向けてまだ声が聞こえる現実世界の彼らを茶化すようにケラケラと笑う。

エツィオ「十分な戦力が今此処に誕生したワケだ。これから林檎が居る特異界で十分“俺の援護者（なかま）”として期待してるし、アイツの中に混合したあの人も出来る限り今の現実世界へと引き戻す構成を探って行きたいしな。よしっ！！」

時空に歪みが来ている世界でも“エツィオだけは平然としており”パンと両手の平を乾いた音を立てながら両手の平同士を合わせた後、

上空で消えていく炎に向けてゆっくりと包むように両腕を前へと伸ばして…

エツィオ「Ｉｏ　ｌａｓｃｉａｉ　ｌ'ｉｍｍａｇｉｎａｚｉｏｎｅ　ｃｏｍｐｒｅｎｄｅｒｅ！（生きる総ての世界の魂と共鳴！）」

エツィオの翳した両手の平から大きな純白の塊が飛び出してキラキラと白銀の粒子を周囲に散らしながら、消え行く炎を身体に抱き寄せるように覆い被さる。

やがてその純白の塊はヒトに近い容に変えていき純白の体にして機械のような骨組みで出来た巨大に、首が長く途中から埋め込まれるように出てくる純白の長いケーブルを髪のように流す背中から実写版サ●カノ機械翼が生えた“機械天使”がぎゅっと炎を抱きしめてそのまま体育座りをする体勢を取る。

エツィオ「Ｌａ　ｓｏｍｍａｔｉｏｎ！　ｓａｕｖｅｕｒ　Ｍｅｓｓｉａｈ！！（召喚！救世主（メサイア）！！）」

カッと救世主（メサイア）が抱きしめている両手の平の指間から一つ一つの赤い光が突き刺して、救世主（メサイア）の背中から生えている機械翼がバサリと数回羽ばたいた後光が一点に集中し暗闇の世界を一瞬の内にして太陽のように赤く染め上げていった。

…

……

……

ーＶＳ魔神エツィオ事後　二人だけの精神内戦争　事後ー

エツィオ「…つーワケで“前話”に繋がるんＤＥＡＴＨよぉ～♪超ｇｄｇｄな小説に付き合ってくれてテラサンクス★」

エツィオは“カメラ目線”に向けて両手の平をプラプラと爛れるように動かし、高校★ギャルのようなキャピキャピとした雰囲気を持っていくようにおちゃらける仕草を取る。

フラムエール「「むっ…。（汗）そのｇｄｇｄというよりも“全然話が進まない作者の苛立ち”も少なからずともこの小説内に含んできているがな（苦笑）それよりも…」」

フラムエールは自身の腕・手・足を見渡すように視点を動かして、魔神に完璧に再構成された“圧倒的魔力（反則チートＤＥサーセンｗｗｗ）”を眼を大きくするような感じで表面は落ち着いたような表情を出しながら内面は驚愕すぎる実態に思わずたじろぐ仕草を取る。

フラムエール「「（凄い…１００％俺の…“俺だけの身体”として完璧に構成されている！！）これが…魔ノ神の“力”！！」」

エツィオ「この俺に出来ねぇ事などねぇんだよ（笑）俺の魔力はほぼ“この星さえ全て掌握できるほど支配する存在”なんだからなぁ～♪だもんでぇ～。」

エツィオは完全修復されて非常に驚いているフラムエールの姿を見て、ケラケラと笑いながら両腕を組み炎翼をフツーに素通りした後…

エツィオ「そろそろ戻れ、炎翼（フラムエール）。現実世界で“俺のシャイナ”と“友達”がお前を待っている。あっ…復活した“ゴスロリょぅぃぢょ”も居るぜ？隣にｗｗｗ」

フラムエール「「！リコが！？っ！うぉっ！？」」

フラムエールは前方にいるエツィオの台詞を聞いた時無意識に右腕を伸ばして、手の平を広げながら駆け寄ろうとしたが突如浮遊感を覚えて一旦めまいがするようなふらつく仕草を取る。

エツィオ「Ｌｅ　ｊｅｕ　ａｇｒ?ａｂｌｅ　ｅｓｔ　ｄ?..ｊ?ｕｎｅ　ｆｉｎ（時間だ。）んじゃ、俺式極☆楽なＴＥＳＴはコレにて終了するＺＥ★乙！！」

フラムエール「「ぅ……な…にを……いっ……て…。」」

ドサリとフラムエールは前のりになるように倒れ焦点が合っていないボヤケた視界の中、フラムエールに向けて（＾Д＾）ｍｇ差しするエツィオを見続けた後…

エツィオ「Ｖｏｕｓ　ａｖｅｚ　ｄ?ｊ?　ｌａ　ｑｕａｌｉｔ?　ｃｏｍｍｅ　ｌ'?ｔｒｅ　ｈｕｍａｉｎ.Ｓｉ　ｌｅｓ　ｓｅｎｓａｔｉｏｎｓ　ｓｏｎｔ　ｓｕｒ　ｓｅｕｌｅｍｅｎｔ　ｌｕｉ…Ｊｅ　ｓｅｒａｉ　ｄ?ｊ?　ａｓｓｅｚ.」

第二百二十二曲　小説版限定“隠しボス”と戦ったディクサァァンの無謀な闘い

―妖精界　リュミエール　牢獄館（ノワール）　何かしらの廃墟遺跡　地下２Ｆ　隠し部屋―

シャイナ「いい加減起きろやぁ！！！！ヽ（、Д，＃）ノこの長身※□△※☆▼◇野郎！！！！！！」

ディク『ちょっｗｗｗ待て待てシャイナァ！！！！！（；´Д｀）あ…相棒に向けてそ……そそんなことしちゃいかぁ…うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！（多汗）』

分厚い鉄の板で施錠（ロック）されていた扉に歩んでいたフラムエールが突如前のりに倒れた後、直ぐに駆け寄ってディクと共に声かけしても一切眉一つも動かず、死んだように眠っているフラムエールを見てシャイナは一時的に女性らしい悲鳴な表情を出していたが…

シャイナ「起きろ！！！！起きろや！！！！！このポンコツガンマンがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！テメェの●■▲◆をもぎ取るぞおおお

ドガ☆ゲシ★ドス♪ボグッ☆ベッ★キン♪♪

―いつまで経っても起きない事でシャイナ自身の脳内ストレスがゲージさえ振り切れてしまう位に達した直後“逆ギレ状態（暴走状態）”になり、シャイナはドカドカとブーツの靴先で強く何度もフラムエールの“顔面”&“男のアレ”に向けてフルボッコ蹴りしていた。

―

シャイナ「このクソ☆℃%♀∇♪めっ！！！！こんだけやってもまだ起きないのかよっ！！！！！それに綺麗な顔をして“男の癖に女々しく死んでやがる”！！！！！」

ディク『おっっっっっっっっっっっっまっっっっっっっっっっっっ！！！！！！だからと言って、その“鈍器”だけはやめろオオオオオオオオオン！！！！！！！俺の相棒を勝手に殺さないでくれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！（涙目）』

ディクは暴走している赤目状態のシャイナを背後から羽交い締めしながら、いつの間にかシャイナの両手に持っていた巨大な“アレ”をディクは持てる力をフルに発揮して両手でシャイナの上に翳す両腕を羽交い締めしていた。

シャイナ「この女々しい赤ポンコツめっ！！！！！！俺がヤツを殴った時は全然痣一つも浮かばなかったあの“鉄壁過ぎる最強肌（第

百七十三曲参照）”が憎い！！！！！こぉぉんぐらぃのモノを使ってＤＯ★タマに向かって救済ショックを与えないと奴は…っ！！！！！！！」

ディク『イヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤ（必死）どう見てもコレは“殺す気マンマン”だろぉぉおおおおおおおおおっ！！！！！！』

何故人間相手であるディクが“必死な形相で羽交い締めしている”光景を、閲覧用カメラを使って少しずつ上へと上げていった時…

シャイナ「Ｍａ ｐｒｏｍｅｎａｄｅ ｅｓｔ ｍｉｓｅ ｓｅｕｌｅｍｅｎｔ ｐｏｕｒ ｃｅｃｉ. Ｊｅ ｐｅｎｓｅ ｑｕｅ ｊ ｏｂｓｅｒｖｅ ｂｉｅｎｔ?ｔ ｃｅｔｔｅ ｅｘｉｓｔｅｎｃｅ ｅｌｌｅ－ｍ?ｍｅ…（＃＃＃＃＃ Д ＃＃＃＃＃）」

ディク『うわぁぁぁぁぁぁぁっ！??!何か色々とヤバイ状態になったぁぁぁぁ！！！！』

―シャイナの上に掲げた両腕の手の平の上に“明らかに人間１０人分でないと持ち上げられない巨大な多数パイプ付き鉄塊”を、床に寝ている乙女顔な長身男に向けて降り下ろそうとしていた。―

シャイナ「俺得投擲誤差修正＋５。ぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！

！！！！！！！！クソポンコツのドタマに向けて投擲準備いいいい

腕に纏わせて爪形態にさせた後持ち上げている鉄塊に向けて右腕を真っ直ぐに伸ばし破壊を試みる。しかし…

シャイナ「Lei…Intende assassinarmi realmente? Ma pensa che Lei pu? mettermi fuori a tale abilit??」

ディク『な!?…ま…マジ!?!!?』

ガキィィィィィン!!!!

突如赤目状態の暴走シャイナがハイライト状態★赤バージョンで振り返って、両手持ちしていた鉄塊を“はみ出ていたパイプに向けて右腕だけで片手持ち”し、サーセン（笑）イタ公翻訳不可で喋りながらディクが伸ばした右腕の爪を軽く横にあしらうように弾き防がれる。

シャイナ「Io non posso distruggere l'arma che io ho da tale bracc io. ? approssimativamente impo ssibile se non c'? un'abilit? con potere simile a me quando io voglio distruggerlo」

ディクの爪攻撃をあしらったシャイナはスグに手にする鉄…否“最強の巨大鈍器”をディクの腹部に向けて横に薙ぎ払う仕草を取り、ディクは横に薙ぎ払ってくるシャイナの鈍器攻撃を瞬時に海老反りになるようにフードの上部隙間から出ていた栗色の髪を一枚掠りながらも回避する。

ディク『に…にににににに“日本語でおｋェェェェェェェェェェェェェェェェ”！！！！！頼む！！め…めめめ眼を…覚ましてくれっ！！！！！』

ディクは必死な形相で次々と繰り出してくるシャイナの“巨大鈍器（アクリ2でいうメイス系統の武器）ＤＥ★軽々すぎる攻撃モーション”を避けて、屈めたり軽く飛翔したり時には爪と化した翼の力で防いだり、色々とヤバ過ぎるシャイナの攻撃を一部火花を散らしつつ避け続けていた。

シャイナ「ｎｏｎ　ｃａｄｏ！ｎｏｎ　ｍｉ　ａｒｒｅｎｄｏ！！ｎｏｎ　ｍｉ　ｒｉｔｉｒｏ！！！Ｉｏ　ｈｏ　ｉｌ　ｐｏｔｅｒｅ　ａｓｓｏｌｕｔｏ　ｐｅｒ　ｆａｒｅ　ｏｇｎｉ　ｒｅｓａｃｏｎ　ａｌｃｕｎ　ｇｅｎｅｒｅ　ｄｉ　ｎｅｍｉｃｏ！！！！」

ディク『！し…しまっ…！！』

暴走シャイナの攻撃を避け続けていたディクはシャイナのハチャメ

チャすぎる気迫に負けたのか後退中に右足を滑らせてバランスを崩し、一瞬の内にしてディクの身体が背中から床へ転倒してしまう。

シャイナは尽かさずバランスを崩し尻餅状態になったディクに向けて走り出し、右腕をディクの首に向けて伸ばしてそのまま締め上げるように掴んだ後、そのままディクを押さえたまま馬乗りするように完全に床へと押し倒す。

シャイナ「…Ｇｉ？　？　ｌａ　ｆｉｎｅ．Ｉｌ　ｄｉｖｅｒｔｉｍｅｎｔｏ　ｏｔｔｕｓｏ　ｇｉ？　ｐａｓｓ？　ｔｅｍｐｏ　ｆａ．」

ディク『か…はっ！！…し…シャ……イナ…（つ…強すぎるｗｗｗ人間のくせに本当に…“隠しラスボス並み”みたいな…ｗｗｗぐへっ…。。（Д　　⊂（　つ）』

床に押さえつけられたディクはもう＼（＾ｏ＾）／な苦々しい表情を出しながら両腕を横に広げて、両腕に纏わりついていた翼を剥がすように解いて爪形態を解除した後ゆっくりと翼を背中に仕舞いこんで、やがて訪れる暴走シャイナの振り翳す鈍器の審判を待った。

が…

？「「Ｈｅｙ？Ｗｈａｔ　ｄｏｅｓ　ｔｈｅ　ｃｏｍｐａｎｉｏｎ　ｄｏ　ｍｕｔｕａｌｌｙ？俺が気絶している間に何をしていた？」」

シャイナ&ａｍｐ;ディク「『！！！！』」

ディクを押さえて鈍器を上に構えていた暴走シャイナが突如背後から聞き成れた声が聞こえて、その声の主が何者なのかスグに理解しシャイナはディクの首を押さえていた右手を離して、赤目状態だった両眼が透き通った黒目へと元に戻り顔だけを後ろに振り向く。

ディクは拘束されていたシャイナの手から直ぐに解放されてスグに両手に力を入れて上半身だけ起こし、シャイナの背後に立つ長身男を見て思わず口元を吊り上げて安堵＋ニヤケるような表情を出す。
そして…

ディク『Ｕｎ　ｒｅｔｏｕｒ　Ｆｌａｍａｉｌｅ…』

第二百二十三曲　良い子の男は決して暴走状態に陥ったブースト女の子をお…

―妖精界　リュミエール　牢獄館（ノワール）　何かしらの廃墟遺跡　地下２Ｆ　隠し部屋―

フラムエール「「…全く俺が気絶していた間に…シャイナ、お前は…（ディク…気絶した相手に顔面だけでなく、男特有の“アレ”に向けて何度も蹴っただと？卑猥も混じった暴力的な人間だな。（汗））」」

シャイナ「ご…ごめんっｗｗついつい気絶したあ…アンタを助けようとし……そ……それで……我を……忘れて……ア…ハハσ（＾◇＾；）」

フラムエールはやつれたような表情を出しながら方膝を床に着き、両膝を折って正座しているシャイナに向けて自身が気絶していた間に起きた事を彼女から少し聞き出す。

ブライン《彼女…シャイナという人間は、最初貴方を凄く精神的に限界が来るまで心配していた。でも…》

医療用カプセルから出ていた修繕済みのブライン（リコ）が片膝を着く炎翼（フラムエール）に寄り掛かるように立っていて、おどおどしたような雰囲気を表面から出しながらシャイナの側面に立つディクに向けて顔だけを動かす。

ディク「長時間目覚めてない事で我慢限界（ストレス）が来ちまって、挙げ句の果てに自我さえ失うほど大っ暴走したんだよ。そこらへんに落ちていた鉄の塊の瓦礫を“最初は両手持ちだったが次からは片腕だけ”で持ち構えて、自我さえ失う程俺に向けてクソ危ない“鈍器と化した武器”を振り回したもんなぁ～シャイナｗｗｗ」

フラムエール「「まったく…俺が一時期“疲弊の影響で意識を無意識に手放してしまった”だけでこんな騒動になったのか。騒々しい程があるぞお前達…（´、`；）」」

犬ツィオ「キャゥ～ン。」

フラムエールは両眼を瞑って落胆するように両肩を竦めた後、床に着けていた片脚を上に上げて立ち上がり、フラムエールは何時のまにか右足下で身体を寄せながら頭を何度も擦っている子犬（エツィオ）を両手で拾い上げて左肩上に乗せる。

シャイナ「ご…ごめ…ｏｒｚ」

ディク『悪ぃ悪ぃｗｗｗ“次”からは気をつけるからＳＡっ★』

ブライン《私からも御免なさいフラムエール…私が完全に修繕される間に何も出来なくて…》

表面はケラケラと笑うディクにムスっとしたような表情を出すフラムエールが互いに微笑ましく会話し、炎翼の隣にいた申し訳なさそうな表情を出すブラインに「「お前は治療に専念していたから別に気にするな。」」といって一見和やかな空気が流れていても…

ディク『（聞いてくれよぉ～相棒（´；ω；`）…シャイナ…シャイナは…お前が本気だしても決して勝てない“最強過ぎる隠しボス”だということをｗｗｗ）』

フラムエール「「（それは“災難”だったなディク。見かけはただの人間でも本来の本質が剥き出しになった“臨勢体勢の人間”相手は、我々の人ざらぬ力を一瞬の内に凌駕する効力がある事例が前世紀に数件あったらしいな。それがこれか…）」」

ディク『ｗｗｗ（嗚呼…お前が目覚めるまでこんなに恐ろしい体験を一足先に味わうなんて…おぉう…怖い怖いｗｗｗ）』

ー裏面は今この世界にいる“史上最強の怪力女（シャイナ）”を身震いしつつ、表情そのものがドベドベと汗が大量に流れ落ちて、チアノーゼにな

るほど顔面そのものが真っ青になるように大の男共(ウホ)はガタガタと震えながら裏声である“本来の言葉”を脳内だけで会話する共震魔力(テレパシー)を使って互いの身体を支えるようにして震えていた。―

…

……

……

ディク『あっ…そうそう。なぁ“リコ”ちゃん？俺らのようなウホっ☆チームが此処に連れてきた理由というのを詳しく教えてほしいんだが…それに…』

ブライン《“ブライン”って呼ばないの？黒い英霊さん？？だって私…》

本来の名前を言われたブラインは息を詰むような感覚を受けて一時的に咽仏を上に上げ、自然に丸めた右手を心臓付近まで持っていき、眉をやや下に下ろして愁哀を漂わせるような表情を出す。が…

ディク『だってそれは此処に来た時に“臆病な妖精王”から勝手に名付けられた“偽名(コードネーム)”だったんだろ？本来の名前を言ったほうがスッキリするし、そんな暗い雰囲気が漂う“前名(ブライン)”など言いがたいし…』

ブライン《そんな理由で??その根拠がどうしても…わ私は…》

フラムエール「「小難しい理由など付ける必要などない…という事だ。リコ…。」」

犬ツィオ「キャン！」

ブライン《！…っ…。》

ポンと落ち込むような幼女の左肩にフラムエール右手が当てられて、頬まで温まる感覚を受けながら顔を上に上げ硬い表情を出しながらも彼らしい笑みを出す表情を見て、ブラインは一瞬だけときめくような表情を出す。

フラムエール「「まだ感情が目覚めたお前ではその意味が解らぬかもしれんが、本来の名はその名を付けた者の誇りでもあり、一生の宝である大切なモノの一つだ。これは活きていくならではの“重要なモノ”だということを頭のどこかで置いておいてくれ。それで本題に入るが…リコ、お前が我々に見せたいものが此処にあるという事は…」」

ブライ…リコ《…付いて来て。この先の扉にその答えがある。》

ブラ…否リコは上げていた右腕を下ろして側にいたフラムエールを後にし、前にいたシャイナとディクを追い抜いて一時フラムエールが倒れた施錠（ロック）されている鉄の扉へと歩み寄る。

リコ《戦闘用…いえフラムエールはもう“今いる場所自体”が何なのかもう解っているでしょう？いえ、この場所だけでなく貴方たちがこの牢獄（ノワール）に入った時点でこの時代・この世界そのものに“絶対に有りもしない高度な文明”がそのまま残ったモノを…》

シャイナ「…そういえばこの箱庭に入った時点で、俺のような人間が生きる“今現在の技術に近い存在”が多数あったような…」

シャイナは首を少し傾げて口下に右人差し指を当て両頬を膨らませながら悩む仕草を取った時、ふとこの牢獄（ノワール）自体にあった最初妖精が住まう世界にない鋼鉄の建造物を思い出す。

ディク『もともと妖精は魔力で生成し、表本質が主となって世界を形成しているというが。こんな鉄やら光を灯す“高度な技術は持っちゃいない”。ましても妖精は“一度もこの世界を救ってくれた魔神以外の人間を招きいれ技術を学んだことは無い”と俺に教えてくれた師匠の知識の中の話だがな。』

フラムエール「「見かけは只の廃墟だが内部の機材がある程度生きている点で、あの“高性能な医療装置”や俺が溶かしたあの廃棄工場があった時点で…あぁそうだな、思い出したぞ。前世紀、俺はこ

の施設自体を見たことがある。たしか…」」

リコ《前世紀の人類および文明が滅んで数億年後…仮眠状態（スリープモード）になっていた私は、時に流れ荒れ狂う自然の身に任せてようやく静寂が訪れた後再び蘇った新人類がある程度文明が進化し続けている合間に目覚めた。しかし…》

リコは施錠（ロック）されている鉄の扉に向けて右腕を前に伸ばし開いた右手の平から淡い紅色の日光が発した後、ガチンと施錠している部品が収納される機材内へと一つ一つ引っ込んでランプが赤から緑色に変わりピィーと解錠される音が鳴る。

リコ《…目覚めた場所自体が悪かったかもしれない。その時は…》

―私は…特級悪魔を引き入れてこの妖精界を侵略している計り知れない数の悪ノ魔の軍団に襲撃の合間に目覚めてしまったんだ…。―

第二百二十四曲　大量生産されたプロタイプと本物黄金つ…否不死鳥の●です

―妖精界　リュミエール　牢獄館（ノワール）　何らかの廃墟遺跡　地下２Ｆ
隠し部屋　試験研究部屋前―

リコ《新人類が文明を発達して１２世紀ぐらいかな…。その時代の妖精界に特級悪魔を引き連れて来た多くの悪ノ魔達がこの妖精界を襲撃してきて、まだ何も特級悪ノ魔に対しての対抗手段がなかったこの妖精界の時代に私は巻き込まれたの。≫

ガシュンッと解錠された鉄の扉が空気を抜くような音を立てて開いていく中、リコは背後にいるシャイナ達を見ずに顔を俯きながら先に開かれた部屋内へと入る。

リコ《妖精界の人々はなすすべもなく殺され、悪ノ魔の魔力を補給する糧としてどんどん捕獲されていった。一時期この世界の妖族達は悪ノ魔達に支配されていく魔界になりかけの世界の隅まで追いこまれて行き、たった一握りの唯一な安全な世界の中で周囲の悪ノ魔達に怯えながら、必死に特級悪ノ魔対抗する術を見つけるべく日々魔力の研究を重ねていったの。≫

リコは照明が全て落ちた暗闇の部屋の中に入って直ぐに右側へと歩

み、壁らしきモノに向けて左腕を伸ばしカタカタと何かを打ち込むような音を立てつつ更に続けてシャイナ達に言う。

リコ《目覚めた私は“自身の正体を決して悟られない”“高度の文明・技術を決して文明成長途中から与えない”ようにし、その時の…その時だった妖精界の妖族(かれら)達に紛れて必死に魔力を研究する一人の“妖精”として彼らを言葉だけで補佐しつつ生きてきた。そして…》

パシッと上部に付いていた照明が真っ白になるように光が点いて、全ての照明が光を灯し暗闇だった室内が漸く明らかになる。

リコ《救世主の出現…いわば魔神という悪ノ魔がこの世界を支配しようとしていた悪ノ魔を片っ端から滅していき、私の知る“前世紀に無い圧倒的な力”で絶望的な相手（特級悪ノ魔）を一分すら持たないまま終わらせてしまった。その力に私は…》

シャイナ「！これって…！！」

奥まで長く続いている鉄で出来た棚の上に一つ一つ奥まで続くように置いてある四翼が生えた女神の白い杖…それは現世のフランスオルレアン（ジャンヌダルク邸の地下室）で嫉妬(クソハゲ)と死合(ケンカ)した時に使われた“ニケの杖”であった。

シャイナ「あのクソハゲ（第百四十三～百四十四曲参照）が使っていたニケの杖が…いっぱい！！（　。Д　。；）」

リコ《これは全て長年の対特級悪ノ魔用兵器として作り出してきた“失敗作”。当時の…妖精界を救った魔ノ神の力に近づけるべく、私は誰も悟られないように秘かにこの研究をし続けてきた。でも…》

リコは歩みながら敷詰められるように置いてある杖一つを手に取った後、杖の柄の部分右手で手に取って花を摘むような形で胸元に引き寄せた後…

リコ《一人の妖精が私の研究開発を見て共にその研究に参加したいと言ってきた。最初私は断ったの。私のような“前世紀の高度な知識を持ったヒト”に再び発展し続けているヒト達に知を与えることは、発展し続けている歴史さえ変えてしまう危険な引き金…。》

柄後先が純白から灰色へと浸透するように変わっていき所々ひび割れみたいなものが複数浮かんだ後、杖の後部先が段々と砂のように変化してボロボロと綺麗に崩れ落ちていった。

リコ《でもその妖精は偽の無い情報で溢れていた。「私の父と母はあの襲撃してきた悪ノ魔で何もかも失ってしまった。またしても次に奴らが現れた時にどうしても貴方の力が必要なんです」と。それで…》

フラムエール「「文明発展最中に教えてしまったということか。馬鹿な事を…君の性能はもう御存知の通り俺よりも“旧製の情報基盤（アリストテレス）機能”の中ではその人の“裏本質”まで見抜くことが出来ない高リスクがあるということを！」」

フラムエールは両肩を落とし少し溜め息を付いた後、棚に多く陳列している失敗作一つを手に取ってじまじまと失敗作（ニケの杖）を全体的に見回しながら少し強い叱咤を吐く。

リコ《解っていたよ…私は貴方のような高性能の“進化し続ける情報基盤機能（アリストテレス）”は付いて無くても…私は…私…》

ディク『…君のような感情が目覚める前の無機質な君でも、何処かで人間だった記憶が残っていたんだな。初対面の人間から発する言葉を聞いて直ぐに信じてしまう事と、表の感情だけで芝居するように振舞う下手な役者のような人間相手にゃぁ…』

ディクは機嫌よく口笛を吹きながら左手に持った失敗作をデコピンで上へと弾き飛ばし、上へと弾き飛ばした失敗作に向けて左人差し指先に魔力を小さく集中させた後…

ディク『色々とそのほんにんしかほとんど解らねぇモンがあるもんだ。人間っていうのは表はにこやかに接していても、肝心な“中身”は何を考えているのかは予想出来ねぇ。ひょっとしたらその人間

に対しての嫉妬や憎悪・嫌悪を思っているのか、その技量を見て逆に利用しつつ悪巧みを考えているかもしれないし…』

シャイナ「何気に一番怖いのは“人間”だよねぇ…。何をしでかすかよく解らない部分もあるし、言葉で発することもなく只黙々と“不気味にやる奴もリアルに居る”もんで、私も人間相手（上司関係）には色々と恐ろしい意味がｗｗｗ」

爪先から小さな白銀の光の線が飛んでいって光に当てられた杖がパチンと音を立てて、杖が段々と細かい粒子状の粉末へと変化し粉雪のように床へと舞い散っていった。その合間に…

リコ《そこから段々と研究に加担する者が増えてきた。中には貴方（フラムエール）が戦ってきた戦闘用模擬兵器２６９０号も居て、月日が経つ内にその研究に加担する者が一時期２万ぐらいまで達した。》

フラムエール「「！戦闘用模擬兵器２６９０号って、あの…」」

ディク＆シャイナ『「あ　の　肉　デ　ブ　か　ｗｗｗ（第二百五曲参照）」』

リコは更に奥まで歩み寄って赤いバルブで硬く絞められている四角い鉄の扉へと歩んだ後、右手の平をバルブに翳してギギギと手の平から発する赤い光の魔力で開放していく。

リコ《当然あの時は数が多かったからこの世界の妖精王（リオリーネ）に処刑、または牢獄監視者（ブリッツ）の力で魔力を全て抜き取られて妖ノ魔と化し、この牢獄（ノワール）へと永遠に閉じ込められる研究員が多く犠牲になった。そして僅かな数になってしまった研究員と私は…》

フラムエール「「君が手にするその“本物の神杖”の力であの御老体の眼を欺い…いや“洗脳”してこの世界に潜入し、御老体の“記憶を書き換えて”この施設を根城にし研究をし続けてきたということか。」」

シャイナ「わっ!?、また同じようなも…んん?? あれ? 此処に沢山置かれている白ペンキでもそのままぶっかけたような純白メッキな素材じゃない!?」

シャイナは奥にあったバルブ付き戸からリコの魔力で開けられた“黄金杖”を見て、不満顔から突如思わず声が裏返るほど大きな声を出して両眼を大きく丸めながら驚愕な表情を出す。

リコ《これが“本物のニケの杖”。またの名は“古ノ聖杖金”とも呼ばれる前世紀の人間…貴方達今の世代で言う“古人”が残した武器（い さん）の一つ。》

リコの右手に持つ黄金に輝く六翼の女神がモチーフにした見た目で

も“神々しい”杖が光の反射で眩く輝き、柄後先に付いていたダイヤ状の金細工が四つ流すように三つ垂れ下がった金の飾りが揺れるたびにシャランと音が鳴る。

リコ《表向きは“人を魅了・洗脳する”幻惑（テンプテーション）させる武器。しかし…》

リコが両手持ちに持ち替えてぐっと両手に力を入れた後、先端の祈るようなポーズを取る女神像が縦一直線に割れて、ぐるんと枝分かれした像が遺伝子のように上へと突くように何度も捻って、唾辺りが六翼だった翼を残し先端が“鋭利な剣先”へと変わる。

リコ《本来…裏向きは“前世紀を滅ぼした存在を打ち穿つために創られた槍”であって、人を魅了・洗脳させる力を持ちながら“天（ひかり）ノ力”が込められた金光槍…》

―ドレ・アルカンジュ―

第二百二十五曲　外で集まる不審者共＆ようやく本来の主人公が復活しますよ

―妖精界　リュミエール　牢獄館（ノワール）　何かしらの廃墟遺跡外入り口付近廃庭―

ライレクA―ゴシュー！！フシュー！！―

ライレクB―ゴハァァァァ…―

ドシンと錆付いた鉄の機材と長年手入れをしていない朽ちた人工芝が入り乱れる地面の上に、四肢の一部が変異した鋭利なモノに叩き付けられて少し振動を発し地面を揺らす。

デフロラトーレA―クッケッハハハハハハハァ！！！！臭う！臭ウゾォォォォッ！！―

デフロラトーレB―ギャハハハハ！！！！奴らだケデなく、我々ノ主領“ブライン様の臭い”モこの中から漂って来るゾォッ！！！！！―

デフロラトーレC―ゴボボボボッ！成る程…この場所とイイ、通り

デ我らの圧倒的な嗅覚ニ反応スル力ヲ弱メル、コノ“放射性が乱レる石棺”の中ニ長々ト停滞シテイタのカ…。―

デフロラトーレD―馬鹿な奴らメ…ブライン様の力は余リニモ強大！今頃奴らハ、ブライン様ノ手で八つ裂キニサレテイルだろウ！―

下級妖魔達（ライドレクルーゾ）だけでなく上級妖魔（デフロラトーレ）も少しずつ地平線からやって来て、下卑めいた声を吐きながらも一部“問題発言が出た用語（ワード）”を涼しい表情でも出しているかのように言う。

デフロラトーレE―総員コノ石棺の中ニイル奴らヲ逃がスナッ！隙間ヲ全て無クし、完全に包囲シロッ！！！！―

入り口付近に集まってきた下級妖魔・そこそこの上級妖魔がある程度集った後、一体の右目に三つの傷が付いた上級妖魔（デフロラトーレ）が一つの号令を掛けて右腕を上に上げた途端…

ライレクA―ギャハハハハハハ！！！！！！―

ライレクB―グヒャァァァァァァァァァ！！！！！―

デフロラトーレA―カカカカカッ！！囲め囲メェェェェェェェェェ！！！！！―

デフロラトーレB―キヒヒヒヒッ！肉ダァッ！！漸く味わエる１２５８年ぶりの肉ダァァァァァァァァ！！！！！！―

後ろに集まっていた下級・上級妖魔達が一斉に動き出し、全員が動きを見計らって波状をしつつ弧型のアーチを描きながら朽ちた壁を含めて廃墟遺跡周囲を完全に隙間さえ埋める程完全包囲する。

デフロラトーレE―サテ…完全ニ包囲したヨウダシ、刻を計らッテ全員…―

？―待った待っタァ～！！まだ飛び込ム時ジャナいよぉ～♪アイツラはまだ“俺達ノ主領と共に生キテイる”。しかも…―

粗方人の型を止めていない縫い目糸が複数目立つ肉厚の側面から、シャリッと高速に羽ばたく蝉の翼の風切り音と共に小さな光を淡く放つこの世界に似合わない妖精が横切って、石棺中に進もうとしていた屈強の隻眼上級妖魔（デフロラトーレ）をため口だけで止める。

？―主領…コノ世界ニ入ってキタ人間共に加担シテイルワよ？俺達ガ隠し続ケテキタ試験兵器ヲ見せテイルシ～♪―

デフロラトーレE―何ダト？何故我々ノ有能なル主領が、あの人間

ドモにソンナ事を…―

デフロラトーレF―理由ハどうでアレ、我々ノ高度ナ知識ヲ持ツ貧弱ナ人間ドモに知ヲ授けヨウトスルなら…―

？―ウフフッ♪たとえ俺達ノ主領デモ、人間二加担シタ時点デモう完全破壊スルってネ。キャハハハハハハハハハハ♪♪―

すると縫い目が多い肉厚妖魔の右側面から枯木のように細い骨格を持つ鉛色肌の上級妖魔がヌゥンと出てきて、背中から生えた枯木のように細い枝分かれが多い両翼で足先が着くぐらいに地面スレスレで浮いていた。

そんな無気味すぎる妖魔軍団の中で小さな光はケラケラと笑いながら前方に出ている凸凹上級妖魔の身体を何度も旋回し、声が渇れるまで甲高く狂笑した後…

？―アハッ♪ハハハッ！サァ…復讐ノ時間ヨ？この私ヲ沢山舐め回シタ身体的な意味ヲ含メて屈辱的な事ヲ漸クッ！！！！！―

…

……

……

―何かしらの廃墟遺跡　内部　地下２Ｆ　隠し部屋　試験研究部屋―

リコ《…研究を積み重ねる内に私は前世紀文明が生み出した“林檎の力へ真似る”段階へと突入。それを移す段階でまだ完全にインストールしていない実用性がまだ低い試作兵器“ニケの杖”が何者かに一つ盗まれて、そこから貴方達人間達が住まう現世へと渡り魔界にいた嫉妬という上位悪ノ魔まで手に入れるぐらいまで干渉してしまった。…私はソレを…最初から人を信じ受け入れる事をしていたら…でももう一度起こしたことは決して過去へと戻す事が出来ない。私は人を信じてしまった時点でもう…》

フラムエール「「リコ…。」」

ディク『リコちゃん…。』

金光槍（ドレ・アルカンジュ）を持ったリコは顔を俯いたまま上げていた槍を下に下ろし、カタンと槍の刃先が床に着いて《前世紀の兵器としてはもう廃棄兵器（失敗作）ね。》と嗚咽が少し混ざった悲しい声で呻く。

リコ《そのことが起きてから私はスグに取り戻そうとした！でも外部からの強い境界壁が突然張られて、私は現世へと渡る事が出来ずその境界壁の力でこの世界に閉じ込められてしまった…最初の太陽の力が込められた兵器（わたし）が情けなくて…ただ…涙さえ一つも溢すことが出来ず呆然に時が無常にも寂しく過ぎていき私はただこの狭い世

界の中でずっと…ずっと！！…それでも私は人間で言う自己満足や欲目的のために兵器（ニケの杖）を淡々と製作していたワケじゃない！私は…私はっ！！≫

フラムエール「「再び再来する前世紀文明を滅ぼした存在から護り、それを滅する力を持った“ヒトを護る武器”を創りたかったのか。リコ…お前は…。」」

ディク『うぅぅ…（´；ω；`）か…悲しい話でありイイ話ダナー…リコちゃん。』

あれから更に詳しく事情を聞いたシャイナ達は全員“友(エツィオ)が傷付けられた製作者の怒り・仇討ち”から、“擬似林檎の製作者…彼女(リコ)の正義を突いた人類を護る為の行為が一人の妖精のせいで悪へと成りさがってしまった不幸な少女話”を聞いて全員が全員で彼女の感情に共感し、全員が眉を下に下げて哀愁漂う表情を出す（一人ボロ泣きしている）。

リコ≪っぅ！！…でもこれは貴方達に取ってもう単なる言い訳しか聞こえないよね…。私は貴方達が言う“大切なヒト”をその盗まれた杖で傷つけてしまったことを詫びるわ…。だから…その分の罪も…≫

シャイナ「！な…ちょ…！！！！Σ（ ゜Д ゜；）」

フラムエール&ディク「「『！！！！』」」

切ない表情を出していたシャイナ達はリコの次の行為を見た時、全員が眼を丸くさせてフリーズしたかのように全員が驚愕の表情を出しながら静止画像の姿へとなる。

リコ《私が作り出した試作段階の杖…それでも“エデンの果実”に近づいた兵器を貴方たちが言う友と同じように…罪を受け入れるわ。》

リコは手にしていた金光槍（ドレ・アルカンジュ）を手の平の中で一回回転させた後、両手持ちに構えて槍先を自身の心臓部分がある胸部へと持ってきて羽織る黒いゴスロリ服の皮一枚刃先で少し破かせる。

フラムエール「「ば…馬鹿な真似は止めろリコ！！お前はっ！！」」

リコ《御免なさいフラムエール…私が…いけなかったの…私という人型兵器がこの世界に目覚めた時点で…》

ディク『おぃ！早まった真似すんじゃねぇよ！！お譲ちゃん！！！！』

シャイナ「と…止めるんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！こんな所でょぅ　ぃ　ゃょを殺したらまた…駄目ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！」

シャイナ達はとっさに自身の胸に向けて手にする槍を突き刺そうとしているリコを見て全員が走りだし、一人一人違う焦る表情を出しながら右腕を前へと伸ばし開いた手の平を大きく広げて掴みかかるような勢いで走り出していく。

しかしリコが居る位置は今居る部屋の一番奥におり、例えディク・フラムエールのチーター2人組みでも置くにたどり着けるまで最低1秒も掛かってしまう。そのコンマ数秒内でリコは文字通り死を迎えることになり何も製作理由だけでなくフラムエールにとっての重要な過去を全てを聞く事すら敵わないまま終えてしまう。だから…

フラムエール「「止めろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」」

リコ《御免ね…炎翼（フラムエール）…やっと…やっと人間らしい部分が出て来たというのに…ゴメン…ゴメンね…御免なさい…っ！！》

フラムエールの叫びが聞こえる中リコは背景が真っ白に浮かぶ走馬灯の中にいて、ゆっくりと両眼を閉じながらやがて胸部に突き刺さる槍先の刃の傷みを神経に感じて内部の組織が突き破られる空洞と背中から血しぶきとともに出る自身の心臓の骸の姿を…

が…

？「Lei non ha il crimine. Lei non ha bisogno di morire a causa di tale cosa!」

シャイナ's「「『!!!!!』」」

リコ《えっ!?》

ドンと何かがぶつかるような音が鳴ってリコは何時までも胸部に来ない刃の傷みを不思議に思い、閉じられていた両眼を開けて俯いていた顔を上に持っていくと…。

？「Io prendo la giustizia che Lei ha, e si decide che il crimine ha in se stesso nulla!!」

ディク『あっ!!』

フラムエール「「!お前はっ!!」」

シャイナ「…もうっ、このような時を見計らって美味しいトコもっていくのかよ…たまんねぇな！！」

リコに駆け寄ろうとした仲間達は前方に居る人物を見て、二人は虚を突かれた顔と思わずニヤケ顔になり憎憎しい台詞を吐きながらも待ち望んでいた黒いローブを纏った“本来この小説の主人公”存在を見て思わず…

シャイナ・ｓ「「『エツィオ！！！！！』」」魔ノ神！！！！！」」

第二百二十六曲　復活した男は更にハイ☆テンションとなってアホな奇跡を起こ

一妖精界　リュミエール　牢獄館（ノワール）　何らかの廃墟遺跡　内部　地下2F　試験研究部屋一

リコ《!!!??!?い…犬が…“人”になった!??!?!?》

エツィオ「イヨォォォォォォォォウ★待たせたなぁ～（大●風に）この小説にて“主役主人公”が漸く復帰だYOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOON♪」

リコは唖然とするように赤い両眼を大きく開きながら、彼等の足下に腹チラッ☆寝ベソっていた・人間女（シャイナ）の谷間の中に寝ていた黒い子犬が突然“変ずるという動作・エフェクトすら無い状態”でリコの目の前に“黒い甲冑とローブを纏った爽やかアサ★シン”が立っていた。

シャイナ「もう…遅い！！何時になったらエツィオが元に戻る時が来るのかって…」

エツィオ「Io sono spiacente per pre

ｏｃｃｕｐａｚｉｏｎｅ…Ｌａ　ｍｉａ　ｐｅｒｓｏｎａ　ａｄｏｒａｔａ.（色々と悪かったな…シャイナ。）もう俺が現れた時点で、安心してていいＺＥ★やっとあの姿から開放されるぅぅぅぅ〜♪」

ディク『まぁあの…色々と乙ですたｗｗｗ（長時間きぐるみを着た地獄ヴァイトの一つのようなモンだな。いや今までのあの小型といい…背中とかぁ…腕とかぁ…色々と堅苦したかったかな？ｗｗｗ）』

フラムエール「「この“男”め…美味しい部分を持っていくとは…まぁ、リコの命を救ってくれたことに一応感謝でもしておくか…。」」

エツィオはケラケラと後方にいる安堵顔の仲間達にむけて顔だけ動かし、ニシシ♪と歯並びのよい健康歯を見せて笑いながら皮肉に言うフラムエールに向けて「一応とは何だよぅ！！ヽ（、８′）ノ」と両頬を膨らませて軽い威嚇でもするような言動を返す。

リコ《え？…あっ…あぁ……。（有り得ない…私が持つ金光槍（ドレ・アルカンジュ）は…）》

そんな最中リコは驚く間にも自身が両手に持ち構えて胸部にむけて背中ごと刺し抜こうとした槍先に“エツィオの右手ごと”掴まれていて、リコが突き刺す兵器としての腕力を“右手だけで少し破けた服のもう一階層の繊維一枚すら破けない・右手自体が傷付くことも

出血も無い・素手状態で静止されていた”。

リコ《ど…どうなっ…て……？（通常の人間ならば柄等を触った時点で重度の幻覚作用が脳全体を侵食し、１秒さえ経たないまま精神崩壊を起こしそのまま死に至る…それが何故この人は…）》

エツィオ「あぁそうだった…お譲ちゃん？この“幻覚・魅了させるクソヤヴァィ槍”を放せるかぃ？？たとえ君のような“ヒトの形を持った試験兵器”でも、長時間所持は脳内にある効力有武装制御装置（ラム）に負担が掛かりすぎて内部ごとＢＡＮッ★しちゃうＺＯ？」

リコ《！》

リコは後方に向いていたエツィオの顔が突然前に振り戻って、相手を心配する顔を出しながら自分を真剣に見続けるその男のイケメン★フェイス（見かけは３０代前だが実年齢はおｒｙ）を見て、思わず見惚れてしまうように少し息を漏らす。

だがエツィオの言われたとおり自身が持つ金光槍（ドレ・アルカンジュ）は千の存在を幻覚・魅了させる支配武器。例えヒトでない存在でも“その兵器の所持者”である限り手に持つ武器から溢れ出る“支配という呪われた薬（コトバ）”を完全にプログラムという抑制を破壊し精神ま完全に精神を崩壊させ死に至らせるまで永遠に侵食し続ける危険な存在なのだ。

リコ《っ！（いけな…い！こ…この武器は…ち長時間所持は余りにも危険…っ！は…早く…っ！！）》

リコはすぐに槍の柄を持っている両手に向けて引き離す指令を神経に送る。神経伝達は人間と同じなのでスグに脳内にある運動機能へと伝達しそこから“持っているモノを放す”という指示が一秒待たずにさっさと放すという動作へと施行されるが…

リコ《は…離れ……な…い！！》

何故か握られている両手は柄から一切離れなく、ピクリとも動くような動作もないまま静寂に終わった。リコは焦った。何故手を放すことが出来なかったのか…ただ単純の動作だと いう の に 何故放す事は …！

リコ《た…助け……て…！！わわ…私の…の中が……い…イヤッ！！！！》

フラムエール「「（マズイ！もう神経回路まで侵され始めたのかっ！？早すぎるっ！！！！）リコォォォォッ！！」」

リ コ は 兵 器 の
力で侵 さ れ て いく 自分をのの

脳　　内　　ヲ見て思わず　　両眼　　カカラ　　一つ
の小さなた　　が落チル。

フ　　ラ　　ム　　エー　　ルの声が　　声が！！
キキキ　　コエ！！！！　　ワタ
シ　　ワッ！！　　…！！
タ　　ス　　ケ　　…！！　　フラ
ム　　エッ！！！！

エツィオ「お嬢ちゃん、息を良く吸って（ハート）この優しい“お・兄・ぃ・さ・ま”の今言う言葉に柔らかく…しなやかに…甘く受け止めるんＤＡ★」

シャイナ「ちょっｗｗｗエツィオ…キモいｗｗｗ」

ディク『ｗｋｔｋ（・∀・）』

フラムエール「「な…何だコレは…俺は…どうすればいいんだ…（汗）」」

カタカタと大きく瞳孔を開いたまま痙攣している浸食状態のリコにエツィオは片足を折って半立ちになり、エツィオは後ろにいる仲間達に変な視線（一人はｗｋｔｋ状態）を背後から刺されたまま笑み満開でキモッ★台詞を吐きながらリコの左肩を右手でポムッと二三

回ぐらい叩いた後…

エツィオ「君の手ぇぇぇぇぇは自然に放れるぅぅぅぅぅ♪何も考えないでぇぇぇぇ～♪ただ君はワタスィィ～の甘い言葉に従っ…ｒｙ放れぇぇぇぇぇ～る放れぇぇぇぇぇぇぇぇる★」

シュシュシュシュシュ♪

エツィオは放れないリコの両手に向けて右手の平を優しく当てた後、何度も擦るように高速に動かして手の残像が映るぐらいまでノリ☆ノリに温める。

シャイナ「おまっｗｗｗ何その胡散臭い洗脳術みたいなクソ用ｒｙ（…あっ（・・））」

ディク『おぅ。』

フラムエール「「むっ！」」

リコの両手に持っていた金光槍が外れるように落ちてカランッと乾いた音が床から数回鳴り響き、軽く弾みながらエツィオの足下にリコが持っていた金光槍が転がり落ちる。武器がリコ（ドレ・アルカンジュ）から放れたのだ。

リコ《ぁ…。》

エツィオ「なっ♪（＾＾）bお兄さんの言葉は最高だろ?俺はこれでも“人”の中にゃぁ最高の存在なんだぜぇ??この言葉だけで救われた人類は限りなく多い!!（キリッ」

シャイナ-ｓ「「「『（嘘だｗｗｗそれに無駄にカッコよく付けるなｗｗｗ気持ち悪いｗｗｗ）』」」」

リコはエツィオの足下に落ちた金光槍(ドレ・アルカンジュ)を見て身体に侵されていた存在が解き放たれた感覚を受けながら、開かれた口が一切閉じる事が無く呆然とするように大きく胸を張るエツィオを見て立ち尽くす。

エツィオ「Ｇｕａｒｉａｍｏｌｏ　ｉｎｃｉｄｅｎｔａｌｍｅｎｔｅ　ａｌｌａ　Ｓｕａ　ｍｅｎｔｅ　ｖｉｏｌａｔａ.（ついでに回復魔力も付けてやる。）どや?気持ち良くなっただろ??」

リコ《!きゃっ!?…わ…わタシの中にあったモノが…》

呆然に立つリコにエツィオの右手の平が顎下へと軽く撫でるように触れた途端、右手の平から青白い蓮の花みたいな形をした光が複数零れ落ちて散った複数の花弁がリコの身体(なか)へと浸透した時、リコの中に取り残された金光槍の呪いの薬(コトバ)が完全に細かい粒子状へとなっ

て身体の中から出てきて上空へと昇るように消えていった。

エツィオ「君の身体（なか）に侵食されていた薬（コトバ）は消えた。もう大丈夫っ！俺が治したからな＾＾あと数秒後で言語も運動神経も元に戻るハズだ。」

フラムエール「「リコッ！！大丈夫か！？」」

きょとんとしているリコを見てエツィオはイヒッ☆と得意げな表情を出し立ち上がった後、後ろに居た仲間達が走り向かってきてその中の炎翼（フラムエール）はリコの側へと寄り添うように後ろへと回り込む。

リコ《フラムエール…私…ぁっ…。》

フラムエール「「良かった…リコ…。」」

ダキッとリコは後ろに回ったフラムエールに身体ごと抱き寄せられ、リコは抱かれているフラムエールの熱を感じながらそっと左腕に右手を当てる。

リコ《ごめんなさい…私…私のせいでフラムエールも…皆に…》

フラムエール「「良いんだ…お前が生きて…生きているだけで…それだけで十分だ！」」

リコ《フラムエール…。》

フラムエールは更にリコを抱いている両腕に力をいれてポスッと胸部に触れるぐらいまでリコを寄せた後、片膝を折って半立ち状態になりながら周りに居る仲間達に微笑ましい視線を受けつつ伏せた顔の両眼から一滴の雫を流す。

リコは顔を見上げながら右頬に落ちたフラムエールの涙を受けて、脳裏に映るかつての兵器となる前の彼の思い出が一つ一つの映像でフラッシュバックするように流れ込んでくる。

ーまどろみの世界の中で唯一笑いあった兵器（かれ）と女被験者（オリジン）の思い出ー

ー自身が兵器となる前に逃がそうとしてくれた最愛の家族ー

ー怒れる兵器（かれ）と女被験者（オリジン）のハーメルン機関に向けて人間らしい最後の抵抗ー

ー兵器（かれ）が完全に人で無くなってしまっても、焦土数時間前に残っていた最後の自我そして一時的な終焉ー

―そして…再び目覚めるまで私達と離れ離れになった孤独と虚無。
再び会えるまで長すぎた時間―

彼は…私と同じようにずっと……

リコは仲間に決して見せないように流している涙を右手で拭い取った後、抱きしめられているフラムエールの唇に向けて両眼を閉じながら少しずつ近づけていき、フラムエールは口元を吊り上げてそっと近づいてくるリコの唇を待っていた。

しかし…

ドンッ！！！！！

フラムエール&エツィオ「「「！」」」

リコ《キャァ！！》

建物全体を揺るがす大きな震動が鳴り地に着く床が波のようにグニャグニャとうねり、陳列していた棚・ニケの杖の失敗作がドサドサと床へと落ちていく。

シャイナ「だわぁぁぁぁぁっ！？？！？？！？！」

ディク『おひゃぁぁぁっ！？？！？？！？と言いつつ冷・静・に♪』

バサッ！！

シャイナとディクはうねる床で上部へと数メートル浮き一時きりもみ状態で浮かんでしまったが、ディクは慌てることなくシャイナの右腕を左手で掴んで胸元へと抱き引き寄せた後、背中からトキの翼を展開し全体に渡る振動を翼の力で温和する。

エツィオ「上部からだな。まったく…いい雰囲気になっていたというのにぃ～」（、8、）r」

フラムエール「「台無しだ…（怒）これが現世で言う“ＫＹ（空気を読まない）奴ら”という意味かっ！！」」

大きく揺れる建物内でエツィオとフラムエールは“微動さえせず普通に立ちながら顔を上に上げて”、上部の天井から落ちる砂埃を見ながら何かとプッチンマークでも浮かぶように苛立つ表情を出す。

エツィオ「おっ！Σ（・・）お前もこの今の世界の言語を使うようになったのか！！こりゃイイッ！！（・∀・）」

フラムエール「「フン…誰かのせいで俺の中にあるセンチメンタルが少しずつ“変”に変わってしまったがな…まぁいい、俺は…」」

フラムエールは厳上部から鳴る震動とその存在に向けてしい表情を出し、胸元に抱き寄せているリコを再度顔だけで見た後…

フラムエール「「漸く本来の俺と同じ“ヒト”に会えたんだ！必ず、リコを護るっ！！」」

2022

第二百二十七曲　小さな虫の正体と楽しい★大乱闘の幕開け

―妖精界　リュミエール　牢獄館（ノワール）　何かしらの廃墟遺跡外入り口廃庭―

ライレクＡ―ゴガァァァァァァァ！！！！―

デフロラトーレＡ―ヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャ！！！！―

ライレクＢ―ボルォォォォォォォォォォォォ！！！！！―

デフロラトーレＢ―クッハハハハハハハハハハハハ！！跡形モ無く壊しテやルッ！！―

ドシンッ！！ドシンッ！！

取り囲んでいた下級・上級妖魔たちが一斉に石棺の壁を攻撃しはじめて、奇形した四肢の一部を鞭のように振るいバチンと茶色く変色した壁に容赦なく叩きつける。

？―キャッハハハハ！！潰れロォ！！潰れロォォォォッ！！潰れチマエエエエエエエエエエエエエエ！！！！！―

小さき光が何度も旋回しながら石棺の周囲を取り囲む妖魔達が建物を攻撃する度に喜び、攻撃された建物の脆い壁から瓦礫一つが地面に落ちて、破片が複数に飛び散る瞬間を見た途端その小さな光は狂声を上げていく。

ライレクＣ一ガヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャッ！！！！！―

デフロラトーレＣ一キヒヒヒヒヒヒ！！こりゃ快感ダァァァァァァァァ！！！！！―

バゴッ！！！ゴゴォォォォォン！！

長年手入れされていなかった石棺の素材が妖魔の一撃でボロボロと脆く壊れ、壁の中に入っていた鉄骨の骨組みが剥き出しになり、それにむけて一撃を与えた途端酷くひしゃげて内部が見えるぐらいに折れた鉄骨ごと大きな風穴が開く。

ライレクＤ一キキキキキキキキキキキキキキ！！！！！―

デフロラトーレD「逝っチマぇ！！逝っチまぇエエエエエエエエエエエエエエエ！！！！！」

？「破壊シロォォォォォォォ！！破壊シロォォォォォォォォォォ！！内部ごとブッ潰シチマエエエエエエエエエエエエエエ！！！！」

周囲の妖魔たちが集団フルボッコしている中一二体の上級妖魔（デフロラトーレ）が酷くひしゃげた建物の入り口だった部分へと歩み、背中を少しネコ背へと折って両腕をだらけるように下へと流した時…

ベキベキベキベキ！！！！

ムクムクと膨れ上がって肉厚が増し外部の人間の肌が炭化したかのような黒く変色し、上空の月光の反射によっては表面が硬く高質化しているように見え人間のように細かった腕が巨大な獣のような腕へと化し爪先が鋭く鋭利に尖っていた。

デフロラトーレE「じわじワと建物（おもちゃ）如キニいたぶるのはツマラん…。一気に…」

デフロラトーレF「潰（こわし）テやルッッッッッッッッッッ！！！！」

ドガンッと二人同時にタイ●ンレイブもどきな動作で巨大化した片腕を思いっきり入り口付近にある壁に叩き付けた瞬間、殴りつけた部分から波紋のような波が何度も広がってその波紋の中心からヒビが複数走り、殴りつけた同士のヒビが交差するように交わった後…

？ー アッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！！！！死ンジャエエエエエエエエエエエ！！！！！ー

ドヴァァァァァァァン！！！！と殴りつけた部分から大きな稲妻型のヒビが高速に走って、頂上ぐらいの高さまで上昇し一瞬だけの光を放った後、頂上まで行った建物自体が断末魔を上げる音を立てながら原型さえ留めないぐらいに落ちていく瓦礫もろとも内部崩壊していった。

ドサドサと粉々に破損した機材が地に落ちて内部にあった電菅が千切れ火花が飛び散る部分はあったが、一瞬の出来事なので更に上から落ちてくる瓦礫の下になり更に積み重ねられて大きな瓦礫の山へとなっていった。

？ー呆気なぃ！！呆気なサ過ぎル！！所詮は外来ノ人間じゃぁソノ程度か…アハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！！！！ー

完全に崩れ落ちたかつての石棺…瓦礫（ゴミ）の山になったモノに向けて小

さな光は高笑いし、内部にいた外部者達(シャイナ)をザァァァマァァァ（＾Д＾）ｍｇ風な様子で何度も右人差し指を指す。

デフロラトーレＥ－フン…確かニ呆気なかったナ。この建物ノ内部にいたヤツらの気は感じラれん。…ソノまま死ンダか。―

デフロラトーレＦ－ククク…何にセよ、奴らハコノ世界ニ入ってキて早々我々ヲ多く殺しすギテいる。コノぐらいの報いヲ受けテ貰わんト、我々が受けた傷ガ完全に癒えンカラな。―

黒く変色した巨大化妖魔が完全に朽ち果てた瓦礫の山を見てクツクツとせせら笑いするかのように声を鳴らした後、外郭を覆っていた黒いモノが浸透するかのように消えていきたくましかった肉厚が元の人間のような標準の肉厚へと戻る。

？―アンダょぉぉぉぉぉぉ…何時まデ経ってモ出てこネェ。私ガ出る幕無いジャン、チッ…―

デフロラトーレＤ－帰るゾ。コンナがらクタ山の中に眠っている潰レタ糧を探す必要は無い。―

デフロラトーレＥ－ソウダナ。糧など幾らもアルからな。この弱肉強食ノ世界ニ居る限り…―

何時まで経っても出てこない彼等を見て妖魔達は期待はずれしたかのように瓦礫と共に埋まった彼らを再度叱咤を返した後、踵を返して瓦礫の山を背にしその場から去ろうとした時…。

エツィオ「おぃ…俺達を勝手に殺すなＹＯ（、８′　＃）ｹﾞテメェラが勝手にペラペラと喋るから出るに出ようかと迷っちまったじゃねぇかｗｗｗ」

デフロラトーレＤ＆Ｅ－エ？－

ドシャァァァァァァ！！！！

不意に背後から不意の第三者の声が聞こえてきて二人は互いに顔だけを後ろへと動かした途端、背後にいたエツィオの手刀が飛び込んできて二人は両眼から頭部裏にかけてエツィオの手刀が鮮血と抉られた目玉と共に突き破られる。

デフロラトーレＥ－だ…誰だテメ…－

突然暗殺された二人の上級妖魔（デフロラトーレ）を見たもう一体の上級妖魔（デフロラトーレ）が刺し殺した仲間を地に振り払う不機嫌顔のエツィオを見て叫んだ時…

フラムエール「「Ｄｏ　ｎｏｔ　ｋｉｌｌ　ｕｓ　ｗｉｔｈｏｕｔ　ｐｅｒｍｉｓｓｉｏｎ．（勝手に殺すな。そして死ね。）」」

ガゥンッ！！

突然エツィオの右顔側面から赤黒いリボルバーが突き出されて銃口から火を吹くと同時に眉間に一つの風穴が開いて、頭部後方から小さな弾丸が後から出る血線と共に真っ直ぐに伸びた後、一線の鮮血を噴出しながら仰向けに倒れていった。更に…

ディク『Ｕｎ☆ｊｅｔ♪』

ライレクＡ－ガ！？ガガァ…－

ライレクＢ－ギ…－

ドシュッとフラムエールが手にする銃で撃ち殺した妖魔の前にいた数体の下級妖魔（ライドレクルーゾ）に向けてフラムエールの背後にいたディクの魔力で生成された鳥の羽根（ナイフ）が交互に飛んで行き、全員が額に突き刺さった途端その部分が大きく削れたように内面ごと消失して、平たく言えばナイフが刺さった時点で下級妖魔の頭部が“消失”した。

？－ぁぁぁあああああああああああああああああ！！！

！？！？！？！（声にもならない叫び声）ー

その光景を見た小さな光は突然瞬殺された妖魔(なかま)達を見てムンクの叫びのように大きく絶叫し、瓦礫の山から…否“既に外にいた無傷な彼等”の姿を見て思わず…

？ーナンで無傷なんダァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！ー

エツィオ「おっｗｗｗ良く見たら“メリル”ちゃんじゃないかぁ～ｗｗｗまさか君のような可愛い子チャンが♪」

シャイナ「ほんとだぁ～ｗｗｗあの罵声ストーカー妖精（第百六十七曲参照）が俺らのような世界に入流したってワケねぇ～（迷惑的な意味でｗ）」

フラムエール「「“ヤツ”がリコがヒトのために作った武器を…！！」」

ディク『おっし！なんなら早く殺(や)っちまおうＺＥ☆』

ドドッ☆ドッ★ドドン♪（ターミ●ーター風にｗｗｗ）

エツィオ達は小さい光…否絶叫しているメリルに向けてゆったりとした速度で歩み出し、全員が全員で個人の武器（エツィオとディクだけは拳）をポンポンと軽く刀身を丸めた拳に叩きながら８・９・３丸出しの表情で威圧を掛けつつメリルに詰め掛ける

メリル―（ヒィッ！！ヒィィィィィィィィィィィィ！！！！）ミ…ミンナァァァァ！！こ…ここココココこいツララらヲカッ…カカぁ囲めェェェェェェェェェェ！！！！！―

ザザザッ！！！！

内面はエツィオ達に対しての恐怖・表面は焦ったようなもの凄い表情を出しながら引き連れていた妖魔達に向けて右腕を上げた後、それぞれの場所へ帰ろうとしていた妖魔達はメリルの声で一斉に後ろへと振り向き自身に向けて歩んでくるエツィオ達を取り囲む。

エツィオ達は互いに背を合わせて臨勢体勢を取り何時でも己が武器を振るえるようにして、エツィオは両拳を前に突き出し・ディクは背中から出ていた翼を中に仕舞って両袖から隠両剣（カトラス・ポルックス）を出し・フラムエールは右手に持っていた銃を右腰のホルスターの中に仕舞ってリコを左手で抱えながら●刀（●ｉｉリモコン）を構える。

エツィオ「さて、楽しい大乱闘の始まりだ。シャイナ、俺の中に入ってくれ。」

シャイナ「まっｗｗｗこうなるわなｗｗｗ次回は“大乱闘チートブラザーズ”っとなるワケですね解りますｗｗｗ」

シャイナは解りきっていたかのようにエツィオの腹部に向けて身を屈めた後、顔からズブズブと入っていき所々波紋が浮かびながらシャイナはエツィオに「くすぐってぇ～ぉ♪」と言われつつ素直にエツィオの身体（なか）へと入っていく。

フラムエール「「リコ、しっかりと俺にしがみ付け。絶対に放すんじゃないぞ。」」

リコ《うん。》

ディク『ＨＡＨＡＨＡ♪Ｃｏｎｔｉｎｕｅｚ ？ ｐｒｏｔ？ｇｅｒ ｌａ ｆｅｍｍｅ ｑｕｅ ｊ ａｉｍａｉｓ ｊｕｓｑｕ' ？ ｌｅ ｄｅｒｎｉｅｒ（惚れた女は最後まで愛し護りぬけ）と…たしか小さなノ島国にいた“傾奇者”という台詞を俺なりに言ってみたけど…合ってます？“閲覧者”の皆さん？？』

フラムエールが抱かかえているリコに向けてこれから起こる修羅場（敵が）にリコを告げている最中、ディクは“カメラ目線”に向けて背を折りつつドゥｐ顔を見せながら何度も左人差し指を横に振る仕草を取った後…

シャイナ『んー確かそれは戦国バ●ラ２ＫＪが合戦中に言う架空台詞だと思ｒｙ（…そんなことよりｗｗｗ』

エツィオ「さぁ！始めェェェェェるＹＯＯＯ

第二百二十八曲　第一回戦“大乱闘チートブラザーズ”！！

―妖精界　リュミエール　牢獄館（ノワール）　ガラクタ山周辺（元何かしらの廃墟遺跡）―

エツィオ「ゴ●ゴムのおおおおお銃乱打（ガトリング）！！！！！」

シャイナ『いいぞっ☆派手にぶちかまして殺れ♪ｗｗｗ』

ドドドドドドドドドドドドドドドドドッ！！！！！

エツィオが両拳を何度も前へ素振りするように動かし大きく息を吸って背を後ろへ折った後、激しい魔神パンチラッシュが妖魔達に襲い掛かりそのパンチ自体が本人（エツィオ）の姿さえ見えなくなるほどの“クソ多い弾幕拳”が妖魔達の身体を容赦無く殴り付ける。

エツィオ「魔神パァァァァァァァァァァァンチ！！！！」

ライレクF―ギャァァァ…―

ライレクG―ギヒィァァァァァァ！！！！―

ライレクH―ヒィィィィィィ！！！！！―

ボボボボボボボボボボボボ！！！！！

エツィオの高速拳に殴られた妖魔達は殴られた箇所から背後まで突き破られるほどの風穴が多数開いて、最後まで絶叫を吐ききれないまま風穴が空いた内部丸見えの身体ごとボコボコに抉殺（ミンチ）されていく。

ディク『A↓A↓A！！A＋X↓Y↓↓B↓B↓B！！TAB押してF12連打ァァァァァァァァ！！！！のっ♪ボ★コラァァァァァァァァァァァァァッシュ！！』

デフロラトーレH―ぎぁァァァァ！！！！！―

デフロラトーレI―グバゥエぇぇぇぇぇぇ！！！！！！―

ドジャャァァァァァァァァァァァッ！！！！

高速に接近してきたディクが相手に攻撃させる暇も与えないぐらい

に一瞬の内に飛び込んで、その直後にイミフなコマンド台詞を吐きながら上級妖魔（デフロラトーレ）の頭部に次々と両隠（カトラス）左剣→両隠（ポルックス）右剣の順に突き刺す。

頭部を突き刺された上級及び下級（デフロラトーレ　ライドレクルーゾ）含めた妖魔は案の定即死し力無く地へとキスした後、刺された部分からダイヤ状の粒子が浮き上がって細かく頭部から足先まで綺麗に分解しながら消滅していった。

フラムエール「「Ｄｉｅ　ｑｕｉｃｋｌｙ！Ｎｅｖｅｒ　ａｐｐｅａｒ…！！」」

デフロラトーレＫ－ギャ！？？！？－

ライレク－グへ…？－

ドンッ！！！！

フラムエールに切りかかろうとした妖魔達が一斉に奇形したモノを上に振り上げる仕草をとったが既にリコを左腕に抱えていたフラムエールの姿は無く、彼は既に切りかかろうとした妖魔達の背後に居てフラムエールは背後に居る妖魔達に振り向かないまま手にしていた●刀（●ｉｉリモコン）を左腰にある鞘へゆっくりと仕舞った直後…

フラムエール「「Ｒｅｔｕｒｎ　ｔｏ　ｔｈｅ　ｄａｒｋ　ｌｉｋｅ　ｓｉｌｅｎｃｅ．」」

ズヴァァァァァァァァァァァァァ！！！！！

背後にいた妖魔達の身体に光の太刀筋が複数高速にシャッシャと動いた後、その発した部分から赤い血線が噴出し身体がズレ落ちながら空中分解されていった。

シャイナ『！十時方向及び四時方向から増援部隊が出現！そいつらも全部３・７・５・６・４して下さいＮＡっ☆』

エツィオの身体の中にいたシャイナが頭部の髪一枚を“何処かのアンテナ”のようにピンッ！と立てて、エツィオ達が大乱闘（フル☆ボッコしている）最中の新規状況をＡ●Ｅ風オペなノリで彼等に伝える。

エツィオ「了ぉぉぉぉ解っ☆サンクス！シャイナぁ！！」

ディク『オッケェ～♪（＾＾）ｂんじゃ、さっさと俺らを取り巻く奴らｗ…「「ｕｎｎｅｃｅｓｓａｒｙ（要らん。）もう終わった。」」Ｏｈっ Σ（・・）』

エツィオとディクがそれぞれの武器（エツィオは拳）に付いた妖魔の返り血を振り払った後、ディクの背後でドサリと新鮮な肉が重々しく落ちる音が鳴ってディクは顔だけを後ろに動かして背後にいる相棒を見る。

フラムエール「「我々を囲っていた上級・下級妖ノ魔を含めて累計９８８８３１２９０３４５体の内９８８８３１２９０３４４体。俺がさっき斃した死体（コイツ）を含めて９８８８３１２９０３４５体だ。第一次敵部隊はもう殲滅している。」」

ディク『ちょっｗｗｗそんなに居たのかフラムエールｗｗｗ俺ぁ倒すのに忙しくて数なんか数えてられなかったし…ｗｗｗ』

ディクの背後にいたフラムエールが地に伏した死体を頭部に向けて右足を叩きつけて、グシャリと踏み潰す音を立てながら彼等の周辺に転がる“かつての妖魔だった死体”に閲覧者用カメラを後退させてその全面を詳しく映し出す。

エツィオ「え～？？（・８・）そんなに居たのかぁ？俺からして“まだ少ない”と思っていたけど？？」

フラムエール「「そうだな。まだこれは“前菜”程度にすぎん。これから“主食盛り合わせ（メインコース）”の嵐がやってくるぞ。」」

自分らが倒した最初の敵数をフラムエールから聞いてディクは目を大きくしてちょっと息が乱れながら驚いている表情を出す対象的に、エツィオは“息さえ乱れていないまま涼しい顔”で両腕を組み強面を出すフラムエールに軽く口笛を吹く。

ディク『く～８００年前の大戦と大違いだなｗｗｗでもいいや…こうして戦う度に俺も強くなるもんだしｗｗｗ経験値うｐのチャンスだぜぇ～☆』

エツィオ「それを言うなら“後々の後半に向けての能力値振り分け稼ぎ地点（ポインツ）”だなっ★」

フラムエール「「ｐｏｓｓｉｂｌｅ　ｔｏ　ｓａｙ　ｅａｓｉｌｙ　ｉｎ　ｓｕｃｈ　ａ　ｓｉｔｕａｔｉｏｎ…（こんな状況でよく言う…。）まぁいい、奴らを完全に叩きのめすまで俺は剣を振るうだけだ。」」

その直後シャイナの台詞通り上空から新たな上級・下級妖魔が現れて彼等の力で血の海になっている戦場に降り立ち、再度彼等を逃がさないように数の暴力でドーナツ状になるよう再包囲する。

エツィオ「おっし！敵さんも殺（や）る気マンマンだしこっちも温まって来た！！“魔神化”してさっさとケリを着けるぞぅ♪」

シャイナ『ちょ！！Σ（ー Д ー　；）そ…そんなことしたら、アータ…』

ディク『オィオィ！！それだと魔神化した時の莫大な魔力でアンタの存在自体が“バレ”ちまうぞ！？この世界にいる妖精達が！！』

シャイナとディクはエツィオの言葉を聞いて少し焦るような表情を出しディクは顔だけを横に動かして、ポキポキとのんびりとした表情で両肩を回して首を右往左往に動かしてストレッチしているエツィオに緊迫したような言動を吐く。が…

フラムエール「「…いや“大丈夫”だ。ディク、俺達も共鳴（リンク）してさっさと奴らを滅するぞ。」」

ディク『でもっ…！』

側に寄ってきたフラムエールがディクの右肩を軽く叩いて、ディクはその意味が解らない表情でも出しながら顔だけを上に上げて不敵に笑みを浮かべる相棒（フラムエール）に言う。

フラムエール「「心配するな。奴が“この時点”で出てきているならこの世界外にいる奴らも感じることは無い。さぁディク、俺と共鳴（リンク）

鳴を！」」

ディク『！？…わ…解った！いくぞ、フラムエール！！Ｒ？ｓｏｎａｎｃｅ！！』

その意味が理解出来ないディクは少々戸惑いの表情を浮かべた後、相棒（フラムエール）の言われるままに右腕を横に伸ばして両袖から出ていた両隠剣（カトラス・ポルックス）を中へと仕舞い右親指と人指し指の骨を軽く鳴らして、側にいたフラムエールと同様に赤い線を全身に張り巡らせ赤黒い光柱を立たせた後赤黒い外人侍へと変ずる。

シャイナ『え？ええ？？一体どうゆう意味かおしｅ…』

エツィオ「ＨＡ・ＨＡ・ＨＡ！！次回その意味を教えてやるＹＯ★さてっ…」

仲間（ディク）が共鳴（リンク）したのを見届けながら“カメラ目線”に向けて軽くウィンク☆をかました後、エツィオの全身に青い線が走ってメキリと少しずつ身体が変化しながら構えていた両腕を下へ下ろした後…

エツィオ『第二次大戦と行くか。ヒャッホゥ！！』

フラムエール【ふっ…偉く上機嫌だな魔ノ神よ。】

全身に青白い光柱が上へと遡って光が止んだ直後に魔神と化したエツィオがうきうきとした様子で地に降り立ち、それを溜め息を付きながら苦笑いする混合体（フラムエール）が可笑しくクックとした後自身達を取り囲む妖魔達に向けて身構えた。

第二百二十九曲　Ｐｏｗｅｒ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｂｒａｖｅ　Ｖｉｓｈｎｕ　ｔｈ

―妖精界　リュミエール　牢獄館（ノワール）　血濡れガラクタ山周辺（元何かしらの廃墟遺跡）―

メリル―ァ…アアアア

金色の鷹の目の下に浮かぶ二つの隈取り…

メリル―ま……ままままママママママま……魔神いィィィィィィィィィィィィィィン！！！！？？？？？！！ほ……本物ォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！！！！！！！！！―

エツィオ『ＹＥＳ☆正真正銘俺は“魔神”ＤＥＡＴＨ～♪♪』

メリルが今いる世界全体に響き渡る程大きな声を上げている最中、エツィオは本来の魔神と化した腕を囲む妖魔達に振りかざして、ズバッと今いる位置とか関係無く“斜線に入った存在（てき）を全てエツィオの爪でバラバラに引き裂く。

エツィオ『ヒャッハァ～！！！！！ＴＨＥ俺得★徒手格闘術タイムＤＡ☆！！！！いちッ！コンボッ！！にっコンボ！！スリィィィィィコンッｒｙ（』

シャイナ『ちょｗｗｗ省略すんなｗｗｗそれにそれはコマンドサンボというレヴェルじゃねｒｙ（』

ライレク「ｓ＆デフロラトーレ」ｓ―ギャァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！！！！！！！！！

ＤＯＤＯＤＯ

ズシャアアアアアアアアア！！！！

両手首裏に付いていた鞘みたいな部分口から本来の青白い長いアサシンブレードが飛び出し、エツィオは身を軽く飛翔させて何度も横回転させながら自身が大きな横版の扇風となり斜線上にいた全ての妖魔達を“ズタズタに千斬るよう解体させていった”。

フラムエール【Ｒｅｄ　ｐｉｎｗｈｅｅｌ！】

ズシャアアアアアア！！！！

フラムエールは右手には●刀（●ｉｉリモコン）を左手にはリコが持っていた“金光槍（ドレ・アルカンジュ）”を持ちながら自身を何度も後方回転させて剣圧と刀身に覆う魔力の刃で襲い掛かる妖魔達を斬り捨てる。

ライレクＮ－ガァァ！！－

フラムエール【甘い！】

ドスッ！！

地面へ着地後フラムエールは背後からの殺気を感じて左手に持つ槍を手の中でなんども回転させた後、背を向けたまま後方から襲い掛かる妖魔を手にする槍一突きで眉間に当てて頭部を突き破りそのまま刺殺する。

リコ『凄い…この私でも長時間所持は不可とされていた“千の存在を支配させる魅了の槍”が…。』

ディク『武器でもその中の人間のような意思を持った“誇り高い兵器（魔具）”があるもんだ。“その力を超える持ち主を選び一切衰えずそのまま力を継続できる者”って奴だな。あの武器…相棒に選んだようだぜ？』

リコ『フラム…。』

フラムエールの身体（なか）にいるリコが何時の間にか持ってきたのか解らない金光槍（ドレ・アルカンジュ）をそのまま振るう炎翼（フラムエール）を見て驚いたように息を漏らし、その隣でもいるようなディクがかっかと胸を大きく張って笑いながらその光景をそのまま観戦★モードに映る。

フラムエール【ふむっ…長射程（リーチ）はあるが横に関しての対応が皆無…か。まぁいい、コレは俺が短期間で改善してやる。】

フラムエールは右手に持っていた●刀（●ｉｉリモコン）を左腰の鞘へと仕舞って左手に持っていた槍を何度も手の平に回転させながら、背中から右肩を通じて変則的に動き槍自体が回転しながら右足へと落ちた後、フラムエールは足の爪先で槍の柄を軽く蹴って数回弾みながらフラムエールの右手内へと綺麗に収まる。

エツィオ『い～なぁぁぁぁぁいいなぁぁぁぁぁぁ～♪俺も槍を使いたいぉ～（ア●クリ2プレイ時の意味で）』

フラムエール【断る。断じて貴　様　に　は　や　ら　ん　ぞ　魔　ノ　神　よ　（迷惑）　この武器は元々リコが使っていた武器なんだ。俺が…彼女の代わりに使う。いや…“事を成し遂げるまで”に使うだけだ。】

エツィオ『…。』

ドシュッ！ドズッ！！ズバンッ！！！ザシュシュシュシュ！！！！

フラムエールは槍を両手持ちに構えて何度も前へ突き刺し襲い掛かる妖魔達の身体に複数の背中裏が見えるほど風穴を開けて抉り倒しつつ、エツィオは両手首裏から出ているアサ★ブレで一撃切断死させながら互いに背中合わせで妖魔達を片っ端から殲滅していく。

エツィオ『いいや、お前がその武器を使え。んー…お前ぇが持って

いる武器自体が“魂（アンタ）を気に入っているようだぞ”？』

エツィオはアサ★ブレで切断しながらも途中喧嘩キックも入れて、魔神化した時の竜のような足形がくっきり残るぐらい風穴が開いて後方へと吹き飛ばしつつ、フラムエールが持つ武器自体の意志（こころ）を背中を護るフラムエールに手に持つ武器の代弁を吐く。

フラムエール【ふん…前はリコに力を貸したくせに、何を今更…。】

エツィオ『その“前所持者（リコ）”が“弱くなった”そうだ。要するに“武器を扱う者に対して力不足”でありまたは“武器自体が前所持者（リコ）を感情が戻った時点で完全に見限った”とか…』

フラムエール【…やはり“力ある者”しか分け与えないのか…。皮肉なものだ。】

フラムエールは一瞬両眼を閉じて魔神（エツィオ）の酷な…否“今の世界でもよくある事”を聞いてフラムエール自身は解っていても納得できない部分があり、その納得できない部分こそがいずれにせよ食い違ってくる本当の矛盾点に憎憎しい思いを脳裏に過ぎらせる。

フラムエール【力…力こそ全て…か。だが…！】

キッとフラムエールは閉じられていた両眼を開けて鋭い眼光を放ちながら、両手に持つ槍に自身の魔力を握り締めている両手から柄を上に伝って槍先へと集中させる。

段々と槍先に赤黒い光球がより大きく膨れ上がり、バチバチと光球周囲に赤黒い稲妻が迸りながら二つの長い裾・エツィオの腰のコート状になっている翼を発生させている魔力の力場で少し上へと捲り上げるのように上げる。

そして…

フラムエール【俺は…力よりも“大切な人を一生護る信念・誇り”を欲する!!コレが俺のっ!!証明(ちから)だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!】

一度光球が小さく凝縮したがその直後に大きく弾き跳ぶように爆発して、稲妻混じりの赤黒い帳が広がりながら周囲に群がっていた妖魔達に帳が触れた直後、身体が細かい粒子状になる暇も無く跡形も無く連鎖的に消失していった。

第二百三十曲　ワンコの理由と赤鉄2主人公式火葬処刑

―妖精界　リュミエール　牢獄館（ノワール）　血塗れのガラクタ山（元何かしらの廃墟遺跡）―

メリル―■■■▲▲▼▼▼▼ー！！！！？？！！（声にもならない叫び声）―

フラムエールが持った金光槍（ドレ・アルカンジュ）の槍先に膨張していた赤黒い光球が、何度も放つ黒色の稲妻入り帳で二人を囲っていた全ての妖魔達が広がる帳に触れた途端“跡形も無く消し飛ばされた”。

メリル―嘘だ嘘だうソダ嘘だ嘘だウソだ嘘だ嘘ダ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘ダァァァァァァァァアアアアアア！！！！！！！！！―

メリルが再び両目を充血になるぐらいまで何度も両手で擦って、視界に映る現実を再度見た後絶望するような表情を出しながら宙で立ち尽くす仕草をする。

エツィオ『ヒュー♪武器自体の力を“反転”させたのか。それがこ

の威力…すんっっっっ晴らスいいいいイ！！』

フラムエール【千の存在を支配させる表面でも、“千の存在を葬り去る”裏本質ぐらいあると思ってな。俺はこの武器自体の本来の力を呼応してみただけだ。】

中央の稲妻が竜のように荒れ狂う黒い渦の力場がパシュンと弾けるように消えた直後、黒く渦巻いていた中からふざけ顔丸出しのわざとお手上げな仕草をしながら口笛を吐く魔神（エツィオ）と、槍先を地に着けて右手に槍を持ち左手を広げるように翳しながら斜めに構える強面のフラムエールが淡々とした口調で立っていた。

フラムエール【まさか本当に千の存在を滅する力があるとはな…。前世紀の俺達を生み出した最後の人間達の唯一の希望…か。】

ディク『まぁそれは置いといてｗｗｗ…なぁエツィオ？何故“神域以上の魔力が溢れる魔神の姿になった”のに、妖精共が何時まで経っても来ないぞ？これはどうしてだ？？』

シャイナ『！あっ！！そうそう！！ソレを聞こうとして私も言おうとしたけど…（このクソ作者がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！（怒）次回その理由を執筆されると言っていたのに…また嘘をつきやがったァァァァァァァァァ！！！！！！！（怒怒怒））』

すると各様々の身体の中でディクが唯一“気になっていた事”を思い出して、シャイナはディクが言った台詞を聞いて表面は訳も解らず戸惑う表情を出す裏に“毎回俺式★フライングフェイント”に苛ッ★殺ォォォォォォォォスのような怒りの表情を出しながらギリリと歯軋りをする。

リコ『“大人の事情”…というモノよ人間の貴方。思った事を書きたくても“ソレ自体を書き忘れてしまう”または“この小説を簡潔に読みやすく書くのをモットーとしている為に止む終えなく次の話へと持ち越す”…これが“三次元の人間”というモノよ。さて…』

混合体（フラムエール）の中にいるリコが牙むき出しのシャイナを他人事のように言う中、混合体（フラムエール）の視界に映る魔神（エツィオ）に向けて『説明してもらおうかしら？』と顔だけを横に向ける。

エツィオはピクンと銀白の角裏に隠れた尖った耳を僅かに上へと上げて、両腕を組みながら顔だけを背中に金光槍（ドレ・アルカンジュ）を携え両腰に両手を当てているしかめっ面の表面の仲間（フラムエール）に向けクスリと口だけを上に上げて微笑んだ後…

エツィオ『じゃっ★タネ明かしでもするか。…俺がこの世界に入った時点で何故犬になったのか。それを簡潔にまとめるとしようオープンＴＨＥウィンドゥ♪』

シャイナ『ぶっｗｗｗこれは９０年代？にやっていた子供向け番組のポン●ッキーｗｗｗ』

ピョイーン♪ピョイーン♪♪ピョイーン♪♪♪

エツィオは右手人指し先の鋭い爪先から青白い閃光を放って、一筆書きのように魔力で描かれる文字を宙に浮かべて綺麗な正方形を描いた直後、大きく開いた中心部分から第百六十一曲からこの話まで変じていた黒い子犬の姿を再度映し出す。

エツィオ『本来犬…いや動物達は自身の臭いマーキングをすることで自身の縄張りを広げ、自身の強さをそのまま残すために行なう習性を持っているが…』

映像には何度も妖精界の地面を白い胸毛見せながらコロロンと転がって、時には小説自体に書かれていなかった変な水浴び（水あめで全身にゴーロゴロｗ）シーンや、都市内のウェハースで出来た建物の壁一つに向けて何度も爪研ぎする所も…

エツィオ『俺はその“逆（ディアメトゥラーレ）”にやってみたのさ。周囲のマーキングを広げるという逆に周囲の臭いを一点に集中させるように取り込んで、“この世界の臭い自体を取り込んだ”…となると？』

シャイナ『！あぁ！！ｃｏｍｐｒｅｈｅｎｄｅｄ！！（なるへそ！

！）ｗｗｗこの世界独特の臭いを全て同じにするなら…』

フラムエール【この世界に漂う同じ嗅皮質（フェロモン）…この世界に染み付く同じ霊地（マナ）を、その魔ノ神の身体に取り込んだ身なら、全身から溢れ出る“神域の魔力を覆い隠すことが容易い”というワケか。ふっ…乙な事を。】

ディク『あーｗｗｗだから妖精共は来ないのねｗｗｗ（うわぁぁぁぁｗｗｗその姿ともいえども、“超甘臭そうな身体に見える”なぁｗｗｗ何かつらそう（精神的な意味で））』

フラムエール…シャイナ達はエツィオの策を成る程簡単・安心・納得な説明を聞いた後、シャイナとディクは丸めた右手を左手の平に乗せて、ポムッ♪と可愛いデフォ音を付けながら（´∀`）ナルホドナーとＡＡ交じりのやる気ねぇ表情で言う。

リコ『…色々と貴方自身には“気に食わない部分”があったでしょうに…それしか無かったの魔ノ神さん？？』

フラムエール【いずれにせよ面倒ごとが起きない分俺達には好都合だ。奴が送り込んだ雑魚どもはもうこれで最後のようだし…】

逆にリコは呆れたような表情を出しながらケラケラと笑う魔神に向けて両肩を下ろすような落胆振りを振るわせる最中、フラムエール

は軽く鼻で挫くように笑って『だってそれしか無かったんだＭＯＮ★』と子供のようにおちゃらけている魔神をそのまま素通りしながら…

フラムエール【チェックメイトだ、リコを裏切った妖ノ精よ。貴様に多大なる罪を此処で刻まねばならぬのだからな。】

メリル―！？！？！？！ヒィッ！？―

ザンッと一瞬の内にメリルの咽仏にフラムエールが背中に携えていた金光槍（ドレ・アルカンジュ）の槍先が突きつけられていて、後数センチで咽仏の肉に槍先から突き刺さる光景をメリルは全身をガタガタと恐怖で震わせる。

メリル―イヤ！！嫌！！厭厭嫌嫌嫌イヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤ！！！！死にタクなイ！！死にたクナい！！どうか許しテ！！私を助けテェェェェェェェェェェェェェェェェ！！！！！！！！―

フラムエール【Ｔｏ　ｏｕｒ　ｒｅｇｒｅｔ，　ｅｖｅｎ　Ｉｎｅｖｅｒ　ａｃｃｅｐｔ　ｉｔ．（断る。）貴様はリコを裏切る他に、我々前世紀の技術をこの不完全な世界に持ち込み、一切開かれる事が無い扉を無理矢理開かせたＣｒｉｍｉｎａｌ（罪ノ人）が！！】

メリル―ギャァ！！―

ドシュッ！！

メリルはこの後迫り来る死の恐怖を恐れて自身が行なってきたことを全て無(チャラ)にしようとただ生にしがみ付く様にフラムエールに向けて右腕を伸ばそうとしたが、【ｄｏ　ｎｏｔ　ｆｅｅｌ　ａｆｔｅｒ　ｍｅ　！！（汚れた手で俺に触れるな！！）】とフラムエールが持つ金光槍の刃先でメリルの右腕を容赦なく斬り落とす。

メリル「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁアアアアア！！！！痛い痛イイタイ痛ィィィィィィィィィィィィィィィィ！！！！腕ガァァァァァァ腕がぁっぁぁぁぁぁああああああああああああああああアアアアアアア！！！！」

フラムエール【それともう一つ…我が所持者であり契約者（名付け親）でもあるディクの戦友(とも)を傷付けたその分も払ってもらう。Ｙｏｕ　ｍｕｓｔ　ｃｒａｓｈ　ｔｏ　ｔｈｅ　ｅｔｅｒｎａｌ　ｄａｒｋ　ｗｉｔｈｏｕｔ　ｔｒａｎｓｍｉｇｒａｔｉｏｎ　ｔｈｒｏｕｇｈ　ａｌｌ　ｅｔｅｒｎｉｔｙ　ｗｉｔｈ　ａ　ｌｏｔ　ｏｆ　ｅｎｏｒｍｏｕｓ　ｉｎｔｅｒｅｓｔｓ　ａｄｄｅｄ.　（莫大な利子を付けたままあの世で永遠にさまようことだな！！）】

腕を斬り落されたメリルは切断面を見て大きく泣き叫びながら地に落ちて、フラムエールは冷たい視線を地に落ちていくメリルを見下すように見ながら数歩前へと歩みだす。

メリル―あぁぁ…ぁぁあああ…ひ…ひひ…ヒヒヒ！！…アハハハ

ッハッハハｈ！！！！ー

フラムエール【…。】

段々とメリルという存在（じが）が完全に消え失せていく中、メリルの大きく開かれた両眼から流す赤い血と斬られた右腕の切断面から溢れ出る鮮血を愛しいように眺めながら、霞んでいく視点を再度上に上げて表情がもう解らない赤黒い混合体（フラムエール）の姿を最後の抵抗という形で罵倒する。

メリルーアハハハ

グシャァァァァァ！！！！

メリルが狂喜顔からへっ？（　∀　）と数秒間フリーズしたかのような表情を出した直後、メリルはフラムエールの右足に押し潰されて、フラムエールのブーツの隅から小さな赤い液体がジワジワと染み出てくる。その直後…

フラムエール【第一罪ノ人処刑完了…けがわらしい“クソゴマ”がっ！！】

その後フラムエールは右足に魔力を注いで一瞬赤い光が浮かび上がった後、全身が赤いオー…否赤黒い炎に包まれてブーツ底に付着していたメリルだったモノの肉片を全て焼き焦がしていった。

第二百三十一曲　ちょっとヤバ気なホモモモンと一気に大事態発生な回！

―妖精界　リュミエール　牢獄館（ノワール）　血塗れたガラクタ山（元何かしらの廃墟遺跡）―

シャイナ『ちょっｗｗｗ鬼という鬼畜野郎がいやがるｗｗｗ只かリ●ちゃんサイズの罵倒妖精相手に“踏殺＆火葬”ｗｗｗ』

シャイナは口を大きく開けて顔面蒼白（違う意味のチア★ノーゼ）になりながら、全身を炎と化しているフラムエールを見る。

エツィオ『え～じゃねぇぇぇぇかＹＯ☆アイツが代わりにぶっ飛ばしてくれたお陰で、俺は身も心もスッキリしたよｗｗｗただなぁ～…』

フラムエール【すまない…お前にも踏殺した奴（コイツ）の身体を一太刀入れるべきだと解っていたが…】

全身が炎に包まれていた最中炎の中心からフラムエールの頭部がボコッと這い出て来て、徐々に燃え盛る炎が一つ一つ人のような身体（カタチ）へと成っていき、身に付いた炎が小さな火の粉へと昇華した直後元

の赤黒いガンマンコスを纏った姿へと戻る。

フラムエール【お前…いや“仲間の一人”の為に俺は…！「良いんだよ。一々細けぇ所まで気にする必要無ぇ！」！】

炎の塊から元の姿へと戻る仕草をするフラムエールが魔神（エツィオ）に役者違いだったと謝罪していた時、ポスンッとフラムエールの左肩に魔神の右手が軽く乗せられる。

暗い雰囲気を漂わせていた彼は俯いていた顔を上に上げると、いつの間にか魔神化を解いたエツィオが立っていて「何時までも暗ぇ顔すんじゃねぇ」と満天の笑みを出しながらフラムエールに軽く語りかけていた。

エツィオ「これでお前にとっちゃ新たな目的を見つけ出した第一歩ってことだ。此処だけじゃねぇ…此れから行く場所も同じような奴等が入るかもしれないし、高度の文明を手にした“キチガイ”らもまだ発展途中の人間界に何れか危害を及ぼすような行為を起こすかもしれん。そん時は…」

フラムエール【そうだな、まだ唯一人類のために戦う俺という“生粋の存在”が居る限りはな。】

フラムエールはエツィオのウィンク混じりの笑みを見て一瞬口の端

が上がり、心の中で憤りと自分という存在が今新世代の世界を崩壊してしまうのでないかとドロドロと渦巻いていたが、それはもう一瞬の内に掻き消された。そして…

フラムエール【（!?な…何だこれは!?俺のセンチメンタルが…??この感情は一体…）】

魔神（エツィオ）の人間らしい笑みを数秒間静止画像のような光景を脳裏に焼きついた途端、自然に浮き上がった両眼下に滲み出るように浮き上がった赤面…フラムエールはいそいそと顔だけを後ろに向けて、思考内の整理をするべく必死に心の中で何度も頭を両手で押さえながら顔をニ三回右往左往に動かす。

エツィオ「おっ?どぅしたんだよ“フーちゃん”?俺の顔を逸らして何を急いで隠しているんだぁ〜??（・∀・）ニヤニヤ」

フラムエール【ふ…フーちゃん!?ば…馬鹿者!!俺はフラムエールという名が「イヤンっ★嫌っすｗｗｗこれから俺はお前のことを“フーちゃん”と呼ぶからなぁー♪」いっ!??!?!?】

ドドンッ☆

魔神（エツィオ）から視線を逸らしていたフラムエールは突如目の前に２８２８顔を浮かべるエツィオがいて、フラムエールは一瞬【うわぁっ!?】

とひょんとした声を出してしまい、その声を聞いたエツィオはクスクスと笑う。

エツィオ「おーおーｗｗｗ顔が赤いぞぉぉぉぉぉぉぉぉぉ？赤いぞぉぉぉぉぉぉぉぉぉう？？てか…シャイナァ！お前の言う通りマ近に見ると本当に“女見てぇな顔付き”したんなぁぁぁぁぁぁンｗｗｗ（　゜∀　゜）ニヤニヤ」

シャイナ『でしょでしょｗｗｗ外見からの“見事なシャープ腰”といい“雄っパイが見えそうな胸筋”とか“顔面半まで開けられた真っ黒いファスナーから湧き出る絶対領域”とかｗｗｗコイツ…本当は“Ｍ属性なエロ男丸出しキャラ”じゃね？？（８０１的な意味で）』

フラムエール【ば…馬鹿者！！“俺の顔に近付きながら喋るな”ままま…魔ノ神！！それと魔ノ神の中に居る人間…しシャイナ！！“変な台詞”を吐きながら魔ノ神と同様にお…俺に変な思考を与えるんじゃない！！や…止めろぉぉぉぉ！！（必死）】

後数センチで“魔神（エツィオ）の唇と接触するぐらいの距離”まで詰められたフラムエールは、顔面全体に赤みを帯びた熱と大量の汗だくを流し顔自体を引き攣りながら慌てて身体ごと後ろへ振り返って、一旦今居る場から離脱するように脳内で右腕を前に伸ばして助けを求めるような素振りをした後…

フラムエール【り…りリ共鳴解除（リンクダウン）！！で…でディクーっ！た…助け…】

ディク『ちょｗｗｗまだ俺お前に共鳴解除させる思考ｇ…』

エツィオ「あ。（・・）」

シャイナ『！ちっ…アァァァン野郎ぉぉぉぉぉぉ…逃げやがった！！（腐女子的な思考で）』

パシュンと所持者（ディク）の意思と関係なくフラムエール自身の意思で共鳴（リンク）を解除し、赤黒い光の柱が立って数秒間赤黒い光が止んだ後、光が昇っていた中心に両足を綺麗に折って両手を地に着けている“乙女座りディク”とその側でフツーに突っ立っている硬い表情のリコが居た。

ディク『なｗｗｗ何この“何処かの誘いをさせるようなエロ体勢”はｗｗｗてか…エツィオ、シャイナァ～…俺の相棒に一体何をしｒｙ（』

リコ《貴方が背負う刀（フラムエール）から…何か外部に対して“脅”の気が出ているわよ？私のセンチメンタル…いえ私自身の感情から中に居るフラムエールの思考を読み取ると“ビクビク”しているような感じがするわ。》

ディク『ぶっｗｗｗあ…相棒がビクビク…だと？ｗｗｗ』

シャイナ「おぅよ！あの女々しい顔付きが居るとついつい俺の“ＴＨＥ☆妄想爆発ヒイィィィィィハァァァァァァ人間（やっおーい）”が全開しちゃうのよぉぅｗｗｗもう奴に向けて現代世界にある“アレ”と“アレ”をヤツにぶち込んで“アンアンさせたい”ような腐要素全開☆脳内妄想２００％以上！！」

エツィオ「そうそうｗｗｗ“８０１”の連中に敵を回すと絶対に勝てねぇぞｗｗｗ特に作者が時折見る・参加するとある２●ｈスレ掲示板になｗｗｗ（実話）」

ディク『マジかよｗｗｗ』

ディクは一旦背中に携えている長神刀（※中でｏｒｚ体勢になりながら心が折れているフラムエールさんｗｗｗ）に向けて視線を映し、呆れたような言動を吐きながらゆっくりと両手に力を入れて立ち上がって、いつ間にかエツィオの身体（なか）から出ていたニヤニヤ顔全開の“８０１全開のシャイナ”を見て思わずブフッと口から白い液体を吐き出す。

ディク『まぁそれは置いといて…なぁリコちゃん？本当にいいか？？この武器を…』

リコ《あ…そうか…フラムエールが金光槍（ドレ・アルカンジュ）を問題なく使えるとなると、貴方も“フラムエールと同様に扱える”ということになるのね…。》

中には作者が体験した実話もちょぴりと混じっていたがディクはそんなことをスルーするかのように気にせず、背中に居る長神刀の鞘と交わるように携えている金光槍（ドレ・アルカンジュ）も見てちょっと申し訳ない表情を出しながら隣に立つリコに言う。

リコ《いいよ。その武器自体が貴方達を選んだとならば…》

《あげる》とリコはディクが背中に携えていた金光槍（ドレ・アルカンジュ）に向けて伸ばそうとしていた左手を両手で握り締めるように止めて、ディクはリコに握られ左手首から全身にかけて少女の温かみを感じながらそっと右手を握り締められている少女の両手甲上にそっと乗せる。

ディク『…良いんだな？リコちゃん？？君に取っては長年付き合ってきた武器（あいぼう）なんだろう？？』

リコ《うん。でももう“今の私”にはもう持つことすら敵わないようになったのだから…。だから代わりに貴方とフラムエールが最後まで使ってほしい。私が作られた時と同時に開発された擬似林檎（エデンの果実の模擬品）の素体とされた存在なのだから…》

ディク『リコちゃん…。』

ディクはふと口の端を上に上げて両眼を閉じゆっくりと頷くような仕草をした後、後方でエツィオとシャイナの２・８・２・８鑑賞視線を背中から受けながら握り締めている少女を胸元へ引き寄せようとＳ…

ディク『で？毎回毎回この感動シーンを邪魔する“キチガイ野郎”は現実（リアル）で本当に死んだほうがいいぞ？（大迷惑）』

シャイナ「ちょっｗｗｗ」

エツィオ「ありゃりゃぁぁぁぁん（ハート）ょぅぃ〃ょとパパンの幸せな光景が一瞬の内でｗｗｗ」

ガキンとディクは背後からの強襲者を背中から出した純白のトキの翼で受け止めるように止めて、翼自体が“人間のような腕”になりながら強襲者の武器と硬質化した翼で火花を散らしつつ思いっきり突き出すように翼を動かして、強襲者を更に後ろへと後退させる。

？『ガァァァァァァァァ！！！！！コロス！！貴様ラは！！必ず必ズゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！！』

ディク『！お前は！！』

エツィオ「あーあー…“裏本質”が完全に出ちまっているぜ。一体何が原因でこうなっちゃったかなぁぁぁぁ？？」

ディクは後方に仰け反らせた強襲者の姿を見て大きく眼を開けながら身構え、エツィオは両腕を組んでケラケラと笑いながら強襲者の姿をじまじまと見詰めた。

？『貴様ラノセイでエェェェェェェェェェェェェ！！！！許さナい！もう許さナイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！！！！』

第二百三十二曲　Un vendicatore chiam? la rit

―妖精界　リュミエール　牢獄館（ノワール）　血塗れのガラクタ山（元何かしらの廃墟遺跡）―

？『グルァァァァァァァァァァァァ！！！！！！！！！！
殺スッ！！！！！殺すっ！！！！！殺ォォォォォォォォォォォォォォォォシテヤルぅウウウウウウウウウウウウ！！！！！』

シャイナ「何だありゃ…何か……どっかで見たことがあるようなボスが目の前にｗｗｗ」

ディクが翼の力ではね除けた強襲者正体…かつては金色に輝いていた長い髪が人間の血のように染まり、純白だったドレスも赤茶色く変色して臍の緒が見えるぐらいにボロボロに破け、両腕の途中から白い羽毛が浮かび腕自体が大きな翼になって折り畳む部分から人間のだった時の腕が生える。

両足はもう原型さえ留めていないぐらいに三つに細かく編むように分裂した緑・白・赤の長い触手、背中からはあの美しかった丸みを帯びた四角形の翼が何かしらの突然変異で変わった吸血蛭のような六つの長い触手…

チート一行から見た姿はかつてこの世界を束ねていた“妖精王（リオリーネ）”が人の形すら留めていないほど異形となり、透き通るような綺麗なマイク音だった声が“ドス汚いガラガラ声”になって、本来の裏本質が解放された“完全体の妖魔”へとなっていた。

―大妖魔　カラミタ・リオリーネ―

ディク『妖精王が…妖魔に!?こりゃ一体どうゆうことだよ!!』

シャイナ「うはぁ…下半身がポ●モンのデ●キシスみたいな触手に、上半身はD●Dに出てくる女神ギョ●アエ戦みたいな…き…気色悪い生物（ナマモノ）だぁー!!キャー!!（棒）」

エツィオ「わぁーわぁーwww（棒）」

後方でシャイナとエツィオが“罵りという意味の無表情”のまま酷い棒読み台詞を吐いて綺麗に人差し指を指している最中、ディクは知る知識の中で有り得ないことを前方に映っているのを見て、リコを胸元に引き寄せてギュッと守るように抱きしめながら、背後にいるエツィオに向けて汗を数滴流しつつ顔だけを振り返る。

エツィオ「…いや、解んねぇな。ヽ（、8、）γつーか、突然現れ

たモンだからその状況を見ていない俺が知るワケねぇーだろｗｗｗ
（即答）」

ディク『そりゃそうだけどさ（－ｏ－；）でも、アンタが教えられた通りの知識では、妖精王は他の妖精達の身体と違って一切妖魔化しない“最高性能の素体”だと『死ねエエエ

リオリー…大妖魔『グルァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！』

ディク『ちっ…にゃろぅ！コイツ！！』

またしても大妖魔（リオリーネ）は翼から羽根（ダガー）達を投擲させてきて、ディクは舌打ちしながら槍を立て続けに高速回転させ時には背中から出ていた翼（腕）を払い除けるように振りかざし、ガシガシと羽根（ダガー）を弾く作業に戻る。

フラムエール「「前話の事があって少し落胆していたが、今はその場合じゃない…ディク、加勢するぞ。」」

ディク『相棒（フラムエール）！』

第二次…第三次の羽根（ダガー）を弾いている最中、ディクは背中から出していた両翼（うで）を元の翼に戻し中へと閉まった後、背中に携えていた長神刀が赤い光を放って上半身だけ浮かんだまま、ディクの攻撃の補助（スタンド）形態で現れディクが弾いている羽根を全て●刀（●ｉｉリモコン）で叩き斬る。

シャイナ「！ミッソー！！インカミン…ミソォォォォォォォォォ

オオオッ！！！！」

途中ディクとフラムエールが弾いていない部分の羽根（ダガー）が後方にいたシャイナ達に襲い掛かったが、エツィオはシャイナを護るべく前に出て身体に右手をシュポンと浸透しながら入れた後…

エツィオ「味噌おおおおおおおおおおおおお…玉砕（ブレイク）ッ☆」

ブリトラ《ガゥッ！！（バキ！ゴキ！！ビキッ！！！バキキキ

前方から絶えない羽根（ダガー）の嵐をデイクが槍で高速回転させて補助斬りしている最中、フラムエールは斬り壊した羽根（ダガー）を手にする●刀（●ｉｉリモコン）の刀身上に羽根（ダガー）を破壊する度に乗せて、一本一本を刀身上で回転させながら第四波の羽根（ダガー）の嵐が一時的に止んである程度お手玉遊びをした後…。

フラムエール「「ｇｉｖｅ　ｔｏ　ｍｅ　ｓｅｐａｒａｔｅｌｙ　ｎｅａｔｌｙ　ｉｎ　ｔｈｅ　ｄｉｓｃｒｅｔｉｏｎ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｂｕｌｋｙ　ｇａｒｂａｇｅ（粗大ゴミを無差別に捨てるな、アバズレ#$&@＊×女）」」

シャイナ「ちょｗｗｗ英文の中に（ピー）がｗｗｗ」

ドドドドドドドドドドドド！！！！

刀身上に乗っていた総計２００００本ぐらいの半壊羽根を宙に投げて、多くの羽根（ダガー）が回転させながらフラムエールが浮かぶ顔面の高さまで飛翔した後、フラムエールは右手に持つ●刀（●ｉｉリモコン）を両手持ちに変えて前へと突き出すように回転する羽根達を全て“突き出す勢いの剣圧で前へとぶっ飛とばした”。

大妖魔『ア〝アア〝ア〝アアアァァァァァ〝ウ！！』

ドジャァァァ！！とフラムエールが突き飛ばした全ての半壊羽根が狂い無き軌跡で大妖魔（リオリーネ）の全身に全ての羽根が刺さり、一部は抉るように削られて内部ごと欠損する肢もあり背中を後ろへと数秒仰け反ったが…

大妖魔『ギヒッ！！ギャハハ…ヒャヒャヒャ

仲間達(シャイナ)がポカーン（。Д　。）としたような表情を出しながら上空に浮かぶ大妖魔を見て唖然としている逆に、エツィオはキャッキャと無邪気な笑い声を上げて子供のように振舞いながら何度も左人差し指を指す。

フラムエール「「Ｙｏｕ　ｆｕｃｋ　ｉｄｉｏｔ…（クソが…）奴はもうヒトからかけ離れた我々が倒してきた奴らと同じ“異形”。いや…身体(うつわ)は奴らと違う。コイツは…」」

エツィオ「人間が防衛本能へと切り替わる時“中にある本質”に則って外部の存在を排除するよう身体ごと改変させ、一時力を完全に放出するため自尊心というモノを切り捨てる必要がある。それがコレなのＳＡッ♪」

大妖魔『ギャァァァアアア

鎧付き下級ネロマテ- sその2【ギギギギ!!!!ガガァァァァァァァァ!!!!】

ディク『おぃおぃ…ｗｗまさかの黒鉛筆軍団召喚ｗｗｗ』

シャイナ「おぉ!!これは何というスーパーチート大戦の幕開け!?何か次回Ａ・ＨＯ★カオスな戦闘をやってしまいそう…ｗｗ」

紫色に満ちた上空から暗い虹色の輪が複数浮かんで何度も輪自体が周回していた途端、輪の中から鍋の蓋・バネ等を無理矢理に付けた“鎧付き下級・中級ネロズマティエーター軍団”が出てきて、ズラズラと集る蝿のように密集行動しながら地上にいるシャイナ達を隙間無いように取り囲む。

エツィオ「ありのままだなぁ～…。奴の中からほんっっっっとうな気持ちが感情として出ているぜぇ～。」

フラムエール「「我々に対しての怒り…悲しみ…憎しみ…妬み…それを一まとめにした一つの感情が…」」

リコ《“報復”…ね。》

お互い背中を合わせてそれぞれの武器を強く握り締めぐっと身構えるシャイナ達はリコの台詞を聞いた時、彼等を囲っていた全ての鎧付き悪魔達が一斉に雪崩込むように襲い掛かってきた。

第二百三十三曲　チート一行の変態共の編隊による無双☆大戦♪そして魔神の登場

―妖精界　リュミエール　牢獄館（ノワール）　血塗れのガラクタ山（元何かしらの廃墟遺跡）―

鎧付きネロマテA【殺セェェェェェェェェェ！！！！奴ラヲ今此処デ抹殺シテヤルッ！！！！！！！！】

鎧付きネロマテB【仕留メロ！！必ズダァァァァァァァッ！！！！】

鎧付き中級ネロマテA【ヴァフォォォ

シャイナ「えっ？どうやっｔ…オブッ！！」

エツィオの背中に合わせているシャイナが顔だけを後ろに向けて言った途端、自然に下げていた右腕の手の平に冷たい感触を受けて思わず顔を自然に下に向ける。

アンゲルス【あらっ…貴女が私と一緒に踊るの？可愛い坊や（ダーリン）の婿さん？？】

シャイナ「ちょっｗｗｗコレは…」

右手の平に握られていたのはエツィオと契約した氷魔銃（アンゲルス）であり、エツィオは氷のショットガンを一時的シャイナに渡したようだった。

アンゲルス【本当は可愛い坊や（ダーリン）と一緒に踊りたかったけど…】

シャイナ「何？俺じゃ不服？？この俺がゲーセンの“ＳＴＧ系統のアーケード全世界３位”と言われた（匿名）プレイヤー名“Ｓ．Ａ”をっ！！」

シャイナは右手に持つ氷魔銃（アンゲルス）の言葉に何か不満のような声を聞いて

少しムスッとした後、自身の視界から襲い掛かって来る鎧付き悪魔達に向けて…

シャイナ「“総合ＡＩＭ率９９％”かつワンコインクリア回数他ゲー含めて“９６６８６３４１２５８９９回っ”！！今の現実ゲーマー世界にゃぁ“全世界三強”として恐れているイタ公代表シャイナ・アクイラ様を舐めるなよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！」

ディク『ぶっ！？ｗｗｗ』

アンゲルス【あらっ？】

下級ネロマテ－ｓ【グギャァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！！！！！！】

ズドガァァァァァァァァァァァァァァァァン！！！！！

手にした氷魔銃（アンゲルス）をシャイナは“片手射ち体勢”で中腰体勢すらしないままそのまま引き金を引いて、シャイナが放った氷の魔弾達が狂い無き軌道で鎧を纏う中の唯一被われていない“僅かな隙間”に魔弾が突き刺さった途端…

シャイナ【“ゲーマー廃人”は伊達じゃねぇぇんだよっ！！】

リコ《その意味…理解……出来ない…………。》

パキッ……ガシャァァァァァァァァァァァン……

―シャイナが放った氷の魔弾を受けた中級含めての“総勢射殺数９００００体”の鎧付き悪魔が全て凍り付き、隅々からヒビが細かく走った瞬間“９００００体”の鎧付き悪魔が身体ごと硝子の破片のように砕け散って逝った。―

フラムエール「「…恐ろしい女であり不可解過ぎる怪力女だ。これが奴の“本来の本質”なのかっ!?（（（（（（（（（（゜Д゜；）））））））））））））））」」

エツィオ「Ｎｏッ♪本質ではなく、これはシャイナの…閲覧者(アンタ)の三次元(リアル)にいる“極限までにやり込んだ真の変態王者”だぞっ☆」

シャイナ「ヒャハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！！！（　゜∀゜）死ね死ね死ねぇぇぇぇい！！！！！ヒィィィィィィィィィィィハァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！」

ズガンッ！ズドンッ！！ドキュッ！！！ズドドォォォォォォォォォォォ！！！！！

エツィオの隣にいる半透明状態（フラムエール）が身体を後方に向いて、後方で狂喜乱舞を繰り出すフリーダムシャイナの“殺★戮Ｋｉｌｌ Ｋｉｌｌアクション”を見てゾッと青ざめた表情を出しながら…

リコ《……人間なのに…どうして……》

フラムエール「「不可解（カオス）だな…（諦）」」

―“ただの人間なのにただの人じゃない廃人（ゲーマー）モード状態のシャイナ”を呆然として見て、フラムエールだけでなく傍にいたリコもあの凍り付いた悪魔達と同じように数秒間フリーズしていた。―

エツィオ「良いぞぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！！シャイナァァァァッ！！俺様も負けてられないＺＥ☆ブリトラァァァァン（＊´８、＊）」

ブリトラ《ガウッ！！カァァ……ゴクッ！》

バキゴキバキャゴキャビキッボグッゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリ！！！！！！！

エツィオの背後で殺戮射ちしているシャイナを和気藹々で両手両足を踊るようにはしゃぎながら、エツィオの右手に持つ雷竜鞭（ブリトラ）を横に振りかざす。

横に振られたブリトラはアーン（＾〇＾）と可愛らしく口を開け、鎧付き悪魔達を口内で生々しい音を立てながら美味しく召し上がっていると裏腹に…

ブリトラ《我々をこの回まで放置してきた“執筆者”め…これがもしリアルだったら、我は…！！》

アンゲルス【それは無理というモノよブリトラ？ここにいる“私達”を“文字だけで産み出したその人”と“この架空世界”との干渉なんて一切出来ないし、簡単に言えば“不可能”という意味よ？】

心境は“第百六十一曲から今回まで一切出番無し＝引き籠り＝ニート”だった暗殺魔具（エツィオのペット）達は、作者に対して悪意＝訴えを感じつつ特に駄犬（ブリトラ）は、内面で牙と雷で今すぐにでも作者に向けて雷撃で消し炭にしつつ噛み砕きたいと思っていた。

が…所詮はこの小説自体は“架空”そのものなので、二次元と今の我々が住まう“三次元”には当然その願いは一切叶わないモノなので、彼等にとっちゃぁ皮肉過ぎる話ｄ…ｒｙ（

ディク『まっ…そんな小難しいことを言っているより、今はぁ～♪』

フラムエール「名付け親（ディク）に近付く憎たらしい悪ノ魔を…殺す！！」

ズバンッとディクが両手に持ち構えた金光槍（ドレ・アルカンジュ）を目に見えないぐらいの速さで何度も前に突き出して、ディクの背中から浮かび上がっている幻影（フラムエール）は突き漏れてしまった鎧付き悪魔を、手にする●刀（●ｉｉリモコン）で容赦無く鎧ごと叩き斬る。

エツィオ「ヒャッハーーーーーーーーーー１１１１１２２５１７５６９体目の悪魔を撃墜（デストローイ）ッ♪」

ブリトラ《ガウゥッ！！バオッ！！グルルルルル！！！！！》

シャイナ「ハッ…何のぉ！現時点射殺悪魔総計“１２３６９５８７０００体”中…ヘッドショットキル数“１２３６９５８６５５８体”！！まだまだ射ち漏らしがある見てぇだなぁっ！！」

エツィオ「ＨＡ・ＨＡ・ＨＡ★そんぐれぇ頭がパァァンＫｉｌｌしてるなら“十分過ぎるぐらいのプロの壊（ころ）し方”だＺＥ♪」

アンゲルス【ウフッ♪“可愛い坊や（ダーリン）と肩を並べるぐらいに凄い”わよ？人間の貴女。】

ズダンッズダンッとシャイナとエツィオは互いに背中を合わせ襲いかかる鎧付き悪魔を手にする武器でぶちのめし、ヒーハー状態でそれぞれ手にするエツィオの使役達（ペット）とフツーに会話しながら鎧付き悪魔共を殲滅する。

フラムエール「「ドラゴンの型！！無限熱弾乱射（インフェニティードライヴ）！！」」

リコ《試験太陽拡散焼却攻撃（アナザーヴィシュニコムディストラクション　ディスチャージ）…解放！！》

鎧付き悪魔軍団【グアアア

イルみたいな弾幕を多数放出”し、一つ一つの光弾から百熱以上の陽炎を浮かべながら全ての鎧付き悪魔共を内部ごと貫通する。

悪魔共が纏う鎧の効力を一切無視した“太陽並みの熱”に鎧の魔力さえ消し飛ばすぐらいに焼け消えて、総計９９６８７４５２１０００体の鎧付き悪魔が全てフラムエールとリコの太陽の力でジワジワ…否ボッと一瞬の内に灰さえ残らないまま魂ごと焼却されていった。

ディク『クイック弾き！↓＋Ａ俺式ストレェェェェトＡ／Ｂキィィィィィィィィィクッ＼（、Ｏ′θ／！』

鎧付きネロマテＺ【ギャッ…】

ドバンッと目の前に突っ立っていた（ディクの速さに付いてこれなくてオロオロしていた）鎧付き悪魔の顔面にディクの右足が強くめり込まれて、足蹴にされた周囲からヒビが走った途端鎧が纏っていた頭部に白銀の光が迸り、ブーツ脇に付いていた短銃（リボルバー）が火を吹いて鎧ごと顔面を抉り滅する。

ディク『お前で“ラスト”じゃ！アバヨ、クソ★▼※□※♂が！！（そう言えば何か妙な事が起きているな。この世界はもう妖精王という存在が無くなって、他世界からの干渉も起こり得るというのに…）』

ディクは鎧付きの悪魔の顔面に足蹴にしていた右足をパッと離して、頭部が無い悪魔の死体が力無く倒れていく姿をディクは他所にしながら、顔面を上に上げて今いる妖精界自体の境界線効力を不思議に思いながら疑惑を過らせる。

ディク『なぁ、エツィオ？もうこの世界は…（？他世界との干渉を絶っている境界線がまだ継続している？？それに特定の範囲内しか悪魔共のみ転送させていない制限域がまだ生きている…これは一体…何故？）』

ディクは最後の頭部の無い鎧付き悪魔を倒した身体をブーツの爪先で蹴り転がし、蹴られた死体はジュワッと溶けるような音を立てながら消失していく最中、後方で手足を伸ばしてストレッチをしているのびのびモードのエツィオに問う。

エツィオ「うんにゃっ♪まだこの世界を被う結界魔力は健在だにゃぁー☆まだまだ“数体の悪魔”しか侵入されてないし、侵入されたとしても“制限された箇所しか侵入”しか出来てないし、抜群な防壁が敷かれているから完璧ジャナイノォ～？？（カ●サキ風な意味で）」

ディク『で…でもエツィオ！一度妖魔化された妖精はもう二度と“魔力が使えない”ハズだよ！？例え最高性能の素体で出来た妖精王でも一度妖魔化してしまったら…』

エツィオ「あぁ、この牢獄（ノワール）の中と同じように魔力は二度と使えない。本質がさらけ出した本来の力で外部からの侵入者を倒し、人肉（かて）を体内に得ることで魂ごと崩壊していく時間を少し引き伸ばすことが出来るからな。でもよぉ…」

ブリトラ《グルルルルル…》

のびのびとストレッチが終えたエツィオは右手に持っていた雷竜鞭（ブリトラ）の剣先（鼻先）に軽いキスをして、ブリトラは甘えた声を出しながら素直にエツィオの身体（なか）へと戻っていった時、氷魔銃（アンゲルス）を持つシャイナに向けて歩みながら更に続けて話をした瞬間…。

エツィオ「俺達の前方に浮かぶあの妖精王…いやアイツはただの“妖精”であり決して“王という素質が無い”ただの妖精なんだよなぁ～。アイツには元々この世界を被う為の魔力が全然無い。奴は“偽物”だよ。」

ディク『なっ…』

シャイナ「ちょっ…！」

フラムエール「「なん……だと……！？」」

リコ《…。》

エツィオの発言を聞いた仲間達は全員唖然とした表情を出して、彼らの背後には奇声をガラガラと上げる大妖魔（リオリーネ）を背にしながら、エツィオが放つ閉鎖空間の中へと引きずり込まれていった。

第二百三十四曲　本当の妖精王と残酷過ぎる本性と若干病ンダ素顔

―妖精界　リュミエール　牢獄館（ノワール）　血塗れのガラクタ山（元何かしらの廃墟遺跡）―

ディク『あの浮かんでいる妖精王が“偽者”!?じゃぁ誰がこの世界の境界線を張っているんだ!?』

ディクは宙に浮かぶ大妖魔（リオリーネ）にむけて武器の刃先（ドレ・アルカンジュ）を突きつけながら構えつつ、額から数滴の汗を流し後方にいるエツィオに背を向けたまま問いかける。

エツィオ「これだけの魔力の層に覆われているワケだ。他世界との干渉を避けるために魔力維持するとなると、この世界全体の境界線を全て見渡せる場所で“比較的に超安全な場所で継続し尚且つ監視し続けることが出来る”。この要因がマッチングした所はもうおめぇらにも解るだろ??」

エツィオはシャイナが持っていた氷魔銃（アンゲルス）をパシッと軽く回収し、右手の平の中で銃を何度も回転させた後身体の中へと入れる。

フラムエール「「！！まさか…」」

ディク『ちょっ…待てエツィオ！それって…』

シャイナ「あぁ…馬鹿な私でも“本当の妖精王”なのか脳内映像で浮かび上がった後、リコとエツィオ以外のシャイナ達は一斉にその人物名をはもるように言う。

リコ以外のシャイナ達「「『あのかりん塔にいたバアサンか…。（第百九十七曲参照）』」」

？《このクソ餓鬼共め…御主らの年代をよぉぉぉぉぉく思ってほどほどにしておいたんじゃが…（怒）わしゃぁは現在“牢獄（ノワール）の監視者”！！１４００年前以降はもう隠居済みなんじゃ！！》

リコ以外のシャイナ達「「「『！？』」」」

タイミング良すぎるぐらいにエツィオ達の前方の地表に音もエフェクトとかも無く牢獄の監視者“ブリッツ”が地中からピョーンと現れて、全身が透けているように赤い地表が映りながら数秒間宙に浮

かぶ。

やがてブリッテの纏う衣類の色に戻るようにほんのりと浮かびながら着色され、ブリッツはしかめっ面を出しながら両足に着けた草鞋の両サンダルを赤い液体が付着した地表へとピチャッと着ける。

―前世代妖精王　ブリッツ（現牢獄館監視者）―

エツィオ「おっ？丁度良く“本人”が現れたようだＺＯッ☆わざわざ“市街地”から来てご苦労なこった。」

ブリッツ《黙らんしゃいこの監…いや人間のように憎たらしい魔神めっ！！お主が最初この世界に来た時点でもう妖精界という基準が何もかも終わってしまったんじゃっ！！》

ブリッツはイライラとした表情でズカズカとエツィオに向けて乱暴に歩んだ後、ブリッツが手にする樫で出来た杖をニヤニヤ顔のエツィオの顔面に向けて突きつける。

ブリッツ《主がこの世界に来なければ何もかもが巧く行って来た！お主という“外法の存在”がもしこの星に生む事すらなかったら我々前世紀のにん…》

エツィオ「じゃぁ逆に問うけど新しく転生した人間達は“おめぇら前世紀以外”を見殺しにさせるつもりだったのか??あの強大な都合良過ぎるタイミングで特級悪魔の来襲といい、お前…本当は“外部の存在と共に計画を立てて最初(ハナ)っから転生された人間達を皆殺しにされる茶番な計画を作っていた”んじゃねぇのか??」

ブリッツ《!》

エツィオの顔面に樫の杖を突きつけていたブリッツは突如エツィオの表情が一変したの見てピクンと耳たぶを動かし、ブリッツは黙ってエツィオの“自身の本性を見破られたような言葉自体(カットイン)”を嫌々しく思いながら、心の中で過去にやってきた自分を再度分割映像で見直す。

ブリッツ《ククッ…何を言い出すと思えば。お主…》

―特級悪魔の襲来でパニックに陥った逃げ惑う妖精達と妖精へと成り過ごした前世紀の人間達…―

―必死に奮闘する妖精王と名乗った偽の役者と、その役者(ジブン)と共に闘い特級悪魔の攻撃で鮮血を散らし散っていった転生され人間達…―

―粗方の民が狩り尽くされた後の偽の役者は、乱入された魔神との共闘の闘いの中で不敵に笑う…―

―背後に…―

―その背後に……―

…

……

……

ブリッツ《…わしゃぁは外部の存在などと手を組むことは一切せんよ？わしゃぁはただこの世界に住まう人々を護るべく“出来る限り被害を最小限に抑える”ために一定の箇所へと絞り、必要とされない“模擬品と玩具”には大人しくk「「それが“王”としてやるべき行為なのか！？貴様っ…！！」」…（苛）。》

ブリッツは過去に起こした行為を自分自身では“仕方無いこと”と思わせていたが、シャイナがいる場所にいるエツィオの後方にいたディクとフラムエールが憤りを思わせる表情でそれぞれが手にする武器を震えただせながら、前妖精王（ブリッツ）にむけて激を飛ばす。

フラムエール《それは貴様にとっては“仕方ない事”だと言い聞かせていても、内心は“必要とされる者以外は斬り捨てる”つもりだったんだろう！？…俺には見える…お前が犯してきたその行為はっ…！！》

ディク『あぁただの“虐殺者”だ。それにもう俺達に“役者（うそ）”をし続ける素振り”はもう止せよ…。必死すぎるお前の下手な演技にゃぁ付き合うつもりは…無ぇ！！』

エツィオ「そういうこったぁ他世界と干渉を持った“外道な妖精王サン”よぉ～。いや…アンタは滅びる世界の世代に“仲間（フラムエールとリコ）が生まれた施設”で２５８４１７３６９５番目の博士号を轟かせた“科学者ブリアニア・Ｊ・リシェーヅ”さん？」

ブリッツ《…（－へ－＃）》

敵意剥き出しの表情を出すディクとフラムエールの怒声を更にエツィオの“自分の素性・本名まで言われた”ブリッツは、口を閉じながらも静かに口内で歯を強く噛み締めて、内心から外側へと苛ついていく感覚を少しずつ覚えていく。

ブリッツ《…ふんっ！ただか戦闘兵器と新世代の人間ごときにこのワタシャぁが言葉攻めされてこけにされるとはのぅ…。お主らを見ていると次第に嫌というｈ…》

ディク『アンタの素性が俺らのような“赤の他人”に言われると嫌になるよなぁ～？分かるぜぇ～？その嫌嫌しい気持ちがよぉ～？』

フラムエール「「あの宙に浮かぶ“化け物”といい、俺達を生み出した製作者（さくさま）の父代わりとなる慈愛というモノが全然無い。正に外道。貴様こそ本当の悪ノ魔だ！！」」

シャイナ「何考えているのか俺らにはさっぱりだけどさぁ～。でもこれだけは解る…。アンタは…」

リコ《本名と素性はどうでもいい！貴女は私達が倒してきた悪ノ魔と妖ノ魔と同じ“敵”よ！！》

ブリッツ《……苛苛苛苛苛苛苛苛苛苛苛苛苛苛苛苛苛苛苛苛苛苛苛苛苛苛苛苛苛苛（―”―＃＃＃＃》

ブリッツはそれぞれの武器を構え敵意を剥き出しにしている（エッィオは両腕を組んでいるだけ）彼らを静に睨み付けた後、額に多くの皺を浮かべながら身体の隅々にプッチンマークの血管を浮かび上がらせた。その直後…

ブリッツ《まったく新世代も旧世代も五月蝿い童らじゃのぅ…。特に魔神の後ろにいるそこの二次元兵器共（オリジナルレプリカント）…貴様らの中に組み込まれていた自我を再度確認していたら完全にこの事は起こらなかったと思ったがのぅ…》

ブリッツは本性をさらけ出して先程よりも冷たい視線を彼等（エツィオたち）に注ぎながら、ディクの背後に浮かぶフラムエールと左傍に立つリコに向けて“科学者としての威厳”を言葉だけで見せ付ける。

フラムエール「「再確認してもどうせその時間など無かった。一々細かい事を気にしていると、前世紀にいた滅ぼす存在に破壊の時間を与えてしまう有用になってしまうのだからな！！」」

そう言った後ディクは背中に携えていた長神刀の束に手を掛けて“画面外”に向けて上を投げた後、投げられた方向から実体化したフラムエールが●刀（●ｉｉリモコン）を鞘から抜刀しつつ、両裾を上に舞い上がらせて綺麗に両足から命文字になるように地へと着地する。

ブリッツ《この失敗作が…お前を創らなければ良かった！それにこの世界に入った途端に、このわしゃぁが壊れたプログラムを修正させていれば、多少はお前のような若僧に命令基盤を…》

リコ《貴女達のようなただ外部の存在を滅ぼす力を求める慈悲の欠片もない傲慢の科学者などに！私達は…！！》

エツィオ「お前はもう妖精も王でも監視者でもない“あの宙に浮かぶ化け物んと同様”のアンタが偉そうに俺の仲間に気安く語るんじゃねぇよ。まだ偽りの博士号という“明らかに選抜を間違った”偽りの人間になり続けるつもりか？」

ブリッツはエツィオの暢気そうなＫＹ乱入台詞を聞いてプチンと来た後、怒りを露にした形相を浮かべながら欠伸を出しているＫＹ魔神に向けて激しい怒声を放った。

ブリッツ《黙れ小僧っ！わしゃぁはこの二体の失敗した二次元兵器（オリジナルレプリカント）のゴミに今話をしｔ…ｒｙ（…何故元々二次元兵器（オリジナルレプリカント）に自我を埋め付けた我がハーメルン機関の施設長の意図がいまだにも（略）》

エツィオ「良いぞぉ～！良いぞぇ～！！怒れ怒れ！！お前の素顔が醜い位に代わっているぞぉぉぉぉ～？？もっと理性を無くせ！！アンタの内部にある獣を全て解放しろぉっ！！」

シャイナ「かりん搭の　クソババァ　は　怒り出した！　かりん搭の　クソババァの　怒りのボルテージが　２５０％強にうｐ！！更に　かりん搭　の　クソババァは…（以下略）」

ディク『キメェキメェキメェキメェキメェキメェキメェキメェキメェキメェキメェキメェキメェｗｗｗババァの癖に超キメェエェエェエェエェエェ（笑）』

更に醜い顔へとなったブリッツを他所にエツィオとディクは腹をくに折って両手を腹に押さえたまま高笑いし、シャイナはとあるＲＰＧのステータス状態をマシンガンアタックするブリッツに向けてゆ

っくりボイスで言う。

リコ《漸く…見せたわね。》

フラムエール「「あぁ。非情に醜い製作者だな。こんな奴が今日まで妖精界を束ねていたなんて…」」

そんな光景を見ていたフラムエールとリコは、エツィオ達の口だけの挑発で乗せられているブリッツに向けて呆れた視線を出しながら、ただぼーと棒立ちになるように立ち尽くしていた。

第二百三十五曲　開発者と創作物の闘いと魔神のゴニョニョな策

―妖精界　リュミエール　牢獄館（ノワール）　血塗れのガラクタ山（元何かしらの廃墟遺跡）―

ブリッツ《このクソ餓鬼共が…わしゃぁのような“前世紀の思考な科学者”に何たる言い種を！！また新たに改善させる必要がある容器（ボディー）が増えるとはっ！！！！それに新世代の人間共の概念も改めて作り直すこともなんやら…本当っにめんどくさい奴らめっ！！！！≫

シャイナ「嫌ぁぁぁぁぁぁぁYO？アータのような“悪人面丸出しのしわくちゃババァーバァーア”なんかに私の身体をアッハンさせる行為など…クソ汚わらしいわっ！！寧ろ触れるな！！そして死ねッ☆」

エツィオ「そうだ！そうだ！！お前なんかのクソババアごときにシャイナの身体をエロチックな手つきで易々と触れさせてやるもんかっ！バーカバーカ！！ｗｗｗ（＾ｑ＾）」

ブリッツ《く…くくくくくくクソババア！？？？！？！？き…貴様らぁぁぁぁ…！！！！！≫

老婆（ブリッツ）ならではの口調を普通どおりに吐いたとしても、相手は通常？な人間達（シャイナ）相手（一部人外有り）にとってはその言葉自体が“不適切という意味のちょぴっとした卑猥”に聞こえたので、シャイナとエツィオは半ば馬鹿にするように大きく笑いながら何度も人差し指をさしてシャイナの隣にいたエツィオは、右目下を右手人差し指で引っ張って軽くアッカンベーする挑発仕草を取る。

フラムエール「「ふんっ…こちらから逆に言わせて貰うとすると、“お前自身を改変”させる必要がある。“貴様自身の身体ごとな”？」」

ブリッツ《お前？“お前”じゃと！？わしゃぁが“おぬし達を生み出した親”に対して何たる口の聞き方！！き…貴様のような出来損ないの兵器もっ…！！》

リコ《貴方は私に対して何を考えていたのかは知らないけれど…貴方は新世代の人間達を多く見捨てた！一度きりの命を無駄にさせた貴方が憎い！もう私達を生み出した親でもない…前世紀にいた人間からもう何もかもが全て堕落へと行ってしまった“最低の屑（ヒト）”よ！！》

ブリッツ《（、皿´＃）…》

リコは身体に向けて右手を入れて中から●ーアＤＬＣ武器に似た愚者の●哭のような赤黒い大剣を取り出し、彼女の側にいたフラムエ

ールも既に抜刀していた●刀（●ｉｉリモコン）の刀身を顔面横に持っていき、開いていた左手を左腰のホルスターに仕舞っていた赤黒い短銃（リボルバー）を取り出し、刀身とやや長い銃口を交差させるように構える。

ブリッツ《（っち…最良の素質があった戦闘用模擬体１７５号にもあの“赤長身のクソ餓鬼”と同じように染まったか。コイツも中々と様々な使い道があったと思っていたが…）やれやれクソ生意気な兵器（クズ）共じゃのぅ。しかし…忘れていないか？わしゃはもう既に“人質を取っている”ことを！！》

エツィオ「お？」

エツィオ以外のシャイナ達「「「《『！』》」」」

ブリッツは本性を丸出しにしながら馬鹿にしているエツィオ達（フラムエールとリコだけは真面目）に義歯が混じった歯茎が少し茶色い歯を見せ歪んだ表情を出しながら、エツィオの顔面に突きつけている樫の杖先をエツィオの額に軽く触れる。その直後…

チャキッ…

エツィオ「！」

ブリッツ《フェッフェッフェッフェッ！この杖は“対悪魔用圧縮型仕込み銃”でのぉ～。如何に最強の魔神とはいえこんな密着状態に構えられたら“後方にいる仲間でも手出しも出来ん”じゃろ？？それに…》

ブリッツはケラケラとひ●らし風な不気味な笑みを出しながら手にする樫の…擬態銃をエツィオの額に突き付けながら、後方にいる緊迫顔の仲間達に感ずかれないようにゆっくりと丸められた杖上部分の隙間にある小さな引き金に向けて右手人差し指を持っていこうとした。が…

エツィオ「それに何？なんかの効力でも付いていんのか？？かりん塔のバアサンよぉ～？？でっ？それで“俺相手”何かに人質行為なんぞ通用しねぇぞ？？」

ブリッツ《ふぇ？》

バキンッ！

ブリッツの次の視界に映った光景は額に突きつけていたハズの擬態銃の銃口が“一瞬の内にバラバラに砕けていて”、この時のみスロー・モーが掛かったように木の破片と内部の機材が破片のようにゆっくりと散っていく中、じっと見詰めているエツィオの哀れみな表情を両眼にくっきりと焼き付いていく。

ブリッツにとってはエツィオが語るその言葉自体もゆっくりに聞こえて、両眼が点な状態が何時までも続くように感じて尚且つエツィオ自体の容姿に見惚れるように釘付けになってしまい、ブリッツは前方から走ってくる一点の赤い存在に気づかないまま…

フラムエール「「Ｉｎｔｅｒｓｅｃｔｉｏｎ　Ｂｌａｄｅｓ!!」」

ブリッツ《あ゛？》

ようやく気がついたブリッツの視界の目の前にフラムエールが手にする●刀（●ｉｉリモコン）と銃自体に赤い炎が纏わり付いた交差する斬撃…いわばワン●ースのマリモが使う“●斬り”のような荒々しい斬撃が一瞬の内に襲い掛かる。

ブリッツは避けようとして身を引こうとしたがフラムエールが持つ二つの燃え盛る武器はブリッツの左上筋辺りの腕・右足大脚部を捕らえて、やがてその交差は次第に切込みを入れた部分を全て斬り落すように前へと振り翳され…

フラムエール「「Ｉ　ｓｐｅｃｉａｌｌｙ　ｇｅｔ　ｔｗｏ　ｓｏｕｌｓ　ｔｈｉｓ　ｔｉｍｅ　ｔｈｏｕｇｈ　Ｉ　ｗａｎｔｅｄ　ｔｏ　ｒｏｕｎｄ　ｅｖｅｒｙｔｈｉｎｇ　ｄｏｗｎ.（本当は

一気に全てを斬り捨てたかったが、今回だけは特別だ貴様の二つの肉片を頂くとしよう。）」」

ブリッツ《！？》

バシュッ…！！！！

フラムエールの斬撃を後退するように回避したブリッツは地表へと両足から着いた瞬間に、左上筋辺りの腕・右足大脚部のから一線の赤い線が綺麗に引いてそこから赤い液体が上へと噴出しながら、ゆっくりと斬られた部分が横へとズレて行き…

エツィオ「あらっ♪ここに新鮮な肉があるＹＯっ☆」

シャイナ「うんｗｗｗ新鮮というよりも“しわくちゃになったとても触れがたい腐りかけの汚ぇ肉”が落ちたけどＮＡッ★」

ドサッ…ドサッ…

ブリッツの足下に斬り落とされた左上筋辺りの腕・右足大脚部が転がり落ちて、切断面に小さな赤い炎の粉が少しずつ肉を焦がし、その斬られた肉片の上に赤い液体がボタボタと滝のように落ちて、肉片を赤く染め上げた。

ブリッツ《ぅ〝ぁ…アアアアアアアアアアアアア！！！！！！》

ブリッツは叫び声を上げながら切断された左上辺りの筋の腕の断面を残った右手の平で押さえて、ボタボタと血が落ちる右足大脚部の切断面部分は、背中から赤黒い魔力で生成された人の腕を足がわりに地を着けて倒れ掛かったブリッツの体重を支える。

ブリッツ《ガァぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！コのクそ餓鬼がァァァァァァ！！！！！き…貴様ラはわシゃぁを殺ストなルト、コノ世界デ何が起こルノカ解ってイルノカ！！！？？！》

バサッ！！

ブリッツは両目を赤く染め上げながら斬り落とされた相手（フラムエール）とムスッとした態度で両腕を組むエツィオ達を見て更に憤怒の形相を浮かべた後、背中から更に大きな赤黒い人間の腕を多数生やして、腕自体が翼のように変化し大妖魔がいる高さまで飛翔する。

背中の翼代わりとなった赤黒い腕を数回羽ばたかせて地上にいるエツィオ達に、苦痛な形相を半分浮かべつつ優位な形相を出して切断された左片方を切断面から赤黒い手で補いながら両腕を横に広げて軽く語る。

ブリッツ《カッはっはッハハ！！こジョワシゃぁが滅べバこの妖精界自体の境界線が崩壊しテ、他世界ノ扉を開キ今でも多くの境界線ノ前で集まってイる悪魔共に！！》

このことをまだ知らない妖精(にんげん)共もこの世界ごと焦土と化す！とブリッツは彼等に対して勝ち誇っているような台詞を吐いて、顔を上に上げながら大きく高笑いし両眼から数滴の赤い液体を地表に落していく。し・か・し…

リコ《いいえ、貴方の代わりは居るわ。今居る世界に…今居るこの場所で！》

フラムエール「「！」」

サクッと静かに大剣の剣先を地に着けて黒い柄を両手でかぶせるように持ったリコは静かな声で言って、両眼を細くし冷徹な視線を宙に浮かぶブリッツに向けて睨み付けるようにして、フラムエールの視線を感じながら顔を少し左横へと向け前にいるエツィオに言う。

リコ《魔ノ神さん…あの老婆の隣に居る“彼女”を…》

エツィオ「わかっているさ、お譲ちゃん♪境界線を張る魔力を持っ

ていないあの偽者（リオリーネ）の身体にゃぁ…」

ディク『え?? 何何?? アイツに何があるっていうんだ?? 教えて教えて!!』

シャイナ「E?（・ε・）何か策でもあんの? H男?? まぁぁぁぁた変な事を考え付いてヘンな真似をさせる気じゃないでしょうねぇ～?」

フラムエール「「Will measures like any way foolish juggler y?（どうせ下らん阿呆丸出しの策だろう?）しかし今の状況からしても唯一“悪知恵を目論む奇怪者”の言葉を聞けば多少の変化があるかもしれん。一先ず話を聞こうか…。」」

と一部酷ぇ台詞が紛れてながらもシャイナ達はエツィオの元へと歩み寄って、エツィオ自身は「カァァァァァァヽ（、Д,）ノ奇怪者とはなんじゃぁぁぁぁ!??!??!?」とワザとらしく両両足を地団駄するように怒り回った後…

エツィオ「じゃぁ俺が今から言う事をちゃんと覚えとくんだぞ?…それはな（ゴニョニョニョ

シャイナ「ちょ…ｗｗｗそれは可能なの？？ｗｗｗｗ」

エツィオ自身を囲む仲間達（シャイナ）に向けて宙に浮かぶブリッツに聞こえないよう小さな会議を開きながら彼らに語った後、エツィオの“次回の戦闘&今後の対応策”を聞いたシャイナは思わずひょんとした声を大きく出す。

ディク『へぇ…偽者（リオリーネ）の“アレ”があったから…そうかそうか…。』

フラムエール「「その内容は我らにとって“容易い策”だが…“少し奴の身体を荒くさせる必要があるぞ”？魔ノ神よ？」」

リコ《…色々と酷な事をさせるわね魔ノ神さん。でも今の彼女に取っては唯一…》

策を聞いた仲間達はそれぞれはぁと溜め息を付いて両肩を落しながら、それぞれのポジションへと歩み出していった。

第二百三十六曲　魔神エツィオ視点・前世紀元とある施設の科学者ブリッツの最期

―妖精界　リュミエール　牢獄館（ノワール）　血塗れのガラクタ山（元何かしらの廃墟遺跡）　上空―

ブリッツ《カァァァァァ！！何をゴチャゴチャと喋っているンだイ！！この騒々しい新旧世代ノ人間共と外法ナ存在ガっ！！》

ブリッツが地上に居たエツィオ達が何かと丸くなって敵側（ブリッツとリオリーネ）をスルーしている姿を見てキィィィィィィィィッ、（、Д,）ノと両手両足をバタつかせ苛立つような声を出した後、地上に居たエツィオ達がそれぞれの力でブリッツがいる上空へと上がってくるのを見る。

エツィオは背中から漆黒の鷹の両翼を、ディクはエツィオと逆の純白なトキの両翼を、フラムエールとリコは全身を赤いオーラで覆いながら魔力で飛翔し、非戦闘員のシャイナはエツィオの身体（なか）から短闇剣を取り出して召喚させたラークシャシーの背に乗り大きな翼でブリッツと大妖魔（リオリーネ）を取り囲む。

エツィオ「ラークシャシー、シャイナを頼んだぜ。皆！作戦は前話俺が言った通りに行動してくれ…よ？？」

ディク『巧くいくのかなぁ～？てか…あのバアサンは別に良いとして…』

ラークシャシー《何時までも弱気にボヤクな、魔神に鍛えられた人間の小僧。貴様は吾が愛する主の言葉に言われた通りに動けば良いことだ。》

バサッとラークシャシーの両翼の端にある一つの鍵爪をディクの頬を掠めるように軽く扇ぎ、ディクは一旦眼を背けるようにして顔を横に動かした後、『ハィハィ♪』と軽口でラークシャシーに吐き返す。

フラムエール「「先ずはあの妖魔から本質を魂から引き離すぞ。妖魔化を解いた後、後は…」」

リコ《貴方に任せるわ…魔ノ神さん？？》

固い表情を出したまま疑惑な思想を浮かべて武器を構えるフラムエールを後押しするようにリコが言った後、エツィオは「ちったぁ、“この俺”を信用しろよなぁ～（、ε′　）」と両頬を膨らませてブーイングするワザとらしい素顔を軽く出す。そして…

エツィオ「じゃ…何時も通りにヤってくれ。ただし“ギョロン☆ギョロン♪な目玉グルルン状態の彼女を決して壊すんじゃないぞ”？」

ディク『おうよっ！！俺っち、峰打ち得意だからＳＡッ★彼女の後頭部か鳩尾とかに峰打ちを決めた途端…“何て声をするのかなぁ～”？（ドキドキ）』

フラムエール「いや…軽い峰打ちだけじゃ、大妖魔という相手じゃ簡単に止まらんぞ？（苦笑）それにディク、お前“卑猥な発言が出る手前の言語が多少出ている”ぞ…（汗）」

ラークシャシー《ならば“死なぬ程度に痛み付ければ良い”ことだ。吾が愛する魔神よ…我らが引き付けいてる間奴を頼む。》

シャイナ「ちょっｗｗｗア●ヘルさん何気に怖ぇこと言うなｗｗｗまぁ良いや、取り敢えず各個に別けてそれぞれのミッションを片付けましょかぁ～？？んじゃ、エツィオ…」

リコ《気を付けて…ね？》

と仲間達の軽い会話？が飛び交い一部ヤバイ台詞内容が出ていたのに関わらずリコはスルーするようにして不安と信頼が混ざった表情を交互に出した後、エツィオ以外の仲間達は一斉に大妖魔に向けて飛んでいき、三人と一匹＆一人はそれぞれ大妖魔に向けて業を振るう。

エツィオは前方にいる仲間達の戦いの声と各魔力のエフェクトを見てふと口の端を上に吊り上げた後、顔だけを横に動かしてキッとした表情でブリッツを睨み付ける。

ブリッツ《カカカッ！！何を思い付イたと思えば“私の道具（むスメ）”ごときに態々分散サセテ、この高貴な頭脳ヲ継続サセテイるこのわしゃァが！！》

エツィオ「あ〝んっ？お前見てぇなクソバーローが“高貴な頭脳”だってぇ？ぶっはっはっはっは！！…いい加減自分自身の愚かさに気づけよ？…テメェ？」

ブリッツ《あァ〝ッ！？》

エツィオは一時子供のように馬鹿らしく腹をくに折って笑い声を出しながら堪える仕草をしたが、その数秒後に本来の冷徹な視線を出した真面目顔へと成って、いまだに不気味な表情で苦笑しているブリッツを言動だけで叱咤する。

エツィオ「お前のような奴が居るだけでこの世界は“俺が居た前世紀と同じ”ように衰弱していくんだ。この牢獄（ノワール）も次第にこの現状を知らない幸せがある居住区へと広がっていき、テメェが勝手にただ求めた戦闘兵器としての最高性能を見付け出し留めるべく、この妖精界ごと“実験所”へと代えて行こうとなぁっ！？」

ブリッツ《黙レッ！！！！外法に染めタ悪鬼メっ！！！！貴様がアノ時“アレ”さえとめてレば…止メテいれバァァァァアあああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！》

ドンッと魔力で生成された赤黒い左腕を身体を捻らせながら横へと凪ぎ払い、指先の鋭い爪がエツィオの腹を五枚に横スライスさせるべく、爪先から赤い残像を横に残しながら空を斬る。

エツィオは直ぐに軽く飛翔（ジャンプ）するようブリッツの攻撃を紙一重で避けて、両足をくの字に折りながら空中であるに関わらず“シェー”なポーズを取る。

ブリッツ《ガァアアアアアアアアアアアアぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！》

エツィオ「HAっ…こんな“若僧”相手に怒ってらっしゃる。経験豊富なアンタがこんな形相を出すなんて（笑）」

ブリッツの攻撃を避けたエツィオは右片翼だけを右腕に纏わせて爪形態にさせた後、ブリッツに向けて右爪先を前へと突き刺すように振りかざす。

ブリッツは瞬時にエツィオの突き刺し攻撃を纏わせた赤黒い左手を前に翳すように止めて、互いの爪と魔力で出来た赤黒い手の平から鋼音が鳴った後凄まじい火花が長期飛び散る。

ブリッツ《ガァァァァァァァァァァァァ！！！！！！》

エツィオ「そう怒るなよ。ほらっ★こーゆう風にして笑えよなぁ～…。ニコッと♪」

ブリッツ《ギッ！》

エツィオのはにかみスマイルがキラッ☆という効果音と共に右親指・人差し指・中指の手を広げるように伸ばして残りの指を折り曲げながら軽く上下に振った直後、ブリッツの左肩から少しの亀裂のような光が走った途端バシュッと赤い鮮血が上へと噴き出す。

ブリッツ《ガァァァァァァァァァァ！！！！》

バシュルルルルルルルルルルルル！！！！

ブリッツはいつの間にか斬られ断面が見えるほど抉られた左肩を右手で押さえながら後退し、ブリッツは両眼そのものが血なまこになりながら大きく叫ぶ声と共に背中の赤黒い翼（腕）を一斉に触手の

ように変化させ、“表面は天真爛漫のエツィオ”の全四肢に向けて触手と化した腕を一斉に前へと伸ばす。

エツィオ「もう科学者と言い難いほどより醜くなったなぁ～、ブリアニア。前のお前はこんな性格じゃなかったのにねぇ…。」

ザシャアアアアアアアアアア！！！！

エツィオはもう片翼も左腕に纏わせて両爪形態にさせた後前方から放たれてくる赤黒い魔力で生成された触手達を爪先だけで一つ一つ触れた途端、“魔力でされた赤黒い腕が伸ばされる後ろ方向に沿って斬り裂かれ”それぞれ火花を散らしながら伸ばされた触手（腕）がどんどん綺麗にスライスカットされていく。

タンッとエツィオは空中状態なのに関わらず“地上と同じように走り出して”、両腕を横に伸ばしてＯＰ●イジ並みの笑みを出しながらアラレちゃんダッシュをしながら触手を斬り裂いていき、一部触手の途中から小さな赤黒い人間の腕が殴りかかるように振り翳されたが、エツィオは瞬時に爪を横へと振るい小さな腕を爪で引き千切る。

ブリッツ《アアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！≫

エツィオ「Ｉｌ　ｖｉａｇｇｉｏ　ａｌｌ' ａｌｔｒａ　ｓｔｒａｄａ　ｄｉ　ｍｏｎｄｏ　ｆｕ　ｍｅｓｓｏ？（準備は出来たかブリオニア？）Ｉｏ　ｍｏｓｔｒｅｒ？　ａｐｐｅｎａ　ｌａ　ｐｒｏｃｅｄｕｒａ　ｆｕｎｅｂｒｅ　ｃｈｅ　？　ｂｕｏｎａ　ｐｅｒ　ｐｒｅｓｅｎｔｅ　Ｌｅｉ（オメェに相応しい葬儀方をそっくり与えてやるよ。）」

そしてブリッツの顔面キスさせるぐらいまで一気に間を詰めたエツィオは、血の涙が出ているブリッツの顔面を押さえ込むように爪と化した右手で頭部全体を被い被せた直後…

エツィオ「アバヨ、ブリオニア。Ｄｉｍｅｎｔｉｃｏ　ｌ' ｅｓｉｓｔｅｎｚａ　ｐａｒｉ　Ｌａ　ｃｈｉａｍ？　ａｎｃｈｅ　ｓｅ　Ｌｅｉ　ｅｓｃｅ　ａｄ　ｕｎ　ｓｏｇｎｏ？」

ブリッツ《ギャッ…》

大妖魔『ギャァアアア

た仲間達の作戦による攻撃で大妖魔（リオリーネ）の断末魔が轟いて背景が真っ白になっていった。

第二百三十七曲　エツィオの仲間視点・大妖魔としての本質の最後

―妖精界　リュミエール　牢獄館（ノワール）　血塗れのガラクタ山（元何かしらの廃墟遺跡）上空　仲間視点―

フラムエール「「ディクッ！！四時と二時と八時方向から投擲攻撃が来るぞ！避けろ！！」」

ディク『解ってるって、フラムエール♪ちょったぁ俺の腕前を信用しろって（笑）』

バシュシュシュ

いつか“本当に大怪我”するぞおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！（焦）」」

シャイナ「かぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！スッッッッッッッッッッ（、Д,）ゲぇ煩ぇよアンタァァァァ！！！！！何時そんな“超々々々々々々過保護な心配性（ママン）キャラになったぁぁぁぁ！！？？！？！！」」

フラムエールは楽々とした表情で回避する名付け親と逆に“とある漫画のようなアワワッと慌てふためく表情”をモロに出しながら、ラークシャシーに乗るシャイナに煩いと言われつつ「「馬鹿者！この状況でママンと言うなっ！」」とやや苛立つ声をシャイナに吐きながら手にする●刀（●ｉｉリモコン）で刀身を縦に構えながら投擲される羽根達を全て刀身だけで弾く。

ディク『ウッヘッヘッ♪ＲＴエアダァァァァッチ～☆更に続けてＬＴエアァァァァァァダッチッ★ウヘッヘヘヘヘヘ♪♪』

フラムエール「「だ　か　ら　っ　！！そんな変な避け方を止め…うわわわわわわわわわわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ（（（（（（（（（（。Д。；））））））））」」

シャ！！！！！！！

更にディクはほろ酔いしたかのような酔っ払い運転のように殺す気で投擲されてくる羽根達をギリギリ蛇行しながら避けて、フラムエールは更にハラハラとした表情を浮かべながらただ足下の階下で空中避けしている名付け親を、左手で開けられた口に向けて被うように更にあたふたした仕草を取りながら見届ける。

シャイナ「テメェッ！過保護過ぎる程があるぞこの“ママンなフーチャン”ＭＥっ！！！！これ以上テメェの性格が変わったら何もかもがｋ…」

ラークシャシー《確り吾の背に掴まれ魔神の婿よ！奴の攻撃が激しくなるぞ！！》

シャイナ「！だわわぁっ！？」

シャアアア

の配列のように一直線に飛んでいた羽根（ダガー）達に向けて翼と一体化した右手の平を前へ翳した瞬間、隊列を組んでいた一枚一枚の羽根が一斉に弾けるようにして飛び散って、それぞれの羽根（ダガー）達は一枚一枚意思あるかのように“まだ掠り傷一つもないノーダメ状態のディク達”に向けて一斉に襲い掛かる。

フラムエール「「だ・か・らぁっ！！一気に訳すような名前（フーチャン）を呼ぶなぁぁぁ！！！！いい加減に俺の本名をｒｙ（」」

シャイナ「“嫌で御座るっ（保●風に）”！！俺もこれから“フーチャン”って呼ぶからねっ☆（キラッ」

フラムエール「「だぁぁぁぁかぁぁぁぁらぁぁぁぁ“フーチャン”は止めろおおお

ように変えて”、羽根（ダガー）達はフラムエールの全身に刺さった瞬間に“ジュワァァァと溶ける音を立ててフラムエールを突く度に羽根（ダガー）達が太陽並みの熱で宙に蒸発する”。

ラークシャシー《フムッ、一点の火力を集中させた一点攻撃から分散攻撃と変えたか…。火力は先程より落ちるものの…。》

リコ《一つ一つ違う位置から仕掛けられるから、拡散範囲が広く相手に当てやすくなる。でも…》

バキキキキキキキン！！！！！

リコは冷静な表情で言いながら左腕を前へと翳すように伸ばし、ラークシャシーも左翼手をバサリと音を立てて腕の中へと収納し、本来の屈強の腕を出しながらリコと同様前へと翳した途端、全身の周りに薄い赤黒い輪が被うように張られ、赤黒い光で出来た膜に羽根（ダガー）達が触れた時、“跡形も無いように羽根自体が全て破片すら消し飛ばしてしまうぐらいに粉々に破壊される”。

フラムエール「「Ｈａ…Ｅｖｅｎ　ｉｆ　ｔｈｅ　ｍｅｔｈｏｄ　ｉｓ　ｃｈａｎｇｅｄ，　ｉｔ　ｉｓ　ｔｈｅ　ｓａｍｅ　ｔｈｉｎｇ。　（フン…詰まらん小癪な真似をしやがって。）」」

上記のｏｒｚ体勢からやっと真面目体勢になったフラムエールは●

刀（●ｉｉリモコン）だけで周囲から襲い掛かる羽根（ダガー）を全て叩き斬るように身体ごと回転させ、フラムエール自身が駒となり何度も回転させながら全ての羽根（ダガー）を刀身が一周する度に“粉末状になるぐらいまで粉々に粉砕する”。そんな最中…

ディク『ディクパァァァァンチ！！ディクキィィィィク！！ＲＴ連打ストレェェェェト！！ＸＸＸＸＸＸＸＸＸ連打連打連打連打ァァァァァァ！！！！！！アッヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャ！！！！！！！！（ﾟ∀ﾟ）』

ドギャラ〝ララ〝ラ〝キャズギャラララララ〝ラ〝ララララララ！！！！！

一方仲間達が羽根の弾幕をそれぞれの方法で凌いでいる最中ディクは“ひ●らし風の●ナのようなギョロンとした不気味な表情”を出しつつ分散攻撃させている大妖魔（リオリーネ）に向けて走り出し、背中に翼が出ているのに関わらず“エツィオと同じように地上と同じ感覚でフツーに走り”ながら、襲い掛かる全ての羽根（ダガー）を“ブ●タイ並みの素手力だけで不気味な効果音が流れながら粉々に破壊する”。

ディク『フッハハハ

シャイナ「ちょっｗｗｗ一部ＴＶ版の超時空要塞マ●ロスの名言が…ｗｗｗ」

フラムエール「「おぃ…で…デ…ィク？？　Ｄｏ　ｎｏｔ　ｅｎｄ　ａｌｌ　ｌｉｆｅ　ｓｉｄｅｓ　ａｎｙ　ｌｏｎｇｅｒ.（Д）」」

リコ《え…何あの黒深巾を被った人間…攻撃性が“異常に何かが”…こ…怖い…よ…。（表面的な意味で）》

ラークシャシー《…理解出来ぬ。（呆）》

ドガシャァァァァガガガガガガガガガガガジャァァァァァァァン！！！！

次第にディクが繰り出す眼に見えない素手の攻撃エフェクトが音速を超えるように白い何かが浮き上がって、ディクの両腕から出る白い靄が次第に人間のような腕へと変わって白い腕自体がグニャグニャと螺旋状にうねり、腕自体が牙が剥き出しになった蛇のように前へと伸びて放たれてくる全ての羽根（ダガー）を噛み砕き（殴壊し）ながら大妖魔（オリーネ）に向けて高速接近して行く。

大妖魔『！ガッ！！ギィィィィィィイイイイイイイ！！！！』

大妖魔（リオリーネ）は“不気味な表情で高速接近してくる黒フードの人間”を見てややどよめき後退する仕草を一瞬した後、背中の変異した触手翼を向かって来るディクに向けて伸ばしバキバキと数センチぐらい横に赤い線が引いた後小さな牙と長い赤舌が出た口が一つ一つ奇声を上げて大きく開いてディクを噛み砕くべく一斉に口を開いて呑み込もうとした…が。

ディク『ＧａｓｐｉｌｌａｇｅＧａｓｐｉｌｌａｇｅＧａｓｐｉｌｌａｇｅ

チュドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！

グシャアアアアアアアアアアアアア！！！！とディクが翳した右拳の“鉄拳☆制裁”が大きく口が開いた一つの触手に向けて思いっきり殴りつけた直後、殴られた部分から白いダイヤ状のような光の亀裂が複数刻んだ後、火が点いた導火線のような速さで“白い紙吹雪のように変化していき”、付近にあった触手達も向かってくる紙吹雪の余波で同じように巻き込まれながら大妖魔の背まで消滅していく光が辿り着いた瞬間大きな閃光と共に爆発して大妖魔は悲鳴を上げながら前へと仰け反る。

ラークシャシー《！大妖魔が怯んだ！！今が好機ぞっ！！》

フラムエール「「よし…俺の一太刀だけで“アレ”を奪い取ろう。」」

斬ッ！！！！

ラークシャシーの甲高い声が上がった瞬間にフラムエールは一気に駆け出して、ダメージ状態で前に仰け反っている大妖魔自体の動きがフラムエールに対して“スローが掛かった状態のまま”左腰に仕舞っていた●刀（●ｉｉリモコン）の柄を右手で掴んだ瞬間に“見えない居合い斬り”を振り翳して、大妖魔の首にかけられていた“アレ”の鎖だけを断ち斬り武器を再度鞘の中へと仕舞う。

フラムエール「「よし、“この世界を安定させる魔具の奪取完了”した。後は…」」

リコ《“魂（彼女）”を抜き取り、“仮の器を破壊する”だけね…。》

ドドド

の姿”を見てクスッと口の端を上に上げた後再度大妖魔に振り向いて、出した両隠剣の刀身と刀身同士を合わせるように両腕を綺麗に縦方向に合わせた直後…

ディク『Donnons－vous　qui　d?truisent　un　coup　seul　absolu　pour　donner　espoir　et　manutention　de　la　victoire!』

ドンッ!と合さった両隠剣同士が大きく光を放って一筋の光柱を境界線さえ突き破るぐらいまで眩しく照らした直後、一つの“ディラ●ンスレイの形をした光の大剣”がディクの両腕ごと一体化する。

そして…

ディク『Une　lame　de　la　lumi?re　de　la　manutention!!!!』

シャイナ「うオオおおおおおおおおおおおおおおおお!?!?!?!これなんて“オー●ーエンド”!?!?!?!?!」

大妖魔『ギャァアアア

ディクが一気に拘束されている大妖魔に向けて光の大剣と化した両腕をど頭ごと割るように振り翳した瞬間、大妖魔の頭部から股に掛けて一閃の光が走った直後光った部分から大きな光が漏れ出るように開いていって、遥か背後で“握り潰される音”と共に大妖魔が絶命を上げた途端その場にいるディク達ごと大妖魔の身体から出る大きな光と共に呑み込まれていった。

第二百三十八曲　王としての身体の構成条件…ＥＥＥＥＥＥＥ！？？！？！

―現世　妖精界入り口付近　境界線―

一方…エツィオ達が大妖魔と化した妖精王と事の発展させた元凶をぶちのめしている最中、現世の世界の妖精界入り口付近にある境界線上空に多くの下級・中級を含めたネロマテ達が犇めいていた。

ネロマテＡ【キッヘッヘッヘッヘ！！！！！以前ノ借リヲ返ス時ガキタゾッ！！！】

ネロマテＢ【今度コソ我ガ“主”ノ仇ヲ討ッテヤル！！！！！ガハハハハハハハッ！！！！！】

中級ネロマテＡ【ヴォオォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！！！！！！】

ガチガチと口内の歯と歯を擦り合わせる音を立てながらそれぞれの持つ武器を右往左往に振り、一部の者は口内で大量に溢れた唾液を咆哮と共に一気に吐き出すバリ汚ぇ輩も居いた。

ドンドンと境界線の内部から聞こえる境界線を張る存在から悲鳴と苦痛の声が聞こえる度にガス状の悪魔・実体化した巨大悪魔達は全員ケラケラと笑って、妖精界に敷かれている境界線が次第に薄くなるように消えていく時を待ち続けていた。そして…

ア……アァ……

ネロマテA【！境界線ノ内部ガ見エタゾッ！！！！！】

ネロマテB【クッハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！！！！！！！モウジキダッ！！！！！！モウジキアノ中ニ居ル妖精共ニ我ラノ報復ヲ与エルコトガ出来ルッ！！！！！！！！！】

ネロマテC【キキキキキキキキキキキッ！！！！！！】

張られいた濃い虹色の境界線が薄くなっていき境界線から発していたエロ声が弱々しく小さくなっていき、妖精界内部の景色が肉眼でハッキリと見える程見通しが良くなった後、悪魔達は牙を剥き出しにしながら前代の失敗した事を再度畳み掛けようとしていた。が…

ズァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！

ネロマテA【!?ナ…ナンダコレハッ!!!!??!!??!】

ネロマテB【ヒッ!!!!ア……ァ新シイ結界ガ…張ラ……
……何故ッ!!!!!??!】

中級ネロマテA【グギャァァ…】

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!!!!

解かれようとしていた内部が見える境界線が突如虹色から真っ白に成る程眩しい位に輝き、地平線に沿って白い光が張られている境界線を全体的に沿って再び交わった直後、大きな爆発音と共に閃光が広がって境界線付近にいた悪魔達を境界線の光の浄化の力で身体ごと綺麗に消し飛ばされていく。

ネロマテD【ヒッ!光ィィィィ!!光ィィィィィィィィィィ!!!!!!ヒギャァァァァァァ!!!!!!!!!】

ネロマテE【ギャァァァァァァ…】

中級ネロマテB【ギャフ…!!!!!!】

新しい境界線の光が今居る現世の地平線まで大きく広がって行き、その光に浴びられた悪魔達は悲鳴の最後まで吐ききれないまま身体ごと粒子状になるまで消失していく中、光そのものが現世の夜間帯を昼間に変えるほど大きく広がって照らしていく中…

？「あの光は…一体…？？」

その上空の光景を偶然見てしまっていた旅客機ボー●ング７４７一機がいて、内部にいる全ての乗客達がざわ…ざわ…と騒然としている中、一人冷静な表情で窓硝子に映る上空の光を見詰めている黒いスーツを纏った３０代後半の顔付きを持つ金髪の男が、座る席の周りに黒いサングラスを掛けた黒スーツのター●ネーター達の輪の中でそっと静かに呟く。

？「いや私の知る情報では恒星一つに向けて観測衛星シャトルを発射させる予定など入っていないぞ！？まさか…」

教会上層部員Ａ「…あれはシャトルの光では無い。寧ろ“イギリス首相の貴方”が知る必要無いのです。」

？「いや！し…しかし！」

教会上層部員Ｂ「周りの愚民共に易々と遊ばれてはなりません。貴方はただ我々コロナ・ド・アンジェリの下で確りと己が今行く所の

責務を果たしてください。」

？「…。」

男は淡々と感情が無いように叱咤される不気味な集団にピシャリと言われた後、渋々としながら黙って右手に持つ携帯用ＰＣに何かを打ち込んで男とスーツ集団に入った表面向きは普通の旅客機は、昼間になっている夜空をそのまま進路を変えずに北へと飛んでいく。

（※後にこの男の姿は次チャプターに登場する“重要人物の一人”なので少し覚えておきましょう。）

これが後にシャイナ達現代世界で後の“クソめんどい大きな大事件の発端になってしまう”事になるのを、妖精界にいるチート一行エツィオ達には知る良しもなかった…。

…

……

……

一事前　妖精界　リュミエール　牢獄館（ノワール）　血塗れのガラクタ山（元何かしらの廃墟遺跡）　地上一

エツィオ「終わったぁ～終わったぁぁぁぁぁぁん♪コレで友の目的（アルタイル）指令は無事☆達成っ！！」

シャイナ「無事ってｗｗｗどこが無事だっての？？ｗｗｗ大半、此処にいる全ての獄中犯妖魔（元妖精）を片っ端からぶっ潰したじゃねぇかｗｗｗてか…監視者同様“囚人者らしき姿がもう何処にも無ぇＹＯｗｗｗ”」

バサリと左腕に纏って爪と化していた翼を元に解くように戻し、爪状態の右手の中に“頭部を握殺した老婆の死体を摘まんだ”まま、片翼だけで数回空を切りながらゆっくりと両足から地に着けて、その後にエツィオの仲間達が少し送れて地上に降りてきた。

エツィオ「エッ？妖魔？？何ソレ？？美味しいの？旨いの？馬鹿ナノ？？死ぬのぉぉぉぉぉぉ？？（笑）」

シャイナ「おっっっっっっっっっっっまっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっ！！！！！！ｗｗｗ（テメェ）野郎が今まで殺ってきたことをわざとらしいカタコト台詞吐くんじゃねぇぇぇ

ながら暴れまわる。

エツィオ「ウヘヘ…虐殺遊戯（ジェノサイドレイプップぷ）は…やっぱイイ！！（・∀・）」

シャイナ「鬼っっっっっっっっっっ！！！！！エツィオの鬼ィィィイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイッ！！！！」

シャイナはエツィオの両肩を両手で掴んでゆっさゆっさと上下に何度も揺らしながら両白目のまま血の涙を滝のようにドパッと出し、逆にエツィオはシャイナに揺らされている度にのほほんとした表情で「ヴェ〜♪」と言いながら“気持ちよいM感覚（マッサージ）で嬉しく感じていた”。

フラムエール「「？？別に良い方だぞシャイナ？妖魔化してしまった妖ノ精はもう二度と“以前の姿には戻れない”し、生きている相手を喰らい続けなければ生命維持など長らえないし、尚且つ妖ノ魔自体は我々人間兵器が倒すべき“悪ノ魔と同じ”よ。」」

ディク『そうそうｗｗｗ此処にいたヤツらは元々自然界の掟に反じた“ＤＱＮ共の終身刑場”みたいなもんだったらさぁ。どのみちリコちゃんに加担していたアイツらも何れは“リコちゃんの技術を逆に利用”して、外部に居る悪意な存在と手を組みながら“今に無い高度の技術を用いて魔界と同じように“高度の技術による力の現世界完全支配”って完全なＢＡＤＥＮＤな世界になっちまうしなぁ〜…。』

フラムエールとディクはそう言いながら二人一緒にエツィオに向けて歩んで、フラムエールは歩きながら大妖魔の首に掛けられていた魔具の鎖を斬り落とし右手に持っていた“アレ”をエツィオに投げ付けて、エツィオはシャイナから解き離れて投げ付けられた“アレ”を右手の中へ上手くキャッチする。

リコ《他にも深蒼界にいる“妖ノ竜”も妖魔化した妖ノ精と同じ本質になった暴食者もいるわ。貴方達も何れ“其所の世界に訪れるでしょう”ね。まぁ、それは置いといて…。》

ラークシャシー《抜いた魂を宿す器を探さぬとな。早く魂の宿り木を転生させねば…》

両翼を腕の中に折り畳んだ本来屈強の腕を持つラークシャシーが、右手の中に鷲掴みするように閉じ込めている桃色の魂(リオリーネ)の新しい宿り木を探すよう主(エツィオ)に言う。

ラークシャシーが言う通り妖精界を護っていた存在が消えた（詳しくは魂を宿す器が消失）ことで妖精界を覆う境界線の力が弱まり、外部の悪意な存在が侵入しやすくなって尚且つ他界と縁を切っている発展中の現世に本来見える存在じゃない妖精界自体が見えてしまうという“超ヤヴァい状態”なのだ。

エツィオ「大丈夫だ、魂を宿す器の作成の素材は“もうこの地面に持っている”さ。」

シャイナ達「「「『《《！》》』」」」

エツィオは慌てる素振りも無く冷静な表情で前話から多くの妖魔達をぶちのめして染められた赤茶色い地面に向けて右手人差し指をザクッと刺し、スススと地面を落書きしながら二重の円形を描いてさらに円の中心に一筆書きの星を描いて呪文らしき文をさっさと書いた後…

エツィオ「Ｉｏ ｄｏ ａｄ ａｎｉｍｅ ｄｉ ｑｕｅｓｔａ ｔｅｒｒａ ｒｏｖｉｎａｔａ ｕｎ ｏｒｄｉｎｅ ｐｅｒ ｃｏｍｉｎｃｉａｒｅ ａ ｌｕｉ…」

シャイナ「わっ！？エツィオが描いた落書きから！？」

エツィオは一度手拍子をして地面に右人差し指を地面の落書きに向けて指した途端、ポゥ…と落書きした絵の全体から眩い金色の光が輝き始めて、一つの紋章がキラキラと輝きながらシャイナ達が踏む地面にも赤茶色から金色へ変わって、生が溢れるように地面自体が“天国のように蘇る”感覚を過ぎらせる。

エツィオ「Ｉｎ ｏｒｄｉｎｅ ｉｏ ａｎｃｏｒａ ｕｎａ ｖ

oltaｄivengo ｑuestoｍondo ｅｄ ｕno, ｅ ｒifarsi ｕn ｍodo ｎuovo…」

ディク『（凄ぇ…こんな“超々々々々々々々々々高等魔術”を楽々と“ねっ？簡単でしょ？？”とでも言うぐらいに唱えられるなんてな…。）』

ラークシャシー《成る程…吾が愛する主が倒してきた“妖魔・悪魔を含めた魔力体１２９９９０８９６９０３８４７５６８２９３８７５６体分の境界線を晴れる強靭な身体を構成させる素材”を一箇所に掻き集めていたのか。》

ズズズ…

次第に描かれていた金色の魔法陣の中心から茶色の長い髪にややクセが付いたキュート＆ａｍｐ；ガーリー型のふつくしいプロポーションを保った成人女性が“裸体のまま”出てきて、エツィオの高さまでゆっくりと魔力で上昇しながら両腕を胸元に組むように眠ったまま仰向けの状態になる。

エツィオは魔力で創られた器の額に向けて右手を伸ばしぐっと手を丸めて翳すように開いた後、魔力で浮かんでいた器を仰向けのまま金色の地面へゆっくりと下ろす。

エツィオ「ラークシャシー“魂”を、あとフラムエール…」

フラムエール「「何だ？」」

エツィオはしゃがんで背を向けたまま背後に居るラークシャシーに向けて左腕だけを伸ばし、ラークシャシーはコクリと顎を下に下ろして頷いた後、右手の中に掴んでいた魂（リオリーネ）を翳したエツィオの左手にそのまま手渡しする。

エツィオ「お前の太陽の力である“記憶の消去”つうモンもやってくんねぇか？なるべく魂（コイツ）によぉ…」

魂（リオリーネ）を受け取ったエツィオはリコの隣にいたフラムエールに右手をクイッと何度も後ろに下げてこちらに来るようにジェスチャーし、フラムエールは首を傾げながらエツィオの隣まで歩み寄って同じようにしゃがんだ後…

フラムエール「「…それは可能だが、記憶を消しても度々“前記憶にあった我々の面影ぐらいは残ってしまうこともある”が？」」

シャラン…

エツィオは隣に居るフラムエールに言った後左手に持つ桃色の魂を

器の中へ押し込めるように埋めて、右手に持っていた“アレ”に斬られた鎖の面に向けて左手を擦る仕草を取って首にかけるようにした後、フラムエールが斬った鎖が綺麗に繋ぎ直って小さな音を立てる。

エツィオ「構わないさ。ただコイツが受けてきた記憶は“精神が幼ぇ魂（コイツ）にとって苦行すぎる”モンだぜ。また新しい世界で新しい自分と向き合いながら新しい妖精界へと導いてくんねぇ～と…」

フラムエール「「（転生した彼女の今後の為の気遣いか…乙な事を…）承知した。さっさと事を成すぞ魔ノ神よ。」」

そう言った直後フラムエールは転生された魂の器（リオリーネ）の額に向けて右手を翳し、右手が赤く光りながらスルッと額…魂の中にあった白銀の球体（記憶の欠片）の一部を抜き取って右手の中でぐっと握って中で記憶の欠片自体を焼け消した後…

エツィオ「Ｄｉａｍｏ ｐａｓｓｏ，ｕｎ ｇｉｕｒａｍｅｎｔｏ ｅｔｅｒｎｏ ａ Ｌｅｉ ｃｏｍｅ ｓｅｃｏｎｄｏ．ｉｎ ｔｕｔｔａ ｌａ ｖｉｔａ」

第二百三十九曲　新シク遺サレタ者ヘ…

―リオリーネ視点　転生―

……りだ。……かいへ行く……

リオリーネ『（黒い空から…声が…聞こえる…声からにして男…の子？）』

光の無い黒い世界に姿形も何もかも変わった転生体（リオリーネ）が言い、閉じられていた両眼をピクッと震わせながら静かにもうひとつの声を聞く。

……かよ？……してお……て？？……だもんで……

…じゃ……

……そのこ……ないわ……から。……

……にせ……した。……事にな……

くぞ。……

……な。……にと……無い。……
…さっさ……ぜ？……
…オ。……

リオリーネ『（女の子の声らしき人が三人…後の先程の男の子の声を含めて三人…。え？）』

両眼を閉じている転生体が（ー―ー；はっとなるようにピクッとしていた瞼の震えを止めて、白いような肌をした右手をそっと額に向けて翳そうとした時……

―さぁ…起きてリオリーネ…。君がやるべきことを…為さなければならない課題が多く残されているのだから…。―

リオリーネ『貴方は……誰……なの？』

パァァァァ…

聞こえてくる途切れ途切れの会話から“はっきりと聞こえる言葉（ワード）”を見つけて、無意識に右腕を上へ伸ばし右手を翳したた途端、眠ったままの転生体（リオリーネ）が上に引っ張られていくような感覚を何の準備すらしていないまま普通に受ける。

上へと強制に引っ張られていく転生体（リオリーネ）はただ引っ張られていく存在に任せて身を安定にさせて、次第に冷たい空気が流れる暗い世界から温かみが感じられる世界へと冷たい身体に受けながら少しの間、転生体（リオリーネ）は意識を手放していった。

……

……

……

―妖精界　リュミエール　何もない高野（元牢獄館（ノワール）だった土地）―

リオリーネ『此処は…何処？』

転生体（リオリーネ）が眼を覚まし最初に入った世界は白灰色の眩しいぐらいに輝く空、視点が常に上に向いて背中から固いモノを地味に受けている事から、仰向け状態になっていることを理解する。

転生体（リオリーネ）は両手に力を入れてゆっくりと背を上げて、上半身だけ起こした後地に両脹ら脛を着けたまま今居る地上の姿を、左から右へ顔と視点と共に動かして焼き付くように見ていく。

リオリーネ『“見慣れない土地”…此処は一体…元々何があったのかしら？』

ヒュオオオ…

グレートキャニオンのように赤茶色い割れた大地が何度も隆起するように地形が荒れ果てて、所々から折れた鉄パイプらしき物体と凹んだ何かの鉄板の一部が複数地の果てまで地面に落ちていた。

転生体（リオリーネ）は一息を付けて地に着けていた両脹ら脛をくの字に曲げ、背中を前へ折った後右片手を地に着けて軸にしながら立ち上がる。

リオリーネ『身体は裸体だし…肌寒い…何か羽織るモノが有ればいいけど、先ずは“私という存在が何の為に有るのか”…詳しく調べる必要が有るわね。えっと…私の……』

転生体（リオリーネ）は目覚めた時の視界に映った“服の皮一枚自すら着ていない白い素肌”を見て少し表情を曇らせながら、脳内にある己の素性と身体の機能を細かくチェックしていく。

リオリーネ『私は“リオリーネ”…この妖精界を束ねる“次世代１２番目の王”として選ばれた“転生体”。この妖精界にある至宝“究極魔具（ウルティモ）の継承者”かつ“この星の守護神の一人”…リオリーネの記憶……“該当無し”。』

無機質な声で淡々と転生体…リオリーネは言いながら身体を隅々までチェックした後、少し前方に白い生地みたいなモノが“綺麗に折り畳んである”のを見て、あっとしたような表情を出した後直ぐに地面に置いてある白い生地…衣類に向けて素足で歩み出す。

リオリーネ『？…これは手紙？』

折り畳んである衣類の間に黒い紙が解りやすい位置に挟んであって、リオリーネは右手で綺麗に折り畳んであった衣類を持ち上げた後、挟んであった黒い紙に書かれていた内容を静かに読み上げる。

黒紙（執筆者Ｅ・Ａ・ＤＡ・Ｆ）「ＨＥＹッ★次世代妖精界の王に選ばれた超可愛いプリチィーな君へ！！

いよぉぉ～♪こんなクソ悪い時に君は運悪く目覚めちまったが、その心配は無ぇ！！

君には“前世代の妖精王を超えた圧倒的な力が最初から備えられているっ”！

君が使う究極魔具は君の器…即ち“身体（きみ）自身となっている”ＺＯっ★

その力が君に取って何を造り出していくか…それは全て王になった

君に任せるＺＥッ♪

願わくは“一生害を創らせない本当の幸せを築く”ことだけだな。

んじゃ、此処でお・わ・しとさせとくぜ。ＧｏｏｄＬｕｃｋッ（＾Ｏ＾）ｂ

Ｐ．Ｓ：君が持つその“服”、大事に使ってネッ（ハート）…この俺が精力を込めて“魔力を使わず地道に編んだ”からなぁ～（＾＾）ノシ」

リオリーネ『な…何この…変な記号が入った痛文（困惑）』

リオリーネは黒紙にメッセージを書いたため口&悪ふざけ全開状態な執筆者を脳裏で想像してしまい、頭部裏から漫画のような巨大な滴を“チーン╲（＾ｏ＾）╱な裏効果音”と共に浮かびながら、手にしていた白い衣類を自然に身に着け始める。

リオリーネ『（軽い…それに柔らかくて、まだ温かみが残っている…？何処かでこの“匂い”を感じたような……）』

両肩に細い袖を掛けて首裏に両手を回し白い紐をリボン結びで締めてバサリと音を立てながら羽織った後、左腰辺りに付いていた水色

と青が混ざった長い滞をグルグルと二週ぐらいまで回し、最初残していた滞と余った滞をリボン結びで左腰に締めて羽織る服を固定する。

リオリーネが着た白い衣類…薄着の両足の下肢まで掛かった長いワンピースを着て、一瞬見惚れてしまうような“無垢な美しさを保つ衣類”を惚けるように息を漏らした途端、右腰辺りの小さな封口から何かの感触を右腰から頭部に掛けて静かに受ける。

リオリーネは右手を右腰辺りにある封口に向けて突っ込み、数回封の中で手探りした後サラサラとしたモノを感じて、掴める部分らしきモノを摘まむようにして手に取り、そのまま顔面辺りまで摘まんだモノを持ち上げた直後…

リオリーネ『！綺麗っ！！これはまさか…“姫君の白鳥”！？』

右手の親指と人差し指に茎を挟まれる形にして持ち上げられているシミ一つもない綺麗な白い花…それはこの妖精界にとって１０００年に一度しか見掛けない・滅多に見れない奇跡（レア）の花。

たとえ手に取り魔力で長期間保存しようが“魔力で被っても１日で枯れて”しまい、維持することがかなり難しい一度だけの存在なのだが…

リオリーネ『“生きている”…目覚めた私と同じようにし……！！？？！』

バシッ…

手に持つ花の素晴らしい生命力にリオリーネは静かに見惚れていた最中、脳裏に“黒いローブを着た側面の男の姿”が一瞬浮かんで、リオリーネは数秒間だけ見えた“その男”に息を飲むようにして驚愕の表情を出す。

リオリーネ『（だ…誰なの！！？？！こ…この人！！？？！この人は一体…！！！！！）』

リオリーネは数秒間脳裏に映った“見知らぬ男”を見て動揺している間にも、更に続けて“濃い緑と黒が深く混ざった側面方向のフード男”と、“純白の衣を羽織った金髪少女の背”がシャッター音と共に浮かんで…

バシシッ…！！

リオリーネ『！』

最後に“赤い衣を着た長身男”と“黒い衣を着た膝下辺りまで小さ

い少女”が手と手を繋ぎ合わせている光景を見て、リオリーネは一瞬に過ぎて行った光景を呆然としながら開かれた口を右手で覆い隠す。

リオリーネ『（解らない…あの人達は一体何を……何故あの“名前すら聞いてもないし、見たことがない存在”が私の中の記憶に？？？？）でも…』

リオリーネは脳裏に映った光景に困惑しながらも自身が身に羽織った白い服を胸元に向けて両手を当てて、ぐっと手同士を合わさりながら静かに両眼を閉じてそっと呟く。

リオリーネ『暖かい…』

優しい感じがすると蚊のような声で小さく言った直後、リオリーネの背後から多数の存在が慌てて詰めかけて来る存在に顔だけを後ろに向ける。

リオリーネ『私の中に映ったあの人達の“名前は解らない”けど…それでも私は……』

サクッと右手に摘まんでいた姫君の白鳥を頭部の髪にくるむようにして刺し止めた後、背後から向かってくるこの世界の住民達に向けて身を翻し歩み始める。

リオリーネ『私は…転生された“新しい王”だから。私は一生守らなければならないこの世界の人々の為に…一生を懸けて戦い…』

―一度だけの魂(いのち)を……―

第二百四十曲　二世界という二次元を完全にコラボさせる男…小西タイル！！

一方エツィオ達が妖精界で発展し続けている“現代”へ勝手に流入した元凶をフルボッコしている間、地球から遠く離れた世界（神界）の話へとちょぴっと遡る。

最強の結界に被われた白い上空に粉雪みたいな綿がプカプカと漂う中、巨大な城で出来た砦の中の大導師の間で一人の白い衣を着た若者…アルタイルが両足を折って胡坐になりながら両手の中にある何かを黙って高速に指を動かす。

―エツィオ達が神界へ来る数時間前　神界マシャフ　アサシン教団砦内部　大導師の間―

？《いいいいいっ眺めダァァァッ！アァンタレェスッ！！》

？《お前の菓子を喰ってやるぅぅぅっ！》

？《そうだぁっ！！モット撃って来いっ！！！！》

ピィィィィィィィィィィィィィィ♪

アルタイル「ちっ…この“変態イカマニ”がっ！」

チュドーンチュドーンと画像内の味噌アラート効果音がアルタイルが持つエ●コンＸ２ジョイントアサルトの●ＳＰ内から鳴って、画像に映るネタバレ全開のＨＥ・Ｎ・ＴＡ・Ｉ★ス●イマニＤＡＮＣＥの最終ミッションに苦戦しながらミサイルを回避しつつ隙を伺って何度も味噌を発射させる。

ス●イマニ《売った親をっ！…売られたオレオォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！》

アルタイル「！《ズガァァァン！》ちっ！被弾したか！！この…“オレオを食いたくて本気に泣きながら振り向き際に味噌を放つな”クソ変態イカマニマニ！」

カダール「え？“俺を”じゃないですか？？アルタイル大導師？？？」

しかし何度もアルタイルが放つミサイルを的確に撃っても敵機の“クソ有り得ない機動”で“ミサイル誘導すらさせてくれない”まま何度も空を切り、何度やっても当たらない事でアルタイルは痺れを

切らしながら背後射ちから正面射ちへと機体を動かしたが、“背後を取っていた敵機が突然後ろへと振り返って”逆にアルタイルが操作する機体にミサイルを討ち込まれダメージを受けてしまった。

マリク「どうしたアルタイル？お前の機体（Ｆ－１５Ｓ／ＭＴＤ）ダメージが“真っ赤”だぞ？しかも何度も点滅している。」

アルタイル「マリク、お前の機体（Ｆ－２２）にある連続射ち（ＸＭＡＡ）はもう無いのか！？もう俺の機体は危険な状態だ（次攻撃受けたらダサかっこ悪いオ・ワ・タ＼（＾ｏ＾）／になる（汗））」

カダール「焦っちゃ駄目ですよ！アルタイル大導師！！僕の乗る機体（Ｓｕ－３７）でなんとかしますからっ！！（うへぇ…特殊兵装の選択間違えちゃったなぁ…ｗｗｗ（ＦＡＥＢ）てかっ僕こんなかっこ良くいっちゃって、余計にプレッシャーがｗｗｗ）」

アルタイルだけでなくその周囲にカダールとマリク達が居て三人とも胡坐を掻きながら、お互い手に持つ●ＳＰのゲームをワイヤレス通信で協力しあいながら今やっている最終ミッション内の“変態イカの壮絶な死闘（指が）”を繰り広げていた。

マリク「あぁ。その特殊兵装とやらが俺の画面からだと“０”だ。奴に群がる最初の取巻きを殺した時に…（苦笑）」

アルタイル「むぅ。それ以前にこの“トチ狂った阿呆”と戦う前の前半ミッションのせいで俺の機体にもガタがきてしまった。敵艦のＳＡＭとＡＡガンがマジキチすぎるｗｗｗ（ソロプレイ時は鬼）」

ス●イマニ《その金でっ！俺はオレオオオオオオォォォォォォォォオォォ！！！！》

カダール「うーん…さっきはかっこ良く言いましたけど…僕の方も“ヤバ気”なんですよねぇぇぇｗｗｗ（機体ダメージがｗｗｗ）」

マリク「此処まで来て、詰んだか…俺達は（呆）」↑マリクの機体も真っ赤ｗｗｗ

お互いの画面に映る機体ダメージ率が“三機とも真っ赤に染まっていて”その内の一機が赤点滅かつ三機とも兵装があと僅かな状態となると、もはやアルタイル達に取って変態機動に翻弄されつつ背水の陣へと追い込まれつつあった。（制限時間もあと残り僅かな状態ｗｗｗ）

しかし…

アルタイル「…止む終えん、ならばっ…！！」

ズアッ！！

このままでは“変態機動に乗るイカ野朗”にやられてしまう事にアルタイルに取っては“厭な屈辱”を長期味わう（心が）のがエースパイロット（プレイヤー）として恥（逆切れ・数ヶ月放置）になってしまうので…

アルタイル「Ｉｃｈ　ｄｒ?ｃｋｅ　Ｐｈａｎｔａｓｉｅ　ｐｒａｋｔｉｓｃｈ　ａｕｓ！！（生きる総ての世界の魂と共鳴！！）」

マリク「！！！??!なぁっ！?」

カダール「ちょっｗｗｗ」

バシィィッとアルタイルが持っていた赤い●ＳＰに赤い稲妻が宙に浮かんで、●ＳＰ自体がアルタイルの赤い魔力の光で数秒間放電状態に成った後、マリクとカダールはそれぞれ持つ●ＳＰの画面を見た瞬間虚を疲れたように大きく口を開いて唖然とする。

アルタイル「奴が変態機動をするなら、“俺の機体も奴よりも凄い変態機動になるように超対抗”するだけだ！！」

マリク「ぶっ！ｗｗｗ待て待てアルタイル！！“コレ”はいかん！

！“コレ”は駄目だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！（汗）」

カダール「わぁぁぁぁぁ！！か…アルタイル大導師の機体かっこ良いですっ！！機体に“手と足が付いて華麗に横滑り”してますよぉっ！？」

マリクが持つ蒼い●ＳＰに映るアルタイルの機体を見て絶叫している最中、弟のカダールは両目をキラキラと少女マンガ風に輝かせてカダールの持つ緑の●ＳＰ内で華麗に動くアルタイルの斬新的な機体を視線で追う。

アルタイル「フフフッ！此れで私は本当のエースに昇格した！！もう恐れる敵など居らん！！ハハハハハハハハハハハハ！！！！！」

ーアルタイルの蒼と白のカラーリングされたＦ－１５Ｓ／ＭＴＤの機体の下に両手が付いて、足の部分が後方視点から見えるエンジン部分となり、アルタイルの機体自体が“マ●ロスでいうガ●ォーク形態”になっていたー

アルタイル「行くぞっ！！突撃ラヴハァァァァァァァァァァァァァァァァァァァト！！！！！（声優繋がりの意味で）」

マリク「ちょっっっっっ？！？！？！！お前の素顔が一瞬マ●ロスＦに出てくるオ●マに！？？！？！？おまぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっ

っっ！？？！？！？アルタイルの機体ダメージが０になってるしそれｎ…い〝いっっっっっっっっっっっっっっっ！？！？！？！？」

ドガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ！！！！

アルタイルの動かす機体から多くの味噌が板野サーカス並みに飛んでいって、放たれた全てのアルタイル式チート追尾味噌が容赦なくス●イマニの駆るふっわふっわな変態機体に“一発づつ全弾命中する”。

ス●イマニ《お前の菓子を喰っｔ（大事な事なので二回以上言いました）》

アルタイル「けっ…まだ墜ちぬのか、このクサレイカ#$%&※□※が…っ！！ならば…」

マリク「ただか人間共が作り出したゲーム如きに“お前だけの超反則魔力（チートマジック）”を使うｎ…ぶっ！ｗｗｗ」

カダール「わぁ～♪また“変形”したぁぁぁぁ♪今度は“人型になってます”ねぇ～（＊´∀`＊）」

アルタイルは敵機の体力を赤くしてもまだ墜ちない事でキリキリと歯軋りしながらイライラする表情を一瞬浮かべた後、操作する●ＳＰのボタンを一つ押して今度はガ●ォーク形態からＶＦ－２５に近い接近型形態（ヒト）“バ●ロイド”になる。

アルタイル「接近戦（ステゴロ）でスクラップにしてやるっ！！Ｖｅｒｓｃｈｗｉｎｄｅ ｆｒ?ｈ ｖｏｎ ｄｉｅｓｅｒ Ｗｅｌｔ！Ｄｉｅｓｅｒ Ｆｅｉｇｌｉｎｇ！！！！」

マリク「や…ヤックデカルチャァアアア

等（一部●ーアの白塩化症候群になっている天神（マリク））に…

エツィオ「ＨＥＹっ？ここに戻ってきて早々、何やってんだＹＯ？？」

アルタイル＆ａｍｐ；マリク＆ａｍｐ；カダール「「「！？」」」

三人組が●ＳＰに没頭している中にその中央で既に下界で事をなしていたエツィオ達が居て、三人は戻って聞いた事に全然気づかなかったまま、数分間フリーズしているエツィオ達と同様氷の彫像のように固まっていった。

第二百四十一曲　スーパーチート大戦Ｂｙマ●ロスチートフロンティア

－神界マシャフ　アサシン教団砦内部　大導師の間－

エツィオ「Ｉｏ　ｌａｓｃｉａｉ　ｌ'ｉｍｍａｇｉｎａｚｉｏｎｅ　ｃｏｍｐｒｅｎｄｅｒｅ!!（生きる総ての世界の魂と共鳴!!）」

アルタイル「Ｉｃｈ　ｄｒ?ｃｋｅ　Ｐｈａｎｔａｓｉｅ　ｐｒａｋｔｉｓｃｈ　ａｕｓ!!（生きる総ての世界の魂と共鳴!!）」

シャイナ「おまっっっっｗｗｗい…いきなり反則技がｗｗｗ」

ディク『おほっｗｗｗ最初から本気モードとはねぇ～…ｗｗｗ』

グワッと突然の出落ちに二人の白眼かつぺ●ソナ3風半面カットイン（エツィオとアルタイル）が混ざった光景が“閲覧者用カメラ”に映って、二人の全身から蒼と赤の闘気（オーラ）が天井まで大きく遡るまで上昇し、シャイナとアルシャイフ兄弟そして地上からのエツィオの仲間達は二人の手の平にあるモノを黙って観戦する。

アルタイル「Ｉｃｈ　ｓｃｈｍｅｃｋｅ　Ｖｅｒｚｗｅｉｆｌｕｎｇ　ｕｎｄ　ｓｔｅｒｂｅ　ｂｉｔｔｅ　Ｅｚｉｏ．（絶望を喰らって死ね、エツィオ。）私のチートバ●キリー（ＶＦ－２５モドキのＦ－１５Ｓ／ＭＴＤ）の力に屈っしろ。」

エツィオ「？　ｌｉｎｅｅ　ｄｉ　ｑｕｅｓｔｏ　ｌｕｏｇｏ　Ｕｎ　ｓｃｉｏｃｃｏ　ｌｅｎｔｏ（誰がお前なんかに屈っするか、このアホォウ。）いや、俺のバ●キリー（ＹＦ－１９モドキのＳｕ－４７）の方が数百倍上だＺＯ？？」

ドガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ！！！！

二人の持つ●ＳＰ内の画面はマ●ロスエースフロンティアの対戦モード…否二人だけの最強魔力で改造させたデバッグモード対戦であり、二人の操る機体はゲーム内に無い圧倒的な“味噌の物量”と“一部エ●コン機体入りオリジナルバ●キリーが混ざった”明らかに可笑しいスペックで綺麗にラグ無く稼働する。

アルタイルの駈る蒼と白のメ●イア擬きのバ●キリーと、エツィオの駈る赤と橙と黒のエ●スカリバー擬きのバ●キリーは、二機ともファイター形態のまま板野サーカスを画面全体まで埋め尽くすぐらいに好き勝手に放ち、互いに放つ味噌同士がぶつかり合ってバリ汚ぇ花火が画面内に多く咲かせていく。

アルタイル「フゥァッハハハ

凄まじ過ぎる。普通なら処理機能が追い付けなくて基盤自体が疲弊(フリ)麻痺(ーズ)するのが素人が良くやるオチなのだが…」」

リコ《二人は最初からその基盤自体に“外法魔力”を注ぎ入れて、基盤ごと“魔改造”したから初めからもう問題無い…ことね。》

ディク『つー訳ですよっ♪閲覧者の皆さん★…お分かり頂けただろうか??』

シャイナ「十中八九…フーちゃんとょぅι゛ょの言葉の意味が解った奴は“童☆貞”な??」

ドドンとディクの後押しをするようにシャイナが“ク●マティ流太ペン描きのような渋顔”で画面外横からどアップするように現れ楽々と言った途端、ディクの隣にいたフラムエールは「「だから“フーちゃん”は止めろぉっ!!」」と恥ずかしいような声で大きく裏返るように上げた。

アルタイル「退かぬっっっっっっっっ!!滅びぬっっっっっっっっっ!!我こそ最強の天神・アルタイル也っっっっっっっっっっっっっっっっ!!!!」

エツィオ「抜かせぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ!!!!お前が最強の天神なら、俺は最強の魔神エツィオだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ

ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！」

ガシィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィ！！！！！！

二人の操る機体に頭部だけの自分が半透明状態で浮き上がって互いにキリッとした形相を浮かべながら、お互いが駈る機体が何度も旋回しつつ中央へとぶつかる寸前に、ガ●ォーク形態からバ●ロイド形態になって互いの丸められた右拳が空中にぶつかり合う。

アルタイル「ぬぉぉぉ

全ての力をっっっっっっっっっ！！！！！」

エツィオ「上等だ……テメェを完膚無きまで叩き潰してやるぜ！！！！例え仮想世界内でもなっ！！！！！！」

シャイナ「ちょっｗｗｗｗおまっｗｗｗｗｗｗ二人とも“●ＳＰ内”に入って行きやがったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっっっっっっっ！！！？？！！」

突然二人の身体がダ●ソンの吸引機のように“●ＳＰの画面内へと吸い込まれ…否入って行き”、二人が手にしていた●ＳＰがカシャンッと音を立てながら白いタイル上へ落ちる。

シャイナと仲間達とアルシャイフ兄弟は床に落ちた●ＳＰに向けて走り出し、二人が持っていた赤と蒼の●ＳＰをシャイナとマリクが拾い上げて画面に映る“超ドッキン★バリ×１０ショッキンな光景を、全員が白色になるように硬直しながらゲーム画面を見る。

アルタイル《クッハッハッハ

をソックリと返してやるぜっ！！！！！！俺の持つ神腕（ゴッドハンド）が、貴様という“悪”を挫くっ！！！！！！！！》

シャイナ達「「「「「『《ＥＥＥ

ｅｃｏｎｌｅｆｅｃｉｄｉｕｎａｃｅｒｔａｃｒｅａｔｕｒａｉｎｔｕｔｔａｌａｖｉｔａｓｅｉｏｐｏｓｓｏｆａｒｌｏ．（´∀｀）ｑ》

シャイナ「オウッ…フｗｗｗえ…エッィオ…何気に酷ぇ台詞を吐きやがるｗｗｗ」→の意味が解る人は“自動翻訳サイト・辞書を使わず、自己でファン翻訳に直すようにして挑戦してみましょう（笑）”

ガインガインガインガインガインガインガインガインガインガインガインガインガインガインガインッッッッッ！！！！！

二人の駈る赤と蒼の機体（バ●ロイド）は同じ動きで高速に両手両足を匠に翳し、避けきれない敵機の攻撃を“ジャスト☆外椀受け２でバチンと装甲同士の火花を散らし弾きながら、それぞれの反撃の蹴りと何れかの片椀を手刀にするように前へ突き出す。

シャイナ「し…シュールすぐるｗｗｗ何か最初…アルタイルと出会った時と同じような光景がｗｗｗ（第十一曲参照）」

フラムエール「「激しいな…これが自然界を束ねる“光と闇の人知を超えた最大の戦い”か！！！！」」

ディク『凄ぇぇぇ

加してぇぇぇぇぇぇ！！！！』

リコ《止めた方がいいわよ、ソレ（呆）それとフラムエール…“その言葉自体”が間違っていると思うわ（汗）》

ドドド

アルタイル《Ich lehne es ab. Weil ich die originale f?hrende Rolle bin, gibt es, schlu?folgern Sie nicht, um gesagt zu werden, es f?r Sie zu sein, wer sind eine unterst?tzende Rolle welche Imitation!!》

シャイナ「あっ…ちなみにここで、この“台詞解読”を翻訳サイトを使わず解読出来た奴は“翻訳の暇人”というクソトロフィー（又は実績）をプレゼンしまふｗｗｗ（嘘）」

マリク「阿呆かｗｗｗ」

第二百四十二曲　シャイナ流話を進ませないＤＱＮな奴らに大いなるオシオキを

―神界　マシャフ　アサシン教団砦内部　大導師の間―

アルタイル「…前回の余興はここまでだ。これよりこの小説の本編へと突入する。」

シャイナ「ちょっｗｗｗ前回の話を全て使ってまでの“１８時間”と俺ら休憩(オフッた)後の切り替えが早ぇぇぇぇよｗｗｗアルタイルサァァァアンｗｗｗ」

ドンッ！とワン●ースのように大きな効果音を鳴らしながらアルタイルは机に両肘を着いて顎下に両手の甲を当てながら何時ものポジションへと戻り、マリクとカダールもアルタイルが腰掛ける椅子の側に立ちながら紋章の中心に居るシャイナ達を両腕を組みつつ見下ろす視線を出す。

アルタイル「あの時はあの時…今は今だ人間の女。あとそれと我々を見届けている“お前”にも言うが、前回の話は我々の本来の裏舞台・日常茶飯事の素顔という“デバッグモード”というのを解釈してほしい。あっ…因みに我々が使っていた●ＳＰとゲームディスクはスタッフが美味しく頂きました。（笑）」

エツィオ「おぃっｗｗｗそこはぶっちゃけ言っちゃ駄目だろアルタイルｗｗｗてか、お前本来の素性が台詞の“語尾に出ている”ぜ（呆）」

アルタイル「！おっと…これは失敬した。前回のお祭り気分となると、このような私でも…（赤っ恥）」

シャイナ「それはどーでも良いけどさぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ…早く本編に繋げましょか。さっさと次の特異界の浄化・イギリス編へと突入させたいし…」

アルタイルとエツィオがははっと苦笑していた時、エツィオの隣にいたシャイナがエツィオの羽織るローブ内の赤い襟をグイグイと引っ張って、長話&他のキャラ達（俺ら）を無視（スルー）している彼等を代理ブーイングするような表情を出す。

シャイナだけでなくシャイナの隣にいた詰まんなそうな表情を出すディク、ディクの隣にいた固い表情のフラムエール、フラムエールの左手に繋がれるようにして不満そうな表情を出すリコが、一斉に今椅子に腰掛けているスタイリッシュ着席の大導師に向けて変な視点を浴びせていた。

アルタイル「あー…ごほんっ！！…これはこれは失礼…そうだ…こ

れは本番なのだ。何を今更…」

マリク「さっさと本来の話を切り出せ馬鹿タイル。馬鹿魔神達が下界している間、俺に隠れて下界ではまった●ＳＰゲームをしている“ニートなお前”に“一万年以上も溜まりきった２５６３９８４７０６５８冊の書物を書き終えるまで隔離（ゲーム禁止）させるぞ”ゴラァ！？」

アルタイル「Σ（Д）！？…ちょっｗｗそれは勘弁しろって、マリクｗｗそれに俺は完全なニートってワケじゃ…（汗）」

マリク「黙らんしゃぁぁぁぁぁぁぁぃ！！！！ヽ（ヽД′）ノこの“クソニートヌケシン”がぁぁぁぁっ！！一体誰のおかげでお前が貯め込んできた書類の整理と代理執筆で何千万冊の報告書＆書籍作成ｅｔｃを（略）」

般若面丸出しの“神界で真相をぶっちゃける”マリクとＭ丸出し＆引き気味の表情を出すニートタイルが、大導師の間の白い机の上で弩突き漫才でもしているかのように両手両足をポカポカ♪と何度も頭部を叩いて“半分本当・半分悪ふざけ”をする二人コントをかましていた時…

ディク『まぁまぁｗｗそこまでの細けぇことはいいからよぉ～…、シャイナの言うとおり早く本題に入ろうぜぇ～？無駄に裏素性の漫談が続いちゃ…』

リコ《魔ノ神の隣に居るシャイナという人間さん…更に彼女のアリストテレス内にある感情抑制が完全に吹っ切れて“解りやすく人間語で解釈するとブチギレ”るわよ?》

カダール「兄さん!アルタイル大導師っ!!“二人プロレスしている”場合じゃないですよっ!!エツィオさんの左側にいるシャイナさんが…（´Д`；）」

ディクがわざとらしいお手上げの仕草をしリコは冷めた表情で両肩を下ろし、ディクは机の上で白い噴煙を上げながらスパンキングしている兄（マリク）と第導師（アルタイル）に向けて何度も指を指す。

グニーッ♪と片頬のを互いに引っ張っていたアルタイルとマリクが、何事かと必死な形相で何度も指を指すカダールを見て何事かと同じ動作でカダールが指す方向へと顔を動かした時…

シャイナ「怒怒怒

マリク&アルタイル「「！！！！！！」」

両腕を斜め上に上げてオワタな仕草を取るエツィオの隣に居たシャイナが全身から赤黒いオーラが浮かび遡るように上がって、翻訳不可なイタリア語を吐きながら机の上で硬直しているマリクとアルタイルを一瞬だけ見て静かに右手をギリリと握る。

エツィオ「アルタイルとマリク…オワタァァァァｗｗｗ＼（´∀｀）／」

リコ《え?彼女のアリストテレス内がもう要領限界が来ｔ「「見るな、リコ。」」え?…ちょ…っと??》

シャイナの全身から溢れるオーラが怒りから次第に“何時まで経っても話が進まない殺意”の気配に変わって、この気を読み取っていた太陽(フラムエール)はこれからスグに起こることを“先読み”した後側に居たリコを抱き寄せていそいそとリコの両眼を覆うように両手の平で隠す。

アルタイルとマリクはシャイナの殺意を感じ取ってスグに机上の痴話喧嘩を中止し、スタスタと音もなく歩いてくるシャイナを見て冷や汗を流しながらゴクリと唾を飲み込んだ後…

アルタイル「す…すまない！！お…俺達がしたことはｔ「宇宙もろとも塵になれぇぇぇ

第二百四十三曲　ちょっとホモモン注意と魔神限定衝撃台詞を聞くH男

―数時間後　神界　マシャフ　アサシン教団砦内部　大導師の間―

エツィオ「はいっ★回復魔力だＹＯ～っ♪久々の真空旅行は良かったかぁぁぁぁ？？？？（冗談）」

シャイナの鉄拳を喰った二人の内一人である友の白い衣（アルタイル）（エツィオと同じ最強の鎧）が“ボロボロにはだけ”、穴と血が滲んだ赤シミが所々空いたズタボロ状態”の姿を見たエツィオは、ケラケラと笑いつつアルタイルの両肩に両手を当てながら回復魔力を注ぎ入れる。

アルタイル「最悪だｏｒｚ…な…何故人間ごときの拳でこの私が“重傷状態”になるのだ！？？？！？しかも我が纏う衣は“お前の霊鎧と同じ”最強の鎧のハズだがががが…痛っ！？」

カダール「無理に喋っちゃ駄目ですよ！アルタイル大導師！！今腹に出来た“穴が開いちゃいそうな傷”を緊急縫合しますから！！あっ！あと…追加のガーゼを後数枚持ってきて貰いませんか？それとテープを…」

シャイナ「え…ちょっｗｗｗ私そんなに“神相手”に力入れたっけ？？？？ｗｗｗ（棒読み）」

シャイナ以外の全員「「「（入れてたじゃねぇかｗｗｗｗ）」」」

アルタイルは全身傷（一部風穴一歩手前の大怪我）だらけになった箇所に回復魔力を注いでいるエツィオに向けて言おうとしたが、腹部を縫っているカダールにピシャリと言われバタバタとしている大導師の間にいるアサシン達を視線で追いながらはぁ…と両肩を力なく落す。

マリク「痛てててて…なんで俺まで奴と同じとばっちりを受けるんだ…ｏｒｚ…厄日だ。」

ディク『ハイハイ、大人しくしてて～ｗｗアンタに回復魔力を7割注だもんで、アンタ自身らの“天神の身体能力”を生かしゃぁ、あと数分後に“完治完了”さっ★あっ、ここも一応巻いとくね？？これでも応急処置ってもんだし。』

ぎゅっ♪とマリクの身体に回復魔力を注いだディクはアルタイルと同じ重度の怪我を負っていたボロクソの身体を上半身首下辺りまで回復させ、先程よりかはマシになったマリクの包帯まみれの身体をディクはハハッと笑いながら右手の甲に包帯を捲きちゃっちゃとテーピングする。

ドカドカと新米アサシン達が慌ただしく砦内を走り回り在る者はカダールに言われた通りに応急用具を届け、在る者はシャイナが二人を空へぶっ飛ばした時に空いた天井に向けて両手を翳し放たれる魔力で修繕する作業をしていた。

エツィオ「いっそ“天神化”して一気に治しちまえばいいじゃねぇか？そうすりゃ、受けた外圧なんぞ瞬時に収まるもんだぞ？？」

アルタイル「うむ…そうしたい所だが…今はこのような状態だし…それに私が本来の姿をあの…」

のびのびとした態度で吐くエツィオの両手で両肩を押さえられていたアルタイルは視線だけを左後ろへと動かして、エツィオが地上に降り立った時に新しく出来た“人の容をした二人の仲間”を見て少し躊躇するような素振りを蚊のような音量で吐いたが…

アルタイル「（８００年前…いやそれ以上前に私はまだ知らぬ転生者たちを…）私があの二人にほ「「構わんさ、第一俺達は本来の姿である魔ノ神をこの眼で見たし、何にせよ例えば人ざらぬ者に成ろうとも我々は驚かん。」」むっ…」

アルタイルの気遣いを感じ取っていたのか少し前にいたフラムエールが、両膝を女の子のように地を着いているアルタイルの元に立っていて、口の端を吊り上げて静かに笑みを出しながら治療中のアル

タイルに吐く。

リコ《貴方から溢れる魔ノ神と同様の“外法魔力”を感じ取れるわ。それに私も貴方の本来の姿・本質である“天神”を見てみたいし、魔ノ神と同様の絶対なる支配の存在を一度眼に焼き付けておきたいし…。》

アルタイル「…。」

フラムエールの腰の裾を掴んでいるリコも同じように微笑み、二人の前世紀人型兵器しか見えない傷付いた天神（アルタイル）の影から“本来の姿”がズズズと浮かび上がって、シルエットながらも腰辺りから巨大な四翼・頭部両側に天使の羽根のような容をした影の天神の姿が彼等の眼に映っていた。

アルタイルはそんな前世紀人型兵器の二人を見て少し竦めて軽い溜め息を付いた後、腹部の縫合を終えたカダールに「少し下がってくれ。」と言って右手を軽く前へと払いカダールを少し遠退かせた後、両眼を閉じてゆっくりと内に秘められた魔力と本質を解放するようにし…

アルタイル『フゥ…やっぱり重度の痛手はコレに限る…か。』

エツィオ「ちゃんと息を吸ってぇぇぇぇぇ♪吐いてぇぇぇぇ♪♪吸

ってぇぇぇぇぇ♪♪♪吐いてぇぇぇぇぇぇ♪♪♪♪傷付いた外圧を塞ぐにゃぁ、落ち着いた状態（チート形態）でやりゃおKよっ☆」

アルタイルの全身に赤い柱が昇って止んだ直後に白い羽毛のような身体と赤いラインが走った本来の姿である“天神（第三十六曲参照）”に成っていて、バサリッと両腰の人型だった長い裾が大きな純白の鷹の翼となり四翼に別れた翼の一つ一つがアルタイルの全身を優しく包む。

フラムエール「「（これが神々を越えた圧倒的な支配神であり“星（ちきゅう）”の創造神“天神（アルタイル）”か…。）」」

リコ《天使に見えて…人に見える“半神半人”のような存在であり、光の魔ノ神とは逆の“闇の聖霊体”…。これが“天神”！》

前世紀戦闘兵器が驚く表情を出す中、エツィオも両腰辺りから黒い魔神化した時の巨大な竜の翼をバフッと出して、原型を保ちながら両頬の隅々から青い隈取みたいな紋様が浮かびつつ天神（アルタイル）の両肩に乗せている両手を更に魔力を集中させて、そっと治癒行動を移している友の助力（アルタイル）を注ぎいれる。

ディク『凄…じょ…冗談じゃねぇぐらいの“信じられない魔力”を感じるぜ…。それになんか…神域みたいな…“プレッシャー”つぅモンも感じる…。』

シャイナ「うほぉぉぉぉ…何か久しぶりに見たような気がするｗｗｗ試作馬鹿神な風武器候補だった悪魔（ディヤウス）が刃向かった時以来だなぁ～ｗｗｗ（第七十五曲参照）」

仲間達がアルタイルの全身から放つ神圧力（超プレッシャー）を受けて驚くというより“圧倒的な全ての世界に活きる存在を支配する最強魔力の覇気”に両足を竦めてしまうほど神経が麻痺してきて、余裕を見せるシャイナ・長年側に居るマリク・マダールのアサシン達以外のエツィオの仲間達全員は“立つことすらやっとの状態”で倒れそうになるフラフラの身体を必死に気力だけで抑えていた。

アルタイル『（本来は私一人でも早く治癒出来るが…）すまない、助力感謝する。』

エツィオ「構わんさ、むしろもっと“戦友（オレ）”に頼れ。何でもかんでも自分一人で事を成し遂げようとするな。完全な聖霊体でも何れ“ガタ”が来る。」

アルタイル『（あの時よりも戦友（エツィオ）が段々強くなってきているな…目覚めてからまだ三週間ぐらいしか経っていないのにな…。）！……すまん…。』

天神（アルタイル）は半ば魔神（デーモネ）化しているエツィオに叱咤されて顔だけを後ろに向け、一つ一つ吐かれる両眼を閉じ蒼い隈取が浮かんだエツィオ穏や

かなの表情・言葉を聞く度に次第にアルタイルの中にある“ある意思”が一つ一つ動き出していく。

アルタイルは静かに両肩を押さえている一つのエツィオの左手首にむけて右腕を伸ばし、天神化したときに伸びた爪を肌を傷つけないように右手で握り締める。そして…

アルタイル『Ｉｃｈ　ｇｅｈｅ　ｖｉｅｌｌｅｉｃｈｔ　ｈｉｎ　ｄａｓ　ｉｎｎｅｒｈａｌｂ　ｄｅｓ　Ｋａｍｐｆｅｓ，ｄｅｒ　ａｕｃｈ　ｄｉｅ　Ｂｕ?ｅ　ａｌｓ　Ｓｉｅ　ｉｎ　ｄｅｒ　Ｚｅｉｔ　ｇｌｅｉｃｈ　ｇｅｎａｎｎｔ　ｗｉｒｄ…』

エツィオ「え!?マジッ!!?!?!」

アルタイルの台詞を聞いたエツィオはへ!?Σ（・Д・；）と唐突な事で驚く表情を出したまま、天神（アルタイル）の全身から放たれる赤いオーラの旋風に包まれて、側に居る半魔神化しているエツィオも巻き込みながら大きく赤い光を上へと展開させていった。

第二百四十四曲　ロンドンの特異界に行く前に…一時休憩じゃっ☆

―更に数分後　神界　マシャフ　アサシン教団砦内部　大導師の間―

アルタイル「すまない…待たせたな。（エス●ン６シャ●ロック風に）中々と事情が事情で本編へと繋げることが出来な（略）…我々を見守ってきている“画面の君”に申し訳ない。」

エツィオの魔力で助力治癒したアルタイルは天神化から元の人の姿へと戻り、前話のトラブル騒動は“元から無かった”かのような素振りで机の上に足を組ながら“元のスタイリッシュ★着席”をする。

マリク「全く…お前といるとこうゆう下らん騒動に捲き込まれ…いや、２０００年前と似たようなあの嫌々しい馬鹿げた事を（略）…大体お前があの時理由を詳しく告げる事なく、単刀直入に言ったせいで俺もお前と同じ（また省略）…だから俺は反対していたんだ！！こんな元々傲慢かつ下等な知識しか持たぬ新参者やそこそこの者を見下し（もうメンドイから略）」

カダール「お…落ち着いてよ、兄さんｗｗｗもう過ぎた事だし、それに兄さんはまだ完全治癒されたばかりだからさぁ…。（苦笑）」

大導師の間にある机でスタイリッシュ★着席をしているアルタイルの右側に完全回復した高速罵倒しているマリクと、前話詳しく書かれて無かった“白衣のオペ着（血付き）を着ていた”左側のカダールも“何事も無かったかのように”いまだにも高速罵倒しているマリクを宥め？ながら元のポジションで立っていた。

エツィオ「まっ…“易いトラブル”ぐらいは付くもんだ。良く有るこった、気にすんなっ☆」

シャイナ「何気にポ●スペのゴーちゃん台詞らしき部分ががががが
ｗｗｗ」

ディク『これで少し話が進められそうだな。早く俺も大暴れ&現代世界の技術を見てみたいしぃ～♪』

ディクはこれから地球に戻って特異界をエツィオと共に浄化した後、生前のあの時にないディクにとって高度な技術を手にした今現代の世界をワクワクしつつ静かに右手を丸めてガッツポーズを取る。そんな最中…

フラムエール「「俺は前世紀見ているからいい。今はあの時のＷ・Ｃ．Ｅ４８世紀並みの高度な技術じゃない…今現在の２１世紀などたかが知れている。」」

リコ《発展し続けている今でもまだまだ私達の文明だった高度な世界に至るまで時間を掛けているし、１４世紀生まれの新世代の貴方にとって楽しみかもしれないけど…》

フラムエールとリコはあの時と違う不完全な文明の世界に歯痒く思いながら、はぁ…と小さく溜め息を付いて渋々顔を下に下ろして“億以上の時を生きた”彼らにとって詰まらなそうな表情を浮かび上がらせていた。

ディク『相棒（フラムエール）とリコちゃんにゃぁ低い文明に見えるかもしれないけれどよぉ～…俺は物凄くワ☆ク☆ワ☆クしてるんだぁっ♪（この世界の技術（食い物）だけじゃなく、ベッ☆ピンな姉チャンもワンサかいるんだろぉぉぉぉなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁｗｋｔｋ（＊´Д`＊）ハァハァ）』

シャイナ「えっ？そう？？（ちょっっっっっっっっっ！！！！？？？！俺の卑猥電波らしき波長をリアルハ●ター擬き（ディク）の脳内からキャァァァァァァァァァァチッ！！！！？？？！！！！このゲシュ●ーアフード野郎に何かヤバげな思想を読み取ったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？？！！？！クソヤベェェェェェェェェェェェェェェェェ！！！！！！！！）」

フラムエールが両腕を組んでしれっとした態度でディクに告げていた中、シャイナはディクの脳内にある“クソヤバそうな思想情報”をキャッチして、シャイナのクセのある短い金髪の一枚をピンッと上に立てて表面は普通の表情を出し裏面は派手にどよめくオーバー

な仕草を取っていた。

アルタイル「フムッ…現時点の文明は先ず置いといて、我々がすべき事を手短に告げる。」

エツィオ「おぅよっ！もうじき、林檎を回収出来る工程まで入ったからな！！今度こそ逃がさねぇぞ！！」

アルタイルは冷静な表情を出しながら机の上に軽く左人差し指で三回叩いて、叩かれた所から魔力で生成された四角いボードを召喚し、エツィオはボードに映る林檎が今停滞している下界の特異界を見て強気な表情を出し、丸めた右拳を左胸部に向けて軽くガッツポーズを取る仕草を取る。

魔力で映し出される画面には特異界特有の赤い渦と霧で覆われた世界であり、地上には時計塔のビッグ・ベンらしき構造が“剣山のように何度も尖った火柱”と化していて、城？礼拝堂のようなウェストミンスター宮殿が“聖●伝説ＬＯＭに出てくる焔城”のような禍々しい姿になっていた。

アルタイル「む…前の場所から少し移動したか。だが所詮我らの天神の眼から逃れられぬ。」

この後アルタイルは詳しくエツィオ達に地上での動きを話し、エツ

ィオ達が地上に居た（妖精界に居た）前はロンドンのタワー・ブリッジ下のテムズ川の水に触れる隠し部屋に林檎を持ち去った犯人が篭っていたらしく、エツィオ達が妖魔化した妖精王と元凶の老婆と戦っていた最中に林檎を持ち出した犯人が何かに感ずいて何処へと移動されたのだ。

しかし神界にいたアルタイルは冷静に王としての雑務をしつつ林檎の動きに注意して見ながらじっと視線だけで追っていき、何度も林檎と犯人の動きが何度も蛇行するような形で“何かから逃れている存在”を仮に脳裏に予測しつつ、林檎と持ち去った犯人がやがて一点の箇所へと滑るように飛び込んでまたしても篭城するような形を取るのをエツィオ達に説明した。

アルタイル「林檎とその持ち出した犯人が今いる場所は“ロンドンにある首なしの亡者と未成仏霊が徘徊する呪われた塔”内に居る。」

シャイナ「それって“ロンドン塔”！？もしくは要塞兼宮殿とも呼ばれる“誰もがその城にまつわる呪われた伝説で絶対に近付いてはならない”…ような…。」

シャイナはアルタイルが言った言葉にどっかのテレビ番組で見たような“オカルト伝説”を一つ思い当たるように言った後、アルタイルは「ほぉ、中々察しがついているじゃないか。人間の女？」と鼻息を軽く鳴らし得意げな笑みを出すアルタイルを見て、シャイナはがっくりと的中したことで両肩を弱弱しく下に下げる。

アルタイル「未成仏霊がアレだけ彷徨っているだけの呪塔だ。私から見ればその塔のもう一つの名を“断頭台”と呼んでいる。かつて９００年以上前に多くの反逆者や破れた王族を閉じ込めて、一人ずつ拷問を掛け快楽を味わった後“処刑斧等で首を切断してきた”そうだ。何度も何度も処刑していくうちに閉じ込められた不成仏の霊達は“悪霊”へと遂げて、今でも招かれて来る人間共を“呪殺”しまたは前世と同じように“魔力で物質化した断頭台で首を切断”し永遠に出れない牢獄へと…今でも“生きたまま人間達を引き摺りこんでいる”のだ。」

シャイナ「！！！！！」

シャイナはアルタイルから吐かれる観光名所の一つが“めちゃくちゃ恐ろしい場所”＆“馬鹿馬鹿しい話が現実になっている”ことに驚く表情を出して開かれた口を両手で覆い隠す。

ディク『で？林檎を持っている犯人には“その悪強い未成仏霊が徘徊しているヤバイ場所”でも平気（精神が）なのか？』

ディクはアルタイルが生成した魔力のボードに映る光点と場所を見てふぅ…と短い溜め息を着いた後、いまだに右手を右顎下に当てたままスタイリッシュ☆着席しているアルタイルに向けて怪訝な表情をだしながら問いかける。

アルタイル「あぁ、林檎にはたとえ上級（将門）並みの最強霊でも“完全に防ぐ最強の結界”があるからな。所持者でもその特権を得られて身体精神および“林檎を手放さない限り”は効力を持つことが出来る。しかし…」

フラムエール「「魔ノ神と天ノ神…蘇った魔ノ帝以外は拒む“全知の力”が何故“その持ち出した者に従っている”のか…だ…ん？リコ？？」」

リコ《フラ…ム……》

ポスッ…

両腕を組んでいるフラムエールが静かに言い眉を細め画面に映る光点を見ていた時何かを触れられる感覚を受けて、何事かと顔だけを下に下ろし左腰の裾の部分を掴んでいた硬い表情を出していたリコが両眼を閉じてフラムエールの左腰に額を当てており、フラフラとよれているリコの身体をフラムエールはそっと身を翻して両手で優しく背中を摩るようにしてよれかかっていたリコを立て直そうとした時…

フラムエール「「どうした？リ…！！」」

リコ《フ…ラ……ム……。》

よれかかっていたリコはフラムエールに背中から摩られた感覚を受けて無意識に両腕を前へと伸ばし、腰の背後から前へ覆うようにしてピタリッとフラムエールに抱き着いた後、スーと寝息のような音を立てる。

フラムエール「「ね…眠った!?（馬鹿な、この子は俺と同じ人であっても人でない“決して睡眠・疲労という概念が無い”兵器の身体なのに…）」」

アルタイル「ふっ、本来は直ぐにそこへと急行させたいのだが…」

エツィオ「ははははっ!!リコちゃんが寝ちゃってらぁ～☆こりゃ、無理に行っても疲れるだけだべ♪」

マリク「ああ、兵器の身体でもあの子の身体構造は“子供（ガキ）”だからな。あの赤い長身の大人と違って機能の負担は奴よりも掛かるか。」

シャイナ「あらっ☆普段は表情硬ってぇぇぇぇょぅぃ〝ょなのに…なんて可愛いぃぃぃぃ寝顔～ｗｗｗｗ（＊´∀`＊）」

ディク『ホントだぁ～♪こうゆう時こそ“写メ”を撮りたいけど、俺“生まれた時代が違う”からさぁぁぁぁ♪あっ…一応“一部発言

に対して”突っ込みは禁止な??』

カダール「えぇ！多分もぅ“最初(ハナ)っから突っ込まれている”とおもいますよ?ディクさん??」

フラムエールが抱かれて寝ているリコの姿を見て慌てふためくように動揺している中、エツィオの仲間達はほのぼのとした笑みで和やかな表情を出しながら、身長差がある二人組みの姿を（・∀・）ニヤニヤしながらそれぞれの“妄想ビジョン”を投影させる。（一人一人の映る光景はなんなのか想像でお願いします（笑））

アルタイル「先ずは妖精界から持ってきた疲弊を取り除くのが先だ。お前達が休んでいる間にも私は地上の林檎の動きを監視している。おぃ、マリク…すまないが…」

アルタイルが右側にいるマリクに向けて顔だけを動かし続きを言おうとしたが「解っているさ、アルタイル。もう部屋の準備は既に手入れしている。」と言いながらマリクの姿は既に大導師の間の入り口に立っていた。

マリク「食事の支度をして来る。エツィオとその“馬鹿魔神の下僕共”、さっさと手入れした部屋へと行け。立っているだけじゃ時間の無駄だ。（まったく馬鹿魔神め…食事分を余計に増やすんじゃねぇよ。）」

エツィオ「オィオィwww俺の仲間にまた“酷ぇ言い用に変えやがって”www（ん？若干ツンな要素があったけど…まぁいいやwww）おっし、開いた居室へと行くぞおめぇら♪」

シャイナ「えぇ。（おっと…若干和解前のツンリクが入ったなコリャwww）」

ディク『おぅ。てか…下僕は無ぇよwww下僕はwww』

リコ《スー…》

フラムエール「「リコ…（彼女の中に何が…いやまさか…！駄目だそんな事を考えちゃ…いけない…。）」」

とエツィオがさっさと出て行くマリクの背中を見てプププと吹き出すのを堪えるような仕草をしながら、背後にいる仲間（一人心配性）に向けて軽く言った後、仲間たちは静かに頷いて出口へと歩んでいく魔神の後に着いて行くように歩み出した。

アルタイル「カダール、エツィオ達を我々若葉アサシン共が住まう塔へ連れて行ってくれ。私は地上の林檎の動きを監視し続ける。」

カダール「了解しました、アルタイル大導師！それじゃぁエツィオさんとその仲間の皆さん！！僕の後に付いて来てください！！」

次なる場所へと向かおうとしていたエツィオ達だったが、フラムエールに抱きついて立寝しているリコの姿を見てアルタイル含めてエツィオ達皆は和やかに思い、兵器でもやっぱ人間と同じなんだなっ♪と思い込んで彼等は一時休息を取る事を決定する。

まだ新米であるカダールは神界の王・自然界を束ねる闇王とも呼ばれる大導師（アルタイル）の指令を受け取った途端ヤッターと大きく両腕を斜め上に上げてバン☆ザイする仕草を何度も取った後、後ろに居るエツィオ達に笑われながらテンション高く彼等を引き連れて大導師の間を後にする。

白い光がカーテンのように入った長い廊下を歩み、所々虫食いの巣のように開いてある窓らしき部分から雲で覆われた地上の絶景をシャイナは見つつ前方に居るカダールが「此方ですよぉ～！」と宿舎に繋がる石で出来た扉を思いっきり広げるように開けた後…

カダール「皆さんっ！もうじき到着しますよ！まぁ、大導師の言うように間に合わせですけど、僕のような未熟者が宿舎としている場所へ案内しますねっ☆」

シャイナ「ちょっ…おぶっ！！怖っ！！！！！」

ヒュォォォォ…

弟のカダールが閉じていた石の扉を全開に開けた途端シャイナの両眼に映っていた景色…砦内から修行中のアサシン達が休息している塔に続く“手摺一つもないコンクリだけで出来た空中廊下”&“一本道の上に綿菓子のような厚い雲が先の進路を見えないように阻んでいる”ようにして此処に居る全員をありのままの自然という光景を見せ付けていた。

ー神界　マシャフ　アサシン教団砦　見習いアサシン宿舎塔に続く空中廊下　チョ●ランマ頂上辺りの高さー

カダール「あっ！言い忘れていましたが、この空中廊下は“ありのままの自然で出来た大気”が荒れ狂っていますので、吹き飛ばされないよう十分気をつけるようお願いします！！」

シャイナ「ちょっ！遅ぇぇぇぇぇぇぇぇよ！！！！！ソレをもっと早くここに来る前につ…ぶわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっぁあああああ！！！！！風っ！！！！！…風ががががぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！……ヒィッ！！！　！（（（（（（（（（（Д　）））））））））」

空中廊下へシャイナ達が数歩踏み出した途端、荒れ狂う上空の気流でシャイナは風で煽られ身体が弄ばれるように右往左往にふらつき、エツィオの背の翼での安全☆快適な飛行とは違う“自走の恐怖”を受け、シャイナは句音症になりながら両眼が真っ白&表情が恐怖に青ざめていく。

エツィオ「大丈夫だシャイナ！例え落ちても、俺の後ろにいる仲間の内一人が救い出しくれるＺＥっ☆（キリッ」

シャイナ「で……でででも……わ……わわわわわわわわ…ヒャァッ！！？？！！！」

気流が荒れ狂う場所でもエツィオは“風の影響さえ受けないまま動じずフツーに立ちながら”、キラッ☆とかっこ良く良い笑みをシャイナに出した直後、突如シャイナの前方から突風が襲いかかってきて、人間であるシャイナは鉄砲のような風圧で簡単に宙に浮き上がる。

シャイナ「ヒャァァァァァァァァァァァ！！！！？？？！

！お…落ち…っ…！！！！？？？！！！」

ディク『ニャァッ★』

ペチッ☆

シャイナが鉄砲風で宙に浮かんで後方へと飛ばされてしまう前に、シャイナの後方にいたディクがシャイナの首を猫のように掴んで、彼もエツィオと同じように“風の影響を受けない”まま飛ばされそうになったシャイナを掴み止める。

シャイナ「あ……アブッ！！？！！！アブゥウウウウウウウッ！！！！！！！！！！た…助かっ……！！！！」

ディク『ＨＡ・ＨＡ・ＨＡ♪渡り終えるまで俺が“抱っこ”してやろうか可愛子チャン？？それか、エツィオの愛ゆえに突撃★ラブッな幸せなダッコが良い？？』

シャイナ「ちょっ…何このマ●ロスプラスのイ●ム台詞に似合うようなキャラは…！！！い〝い！！！？？？！！」

ニヤニヤ顔を出すディクに猫掴みされながら顔だけを後ろに向けた時、前方にいたエツィオが背中から大きな漆黒の鷹の両翼を出しつ

つ…

エツィオ「ウヘヘ…カモォォォ

ディクの右手で猫掴みされているシャイナは“明らかに変態臭い図りを立てている”エツィオを見て半ギレの表情を出しながらバタバタと両腕を何度も振るおうとした時、またしても強い突風が前方から吹いてきてシャイナは猫掴みされながらも風で全身が上下に煽られるように揺れながら、摘まれているディクの右腕を巻きつくようにして力いっぱいしがみ付く。

シャイナ「高所の風怖い！高所の風怖い！高所の風怖い！高所の風怖い！高所の風怖い！高所の風怖い！高所の風怖い！高所の風怖い！高所の風怖い！高所の風怖いぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！！」

ディク『ハハハ！ホンマもんの人間の身であるシャイナにゃぁヤバ過ぎる所だよなぁ～ｗｗまっ、魔力を元々持っていない人間相手は…』

ディクは右腕ごとしがみ付いている猿のような体勢をしているシャイナの姿を見てケッケと笑った後、しがみ付かれている右腕を右胸部前へと寄せるように持ってきて、硬く硬直したシャイナの両足後ろを左手先から軽く摩って緊張を解くように少しずつ足の筋肉を軟らかく硬縮された両足を解いていった後…

ディク『ほらよっ！ちゃんと俺にしがみつかねぇと、また空中ブランコ状態になっちまうぞ？？』

シャイナ「わふっ！？」

ポスッとディクの胸部にシャイナの身体が寄せられるようにして、固まっていた両足が川のように綺麗に流れるようにして両足腿の上にディクの左腕筋裏が乗せられている体勢…いわばシャイナは“お姫様抱っこ”させられていた。

ディク『どや？これでちったぁ安心になるだろ？？』

シャイナ「う…うん／／／（ちょ…おまっ！？！！！？！こんなオッサンフード如きの野郎なんかにこの俺がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁｏｒｚ）」

深い緑が黒く掛かったフード越しから見るディク（※外見４０代ですｗｗｗ）のキリリとしたエツィオに負けない“イケメンフェイス”を見て、シャイナは少し一瞬だけ顔面が赤くなりときめいてしまうような感覚を内面から覚えて、思わず内面で思いっきり悔しがる仕草を取る。

エツィオ「なんだＹＯ～ｗｗｗ折角シャイナを抱き止めた後に“ニャンニャン”させるシーンをヤろうとして…」

エツィオはしてやったりの表情を出しながらシャイナをお姫様抱っこしたまま宿舎塔へと歩んでいくディクの姿を見て、ブーイングするような素振りをしつつ両腕を首後ろに組みながら背中から出ていた漆黒の鷹の両翼をバサリと仕舞う。

フラムエール「「それは駄目だぞ、魔ノ神よ。この小説は“信じられるか？…これでも全年齢対象なんだぜ？”のA指定小説だからさ…猥褻行為・ヤり過ぎる性的行為は、この小説“サイト”自体のルールを破ることになる。」」

そんな話を聞いていたフラムエールがディクと同じようにリコをお姫様抱っこしながらエツィオへと歩み寄ってきて、魔神の呆れた発言に太陽は半ば呆れたような表情を出しながら両肩をガクンと落す。

エツィオ「いや、この話まで一部の話は“エロ描写”があるからさｗｗてか…“ギリギリ手前”までねっ☆てか…シャイナとア★ハンな運動が“アレ以降（第五十八曲参照）”やってないしｗｗつーか、そろそろヤっちまったやぁぁんなシーンも色々投稿したいｓ…（略」

フラムエール「「そんなにヤりたいなら、俺と契約者（ディク）が見ていない場所でヤってくれ。（汗）後の連載終了時に裏場面を“短編”としてうｐればおｋ。」」

エツィオとフラムエール自身の発言自体が“作者の代弁”のように

なっていて、さっきの台詞を吐いたフラムエールは「「何だ此れは（苦笑）」」と数秒間キャラ崩壊した自身を馬鹿馬鹿しく思って両眼を瞑る。

そんなフラムエールを見てエツィオはアハハと笑いながら両腰に手を当てつつ顔だけを後ろに向けて、先頭にいるカダールの後を付いて行くように歩んでいく幸せ状態のディク（お姫様抱っこしたまま）の姿をニタリと口の端を吊り上げながら…

エツィオ「余計な恋敵（ライバル）が増えちまったな…たくよぉ…。」

第二百四十六曲　暴走マシンガンママンと複雑な思考を寄せる唯一な人間

宿舎塔内に入ったエツィオ達は中にいた修行中の新米アサシン達に歓迎され、カダールに案内された何もない居室へと入った後、エツィオとシャイナは付いてきた若葉達に今まであったことを“白昼★ドッキリな生々しい魑魅魍魎の地上話”を子供向けに面白くするようにまだ修行を終えていない好奇心の彼らに語る。

英霊であるディクも新米の彼らに話を掛けられてエツィオと同様地上であった事の話と、生前にエツィオに出会って人ながらにして魔神と同等の光の魔力を身に付けた３０年の修行の日々と、永眠するまでの王としての戦い・生きた民の為の意義を熱い視線で聞く彼らに時々冗談も混じりながら面白可笑しくするように話していた。

フラムエール「「（やれやれ…魔ノ神もディクも愉しそうだな。）」」

そんな光景をフラムエールは背中を壁に寄り掛かるように見ながら顔を下に下ろし、騒がしい小さな居室の中で熱気溢れている中でも、いまだに両腕の中で静かに眠っている“小さい太陽”の素顔を見る。

リコ《……スー……》

フラムエール「「（やれやれ…完全に眠ってしまっているな。俺もリコのように“疲れた”という感覚があればその意味を知れるし、身体だけが人間性として薄れている俺には…）少し…当たってくるか。」」

フラムエールは抱き締めている小さな太陽（リコ）をギュッと両腕に少し力を入れて、我が子のようにあやし庇うような思いを脳裏に過らせながら、若葉達と愉しく雑談している彼らからそっと静かに居室を後にしていった。

―神界　マシャフ　アサシン教団砦外離れ　若葉アサシン用宿舎塔内　とある居室―

マリク「持ってきたぞ、馬鹿魔神（エツィオ）の“下僕共”。さっさと食って、休んだら下界に逝ってこい。」

シャイナ「おっまっｗｗｗ字が一部違ぇよｗｗｗてか、俺らのようなピチピチ一人だけの“ウホまみれな超年増メンツ”を邪見すんなヤｗｗｗ、（´Д`、）」

物一つも置いていない窓だけある殺風景な居室にマリクが砦内で調理してきたお手製料理を片手ずつ持ち、マリクの台詞を聞いていたシャイナは突っ込みを軽く入れつつ持ちきれない料理はそこら辺に

いる新米共に持たせて、一つ一つの料理が盛った皿を予め魔力で生成した白い長机に置いていく。

エツィオ「机の上に三又台の蝋燭とぉ～♪天井にふつくしいシャンデリアァァ～♪♪床は赤いカーペットにしてぇぇぇぇ♪♪♪」

バシュッ！バシュッ！！

エツィオは明らかにクソわざとらしい音痴で歌いながら人差し指の指先から青白い光弾を次々と放ち、光弾が当たった部分から“台詞通りに魔力で生成されたモノが召喚(リッチ)”されて、何もなかった殺風景の居室内が次第に豪華な世界へと成って行く。

マリク「おぃおぃ、馬鹿魔神。お前地上で（妖精界で）散々な目に合った（正体を隠すために妖精界にあった菓子のようなフェロモンを身体に浴びせた）ばかりだろうが。」

エツィオ「細けぇことは良いんだョ“ツンツン☆ママン”。それと俺に対して何度も馬鹿馬鹿馬鹿言うんじゃネーヨｗｗｗヽ（´、｀）」

そう言った直後マリクが「俺はママンじゃねぇぇぇぇぇ！！！！」と半ギレな表情を出しながら左腰に掛けられていた剣の束に手にとって、魔神をぶちのめすべく剣を引き抜こうとしたが周囲にいた新米アサシン達&弟(カダール)に押さえつけられる。

マリク「放せカダール！！新米共おおおおおおおおおおおおお！！俺はこの馬鹿魔神に！！！！！！！Ich werde es zerreißen，zusammen mit Ihrem Körper darüber fein Ausschnitt zu machen und wieder hinüber von diesem Moment！！！！！Beid nicht nur es，aber auch dem ontier en Ihr Herz und der Arm deshalb alle Augen，wie sie schlampig werden，und fein nicht einmal ein Modell zu behalten！！！！！！」

カダール「兄さん落ち着いて！！！！！！！此処で殺し合いしちゃったら、折角の大事な休息が台無しになっちゃうよっ！！！！！！（うわわわわ…っ！！！！兄さんが翻訳不可になるぐらいまで半ギレ状態になッとるｗｗｗ）」

マリク「ブぅぅウゥウゥウゥウゥルゥアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！（ア●ゴ的な怒りで）」

そんな必死すぐるアサシン達に羽交い締めされている半ギレマリクの姿を見たエツィオは、ププッと喉から来る至高の笑いが出そうになるモノを口に左手で被い隠しながら言いつつ、次々と右指先から出る青白い光弾で豪華な物を召喚し居室内を改造していく。そんな

最中…

シャイナ「？ありり？？フーちゃんとゴスロリょぅι゛ょが居ないべ？？」

ディク『あっΣ（・・）ホントだ。もうじき宴会☆万歳☆乱交会！が出来上がるというのに、相棒とリコちゃんは何処に行ったんだ？？』

ワイワイと熱気になりつつある最中シャイナはふと部屋入り口の壁に寄りかかっていたフラムエールと、フラムエールの両腕に抱かかえられていたリコの姿がいつの間にか無く、ディクは面白半分に喧嘩直前の空気になっている一部始終を見ていたが、シャイナの一声でピクンと反応し顔だけを横に向けてのほほんとしていた表情を出しながらシャイナと共に居なくなった二人の人型兵器の行方を脳裏に想像として思い浮かべる。

シャイナ「あっ！もしかしたら乱交会場という“クソ容赦ない味噌乱舞（酒の掛け合い）”とか“酔った時が本番！生き残りをかけたデス★マッチ（一気にノマノマウェイ大会）”から逃れるために、さっさと離脱したんじゃ（´Ｈ、）プッ！」

ディク『アホかｗｗｗ俺の相棒はどんな状況であれ例え武器状態だろうが“その場で逃げるという行動すら一切しない”し、当時生前の時でも相棒は人（オレ）に振るわれる兵器でありながら“自立している”

果敢な戦士なんだぞ？人間味が欠けていたアイツでも“時々人間らしいような気遣い”があったもんで…そのおかげで俺は王としての最後の最後までやり遂げる事が出来たと思う。多分どっかで時間つぶしに風に当たっているだろ？』

ディクが生前の過去話が混じった炎翼の素顔を言った途端「へぇー…あんな“元”人形な奴だった熱血外人侍が貴方のようなまだ発展していない時代でそんなことがあったとはねぇ～。」とシャイナが半ば信じていない素振りを吐きながら、指先から放つ魔力で改造していくエツィオの元へと歩んでいく。

ディクはシャイナの羽織っている白い厨ニコートの腰にあるポケットに両手を突っ込みながら歩んで行く後姿を見つつ両腰に当てていた両手を離し、すっと顔を上に上げて今見上げている視線の先にいる“閲覧者視点のカメラ”をじっと見た後、軽く溜め息を付いて静かに吐く。

ディク『シャイナの奴…まだ相棒のことを“人形”と見ているのかなぁ…。』

第二百四十七曲　前半エロ☆ス・後半世界が滅びる瞬間に…

―神界　マシャフ　アサシン教団砦外離れ　宿舎塔頂上部―

リコ《スー……スー……》

フラムエール「「全く…リコめ。こんな暴風が荒れる冷たい場所でも“楽々と安眠出来ている”のだな。（苦笑）」」

ヒュオオオオオオオオオオオオオ……

一方シャイナ達がいた宴会場（元は何もない居室）へ改造していた場所から外へコソコソ移動したフラムエールと居眠り状態のリコは、矢じりのように尖っている宿舎塔屋根上に腰掛けるように座っていて、視界に映る夕闇の上空と流れていく羊雲を美しく思いながらまったりとしていた。

所々吹き荒れる自然そのものの風は無像無人に屋根上にいるフラムエールとリコを遥か地上に叩き落とそうと何度も吹くが、“見掛けは人間、身体は兵器”という人外な彼らには動じることも無くフラムエールの羽織る赤いコートの長い二つの裾さえ“風の動きのよう

に煽ることすら無い”まま静かに時が流れる。

上記の通り神界の時間帯は夕刻に満ちていて西に映る太陽の光が少しずつ地平線内へと隠れて行き、オレンジ色に掛かっていた上空が次第に深い黒紫色へとなりつつ数々の星の光を一つ一つ輝かせていく。

フラムエール「「なぁ、リコ覚えているか？お前が兵器へと改造される前の《覚えているよ、フラムエール…》！」」

突然フラムエールの両腕の中眠っていたリコが眼を醒まして、フラムエールはあっ…と虚を突かれたように少し顔を後ろに引く仕草をする。

フラムエール「「馬鹿…起きていたなら早く言ってくれないか？心ノ臓がはね除ける位にビックリしてしまうぞ…。」」

リコ《ゴメンね、フラムエール。私…私はねフラムエールと二人だけになるまで、ずっと芝居（寝たフリ）をしていたの。漸く私達…いえ貴方だけと解り合える“友達”と3憶年以上振りに…》

フラムエール「「（芝居だと！？こ…この俺のような大人が嘘一つな行為を出し抜くとはっ！！あぁ…情けない。（￣￣；））」」

フラムエールはリコの台詞を聞いて一瞬両眼を大きく開けて（。д。；）ヘッ！？とでも言いたくなるような表情を出している間、両腕の中に包まれているリコが次第に背けていた身体をフラムエールの顔面と向き合うように持っていき…

フラムエール「「オィ…それじゃ、あの時の天ノ神がいる間で突然俺に寄り掛かったのｈ…うぁっ！？」」

ドサッ！

正面に向いたリコがフラムエールの両肩の上に手を乗せた直後フラムエールを背中から押し倒し、上を取ったリコは少し身体を上にと這いずるようにしてフラムエールの顔面へと近付く。

フラムエール「「な…何をす…くっ！？」」

リコ《動かないで…》

押し倒されたフラムエールはリコを退けるべく押さえ付けられたリコの両手首に向けて両腕を伸ばそうとしたが、リコの背中から魔力で生成された紅蓮色の複数の人間の腕に逆に押さえ付けられて、腕だけでなく足も押さえつけられ、フラムエールの身動きを完全に封じ込められる。

フラムエール「「？リコ…？？ふ…！く…。」」

フラムエールは股下から“何かが嘗め回される”感覚を覚えてビクンと身体を若干跳ねるように奮え上がらせ、フラムエールは股下から腹部へと這うようなモノが何かなんとなく想像できた。

リコ《Ｉ　ｆｅｅｌ　ｔｈｅ　ｐｕｌｓｅ…（感じるよ…）貴方の心の声が…。》

フラムエール「「うぁぁ…リ！…リコォォォォ…！！う…ぐ…ぁぁ！！…」」

ズルル…

リコの背中に出ていた魔力の紅蓮の腕の二三本が“ゲソのような触手のようなモノ”に変化していて、ただ押さえつけられただけでなくフラムエールの羽織るコートの右腰から直接服ごと突き破り、フラムエールの素体へと乗った触手はズルズルと股下から左腹部に沿って全身を絡めるように蠢きながら首筋へ伸ばしていく。

フラムエール「「はっ…うぐぁ…！…が…ぁ……。」」

リコ《Ｗｉｔｈｏｕｔ　ｔｈｉｎｋｉｎｇ　ａｂｏｕｔ　ａｎｙｔｈｉｎｇ…Ｗｉｔｈｏｕｔ　ｔｈｉｎｋｉｎｇ　ｏｆ　ａｎｙｔｈｉｎｇ…（考えないで…思わないで…）Ｈｏｗｅｖｅｒ，　ｙｏｕ　ｅｎｔｒｕｓｔ　ｍｅ　ｗｉｔｈ　ｅｖｅｒｙｔｈｉｎｇ…（ただ、私に全てを委ねて…）》

グプッ…

フラムエールの全身に絡められたニ三本の触手が首筋まで上ってきて頚動脈部分を擦るようにして炎翼を更にビクンと上がらせた後、フラムエールの上に乗っているリコが忍ばせた触手一本を左顔面横へ持っていく。

トクン…トクン……

息が荒くなり忍ばせている触手・押さえつけている魔力の両手から受け取る彼の心の臓の鼓動を感じながら、フラムエールの左頬に向けて上げていた触手で軽く舐めるように動かした後リコは顔が赤くなっているフラムエールの唇に向けてリコの顔面もろとも覆い隠し徐々にフェードアウトしていった。

…

……

……

―フラムエール　回想　W・C・E４５　３４７５年　―

リコ《ねぇ…　　、　　さん。…私、三日後に人類を護るための兵器になる手術をするの…。》

！これは…人類が全て焦土と化す前の記憶！？それに…

意識を閉ざしていたフラムエールが漸く長かった静寂の時間から覚まし、ゆっくりと閉じられていた視点を開いていくと、目の前に移っていた光景は偽りの空が投影された青い天井と床には人工芝生で敷詰められた密室に居た。

一人称視点で顔だけを少し横に動かすと機材が埋め込まれた白い壁によたれ掛かるようにして体育座りしている三人の人間がいて、よく見るとそれは滅びる前の世界にいた自身であってその隣には共に生きようとした若い女性と今も変わらないリコが悲しい声で俯きながら二人に語っていた。

前世紀フラムエール（偽名）「…そうか。…お前とこうしていられるのも３日だけなのか…寂しいな。」

―アレは俺だ…それに何故…俺の“本当の名前”が聞こえない！？

俺は…俺はっ！？！！！？ー

平行世界の若き女性（名前は不明）「やっと分かり合える“唯一の友達”に出会えたのに…リコちゃん…。」

ザザザザザザ！！！！

リコが言う前世紀の自分と背後に憑くようにして映っている彼女の“真名”を言っているのに、その真名自体が酷いノイズ音が走って掻き消されるように聞こえないまま一瞬の内にして目の前に映る光景が砂のように過ぎ去っていき、次なる場面が一つ一つのカットインのように映し出される。

ーW．C．Ｅ４８　３４７８年　人類最後の日ー

リコ《私ね…もし…手術に埋め込まれる“力”に飲み込まれ…ちゃったら…》

科学者Ａ「！大変だぁぁぁぁっ！！！！！実験棟Ｅ－０３に完成したばかりの“戦闘用模擬体１４５６０２４５７９３号”が暴走をぉぉぉっ！？？！？！！」

施設長「何だと！？す…直ぐに映像に映せ！後施設内に居る全ての

防衛部隊をこの中枢入り口に集めさせろ！！！！」

リコ《お願い…もし…いえ…何れは…》

赤と黒が成り立つ世界に映る一つ一つの映像から鳴り響く警報音とリコの背中姿が交互に映って、騒がしいほどの悲鳴と怒号が響く中真っ白な背景の映像の中に居る背中だけのリコは静かに語る。

施設長「馬鹿な！？戦闘用模擬体１４５６０２４５７９３号にはもう“自我という概念を全て除いた”ハズ！！！！！」

リコ《私は貴方を…》

科学者Ｂ「ひぃっ！？！！！中枢部にと…ととと到達まで４０…２…は早い！！？！？！１０《ドガァァァァァァァァァン！！！！！！》うぁぁぁ

く中、他の映像から響く爆発音と何かがつぶれる生々しい音が鳴って、黒い噴煙を上げる入り口から青白い浮遊霊を背に従えた前世紀の自分が現れて、“まだ自我が僅かに残っていた自分”が大きく怒号を上げる。

施設長「こんなことがありえるのか!?も…もう我々最後の人類は此処で…」

科学者A「戦闘用模擬体１４５６０２４５７９３号に強制戦闘指令切断基盤（プログラム）を展開!!!完全切断されるまで後…ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」

リコ《私の中にある…》

前世紀フラムエール（偽名）「「殺すっ!!!!キ…サまラを全員此処でマッ…殺してヤるっ!!!!!うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!!!!!!!」」

逃げ惑う科学員達と施設長がなす術もなく悲鳴を上げながら居室内の端へと追い詰められていって、入り口前に固めていた防衛部隊を全て斬殺した●刀（●ｉｉリモコン）の柄を握って、身に溢れる“本物の太陽”を手にした前世紀の己は爆発した怒りに任せて端に追い詰めた全ての科学者・施設長を…

リコ《全てを…あげる…ね？》

前世紀フラムエール（偽名）「「コんな世界ナどっ…！！！！！滅びテしまえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇええええええええええええええええええ！！！！！！」」

ドォォォォォオオオオオォォォォォォォオォォォオオオオォォォォオ

オオン！！！！！

一人称の自身に振り向いたリコが両腕を後ろにして組みながらニコッと身体を横に傾いて喋った直後、映っていた全ての映像が巨大な赤い爆炎と破壊音と己の孤影の叫び共に、今居る幻想世界そのものを全て灰燼と化していった。

第二百四十八曲　Past memory saved with the f

―神界　マシャフ　アサシン教団砦外　宿舎塔頂上―

フラムエール「「うぁぁっ!!??!…!!」」

ビクンと何かが穿つ感覚を受けてフラムエールは閉じていた両眼を大きく開いて、身体ごと跳び跳ねるように上半身を起き上がらせる。

フラムエール「「ハァ…ハァ……（アレは一体何だったんだ!?過去の俺が白い衣を着た人間達に向けて力を!?まさかアノとき、前世紀の人類が消滅した要因は…くそっ…これ以上言いたく無い!俺は望んでいない!!）ココ…は…」」

脳裏は先程前話の過去の一部の映像を見たフラムエールは苦悩するように苦い表情を出して、滲み出る頭痛のような症状もジワジワと感じながら額を右手で押さえて、今視界に捉えている風景を落ち着いて見る。

先程のフィルムのような映像画面が流星のように多く流れた薄暗い場所と違って、今いる景色は既に太陽が落ち天には星々が多く光る

夜空に、階下には綿雲が吹く風に従って流れる黒紫色の雲達がフラムエールの視界に映っていた。どうやら前話のような夢と幻覚が満ちた世界から、現実世界へと引き戻ったらしい。

リコ《フ……ラム……スー…》

フラムエール「「リコ！…んっ？あ？何だ此れは？？」」

フラムエールは胸元から寝息のような声が聞こえて風景を見ていた顔を下に下ろしたら、フラムエールの胸部の中に入るようにして丸くなっていて、そのまま爆睡しているリコは寝言を少し吐きながらまたしても寝息を静かに立てていた。

その光景を見たフラムエールは首を少し右へと傾げる。…前話リコの背中に生えていた魔力の腕が消えていて、拘束された挙げ句身体に向けて卑猥行為をし、何度も嘗め回され股下から出してしまったあの“ヌメヌメとしたモノ”と魔力で生成されその“ヌメヌメとしたモノが付着していた触手数本”が綺麗さっぱりと無くなっていた。

フラムエール「「どういう事だ？あの“如何わしい感覚”が全く感じない…リコ、お前は一体何を？」」

アルタイル「“継承”されたのだ。お前の腕（なか）に眠る“幼き太陽”そのものの力を。」

フラムエール「「！お前は…」」

第三者の声がした方向に向けてフラムエールは眠っているリコを抱かかえながら身体ごと振り向いた後、振り向いた先には頂上の中心にある尖った柱らしき部分に寄りかかるようにして立っているアルタイルが居た。

天神…アルタイルは両腕を組みながらフッと笑うように口の端を吊り上げて、フラムエールの腕の中に眠るリコをしげしげと覗き込むようにほほぅ…と何度も顔を静かな動作で何度も上下に動かす。

フラムエール「「？継承だと？？何故…」」

アルタイル「お前の抱いている“小さき太陽”の中にあった“兵器としての力（太陽の力）”が完全に失っている。解らぬのか？もう既にお前の中に“彼女の力が取り入れてある”事を…！」

フラムエール「「な…っっ！！！！」」

やや真面目顔を出すアルタイルが自身に向けて左人差し指を指した時、ガシャンと右腕自体が重いモノで押し潰されたような感覚を受けてフラムエールは咄嗟の反応で顔を右斜め下に向けた直後…

フラムエール「「！！！！！こ…この武器は……！！！！！」」

フラムエールはいつの間にか手にしていた武器（モノ）を見て、（・Д・；）ポカカカカカァァァァンと唖然とするような表情を出す。

刃先ら唾にかけて大きな赤い亀裂のような光が走った大きな赤黒い刀身、鍔自体が何処かの“厭ゲー”に出てきた竜”に似た形をしていて、前世紀時フラムエールの持つ●刀（●ｉｉリモコン）と同等の力を持ち威圧感を漂わせていた巨大な赤黒い剣…

―それはリコが改造された時以降に使っていた“ニー●ＤＬＣの愚者の●哭”みたいな武器を、フラムエールの右手の中にしっかりと離さないように握り締めていた。―

フラムエール「「これはリコの“大剣”じゃないか！！馬鹿な…我々兵器同士は己の使う武器以外“拒む”というのに…」」

アルタイル「…予測だが、お前が抱いている幼き太陽がお前に“夢魔”という幻惑魔力を与えていた間に、この子の中に残っていた全ての力をお前に流し込んだのだろう。兵器同士の異武器干渉基盤（デリンクウェレプログラム）を瞬時に破壊し、この子の太陽の魔力で砕いた基盤の穴からこの子の力を注ぎいれたかもな。」

アルタイルは冷静な表情を出しながらよたれ掛かっていた柱から一旦離れて、半立ちになりながらリコを抱えているフラムエールに向けて歩みながら更に続けて言う。

アルタイル「そして全てを注ぎいれた後、夢魔の効力が切れると同時に破壊した基盤を修繕させてまた再び渡した武器が戻ってこぬよう“異武器干渉基盤（デリンクウェレブログラム）の内容も書き換えて”、他兵器との情報交換・干渉を二度と無い様に完全切断（シャットダウン）した。まぁ解りやすく言えば…」

フラムエール「「“身体は兵器”でも力を全て俺に託したことで“下界にいる魔力を持たない人間”となったのか…。馬鹿野郎ぉぉぉおおおおおおおおおおおおっ…！」」

フラムエールは抱いている胸の中でスヤスヤと眠る“人間になったリコ”に向けて、苦渋の顔を出しながら右手に持っていた武器を一旦屋根に中間ぐらいまで突き刺し、抱えている両腕に力を入れてぐっと離さないように抱きしめながら…

ツツッ…

―“閲覧者用カメラ”に映らない角度でフラムエールの左頬に一筋の透明な線が流れて、顎下までその透明な線が流れた後両眼を閉じているリコの右頬に流れていた透明の線が“雫”となって、数滴の雫がリコの右頬を濡らしていった。―

フラムエール「「俺のよ…うな大の兵器が…“泣く”とはな……ただ悲し…い…だけじゃな…い。俺はこの子に対して…っ！！」」

アルタイル「お前の抱いている“その子自体”が望んでいたことじゃないのか？…我が真実の眼に映る情報そのものが伝わるぞ…。滅びる前の世界で兵器として変わっていく己の“虚無”“絶望”“無慈悲”…例え全ての記憶を無くしても、いつか再びお前という存在に会った時に…」

アルタイルは黒い両眼から真実が見える黄金の鷹の眼へと変えて、フラムエールが今抱いているリコの全身から浮かび上がる青い枠が多く浮かんだ情報という名の板盤を見ながらフラムエールの顔に近い距離あたりまでしゃがみこむ。

アルタイル「全てを掛けてまでお前に捧げようとしたじゃないのか？太陽という“重大な使命”を背負ったこの子には「「…気づいていたよ。リコと再び出会えた瞬間から…だ。」」ほぉ…」

アルタイルは意外な答えを聞いたフラムエールの台詞を聞いてややひょんとするような表情を出し、フラムエールは左頬に伝っていた雫の痕を右手で拭い取った後、抱かかえているリコを少し上に上げて穏やかな表情を浮かべながら唇に触れるぐらいまで持ち構える。

フラムエール「「あの時…まだ兵器としての本能で動いていたリコと再会して、なんらかんらと戦うことになってしまったけど…」」

フラムエールは両眼を閉じて脳内でリコと再会したあの場所の記憶へと遡るように映像として見ながら、自身が翳した刀とリコが召喚した大剣同士がぶつかり合いながら（第二百十四曲参照）リコ（ブライン）の攻撃で自身が高速後退していく最中に…

―兵器としての本能が出ていた彼女の表情が一瞬“助けを求めるような本来の素顔”が浮かび上がって、鍔迫り合い状態のまま次に聞こえた無表情のまま彼女の口から…―

フラムエール「「“助けて”…て聞こえたんだ。かすかに、彼女の本来の自我がその瞬間だけ露になったんだ。でも実際的に自我が戻ったのは一時身を潜んでいた時に妖ノ魔に襲撃された所からだったけどな…。」」

アルタイル「…だがお前が今抱いているこの幼き太陽だった彼女自身の願いは成就した。この子には元から人間に成りたい意識が強く戦うという意思すら拒んでいたらしい。過去に植えつけられた人間の基盤（プログラム）というモノすら、完全に抑えられないよう本当の…本当の感情がこの子に…」

フラムエール「「リコ…。」」

フラムエールは閉じていた両眼をゆっくりと開いて何かを決心したかのように立ち上がり、一旦屋根に突き刺していたリコの大剣の柄を握ってスラッと刃音を立てながら引き抜いた後…

フラムエール「「（リコが俺の中に入れた力だけでなく、言い出すことが出来なかった彼女の本音と思いが俺の中に…）天ノ神よ、頼みを聞いてくれるか？」」

アルタイル「ん？」

フラムエールは手にした大剣を刃先から鍔にかけてしみじみと視線だけで追うように見た後、一回手の平の中で大剣を回転させ剣先を下に振って背中に携えるように仕舞いこむ。

フラムエール「「この子はもう人間になったんだ。人間に成ったこの子にはもう、戦う力など無に等しい。リコが俺に全てを託したとなると、俺が言うべき願いは一つだ。」」

リコが託した大剣を背後に携えながらすくっと立ち上がったアルタイルを見つつ、一瞬視線を逸らして再びキリッとした視線を出しながらこの世界の王に向けて…

フラムエール「「リコを…この神界に預かってもらえないだろうか

？全てが終えるまでリコを「無論、私も最初からそうするつもりだ。お前に過去という前世紀最後の映像（ログ）が…そこに映っていた映像は、自我がまだ残っていたお前の自身の力の原因で世界を滅ぼしたワケではない。」！」」

最初は反対させられるだろうと思っていたフラムエールだったが、今目の前に居る“神界の王”がすんなりと受け入れてくれて、更にリコが見せたあの映像の裏付けを自身の力のせいではないと言われて、あっと驚くような表情を出す。

アルタイル「自我が残っていたお前が、太陽の力を振るい滅ぼしたのは“研究施設にいた全ての存在のみ”。その後前世紀の全ての人類が滅んだのは…幼き太陽の力を受け継いだ戦士、お前なら知っているだろう？その“存在”を…。」

フラムエール「「あぁ…。あまり口に出したくない“存在”だからな。…今だけ遠慮しておいていいか？？」」

不敵な笑みでフラムエールに言うアルタイルの台詞を聞いたフラムエールは、顔を少し何度も横に振るって困ったような表情を出しつつ言い返した後、「別に構わんよ？今だけ関係ない話だがな。」と舐めたような素振りで両腕を組みつつ炎翼（フラムエール）に向けていた顔を逸らすように横へと向けて、今居る頂上から見える夜空の景色を見ながらそっと溜め息も出しつつ呟いた。

アルタイル「後々…“５歳から８歳までの子供の養い方・ふれあい方１０８マニュアル”を参考にしながら世話していくとするか。」

第二百四十九曲　出オチ口論戦争と、新たなる仲間と別れ

―翌日　神界　マシャフ　アサシン教団砦内部　大導師の間―

シャイナ「えぇぇぇ

の魔力で生成された心地よい感触を膝から受けながら少し息を漏らしていた最中…

マリク「朝から五月蝿いぞ馬鹿魔神に付き添う人間の女。まだこの時間帯は朝5時だ！！！！！この世界に住まう民達一部にとって目覚め時じゃない！全く貴様はとある下界にいた場所で、“騒音引っっっっっっっっっ越ぉぉぉぉぉぉぉぉしい布団リズムババア”みたいなウザい迷惑犯になっているぞ、このクソＫＹ〇●※□※△がっ！！！！！！！！」

アルタイル「マリク…」

とシャイナの出オチ爆音台詞を聞いていた大導師専用スタイリッシュ☆椅子（チュアー）に腰掛けているアルタイルの右側に立っていたマリクが、ピクピクとこめかみと眉を僅かに動かしつつ、ウザったらしい形相を出しながら罵倒に近い放送禁止用語混じりの説教をシャイナに投げ掛ける。が…

シャイナ「何だってぇぇぇ

ッ！ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！！！！！！！！！」

エツィオ「し…シャイナ…（・ω・；）」

マリク「何だとぉおおおおおおおおおおおおおおおお！！！？？！！？！この魔力を持たないクソゴマ★●◆□＊@§∴人間がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！

でも大導師の間自体が“死屍累々な焦土戦場”になってもおかしくない状況になってしまい、最強である魔神と天神でも二人の背中から放つ“殺戮ブリザード結界ＴＨＥ提供マ王”の覇気でヨヨヨと“戦意喪失になってしまい”、とある漫画のようなデフォ体型になりながら覇気丸出しの二人を見つつデフォルト状態になっているアルタイルに抱きつきながらオタオタする仕草を取る。（ディクだけのびのび観戦モードに突入中ｗｗｗ）

エツィオ「うぁぁぁぁぁぁ…（や…ヤベェよアルタイルぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！！！マジ死んじゃうよっ！！！！！！死んじゃうよぉっ！！！！！！！（俺らが）怖いよぉっ！！！！！！！どうしよぉぉぉぉぉぉぉ！？！！？？！！！？？）」

アルタイル「ぬぉ…ぉ…（それはこっちが聞きたい所だエツィオ！！！！私だってあの二人を何とかして止めたいが…止めたいが……ぁぁ…っ！）」

マリク＆シャイナ「魂そのものすら消失させるぞクソ★●◆■△▲▼※〒℃「死なすぞぉっっっっっっっっっ！！！！！！！

アルタイル&エツィオ「「オ…オワタ…（　Д　）…。」」

シャイナの背中から出ている東洋風の赤い凶竜にマリクの背中から出ている黒い大型の猛虎が互いに牙をむき出しにしながら双方を睨み付けて、いつでもいい時に相手を“腸を全てぶち撒けるように”と前に構えた両手を二人はピクリとわななかせるように動かす。

魔神と天神がビクビクと互いの身体を抱き合うように二人の戦闘体勢の覇気で脅えながら見ていて、ディクも二人から放つ魔闘気に心をメッキリと挫かれて引き気味になりながらちょっとずつ二人から離れるように後退していく。（リコは冷静に傍観中）

しかし、そんな雰囲気の状況を破った一人の救世主（第五主人公）で…

フラムエール「「ａｌｒｅａｄｙ　ｓｔｏｐ　ａ　ｔｒｉｖｉａｌ　ｐｌａｙ.　（詰まらん言い合いは止めだ）Ｙｏｕ　ｆｕｃｋ　ｉｄｉｏｔ!!（この阿呆共がっ!!）」」

シャイナ「オブッ!!?!?!?!!?」

マリク「ぶべぇぇぇぇ!!!?!?!?!」

エツィオ&ディク「『ちょ…！！！！！！ｗｗｗｗΣ（´Д`；）』」

バキン★リッ♪

睨み合う二人組みの間から割ってきたフラムエールが突然“デフォ状態のままカメラ前に出オチ出現”として現れた直後、背中から魔力で生成された赤黒い腕二つを二人の頬に向けて思いっきり殴りつける。

不意の一撃で殴られたシャイナとマリクは　。。（ε　）グフッ…と殴りつけられた部分が蜂の大群に集中刺されたように膨れ上がって、先程の臨戦体勢を取っていた血の様に怖い充血眼から眼自体ををグルルン裏返るように白くさせて、鱈子唇になった口内から白い何かが噴水のように吹き出ながら二人同時に床へドサッと叩きつけられていった。

フラムエール「「安心しろ太陽の力を一切入れていない“物理という名の峰打ち”だ。暫くそこで眠っていたほうが話が効率よく進む。」」

背中から出ていた魔力の両腕をフラムエールが右親指と人指し指同士の骨でパチンと軽く鳴らした後、赤黒い腕が砂のようにサラサラ

と細かく宙へと消えて行って、通常の体格になったフラムエールは床に伸びた二人の無様な姿を見下すような視線を出しながら両腕を組んでぐっさりと突き刺す。

エツィオ「おまっｗｗｗ…この小説内のさ…“最強ゲーム・オカルトオタク（シャイナ）”と“神界の最強ママン（ブチギレモード）”が…ｗｗｗ」

ディク『凄ぇ…さすが俺と長年付き合った相棒だぜっ！！！！ＣＯＯＬだ！ＣＯＯＬという名の渋カッコイイＺＯっ☆』

アルタイル「な…何という漢よ…。（こりゃ後に我が友の女にフルボッコされるなｗｗ今の内にこの漢を焼き付けておこう…）」

ディクは二人を一瞬の内にのした相棒（フラムエール）の姿を見てテンション高くガッツポーズを出していた中、エツィオとアルタイルはこの後フラムエール自身に起こる“多大なる報復（リベンジャー）”を脳裏で想像しながらアハハと元気なく声を鳴らしていった。

…

……

……

一色々とあって省略…一

ディク『…そうか。相棒の背に携えているその大剣といい、リコちゃんの力を受け継いだ新たなる業（ちから）とリコちゃん自身の意思も…』

ディクはフラムエールの背に掛けられている赤黒い大剣を白々と見ながら、曲げていた背をゆっくりと上へと伸ばして元の背筋へと戻す。

フラムエール「「まだこの武器の名自体は無い。前世紀の人間達は我々が持つ一人一人の兵器にはほとんど数字盤名（コードネーム）しか付けられていないんだ。まぁ、あの時はもう人類そのものが…」」

エツィオ「うーん、折角良い武器を貰ったのによぉ～…。（´・ω・`）この剣先から両手翼型の鍔までの禍々しさといい、全てを叩き斬ってしまいそうな百熱の…！そだっ！！良い名前を浮かび上がったぞぉっ！！！！」

エツィオもフラムエールの背中に携えている大剣を見ながらうーんと悩むような仕草で呻っていた時、エツィオの脳内で何かがはじけるようにピキーンとなって黒いフードで解らない頭部上部の髪一枚がピン！とアンテナのように上へと立て丸めた右手を左手の平に軽く叩いた後…

エツィオ「継承されし小太陽の大魔炎剣“ヒュペリオン”で良いじゃね？ｗｗｗ」

フラムエール「「大魔炎剣（ヒュペリオン）…ギリシア神話に出てくるティターン神族の一柱からか…。」」

フラムエールはエツィオに付けられた大魔炎剣…ヒュペリオンの柄を右手に取ってゆっくりと引き抜きながら上へと掲げるように持った後、フラムエールは剣先から鍔までかかる赤い亀裂のような光をじっと見ながら静かに顎を下に下ろす。

アルタイル「それで…我が友から付けられた名はどうだ？太陽の戦士よ？？」

フラムエール「「悪くない名だ。その名自体も俺が目指すべき目標の一つとして入っているのだからな。」」

ディク『相棒…。』

フラムエールは一旦掲げた大剣を宙に投げて刀身自体がクルクルと回転しながら再びフラムエールの右手の平の中へ握った後、巨大な刀身を持つ武器を軽々とした動きで元の背中へ収める。

リコ《…その武器、貴方をとても気に入っているわ。前使っていたこの私よりも…》

フラムエール「「ふぅ…どいつもこいつも使い手を選ぶのか。ん？…ディク、お前にもこの武器自体が“配下に付く”と言っているようだが…？」」

ディク『お？マジかよｗｗｗ俺ぁのようなボン★クラーなオッサンにｗｗｗ』

なんとフラムエールが背している大魔炎剣（ヒュペリオン）自体の意思があったらしく、その大魔炎剣（ヒュペリオン）はフラムエール同様に力を貸すという意味で使用の許可が下りたらしい。

エツィオ「まぁ、これで新たな仲間一人“フーちゃん”と“炎属性の大剣”も加わったことだし、なぁアルタイル？」

アルタイル「林檎は相変わらず断頭台内に居る。これは好機（チャンス）だ！もう逃がすワケにはいかん！！先ずはお前達が赴く場所の特異界を浄化し終わった後…」

アルタイルは腰掛けていた椅子から立ち上がって威圧感をむき出しにしながら、中央に居る三人に甲高い激励をマイク音のように言い放った。（※背後には伸びているシャイナとマリクが映っている状態でｗｗｗ）

アルタイル「すぐさま断頭台内へと強行突入し、また再び移動させられる前に林檎を奪取するのだ！！…“どんな手でも使ってもいい”。林檎だけを最優先に回収せよ…！！」

エツィオ「ククク…ラジャー！」

第二百五十曲　チャプター5開始時は…クソ短い戦闘から始まるｗｗｗ

神界でアルタイルの激励を受けたエツィオ達は床に伸びていたシャイナを回復魔力で蘇生させた後、直ぐに神界から発って中央の紋章から放つ光を受けながら一瞬の内に現世へと戻り、夜明けになりつつあるドイツ上空にポツンと現れた彼らは、各背中に出した翼で滑空しながら更に北へと目指す。（一人魔力で浮遊移動）

目的地へと向かっていた途中上空に飛び回っていた下級・中級悪魔共と、現世で指名手配されて追い掛けていた人間達が駈る戦闘機達がタイミング良く悪魔共と混じって立ち塞がり、人間達には見えない下級・中級悪魔共と一緒にエツィオ達に襲い掛かる。が…

ー現世　地球　ドイツ辺り上空　夜明けー

エツィオ「ビバッ★経験値うpポインツ！！！！！」

ディク『死ね死ね死ねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！ヒャッハハハハハハハハハハハハハハハハハハハァ！！！！！！！（。∀。）』

ドドドジドドドドドドドドドドジドドドドドドジ
エツィオ達は倒してきたモノ達と同様に目的地を阻む全てを各手に取った武器で“一分足らずで皆殺し”にし、空中には赤い花火のような光が多く花のように咲き乱れ、パラパラと砕かれた機体の破片と人だった肉片が粉雪のように舞い、彼らの武器で引き裂かれた下級・中級の悪魔達の死骸と共に次々と地上へと堕ちていく。

エツィオ「ヒャッハハハハハハァ！！！！皆殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！（●ユラン的な台詞意味で）」

ディク『粉砕☆玉砕★大喝采！！粉砕☆玉砕っ★大喝采ィィィィィィィィィィィィ！！！！！！！！！』

フラムエール「「全く、魔ノ神もディクも…お前もそうだ。不可解な事が多すぎる…不可…いや人間として言うなら“クソワロタ”だな。」」

シャイナ「いや、マジキチだろｗｗｗフーちゃんｗｗｗ」

エツィオとディクが織り成す圧倒的な変態戦闘で次々と敵という全ての高速疾走する機体（悪魔も混じって）を“一機・一体素手で拘

束”した後“目に見えない高速指弾”で“パイロットごと木っ端微塵”にする。

高速指弾で破壊した機体の破片をナイフ代わりにかき集めて破片自体を“密かに魔改造”した後、飛び回る機体や悪魔に向けてダーツ投擲し、“ＱＡＡＭ以上の性能と化した魔改造破片”は変態軌道で逃げ回る敵（機体も入れて）を嘲笑うかのように追い付いき、直接コックピット（悪魔なら頭部）ごと突いてその数秒後に破片自体がマイン●ローアーの爆弾のように大きく爆発を起こして、上空に様々な位置で多輪の赤い花を咲かせながら完全に殺傷させていった。

フラムエール「ぁ…ハハッ！只か人間・下級中級悪ノ魔相手にそれは無いぞ？もっと手加減したらどう……」

シャイナ「お前も十分酷ぇよｗｗｗ鬼畜フーちゃんめっｗｗｗｗ」

バシュ！バシュバシュバシュバシュバシュバシュバシュバシュバシュバシュ！！！！！

フラムエールはそんなハチャメチャ過ぎる戦いをする二人を見てハハハと苦笑いしつつ背中にはシャイナを背負いながら、左腰から引き抜いた●刀（●ｉｉリモコン）の刀身にまとわりついた太陽の魔力を何度も横に振るうように翳して、刀に振るわれた直後大きな赤い光の三日月型の太刀筋が複数飛んでいき、その斬撃自体も“自動追尾機能”でも入っているかのように敵を追いかけ追い付いた後、

機体（悪魔も含めて）ごと真っ二つにさせて朝日が昇る上空に汚ぇ花火が咲いていく。

フラムエール「「だから“フーちゃん”は止めろと荒れほど言ったの…」」

ディク『別にえぇじゃねぇか相棒ぉ♪俺も相棒のことを“フーちゃん”って言おうかなぁ～!?何か可愛らしいあだ名だし（＾ρ＾）』

フラムエール「「ディク……（；　｜　｜）σ」」

エツィオ「良かったなぁフーちゃん♪お前に新しい名が付けられてよぉｗｗｗ前の名よりかはマシになったもんＤＡ。フーちゃんっ☆」

フラムエール「…。（貴様がいるだけで気色悪くなるわ！このクソ魔神が…！！（一｜一＃））」

ディクが子供のようにはしゃぎながら両腕を大きく斜め上に上げて歓喜の声を上げている最中、ディクの背後からヌゥンとデフォ効果音と共にとある某ゲーの変態★スレ●マニ☆ダンスしながら気色悪くエツィオが登場する。

今いる場所自体が乱気流＆低温圏な遥か上空にいるハズなのに、エ

ツィオの繰り出す両腕両脚を何度も蛇のようにうねり唇を裏返すように前へと突っ張って、星上の重力すら“やる気なくしたように仕事しないまま”イカ人間と化しているエツィオを見たフラムエールは、気を重くするように両肩を落としてげんなりする表情を出す。

エツィオ「まぁ良いじゃないかフーちゃん＾＾どんな名を付けられようが、俺らのような“最強集団が四人（クワテルナ）（チートトライブ）”となったんだしぃ～ｗｗこれから逝く林檎＆特異界での戦力は１００奥倍になったもんだしｗｗｗ」

シャイナ「ちょっとぉぉぉぉぉぉぉ！！こらっ、エツィオ！私も抜けているわよ“　私　も　”！！！Ｌ'ｈａ　ｆｅｒｍａｒｅ　ｕｎ　ｐｅｎｓｉｅｒｏ　ｉｎｄｅｃｅｎｔｅ　ｃｈｅ　ｒｕｂａ　ｆｕｏｒｉ　ｄｉ　ｓｅｎｚａ　ｐｅｒｍｅｓｓｏ！！？！！」

ディク『ちょｗｗｗ俺のようなクソＤＱＮ頭を持つエセ王（笑）が、イタ公限定（言語が解るエツィオだけ）の台詞を吐くんじゃねぇよｗｗｗ』

フラムエール「「お前は“元国王”だろうが…ヽ（ー－　；）」」

ドンドンドン！！！！！

そしてそのまま変なテンションのままに戦い続けたエツィオ達は各

持つ武器で悪魔・戦闘機を斬り捨てて、斬った時に断面部分から黒いオイルが噴出し斬られた悪魔の断面から赤い鮮血のような細いモノがドピッと勢い良く飛び出しながら地上へと舞い落ちる。

やがて“数分後”には東の地平線から昇った太陽の赤い光が大きく広げるように伸ばしていった時、遥か高き上空には蝿一匹さえ残っていない“四人と一人”だけの静寂な世界へとなって、彼等が地に着いている（空中にいる場所）地上には原形を留めていない悪魔・機体の残骸が“市街地問わず全ての敵が落下した箇所”で無残に転がっていた。

第二百五十一曲　Io sono spiacente per tratta

―特異界　上空（イギリス　ロンドン辺り）―

リコ《こんにちは、又はおはよう御座います、もしくはこんばんわ…私は此れから彼らの旅目的・戦闘情報を時間経過（リアルタイム）で神界からサポートする担当になりました、元戦闘用模擬体１７５号リコです。よろしくお願いします。》

エツィオ「ちょっｗｗｗいきなり俺らが入った時点でその台詞かよｗｗもっと感情豊かに言ってくれ！！棒読み人形のようにメチャ怖いわっ！！！！！！ｗｗｗｗ（（（

漸く数週間かけて作り出した震動魔力と共振魔力と地上のガラクタ（いわばカメラ付きトランシーバーのようなモンｗｗｗ）機械で仲間（エツィオ達）のみ聞こえており、彼等のみ聞こえる脳内通信で神界にいるリコと通信しつつ特異界を張っている上級悪魔を探していた。

リコ《ごめんなさい魔ノ神さん…。まだ人間らしい感情表現がまだ一部のみしか整理できてなくて…。それに私の隣にいる天ノ神さんが作った“情報伝達基盤（オペレーションシステム）”を初めて操作するもので…》

エツィオ「まぁ俺のような（アルタイル含めて）“人外”が創った創作魔力は他の創作魔力物と違って扱いがたいもんだけど、まぁそれは次第に慣れていくしかねぇべ？」

シャイナ「解りやすく言えば私が研修中に初めて現場での厨房に入った時のようなモンかな？先ず始めに何をするべきか詳しく教えてもらえなかったし…（それが原因で私の教官だったアイツがゴチャゴチャと言われるハメになったしｗｗｗつーか手順書ぐらいは研修生に渡すでしょうがｗｗｗ）」

地上だけでなく今居る上空にももっこりとした赤い火柱達が不規則な出入りで多く何度も噴出し、途中氷柱のようなドロドロとした水あめ状の物体が飛翔し彼等を横切るように飛び交い、イギリス全土の一面そのものが“スーパーマ●オギャラクシーに出てくるアイスボルケーノギャラクシー”のように特異界自体が火口内・氷河期が混ざった高温&低音地帯になっていた。

ディク『炎だけじゃなくて氷も混ざっていんのか。となると、この特異界を張った輩は火属性と氷属性が混合した上級悪魔（アマルガマ・デモーニオ）か？』

エツィオ「普通はそう考えるのが自然だな。だがその属性は互いに反発し合う相対属性。相対しあう者同士ににゃぁ共存というモノにゃぁ有り得ないハズ…へっ、これは一般的範囲内の話だけどな。」

先頭を切るエツィオがうーんと表面は首を傾げて悩む仕草を取りながも裏面は“別にたいした事ないヘタな奇術（トリック）を外部から借りている”という思考を捉えながら付いてくるディクとシャイナを乗せたフラムエールを引き連れながら空中を疾走する。

フラムエール「「いや大丈夫だリコ。それは徐々に身に付けていくものだから焦らなくてもいい。俺も君と同じなのだからな。」」

リコ《フラムエール…。》

エツィオ&ディク「『ニヤニヤ（・∀・）』」

と…先程の脳内通信を聞いていた仲間の一人であるフラムエールが滑空しつつ顔を上に上げて、遥か遠い地の神界にいるリコに向けて口を開き、その発した言葉を聞いたリコはフラムエールの優しい声

を聞いて少しトキンとするような思いを脳裏に過ぎらせて、地上の特異界の中ではフラムエールとリコの脳内会話を聞いていたエツィオとディクはニタニタと笑う表情を出しつつちょっと可笑しく吹く仕草もする。そんな最中…

シャイナ「「ケッ……ケッ……！！！！！！！テメェのような“女々しい野郎”とゴスロリょぅι゛ょ（二人とも億以上の年齢です。）カプなんて認めねぇっ！！！！！！！！！！オラァッ！！！！！！！ｏ（、皿'）〇」」

フラムエール「「い…！？痛っ！！？？！痛痛痛痛っ！！！！！！！？？？！！し…シャイナ何をす……ぐおっ！！！？？？！！！お…俺は女じゃな…ぐぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？！？！？！」」

フラムエールの背に乗っていたシャイナが脳内にときめく二人の姿に気に食わない思考を覚えたらしく、羨ましい≠厭々しい表情を浮かべながらフラムエールの鳩尾に向けてドスッドスッと何度も蹴りを加える。

フラムエール「「ば…馬鹿者！！！！！ここで暴れたら…痛ぁっ！！？？！シャイ…」」

フラムエールはわけもわからず何度も鳩尾に向けてシャイナの蹴りを受けて、苦痛&戸惑いの表情を浮かべながら背にしているシャイナに向けて顔を後ろに向く。が…

シャイナ「心配無用ですぅ～…私にはぁ…」

エツィオ「俺がいるからＮＡッ★そやろ？シャイナァ？？」

既にフラムエールの背中から飛び降りて頭から堕ちていたシャイナが怪訝な形相を浮かべながら、上空で唖然としている太陽（フラムエール）を鼻高々と鳴らした後、シャイナの落下する位置の横から背中から漆黒の鷹の翼を生やしたエツィオが高速接近し前に伸ばした両腕の手の平へとシャイナの身体ごと抱き止められる。

シャイナを受け止めたエツィオはそのまま優しい手付きでシャイナを背中へと乗せた後、翼の羽毛の一部をシャイナの身体にグッと被って、特異界周囲の自然の炎をエツィオの最強の翼の羽毛で完封する。

シャイナ「うにゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ～♪やっぱエツィオの背中の翼が良いぃ～♪♪フワンフワンでモコモコでプリンプリンしてるもぉぉん☆」

エツィオ「ウヒヒッ♪だろだろぉ？？俺の翼は本当に世界…いや宇宙一だＺＥッ★」

フラムエール「「たくっ…この人間め。（阿呆か…（呆））」」

フラムエールは足下にいる少しの空中場で調子良く両翼をバッサバッサと羽ばたかせているエツィオの姿を見て、フラムエールはハハッ…と苦笑しながらシャイナに何度も蹴られた鳩尾部分に向けて左腕を伸ばし、スッとカメラに映らない背後姿を捉えるよう旨く左手を擦る。

フラムエール「「く……あの人間め…容赦無い事…ぐ…っ。」」

ディク『相棒～…大丈夫かぁ？』

全てを見ていたフラムエールの名付け親＝契約者でもあるディクがそそくさに寄ってきて、ディクの背中から出ていた純白のトキの翼の左翼が一瞬の内に人の腕と化して、前へとよたれているフラムエールの身体を肩を貸すように抱き抱える。

フラムエール「「大丈夫だ、問題無い。いや…しかしアレだな、どうも…。」」

ディク『相棒？』

リコ《フラムエール？》

フラムエールは空中の足下でじゃれている二人組みの一人シャイナをじっと見て、何かを複雑に過らせるような思考を脳裏に思わせつつ顎下に右手を摘まむように乗せて、考える人のような体勢を取る。

フラムエール「「シャイナを見ていると…何か…“前世紀で見覚えがある”ような…無いような…でも“悲しかった記憶”がうっすらと…」」

ディク『“悲しかった記憶”“前世紀にシャイナと似たような奴と出会った”？…またお前の中に残っていた遺言みたいなモンが？？』

フラムエール「「解らない…俺の中に入っていた改変装置基盤（レシピエント）はもう消失してしまっているから…ん…いや、“この言葉を発した俺でも理解できないぐらい困惑している”…。」」

フラムエールは脳裏で僅かに映る“前世紀の映像”なのか？“別の次元が飛んだ別の存在”か“無意識に自己の故創作させた幻の存在”なのか…フラムエールは一瞬の内に映ったその映像のことで深く悩み、顎下に右手を摘むように当てながら俯きつつ深く悩む仕草を取っていたが…

ディク『相棒…“今はこの世界を浄化させる”のが先だ。そんな小難しいことなど後回しにしようぜ？』

フラムエール「「ディク。」」

ディクははっきりと今やるべきことをフラムエールに告げて自身の右胸に向けて軽く丸めた右手を叩く仕草を取り、フラムエールはディクの台詞を聞いてはっとしたような表情へと変わり俯いていた顔を上に上げてディクがいる左方向へ向ける。

ディク『過去は過去だ。失った時間はもう二度と戻ることは出来ない、今までの自分自身が偽りだったって…相棒も言っただろ?それに前世紀の違う相棒でも、お前は俺の相棒だ。少なくとも前世紀よりかはとても良くなっていると思うぜ?だってホラっ!』

フラムエール「「!?」」

ディクは天真爛漫の笑みをキラキラエフェクトでも付けたかのようにフラムエールに向けて微笑み、通り越しながらきょとんとしているフラムエールの左肩に向けて右手を軽く叩きつつ、どんっ♪とディクの額とフラムエールの額が当たる手前まで寄った直後…

ディク『表情そのものが“軟らかくなっている”ぜ?もう少しで俺ぁのような“人間”になれるんじゃないのか?』

フラムエール「「っ…！」」

フラムエール自身には気づいていないが、周囲の仲間達にはフラムエールの表情変化が激しく変わっていることに気づいており、ディクもエツィオの背に乗るシャイナもそのことに気づいていたかのようにしてフフッと口の端を吊り上げて微笑む表情を出しながら…

―表情が彫像のように冷たく硬かった彼の顔が、丸みを帯びた“生そのものが常時溢れる面(かお)”へとなっていて、シャイナ・生前のディクのような人間に近い表情へと変わっていた。―

シャイナ「私がさっきわざと貴方から落ちたのも、“その変化を見たかった”トコなのよ？フーちゃん？あぁ…本当に短時間で変われちゃうもんなのねｗｗｗ私と同じようにｗｗｗ」

フラムエール「「シャイナ…。」」

とフラムエールの側まで寄りながら滑空してきたエツィオの翼に乗るシャイナがそう言い、フラムエールは棒立ちのままやや呆然しつつ甘いような軽い息を漏らしつつ不敵な笑みを出すシャイナを見て、フラムエールは自然に面白可笑しく笑みが浮かび上がる。

ディク『なぁシャイナ…俺ずっと思っていたケド、相棒に対してお前冷たく取っていたし…それに…』

シャイナ「昨日まではね。私だってこんな“出来すぎた人形野郎”なんかに嫌悪して、コイツがどんどん自分らしい人間らしさに気色悪い速さで成長していく姿を見て憎んだ。よりずっと“アノ時”を思い返してずっと貴方を見るたびに憎み、嫉んで、怨んでいたんだけど…」

フラムエール「「アノ時…？」」

エツィオ「…。」

リコ《…。》

シャイナは脳裏に映る過去の自分自身と今の自分と成長するフラムエールの姿を見て矛盾との繰り返しを覚えつつ、一つ一つのフラッシュの光に映るまどろみ世界のなかで生きた過去の“感情の無い泥人形”だった自分に胸に留めるよう両腕同士を組んで仲間達に見守られつつ（一人画面外（神界））胸中心に祈るようなポーズを取りながら次の言葉をフラムエールに言った。

シャイナ「Ｄｉ　Ｌｅｉ　ｓ？　ｄｉｖｅｎｕｔｏ　ｃｏｎｓａｐｅｖｏｌｅ　ｄｉ　ｓ？，　ｅ　ｃｏｎｇｒａｔｕｌａｚｉｏｎｉ．Ｉｏ　Ｌ'ｏｄｉｏ　ｔｕｔｔａ　ｌａ　ｄｕｒａｔａ　ｆｉｎｏａ　ｃｈｅ　ｏｇｇｉ　ｅ　ｓｏｎｏ　ｖｅｒａｍｅｎｔｅ　ｓ

piacente per permetterLe di trattarlo come un eccentrico.」

フラムエール「「…そうか。それはこっちも同じことだ。お互い…すまなかったな、シャイナ。」」

今居る特異界自体にも彼等だけのほんの一握りな笑み溢れる時間となって、仲間達全員が笑いあいながら数分間だけ宙に一時停止（ポーズ）していた。

第二百五十二曲　炎の塔の上の人気ＢＡ●ＡＲＡなアノ人達ぇ…ｗｗｗ

―特異界　（イギリス　ロンドン　元・時計塔（ビッグベン）らしき炎の塔）―

リコ《間もなく特異界を張った強力の個体と接触する範囲内になります。周囲に流れる魔素と結界内の独立した魔力弾に注意しながら各自警戒体勢を取ってください。》

エツィオ「アイルー♪」

シャイナ「おＪＡＬぅ～★」

ディク『ペヤァァァァァングッ（´∀`）ゞ』

フラムエール「「…了……解？」」

フラムエールに対してシャイナは彼に謝罪・和解し仲間同士和やかな空気を感じた後再度飛行移動を再開して、飛び交うマグマのような炎とアメーバ状の氷の弾幕達を避け続けたエツィオ達は、神界からリコの情報を捉えつつ北へと向かっていき、やがて受領らしき者が根城にしている原型時計塔らしき炎の塔へと辿り着く。

そんな最中リコの応答に対して“妙なテンションDEアンサー”するエツィオ達の声を聞いたフラムエールは、（。Д。；）エ？とでも額から見えない汗を流しながら微妙すぎるテンションに呆れつつ先に元ビッグ・ベンの頂上に近い炎の足場へと両足を着ける。

その時…

グォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！

フラムエール「「！」」

リコ《！フラムエールが足場にしていた炎が“呑み込んだ”！？待って！…！！コレはただの魔力で構成された炎というモノの創生物じゃないわ！！始祖…魔ノ神と同じような“始祖”の力が宿った“浄炎”そのもの…フラムエール！！》

エツィオ「！フーちゃん！！」

火属性（太陽そのもの）であるフラムエールが足場に着けた瞬間一瞬の内に炎がフラムエールの全身を包むように閉じ込めて、グププとゲル状の赤い溶岩にった炎に呑み込まれ神界にいるリコの叫び声に近い声を仲間達は脳裏で聞きながら、ゲル状のもっこりとした炎

に包まれているフラムエールをただ呆然に見ていた…だったが。

フラムエール「「魔ノ神、シャイナを中に入れたほうがいい。この炎は“存在を超越した者”以外を焼き尽くす魔ノ焔だ!!」」

ディク『相棒!』

グチャリと何かがつぶれたような音が鳴った部分からフラムエールの両指先が出てきて、突いた部分から横へと割るように両腕を広げつつ“変哲も外傷無し・スルーでおkの余裕丸出しな冷静の表情”を出すフラムエールがゲル状の炎の中から這い出てくる

リコ《大丈夫!?フラムエール!?》

フラムエール「「見た目は酷いが、身体には特に何も外傷は無い。大丈夫だリコ。」」

外見はゲル状の中に取り込まれて付着したドロドロの赤い熔融みたいなモノが付いていたが、フラムエール自身の身体…だけでなく身に纏う赤い西部劇のようなロングコートも“同じ太陽の構成”としているため服自体が焼け燃えることは無かったらしい。

エツィオ「まぁフーちゃんの身体は“太陽”そのものだからなぁ～

ｗｗｗあのアイモンでもこの炎の前じゃぁ…よし。じゃぁ、シャイナぁ俺「了ー解ー（・∀・）ゝんじゃ、さっさと結界を張った“今回の生贄”をぶっ飛ばしたら、久々の大●降ろしを見せてネッ★」ちょｗｗｗまだ全部言い終えてないｗｗｗｗ」

ズブブブ…

エツィオはフラムエールの言葉を聞いてシャイナの身に纏う服（防具）の効力が無いことに少し驚きながらも、背中に乗るシャイナに向けて言葉をかけようとした瞬間に“既にエツィオの左わき腹から頭部侵入している”シャイナの姿を見てブッと口を鳴らす。

シャイナ「スィィィィィィィィィィム♪♪やっぱアンタの身体の中に入っていくこの快☆感がたまらんｗｗｗ（つ∀、＊）ウフフフフフフフーン」

そうしている間にもシャイナはノリノリ風な態度で掻き分けるように入っていき、エツィオは不意な突撃ッ★わき腹潜入で「クヒャヒャぁ～！！くすぐったいぉーｗｗｗイヤンッ★Ｈぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃｗｗｗ」とつぼにはまったかのように笑いながらシャイナは完全にエツィオの中へと入っていった。

リコ《あの二人組みを見ているとなんだか…こ…こっちまで変な気分になるような…（汗）》

フラムエール「「言うなリコ（苦笑）ヤレヤレこの男は…ディクぅー」」

はっちゃけている二人組みを神界から見ていたリコは思わずアハ…ハと枯れた声で口を引き攣るように浮かべつつ、フラムエールはその臨場感という概念が“全然無い様子”で呆れ果てたように一瞬頭部に被る大きな西部劇帽子の端を右手で掴んで同時に顔を伏せた後、再度顔を上げて上空でシャイナを魔神の中に入れたのを確認しつつ隣に飛ぶディクに向けて声を上げようとしたが…

ディク『おうよっ！たとえエツィオに人類最強と言われた俺でも“始祖を越えた超越”ってモンねぇしｗｗｗ後頼んだわぃ。フーちゃん！（´∀`）b』

フラムエール「「おぃ…ディク…（汗）」」

目の前に映っていたのは背中に出ていた翼を仕舞ってサ●ラ風に左手の中指と薬指を曲げてチィィィス♪している顔面どpのディクが居て、キラッ★と効果音でも付けたかのように満点な笑みを出しながらフラムエールの胸部に触れるように右手指先から触れた瞬間、指先から枝分かれした赤い線がディクの全身を巡って二人の間に赤い柱が大きく立ち赤い光柱がキラキラと薄くなるよう消えていった後…

フラムエール【もう…毒っているな…（´Д`　；）…ディク、俺は悲しいぞ…（泣）】

エツィオ「にゃはははははｗｗｗもう最初（ハナ）っから毒ってますＺＥッ★てか、ディクに戦い方と光の魔力を教えたのは俺なんだしぃ～♪」

フラムエール【…。（-　-　；）】

燃え盛る炎にフラムエールとディクが共鳴（リンク）した赤黒い衣装の混合体となっていて、混合体（フラムエール）は【習う相手を間違えたようだな…】と額に右指先を当てながら隣にダブンッ！と＼（＾ｏ＾）／体勢で着地するエツィオを見つつはぁと溜め息を付いていた時…

？『ウハハノハアアアアアアアアアアア！！！！待っていたぞぉ！我々を裏切り、尚且つ俺の憧れ的存在な魔神…エツィオ殿ぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！』

？『♪～Ｗｈｅｒｅ　ｈａｄ　ｙｏｕ　ｇｏｎｅ　ｔｏ　ｃｏｍｅ　ｔｏ　ｔｈｉｓ　ｃｏｎｄｕｃｔ　ｏｎｅｓｅｌｆ…！（やっと来たようだな…！）何時まで経っても来ないから“うっとおしい下級兵と戯れながら”待ちくたびれていたぜぇ～！魔神エツィオ！！』

フラムエール【！】

シャイナ『！？ちょｗｗｗ待て待てｗｗｗこの声は…ｗｗｗｗ』

リコ《！上部に強力な悪ノ魔の反応を捉えました！彼らがこの特異界を張った元凶です！！》

二人の頭部から“クソ熱苦しい何処かの赤い甲冑の武将のような声優声”と“外来語を使いながら盗んだ軍馬でシートベルト走行する何処かの筆頭声優声”が掛けられて、二人は声がかけられたところへと顔を上に上げてその姿を両眼で捉える。

？『ぬぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！我らの魔帝の為にこれ以上浄化させん！！！！！このイグニスが、我が炎で魔神という身体を焼き尽くしてくれようぞぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！』

？『ＯＫ，　Ａｒｅ　ｙｏｕ　Ｒｅａｄｙ？悪いがイグニス！魔神の首を狩り取るのはこの俺！フィンブルの氷の六爪でなぁ！』

第二百五十三曲　戦国ＢＡ●ＡＲＡ風ノリノリ悪魔ェｖｓユービーアイソフト！

―特異界　（イギリス　ロンドン　元・時計塔（ビッグ・ベン）炎の塔頂上）―

？『逝くぞぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！！！！！！！魔神エツィオ殿ぉぉぉぉっ！！！！我が魂（ココロ）熱く燃えゆるっ！！！！！！！』

頂上の尖った部分の炎柱に片足立ちしていた一人の上位悪魔…薄い茶色が掛かった短い髪に、頭部後ろには一つに結んだ途中から炎になっていて、額に赤い鉢巻きを結び全身が戦●無双提供のとある武将の赤い甲冑を着た人型悪魔が、両手に持つＢＡＳ●ＲＡ式二槍・●羅のような武器を突き刺すようにして階下にいる魔神に突撃ぃぃぃぃ！！！！！する。

―上級悪魔　イグニス・エクスハティオ―

シャイナ『ウガッｗｗｗ何という熱苦しい＆クソウザいエセ武将擬きの悪魔っ！！！！！！！奴は戦国バ●ラの真●幸村かァァァァァアアア

エツィオ「へへっ♪威勢の良い坊やなこった。」

バシャシャッ！！！！！

エツィオは頭部に目掛けて一直線に突いてくるイグニスの攻撃を身を後ろへと引くようにして何度も左肩のマントをバササッと翻しながら、軽いステップだけでイグニスの最初の突撃攻撃をフツー通りに避ける。

？『Ｇｏ　ｔｏ　ｈｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｌｌ！！！！！！！！！！！！！！！！』

シャキンッ！！！！！！

同時にイグニスの隣に片足立ちしていた頂上の氷柱の足場にいた上位悪魔…頭部にはイグニスと逆に三日月のようなモノが付いた冑、頭部の隙間から見える黒い髪に左目には黒い眼帯を付け、蒼い羽織袴と黒い甲冑姿包まれた“何処かの暴走族風の極寒の武将悪魔”フィンブルの両指先から出る蒼白い爪が生え出てきて、イグニスの突貫攻撃を抜いつつ後方に避けたエツィオへと一気に氷の爪と化した腕を前へと突き刺す。

―上級悪魔　フィンブル・アバランシュ―

―要するに…二人合わせて炎氷の上級悪魔　イグニス・フィンブル―

シャイナ『ちょっｗｗｗ今度の犠悪魔は戦国Ｂ●ＳＡＲＡ風エセ武将かよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっっっっっっっっっっ！！？？？？！！？！！！てかっ！フィンブルって奴は元ネタ姿だと雷属性のハズずずず…ｗｗそれよりもあの戦国●双とＢＡ●ＡＲＡ衣装をごっちゃ混ぜした熱血漢がいる時点で熱苦しいわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！ヽ（、Д´）ノ』

フラムエール【させるかっ！】

ガシィィィィィィィィィッ！！とフィンブルの突き出した氷の爪をフラムエールは後退したエツィオの前に立って手にする●刀（●ｉｉリモコン）を横に構え、刀身と氷の爪の間に火花を散らしながらフィンブルの突き刺し攻撃をエツィオから守る。

フラムエール【お前が氷属性の悪ノ魔なら好都合。俺の持つ太陽の力で悪ノ魔という貴様を叩き斬り、魂さえ何もかも焼失させてやる！】

刀身に食い込んだフィンブルの氷の爪と自身の腕力を上回るように武器を持つ右腕に力を入れた後、掬い上げるようにしてフィンブル

の身体ごと宙へ弾き飛ばす。

フィンブル『Ｈａッ…殺れるモンなら殺ってみやがれ“魂を取り込んだ人間擬きの怪物”が！テメェが持つその武器（ガラクタ）一本で、皮一つ抉ってみろよぉ？？そうしたらテメェの勝ちにしてやっても良いぜぇ？』

ピシシ…

フラムエールの力で吹き飛ばされたフィンブルは一旦宙で後転返りし、その後着地地点であるドロ状の炎の海に青い両具足に近い氷の足裏が炎へと触れた途端、パキンと六角形の中心に雪印のマークのような痣が刻んだ氷の足場が出来て、超越したモノを拒む炎の効力さえ“無視（スルー）”するかのように平然と着地する。

フラムエール【…短時間でケリを着けてやる。後それと俺は人間だっ！！】

フィンブル『ハハハハハハッ！！！ｓｔｒｕｇｇｌｅ ｕｓｅｌｅｓｓｌｙ ｔｏ ｏｎｅ'ｓ ｈｅａｒｔ'ｓ ｃｏｎｔｅｎｔ…？（せいぜい無駄に足掻けよ…？） 侍小僧。どのみちお前にゃぁ、俺の爪に引き裂かれて無駄に傷つき生という時を稼ぐしかないのだからな？』

ガガガガガガガガガガガガガガガガガガ！！！！！！

ドンッ！とフィンブルが両腕を広げて瀬を少しかがめた後フラムエールに向けて走り出して、フィンブルの足下から氷の足場と化した氷板を残しながら爪を思うがままに振り翳し、フラムエールの持つ●刀（●ｉｉリモコン）の刀身同士が高速にぶつかり合い、二人の翳す赤と蒼の攻撃の軌道の光が綺麗に浮かびながら激しい打ち合いが始まった。

イグニス『うぉおおお

イグニスの持つ二槍・●羅の激しい高速突きがエツィオの全四肢に向けて放たれていて、高速に突いて来る槍先をエツィオは余裕な笑みを出しながら“素手だけ”で槍先の全軌道を“エツィオから逸れていくかのように何処かへと突いて行く”。

イグニス『っく！流石魔神エツィオ殿！！強いっ！！！！我が槍がエツィオ殿から“逃げていく”ように見えて…っ！！！！何の！まだまだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！』

エツィオ「いいぞっ！もっと叫べ！！お前の持つ魂そのものを爆発させろぉ～！そうすりゃスカッとするＺＥ？」

全ての突き攻撃をいなされたイグニスはくっ！と苦渋の表情を一瞬だしたが、次なる攻撃へと変えようと瞬時に思考を切り替え魔神に向けて右足蹴りを放ったが、バサァァァッ！とエツィオの左肩に靡く黒衣のマントが翼を折りたたむように阻まれて、マントを蹴ったイグニスには足先から右腰にかけてジーンと来る痛みと震動を食い縛る様に我慢しながら自身の蹴りの威力で後方へと一旦退避する。

後方に飛んだイグニスはふわっとした空気を後方から受けつつ両足を綺麗に立てて、くの字に曲げた脚の両足先から足首の深さまで炎の海の中へと入れて、ザザッと赤い飛沫を立て滑りながら後退した後爪先に力を入れて後退を食い止める。

イグニス『ならばっ！我が槍を一つにし、業火の世界と同様…一体化した完全なる“鬼の牙の一撃”を与えるまでよっ！！！！！』

エツィオ「ほぉ！Σ（・・）」

バシュルルルルルルルルルルルル！！！！！

イグニスが両手の中に持つ●羅を横一直線に構えてゆっくりと綺麗に二つの槍を回転させ徐々に扇風機のように高速回転させた直後、回転してるニ槍が赤い炎にように燃え上がり渦巻きを描きながらやがて一つの武器…P●Uに出てくるタイラ●トエスパーダを無理矢理繋ぎ合わせた赤い武器へと変化させる。

イグニス『我が真なる魔具“紅鬼ノ浄土ナル牙ノ怒リ（メギドフレイム）”の力で魔神…いやエツィオ殿ぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！貴殿のみしるし！頂戴いたすっ！！！！！！！』

シャイナ『ちょ…ｗｗｗそれタイラ●トエスパーダじゃんｗｗｗつーか両手剣のハズなのになんか“両剣”になっトルｗｗｗ』

エツィオ「おっとぉぉぉぉぉぉぉぉ！俺を首を刎ねたいのか？なら、全力で掛かって来いよ？熱血の坊や？？俺を落胆させるんじゃねぇぞ？？」

身体の中でシャイナはエツィオの視界に映る光景を見てブッと口から白い液体を吐きつつ、エツィオは両剣に持ち替えた先程よりも良い闘気を出すイグニスを見てふっと不敵に笑った後、右手を身体の中に突っ込んで中から前剣先から後剣先まで緑色の風が綺麗に流れる風魔両剣（ヴェルズ）を取り出し、背を少し低くして股を広げながらのっくらと構えた。

第二百五十四曲　罵倒だらけの英文祭り！君は翻訳機を使わず何ていっているか分かるかい？

―特異界（イギリス　ロンドン　元・時計塔（ビッグベン）炎の塔頂上）―

フィンブル『ヒィィィ

フィンブル『少しでも止まってみろよ?侍小僧??一度でも休んだら一瞬の内にお陀仏だぜ?Ｙｏｕ　Ｓｅｅ??』

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!!!!!!

避ければ避ける程フィンブルはフラムエールの動きに合わせて氷の爪を振りかざし、氷の爪先から放たれる青い弾幕はフラムエールの回避を休む隙も与えないまま、容赦なく魔法弾幕をジャンジャン振らせ炎の塔半分を時が止まった氷柱世界へと変えていく。

フィンブルは避け続ける一芝居なフラムエールの姿を見て、嘲笑いするかのように口の端を上げながらニタニタと笑い脳裏に浮かぶフラムエールの未来の姿を一人勝手に想像する。

次第に訪れる肉体の限界が疲弊としてフラムエールの内側から浸食し、そしてフィンブルが望む臨界を突破した時のフラムエールの身体に、自身の爪から放った氷の弾幕で全身貫かれ次々と破る内に破かれた肉片が引き裂かれるように飛び出し、羽織る赤いロングコートも跡形もなく消失する“数分…否数秒先の未来の姿”を胸糞微笑みながらじっと待っていた。

が…

フラムエール【フィンブルとか言ったな悪ノ魔よ？残念だが俺は“疲弊という概念は無い”。俺が戦う意志がある限り、朽ち果てることも尽きることも無いのだ！！】

フィンブル『あぁんっ！？？！！？』

ガシャァァァァァァァァァァァァァ！！！！！！

フィンブルの目の前から放った弾幕を“武器でフツーにカット走りしている”フラムエールの姿が映っていて、汗一つも見当たらないまま自身が放った氷の弾幕がフラムエールの持つ●刀（●ｉｉリモコン）の斬撃で“全て断ち斬られた”。

リコ《敵氷属性悪ノ魔の分析完了しました。氷属性の悪ノ魔“フィンブル”の攻撃パターンを送ります。その中の強力な一点放出攻撃が悪ノ魔の“最大攻撃”です。その前兆らしきモノが見えたら回避行動重視に専念してください。落ち着いて対処すれば問題は特に有りません。》

フラムエール【了解…！リコ、有り難う！！】

フラムエールは氷の弾幕を全て斬りながらフィンブルの元へと走って行く最中、神界にいるリコから今現在の正確な戦闘解析の情報が

フラムエールの脳裏にメールとして受信され、メールの中身を解放し電子で浮かび上がった光文を黙って脳裏内で読み、リコが調べ上げたフィンブルに対するA●E風・敵戦闘能力情報（ボス戦攻略）が“非常に解りやすい内容”でフラムエールは静かに顎を下に下げる。

フィンブル『Ｈａっ…弾幕を全て叩き斬っただけで調子に乗るなよ？侍小僧！俺の持つ“竜の爪”に餌食になれっ！！！！Ｗａｒ　Ｄａｎｃｅ！！！！！！！』

フラムエール【ｆｕｃｋ　ｏｆｆ！（全力で拒否する！）】

ガシィィィィィィィィィィッ！！！！！！！！

フィンブルの振りかざす氷の爪とフラムエールの持つ●刀（●ｉｉリモコン）が二度ぶつかって、二人の真正面同士の攻撃から右肩から左腰に掛けての斜め斬り、身を捻らせながら左肩から右腰に掛けての架沙汰斬り、そして頭部から胯間に掛けての一直線の降り下ろしをして…

フィンブル『テッッッッッッッッッッッッメェェェェェェェェェェェェッッッッッッッッッッッッ！！！！！！！！俺の攻撃を“真似するんじゃネェよッッッッ”！！！！！！！！侍小僧ぉッッ！！！！！！！ｆｕｃｋ　ｙｏｕ　ａｓｓｈｏｌｅ！！！！！』

フラムエール【ｈｕｈ？“偶々”だろう？悪ノ魔よ？？俺はお前の攻撃に合わせて完全に反らせるよう振りかざしているだけ…だぞ？（黒）ｓｔｏｐ　ｔｈｅ　ｂｉｔｃｈｉｎｇ：（笑）】

フィンブル『アァァンッッッ！！？？！俺の攻撃を剃らしながらその“気色悪い顔”は何だ！？？！！テメェ…絶っっっっっっっっっっっっっ対っっっっっっっっっっっっっに真似していやがるなっ！！？？？！！！！Ｙｏｕ’ｒｅ　ｌａｍｅｒ　ｔｈａｎ　ｌａｍｅ！！！！！！！！』

ズガガガ

フィンブル【（コイツ…“魔帝のオッサン”と同じ裏真声（マントラ）が使えるのか！？）いい加減に俺に大人しく斬られろ！！クソ餓鬼侍小僧っ！！！！！ｙｏｕ　ａｒｅ　ｒｕｄｄｄ

ムエールの武器を横に構えた右拳（鉄拳）と左裏拳がめり込まれていて、徐々にめり込まれたフィンブルの腹部に渦のような螺旋がジワッと浮かび内部の血管がズズッと出てきた後…

フラムエール【六式奥義・六王銃（ロクオウガン）！！！！！！！】

フィンブル『！！？？！！？？！Ｎｏｏｏ

る血流を無理矢理止めた後、法則にしたがって後方に吹き飛ばされている身体を全身に力で強張るように大の字になりながら“無理矢理後退を防いだ”。

フィンブル『Fucking mattttttttttttttttttttttttte！ That's a load of bollocks！！！！目障りな怪物が…だったら！！！！』

フラムエール【！】

フィンブルを体術で遥か後方までぶっ飛ばしたフラムエールは右手に持つ●刀（●iiリモコン）を横へ払う斜めに下ろし、顔を徐々に上に上げながらフィンブルを吹き飛ばした方向へと顔を向けると…

フィンブル『反対側にいる魔神もろとも永遠氷河の塊にしてやる！！regret the action of you who bought anger！！！！』

ドドドドドドドドドドドドドドドド！！！

フィンブルの両腕を空高く上に上げるようにして手と手を合わせるように翳した後、上げていた両腕をフラムエールが居る方向に向けて両手同士が“竜の口”に見えながら開いている両手の中から蒼い

冷気がキラキラと発ち込めるようにして零れ落ちる。そして…

フィンブル『Ｈｅｌｌ　Ｄｒａｇｏｎ！！！！！ＵＲＹＷＷＷ

第二百五十五曲　ちょっと？エロキチな表現注意♪&良い子は他者の異臭ぐらい

―特異界（イギリスロンドン元・時計塔炎の塔頂上（ビッグ・ベン））―

リコ《！敵強力な射出攻撃が後１５秒後に来ます！！回避を！！！！》

遥か前方から見える青い光…それが徐々に大きく広がるようにして、規模がデカくなりながらフィンブルが放った最大の攻撃を先程のドS剥き出し面から本来の強面へと代えて、脳裏に響く神界に居るリコの声に向けて震動魔力（テレパシー）を送る。

フラムエール【（！アレが奴の最大の攻撃か！！）解った、エツィオにも同じように伝えてくれ！！】

フラムエールはそう言った後【もう魔ノ神さんには伝えているわ！】と返され、フラムエールは速いな…と心の中で苦笑しながらフィンブルが放った射出攻撃が届かない位置まで“一瞬の内に剃でも使ったかのように遥か上空へと移動”する。その後に…

―特異界　上空―

エツィオ「ウルトラ★ショッキン！！！！ストリートファイター風魔神アッパー拳っっっっっっっっっっっっっっっっ！！！！！！！」

イグニス『ぐあぁぁぁ

エツィオ「おっと！Σ（・・）まだ息があったのか熱血坊やｗｗｗ俺はとっくに息が絶えたかと思ったぞ??」

エツィオは腹部から背中に掛けて突き破ったイグニスがまだ生きていたことに少し驚き、突き破った右腕を自身に寄せてボロボロのイグニスの顔を顎下に右手を添えて持ち上げる。

ヴェルズ【いえ、それ以前に私の風・重力の力を耐えたこの者の精神力も半端無いですね。普通なら立ってもいられないぐらいにのたうち回り、やがては死に至るというのに…。】

フラムエール【…“特級”か。】

フラムエールはエツィオがいる背後へと身を翻しエツィオの右腕の上に垂れる傷だらけのイグニスのボロボロの身体を白々と視点だけで動かして、エツィオの持つ両剣の力を引き出した重力の複数の痣と両剣の端同士に付けられた刃で斬り傷が多い血塗れのイグニスを、顎下に左手を当ててフンフンと何度も頷くようにじっくりと観察した後…

リコ《着弾まであと5…4…3…2…1…着弾っっ今！！！！！！》

バシュルルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！！！

既に退避していたエツィオとフラムエールの階下にあった炎の塔（元・時計塔（ビッグ・ベン））が、遥か前方から放たれたフィンブルの蒼い氷の射出攻撃（ザー）で一瞬の内に凍り付き、ドロ状になっていた百熱の炎（マグマ）さえも“原型と燃え盛る炎のそのままの形がくっきりと残る”ようにして、炎の塔（半分氷の塔）が透き通った完全な氷の塔一本へと変わった。

フラムエール【まるで液体窒素を思いっきりぶっ掛けたみたいな攻撃だな。しかし、放たれた奴の氷は“氷河期と同じ”の冷寒よ。】

エツィオ「アッヒャッヒャッヒャッヒャッヒャッヒャッ！！！！！本っっっっっっっっっっっっっっに“氷河期と同じ”だなぁっっっっっっっ！？ハハハハハハハハハッッ！！！！！！作り方も何もかも似すぎているぜぇぇぇぇぇ！！！！！アハハハハハハハハハッッ！！！！！！」

フラムエールとエツィオの遥か階下で冷気をキラキラと白いモヤが出ながら聳え立つ氷の塔を見て、ヘラヘラしているエツィオと逆にフラムエールは真剣（マジ）に強面を出しながら、再度イグニスを突き刺し腹を折って大きく高笑いしているエツィオへと顔を上げて向き直す。

リコ《第二次放射攻撃、その5秒後に第三次放射攻撃3秒後に放射攻撃（略）…連続の放射攻撃が来ます！敵の魔力が尽きるまで耐えてください！》

ババババババババババババババババババ！！！！！

この合間にも遥か前方からフィンブルが放つ青白い氷のレーザー弾幕が飛んできて、フラムエールとエツィオは“服の繊維一枚すら掠らない”まま軽い横ステップだけで氷弾幕（アイスバー）攻撃を完全回避しいく。

フラムエール【？何をさっきから笑っているんだ？魔ノ神よ？？何か俺が言ったところに可笑しい所があったのか？】

エツィオ「アヒヒッ！！いやー…失敬失敬♪♪あぁ、俺と契約した女帝（アンゲルス）と比べてさぁ…“超格下”なんだが…まだコイツらにゃぁ、…ウフフッ！！隠された“本当の潜在能力を暴くまで”たっぷりと遊がせなくちゃなぁ～♪イヒッ（＊＾ｍ＾＊）」

イグニス『ぐぉ……っ……！！！！！！』

首を少し傾げて怪訝の表情を出すフラムエールの前に、エツィオは今でも吹き出しそうな口をぐっと堪えるようにして左手の平で塞ぎながら、右腕中間まで突き刺した右手を一度イグニスの中引っ込めて、内部に入れた右手を腸の中でグリグリと掻き回す。

イグニス『！！！！ガ……ヒッ…！！？？！！？ヒッ……グゥ……ガガァァァァ…！！！！！！！』

シャイナ『おっとｗｗこりゃいい“Ｒ１８－Ｇ”に近いような“映像不可（Ｚ指定推薦）”なエロキチなショッキンッ！！！！！』

グチャグチャ…ブチッ…ズズズズブチッ…ブチュ…チュ…

イグニスは腹部から突き刺されたエツィオの腹部内弄くりな仕草を受けて喉仏に溜まっていた血の塊をゲポッと吐き出し、イグニスの中で蠢いているエツィオの右手が胃から小腸へ滑るように巡り、途中腸内中盤辺りまで入れていた右手をぶち破って、周囲にある臓器を手探りで掻き分け（一部臓器を摘んで内部で潰し）ながら横隔膜付近へと右手を持っていった後…

エツィオ『似すぎてる！似すぎてるっ！！けど似すぎちゃぁダメダァァァメッ♪餓鬼が何時まで経っても“ママン”の真似しちゃならんぜぇ～♪♪自立しなくちゃっ！そうしないと…おっ！あったあったぁ～♪』

フラムエール【？ママン？？それは…？（汗）】

青白い氷弾幕が飛び続け回避行動している最中にエツィオは横隔膜付近で何かを見つけて、ブチリと内部で何かを引き千切りながら落ちそうになるイグニスの身体を左手で支えるように抱えて、腹部内に入れていた右手（右腕）を突き刺し口である前方面の腸から引き

抜き、内部で掴んだモノをフラムエールに見せる。

エツィオ「これが…“コイツら”という存在を消失させないように、常時反魔力を広げている“魔力で構築された物質ある魔素”が形としてなっている。コレがそうさ。」

フラムエール【ほぉ…しかし“血塗れ（破れた少量の臓器付き）の魔素”じゃ、何がなんだか解らぬぞ？先ずは“閲覧者でも解るぐらいに”綺麗に清潔しろ。…後その“尿や便らが混ざった異臭”をなんとかしてくれ。（苦）クセェよ…。】

エツィオの右手（右腕自体が血塗れｗｗｗ）の中に持つ何かともっことした血の塊が“今居る特異界の秘密・二人の悪魔の隠されたモノ”らしいが、閲覧者カメラからにして“生レバー”しか見えなく途中ツーンと来るような臭いも漂いながらフラムエールは曇らせる表情を出しながら鼻付近に右手を添え被うように庇う。

エツィオ「はいはい、さっさと綺麗にするよ。それにおめぇ俺と同じ男だろぉ？？ちょっとぐれぇの臭いごときでたじろぐなって！！」

フラムエール【その臭いでフツーとしていられるお前にも、正直変なところがあるぞ…（汗）】

クソありえんとフラムエールがさらに付けて言った後、エツィオは

「馬鹿！作者の“仕事先”も同じようなモンだ。いちいち臭ェぐらいでわめくなよぉ！！ヽ（、Д,）ノ」とプンスカと両手両足をばたつかせるように怒る。

今居る上空に“氷弾幕のオンパレード中ＤＥ完全回避動作中”にエツィオの右手の中に持つ“秘密の道具（今現在血の塊）”に向けて浄化の力が入った魔神・天神限定の古魔力を放って、徐々にこびりついていた血が粒子状に上へと上るように消えていきながら右手の中にある物質を持った魔素の正体を明かしていった。

第二百五十六曲　？ il　pi？　pi？　pu？　fare　non　ca

―特異界　上空　フィンブル視点―

ドクンッ！！！！

フィンブル『グォッ！？…な……何だこの痛みは……！！！？？！（！？イグニスの生気が尽き欠けて…俺にｍ…）！！！！！ハァァァァァァァーッ！！！？？？！！！！』

氷の段幕を合わせた両手同士に放っていた最中、突然胸中にある心臓が飛び出すような勢いのように跳ねて、フィンブルは胸中にから来る重度な苦痛を受けながらわなわなと全身を震え質せる。

フィンブル『ぐ…あ…熱……い！！俺の身体（なか）…では…初めてイグニ……スに会う……グァッ！！！！ほ…炎そのも……が！！！！入り込ん……うぐぉぉぉぉっ！！！！！！！』

ドクドクドク

胸中に跳ねる心ノ臓の心拍数が有り得ないぐらいの速さで鼓動が短くなり、次第にフィンブルの内部全体が炎で巡られ焼かれていくような痛みを受けながら身体をくの字に折って、宙で体育座りするように踞る体勢を取る。

遥か前方にいる侵入者二人に向けての弾幕攻撃はもう今の状態からにして無理があり、口から飛び出さんぐらいの高速に打つ心臓が今でも破裂してしまいそうな脳内妄想に過って、フィンブルは両側の頭に両手を当てながら内部から来る痛みを軟らげるよう必死に足掻く仕草を取る。

ガァぁぁぁ！！！！！！！！…痛い…痛イっ痛い痛イ痛イ痛イ

なのかは、実際的に定かでは無くそれを確証する証明など今のフィンブルの思考内には考えることなど出来なかった。

しかし、今の身に受けている内側からの構成そのものの破壊がフィンブルの精神を壊し、段々と意識が薄れ自我というモノも無くなりつつ片言になりながら、フィンブルは壊されていく脳内の無我な世界の映像を見てそっと右腕を前へと伸ばす。

ググ…苦ジィ…！！！！！！…グルジィィいい〝いい〝いいいい……
…グル〝ジィ〝いいヨォォォ

―特異界　上空　チート側視点―

ディク『それがこの世界の異属性同士を共鳴（リンク）させている物質化した半魔力の魔素？』

シャイナ『ふーん…何かドラクエの●イの大冒険に出てくるフレイ●ードの核のようなもんっすか？？』

ブブブ…

エツィオの右手の中に握り締められている半面赤と蒼のオーラで覆われ小さな電子音が静かに鳴る球体状の物体を見て、フラムエールの中にいるディクとエツィオの中にいるシャイナははぁ～と息を洩らしながらじっ…（●A●）と目をまん丸にさせて見詰める。

エツィオ「ザッツ☆ライト♪シャイナ！アンドゥディクゥっ★これが魔力で物質として造られた半魔力の魔素“異逆晶（ティタニズモ）”だ。異属性同士の悪魔が一つ此を持っているだけで、反発し合う属性を通常通りに保てるし、異属性の効力を無効に出来るってワケ！！（＾―＾）b」

フラムエール【フムッ…正確にはその異属性同士の中にある“核（コア）”が異属性同士の干渉を自動制御している事になる。しかし…】

―似すぎてる！似すぎてるっ！！けど似すぎちゃぁダメダァァァメッ♪餓鬼が何時まで経っても“ママン”の真似しちゃならんぜぇ～♪♪自立しなくちゃっ！そうしないと（略）―

フラムエールは顎下に右手を当てながら深く悩む仕草を取って、エツィオの持つ物質化した魔素…否前話でエツィオ自身が言ったあの言葉自体が解らず、脳裏にある前世紀の知識と今の発展し続ける世界の知識を弄くり出すようにして少し顎を何度も俯く。

フラムエール【魔ノ神に問うが、さっきの言葉の意味はお前の持つその異逆晶（ティタニズモ）と、どのような関係になる？まだしっくりとしないんだが…】

エツィオ「あぁ、そのことか。なんならさっさと簡潔にまとめるよう告げるぜ？Ｕｎａ ｃｉｔａｚｉｏｎｅ Ｕｎ ？ｎｇｅｌ！（出て来い、アンゲルス！）」

カッ！！

エツィオは右腕を天に向けて掲げてよう上に伸ばし手の平から氷魔銃が飛び出してきて、氷魔銃が真っ白な光に包まれ天に向けて光柱を伸ばし、キラキラと白雪がエツィオ達周辺のみ深深と降り光が止んだ後本来の巨体でなく“人間サイズ（エツィオ達）に合わせた体格”で白い身体を持ったアンゲルスが召喚される。

アンゲルス【イヤァァァァン♪ずっと貴方の中に居たからようやく外に出れて…待ちに待った貴方との“愛の舞踏（ダンス）”が出来るわぁぁぁぁん♪ウフフフフフフフ…。】

実体化したアンゲルスはエツィオに【もう離さないわ可愛い坊や（ダーリン）っ♪（ハート）】と言って抱きついて、アンゲルスは右手先をエツィオの左首筋から触れて徐々に左頬へとエロい手つきで触れるよう上げながら、エツィオの左頬に触れる手前まで魅惑溢れる唇を持っていく。

エツィオ「HAっ…後で十分すぎるように構ってやるよ（遊んでヤるよ？）アンゲルス。それよりも先に“コイツ”はどうだ？何か変なモノでも付いているかい？？」

アンゲルス【あらっ？これは私が人間界の海を支配するよう魔界から出て行く時に無くした“落し物”じゃないの。それが何故この異属性の子の身体（なか）に入って在ったのかしら？？】

アンゲルスはズイッと唇に触れるぐらいまでに突きつけられたエツィオの右手の中に持つ異逆晶（ティタニズモ）を見た後、アンゲルスの下半身に蠢く白いゲソの触手ニ三本が上へと伸びアンゲルスが持った異逆晶（ティタニズモ）を手の変わりに触手がクルンと異逆晶（ティタニズモ）を丸めるようにして握り絞める。

エツィオ「？知らなかったのか？アンゲルス？この俺のような魔神でも“世界が危機に成らない要因モン（超くだらねぇ）”は全部“無視（スルー）”していたもんで…。」

アンゲルス【おかしいわねぇ～…。私の氷子（フィンブル）でもこの異逆晶（ティタニズモ）…いえ私の身体で構成されている“氷ノ雫”は氷・水属性の特級以外触れる事は敵わないのに。コレ自体が変化している意味が私でも“不理解”なんだけど？】

シャイナ『え！？ちょっｗｗアンタのような美人且つエロす・黒策士・堕落魔女の悪魔が“解らない”！？』

フラムエール【なんと…氷の特級悪魔でも解らぬというのか。じゃぁ…】

ディク『弱ったなぁ～…またふりだしになっちまったぞ？リコちゃんも何か解るところは？？』

リコ《その証拠らしき事例が無いわ。この事を知っている天ノ神さん（アルタイル）はこの時に限って何処かに行ってしまったし、申し訳ないけど答えようが無いわ…。御免なさい…。》

エツィオが契約している女帝（アンゲルス）でさえも何故“氷水（アンゲルス）”のみさえ触れる事が敵わない特級以外の落し物がイグニスの中に入っていたのか、

それと元々氷だけで生成されていた魔素が特級の炎子(イグニス)の力が混合してしまっているのか…不可解過ぎる事に神界にいるリコでも解らないようでエツィオ達は深く悩む体制になる。

エツィオ「…なら、その事を知る“フィンブル”に直接聞いた方がよさそうだ。そらっ、直々と来てくれたようだぞ？？」

フラムエール【！？なっ…】

ズシンと空中に居るのに関わらず空気中の大気が飛び跳ねるように大きく震動して、エツィオ以外のフラムエールは地震波のような震動で少し身をたじろぐ仕草を取る。

ズズズズズズズズズズズズ！！！！！

フラムエールは直ぐに倒れ掛かった身体を前へと屈むように持ち直して、強面の表情を出しながら前方から発する震動と自身の拳で吹き飛ばした豆粒サイズの悪魔が次第に近付くにつれて大きくなってくる。そして…

フィンブル『ガアアア

数秒間原型を保っていたフィンブルが大きく口を開いて口から獣のような醜い咆哮が真上に轟いた直後、フィンブルが纏う蒼い羽織が引き千切る音を立てながら破れていき、破れた箇所から氷の結晶みたいなモノが多く突き出て、身体が変異していくフィンブルの両眼からは赤い眼光と共に複数の血涙を流していた。

第二百五十七曲　Ｔｈｅ☆巨大悪魔と第二回Ｂｏｓｓ戦ですよおめぇらｗｗｗ

―特異界　（イギリス　ロンドン）上空―

フィンブル？『ガアッ！！！！ああああ…アアアア

フィンブルの変異は破けた部分から氷柱が複数出るだけでなく、氷柱の一部が肉体を厚く被うようにしてまとわり付き、まとわり付いた氷柱と重ね掛けする氷柱同士が何度も重複し、細い腕が足が身体が次第に太ましい氷の体格へと成る。

指先が鋭い爪へと変化して両肩辺りから翼状に曲がるプロテクターらしき氷が伸びて、至る処から蒼い光を放つ十字の痣が浮かんで胸部がX字の痣が烙印のように刻まれる。

フラムエール【奴の中にある氷の魔力が暴走した!?】

エツィオ「…何かしら精神障害が起こって、アンゲルスの莫大な氷の魔力と熱血坊やの炎属性の特級悪魔の力に耐えきれず、核の魔力が制御しきれないぐらいまで内側から暴走したか。しかも自我さえ失いつつあるし…クソまんどクセっ（´Д`）」

エツィオは両手で抱き抱えるようにして支えている腹に風穴&血塗れ＝死にかけのイグニスを持ちながら、どんどん変異し巨大化&怪物化していくフィンブルを顔だけ上げるようにして面倒くさい表情を出しながらケッ！と吐き捨てる。

エツィオ「さっさと穏便に聞こうとして、いい加減“イギリス編へ突入したいっ！”と、思っていたのにぃ～（´ε`）」

フラムエール【穏便？魔ノ神の両手に抱くその“血塗れ小僧”＆“腹をぶち抜いて内部の核を弄くり出した”冷徹のお前が何を馬鹿な事を…】

口を八の字にさせながら左腕を頭部後ろに組んでふて腐れているエツィオを余所に、フラムエールは呆れた表情でエツィオの両手持ちから“左片手だけで掴んでいる（摘まんでいる）瀕死状態の猫掴みイグニス”を見ながらわざとらしい表情のエツィオに向けて言い返す。

リコ《目の前に居る敵悪ノ魔の魔力が更に膨張していきます！速い…１０００…２０００……６０００…８０００！！……敵悪ノ魔の最大魔力１５０００！！先程の人型だった時よりも強大な数値です！！》

ゴォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ……

巨大悪魔（フィンブル）の視点からにして豆粒サイズになっているエツィオ達を視線だけ動かし、身体を少しずつ前へ曲げながら逞しくなった両腕を胸に寄せるよう交差させて、全身から漏れ出る氷の魔力を前へ爆発させるように両腕を大きく広げて咆哮を上げていった

―暴走体　上級悪魔　フィンブル　ザ　フェッロネスカメンテ　―

暴走フィンブル『ウォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！』

エツィオ「んあ？俺だけかぁ？？眼帯坊や？？フーちゃんも狙えよ！フーちゃんもっ！！」

フラムエール【勝手に指名するな馬鹿者！それとフーちゃんはいい加減にやめろぉっ！！（恥）】

ゴォッと暴走したフィンブルの巨大な氷の爪（腕ごと）が一直線にふた…否“エツィオだけ”振り下ろしたが、ボケケェとした表情でエツィオは右鼻に右手を突っ込んで鼻糞を穿りながら、軽い動作で横方向に滑る様に完全回避する。

しかし攻撃を避けたエツィオだったがそれを息着く暇も無くフィンブルが一直線に飛び込んで来て両爪を無増無人に振り回し、エツィオは「たまんないねぇ～♪」とのびのびと言いつつフィンブルの爪攻撃を横ッ飛びや後転やら華麗に避け続けて、フィンブルとの距離を開けていても…

暴走フィンブル『グァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！』

バキバキバキバキ！！！！！

赤い眼光を放つフィンブルの足下からは白い靄みたいなガスが噴き出てそのガスが大気中の空気と自身の足を足蹴する時“大気中の空気を魔力で凍らせて一つの六角形の足場を造り”、フィンブルが通り過ぎる度に宙に巨大な氷の足場が残ってそれがエツィオを追いかける巨大な足跡のように刻んでいく。

リコ《！魔ノ神さんが一方的に狙われています！！フラムエール！彼を…エツィオさんを援護してください！！》

フラムエール【（魔ノ神だけが狙われている！これは一体…）了解！援護するぞ！魔ノ神よ！】

暴走フィンブル『ウァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！』

ズバンッ！！！！

一人フィンブルの眼中に入っていなかったフラムエールはふぅと両肩を落して落胆しながらも、一方的に狙われている仲間（エツィオ）とリコの叫びを聞いて本来の真顔へと直ぐに変えて、フラムエールは魔力で翼を使わず高速魔飛行（ブーストダッシュ）し全身から赤黒いオーラの光を後方へと残しながら手にする●刀（●ｉｉリモコン）をフィンブルの上に降り掛か

った左手首に向けて一閃を入れる。

ズルッとフィンブルの左手首に一閃の光がチョイ斜めに走った直後氷の腕が斜めにずれて、徐々に氷の左手首がズレ落ち切断面から透明の液体と小さな赤い液体が零れ落ちながら遥か地上へと落ちていった。

暴走フィンブル『ガッ！！！！！ガガガガガガガガガガガ！！！！！！！アアアア

られたワイヤーに向けてこびりついて、徐々に斬りおとされた手と同じ前構成へと復元されていく。

フラムエール【ならば…！リコ、お前の思いそのものが受け継がれた“この力”を今こそ振るう時だな。】

ディク『おっ！これはこれは♪』

リコ《！》

ジャキンッ！！！！

フラムエールは手にしていた●刀（●ｉｉリモコン）を元の左腰に掛けられている鞘の中へ仕舞って右手を身体の中へ浸透するように入れた後、身体（なか）からリコから受け継がれた“何処かの竜のモチーフにした赤黒い大剣…ヒュペリオン（第二百十四曲～参照）”を取り出して一旦宙で一回転させ両手持ちに持ち構える。

そして再び高速飛行（ブーストダッシュ）を開始してエツィオを必死に爪を振り回しながら追いかけていくフィンブルの背後を瞬時に捉え、フィンブルと同じ“ピッタリ☆ジャスト速度”で頭上真上へと移動しながら両手に持つ大剣（ヒュペリオン）に自身の魔力を注ぎ入れる。

フラムエール【魔ノ神だけ狙うのは少し不快な気分だ。この一撃で“本来狙うべき相手”を見直してもらおう。】

暴走フィンブル『！！！？！？！？？？！？』

ズガァァァアアアアアアアアアアアン！！！！！！

突如フィンブルの身体半分が赤い光が走った後核爆発みたいな汚い茸雲が上空全体を覆い、激しい爆炎が止んだ直後フィンブルの上半身左側面が“跡形も無く焼け溶けていた”。

第二百五十八曲　強い奴ほどよくやられる存在…なのですがこっちは“一切やら

―特異界　（イギリス　ロンドン）上空―

リコ《凄い…私が使っていた大剣には“そのような力が無かった”のに。…フラムエール》

ディク『あっっっっっったっぼぅよぉぉぉぉっ！！長年付き合っている俺の相棒だからな！こんぐらい出来て当然っ！！！！！！！』

暴走フィンブル『ガヒュッ！！ヒュッ…ヒュヒー！！グヒュッ！！！！！！！！！』

ジュゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ…

フラムエールが持ち変えた大剣の炎の力（ヒュペリオンたいよう）で左上半身側面が焼け溶けて、溶かされた部分から蒸気の活火山のような硫黄の臭いを放ち巨大な分厚い氷が完全に斬られ（焼け溶かされた）、神界にいるリコもフラムエールに託した大剣が“自身がかつて使っていたそれ以上の力を出している”ことに驚く声を出す。

暴走フィンブル『ギャッ！！？？！ガッ……ガァァァ

上半身左側面を焼失させたフラムエールの持つヒュペリオンの力を見たエツィオはやる気無し版☆外人四コマガッツポーズを取り背後から出ていた人型サイズの特級氷水悪魔（アンゲルス）も上がる爆炎の熱で顔を背け熱がる仕草を取りながら言っていた時、ゴオッ！と背後から風切り音が鳴ってバササッと何かが靡く音を立てつつエツィオの左側面に高速飛行（ブーストダッシュ）で追い着いたフラムエールが来て、全身から放つ魔力で宙を浮遊しながら空中静止する。

その後アンゲルスは【熱が冷めたらまた出して頂戴、可愛い坊や（ダーリン）（；Ａ；）】と“嘘泣き”する仕草を取りつつ左側にいるフラムエールに一瞬顔を向けて（、Д,）ケッ！と“唾を掛ける様な憤怒の形相”を出して全身に白い光が包まれた後元の氷魔銃に戻り、エツィオの背中に携えるようにちょこんと掛けられていた。

シャイナ『うんっｗｗｗバリ汚ぇ花火が三連続と赤い松茸（ビッグマグナム）を昇らせるしｗｗｗアレ見て○●◇だ！※□※だっ！！二十以降限定特注品（ハタチ）☆＄★予約制セールって…うんｗｗｗぶっちゃけ“思いっきり叫んじゃった”し（爆）』

エツィオ「ぶっｗｗｗｗし…シャイナァ～ｗｗｗなってないｗｗｗ全然伏字になってないなってないＺＯＯＯ

w』

フラムエール【ｙｏｕ　ａｒｅ　ｒｕｄｅ…（このクソ馬鹿が…）全　然　伏　せ　字　に　な　っ　と　ら　ん　ぞ??　馬　鹿女??つーか全年齢対象の小説自体をこれ以上穢れさせるなクソビッチ馬鹿女。】

リコ《?????〇×※?????????コレは…何の……用語??》

身体（なか）にいるシャイナが立ち上った爆炎（赤い松茸）自体を★※★と例えるように言って、台詞自体が“クソ伏字になっていない”事にフラムエールは半ば額の左上に赤いプッチンマークが浮かぶ怒りの表情を出しながら、仲間達は困惑（一人怪訝な様子）エツィオの中にいるシャイナを叱咤する。が…

暴走フィンブル『グガッ!!!!!!ガアアア

突如二人の合間にめがけて残された右腕をチョップするかのように振り下ろされ、二人は不意な攻撃であったのに関わらず“あら？ビックリィ～ッ☆（＊´∀｀＊）ミ”したかのような超のびのびとした表情で、巨大悪魔（フィンブル）の一撃を“ＣＰ●直伝剃移動”でＯＮＥ！グリィィィィズナッシン！！完全回避する。

暴走フィンブル『ガッ…ガガガガガガ……』

エツィオ「おいおい…まだヤル気かよぉ～。まっ、一応戦意を失わないガッツは認めるが…。」

暴走フィンブル『グガアア！！！！！』

ゴォッ！！！！

溶けかけても巨大悪魔は決して戦意を失っていらしく寧ろ溶けかけている残り半分の身体を引き摺りながら、震える氷の片腕を無理矢理上に伸ばしてフィンブルにとって豆粒サイズであるエツィオに目掛けて振り下ろそうとするが…

フラムエール【崩壊（とけて）している身体はもう後数秒先で“本体（オマエ）”ごと死滅するぞ??俺とリコの一つになった新生の炎は伊達ではない!!】

暴走フィンブル『!!!!!!』

バッキャァァアアアアアアアアッッッ!!!!!

上に上げていた右腕に複数の亀裂が走った直後バラバラに氷の腕が複数の氷塊となって崩壊し、更に続けて両足の爪先から頭部にかけて赤い炎のような線（亀裂）が複数昇るように走った後、残っていた半身が浸透したフラムエールの炎で完全に砕かれ白い蒸気を上げながら宙で大きく分解する。

エツィオ「ふー…、何か今回も呆気ないBOSS戦だったぜ。まっ、俺らが最初（ハナ）から強すぎたからかな??」

シャイナ『うーん…何かモノ足りないような…付け足したかったようなぁ～…未消化気味でぇ～wwwあっ、エツィオ!アータが左手に持っているその戦国BAS●RA風な真●幸村悪魔はどうすんの??コイツを殺さねぇと…』

フラムエール【そうだ、魔ノ神よ。前方に浮かんでいたあの暴走悪魔の気はもう感じ取れん。後は虫の息になっている炎の悪ノ魔を駆逐すれば。】

と仲間達がエツィオが左片手に持っていたイグニスを全員指指すように言って、エツィオは「んじゃ、とっと浄化させねぇとなっ☆」と言いつつ右手を真っ直ぐに添えるように指と指の間を閉じて、爪先端をイグニスの頭部に向けて捉えながら頭部から股にかけてブッ指し処刑をしようとした時…

瀕死フィンブル『イ…グニ……スに手を……出すなっ！魔神！！』

エツィオ「！」

エツィオ以外の仲間全員「「！！！！！！」」

ドンッ！！！！

エツィオの背に衝撃が走って生々しい音が鳴り響く。近くにいた仲間（フラムエールとディク）と神界にいるリコがその光景を見て思わず絶句するような表情を出し時が止まった世界のよう身体が硬直してしまう。

仲間達から見たエツィオの姿…その黒い衣の背後には血まみれで既に左腕が無くなっているズタボロ状態のフィンブルが、エツィオの背中に向けて半壊している右腕の氷の爪先五本をより深く突き刺していた。

第二百五十九曲　残念…この小説の主人公側は〝ドSしかおらん〟のだよっ！！

―特異界　（イギリス　ロンドン）上空―

瀕死フィンブル『や……やった…ぜ！！誰もな……成し遂……げ無かった〝魔神の身体〟に……！！！！！』

エツィオの背後を取り貫いた半壊の爪を見た満身創痍のフィンブルは、ボロボロな身体でもニヤリと口の端を吊り上げて不敵に笑いながら無防備のエツィオの背を嘲笑う。

氷の多重層で覆われていたフィンブルは身体が氷の身体が完全に砕かれる前に直ぐに這い出るように脱出し、脱出する合間もフラムエールの炎と崩壊していく氷の破片自体がギロチンのように鋭くなって逃げるフィンブルの身体を雨のように斬り刻み、外へ脱出した瞬間に千切れ掛けていた左腕自体が風圧で切れて何処かへと飛ばされ、全身が血塗れになりながらも死に物狂いでエツィオの身体の何処かへとブチ刺すように決死の特攻をしたらしい。

フラムエール【ま…エツィオ！！！！！！】

ディク『エツィオ！！！！！』

リコ《エツィオさんっ！！！！！！！！！》

仲間達の悲鳴に近い声が上がりながら数秒間硬直していたフラムエールは金縛りが解かれたかのように身体がピクッと動き、両手に持っていたヒュペリオンを構えながらフィンブルに向けて走り出そうとした時…

瀕死フィンブル『クックック……動く…な化け物っ！！魔神がど……うなっ……ても……いいのか！？』

フラムエール【！】

ジャキンとエツィオの背中を突き刺している半壊の右腕のひび割れが多い肘から僅かな魔力で生成されたくの字の折り畳み式ブレードが出てきて、ブレードの先端がエツィオの右首筋に添えるように構え駆け寄ってくるフラムエールを強制停止させる。

瀕死フィンブル『これ……いじ……ょう近ず……くと、ま…魔神の首が……飛ぶぜ！はっ…ハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！…俺の……勝ちだ！！！！！！』

フラムエール【くっ…！】

ディク『クソが…一発殴りたい輩だぜ…！！』

リコ《エツィオっ！！》

エツィオを盾にされ更に人質を取られていることにフラムエール達は苦渋の表情を出しながら、ぐっと歯を噛み締めてエツィオの救出の合間が来るまで必死に飛び出しそうになる身体を堪える。

血塗れながらもフィンブルはもう既に勝ち誇ったかのように背中を突き刺したエツィオの背中を見て興奮しながら、更に深く突き刺すように半壊し…否力を入れる度に氷の皮が剥がれ朽ち果ててブレードの先端を右首筋に添えながら氷の腕ごとエツィオの中へ挿入しようとしたが…

エツィオ「うんっうんっ～♪そうやって君のような若僧に勝利気分を思う存分味あわせてやりたいけどぉ～…」

シャイナ『残念っ！相手は“常時プロリアクション（フリーズナッッッシン！）”＆史上最強のスタイリッシュ☆アサァァァァァァシン又はグ●ール太陽系の英雄…悦男（えつお）・ウェイバーなのＤＥＡＴＨ！！！！』

瀕死フィンブル『！！！？？！！？？！』

バッッッッッッッッキッッッッッッッィィィィイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイッッッッッッ！！！！！

更に突き刺そうとし背中に突き立てていたフィンブルの氷の爪（腕も含めて）が粉々に砕かれ、エツィオと中にいるシャイナが同時に天真爛漫の表情を出しながら背後にいる余裕顔だったフィンブルの表情が一瞬の内に絶望的な状況へと陥られる恐怖の表情へと変わる。
それは…

エツィオ『アンタの不意な一撃は“一切届いていない”ぜよ？？ガッツな隻眼坊やっ☆俺の身体は神々さえ通さない絶対なる壁があるのだよ？（ー＋ー）』

瀕死フィンブル『……なっ……ま……マジか……よ……！！！！！』

フィンブルの視界にはアサシン衣装を纏ったエツィオの姿ではなく、黒衣の甲冑のような鱗に青いラインが入った原型に近い半人半竜の黒い悪魔…本来の姿である“魔神”になったエツィオが絶望するフィンブルの前に穏やかな笑みを出しながらフツーに立っていた。

瀕死フィンブル『Ｆｕｃｋ……ざけ……や……
……がっ……てっっっっっっっっっっっっ！！
！！！！！！』

フィンブルは魔神化し絶望する前に突き刺したエツィオの“突き刺した衣服の繊維が一切破けていない”“突き刺したら直ぐに血が出る筈なのに全然出ない。”綺麗過ぎた背中を見て、ふとおかしな点があった所を思ってフラムエールを足止めしながら疑問を浮かんでいた。が…

エツィオ『言ったろ？お前…いや、魔界にいるヒッキークソ魔帝に聞かれた通り俺と渡り合える天神(アルタイル)以外は拒絶する。例え神様だろうが、俺を完全に殺せれないし、寧ろ神そのものの総てが俺達に平伏(アルタイルとオレ)すんだよ。バーカ！バーカ！！ザマァァァァァァァァ！！！！！（＾Д＾）ｍｇ』

ドカッ！！！！

フィンブルの腹部に何かがめり込む感覚を受けて、フィンブルは腹から喉そして開かれた口から血の塊を滝のように吐き、ボキボキと腹部・胸部の骨が全て筋肉と共にぶち壊されながら血塗れの身体をくの字に折る。

どうやら魔神(エツィオ)がフィンブルの腹に向けて喧嘩☆キックを咬まし、前

蹴り程度で“フィンブルの骨が全てへし折られ”“次いでに内部の筋肉・一部臓器を破裂”させながらふざけた態度でボッコしたらしい。

エツィオ『さてっ…この“自然界を束ねる闇王”に手を出した行為を身体で払って貰わないとなぁ～♪フーちゃん！お前も手伝ってくれっ★ｍ（＿＿）ｍ』

フラムエール【何で俺もだ？クソ魔神（苦情）…良いや、後少しで浄化出来るし。】

宙に浮かせたフィンブルをエツィオはいつの間にか飛ばされたフィンブルと同じ高さに“瞬間移動”していて、バキッと両手をゆっくりと内側に閉じるように動かし骨を鳴らしながら、少し階下にいるフラムエールに向けてカモォォォ

ディク『おっし！俺の連射機は何時でも準備バリバリおｋっ！！ｗｗｗそれか何時でも取り換え出来る第二次第三次の連射機ストックが俺の５３万個あるぞ？』

リコ《れ？連射機？？それって一体どうゆう意味でｒｙ》

ゴォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！！！！

それぞれの身体の中にいる仲間と神界にいるリコが突っ込み＆ノリノリィなテンションが飛び交っている最中、魔神（エッィオ）は腰の裾状の翼を本来の巨大な竜の翼をバサッと展開し、フラムエールと同様拳を前に構えて魔闘気を全身から立ち上らせながら、徐々に右腕を後ろに引いた後…

エッィオ『ＭＡＣＳＰＥＥＥ

ドバギャラ〝ラ〝ララ〝ガギギュゴビュビゲガビャババラ〝アアア〝アアア〝ア〝アア！！！！！！！！！

宙に浮かんだ瀕死フィンブルに向けて二人同時に容赦ない激しいピンポイントパンチラッシュをドバドバと浴びせ、二人の放つ拳自体が“マッハを超えた超時空拳”でフィンブルの身体そのものを拳圧&拳力で悲鳴さえ上げられないまま穴だらけにしていく。

エツィオ『ヒャッハアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ねぇぇぇ

ただ穴になるだけでなく二人の放つ拳を受けてもう耐えきれない穴まみれの身体の一部がボロボロに引き裂かれただの破れた肉片へとなり、欠損した手足・抉られた目玉・破れた腎臓と小腸と大腸等の破裂した臓器が赤い血と共に地上へとボトトと落ちていく。

エツィオ『ヒッハッッッ！！！！！ハハハ

第二百六十曲　チャプター5始まり始ま…毎度ながら急場面でサーセンッｗｗｗ

―イギリス　ロンドン　中心街　とあるカフェ店内―

エツィオ「てなワケでぇ～、イギリス編かつ“チャプター5”はっじっまるよぉ～♪♪」

シャイナ「おまっ！！ｗｗｗ展開早ぇよ糞ったれ！！ｗｗｗ（いつものことだがｗｗｗ）せっかく俺も閲覧者の皆が期待していた浄化のシーンがががががががｗｗｗ」

いつの間にかエツィオ達は“浄化されたイギリス内”に降り立っていて、それにエツィオの衣服は先程のアサシンローブと違う“神界製ダッさいシャツと黒Gパン”を履いて、オレンジ色の光を灯す静な珈琲店内でシャイナと共にリラッ☆クス座りしていた。

なお、イギリス浄化のシーンは前話で書こうとしましたが、小説作業を放っていた（※プ●ポ2に眼中していた）馬鹿作者の都合により、ゲーム終了時間が予定より※○□※□（更新落ちする手前でした（笑））だったのでジャガジャランと“急いでカッ飛ばして無理矢理間に合わせるように省きました”。

―サーセ……反　省　は　一　切　し　て　い　な　い　。　（笑）
―

シャイナ「反　省　し　ろ　よ　ク　ソ　作　者　（怒）てかっ、まだこの小説自体が終わってねぇのに※○□※な時間まで（事実）ゲームなんかするンじゃねぇーよｗｗｗ」

ディク『別に良いじゃねぇかシャイナっ☆時には数時間だけでも作者の息抜きは必要ＳＡッ。誰だって“現実逃避キボンヌ”してぇことを過るだろ??』

と多くの自動車と歩道に沢山の人が通る姿をボーと眺めながら手にする珈琲をズビビと啜るシャイナを他所に、向かい側で座るエツィオは「えーじゃないかっ☆別にえーじゃネェかｗｗｗ」と丸い机の上の粉砂糖が掛けられたシフォンケーキをフォークでぶっ刺して、アーン（ハート）と刺したシフォンケーキを大きく開いた口の中に入れてモゴモゴと美味しく味わうように両頬を膨らませる。

ディク『此が今現代の人間達が発展させた技術かぁ～♪あの高速に走る“馬車”といい、見たことがない“キラキラな建物”がこんなに沢山とぉっ♪♪』

シャイナ「ぶっｗｗｗアータも初回エツィオと同様にソレを例えたのかｗｗｗアレは“車”。それとキラキラした建物は“硝子が付いた高層ビル”だよ。ｗｗｗ」

因みに英霊（ディク）は頭部のフードを取って生前と同様栗色のメンズ髪をした非戦闘状態（オフ）を出しシャイナに突っ込まれながら、シャイナが購入した珈琲入りのマグカップを手にとって窓に映る外の景色を生前の少年時代の無邪気だった自分を思いだしながら、興味津々に今現代の三次元と同じ発展した世界をふつふつと内面から好奇心が産まれてくる。

ディク『触りたいっ～！！触りたいいいいい！！！あのキラキラした光がどうも気になって仕方がないだぁーー！！！！！』

シャイナ「落ち着けよゲシュ●ーアオッサンｗｗｗ大の大人がこんな公共場で騒ぐなやｗｗｗほらっｗｗｗ見てる見てるｗｗｗ」

ディク『フェ？？（・８・）』

窓際で“顔面ごとベッ☆チョリ張り付く”カエル体勢のディクが外に建てられている高層ビル（硝子が）が、太陽の反射で光っている原理を知らないディクにとって興奮気味でありペタペタと一人パントマイムをしている光景を店内だけでなく歩道を歩いていた数人の人間達を止めてしまい、ディクに対して変な視線（変人扱い）をじっと見詰めていた。

ディク『え？これって羞恥心なアクションなの？？はぃ？？はぃ？？』

シャイナ「羞恥心っていうよりアンタに対して“変人”扱いしているよｗｗｗまぁ、その意味は昔を生きたアンタには解らないだろうしｗｗｗ」

ディク『何ぅぉおっ！？俺は元“オルレアンの国王”だぞぉっ！！それに俺は国の危機を救った男の中の男じゃぁっ！！！！！』

中には「何をやっているんだアイツ？」「こんな昼間時から酔っているのかよ…あのオッサン…。」「何？芸の練習？？」と罵声が一部上げられており、シャイナとの会話でディクはムキィィィ！ヽ（、皿´）ノ両手両足じたばたしながら店内で暴れる姿を見て、更にディクに対して彼等は罵りの言葉を次々と静かに吐き漏らす。

シャイナ「ＨＡッ…関係無いねっ！！昔は貴方に対して英雄扱いしたかもしれないけど、今の俺らのような二次元だけの魔法やら二次元生物など存在しない三次元（リアル）と同じ世界なのっ！実技ならではの英雄ならこの世界に居るけどね（五輪選手とか）ｗｗｗ」

ディク『むーっ！！シャイナ達の世界は本当に緩くなりすぎだって！！今でも魔界から出現した悪魔達やリコちゃんの知識を悪用に盗み出した馬鹿共も今でもこの瞬間でも密かに悪影響を及ぼしているかもしれないんだぞぉっ！！』

ディクは両腕を頭部後ろに組んで両頬をプクーと風船みたく膨らませて不貞腐れながら、シャイナとエツィオが寛いでいる机へと歩み、当初店内に入って座っていた窓側の自席へと座り込む。

とディクが自席に戻った姿を見た彼らはそのままそれぞれ向かうべき場所に向けて歩みを再開し、今いる店内も通行人と同様ざわめきが止んでまたそれぞれ世間話や相談事、朝食又はおやつ目的で注文していた食べ物を再び食べ始め、再び活気ある店内へと戻った。そんな最中…

フラムエール「それは一理あるが、今は無理な話だディク。文明はお前より遥か発達したとしても、彼らはシャイナと同じ“魔力を持たない人間”だ。解っていると思うが、お前も魔力を身に付ける際に元はシャイナ達と同じ構成だったのだから。今徘徊する悪ノ魔も、魔力又は生命活動が弱りきれない限り絶対に人間には見えないのだ。」」

ディク『…そうだけどぉ…。』

ディクの身体（なか）から武器状態として入れられていたフラムエールがディクに当たり前のような表情を出しながら語りかけ、ディクはその当たり前のことを不便過ぎる&抜けすぎている今の世界に怪訝な表情を出しながら、両顎下に両手を上乗せに組むようにして手にしていた空のマグカップを机の上にカタンと置く。

エツィオ「まぁ、それは置いといて。ディク、シャイナ。まず俺達が此処にいる時点でも…」

エツィオは生クリームとケーキの粕が多少付いた空の皿を机の中央に置いた後、人前で見せないように両眼を金色の鷹の目へと変えて、黄金の両眼に映る雲のように流れる確実な情報を見ながらそっと彼らに呟く。

エツィオ「今いる店内には敵はいないけど、外は私服を混じりながら潜伏している“教会やら軍も市民に紛れながら俺達を探している”べ。」

シャイナ「お待ちかねっ☆…つー意味か。漸く林檎が潜伏している場所へと辿り着いたと言うのに。」

エツィオの両眼に映る人混みの中には全身真っ赤に覆われた人間が、水色に覆われている市民に紛れて多く徘徊しており、森と化す前のフランスの一部と同様“コロナドアンジェリの関係者達が密かに蜘蛛の巣の如く隅々まで巡らせていた”。

フラムエール「「しかし、奴らが持っているデータは古い。“今現在のシャイナの姿”さえ特定出来ていない程、無駄な労力を使って消費している間抜け共だけだ。このまま林檎が居る場所へと急行するか、又は…」」

エツィオ「準備をするさ。多分準備が終えた後“当分シャイナにとって休めない事があるかもしれない”からな。一度“アルボーレドバンケット”に入って準備万全☆何時でも殺し愛おうＺＥっ♪と言う意味でｗｗｗ」

ディク『あ…あるぼーれど?ば…ばんけ??それは一体…??』

シャイナ「見てみりゃ解るよ。今着ている服もアイモンおじちゃんの御下がりだし、何にせよアイモンおじちゃんが作った料理も最高なんだぁ！！」

フラムエール「「ほぉ…そのアイモンという輩がお前が羽織る最高級の魔鎧を託した者が一体何者なのか…ふっ、楽しみだな。」」

とテケトーな時間の中で寛いでいた彼らは席を立ってシャイナが先にカウンターへと歩んで勘定を済ませた後、三人（一人はディクの中）は店から出てエツィオの両眼に映る敵と接触しないよう注意して歩みながら人目に付かない場所へと移動して…

エツィオ「いらっさぃませっ！提供Ａｍ●ｚｏｎによる特注キーでございますっ☆」

シャイナ「おまっｗｗｗＡｍ●ｚｏｎっｗｗｗＡｍ●ｚｏｎって…

ｗｗｗ」

プィーンとエツィオが右手に持った小さな四角い黒色魔札を壁に翳した直後、壁に長方形が浮き出るように光が走ってちょーんとノブが付いた一つのドアーが壁に設置される。

そしてエツィオはノブに手をかけてゆっくりと捻りながら扉を前へ開けた後、後ろに続いていたシャイナとディクはエツィオの後に着いていって最後尾のディクがパタンとドアーを閉めた後、壁に現れていた扉は瞬時に消えてシャイナ達は現世から消えていった。

第二百六十一曲　隠し居酒屋でのサプライズ☆劇場！！

―創魔結界　アルボーレ　ド　バンケット―

エツィオ達がイギリスの特異界を浄化して寛いでいた最中、スペインバルセロナに住まうアイモンは表（地上）の店を何時もどおりの時間帯で閉めて、夕闇に満ちた薄暗い店内を一人パチンッと右親指と人指し指の骨同士で軽く弾いた後、“本来の店（シャイナ曰く居酒屋）”の結界の中へ入る。

直ぐに表業務で煤が付いたオーバーオールを脱ぎハンガーに掛けて上部に付いたフックに掛け、直ぐ側に置いてある綺麗（ピッカピッカのッ☆）な黒いスーツを手に取り本来の仕事着へと変身して、調理場＆カウンター席へと出た後…

？「よぉ、アイモン。此処に来れば“俺よりも地上最強の悪魔”が来ると聞いて、待っていたんだ。俺が此処に入ったら誰もいなくて…」

アイモン「おやおや、まさかこんな小汚い店に“ＶＩＰ”が来店されるとはなぁ？？」

カウンター内に入るなりいきなりアイモンの視界には台詞通り“最高客”が既に両手を組み両肘を机の上に乗せながら綺麗に座っていて、アイモンは最初から待っていたその客の姿を見て思わず口の端を吊り上げてニヤケる表情を出す。

その姿は上半身は白いパーカーが付いたスウェットシャツに下半身は紺のGジャンを着て、左腕には黒い刺青が刻んだ“今時の現代人と同じ”フラ●シスコ・ラミレス容と似た若き青年の姿…

アイモン「魔界の中で三強…その中の一柱の「あざーすっ！！またまた世話になっていいかぁ～？アイモ…アッー！！！！？？？？！！？」クックッ…丁度いいタイミングで来やがって！！」

ガチャッ☆と入り口に付けられていたドアのノブが下がって鈴の音を鳴らしながら扉が開きエツィオ達が入ってきた直後、先導していたエツィオがカウンター席に座る青年の姿を見て思わず素っ頓狂な声を出しながら右人差し指をビシッと指す。

？「よっ！久しぶりだな、エツィオ！」

エツィオ「で…デズモンド！？お前っ…デズモンドかぁぁぁぁぁぁぁぁあああああああ！！？！？！？！？」

シャイナ「ちょっｗｗｗｗ声デカッ！！！！もっと音量下げて叫んでくれｎ…ｗｗｗ」

ディク『！？じょ…上級悪魔が二…いや一人だけ“エツィオと同じ格別な悪魔”の気配が“アイツ”から！！』

カウンター席に座っている青年が華やかな笑みで右腕を上げて軽い挨拶をしながら言い、引き続き仰天の形相を出しっぱなしをしているエツィオの背後では、うるせぇぇぇｗｗと両耳を必死に塞ぐシャイナと今いる店内でエツィオと同じ異常な力を感じたディクは思わず険しい表情を出して身構える仕草を取る。

だがカウンター席に座る青年…否格別な悪魔は身構えているディクの姿を見て「待て待てっ、俺はこんな所で戦う気はないし、寧ろそんな気なんてないさ。」と軽い口調で言った後、スッと座っていた席から立ってシャイナ達を逆に出迎えるような仕草を出していた。

―元魔界三強一柱　鬼神　デズモンド・マイルズ―

デズモンド「元は“魔界三強一柱”と言う魔族の力をかけ離れた名称。魔帝を始めとして魔神エツィオと“鬼神”と呼ばれた俺は奴の片腕として“力”で縛り、奴の意思のままに裏の任務を遂行する特殊な役割をやっていたんだが…どうも、奴に対して反感が過ってね。期を見計らってエツィオと同様逃げたしたんだよ。もう俺はカタギとして成り下がった“ただの悪魔”さ。」

シャイナ「オィオィwwwただの悪魔ってwwwじゃあ今現在アンタは“ニート生活”しているのかよwww」

とシャイナがエ～（´。д。、；）と残念&呆れた感情がごちゃ混ぜになった表情を出しながら言った後、「失礼なっ！俺は魔界から逃げ出して人間界に潜伏して早々様々な仕事に就いて、その時とその時の時代に合わせながら此処まで来れたんだよっ！！」とデズモンドは顰めっ面を出しながら両手を両腰に当ててはっきりと言い返す。

デズモンド「昨日までアメリカのラスベガス内に有った人間で言うＶＩＰ専門店のバーで働いていたけど、エツィオと同様魔帝を裏切った俺を処刑するべく追い掛けてきた悪魔共（ザコ）が、勤務中に襲撃してきてねぇ～。それで…」

シャイナ「何か…色々とあって“首切られた”…んだね。wwwうわっ、ちょっwww今俺の中に変な妄想映像がwww」

とシャイナが脳内で浮かんだ予想図をモウモウと上げながら言った直後、「流石だなぁ～。感鋭いねぇ君っ！」と両手人差し指をシャイナに向けて交互に指し、両脚をくの字に追って歯を店ながらゲッ☆ツ仕草を取る。そんな最中…

ディク「あ…有り得ない事が目の前に起こって……いるよ?なぁ、フラムエール…この場合どうすれば…ｗｗｗ」

フラムエール「「俺に聞くなディク。それよりも俺もこんな事例の無い光景を見て、不理解な要素が俺のセンチメンタルサーキットに……解ら……ない。。。（；￣Д￣）σ＝」」

リコ《…私も…よ。》

そんな軽い会話を聞いていたディクと中にいるフラムエールと神界にいるリコは、えっ?えっ??と整理されていない事に対して怪訝な思いを過らせながらも、身構えていた身体が段々と通常体勢へと解かれ強面だった表情が次第に呆れ果てた面へとなってしまった。

デズモンド「本っっっっっっ当っっっっっっに大変だったなぁ～。ただの雑魚が来たと思ったら“上級・中級”の悪魔まで処刑しに来るし、てか戦闘が次第に広くなってラスベガスを8割程度ぐらいに人間達を死傷させ建物を内部ごと損失させちまったからなぁ～。アハハッ!!」

エツィオ「ハハッ!しっかし、生まれた時からずっと変わらねぇなぁ～デズｗｗｗ後ご苦労っｗｗｗ」

アイモン「ほれぇ～、出来上がった☆出来上がった☆今日は鬼神も

来ているから、豪勢なセットメニューを作ってみたぞ。お前ら座れ！」

と楽しい（三人だけ硬直）会話をしたシャイナ達はデズモンドが座っていたカウンター席へと歩みだし、アイモンが作った丸く切ったイカとスライスした玉葱と赤いパプリカを餡だマリネを、彼らが座る席の一つ一つに丁寧に置いて、次なる調理製作をしようとした時…

アイモン「それじゃぁ、後は若い者同士でゆっくりしなよぉ～♪」

とエツィオの耳に向けてアイモンが伝え、「此処には“ジジイ”しか居らんよ。」とエツィオ自身が言った後一人先に前菜を食べ始めた。

第二百六十二曲　約万以上と約億以上前から愛してるぅ～♪（※決して♂×♂の方ではない）

―創魔結界　アルボーレ　ド　バンケット―

ディク『き…鬼神！魔神（エツィオ）と肩を並べる“最強（エツィオ）にもっとも近い格別悪魔”。またの名は“ＥＸ悪魔（エクストゥラデモーネ）”！！その存在が今此処に…！』

デズモンド「Ｉｔ　ｉｓ　ａｌｒｅａｄｙ　ａｎ　ｏｌｄ　ｆａｒ　ｓｔｏｒｙ（よせよっ、英霊君）ｗｗｗ．俺はもう悪魔業界から引退した身なんだ。今更俺も鬼神という名すらあの時以降捨て去ったからなぁ～。」

両眼を大きく飛び出さんぐらいに大きく広げながら驚く表情を止まないディクを見たデズモンドは、その表情自体がおもしろ可笑しく見えて腹をくの字に曲げて両手で押さえながら、ヒャッヒャッヒャッ！！とド派手に大笑いする仕草を取る。

オレンジ色に染まる店内の中は四人（一人は体内の中）だけでも活気ＤＥ☆ワイワイなテンションになっており、次次と目の前にある調理場でアイモンが作るトリュフ入りカボチャ風味パエリアや松茸入りバジル風マルゲリータ等“硬球素材を無駄に使用した贅沢料理”がジャンジャンと彼等が座るテーブルの上に置かれていく。

ディク『で…でも本当にアンタの身体（なか）にある“冗談じゃねぇレベルの魔力はが全く衰えていない”気配があるし。それに…』

デズモンド「オイオイっｗｗｗお前も魔力が使える元人間なら解るだろうがｗｗｗ誰がお前に魔力を教えたのか知らんが、エツィオ含めて俺達悪魔は“他人に殺される”以外は一切魔力は衰えなどしないのさ。だが身に覆われる魔気だけは隠すことは出来ない。魔気を完全に消したいとなれば人間界又は現世と呼ばれる魔力を持たない種族の中で臭いを数百年…いや魔気そのものが消えるまで付けなくちゃいけねぇんだ。」

ディク『マジかよｗｗｗ』

エツィオに教えられたディクでもその知識に無い事がデズモンドの言う言葉を聞いて、少し身を引くような仕草を取りつつテーブルの上に置かれた薄緑色の冷茶をグイッと一口含めて咽へと流し込む。

デズモンド「８００年経った今でもまだ俺の魔気は完全に消えちゃいねぇんだ。つーか“魔気を一瞬の内に掻き消す業”を持っている全悪…いや悪魔だけでなく神界・人間界・魔界・深蒼界の全世界に生きる全ての存在の中の二人“友人（エツィオ）と天神（アルタイル）以外”は無ぇんだ。解るか？俺がこうして８００…そうじゃないな“正確に言うと万以上ぐらいだっけ？”の長い時を生きていていようが、魔気など完全に消す事自体が一苦労＆クソむずいんだよ。」

フラムエール「「（確かに、常時の身を被う魔気は外圧を多少抑える為の鎧のようなモノ。そんな一番大事な鎧を無くす（消す）となるともしもの悪魔以外の状況次第で多大な外圧を受けてしまったら相当な痛手を負おう事になってしまう諸刃の剣のようなモノだ。しかし、魔ノ神だけは…）」」

シャイナ「あの時？あの時って…」

ディクの体内（なか）にいたフラムエールが顎下に右手を当てて深く悩む仕草を取っていた中、アイモンが創ったオリジナル酒を飲んでいたシャイナはデズモンドの台詞を聞いてふと“あの事を思い当たるような出来事”を言おうとしたが…

デズモンド「おっと！それはノーコメントだお嬢さん！俺は今“友人（エッイオ）”と出会えてすっゴイ良い気分なんだよっ！！」

シャイナ「うほっｗｗｗ！？」

デズモンドの右手の平がシャイナの顔面に触れる手前まで迫っていて、伸ばされた手が何度もべべべべべべべっと“残像が残るぐらい”高速に右往左往に振られながらシャイナの言葉の続きを遮られた。

エツィオ「そうだぞぉ、シャイナぁぁぁぁっ！！８００年ぶりに“友人（デズ）”と再会したんだ！！個人のプライバシーを尊重しつつ決して“公共の場”で口を出しちゃいけないんだＺＯッ！！おっし！アイモーン！！」

シャイナ「ちょっｗｗｗこんな結界の中でも“公共の場”なんすかｗｗｗてっ、エツィオ…アンタはｗｗｗ」

アイモン「ＨＡ☆ＨＡ☆ＨＡッ！！！！！！乗って来ているネェ！！！！！黒い兄チャンッ！！！！おっし、ならばお前らが来る前に仕入れてきたブツを早速出すとしようっ！！！！！ヒィィィィィィィィィハァァァァァァァァ！！！！！！」

ディク『ちょっｗｗｗおまっｗｗｗノリノリすぎるよ！！アンタらっ！！ｗｗｗ』

と右手の中に酒を持ったエツィオがシャイナが座るテーブルの上にバシンッ！と強く叩いた後、調理場にいるアイモンに向けて左腕を上げて何度も右往左往に振りながら超ッ元気イッパイに声を掛ける。

とエツィオの声を聞いたアイモンは超ハイテンションな表情を出しながら、一時“閲覧者用カメラ目線”に向けて“背後はウザッ☆キラキラ入り荒らぶる鷹のポーズ”をビシッと決めた後、作っていた料理の火を止めて店の奥へと入っていった。

デズモンド「仕入れてきたブツねぇ～。俺はこの店に来る前に現世で知り合った“この店の常連客”と出会って、色々と事情とかそのものを互いに分かち合いながら漸く親しくなった後、お前がこの店に認められたと聞いて、今でも逃亡中さえクソッタレェッて風にウズウズしていられなかったんだ。それがやっと…」

エツィオ「フヘヘｗｗｗなるるるへそぉぉぉぉっ☆んでで？そのオメェーをコノ店を紹介ジダじょウれん客とは一体誰なんだだだだだだ？？ウヒッ♪ベリィーに簡潔にアンサーしてくだされでおＪＡＬ？？」

シャイナ「酔ってるｗｗｗ酔ってるｗｗｗまだこの居酒屋に来て数分しか経っていないのにｗｗｗ」

シャイナはエツィオの顔全体が猿のように赤くなって、台詞自体が間違いだらけの日本語になっているのを見て、喋る度にエツィオの口内から“ツーンと来る強い酒の臭い”を嗅いでしまい、もうエツィオ自体がいつの間にか“泥酔い＝ラ？状態”になっていたｗｗｗ。

ディク『な…何か……この二人を見ても……』

フラムエール「「そうだな、あれが俺が目指すべき本来の“人間”なんだろうな。あんなに笑って愉しそうに振る舞っていることで、

もはや悪魔という素性すら無視したお互いを分かち合える友同士の“絆”なのだろう。」」

ディク『絆…かぁ……。』

ディクは席から立ち少し離れた位置へ移動した二人を視線だけで追う様に動かし、エツィオの持つ酒を隣にいるデズモンドに投げ渡し一口飲んだ酒をエツィオに投げ返し、投げ返されたエツィオは再び酒をＮｉｃｅ☆キャッチして一口入れた後デズモンドに投げ渡し、それを繰り返しながら二人は肩を組んで“コックサックダンスをするホロ酔い限定の二人の姿”を見る。

ディクはノリノリではしゃぐエツィオとデズモンドの姿を見て少し口の端を上に上げながら、かつて生前時に共に戦い祝福してくれた戦友…否ディクにとって家族の存在だったジャズム達との日々を脳裏で思い出し、ディク自身も今居る悪魔自体が人間と同様だという事に少し苦笑しながらも表情は笑みに満ちていた。

デズモンド「あぁ、そいつは負傷した俺を匿い仕事を与えてくれたし…」

アイモン「Ｙａｈｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏ！！お・待・た・せ・っ★深蒼界だけしかない特注の特注の一品“ヌーボラァマントリー”の尾が入った海魔酒ＤＡっ！コイツを飲めば“魔力が更に向上”すると云われているぜぇ？」

デズモンド「アチャー（ノ∀､）」

エツィオ「あばぶ?? アーンッ（ＴｏＴ）アイモぉぉぉぉぉン、出てくくるタイミー悪スベルぅ～ッ（＞＜。）。。」

とドロ酔いしている酒臭いエツィオでもデズモンドは笑みを絶やさず顔自体をひきつったりしないで店を紹介した人物を言おうとした時、タイミング悪く店奥にいたアイモンが例のブツを持って片足立ちで回転移動しながら出てきてしまい言葉を遮られてしまった。

アイモン自身もいつの間にか酒を飲んでいたらしく顔全体が赤くなりながら、持ってきた例のブツ“蜥蜴の尻尾のようなバカ太い物体が入った濃い藍色の酒”を、空になっていた二人のテーブルに置いていた二つのグラスの中に注ぎ入れる。

デズモンド「ありゃりゃっ、タイミング悪く出ちまったなぁ～。良いや…エツィオ～。」

エツィオ「ンァ?? 何デズッち??」

デズモンドはドロ酔いになっているエツィオの肩を貸すように左腕をエツィオの左肩に掛けて元の席に戻るよう共に歩みながら、静か

にシャイナ達に聞こえないようエツィオの右耳の穴に向けてそっと言った。

デズモンド「酔いが醒めたら、一旦お前だけ現世に来てくれ。大事な…とても大切な話があるんだ。」

第二百六十三曲　元破戒の王と英霊の器を借りた炎翼の貴重な会話

―創魔結界　アルボーレ　ド　バンケット　事後―

シャイナ「ズビー…ビビビビｗｗｗｗ…」

ディク『スー…スピピー……』

アイモン「かぁーｗｗｗあの二人組みに強制付き添われたお前らにゃぁ、とんだ被害者だよクハハハ！！」

彼らに取って長かった隠し居酒屋内のノマノマＷａｙ、（　゜∀゜）ノでレッツ★パリィ～が終えた時、せっせと後片付けをし粕が付着した皿を洗っていながら笑っているアイモンの背後には、彼等のノリで巻き込まれた“二人の犠牲者”が机の上にのたれかかるようにして酔い潰れていた。

アイモンは一旦皿を洗う手を止めて泡が付いた手を水で洗い流しタオルで拭いた後、コンロの側に置いてあった例のブツ…ヌーボラァマントリーの尾が入っていた海魔酒の空の酒ビンを手に取って、ビンの裏にはっ付いてあったラベルを視点に映る位置へくるっと回し、内容をちょびっと見てクックッと苦笑する。

―アルコール度数　８０％強―

アイモン「ぶっｗｗｗコレを飲んだ時点で“アーな身体になる”ぞコリャｗｗｗしかし…この二人は「「くっ…何だ？この胸が焼きつくような感覚は…」」おぅ？」

アイモンが手にした空の酒ビンのラベルを見てプップ（＾Ｈ＾）と頬を膨らませて面白可笑しく吹いていた時、酔いつぶれていたディクの上半身が突然上がってディク本人でない別の若き男性の声がアイモンに響き渡る。

どうやらディクが意識を手放した事で身体（なか）にいたフラムエールが武器状態（仮死状態）から眼を醒まし、ディクの中に入った強い胸焼け（アルコール）を同時に覚えながらもやつれた表情で心臓に近い胸部に右手の平を当てる。

アイモン「おやおや、もう一人いたんだな。…てか、此処に居る酔い潰れたお前ら二人が俺の結界内に入ってきた時点で“気づいていた”けどなっ♪」

フラムエール「「やはりな…ならあえて何故俺という存在を気づいてい居ることを、あの時お前は彼らに言わなかった？」」

アイモン「お前さんにどうしても聞きたい事があってなぁ～っ♪ぶっちゃけお前と聞きやすいように此処で酔いつぶれている二人をどうしても“ＧＯＯＤ★ＤＲＥＡＭ”させる必要があったからさ。」

フラムエール「「上位の悪ノ魔であるお前と一対一で会話か…。前世紀に一切無かった事例だな。」」

ディクの身体を借りているフラムエールが再び皿を洗い始めているアイモンに向けてそう言い、最後の一枚の皿を洗い終わったアイモンがカチャンと水破棄棚へ掛け濡れた手をタオルで拭い取った後、起き上がっているディク（フラムエール）の席へと歩み寄る。

フラムエール「「それで何を問うつもりだ上位の悪ノ魔よ？妖精界の時の様にまた俺のような“人型兵器”に対しての罵りか何かか？」」

ディク…否ディクの容をした二次元兵器（オリジナルレプリカント）は両眉を上に上げて、ニヤニヤしているアイモンを厭に思い敵意の視点として見定めながら、座っていた席から立ち上がって少し右腕を後ろへと持ち、左腕を前に構えて静かに臨勢体勢を取る。が…

アイモン「違ぇぇぇよ、馬ー鹿ｗｗｗ俺のような感情の無かった悪魔がエツィオと出会った時点で人間の情に目覚めちまった人の血肉を喰らえない“出来損ないの悪魔”だ。俺はお前に対しての感情に

目覚めた兵器に対してのグチなんざ言うつもりは一切し無ぇよｗｗｗ」

フラムエール「「何!?魔…いや出来損ないとは…一体……。」」

意外な回答にフラムエールは思わず敵意を剥き出しにしていた細い瞳孔を大きく開いて、あっとなるような表情を出しながら思わず構えていた身体を解いてしまう。

アイモンはフラムエールの仕草と顔付きの変化を見て一瞬口の端を上げた後、立ち尽くしているディク（フラムエール）を追い越すように歩んで、店内の隅に置いてある木の額縁で被われた一枚写真を右手に取る。

アイモン「昔の事だよ、随分とっ☆でも俺は後悔などしてねぇさ…。感情に目覚めちまった罪悪感や死する時が来るまで俺を狩り殺す奴らの存在の絶望。何何っ、こんなしめっポイことなんぞクソ喰らえだし、ぶっちゃけ“どーでもいい”んだよっ!そんな状況でも俺は楽しく生きてられているんだ。」

薄いガラスの中に少女期の笑みがいっぱいのシャイナ（シャイナ）と故郷（イタリア）にいるやや若い頃の叔父（リオール）とやや若い頃の叔母（エルシア）の三人が、一緒に手を繋ぎながら中央の少女が万歳とする楽しそうな姿が見られる写真が綺麗に映っていた。

ディク（フラムエール）はじっと写真を見ているアイモンの下へと歩んで、アイモンが隣にディク（フラムエール）が来たのを感じた後、顔を自然にディク（フラムエール）へと向けつつ手にする写真入り木の額縁をフラムエールに渡す。

フラムエール「「上位あ…アイモンと言ったな。この写真は…」」

アイモン「あぁ、１２歳になったシャイナちゃん&ぴあのという演奏を学べる専門校に一発合格したその祝いだよ。この頃はシャイナちゃん、弾くピアノの音を他の皆に聞かせたいと思って、帰って来るは帰って来るは自宅の奥でパンパンと購入したピアノで毎日演奏していたんだＺＥっ★」

フラムエール「「何と…この女は元前世紀で言うピアニストに目指そうとしていたのか！？」」

フラムエールは一時隠し居酒屋へと向かう数時間前に現世で今現在“見習い栄養士”として学んでいる事を本人から聞いて、妖精界で一時妖精王に美味しそうな食事を提供したのを見て青年期まで調理学校に習ってきていると思い込んでいたが、過去のシャイナは以外にピアニストとして目指していた事にフラムエールはあっと驚く表情を出す。

フラムエール「「なら何故…シャイナはピアニストから栄養士にな

る事になったんだ?まだ俺にシャイナに対してのルーツが完全に…」
」

アイモン「ちょっと15の時に“アレ”を受けちまった以降…やめちまったんだよ。やっと才能が開花出来る手前まで来れたというのに…アイツらと言ったら!!たくっ、思い出す度に腹立しい!!」

フラムエール「「何が…あったんだ?」」

フラムエールはアイモンに手渡された写真とその本来の裏の素顔を脳裏に妄想として映り、隣にいたアイモンが両腕を組んで嫌み嫌みな表情を出しながらキー!と威張った後、一瞬“カメラ目線”に向けて強面の表情を出しながらビシッと右人差し指を突き出して言った。

アイモン「シャイナちゃんの過去を知りたいなら“今現在隠れ執筆しているノクターン（R－18）短編小説”の更新を待っていろ。全年齢対象の此処じゃ“乗せられないぐらい厭とクソやばい内容”だからな!!」

第二百六十四曲　La felicit? del conversare

アイモンが創りし結界の中でディク（フラムエール）はシャイナの“厭成分が含まれた残酷すぎる過去話（随時投稿予定“空ロナ紅夢”をただいま執筆中）”を聞いていた中、エツィオとデズモンドはそっと隠し居酒屋（結界）から出て現世（イギリス）へと戻り、二人の悪魔は聳え立つビルを壁にして次々と高速に駆け巡る。

デズモンド「酒は抜けているかぁ？エツィオ？？こんな人が沢山住まう大都会の中でまだ酔っていたら大惨事になるぞ？ｗｗｗ」

エツィオ「失礼なっ！酒（アルコール）なんどもうとっくに抜けているよ！！てか、この小説の主役である“最強設定の俺”がヘマなどしねぇよっ！！」

ダンダンと二人が蹴度にビルの壁がくっきりと足跡が残るように深く凹んで、ボコボコと壁自体が次々と小クレーターのようにへしょげ、窓ガラスの部分だったところは高速疾走する彼等さえ分からない蹴りでガシャンとビル内部にいた人間達を驚かせていようが二人は一切気にせず、ただデズモンドが言うおすすめの夜景が見えるすばらしい箇所へと移動していた。

―現世　イギリス　ロンドン　タワーブリッジ　上部辺り―

デズモンド「ふぅ…お前と一緒にこうゆう風に駆け巡ったのも本当に久しぶりだな。あの時は本当にお前ははっちゃけていて、一緒に魔界から出た後危なっかしいところもあったんだけどな。」

エツィオ「危なっかしいだってぇ～？何を阿呆な事をｗｗｗあん時俺はまだ初めての人間達が住まう世界が楽しみで楽しみで本っっっっ当っっっっに素性が悪魔だろうが“んなもん気にしてらっれかぁっ！！”だったよ！」

デズモンド「そうそう、そうやってお前は俺と一緒にいた間に何かしら“人間同士の喧嘩騒動に乱入参加”してたり、戦火中だった人間達の間に入って「戦争なんて下らねぇぜ！俺の歌を聴けぇぇぇぇぇ！！」と歌だけで戦争を止めちまったとか…明らかに“歴史上の戦いを台無しにしてた”所もあったしｗｗｗ」

エツィオ「別に良いじゃネェか、あんなクソな面白くない祭りなんぞｗｗｗでも無事に怪我も無く家族の下に帰れたあの時の兵士達の顔を思い出してみろよデズっ。」

デズモンド「解っているさ、エツィオ。確かに一人一人の兵士達は幸せそうな顔をしていて、民からも大きな恩恵をもらえたし俺も心地よい事を味わえたさ。でもよぉ～ｗｗ」

二人は一定時間ごとにタワー下の橋が上に上げるように開いていき一時停滞していた大型船が橋を通る中、その跳開橋の真上にある展望通路の上にブラブラと両足を流すように座りながら今時の学生風のような友人同士の会話を懐かしあの時の場面を脳裏に映しながらルン★ルン★に話す。

デズモンド「あの時の戦争の引き金を引いたその国の首謀者同士の王が俺らを見て何を言ったか…忘れたわけじゃないだろうな？」

エツィオ「あぁ、言っていたな。たしか…“俺らの正当な戦い（笑）に水を差すんじゃねぇ！このＫＹなクソ旅人がっ！！てめぇら一回この王（クソバロスｗｗｗ）にぶっ飛ばされろやクソ”＃＄％＆※□※！”だったけ？」

デズモンド「ｗｗｗ“閲覧者用に解り易く伝えている”となると、まぁ翻訳はソレでまぁまぁ合っているんだがｗｗｗ＃＄％＆※□※！とか％＆●△○とやらは言ってないと思うぞ？ｗｗｗ」

デズモンドは隣で座っているエツィオに向けて顔だけ横に動かし、何かしら腹の底から変な物体を吐き出してしまうほど爆笑の表情が抑えなれないぐらいに大きく口から吐き出す。

しかしエツィオは「アン時は“ハングル言訳”しか発して何なんだか約し辛い所はあったもんで、解んねぇ最後の部分は（ピー）でい

いんじゃないのぉぉぉぉ？」とふざけた態度で互いに腹を抱えながら笑い合う。

デズモンド「挙句の果てにその首謀者二人と戦う羽目になったんだが、そいつはななななーんとっ！！はい、我の大友人エッチオ様！ババーンと答えてぇ～？（＊´８、＊）ｍｇ」

エツィオ「ＹＥＥＥ

そして今後も彼等の阿呆&鬼畜な過去話を楽しく語らいあい一旦わざと泣き喚く内容はあったものの、友と漸く再び巡りあえた彼らに取ってすばらしい世界へと誘って、もはや今いる国内の使命さえ忘れるぐらいにネオンのような光が河のようにゆったりと流れる世界で時間がちょいっとずつ経っていった。

…

……

……

デズモンド「ははははっ…やっぱお前が居るとこんなに楽しいよっ！俺はもう幸せだぁ…。」

長々とした会話そのものが楽しかったデズモンドはんーと両腕を上に伸ばすようにストレッチをした後、ゆっくりと展望通路上に背中をつけるよう大げさにその場で寝転ぶ。

上空はもう深い紫色の星達が輝いていた真夜中から薄い水色に変わっていて、点灯していた待街の光が段々消えていきながら階下の河から白い湯気…霧みたいなモノが河全体を覆うように浮かんでいた。

エツィオ「そんでデズゥ?さっきホロ酔いだった俺に向けて“大事な話”って何なんだ?お前に取って何かが“押さえつけられない部

分”があったとでも？？」

エツィオはそのまま座りながら寝転ぶデズモンドに向けて顔を見ずに真っ直ぐと向けながら、徐々に地平線から太陽の光が昇っていく光景を眼を細めつつ結界内のあの話の意味をデズモンドに問う。

ホロ酔いしていたエツィオでもデズモンドが発する言葉を聞くたびに“何かに対して焦っている”又は“恐れている”の意図を読み取っていて、コントロールも完璧な生粋の最強悪魔であるエツィオはゆっくりと腰掛けていた展望通路上へと立ち上がる。

デズモンド「…なら話は早いな。そんじゃ、単刀直入に言う。エツィオ…」

エツィオ「デズ？？」

エツィオが立ち上がった姿とさっきのＯＦＦ状態だった彼がＯＮな態度になっているのを見たデズモンドは、かっこよく背中を見せているエツィオに向けて口の端を上に上げて微笑む表情を出し寝ベソっていた身体を立ち上がらせた後…

デズモンド「過去に…“奴”と戦った際に負傷し癒えた俺でもまだ中に生き続ける“毒素”をお前の手で殺してほしい。」

第二百六十五曲　白いボツネタダ●テ真・●人化　鬼神デズモンド

―イギリス　ロンドン　タワーブリッジ　上部辺り―

エツィオ「毒素だって!?お前のような全悪魔の中で二番目の強さを誇る“鬼神”が、毒程度に手こずっているのかよ!?」

デズモンド「そうだよエツィオ。言った通り俺は奴との戦いで負傷し、傷が癒えても“奴”の因子が俺の中を侵し続けている。鬼神である俺自身一人では完全に抜きだせれない厄介な種を植え付けやがったのさ…呪いだよ、たくっ…。」

鬼神と与えられた彼でも身体（なか）にある“因子”が取り除くことが出来ない事に、エツィオは瞬時に彼へ振り向いてエツィオは驚く顔を出す。

ふとエツィオはデズモンドの言葉自体に何かが植え付けた毒素の本人が一体誰なのか直ぐに理解出来て、今日まで此処に来る時の戦った“クソウザいツルピカ悪魔”の名前を脳裏に焼き付き吐き捨てるように言う。

エツィオ「“ボルジア”か…。」

デズモンド「そうだ。あの時目標を見つけたお前と俺が別々の道に告げてから別れた時、俺が最初に訪れたこのイギリスで奴(ボルジア)に出会っちまった。そんで奴と一戦を交えていた時に…」

エツィオ「戦闘中にお前の内部ごと破壊させるようにする毒素を漬け込まれて、例え自己がお前に滅ぼされても共倒れ出来るよう保険として備え付けられたのか…あの野郎…！」

楽々とした素振りでデズモンドが両腕をわざとらしい御手上げの仕草をしながらエツィオの知らない過去を語る中、両手先から全身に掛けて黒い呪文のような気持ち悪い線？●ーアの黒紋病ような紋様が現れて、徐々に中に潜んでいた毒素が急速に侵食していく。

デズモンド「ハハッ！奴に漬け込まれた毒素を俺は防御体勢に切り替えて、手負いを多数負いながらもこうやって今日まで我慢してこれたんだ。だけど、もう…『限界だな。』

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ…

身体全体に黒い紋様だけでなく濃い紫色の毒々しい霧のような靄も出てきて、デズモンドの声自体が冷たい二重声になりながら“今までと違う自分”へとなっていく己を軽く嘲笑う。

デズモンド『もうじき俺は奴に植え付けられた毒素に完全侵食されて“違う俺”…いや、本来あるべき“悪魔の本質”へと変わるだろう。鬼神としてのあるべき力を振るい、魔帝の片腕としてただ…っ！！』

エツィオ「デズッ！！」

ドッ！と悪魔になりかけてきていたデズモンドが遂に両腕を組んで、全身を震えただせながら両膝を地につけて倒れ込んでしまう。

エツィオは徐々に自我を持たない元々の鬼神（アクマ）になろうとしているデズモンドに駆け寄ろうとしたが、『来ちゃダメ…だ、エツ……ィオ…。』と駆け寄ろうとしたエツィオの足をデズモンドが右腕を前に翳して動きを静止させる。

デズモンド『だからお願い…だ。この後…き…鬼神化しちまったら……』

デズモンドは伏せていた顔を上に上げて、前で瞳孔を大きく開いているエツィオに向けて彼の自我を持った最後の笑みをニコッと出しつつ口を一つ一つ動かして…

こ

ろ

し

て

く

れ。

エツィオ「っ！！」

エツィオに告げられる一つ一つのバラバラになった文字という言葉、それは長年共に生き長年掛けて再会した古き共に手を下す残酷で悲惨な結末へ誘う一つのバッドエンドへの道。

映画のように又はとある某ゲーに出てくるような親しんだ者達の最期の瞬間、どんなに手を使おうが只主人公を護る・道を作るべく一時死に決意した最期の英雄が感情が無駄に振るうしか出来ない者達への餞であり、意思を託す者への引き継ぎ役として役目を果たし朽ち果てる。しかし…

エツィオ「馬鹿野郎っ…誰がお前のような“友人”を殺せって…出来るわけねぇっ！！つーか、こんなシリアスなシーンなどクソ食らえだし、アサクリ主人公を殺したくもないわっ！！！！ヽ（ヽДˊ）ノ」

と一時戸惑っていたエツィオだったがこの小説自体がシリアスになっていくことに“不快を覚え”一変半ギレの表情に変えながら、両腕両脚をバタバタと煩く動かしつつ鬼神化になりかけているデズモンドに向けてウガァッ！！（、Д,）ｍｇと声を出した後…

ドォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォッ！！！！！

デズモンドの全身に黒い紋様が素顔さえ見えなくなる程たっぷり覆い尽くし、全身に掛かっていた毒々しい靄が本体（デズモンド）を球体の中に閉じ込め、閉じ込めた紫色の球体が大きく膨張した後爆発したかのような旋風が巻き起こる。

エツィオ「俺はしないぞっ！友人（おまえ）を口実通りに殺すなどっ！！お前を救う術は幾らでもあるわぃっ！！」

莫大な魔力の旋風がエツィオも巻き込まれ一部の上部の部品が魔力の風で剥がれ、落ち繋ぎ合わせた部品は数ヶ所へし折れて足場にしている展望通路の窓が全て破壊されひび割れが出来ているというのに、“エツィオだけは平然と立っていて”エツィオが立つ箇所の足場のみ“綺麗に残っていた”。

エツィオは爆発し球体から現れた一人の悪魔の姿を見る。…頭部には四つの白灰色の角と背中から巨大な竜の翼が展開し、尾てい骨辺りから赤と黒の逞しい竜のような長々しい尾が、地に着けているヒ

ビが多い通路上に尾裏から叩く度にボコッと小さな痕が生々しく残る。

白い両腕の裏と葵い両足の爪先部分から附けられていた折り畳み式骨のような黒いブレードが真っ直ぐに出ていて、人型だったデズモンドに近い悪魔…否Ｄ●Ｃ４のダ●テボツネタ真・●人魔のような鬼神が其処に立っていた。

―鬼神化　デズモンド（暴走状態）―

エツィオ「その姿も久しぶりだなぁ～。人型（原型）に近い悪魔になれるなんぞ、滅多に居ないもんだぞ?け・れ・ど、悪魔化した際には俺のほうがガチでカッコいいと思っとるっっっっ!!（キリッ」

デズモンド（鬼神）『…。』

鬼神（デズモンド）はふざけた調子で言うエツィオを見ても眉一つも動かさず、ただ目の前に立つ裏切りの悪魔は只本能のままに殲滅すべき対象として捉え、爪先に出ていた両ブレードをしまい込み両腕裏から出ていた折り畳み式ブレードを胸横に翳すようにして身構える。

エツィオ「（鬼神とやりあうのはちょっとあれだが、まっｗｗｗここまで来ちゃったモンで）…ちょいっと、本気出すかぁ～。」

エツィオはのびのびとした表情で両肩を下へがっくりとした後、右腕を前に翳して手のひらをぐっと小さくしつつ丸めた直後、握られた右手の平の中召喚したエツィオの剣を両手へと握り直し、そっと静かに手にした武器（エツィオの剣）を右腰斜め後ろへ構えた。

第二百六十六曲　魔神ＶＳ鬼神　第一ラウンド現世イギリスロンドン内タワーブリッジ

―イギリス　ロンドン　タワーブリッジ　上部辺り―

デズモンド（鬼神）『……魔帝……裏切りし……魔神……我…殺す……。』

エツィオ「“…”が多いなデズｗｗｗ言葉自体が片言になってやがるぜｗｗｗ」

ガキンッ！！

鬼神（デズモンド）の両腕裏に付いていた黒い折り畳み式ブレードがエツィオの首を狙うべく交差させるよう振り回したが、エツィオはブレード同士が交える瞬間を狙って、エックス字の中心に手にした（召喚した）長剣の刀身を食い込み即死斬りを防ぐ。

デズモンド（鬼神）『殺す……故に……魔神……失敗されし……廃棄…悪魔……！』

ギリギリとブレードと長剣同士の刀身から火花が飛び散りながら両者とも力を入れて互いに手にする武器を少しずつ上に上げた後、両者のソバットが炸裂し両者の下肢脚部が交わった直後空気中の大気を引き裂く。

両者の鍔迫り合いの武器と体術がガツンと一点へ集中した後二人は後方へと弾き飛び、両者は綺麗に両足を地に着けながらザザッと数メートルぐらい引き摺る。

デズモンド（鬼神）『殺す。……我が…魔帝に……反逆…の因子を持……った……悪魔を！』

エツィオ「やれやれ…。」

ドバッ！！！！！！

エツィオ視点で遥か場所へ後退した鬼神（デズモンド）が身体を覆うように一旦背中を丸く折って両腕を前にクロスさせた後、交差させた両腕を前に広げた時半端ねぇ“●ーアＤＬＣ版の黒の魔法弾”が渦状となってエツィオに襲い掛かる。

エツィオは手にする長剣で魔法弾をズバッと高速素振りするように斬りながら、空いていた左手を身体の中（なか）に入れて身体から短闇剣（ラークシャシー）を取り出して双剣のように交互へテンポ良く魔法弾を丁寧に刈って

いく。

ラークシャシー『気を付けられよ、吾が愛する魔神よ。鬼神の咆哮はまだ止まん。』

エツィオ「解ってるって、ラークシャシー。今は暴走状態のアイツの動きを全て見る必要があるんだ。」

ラークシャシー『なんと…魔神であるお主が、鬼神と一度も戦ったことはないのか？』

螺旋状を描きながら高速に放たれる魔法弾をエツィオは手にした短闇剣と長剣で身を何度も翻しながら斬り、短闇剣（ラークシャシー）との“高速に放たれる魔法弾の真っ只中の会話”で「まぁ、そうだな。」と覚めた表情で“息さえ上がらないまま平然に言い返す”。

エツィオ「特級悪魔のお前なら知っていると思うが、同じ階級同士の悪魔は“決して同等たる魔徒と争うな、同等の者と活き同等と共に我らに刃向かう者共を駆逐すべし”…と今でも首を長ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁくして待っている魔帝からそう教わったと思うぜ？」

ラークシャシー『そんなこと解っておるわぃ、吾が愛する魔神よ。しかし…』

ズドドド

弾幕を全て斬られ懐まで飛び込まれたエツィオを鬼神（デズモンド）は折り畳んでいた黒いブレードをカシンッと伸ばし、斜めに振り下ろすよう頭部に向けてブレードの刀身を叩きつけたが…

エツィオ「きちんとコントロール出来ていない暴走状態の悪魔相手じゃ、例え俺と同等の力を持つお前でも…」

デズモンド（鬼神）『！！』

エツィオはその攻撃さえ読んでいたように振りかざしてくる鬼神（デズモンド）のブレードを短闇剣の刀身を軽く上に翳すだけで“黒いブレードが思いっきり腕ごと上に弾かれ”一瞬鬼神は片腕万歳するかのように無防備な体勢になってしまった。そして…

エツィオ「俺には勝てないぞー、俺を処刑出来ないぞー♪俺は無敵超人のアサ☆シンだから何でもアリなんですぅ～ｗｗｗ」

デズモンド（鬼神）『ぐ…ぁ……！！』

メキリッとデズモンドの腹部におちょぼ口を出したエツィオの力が込められた右腕がめり込まれた部分が大きな渦状になっていて、両手に持つ武器を使わず決して刀身に友の血を付着・身体を汚さないようにし“彼なりの手加減”をしながら鬼神を大きく真上へと吹き

飛ばす。

エツィオ「一弾！二弾！！三弾！！！四段！！！！！五段！！！！！ろ……数えるのクソ面倒ちぃ！！！！！／（、皿、θ／」

デズモンド（鬼神）『っ……ガ……ハ……』

ドガッ☆ドスッ♪ボキ～ッwズドッ（ハート）ドゴッ★ボグッ（ノ－皿－）ノ┻

殴り上げられたデズモンドの身体は何度もきりもみ状態になり何度も身を捻らせていた最中、宙に上がったエツィオが容赦なくＰｓｐｏ２のボッガ・●ンパしたかのような高速版連続空中追い討ちで鬼神（デズモンド）をフルボッコする。

しかし…

エツィオ「固ぇっｗｗｗ何かとある何処かのマルチプレイのような“驚きの耐久力”＆“ボロボロにならないお前のずば抜けた身体構成”がマストダイッｗｗｗ」

ガガガガガガガガガガガガガガガガガガ！！！！！

本来、魔神（エツィオ）に殴られるだけで“特級・上位悪魔は全員失神又は一発で殴死”、“中級・下級悪魔・人間は身体ごと内部破裂を起こした後に外部ごと全て捲られて骨だらけになる”爆発死が通常だが、同等のＥＸ悪魔なのか確りと普通に“殴られた痣もなく”苦痛を浮かべる表情を出しながらエツィオの追い討ち蹴り攻撃を耐えなく受けていた。

エツィオは良く見るとただ鬼神をボコボコに殴っている最中に両足の爪先から出したブレードの刃先だけを切り離すように飛ばして、本体から離され地にある展望通路等に切り離されたブレードの刃先が深く貫いた後、黒いブレードが一輪の黒い花へと変わって花の中心からの花粉みたいな金色の光がデズモンドに向けて注ぎ入れ外圧からの衝撃を和らいでいるように見えた。

エツィオ「（あれはデズモンド十八番のの随時効果回復魔力（エンチャット）“黒花（アルバドリーズ）”か。あれがあっちゃ何時まで経っても奴を救えねぇよｗｗｗ）なら、場所を変えて一気に流れを掴むとしようか。」

デズモンド（鬼神）『！』

殴るのを止めて一旦鬼神に頭突きを咬まし数秒間昏倒させた後、手にしていた武器を交互にさせるよう華麗に中にしまい込み、エツィオは右腕を後ろに伸ばして手の平を翳した直後、エバラノゴマだれー如くゼ●ダ風謎解きご苦労音が何処かに響いて、翳した箇所から

空間が捻れたように青い風穴のようなエフェクトがくっきりと浮かんだ後…

エツィオ「俺の創魔結界の中でモッコモコにしてやんよっ★」

エツィオは鬼神（デズモンド）の首を猫掴みするようにして左片腕だけで持ち上げた後、自身が召喚した歪みの穴へボッ★シュートし、自身も開けた歪みの中に入って悪魔の二人は現世から消えていった。

第二百六十七曲　創魔結界ぇっぉの間その？！…カ●ビー無双

―創魔結界　悦男（えつお）の間―

デズモンド（鬼神）『ガフ……ッ！！！！！』

エツィオに投げられた鬼神（デズモンド）は次に来る感覚が冷たい物を受けて、バシャッと顔面から水らしき地上へと叩き付けられる。

鬼神（デズモンド）は現世の戦いで乱れた息と疲弊された身体を無理矢理両手に力を入れて立ち上がり、全身から地上に叩き付けられた際に滴った藍色の水を落としながら顔を右往左往に動かす。

デズモンド（鬼神）『！…創魔……結界！！……き…鬼神たる……我……が…閉じ……込めら…れ……た！！』

見渡す限りのドーム状の青い空間と無限の彼方まで広がる藍色の綺麗な膝辺りまでの水面、少し時間が経った直後何も無かった水面から大小の蓮の葉達がポンッと出てきて茎が伸び蕾が出てきて蕾自体がむくむくと膨れ上がる。この時…

エツィオ「ザッツ☆ライト、怪獣デズズッ♪オメェーの力が多少目が余るぐらい困ったもんで、強制的にこの中へ俺っ☆ｗｉｔｈ幽閉させて貰うべｗｗｗ」

デズモンド（鬼神）『貴様……！！！！』

鬼神（デズモンド）の真上にお釈迦寝入りしながら現世でシャイナが買って貰えたチョコ付きポテチの封を開けてバリバリと食っているエツィオがいて、普段のアサシン衣装と違い神界産“馬鹿Ｔシャツ（ｂｙ阿留汰）”を着た現世に住まう人間の風貌と同じ仕草で軽く鬼神相手をあしらう（挑発する）。

鬼神（デズモンド）はそのふざけた態度で鬼神というＥＸ悪魔をおちょくる愚か者に対して更に怒りを覚え、鬼神（デズモンド）は歯軋りしながら現世で受けたダメージを無に返す黒花（アルバドリーズ）を周囲に放ち、ブレードの刃先を水面の底へ刺そうとしたが…

ジュッ！！！！！……フゥ……

デズモンド（鬼神）『！！！！』

爪先から放ったブレードの刃先が水面に触れた途端ブレード自体が

腐り落ちるようにボロボロに崩れ、崩れたブレードの破片が水面に滴った直後“黒紫色の蓮花”に変わって開かれた中央から青い球体の光を複数昇らせながら全ての黒花（アルバドリーズ）がプカプカと水面を漂う。それだけでなく…

エツィオ「“浄化の力”がそのまま俺の魔力で具現化された俺☆得の結界だ。俺に対する存在の力を防ぐだけでなく…」

デズモンド（鬼神）『！…ぐ……おっ……！！』

ジュワッ！！

足場にし浸けていた鬼神（デズモンド）の両脚の藍色の鱗が焼け落ちて、溶ける音を立てながら徐々に鬼神というの悪魔の身体を溶融（とか）していく。

鬼神（デズモンド）は直ぐに足場にしている水面から退けるように背中から出ていた二つの竜のような大きな翼を羽ばたかせ、軽く水面の底を蹴っただけで上へと上昇し退避する。しかし…

エツィオ「それだけでなく俺に対して敵意を持つ悪魔、又は人間等ｅｔｃ…俺のような“闇の聖霊体に刃向かう愚か者共に対する処刑場”として活用する効力も付け加えられる。どだっ？浄化の力が入った“聖水”に滴った感想は？？」

デズモンド（鬼神）『っっ……不……覚……
……！！！！！』

シュゥゥゥ……

両脚下肢部分は焼けただれるように煙が出ながら外部の鱗が破れ内面の筋肉が剥き出しになっていて、両足の爪先から出ていたブレードの構成自体も“完全に内部ごと焼け溶けてしまった”ようで両脚のブレードは使えなくなってしまった。

鬼神（デズモンド）は両腕下肢が鱗ごと焼け溶けてしまった素が見える肉体を数秒間見下ろすようにした後、再び顔を上に上げて揚々とポテチを食らっているエツィオを睨み付ける。

エツィオ「ムシャムシャさぁ、オメェの両脚の武器を破…ボリボリ壊したぞぞぞ？次は…あーん…両腕裏の武器も次いでに壊そクチャクチャ…んんっ！イギリスのぽてちウマー＼（＾Ｏ＾）／」

デズモンド（鬼神）『ぐ……く……この……
……！！』

ジャギッ！！

まだ残っていた両腕裏の折り畳み式ブレードを展開して両腕を水平に広げながら、お釈迦寝入りから胡座をかいてぽてちを食らうエツィオに向けて背中の翼を広げながら高速滑空する。

そのままブレードを出した両腕を前に交差させるように構えて、一気にエツィオの頭部ごとバッ★テン死させるべく後数メートルぐらいまで接近させていったが…

エツィオ「そう焦るなよ、デズッ。俺のぽてちを大人しく食っていけ！そうすりゃ、お前に対して悪いことなどしないからさぁ～♪」

デズモンド（鬼神）『な……！！？？！！』

ペチッ♪ペチュッ♪♪

憤怒の形相で武器を広げながら走ってきたデズモンドのを見たエツィオは、まだ余裕でも見せているかのようにチョコ味のぽてち食いながら口に持っていこうとした二つのぽてちを両腕から出ていたブレードの刀身に向けて一枚一枚ぽてちの皮を弾き飛ばしブレードの刀身とキスした瞬間…

バギャァァァアアアアアアアアアアアアアアアアアア

アアアア！！！！！！

チョコ味付きのぽてちとブレードの刀身が触れた途端“飛び出していた二つのブレードが粉々に破壊されて”、ブレードを破壊したエツィオが今食べているぽてち自体は“無傷”のまま後方へと飛ばされていった。

エツィオ「ナイフ代わりの投擲武器・ぽてち！！何気にぽてちは一般市民の中でポチュラーななぶ……ウマー！！武器名“ぽて●リス”ＤＡ！！」

デズモンド（鬼神）『ぐっ！！……オォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！』

遂に両腕裏から出ていたブレードが完全破壊されて武器を完全に失ってしまったが、鬼神（デズモンド）は戦意を魔力が使えない結界の中にいようが決して失わず、まだ健全な爪と牙と体術が残っていたので菓子を食べているのに夢中になっているエツィオに向けて駆け寄ろうとしたが…

エツィオ「ハハッ！！無駄無駄っ！！魔力が使えない&主力武器が全て破壊された鬼神など怖くもねぇよっ！！ヒャッハー！！」

デズモンド（鬼神）『が……！！！！……ガ……ァ……
……』

ドズッ！！！！！！

鬼神（デズモンド）の目の前に既に弾き飛ばされていたぽてち一枚が目の前にあって、ペチッ♪という可愛らしい音でなく“肉を叩き潰すような生々しい音”を鬼神の胸部に当てられた“ぽてち”から立てられる。

エツィオ「くらえっ、無限ぽてちマシンガぁぁぁ

デズモンド（鬼神）『ガァ……ガガ……ガガガッ！！！！』

エツィオ「おっと、まだ動けるのかい？デズズズｗｗｗお前にゃぁ、フーちゃんと同様のガッツがあるのか？？」

エツィオは食べるのを一旦止めて顔を上に上げ直し、明らかに墜落しそうな穴だらけの翼でも鬼神はよろめきつつ宙を保っており、大半が鱗が消し飛ばされ頭部の角が三本ぐらいへし折られようが、本質たる悪魔の自我に従って楽々としているエツィオに向けて殺意の視線を出す。

エツィオ「…仕方無ぇな、だったら…」

デズモンド『！』

エツィオは胡座を掻いていた体勢から普通の仁王立ちへと立ち直し、宙にいるのに関わらず翼さえ出さないまま制止動画のように口にしていたぽてち一つを上に掲げた直後…

エツィオ「ぽてちの神よー！！俺に友を救う大いなる力を分け与えてくれー！！」

デズモンド（鬼神）『な……！！！！』

ドンデンドンデンデーンッ★

上に掲げたぽてちが上部からの白い光に照らされた直後、何処かから効果音が鳴りながら翳した方向の上部に“内輪になった“スイーツ（笑）”文字入り巨大ぽてち扇子へとなる。そして…

エツィオ「□！！　叩き潰す　菓子の内輪　ぶっとばす！！！」

鬼神の視界が巨大なぽてちの皮の扇子を捉えて唖然としてしまった直後、鬼神の視界はもう暗くなって意識が何もかもぶっ飛ばされていった。

第二百六十八曲　半日以上寝すぎた女と過去を知った炎翼

―数時間後　創魔結界　アルボーレ　ド　バンケット―

シャイナ「ん……んん……ふぇ？今何時だろロロ？？？？」

一方隠し居酒屋で寝ていたシャイナは長い酔いから眼を醒まし、テーブル上に寄り掛かっていた身体を起き上がらせて右手首に付けていた腕時計の針を見る。

シャイナ「あ〜……今ＡＭ１０時かぁ。ん？１０時？？んじゃ俺が眠りにＯＦＦった時間は「「１７時間だ、シャイナ。」」おうっ！？ク●ガリいいいいいい！！！？？！！？」

いつの間にか武器状態から実体化されていたフラムエールが凭れていたシャイナの背中に合わせて立っていて、両腕を組み俯くような体勢を取りながら更に付け足す。

フラムエール「「正確に云えば“１６時間３８分４７．６秒”だ。人間の通常な睡眠時間と比べても…貴様は寝過ぎている。これが続

くと後にお前は新陳代謝の低下や昼夜逆転する症状も多発するぞ？？何度も言うが俺はク●ガリではなｒｙ（」」

シャイナ「いちいち細けぇこと言うなよ、統計学的な思考人間フーちゃん！！オメェはもうママンキャラ決定過ぎて、テラキモいわぁぁぁ

店の奥から貸された店内用文字付きエプロンを着たディクと表仕事で何時も着る作業着バージョンのアイモンが現れて、両手の平の上にサラダ和えのスクランブルエッグと、茶色い焦げ目が付いた焼き立てのバターロール・クロワッサンを盛った、朝食らしい西洋風のパンをシャイナが掛けるテーブルの上に置く。それだけでなく…

シャイナ「ちょっｗｗｗもう打ち解けてやがるｗｗｗ初回はあんなに警戒心丸出しだったアータがｗｗｗ」

更にシャイナが驚いた事は悪魔であるアイモンと初めて会って“まだ数時間しか経っていない”というのに“完全に打ち解けていて”、フレンドリーな態度でアイモンと近くにいながら平然と語る。

ディク『あぁ、最初だけなっ！！でも相棒と一緒にアイモンと語っていた間、もう悪魔という設定など“クソ食らえ”だと俺流にルール★ブレイクしてこうなっていたんだ！だが…』

フラムエール「「俺はディクの眼で見てディク自身の判断に身を委ねただけだ。悪魔か人間かという種族・敵対する思考など一切削除し、ディクが見た気持ちそのものを俺は契約者との共鳴に身を委ね、ディクの心と同意している。」」

シャイナ「おまっ！お前もかよｗｗｗク●ガリマーマー！！！！！俺が知らない間に何があったんじゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

カメラ目線に向けてウィンクを咬ますディクと前髪を上に巻き上げるようにして軽い挑発のような仕草をするフラムエールが予想外な事に驚きの感情を出すシャイナにそう言った後、「先ずはパンでも食っていけ！詳しい話は後だよっ！シャイナちゃんっ☆」と調理場に移動していたアイモンが言って既に焚いていた湯とコーヒー豆を入れて飲み物を作成する。

ディク『アイモンはとても良いやつ！良いやつなら俺は殺さない！無駄な殺生などせんっ！元国王からの朝食クオリティー！！』

シャイナ「ｗ」

そう良いながらまたしてもカメラ目線に向けてディクはウィンクする度に“ＹＥＳ！”と言う文字体勢を順に取って、汚れなき笑みを何度も返しながらあきれ果てているシャイナに言い返す。

そしてシャイナの背中合わせに立っていたフラムエールもシャイナに背を向けたままそのままの形で手を組んでいて、むっつりとした態度でも少し面白可笑しい表情を出しながらそっと皿に持っていた一個のクロワッサンの端から口に加え静かに食べる。

ディク『食べてみてよっ！シャイナ！！このクロワッサンは俺が作った最高傑作なんだべっ♪他にもレーズンとシナモンが乗ったクロ

ワッサンもあるから、これも口の中に入れてくれよっ！！』

シャイナ「アンタが作ったのかｗｗｗでもいいや、これだけ寝ていたとなると“スッゴい腹ヘリオワタ＼（＾ｏ＾）／”な腹情報だもんで、頂きまーす！！」

シャイナが手に持ったとろけたバターの香りがそのまま染み付いているクロワッサンを口の中に入れて、サクサクと音を立てながらゴクッと喉の奥に流し込んだ後、ディクに向けて「焼き立てはウマー（　。Д　。）」と超幸せな表情を出しながらパンの味を楽しむ。

そんな光景を静かに見ていたフラムエールは数時間前にアイモンから聞いたシャイナの過去と、今のシャイナの姿を見てふっ…と微笑むような表情を一瞬出した後、パンを流し込んでいるシャイナに向けて…

フラムエール「その笑顔を…大切にしろよ？」

シャイナ「ンゴモモッ！！！！！モ〝モモ〝ヅン！！！！！」

フラムエールの超大事な台詞を全く“食べる事だけ頭に入っている無視なポジション朝食に集中しているシャイナを見た後「「やれやれ…」」と両肩を落としてわざとらしいがっかりさをハッと静かに言った直後…

エツィオ「たーだいまー！ちょっと、野暮用で遅くなっちまった！
！」

第二百六十九曲　異臭を放っている人には必ずフ●ブリーズで綺麗＆無臭しまし

―創魔結界　アルボーレ　ド　バンケット―

ディク『えっｗｗｗちょっｗｗｗ何この展開ｗｗｗつーか、俺らが知らない間に何をしていたんだよっｗｗｗ』

エツィオ「何、ちょっとした野暮だって言っただろーがｗｗｗちょいっとデズと語り合っただけでこんな風になっちゃったのさっ★」

シャイナ「意味解んねぇよっ！馬鹿ツィオ！てかっ、臭っ！！！！焼け過ぎた炭化版のチョコみたいな臭いと突然変異で塩が石炭に進化した“摩訶不思議の珍臭”が野郎からに…うぇっ！！臭ぇっ！！」

店の入り口からぐったりとしているデズモンドを“お姫様抱っこ＆頭上に上げながら一人万歳している”エツィオを見たディクは、シュールすぎる登場に思わず口から白い変な液体をブフッと吐き出す。

鼻を抑えるシャイナを余所にディクは良くリサーチ＆開★眼するとデズモンドの全身に何か“茶色い細かな破片が多くこびり付いて”いて、デズモンドが纏う服自体は破けていないが…何かしら“チョコと塩やらの焼けすぎちまった糖…否炭の臭い”がぷーんと抱えら

れている人型悪魔（デズモンド）から漂っていた。

アイモン「おやおやっ、こんな朝（笑）から騒がしい事をおっ始めやがってw黒い兄チャンよぉっwwwまっ、俺には関係ない事だから追求なんかしねぇぜ。」

フラムエール「「そこはフツー“疑問するところ”だろうアイモンよ。取り敢えず魔ノ神、簡潔に説明してくれないか??」」

異臭になっちまったデズモンドを見たアイモンは“追求何ぞ面倒くせぇよw俺は他人じゃっ♪”風に特に何も変わらない表情を出しながら、空になった皿をチャッチャッと片付けてパンの糟が付いたテーブルを濡れ巾で綺麗に拭き取って通常通りに皿を綺麗に洗い始める。

それをフラムエールはアイモンの行動に対し額から汗を流しながら軽い突っ込みをビシッとした後、異臭を上に抱き抱えているエツィオに向け直してその事の発端を彼に問いかける。

エツィオ「いいよっ☆どーせ下らねぇ話だもんで短く種証しをする。よs……あっ!!そうだった!なぁ、アイモーン!!!!」

アイモン「?どうした黒い兄チャン??そんな声出しちゃって???」

突然の事ではっきりとしていない仲間達の問いを聞いたエツィオは、頭部に？マークを浮かばせている彼等にこのような状態になってしまっているデズモンドを詳しく説明しようとしたが、エツィオ自身にとって忘れていた事にすっとんきょうな声を高く出す。

アイモンは皿を洗いながら突然すっとんきょうな声を高く出したエツィオに釣られて下げていた顔を上げて、エツィオが今いる所に向けて顔だけを後ろに動かした後少し首を傾げながら言う。

エツィオ「悪ぃ！！アイモン！！この結界内でも浴槽はあるか？？ちょっと忘れちまった事を思いだしちゃって！！！！！」

アイモン「？浴槽は無いがシャワー浴室ならあるけど…それが何か？？」

アイモンは皿を洗う手を止めて一旦エツィオの所へと歩み寄った後、万歳体勢＆アサクリ主人公（デズモンド）をテイク☆アウトを止めて元のお姫様抱っこに戻しながらポフッと炭化まみれのエツィオを投げ渡す。

アイモン「ちょっｗこの“炭化臭い兄ちゃん”はシャワー浴室に連れていったほうが良いじゃないのか？そうしなき…」

エツィオ「俺は“特殊な事をした”からデズは何処か空いてある部屋内に連れて休ませてくれない！？後何か消化が良い飯も与え……ヒャー！！！！」

シャイナ「ちょｗｗｗきちんと説明してから行ｋ…おっっっっまっっっっ…早ぇよっ！！！！」

ディク『ｗｗｗ』

シャイナ達が更に続けて問うただそうとしたがもうすでにバビューンと脱兎の如くシャワー浴室に繋がっている扉へもうワープしていたエツィオがいて、慌てた表情を出しながら額に添えて横にした右手の平が触れる手前まで持ち申し訳ない表情を出した後、さっさと浴室に続く扉を開けてバタンと扉が閉められた。

シャイナ「な…何そんなに慌てて一人極上へとログアウトをｗｗｗん？待てよ？？エツィオにとって大事な事は……」

シャイナはエツィオが言った台詞を疑問するように顎下に右手を当てながら、ちょっと思い当たる事を脳内で再生しつつ前話へと遡って…

フラムエール「「妖精界の時に自身の魔気を覆い隠すようにして、妖精界ならではの霊地をその身に付けたフェロモンを落としにいっ

ただろう。（第百六十曲以降から）」」

フラムエールが付けるようにして言った後シャイナは「そう言えば、エツィオの風呂しーんはまだな…」と言って、シャワー浴場へ入っていったエツィオがいる室内へとじっと見詰める。その後…

アイモン「取り敢えずわぁ、事務所に行ってデズちゃんを安静させないとなっ！よっっっっと！！！」

シャイナ「ちょっｗｗｗ何故フ●ブリーズがあるんだよｗｗｗ」

シュピピピピッ♪

いつの間にか出していたのかアイモンの右手の中にフ●ブリーズが握っていて、変な異臭を放つノックアウト状態のデズモンドに向けてなんども吹き掛ける。

アイモン「シャイナちゃん、俺っちの調理場を使って何か病人食を作ってくれ。食材は何でもいいよー。ディクちゃんとフラムエールと一緒に先に事務所にいるからなぁ～。」

シャイナ「もうっ、次から次へと展開早すぎだっちゅーの！！まぁ、いいや。この小説自体はフリーダムだしｗｗｗ」

と付いてきているディクとフラムエールを従ってデズモンドを抱きながら事務所に向かいつつシャイナに言い、一人店内に残されたシャイナははぁとため息を付いた後、アイモンの仕事を継いで終えた後に棚の中に入っていた数々の調味料を一つ一つ出し始めた。

第二百七十曲　夢の中の叫び聲＆ＳＯＳしに来ますた乱入ＶＩＰ悪魔でつｗｗｗ

―デズモンド　夢　闇聲―

殺せ！！！！！！

殺せ殺せ！！！！！

殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ！！！！！！

意識を深く…より深く堕ちていたデズモンドという個体の情報は、閉じられた暗闇の世界の中で脳裏に響くもう一人の己影を聞く。

窓閉じていた情報はピクッと何度も響く己影に対して少しずつ瞼を戦慄かさせ、素体の上に両手を押さえるようにして延びていた身体を丸くするように縮篭る。

殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ

デズモンド「止めてくれ……俺はもう……ふ……深く……関わった友人達を殺したくないんだ……殺したく……ないよ……。

深く…冷たく……普段と違う己の本来の聲が人という容を保っている情報(デズモンド)に、容赦なく上書きするようにして津波の如く情報(デズモンド)の中枢に集中攻撃する。

何故殺したくない？何故殺すことを拒む？？何故殺すことを躊躇う？何を馬鹿な事を…我ら魔族に力なき無能な種族を処刑する存在に躊躇など要らぬわ…。

デズモンド「それが嫌なんだよ！俺はっ！！ただ魔帝に言われるままの操り人形なんて御免だ！！俺はエツィオのように自由に活きたいんだよぉぉぉぉ！！」

情報(デズモンド)は冷徹なる己影の声を聞いて思わず窓(め)を全開に開き、窓(め)から映る暗闇に満ちたワイヤーだけの仮想空間(テストプログラム)内に居る“姿無き己の己影”に向けて感情を赴くままに振るう。

自由？自由という魔素(ワード)など我ら上位なる魔族にとって不要な物だ。エツィオは我ら魔族にとって裏切りの存在！奴がお前と同じＥＸ悪魔なんて不愉快也！！基盤外だ！！基盤外！！！！！我ら魔帝を超

えた基盤外が“真の魔族の皇”などと…っ！！！！

だが今いる仮想世界内(テストプログラム)の姿無き己影は論外(エツィオ)という存在を聞いて更に叱咤するように言い、その論外(エツィオ)に対しての憎悪・嫌悪・憤怒を全て掛け合わせた声を情報(デズモンド)に向けて突き飛ばすように言う。

デズモンド「彼は皇なんかになる気は無い！！彼はっエツィオは！人間のように活きるありったけの強さを秘めた力があったこそ、お前らはそんな事に気づかないまま無駄な刻を日々経っているだ！！！！お前には…エツィオの……！！！！！」

黙れっ！！！！！！我の傀儡め！！！！！！あの基盤外と同じ不要な物を持つお前というクズに云われる筋合い等ないわっ！！！！！！！

デズモンド「！ぐっ！！？？！」

ドクンッ！！！！！！！

突如情…否デズモンドが胸部内から何かが突き出す気色悪い感覚を受けて、思わず息が詰まるぐらい息苦しい胸焼けを覚えながら両膝からガツンと固いタイル状の電子床上に落ちる。

息苦しい胸焼けから今度身の毛を弥立つ激しい寒気を身に受けて、

わなわなと全身を震えた出せながら両腕をクロスさせるように背中を丸めていく。

デズモンド「う゛ぁ……い……一体どうなっ……！！！！！！」

ドンッ！！！！！

デズモンドは息を乱れながら何故今身がこんなに苦しいのか疑問を浮かばせていた時、突如デズモンドの背中から巨大な悪魔の両翼が展開されて、両腕両脚がごつごつとした鱗状の屈強たる異形へと変わる。

デズモンド「な……何故……勝手に鬼…神化して…！！？？！」

何…在るべき姿へと戻してやるだけだ。お前という最高性能と素体がまだヒトという不要な意識を完全に取り除いていないなら、俺という本来の本質が素体（オマエ）を媒体として今後正当なる鬼神の役目を果たす者として大いなる破壊を与える。それが今なのだよ。

パキパキ…

徐々にデズモンドの姿が姿無き己の己影の意識に乗っ取られていくように侵食していき、尾長いが生え爪が鋭利に伸び皮膚が鎧のような鱗に変わり、身体中から赤黒い線が伸びながら首下辺りまで完全に鬼神の身体になる。

デズモンド「あ……アアアア…！！！！！！嫌だ……こんな……の……」

嫌嫌嫌

助けは……望まない方がいい…

此所は己の夢の世界…

決して入ることすら出来ない自己だけの……

デズモンドは鬼神化になりかけている身体を抑えるように両腕をクロスさせて、少しでも鬼神化になる時間を長くするようにただ必死に夢が醒めるまで己が持つ全ての力を抑制に切り換える。

だが姿無き己の己影はそんな見苦しい行動を取る傀儡を嘲笑うかのように更に侵食を上げるよう力を入れて、遂に頭部上まで線を少し伸ばした後頭部がもう完全なる悪魔の素顔に変わって鬼神の容へとなる。

後はお前の意思を無くすだけだ。そうすれば……！！！！！！！！！

デズモンド「ヒッ……ィ！！！！！！……アァ……ウァァ『ァァァァアアア

きたい　活き　た　い活きた　い
活　きたい活　きたい活きたい　活きた
い……い……き……
た
い
鬼　神化　した身体
からデズモンド内　にある精神
云わ
ば心にも手　を伸ばして、犯されて　いく
度　にバラ　バラにな　っ
て　いく言葉　が余りに
も儚く　花のよう　に散っ　ていく
脆さ　を　受け　ながら……

鬼神化し心が消えてしまいそうなデズモンドでも赤い両眼から涙を一つ流し、消え逝く己の意思を現世にいる大切な友人に向けて手を上に翳した時…

？「待てよ、このドサンキンＪＫ！！！！！俺の大切な友人に何しやがる！！！！」

デズモンド「！！！！！！！！！」

何っ！！！！！

カツンと誰も入ることが出来ない夢の世界の中にデズモンドにとってかけがいのない友が目の前に降り立った姿を見て、思わず鬼神化した素顔でも救われたような安堵の表情を出す。

それはデズモンド内にいる己影でも奇想天外な展開に驚く表情を出す。それは…

？「何でデズの夢の中に入れたのかは応えねぇぞ？腐れドサンキンＪＫ！！！！さて……」

お仕置きの時間だ！！！！

第二百七十一曲　言われたことは素直に実行しましょうっ★これが自己ステうp

―創魔結界　アルボーレ　ド　バンケット　店内奥　事務所―

デズモンド「うぅ……う〝ーン……」

ディク『おぃっ、アイモン。エツィオの友人（デズモンド）がさっきよりも魘されているぞぉー??何か当たっちまったんじゃねぇ～か????』

シャイナ「おっっっっまっっっっっ!?ｗｗｗ重度?な病人悪魔がばたんきゅーしているのに、そのアホな態度は何だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!??!!」

薄暗い蝋燭の光だけで照らされたほんのーり事務所の側に設置されている仮眠用ベッドの上に、デズモンドが顔全体から大量の汗を出しながら横たわっていた。

その状態なのに関わらずディクだけ鼻くそでもほじっているような“クソ寝惚けた表情”で言っていて、丁度病人食をお盆に乗せて持ってきたシャイナが見た途端、舌ベロ自体が蛇になるぐらい激しく半ギレの表情を出していた。

ディク『え？だって、コイツＥＸ（エクストゥラ）悪魔（デモーネ）なんだから自然治癒能力ぐれぇトップクラスだと見えｔｒｙ（』

アイモン「…いや、そうでも無いようだぞ？元人間の小僧。構成があの黒い兄チャンと近い悪魔（デズモンド）は、こんな状態になるまで殆ど無い。つーか…“鬼神は聖霊体であるエツィオと最も近い生粋の悪魔”だからどんな状態に掛かっても、決して効力魔力は受け付けないハズ。…きっと何処かで植え付けただろ？」

ディク『！？植え付け…られた？』

アイモンはそう言いながら水を汲んできたバケツの中に乾いた雑巾を滴って両手でギュッと絞った後、仮眠用ベッドの上で横たわるデズモンドの額に冷たい雑巾を掛けて頭部裏にはふかふかの白い枕の上に冷やしたタオル巻きのアイスノンを敷く。

アイモン「光の聖霊体（魔神エツィオ）に近い鬼神。元人間の魔力を持った小僧なら解ると思うが、効力魔力を受け付けない完全な鬼神という構成（からだ）だというのに、それがどうしてこんな風になっちまったんだろ？？長年生きたこの俺でも不可解な症例だべ。」

元破戒の王の一柱であったアイモン（本名はアモン）でもこんな状態になることすら初めてであって、対処法が掴めていない今では脱

水症状&高熱に対応した人間のような処置でただ応急処置をする他に無かった。

それにエツィオに知識を全て叩き込まれたディクでも、教えられた知識に無い不可解な出来事が目の前に起こっている事は、知識に無い得体の知れない存在をしていることなので、ディクは先程のボケ顔からやや真面目な表情へと変える。

フラムエール「「…“毒素”が奴の身体の中から感じる。それに“嫉妬”のような魔気みたいな魔力も若干…ある！」」

アイモン「!?嫉妬だと!!??!何故解るんだい?赤い侍兄チャン??」

シャイナ「ま　た　あ　の　ク　ソ　ハ　ゲ　か　ｗｗｗいい加減にしてほしいもんだなぁ～ｗｗｗ（－Ａ－　＃）」

横たわるデズモンドの処置を後方から見守っていたフラムエールが、顎下に手を当てながら考えている仕草を取りつつ前方にいる彼らに言い、前世紀最後の完成体兵器としての力を彼らに見せつける。

フラムエール「「俺の中にある状態演算処…いや“感じる”んだ。遥か昔の世界で逃亡していた鬼神が処刑しに来た一人の…“嫉妬の魔気が漂う悪意な存在”に。きっと…」」

フラムエールは顔を顰めながら顔を下に下げてありのままの事を言い、鬼神（デズモンド）の身体内で蝕んでいる毒素の悪意と鬼神自体の身体機関継続内容（クロニスト）を“人間語へ変換させる”みたいな解りやすいようにシャイナ達に語る。

アイモン「“感じる”ねぇ。だがお前が言う事が事実だとすると、その嫉妬という言葉自体に当てはまる悪魔わぁ…ボルジアか。それで？」

フラムエール「「あくまでもこれは俺の勝手な推理だ。非科学的な要素にお前は直ぐに8、9割りぐらいの確率で信じる事は無いだろうが…俺は解るんだ。ただそれを証明する手立てが俺には無いとなると…な。」」

フラムエールは顔を俯いたままぐっと息を押し殺すように止めて、今の新しい新世界にない知識と前世紀の知識に着いていけない…かもしれないシャイナ達に深く謝罪するような素振りで閉じた両眼のまま顔を何度も横に振っていた時…

シャイナ「でもそれは今起こっている“確実な事”なんでしょ？フーちゃん??アータのような“仲間の一人”がいちいち自信のないような素振りを私達に見せないでくれる??」

フラムエール「「！！シャイナ…？」」

ぐっとフラムエールの右手首に何かが強く掴まれる感覚を受けて、フラムエールははっとなるような表情を出して俯いていた顔を瞬時に上に上げると、しかめっ面を出しながら自分を睨みつけている不機嫌顔のシャイナが眼と鼻の先に居た。

シャイナはフラムエールの篭手から通して来る人の温かみをじっと感じながら掴む手の力を緩め、強張っていたフラムエールの筋力を少しずつ弱めながら唖然としているフラムエールの耳元に向けてそっと吐く。

シャイナ「私よりも“大の大のチート優男”がそんな顔をしないでっ。アータが一度倒れた時にエツィオからじっくりと聞いたけど、仲間として認められたアンタが弱弱しい言葉をこれから一切使わない！コレが第一の約束！それと第二の約束は決して悪党共と戦う際に何があろうが絶対敗北しない！！それとそれとそれとｒｙ（」

フラムエール「「シャイナ…」」

シャイナは何度もフラムエールの胸部に何度も右人指し指をツンツンと軽く突きながら言って、外見はブーイングするような素振りを振るおうが内面は“仲間に対して精神面のアドバイス＆ａｍｐ；シャイナらしい叱咤激昂”を今の彼にありのままの言葉をぶつける。

フラムエールはそんな彼女に対して少し戸惑いもあったが吐かれる言葉自体が“今後自身を成長させる目標”として与えられて、フラムエールはふと静かに口の端を吊り上げながら満々と語る説教モードのシャイナに向けてそっと…

ディク『（シャイナちゃんは相棒（おまえ）に対して色々と何か不自然な点があったら色々と言うからさぁ…もし何かを言われたら素直に受け止めて、言われた言葉自体が自身を変えていく工程となるんだし、色々と頑張って努力をしていこうぜ。俺もそうだけどｗｗｗ）』

フラムエール「「（そうだな、俺もまだまだ一歩を踏み出した初回に過ぎん。これからも旅を通して変わっていかないとな…。）…有難う。」」

シャイナ「!?ちょっｗｗまだアンタに対して色々と不満＆ａｍｐ;ぶつくさ満開なクソうぜぇ説教が吐かれたっつーのにｗｗｗ何故感謝を??ｗｗまぁ、いいや…。」

クソメンドイやぁっ!!とフラムエールをつついていたシャイナがわざとらしいお手上げの仕草をしながら彼から離れ、フラムエールはそんな彼女の態度にやや呆れても心はすかっとするような気持ちになりながら、左側面にいるディク共に脳内で振動魔力（テレパシー）を使った会話をした後…

デズモンド「！！ブギョアガギガギャアアア

ディク「ちょっｗｗｗワケわかんねぇっ！！！！！！マ●ァァァァァシッって何ぞ？？？？てか、お前もシャイナと同じように張り合うな！！叫ぶなｗｗｗ」

フラムエール「「不理解（カオス）すぎる…（汗）」」

ベッド上で叫ぶデズモンドと張り合うように叫ぶシャイナとアイモン（本人にとっては真似）が、胸を大きく張って男子応援団のようにご挨拶をしている仕草を見たディクとフラムエールは両肩を落として唖然＆馬鹿だろっｗと呆然に呆れていた間…

毒素（ボルジアの残留因子）『ギャアアア

第二百七十二曲　攻撃的な小宇宙提供による不死鳥一●のチート版ｗ

―事前　デズモンド　夢　婆路醋（バロス）ナ魔神世界（えっおフリーダモ）―

エツィオ「アーーーサーーーーーーシーーン…魔壊王神貫通拳（デモーネブリッツバスター）！！！！！」

毒素（ボルジアの残留因子）『ギャアアア

も鳴った後、徐々に透明だった色が着いて姿が明らかになる。

毒素（ボルジアの残留因子）『グォォ！！！！！…こ……このクソ餓鬼ガァァァァァァァ！！！！後少しで鬼神の精神をっ！！！！』

デズモンド『！！？……アレが……俺の中を蝕ん……でいた“毒素”なのか！！？？！』

鬼神化しているデズモンドは両膝を地に着けて右腕を床に着けながら、息切れしつつ蝕んでいた毒素の本来の姿を両眼に焼き付ける。

その姿は内部が宇宙空間のような黒紫色の赤い粒子を取り込んだ粘膜ようなモノに、その外部はネチャネチャと何度もうねるアメーバ状の物体が鬼神と魔神を睨み付けるようにして引き摺っていた。

―嫉妬（ボルジア）の残留雑魚因子　毒素　カスカノーメ・ボルジア―

毒素（ボルジアの残留因子）『！！！？？！！？何時この余が“雑魚呼ばりされた”のだ！？？？！！！この余たる嫉妬のｏ「俺らからにしてもう“見た目で雑魚に見える”じゃねぇぇか、このバカハゲ雑魚スラァァァァァイムムムッｗｗｗ」ギャガアアア

チュドォォォォォォォォオオオオオオオオオオオン！！！！！

アメーバ（ボルジアの残留因子）状の物体が上記のあだ名について“更に付け加えられている”ことに疑問をカメラ目線に向けて言おうとしたが、顔面辺りのゼリー状の外部にエツィオの左喧嘩キックが深く食い込まれて、台詞を遮るように“閲覧者用カメラから遠ざける”ように派手効果音と一緒に後方へとブッ飛ばされた。

クソ雑魚毒素（ハゲの残留因…ウゼェ！ばっちぃ！！寄るな！！！ツルピカ金魚野郎！！！！）『グォォォォォォ！！！！！！何故だ何故だ何故だァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！！！！此所は鬼神しか入れない“精神世界（存在しない空想世界）”だと言うのに、貴様のような力有るだけの廃棄悪魔（スカノーメ）が…何故！！！？？？！！！！』

エツィオ「テメェに答える義理など無ぇと言ったハズだぜ？クソデブ※♂□※△ハゲ雑魚スライム野郎。俺はお前を見る度にすっっっっっごっっっっっっっい苛立つんだよ！！バーカバーカ！！！！」

ヒュゥゥゥゥ…

スライムを“画面外”まで蹴りブッ飛ばしたエツィオは嫌味嫌味な

表情を浮かべつつ歩んでいき、途中蹴りブッ飛ばしたスライムへ向けて歩んでいる最中両足先と両指先から蒼い線が枝分かれするように走って、少しずつエツィオの身体が本来の魔神体（第六十五曲以降参照）へと変身していく。

クソ雑魚金…相撲体型ウザぴかハゲ野郎のしつけぇストーカー因子『な…仮想空間内で…全を統べる最強のま……魔神になっても…空想間破裂（パンク）しない！！！？？？！！解らん！！！！！！意味が解らぬ！！！！！！！』

スライム状の因子（ボルジア）はズルズルと身体を引き摺るように立ち上がっているような仕草をしているかのような音を立てて、完全に魔神化したエツィオが身に溢れる圧倒的な最強魔力の気が空想間全体に広がっているのに関わらず“本体（デズモンド）の精神（たましい）が破裂されていない”不可解な現象が此所に起きていた。

エツィオ『破裂（イン★パクト）？んなワケあるかよ、大切な友人の精神（夢）の中で内部ごとぶち壊す“クソ空気読めねぇ馬鹿（ニンゲン）悪魔”なんかいるかぁっ！！』

デズモンド『エツィオ…』

鬼神（デズモンド）は大きく胸を張りながら逞しい視点でスライムに言う魔神（エツィオ）の姿を見て少しときめき、力無く折れていた両膝に再び力を入れてすっと立ち上がる。

エツィオ『お前だけは許さんぞっ！！このクソ生ゴミ推奨の昭和怪獣映画に出てきた●ドラＭＥっ！！細かくその身（ゼリーみてぇなふざけた身体）を千切千切したるっ！！！！！』

数分以上地面とキスしているバイ菌付き元ツルピカ野郎…だったような雑魚スライム『ギャア！！！！この余たるｓグギャアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！？？！！？！』

ブチチチチッ！！！！！！バキャグチャジャブブブビビビジャジャジャジャジャジャジャジャジャジャジャジャジャジャジャジャジャジャ！！！！！！！！

画面外の壁に蹴りブッ飛ばしたスライムを右手でグワシッと掴み上げた後、容赦無く魔神（エツィオ）は“モザイクが掛かる位規制状態に陥る”程スライム状の身体？を爪で引き裂き、葬り、ぐしゃぐしゃになるまで“素手のみでボルジアの因子を叩き潰す。”

エツィオ『ヒャッハー！！コリャ快感だぜぇぇぇぇっ！！！！テメェがさっさと死ぬ（永久ログアウトする）まで、俺は千切る動作を止めないＺＥッ♪』

デズモンド『（久しいなぁ、エツィオが魔神の姿になるのを。…やっぱ彼は…）援護するぜ、親友（エツィオ）』

カカッ！！！！ポゥッ……

魔神（エツィオ）がレイプ遊戯中鬼神（デズモンド）は昔エツィオと共に本来の悪魔化し遮る上位悪魔を戦いを脳裏内に映し出すように思い出しながら、両腕裏の折り畳んでいたブレードを展開して両腕と上下へと交差させるよう合わせた後…

デズモンド『エツィオ、一時身体向上魔力（スタミットアビリティー）を掛ける。仕上げはお前に…任せる！！』

エツィオ『ガチャァ～！！サン★キュゥ！！！！』

展開した両ブレード刀身から交互に薄い光を放つ赤と青のリング状の二つの円が浮かび上がって、二つのリングが前へと押されるように飛んで魔神（エツィオ）にふわっと優しく触れた直後、青いオーラに被われていた魔神の身体の外部に更なる薄い赤と青のリングで囲まれＰ●Ｏのよあなシ●デバエフェクトに覆われる。

エツィオ『ヤル気どうｐ！！更にうｐ！！鬼畜強化うｐ！！仕上げは此で決めるぜぇっ！！！！！』

ぐちゃぐちゃに９割以上潰れた廃棄物行きの汚物は消毒だぁー！！

的な意味のナマモノ『グハッ！！？？！！！な…何だこの……』

ぐしゃぐしゃに潰れ所々黒い液体みたいな汁が落ちている破裂手前のスライムが見上げるような仕草でもしているかのように上げた後、眼と鼻の先でシ●デバに掛かった魔神（エツィオ）が両腕を横に伸ばして腕自体を鳥の翼のようにバッサバサ♪と大きく羽ばたく仕草をし、両腕自体が上下に動く度に残像が綺麗に分かりやすく鳳凰の羽のようなエフェクトがチラチラと宙に浮かびながら……

エツィオ『鳳●天翔ーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！』

お疲れ様でしたぁーボル★ジアさんっ♪『グギャアアア

第二百七十三曲　ズット…ズット…君ノ友達ダヨッ？君ノ為ニ俺ハ…

―？？？―

デズモンド『？此所は……俺だけの世界じゃない…。』

魔神（エッィオ）がデズモンドの体内に蝕んでいた“雑魚毒素”を強制ログアウトさせた直後、一時視界が暗くなって意識も強制的に閉じられた。

長く…より長く時を感じたデズモンドが再び意識を取り戻して閉じていた両眼を開いた時、テクスチャのような暗闇の夢世界が“何もない真っ白な世界”へとなっていた。

無音…

無音……

聞こえない空気の音…

他者の気配さえ感じない精神的に不安定になりそうな虚無世界……

それでもデズモンドはあれから鬼神化したままでも怖じ気ずくことなく、ただ鬼神(デズモンド)が長年望んでいた静寂の白い無音世界に一人…たった一人で白い床の上へと立っていた。

鬼神はふと記憶を遡るかのように顔を上に上げて、両眼を細目ながらそっと真上に向けて右腕を伸ばし右手を翳す。

デズモンド『エツィオ…』

道を見つけた彼(エツィオ)と別れておよそ８００年…否それ以上の昔の世界で交わした彼との約束と決意、人間らしい悪魔でありながらにして自分らしく誇りを持って生きていく前向き（ポジティブシンキング）な正義な彼を誇り・敬い・思っていた。

鬼神(デズモンド)は脳内に映る過去の記憶を思い返してはっと苦笑する声を若干出した後、上に伸ばしていた右腕を下ろして白く発光している床へと座り込む。

デズモンド『（人の姿に戻れないな…やはり長年の人型維持魔力(ヒューマタミネート)の疲弊…いや、毒素(ヤツ)を無理矢理押し止めた無理な魔力解放が原因か…。）もう俺はずっと悪魔の姿ままだ…ハハハッ……』

バサッ…

デズモンドは体育座りしながら背中に出ていた巨大な竜の翼を全身を包むように曲げて、翼の羽根から感じる温かみを肌（鱗）を受けながらそっと呟く。

現世へ行くために必死に身に付けた悪魔から人型への疑似仮装魔力…それがもう出来ないとなると、もう彼（デズモンド）は例え毒素を抜けられようが本来の身体である悪魔（バケモノ）として現世をさ迷うことになり、二度と関わってきた人達と話すことも会うことすら出来ない永遠の後悔がこの後待っていることを、彼はわざとらしく誤魔化すようにして笑っていた。

しかしあと数分…数秒先の世界で現世へと意識を醒めた時、今自分を看病しているだろうエツィオの仲間達がどのような反応をしてしまうのだろうか…それが怖くて一番怖くて堪らなかった…。

デズモンド『…ハハ……ハハハ……ヒッ……クッ！！！！厭だ……イ……ヤだ……よっ！！！！』

ポタッ…

鬼神（デズモンド）は更に抱え込むように両脚を深く曲げて顔を深く下に向け、次第にわざとらしい苦笑いから本来のデズモンドの心が外部へとさらけ出す。

深く俯いている悪魔の閉じられた両眼から数滴の滴を出して、こぼれ落ちた滴が座る白い床へと落ちて落ちた部分を濡らす。

デズモンド『うぅ……ぅ……ヒッ……ク…ッ……

「デェェ～ズ♪」！！！！！！』

絶望していたデズモンドが嗚咽を吐きながら呻く声を静かに上げていた時、喪哀な空気を一気にブチ壊す“超ノー天気なこの小説限定最強主人公”の声を聞いて、俯いていた顔を上げて覆っていた翼を解く。

エツィオ「良い歳こーたアンタが素で泣いちゃいかんぜよっｗｗｗほらっ！良い笑顔だしないっ！！」

デズモンド『エツィオ…』

現世で再び出逢った時に着ていたあの阿呆臭い馬鹿Ｔシャツとパンでなく、元の黒い鎧とアサシンのローブを纏った本来のコスになっていて、魔神化を既に解いていたのか通常の人間型になっていた。

デズモンド『ヒッ…ク！！……く……ハ……ハハッ……
…あい……ぅウ……からず……元気だ……なエツ……』

エツィオ「あややややｗｗｗ泣くなよデズゥゥゥゥゥｗｗｗホラッ、都会でよく配われる強制提供歩道人ティッ☆シュをやるからさぁ～。取り敢えず泣き止ＭＥ！！」

ホロホロと涙を流している鬼神（デズモンド）を見ていたエツィオがクスッと軽く微笑んだ後、腰に付けてある暗殺用小道具袋に手を掛けて中から、現世の旅の途中でシャイナから渡された“苺とケーキの絵がプリントされたティッ☆シュ入れ”を取り出し、体育座りをしている鬼神（デズモンド）に向けてササッと駆け寄る。

エツィオ「隣良いかい？デズゥ？？俺っ★デズゥと近い場所でゆっくりと語りたいんだっ♪」

デズモンド『エツィオ…』

体育座りをしているデズモンドのすぐ右側にエツィオが駆け寄った後、本人の了承を得ないままさっさとデズモンドと同じように体育座りして、鬼神の皮膚の外部を覆う鱗に当たっている距離で楽々と座り込んだ。

エツィオ「言ってみろ★デズッ！！俺がお前が今悩みを抱えている

不安要素とやらをたった数分だけで解決したるっ！！したるぞぉぉおぉおぉおｗｗｗ」

デズモンド『エツィオ…』

直ぐ側に座っているエツィオの暖かい体温を肌(ウロコ)から感じて涙ぐんでいたデズモンドだったが、自然に流れ落ちる滴が止まって同時に冷たかった全身からほんのりとした気持ちという熱が生まれる。

そしてエツィオが取り出した可愛いプリント入りティッシュを手にとって、流れ出ていた滴の一点の跡を拭うように拭き取り鼻中に貯まっていた水も更に取り出したティッシュでズビビと綺麗に出す。

エツィオ「落ち着いたかい?デズゥ～??今の時代の旅で貰ったティッシュは沢山あるから、どんどん言ってくれよっ★」

デズモンド『有り難うエツィオ何とか今落ち着いた。でも……』

エツィオ「?」

鬼神(デズモンド)は再び息を止めるように言葉自体を遮って、解いていた両手両脚を再度伸縮してリアルヒッキーのような体育座りの体勢を取る。

デズモンド『俺は……もう……人間に成れない……俺は……魔界にいた時と同じように……』

人の姿に戻れない絶望と虚無感…デズモンドは胸元で両腕を組むように囲いながら言って、今いる夢のようなまっさらな世界から出た時の今後の出来事に恐怖していた。が…

エツィオ「そうか。だったらぁ～…よっっっっっと！！」

デズモンド『っ！？なっ…』

隣に居たエツィオが悩むような仕草をし何かを思い付いたかのように丸めた右手を左手の平にポムッと叩いた後、突然エツィオの全身が青白い光柱に包まれて青い旋風がクルルッと空気を震わせる。

神聖な青白い光柱が止み渦巻いていた空気のざわめきが止んだん後、デズモンドの隣には本来の姿である魔神化したエツィオが居て、エツィオは鬼神と同様に体育座りをしながらそっと顔を鬼神の方へ向ける。

エツィオ『これで“オアイコ”だよっ！デズゥ～♪俺も悪魔（デモーネ）の姿になって現世で暴れちゃるっ☆』

デズモンド『エツィオ…。』

魔神化しても形相は悪魔そのものの鬼神と違って“人型だった素と近い面と体格”であって、悪魔にとても見えない完全な人型に近いスタイ★リッシュな魔神（エツィオ）の最高の笑みが鬼神の心を解すように暖かくする。

再び閉じ込めようとしていたデズモンドの内面にある精神が穏和するようにして解れていき、尾てい骨辺りから出ていた長い先尾をくるんと丸く丸めて、エツィオの背中から出ていた長い黒尾の先を握手するように互いの尾を交える。

エツィオ『フヒヒッ★デズモンドのしっぽっぽーはフワフワだなぁ～♪俺のようなヌルヌルしそうな綺麗過ぎる尾に触れて変だろっ？？』

デズモンド『ハハッ…！そんなこと無いさエツィオ。お前のほうがもっと柔らかくて触り心地がすっっっっんばらしぃんだよっ！！』

と鬼神（デズモンド）が言った直後エツィオは『コイツメェ～ｗｗｗ』と言って、互いの尻尾同士が組んでいた仕草から何度も絡め合うようにして尾同士がパタパタとじゃれ合うような形になる。

少々黙り気味だった鬼神は次第に魔神と会話していく内に笑い合って、同じ種族・同じ階級悪同士というモノでなく人間のような明るい親友同士の雰囲気へと変わっていった。

デズモンド『でも、どうしても俺は人間に成りたい。人間の姿に再び戻って悪魔という素性を隠しながらも、今の時代の現世の大地を…昔のようにエツィオと一緒踏みたい…。』

魔神（エツィオ）は黙って隣に座る鬼…否、親友（デズモンド）の心の底から思っていた本当の願望を聞く。そしてエツィオは…

エツィオ『…だったら、コレだな。ホレッ♪』

デズモンド『んっ？これは……クッキー？？』

何処からか取り出したのか隣にいた魔神（エツィオ）から鬼神へと手渡しされた一枚の丸い菓子…魔力も無くただ甘い匂いが漂う小さな板盤をじっくりと視点だけ動かしながら、数分間無言で観察した後手渡されたクッキーを牙が見える開いた口へ持っていく。

パキッ

パキリッ

デズモンド『！…美味し……い。』

口内に入れて噛み砕く度に広がる優しくなるような嬉しく沸き上がるような思いを過り、ゴクッと噛み砕いたクッキーの欠片を胃袋へと送り込むと次第に内面から貯まっていた不安・恐怖・現実から遠ざけられていく。

エツィオ『ハハッ！うめぇだろ？デズッ！？まだあるぞっ、ホレホレッ！！と言いつつ、俺も食うっ！！』

デズモンド『おぉっ！！美味い！！此も美味い！！一体何処でこんな美味しいクッキーを手に入れたんだ？てか、お前も食べるのかよｗｗｗ』

エツィオ『解っているだろーが、何でも食う俺でも実は甘党なんだよっ！！特に糖分一杯入った菓子がスキーｗｗｗ』

食べる度に魔神（エツィオ）から様々な形をしたクッキーを手渡され、手渡されたデズモンドと渡すエツィオが互いにクッキーを食べる度に優しい雰囲気が今いる場所で長く感じらた。そして…

エツィオ『デズッ！ハイッこれが最後のくっきーだよっ！！だもんで…』

魔神（エツィオ）が右手に持つクッキーが最後の一枚であり、その一枚をぐっと左手先で優しくクッキーの型を崩れないように…。

エツィオ『ちゃんとぉ…半分ッコだよっ??』

デズモンド『有り難う……「エツィオ。」」

綺麗に半分割れたクッキーを鬼神が手にした瞬間、鬼神化が解けて元の白いパーカーと紺のGジャンを羽織った人間体になる。

そして同時にエツィオも魔神化を解いて人間体になった後、今いる場所そのもの全体が白く塗り潰されるようにしてホワイトアウトしていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8271j/

【チートクリード】

2010年12月29日21時01分発行